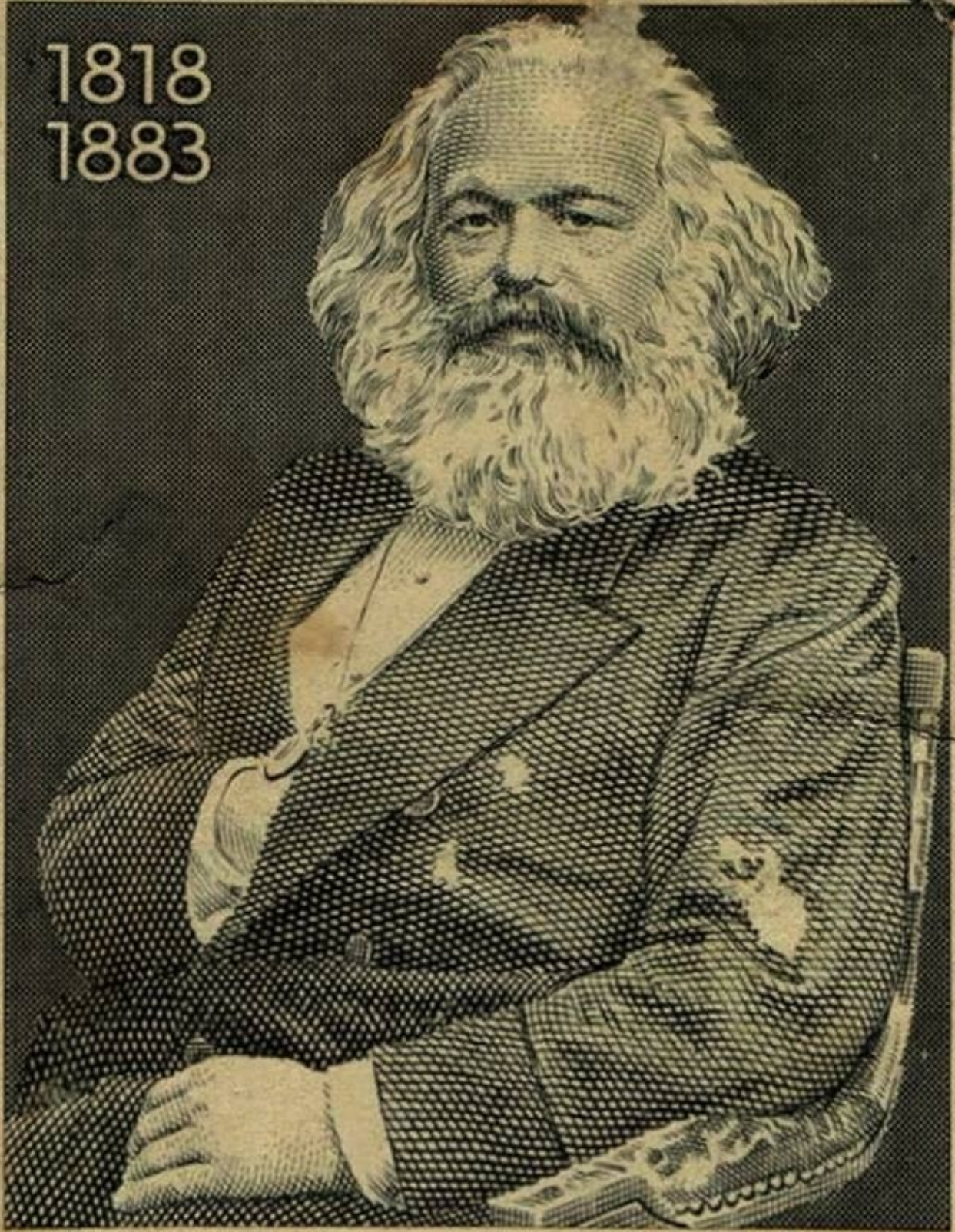


1818
1883



「資本論」

第1巻 第1章・第2章 詳解

—— 大阪泉州 ——

『資本論』を読む会の記録

はじめに

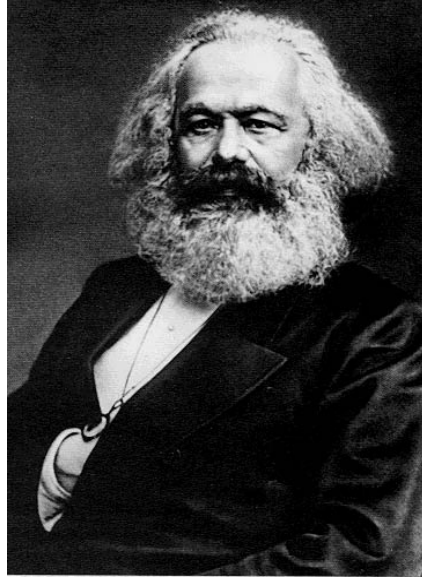
この本は、『資本論』の学習を大阪の泉州地域で行った時の報告をまとめたものです。

「『資本論』を読む会」そのものは第2章が終了した時点で、諸般の事情でやむなく中止になってしまい、それまでの成果と第3章の冒頭部分を解説したものを、今は「『資本論』学習資料室」(<http://blog.goo.ne.jp/sihonron>)として掲載しているものです。しかし新たな更新はいまは中断しており、再開の見通しも今のところはハッキリとしません。

よってブログは今も掲載中なのですが、ブログという形式上なかなか遡って読みにくいので、とりあえず、第1章・第2章部分だけでも、これまでの案内と報告のすべてをまとめて一つの冊子として電子書籍化したものです。

途中で解説する手順や形式を変えたりしていますが、すべてもとのまま紹介します。ただ部分的には、解説のほとんどを担当した亀仙人自身のその後の理論的深まりを踏まえて、より一層深く論じた部分もあります。だからブログに掲載されているものと一部異なるところもあります。また挿入されていた写真や図表のなかにはすでに消失してしまっているものもあり、すべて再現できなかったものもありますので、ご了承ください。

『資本論』を読んでみませんか



「大坂城は誰が建てた？」

「太閤さんや」

小学生でも答えられる。

しかしほんまやろか？

ほんまは、太閤さんは、大坂城を建てるために、石垣の石の一つも、屋根瓦の一つも作ったり、運んだりしてへん。

ほんまに建てたのは、当時の築城工事に動員された、農民や大工、石工、左官などの人夫たちや。

世の中の生活やそのもとにある経済は、こうした実際に額に汗して働いている人たちによって支えられ動いています。こんな世の中のほんまの仕組みを科学的に解きあかしているのが、カール・マルクスという人が書いた『資本論』なんです。

『資本論』は「資本主義」という今の世の中の経済の仕組みをもっとも簡単なものから、もっとも複雑で高度な内容まで、順序よう、一つ一つ理論を積み重ねて明らかにしたものです。

確かに初めての人にはむずかしいと思うかも知れんけど、実際に自分で働いたことのある人には、読んだら「なるほど」とようわかるように書いています。

それに私らの読書会は、初めから、丁寧に読んで行くことを心がけています。

一つの段落ごとに、読み合わせて、その内容について話し合い、みんなが納得してから、次に進むというように、読んで行くわけです。

一人でも「わしゃ分からんわ」という人がいたら、何度もそこで議論して、色々な参考文献も読んだりして、とくにかく全員が納得してから、次に進むというようにやっていくつもりです。

そやから初めて読もかという人も、もちろん何度も読んでよう知ってるわ、という人も、参加してもらて、知っている人は色々とその蘊蓄（ウンチク）を傾けてもらて、みんなでガヤガヤいいながら、まあ、茶菓子でもつまみながら、ゆっくり読んでゆこやないか、という読書会なわけです。

そんな読書会ですから、前もって予習をせよとか、むずかしいことは言いません。

古本屋でも覗いて安売りしているものでも、あるいは家の本箱の隅でホコリをかぶっているものでも、どんな版のものでも結構ですから、『資本論』の最初の巻（分冊）を持って参加して下さい。そしてみんなで声を出して読んでゆきましょう。そうしたらぼちぼち分かってくるはずです。

まあ、そんな『資本論』の読書会ですから、誰でも気軽に、参加してください。

第1回「『資本論』を読む会」の報告

◎すぐに散るわけには.....

関西の桜もそろそろ見納めですが、まだまだこれからというところもあることはあります。造幣局の通り抜けはこれからですし（期間は4 / 16 ~ 22）、吉野山の下千本と中千本は今が散りはじめですが、上や奥はまだ下旬に向けて見頃を迎えるところです。

会場の堺市南図書館の3階の教室からは、丁度、散り初めの桜が窓一杯に見えました。満開の桜は見事ですが、はらはらと舞落ちる桜吹雪を見るのもまた格別です。

第1回の「『資本論』を読む会」は、なかなか満開とはいかず、かといってまだ散るには早すぎるという、何と表現したら良いのでしょうか、まあそういう状況でした。そもそも会場が、40人規模というのですから、あまりにもだだっぴろく、私たちは部屋のすみに長机を四つくっつけて、細々と読書会をやったのでした。

しかし、まあ、形としては貧相でしたが、議論の内容は必ずしもそうとは限りません。その報告をすることにしましょう（なお以下『資本論』の頁数は全集版の原頁とします）。

◎いきなり本文から始める

参加者は4人、進行役は、私、亀仙人が担当、報告はピース（peace）さんがやってくれました、JJ富村さんと、あと紅一点の女性（クミさん）。

代々木の党本部に300人を超える幹部を集めて『資本論』の講義をやるのも良いのですが、私たちのように、少人数でじっくり議論しながら『資本論』を読むのもまた良いものです。

私たちは、すぐに『資本論』の本文、つまり「第1部 資本の生産過程」の「第1篇 商品と貨幣」の「第1章 商品」、「第1節 商品の二つの要因——使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」から始めました。

ご存知のように、『資本論』には長い「序言」やら「後書き」等々があります。新日本新書版

でいうと、それだけでほぼ50頁もあるわけです。もしこれを私たちのやり方であるワンパラグラフごとに議論し読んで行きますと、こうした類のものを読むだけで、何カ月も要することになり、いつまでたっても本文にたどり着けないことになり兼ねません。だからこうした類はすべて省略し、いきなり本文から始めたというわけです。

もちろん、「序言」や「後書き」には「方法論」的に重要な示唆を与えるものがいろいろとありますが、そうしたものも本文を読んで行くなかで、必要に応じて取り上げて議論して行けばよいという判断です。

◎「第1章 商品」の位置

ピースさんは、簡単なレジユメを用意してくれました。まずピースさんが最初のパラグラフを朗読し、そしてレジユメにもとづいてその内容を解説、それを受けて全員で議論を行う、という順序で始めました。

最初の議論は、第1パラグラフの説明として、レジユメにある〈貨幣形態をその完成した姿とする価値形態を明らかにするために商品の分析から始めることを明らかにしている〉という一文に、JJ富田さんが噛みついたことから始まりました。

「第1章 商品」の説明として、これで良いのだろうか、というのがJJ富田さんの疑問でしたが、すぐに亀仙人もその疑問に同意し、第1章が貨幣形態を説明するためにあるかの位置づけはおかしいのではないかと言いました。そこでそもそも第1章の位置づけをどう考えるべきかという問題に議論は発展しました。

『資本論』の最初の部分の章や節の関連については、久留間鮫造氏の有名な説明があり、それに関連して議論されました。久留間氏の説明は、第2章の最後のあたりに出てくる《困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある》(107頁)という一文の《どのようにして》《なぜ》《何によって》とマルクスが述べているのは、それぞれ第1章の「第3節 価値形態または交換価値」、「第4節 商品の物神的性格とその秘密」、そして「第2章 交換過程」で、それぞれの問題を論じて来たのだ、というものです。

しかしこのように説明されても、なるほどとは思うものの、それだけでは、第1章の各節や、第2章と第3章のそれぞれの関連など各章・節の課題が必ずしも明らかになるわけではありません。やはりそれは『資本論』そのものの展開に沿って考えるべきではないかという意見が亀仙人から出されました。亀仙人の意見はだいたい次のようなものです。

【なるほど久留間さんの説明だと何となく第3節、第4節、第2章のそれぞれの関連が説明されたかのように思えるけど、しかしまず第一に、なぜ第3節、第4節、第2章なんや、という疑問がどうしても生まれる。なぜ第1章の第1節や第2節は問題にならへんのや、それになぜ第2章なんや、前の二つは「節」やのに、三つ目は「章」や。これはどう考えても、この三つを同じレベルで捉えるのはおかしいのやないか、と思う。それにそもそもマルクスの「商品がどのようにして、なぜ、何によって貨幣であるか」という設問そのものが分かりにくいし、それが第3節、第4節、第2章のそれぞれを指しており、そこで説明されたのやと説明されても、それによって俄にはそれらの関連が理解されたとはなかなか言いにくいのやないか。

それに対して私はむしろマルクスの『資本論』の叙述に沿って全体の構成を見るべきやと思っている。

まず第1章は商品論ということや。これは『資本論』の目次を見れば明らかやからそれほど注目されへんが、しかし重要なことや。目次を見ると「第1章 商品」となってる。つまり第1章はあくまでも商品が分析の対象なんや、商品とはそもそも何かが問題になっている。つまり商品の概念が明らかにされ、展開されているんや。これはどうして重要なんかというのと、特に第3節が往々にして「貨幣の発生」が展開されていると理解される場合が多いからや。もちろん、こうした理解が間違いというのではない、しかし武田信照氏のような誤りがあるように、つまりそれまでも貨幣論の立場から理解しようとするような間違いがあるんや。今回のピースさんのレジュメもそれと同様なニュアンスがあるように思うんやが、往々にしてこの第三節も商品論であり、商品とは何かを明らかにする一環として「貨幣の発生」も論じられているんやということが忘れられがちなんや。

少し第1章を商品論としてどのように展開されているのかを、私の記憶だけで辿ってみまひよう。

まず、マルクスはなぜ『資本論』を商品の分析から始めるか、その理由を説明する。それが「冒頭の商品」として論争になった部分や。それは資本主義的生産の社会の富が商品として生産されているからであり、商品がこの社会の富のもっとも基本的な要素（単位）になっているからやとマルクスは説明する。

では商品とはそもそも何なのか、とマルクスは商品の分析を開始する。マルクスはまず商品をもっとも直接的な、すなわち商品を目の前に置いたときにわれわれの表象に捉えられる、そのありのままの姿において観察することから開始しようとする。これが唯物論的な分析の端緒なんや（この点がヘーゲルの始元との違いでもある）。

マルクスは商品とはまず一つの使用価値であることを見る。しかし同時にそれが商品である限

りは、単に人の欲望を満たす有用物というだけではなく、他の物と交換できるという交換価値を持っていること、この二つの属性を持っていて初めてそれが商品であると言いうことを指摘する。そして前者の使用価値はとりあえずはわれわれの分析の対象ではないことも確認する。というのは単なる使用価値でありながら商品でないものはいくらでもあるが、しかし交換価値でないのに商品であるようなものはなく、やはり問題は交換価値であるということがそれを商品たらしめているものであることが確認できるからや。だから商品とは何かを知るためには、使用価値ではなく、交換価値を分析する必要があることが分かるのや。

そしてマルクスは交換価値の分析にとりかかる。この場合もマルクスはまず交換価値のもっともありふれた直接的な表象から開始する。それは直接には一つの商品が他の諸商品と交換される割合として見える。だからそこからマルクスの分析が開始される。つまり諸商品が交換されるということは、それらが同等性を持つからだというのや。つまり両者が交換されるということは、それらの中に等しい何かがあるからであり、その何かは交換価値とは何かを示すものだろうと考えるのや。しかし交換される諸商品は当然、それぞれ違ったものであり、違った使用価値を持っている。にもかかわらずそれらに同じものがあるというのはどうしてなのか、と問題を追求する。そのためにはまずそれらを共通の質に還元しなければならんのが、それは何か。それは結局は、それらの諸商品がいずれも労働生産物やということに気づくんやな。つまりそれらは労働生産物という共通性を持っている。しかし労働生産物といってもそこに支出されている労働は、決してそれぞれ違った質を形成する具体的な労働ではないことになる。なぜなら、そうだとそれらは違った質の持つものとなり、共通性はなくなるからや。だからそれらは抽象的な人間的労働の生産物だということが理解される。そしてそういう抽象的な人間労働が対象化したもの、つまり生産物に凝結し積み重なったものがそれらを交換価値にしているものであり、それがすなわちそれらの「価値」なんや、というのがマルクスの分析の一つの結論なんや。

そしてそれらが互いに交換されることは、そうした「価値」という共通の質を含むからであり、同時にその量も同じやからやということが分かる。では価値の量とは何かというと、そうした対象に支出され凝結されている抽象的な人間労働の継続時間がすなわちそれや。そして個別の商品に対象化されている抽象的な人間労働の継続時間とは、ようするにその社会において、その社会が必要としている生産物に支出しなければならない社会的な総労働時間の一部分やということが分かり、これがすなわち価値の量を規定するものやというわけや。ここまでがまあ第1節の内容である。

次にマルクスは、こうした商品に対象化されている労働が一方で具体的な有用労働としての側面を持ち、他方では抽象的な人間労働の側面を持つという商品に現われる労働の二重性が、この社会では重要な意義を持っていることを指摘する。そして労働のこの二つの側面が、この社会ではどのような意義を持っているのかを解明するのが第2節の課題なんや。

こうして少なくともわれわれは商品とは何かを問うて、その商品が持つ二つの属性、使用価値と価値という相反する二つの属性の統一物であるという認識を得たのであり、しかもそれが具体的有用労働と抽象的人間労働という労働の二つの契機が、この社会では使用価値と価値という、商品の対立した二つの属性として現れ、それが商品の中に統一されていることを知ったのや。

しかしわれわれが商品をそのものとして眺めた場合、それが商品であるかどうかは俄には分からへん。というのは価値というのは目に見えるものやないからや。そやから、それが商品であるかどうかは、結局、そこに値札（価格）が付いているかどうかによってやっとそれが商品であることを知るんや。ではそもそも商品に値札（価格）が付いているということはどういうことなんや。値札（価格）というんは諸商品がわしは交換価値を持っているで、と自分で示すことなんやが、それはどうしてそうなるんか、ということの説明するんが第3節の課題なんや。

つまり第3節で展開されている「貨幣の発生」というのは、そういう商品についている価格とはそもそも何かを明らかにするためのものなんや。だからあくまでも第3節も対象は商品であり、その限りでは「商品とは何か」を解明しているんや。つまりそれはマルクスがいうように「商品はいかにして貨幣なのか」、つまり商品にはどうして値札（価格）が付いているのか、を解明することがすなわち第3節の課題なんや。「貨幣の発生」もその限りで問題になっている、そのところが重要なんや。

マルクスはまず商品が自らが価値物であることを示すのはどうして可能かを問う。そしてそれはそもそも価値とは何やったのか、われわれはそれをどのようにして明らかにしたんかを振り返るなら、それはもともと諸商品が交換されるところからわれわれも分析を開始してそこに到達したことを思い出させる。ということは結局、この価値というものはそうした諸商品の社会的な関連のなかから明らかになることが分かるのや。だから商品がその自らの価値物としての属性を示すのは、結局は他の諸商品との関係のなかにおいてであることを指摘する。そしてマルクスはそうした関係を分析するために、まずもっとも簡単な関係からわれわれは分析を開始するとして二つの商品の交換関係を取り上げてるんや。

ここでもマルクスは、まず二つの商品の交換関係というもっともありふれた、その意味ではわれわれにとって直接目にできるものから分析を始めている。そして二つの商品が交換されるとい、そういう関係に置かれていることを確認したあと、それが二つの商品の価値の関係（等価関係）でもあることを見るんや。

しかし二つの商品は価値の関係として見た場合、同じ役割を果たしているのではない。なぜならわれわれはまず最初に一つの商品であるリンネルに注目して、それが商品としてどうして値札をつけているのか、を知ろうとしているのやからや。だからまずリンネルが自らが価値物であることをどのようにして他の商品との、この場合は上着との交換関係（＝価値の関係）のなかで示すのか、が問われているんや。だからリンネルは自らの価値を表す立場にあり、上着はその価値

を表すのに役立つ立場にある。つまりリンネルは自らの価値を相対的に表現する立場にあり、上着はそのための協力者の立場にある。それをマルクスはリンネルは相対的価値形態にあり、上着は等価形態にあると指摘するんや。

こうした二つの商品の価値の関係におけるそれぞれの役割を確認したあと、次に、マルクスはそれではリンネルはどのようにして自らの価値を表すのかを分析する。そしてそのためにまずリンネルが上着を自分に等置するということはどういうことかをさらに分析することによって、それを行う。リンネルが上着を自分に等置するということは、リンネルは上着は価値としては自分と同じであるということを示すことである、とマルクスは指摘する。つまりそれによってリンネルは自分の内において直接には目に見えない自分の価値に等しいものとして、上着を自分に等置するんやが、そのことによって、上着そのものが自分（リンネル）の価値と等しいのや、上着そのものが自分（リンネル）の価値そのものやと言っているのやというんや。つまり上着こそがリンネルの価値物やというのが、この価値関係のなかで明らかになることなんや。

そしてそもそもこうした関係になっているんは、リンネルの価値を形成した抽象的人間労働に上着という使用価値を形成した具体的な有用労働が等置されることを意味するんであり、それによってリンネルの価値を形成した抽象的人間労働が上着という使用価値を形成した具体的な有用労働によって表されていることでもある、とマルクスは指摘している。つまり上着という具体的な姿態を形作った裁縫労働が、この場合、リンネル価値を織った抽象的人間労働という、その限りでは全く目に見えないものが、上着という目に見える具体的な形あるものとして表されているのだというんや。つまり裁縫労働がこの場合、抽象的人間労働の目に見える形態としてある、というんや。

だからこそ、この抽象的人間労働の現実的な形態である裁縫労働によって作られた上着形態そのものが、価値そのものになっている、まさにその体で価値を表すものになっている、すなわち「価値体」になっているんや、とマルクスは指摘している。

だからこの場合、上着の使用価値はリンネルの価値の現象形態、つまり目に見えるようなものとして現われている物やと、マルクスは一連の分析の結果をまとめている。これが相対的価値形態の内実としてマルクスが語っていることなんや。

次にマルクスは等価形態の分析を行い、等価形態の謎、つまりその物質的な形態が社会的な力を持つ（金がものをいう！）というこのブルジョア社会の物神性の謎を解明している。

そしてさらにマルクスは二つの商品からなるもっとも簡単な価値形態から、一つの商品の価値を他のさまざまな諸商品によって表す関係、展開された価値形態に進み、さらにそれを逆転したさまざまな諸商品が、ある特定の一商品によって共同してそれらの価値を表現する形態、すなわ

ち一般的価値形態への分析へと進んで、これこそが潜在的な貨幣形態であることを指摘する。すなわちそれが特定の一商品、金に固着したとき、それは貨幣形態になることを指摘するんや。

こうして諸商品は貨幣形態をもち、どのようにしてそれらの価値は価格として表示されるのかが分かった。つまり商品がどのようにして値札をつけているのかが分かったんや。

以上が、第3節までのマルクスの分析や。ここまでで商品なるものの概念はその限りでは展開し終わったんや。商品とは何かが明らかになり、商品はそれ自体として存在するものとして一つの現存在として把握された。あとはこの商品が一つの自立的存在として運動する、その運動をわれわれは分析することになるんやが(「第2章 交換過程」)、しかし、マルクスはその前に、商品そのものの歴史性を暴露する節を設けている。それがすなわち第4節なんや。これも商品とは何かを明らかにする上で不可欠の節や。マルクスは資本主義的生産様式の深い分析は、おのずとその歴史的な考察を必要とする所をわれわれに明らかにすると『経済学批判要綱』で述べているが、ここはまさにそういうところの一つやな。

つまり第4節の商品の物神性というのは、商品そのものの歴史性、すなわちその発生、発展、消滅の必然性を明らかにするところなんや。

だから第2章は、第1章で明らかにされた商品をもとに、今度は自立した商品の運動が、すなわちその交換の過程が考察される章なんや。商品は自分で市場に行くわけやないから、ここからは商品所持者が問題になる。そしてそこでは商品の運動に内在する矛盾こそが貨幣の発生を必然にしたことが解明されるんや。つまり確かに久留間さんがいうように、「何によって」が解明される。だからこの第2章は、第1章の商品論と第3章の貨幣論を媒介するものであり、いわば商品から貨幣への移行を橋渡しする章ともいえる。それは商品の矛盾した運動のなかから貨幣が必然的に生み出されることを明らかにして、次の第3章の貨幣論へと移行する章なんや。

そして第3章では、今度は貨幣が主体となる。つまり今度は貨幣が分析の対象になるんや。ここでは貨幣の機能とその諸法則が解明される。そして貨幣が解明されたあとは、第2篇の「貨幣の資本への移行」へと続くことになるんや。

まあ、だいたい以上が『資本論』の第1篇の主な流れやと私は考えているんや。このように見たら、久留間さんの主張するいわゆる「シェーマ」が、第1篇全体のなかでのそれぞれの章や節やらの位置を必ずしも明らかにするものとは言えんのかな、という私の疑問も了解してもらえんとちゃうやろか……。】

【どこやらから「亀仙人は自分の意見だけえらい丁寧に説明してすっこいなあ〜っ」という声が聞こえそうやが、これはまあブログという七面倒くさいことを担当させられている者の、い

わば「補償措置」みたいなもんですわ。自分の意見ももっと丁寧に紹介せよという人がありましたら、ご面倒ですが、ちゃんと文章化して頂いたら、喜んで紹介させていただきます。もっとも内容にもよりけりですけど……。】

◎「市場経済」って？

新しい趣向として、最初にもちょこっと紹介しましたが、不破哲三氏の講義録《『資本論』全三部を読む》（新日本出版社2003.5.10刊）も並行して一緒に検討して行こうということになりました。そこで最初の「商品」論の位置に関して、不破氏はどういうてるかということ、次のように言うてます。

〈第1部第1篇は「商品と貨幣」、内容は、いわば市場経済の研究だと思ってもらえればよい、と思います。全体で三つの章にわかれています。「第1章 商品」は、まず商品そのものの研究、「第2章 交換過程」は、その商品をつくる生産者の市場での行動の研究、「第3章 貨幣または商品流通」は、貨幣の役割と運動を中心にした市場経済の研究です。〉（99頁）

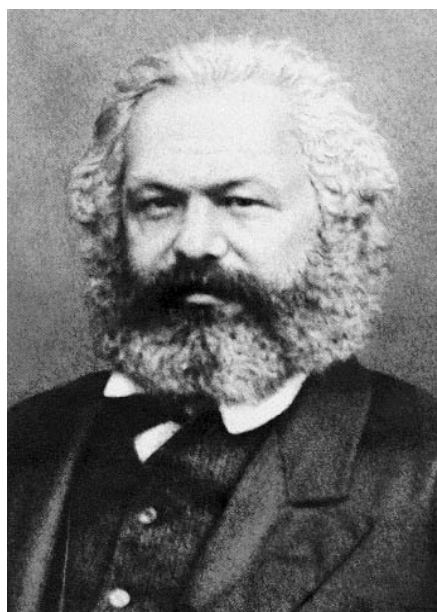
まず不破氏は何故か「市場経済」という言葉がお好きで、何度もでてきます。なぜ「市場経済」なのか？ と「読む会」でも疑問が出されました。そもそも「市場経済」などという用語は、『資本論』には出てきませんし、マルクス・エンゲルス全集の事項索引にも該当するものはありません。もちろん「市場」そのものや「商品市場」、あるいは「世界市場」、「労働市場」、「貨幣市場」、「市場価値」や「市場価格」等々という用語は『資本論』でも出てきますが、「市場経済」などという用語はありません。不破氏のこうした説明は、私には何か非常に通俗的な響きをもつのですが、私の偏見のせいでしょうか。

まあ、それはよいとして、不破氏の第1章、第2章、第3章のそれぞれの位置づけのなかで、特に第2章の位置づけは、少しおかしいのではないかという意見が出ました。「商品をつくる生産者の市場での行動」が研究されると不破氏は説明しているのですが、それが果たして第2章の課題なのでしょうか？ 確かに第2章では商品所有者が登場します。しかしマルクスは《諸人格は、ここではただ、たがいに商品の代表者としてのみ、したがってまた商品所有者としてのみ、存在する。われわれは、展開が進むにつれて、諸人格の経済的扮装はただ経済的諸関係の人格化にほかならず、諸人格はこの経済的諸関係の担い手としてたがいに相対するということを、総じて見いだすであろう》（100頁）と述べています。

つまり商品の所有者の行動も、それは商品の運動を代表するものであって、だからあくまでも考察の対象は市場における商品それ自体の運動ではないのでしょうか。そして商品の運動（交換過程）に内在する矛盾が貨幣を必然にするのではないのでしょうか。「読む会」の意見としては、だいたいそのように纏まったと思います。

第1パラグラフについては、それ以外にも興味深い議論が次々と展開されたのですが、あまりにも長くなりすぎるので、これぐらいにしておきます。

第2回「『資本論』を読む会」の案内



昨年夏に表面化したサブプライム問題は、たちまち世界中に広がり、世界経済の深刻な危機を招いています。

サブプライムローンとは、アメリカの優良（プライム）でない階層（サブプライム）向けに貸し出した住宅ローンのことです。それがどうして世界経済を揺るがす震源になっているのでしょうか？

それはこうしたローンを融資した金融機関が、その債権をいくつかの媒体機関を通じて証券化して売り出し、その媒体機関（投資銀行など）がそれをさらにいくつかの別の債権とまぜ合わせて、世界的なカネ余りのなかで、ぼろ儲けを企んでいるさまざまな機関投資家やヘッジファンドなどに売りつけていたからです。

こうした世界の資産担保証券市場で売買されている証券類の総額は十数兆ドル（日本のGDPのほぼ3倍！）とも言われています。その約70%がアメリカ、残りの30%がヨーロッパ・アジアその他の市場で発行されているというのです。

だからアメリカの住宅ブームが終わり、住宅価格の上昇が伸び悩むと、たちまちその価格上昇をあてにしてローンを組んでいた人たちが返済に行き詰まり、ローンの焦げつきを引き起し、こうした劣悪な債権を含んだ証券の価格が暴落して、それを買ってぼろ儲けを企んでいた連中＝世

界中の金融機関や投資家に膨大な損失をもたらしたというわけです。

これは言ってみれば自業自得というべきなのでしょうが、しかしそれが世界経済の危機へと発展するからそうも言っておれません。

だからブッシュ政権は、ローン債務者への支払い猶予に加え、総額18兆円の財政政策を打ち出しましたが、しかしその効果はほとんど見られないというのが現状なのです。

こうした複雑な金融問題を解明していく基礎も『資本論』で与えられています。

資本主義社会では、すべての定期的な一定の貨幣額の収入（貨幣請求権）は、資本還元されて、利子を生む架空な資本として価格を付けられ売買されるようになります。国債や株式、住宅ローン債権等もしかりなのです。マルクスは「利子生み資本一般がすべての狂った形態の母であったたとえば債務が銀行業者の観念では商品として現われる」（『資本論』第3部、全集版596頁）と述べています。

だから『資本論』は決して古くさい古典などではなく、現代の「狂った」世界経済を根源的に解明する手段なのです。一度、是非、貴方も『資本論』を読んでみませんか。

第2回「『資本論』を読む会」の報告

◎新参加者もなく、欠席もあつたりして、さらに寂しく.....

新参加者もなく（ピースさんの言うには、参加しそうな人があつたらしいのだが？）、常連参加者の一人に不幸があり欠席したために、ただでさえ少ない参加者がさらに少なくなり、寂しい限りであった。しかし泣き言ばかり言ってしまうのがないから、とにかく読書会を続けることにした。

参加者が少なかったから、という分けではないだろうが、テキストは捗り、前回はたった二つのパラグラフを終えただけだったのに、今回は四つも進み、第6パラグラフまで終わってしまった。

だから議論もあっさりしたものだっただろう、って？ これがなかなかどうして、何しろ自説を滔々と説いて止まない御仁がおるものですから.....。

◎「交換価値の素材的担い手」とは？

最初に問題提起をしたのは例によって例のごとくJJ富田さんだった。第4パラグラフの次の一文――

《使用価値は、富の社会的形態がどのようなものであろうと、富の素材的内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態においては、それは同時に交換価値の素材的担い手をなしている。》（新日本新書版61頁）

ここで使用価値が「交換価値の素材的担い手をなしている」というのは、どういうことなのかというのである。

この部分は、これまで当たり前のこととしてあまり問題にもされて来なかったところなのだが、JJ富田さんのいうには、これに続くパラグラフでは交換価値について述べているが、例えばそこで言われている「一クォーターの小麦」の諸交換価値として「x量の靴墨、y量の絹、z量の金」などがあげられているが、「使用価値は.....交換価値の素材的担い手をなしている」という場合、ここでいう「x量の靴墨、y量の絹、z量の金」等々の諸使用価値のことを指しているのか、それとも「一クォーターの小麦」の交換価値の「素材的担い手」になっているのは「一クォーターの小麦」という使用価値そのものなのか、というのである。果たしてどうなんでしょう？

「一クォーターの小麦」の交換価値は、当然、「一クォーターの小麦」自身が持っているものだから、その交換価値の素材的担い手というなら、「一クォーターの小麦」という使用価値のことではないのか、というのがピースさんの意見。「x量の靴墨、y量の絹、z量の金」等々は、「一クォーターの小麦」の交換価値を表現する材料にはなっているが、しかしそれは「素材的担

い手」ということとはまた別のことではないのか、というわけ。

亀仙人もピースさんとまったく同じように解釈していた。だからすぐにその意見に賛成したのだが、しかしあとで振り返って反省してみるに、JJ富田さんの問題提起は、もっと良く考えてみる必要があると思うようになった。

この部分は、『資本論』を読んでいるだけだと、なかなか分かりにくい。「素材的担い手」というだけだと、どちらとも取れるような感じがするからである。ところが『経済学批判』を読むと、これがハッキリするのである。当日は『批判』を持っていなかったからしょうがなかったが、『批判』ではその部分は次のようになっている。

《使用価値であるということは、商品にとって必要な前提であると思われるが、商品であるということは、使用価値にとって無関係な規定であるように思われる。経済的形態規定にたいしてこのように無関係な場合の使用価値は、すなわち使用価値としての使用価値は、経済学の考察範囲外にある。使用価値がこの範囲内にはいつてくるのは、使用価値そのものが形態規定である場合だけである。直接には使用価値は、一定の経済的関係である交換価値があらわされる素材的土台である。》（国民文庫版25頁）

ついでに『資本論草稿集』第3巻ではこの部分は次のように訳されている（ただし最後の部分だけ）。

《……直接的には使用価値は、一定の経済的関係である交換価値が自らを表すさいの素材的な土台である。》（214頁）

もちろん、『資本論』と『批判』とは違った文献だし、書かれた年代にはかなりのブランクもある。だから両者がまったく同じ内容を論じているとは断定できないのだが、しかし『批判』では、マルクスが「素材的土台」として論じているのは、明らかに交換価値を表す対象であることが分かる。だからそれから類推して『資本論』の当該部分の解釈をやってみると、「一クォーターの小麦」の「交換価値の素材的担い手をなしている」ものとしてマルクスが語っているのは、「x量の靴墨、y量の絹、z量の金」等々の諸使用価値のことであることが分かるのである。これがまあ、正しいのではないか。一件落着。

（補足〔09.8.16〕：この『資本論』を読む会の報告を書き進めていくなかで、マルクスが第二版のために作成した『補足と改訂』のなかに、次のような一文があることを知った。

《上着の生産においては、裁縫労働という形態のもとに、人間的労働力が実際に支出され、したがって、上着のなかに人間的労働が堆積されている。それゆえ、この面からすれば、上着体は

価値の担い手である。もっとも、上着のこの属性そのものは、上着がどんなにすり切れてもその糸目から透けて見えるわけではないが。》（大黒正夫訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第5号65頁）

つまりここでは「素材的担い手」という文言はないが、上着体は上着の価値の担い手であるとのマルクスの言明がある。だからピースさんや亀仙人が最初に理解していた解釈もまんざら間違いとは言いきれないのではないかとこのことを補足しておきたい。）

◎やはり第6パラグラフが問題に

次に問題になったのは、やはり第6パラグラフであった。ここではマルクスは「一クォーターの小麦」が「x量の靴墨、y量の絹、z量の金」などと交換される関係を例に引いて、そこから次のような二つの結論を導き出している。

《それゆえ、こういうことになる。第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものを表現する。しかし、第二に、交換価値は、一般にただ、それとは区別されるある内実の表現様式、「現象形態」でしかありえない。》（新書版63頁）

この二つの結論がどうして出てくるのか今一つ分かったようで分からない、という疑問が、やはりJJ富田さんから出された。

ピースさんも今一つ納得ゆく説明ができなかったのだが、亀仙人は、以前、大阪でやった「『資本論』学ぶ会」でも同じところが問題になり、「『資本論』学ぶ会ニュース」でそれについて論じたことを指摘した。そしてそのニュースをその場で読み聞かせたのだが、ここではそれを紹介するだけにしておこう（以下同ニュース№5から）

【議論になったのは、第6パラグラフを巡ってです。ここではマルクスは、交換価値から価値を導き出すために、まず1クォーターの小麦を例に上げ、それがさまざまな物と交換されることを指摘します。x量の靴墨、y量の絹、z量の金などです。そしてそうした小麦の他商品との交換を分析して結論として次の二つのことを導き出しています。

「第一に、同じ商品の妥当な交換価値は一つの等しいものを表現する。しかし第二に、交換価値は、一般にただ、それとは区別されうるある内実の表現様式、『現象形態』でしかありえない」と。

さて、ここに出された疑問は、結論として言われている二つのうち、最初のものは何となく分かるが、第二のものはどうしてそれが言えるのか、もう一つ良く分からない、この二つは同じことを別の観点から言っているのか、マルクスはここでは全体として「交換価値の限界」といった

ものを言いたいのか、といったものです。

こうしてこの二つの結論の理解を巡って喧々諤々の議論が行われました。今、その議論の一つ一つを再現することは出来ませんが、これを考える上で、参考になると思える、文献から関連部分を紹介しておくことにしましょう。

第二の結論として言われていることで、分かりにくいのは、なぜ、小麦と諸商品との交換関係から、交換価値が「ある内実の表現様式」だと分かるのか、ということではないかと思います。その点、マルクスは『剰余価値学説史』の中でベーリーの価値論を批判しているところで、次のような分かりやすい例を上げて説明しているところがあります。

「ある物が他の物から離れている場合には、事実上、距離が、ある物と他の物とのあいだの関係である。だが同時に距離は、二つの物のあいだのこの関係とは違ったあるものである。それは空間の広がりであり、いくらかの長さであって、比較されうるこの二つの物以外の、他の二つの物の距離をも同様に表しうる。だが、これがすべてではない。もし二つの物のあいだの関係として距離を論じる場合には、われわれは、両方の物が相互に離れていることを可能にしているそれらの物自身の、ある『内在的なもの』、ある『属性』を想定しているのである。文字Aとテーブルとのあいだの距離というのは、なんのことであろうか？

こんな問題はばかっているであろう。二つの物の距離を論じる場合に、われわれが論じているのは、空間のなかでの二つの物の相違なのである。したがって、われわれは、二つの物がともに空間のなかに含まれていること、空間の二つの点であること、を想定しているのである。したがってまた、われわれがその二つの物を同等化するのとは、ともに空間のあり方としてである。そして、同等化したのちにはじめて、空間の観点のもとで、われわれは、二つの物を、空間の違った二つの点として区別するのである。空間に属しているということが、それらの物に共通な単位なのである」（全集二六巻・184～5頁）

つまり小麦を靴墨や絹、金などとの交換関係に置くということは、両者に共通な「内在的なもの」「属性」の観点から両者を見ているということなわけです。だからマルクスは「ある内実の表現様式」だと結論したのではないのでしょうか。

もう一つ、河上肇はその『入門』で、この部分を、『資本論』の第一版、第二版、エンゲルス版、カウツキー版と比べながら、次のように説明しています。

「かくの如く表現の仕方は版本によって種々の相違があるが、しかし何れにしても内容にさしたる相違はない。それは要するに次のことを意味する。――すでに述べたように、商品という以上は孤立して存在するものでなく、必ず他の種々なる商品と種々の割合で交換される。例えば1クォーターの小麦は、あるいは20ポンドの靴墨と交換され、あるいは2エルレの絹と交換

され、あるいは半オンスの金、等々と交換されるのであるが、そうすると、その1クォーターの小麦の交換価値は、20ポンドの靴墨であると表現されると同時に、あるいは2エルレの絹であるとも、あるいは半オンスの金、等々であるとも、表現されることになり、かくてx量の靴墨、y量の絹、z量の金、等々は、各々分量を異にし且つ甚だしく種類を異にする使用価値であるにも関わらず、1クォーターの小麦の交換価値であるという点では、それらのものが皆な同じだということになる。すなわち吾々が日常の経験において見るところで、理屈でも何でもない。だが吾々はこのことから、交換価値は『かくの如き種々なる表現の仕方と区別されうる或る内容を有たねばならぬ』ということを経験しうるのである。同じものが或いは雲となり雨となり或いは雪となり氷となるというのであれば、これらのものは雲でもなく雨でもなく、すなわちそれ自身とは区別されうるところの、或る内容を有たねばならぬ。かくて吾々は先ず、交換価値なる現象形態と区別されうるところの、或る内容に考え到った。次に吾々は、その内容が何であるかの論究に進む」（『資本論入門』青木文庫第一分冊137～8頁）

このように河上肇はわかりやすく説明しています。これらを参考に、皆さん自身でもう一度考えてみて下さい。】

以上、今回は比較的簡単になりましたが、報告を終わります。

第3回「『資本論』を読む会」の案内

『蟹工船』ブームなのだという。

もちろん、あの小林多喜二の『蟹工船』である。

異常とも言える売れ行きに、新潮社は5月の時点で10万7千部増刷することを決定したという。

買ってゆくのは「格差社会」の真っ只中にある「30代から50代の働きざかりの人が多い」とも言われ、「ワーキングプア」との関連で特設スタンドをおいたら飛ぶように売れた、などとも言われている。

『蟹工船』で描かれている世界は、多喜二自身が「この一篇は、『植民地に於ける資本主義侵入史』の一頁である」と小説の最後の「付記」で書いているように、当時はまだ開拓途上にあつて「植民地」とほとんど変わらなかった北海道における資本の「原始的な」「虐使」の実態である。

人を人とも思わない資本の過酷な搾取の有り様がこれでもかこれでもかと描かれている。

つまり『蟹工船』で描かれている世界は、当時でも最も劣悪な労働条件で酷使されていた労働者たちなのである。

「この百に一つくらいのことがあつたって、あっちじゃストライキだよ」と元芝浦の工場にいた労働者は語る。

「――内地では、労働者が『横柄』になって無理がきかなくなり、市場もだいたい開拓されつくして、行き詰まってくると、資本家は『北海道・樺太へ』鉤爪をのばした。そこでは、彼らは朝鮮や、台湾の植民地と同じように、面白いほど無茶な『虐使』ができた。」

と多喜二は書いている。

それほど過酷な労働の実態がそこにはある。それがこの現在の高度に発達した資本主義の下で働く労働者たちに共感を呼んでいるのである！

働いても働いてもカツカツの生活を維持するのがやっとの「ワーキングプア」たち。

多くの労働者が超過密で長時間の労働に追いまかれるなかで、明日の生活の不安にさいなまれている。

資本主義は80年前と何一つ変わっていないではないか、と誰もが思っている。

『資本論』は“古くさくなった”と何度も言われてきた。しかし『資本論』で明らかにされている現実、まさに今の資本主義の現実なのである。

《資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるいっさいの方法は、個々の労働者の犠牲として行われるのであり、生産を発展させるいっさいの手段は、生産者の支配と搾取との手段に転化し、労働者を部分人間へと不具化させ、労働者を機械の付属へとおとしめ、彼の労働苦で労働内容を破壊し、科学が自立的能力として労働過程に合体される程度

に応じて労働過程の精神的能力を労働者に疎遠なものにするのであり、またこれらの方法・手段は、彼の労働条件をねじゆがめ、労働過程ではきわめて卑劣で憎むべき専制支配のもとに彼を服従させ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れる。しかし、剰余価値の生産のいっさいの方法は、同時に蓄積の方法であり、その逆に、蓄積のどの拡大も、右の方法の発展の手段となる。それゆえ資本が蓄積されるのにつれて、労働者の報酬がどうであろうと——高かろうと低かろうと——労働者の状態は悪化せざるをえないということになる。最後に、相対的過剰人口または産業予備軍を蓄積の範囲と活力とにたえず均衡させる法則は、ヘファイストスの楔（クサビ）がプロメテウスを岩に縛りつけたよりもいっそう固く、労働者を資本に縛りつける。この法則は資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。したがって、一方の極における富の蓄積は、同時に、その対極における、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する階級の側における、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、野蛮化、および道徳的墮落の蓄積である。》（『資本論』第1巻・全集版840—1頁）

『資本論』は『蟹工船』の背後で何がどのように作用し、その過酷な搾取を必然ならしめているかを明らかにしている。

『蟹工船』でストライキに立ち上がった労働者たちから現代の労働者は何を学ぶのだろうか？ 彼らが『蟹工船』だけでなく、さらに『資本論』からも学び始めることだけは確かではないだろうか。

貴方も是非『資本論』を私たちと一緒に読んでみませんか？

【なお下記サイトからは「漫画蟹工船」が無料でダウンロードできます。

<http://www.takiji-library.jp/announce/2007/20070927.html>】

第3回「『資本論』を読む会」の報告

◎図書館は閉まり、フロアも真っ暗

今回の「『資本論』を読む会」は、初めて夕方の6時開始でした。

会場の堺市立南図書館に行くと、どうしたことが、入り口の自動ドアは開かず、中は電気も落ちて真っ暗でした。一瞬、曜日間違えたかと思いました。しかし、そんなはずはないと思いなおし、ウロウロするうちに、中の守衛室には電気が灯っているので、守衛さんが部屋から出てくるのを待って、ドアの外から声をかけると、彼は自動ドアを手で開けて顔を出してくれたので、「実は、今日は読書会があるはずなんですかが...」という、「ああ、あの『資本論』のやつですね」という。「まだ時間が早いのでそこで待っていてください」と薄暗いフロアの椅子を指さします。ということは、やはり曜日は間違っていなかったのだと思い、なかに入る。そのうちJJ富田さんも半信半疑で別の自動ドアを手動で開けて入ってくるということで、ようやく一安心。

しかしそれにしても、もう少し分かりやすい案内があってもよいのではないのでしょうか。どうやら集会室は開いているが、図書館は土・日は午後5時までらしい。だから入り口の自動ドアも電気を切り、フロアの電灯も消してあるらしい。なるほど“節約精神”は買うにしても、しかしこれでは集会室の利用者は、とまどうだろう。私のように読書会が必ずあると確信しているような者でさえ、一瞬、曜日間違えたかと疑ったほどだから、もし案内ビラやこのブログを見て初めて参加された方があったとしたら（そんな人はいないだろうって？ そうとも限らないでしょう）、恐らくその人は入り口の自動ドアが開かず、中のフロアの電灯が消えているから、そのまま帰ってしまったに違いないのです。せめて自動ドアに「集会室の利用者は手でドアを開けて入ってください」ぐらいの案内があってしかるべきではないのでしょうか（自動ドアを手動で開けるという発想は通常はなかなか出て来ないものです）。

なにに、「タダで借りているのに、文句は言うな」ですって？ しかし利用料が無料だから、サービスがいい加減でよいということはないでしょう。それに利用料が無料といっても図書館や集会室は市民税で運営されているのですから、まったく負担がないわけではないのです。

というわけで（もちろん、それだけが理由ではないでしょうが）、今回の「『資本論』を読む会」も新参加者はゼロでした。

◎《幾何学上の一例》は問題を分かりやすくしているのか？

さて、今回も進んだのは、たったの三つのパラグラフのみでした（第7～9パラグラフ）。参加者も同じ顔ぶれでやマンネリ化したのか、議論もあまり盛り上がりせず、比較的短時間で終わりました。

ここで問題になったのは、マルクスは第7パラグラフで、二つの商品の等式《1クォーターの小麦 = aツェントナーの鉄》から《同じ大きさのある共通物が、二つの異なった物の中に、.....存在する》こと、だから《両者はどちらも、そ

れが交換価値である限り、この第三のものに還元されうるものでなければならない》という結論を引き出しています（これはまあ良い）。そしてさらにそのことを説明して、第8パラグラフでは、《幾何学上の一例》を上げています。ところがこの《幾何学上の一例》が今一つよく分からないのです。ここでは出された疑問点をとにかく列挙してみましょう。

（1）まず第7パラグラフでは二商品の等式から、第三のものへの還元を説明していますが、第8パラグラフでは等式ではなく、《直線形の面積をはかり、比較する》ことが課題になっています。これは第7パラグラフの説明としては、あまり適切とはいえないのではないか、という疑問です。

もし幾何学上の一例の方も等式から説明するとなると、例えば、四角形と六角形がイコールで結ばれるなら、両者の中に《同じ大きさのある共通物が、二つの異なった物の中に、……存在する》こと、ということになり、結局、両者の共通物は何かということ、ただ面積が等しい、というような説明になるのではないか、ということなのです。

（2）第7パラグラフでは、《同じ大きさのある共通物が、二つの異なった物の中に、……存在する》ことを見出しています。ということは《幾何学上の一例》でも、さまざまな形状の《直線形》の中に《同じ……共通物》を見い出さなければならないはずですが、マルクスはまずそれを《いくつかの三角形に分解》し、さらに《三角形そのものは、その目に見える形とはまったく異なる表現——底辺×高さ／2——に還元される》としています。

ここでマルクスがさまざまな《直線形》の《共通物》として見ているのは、果たして《三角形》なのか、それともその三角形の面積を求める公式である《底辺×高さ／2》なのか、ということが問題になりました。

（3）もし《共通物》として《三角形》を見ているだけなら、それだけでは面積は比較できないから、当然、後者であろうということになります。しかしもし後者なら、果たしてそれはさまざまな《直線形》の中に存在する《共通物》といえるのかどうか、三角形を求める公式《底辺×高さ／2》は果たして何か一つの質といえるようなものなのかどうか、という疑問が出されました。

もしさまざまな形状の《直線形》の共通の質を問題にするのなら、やはりそれはそれらの「面積」ではないのか、と。面積を求める公式と面積そのものとはやはり違うのであり、公式を一つの質と考えることが果たしてできるのかどうか、という疑問です。

（4）またマルクスが《三角形そのものは、その目に見える形とはまったく異なる表現——底辺×高さ／2——に還元される》ということで強調したいことは、《その目に見える形とはまったく異なる》もの《に還元される》ということではないか、という意見が出されました。

一クォーターの小麦やaツェントナーの鉄の《その目に見える形とはまったく異なる》《第三のものに還元されうる》ということ、マルクスはこの一例で示そうとしているのではないか、ということなのです。

しかしそう考えると、またおかしなことがでてきます。というのは、マルクスは《三角形そのものは、その目に見える形とはまったく異なる表現——底辺×高さ／2——に還元される》と述べているだけであり、《その目に見える形とはまったく異なる》としているのは《三角形》に対してであって、決して最初の比較の対象であるさまざまな《直線形》に対してではないからです。もちろん、《底辺×高さ／2》が《三角形》と《その目に見える形とはまったく異なる》のだから、当然、最初の《直線形》とも《その目に見える形とはまったく異なる》といえるのではないか、とはいえますが、果たして《その目に見える形とはまったく異なる（もの）に還元される》ことが、ここでのポイントなのかどうか、どうなんでしょう？

結局、この問題は未解決のままで終わり、まあ、そんなに細かく詮索しなくても良いのではないかという結論になりました。皆さんはどうお考えでしょうか？

以上のように、今回の議論は内容的にはあまり面白くもなく、また時間も短く終わりましたが、とりあえず、報告しておきます。

(そろそろこの「『資本論』を読む会」も“終末”が見えつつあるですって？ 誰ですか、そんな陰口を叩くのは！)

第4回「『資本論』を読む会」の案内



7月7日から洞爺湖サミットが開かれる。

今回のサミットのテーマは「環境・気候変動」「開発・アフリカ」「世界経済」そして「不拡散をはじめとする政治問題」だという。

特に地球の環境変動問題は待ったなしと言われている。

昨年2月、国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が発表した第4次評価報告書によれば、2100年には地球の平均気温が最大で6.4℃上昇し、海面水位は平均38.5cm（最大59cm）上昇するとされている。

地球規模の生態系の変化、異常水温現象の増加、太平洋熱帯域でのエルニーニョ現象の増強、海流の大規模な変化、深層循環の停止、あるいはこれらに伴う気候の大幅かつ非可逆的な変化等々、さまざまな恐ろしい未来図が予想されている。

こうした地球環境の破壊も、資本主義の無政府的な生産が地球規模に広がり、あまりにも大規模になってしまった結果でしかない（世界の人口のほぼ3分の1を占める中国とインドの急速な資本主義的発展が決定的な影響を及ぼしつつある！）。

われわれが地球環境破壊の原因とその本質を考え、その真の解決の方向を見いだすための理論的武器も、やはり『資本論』は与えている。

マルクスは資本の無政府的な生産の本性を次のように明らかにしている。

《資本が、人類の将来の退廃や結局どうしても止められない人口減少やの予想によって、自分の実際の運動をどれだけ決定されるかということは、ちょうど、地球が太陽に落下するかもしれないということによって、どれだけそれが決定されるかというようなものである。どんな株式投機の場合でも、いつかは雷が落ちるにちがいないということは、だれでも知っているのであるが、しかし、だれもが望んでいるのは、自分が黄金の雨を受けとめて安全な所に運んでから雷が隣人の頭に落ちるということである。われ亡きあとに洪水はきたれ！ **〔Apres moi le deluge!〕**これが、すべての資本家、すべての資本家国の標語なのである。》（第1巻352-3頁）

だから世界の主要国の首脳がいくらサミットと称して鳩首会談をやろうと、すべての資本家国家はこの標語どおりのこと以上のことはしようとはしない。

《資本主義的生産様式は、それが大中心地に集積させる都市人口がますます優勢になるに従って、一方では、社会の歴史的原動力を蓄積するが、他方では、人間と大地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間が食糧・衣料の形態で消費した耕地成分の耕地への回帰を、したがって持続的な耕地肥沃度の永久的自然条件を攪乱する。こうしてこの資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活を、同時に破壊する。しかしそれは同時に、あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する。》（1巻656-7頁）

今日の地球規模の環境破壊も、われわれに地球規模の《物質代謝を社会的生産の規制的法則として、完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する》ものの一つではないだろうか！

《資本主義的生産の眞の制限は、資本そのものである。資本とその自己増殖とが生産の出発点と終点、動機と目的として現われるということである。生産はただ資本のための生産だということ、そしてそれとは反対に生産手段が生産者たちの社会のために生活過程を絶えず拡大形成して行くための単なる手段なのではないということである。生産者大衆の収奪と貧困化とにもとづく資本価値の維持と増殖とはただこのような制限のなかでのみ運動することができるのであるが、このような制限は、資本が自分の目的のために充用せざるをえない生産方法、しかも生産の無制限な増加、自己目的としての生産、労働の社会的生産力の無条件的発展に向かって突進する生産方法とは、絶えず矛盾することになる。手段――社会的生産力の無条件的発展――は、既存資本の増殖という制限された目的とは絶えず衝突せざるをえない。それだから、資本主義的生産様式が、物質的生産力を発展させこれに対応する世界市場をつくりだすための歴史的な手段だとすれば、それはまた同時に、このようなその歴史的任務とこれに対応する社会的生産関係とのあいだの恒常的矛盾なのである。》（3巻313-4頁）

だから問題の根本的解決のためには、現代の資本主義的生産様式そのものを革命的に変革しなければならない。人間の自然に対する働きかけを資本の無政府性のままに放置するのではなく、それを人間自身の意識的な統制のもとに取り戻さなければならないのである。

《すなわち、社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。》（3巻1050-1頁）

しかし、そのためにはこの資本主義社会を変革する労働者階級の闘いが必要であり、その階級闘争の発展が何よりも望まれる。

貴方も是非、この資本主義社会を変革する武器として、『資本論』を学んでみませんか？

第4回「『資本論』を読む会」の報告

◎夏真っ盛り、とにかく暑い!(@ @)

関西地方も梅雨が明け、第4回「『資本論』を読む会」が開催された20日も、お日さんがカンカンと照りつける好天日でした。こんな日には、若い者なら海や山に、あるいはプールへと、老人たちは静かに家でクーラーの効いた部屋で昼寝でもやりたいものです。何が因果かこのクソ暑い中、昼日中にノコノコと出かけなければならないのか、などと愚痴をこぼしながら、とにかく出かける羽目に相成りました。

泉が丘駅から会場の図書館までほんの2~300m歩道橋を歩いていくのですが、途中から日差しを避けるものが何もなく、私は持っていた汗ふきタオルを頭に乘せて、照り返しの強い歩道橋を汗をタラタラ流しながら歩きました。

しかしこんなに暑くても、ありがたい事に会場はクーラーが効いていました。私たちは第2集会室を利用したのですが、この部屋も4~50人規模の大きな部屋。それを私たちはたった4人で利用しました。こんな大きな部屋をたった4人で、しかもクーラーを効かせて、タダで使用するのは何となく気が引けるというか、後ろめたい気持ちが否めません。私たちはもっと小さな部屋があればそれで十分なのですが、あいにく図書館に併設されている集会室にはそうした適当な大きさのものがありません。もっとも私たちの隣の第1集会室（これも4~50人規模の大きな部屋だが）を利用してあるグループもたったの3人ほどのようでしたので、まあ何というかその後ろめたさがやや和らいだというか、私たちだけが罪深いことをしているのではないという安堵感のようなものがあつた次第です。

こんな大きな集会室ですが、部屋を借りてくれているピースさんの話では、案外に土日は空いているのだそうです。平日の夜はさまざまなサークルで一杯のようですが、土日は誰もが休みたいのか、利用者は少ないといひます。それに図書館に併設されていることから、その利用目的が制限されている（「読書会」や「読み聞かせ会」、「お話し会」等々のグループの利用が多いよう）ことも、会場が案外空いている理由のようです。いずれにせよ、とにかくありがたい事です。

◎「価値」を導き出すややこしい論理

さて、いよいよ私たちの『資本論』を読む会も佳境に入り、これまで多くの人達が議論し、論争してきた部分にさしかかってきました。まずその部分を全文引用しておきましょう。

《使用価値としては、諸商品は、何よりもまず、相異なる質であるが、交換価値としては、相異なる量でしかありえず、したがって、一原子の使用価値も含まない。

そこで、諸商品体の使用価値を度外視すれば、諸商品体にまだ残っているのは、ただ一つの属性、すなわち労働生産物という属性だけである。しかし、労働生産物もまたすでにわれわれの手で変えられている。もしもわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、われわれは、労働生産物を使用価値にしている物的諸成分と諸形態をも捨象しているの

である。それはもはや、テーブル、家、糸、あるいはその他の有用物ではない。その感性的性状はすべて消しさらされている。それはまた、もはや、指物（サメノ）労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他の一定の生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有用的性格と共に、労働生産物に表れている労働の有用的性格も消えうせ、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的形態も消えうせ、これらの労働は、もはや、たがいに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間労働、すなわち抽象的人間労働に還元されている。

そこで、これらの労働生産物に残っているものを考察しよう。それらに残っているものは、幻のような同一の対象性以外の何物でもなく、区別のない人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、単なる凝固体以外の何物でもない。これらの物が表しているのは、もはやただ、それらの生産に人間労働力が支出されており、人間労働が堆積されているということだけである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値—商品価値である。諸商品の交換関係そのものにおいては、それらの物の交換価値は、それらの物の諸使用価値とはまったくかわりのないものとして、われわれの前に現れた。そこで今、実際に労働諸生産物の使用価値を捨象すれば、今まさに規定された通りのそれらの価値が得られる。したがって、商品の交換関係または交換価値のうちみずから表している共通物とは、商品の価値である。……》（全集版51—2頁）

何とも複雑な論理で、頭がこんがらがってしまいそうです。

ピースさんは、「どうして、マルクスはこんなに回りくどい説明をしているのかなあ、“諸商品を互いに質的に区別している諸使用価値を捨象したら、あとに残るそれらの共通物がすなわち価値である”とスッキリ説明したらどうしてアカンのやろ」と疑問を出しました。

実際、マルクスも引用文の最後のパラグラフでは《実際に労働諸生産物の使用価値を捨象すれば、……それらの価値が得られる》とスッキリ説明しています。

もっともこれだと価値の実体が説明されたことにはならないのですが、だからマルクスはそれを説明するために色々工夫したのではないか、ということになったのです。

そこで初版では、ここはどのように説明していたのかを見てみました。次のようになっています。

《交換価値の実体が商品の物理的な手につかめるある存在または使用価値としての商品の定在とはまったく違ったものであり独立なものであるということは、商品の交換関係がひと目でこれを示している。この交換関係は、まさに使用価値の捨象によって特徴づけられているのである。すなわち、交換価値から見れば、ある一つの商品は、それがただ正しい割合でそこにありさえすれば、どのほかの商品ともまったく同じなのである。

それゆえ、諸商品は、それらの交換関係からは独立に、またはそれらが諸交換—価値として現われる場合の形態からは独立に、まず第一に、単なる諸価値として考察されるべきなのである。

諸使用対象または諸財貨としては、諸商品は物体的に違っている諸物である。これに反して、諸商品の価値存在は諸商品の統一性をなしている。この統一性は、自然から生ずるのではなくて、社会から生ずるのである。いろいろに違う諸使用価値においてただ違って表わされるだけの、共通な社会的な実体、それは—労働である。

諸価値としては諸商品は結晶した労働よりほかのなにものでもない。（以下、価値の量の考察に移っている）》（岡崎訳・国民文庫24—5頁、注は省略しました）

なるほど、初版では全体に簡潔だし、ここにはまだ「抽象的人間労働」といった言葉もでて来きません。ただ「共通な社会的実体」としての「労働」が指摘されているのみです。そして論理としてはむしろスッキリしているような印象を与えます。

しかしこれが第二版のための『補足と改訂』（1871年12月－1872年2月執筆）だと次のようになっています。

《そこで、諸商品体の使用価値を度外視すれば、諸商品体にまだ残っているのは、一つの属性、労働生産物という属性だけである。しかし、労働生産物もまたすでにわれわれの手によって変えられている。もしわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、われわれは、労働生産物を有用にしている、すなわち使用価値にしている肉体的諸成分と形態をも捨象しているのである。それはもはや、テーブル、家、糸、等その他なんらかの使用対象ではない。その感性的性状はすべて消し去られている。したがって、それはまた、もはや、指物労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他何かある一定の有用的生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有用的性格とともに、労働生産物に含まれている労働の有用的性格も消えうせ、したがってまた、ある労働がなにかある一つの使用対象を生産するときの、一定の具体的形態も消えうせる。

そこで、これらの労働生産物にのこっているものを考察しよう。いま、一つの商品は他の商品と同じようにみえる。それらはすべて、何かあるものと同じまぼろしのような対象性以外の物ではない。何のか？ 区別のない、人間的労働の、すなわち、その支出の特殊な、有用的な、規定された形態にかかわりのない人間的労働力の支出の対象性である。これらの物が現わしているのは、それらの生産に人間的労働力が支出されており、人間的労働が堆積されている、ということ以外のなにものでもない。それらに共通な、この社会的実体の結晶として――これらの物は価値である。

われわれは次のことを見てきた。――諸商品の交換関係あるいはそれらの交換価値の形態そのものは、交換価値を使用価値の抽象と、特徴づけた。使用価値の抽象が現実に行われ、いままさに規定されたとおりのそれらの価値が得られる。（以下、略）》（小黒正夫訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第5・7号56頁）

これは現行版にかなり近くなっていますが、まだ「抽象的人間労働」という用語そのものはこの範囲では出て来ません。しかしこの『補足と改訂』にはそのすぐあとに次のような注目すべき言及があります。

《労働生産物を、それらの非常に多様な使用対象性とは異なる、同じ種類の価値対象性に還元するさいに、一つの状況を見過ごしてはならない。すなわち、諸労働生産物が価値対象性を持つ、あるいは価値つまり単なる労働凝固であるのは、それらのなかに実現されているさまざまな具体的諸労働が、すべて抽象的人間的労働に還元されているからに他ならない、ということである。》（同）

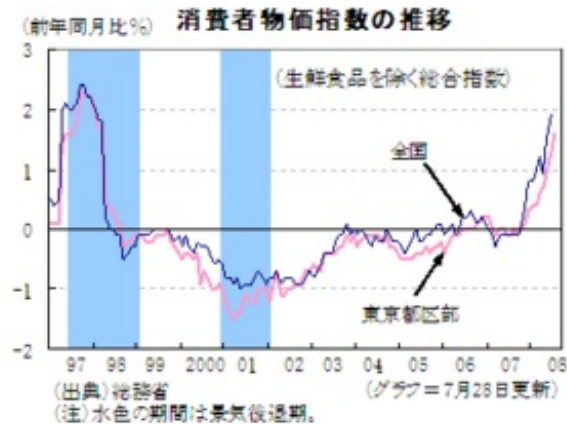
第二版ではこの二つが合わさって現行のような敘述になったと考えられるのではないのでしょうか。

さて、この部分については、戦前から今日に至るまで多くの議論がなされてきたのですが、それについては次回の報告の時にでも検討することにして、今回はこのぐらいにしましょう。

第5回「『資本論』を読む会」の案内

総務省が7月25日に発表した6月の全国消費者物価指数は、前年同月比1.9%も上昇し、9カ月連続のプラスとなった。

消費税率引き上げの影響で物価が上がった1998年1月以来、10年5カ月ぶりの高い伸び率だという。ガソリンの高騰や、穀物価格上昇に伴う食品の値上げなどが影響したなどと言われている。



実際、身の回りの生活必需品を見回しても、値上げラッシュである。パンやスパゲッティ、チーズ、インスタントラーメン等々、食料品はいうに及ばず、電気やガスも値上げが予定されている。テレビのニュースでは教育費やPTAの会費まで値上げしているなどと報じていた。そして唯一労働者の賃金だけが低下し続けている、と。

すでにインフレは明らかになりつつある。6月に大阪で開かれたG8財務相会合でも世界インフレが指摘され、「警戒を怠らず、共同で適切な行動を」などと訴えていたが、インフレは世界中で広がろうとしているのである。

世界的なインフレは、サブプライム問題などによって、オイルマネーなど世界的な投機資金が金融商品を回避し、石油や穀物など現物商品の先物市場に流れ込んでいるからだとも言われているが、しかしその背景にはドルの“タレ流し”による過剰な貨幣資本があることは明らかである。

こうした国家信用で膨れ上がった架空な貨幣資本は、為替や有価証券などに向かっている限りは、ただ剰余価値の上前をハネルための権利のやりとりでしかないし、物価に対する影響はほとんどないのだが、しかし一旦、現物商品に向かうと、たちまちその架空性が暴露されて（というのはこうした架空な貨幣資本は現実資本に対する直接的な請求権を代表していないから）、物価の騰貴を引き起し、結果として、その貨幣“価値”の下落、すなわちインフレをもたらすことになるのである。

だから今日のインフレは国家的な信用膨張と深く結びついた現象であり、なかなか複雑ではあるが、しかしインフレそ

のものは、直接的には貨幣的現象であり、それを解明するためには、やはり『資本論』で明らかにされている「貨幣論」が必要なのである。

だから貴方も是非、今日の複雑な経済現象を理論的に読み解くためにも、共に『資本論』を読んでみませんか？

第5回「『資本論』を読む会」の報告

◎暑かった夏もおさらば

8月も終わりに近づくと、急に涼しくなりました。

私は友人夫婦と一緒に19～21日にかけて恒例の2泊3日の旅行に出かけ、標高1000m近くの高原の宿舎で過ごし、さすがは高原は涼しいなあ、などと言っていたのですが、帰ってくると、何のことはない、大阪の方が涼しくて、夜は窓を開けて寝ていると風邪を引きそうなほどでした。これでは何のための避暑旅行かといった次第でした。

それほど今年の夏は短く、秋は早足で訪れつつあるようです。これを喜ぶべきか、それとも悲しむべきか、子供達にとっては、楽しい夏休みが終わり、学校が始まるという何とも言えない複雑な気持ちではあるでしょうが、年寄りには、まあ身体が楽になるという点では、喜ぶべきなのでしょう。

“実りの秋”と言います。しっかり『資本論』を研究して、実り多い秋にしたいものではありません。

◎「抽象的人間労働」と「同等な人間労働」

最近秋雨前線が停滞して、天気の悪い日が続きますが、わが「『資本論』を読む会」も、やや停滞気味で、ほとんど“移動”がありませんでした。

といっても、何も議論もせずに終わったということではありません。問題が難しく何度議論してもなかなか埒が開かなかったからです。

「抽象的人間労働」を如何に理解するかが問題でした。これは戦前から多くの学者が議論してきたものですから、私たちがたった数時間議論したからと言って埒が開くような性格のものではないと言えばそれまでですが、とにかく議論になった点を紹介しましょう。まず当該パラグラフを全部引用しておきます。

《(14)したがって、ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからにほかならない。では、どのようにしてその価値の大きさははかれるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」、すなわち労働の、量によってである。労働の量そのものは、その継続時間によってはかれ、労働時間はまた、時間、日などのような一定の時間部分を度量基準としてもっている。

(15)一商品の価値がその生産のあいだに支出された労働の量によって規定されるならば、ある人が怠惰または非熟練であればあるほど、彼はその商品の完成にそれだけ多くの時間を必要とするのだから、彼の商品はそれだけ価値が大きいと思われるかもしれない。しかし、諸価値の実体をなす労働は、同等な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商

品世界の諸価値に現される社会の総労働力は、たしかに無数の個人的労働力から成りたっているけれども、ここでは同一の人間労働力として通用する。これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。たとえば、イギリスで蒸気織機が導入されてからは、一定の量の糸を織物に転化するためには、おそらく以前の半分の労働でたりたであろう。イギリスの手織り工はこの転化のために実際には以前と同じ労働時間を必要としたが、彼の個人的労働時間の生産物は、今ではもう半分の社会的労働時間を表すにすぎず、したがって、以前の価値の半分に低下したのである。》

これはパラグラフで言うと、14と15パラグラフです（いま便宜的に引用文にパラグラフの番号を記してみました）。この二つのパラグラフの論理的な関係が今一つよく分からないのです。

まず最初に気付くのは、14パラでは「抽象的人間労働」という用語が使われていますが、15パラではそれが見当たらないということです。「価値の大きさ」が問題になると、どうして「抽象的人間労働」（の量）ではなく、15パラで問題になっている「同等人間労働」とか「同じ人間労働力の支出」とか「同一の人間労働力」とか「社会的平均労働力」「社会的平均労働」「社会的に必要な労働時間」等々が問題になるのか、前者と後者とはどのように関連しているのか、が問題になったのです。

◎まず最初は15パラグラフから

15パラグラフでは、さまざまな用語がでてきますが、それらは次のような展開になっています。

《諸価値の実体をなす労働は、同等人間労働であり、同じ人間労働力の支出である》

↓

《商品世界の諸価値に現される社会の総労働力は、たしかに無数の個人的労働力から成りたっているけれども、ここでは同一の人間労働力として通用する》

↓

《これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である》

↓

《社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である》

ここでは、まず《諸価値の実体をなす労働は、同等人間労働、同じ人間労働力の支出である》との命題が述べられ、だから個々の労働は諸価値に現される限りは、《同一の人間労働力として通用する》こと、そして《同一の人間労働力として通用する》ということは、個々の労働が《社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用》する限りにおいてであること、というのは、《一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である》と言えるからだ、とされています。

つまりここでは「価値の実体をなす労働」と「個別の諸労働」との関連が明らかにされているように思えます。個々の労働はその総計によって「社会の総労働力」の一部を構成しますが、しかし個々の労働それ自体としては価値を形成する労働としては通用しないこと、それが価値の実体をなす労働として通用するためには、それらが社会的な平均労働力とし

て作用しなければならず、《したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて》価値を形成すること、というのは、それらはそうしたものとしてのみ、「同等な人間労働」として通用するのであり、よってまた価値の実体となることができるのだからである、等々。

だからここでは「諸価値の実体をなす、同等な人間労働」が量的に、より具体的により深くその内容が規定されているように思えます。

◎14パラグラフと二つのパラグラフの関連

まあ、15パラグラフはこの程度でよいとして、それではそれが14パラグラフとどのように関連しているのか、それが問題です。次に14パラグラフを考察してみましょう。 14パラグラフで問題になったのは次の一文です。

《では、どのようにしてその価値の大きさははかられるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」、すなわち労働の、量によってである。》

ここでマルクスは《「価値を形成する実体」、すなわち労働の、量によって》と書いていますが、ここに出てくる「労働」は、その前の分節――《したがって、ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからにはほかならない》――に出てくる「抽象的人間労働」と同じなのか違うのかが問題になりました。

ピースさんは同じではないかというし、亀仙人は「同じならどうして単に『労働』ではなく、『抽象的人間労働』という言葉を使わないのか」と疑問を呈したのですが、結論はでませんでした。

この両者は同じと言えば同じですし、違うと言えば違うと言えます。明らかにマルクスはここで単に「労働」とのみ述べているのは、その次の15パラグラフとの絡みからだだと思います。両者の違いは、「抽象的人間労働」は諸商品に対象化された労働であり、いわば「過去の労働」ですが、「価値を形成する実体」としての「労働」は、これから価値を形成する労働、つまり「生きた労働」という点にあるように思えます。「抽象的人間労働」は諸商品の交換関係から、それらの諸商品に共通なものとして、諸生産物に対象化され結晶している「社会的実体」として、抽出されたものです。それはもちろん、価値の実体をなすわけですから、社会的に共通な質に還元された労働であり、その具体的姿態が捨象された、一般化・抽象化された労働です。しかしわれわれが「価値を形成する実体」として捉えている「労働」は、これから価値を形成する労働として、その内容が問われています。それは「価値を形成する実体」とマルクスが説明しているように、すでに個別の労働とは異なる、何らかの社会的実体になった労働なわけですから、それは単に個別の労働から、その具体的姿態を捨象して、単なる労働一般として捉え、その継続時間を問題にすればよいというものではないわけです。

商品に対象化された労働の場合、それはすでに商品のなかに物質化されたものなので、その具体的姿態を捨象して「抽象的人間労働」に還元すれば、それはすでに一つの「社会的実体」ということができます。それは諸商品の交換関係、という一つの社会的関係から抽出されたものでもあるからです。つまり具体的な労働からその具体性を捨象し、抽象的人間労働に還元して、そのことによってその労働が社会的に共通な質を獲得するということのなかには、その労働が「同じ人間労働」「同じ人間労働力の支出」として捉えられるということが含まれているのです。だからその労働は個別に支出された労働とはすでに異なるものなのです。個別の労働の具体的姿態をただ捨象しただけでは不十分であり、そうした抽象された労働がその抽象性によって社会的な共通の質を獲得するためには、その労働が「同じ人間労働」「同じ人間労働力の支出」として通用するものにならなければならないわけです。そこから第15パラグラフの説明に繋がって行くわけです。

つまり「諸価値の実体をなす労働」である「同じ人間労働」「同じ人間労働力の支出」というのは、より具体的にその内容をみると、「社会的平均的労働力の支出」という意味を持ち、だからその継続時間というのは、「社会的に必要な労働時間」なのです。それは「現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である」とも規定されています。

だから「価値を形成する実体」としての「同じ人間労働」とか「同じ人間労働力の支出」、あるいは「社会的平均的労働力の支出」、さらには「社会的に必要な労働時間」というのは、「価値の実体」としての「抽象的人間労働」をより具体的にその内容を展開したものということができるのではないのでしょうか。

一応、不十分ながら、結論らしきものとして、以上のことを述べておきます。もし、異論があればどしどし出してください。歓迎します。

第6回「『資本論』を読む会」の案内



福田首相があっさりと政権を投げ出し、自公政権は混迷を深めている。もはや、さっさと解散・総選挙でも行い、政権交代でも何でもやってもらいたいものだ。

景気後退が顕著になるなかで、政府は小泉政権が掲げた「構造改革路線」を転換し、財政膨張に依存した“景気浮揚策”へと後戻りしつつある。福田内閣が8月末にまとめた「総合経済対策」（事業規模11.7兆円、08年度補正1.8兆円）がそれだ。

もし福田首相の後を、麻生太郎自民党幹事長が引き継ぐなら、財政の膨張はより一層野放図になるであろう。麻生氏は、幹事長就任後、「景気がその気になるまで、財政出動以外に手はない」（『朝日』9月2日）などと公言してきたからである。

しかし日本の国家的債務は国・地方合わせて約1000兆円（実質GDPのほぼ倍！）と言われ、平成20年度の公債残高は約553兆円（国民一人当たり約433万円）である。これではほとんど国家的破産に近いといわなければならない。

マルクスは国債制度は資本主義が歴史的に生まれてくる上で重要な役割を果たした、と次のように指摘している。

《公債は本源的蓄積の最も強力なテコの一つとなる。それは、魔法の杖を振るかのよう、不妊の貨幣に生殖力を与えてそれを資本に転化させ、そのためには貨幣は産業的投資や高利貸しの投資にさえつきものの骨折りや危険を犯す必要はない。国家に対する債権者は現実には何も与えはしない。というのは、貸しつけた金額は、容易に譲渡されうる公債証書に転化され、それは、ちょうどそれと同じ額の現金であるかのように、彼らの手中で機能し続けるからである。しかも、このようにして生み出される有閑金利生活者の階級や、政府と国民とのあいだに立って仲介者の役割を演じる金融業者たちの即製の富を別としても……国債は、株式会社やあらゆる種類の有価証券の取り引きや株式売買を、一言で言えば、取引所投機と近代的銀行支配とを、勃興させたのである。》（『資本論』第1部第24章、全集23b 984-5頁）

そして今日の公債制度、すなわち国債制度は、今度は、資本主義延命の「最も強力なテコの一つ」である。資本はさまざまな経済危機を国家に依存して、その財政や信用の膨張に依存して切り抜けてきた、その結果が、今日の膨大な国家的債務の累増なのだ。

そしてその行き着く先は、国家の破綻か戦争か、それとも猛烈なインフレか、あるいは国民への徹底した重税かに帰

着するしかない。いずれにしてもすべての負担は国民に転嫁される！

だから労働者はこうした無責任な“景気浮揚策”などは御免である。この社会のより深い理解を得るためにも、是非、貴方も『資本論』を読んでみませんか？

第6回「『資本論』を読む会」の報告

◎すでに冬近し？

急に冷え込んできました。

今回、報告を行う第6回「『資本論』を読む会」が開催された9月21日はまだ気温も高く、午前中はよい天気でした。天気予報は「雨」とありましたが、こんなよい天気だから予報は外れだな、と思いながら、傘も持たずに図書館に行ったのでした。ところが学習会が終わりに近づくと天気は一転し、土砂降りの雨になりました。私たちは、帰ろうにも帰ることができず、しばらく図書館で雨宿りをしていましたが、少し小降りになったところで、私はショルダーバッグを頭に掛けて、ピースさんやクミさんなどは持っていた汗ふきタオルを頭に掛けて、一散に駅まで走りました。さすがピースさんはフルマラソンをやっているだけあって、軽快でしたが、太っている私などは走っているつもりでも、現実には早足で歩いている程度で惨めなものでした。しかしそれでもなんとか駅にたどり着き、私などはかなり雨に濡れましたが、しかしまだ気温は温かったので気にならなかったのです。何しろピースさんやクミさんはまだ汗ふきタオルを持っていたぐらいなのですから。

ところがその日から一週間余りたったただけなのに、この寒さはどういうことでしょうか。歳をとると時の経つのは早く感じるものですが、これはどう考えても早すぎます。これもやはり異常気象の一つなのでしょう。この急激な気温の変化で体調を崩し、この報告もやや遅れることになりました。都合のよい言い訳ですが、ご容赦、ご容赦。

◎「抽象的人間労働」の議論を継続

学習会はテキストのパラグラフとしてはまったく進まず、前回議論になった問題をもう一度議論することになりました。

というのは、前回の議論に関連して、亀仙人から資料が配布され、その資料をもとにもう一度議論が再燃したからです。

その資料というのは、埼玉の「『資本論』を読む会」の第110回の報告 (<http://shihonron.exblog.jp/9470612/>) の中に、久留間鮫造氏や宇野弘蔵氏などが参加した研究会の記録をまとめた『資本論研究—商品および交換過程』(河出書房1948年)の中から引用されているものです。まずその議論になった引用文を紹介しておきましょう。

〈相原 一寸、その前に、生産力と必要労働時間との関係を分かり易く教えていただきたいのです。

労働生産力が大であればある程、或る品物の産出に必要とされる労働時間は小となり、価値も従って小となる。逆の場合は逆になるといって、必要労働時間は直接労働生産力の凡ゆる変化につれて変化する、ということが書いてある。ところが少し先には、労働の生産力は、労働の具体的な有用的な形態に属しているから、それは、労働の具体的な有用的な形

態が抽象されるや否やもう労働には関係しない、云々、と述べられている。

その間のつながりというのはどういうことになるのか。価値の大きさを定める社会的必要労働時間は直接に生産力の変化に逆比例して変化するようにも云われ、次にこの生産力の変化がそういった価値を作る抽象的な労働とは直接関係がない様にも云われていること、この点は生産力の増減が使用価値の増減であって、それを媒介としてつまり商品の単位当たりによればそこに含まれている労働が増えたり減ったりするものだとして理解していいのか、何かそこに品質と分量とのむずかしい関係がある様でもあり櫛田さんのものも読んだが、よく読まないせいか未だ安心ができない節があります。

久留間 その疑問は価値の大きさに関する二つの異なった問題をはっきりと区別しないことから来るのではないでしょうか。いま引き合いにだされたマルクスの二つの命題はいずれも価値の大きさに関するものではあるがそれを問題にする視角が全然異なっていると思う。すなわち、生産力と無関係だといっている場合には、価値の大きさは本質的にはなんの大きさによってきめられるかを問題にしているのであって、それに対してマルクスは、専ら価値を形成する実体の大きさによって、即ち支出の態様の如何を問わない単なる人間労働力の支出としての労働の分量、即ち抽象的人間的労働の分量によってきまるのだと云っているのです。即ちこの観点からすれば、等しい人間労働力の支出は、それがどのような種類の使用価値のどれだけの分量に結果しようが、常に一定の価値を造り出すということになる。即ち労働の生産力には無関係だということになる。これはもともと、価値の大きさの問題とは云っても、価値の大きさをその実体の大きさに還元する問題に外ならないのであるから、本質的には価値そのものの問題、云わば価値の品質の問題と見ることができる。これに反して今ひとつの問題は、価値の大きさをその実体である労働分量に還元した後に生じる、云わば固有の意味においての価値の大きさの問題に関するのであって、ある特定の使用価値を生産するために社会的に必要な労働時間そのものが何によってきめられるかを問題にしているのである。だからそれは生産力に逆比例してきまると云って答えられるのが当然である。なぜかと云うに、この場合にはある特定の使用価値の生産に必要な労働時間が問題とされているのであり、人間の労働力のある特定の態様における支出が問題にされているからです。

相原 必要労働時間の労働と、品質の方の時にいっている労働とは違いますか。

久留間 必要労働時間というのは。いうまでもなく。一定の使用価値を作るのに必要な労働時間、例えば米一升を作るのに必要な労働時間、糸一斤を作るのに必要な労働時間、等々であって、従ってそれは、一定の使用価値との関連なしには、従ってまた労働の有用的具体的な性質に即することなしには考えられない。だからこそ、それは労働の生産力に逆比例することにもなるのである。ところで単にこの面のみから見れば、必要労働時間なるものは生産の社会的形態には無関係な、人間と自然との交換の関係を云い現すものに過ぎないのであるが、商品生産社会においては、この必要労働時間は同時にまた価値の大きさを規定するものとして現れる。そしてこの場合には労働は、有用的・具体的な性質を捨象された、単なる人間労働力の支出としてゲルテン(gelten)するのである。だから必要労働時間と云う場合には、労働は同時に二重の性質において現れるものと考えなくてはならない。それは有用的・具体的性質においては一定時間内に一定の使用価値を作り、抽象的性質においては一定時間内に一定の価値を作る。だから一定時間内に作られた一定の使用価値が一定の価値をもつと云うことになる。〉(110-111頁)

ここで久留間氏が説明していること、すなわち〈価値の大きさに関する二つの異なった問題〉が〈区別〉して論じられているのが、すなわち14パラグラフと15パラグラフの違いであり、また両者の関連でもあるのではないかと、というのが亀仙人の問題提起でした。

つまり第14パラグラフ――

《(14)したがって、ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからにはほかならない。では、どのようにしてその価値の大きさははかられるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」、すなわち労働の、量によってである。労働の量そのものは、その継続時間によってははかられ、労働時間はまた、時間、日などのような一定の時間部分を度量基準としてもっている。》

で述べていることは、久留間氏が次のように説明していることを含意しているのではないか、

〈価値の大きさは本質的にはなんの大きさによってきめられるかを問題にしているのであって、それに対してマルクスは、専ら価値を形成する実体の大きさによって、即ち支出の態様の如何を問わない単なる人間労働力の支出としての労働の分量、即ち抽象的人間的労働の分量によってきまるのだと云っているのです。……これはもともと、価値の大きさの問題とは云っても、価値の大きさをその実体の大きさに還元する問題に外ならないのであるから、本質的には価値そのものの問題、云わば価値の品質の問題と見ることができる。〉

また次の15パラグラフ――

《(15)一商品の価値がその生産のあいだに支出された労働の量によって規定されるならば、ある人が怠惰または非熟練であればあるほど、彼はその商品の完成にそれだけ多くの時間を必要とするのだから、彼の商品はそれだけ価値が大きいと思われるかもしれない。しかし、諸価値の実体をなす労働は、同等な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値に現される社会の総労働力は、たしかに無数の個人的労働力から成りたっているけれども、ここでは同一の人間労働力として通用する。これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。たとえば、イギリスで蒸気織機が導入されてからは、一定の量の糸を織物に転化するためには、おそらく以前の半分の労働でたりたであろう。イギリスの手織り工はこの転化のために実際には以前と同じ労働時間を必要としたが、彼の個人的労働時間の生産物は、今ではもう半分の社会的労働時間を表すにすぎず、したがって、以前の価値の半分に低下したのである。》

は、やはり久留間氏がもう一つの価値の大きさの問題として述べている説明――

〈これに反して今ひとつの問題は、価値の大きさをその実体である労働分量に還元した後に生じる、云わば固有の意味においての価値の大きさの問題に関するものであって、ある特定の使用価値を生産するために社会的に必要な労働時間そのものが何によってきめられるかを問題にしているのである。だからそれは生産力に逆比例してきまると云って答えられるのが当然である。なぜかと云うに、この場合にはある特定の使用価値の生産に必要な労働時間が問題とされているのであり、人間の労働力のある特定の態様における支出が問題にされているからです。〉

に該当するというわけです。

つまりこの二つのパラグラフ（14と15）の関連は、14パラグラフではそもそも価値の大きさは何によって決められるかを問題にし、15パラグラフはある特定の商品の価値の大きさは何によって決められるかを問題にしているということです。

特定の商品の価値の大きさというのは、当然、その商品が何であるかということを不問にしては論じることはできません。つまりその商品の使用価値を無視しては論じられないのです。価値の大きさは対象化されている抽象的人間労働の量によって決まるが、しかしそれがどれだけの大きさであるか、つまりその限度は、結局、使用価値によって決まってくるわけです。もともと抽象的人間労働は現実の労働の一つの側面にすぎません。現実の労働は具体的有用労働と抽象的人間労働という二つの契機を持っており、両者を切り離すことはできません。抽象的人間労働の量の限度は、まさにそれが統一している他のもう一つの契機である具体的有用労働によって決まってくるのです。だからその量の限度は、具体的有

用労働に関連する生産力によって規定されることになるのだと思います。

他方、この具体的有用労働というのは、個人的にはまちまちです。特定の使用価値を生産するために支出される具体的有用労働は、その限りではその具体性も有用性も同じ質を持ちながら、やはり個別にはまちまちでしかありません。だから一律同一である抽象的人間労働の量的限度もやはり個別的にはまちまちなわけです。だから15パラグラフでは「個人的労働力」と「社会の総労働力」や「社会的平均労働力」との関連を説明しているのだと思います。

◎「必要労働時間という場合は、労働は同時に二重の性質において現われる」

次に議論になったのは、もう一つは久留間氏の説明に関連してでした。

久留間氏は「必要労働時間なるものは生産の社会的形態には無関係な、人間と自然との交換の関係を云い現すものに過ぎない」とか「必要労働時間という場合は、労働は同時に二重の性質によって現われる」と述べ、必要労働時間を歴史貫通的なものとして捉えています。果たしてこれは正しいのかどうか議論になりました。

これを検討するために、前回の15パラグラフにおけるマルクスの考察をもう一度、再現してみましょう。そこでは次のような命題が展開されていました。今それぞれの命題に便宜的に番号を打ってみます。

(1)《諸価値の実体をなす労働は、同等な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である》

↓

(2)《商品世界の諸価値に現される社会の総労働力は、たしかに無数の個人的労働力から成りたっているけれども、ここでは同一の人間労働力として通用する》

↓

(3)《これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である》

↓

(4)《社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である》

このようなマルクスの展開と、久留間氏の次のような説明とを比較検討してみましょう。

〈必要労働時間というのは。いうまでもなく。一定の使用価値を作るのに必要な労働時間、例えば米一升を作るのに必要な労働時間、糸一斤を作るのに必要な労働時間、等々であって、従ってそれは、一定の使用価値との関連なしには、従ってまた労働の有用的具体的な性質に即することなしには考えられない。だからこそ、それは労働の生産力に逆比例することにもなるのである。ところで単にこの面のみから見るならば、必要労働時間なるものは生産の社会的形態には無関係な、人間と自然との交換の関係を云い現すものに過ぎないのであるが、商品生産社会においては、この必要労働時間は同時にまた価値の大いさを規定するものとして現れる。そしてこの場合には労働は、有用的・具体的な性質を捨象された、単なる人間労働力の支出としてゲルテン(gelten)するのである。だから必要労働時間と云う場合には、労働は同時に二重の性質において現れるものと考えなくてはならない。それは有用的・具体的な性質においては一定時間内に一定の使用価値を作り、抽象的性質においては一定時間内に一定の価値を作る。だから一定時間内に作られた一定の使用価値が一定の価値をもつと云うことになる。〉

久留間氏の説明をマルクスの展開と同様に、命題化して、番号をつけてその展開を見てみると次のようになります。

[1] 〈必要労働時間というのは、……一定の使用価値を作るのに必要な労働時間……である〉。

↓

[2] 〈この面のみから見るならば、必要労働時間なるものは生産の社会的形態には無関係な、人間と自然との交換の関係を云い現すものに過ぎない〉

↓

[3] 〈商品生産社会においては、この必要労働時間は同時にまた価値の大きさを規定するものとして現れる。そしてこの場合には労働は、有用的・具体的な性質を捨象された、単なる人間労働力の支出としてゲルテン(gelten)するのである。〉

↓

[4] 〈だから必要労働時間と云う場合には、労働は同時に二重の性質において現れるものと考えなくてはならない。それは有用的・具体的性質においては一定時間内に一定の使用価値を作り、抽象的性質においては一定時間内に一定の価値を作る。だから一定時間内に作られた一定の使用価値が一定の価値をもつと云うことになる。〉

この久留間氏の説明の展開は、[1]、[2]は必要労働時間が歴史貫通的なものであることの説明であり、[3]はそれが商品生産社会では価値の大きさを規定するものとして現れることを指摘し、[4]では、この両者を統一した説明になります。

これをマルクスの展開と比較すると、マルクスの(4)は久留間氏の[1]に該当します。またマルクスの(1)は久留間氏の[3]に該当すると思われます。ただマルクスの展開の場合は、あくまでも価値の大きさの説明として一貫しているように見え、(4)の説明からはそれが直ちに歴史貫通的なものとして理解することできないように思えます。

マルクスの説明は、《諸価値の実体をなす労働は、同等な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である》から始まり、その「同等な人間労働」「同じ人間労働力の支出」とはそもそもなにかを個別労働との関連から説明するものになっています。すなわち《これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である》と。すでにここでは「社会的に必要な労働時間」が説明されており、(4)はそれをさらに厳密に言い換えたに過ぎないと言えます。

マルクスの説明は、価値を形成する労働は同一の人間労働であり、それは個別の労働とは異なる。だから価値を形成する労働としては個別の人間労働は、他の労働と同一の人間労働力として通用しなければならない。それは一つの社会的平均的な労働力という性格をもち、そのようなものとして作用し、一つの商品の生産に社会的に、平均的に必要な、労働時間のみを用いる限りにおいて、そうしたものとして認められる、というものです。

このようにマルクスの説明はあくまでも一商品の価値の大きさを説明するものとして終始しているように思われます。

もしマルクスの命題の(4)が歴史貫通的なものであるという久留間氏の説明が正しいのであれば、このマルクスの展開にそって遡及すると、マルクスが「諸価値の実体をなす労働」として説明している「同等な人間労働」「同じ人間労働力の支出」もやはり歴史貫通的なものとして理解すべきではないでしょうか。なぜなら、マルクスの(3)の命題から考えるなら、ここで「同じ人間労働力」というのは、「一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて」とらえられた労働であり、だからそれは抽象的人間労働の契機だけではなく、具体的有用労働の契機からも捉えられており、久留間氏によれば〈生産の社会的形態には無関係な、人間と自然との交換の関係を云い現すものに過ぎない〉と言えるように思えるからです。ところが久留間氏は[3]では次のように述べています。

〈商品生産社会においては、この必要労働時間は同時にまた価値の大きさを規定するものとして現れる。そしてこの場

合には労働は、有用的・具体的な性質を捨象された、単なる人間労働力の支出としてゲルテン(gelten)するのである。〉
。

つまりこの久留間氏の説明だと「単なる人間労働力の支出」、つまりマルクスのいう「同一の人間労働」「同じ人間労働力の支出」というのは、有用的・具体的な性質を捨象されたものだということです。しかしマルクスによれば、個別労働が「同じ人間労働力」として認められるのは、それが社会的平均労働力という性格を持つからであり、《一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる》から、つまり「社会的必要労働時間」である限りにおいてなのです。ところが久留間氏によると〈必要労働時間と云う場合には、労働は同時に二重の性質において現れるものと考えなくてはならない〉ということです。つまり具体的・有用的な性質も含んだものだということです。これでは一体どう理解したらよいのでしょうか？

第7回「『資本論』を読む会」の案内



世界的な金融恐慌が勃発しつつあります。

アメリカのサブプライムローン問題に端を発した世界的な信用収縮は、留まるところを知らず、リーマン・ブラザーズなど米大手金融機関の破綻へと発展し、欧州の金融機関にも波及して、国有化や国家の大幅な介入を招いています。

9月29日のニューヨークの株式市場は777ドルという史上最大の下げ幅を記録しました。金融危機対策としてブッシュ政権が打ち出した緊急経済安定化法案を米議会下院が否決したからです。

最大7千億ドル（約75兆円）の公的資金で金融機関の不良債権を買い取るというものですが、「金持ち優遇」「ボロ儲けのツケを国民に押しつけるな」という圧倒的な国民の批判の前に、与党の共和党議員でさえ7割近くも造反する有り様。

しかしこれは当然です。これまでことあるごとに、“新自由主義”の理念を振りかざし、「小さな政府」を呼号し、自己責任を云々して、弱者を切り捨ててきたのですから、今更、泡銭に群がって荒稼ぎしてきた連中が、そのツケを払わされる段になって、政府に泣きつき救済せよなどというのは虫が良すぎます。

というわけで、アメリカの金融危機はますます深刻の度を加えつつあります。世界経済の牽引役を果たしてきたアメリカ経済の破綻は、単にアメリカ一国に留まらず、世界的な経済恐慌へと発展しかねません。世界のブルジョアジーが震え上がり、米政府のみならず欧米や日本の政府が救済に必死になる所以でもあります。

こうした金融恐慌や経済恐慌はどうして起こってくるのでしょうか。世界の資本家たちは何度もそれを経験しながら、やはりそれを繰り返すしか能がありません。

マルクスは《世界市場恐慌は、ブルジョア的経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかまなければならない》（『学説史』11689頁）と述べています。

そして恐慌は、資本主義的生産様式そのものの歴史的な限界を示すものだとも指摘しています。

《尖鋭な諸矛盾、恐慌、痙攣においてこそ、社会の豊かな発展にとってはその従来が生産諸関係が、ますます適合しなくなったことが示される。資本にとって外的な諸関係を通じてではなく、資本の自己維持の条件としての資本の暴力的な破壊は、去って社会的生産のより高い段階に席を譲れと言う資本に対する忠告の最も適格な形態である。》（『経済学批判要綱』高木訳IV702頁）

『資本論』はある意味では、どうして資本主義社会では恐慌が繰り返されるのか、それは歴史的にはどういう意味があるのか、を明らかにするために書かれていると言っても過言ではありません。

貴方も、是非、現在の世界的な金融危機を解明するためにも『資本論』を読んでみませんか？

第7回「『資本論』を読む会」の報告

◎ポスターも作成

“天高く馬肥ゆる秋”と言いますが、第7回の「『資本論』を読む会」の開催日も、天高く秋晴れの好天日でした。

ところが“紅一点”のクミさんは季節外れのインフルエンザに罹ったとかでお休み。寂しい開催となりました。

おまけに、われわれ以外には、会場を使う人も少ないのか、全体にガランとして侘しさがつります。

今回、我が「『資本論』を読む会」はポスターを作成しました（写真参照）。

というのはどうやら図書館の掲示板にポスターを貼り出してもらえそうだとピースさんが提案したからです。さっそく、埼玉の「所沢・『資本論』を読む会」のポスターが迫力があるので利用させてもらうことにし、連絡して送ってもらい、それを加工してつくりました。なかなかよいポスターが出来たと思ったのですが、残念ながら、図書館の掲示板には掲載できないとのことでした。掲載するのは、図書館が後援したり、支援する団体に限っているのだそうです。しかしわれわれの案内ビラを入れる箱を作ってくれるなど協力的なので、作ったポスター（A4）もそこに入れていたところ、さっそく無くなっていたので、持ち帰る人があったのだと思います。

今後も案内ビラとポスターを裏表に印刷して、ボックスに入れておくことにしました。



今回は第16パラグラフから第1節の終わりまで進みました。テキストに入る前に、前回の「報告」に関連して、「抽象的人間労働」の概念について、それは歴史的なものなのか、それとも歴史貫通的なものなのか、という議論が行われたのですが、これは次の第2節でも必ずと言ってよいほど議論になる問題なので、ここではその報告は割愛します。

今回はテキストは比較的進捗したのですが、それはあまりゴチャゴチャした議論が無かったからでもあります。しかしそのなかでも議論になったのは第17パラグラフでした。

ここではマルクスは《ある一つの商品の生産に必要とされる労働時間が不変であれば、その商品の価値の大きさは不変のままであろう。しかし、その労働時間は、労働の生産力が変動するたびに、それにつれて変動する》と述べて、《労働の生産力》を規定する諸事情については色々としながら、とりわけ、(1)《労働者の熟練の平均度》(2)《科学とその工学的応用可能性との発展段階》(3)《生産過程の社会的結合》(4)《生産手段の規模とその作用能力》(5)《自然諸関係によって、規定される》としています。

まずここで、上げられている生産力を規定する五つの事情について、それぞれ具体的にはどういうものが考えられるかについて議論になりました。

例えば、「協業」や「分業」などによる生産力のアップはどれに入るのか、という問題がピースさんから出され、それはやはり(3)に入るのではないかということになりました。

しかし、それに対しては亀仙人から、コンビナートなどのようなさまざまな産業分野が有機的に結合されるような場合はどうか、という質問も出されました。後者も(2)や(4)の要素もあるように思うが、どちらかという(3)に入る感じがするが、しかしそうすると両者はかなり内容的に違う感じもするわけで、果たしてどう考えたらよいのかという疑問だったと思います。これは未解決です。

次にマルクスは価値の大きさを規定する労働時間は生産力によって規定されるとし、その生産力を規定する事情はさまざまあるとしながら、そのあとにそのことの例として書いていること—《たとえば、同じ量の労働でも、豊作の時には八ブッシェルの小麦に表され、凶作の時にはただ四ブッシェルの小麦に表されるにすぎない。同じ量の労働でも、豊かな鉱山では貧しい鉱山でよりも多くの金属を供給する、等々》—は、すべて(5)の《自然諸関係》に関連するものばかりではないか、その点、展開としては疑問がある、との指摘がありました（ただこれについては、そのあとの議論のなかでマルクスが《もしもほんのわずかの労働で石炭をダイヤモンドに変えることに成功すれば、ダイヤモンドの価値はレンガの価値以下になりうる》と述べている例は(2)の《科学とその工学的応用可能性との発展段階》に該当するだろうとの指摘がありました）。

さらに問題になったのは、そのあとでマルクスが金とダイヤモンドの例を上げて述べていることです。まず引用しておきましょう。

《ダイヤモンドは地表にはめったにみられないので、その発見には平均的に多くの労働時間が費やされる。そのため、ダイヤモンドはわずかな体積で多くの労働を表すことになる。ジェイコブは、金がかつてその全価値を支払われたことがあるかどうかを、疑っている。このことは、ダイヤモンドにはいっそうよくあてはまる。エッシュヴェーゲによれば、一八二三年の時点で、ブラジルのダイヤモンド鉱山の過去八〇年間の総産出高は、ブラジルの砂糖農園またはコーヒー農園の一年半分の平均生産物の価格にも達していなかった。ダイヤモンドの総産出高はるかにより多くの労働を、したがって、より多くの価値を表していたにもかかわらず、そうだったのである。》（全集版 s.54-55）

つまりダイヤモンドは小さな体積で多くの労働を表し、だから小さなダイヤでも恐ろしく高いものだが、しかしマルクスがここで述べていることは、そういうことだけではなく、だから実際には、ダイヤモンドはその価値どおりには支払われたためしはない、ということのようである。つまりダイヤモンドは実際に売買されているよりもっと高価なものなのだ、とでも言いたいかである。

しかしこれは果たして事実なのかどうかはまず疑問として出されました。そして、もしそれが事実なら、それは生産力が商品の価値を規定する例としては、むしろダイヤモンドは例外だということではないのか、それともここでマルクスが言いたいのは、ダイヤモンドの価格はその価値から乖離して売買されているということであろうか、もしそうならそれはどんな理由によるのか、ただ価値があまりにも膨大すぎるからなのか、そもそもそんなことをここで論じる意義が果たしてあるのか、という疑問が出されました。この疑問も解決されていません。

◎価値であることなしに、使用価値である、商品であることなしに、有用である

次は最後の第18パラグラフが問題になりました。まず引用しておきましょう。

《ある物は、価値であることなしに、使用価値でありえる。人間にとってのその物の効用が労働によって媒介されていない場合がそれである。たとえば、空気、処女地、自然の草原、原生林などがそうである。ある物は、商品であることなしに、有用であり、人間労働の生産物でありえる。自分の生産物によって自分自身の欲求を満たす人は、たしかに使用価値を作りだすが、商品を作りだしはしない。商品を生産するためには、彼は、使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値を、社会的使用価値を、生産しなければならない。》(s.55)

ここでまず最初に《ある物は、価値であることなしに、使用価値でありえる》例として、マルクスは《人間にとってのその物の効用が労働によって媒介されていない場合がそれであり。たとえば、空気、処女地、自然の草原、原生林などがそうである》と説明しているが、しかしその説明だとむしろ〈ある物は、労働生産物であることなしに、使用価値でありえる〉とすべきではないのか、という意見が出されました。

というのは、その次にマルクスは《ある物は、商品であることなしに、有用であり、人間労働の生産物でありえる》と述べているからです。つまり今度は労働生産物であり、有用なものだが、商品ではない、すなわち価値ではないものを例として上げています。だから順序としては、まず最初に使用価値はあるが、労働生産物ではないもの、そしてその次は労働生産物であり、使用価値ではあるが、価値でないものを上げるというのが順序としてはよい様に思うというのです。

しかしこれに対しては、マルクスはここでは《ある物が、価値である》とは、そもそもどういう場合かを論じるために書いているのであって、だから最初から《ある物が、価値であることなしに、.....》と書きはじめているのは、これだよいのだ、という意見もできました。

またエンゲルスが先に引用した文章に続けて、次の様な注を挿入していることについても少し意見ができました。

《(しかも、ただ単に他人のためというだけではない。中世の農民は、封建領主のために年貢の穀物を生産し、僧侶のために十分の一税の穀物を生産した。しかし、年貢穀物も十分の一税穀物も、それらが他人のために生産されたということによっては、商品にはならなかった。商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他人の手に、交換を通して移譲されなければならない)》(同)

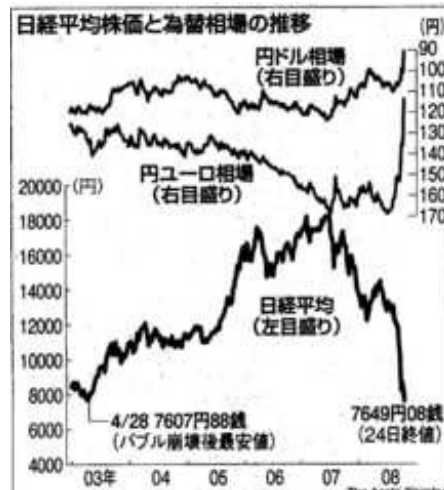
ここでマルクスは《商品を生産するためには、彼は、使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値を、社会

的使用価値を、生産しなければならない》と述べているだけであって、《他人のための使用価値を、社会的使用価値を、生産》したもの、その生産物はすべて商品になるとはっていないのだから、エンゲルスの注は不要である、との意見がでました。しかし他方で、まあエンゲルスが注で書いているように、「誤解」を取り除くためなのだから、別に良いのではないかという意見もでました。

全体に議論としては淡白でしたが、これは天気が良すぎたからか、まあ、こんな学習会もあるということです。

第8回「『資本論』を読む会」の案内

株価が激しい乱高下を繰り返しながら暴落し続け、10月24日の東京株式市場の日経平均株価は8000円を大きく割り込み、03年のバブル後の最安値とほとんど同じ状態に戻ってしまった。



こうした株価の低迷が実体経済に影響を及ぼし、深刻な経済停滞が予想されるとマスコミでは報じている。

なるほど現象的にはそうではある。しかし現象は必ずしも本質を示すわけではない。現象的には金融の破綻が株式の暴落をもたらし、それが実体経済にも影響及ぼして深刻な不況と停滞をもたらしつつあるかにみえる。

しかし本質的な関係はその逆である。マルクスは貨幣・金融恐慌は一般的な生産恐慌の特殊的局面として現われると指摘し、《経済学の浅薄さは、とりわけ、産業循環の局面転換期の単なる兆候に過ぎない信用の膨張・収縮をこの転換の原因にするということのうちに現われている。》（『資本論』第1巻全集版825頁）と指摘する。

そしてさらに次のようにもいう。

《生産過程の全関連が信用に立脚しているような生産体制においては、急に信用が停止されて、もはや現金払いしか通用しなくなれば、明らかに、恐慌が、支払手段を求めての殺到が、起こらざるをえない。だから、一見したところでは、全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現れるのである。そしてじっさい、問題はただ手形の貨幣への転換可能性だけなのである。しかしこれらの手形の多くは現実の売買を表しているのであって、この売買が社会的な必要をはるかにこえて膨張することが、結局は全恐慌の基礎になっているのである。》（『資本論』第3巻同627頁）

つまり現実の再生産過程の構造そのものにすでに破綻が内在しているのに、信用制度がその破綻を覆い隠し、再生産過程の弾力を極限まで引き延ばしてさらにその破綻を拡大するが、やがてそれは自ずからその限界に突き当たり、破局が現実化する。株価の崩落はその前兆を示すに過ぎないのである。

もちろん、国家信用が崩壊しないかぎり、現代の政府は公信用を拡大して、こうした破局が暴力的に生じることを防ぐことは出来る。しかしいずれにせよ調整は不可避である。政府の介入は、その調整過程を暴力的にではなく、ただ過程をガラガラとした長期の停滞のなかで行うことを可能にするに過ぎない。しかも国家財政の膨大な赤字と引換にである。主要な先進国は総力を上げて、資本の救済に乗り出している。しかし、それは他方で国家破綻の可能性をますます増大させるのみであろう。

貴方も、現象に隠れた本質を見抜くために、是非、『資本論』を読んでもみませんか？

第8回「『資本論』を読む会」の報告

◎紅葉

秋も深まり紅葉の季節になりました。会場の堺市立南図書館の三階の第一会議室の窓には、紅葉した桜などが色鮮やかに映えています。

「実りの秋」とか「読書の秋」と言われますが、「『資本論』を読む会」には新しい参加者はいまだ現われず、さびしい状態が続いています。残念ながら、実りの時期はいま少し先のようです。

ただ二階の図書館掲示板に備えつけのケースに入れてあった「『資本論』を読む会」の案内は、10枚全部が無くなっており、誰かがそれらを持ち帰ったのでしょうか。必ずや何らかの連絡があるものと信じています。

新しい参加者があり、その人の希望によっては、もう一度最初から、『資本論』を始めても良いと私たちは思っています。もっとも新しい参加者がある度に最初に戻っていたら、いつまでたっても先に進めないではないかと、思われるかも知れませんが、それはまあそれで、臨機応変、適切な対処を考えることにしましょう。

是非、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

◎「労働の二重性」が経済学理解にとって決定的な点であるとは？

ようやく第2節に入りました。つまり第1節を7回に分けて学習したことになります。何ともゆっくりした進み方ですが、これが私たちのやり方なのです。とにかく徹底して議論するのが、我が「『資本論』を読む会」のモットーなのですから。

まず最初に問題になったのは、マルクスが第一パラグラフで〈労働の二面的性質は、私によって始めて批判的に指摘された〉として、〈この点は、経済学理解にとって決定的な点であるから、ここで立ち入って説明しておこう〉と述べているのですが、経済学理解にとってどのように決定的なのかについて何も説明がそのあともないのではないかと、それをどう理解したらよいのか、という質問がでました。しかしこれについてはズバリとその内容を説明できる人はありませんでした。だから少しマルクスが「労働の二重性」について述べている箇所を調べてみることにしましょう。

まずマルクスが〈私によって始めて批判的に指摘されたものである〉として上げている『経済学批判』の箇所があります。それは次のような部分を指すと思えます。

〈諸商品の交換価値は、じつは同等で一般的な労働としての個々人の労働相互の関係にほかならず、労働の独特な社会的形態の対象的表現にほかならないのであるから、労働は交換価値の、したがってまた富が交換価値から成りたつかぎりでは富の唯一の源泉である、と言うのは同義反復である。自然素材そのものは労働をふくまないから交換価値をふくまず、また交換価値そのものは自然素材をふくんでいないということも、同じ同義反復である。しかしウィリアム・ペテ

ィが「労働は富の父であり、大地はその母である」と言い、あるいはバークリ主教が「四原素とそのなかにふくまれる人間の労働が富の真の源泉ではないか？」と問うたとき、あるいはまたアメリカ人Th・クーパーが「試みに一塊のパンからそれについてやされた労働を、パン屋、粉挽き屋、小作農等々の労働をとりさってみなさい、あとにいったいなにが残るか？ ひとつかみの、野生の、どんな人間にとっても使いものにならない雑草だけだ」とわかりやすく説明したとき、これらすべての見方で問題とされているのは、交換価値の源泉である抽象的労働ではなく、素材的富の源泉としての具体的労働、つまり使用価値をつくりだすかぎりでの労働である。商品の使用価値が前提されているのだから、商品についてやされた労働の特殊な有用性、一定の合目的性が前提されているわけであるが、商品の立場からすれば、これでもって同時に有用労働としての労働にたいするすべての関心は尽きている。使用価値としてのパンにわれわれの関心を起こさせるのは、食料品としてのその諸属性であって、小作農、粉挽き屋、パン屋等々の労働ではない。もしなんらかの発明によってこれらの労働の20分の19がはぶかれたとしても、一塊のパンはそれまでと同じ役を果たすであろう。もしもパンができあがったものとして天から降ってきたところで、その使用価値の一片をも失わないであろう。交換価値を生みだす労働は、一般的等価物としての諸商品の同等性のうちに実現されるのにたいして、合目的な生産的活動としての労働は、諸商品の使用価値の無限の多様性のうちに実現される。交換価値を生みだす労働は抽象的な、一般的な、同等の労働であるのにたいして、使用価値を生みだす労働は、形態と素材とにおうじて際限なくさまざまな労働様式に分かれる具体的な特殊な労働である。

使用価値をつくりだすかぎりでの労働については、労働が、それによってつくりだされた富、すなわち素材的富の唯一の源泉であると言うのは誤りである。この労働は素材的なものをあれやこれやの目的に充用する活動であるから、それは前提として素材を必要とする。いろいろな使用価値では、労働と自然素材との割合は非常に違っているが、しかし使用価値はいつも自然的基礎をふくんでいる。自然のものをなんらかの形態で取得するための合目的活動としては、労働は人間存在の自然条件であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の、すべての社会的形態から独立した一条件である。これに反して、交換価値を生みだす労働は、労働の独特な社会的形態である。たとえば裁縫労働は、特殊な生産的活動としてのその素材的規定性では上着を生産するが、しかし上着の交換価値は生産しない。裁縫労働が上着の交換価値を生産するのは、裁縫労働としてではなくて、抽象的一般的労働としてであり、そしてこの抽象的一般的労働は、裁縫師が縫いあげたのではない一つの社会的関連に属する。だから古代の家内工業では、女子は上着の交換価値を生産することなく、上着を生産した。素材的富の源泉としての労働は、税関吏アダム・スミスにわかっていたのと同じように、立法者モーセにもわかっていたのである。〉（全集13巻20～22頁、原注は省略、下線はマルクスによる強調）

まあ、これを読んだだけでは、最初の疑問、つまり「労働の二重性」は、なぜく経済学理解にとって決定的な点であるのかは必ずしも明確ではありません。むしろそれは、引用した少し前の次のような部分から分かるのではないでしょうか。

〈最後に、交換価値を生みだす労働を特徴づけるものは、人と人との社会的関係が、いわば逆さまに、つまり物と物との社会的関係としてあらわされることである。一つの使用価値が交換価値として他の使用価値に関係するかぎりだけで、いろいろな人間の労働は同等な一般的な労働として互いに関係させられる。したがって交換価値とは人と人とのあいだの関係である、というのが正しいとしても、物の外被の下に隠された関係ということをつくわえなければならない。……（中略）……社会的生産関係が対象の形態をとり、そのために労働における人と人との関係がむしろ物相互の関係および物の人にたいする関係としてあらわされること、このことをあたりまえのこと、自明のこのように思わせるのは、ただ日常生活の習慣にほかならない。商品では、この神秘化はまだきわめて単純である。……（中略）……もっと高度の生産諸関係では、単純性というこの外観は消えうせてしまう。重金主義のすべての錯覚は、貨幣が一つの社会的生産関係を、しかも一定の属性をもつ自然物という形態であらわすということを貨幣から察知しなかった点に由来する。重金主義の錯覚を見くだして嘲り笑う現代の経済学者たちにあっても、彼らがもっと高度の経済学的諸範疇、たとえば資本を取り扱うことになると、たちまち同じ錯覚が暴露される。彼らが不器用に物としてやっとなかまえたと思ったものが、たちまち社会関係として現われ、そして彼らかようやく社会関係として固定してしまったものが、こんどは物として彼らを愚弄する場合に、彼らの素朴な驚嘆の告白のうちに、この錯覚が突然現われるのである。〉（同上19-20頁、同）

だから「労働の二重性」を理解するという事は、経済学が対象にする経済的事象とはそもそも何なのかを理解することでもあるのです。だからマルクスは〈この点は、経済学の理解にとって決定的な点であるから、ここで立ち入って説明しておこう〉と述べているのではないのでしょうか。

実際、「労働の二重性」は、これから学ぶ『資本論』の各所に（第1巻にも第2巻にも第3巻にも）登場します。しかしそれらは、それらを学ぶときのためにとっておき、前もって紹介するのはやめておきましょう。

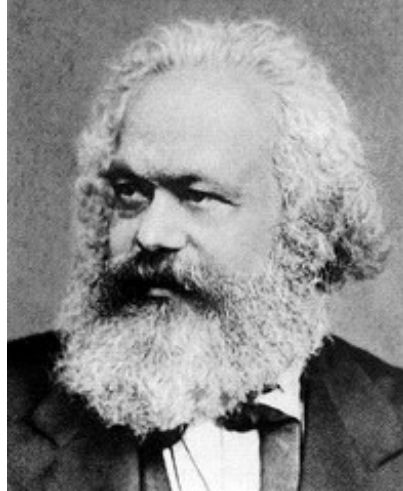
◎『経済学批判要綱』における「労働の二重性」への言及

しかし『経済学批判』の前に書かれた、『資本論』の最初の草稿といわれている『経済学批判要綱』では、「労働の二重性」についてどのように論じているのかを見てみることにしましょう。『要綱』でも「労働の二重性」に言及した部分は多いのですが、これまで学習した部分の理解にも役立つと思える部分の一つだけ紹介しておきます。

〈個々人の労働は、生産の行為それ自体の内部で考察すれば、彼が直接に生産物を、かれの特殊な活動の対象を買うための貨幣である。しかしこの貨幣は、まさにこの限定された生産物だけを買う特殊な貨幣であるにすぎない。直接に一般的貨幣であるためには、個々人の労働は初めから特殊な労働ではなくて、一般的労働でなければならない、すなわち初めから、一般的生産の分枝として措定されていなければならないであろう。しかしこうしたことが前提されるとすれば、交換によって初めて労働に一般的性格が与えられることにはならず、労働の前提としてなっている共同社会的性格が個々人の生産物への参与の仕方を規定することになる。生産の共同社会的性格が初めから生産物を共同社会的、一般的なものにすることになる。本源的に生産の内部で行なわれる交換——諸交換価値の交換ではなくて、共同社会のもろもろの必要によって、共同社会の諸目的によって規定されている諸活動の交換——が、初めから個々人の共同社会的な生産物世界への参与を含んでいるであろう。諸交換価値の基礎の上では、労働は交換を通じて初めて一般的なものとして措定される。上記の〔共同社会的な〕生産の基礎の上では、労働は交換に先立ってそのような一般的労働として措定されているであろう。すなわち諸生産物の交換は、およそ個々人の一般的生産の参加が媒介される媒体ではないであろう。媒介はもちろん行なわれなければならない。個々人の自立した生産から出発する前者の場合には——この自立したもろもろの生産が、それらの相互間の諸関連によって事後的にどれほど規定され、変容を被るにしても——、媒介は、諸商品の交換、交換価値、貨幣——これらはすべて、一個同一の関係の表現である——によって行なわれる。第二の場合には、前提自体が媒介されている。すなわち共同社会的生産、生産の基礎としての共同社会性が前提されている。個々人の労働は初めから社会的労働として措定されている。それゆえ彼がつくり、またつくるのをたすける生産物の特殊な物質的姿態がどうであろうとも、彼が彼の労働で買ったものは一つの規定された特殊な生産物ではなくて、共同社会的生産への一定の参加分なのである。したがってまた彼はなんら特殊な生産物を交換する必要はない。彼の生産物は決して交換価値ではない。生産物は、個々人にとっての一般的性格を受け取るために、まず一つの特殊な形態に転置される必要はない。諸交換価値の交換において必然的につくりだされる労働の分割〔分業〕にかわって、個々人の共同社会的消費への参加を帰結としてもたらすような一つの労働の有機的組織ができてくるであろう。第一の場合には、生産の社会的性格は、まず諸生産物を諸交換価値に引き上げること、こうした諸交換価値の交換とによって初めて、事後的に措定される。第二の場合には、生産の社会的性格は前提されており、生産物世界への参加、消費への参加は、相互に独立した諸労働または諸労働生産物の交換によって媒介されてはいない。生産の社会的性格は、個人がその内部で活動している社会的な生産諸条件によって媒介されている。〉（『資本論』草稿集第一巻160-161頁、下線はマルクスによる強調）

ながながと引用しましたが、まあ、今回はこれぐらいにします。

第9回「『資本論』を読む会」の案内



世界的な金融恐慌は、経済恐慌の様相を深めて、いよいよ現実資本の「価値の破壊」、すなわち倒産や人員整理の段階に突入しつつあります。世界中で労働者の“首切り”の嵐が吹き荒れようとしているのです。

アメリカの自動車産業はいまや“風前の灯火”で、政府に1兆4千億円もの支援をと泣きついています。それは同時に大幅なリストラを意味します。すでにGMは4工場の閉鎖と3工場合わせて2000人の人員削減計画を発表。IBMは最大1万3000人の人員削減、サンマイクロシステムズは6000人、AT&Tは全従業員の約4%に相当する約1万2000人削減、等々、人員削減の記事を追っていくと枚挙に暇がないくらいです。

日本でも自動車関連企業主要十社だけで15000人（トヨタ6000人、日産1500人、ツマダ1400人等々）の削減が予定されています。今は、いわゆる「派遣切り」といわれるように、派遣労働者など非正規雇用の労働者に集中していますが、しかしそれだけに留まる保証は何もありません。

12月4日、東京で2000人の労働者が「派遣を切るな」と決起し、「僕たちにも2009年を迎えさせて下さい」「寮から追い出さないで」「ホームレスにしないで」等々と訴えたといえます（12月5日『朝日』）。また契約を打ち切られたいすずの期間従業員や派遣社員440人のうち有志が解雇撤回を求めて労働組合を結成し、闘いに立ち上がったことも報じられています。まさに労働者階級と資本家階級との死に物狂いの闘いの火蓋が切って落とされたのです。



(12月5日『朝日』より)

マルクスは次のように述べています。

〈“わが亡き後に洪水は来たれ！”これがすべての資本家およびすべての資本家国民のスローガンである。したがって、資本は、社会によって強制されるのでなければ、労働者の健康と寿命に対し、何らの顧慮も払わない。肉体的、精神的萎縮、早死、過度労働の拷問に関する苦情に答えて資本家は言う――われらが楽しみ（利潤）を増やすがゆえに、それが何でわれらを苦しめるというのか？と。しかし、全体として見れば、このこともまた、個々の資本家の善意または悪意に依存するものではない。自由競争は、資本主義的生産の内在的な諸法則を、個々の資本家に対して外的な強制法則として通させるのである。〉（『資本論』第1巻全集版23 a 352-3頁）

だから資本家たちも生き残りをかけて必至の立場に追い込まれているのです。だから労働者はただ団結して自分たちの要求を資本に突きつけて闘うしか、その生活を守り未来を切り開くことはできません。

『資本論』は、資本主義のもとで、労働者が置かれた状態を労働者に自覚させ、彼らこそがこの社会をその労働によって支え動かしていること、彼らこそがこの社会の主人公であり、未来を切り開く力であることを知らせ、その団結と闘いを呼びかけるものです。貴方も、是非、『資本論』を学び、ともに闘いに立ち上がりましょう。

第9回「『資本論』を読む会」の報告

◎師走の学習会

第9回の「『資本論』を読む会」は、28日の暮れも押し詰まってからの慌ただしい開催となりました。しかし議論は内容の充実したものになり、会場を借りている午後5時近くまで行なったのでした。というわけで、今回はさっそく、議論の紹介に移ることにします。

◎各パラグラフの位置づけ

今回は「第二節 商品に表される労働の二重性」の第6パラグラフから、「使用価値と有用労働」を取り上げている最後の第8パラグラフまで学習しましたが、最初に問題になったのは、第6パラグラフと第5パラグラフとの関係でした。この二つのパラグラフはほぼ同じような内容を述べているように思えるのですが、それぞれどういう役割を持っているのが問題になったのです。そしてそれに関連して、この第二節の前半部分（「使用価値と有用労働」が対象になっている）の各パラグラフのそれぞれの位置づけが問題になりました。

まず第6パラグラフの冒頭が《したがって、われわれは次のことを見てきた。――》という言葉から始まっているところを見ると、この第6パラグラフはそれまで述べてきたことを振り返って、全体の総括を行なっているところと見ることができます。

ではそれはどこからどこまでを振り返っているのかというと、第二節の第1パラグラフと第2パラグラフは第二節全体の導入部分と考えることができますから（第1パラグラフは第一節を振り返り、それを踏まえて、第二節で取り上げる「労働の二重性」の重要性の確認、第2パラグラフは第二節全体で取り上げる二商品〔上着とリンネル〕の具体例の説明）、第6パラグラフで総括しているのは、第3～5パラグラフまでで述べてきたことと考えられます。

まず第6パラグラフの最初の二つの分節は、それぞれ第3パラグラフと第4パラグラフの内容を確認しています。そして最後の分節は、第5パラグラフで確認した内容を違った観点からみていることが分かります。

第3パラグラフは使用価値の分析から入っています。これは第二節の表題が「商品に表される労働の二重性」とあるように、「商品に表される労働」が問題だからです。第1パラグラフでは、第一節で見たように、商品は《使用価値および交換価値として、われわれの前に現われた》ことが確認され、第2パラグラフでは、リンネルと上着が例として上げられます。だから第3パラグラフでは使用価値としての上着の考察から入っているわけです。そしてその有用性が使用価値として表されている労働を考察し、それを有用労働と規定します。この観点のもとでは労働は常にその有用効果との関連から考察されます。第4パラグラフでは、使用価値が異なれば、労働も異なることが指摘されます。質的に異なる使用価値は商品の前提であること。第5パラグラフでは、さまざまな種類の使用価値は、多様な有用的労働の総体――社会的分業――を示すことが指摘され、同時に社会的分業は商品の前提だが、その逆は成り立たないこと、商品を生産する分業は「自立的な、互いに独立の、私的労働」にもとづくものであることが明らかにされています。

そして第6パラグラフでは、それらをもう一度確認しているのです。特に《生産物が一般的に商品という形態をとっている社会》とは「資本主義社会」のことですから、資本主義社会では、社会的分業は「一つの多岐的な体制」に発展していることが確認されているわけです。

◎「商品生産者の社会」と「商品生産社会」

またこれと関連して、マルクスは《生産物が一般的に商品という形態をとっている社会》を言い換えて、《すなわち商品生産者の社会》と述べていますが、これは「商品生産社会」と同じと考えるべきかどうか議論になりました。

まずここで《商品生産者》というのは、資本家のことでしょう。ただ第1章では資本関係は捨象されていますから、単に「商品生産者」となっているだけだ、との指摘がありました。

ピースさんは「商品生産社会」を「資本主義社会」と対比させ、それは資本主義以前の商品を生産する社会と理解していたと述べましたが、亀仙人は、そもそもマルクス自身は、「商品生産社会」という用語自体を使っていないのではないかと指摘しました（そして実際、後に『資本論』のテキスト版全体を検索してみたが1～3巻からは「商品生産社会」という用語は一件も検索に引っかかりませんでした。またマル・エン全集の事項索引にもありません）。もし「商品生産社会」をマルクスがいうように、《生産物が一般的に商品という形態をとっている社会》という意味で使うなら、それは資本主義社会と同義であるし、その場合は、それを資本主義社会と対比させて、それ以前の商品を生産する社会と理解するなら間違いであろうとも指摘されたのでした。

◎「一定の合目的的な生産活動」

このパラグラフでは、どの使用価値にも合目的的な労働が含まれている、しかもそれらが商品として相対するためには、諸使用価値は質的に違った有用労働の生産物でなければならない、ということが言われ、資本主義社会では、それらの質的に違った有用労働が、一つの社会的分業に発展すると言われていました。

つまり商品に対象化されている労働は、一定の合目的的な活動であるが、しかしそれは私事であり、その限りで限界のある合目的性であることが分かります。社会主義社会でも、その労働は合目的であるが、しかしそれはその労働が直接社会的であるが故の合目的性でもあり、その意味では資本主義社会のそれとは異なる側面を持っているわけです。

マルクスは『土地の国有化について』という小論のなかで、将来の社会では《生産手段の国民的集中は、合理的な共同計画に従って意識的に行動する、自由で平等な生産者たちの諸協同組合（諸アソシエーションー引用者）からなる一社会の自然的基礎となるであろう》（全集18巻55頁）と述べていますが、将来の社会主義社会を形成する自由な生産者たちのさまざまなアソシエーションは、生産諸手段相互の物的・技術的関連という「自然的土台」に直接規定されて存在するものなのです。だから資本主義社会における労働の「合目的性」はその限りでは「一定」の限界のあるものです。つまりそれは特定の使用価値を生産するという合目的性ですが、しかしそれらの社会的な関連を直接に持っているわけではない、あるいは意識していない合目的性なのです。

しかし社会主義社会では、生産諸手段の諸使用価値が示す自然的基礎にもとづいて、諸労働は意識的に社会的に関係づけられています。社会主義社会では、どういう使用価値をどれだけ生産するかは、使用価値そのものが示す一定の物質的・技術的関連によって規定され、また最終的な使用価値の実現においてもそれを欲求する人々の合目的な意識性が想定されています。

つまりこのパラグラフは、最初の「一定の合目的的な生産的労働」が、さまざまな有用労働の質的区別をなしているが、しかしそれらは「自立した生産者達の私事として互いに独立に営まれる有用労働」としての、「一定の」制限ある「合目的性」である、というふうに展開されているわけです。

◎第7・8パラグラフの位置づけとその内容

次に第7・8パラグラフに入りましたが、ここから若干、内容が変わっていることが確認されましたが、やはりこの二つのパラグラフの全体のなかでの位置づけが問題になりました。

この二つのパラグラフは、いわば第二節の前半で問題になっている「使用価値と有用労働」の歴史的な位置づけを論じている部分と考えることができます。

『資本論』の各部・篇・章・節等々の敘述の特徴として言えることは、最初は直接的な表象に現われる現象の分析から入り、その背後にある本質を探り出し、それらの内的関連を明らかにして、最初の諸現象をその本質から展開して説明する（概念を明らかにする）、そして最後に対象となっているカテゴリーの歴史性を示す、という展開が指摘できますが、この第7・8パラグラフは、そうした最後の歴史性を明らかにする部分と考えることができます。

これは例えば「第一章 商品」の「第4節 商品の呪物的性格とその秘密」、あるいは「第一部 資本の生産過程」の「第8篇 本源的蓄積」（ただしフランス語版の場合）と同じような位置づけをもっていると考えることができる、との指摘がありました。

第7パラグラフでは、特に第6パラグラフまでで論じられている問題と関連させて、使用価値と有用労働の歴史的な性格を論じていると考えることができます。最初の《上着にとっては、それが裁縫師自身によって着られるか、それとも裁縫師の顧客によって着られるかは、どうでもよいことである。どちらの場合でも、上着は使用価値として作用する》というのは、使用価値のどういう特性をいわんとしているのが問題になりました。上着にとって、それを誰が着るかはどうでもよい、つまり使用価値として作用する場合の、対象はどのような社会的関係にある存在かは問わない。上着とそれを使用する人との関係は直接的であって、媒介するものは何もない、ということでしょうか。確かにパンを食べる人は、誰であろうが、その行為そのものは生物的な自然的な行為でもあるということでしょう。ただ使用価値によっては、一定の社会的関係を前提する場合があります。例えば奢侈品は資本家を想定し、労働者の消費は、必要生活手段に限定されている、等々。しかしそれは諸使用価値の特性からというより、それを実際に消費する人間の社会的関係に規定されたものといえます。使用価値そのものは、その有用効果を実現する人間とは直接的な関係をもっており、それは物質代謝そのものであり、その限りでは自然的であるといえます。

次に「同じように」やはり上着という特定の使用価値という立場から問題を見て、今度は《上着とそれを生産する労働との関係》を見ています。つまりその労働がどのような社会的関係の下に支出されるかは、やはり上着そのものにとってはどうでもよいことだということです。ここで《社会的分業の自立した一分岐となる》というのは、商品を生産する労働ということでしょう。裁縫労働は、商品生産以前からあったということです。

しかし諸使用価値の定在は、自然素材を特殊な欲求に適合させるある一つの特有な目的にそった生産活動が必要でした。ここで《特殊な自然素材を人間の特殊な欲求に適合させるある一つの特有な目的にそった生産活動》というのは、やはり第6パラグラフで出てきた《一定の合目的的な生産的活動》と同義でしょう。

こうした考察を前提に、《だから、労働は、使用価値の形成者としては、有用労働としては、あらゆる社会形態から

独立した、人間の生存条件であり、人間と自然との物質代謝を、したがって人間の生活を、媒介する永遠の自然必然性である》ということが結論的に言われているわけです。

つまり最初の使用価値そのものはそれを使う人やそれをつくる人が誰であるか、どういう社会的関係にある人であるかは問わないが、しかし一定の合目的な労働が含まれていることだけは示しています。だから使用価値を形成する労働は社会的関係を問わないのであり、それは一つの自然必然性なのだ、というのがここでの結論と考えることができます。

これは使用価値の生産とその消費というのは、その限りでは人間が他の動物と共有する自然的な物質代謝活動そのものであって、それは社会関係如何を問わないということです。もっとも「生産」というのは人間に固有のものですが、人間は社会的である前にすでに生産していたといえるのかも知れません。いずれにしても、人間が進化の過程で猿から人間になるにしても、そのあいだもやはり生きていなければならず、そのためには特定の自然素材を自身の欲求に合うように摂取していたことは確かでしょう。

第8パラグラフでは、使用価値は二つの要素（自然素材と労働）の結合であること、しかしこの二つの要素のうち、自然こそが基底であることが指摘されています。《人間は、彼の生産において、自然そのものがやる通りにふるまうことができるだけである。すなわち、素材の形態を変えることができるだけである。それだけではない。形態を変えるこの労働そのものにおいても、人間はたえず自然力に支えられている》。

つまり第8パラグラフでは、さらに「使用価値や有用労働」のその基底にあるもの（＝自然）を指摘し、そういう意味でそれらが限界づけられていることを明らかにする役割を持っているといえます。またそういう意味で、それらの歴史的な性格が示されているとも考えることができるわけです。

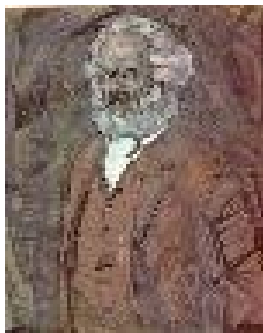
◎還元主義？

マルクスは注13で、ピエートロ・ヴェッリ『経済学に関する諸考察』からの引用を行なっていますが、そこでは「宇宙のすべての現象は、人間の手によって生み出されようと物理学の一般的諸法則によって生み出されようと、事実上の創造ではなく、単に素材の変形であるにすぎない」と述べています。マルクスはヴェッリが「使用価値」について述べていることを自覚していなかったが、しかしそれは使用価値について本質的なことを述べていると考えて、引用していると考えられます。しかしこの引用文では、いささか自然還元主義的な内容があるのではないか、という疑問が出されました。

確かに使用価値に表される労働は、ただ自然がやるとおりにふるまうだけであり、ただ「素材の変形」をするだけともいえますが、しかしそれらが「事実上の創造では」ないというのは言い過ぎではないだろうか、という疑問です。というのは、自然にある素材を変形するだけとはいえ、そこには必ず新たな「質」を生み出すという契機が存在しており、ある場合には自然界にも存在しない、「新しい質」を生み出しているともいえるのであり、その限りではそれは「創造」以外の何ものでもないからです。

例えば、パソコンはそれを構成する諸部分に分解して、それぞれの素材を辿れば、さまざまな物的素材をただ変形させただけでもいえますが、しかしそうした変形によって明らかに「新しい質」を生み出しており、そうした「新しい質」を「新しい使用価値」として、「創造」されたものだということを確認することも重要ではないか、それをただすべて素材に、あるいは自然に分解・還元してしまうなら、それはある種の還元主義ではないか、というのです。

第10回「『資本論』を読む会」の案内



昨年末、「トヨタショック」が世界を駆け巡った。

11月にトヨタは09年3月期の大幅減益の見通しを発表したが、そのわずか一カ月後、すぐにその見通しを修正して、12月には営業損益が前期実績の2兆2703億円の黒字から一転して1500億円の赤字に転落する見通しを明らかにした。

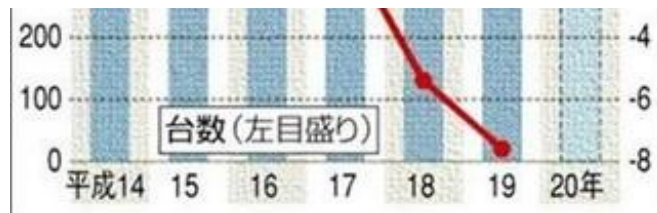
あの「世界のトヨタ」が苦境に陥っている。欧米メディアはトップニュースで伝えた。「ビックスリー（米自動車3大メーカー）を超えて、最強の自動車メーカーにさえ打撃」（米紙ウォールストリート・ジャーナル）。「日本経済の象徴であるトヨタの不振は、不況が日本経済にいかに打撃を与えているかを示す例になっている」（南ドイツ新聞）（08年12月26日産経）。

昨年9月の米大手金融機関のリーマン・ブラザーズの破産は、「リーマンショック」として、世界を金融恐慌の嵐に巻き込んだが、それに続く「トヨタショック」は、バブルの破綻と金融恐慌の勃発は、単にそれに続く全般的な過剰生産恐慌の先駆けに過ぎなかったことを明らかにしている。

日本の自動車業界は08年の前半は我が世の春を謳歌してきた。円安や新興市場における販売増などの追い風を受けて、2008年の3月期は軒並み増収増益を達成し、その利益体質はまさに磐石のように見えたのである。主要3社の営業利益は、トヨタ自動車が前年比1.4%増の約2.3兆円、日産自動車が1.8%増の約7900億円、ホンダに至っては12%増の約9530億円、それぞれ過去最高益を実現した。しかしそれはただ世界的な信用膨張によるバブル景気に浮かれていただけに過ぎなかった。

今や、各社とも一転して業績予想を大幅に下方修正している。トヨタの幹部は「09年の販売見通しを立てようにも、数字が次から次へと動いて立てられない」と悲鳴を上げているという。





しかも苦境は、何も自動車業界だけではない。

同じように好景気を謳歌してきた家電業界にも軒並み荒波が押し寄せつつある。ソニー、東芝は09年3月期連結業績が営業赤字へ転落の見通しであり、シャープやパナソニックは液晶パネル工場など巨額の投資が裏目に出ていると指摘されている。さらに自動車業界に鋼板を供給してきた鉄鋼業界も、粗鋼生産量が過去最高を記録した「30年ぶりの春」から、一転して「減産の嵐が吹き荒れている」。

かくして〈ブルジョア的生産のすべての矛盾は、一般的世界市場恐慌において集合的に爆発〉しているのである（『剰余価値学説史』全集26巻672頁）。

恐慌は、この資本主義的生産様式そのものの歴史的限界を暴露するものである。それは何か絶対的な生産様式ではなく、ただ歴史的な発展段階に対応したものでしかないことを、純粋に経済学的な仕方で、すなわちブルジョア的な立場から、示すものである。それは多くの人たちにさまざまな災厄をもたらすが、しかしまさにそのことによって、人類は資本主義社会そのものを乗り越えて進まなければならないこと教えるものなのである。

今、まさに生じつつある世界的な大恐慌を理論的に解明するためにも、是非、貴方も『資本論』と一緒に読んでみませんか。

第10回「『資本論』を読む会」の報告

◎前回（第9回）の報告へのクレーム

やや唐突にこうした問題から始めることをお許しください。

第9回「『資本論』を読む会」の報告に二つのクレームというか、問題点の指摘がありました。

一つは、ピースさんからのもので、わが大御所は、〈前回の報告は分かりにくかった。もっと、『資本論』の内容がよく分かるようなものにして欲しい。あまり難しい内容だと、「『資本論』を読む会」そのものが、そんな難しいことをやっているのか、と敬遠されかねない〉というのです。

確かにそうかも知れません。ただ少し弁解させていただきますと、私たちの「読む会」は、一回で進むのはほんの数パラグラフに過ぎません。だからその内容をただ解説するだけなら、ほんの数行で終わりかねないのです。だから出来るだけ、その数パラグラフを理解する上で必要な問題をアレコレと論じることになってしまうわけです。

そして『資本論』は読めば読むほどその奥の深さが分かるというような代物でして、それまでの自分の理解の浅さを痛感すること頻りなのです。だから『資本論』を何度読み直しても新しい発見があり、より深い問題が見えてくるという次第です。

だからそれらを何とか紹介したいという気持ちがついつい前にでてしまうわけです。だからまた他方で、これまである程度議論されてきたような内容はほとんど取り上げないということになってしまうわけです。

ただこれまでの報告では、テキストの内容は、読者の皆さんがすでに読まれていることを前提に、そこで問題になる部分や、難解な部分、テキストを理解するに必要な問題を主に論じるという形でやってきました。しかし、これからは『資本論』を直接読まれていない方や、読んだが忘れた、という方も分かるように、テキストの内容そのものも要約する形で報告を行なうことにしたいと思います。

もう一つの問題点の指摘は、埼玉の所沢の「『資本論』を読む会」に参加されているNさん（亀仙人の友人でもあります）からの指摘です。次のようなメールを頂きました。

【「使用価値に支出されている労働」「商品に支出されている労働」という表現がされていましたが、「使用価値をつくる労働」あるいは「使用価値に表される(対象化される)労働」といった表現の方がよいのではないかと思います。というのは、労働を専ら労働力の支出という観点から見たものが抽象的人間的労働であり、具体的有用的労働については支出という言葉を用いない方が区別が鮮明になると思うからです。】

そしてこうした問題を理解する資料として、次のような文献からの引用も紹介して頂きました。

【抽象的人間的労働について、私の念頭にあったのは、大谷氏の以下のような記述です。

《労働力支出としての労働とは、人間の力の支出、発揮として見られた活動である。「君はたくさん労働するが、僕はあまり労働しない」。「僕は昨日たくさん労働したが、今日はあまり労働しなかった」、「これを生産するには多くの労働がいるが、あれを生産するには少しの労働しか要らない」などと言うとき、ひとは「労働」という言葉をこの意味で使っている。この意味での労働は、さまざまな具体的形態をもつ現実の労働から労働力支出という共通の質だけを抽象してみた労働だから抽象的労働と呼ばれ、またその共通の質が人間の労働力の支出だから人間的労働とも呼ばれる。抽象的労働の量は継続時間で測られる。その計測単位は、時間(time)の計測単位である。時間(hour)、分、などである。なお「人間の労働」、あるいはたんに「人間労働」と言うときには、一般に具体的労働と抽象的労働との両面をもつ人間の労働のことを指し、「人間的労働」と言うとき、つまり「的」をいれて言うときには、人間の労働の一つの側面である、人間労働力の支出としての労働(つまり抽象的労働)のことを指す。(3)

(注3)「人間の労働」あるいは「人間労働」はドイツ語のdie menschliche Arbeit (定冠詞つき)の訳語、「人間的労働」はmenschliche Arbeit (無冠詞)の訳語であって、ドイツ語では両者ははっきりと区別される。「的」の有無に注意してほしい。》(『図解社会経済学』18-19頁)

まったく不勉強の至りで、大谷禎之介氏の著書は私も一応は読んでいたのですが、そんなことが書かれていたことなどすっかり忘れており、Nさんが指摘されるような点にはまったく気づきませんでした。そこでさっそく、前回の報告の一部の文言を訂正させて頂いた次第です。

ただこの大谷氏の指摘については、若干、私なりに調べたこともあるので、あとで紹介したいと思っています(またピースさんに叱られそうですが)。

◎第9・10パラグラフの内容と議論の紹介

今回はこの二つのパラグラフだけを議論しました。二つのパラグラフといっても第9パラグラフはただ次のような一文があるだけです(ただし、以後、『資本論』のテキストを紹介する場合は、その内容を要約したものです)。

・今度からは使用対象である限りでの商品から、商品価値に移る。

だから議論のしようもありません。ただここで「商品価値」とあるのは、フランス語版では「商品の価値」となっている、ということが紹介された程度でした。

しかし第10パラグラフはかなり長く、しかも込み入った内容であります。だからこの部分は各分節ごとに見ていくことにします。

・われわれの想定によれば、上着はリンネルの二倍の価値をもっている。

ここで「われわれの想定」というのは、第二パラグラフを指しています。

・量的な区別はさしあたり問題にしない。

ということは「質」をまず問題にしようということでしょう。

・そこで20エレのリンネルは一着の上着と同じ価値の大きさを持つという例を思い出そう。

この二つの使用価値の等置は何を意味するかを問題によつてしているわけです。

- ・「価値」としては上着とリンネルは「同じ実体をもつ物」であり、「同種の労働の客観的表現である」。

ここには、「価値」＝「同じ実体」＝「同種の労働」という関係がなりたち、「物」＝「客観的表現」という関係がみられます。つまり上着もリンネルも「価値」としては、つまり「価値」という側面からみるならば、「同じ実体」として「同種の労働」をその内に持ち、それを上着やリンネルという「物」によって「客観的」に表現しているのだ、という捉え方をここから導き出しているように思えます。

- ・ところが、裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる労働である。

つまりその前の分節では「同じ実体」として「同種の労働」を持つというが、しかし現実には裁縫労働と織布労働とは質的に違うというわけです。

- ・しかし、ある社会状態では同じ人間が裁縫労働と織布労働を代わる代わるやるのだから、この二つは同じ個人の異なる労働様式、労働諸形態にすぎず、それはわが裁縫師が上着を仕立てたり、ズボンを仕立てるのに同じ個人的労働の変化を前提するのと同じである。さらに、資本主義社会では、労働需要の状況によっては、ある人間労働が、あるときは裁縫労働の形でまたあるときは織布労働の形で、供給されなければならない。

ここでさまざまな労働には同じ実体があるという例として二つの例が上げられていると説明したピースさんに対して、いや三つではないか、と亀仙人が問題にしましたが、まあ、これはあまり本質的な議論ではありません。

以上までで、フランス語版では段落が区切られています。この段落の区切り方が今一つよく分からないのですが、まあ、これもとりにあえずは拘らないことにします。

- ・だから労働のこうした有用な性格を度外視すれば、労働に残るのは、それが人間的労働力の支出であるということだけである。

・裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる生産活動であるが、ともに、人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、こうした意味で、ともに、人間的労働である。

- ・それらは、人間的労働力を支出する二つの異なった形態にすぎない。

まあ以上が一つの区切りとして、さまざまな種類の労働に共通する「同じ実体」としての「人間的労働」の説明をやっている部分の紹介です。

こうしたマルクスの説明を理解する上で、参考になるのは、マルクスがモストの書いたものをほとんど書き直すほど手を入れたとされている『資本論入門』の次の一文です。

《未発展な社会状態では、同じ人間がこもごも、非常に違った種類の労働を行なう。あるときは畠を耕し、あるときは機を織り、あるときは鉄を鍛え、あるときは大工仕事を行なう、等々。しかし、彼の仕事がどんなに多種多様であっても、それらは常に、彼が自分自身の脳髄、自分の神経、筋肉、手等々を用いるときの、一言で言えば彼が自分自身の労働力を支出するときの、異なった有用的な仕方ではない。彼の労働はいつでも力の支出――労働そのもの――なの

であって、この支出の有用的な形態、つまり労働種類が彼の目的とする有用効果に応じて変化するのである。》（大谷禎之介訳、岩波書店、6-7頁）

問題はここで言われている労働はまったく商品生産に限定された労働ではないことに注意が必要です。これらは、そもそも価値を形成する抽象的人間労働が実際にはどういう労働か、あるいは実際の労働のどういう契機を意味するかを論じていると思えるのですが、しかしそこでマルクスが例として上げているものは、必ずしも商品生産者の労働に限定して論じていないことに気づきます。これは注目されてしかるべきでしょう。

もう一つよく似た『資本論』の別の部分（第四節）からの一文も引用しておきましょう。

《したがって、商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じるのではない。それはまた、価値規定の内容から生じるのでもない。と言うのは、第一に、有用労働または生産的活動がたがいになんかに異なっても、それらが人間的有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容やその形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、一つの生理学的真理だからである。》（全集版97頁）

つまり「価値規定の内容」をなす、抽象的人間労働というのは、資本主義や商品生産に固有のものと考えべきではないということのようです。もちろん、この問題はこれまで多くの人たちによって論争されてきた問題ですが、今回はこの問題を取り上げるわけではありません。

まあ、以上までが、だいたい、価値を形成する労働の性格を確定している部分と言えるでしょう。しかしマルクス自身は、初版や第二版でも、またフランス語版でもここで段落を切っているわけではありません。しかしそれはまあ、あまり拘らないことにします。この部分では、とにかくその形態は問わないが、何らかの人間の力の支出としての労働という形で捉えられていることがわかります。そしてその次からは単純労働と複雑労働との関係を論じることになるのですが、だからこの二つの労働、つまり単純労働と複雑労働とは、ともにこうした人間労働力の支出、力の支出、として捉えられているのですが、しかしその力の強さが異なるものだとして捉えられる、という形で分節としては、繋がっているように思えます。人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出といっても、そこには力としての相違があるというわけです。だから同じ一日の労働日に支出された労働であっても、違った価値の大きさとして結果するというわけです。

それでは次の分節に移ることにします。

◎単純労働と複雑労働

・ 人間的労働力は、あれこれの形態で支出されるためには、多少とも発達していなければならないが、商品の価値は、人間的労働自体を、人間的労働一般の支出を、表している。

この一文で、「あれこれの形態で支出される」というのは、要するにさまざまな有用的な形態で支出されるということでしょう。つまり使用価値を形成する労働には一定の発達が前提されるが、商品の価値は、人間労働一般の支出を表しているから、その発達とは関係はない、と言いたいことのように思えます。しかしそのあとで論じられる複雑労働は一定の育成期間を経たものということですから、発達した労働とも言えます。ただそうした複雑労働も商品の価値としては、単純労働に還元されるというわけですから、とにかく商品の価値としては、極めて素朴な人間の労働一般の支出を表しているだけだ、というのが、ここで言いたいことではないかと思われる。

・ブルジョア社会では、将軍や銀行家が大きな役割を演じ、人間自体はみすぼらしい役割を演じているが、この場合の人間的労働もそのとおりである。

この部分は何が言いたいのか今一つよく分からないと思うのですが、あとで紹介する初版の一文を参照すると、そこでは単純労働の例として農僕の労働が上げられていますが、それについて、マルクスは《例えば、農僕の労働力は単純な労働力とみなされ、したがってまた、その労働力の支出は単純な労働、すなわち、それ以上に修飾のついていない人間労働とみなされるであろうが、……》と述べています。つまり《それ以上に修飾のついていない人間労働》というわけです。だから将軍や銀行家というような肩書で修飾されている人はブルジョア社会では大きな役割を演じているが、そうした肩書のない人間自体はみすぼらしいのと同じように、価値を形成する人間的労働もそうした何の飾りもないものなのだ、ということなのでしょう。

・それは平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である。

ここで「特殊な発達」という文言が出てきますが、一つ前の分節で「多少とも発達していなければならない」という文言がありましたが、それと対応していると考えられます。つまり「商品の価値は、人間的労働自体を、人間的労働一般の支出を、表している」と述べていたのを、ここではそれは「単純な労働力の支出」だと言い換えているわけです。それは「普通の人間ならだれでも」「平均的に」もっており、別に特殊な発達を必要とせずに、ただその肉体そのものにもっているような労働力の支出だということでしょうか。つまり価値として表される労働も、そうしたみすぼらしい役割を果たしているのだ、とマルクスは言いたいのでしょうか。

・確かに単純な平均労働そのものは、国を異にし文化史上の時代を異にすれば、その性格を変えるが、現に存在する一つの社会では、与えられている。

単純な平均労働は、国が異なれば、文化史上の時代が変われば、「その性格を変える」と述べています。ここで、「その性格」とありますが、一体、どういうものとして理解したらよいのでしょうか。「平均的な、単純な、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力」と言っても「その性格が変わる」と述べているわけですから、これは例えば、一昔前の義務教育が普及していない時代だと、読み書きや簡単な計算ができるという条件は、単純な労働とはいえなかったが、今日では、それは「単純な労働」といえるというようなことではないでしょうか。

・より複雑な労働は、単純労働の何乗か、何倍かされたものとしてのみ通用する。

・この還元が絶えず行なわれていることは、経験が示している。

・ある商品は複雑な労働の生産物かも知れないが、その価値は、一定分量の単純労働を表すにすぎない。

つまりどんな複雑な労働の生産物も、価値としては単純労働の倍数として表されるということです。なお、この部分は初版ではもっと詳しく次のようになっています。

《例えば、農僕の労働力は単純な労働力とみなされ、したがってまた、その労働力の支出は単純な労働、すなわち、それ以上に修飾のついていない人間労働とみなされるであろうが、これとは反対に裁縫労働は、より高度に発達した労働力の支出とみなされるであろう。それだから、農僕の一労働日はたとえば $1/2W$ という価値表現で示されるが、裁縫師の一労働日は W という価値表現で示されるのである。とはいえ、この相違はただ量的であるにすぎない。もし上着が裁縫師の一労働日の生産物であるならば、それは農僕の二労働日の生産物と同じ価値をもっている。しかし、こうして裁縫労働はつねにただ何倍かされた農民労働としてのみ数えられるのである。いろいろな労働種類がそれらの度量単位としての単純労働に換算されるいろいろな割合は、一つの社会的な過程によって生産者達の背後で確定されるのであって、それゆえに生産者たちにとっては習慣によって与えられているもののように思われるのである。》（国民文庫35頁）

・さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は、生産者達の背後で一つの社会的過程によって確定され、したがって生産者たちには慣習によって与えられているかのように見える。

ここで「さまざまな種類の労働」とありますが、これは具体的な労働を意味しているのでしょうか。それとも複雑労働でもその複雑の度合いが違って「さまざまである」という意味で、「さまざまな種類の労働」と述べているのでしょうか。しかしこれは、先に紹介した初版の文章を読むと、どうやらさまざまな具体的な労働を意味しているように思えます。例えば農僕と裁縫師の労働等々というわけです。

ここで「生産者たちの背後で一つの社会的過程によって確定される」というのがなかなか分かりにくいと思いますが、先に上げた『資本論入門』では次のように述べています。

《諸商品の価値が意味するのは、これらの物の生産は人間的労働力の支出を要したということ、しかも社会的な労働力の支出を要したということだけである。ここで社会的な労働力と言うのは、発展した分業のもとではおのこの個人的な労働力はもはや、社会的な労働力の一つの構成部分として作用するにすぎないからである。したがって、発展した分業が成立してからは、個人的な労働力の一の支出という意味での労働の一のそれぞれの量もまた、社会的な平均労働の、

すなわち社会的な労働力の平均的支出の大小さまざまな量として意味をもつだけである。ある商品に対象化されている平均労働が多ければ多いほど、この商品の価値はそれだけ大きいのである。》（前掲8頁）

・簡単にするために、以下はどんな種類の労働も直接に単純な労働力とみなす。

今回は都合で早く終える必要があり、時間が無かったので、議論できなかったのですが、そもそもどうして複雑労働と単純労働というような区別が生じるのか、そしてまたどうして複雑労働は単純労働よりも同じ時間内により多くの価値 j として対象化されることが出来るのか、社会主義でも同じような区別がありうるのか、等々という問題も、問題としては出されました。しかし、残念ながら、議論は出来ずに持ち越されました。皆さんも一度考えてみて下さい。

◎「労働力の支出」という表現について

最初に埼玉のNさんからの問題提起を紹介しましたが、Nさんの教示を受けて、私も大谷氏の著書を引っ張りだして、読み直したりしました。

大谷氏の説明だと「労働力の支出としての労働とは、人間の力の支出、発揮として見られた活動である。……この意味での労働は、さまざまな具体的形態をもつ現実の労働から労働力支出という共通の質だけを抽象してみた労働だから抽象的労働と呼ばれ、またその共通の質が人間の労働力の支出だから人間的労働とも呼ばれる」と説明されています。そして「人間の労働」や単に「人間労働」という場合は、具体的側面と抽象的側面を両方持ったものとしての人間の労働を指し、「人間的労働」というように「的」が入ると、「人間労働力の支出としての、つまり抽象的労働のことを指すのだ」ということのようにです。だからこの大谷氏の説明だと、「労働力の支出」という場合は抽象的な人間労働の支出のことだということになります。

しかしその後、いろいろと調べてみますと、必ずしもこうした指摘に合致しない用例があることに気づきました。それはまだ学習していませんが、この第二節の最後のパラグラフです。

《すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。》（全集版63頁）

これをみると、使用価値を生産する具体的有用労働についても《特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出》と説明されており、《支出》という用語が使われています。だから最初のNさんの問題提起に戻りますが、「使用価値に支出されている労働」という表現も、それを「特殊な、目的を規定された人間労働力の支出」として理解するならば、こうした表現そのものは必ずしも間違いとはいえないのではないかという気がします。だからまた「商品に支出されている労働」という場合も、それがそうした二つの側面を合わせ持った労働の支出と考えるならば、必ずしも問題が生じる表現ではないのではないか、という気がするのです。もちろん、Nさんの問題提起を否定する気はありませんがーそれはそれで問題を厳密に理解する必要を教えて頂いたと思っていますー、しかしこうしたマルクス自身の表現もあるということを一言紹介しておきたいと思います。

第11回「『資本論』を読む会」の案内



今、自民党内では、「政府紙幣」の発行が議論になっているのだそうである。

2月6日、自民党の菅義偉選対副委員長を中心に「政府紙幣・無利子国債の発行を検討する議員連盟の設立準備会」なるものが開かれたりしている。

しかも、自民党内だけではなく、民主党の岩国哲人衆議院議員も「8項目の緊急経済対策」の一つとして「政府紙幣発行」を提言したり、経済アナリストの森永卓郎氏なども「もはや政府紙幣の発行しかない」などと述べたりしているのだそうである。

かくしていまやマスコミのなかでもこの議論が大きく取り上げられ、テレビでは討論番組まで組まれたりしているありさまである。もちろん、実際にそれが発行されるのかどうか、あるいは、発行されるとしても、どういう形で発行されるのか、といったことはまったく不明である。



昭和20年に発行された政府紙幣(ウィキペディアから)

どうやら、100年に一度の大不況なのだから、何でも許されるということらしい。しかしこれはもはや“末期症状”としか言いようがない事態である。確かに政府・地方合わせて1000兆円というGDPの2倍にも達する天文学的な債務を抱え、日本の国家は実質上は破綻しているといえば確かにそうである。しかし少なくともいまはまだそれは現実化していないのである。しかし、もし政府紙幣を発行したら、それこそ、それが引き金になって、破綻は現実のものとなり、日本はたちまち“ジンバブエ化”するであろう（ジンバブエでは何と100兆ドル札が発行されているのだという！）。

日本で現在発行されているのは、千円、2千円、5千円、1万円の日本銀行券と500円以下の硬貨（補助貨幣）である。前者は日本銀行が発行し、後者は政府が発行している。これまでマルクス経済学者の間では、金との交換を停止した

不換化した日銀券は果たして銀行券、すなわち信用貨幣といえるのか、そうではなくそれは国家紙幣と同じになってしまったのか、という問題について数多くの論争が行なわれてきた。「現在の日銀券はますます紙幣化しつつある」などと折衷的な立場を取る人もいるらしいが、こうした問題はいまだ理論的に明確に解決されているとは言い難いのである。政府紙幣の発行は、再びこうした議論を巻き起こすかも知れない。

マルクスは『資本論』の第1部第3章「貨幣または商品流通」のなかで、国家紙幣は貨幣の諸機能の一つである鋳貨（流通手段）としての機能から生まれ、信用貨幣は支払手段としての機能から生まれると指摘している。さらに本来の信用貨幣である銀行券は、信用制度が発展するなど資本主義的生産のより複雑な関係を前提するとも述べている。

政府紙幣の何たるかを理解し、それがどんな影響力をもたらすかを考えるためにも、やはり『資本論』をしっかりと学ぶ必要があるわけである。ぜひ、貴方も一緒に『資本論』を学んで見ませんか。

第11回「『資本論』を読む会」の報告

◎春は“花粉症”の季節？

3月にもなると、ようやく寒さも弛み、「山」も「里」も「野」も近くにはありませんが、「春～が来た♪」ことを実感します。「花～がさき、鳥～がなく、春」は、やはり心をウキウキさせるものですが、最近、残念なことに、反対に憂鬱な季節になってしまったようです。“花粉症”です。街を歩くと何と「マスク人間」の多いことか！

ピースさんも、JJ富村さんも、花粉症で、二人ともマスクをしています。ピースさんは8日の「読む会」の直前まで風邪でダウンしていたのですが、JJ富村さんも傍で見ている気毒なぐらい重い症状です。私たちが会議室に着いたとき、彼はすでに先にきて窓際の机に伏せていたので、眠っているのかと思ったのですが、そうではなく、花粉症が辛くて、伏せていたというのです。「読む会」の途中でも、時々、マスクを外して鼻などを洗浄する薬を噴霧したりしていました。

幸い私、亀仙人は、山の中で育ったような人間であるためか、小さいときから漆の木の下を通っただけでもかぶれて顔全体を腫らしたりしていたのですが（この場合の治療法として、栗の葉の煮汁に顔を浸けさせられた）、いまだに花粉症の症状は出ていません。

いずれにせよ、憂鬱で思考力も鈍る花粉症ですが、「読む会」の議論はなかなか充実したもので、11～15と五つもパラグラフを進み、第2節の最後のパラグラフを残すまで行きました。さっそく、その報告を行ないましょう。

◎第11パラグラフの位置づけとその内容

まず、このパラグラフの位置づけというか、役割から考えてみましょう。第9パラグラフから、考察の対象は、それまでの商品の使用価値とそれに表されている有用労働から、商品の価値に移りました。そこでマルクスは第10パラグラフでは、まず上着とリンネルという二つの商品を価値の側面からみた場合にもっとも直接的な表象として捉えられる二商品の価値の量的比較から入っています。

《上着はリンネルの二倍の価値をもっている》。

しかし価値の量的区別にはどんな問題があるのか、ということはさしあたりは問題としないとして、そうした量的比較が可能である前提に質的同一性があること、だからまずその質的同一性から問題にすることが言われていました。

ところで次の第12パラグラフは、この後回しにされた価値の量が問題になっています。だからこの第11パラグラフは、第9パラグラフから始まった価値の質的な考察の最後を締めくくるものであり、その「まとめ」だということが分かります。

その内容を理解するために、そもそも価値の質的考察がどのように進められてきたのかを少し振り返ってみましょう

。第10パラグラフではマルクスは次のように考察を進めていました。

まず上着とリンネルとは価値として量的に比較できるのは、両者が同じ実体を持つ物であるからであり、同種の労働の客観的表現であることが指摘されました。そしてこの「同種の労働」とは何か明らかにされ、それは裁縫労働や織布労働の有用的性格を度外視した《人間労働力一般の支出》であること、それは《人間の脳髓、筋肉、神経、手などの生産的支出》という意味での《人間労働力の支出》であることが指摘されました。それはまた《平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である》こと。だから価値の実体としては、複雑な労働も単純な労働に還元されていることが指摘されたのでした。

そして第11パラグラフではもう一度、それまでの考察をまとめているわけです。だから次に第11パラグラフを分節ごとに見て行きましょう。

【11】

・したがって、価値である上着およびリンネルにおいては、それらの使用価値の区別が捨象されているように、これらの価値に表されている労働においては、裁縫および織布労働というそれらの有用的形態の区別が捨象されている。

われわれは以前は《使用価値に表されている労働》、すなわち《有用的労働》をみたが、今は《価値に表されている労働》を問題にしている。上着とリンネルを価値という側面から見ると、まったく無区別な同質のものとして捉えられる。だからそれらを価値という側面で見るということは、それらを質的に区別している使用価値の相違を捨象することになる。それらを質的に違った使用価値たらしめているのは、裁縫労働や織布労働という有用労働なのだから、そうした使用価値を捨象するということは、裁縫労働や織布労働の有用的形態の区別も捨象するということになる。

・使用価値である上着およびリンネルが目的を規定された生産的活動と布および糸との結合したものであり、これに対して価値である上着およびリンネルは単なる同種の労働凝固体であるように、これらの価値に含まれている労働は、布および糸に対するその生産的なふるまいによってではなく、ただ人間労働力の支出としてのみ通用する。

使用価値として見た上着やリンネルは、裁縫労働や織布労働という目的を規定された生産的活動と労働対象である布や糸との結合の産物であるように、それらを価値という側面で見るということは、それらの価値に含まれている労働も、布や糸に対する生産的な振り舞いによってではなく、ただそうした有用的性格を捨象された単なる人間労働力の支出としてのみ通用するものとなるのである。

・裁縫労働と織布労働とが使用価値である上着およびリンネルの形成要素であるのは、まさにこれらの労働の異なる質によってである。

・裁縫労働と織布労働とが上着価値およびリンネル価値の実体であるのは、ただ、これらの労働の特殊な質が捨象され、両方の労働が等しい質、人間労働という質をもっている限りでのことである。

要するに上着やリンネルを価値の側面で見るということは、それらに支出されている労働を、上着やリンネルの使用価値に表されている裁縫労働や織布労働という具体的な特殊な目的を持った側面、労働のそういう形態を捨象して、単なる人間労働力の支出として見ることになる、ということが再確認されたわけです。

◎商品の価値に表される労働の量的考察

次の第12パラグラフから価値に表される労働の量的考察が始まります。これも分節ごとに紹介しておきましょう。まず第12パラグラフです。

【12】

・だが、上着もリンネルも単に価値そのものであるだけではなく、一定の大きさをもつ価値であり、われわれの想定では、一着の上着は一〇エレの二倍の価値がある。

・これらの価値の大きさのこの相違はどこから生じるのか？ それは、リンネルが上着の半分の労働しか含んでおらず、したがって、上着を生産するにはリンネルを生産する時間の二倍にわたって労働力が支出されなければならない、ということから生じる。

★このパラグラフでは商品の価値の量が、商品に含まれる労働の大きさにもとづくこと、そして労働の大きさは、労働力の支出の大きさに、故に労働力が支出される継続時間に関係することが明らかにされています。次は第13パラグラフです。

【13】

・したがって、商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的にのみ意義をもつのだが、価値の大きさとの関連では、それがもはやそれ以上の質をもたない人間労働に還元されたのち、ただ量的にのみ意義をもつ。

ここで《もはやそれ以上の質をもたない人間労働に還元さ》れているというのは、価値に表されている人間労働も一つの質であるが、それは使用価値がもつ特殊な質を一つの質に還元したものなのです。そしてそれはそれ以上に還元しようのない質になっているために、もはや量的な区別しか問題にならないというわけです。これはヘーゲルの論理学の「有論」を彷彿とさせる敘述です。つまり「質のどん詰まり」としての向自有が、すなわち人間労働一般というわけです。

・前の場合には、労働のどのようにしてと、何をするか問題となり、後の場合には、労働のどれだけ多くが、すなわちその継続時間が問題となる。

使用価値として表されている労働の場合には、《労働のどのようにして》、つまりその具体的形態が問われ、《何をするか》、すなわちその目的意識性が問われたのですが、価値として表される労働においては、ただその《どれだけ》が、つまり量だけが問題となり、よってその継続時間が問題というわけです。

・一商品の価値の大きさは、その商品に含まれている労働の量だけを表すから、諸商品は、一定の比率においては、つねに等しい大きさの価値でなければならない。

★最後の分節にある《商品に含まれている労働》という文言が少し問題になりました。これまでマルクスは《商品に表される労働》とか《使用価値に表される労働》あるいは《価値に表される労働》という言い方はしてきましたが、ここでは《含まれる労働》という表現をしていることです。しかしこれはそれが指摘されただけで特にそれ以上問題にはなりませんでした。

さて、このパラグラフでは、価値の量との関連で見た労働が、使用価値との関連で見た労働の質的相違を還元して、それ以上還元できないまでに還元されているから、量的にのみ意義をもつことが明らかにされています。つまりこのパラグラフでは価値の量として表されている労働と使用価値として表されている労働との関連が考察されたわけです。そうした考察の端緒としての位置づけを持っているように思われます。つまり使用価値との関連で見た労働では、「どのよう

にして」「何をするか」が問われ、価値の大きさとの関連で見た労働では、「どれだけ」が問われる、と。これは次のパラグラフでは使用価値に関連する生産力と価値との関連を考察するための、いわばその導入部分であり、その前提である、といえわけです。それでは、次の第14パラグラフを見てみましょう。

【14】

・たとえば、一着の上着の生産に必要とされるすべての有用労働の生産力が不変のままにとどまるならば、上着の価値の大きさは、上着自身の量が増えるにつれて増大する。

ここで《すべての有用労働》と述べられているのは、単に裁縫労働だけではなく、裁縫労働と結合されるリンネルを織る労働も、織布労働と結合される糸を紡ぐ製糸労働も、とにかく最終的な個人的消費手段である上着という使用価値を生産するに必要とされるすべての有用労働がここでは問題になっていると考えられます。そしてそれらのすべての労働の生産力が不変であるなら、上着の価値の大きさは、上着の量が増えれば、増えるというわけです。

・一着の上着が x 労働日を表すなら、二着の上着は $2x$ 労働日を表す、等々。

・しかし、一着の上着の生産に必要な労働が二倍に増加するか、あるいは半分に減少するものと仮定しよう。

・前の場合には、一着の上着は以前の二着の上着と同じ価値をもち、後の場合には、二着の上着が以前の一着と同じ価値しかもたない。

・もっとも、どちらの場合でも、一着の上着はあい変わらず一着の上着として役立ち、それに含まれている有用労働もあい変わらず同じ質のものである。ただ、その生産に支出された労働量が変わったのである。

★生産力の変化と上着という使用価値との関連をまず問題にし、さらにそれが上着の価値とどういう関係にあるかを見ています。生産力の変化は、有用労働に関連するが、しかし生産力が変化しても、一着の上着という使用価値はもとのままの相変わらず同じ一着の上着として役立つだけで、使用価値としての役割も、またそれに含まれている有用労働にも何の変化もないというわけです。にも拘らず、生産力は有用労働に関連し、だから価値には直接関連しないはずなのに、生産力の変化は、一着の上着という使用価値そのものには何の変化ももたらさないのに、逆に価値には変化をもたらすというわけです。この逆説的な現実を指摘しています。

ところで、ここでは生産力が変わっても、《有用労働も相変わらず同じ質のもの》といえるのかどうか問題になりました。例えば裁縫労働の場合、手縫いするのとミシンを使って縫うのとでは、有用労働の質が変化しているのはいないか、むしろ有用労働の質的变化こそ、生産力を変化させる要因の一つではないのか、という疑問が出されました。これはハッキリ決着がついたといえないのですが、要するに上着という有用性そのものは、生産力が変わっても変わらないのだから、その使用価値の有用性からみた場合に、それを形成する労働の有用性というもの、そういう意味での質にも変化がないと言っているのではないかと、という結論になりました。だから裁縫労働の具体的形態に変化があっても、同じ有用性に結実するという限りで、同じ質を持っているといえるのではないかとこののですが、まあ、今一つよく分からないのが正直なところです。

【15】

・より大きい量の使用価値は、それ自体としては、より大きい素材的富をなす。

・二着の上着は、一着の上着より大きい素材的富をなす。

- ・二着の上着があれば、二人に着せることができるが、一着の上着では一人にしか着せられない、等々。
- ・といっても、素材的富の量の増大に対応して、同時にその価値の大きさが低下することもありえる。
- ・このような対立的運動は、労働の二面的性格から生じる。

使用価値の量が増大しているのに、その価値が低下するというような、対立的な運動は、使用価値に表される労働と価値に表される労働という労働の二面的性格から生じることが指摘されています。

- ・生産力は、もちろんつねに、有用な具体的労働の生産力であり、実際、ただ、与えられた時間内における目的にしたがった生産活動の作用度だけを規定する。

ここでは生産力について、厳密に規定がされています。すなわち、有用な具体的労働の生産力であって、与えられた時間内に目的にしたがった生産活動の作用度だけを規定する。

- ・だから、有用労働は、その生産力の上昇または低下に正比例して、より豊かな生産物源泉ともなれば、より貧しい生産物源泉ともなる。
- ・これに対して、生産力の変動は、それ自体としては、価値に表される労働にはまったく影響しない。

これもすでに指摘したことですが、もう一度、生産力の変動は、それ自体としては、価値に表される労働にはまったく影響しない、ことが述べられています。

- ・生産力は、労働の具体的な有用な形態に属するから、労働の具体的な有用な形態が捨象されるやいなや、生産力は、当然、もはや労働に影響を与えることはできなくなる。

ここでは、どうして生産力の変動は、それ自体として価値に表される労働に影響しないのか、その理由が述べられています。

- ・だから、生産力がどんなに変動しても、同じ労働は、同じ時間内には、つねに同じ価値の大きさを生み出す。
- ・ところが、同じ労働は同じ時間内に、異なった量の使用価値を――生産力が上がれば、より大きい量を、生産力が下がれば、より小さい量を――提供する。

所沢の「『資本論』を読む会」では、ここに出てくる《同じ労働》とは何かということが議論になったようです (<http://shihonron.exblog.jp/m2008-09-01/>)。〈「次の部分で使用価値を与えるとされているのだから、あるがままの労働(具体的労働の側面と抽象的労働の側面をあわせもつ労働)ではないか」という発言が〉あった、と報告されています。

- ・したがって、労働の多産性を増大させ、したがって、労働によって提供される使用価値の総量を増大させるような生産力の変動は、もしもそれがこの使用価値総量の生産に必要な労働時間の総計を短縮させるならば、この増大した使用価値総量の価値の大きさを減少させる。反対の場合には逆になる。

この最後の分節の解釈を巡ってかなり長い時間議論し、JJ富村さんなんかは、黒板を使って問題を整理しながら論じたりしましたが、今一つスッキリと解決したとは言えませんでした。

まずここでは「使用価値総量」が問題になっていますが、どうしてここで使用価値総量が問題になっているのでしょうか。このパラグラフは量的考察の最後でもあり、しかもその最後の分節です。だから単なる一着の上着の使用価値だけではなく、「使用価値総量」が問題になっていると考えることができます。ただここで「使用価値総量」と言っても、すべての使用価値全体を意味するのではなく、例えば上着なら上着の総量を意味しているのではないかということになりました。

さらにこの分節の理解を困難にさせているのは、生産力の変動が使用価値総量も価値総量も同時に変化させる場合について述べているからです。

例えば、使用価値総量を増大させる生産力の変動は、使用価値の一単位の価値を減少させるというのなら、まったく問題なく理解できます。この場合は生産力の変動が使用価値総量を増大させても、その使用価値総量の価値そのものには変化がないために（なぜなら、《生産力は、もちろんつねに、有用な具体的労働の生産力であり、実際、ただ、与えられた時間内における目的にしたがった生産活動の作用度だけを規定》し、《生産力の変動は、それ自体としては、価値に表される労働にはまったく影響しない》から）、一単位の使用価値の価値量は減少するのだと理解することができるわけです。しかしマルクスが述べているのは、こうしたことでは必ずしもないわけです。だからややこしいのです。

マルクスが述べているのは、使用価値総量を増大させる生産力の変動が、その生産された使用価値総量の価値をも減少させる場合についてです。というのは、その生産力の増大は、使用価値総量を増大させるだけでなく、その増大した使用価値総量を生産するのに必要な労働時間の総計をも短縮するケースについて述べているのだからです。そして確かにこのように理解すれば、それはその限りではまったくそのとおりののですが、どうしてこうしたケースの考察が量的考察の最後になされる必要があるのか、しかも《使用価値総量》とその生産に必要な《労働時間の総計》が問題にされる必要があるのか、ということが今一つよく分からないのです。これはとりあえず、疑問として出すだけにしておきます。

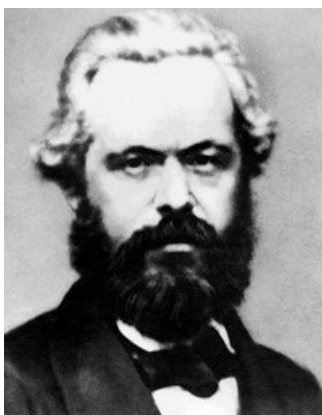
【追記】

この最後の分節の理解について、補足しておきます。私たちは「使用価値総量」を「例えば上着なら上着の総量を意味している」と理解したのですが、それがそもそもマルクスがこの分節で何を言いたいのかを分からなくさせたようです。ここは文字どおり「使用価値総量」とは、その社会が必要とする使用価値総量と理解すべきなのです。そうすると、マルクスが言いたいことは次のようなことです。

生産力が高度化すれば、社会が必要とする使用価値総量を増大させ、社会が享受する素材的富を増大させるが、同時にその使用価値総量の生産に必要な労働時間も短縮させもする。そうした生産力の変動は、しかし資本主義的生産においては、使用価値総量の価値の大きさを減少させ、それは資本主義的生産の攪乱・恐慌に繋がるのである。しかし将来の社会であるなら、それは自由時間の拡大に結果する。しかしもし戦争などで生産力が破壊されるなら、逆の結果を生み出す。第二次世界大戦はまさにそうした形で資本主義を延命させたといえるであろう。云々。

もちろん、かなり脚色して書いてみましたが、このように理解するなら、この分節が商品の価値に表される労働の量的考察の最後に相応しい内容であることがお分かりになるでしょう。

第12回 「『資本論』を読む会」の案内



A I G（アメリカン・インターナショナル・グループ）の巨額報酬が問題になっている。

A I Gと言えば、今回の金融危機のもとになった金融バブルを煽った張本人であり、昨年9月にリーマン・ブラザーズが破綻に追い込まれる一方で、米政府による救済を受け、公的資金が四回にわけて投入され、その総計が1700億ドル（約17兆円）にも達している保険大手である。

今回、そのバブルを煽った金融商品部門の幹部に総額約160億円（一人当たりの最高額は約6億2700万円）ものボーナスが支払われたというのである。一方で政府の公的資金の支援を受けながら、他方で、破綻をもたらした“犯罪人”たちに巨額の報酬が支払われていたのである。これは事実上、税金を山分けしていたに等しい。



AIGに対する公聴会で抗議する人たち

しかも高額報酬を受け取っていたのは、A I Gの幹部だけではない。米銀最大手のバンク・オブ・アメリカに吸収合併された証券大手のメリルリンチの幹部も、昨年、巨額の報酬を受けとっていたことが明らかになっている。同社を統合したバンカメには総額450億ドル（約4兆5000億円）の公的資金が注入されているのである。

ボーナスのトップ10の社員への支払い総額は約209億円（平均約20億円！）。しかも巨額報酬を受け取っていたのは、バブルを煽った専門家達である。例えば、投資銀行部門の責任者33億8000万円、トレーディングの責任者13億円、金融商品の責任者18億7000万円、商品取引の責任者16億5000万円、中東・アフリカの責任者15億円、グローバル戦略の責任者29億4000万円、グローバルセールスとトレーディングの責任者39億4000万円と凄まじい数字が並んでいる。

彼らは自らの責任で破綻を招きながら、税金で穴埋めされることをよいことに、暴利を貪っていたのである。何と腐敗した連中であろうか。

しかしこれは信用が極端まで膨張した腐敗した資本主義の避けることのできない一つの現象なのである。マルクスは資本主義的生産における信用の役割を論じるなかで、次のように指摘している。

《それは、新しい金融貴族を再生産し、企画屋や発起人や名目だけの役員の姿をとった新しい種類の寄生虫を再生産し、会社の創立や株式発行や株式取引についての思惑と詐欺との全制度を再生産する。》（全集版25巻 a 559頁）

《そして、信用はこれらの少数者にますます純粋な山師の性格を与える。》（同560頁）

《信用制度が過剰生産や商業での過度な投機の主要な槓杆として現われるとすれば、それは、ただ、その性質上弾力的な再生産過程がここでは極限まで強行されるからである。……それゆえ、信用制度は生産力の物質的發展と世界市場の形成とを促進するのであるが、これらのものを新たな生産形態の物質的基礎としてある程度の高さに達するまでつくり上げるといふことは、資本主義的生産様式の歴史的任務なのである。それと同時に、信用は、この矛盾の暴力的爆発、恐慌を促進し、したがってまた古い生産様式の解体の諸要素を促進するのである。》（同562-3頁）

バブルの破綻と世界恐慌の勃発が古い生産様式の解体を促進するものであるなら、こうしたバブルの中で暴利を貪った“寄生虫の大量発生”も、資本主義的生産様式が新しい生産様式によって置き換えられなければならないことを教えるものの一つでもあるのであろう。

貴方も世界恐慌をより深く理解するためにも、ともに『資本論』を読んでみませんか。

第12回「『資本論』を読む会」の報告

◎あっ、という間に葉桜に

今年の桜は開花も早かったが、散るのも早かったですねえ。

4月3日に、静岡の“花追い人”の知人に付き合っ、奈良県宇陀市にある「又兵衛桜」を観に行きました。樹齢300年とも言われるしだれ桜の古木は7分咲きといった程度でしたが、しかしなかなか見事なものでした。まだその段階では染井吉野はちらほら程度だったのが、その日曜日には瞬く間に満開になり、一週間後には桜吹雪となって、あっという間に葉桜になってしまいました。今年はいわゆる“花冷え”が満開後に無かったことが花の足を早めた原因かも知れません。

いずれにしても見事な散りっぷりです。われわれも別に一花咲かさずとも、散り際だけはかくりたいものです。

◎第16パラグラフをめぐる議論

さて、今回は、第2節の最後のパラグラフである第16パラグラフだけをやりました。このパラグラフは第2節全体のまとめであり、それだけに十分時間をかけて議論する意義があると考えたからです。まずこのパラグラフをそのまま紹介しておきましょう。

《すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。》（全集版63頁）

このパラグラフを巡っては、資料として出された（後に紹介）、このパラグラフの構造を分析した図を見て頂ければ分かるように、マルクスは明らかに「労働の二重性」について、少なくとも「二段階」ともいべき二つのレベルで見ることが指摘されました。一つは「人間労働力の支出」というレベルであり、もう一つは労働の「属性」というレベルです。この二つのレベルは、抽象度が異なっているように思えます。

「抽象的人間労働」については、これまで数多くの論争や議論がなされてきましたが、その論争の中心は、「抽象的人間労働」というのは、歴史的な概念なのか、それとも歴史貫通的な概念なのかという問題でした。1920年代には、当時のソ連において、ルービン等による論争がすでにあり、日本でも長く論争されてきた歴史があります。

白須五男氏は『マルクス価値論の地平と原理』（広樹社1991.2.20）のなかで、日本のマルクス経済学者のなかで、〈もっとも基本的な対極をなしてきた立場〉として、次のように区分けしています。

〈抽象的人間労働を商品生産社会に固有に定在する特殊歴史的な労働とみなす学説（歴史的カテゴリー説）〉に立つ人たち――（戦前）河上肇・櫛田民蔵（戦後）遊部久蔵・林直道・安部隆一・宮川実（最新）正木八郎・頭川博・松石勝

彦（目される人）平田清明（哲学畑）広松渉（白須氏はそれぞれの主な著書や論文も紹介していますが、省略します）。

〈反対にその労働をすべての社会形態に歴史貫通的に存在する労働とみなす学説（超歴史のカテゴリー説）〉に立つ人たち——白杉庄一郎・岩瀬文夫・山本二三丸・見田石介・荒又重雄・吉原泰助・種瀬茂（同）。

なぜこの用語がこれほど問題になるのでしょうか。もちろん、それはこの用語がそれほど現在の資本主義社会を理解する上で決定的な本質的な概念であるからですが、しかし他方で、マルクス自身が、「抽象的人間労働」と基本的には同じ内容をなすと思えるものをさまざまな言い方で表して論じているからでもあるように思えます。そのなかには歴史的な概念であると思わせるものもあれば、歴史貫通的なものと思わせるものもあるわけです。だからなかなか理解が困難なんだと思います。

しかしそうしたマルクスのさまざまな用語の使い方は（それにはどういうものがあるのか資料を参照してください）、しかしこの第2節の最後のパラグラフの構造を分析すると、そこにはマルクスなりの意図があることが明確に理解できるような気がします。

すなわち「人間労働力の支出」というレベルで見ている場合は、歴史貫通的なものとしてそれを捉えているような気がします。それに対して「労働の属性」として二つの契機を捉えている場合は、歴史的なものとしてそれを捉えているような気がするのです。

しかし問題はこの歴史貫通的な概念としての「人間労働力一般の支出」と歴史的な概念である「抽象的人間労働」とは如何なる関係にあるのかを理解することだ、という問題提起が亀仙人からあり、それに関してひとしきり議論がなされました。しかし、問題はなかなか難しく結論が出たとはとても言えません。よって、その紹介は残念ながら割愛せざるをえません。最後に、今後も、この問題については、引き続いて考えていくことを確認して終わったのでした。

◎第16パラグラフの関連資料

1、このパラグラフのマルクスの敘述の変遷

この最後のパラグラフの現行のような文言は、第二版で登場するのですが、そこに至るまでのほぼ同じ部分と考えられるものの、マルクス自身の敘述を辿ってみます（下線はマルクスによる強調箇所）。

（1）初版から

《以上に述べたことから次のような結論が出てくる。すなわち、商品のなかには、もちろん、二つの違った種類の労働が含まれているわけではないが、しかし、同じ労働が、その労働の生産物としての商品の使用価値に関連して見られるか、それとも、その労働の単に対象的な表現としての商品価値に関連して見られるか、によって、違った規定を受けるし、また、対立的にさえ規定されている、ということである。商品は、価値であるためには、なによりもまず使用対象でなければならないのであるが、それと同時に、労働も、人間の労働力の支出として、したがってまた単なる人間労働として、数えられるためには、なによりもまず有用な労働、すなわち目的を規定された生産的な活動でなければならないのである。》（国民文庫版39－40頁）

（2）第二版への補足と改訂から

《 [A] 》

[5] p. 13) すべての労働は、一面では、人間的労働力の支出である。他面では、目的を規定された形態でのすべての力の支出である。労働力が支出されるこの特殊な形態あるいはあり方は、商品の使用価値を、つまり一定の有効効果をもたらす。それとは反対に、商品価値は、次の事を述べているにすぎない。すなわち、この物は人間的労働力の支出以外のなにもものも現してはならず、この支出の量はその価値の大きさに現わされている、ということである。

[B]

すべての労働は、一面では、人間的労働力の支出である。生産物の価値は、その生産物が支出された労働力すなわち人間的労働そのもの以外のなにもものも現わしてはいないということ、そしてその支出の量はその価値の大きさに表わされている、ということの意味しているのである。他面において、労働力は何らかの規定された形態において支出される、すなわち何らかの方法で使われた、そして特殊な、目的を規定された生産的行為としてのみ労働力は使用価値をすなわち有用効果を生み出す。

[C]

[すべての労働は] 一面では、人間的労働力一般の支出、したがって抽象的人間的労働である。そして、抽象的人間的労働というこの属性において労働は価値を形成する。他面において、すべての労働は何らかの特殊な目的を規定された形態での人間的労働力の支出であり、そしてそのような具体的有用労働として労働は商品の使用価値を生産するのである。》（『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第5号57-8頁、小黒正夫訳）

(3) 第二版（現行版とほぼ同じ）

《すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。》（全集版63頁）

(4) フランス語版

《上述の結果、次のことが生ずる。すなわち、厳密に言って、二種類の労働が商品のなかにあるわけではないが、労働をその生産物としての商品の使用価値に関連づけるか、または、その純粋に客体的な表現としての商品の価値に関連づけるかにしたがって、その商品のなかで同じ労働が自己とは反対のものになる、ということ。どんな労働も一方では、生理学的な意味で人間労働力の支出であり、この同等な人間労働という資格において商品の価値を形成する。他方、どんな労働も、特殊な目的によって規定されるなんらかの生産形態のもとでの、人間労働力の支出であって、この具体的な有用労働という資格において使用価値あるいは有用性を生産する。商品が価値であるためには、商品はなによりもまず有用でなければならないのと同じように、労働が人間労働力の支出、言葉の抽象的な意味での人間労働と見なされるためには、労働はなによりもまず有用でなければならない。》（江夏美千穂/上杉聰彦訳16頁）

2、このパラグラフの構造の解析

まずこのパラグラフを再度引用しておきます。

《すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。》（全集版63頁）

このパラグラフはシンメトリーな構造を持っています。それを図示してみましょう。

| | | |
|---------------------|------------------|--|
| すべての労働は | | これは資本主義社会における「すべての労働」であろう。マルクスは初版やフランス語版では商品の中にある「労働」を見ているからである。 |
| 一面では | 他面では | だから労働が「二重性」として捉えられるのは、商品の使用価値と価値という二つの対立的契機と関連させて見るからである。 |
| 生理学的意味での | 特殊な、目的を規定された形態での | 「人間労働力の支出」というレベルでみた二つの労働の契機。 |
| 人間労働力の支出であり | | |
| この同等な人間労働または抽象的人間労働 | この具体的有用労働 | 労働の「属性」としてみた、二つの契機。 |
| という属性において | | |
| それは商品価値を形成する。 | それは使用価値を生産する。 | 労働の二つの「属性」が、商品の二つの契機に結果するものとしてみている（ここでは「表れる」のではなく、一方は「形成する」であり、他方は「生産する」であることに注意）。 |

3、「抽象的人間労働」に類似するさまざまな用語例

第2節では、この用語は最後のパラグラフに1回出てくるだけです。だからマルクスは同じような内容をさまざまな言い方で表しているわけです。それには一体、どういうものがあるのか、一度、この第2節の最後のパラグラフまでで、同じような内容がどういう用語で述べられているのか、すべて調べてみました（引用は全集版から頁数も同じ）。

§第1節から

■価値の社会的実体

(1) 《一つの等しいもの》《ある内実》

《したがって、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものを表現する、ということになる。しかし、第二に、交換価値は、そもそもただ、それとは区別されるべきある内実の表現様式、「現象形態」でしかありえない。》（50頁）

(2) 《同じ大きさのある共通物が.....存在する》《第三のもの》（50頁）

(3) 《同じ人間労働、すなわち抽象的人間労働》

《そこで、諸商品体の使用価値を度外視すれば、諸商品体にまだ残っているのは、ただ一つの属性、すなわち労働生産物という属性だけである。しかし、労働生産物もまたすでにわれわれの手で変えられている。もしもわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、われわれは、労働生産物を使用価値にしている物体的諸成分と諸形態をも捨象しているのである。それはもはや、テーブル、家、糸、あるいはその他の有用物ではない。その感性的性状はすべて消しされている。それはまた、もはや、指物(サメノ)労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他の一定の生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有目的性格と共に、労働生産物に表れている労働の有目的性格も消えうせ、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的形態も消えうせ、これらの労働は、もはや、たがいに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間労働、すなわち抽象的人間労働に還元されている。》(51-2頁)

(4) 《幻のような同一の対象性》《区別のない人間労働》《その支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出》の《単なる凝固体》《これらの物が表しているのは、もはやただ、それらの生産に人間労働力が支出されており、人間労働が堆積されているということだけ》《社会的実体の結晶》

《そこで、これらの労働生産物に残っているものを考察しよう。それらに残っているものは、幻のような同一の対象性以外の何物でもなく、区別のない人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出の、単なる凝固体以外の何物でもないのである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値、商品価値である。》(52頁)

■価値の量的考察

(5) 《抽象的人間労働が対象化または物質化されている》《「価値を形成する実体」》《労働の分量》《労働の量》

《したがって、ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的人間労働が対象化または物質化されているからにはかならない。では、どのようにしてその価値の大きさははかられるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」、すなわち労働の、量によってである。労働の量そのものは、その継続時間によってははかられ、労働時間はまた、時間、日などのような一定の時間部分を度量基準としてもっている。》(52-3頁)

(6) 《同等な人間労働》《同じ人間労働力の支出》《ここでは同一の人間労働力として通用する》《一つの社会的平均労働力という性格》《社会的平均労働力として作用》《一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である》《社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。》

《一商品の価値がその生産のあいだに支出された労働の量によって規定されるならば、ある人が怠惰または非熟練であればあるほど、彼はその商品の完成にそれだけ多くの時間を必要とするのだから、彼の商品はそれだけ価値が大きいと思われるかもしれない。しかし、諸価値の実体をなす労働は、同等な人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値に現される社会の総労働力は、たしかに無数の個人的労働力から成りたっているけれども、ここでは同一の人間労働力として通用する。これらの個人的労働力のそれぞれは、それが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、一商品の生産にただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間のみ用いる限りにおいて、他の労働力と同じ人間労働力である。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。》(53頁)

(7)《社会的に必要な労働の量》《その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間》《等しい大きさの労働量》《商品の生産に必要な労働時間》《一定量の凝固した労働時間》

《したがって、ある使用価値の価値の大きさを規定するのは、社会的に必要な労働の量、または、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間にほかならない。個々の商品は、ここでは一般に、その商品種類の平均見本とみなされる)。それゆえ、等しい大きさの労働量が含まれている、または同じ労働時間で生産されうる諸商品は、同じ価値の大きさを持つのである。一商品の価値と他のすべての商品の価値との比は、一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。「価値としては、すべての商品は、一定量の凝固した労働時間にほかならない。」》(53-4頁)

§第二節

(8)《同じ実体をもつ物》《同一性質の労働の客観的表現》《一定部分の人間労働》《労働の有用な性格を度外視すれば、労働に残るのは、それが人間労働力の支出であるということである》《人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、こうした意味で、ともに、人間労働である》《人間の労働力を支出する》《人間の労働力そのもの》《人間労働自体を、人間労働〔第1版とフランス語版では、人間労働力、となっている〕一般の支出》(59頁)

(9)《それは、平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である》《単純労働》(60頁)

(10)《ただ人間労働力の支出としてのみ通用する》《ただ、これらの労働の特殊な質が捨象され、両方の労働が等しい質、人間労働という質》(61頁)

(11)《もはやそれ以上の質をもたない人間労働に還元された》《後の場合には、労働のどれだけ多くが、すなわちその継続時間が問題となる》(61頁)

(12)《すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。》(63頁)

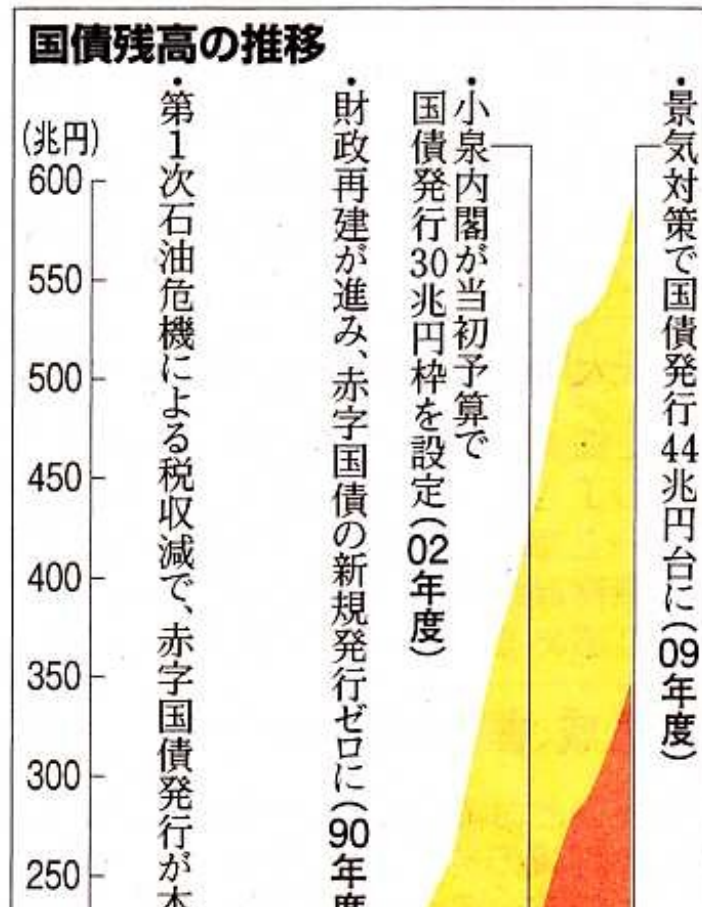
『資本論』を読んでみませんか

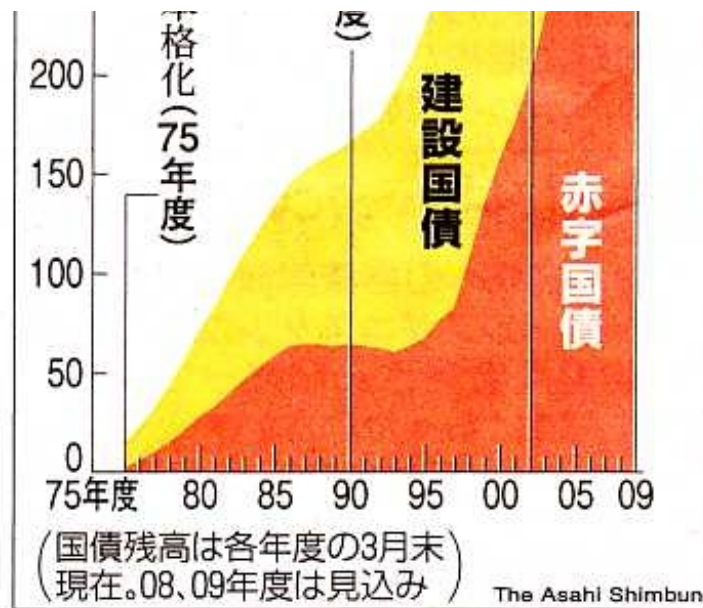


政府は4月末、総額15.4兆円にのぼる過去最大の経済対策の財政的裏付けとなる補正予算案を閣議決定し、国会に提出した。一カ月前に当初予算が成立したばかりであり、「異例づくし」の予算と言われている。

当初と合わせた予算規模は102兆円と初めて100兆円を突破。財源の多くは借金（国債）に頼り、歳入に占める税収の割合は45%と過去最低である。新規の国債の発行額は過去最悪の44兆円となり、ほぼ税収見通しと並ぶ。

麻生内閣は、「景気の底割れリスクの回避」を掲げているが、その実態は、近づく選挙にむけての“バラマキ予算”、“国民買収予算”としか言いようがない。おまけにそのバラマキの対象は大手金融機関や大企業に対するもの以外は、車や家や家電等を買える富裕層を目当てにしたものでしかなく、母子家庭への生活保護費加算の打ち切りに象徴されるように、大企業を潤す公共事業を前倒しする一方で、社会補償費を削る姿勢にはまったく変化はなく、弱者に犠牲を強いる内容になっているのだ。





09年5月2日『朝日』から

そればかりか国債残高は、09年度末で592兆円にのぼる見込みであり、国民一人あたり約463万円。つまり、生まれて来る赤ん坊は500万円近い借金を背負って生まれて来る勘定になる。5人家族だと2300万円を超える借金である。この借金は一体誰が返すのか。それは結局、国民しかいない。つまり将来の国民にすべての犠牲はしわよせされるのである。

マルクスは国債について、次のように述べている。

《国債はすべて全人民の勤労に課せられた抵当、人民の自由の縮小ではないだろうか？ それは、国債所有者という名まえで知られている新しい一団の見えざる圧制者を生み出すのではないだろうか？》（マルクス・エンゲルス全集15巻117頁）

つまりわれわれ全人民は、一人当たり500万円近い借金のために「勤労」することを強制され、それだけ「自由」を奪われる。他方、国債所有者として利子利得を居ながらにして我が物とする圧制者は国民を犠牲に肥え太るというわけである。

麻生内閣の“選挙対策予算”、“国民買収予算”に反対し、「全人民」に災厄をもたらす資本主義社会の仕組みを解明し、理解するために、『資本論』を一緒に読んでみませんか。

第13回「『資本論』を読む会」の報告

◎新型インフルエンザ

新型インフルエンザが猛威をふるっています。神戸や大阪では高校生を中心に拡大しつつあったのが、いまや、あっというまに全国に広がっています。実は、愚息もこの14日にカナダ経由で帰国したのですが、すぐに保険所から電話とファックスがあり、「健康観察票」なるものが送られてきました。21日までが要観察期間であり、18日と21日に連絡するようにとのことでした。結局、愚息は何の症状らしいものもなく済んだのですが、「不要不急の外出を避ける」と言われても、長く海外に居て、帰国したものは直ちにしなければならないのが山ほどあり、そうも行きません。まず有効期限が切れた免許証の復活手続きが必要で、車検切れになった車の車検、仕事の打ち合わせ等々、公私にわたって目まぐるしいほど忙しいのです。とても家にじっとしていることなど出来ないのです。だから当然、水際策をすり抜けた感染者たちも恐らく同じでしょう。だからそうした人たちから一気に広がることは不可避ともいえます。

幸か不幸か、わが「『資本論』を読む会」参加メンバーは花粉症から、日頃からマスクが外せない人が多いので、その点、感染しにくいのかも知れません。何が幸いするか分かりませぬね。

◎「第3節 価値形態または交換価値」の前文

さて、第13回「『資本論』を読む会」は、残念ながら欠席者が多く、ただでさえ少ない参加者なのに、一層寂しい開催となりました。しかし今回は、第3節に入り、じっくり時間をかけて議論し、前文をすべて終えました。この前文は四つのパラグラフからなっていますが、各パラグラフごとにまず本文を示し、そのあとその解説と議論の紹介をやり、最後に、関連資料を紹介しておきましょう。

■第1パラグラフ

《商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である。けれども、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにはかならない。だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである。》

この部分では、まずJ J 富村さんから「本文では『商品は、使用価値または商品体の形態をとって、……この世に生まれる』とあるのを、レジュメでは『商品は使用対象であると同時に価値の担い手＝商品体として生産される』と説明しているが、『または』と『同時に』とでは意味が少し違うように思う」と発言。レジュメを提出したピースさんは、「商品体を価値体という意味に理解して説明している」と答えました。J J 富村さんは、「『または』というのは、商品は使用価値として生まれ、あるいは『商品体』として生まれる、と解釈すべきで、だから商品体は使用価値のことだと思う」と批判。ピースさんは、「同時に」と解釈したのは、間違っていることは認めましたが、「商品体」を使用価値と解釈することには納得ができないようで、「『商品体』というのは、『生産物が価格で表されていること』の意味ではないのか」と食い下がりましたが、J J 富村さんは「これが商品のありのままの現物形態である」と本文にあるように、これは使用価値を意味している」と反論。どうやら軍配はJ J 富村さんに上がったようです。

やはり本文を読む限りでは、「商品体」というのは、「使用価値」を言い換えただけで、鉄やリンネル、小麦というような、商品のありふれた現物形態について述べていると考えるべきでしょう。これは初版付録（付属資料参照）を見ると、「使用価値の形態は、商品体そのものの形態、鉄、リンネル、等々であり、商品体の、手をつかめる感覚的な存在形態である」と説明していることを見ても明らかです。ここでは「商品体」の「体」をマルクスは強調しています。つまり使用価値の形態は商品の身体そのものとして現われている形態であり、手をつかめる感覚的な存在形態だということでしょう。またフランス語版（同）では、「商品体」ではなく、「商品素材」とも翻訳されています。

ピースさんが言及した「価値体」については、もう少しあとでできますが、これについては色々論争もありますので、ここでは説明は保留しておきましょう。

さて、この第1パラグラフは、とにかく商品が商品であるということは、二重の「形態」を持つ必要があることが指摘されています。「形態」というのは、フォルムですが、要するに何らかの形あるものとして「現われているもの」です。私たちは第1節の商品の分析で、商品は使用価値であるとともに価値であるということが分かったのですが、しかし使用価値と価値というだけでは、二重の「形態」を持っているとはいえません。なぜなら、確かに使用価値は目に見えて手をつかめる現物形態ですが、価値そのものは手をつかんだり見たり出来るものではないからです。価値は内在的なものであり、そのものとしては「形態」として「現われている」わけではないのです。しかし商品である限りは、価値もその「形態」を、つまり目で見えるような姿で現われてこなければならない（現象しなければならない）というのです。だから商品はその使用価値としての現物形態とともに価値の形態（価値形態）という二重の「形態」を持つ限りでのみ、商品として「現われ」得る、つまり商品という「形態」をとることになるわけです。すなわちその姿で自分は商品だよ、と誰にでも分かるようなものとして存在することになるのだというわけです。

■第2パラグラフ

《商品の価値対象性は、寡婦のクイックリー〔シェイクスピアの『ヘンリー四世』などの中の人物〕と違って、どうつかまえたらいいかだれにもわからない。商品体の感性的にさがされた対象性は正反対に、諸商品の価値対象性には、一原子の自然素材も入りこまない。だから、一つ一つの商品を好きだけひねくりまわしても、それは、価値物としては、依然としてつかまえないものである。けれども、諸商品が価値対象性をもつのは、ただ、価値対象性が人間労働という同じ社会的単位の表現である限りにはかならないこと、したがって、商品の価値対象性は純粋に社会的なものであること、を思い出せば、それがただ商品と商品との社会的関係においてのみ現れうるといことも、おのずから明らかで

ある。実際、われわれは、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている諸商品の価値の足跡を探りあてた。今や、われわれは、価値のこの現象形態に立ちかえらなければならない。》

このパラグラフには「価値対象性」という用語が5回も出てきます（ところが初版付録やフランス語版ではまったくできません。フランス語版では「商品の価値がもつ実在」と言い換えられています）。それは商品が「持つ」ものであるが、しかし「まぼろしのような」ものであり、「亡霊のような」もの「知覚できないもの」と説明されています。「補足と改訂」では「それは、眼に見える商品体の正に反対物」とも言われ、「社会的価値対象性」という用語もでてきます（付属資料参照）。「同じ社会的単位、つまり人間労働の表現である限りでのみ、社会的対象性をもつ」とも言われています。あるいはまた価値対象性は「価値物」とも言われており、価値物としても、やはり「依然としてつかまえないもの」だとも言われています。

そうしてこういう幻のような価値対象性は、しかし商品と商品との社会的関係においてのみ「現われる」ということ。すなわちその「形態」（現象形態）をもつとも言われています。ここから「価値対象性」とは何なのか、どう理解したらよいのか、そしてそれと関連して「価値物」というのも、どのように理解したらよいのか、ということがこのパラグラフの理解と関連して問題になってきます（「価値対象性」と「価値物」とは同じものと考えて良いのか、それともそれは異なるものなのか、異なるならどういう点で異なるのか、云々）。

「対象」というのは、私たちの主観にかわりなく、客観的に実在し、私たちの主体的な働きかけが向けられるものことです。だから「対象性」というのは、そうした実在性と私たちが何らかの働きかけがなしうる性質ということでしょう。商品そのものは一つの客観的に実在するものです。そして商品は使用価値であるとともに価値であるということが分かっています。しかし、使用価値の場合は、目に見えてごわごわしたりギリギリした現物形態を持っていて、一目でそうした対象性はハッキリしていますが、しかし価値の場合は、確かにそれも客観的に実在する商品そのものなかにあり、だから対象的存在ではあるのですが、しかしその対象性はまったく目に見えないものであり、手で触れるものでもないのです。だからそれは、幻のような、亡霊のような、つかまえどころのないものだ、ということなのです。

「価値対象性」というのは、そうした価値の私たちの主体的な働きかけ（認識）から見た性質ということが出来るでしょう。それに対して「価値物」というのは、商品は使用価値としては「物」としての存在は明らかですが、価値としては決して「物」として捉えることは出来ません。「価値」は「物」として「現われて」いないからです。しかし価値が商品に内在するものであるなら、その本質は現象せざるをえず、それはやはり「物」として現われてくるのです。「価値物」というのは、だから価値が「物」として現われたものですが、しかし商品そのものの「物」としての存在は自然的・素材的な存在なのです。しかしそれは商品の使用価値であって価値ではありません。価値には一片の自然素材も含まれていないからです。だから、商品自身の自然素材においては価値は「物」として現れようがないのです。だから一つの商品を見ている限りは、やはり「価値物」としても捉えようがないのです。

だからそうした幻のような対象性が目に見えるようなものとして「現われる」のはどのようにして可能なのか、ということですが、それは価値というのはそもそも社会的なものだから、社会的な関係のなかで、それも現われて来るのだ、実際、私たちは二商品の交換関係から出発して、価値を見いだしたのだから、その現象形態にもどればよいのだ、ということなのです。

■第3パラグラフ

《だれでも、ほかのことは何も知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な現物形態とはきわめて著しい対照をなす共通の価値形態をもっているということは知っている。すなわち、貨幣形態である。しかし、今ここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、すなわち、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純なもっとも目立たない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えうせる。》

そして実際、私たちが日常目にする商品は、確かに使用価値の形態と価値の形態を持っています。この場合の価値の形態というのは、貨幣形態のことです。私たちが店頭に並んでいる品物が商品であるかどうかは、それに値札がついているかどうかで見分けることが出来るでしょう。この値札というのは、実は、その商品の貨幣形態なのです。つまり商品の価値を貨幣で表示したものが、すなわちその値札（価格）なのです。そしてそれが価値が目に見えるものとして現われているものなのです。だから商品は、その目に見える使用価値とともに、値札（価格）という貨幣形態によって自身の価値を目に見えるものとして現すことによって、商品であるという「形態」を持っていることになるのです。だからこそ私たちは、それを一目見れば、「あつ、これは商品だ、売り物だ」とわかるわけです。

これはあまりにもありふれた現実であり、誰でも知っていることです。しかし、今、ここでやろうとしていることは、誰も知らないし、誰も試みたことさえないこと、では、どうして商品は値札をつけているのか、どのようにして値札をつけるようになったのか、値札をつけているということはどういう意味なのか、ということの説明しようということです。それはさまざまな商品の価値関係のなかに含まれている、価値を表現する形態を、そのもっとも単純なものから貨幣形態にいたるまで追跡して初めてわかることなのです。つまりそれはそもそも貨幣というのはどのようにして生まれてきたのか、ということ明らかにすることでもあるのです。それが分かれば、貨幣が持っているさまざまな不思議な力は何にもとづいているのか、そのカラクリが分かるでしょう。

このパラグラフでは、やはり「J」富村さんから「貨幣の謎」の意味が質問されました。ピースさんは「謎というのは、何故、貨幣によって全ての商品が価格表現されているのか」ということではないかと説明しましたが、「J」富村さんあまり納得できない様子でした。この「貨幣の謎」については、これから価値形態を学んでゆく過程で分かってくることなのですが、少しだけ先回りして、紹介することにしましょう。

実は、久留間敏造著『貨幣論』（大月書店1979年刊）のなかで「『貨幣の謎』とはどういうことか？」とそのものズバリの表題がつけられて、かなり詳しい説明があります。それをすべて紹介すると、長くなりすぎるので、その核心部分だけを紹介しますが、是非、各自一度読んでみて欲しいと思います。

〈マルクスが「謎」と言っているのは、等価形態におかれる商品の自然形態が、そして発展すれば金銀の自然形態が、直接的な交換可能性というまったく社会的な性質を生まれながらにして持っているように見える、ということ。〉

■第4パラグラフ

《もっとも単純な価値関係は、明らかに、どんな種類であろうと種類を異にするただ一つの商品に対する一商品の価値関係である。だから、二つの商品の価値関係は、一つの商品にとってのもっとも単純な価値表現を与える。》

だから私たちの出発点は、もっとも単純な価値の関係、つまり二つの商品をそれぞれが持っている価値という側面に関係づけて考えることから始まるのです。この二つの商品の価値関係は、一つの商品の価値のもっとも単純な価値の表現でもあるのです。

とりあえず、本文の説明は以上で終わりです。あとは関連資料を紹介しておきます。

◎関連資料

§§「前文」の諸類型

前文の原型は初版の本文にはなく、付録にある（初版本文とフランス語版には、価値形態への移行規定というべきものがある）。そしてマルクスは、第二版（これが現行版）のための補足と改訂を行い、さらにフランス語版ではわずかだが表現が変わっている。それぞれを全文、この順序で紹介する（太字はマルクスの強調）。

§初版本文とフランス語版の移行規定

《これまではまだ価値の実体と価値の大きさが規定されただけなので、今度は価値の形態の分析の方に方向転換することにしよう。》（初版・国民文庫版40頁）

《いまや、価値の実体と価値量が規定された。まだなお価値形態を分析しなければならない。》（フランス語版・江夏他訳17頁）

§初版付録から

《第1章（一）への付録

価値形態

商品の分析は、商品は一つの二重物、使用価値にして価値である、ということを示した。それだから、ある物が商品形態をとるためには、それは二重形態を、すなわちある使用価値の形態および価値の形態を、もたなければならない。使用価値の形態は、商品体そのものの形態、鉄、リンネル、等々であり、商品体の、手でつかめる感覚的な存在形態である。これこそは商品の現物形態である。これにたいして、商品の価値形態は商品の社会的形態なのである。

ところで、一商品の価値はどのようにして表現されるであろうか？ つまり、価値はどのようにしてそれ自身の現象形態を得るのであろうか？ いろいろな商品の関係によってである。そのような関係のなかに含まれている形態を正しく分析するためには、われわれはその形態の最も単純な未発展な姿から出発しなければならない。一商品の最も単純な関係は、明らかに、なんであるかを問わずただ一つの別の商品に対するその商品の関係である。それだから二つの商品の関係は、一商品のための最も単純な価値表現を与えるのである。》（国民文庫版128-9頁）

§第二版のための「補足と改訂」から

《

[A]

[2] 3) 価値形態または交換価値

p. 764 一つ一つの孤立した商品の価値対象性は見えないままである、なぜならば、それは、眼に見える商品体の正に反対物だからである。諸商品は一般に、それが同じ社会的単位の、つまり人間的労働の表現であるかぎりでのみ、それらの雑多な使用対象性とは異なった社会的価値対象性をもつのである。

[B]

[異文目録参照]

[C]

[3] 3) 価値形態。（注17）

商品は、使用価値または商品体の形態でこの世に生まれてくる。これが商品のありふれた自然形態である。これとは反対に、商品の亡霊のような価値対象性は知覚できない。商品の価値対象

性のなかには、むしろ、諸商品を実感的にお互いに区別している全ての特徴が消え去っている。

[D]

L 商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた自然形態である。とはいえ、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにほかならない。だから、商品は、自然形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言い換えれば、商品という形態をとるのである。

L 商品の価値対象性は、どうつかまえたらいいかわからないことによって、寡婦のクイックリーと区別される。商品体の感性的にぎざぎざした対象性とは正反対に、商品の価値対象性には、一原子の自然素材もはいり込まない。だから、一つ一つの商品を好きだけひねくり回しても、それは価値物としては、依然としてつかまえないものである。とはいえ、商品が価値対象性をもつのは、ただ、それが人間の労働という同じ社会的単位の表現である限りにほかならないこと、それゆえ、商品の価値対象性は純粋に社会的なものであること、を思い出せば、それがただ商品と商品との社会的関係においてのみ現われうるといふことも、おのずから明かである。実際、われわれは、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている諸商品の価値の足跡をさぐりあてた。いまや、われわれは、価値のこの現象形態に立ち返らなければならない。

L だれでも、ほかのことはなにも知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な自然形態とはきわめていじりしい対照をなす一つの共通の価値形態、すなわち貨幣形態をもっているということは知っている。しかし、いまここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、諸商品の価値関係のなかにふくまれている価値表現をそのもっとも簡単なもつともめだたない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで展開することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えうせる。

◇

[10] 3) 価値形態

商品は、一般に、それらが価値関係を取り結ぶ限りにおいてのみ、おたがいに関係を取り結ぶのであるetc

[3] L_p. 764 (++)

[6] 3 価値形態

1) 交換価値として、すなわち、一商品の他の商品に対する関係において。2) すなわち、それが、価値を表現している商品であるのか、あるいはさもなくば、価値が表現されている商品であるのか、によって..... われわれは、いま、価値表現全体の二つの形態——相対的価値形態と等価形態——を、それぞれそれ自体として、より立ち入って考察することとしよう。》(MEM 主義研究第5号/小黒訳/59-61頁)

§現行版から

《第3節 価値形態または交換価値

商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である。けれども、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにほかならない。だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである。

商品の価値対象性は、寡婦のクイックリー〔シェイクスピアの『ヘンリー四世』などの中の人物〕と違って、どうつかまえたらいかだれにもわからない。商品体の感性的にがさがした対象性とは正反対に、諸商品の価値対象性には、一原子の自然素材も入りこまない。だから、一つ一つの商品を好きだけひねくりまわしても、それは、価値物としては、依然としてつかまえないものである。けれども、諸商品が価値対象性をもつのは、ただ、価値対象性が人間の労働という同じ社会的単位の表現である限りにほかならないこと、したがって、商品の価値対象性は純粋に社会的なものであること、を思い出せば、それがただ商品と商品との社会的関係においてのみ現れうるといふことも、おのずから明らかである。実際、われわれは、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている諸商品の価値の足跡を探りあてた。今や、われわれは、価値のこの現象形態に立ちかえらなければならない。

だれでも、ほかのことは何も知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な現物形態とはきわめて著しい対照をなす共通の価値形態をもっているということは知っている。すなわち、貨幣形態である。しかし、今ここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、すなわち

、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純なもっとも目立たない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えうせる。

もっとも単純な価値関係は、明らかに、どんな種類であろうと種類を異にするただ一つの商品に対する一商品の価値関係である。だから、二つの商品の価値関係は、一つの商品にとってのもっとも単純な価値表現を与える。》（全集版64-5頁）

§ フランス語版から

《第三節 価値形態

商品は、鉄やリソネルや羊毛等のような使用価値あるいは商品素材の形態で生まれてくる。これはただちに商品の自然形態であるにすぎない。とはいうものの、商品が商品であるのは、商品が同時に二つの物、すなわち、有用物であるとともに価値の担い手であるからにほかならない。したがって、商品は自然形態と価値形態という二重の形態で現われるかぎりでは、流通のなかに入ることができない。（16）

（16）ペーリのように価値形態を分析しようと試みた少数の経済学者は、どんな結論にも到達することができなかった。第一に、彼らはずねに価値とその形態とを混同するからであり、第二に、彼らはブルジョア的慣行の粗雑な影響のもとで、最初からもっぱら量に心を奪われているからである。「量にたいする支配力が.....価値を構成する」（S・ペーリ『貨幣とその価値変動』、ロンドン、一八三七年、十一ページ）。

商品の価値がもつ実在は、つかみどころがわからないという点では、フォルスタッフ〔シェイクスピアの戯曲『ウィンザーの陽気な女房たち』中の人物〕の女友達である寡婦クウィックリーとはちがっている。商品体のもつかさばりとは極度に対照的に、商品の価値のなかには素材が微塵も入りこんでいない。したがって、一つ一つの商品は、随意にどういじりまわすことができても、価値物としてはどこまでも手ではつかめない。だが、商品の価値には、純粋に社会的な実在のみがあるということ、また、その価値は、それが人間労働という同じ社会的単位の表現であるかぎりでのみ実在があるということ、を想起しよければ、この社会的な実在もまた、社会的な取引においてのみ、ある商品と他の商品との関係においてのみ現われうることが、明らかになる。実際のところ、われわれは、商品の交換価値すなわち交換関係から出発して、そこに隠されている商品の価値の痕跡を発見した。いまわれわれは、この形態—価値は最初この形態のもとでわれわれに姿を現わした—に、立ち戻らなければならない。

ほかのことはなにも知らなくとも、商品が、そのさまざまな自然形態とは最も顕著に対照をなしているような一つの特異な価値形態、貨幣形態をもっていることは、誰でも知っている。ブルジョア経済学がかつて試みなかったことを試みるのが、いま問題なのだ。貨幣形態の発生を提供すること、すなわち、商品の価値関係のなかに含まれている価値表現を、最も単純で最も目立たないスケッチから始めて、万人に一目瞭然なこの貨幣形態にまで発展させることが、問題なのである。それと同時に、貨幣の謎が解決されて消え失せるであろう。

一般的に言って、諸商品は価値関係以外には相互に関係をもたないのであって、最も単純な価値関係は、明らかに、一商品の、どんな種類であれ他の異種の商品にたいする価値関係なのである。したがって、二商品の価値関係あるいは交換関係は、一商品にたいして最も単純な価値表現を提供する。》（江夏他訳/法政大学出版局/17-8頁）

§§ その他の文献

以下は、この前文を理解する上で、一つの参考になるかも知れないというものを紹介しておく。

§ モスト『資本論入門』から

この前文の最後の部分と「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」とも若干、関連すると思える。またここに出てくる「価値物」がどのように説明されているかにも注目。

《さてここで交換価値に、つまり諸商品の価値が表現されるさいの形態に、立ち戻ろう。この価値形態は生産物交換から、また生産物交換とともに、しだいに発展してくる。

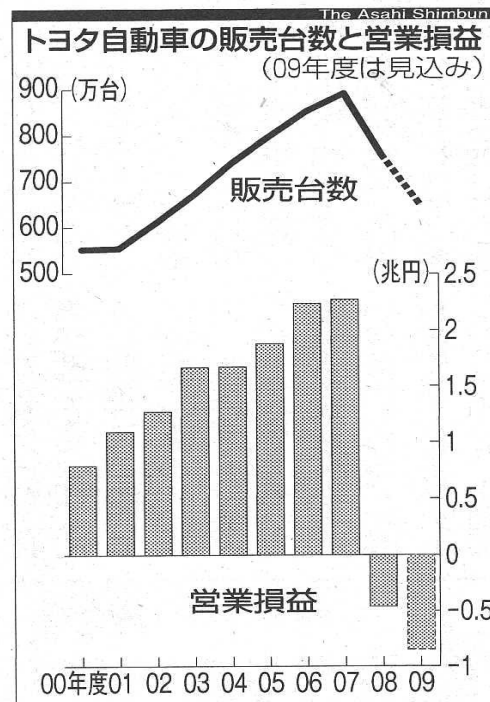
生産がもっぱら自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど余剰分をもっているようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。たとえば毛皮が塩と、しかもまず最初はまったく偶然的なもろもろの比率で交換される。この取引がたびたび繰

り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かに決められるようになり、一枚の毛皮はある一定量の塩とだけ交換されるようになる。生産物交換のこの最も未発展の段階では、交換者のそれぞれにとって、他の交換者の財貨が等価物として役立っている。すなわち、それ自体として彼の生産した財貨と交換可能であるばかりでなく、彼自身の財貨の価値を見えるようにする鏡でもあるような、価値物として役立つのである。》（大谷訳/岩波書店/10頁）

『資本論』を読んでみませんか



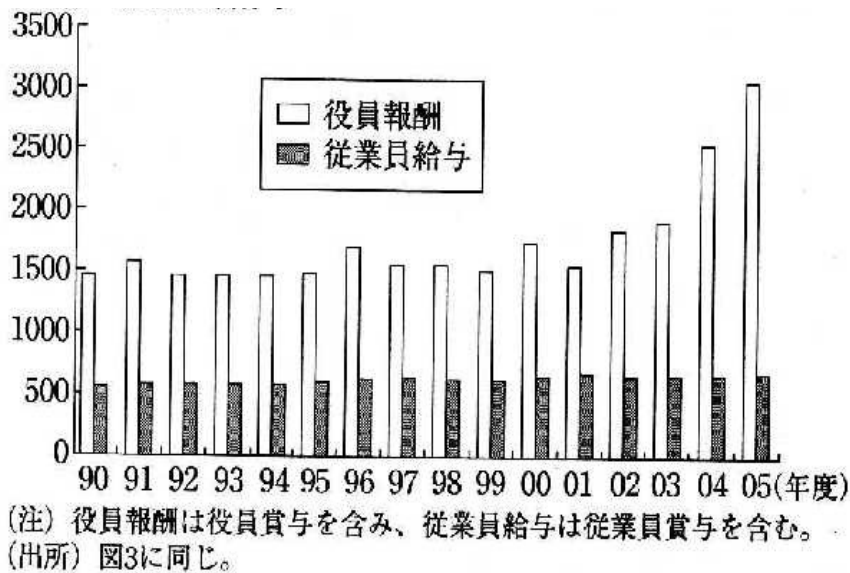
6月26日に上場企業の株主総会がピークを迎え、業績悪化による赤字決算や減配に、トヨタ自動車の豊田章男社長をはじめ、経営者はひたすら頭を下げる「おわび総会」になっていると新聞は報じている。90年代の半ばごろから「株主資本主義」ということが言われ、先行するアメリカにならって「コーポレート・ガバナンス（企業統治）」が声高に言われはじめた。つまり、株主が企業経営に注文をつけ、高配当、高株価を要求する「ものいう株主」のことである。今回の株主総会でも、怒号が飛び交う一幕もあったと新聞は報じている。



(09年6月26日『朝日』より)

「株主資本主義」のもとで、法人企業の配当率と役員報酬（そして内部留保）だけが增大する一方で、労働分配率の顕著な低下が進み、非正規や派遣労働者の割合が増えてきた。例えば、02年から07年の全法人企業の支配配当総額は5兆円から15兆円と3倍にもなり、一人当たりの役員報酬も1800万円から3000万円へと増大しているのに、従業員給与はほぼ500万円の横ばいである。総務省の「労働力調査」によれば、非正規雇用労働者は98年の881万人から08年の1760万人に、派遣労働者は98年の90万人から07年の381万人へと増えている。

図5 製造業大企業における一人当たりの役員報酬と従業員給与 (万円)



(『経済』09年7月号より)

「株主資本主義」の下で、労働者への搾取が徹底して強化されてきたことは確かである。しかし注意しなければならないのは、問題は「株主資本主義」にあるのではないということである。「株主資本主義は、配当の増加や株価の上昇を意図して、企業に対してコスト削減による利潤の増大を求める」(同上『経済』12頁)と言われるが、しかしこうした傾向は資本主義に固有のものであり、何も「株主資本主義」だからそうであるというわけではない。だからまた「株主資本主義」を改めれば、あるいは「株主資本主義に門(かんぬき)をかけ」(同26頁)ればよいという問題でもないのだ。問われているのは資本主義そのものである。マルクスは「株式会社の形成」の意義について次のように述べている。

《 2それは、資本主義的生産様式そのものの限界のなかでの、私的所有としての資本の廃止である。

3このような、資本主義的生産の最高の発展の結果こそは、資本が生産者たちの所有に、といってももはや個々別々の生産者たちの私有としてのではなく、結合された生産者である彼らの所有としての、直接的社会所有としての所有に、再転化するための必然的な通過点なのである。それは、他面では、これまではまだ資本所有と結びついている再生産過程上のいっさいの機能が結合生産者たちの単なる機能に、社会的機能に、転化するための通過点なのである。》(全集25a557頁)

まさに株式資本主義はこうした意味で、ますます将来の生産に近づけば近づくほど、その資本制的形態との矛盾を深め、労働者階級との軋轢を深めるのであるが、それ自体が将来の社会への主体的準備の一条件でもあるのである。

貴方も現代の高度に発達した資本主義社会を読み解くためにも、ともに『資本論』を読んでみませんか。

第14回「『資本論』を読む会」の報告

◎子供たちには楽しい夏休みだが

猛暑日が続く、7月19日に、第14回「『資本論』を読む会」が開催されました。今年は3連休が入るために、ちょっと早い夏休みでしたが、さっそく暑さもウナギのぼりで、老体にはなかなか厳しい季節ではあります。しかし会場の堺市立南図書館は冷房が効きすぎるぐらいで、タダで使わせてもらい、ありがたいことです。

今回は、「第3節 価値形態または交換価値」の本題に入り、「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」の「1 価値表現の両極——相対的価値形態と等価形態」だけをやりました。さっそく、その報告をやりましょう。

◎「偶然的な」とは何か？

まず問題になったのは、表題の「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」そのものでした。ここで「簡単な」「個別的な」というのは分かるが、「偶然的な」というのは、あたかも二つの商品が偶然に物々交換されているケースであるかに捉えられるが、そうではなく、例として上げられている2商品は資本主義的生産を前提にした商品を資本主義的関係を捨象して取り出されたものだ、とレポーターのピースさんが説明したのが切っ掛けでした。

それに対して、そもそもこの表題はエンゲルスの手による第4版にもとづくもので、マルクス自身のものには、こうした表題が見られないとの指摘がありました。マルクス自身が書いた表題には、次のようなものがあります。

- 初版本文——《I 相対的な価値の第一の、または単純な、形態》
- 初版付録——《I 単純な価値形態》
- 第2版——《A 単純なあるいは単一の価値形態》（江夏美千穂訳24頁）
- フランス語版——《A 単純な、あるいは偶然的な価値形態》（江夏他訳18頁）

つまりエンゲルスは第2版とフランス語版をミックスして、この表題を現行のように改めたと思われます。上記の表題のなかで、「単純」で、「第一の」ものであり、「個別的な」あるいは「単一の」ものであることは分かるが、「偶然的な」ものであるとはどういうことが改めて問題になりましたが、これは少し先走りますが、例えば、《B 全体的な、または展開された価値形態》の《1 展開された相対的価値形態》の最後のあたりに、次のような一文があることが紹介されました。

《第1の形態、20エレのリンネル＝1着の上着 では、これらの二つの商品が一定の量的な割合で交換されうるということは、偶然的事実でありうる。これに反して、第二の形態では、偶然的現象とは本質的に違ってそれを規定している背景が、すぐに現われてくる。》云々。

この理解について、「偶然的」なのは「量的な割合」についてではないか、との意見もありましたが、そうではなく一定の量的割合も含めて二つの商品が交換されるということ自体も偶然的事実として説明されているのではないか、それ

に対して《全体的な、展開された価値形態》では、そうした《偶然的現象とは本質的に違ってそれを規定している背景》があることを指摘している、ということになりました。

またフランス語版の《C 一般的価値形態》の《(b) 相対的価値形態と等価形態との発展関係》には、次のような一文があります。

《一商品の単純なあるいは単独な相対的価値形態は、なんらかのほかの一商品を偶然的な等価物として前提している。発展した相対的価値形態、他のすべての商品においての一商品のこうした価値表現は、他のすべての商品全部にいろいろな種類の特殊な等価形態を押しつける。》（前掲訳41頁）

だからやはり「偶然的な」というのは、リンネルの相対的価値を表す等価物が上着であるかどうかは偶然であって、それは別のどの商品でもよいという含意であろう、という結論になりました。

◎2商品の等式について

さて、上記の表題の次にあるのは、次のような等式です。

《x量の商品A = y量の商品B または、x量の商品Aはy量の商品Bに値する。 (20エレのリンネル = 1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する)》

この等式についてJJ富村さんから、「実は以前から疑問に思っていたのだが.....」と次のような疑問が出されました。数学では「=」の説明として、次の三つの条件を満たすことが要求されるということです。

- (1) 「A = A」
- (2) 「A = B」 → 「B = A」
- (3) 「A = B」、「B = C」 → 「A = C」

しかし、2商品の単純な等式は(2)や(3)は否定されているように思うのだが、どう考えたら良いのか、ということです。それに対してピースさんは、(2)も(3)も商品の価値の関係としては成り立っているが、価値の表現としてはそれは別の表現になると言っているのではないかと指摘がありました。また亀仙人は初版付録では、次のような一文があると紹介しました。

《相対的価値と等価物とは両方ともただ商品価値の諸形態であるにすぎない。いま、ある商品が一方の形態にあるか、それとも対極的に対立した形態にあるか、ということは、もっぱら、価値表現におけるその商品の位置によって定まるのである。このことは、われわれによってここでまず第一に考察されている単純な価値形態において明確に現われる。内容から見れば、両方の表現、 1 20エレのリンネル = 1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、と 2 1着の上着 = 20エレのリンネル または、1着の上着は20エレのリンネルに値する、とは、けっして違ってはいない。形式から見れば、それらはただ違っていただけではなくて、対立している。》（国民文庫版132-3頁）

つまりここではA = BとB = Aの二つの等式について、「内容から見れば、両方の表現.....は、決して違っていな

い」と説明され、ただ「形式から見れば、それらはただ違っているだけではなくて、対立している」と説明されている、と。

◎「価値形態の分析には固有な困難がある」とは？

等式のあとには小見出し《1 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態》があり、そのあと最初のパラグラフがあります。まずパラグラフ全体を紹介しておきましょう。

《すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある。》

まず、初版付録やフランス語版では、この一文は等式のすぐあと小見出しの前にあることが指摘されました。また初版本文では、小見出しはなく、等式が示されたあと、その分析の困難さが、次のように指摘されていることも紹介されました。

《この形態は、それが単純であるがゆえに(16)、分析するのが困難なものである。そのなかに含まれている異なった諸規定は、隠されており、未発展であり、抽象的であって、そのためにただ抽象力のいくらかの緊張によってのみ識別され、確認されうるものである。しかし、次のことだけは、一見して明らかである。すなわち、20エレのリンネル=1着の上着 であろうと、20エレのリンネル=x着の上着 であろうと、形態は同じままである、ということである(17)。

(16) それは、いわば貨幣の細胞形態である。または、ヘーゲルならば言うであろうように、貨幣の即自態〔das Ansich〕である。

(17) J・ベーリのように価値形態の分析に携わってきた少数の経済学者たちが少しも成果をあげることができなかったのは、一つには彼らが価値形態と価値とを混同しているからであり、第二には、彼らが、実際的なブルジョアたちの粗雑さの影響のもとにあって、はじめからもっぱら量的な被規定性だけに着目しているからである。「量にたいする支配が……価値である。」(『貨幣とその価値の転変』、ロンドン、1837年、11ページ。)著者はJ・ベーリ。》(国民文庫版43-4頁)

また価値形態の分析の困難さについては、初版序文や当時のマルクスがエンゲルスと交わした書簡のなかにも次のようなものがあることが紹介されました。

●初版序文から

《なにごととも初めがむずかしいということは、どの科学にもあてはまる。だから、第一章、ことに商品の分析を含む節を理解することは、最大の難関になるであろう。価値実体と価値量の分析についてさらに詳しく言うと、私はこの分析をできるだけ万人向きのものにした(1)。価値形態の分析はそうはゆかない。このほうの分析は難解である。なぜなら、弁証法が、前者の叙述(『経済学批判』のことー引用者)のばあいよりもはるかに鮮明だからである。だから、弁証法的な思考に全く不慣れな読者に、私は次のことをすすめておく。すなわち、15ページ(上から19行目)から34ページ末行までの部分はすっかり省いたまま読まずに、その代わりに、本書に追補してある付録「価値形態」を読む、ということ。この付録では、問題の科学的な把握が許すかぎりでの問題を単純にまた教師風にさえ叙述することが、試みられている。付録を読み終わってから、読者は本文に戻って35ページから読み続ければよい。

(1) このことがなおさら必要だと思われるのは、シュルツエーデーリッチに反対したF・ラサールが彼の著書のなかで、上記の題目にかんしての私の説明の「精神的核心」を与えていると明言している一節でさえも、重大な誤解を含ん

でいるからである。ついでに言うておこう。F・ラサールは、たとえば資本の歴史的な性格、生産関係と生産様式との関連等々にかんする、彼の経済学上の労作のすべての一般的な理論的命題を、ほとんど一語一語たがわず、私が作り出した術語にいたるまで、私の著書から、しかも出所も示さずに借用したのであるが、こうしたやり方がなされたのは、おそらく宣伝上の考慮からであろう。もちろん、私が言うのは、彼のやっている細部にわたる論述や応用のことではないのであって、それらは私にはなんの関係もないことである。

価値形態——その完成した姿が貨幣形態である——は、きわめて無内容で単純である。それにもかかわらず、人間精神は二千年以上も前からその究明にむなしい努力をはらってきたが、他方、これよりもはるかに内容豊富で複雑な諸形態の分析は、少なくともだいたいのところまでは成功をおさめた。なぜか？ 発育した身体は身体細胞よりも研究しやすいからである。その上、経済的諸形態の分析にさいしては、顕微鏡も化学試薬も役に立つことができない。抽象力が両者の代わりをしなければならない。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態あるいは商品の価値形態が、経済的な細胞形態である。教養のない者には、この形態の分析は、あちこちと細事のせんさくだけをやっているように見える。このばあいにはじっさい細事のせんさくが問題になるのだが、このことは、微細にわたる解剖ではこのようなせんさくが問題になると全く同じことである。》(初版前掲訳書9-11頁)

●マルクスからエンゲルスへの書簡(1867年6月22日)から

《そのうえ、この問題はこの本全体にとってあまりにも決定的だ。経済学者諸氏はこれまで次のようなきわめて簡単なことを見落としてきた。すなわち、20エレのリンネル=1枚の上着、という形態は、ただ、20エレのリンネル=2ポンド・スターリングという形態の未発展の基礎でしかないということ、したがって、商品の価値をまだ他のすべての商品にたいする関係としては表わしてはいないでただその商品自身の現物形態とは違うものとして表わしているだけの、最も簡単な商品形態が、貨幣形態の全秘密を含んでおり、したがってまた、労働生産物のいっさいのブルジョア的な形態の全秘密を縮約して含んでいる、ということがそれだ。僕は最初の叙述(ドゥンカー)では(『経済学批判』のこと——引用者)、価値表現の本来の分析をそれが発展して貨幣表現として現われてからはじめて与えるということによって、展開の困難を避けたのだ。》(全集31巻256-7頁)

さらに初版付録の最後の項目は《単純な商品形態は貨幣形態の秘密である》というものであり、そこには次のような一文が見られる、と紹介がありました。

《貨幣形態の概念における困難は、一般的な等価形態の、したがって、一般的な価値形態一般の、形態IIIの、理解に限られる。しかし、形態IIIは、逆関係的に形態IIに解消し、そして、形態IIの構成要素は、形態I、すなわち20エレのリンネル=1着の上着 または、 x 量の商品A= y 量の商品B である。そこで、使用価値と交換価値とがなんであるか、を知るならば、この形態Iは、任意の労働生産物たとえばリンネルを、商品としてすなわち使用価値と交換価値という対立物の統一として、表示する最も単純で最も未発展な仕方である、ということがわかる。そうすれば、同時に、単純な商品形態 20エレのリンネル=1着の上着 が、その完成した姿、20エレのリンネル=2ポンド・スターリング すなわち貨幣形態を獲得するために通らなければならない諸変態の列も容易に見いだされるのである。》(国民文庫版170-1頁)

◎「等価物」とは？

次は第2パラグラフです。これもまず全文紹介しておきます。

《ここでは二つの異種の商品AとB、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役だっている。第一の商品は能動的な

、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表わされる。言いかえれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言いかえれば、その商品は等価形態にある。》

ここから単純な価値形態、先に例示した等式の具体的な分析が始まっています。しかしマルクスは等式では表示されていた、「x量」「y量」、「20エレ」「1着」という2商品の量的な関係は問題にはせずに、考察を開始しています。そしてまず単純な価値表現において、二つの商品が演じる役割の違いを指摘します。それは表にしますと次のようになります。

| | | |
|-------------------|-------------------------------------|--|
| 2商品 | 商品A | 商品B |
| | リンネル | 上着 |
| | 第1の商品 | 第2の商品 |
| 演じる役割 | 自分の価値を自分とは違った別の商品体である上着で表現している商品である | それにおいて価値が表現される材料として役立っている（価値表現の材料として役立つ） |
| | 能動的な役割 | 受動的な役割 |
| それぞれの役割から受ける形態規定性 | 商品の価値を相対的価値として表している | 等価物として機能する |
| | 相対的価値形態 | 等価形態 |

ここで、「等価物として機能する」とありますが、「等価物」というのはどういうことかという疑問が出されました。所沢の「『資本論』を読む会」でも同じ質問が出され、〈「等しい価値を持つ物ということだろう」という結論になりました〉と報告されています（<http://shihonron.exblog.jp/9825135/>）。確かにこの時点ではそうした説明で良いのだろうと思いますが、初版本文には次のような一文があると紹介がありました。

《上着でのリンネル価値の表現は、上着そのものに、ある新しい形態を極印している。じっさい、リンネルの価値形態はなにを意味しているか？ 上着がリンネルと交換可能であるということである。上着はいまや、そのあるがままの姿をもって、上着というその現物形態において、他の商品との直接的な交換可能性の形態、交換可能な使用価値あるいは等価物の形態をもっているのである。等価物という規定は、ある商品が価値一般であるということを含んでいるだけではなく、その商品が、その物的な姿において、その使用形態において、他の商品に価値として認められており、したがって、直接に、他の商品にとっての交換価値として現存している、ということをも含んでいる。》（夏目訳34-36頁）

◎不可分性と対極性

次は第3パラグラフです。

《相対的価値形態と等価形態とは、互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な契機であるが、同時にまた、同じ価値表現の、互いに排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。この両極は、つねに、価値表現によって互いに関係させられる別々の商品のうえに分かれている。たとえば、リンネルの価値をリンネルで表現することはできない。**20エレのリンネル=20エレのリンネル** はけっして価値表現ではない。この等式が意味しているのは、むしろ逆のことである。すなわち、**20エレのリンネルは20エレのリンネルに**、すなわち一定量の使用対象リンネルに、ほかならないということである。つまり、リンネルの価値は、ただ相対的にしか、すなわち別の商品でしか表現されえないので

ある。それゆえ、リンネルの相対的価値形態は、なにか別の商品がリンネルにたいして等価形態にあるということを前提しているのである。他方、等価物の役を演ずるこの別の商品は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それは自分の価値を表わしているのではない。それは、ただ別の商品の価値表現に材料を提供しているだけである。》

ここでは二つの商品がとっている相対的価値形態と等価形態というのが、どういう関係にあるのかを見ています。それは同じ一つの価値表現のなかの二つの形態という意味で、「互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な」関係にあるが、同時に「同じ価値表現の、互いに排除しあう、または対立する両端、両極」だと説明されています。初版付録では、この部分は細分されて、次のように説明されています。

《いま、さらに詳しく分析しなくても、次の諸点ははじめから明らかである。

a 両形態の不可分性。

相対的価値形態と等価形態とは、同じ価値表現の、互いに属し合い互いに制約し合っている不可分な諸契機である。

b 両形態の対極性。

他方では、この両形態は、同じ価値表現の、互いに排除し合う、または対立し合う両端、すなわち両極である。それらは、つねに、価値表現が互いに関係させる別々の商品のうえに分かれている。たとえば、私はリンネルの価値をリンネルで表現することはできない。**20エレのリンネル=20エレのリンネル**は、けっして価値表現ではなくて、ただ一定量の使用対象リンネルを表現しているだけである。つまり、リンネルの価値は、ただ別の商品でしか、すなわちただ相対的にしか、表現されえないのである。だから、リンネルの相対的価値形態は、なんらかの別の商品がリンネルにたいして等価形態にある、ということを前提しているのである。他方、リンネルの等価物として現われ、したがって等価形態にあるところの、この別の商品、ここでは上着は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それはその価値を表現しはしない。それはただ他の商品の価値表現に材料を提供しているだけである。》（国民文庫版130-1頁）

ここで《**20エレのリンネル=20エレのリンネル**》という例が持ち出されているが、これは先に等式のところで議論した「(1)A=A」に該当するが、どうしてこれが持ち出されているのだろうか、ということが問題になりました。等式としてはマルクスも「(1)A=A」がありうることを認めているが、しかしそれは「価値表現」ではないと排除しているのではないかということになりました。

だから「両形態の対極性」には(1)互いに排除し合う関係、(2)または対立し合う両端、両極という意味と、さらに(3)「つねに、価値表現が互いに関係させる別々の商品のうえに分かれている」という意味もあり、(4)一方の商品が相対的価値形態にある場合は、他方の商品は等価形態にあるということ、(5)等価形態にある商品は、同時に相対的価値形態にあることは出来ない、(6)つまりそれ自身の価値を表現することは出来ない、ということを含んでいるという指摘がありました。

◎逆関係

次は第4パラグラフです。

《もちろん、**20エレのリンネル=1着の上着** または、**20エレのリンネルは1着の上着に値する**という表現は、**1着の上着=20エレのリンネル** または**1着の上着は20エレのリンネルに値する**という逆関係を含んでいる。しかし、そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そして、そうするやいなや、上着に代わってリンネルが等価物になる。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われることは

できないのである。この両形態はむしろ対極的に排除しあうのである。》

これも両形態の対極性の説明の続きと考えられます。「逆関係」はフランス語版では「逆の命題」とされています。同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われることが出来ないこと、だから両形態は互いに排除し合うことが説明されています。初版付録もほぼ同じような内容です。ただ初版付録には、このあとに次のような説明が続くのです。

《そこで、われわれはリンネル生産者Aと上着生産者Bとのあいだの物々交換を考えてみよう。彼らが取引で一致するまえには、Aは、20エレのリンネルは2着の上着に値する（20エレのリンネル＝2着の上着）、と言い、これにたいして、Bは、1着の上着は22エレのリンネルに値する（1着の上着＝22エレのリンネル）、と言う。最後に、長いあいだ商談したあげく、彼らは一致する。Aは、20エレのリンネルは1着の上着に値する、と言い、Bは、1着の上着は20エレのリンネルに値する、と言う。この場合には、両方とも、リンネルも上着も、同時に相対的価値形態にあるとともに等価形態にある。だが、注意せよ、それは二人の別々の個人にとってのことであり、また、二つの別々な価値表現においてのことなのであって、それらがただ同時に現われるだけのことなのである。Aにとっては、彼のリンネルは、――というの**は**彼にとってイニシアチブは彼の商品から出ているのだから――相対的価値形態にあり、これにたいして、相手の商品、上着は、等価形態にある。Bの立場からすれば、これとは逆である。だから、同じ商品はどんな場合にも、この場合にもやはり、同じ価値表現において両方の形態を同時にもっていることはないのである。》（前掲国民文庫版131頁）

ここでは「リンネル生産者A」と「上着生産者B」と、「生産者」が登場し、しかも両者のあいだにおける「物々交換」が問題になっています。もちろん、「物々交換」とはいうものの、二つの商品が交換されるまでの商談による両者の最終的な合意までで、交換のための準備の段階だとも言えます（だからこそ、それは価値表現の問題なわけです）。ここで生産者が登場するのも、最終的に商談が一致するまでであって、一致した段階では、やはり商品が主体になっています。だから最終的には当初に掲げている等式と同じ前提になっていると考えることが出来ます。そしてここでも、最終的に言いたいことは《同じ商品はどんな場合にも、……同じ価値表現において両方の形態を同時にもっていることはない》ということなのです。ただ物々交換が一つの例として持ち出されていることは、注目される、という指摘がありました。

◎価値表現での商品の位置が問題

次は第5パラグラフです。

《そこで、ある商品が相対的価値形態にあるか、反対の等価形態にあるかは、ただ、価値表現のなかでのこの商品のそのつどの位置だけによって、すなわち、その商品が、自分の価値を表現される商品であるのか、それともそれで価値が表現される商品であるのかということだけによって、定まるのである。》

この部分は初版付録では、次のような一つの項目が立てられ、最初の等式の説明のときに、紹介した詳しい説明があるのです。重複しますが、もう一度、全体を紹介しておきましょう。

《c 相対的価値と等価物とはただ価値の諸形態であるにすぎない。

相対的価値と等価物とは両方ともただ商品価値の諸形態であるにすぎない。いま、ある商品が一方の形態にあるか、それとも対極的に対立した形態にあるか、ということは、もっぱら、価値表現におけるその商品の位置によって定まるのである。このことは、われわれによってここでまず第一に考察されている単純な価値形態において明確に現われる。内容から見れば、両方の表現、

- 1 20エレのリンネル＝1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、と
- 2 1着の上着＝20エレのリンネル または、1着の上着は20エレのリンネルに値する、とは、けっして違って

はない。形式から見れば、それらはただ違っているだけではなくて、対立している。表現1においてはリンネルの価値が相対的に表現される。それだから、リンネルは相対的価値形態にあるのであるが、他方、同時に、上着の価値は等価物として表現されている。それだから、上着は等価形態にあるのである。いま、私が表現1を逆にするならば、私は表現2を得る。両商品は位置を取り替えるのであって、すると、たちまち上着は相対的価値形態にあり、これにたいしてリンネルは等価形態にある。両商品は同じ価値表現におけるそれぞれの位置を取り替えたので、両商品は価値形態を取り替えたのである。》（国民文庫版131-3頁）

なおフランス語版にはこのパラグラフに該当するものではありません。

『資本論』を読んでみませんか



今年の夏は、何かおかしい。

すでに8月の声も聞こうかというのに、いまだに梅雨前線が日本列島に居すわって、各地でゲリラ的な集中豪雨をもたらし、突風、竜巻まで引き起し、十数人ももの死者など甚大な被害を与えている。日照時間の少なさから北海道ではジャガイモなど根菜類の収穫が遅れ、野菜の値上がり報じられている。これもやはり地球規模の環境破壊の影響であろうか。

最近の新聞（「朝日」7月30日夕刊）でも、ヒマラヤの氷河が1984年撮影のものと2004年撮影のものと二つの写真が比較されていたが、氷河が急速に溶けだしていることが、視覚的に確認された。

1984年撮影

ブータン北部の氷河＝京都大学
山岳部提供



2004年撮影

末端の氷が解けて、大きな湖が
出現した＝名古屋大学提供



地球環境の異変が叫ばれてすでに久しいが、しかしこうした地球規模による環境の破壊や異変の根本原因が資本主義的生産様式そのものにあるということは、あまり指摘されたことはない。

マルクスは、人間の生産活動を生物学の用語を使って「社会的物質代謝」と規定している。人間は労働によって自然から有用物を取り出し摂取し、不要なものを自然に返す代謝活動を社会的に行なっている。だから社会にとって有用なものを生産するために、社会の総労働を必要な生産分野に配分しなければならないが、しかし人間はそれを意識的に行なっているわけではない。個々の生産分野はそれぞれ独立に私的な利害にもとづいて行なわれながら、その生産物を商品として交換することで、彼らの生産の社会的な結びつきを実現しているのである。だからどの分野にどれだけの労働を配分するかは、商品の交換の結果として決まってくるだけである。

だから人間は、彼らの社会的物質代謝を自分たちの意識のもとにコントロールしているのではなくて、反対に社会的物質代謝の諸法則は、一つの“自然法則”として、人間を支配し統制する経済的な諸法則という形で立ち現れているのである。人間がそれらの諸法則に翻弄されていることは、今日の深刻な経済恐慌が私たちに何をもたらししているかを考えてみれば、明らかである。

しかも資本主義的生産においては、個々の生産は集中・集積され、ますます大規模に徹底的に組織的に行なわれながら、しかし社会的には私的な生産でしかなく、依然として生産物は商品として交換されている。個々の資本は利潤を唯一の推進動機として猛烈な競争によって生産力を飛躍的に高める一方で、生産の社会的結びつきは、ただ商品交換を通じた偶然的な諸結果にまかせるしかない生産様式なのである。

だから個々の資本はただ儲けることを最大の目的にし、社会全体のことを考えて生産するわけではない。ましてや地球規模の社会的物質代謝を考慮して生産することはできない。高度に発達した現代の物質的生産力は、豊かな富を生み出す一方で、社会的に統御されないために、地球環境には盲目的に作用して、それを破壊する。これが今日の地球規模の環境破壊や異変の本当の原因なのである。

マルクスは将来の社会ではこうした社会的物質代謝を意識的な統制のもとにおく必要があると、次のように述べている。

《社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。》(『資本論』第3部、全集版25 b 1051頁)

人類が当面する地球規模の危機も、資本主義的生産様式が歴史的に克服される必要があることを示している。『資本論』はそうした人類史の壮大な歴史観にもとづいた科学的な経済書である。貴方も一緒にそうした『資本論』を読んでみませんか。

第15回「『資本論』を読む会」の報告

◎お盆休みの最終日

第15回「『資本論』を読む会」はお盆休みの最終日になる8月16日に開催されました。

図書館は開いていましたが、3階の集会室はわれわれ以外は誰も使っておらず、閑散としていました。

泉が丘駅前では、行きは自民党、帰りは共産党と、公示を前にそれぞれ候補者本人が来て挨拶し、ビラを配布していました。改革クラブも宣伝カーで回っていました。ビラを見ると、自民党は「責任力」が謳い文句。何でも「力」をつけて良いなら、民主党はせいぜい「バラマキ力」、公明党は「変節力」、共産党は「ルール力」、社民党は「護憲力」でしょうか。選挙は30日。果たして政権交代はなるのでしょうか。

◎「相対的価値形態の内実」

今回は、「第3節 価値形態または交換価値」の「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」の「2 相対的価値形態」の「a 相対的価値形態の内実」の最初からはじめたのですが、結局、たった三つのパラグラフを進んだだけでした。

これはお盆だから、簡単に切り上げたからではなく、それだけ議論が紛糾したからなのです。とにかくパラグラフごとに紹介してゆきましょう。

しかしパラグラフに移る前に、まず表題についてです。表題はそこでの課題を明らかにしていますから、それをまず見ておきましょう。

《 2 相対的価値形態 》

これは《 1 価値表現の両極——相対的価値形態と等価形態 》で、20エレのリンネル＝1着の上着（ x 量の商品A＝ y 量の商品B）という等式のうち、その価値を表す商品20エレのリンネルは、自らの価値を別の商品である1着の上着で相対的に表しており、その場合は、リンネルは「相対的価値形態」にあると説明されていました。その「相対的価値形態」が、つまりリンネルの「価値」が「相対的」に表される「形態」が、まず考察の対象にされるというわけです。

《 a 相対的価値形態の内実 》

これは「相対的価値形態」として、まずその「内実」(Inhalt・内容)を問題にするということです。興味深いことに、初版付録では、この部分はさらに次のような小見出しに細分されていることです。

- a 同等性関係
- b 価値関係
- c 価値関係のなかに含まれている相対的価値形態の内実

つまり現行版の表題は、初版付録の三つ目の表題に一致していると考えられます。現行版は初版付録と比べても、この項目は厳密化されて膨らんでいますから、現行版の「a 相対的価値形態」の最初の数パラグラフは、内容的には、初版付録の「a 同等性関係」と「b 価値関係」に該当すると考えてよいでしょう。私の考えでは、これは第1・3パラグラフがそれに当たるのではないかと考えています。しかしそれはそれぞれのパラグラフを詳しく見ていくなかで考えることにしましょう。

◎価値関係に価値表現が潜んでいるとは？

それでは、次は、第1パラグラフに移ります。

《ある一つの商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちにどのように潜んでいるかを見つけだすためには、この価値関係を、さしあたりその量的関係からまったく独立に、考察しなければならない。人は、たいてい、これと正反対のことを行っており、価値関係のうちに、二種類の商品の一定量同士が等しいとされる割合だけを見ている。その場合、見落とされているのは、異種の物の大きさは、それらが同じ単位に還元されてはじめて、量的に比較されうるものとなるということである。それらは、同じ単位の諸表現としてのみ、同名の、したがって通約可能な大きさなのである(17)。》

最初に、先にも紹介しましたが、「初版付録」と「補足と改訂」および「フランス語版」では、この部分はどうなっているのかをみておくことにしましょう。

《《初版付録》

〈a 同等性関係 自分の価値を表現しようとするものはリンネルなのだから、リンネルのほ
うかちイニシアチブは出ている。リンネルは、上着にたいして、すなわち、なんらかの別な、リ
ンネル自身とは種類の違う商品にたいして、ある関係にはいる。この関係は等置の関係である。
20エレのリンネル=1着の上着という表現の基礎は、事実上、リンネル=上着であって、これは

、言葉で表わせば、ただ、商品種類上着は、自分とは違う商品種類リンネルと同じ性質のもの、同じ実体のものである、ということではない。人々はたいていはこのことを見落とすのであるが、そのわけは、注意が、量的な関係によって、すなわち、一方の商品種類が他方の商品種類と等置されている特定の割合によって、奪われてしまうからである。人々が忘れてるのは、違う諸物の大きさは、それらが同じ単位に換算されたのちに、はじめて量的に比較されうる、ということである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、それらは同じ分母の、したがってまた通約可能な大きさなのである。だから、前述の表現では、リンネルが自分と同じものとしての上着に関係するのであり、言い換えれば、上着が同じ実体の、同じ本質の物としてのリンネルに関係させられるのである。だから、上着はリンネルに質的に等置されるのである。〉（国民文庫版133-134頁）

《補足と改訂》

〈

[A]

ある一つの商品、たとえばリンネル、の相対的価値表現——20エレのリンネル＝1着の上着すなわち20エレのリンネルは1着の上着に領する——において、人は、たいてい、量的な関係だけを、すなわちある商品が他の商品と等しいとされる一定の割合だけを、見ようとする。その場合、見落とされているのは、異なった物の大きさは、それらが同じ単位に還元されてはじめて、量的に比較されうるものとなるということである。それらは、同じ単位のもろもろの表現としてのみ、同名の、それゆえ同じ単位で計量されうる大きさなのである。

[B]

ある一つの商品の簡単な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのようになっているかを見つけ出すためには、この価値関係を、さしあたりその量的関係からまったく独立に、考察しなければならない。人は、たいてい、これと正反対のことを行っており、価値関係のうち、二種類の商品の一定分量どうしが等しいとされる一定の割合だけを見ている。その場合、見落とされているのは、異なった物の大きさは、それらは同じ単位に還元されて〈Zrückführung〉はじめて、量的に比較されうるものとなるということである。それらは、同じ単位のもろもろの表現としてのみ、同名の、それゆえ同じ単位で計量されうる大きさなのである。〉（『補足と改訂』前掲61-63頁）

《フランス語版》

〈一商品の単純な価値表現がどのように二つの商品の価値関係のうちに含まれているか、を見つけ出すためには、まず、この価値関係を、その量的な側面は無視して、考察しなければならない。一般に行なわれているのはこれと逆のことであって、価値関係のうち、二種の商品の一定量が相互に等しいと表わされている割合を、もっぱら考察するのである。相異なる物は、同じ

単位に換算されたのちにはじめて量的に比較しうることが、忘れられている。ただそのばあいだけに、これらの物は同じ分母をもち、通約可能になる。〉（前掲19-20頁）

さて、ここで問題になったのは冒頭の《ある一つの商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのように潜んでいるか》という部分でした。

これを見ると、価値表現は価値関係のなかに「潜んでいる」と読めるが、両者の関係はどういうものか、そもそも価値関係とは何か、交換関係とはどう違うのか、そして価値表現が「潜んでいる」ということは、そのなかに隠れているということか、とするなら価値関係は一見すると見えている（明らかである）ことになるのか、そして価値表現はそうではなくてそこに隠されているということか、等々と、それはそれは、大変な議論が、例によってJJ富村さんなどから次々と出されて、紛糾しました。順序を追って考えてゆきましょう。

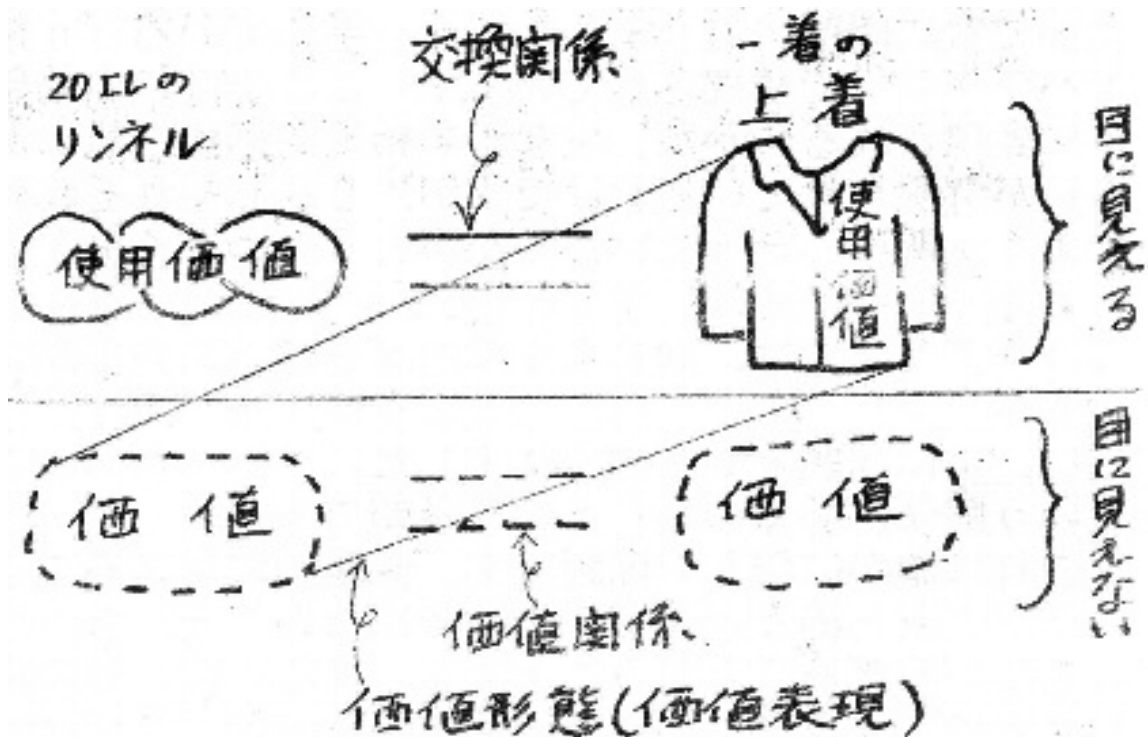
まず確認しなければならないのは、20エレのリンネル＝1着の上着（x量の商品A＝y量の商品B）という等式は、次のような意味をもっているということです。すなわちわれわれの住むこの社会は、われわれが生きていくのに必要もののほとんどを商品として生産し、それを社会的に交換することによって維持されているということです。だから二商品の等式は、そうした社会の物質代謝をなしている商品交換のもっとも基本的な関係として、二商品が交換される関係を取り出しているということです。しかもそれは現実に存在している客観的な商品交換の関係から、それに付随するさまざまなもの、例えばそれらが資本の生産した商品であるという属性や、商品の売買にまつわる信用や、商品所有者や購買者の思惑や欲望、貨幣等々、実際に商品が交換され売買されている諸関係に付随するさまざまな諸問題はとりあえずはすべて捨象されて、とにかく商品と商品が社会的に交換されるという物質代謝のもっとも抽象的な関係だということです。だからそれは直接には、ある一つの商品の一定量が別の他の商品の一定量と交換されるという現実としてわれわれの前には現われているのです。これが交換関係です。それは直接にはそれぞれの一定の使用価値量の交換割合としてわれわれには見えています。

しかし二つの使用価値が交換されるということは、それらが同等であり、等置されるものであるからです。リンネルと上着が等置されるから、それらは交換可能なのであって、実際に交換されているわけです。それが初版付録にいう「同等性関係」ということではないでしょうか。そして二商品の同等性関係というのは、それらの価値の関係であるということです。つまり価値として両者は等しいことを意味しているということです。だから20エレのリンネル＝1着の上着という等置は、リンネルと上着を両者のもつ価値の側面から観た場合の等置関係なわけです。これが、すなわち価値関係です。価値はもちろん目に見えないから、価値関係も見えません。しかし交換関係は現実の客観的な過程ですから、目に見えています。ただ等置されている関係（同等性関係）は見えても、何が等しいのかは見えていません。そして何が等しいかと言えば、それらは価値として等しいということです。だから《価値としてはリンネルと上着は同じ本質のもので

ある》わけです。

価値表現は、価値関係をさらに論理的に解剖するなかから見出すことができるように思えます。価値表現は、それは「表現」ですから、価値が表され、見えているわけですが、しかしその見えているカラクリは直接には見えませんし分かりません。それを説明するのが「相対的価値形態の内実」というわけです。

以前、大阪で「『資本論』を学ぶ会」で学習したときに、そのニュースのなかで、これらの諸カテゴリーの関係を図示した次のようなへたくそな図を紹介しましたが、参考のために再び紹介しておきます。



◎ベイリーが価値形態と価値とを混同しているとは？

次は、注17です。

《(17) S・ベイリーのように、価値形態の分析にたずさわった少数の経済学者たちが何の成果もあげることができなかったのは、一つには、彼らが価値形態と価値とを混同しているからであり、第二には、実際的なブルジョアからの生(マ)の影響のもとに、はじめからもっぱら量的規定性だけに注目しているからである。「量の支配が……価値をなす」(『貨幣とその価値の転変』、ロンドン、1837年、11ページ)。著者はS・ベイリー。》

ここではベイリーが「価値形態と価値とを混同している」というのは、どういうことかという

質問ができました。これについてはマルクス自身が『剰余価値学説史』のベーリー批判のなかで論じているものを紹介するだけにします。

《われわれは、価値が価格で計られ、表現されているのを見いだす。したがって、〔ベーリーはこう主張するのである〕・われわれは——価値とはなにかを知らないで満足することができる、〔と〕。価値尺度の貨幣への発展、さらにまた価格の度量標準としての貨幣の発展と、その発展のなかで価値そのものの概念を交換される諸商品の内在的尺度として発見することを、彼は混同しているのである。彼が正当なのは、この貨幣は不変の価値をもっている商品であることを要しない、としている点である。だが彼は、このことから、こう推論する、商品そのものとは独立な、それとは区別される価値規定は、不必要である、と。

諸商品の価値が諸商品の共通な単位として与えられるようになれば、そのときには諸商品の相対的価値の測定とそれの表現とは一致することになる。だが、われわれは諸商品の直接的定在とは違っている一単位に到達しないかぎり、表現に到達することはない。

AとBとのあいだの距離という、ベーリーの事例にあっても、両方のあいだの距離について語るには、両方がすでにも空間のなかの点（または線）であることが想定される。それらは、点に、しかも同一線上の点に、変えられるから、それらの距離がインチとかフィートなどで表現されうるのである。二つの商品AとBとの共通な単位は、一見したところでは、それらの交換可能性である。それらは「交換可能な」物である。「交換可能な」物としてそれらは同じ単位名称の大きさなのである。だが、このような「交換可能な」物としての「諸商品の」存在は、使用価値としての諸商品の存在とは違っていなければならない。それは、なんであろうか。...（中略）...貨幣は、単に、諸商品の価値が流過程で現われる形態にすぎない。だが、私は、どのようにしてx量の綿花をy量の貨幣で表わすことができるであろうか？この問題は次のような問題に帰着する。すなわち、私は一般にどのようにして一商品を他の商品で、または諸商品を等価物として、表わすことができるであろうか？というのがそれである。これに解答を与えるのは、ただ、価値の発展、つまり一商品の他の商品での表示にはかかわりのない価値の説明だけである。》（『学説史』III215-6頁）

◎園児20人＝関取1人

次は第二パラグラフです。

《20エレのリンネル＝1着の上着 であろうと、＝20着の上着 であろうと、＝x着の上着 であろうと、すなわち、一定量のリンネルが多くの上着に値しようと少ない上着に値しようと、このような割合はどれも、リンネルと上着とは、価値の大きさとしては、同じ単位の諸表現であり、同じ性質の物であるということを、つねに含んでいる。リンネル＝上着 が等式の基礎である。》

「フランス語版」もほぼ同じような内容なので、「補足と改訂」から類似する部分を紹介しておきましょう。

《補足と改訂》

[A 1]

実際、20エレのリンネル＝1着の上着という表現において、リンネルは上着に等しい大きさとして、上着に関係させられている、すなわち、上着に質的に等置されている。リンネル＝上着が等式の基礎であり、ある一つの商品の、他の違う種類の商品との等置関係が、どのような割合で結ばれていようとも、それはその商品の価値関係である。上着とリンネルとは、両者が価値である限りにおいて同じ物である。使用価値あるいは商品体としては、リンネルは上着と区別される、価値としてはリンネルは上着と同じ本質の物である。

[A 2]

実際、表現――20エレのリンネル＝1着の上着――においては、リンネルと上着とは同名の大きさとして意味をもっている。リンネル＝上着がこの等式の基礎である。20エレのリンネル＝1着の上着であろうと、2着の上着であろうと、x着の上着であろうと、どの場合においても、商品リンネルは、同じ性質の物としての自分と等しい物としての、異なる種類の商品・上着と関係させられているのであり、すなわち、リンネルは上着に質的に等置されているのである。

[B]

20エレのリンネル＝1着の上着であろうと、＝20着の上着であろうと、＝x着の上着であろうと、すなわち、一定分量のリンネルがどれだけ多くの上着に値しようと、どれだけ少ない上着に値しようと、このような割合はどれもリンネルと上着とは、価値の大きさとしては同じ単位の諸表現であり、同じ性質の物であるということを、つねにふくんでいる。リンネル＝上着が等式の基礎である。したがって、異なる種類の商品の質的等置が、価値関係の現実的内容である。今や、この内容が現象している形態を考察することが重要である。〉（61-63頁）

まずここでは20エレのリンネルに等置される上着の使用価値の量がどれほどであろうと、とにかくそれが上着の一定量として表されるということは、リンネルと上着が量的に比較されているということであり、そのためには二つの商品は同じ質に還元されているということです。先の『学説史』のベーリ批判でも《AとBとのあいだの距離という、ベーリの事例にあっても、両方のあいだの距離について語るには、両方がすでにも空間のなかの点（または線）であることが想定される。それらは、点に、しかも同一線上の点に、変えられるから、それらの距離がインチとかフィートなどで表現されうるのである》と述べていましたが、AとBとの距離を問う、ということはAとBが同じ空間で同一線上にある点という質的同一性が前提されているわけです。だからリンネルと上着が量的に比較される（等置される）ということは、リンネルと上着が同じ質に還元されて初めて言うことだということです。

J J 富村さんは、この議論の途中でやおら立ち上がって、黒板に次のような等式を書きました。

園児 20 人 = 1 人の関取

つまりこの等式では園児も関取も、ともに重量という単位に還元されて比較されているのだというわけです。この場合は重量が共通の単位といわけです。

ピースさんが用意してくれたレジュメでは「二つの商品は同じ単位の表現をしており、抽象的人間労働という同質性をもっていることが基礎となる」と説明されていましたが、まだこの時点では、同質性として問題になっているのは、「価値」であって、その実体としての「抽象的人間労働」そのものが問題になっていないのではないかということになりました。

◎「価値物」とは？

次は第三パラグラフです。

《しかし、質的に等置された二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？ リンネルが、その「等価」としての上着、またはリンネルと「交換されうるもの」としての上着に対して関係させられることによって、である。この関係の中では、上着は、価値の存在形態として、価値物として、通用する。なぜなら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じものだからである。他方では、リンネルそれ自身の価値存在が現れてくる。すなわち、一つの自立した表現を受け取る。なぜなら、ただ価値としてのみ、リンネルは、等価物としての上着、またはそれと交換されうるものとしての上着に関係するからである。たとえば、酪酸は、蟻酸プロピルとは異なる物体である。しかし、両者は、同じ化学的実体——炭素（C）、水素（H）、および酸素（O）から成りたち、しかも同じ比率の組成、すなわち $C_4H_8O_2$ で成りたっている。今酪酸に蟻酸プロピルが等置されるとすれば、この関係の中では、第一に、蟻酸プロピルは単に $C_4H_8O_2$ の存在形態としてのみ通用し、第二に、酪酸もまた $C_4H_8O_2$ から成りたっていることがのべられるであろう。すなわち、蟻酸プロピルが酪酸に等置されることによって、その化学的実体が、その物体形態から区別されて、表現されるであろう。》

まず、類似した説明として「初版付録」と「補足と改訂」および「フランス語版」から紹介しておきます。

《初版付録》

〈b 価値関係。 上着がリンネルと同じものであるのは、ただ両方とも価値であるかぎりにおいてのことである。だから、リンネルが自分と同じものとしての上着に関係するという、または、上着が同じ実体をもつものとしてリンネルに等置されるという、このことは、上着がこの関係において価値として認められている、ということ表現している。上着はリンネルに等置されるが、それもやはりリンネルが価値であるかぎりにおいてのことである。だから、同等性関係は価値関係なのであるが、しかし、価値関係は、なによりもまず、自分の価値を表現する商品の、価値または価値存在の表現なのである。使用価値または商品体としては、リンネルは上着とは違っている。これに反して、リンネルの価値存在は、上着という別の商品種類がリンネルに等置されるところの、またはリンネルと本質の同じものとして認められるところの、関係において、出現し、自分を表現するのである。〉（国民文庫版134-5頁）

《補足と改訂》

〈

[A 1]

さて、ある一つの商品A、例えばリンネルは、どのようにして、自分と等しい価値の物すなわち自分の等価物としての、何かある他の商品B、例えば上着と関係するのだろうか。

答えは簡単に商品価値の本性から明らかになる。ある一つの商品は、それが単に、その生産に支出された人間的労働力の物的表現、物的外皮である限りにおいて、したがって、人間的労働そのものの、抽象的人間的労働の、結晶である限りにおいて、それは価値なのである。そのことは、石炭が暖房材料としては、それによって吸収された太陽光線の物質的外皮に他ならない、というのと同じことである。

したがって、ある一つの商品A、例えばリンネル、は他のある商品B、例えば上着と、価値として等置されることができるのは、その他の商品、上着がこの関係のなかで単なる価値物として通用する、すなわちその唯一の素材が人間的労働から成っている物として通用する、あるいはそれゆえその肉体が人間的労働以外の何物をもあらわさない物として通用する限りにおいてのみである。〉（62-3頁）

《フランス語版》

〈だが、等質であり同一の本質であることがこのように確認された二つの商品は、このばあい同じ役割を演じるわけではない。このばあい表現されるのは、リンネルの価値だけである。それでは、どのようにして？ リンネルの等価物としての、すなわち、リンネルに代位しうるかこれと交換しうる物としての上衣という別種の商品に、リンネルを比較することによって。まず明らかなことだが、上衣がこの関係に入るのは、もっぱら、価値の存在形態としてである。上衣は価値を表現することによってはじめて、他の商品に相対する価値として現われることができるから

である。他方、リンネル自体が価値であることは、ここで姿を現わす、すなわち別の一表現を獲得する。実際、もしリンネルがそれ自体価値でなれば、上衣の価値がリンネルとの等式に置かれ、あるいはリンネルに等価物として役立ちうるだろうか？

化学から一つの類推を借用しよう。酪酸と蟻酸プロピルは、外観も物理的、化学的性質もちがう二つの物体である。それにもかかわらず、両者は同じ元素——炭素、水素、酸素——を含んでいる。その上、両者はこれらの元素を $C_4H_8O_2$ という同じ割合で含んでいる。さて、もし蟻酸プロピルを酪酸との等式に置くか、あるいは酪酸の等価物とすれば、蟻酸プロピルはこの関係では、 $C_4H_8O_2$ の存在形態としてのみ、すなわち、酪酸と共通である実体の存在形態としてのみ、現われるだろう。したがって、蟻酸プロピルが酪酸の等価物としての役割を演じる等式は、酪酸の実体をその物体形態とは全くちがうあるものとして表現する、いくらかぎこちないやり方であろう。〉（20-21頁）

ここでは「価値物」というものを如何に捉えたらよいのか、という問題を少し論じておきましょう。この解釈については「価値体」と関連させて、さまざまに主張されていますが、「価値体」については、今回はとりあえずはおいておきます。

久留間鮫造著『貨幣論』（大月書店、1979.12.24）のなかで、「価値物と価値体との区別について」と題して、この問題が論じられています。そこで大谷禎之介氏は久留間鮫造氏の旧著『価値形態論と交換過程論』では両者が区別されずに論じられ、事実上、価値物を価値体と同じものとしているが、しかしそれだと価値物は等価形態に立つ商品についてのみ言いうることになる、しかしマルクス自身はそうは述べていないと、『資本論』からいくつかの引用文を紹介し、それらの引用文から結論されることとして次のように述べています。

〈これらの個所からは、次のようなことが読み取れるのではないのでしょうか。すなわち、労働生産物が商品になると、それは価値対象性を与えられているもの、すなわち価値物となる。しかし、ある商品が価値物であること、それが価値対象性をもったものであることは、その商品体そのものからはつかむことができない。商品は他商品を価値物として自分に等置する。この関係のなかではその他商品は価値物として意義をもつ、通用する。またそれによって、この他商品を価値物として自己に等置した商品そのものも価値物であることが表現されることになる。約言すれば、商品の価値表現とは、質的にみれば、商品が価値物であることの表現であり、等価物とはその自然形態がそのまま価値物として意義をもつ商品だ、ということです。／いま申しました、《その自然形態がそのまま価値物として意義をもつもの》、これが先生の意味での「価値物」ですが、マルクスはこれをさす言葉としては、むしろ「価値体」というのを使っているのではないかとと思われるのです〉（『貨幣論』97～98頁）。

これに対して、久留間氏は〈この点については、いま君が言われたことはまったくそのとおりです。「価値体」あるいは「価値物として通用する物」と言うべきであったのを「価値物」と言

ったのはぼくのたいへんなミスでした〉（同99頁）と間違いを認め、大谷説に同調しています。つまり「価値物」とは「価値対象性をもったもの」という意味だということです。だからまたそれはリンネルについても言いうるものと捉えられているわけです。しかし果たしてそうなのでしょうか。

われわれは以前、紹介したモストの『資本論入門』の次の一文（これはマルクス自身が書き直したと思われるものです）をもう一度紹介しておきましょう。

《さてここで交換価値に、つまり諸商品の価値が表現されるさいの形態に、立ち戻ろう。この価値形態は生産物交換から、また生産物交換とともに、しだいに発展してくる。生産がもっぱら自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど余剰分をもっているようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。たとえば毛皮が塩と、しかもまず最初はまったく偶然的なもろもみの比率で交換される。この取引がたびたび繰り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かに決められるようになり、一枚の毛皮はある一定量の塩とだけ交換されるようになる。生産物交換のこの最も未発展の段階では、交換者のそれぞれにとって、他の交換者の財貨が等価物として役立っている。すなわち、それ自体として彼の生産した財貨と交換可能であるばかりでなく、彼自身の財貨の価値が見えるようにする鏡でもあるような、価値物として役立つのである。》（10頁）

ご覧の通り、マルクスは《生産物交換のこの最も未発展の段階では、交換者のそれぞれにとって、他の交換者の財貨が等価物として役立っている。すなわち、それ自体として彼の生産した財貨と交換可能であるばかりでなく、彼自身の財貨の価値が見えるようにする鏡でもあるような、価値物として役立つのである》と述べています。つまり等価物というのは、相対的価値形態にある商品の価値が見えるようにする鏡であり、そのようなものとして価値物として役立つと述べているわけです。だから「価値物」というのは、相対的価値形態にある商品の価値が「見えるようにする鏡」の役割を果たしているものという意味であるわけです。単に「価値対象性をもったもの」ということでは、価値が見えるものとはならないでしょう。

またすでに紹介した「補足と改訂」では、次のようにも述べています。

《したがって、ある一つの商品A、例えばリンネル、は他のある商品B、例えば上着と、価値として等置されることができるのは、その他の商品、上着がこの関係のなかで単なる価値物として通用する、すなわちその唯一の素材が人間的労働から成っている物として通用する、あるいはそれゆえその肉体が人間的労働以外の何物をもあらわさない物として通用する限りにおいてのみである。》

つまりここでは「価値物」を説明して、《すなわちその唯一の素材が人間的労働から成っている

物として通用する、あるいはそれゆえその肉体が人間的労働以外の何物をもあらわさない物として通用する》と述べています。つまり「価値物」としての上着は、ただ人間労働だけから成っている（つまり具体的な裁縫労働と生産諸手段との結合の産物ではない、その使用価値の姿が人間労働として通用している）ものであり、だから《その肉体が人間労働以外の何物をも表さない物》だと説明してされています。だから「価値物」としての上着はまさにその肉体が価値そのものであるような物なのです。すなわち価値の実存形態、すなわち本質である価値が物（Ding）として現われているものだということができます。

さらにこれは前回紹介したのですが、マルクスは初版本文のなかで「等価値物」を説明して、次のように述べていました。

《等価値物という規定は、ある商品が価値一般であるということを含んでいるだけではなく、その商品が、その物的な姿において、その使用形態において、他の商品に価値として認められており、したがって、直接に、他の商品にとっての交換価値として現存している、ということをも含んでいる。》（夏目訳36頁）

だから「等価値物」である上着がリンネルの「価値物」として認められる（通用する）ということは、やはりその上着という物的な姿において、リンネルの価値として認められる（直接に、リンネルの交換価値として存在している）ということではないかと思えます。

では、「価値物」と「価値体」とはどう異なるのか、それとも同じものなのか、ということについては、すぐにまた議論する機会があるでしょうから、今回は論じるのはやめておきましょう。

だからこのパラグラフの説明としては、次のようになると思えます。

リンネルの価値はどのように表現されるのか？ リンネルが、自分に等しいものとしての、自分と「交換されうるもの」としての上着に、関係することによってである。この関係のなかでは、上着は、価値の存在形態として、つまりリンネルの価値そのものが物として現われているものとして、すなわち「価値物」として認められる。そうしたものとしてのみ上着はリンネルに等置されるのだからである。するとリンネルの価値存在もそうした関係のなかで自らの表現を受け取ることになる。つまりリンネルの価値は、上着という姿で、一つの物として目に見える形で表されているわけである。上着は、ここではリンネルの価値の目に見える存在形態として、つまり価値物として通用しているのである。

『資本論』を読んでみませんか

2009年総選挙は民主党が単独過半数を大きく越え、圧勝しました。
自民党は議席をほぼ3分の1に減らし惨敗。

小泉元首相は「自民党をぶっ壊す」などとうそぶいて、国民をだまし、危機に陥った自民党を救ったつもりだったのですが、小泉政治の弊害は社会を蝕み、今回の自民党惨敗に一役買ったとも言えます。その意味では元首相は、その思惑とは異なり、“公約”どおり、自民党を「ぶっ壊した」のかも知れません。

さて、新たに政権党になった民主党のマニフェストの目玉の一つは高速道路の無料化です。それが果たして本当に実現されるのかどうか、またどういう効果や混乱を社会にもたらすのかは、予断を許しません。が、少なくとも無料化当初は高速道路が混雑し、どこも渋滞だらけになることだけは確かでしょう。



ところで高速道路や鉄道、港湾など大型の社会的な資本は経済学的にはどのように考えたら良いのでしょうか。マルクスは、『資本論』でこの問題についても考察しています。

これらは生産材料など生産過程でその使用価値が消費され生産物に価値がすべて移転する「流動資本」とは区別して、生産過程に一定期間（その耐用期間だけ）留まり続け、磨滅部分だけ価値を生産物に移転させる「固定資本」と規定されています。「固定資本」は、一般には生産過程で使用される機械や道具、あるいは建屋などのことですが、それだけではなく、道路や運河、ダム、鉄橋、港湾等々、耐久構築物などもこの分類に入ります。

しかしこうした極めて長期間の耐用年数をもっているものは、機械や道具などとは異なり、その損耗は、まただからその補填も、実際上はほとんどないに等しく、ただ修理費だけが必要に

なる、とマルクスは次のように指摘しています。

《このことは、耐用期間の長い全ての構築物にあてはまる。つまり、そのような構築物の場合には、それらに前貸しされた資本がそれらの損耗に応じてだんだん補填されて行く必要はないのであって、ただ維持と修理とのための毎年の平均費用が生産物の価格につけ加えられさえすればよいのである。》（『資本論』第2部、全集24巻221頁）

ところで、今日の高速道路料金は、「償還主義」を原則としています。つまりその建設費を何十年かで償還することを前提に計算されています。しかしこうした料金設定は、そもそも不要且つ不当なわけです。なぜなら、仮に50年で建設費を償還する計算なら、高速道路が50年で磨滅してしまうことを前提することになるからです。しかしそんな高速道路はありえません。それらは半永久的に使用可能なわけです。だから高速道路などの場合は、ただ維持と補修の費用だけを徴収すればよいわけで、それをもし税金で賄うなら、例え高速道路でも無料であることは、一般の道路が無料であるのと同じであり、当たり前なわけです。

だから民主党のマニフェストの立場は、必ずしも経済原則から逸脱しているわけではありません。

『資本論』は、このよう現代的な問題も論じています。是非、貴方も一緒に読んでみませんか。

第16回「『資本論』を読む会」の報告

◎changeの秋？

民主党政権が誕生し、鳩山外交も上々の滑り出しのように見えます。新しい政権に変わって、われわれの生活も何か変わるのでしょうか？

「チェンジの秋」を予感させるものの、私たちの『資本論』を読む会は相変わらず、進捗は亀のごとくです。今回も、議論はそこそこでしたが、進んだのは、結局、二つのパラグラフと注だけでした。さっそくその報告に移ります。

◎第3パラグラフに出てくる「価値物」について若干議論

最初にピースさんから、前回の第3パラグラフに出てくる「価値物」について、意見があり、若干、その問題について議論になりました。ピースさんは「報告」の解釈に理解を示してくれましたが、報告を担当した亀仙人は報告の立場は必ずしも一般的ではないこと、それは故久留間鮫造氏の最初の立場に近いが、しかし久留間氏は、そうした「価値物」の理解に立ちながら、しかし「価値体」との区別については無意識だったが故に、大谷禎之介氏の指摘に動揺し、自身の立場を捨て、大谷説に与するようになったことが紹介されました。

しかし、実は、大谷氏の説明ではリンネルの価値の表現がなされていないのです。例えば、前回紹介した大谷氏の主張をもう一度紹介してみましょう。

〈労働生産物が商品になると、それは価値対象性を与えられているもの、すなわち価値物となる。しかし、ある商品が価値物であること、それが価値対象性をもったものであることは、その商品体そのものからはつかむことができない。商品は他商品を価値物として自分に等置する。この関係のなかではその他商品は価値物として意義をもつ、通用する。またそれによって、この他商品を価値物として自己に等置した商品そのものも価値物であることが表現されることになる。〉（『貨幣論』98頁）

このように大谷氏は価値表現を説明していますが、ここでは価値は何一つ表現されたことにはなりません。「表現される」ということは、それが目に見えるようになるということです。そしてそのためには、価値が何らかの形ある物として現われる必要があるのです。しかし大谷氏の説明はそうしたものはなっていない。というのは、大谷氏は「価値物」＝「価値対象性を持ったもの」と説明するからです。例えば、この言葉を大谷氏の説明文に出てくる「価値物」の代わりに挿入すれば、それが分かります。

〈商品は他商品を【価値対象性を持ったもの】として自己に等置する。この関係のなかではその他商品は【価値対象性を持ったもの】として意義をもつ、通用する。またそれによって、この他商品を【価値対象性を持ったもの】として自己に等置した商品そのものも【価値対象性を持ったもの】であることが表現されることになる。〉

このように書き換えてみると、何一つ価値が表現されていないことが分かります。というのは、〈【価値対象性を持ったもの】として意義をもつ、通用する〉と言っても、それだけでは、価値が目に見えるものとして、すなわち形ある物として現われていることにはならないからです。形あるものと顕れていないなら、それは表現されたとは言えません。マルクスは《上着は、価値の存在形態として、価値物として、通用する》と述べています。《価値の存在形態》というのは、本来は“まぼろし”のような対象性しかもたない価値が、形ある物として存在することなのです。それが《価値物》の意味です。だからそうした「価値物」の理解に立たない大谷説では、価値は表現されているとは言えないのです。(※)

大谷氏は〈《その自然形態がそのまま価値物として意義をもつもの》、これが先生（＝故久留間鮫造――引用者）の意味での「価値物」ですが、マルクスはこれをさす言葉としては、むしろ「価値体」というのを使っているのではないかとと思われるのです〉とも述べています。しかし、これだと「価値体」によって始めてリンネルの価値は表現されることになり、「価値物」の段階ではまだ表現されていないことになってしまいます。しかしマルクス自身は第3パラグラフでも《他方では、リンネルそれ自身の価値存在が現れてくる。すなわち、一つの自立した表現を受け取る》と述べており、第3パラグラフの段階ですでにリンネルの価値は表現されていると述べているのです。だから大谷氏のような「価値物」理解では、こうしたマルクスの第3パラグラフの説明を理解不能にしてしまうのです。

しかしピースさんは、大谷氏の主張にも一定の理解を示し、第3パラグラフに出てくる「価値物」、つまりリンネルとの価値関係におかれた上着が受け取る形態規定としての「価値物」と、一般に使われる場合の「価値物」とがあるのではないかと、とも指摘されました。つまり大谷氏が主張されるような意味での「価値物」もありうるが、しかしそれはリンネルとの価値関係におかれた上着に付着する「価値物」の規定とは異なるものであり、だから「価値物」には二様の意味があるし、あってもよい、との意見です。これについては亀仙人は自身の意見を保留しました。

確かに大谷氏が紹介している『資本論』からのいくつかの引用文では、ピースさんの意見を肯定するような用例が見られるように思えます。しかしよくよく吟味してみると、やはりそうではなく、マルクス自身は「価値物」という言葉で、価値が形ある物として存在すること、つまり目に見える形で顕れているものと捉えていることが分かります。しかしそれを大谷氏が紹介する引用文一つ一つについて、検証すると横道にそれすぎるので、割愛します（またその機会があればやることにしましょう）。

(※補足： この「価値物」が出てくる第3パラグラフの原文は次のようになります。

"In diesem Verhältnis gilt der Rock als Existenzform von Wert, als Wertding, denn nur als solches ist er dasselbe wie die Leinwand."

ここに出てくる「Existenzform」という単語は日本語では「存在形態」とか「実存形態」等と訳されていますが、「Dei Existenz」はヘーゲル論理学では「現存在」と訳され、ヘーゲルは、この言葉について、次のように説明しています。

〈Existenz〔現存在〕という言葉は、ラテン語のexistere〔出現する〕という動詞から作られたものであって、出現している有〔Hervorgegangensein〕を示す。すなわち現存在とは、根拠から出現し、媒介を揚棄することによって回復された有である。〉(『小論理学』岩波文庫下43頁)

だから「Existenzform」は「現存在の形態」ともいうべきものです。それは本質(価値)が有として、つまり直接的な形で出現したものだと思えるべきものなのです。そして価値が直接的なものとして出現しているからこそ、それは表現されている――つまり目に見えるものとして表されている――といえるのです。「価値物」というのはそういうものと理解すべきなのです。

◎第4パラグラフの位置づけ

さて、それでは第4節の検討に入っていきます。まずは、例のごとく全文を紹介することからはじめます(今回から、分節ごとに検討するために、分節にf)、g)、h)...)の記号を打っていくことにします)。

《f)われわれが、価値としては諸商品は人間労働の単なる凝固体であると言えば、われわれの分析は諸商品を価値抽象に還元するけれども、商品にその現物形態とは異なる価値形態を与えはしない。g)一商品の他の商品に対する価値関係の中ではそうではない。ここでは、その商品の価値性格が、その商品の他の商品に対する関係によって、現れるのである。》

これまで、パラグラフの引用に続いて、そのパラグラフに類似したそれ以外の文献を年代順に資料として紹介してきたのですが、やや煩雑に過ぎるので、それらはすべて付録に回し、すぐにパラグラフの検討に入ります。

最初に問題になったのは、このパラグラフの位置づけでした。前回の報告で紹介しましたが、第3パラグラフに該当する初版付録の小項目は、「b 価値関係」でした。初版付録ではそれに続いて、「c 価値関係のなかに含まれている相対的価値形態の内実」が続き、それが現行の第4パラグラフ以降には該当します。だから第3パラグラフの段階では、まだ現行の小項目「a 相対的価値形態の内実」の本題には入っておらず、本題は第4パラグラフから始まると思えることが出来ます。そして第3パラグラフまでは、そのための前提の考察と位置づけられます。つまり第3パラグラフでは、上着がリンネルとの価値関係において、価値物として妥当することによって、リンネルの価値存在が表現されることが示されました。つまりリンネルが「相対的な価値の形態――相対的に価値を表現する形式――にあることが示されたのです。だから次に問題になるのは、本題である、その「形式」の「内実」というわけです。

ということは、「相対的価値形態の内実」というのは、相対的価値形態がその価値の実体である「抽象的な人間労働の凝固体」まで掘り下げられてそこから説明されること、すなわち「価値の概念」からその現象形態たる「価値形態」まで展開することだということが分かります。それが相対的価値形態が持っている内容(Gehalt)だということです。

そしてそう考えると、この第4パラグラフは、それまでの前提の考察を踏まえた、本題の入り口であり、第5パラグラフ以降への橋渡し、導入部分だということが分かります。だからこの第4パラグラフの内容については、やはり第5パラグラフ(あるいはそれ以降のパラグラフ)と関連させて理解する必要があるわけです。

f)の部分は、第1節で次のように論じていたことを思い出させます(下線は引用者)。

《そこで、これらの労働生産物に残っているものを考察しよう。それらに残っているものは、幻のような同一の対象性以外の何物でもなく、区別のない人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、単なる凝固体以外の何物でもない。これらの物が表しているのは、もはやただ、それらの生産に人間労働力が支出されており、人間労働が堆積されているということだけである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値――商品価値である。》(全集版52頁)

これは価値の概念を導出する部分に該当します。つまりこの第4パラグラフでは、価値の実体である抽象的人間労働の凝固を確認するとともに、それではまだ《幻のような同一の対象性以外》の何もでもなく、「価値の形態――価値が形があって目に見える状態――にはなっていないことを再確認しているわけです。しかし同時に、われわれは第1節では次のようにも述べられていたことを思い出します(下線は引用者)。

《もしもわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、われわれは、労働生産物を使用価値にしている物理的諸成分と諸形態をも捨象しているのである。それはもはや、テーブル、家、糸、あるいはその他の有用物ではない。その感性的性状はすべて消しざられている。それはまた、もはや、指物(指)労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他の一定の生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有用的性格と共に、労働生産物に表れている労働の有用的性格も消えうせ、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的形態も消えうせ、これらの労働は、もはや、たがいに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間労働、すなわち抽象的人間労働に還元されている。》(全集版51-2頁)

つまりこの第1節では、抽象的人間労働に還元するためには、労働生産物に表れている(痕跡を残している)労働の具体的性格、裁縫労働とか織布労働といった性格も捨象され、消え失せなければならないことが言われています。しかし同じような人間労働一般への還元が第5パラグラフにも出てくるのですが、しかし同じ「還元」でも、第1節とは異なるのです。だからそれとの対

比の意味も込めて、あらかじめ、ここでこうした問題が再び論じられているということも出来るのです。

次に①の部分について検討しましょう。ここでは第3パラグラフで見たように、価値関係のなかでリンネルの価値が表現されたように、一商品への他の商品の価値関係のなかでは、《その商品の価値性格》が《現れる》と述べています。ここで現れる「価値性格」とは何かが問題になりました。ピースさんは、「それは直接には目に見えないという性格のことでないか」と言いましたが、それでは内容的におかしくなります。なぜなら、価値関係のなかで価値の「直接には目に見えないという性格」が《現れる》ということになっては意味不明だからです。

やはりここでは「抽象的人間労働の凝固」こそが「価値性格」の内容だと考えるべきでしょう。つまり、一つは価値というのは純粋に社会的なものだということです。商品交換を通じて、その生産のために支出され、生産物に表れている具体的な諸労働が、人間労働一般に還元されることによって社会的性格をもつということ、それが価値性格の一つの側面です。さらに価値性格としては、価値を形成する労働の抽象的・社会的な性格だけではなく、それが商品という物的対象に結晶したものである、凝固したものである、という性格もあるわけです。そうした価値性格の二つの側面が二商品の価値関係のなかで現れ出てくるというのです。そして価値性格の二つの側面の現出過程を説明するのが、だいたい第5パラグラフと第6パラグラフに該当するわけです。だから次は第5パラグラフの検討に入ることになります。

◎第5パラグラフの検討

《1)たとえば、上着が、価値物として、リンネルに等置されることによって、上着に潜んでいる労働がリンネルに潜んでいる労働に等置される。①)ところで、たしかに、上着をつくる裁縫労働は、リンネルをつくる織布労働とは種類の異なる具体的な労働である。②)しかし、織布労働との等置は、裁縫労働を、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、実際に還元する。③)このまわり道を通った上で、織布労働も、それが価値を織りだす限りにおいては、裁縫労働から区別される特徴をもっていないこと、すなわち抽象的人間労働であること、が語られるのである。④)異種の諸商品の等価表現だけが――異種の諸商品にひそんでいる、異種の諸労働を、実際にそれらに共通なものに、人間労働一般に、還元することによって――価値形成労働の特有な性格を表すのである(17a)。》

まず①)について、第2パラグラフで見たように、20エレのリンネル=1着の上着 という等式の基礎には、リンネル=上着 があったように、ここでは リンネル=上着 の基礎には、リンネルに潜んでいる労働=上着に潜んでいる労働 の関係(リンネルに潜んでいる労働に対する上着に潜んでいる労働の等置関係)がなりたつことが指摘されています。そして第3パラグラフでは、リンネル=上着 の同等性との関係とは価値関係であることが指摘され、リンネルの価値が価値物である上着によって表現されていることが示されたのでした。ここでは類似した関係がその基礎にある労働に関して考察されていると言えます。

しかし注意が必要なのは、《上着が、価値物として、リンネルに等置されることによって》と述べられていることです。だから第3パラグラフを前提にした考察だということです。第3パラグラフでは、リンネルに等置された上着は価値物として通用しなければならないことが指摘されたのですが、ではそもそも〈「価値物」として通用する〉とは、どういうことなのか、今度は、価値の実体に遡って問題にされ、説明されているのです。

①)では、その考察の前提として、《たしかに、上着をつくる裁縫労働は、リンネルをつくる織布労働とは種類の異なる具体的な労働である》ことが確認されています。これは上着とリンネルとは種類の異なる使用価値であり、よってそれらの使用価値をつくるために支出された具体的な有用労働も種類の異なるものだということです。

次に②)では《織布労働との等置は、裁縫労働を、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、実際に還元する》とされています。

ここで注意が必要なのは、第4パラグラフのところでも指摘しましたが、同じ「還元」でも、ここで述べられていることは、第1節で労働の具体的な諸属性が捨象されたとは異なる「還元」だということです。というのは、上着が「価値物」として等置されているからです。「上着が価値物として通用する」ということは、前回(第15回)の第3パラグラフの考察でも紹介しましたが、《すなわちその唯一の素材が人間の労働から成っている物として通用する、あるいはそれゆえその肉体が人間的労働以外の何物をもあらわさない物として通用する》(「補足と改訂」ということです。あるいは初版本文では《相対的価値表現においては、上着は確かに、価値あるいは労働膠着物としてのみ認められているが、まさにそのために、労働膠着物は上着として認められ、上着は、そのなかに人間労働が凝結しているところの形態として認められているのである。使用価値である上着がリンネル価値の現象形態になるのは、リンネルが、抽象的な、人間的な、労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的な具象物としての「上着という素材に、関係しているからにほかならない。上着という対象は、リンネルにとっては、同種の人間労働の感覚的な・手でつかみうる・対象性として、したがって現物形態においての価値として、認められている》(江夏訳37頁)とも述べられています。

つまりここで《実際に還元する》とされているのは、裁縫労働の具体的な諸属性を捨象して、それを人間労働一般に還元するというのではなくて、裁縫労働という特定の具体的な労働がそのまま人間労働一般の直接的な実現形態としてあること、すなわち、裁縫労働が抽象的人間労働が実現される特定の形態として意義をもっていることなのです。ヘーゲルチックに言い換えるならば、人間労働一般が、裁縫労働という具体的な労働を通じて、直接的なものとして現われているということでもあります。あるいは第3パラグラフと類似させていうなら、裁縫労働が、人間労働一般を代表するものとして通用しているということなのです。リンネルにとっては、裁縫労働は、自分自身に対象化されているのと同質の人間労働一般を代表するものとして通用しているわけです。

またリンネルにとっては、裁縫労働という具体的な属性はそうした役割しか意味がない、ともマルクスは述べています。

《リンネルは、人間労働の直接的実現形態としての裁断労働に関係することがなければ、価値あるいは具体化した人間労働としての・上着に、関係することができない。……上着は、リンネルにとっては、リンネルの価値対象性をリンネルの糊で固めた使用対象性と区別して表わすということにしか、役立っていない。……だから、裁断労働がリンネルにとって同じように有効であるのも、それが目的にかなった生産活動あるいは有用な労働であるかぎりにおいてのことではなくて、それが特定の労働として人間労働一般の実現形態すなわち対象化様式であるかぎりにおいてのことではない。リンネルがその価値を上着ではなく靴墨で表現したならば、リンネルにとっては、裁断の代わりに靴墨作りが同じく、抽象的な、人間的な、労働の・直接的実現形態として認められたであろう。つまり、ある使用価値あるいは商品体が価値の現象形態あるいは等価物になるのだが、このことは、別のある商品が、上記の使用価値あるいは商品体のなかに含まれている、具体的な、有用な、労働種類――抽象的な、人間的な、労働の・直接的実現形態としての――に関係する、ということに依拠しているものでしかない》（初版本文、同上38頁）

もちろん、この初版本文では、この第5パラグラフ以降で展開されることが先走って述べられている部分もあるのですが、重要なのは、《実際に還元する》ということが、第1節で述べられていた「還元」とは異なる点を理解することです。

次は、2)の《このまわり道を通った上で、織布労働も、それが価値を織りだす限りにおいては、裁縫労働から区別される特徴をもっていないこと、すなわち抽象的人間労働であること、が語られるのである》の部分です。

先(1)で、織布労働との等置は、裁縫労働そのものを両者に共通な、抽象的人間労働の直接的な実現形態にすることが指摘されたのですが、そのことによって、リンネルの価値を形成する抽象的人間労働が、抽象的人間労働の対象様式である裁縫労働という具体的労働によって目に見える形で表されているということです。つまり上着に表れている裁縫労働こそが、本来は目に見えない「思考産物」（初版本文）であるリンネルの価値を形成する抽象的人間労働の具体的な実現形態であり、それによって、目に見える形で表されているものだというのです。

ところで、ここで《まわり道》という言葉がでできます。リンネルは価値としては抽象的人間労働の凝固ですが、しかしそれはリンネルそのものを見るだけでは分かりません。しかしリンネルは、直接には出来ないことを、間接的には、すなわち「回り道を通して」なら出来るということです。リンネルは、《自分自身にたいしては直接に行ないえないことを、直接に他の商品にたいして、したがって回り道をして自分自身にたいして、行なうことができる》（初版本文前掲39頁）のです。すなわち自分に上着を価値物として等置することによって、上着をつくる裁縫労働を抽象的人間労働の直接的な実現形態にし、そのことによって、自らの価値を形成する労働を、すなわちそれが抽象的人間労働であることを、その直接的な実現形態である裁縫労働によって目に見える形で表すことが出来るということです。ここでは裁縫労働という具体的で感覚的なものが、抽象的人間労働という抽象的一般的なものの特定の實現形態として意義をもっているのです。

またここでは《語られるのである》とも述べています。一体、誰が語るのでしょうか？ これは少し先走りますが、第10パラグラフで、《上述のように、商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである》（全集版71頁）と書かれています。ここで《商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのこと》というのは、われわれが第1節で商品の価値を分析して明らかにされたことを意味します。その商品価値の分析で明らかになったことを、リンネルが上着との価値関係のなかで、リンネル自身が語るというのですから、やはり上記の《語られるのである》も、リンネル自身が語っているものとして理解すべきでしょう。

次は最後の(1)《異種の諸商品の等価表現だけが――異種の諸商品にひそんでいる、異種の諸労働を、実際にそれらに共通なものに、人間労働一般に、還元することによって――価値形成労働の特有な性格を表すのである》ですが、これはこれまで述べてきたことをより一般的に言い換えて、繰り返していると言えます。ここでも《実際に……還元する》ということが出てきますが、すでに述べたような意味として理解する必要があります。

◎注17aについて

注17aについては、それほど詳しい議論はしませんでした。だから注については、分節ごとの解説は必要ないと思います。しかしとりあえず、全文をまず紹介しておきましょう。

《(17a) 第2版への注。ウィリアム・ベティの後、価値の性質を見ぬいた最初の経済学者の一人であるあの有名なフランクリンは、次のようにのべている。「商業は総じてある一つの労働を別の労働と交換することにほかならないから、あらゆるものの価値は労働によって最も正しく評価される」（『B・フランクリン著作集』、スパークス編、ボストン、1836年、第2巻、267ページ〔『紙幣の性質と必要についてのささやかな研究』〕）。フランクリンは、あらゆるものの価値を「労働によって」評価することによって、彼が、交換される諸労働の相違を捨象していること、したがってそれらの労働を等しい人間労働に還元していること、を自分では意識していない。にもかかわらず、彼は自分ではわかっていないことを語っている。つまり、彼は、はじめにまず「ある一つの労働」について語り、次に、「別の労働」について語り、最後に、あらゆる物の価値の実体という以外に何の限定ももたない「労働」について語っているのである。》

この注で問題になったのは、本文のこの個所の注としては、あまり相応しくないのではないかということでした。というのは、この注17aでは、フランクリンが、商品の価値を労働によって評価することによって、交換される諸労働の相違を捨象して、それらの労働を等しい人間労働に還元しているのであるが、それを意識せずにやっているのだ、というものです。しかし本文で問題になっているのは、諸労働の相違を捨象して労働一般に還元するというのではなくて、むしろここで《実際に……還元する》ということ述べているのは、具体的な労働を抽象的人間労働の直接的な実現形態にするということですから、注17aで言われていることと必ずしも合致していないのではないかと、ということなのです。

そして実際、フランス語版では、この注は削除され、この注17aとほぼ同じ内容のものが、「第4節 商品の物神性とその秘密」の注31の冒頭に若干変更されて紹介されていることが指摘されました。その部分を紹介しておきましょう。なおこの注は本文の《きわめて不完全なやり方ではあるが、経済学は確かに、価値と価値量とを分析した。(31)》(江夏他訳55頁)という部分に付けられたものです。

《(31)ウィリアム・ベティ以後に価値をその真実の内容に還元した最初の経済学者の一人である、かの著名なフランクリンは、ブルジョア経済学が行なう分析のやり方の一例を、われわれに提供していると言ってもよい。彼は言う。「交易一般とは労働と労働との交換にほかならないから、すべての物の価値は労働によって最も正確に評価される」(スパークス編『ベンジャミン・フランクリン等の著作』、ボストン、1836年、第2巻、267ページ)。フランクリンは、物が価値をもつのは、物体が重量をもつのと全く同じように自然である、と思っている。彼の観点からすれば、この価値がどのようにして最大限正確に評価されるかを見出すことだけが、問題なのである。彼は、「どんな物の価値も労働によって最も正確に評価される」と述べながら、交換される労働の差異を捨象して同等な人間労働に還元していることに気づいてさえいない。彼はこれとはちがってこう言うべきであったろう。長靴または短靴と机との交換は、靴製造と指物細工との交換にほかならないから、長靴の価値が最も正確に評価されるのは指物師の労働によってである! と。彼は労働一般という言葉を用いることによって、さまざまな労働の有用な性格と具体的な形態を捨象している。》(江夏訳56頁)

このフランス語版の注の方が、最初の注17aの内容に相応しいのかも知れません。ついでに『経済学批判』のなかで、フランクリンの同じ主張について、マルクスが論じている部分も参考のために上げておきます。

《フランクリンにあっては、労働時間は、経済学者流儀で一面的にただちに価値の尺度としてあらわされる。現実の生産物の交換価値への転化は自明のことであり、したがって問題は、その価値の大きさを測る尺度を発見することだけである。彼は言う。

「商業は一般に労働と労働との交換にほかならないから、すべてのものの価値は、労働によって最も正しく評価される[*]。」

[*] "Trade in general being nothing else but the exchange of labour for labour, the value of all things is, as I have said before, most justly measured by labour." (前掲書、267ページ)。

この場合、労働ということばかりに、現実的労働ということばかりを置き換えるならば、一つの形態の労働と他の形態の労働とが混同されていることが、ただちに発見されるであろう。商業とは、たとえば靴屋の労働、鉱山労働、紡績労働、画家の労働等々の交換であるからといって、長靴の価値は画家の労働によって最も正しく評価されるであろうか? フランクリンは逆に、長靴、鉱産物、紡糸、絵画等々の価値は、なんら特殊な質をもたない、したがってたんなる量によって測ることのできる抽象的労働によって規定される、と考えたのである[*]。しかし彼は、交換価値にふくまれている労働を、抽象的一般的労働、個人的労働の全面的外化から生じる社会的労働として展開しなかったから、必然的に、この外化した労働の直接的存在形態である貨幣を誤解した。だから彼にとっては、貨幣と交換価値を生み出す労働とは、なんら内面的な関連をもたず、貨幣はむしろ、技術的な便宜のために交換のなかへ外からもちこまれた用具なのである[*]。フランクリンの交換価値の分析は、経済学の一般の歩みにたいしては直接の影響をあたえないままにとどまった。なぜならば、彼はただ経済学の個々の問題を一定の実践上の機会にきいて取り扱ったにすぎなかったからである。

[*] 前掲書。『アメリカの紙幣にかんする論評と事実』、1764年。

[**] 『アメリカ政治論集』。所収、『アメリカの紙幣にかんする論評と事実』、1764年、を参照(前掲箇所)。》(国民文庫65-6頁)

【付属資料】

ここでは、今回検討した、それぞれのパラグラフに関連した、他の文献からの引用文を紹介しておきましょう(下線はすべてマルクスによる強調)。

◎第4パラグラフに関連したもの

《初版本文》

《価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明結晶した労働の凝固をなしている。しかし、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは、しかもどの商品体でも、労働の痕跡を示しているというわけではないが、その労働は無差別な人間労働ではなく、織布や紡績などであって、これらの労働もけっして商品体の唯一の実体をなしているのではなく、むしろいろいろな自然素材と混和されているのである。リンネルを人間労働の単に物的な表現として把握するためには、それを現実な物としてどころのすべてのものを無視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容もない人間労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、一つの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。ところが諸商品は諸物である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物的にそういうものでなければならぬ。言い換えれば、諸商品自身の物的な諸関係のなかでそういうものであることを示さなければならない。リンネルの生産においては一定量の人間労働力が支出されている。リンネルの価値は、こうして支出されている労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値は、上着にたいするリンネルの物体において反射されているのではない。その価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが上着を価値としては自分に等置していながら、他方同時に使用価値として上着とは区別されているということによって、上着は、リンネル-物体に対立するリンネル-価値の現象形態となり、リンネルの現物形態とは違ったリンネルの価値形態となるので

ある(18)。

(18)それゆえ、リンネルの価値を上着で表わす場合にはリンネルの上着価値と言い、それを製物で表す場合にはリンネルの製物価値と言ったりするので

ある。このような表現は、どれもみな、上着や製物などという使用価値に現われるものはリンネルの価値である、ということの意味で、いるのである。》(国民文庫版46-7頁)

《補足と改訂》

〈 [B]

商品の分析はわれわれに次のような結論をあきらかにした。すなわち、価値としては全ての商品は、その肉体のさまざまな多様性にもかかわらず、同じ単位のたんなる表現であり、すなわち質的に等しい、ということである。しかしながら、商品自身はあいかわらず、その価値性格のほんの少しの徴候をも自分からは示すことなく、生まれたままの自然形態にとどまっている。

価値としては、リンネルはただ支出された人間的労働力だけから成り立っており、そしてそれゆえ、透明に結晶した労働凝固体を成している。しかし、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは、しかもどの商品体でも労働の痕跡を示しているというわけではないが、その労働は無差別な人間的労働ではなくて、織布や紡績などであって、これらの労働もけっして商品体の唯一の実体をなしているのではなく、むしろいろいろな自然素材と結びついているのである。それゆえ、リンネルをその生産に支出された人間的労働力の単なる物的表現として把握するためには、それを現実にも物としているものすべてを無視しなければならない。それ自身抽象的でありそれ以外の質も内容ももたない人間的労働のそのものの対象性は、必然的に抽象的対象性であり、一つの思考物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。〉(63頁)

《フランス語版》

〈われわれが、すべての商品は価値としては結晶した人間労働にほかならないと言え、われわれの分析は、これらの商品を価値という抽象概念に還元しているのであるが、その前にも後にも、商品はただ一つの形態、すなわち有用物という自然形態しか所有していない。ある商品が他の商品と価値関係に置かれるやいなや、事情が全く変わる。この瞬間からある商品の価値性格は、他の商品にたいする自己の関係を規定するところの固有な属性として、現われ、確認されるのである。〉(21頁)

◎第5パラグラフに関連したもの

《初版本文》

《20エルのリンネル＝1着の上着、あるいはxエルのリンネルはy着の上着に値する、という相対的価値表現においては、上着は確かに、価値あるいは労働膠着物としてのみ認められているが、まさにそのために、労働膠着物は上着として認められ、上着は、そのなかに人間労働が凝結しているところの形態として認められているのである^(18a)。使用価値である上着がリンネル価値の現象形態になるのは、リンネルが、抽象的な、人間的な、労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的な具象物としての・上着という素材に、関係しているからにほかならない。上着という対象は、リンネルにとっては、同種の人間労働の感覚的な・手でつかみうる・対象性として、したがって現物形態においての価値として、認められている。リンネルが価値としては上着と同じ本質をもっているから、上着の現物形態が、このように、リンネル自身の価値の現象形態になるわけである。だが、使用価値である上着のうちに表示されている労働は、単なる人間労働ではないのであって、裁断労働という特定の有用な労働である。単なる人間労働、人間労働力の支出は、確かにどのようにでも規定できるが、それ自体としては無規定である。それは、人間労働力が特定の形態で支出されるときにだけ、特定の労働として実現され対象化されるのである。というのは、特定の労働にたいしてのみ、自然素材が、すなわち労働が対象化されている外界の物質が、相対するからである。ひとりヘーゲルの「概念」だけが、外界の素材なしで自己を客観化することを達成している⁽¹⁹⁾。

(18a) ある意味では、人間も商品と同じである。人間は娘をもってこの世に生まれてくるものでもなければ、我は我なりというフィヒテ流の哲学者として生まれてくるものでもないから、人間は自分をまず他人のなかに映し出してみよう。人間ペテロは、自分と同等なものとして人間パウロに関係することによって、初めて、人間としての自分自身に関係する。ところが、ペテロにとっては、パウロの全身がまた、パウロのパウロ然たる肉体のままで、人間という種族の現象形態として認められるのである。(19) 「概念は、初めは主観的でしかないが、外界の物質あるいは素材を必要とせずに、自己自身の活動に適合しながら自己を客観化することへと前進する。」ヘーゲル『倫理学』、三六七ページ。所収、『エンテクロペディヤ、第一部、ベルリン、1840年。』

リンネルは、人間労働の直接的実現形態としての裁断労働に関係することがなければ、価値あるいは具体化した人間労働としての・上着に、関係することができない。だが、リンネルをして上着という使用価値に興味を抱かせるものは、上着がもっている羊毛製の快適さでもなければ、ボタンをかけた上着の恰好でもなければ、上着に使用価値の特徴を与えている他のなんらかの有用な品質でもない。上着は、リンネルにとっては、リンネルの価値対象性をリンネルの鞣で固めた使用対象性と区別して表わすということにしか、役立っていない。リンネルは、自分の価値をあざ剤〔あざは植物名。あざ剤は駆虫剤、通経剤などのことを言う〕とか乾燥人糞とか靴墨とかで表現しても、同じ目的を達したであろう。だから、裁断労働がリンネルにとって同じように有効であるのも、それが目的にかかった生産活動あるいは有用な労働であるかぎりにおいてはではなくて、それが特定の労働として人間労働一般の実現形態すなわち対象化様式であるかぎりにおいてのことでしかない。リンネルがその価値を上着ではなく靴墨で表現したならば、リンネルにとっては、裁断の代わりに靴墨作りが同じく、抽象的な、人間的な、労働の・直接的実現形態として認められたであろう^(19a)。つまり、ある使用価値あるいは商品体が価値の現象形態あるいは等価物になるのだが、このことは、別のある商品が、上記の使用価値あるいは商品体のなかに含まれている、具体的な、有用な、労働種類――抽象的な、人間的な、労働の・直接的実現形態としての――に関係する、ということに依拠しているものでしかない。

(19a) すなわち、靴墨の調整そのものが靴墨作りと俗に呼ばれているかぎりでは。

われわれはここでは、価値形態の理解を妨げているあらゆる困難の噴出点に立っている。商品の価値を商品の使用価値から区別すること、または、使用価値を形成している労働を、たんに人間労働力の支出として商品価値のなかに計算されているかぎりでのその同じ労働から区別することは、比較的容易である。商品または労働を一方の形態において考察するばあいには、それを、他方の形態においては考察しないのであって、逆のばあいには逆になる。これらの抽象的な対立は、おのずから分離するものであり、したがって区別しやすい。商品にたいする商品の関係においてのみ存在する価値形態については、そうではない。使用価値あるいは商品体が、ここでは、ある新しい役割を演じている。それは、商品価値の・したがってそれ自身の反対物の・現象形

態になる。同様に、使用価値のなかに含まれている**具体的な**、有用な、労働は、それ自身の反対物、すなわち、**抽象的な**、人間的な、労働の・単なる表現形態になる。商品の対立しあっている諸規定がここでは、分離するのではなく、互いに相手のうちに反射しあっている。このことは、一見したところいかにも奇妙であるが、さらに深く熟慮すると、必然的であることが明らかになる。商品はもともと、ある**二面的な物**、使用価値にして**価値**、府用な労働の生産物にして**抽象的な労働膠着物**なのである。だから、自分をそのあるがままのものとして表わすためには、商品はその形態を**二重**にしなければならない。使用価値という形態のほうは、商品が生まれつきもっているものである。この形態は、商品の現物形態である。価値形態のほうは、商品が他の諸商品との関係において初めて手に入れるものである。ところが、商品の価値形態は、それ自身やはり**対象的な形態**でなければならない。諸商品もっている唯一の**対象的な形態**は、自分たちの使用姿態、自分たちの現物形態である。ところで、一商品たとえばリンネルの現物形態は、この商品の価値形態の**正反対物**であるから、この商品は、一つの**別の現物形態**、すなわち**別の一商品の現物形態**を、自分の**価値形態**にしなければならない。この商品は、自分自身にたいしては直接に行ないえないことを、直接に他の商品にたいして、したがって回り道をして自分自身にたいして、行なうことができるのである。この商品は、自分の価値を、自分自身の**体軀**であるいは自分自身の使用価値で、表現することはできないが、直接的な**価値存在**としての・一つの別の使用価値あるいは商品体に、関係することができる。この商品は、自分自身のなかに含まれている、**抽象的な**、人間的な、労働の・単なる表現形態としての**具体的な労働**には、関係することができなくとも、別の商品種類に含まれている、**抽象的な**、人間的な、労働の・単なる表現形態としての**具体的な労働**には、もちろん関係することができる。そうするためにこの商品に必要なことは、別の商品を等価物として自分に等置する、ということだけである。一商品の使用価値が別の商品にたいして一般的に存在しているのは、この使用価値がこのようなやり方で別の商品の価値の現象形態として役立っている、というかぎりにおいてのことではない。単純な**相対的価値表現**である x 量の商品 A = y 量の商品 B のなかに、**量的な関係**だけを考察すると、見いだされるのはまたも、**相対的価値の変動**にかんする前述の諸法則だけであって、これらの法則はすべて、諸商品の**価値量**はそれらの商品の生産に必要な**労働時間**によって規定されている、ということにもとづいているのである。ところが、両商品の価値関係をその**質的な側面**から考察すると、上述の**単純な価値表現**のなかに、**価値形態の秘密**を、したがってまた、一言で言えば**貨幣の秘密**を、発見することになる⁽²⁰⁾。

(20) 一七八九以前には、本職の論理学者たちが判断および推論の範例の形態内容さえも見落としていたのだから、経済学者たちが素材について関心をもつことにすっかり影響されて、**相対的価値表現の形態内容**を見落としてきたということは、怪しむにあたらぬ。》(江夏沢37-40頁)

《初版付録》

〈c 価値関係のなかに含まれている**相対的価値形態**の内実。〉

上着が**価値**であるのは、ただ、それがその生産において**支出された人間労働力**の**物的な表現**であり、したがって、**抽象的な人間労働の凝固**であるかぎりにおいての**みのこと**である――**抽象的な労働**であるのは、上着のなかに含まれている**労働**の特定の、有用な、**具体的な性格**からは**抽象**されているからであり、**人間労働**であるのは、**労働**がここでは**ただ人間労働力一般の支出としてのみ物**を言うからである。したがって、リンネルは、**人間労働を唯一の素材**としている一物体としての上着に**関係させられることなし**には、**一つの価値物としての上着に**関係**することはできない**、言い換えれば、**価値としての上着に**関係**させられることはできない**。ところが、**価値として**は、リンネルも同じ**人間労働の凝固**なのである。だから、この関係のなかでは、上着という物体が、**リンネルと自分とに共通な価値実体**すなわち**人間労働を代表**しているのである。だから、**この関係のなかでは、上着はただ**価値の姿**としてのみ**、したがってまたリンネルの**価値姿態**としてのみ、**リンネル価値の**感覚的な現象形態**としてのみ**、認められているのである。こうして、**価値関係を媒介**として、一商品の価値は、**他の一商品の使用価値**において、すなわち、**他の、自分自身とは種類の違う一商品体**において、**表現されるのである**。〉(文庫版135頁)

《補足と改訂》

〈 [B] 〉 ◇

それゆえ、**価値関係**――他の商品との**交わり**――のなかでリンネルの**価値**は**使用対象性**とは異なった表現を獲得する。しかし、どのようにしてか。リンネルが上着に等しいものとして表現されることによってである、それはちょうど、キリスト教徒の**羊的性格**が**神の仔羊**との**同等性**において現れるのと同じである。しかし、上着、上着商品の**身体**は一つの**単なる使用価値**である。それゆえ、リンネルの**価値**はそれとは**反対**のもの、他の何らかの**種類の使用価値**、それが何であれとにかく**使用価値**で、表現される。しかしながら、**使用価値上着が**価値**を表現していない**のは、リンネルの任意の一片が**価値**を表現していないのと同じである。このことは、同じ上着が、リンネルの自分との**関係**のなかではこの**関係の外部**におけるよりも、多くの意味をもつ、ということを示すだけである。ちょうど、多くの人間は**金モール**で飾られた上着の中ではその外でよりも多くの意味をもつように。上着の生産においては、**裁縫労働**という形態のもとに、**人間的労働力**が**実際に支出**され、したがって、上着のなかに**人間的労働**が**堆積**されている。それゆえ、この面からすれば、上着体は**価値の担い手**である。もっとも、上着のこの**属性**そのものは、上着がどんなにすり切れてもその**糸目**から透けて見えるわけではないが。そして、リンネルの**価値関係**のなかでは、上着はただこの面**だけ**から**通用**する。リンネルが自分に等しい物としての上着体**に**関係**するのは、上着が**価値体**であるからであり**、そしてそのかぎりでのことである。いまや、明かになったことは、リンネルはその**価値**を上着と等しい物としての**表現**を通して、**使用価値上着**における自分自身の**価値**の**表現**を通してのみ、あますところなく**表現**された、ということである。〉 〈リンネル商品は、当然のことながら**頭脳**をもたないのであるから、その**価値**を形成している**労働**がどの**種類**のものであるかを表現するために、他の方法でそれをはじめ、自分に**質的に等しい物**としての、**価値物**としての上着との**関係**は、上着に潜んでいる**労働**をリンネルにひそめている**労働**に等置する。ところで、確かに、上着をつくる**裁縫労働**は、リンネルをつくる**織布労働**とは**種類の異なる具体的な労働**である。しかし、**織布労働**との等置は、**裁縫労働**を、両方の**労働**のなかの**現実**に等しい物に、**人間的労働一般**という両方に**共通な性格**に、**実際に還元**する。この回り道を通ったうえで、**織布労働**も、それが**価値**を織り出す**限り**においては、**裁縫労働**から**区別**される**特徴**をもっていないこと、すなわち**抽象的な人間労働**であること、が語られるのである。〉

《フランス語版》

〈上衣がリソネルの等価物として置かれるならば、上衣に含まれている労働は、リソネルに含まれている労働と同一であると確認される。確かに、裁断は機織とはちがう。だが、機織にたいする裁断の等式は事実上、裁断を、機織と現実に通なものに、人間労働という性格に還元する。このような回り道をして、機織は、それが価値を織るかぎりでは衣類の裁断と区別されないということが、すなわち、抽象的な人間労働であるということが、表現されるのである。したがって、この等式は、リソネルの価値を構成する労働の独自の性格を表現している。〉（21頁）

『資本論』を読んでみませんか

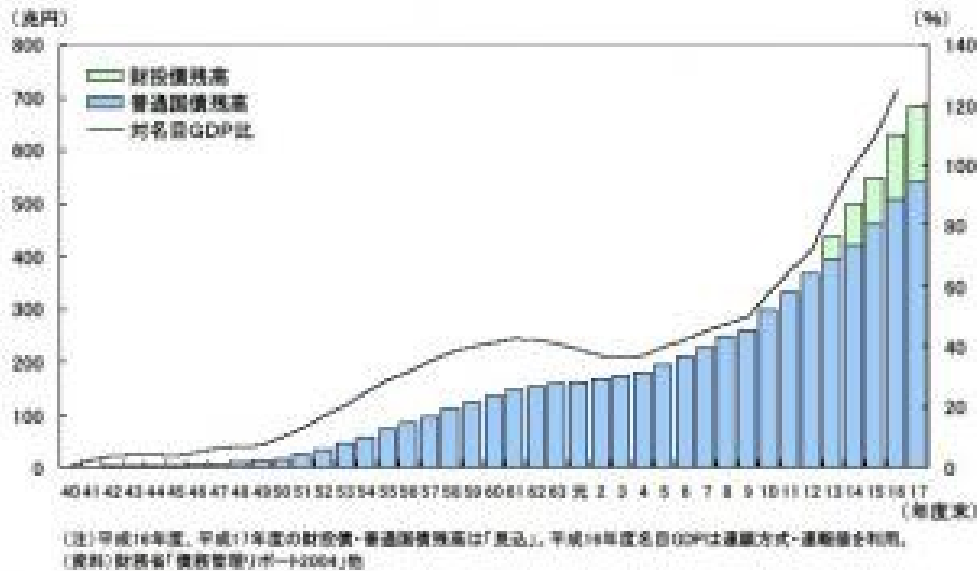


鳩山・民主党連立政権は、最初の正念場を迎えつつあります。マニフェストで謳った「子供手当」等の諸政策実現のための財源を捻出することが問われているからです。このために、総額14.7兆円の補正予算の見直しを行い、ようやく2.5兆円（17%にあたる）を確保したとされています。しかしこれでは10年度に「子供手当」等の実施に必要な7.1兆円に達せず、さらに上積みをと考えているようです。

しかし見通しはなかなか厳しい。というのは、税収が当初見込みの46兆円を大幅に下回ることが予想され（40兆円を切るとの予想）、その補填のために、結局は、また赤字国債の発行を余儀なくされつつあるからです。

かくして、マニフェストでバラマキを約束した民主党政権のもとで、財政破綻はますます進行することは必至の状況です。

09年度の国債の累積発行残高は592兆円（国民一人当たり463万円の借金！）、地方自治体の借金も含めると債務残高は816兆円にのぼり、国内総生産（GDP）に対する比率は174%と主要先進7ヶ国のなかでは最大です（二番目に多いイタリアでも114%、他の5ヶ国は60~70%）。



この借金の返済をどうするのか。民主党は消費税の増税は少なくとも4年間は考えないともいいますが、無駄を省くだけでは、この借金の返済は事実上不可能です。これらの借金は、まさに危機に陥った資本主義体制を救済するために、歴代の自民党政権が膨大な国家の財政信用膨張政策を発動することによって積み上げてきたものだからです。だから例え民主党政権であろうが、自民党と同じように、資本主義を前提にし、その体制的危機の救済を自民党と同様自らの絶対的な使命とするかぎり、この借金の泥沼から抜け出すことは出来ません。

マルクスは国債の発行は、増税、しかも大衆課税である間接税（消費税）の導入とその「自動累進」化による「加重課税」を不可避にさせると次のように指摘しています。

《国債は国庫収入を後ろだてとするものであって、この国庫収入によって年々の利子などの支払がまかなわれなければならないのだから、近代的租税制度は国債制度の必然的な補足物になったのである。国債によって、政府は直接に納税者にそれを感じさせることなしに臨時費を支出することができるのであるが、しかしその結果はやはり増税が必要になる。他方、次々に契約される負債の累積によってひき起こされる増税は、政府が新たな臨時支出をするときにはいつでも新たな借入れをなさざるをえないようにする。それゆえ、最も必要な生活手段にたいする課税（したがってその騰貴）を回転軸とする近代的財政は、それ自体のうちに自動的累進の萌芽をはらんでいるのである。過重課税は偶発事件ではなく、むしろ原則なのである。それだから、この制度を最初に採用したオランダでは、偉大な愛国者デ・ウィットが彼の箴言《しんげん》のなかでこの制度を称賛して、賃金労働者を従順、儉約、勤勉にし……これに労働の重荷を背負わせるための最良の制度だとしたのである。》（『資本論』第1部全集版23b986-7頁）

民主党政権のもとでも、資本主義の矛盾を労働者大衆にしわ寄せする以外にないことはますます明らかになるでしょう。もし民主党が労働者大衆の側に徹底して立つというのなら、資本主義そのものを克服する以外にあり得ないからです。財政の逼迫は民主党を追い詰めて、結局は、民

主党も自民党と同じであり、第二自民党でしかないことを暴露するでしょう。

貴方も民主党政権の本質を見抜くためにも、『資本論』と一緒に学びませんか。

第17回「『資本論』を読む会」の報告

◎秋祭り

泉州地域の秋祭りの季節はほとんど過ぎていましたが、第17回「『資本論』を読む会」を開催した10月18日は、あいにく「堺まつり」と重なってしまいました。おかげで、祭りのパレードに参加する団体を世話するピースさんは、どうしても都合がつかず、結局、「読む会」をお休みされ、寂しい開催となりました。

今回は「a 相対的価値形態の内実」の第6～8パラグラフの学習を行ないました。こちらあたりはなかなか難しいところでもあり、じっくり時間をかけて議論しました。さっそくその報告をしましょう。

◎《課題はすでに解決されている》とは？（第6パラグラフ）

まず第6パラグラフ全体を紹介しておきます。今回も分節ごとに検討するために、i)、ii)、iii) ……と記号を付します。また関連資料は付録として後回しにします。

《i)もつとも、リンネルの価値を構成している労働の特有な性格を表現するだけでは十分ではない。ii)流動状態にある人間労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するけれども、価値ではない。iii)それは、凝固状態において、対象の形態において、価値になる。iv)リンネル価値を人間労働の凝固体として表現するためには、リンネル価値は、リンネルそのものとは物的に異なっていると同時に、リンネルと他の商品とに共通なある「対象性」として表現されなければならない。v)課題はすでに解決されている。》

まずi)の一文は、直接、第5パラグラフを受けたものです。だからこの一文を読むと、第5パラグラフの課題が《リンネルの価値を構成している労働の特有な性格》がどのように表現されるのかを明らかにすることであったことが分かります。しかしそれが表現されるだけでは《十分ではない》というのです。何に対して十分ではないというのでしょうか。いうまでもなく、「リンネルの価値を表現する」という点ではまだ十分ではないということです。

そしてii)では、その不十分な理由が説明されています。第5パラグラフでは《リンネルの価値を構成している労働の特有な性格》、つまりそれが一般の人間労働であることが、その実現形態となっている裁縫労働によって目に見える形で表現されていることが明らかにされたのですが、しかし一般の人間労働ということが表現されても、それだけでは、まだ価値を表現したことにはならないのです。というのは、人間労働は価値を形成するが、価値そのものではないからです。

というのは、iii)、第1節で明らかになったように、価値というのは、商品に対象化された一般的な人間労働だからです。だから人間労働が商品の生産のために支出されて、その流動状態から対象的な形態になって始めて、つまり商品のなかに凝固して、始めてそれは価値になるわけだからです。

iv)、だからリンネルの価値をある物的な対象物に凝固したもとして表すためには、それはリンネルとは物的に異なると同時に、リンネルと他の商品と共通なある「対象性」として表す必要があるということです。さて、この部分で、《リンネルと他の商品とに共通なある「対象性」という一文を如何に理解するかが問題になりました。ここで「他の商品」というのは果たして何を意味しているのでしょうか。上着のことでしょうか。もし上着なら、「リンネルと上着とに共通なある「対象性」ということでマルクスは何をいわんとしているのでしょうか。学習会では、この「他の商品」というのは、上着ではなく、リンネルと同じようにその価値を上着で表す商品、例えば靴墨とか鉄とかを意味しているのではないか、ということになりました。つまりリンネルは自分とは物的に異なっていると同時に、リンネルが靴墨や鉄やコーヒーのような他の商品と共通してそれらの価値を表すある「対象性」として表現されなければならないのであり、それはすなわちこの場合は上着のことではないか、というわけです。だからこの「他の商品」を「上着」と捉えると、おかしくなると考えたのです。

しかしよくよく考えてみると、そのように考えると、上着はすでに一般的な等価物になることになってしまいます。二商品の価値関係を考察しているこの段階で、そうした問題が論じられていると考えることが果たして妥当なのか、という疑問が禁じえません。

そこでこの問題を考えるために、同じ部分のフランス語版を参照してみたいと思います。

《しかしながら、リンネルの価値を産む労働の独自の性格が表現されるだけでは、充分でない。流動状態にある人間労働力、すなわち人間労働は、確かに、価値を形成するが、価値ではない。それは、ある物体という形態で凝固した状態においてのみ、価値になるのである。したがって、リンネルの価値を表現するためにみだしなければならない諸条件は、自己矛盾しているように見える。一方では、リンネルの価値を、抽象的な人間労働の純粋な凝縮として表わさなければならない。商品は価値としては、これ以外の実在をもたないからである。同時にこの凝縮は、リンネル自体とは明らかにちがったある物体という形態を帯びなければならない。この形態は、リンネルのものでありながら、リンネルにとっては他の商品と共通なものなのである。この問題はすでに解決されている。》（江夏他訳21頁）

ここでマルクスが《リンネルの価値を表現するためにみだしなければならない諸条件は、自己矛盾しているように見える》と述べていますが、どういう点で《自己矛盾》だということでしょうか。それは一方では、《抽象的な人間労働の純粋な凝縮》として表すとともに、他方では《リンネル自体とは明らかにちがったある物体という形態》を帯びなければならないからだといわれています。

リンネルの直接的な対象性というのは、そのゴウゴウとした使用価値です。しかしそこにはそれをどんなにすり切れるほど捜してみてもリンネルの価値そのものを見出すことはできません。だからリンネルの価値は、そのゴウゴウした対象性とは違った別のある物体形態として表さなければ目に見える形では現われて来ないのです。だからこの別のある物体というものは、それは別の商品の直接的な対象性でしかありません。しかしそれはリンネルの価値がそれによって表現されているわけですから、その別のある商品の物体形態は、リンネルの価値の物体形態でもあり、その限りではリンネルのものなのです。しかしそれはリンネルのものではあるとはいっても、しかし別の商品の直接的な対象性ですから、それは当然、別の商品の対象性でもあり、別の商品のものであることには違いはありません。だからその別のある商品の直接的な対象性は、その別の商品のものであると同時に、リンネルとの価値関係のなかでは、リンネルの価値の物体形態でもあり、その限りではリンネルのものでもあるという関係にあるわけです。だからマルクスは、それはリンネルのものであると同時に別の他の商品のものである「対象性」として表現される必要がある、と述べているのではないのでしょうか。

だから最初の問題に戻ると、《リンネルと他の商品とに共通なある「対象性」》という場合の《他の商品》とは、やはり「上着」であると言わなければなりません。ここでマルクスが言っていることは、上着の直接的な対象性は、当然上着のものですが、しかしそれはリンネルとの価値関係に置かれると、リンネルの価値の物的表現形態となり、リンネルの価値の対象性が目に見える形（対象性）として現われたものなのだから、その限りではリンネルのものでもある、だからその「対象性」はリンネルと上着とに共通なものだと述べているわけです。それは一方では上着の直接的な自然な対象性であると同時に、他方ではリンネルの価値が目に見える形で現われた物的な対象性でもあるわけです。

次はb)です。ここで《課題はすでに解決されている》とマルクスは述べているのは、どういう意味なのでしょう。興味深いことに、それは論者によって様々な理解されているのです。少しその代表的なものを紹介してみましょう。

●山内清著『資本論商品章詳注』――〈直前の3と5の段落、すなわちリンネルの価値存在の現出過程をさす。〉

●白須五郎著『マルクス価値論の地平』――〈「課題は既に解決されている」というのは、リンネル価値の表現に関して第三パラや第五パラの叙述で既に解決済みであって、第七パラ以降の叙述が単なる補論あるいは詳論にすぎないことを示しているのであろうか。決してそうではあるまい。……そうではなくて、この文言が意味するのは、第三パラで価値表現の表層構造が確認され、更に第五パラで価値実体レベルで価値の純粋な社会的性格の表現が基本的に開明されたことによって、価値の対象性としての表現を問うこの課題の解決にとっての必要条件が既に準備されていること、このことである。〉

●松石勝彦著『資本論研究』――〈リンネル価値を「人間労働の凝固」として表現するためには、上衣とに「共通な『対象性』として表現されねばならない」が、「課題はすでに解決されている」。すなわち、第一段ですでにリンネル価値が上衣に共通な価値として表現されており、第二段では異種商品の等価表現が異種労働を人間労働一般に還元し、これの凝固・対象化が価値であることをみたのであるから、以上を総合すれば、事実上リンネル価値は「人間労働の凝固」として、上衣とに「共通な『対象性』として表現」されているのである。〉

これらの解釈に共通するのは、《課題はすでに解決されている》というのですから、当然、それまで述べてきたことのなかですでに解決済みのことだとマルクスは言っているのだらうと解釈していることです。ところが以前にも参照させてもらった所沢の「『資本論』を読む会」では、この部分について、次のような理解を紹介しています (<http://shihonron.exblog.jp/m2008-09-01/>)。

〈★「課題はすでに解決されている」ことの内容は続く箇所ですべて述べられている。〉

つまり次に続く第7パラグラフ以降で、その内容が述べられているのだというのです。

なんとも分かりにくいのですが、マルクスも罪な表現をしたものです。しかし実は、この問題については、マルクス自身が第二版のために準備した『補足と改訂』のなかで、ズバリ次のように述べているのです。

《もっとも、リンネルの上着との同等性関係がリンネルに含まれている労働の抽象的人間的性格を表現するだけでは充分ではない。人間的労働すなわち流動状態にある人間的労働力は価値を形成するが、価値ではない。それは凝固した状態で、対象の形態で、価値になる。ところで、リンネル価値の対象的形態とは何であろうか？ 上着形態である。》（小黒訳66頁）

ここではマルクスは《課題はすでに解決されている》などというややこしい表現は使わずに、ズバリ《リンネル価値の対象的形態とは何であろうか？ 上着形態である》と明確に述べています。つまりマルクスが《課題はすでに解決されている》ということと言いたいのは、これまでわれわれはリンネルに上着を等置してきたのだから、当然、リンネルの価値の対象的形態として、われわれが見出すのは、上着形態でしかないのだ、ということなのです。分かってみればマルクスは難しいことを言っているのではなくて、いとも簡単なことを簡単に言っているだけであることが分かるのです。

◎第7パラグラフについて

《(1)リンネルの価値関係の中で、上着が、リンネルに質的に等しいものとして、すなわち同じ性質の物として、通用するのは、上着が一つの価値だからである。b)だから、上着は、ここでは、価値がそれにおいて現れる物として、または手をつかめるその現物形態で価値を表す物として、通用する。h)ところで、上着は、すなわち上着商品の身体は、たしかに単なる一使用価値である。c)上着が価値を表現していないのは、リンネルの任意の一片が価値を表現していないのと同じである。a)このことは、ただ次のことを示すだけである。d)すなわち、上着はリンネルに対する価値関係の内部ではその外部でよりも多くの意味をもつということである。f)ちょうど、多

くの人間は金モールで飾られた上着の中ではその外でも多くの意味をもつように。》

このパラグラフは、当然のことですが、第6パラグラフを直接受けたものであることが分かります。つまり第6パラグラフの最後の文言、《課題はすでに解決されている》の代わりに《リンネル価値の対象的形態とは何であろうか？ 上着形態である》という文言に置き換えてみると、その続き具合がよく分かります。つまりリンネルの価値は上着形態であるが、ではリンネルの価値は上着形態であるとはそもそもどういふことをもう一度反芻しているように思えるのです。とにかく分節ごとに見ていくことにしましょう。

4) では、リンネルの価値の対象的形態が上着形態であるというのは、リンネルの価値関係のなかでは、上着がリンネルと質的に等しいものとして通用しているからであり、だから上着そのものが一つの価値だからだと述べています。

0)、だからここでは、上着は、価値がそれにおいて現われる物として、手をつかめる現物形態で表すものとして、通用しているのだ、ということです。

0)、しかし商品体としての上着は、単なる一つの使用価値である。

0)、だから上着の使用価値がその価値を表していないことは、リンネルの使用価値がリンネルの価値を表していないのと同じなのです。

0)0)、だからこのことは、上着はリンネルに対する価値関係の内部では、それを単独でみている場合とは違って、より多くの意味をもつということです。これは一般に「形態規定性」とも言います。つまり上着はリンネルとの価値関係の内部では、新たな形態規定性を受け取る、帯びる、ということです。

0)、それはちょうど、金モールで飾られた上着のなかではその外でも多くの意味をもつと同じだと述べています。この部分の理解で若干の議論がありました。J J 富村さんがもう一つここでマルクスが何を言いたいのかわからないと問題提起をしたからです。つまりこの例とその前で述べていることと、どういう点で類似しているのかということです。

この部分はフランス語版の方が面白いので、まずそれを紹介しておきましょう。

《それはちょうど、金モールの衣裳をつけた多くの重要人物が、金モールをはずせば全くくだらなくなる、のと同じである。》(江夏他訳21-22頁)

だからこの場合、上着に新たに付着する形態規定性(つまりその自然形態が価値の現物形態として通用するという)をマルクスは金モールに例えていると考えることができます。つまり上着はリンネルとの価値関係の外では、つまり上着を単独で見ているだけなら、ただの上着に過ぎませんが、しかしリンネルとの価値関係のなかに置かれると、まるで金モールを着た人間のように、それ以上の意味を持ちはじめるといふのです。ただこの上着の金モールで着飾ったような神秘的な性格のものはまだこの時点では潜在的であり、はっきりとは現われていません。しかしマルクスの例えはそうしたものを捉えたものと言えるのかも知れません。

だからこのパラグラフは、それまでのリンネルの価値が上着形態によって表現された現出過程を振り返って、改めてリンネルとの価値関係におかれることによって上着に付着する新たな形態規定性を、それとして確認しているものと言えます。そうしてその点では、次のパラグラフも同じものと言うことができます。

◎第8パラグラフについて

《4)上着の生産においては、裁縫労働という形態のもとに、人間労働力が実際に支出された。0)したがって、上着の中には人間労働が堆積されている。0)この側面からすれば、上着は「価値の担い手」である。0)もともと、上着のこの属性そのものは、上着がどんなにすり切れてもその糸目からすけて見えるわけではないが。0)そして、リンネルの価値関係の中では、上着はただこの側面だけから、したがってただ体現された価値としてのみ、価値体としてのみ、通用する。0)ボタンをかけた[よそよそしい]上着の外観にもかかわらず、リンネルは、上着のうちに同族のうわしい価値魂を見てとったのである。0)しかし、上着がリンネルに対して価値を表すことは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態をとることなしには、できないことである。0)ちょうど、個人Aが個人Bにたいして王位に対する態度をとることは、同時にAにとって王位がBという肉体的姿態をとること、したがって、顔つき、髪の毛、その他なお多くのものが国王の交替のたびに替わるということなしには、できないように。》

4)、0)、0)、について、これは第2節で論じられていたことを前提すれば、簡単な事実です。まず4)、上着の生産においては、裁縫労働という具体的な有用労働を通じて、人間労働一般が支出されています。

0)、したがって上着のなかには人間労働一般が堆積されているわけです。

0)、だからこの面では上着は「価値の担い手」です。ここで「価値の担い手」という文言が鍵かっことで括られています、その前の第6パラグラフでも「対象性」が鍵かっこに入っていました。これは恐らくこの言葉を強調する意味があるのではないかと思います。われわれは「価値の担い手」という言葉から、第1節でも次のような一文があったことを思い出します。

《使用価値は、富の社会的形態がどのようなものであろうと、富の素材的内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態においては、それは同時に交換価値の素材の担い手をなしている。》(全集版49頁)

第7パラグラフで出てる「価値の担い手」は、この第1節と同じことを述べているのでしょうか。それにしては、第1節の場合は「交換価値の素材の担い手」と書いてあり、今回の場合(「価値の担い手」と)とは若干異なります。以前(第2回の報告)、第1節のこの部分を検討

したときにも、少し学習会で議論になった内容を紹介しましたが、そのときにもく「クオーターの小麦」の交換価値の「素材的担い手」になっているのは「クオーターの小麦」という使用価値そのものなのか」ということが問題になりました。そして結局、この第1章の場合は、そうではなく、『経済学批判』の一文を参照すると、く「クオーターの小麦」の「交換価値の素材的担い手をなしている」ものとしてマルクスが語っているのは、「x量の靴墨、y量の絹、z量の金」等々の語使用価値のことであることが分かる」と結論付けたのでした。これは「価値」の現象形態である「交換価値」の「素材的担い手」というわけですから、そのように理解できたのです。しかし今回の場合は、そうではありません。上着に支出された人間労働が上着のなかに堆積されており、この側面から見るなら上着は「価値の担い手」だと述べているのですから、上着が担い手になっている価値とは上着の価値以外の何物でもないのです。つまりこの場合は上着の価値は上着という物的対象のなかにあるという意味で、上着は「価値の担い手」になっているのだと思います。その意味では第1節で述べていることは違った内容なのです。

二)、だから上着が「担い手」になっている上着自身の価値は、依然として目に見えるようなものになっているわけではありません（それは現象形態にはなっていないから）。だから「上着のこの属性そのもの」、つまり上着のなかに人間労働力が堆積されて上着の価値になっているという属性、つまり抽象的人間労働の凝固体という属性そのものは、上着がどんなにすり切れても見えないわけです。

三)、ところがリンネルとの価値関係におかれた上着は、ただ《この側面だけから》、つまり人間労働一般が堆積されているという側面だけから、《したがってただ体現された価値としてののみ、価値体としてののみ、通用する》とされています。これは以前にも紹介しましたが、《すなわちその唯一の素材が人間の労働から成っている物として通用する、あるいはそれゆえその肉体が人間の労働以外の何物をもあわさない物として通用する》（「補足と改訂」ということと同じことを述べているように思えます。つまり上着を作るのは裁縫労働という具体的な労働であり、その具体的有用労働を通じて人間労働力一般が支出されたのですが、しかしリンネルとの価値関係におかれた上着の場合は、この具体的有用労働である裁縫労働そのものが人間労働力一般の支出形態として通用するのですから、上着はただ単に人間労働力一般だけが支出されたものとして通用しているのだというのです。上着の具体的な物的形態を形作ったのは具体的な有用労働である裁縫労働なのですが、その裁縫労働が、ここでは、つまりリンネルとの価値関係におかれた上着においては、一般的な人間労働そのものの支出形態として通用しているのですから、その裁縫労働によって形作られた上着の具体的な形態そのものが、価値そのものとして通用している。つまり上着は、その身体で価値を表すものである「価値体」として通用しているのだ、というわけです。

ここで「価値体」という用語がでてきますが、これは先の第3パラグラフででてきた「価値物」とどう違うのが問題になります。しかし、それは項を改めて問題にすることにします。

四)、上着を単独で見ている限りでは、上着をいくら見ても上着のなかにある（隠された？）その価値は絶対に見えません。ところがリンネルが自分と価値関係におかれた上着をみた場合、リンネルはボタンをかけてよそよそしく振る舞い、つまり自身の価値を隠しているように見える上着なのに、そうした上着の姿そのものがリンネルにとっては、価値そのものとして見えるのだ、上着そのものの姿にリンネルのなかにある価値を上着の姿に反射させて見ているのだというわけです。

五)、しかし上着がリンネルに対して価値を表すということは、リンネルにとって価値が上着そのものに見える、価値が上着形態をとっている以外には不可能です。

六)、上記に述べたことをまた例を上げて説明しているのですが、これも少し学習会で議論になりました。これもフランス語版の方が分かりやすそうなので、それをまず紹介しましょう。

《同じように、私人Aは個人Bにたいして、Bの眼に映ずる陛下が直接Aの容貌と体躯とを帯びなければ、陛下であることを表わしえないのである。陛下が人民の新たな父となるたびごとに、顔面や毛髪やその他多くの物を変えるのは、おそらくこのためであろう。》（22頁）

単なる一私人に過ぎないAが個人Bに対して王として映るのは、Aの容貌や体躯が王そのものとして見えないと、Bに対してAは王としては見えないというわけです。王位それ自体は何か目に見えるものではありません。だから王位を何か具体的なものとして平民が見ようとするなら、結局は、王位についた人物の顔かたちを王そのものとして見るしかないのだ、ということのようです。だから新しい人が王になると、顔面や毛髪やその他の色々な物を変えて、如何にも王らしく見せるのは、このためだろうというわけです。みすぼらしい格好では、いくら王だといっても誰も王としては見えない、表現されたことにはならないということかも知れません。これは例えば芸術家は如何にもそれらしい格好をするのと似ているかも知れません。

つまりリンネルにとって上着が価値を表すためには、上着の姿そのものが価値そのものにならないと価値が目に見える形で見えたことにはならないということなのです。

◎「価値物」と「価値体」との区別と関連について

最後に、「価値物」と「価値体」との区別と関連について考えてみましょう。この両概念の区別と関連を理解するということは、それぞれの用語が出てくる第3パラグラフと、第8パラグラフとの関連、その両パラグラフの間における一連の展開を知ることでもあります。

第3パラグラフでは、リンネルが「相対的価値形態」にあるということはどういうことが明らかにされています。

そもそもリンネルが「相対的価値形態」にあるということは、本来は幻のようで捉えどころのない対象性しか持たないリンネルの価値が、上着という他の商品に関連することによって、相対的に、目に見える具体的な形ある対象性（物）として表されているということです。そしてそのためには、リンネルと同等性の関係（＝価値関係）に置かれた上着は「価値物」として通用しなければならない、というのがマルクスが述べていたことです。

つまり上着がリンネルとの価値関係においては、価値が「形ある物として現われているようなもの」として通用しなければならぬのだということです。

そして第4～6パラグラフでは、上着がリンネルとの価値関係において「価値物」として通用するということがどういふことなのか、価値の実体にまで遡って明らかにされています。

すなわちリンネルの価値を形成する労働の独自の性格（抽象的人間労働）とそれが物的対象に凝固した状態にあるということが、上着をつくる裁縫労働と、その上着の物的な具体的な身体によって表現されていることが明らかにされているのです。

まず第5パラグラフでは、上着をつくる裁縫労働がリンネルをつくる織布労働に等置されることによって、一般的人間労働に実際に還元されること、つまりリンネルの価値を形成した抽象的人間労働が、上着に表れている（痕跡として残っている）裁縫労働という具体的で感覚的に捉えられる労働によって表現されていることが明らかにされ、次に第6パラグラフでは、そうした一般的人間労働の実現形態として意義を持っている裁縫労働がつくったものが、まさに上着そのもの、上着のその具体的な姿であるのだから、そうした上着体そのものが一般的人間労働の凝固したものなのだ、ということでした。

だから、第7・8パラグラフでは、そうした一般的人間労働の実現形態である裁縫労働がつくった上着体こそが抽象的人間労働の凝固体、すなわち価値そのもの、「一般的な価値肉体」（初版本文）であること、すなわち価値がそれ自身を形あるものとして表しているもの、すなわち「価値体」であることが示されたのです。

だから「価値物」も「価値体」も、どちらも価値を「物」として表しているものですが、「価値物」は、リンネルと上着という二商品の直接的な反省関係から導き出されたものであるのに対して、「価値体」は、なぜ自然形態が価値という抽象的なものを表しているのかを、価値の概念（実体）にまで遡ってその根拠が明らかにされたものだといふことができます。

いささかヘーゲルチックに説明すると、「価値物」も「価値体」も本質的（価値）が直接的なものとして現われているものという点では同じですが、「価値物」は「価値」という二商品に内在する「本質」が二商品の直接的な反省関係によって「物」として現われたものですが（だからこれは「現存在」です）、「価値体」は、さらにその現存在（「価値物」）を本質（価値の概念）との関連によって捉え返されたものであり、よってその（本質＝価値概念の）直接的「現象」として掴まれたものだといふことが出来るかも知れません。つまり「価値物」＝価値の現存在、「価値体」＝価値の現象形態ということです。

その意味では、故久留間敏造氏の最初の理解は必ずしも厳密なものとはいえませんが決して間違ったものでは無かったと思います。ただ久留間氏は両概念の区別と関連について無自覚であったが故に、大谷禎之介氏の指摘に動揺し、その誤った見解に追随する結果になってしまったといえるかも知れません（ただ『貨幣論』を詳細に検討してみると、「価値体」の捉え方については、両者は一致しているものの、久留間氏は「価値物」の捉え方については、大谷説に最後まで与しなかったような感じも受けます）。

.....

【付属資料】

ここでこれまでと同じように、各パラグラフに関連する文献からの引用文を紹介しておきます。

◎第6パラグラフに関連したもの

――は、すでに本文の読解のなかで紹介しましたので、重複を避けます。

◎第7パラグラフに関連したもの

《初版本文》

〈使用価値または商品体はここでは一つの新しい役割を演ずるのである。それは商品価値の現象形態に、したがってそれ自身の反対物に、なるのである。それと同様に、使用価値のなかに含まれている具体的な有用労働が、それ自身の反対物に、抽象的人間労働の単なる実現形態に、なる。ここでは、商品の対立的な諸規定が別々に分かれて現われるのではなくて、互いに相手のなかに反射し合っている。〉（国民文庫版51頁）

《補足と改訂》

〈しかし、上着、上着商品の身体は一つの単なる使用価値である。それゆえ、リンネルの価値はそれとは反対のもの、他の何らかの種類の使用価値、それが何であれとにかく使用価値で、表現される。しかしながら、使用価値上着が価値を表現していないのは、リンネルの任意の一片が価値を表現していないのと同じである。このことは、同じ上着が、リンネルの自分との関係のなかではこの関係の外部におけるよりも、多くの意味をもつ、ということを示すだけである。ちょうど、多くの人間は金モールで飾られた上着の中ではその外でよりも多くの意味をもつように。〉（小黒訳前掲文献65頁）

《フランス語版》

《実際には、われわれがすでに見たように、上衣が等価物として置かれるやいなや、上衣はもはや自分の価値性格を証明するための旅券を必要としない。こうした役割において、上衣自体の存在形態が価値の存在形態になる。ところが、上衣は、上衣商品の体躯は、単なる使用価値でしかなく、一着の上衣は、リンネルの任意の一片と同じように、価値を表現するものではない。

このことはただに、上衣がリンネルとの価値関係のうちでは、この関係のぞとでもりも多く
のことを意味する、ということを実証しているにすぎない。それはちょうど、金モールの衣裳を
つけた多くの重要人物が、金モールをはずせば全くくだらなくなる、のと同じである。》（江夏
訳21-22頁）

◎第8パラグラフに関連したもの

なおここでは、第8パラグラフと直接関連はしていませんが、「価値体」について言及してい
る部分の引用も紹介しておきます。

《初版本文》

〈リンネルは、抽象的人間労働の感覚的に存在する物質化としての、したがってまた現に存在
する【価値体】としての、上着に關係するのである。上着がこういうものであるのは、ただ、リ
ンネルがこのような特定の仕方で上着に關係するからであり、またその限りにおいてのみのこと
である。上着の等価物存在は、いわば、ただリンネルの反射規定なのである。〉（文庫版55-56頁
、【 】は引用者）

《初版付録》

〈上着にたいするリンネルの価値関係においては、上着という商品種類が、単に、【価値体】
一般として、すなわち人間労働の物体化として、リンネルに質的に等置されるだけではなくて
、この価値体の一定量が、……等置されるのである。〉（文庫版136頁、【 】は引用者） 〈し
かし、上着であろうと小麦であろうと鉄であろうと、つねに、リンネルの等価物はリンネルにた
いしては【価値体】として、したがってまた、単なる人間労働の具体化として、認められるであ
ろう。そしてまたつねに、等価物の特定の物体形態は、それが上着であろうと小麦であろうと鉄
であろうと、抽象的人間労働の具体化ではなくて、裁縫労働なり農民労働なり鉦山労働なりとに
かく一定の、具体的な、有用労働種類の具体化であることには変わりはないであろう。だから、等
価物の商品体を生産する特定の、具体的な、有用労働は、つねに必然的に、単なる人間労働の、
すなわち抽象的人間労働の、特定の表現形態または現象形態として認められなければならないの
である。例えば上着が【価値体】として、したがって単なる人間労働の具体化として、認められ
るのは、ただ、裁縫労働が、それにおいて人間労働力が支出されるところの、すなわち、それ
において抽象的人間労働が実現されるところの、特定の形態として認められているかぎりにおい
てきみのことである。 価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的
なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、
感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の表現形態として認めら
れるのである。たとえば等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現
のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働
であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、
ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の表現形態として認められるだけなのである。
この取り違えは不可避である。というのは、労働生産物で表わされている労働が価値形成的であ
るのは、ただ、その労働が無差別な人間労働であり、したがって、生産物の価値に対象化され
ている労働が別種の生産物の価値に対象化されている労働とまったく区別されないかぎりにお
いてのみのことだからである。 この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的
なものの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なものが具体的なものの属性
として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。
それは同時に価値表現の理解を困難にする。もし私が、ローマ法とドイツ法とは両方とも法で
ある、と言うならば、それは白明なことである。これに反して、もし私が、法というこの抽象物
がローマ法においてとドイツ法においてと、すなわち、これらの具体的な法において実現され
る、と言うならば、その関連は不可解になるのである。〉（文庫版142-3頁、【 】は引用者）
〈等価物が直接的に社会的な形態をもっているのは、それが他の商品との直接的交換可能性の形
態をもっているかぎりにおいてのことであり、そして、それがこの直接的交換可能性の形態をも
っているのは、それが他の商品にたいして【価値体】として、したがってまた同等なものとし
て、認められているかぎりにおいてのことである。だから、等価物に含まれている特定の有用労働
もまた、直接的に社会的な形態にある労働として、すなわち、他の商品に含まれている労働と
の同等性の形態をもっている労働として、認められているのである。裁縫労働というような、一
定の、具体的な労働が、たとえばリンネルというような別種の商品に含まれている別種の労働と
の同等性の形態をもっていることができるのは、ただ、その特定の形態が、別種の諸労働の同等
性を、またはそれらの労働における同等なものを、現実に形成しているあるものの表現として認
められているかぎりにおいてのみのことである。しかし、別種の諸労働が同等であるのは、ただ
、それらが人間労働一般、抽象的人間労働、すなわち人間労働力の支出であるかぎりにおいて
のみのことである。だから、すでに明らかにしたように、等価物のなかに含まれている特定の具
体的な労働は抽象的人間労働の特定の表現形態または現象形態として認められているので、その
労働は他の労働との同等性の形態をもっているものであり、したがってまた、すべての他の商品生産
労働と同様に私的労働であるのに、しかもなお直接的に社会的な形態にある労働なのである。
〉（145頁、【 】は引用者）

《補足と改訂》

〈上着の生産においては、裁縫労働という形態のもとに、人間的労働力が実際に支出され、し
たがって、上着のなかに人間的労働が堆積されている。それゆえ、この面からすれば、上着体
は価値の担い手である。もっとも、上着のこの属性そのものは、上着がどんなにすり切れてもその
糸目から透けて見えるわけではないが、そして、リンネルの価値関係のなかでは、上着はただこ
の面だけから通用する。リンネルが自分に等しい物としての上着体に關係するのは、上着が価値
体であるからであり、そしてそのかぎりでのことである。 いまや、明かになったことは、リ
ンネルはその価値上着と等しい物としての表現を通して、使用価値上着における自分自身の価値の
表現を通してのみ、あますところ掌く表現された、ということである。〉（前掲65頁） 〈リン
ネルの価値関係のなかで上着形態は、すでに見たように、価値体として、その自然形態上着形態
が価値形態として通用する。使用価値としてはリンネルは上着とは異なっている。価値としては
リンネルはそれとは反対である。しかし、上着がリンネルにたいして価値を表すことは、同時に
リンネルにとって価値が上着で表されていることなしには、できないことである。ちょうど、個

人Aが個人Bにたいして陛下にたいする態度をとることは、同時にAにとって陛下がBという肉体的姿態をとること、したがって、顔つき、髪の毛、その他なお多くのもので、国王の交替のたびにかわることなしには、できないように。》（前掲66頁）

《フランス語版》

《上衣の生産では、実際に、なにがしかの人間労働力がある特殊な形態のもとで支出された。だから、人間労働がその上衣のなかに積み重ねられている。この観点からすれば、上衣は価値の担い手である。もっとも、この特性は、上衣がどんなに擦り切れていても、上衣の透いた糸目を通して外に現われるものではないが。しかも、リンネルとの価値関係においては、上衣はこれ以外のことを意味しない。上衣の外貌がどんなにあばた面であっても、リンネルは上衣のうちに、価値に満ちた姉妹魂を認めたのだ。これが、ことがらのプラトニックな側面である。上衣が自己の外面的な関係のなかに価値を実際に表わすことができるのは、同時に価値が一着の上衣という姿をとるかぎりでのことなのだ。同じように、私人Aは個人Bにたいして、Bの眼に映ずる陛下が直接Aの容貌と体軀とを帯びなければ、陛下であることを表わしえないのである。陛下が人民の新たな父となるたびごとに、顔面や毛髪やその他多くの物を変えるのは、おそらくこのためであらう。》（江夏訳22頁）

《補足》（国王と臣下のもう一つの例）

《(21) およそこのような反省規定というものは奇妙なものである。たとえば、この人が王であるのは、他の人々が彼に対して臣下としての態度をとるからにほかならない。ところが、彼らは、彼が王であるから、自分たちは臣下なのだと思うのである。》（全集版78頁）

『資本論』を読んでみませんか



10月26日、新政権の下で最初の臨時国会が開かれ、鳩山由紀夫首相が初めて所信表明演説を行いました。



「友愛政治の実現」をスローガンに、「無血の平成維新」を断行するという内容です。

「いのちを守り、国民生活を第一とした政治」とか「居場所と出番のある社会」、「支え合って生きていく日本」、「人間のための経済」等々、耳障りのよい言葉が羅列されています。こうした多くの美辞麗句の裏に何が隠されているのでしょうか。それを私たちは見抜かなければなりません。

それは他ならぬ、鳩山首相の政治理念である「友愛」のスローガンそのものが明らかにしています。

首相は8月末「Voice」に発表した《特別寄稿》「私の政治哲学～祖父に学んだ『友愛』の旗印」のなかで、「友愛」について、次のように説明しています。

「現代の日本人に好まれている言葉の一つが『愛』だが、これは普通〈love〉のことだ。そのため、私が『友愛』を語るのを聞いてなんとなく柔弱な印象を受ける人が多いようだ。しかし私の言う『友愛』はこれとは異なる概念である。それはフランス革命のスローガン『自由・平等・博愛』の『博愛＝フラタナティ（fraternité）』のことを指す。」

しかしフランス革命の「自由・平等・博愛」がもたらした現実は何だったのかが問題なのです。



マルクスは、すでに同じスローガンを掲げた1848年の「フランス共和国憲法」について、《初めから終わりまで、もっとも不誠実な企図を背後に隠した、美しい言葉の寄せ集めにすぎない》（全集第7巻511頁）と断じています。このマルクスの言葉は鳩山首相の所信表明演説にはより一層当てはまります。

というのはこのスローガンは封建社会からの解放を唱えるブルジョア革命においてのみ、正当であり、現実的であり、偉大な意義を持ったのであって、すでに1848年の資本主義が一人立ちした段階においては、もはや一つの欺瞞でしかなく、ましてや爛熟し頹廃した今日の資本主義社会においては単に時代錯誤であるばかりではなく、醜い詭弁でしかないからです。

このスローガンの実際の内容を、マルクスは『資本論』で次のように述べています。

《労働力の売買がその枠内で行なわれる流通または商品交換の部面は、実際、天賦人権の真の

楽園であった。ここで支配しているのは、自由、平等、所有、およびベンサムだけである。

自由！ というのは、一商品たとえば労働力の買い手と売り手は、彼らの自由意志によって規定されているだけだからである。……平等！ というのは、彼らは商品所有者としてのみたがいに関係しあい、等価物と等価物を交換するからである。所有！ というのは、だれもみな、自分の物を自由に処分するだけだからである。ベンサム！（「功利主義」の意味——引用者） というのは、両当事者のどちらにとっても、問題なのは自分のことだけだからである。》（全集23 a 230-1頁）

つまり「博愛（友愛）」は、「所有」や「ベンサム」というこのブルジョア社会の現実を覆い隠す“イチジクの葉”にすぎないのです。

今回の演説でも、鳩山首相は、障害者など社会の弱者をすべての人々が「支え合う」「きずな」の大切さや、そうした社会の実現を訴えましたが、しかし彼が持つ何十億という個人資産をそうした「支え合い」のために、例えその一部でも差し出したという話は聞いたことがありません。

現実には、彼は、崇高な理念の陰で、何十億という個人資産の「所有」にしがみつき、明日の生活にも困って「毎年3万人以上のかたがたがのいのちが、絶望のなかで絶たれているのに」、彼は妻とたった二人だけで広大な敷地を持つ邸宅と別荘を複数持ち、有り余る豊かな生活を享受しながら、そうした人たちにどんな手もさしのべようもしない立派な「功利主義」者として振る舞っているのです！

貴方も、美辞麗句の裏に隠された鳩山政権の正体を見抜くために、『資本論』を一緒に読んでみませんか。

第18回「『資本論』を読む会」の報告

◎紅葉の季節

今年はどうも紅葉が早いような気がします。例年のシーズンを考えて、お仲間は12月の下旬に京都での紅葉狩りを計画し、嵐山にある宿泊施設に予約を入れているらしいのですが、これではどうやら季節を外しそうな感じもしてきました。

ところで、我が「『資本論』を読む会」の“紅一点”のクミさんは、仕事で今回はお休みになり、これまで前回と同様寂しい開催になりました。なにしろ新しい参加者はなく、少人数でチビチビとやっているものですから、一人でも休むと途端に寂しくなります。何とも侘しい限りではありません。

まあ、そんな愚痴を言ってもしょうがないので、報告に移りましょう。

今回は、「a 相対的価値形態の内実」の最後まで終わりました。だから、今回の報告は、この「内実」で課題とした諸問題をとことん明らかにしたいと考えていますので、あるいは、少しは長くなるかも知れません。 これまでも報告が長すぎると苦情(?)が来ているのですが、まあ、難しいところなんですから、解説もとにかく懇切丁寧を心がけていますので、少々冗長なところは我慢して、お許し願いたいと思います。

◎これまでの展開の中間総括

さて、今回は第9パラグラフからです。このパラグラフはこれまで考察してきたことを中間的に総括しているのではないかと、思います。まずその全文を紹介しましょう。今回も分節ごとに検討するために、各分節にf)、g)、h)・・・の記号を打ち、関連資料は後回しにします。

《f)こうして、上着がリンネルの等価となる価値関係の中では、上着形態が価値形態として通用する。g)したがって、商品リンネルの価値が商品上着の身体で表現される。h)一商品の価値が他の商品の使用価値で表現されるのである。i)使用価値としては、リンネルは、上着とは感性的に異なるものであるが、価値としては、リンネルは「上着に等しいもの」であり、したがって、上着のように見える。k)このようにして、リンネルは、その現物形態とは異なる価値形態を受け取る。l)リンネルの価値存在が上着との同一性に現れるのは、キリスト教徒の羊的性質が神の仔羊との同一性に現れるのと同じである。》

f)、ここで《こうして》というのは、直接には前パラグラフ(第8)を指しているのですが、第7・8の両パラグラフを指しているとも考えることができます。というのはこの二つのパラグラフで上着がリンネルとの価値関係を置かれると新たな形態規定を受けることが確認されていたからです。つまりその自然形態が直接価値を表すということです。だからそうした考察を受けて、《こうして》、リンネルの等価となる関係のなかでは、上着形態、つまり上着という商品体、あるいは上着の姿そのものが、価値の形態、つまり「価値が形あるものとして現われているもの」として通用するのだというわけです。

g)、だから商品リンネルの価値が商品上着の身体で表現される。ここでは、すでに先の分節が第7・8パラグラフで直接受けたものであったのに対して、この分節は、そうではなく、むしろこれまでの考察を結論的にまとめたものということができます。つまり第4・5・6パラグラフでは、リンネルの価値がどのようにして表現されるのかを、上着が価値物として通用するという内容を価値の実体はまだ掘り下げて考察することによって明らかにするものでしたが、しかしそのことは、反面では、第7・8パラグラフで考察したように、等価におかれる上着が新たな形態規定(その自然形態が直接価値を表すという)を受けることもあったというわけです。つまりリンネルの価値が表現される過程は、他面では等価に置かれた上着が新たな形態規定を受け取る過程でもあり、そうした両過程があいまって、リンネルの価値表現が完成するのだというのがマルクスがここで述べていることではないかと思えます。

h)、ここで初めて「価値」と「使用価値」とが対比した形で出てきます。リンネルの「価値」が上着の「使用価値」で表現される、これがこれまでの一連の考察の結論なわけです。またここでは「一商品の価値が他の商品の使用価値で表現される」というように、リンネルと上着との関連が、一般化した形で述べられています。これがこのパラグラフが一つの中間的総括であることを示していると言えます。

i)、ここからはまた視点をリンネルに戻して、使用価値としてはリンネルは上着と感性的に違ったものであるが、自身の価値としては、リンネルは上着と等しいもの、上着のものとして見えるのだということです。

j)、だからリンネルは自分自身の現物形態(使用価値)とは別に、価値形態、つまり価値が実際に目に見える物的姿をとって現われているものを、今では受け取ったのだと述べています。これは第3節の冒頭(前文)で、《商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言い換えれば、商品という形態をとるのである》と述べていたことを思い出させます。つまりリンネルはこうして初めて《二重形態》を獲得し、《商品形態》を受け取ったわけです。

k)ここでまた分かりにくい例示ができてますが、これは何を言いたいのでしょうか。 　とりあえず、マルクスがここで述べていることを等式で表しますと、次のようになります。

リンネル＝上着　キリスト教徒＝神の仔羊

まず、ここに出てくる「神の仔羊」というのは、聖書にあるヨハネの言葉として「世の罪を負う神の仔羊を顧よ。我に後れ来らん者は我よりも優れる者なり」というのがあらず、それから考えるに、「神の仔羊」は「キリスト」を指すらしいです。　だから《リンネルの価値存在が上着との同一性に現れる》というのは、リンネル＝上着という同一性によって、リンネルの価値存在が上着の姿に現れるということですから、それに類似させて考えると、キリスト教徒＝神の小羊(キリスト)の同一性のなかに、キリスト教徒の羊的性質、つまり従順で疑うことを知らず、ただ盲目的にリーダーに付いていだけという性質が、キリストという姿で現されているということでしょうか。つまりキリスト教徒がキリストを信じ敬うのは、自分のなかに存在している羊のような従順で疑うことを知らないお人好しの性質を、ただキリストのなかに写して見ているだけなのだ、ということのようです。それとリンネルが上着の姿に自分の価値を写して見ているのと同じだということでしょうか。

◎「商品語」とは何か？

次は第10パラグラフです。ここに奇妙な《商品語》という問題が登場します。果たしてそれは何を意味するのか、それが問題です。まず全文を紹介しましょう。

《f)上述のように、商品価値の分析がさきに入れかわれに語ったいさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。g)ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ちあける。h)労働は人間労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成するということを行うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。i)リンネルの高尚な価値対象性は簡でごわごわしたリンネルの身体とは異なっているということを行うために、リンネルは、価値が上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであるという。j)ついでに言えば、商品語も、ヘブライ語のほかに、もっと多くの、あるいはより正確な、あるいはより不

正確な、方言をもっている。^)たとえば、ドイツ語の"Wertsein"（値する）は、ロマンス語系の動詞、valere, valer, valoir（イタリア語、スペイン語、フランス語の「値する」）にくらべて、商品Bの商品Aとの等置が商品A自身の価値表現であることを言い表すには適切である。^)「パリはたしかにミサに値する！ Paris vaut bien messe!

このパラグラフでは、これまでの一連の敘述とは一風変わった内容になっているような気がします。ここではマルクスは《商品語》という奇妙な問題を持ち出しているからです。少なくともこれまでの敘述から見ると、このパラグラフは一転した印象を受けます。確かにわれわれは第5パラグラフでも《語られる》という表現を見ました。そしてそのときには、このパラグラフを参照に挙げて、《語る》のはだからリンネルだろうと指摘しておいたのです。しかしリンネルが語るというのはそもそもどういふことなのでしょう。それに、このパラグラフは一体何のためにあるのでしょうか。どういふ意義と役割を担ったパラグラフなのでしょう。それが問題です。そしてそのためには、どうやらこのパラグラフでマルクスがいうところの《商品語》とは何なのかを解明する必要があるように思えます。とにかく分節ごとに詳細に考えて行くことにしましょう。

^)、まずここで《上述のように》というのは、この「a 相対的価値形態の内実」のこれまでの敘述を指していると考えて良いでしょう。つまり「これまで展開してきたことで分かるように」ということです。《商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいさきのことを》という場合の、《さきに》というのは、商品価値の分析を行なったのは、第1節と第2節ですから、第1節や第2節でわれわれが行なった分析ということでしょう。その分析が《われわれに語った》と、ここでも《語る》という文言が出てきますが、この場合の《語る》というのは、分析が《語る》わけですから、「分析によって明らかになったように」という文意を少し文学的に言い換えただけで良いでしょう。だからこの場合の《語る》「言語」なるものは何かということは、この際は問題にはならないでしょう。しかし《リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである》という場合の《語る》はそうではないわけです。ここで《リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや》というのは、《上述のように》と述べているように、リンネルが上着を等置関係（価値関係）に置くやいなやということであり、だからこれまで分析を深めて考察してきたことを指していると思われる。

しかし、ここでわれわれは重要な問題に気づきます。つまり第1節や第2節では、《われわれ》が《分析》してきたのであり、その分析が《われわれ》に《語った》のでした。しかし《上述》の考察の過程は、確かにそれもわれわれの分析ではありますが、しかしそれだけではなく、それらは商品自身の振る舞いでもあったということ。つまり《上述》の一連の分析では、商品が主体（主語）であり、リンネルと上着という二つの商品自身が互いに関連し合う過程だったということ。だからここでマルクスは《リンネル自身が語る》と述べているのでしょう。第1節や第2節では、観察者であるわれわれが対象を分析し考察し認識する過程であったのですが、第3節では、商品自身が互いに関連し合う世界を対象にしているわけです。商品自身が主体となって関連し合う過程を、マルクスは商品自身が《語る》世界と考えているのではないかと思います。

^)、《ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ちあける》。この一文も奇妙ですが、商品が主体であることを考えれば、ある程度は分かるような気がします。ただ商品（この場合はリンネル）が主体と言っても、リンネルは自分だけに通じる言葉で、つまり《商品語で》《その思いを打ちあける》と述べています。ということはリンネルの《思い》はただ一方通行であって、相手にはまったく通じていないことになります。ではリンネルが《思い》を打ち明けている相手は、この場合は誰なのでしょう。やはりそれはこの場合は上着でしょう。商品同士が互いに関連し合う世界（商品世界）の話なので、リンネルが思いを打ち明ける相手もやはり商品以外にはないはずだからです。だからこの場合は《われわれ》（つまり第三者の観察者）に語っているわけではないわけです。リンネルが《語る》《商品語》は、リンネルにしか通じなくて、上着にはまったく通じていない、にも関わらずリンネルは健気にもその思いを上着に打ち明けているとマルクスは述べているように思えます。つまりリンネルの上着に対するこの場合の働きかけはまったくの一方通行的なもので、上着の与り知らないものだ、ということのようです。そしてリンネルは、彼の《思い》が上着に通じているかどうかということはお構いなしに、ただ一方的にそれを打ち明けているわけです。その打ち明ける内容が、次に書かれています。それはどうやら二つあることが分かります。

^)、これは二つ目の《思い》であり、《語り》です。まず《労働は人間労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成すること》というのは、われわれが第1・2節の商品価値の分析で明らかになったことです。それをリンネル自身が《商品語》で語るわけですから、これがリンネルが考えていること、つまりリンネルの《思い》であり、その次に書かれていることが、リンネルが実際に《商品語》で《語っている》内容なのでしょう。すなわち《上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、上着はリンネルと同じ労働から成りたっている》ということ。確かに前者はわれわれ、つまり第三者の観察者がその分析から分かった内容であり、後者の場合は、確かにリンネルがリンネル自身の目線で問題を見て《語っている》内容になっているように思えます。ただ後者をマルクスは《商品語》だというのは、では《商品語》とはそもそも何なのかということが問題になります。それはある商品と別のある商品が互いに関連し合うときに、特定の商品の立場から両商品の反省関係を一方の商品自身の《語り》として述べているものと考えられるように思えます。つまりこの場合、リンネルは上着を自身に対する等置関係に置き、自分から二商品の反省関係を展開しているわけです。それが《商品語》です。上着が自分と等しいものと置かれ、通用する限りは、二つは同質であり、だから上着は価値でなければならない、そうであるなら、上着という姿そのものは、リンネルと同じ労働から成り立っている。つまり人間労働一般から成り立っている。これがリンネルが上着に対して一方的に述べていることだ、とマルクスはいうわけです。このような反省関係というのは、例えば初版本の次のような一文を読めばよく分かります。

《リンネルは、他の商品を自分に価値として等置することによって、自分を価値としての自分自身に關係させる。リンネルは、自分を価値としての自分自身に關係させることによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から區別する。》（国民文庫版45頁、訳文を若干変えています）。

マルクスのいう《商品語》は、こうした商品自身が交わす反省関係を、一商品の《語り》として述べているものと考えられることができます。

^)、次は二つ目の《思い》であり、《語り》です。《リンネルの高尚な価値対象性は襦でごわごわしたリンネルの身体とは異なっている》というのは、われわれが価値の分析によって明らかになったことです。つまりリンネルの価値は純粋に社会的なものであり、よってリンネルの価値には一分子もの自然物質は含まれていない、リンネルの使用価値をどんなにすり切れるほど扱ってもリンネルの価値を見出すことはできない、等々、ということ。それが《価値が上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つである》というのだと述べられています。リンネルは自分の価値は上着に見えと言います。ということはリンネルの《襦でごわごわした》使用価値より上着の使用価値（ウールで出来ている？）の方が《高尚》なものどうやら考えているようです。とにかくリンネルは自分の《高尚な価値対象性》は上着の姿をとっている。だからリンネル自身も価値が目に見える物としてある限りは上着と瓜二つであり、上着そのものだ、と主張するわけです。

さて、ここで、この二つの《思い》と《商品語》で《語られる》内容を表まとめてみましょう。

| | | | |
|--|--------|---|-----|
| 価値の分析がわれわれに語ったこと（リンネルの《思い》） | | リンネルが語る《商品語》 | |
| 労働は人間労働という抽象的屬性においてリンネル自身の価値を形成すること | を言うために | 上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、したがって価値である限り、上着はリンネルと同じ労働から成りたっている | と言う |
| リンネルの高尚な価値対象性は襦でごわごわしたリンネルの身体とは異なっているということ | | 価値が上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つである | |

われわれが第1節や第2節で商品の価値を分析して明らかになったことを、リンネルが上着との価値関係のなかで、リンネル自身が語るというのですが、われわれは第1節では、確かに価値の現象形態である交換価値から出発して価値を抽出しました。つまりわれわれは交換価値という価値の現象形態からその本質に辿る過程を歩んだのでした。しかしそうした歩みをリンネルは上着との反省関係のなかでリンネル自身の反省の言葉として語っているわけです。この《商品語》で語られている二つの内容は、第4パラグラフで述べられていた。「商品の価値性格」の二つの内容、すなわち一つは

抽象的人間労働という「価値を形成する労働の独自の性格」と、もう一つは「人間労働の凝固体」としての価値の「対象的性格」に対応していることが分ります。つまりリンネルが商品語で語ると述べられている内容は、リンネルが自身の価値性格を語っていることでもあるわけです。そしてそれはわれわれが第5パラグラフと第6パラグラフで見てきた内容なのです。だからマルクスはこのパラグラフの冒頭で《上述のように》と始めているわけです。そしてここではそれらをリンネル自身が語る《商品語》として説明しているのですが、こうした説明には果たしてどんな意義があるのでしょうか。それが問題です。

われわれが第1節で諸商品の交換関係から商品の価値を分析し抽象したのは、われわれの思惟による理論的登高であり、われわれの意志的な行為でした。そしてその分析の結果は、われわれの分析そのものからわれわれに語られた（明らかになった）のでした。

しかしそうしたいっさいのことは、実際には、われわれが意識的に分析して認識する以前に、商品自身が他の商品との交わりの中で客観的に商品自身が語っている内容なのだ、というのがマルクスが言いたいことなのです。つまりそうした反省規定は、何かわれわれが外的に商品の交換関係を分析して、われわれの頭脳を使ってやっていることだけではなくて、商品自身が他の商品との関係のなかで社会的に行なっている客観的な過程なのだということです。だからそれらは商品という物象と物象との社会的関係のものにある客観的な過程なのであり、それはわれわれの認識から独立した過程であって、むしろわれわれの意識や行為はそうした物象的關係に規制され拘束されるという転倒した関係こそがそこにあるのだ、というのがマルクスがこの《商品語》として語っている内容ではないだろうかと思えます。つまりこのパラグラフの内容は、第4節で問題になる商品の物神性格の内容を先取りしてその示唆を、あるいはその基礎を与えたものと言えるでしょう。

このように考えて、初めて、なぜ、マルクスが《商品語》という奇妙な問題をここに、つまり次の最後の第11パラグラフで全体の総括と結論を述べる前に、持ち出しているのか、持ち出さなければならなかったのか、良く分かるような気がします。

㊦、ここからは《ついでに言えば》というわけだから付け足しでしょう。《商品語》にかこつけてマルクスは、《商品語も、ヘブライ語のほかに、もっと多くの、あるいはより正確な、あるいはより不正確な、方言をもっている》と述べています。ここで《商品語》といえば、《ヘブライ語》が標準語だという観念があることを前提に、《より正確な、あるいはより不正確な、方言をもっている》と述べているのですが、ヘブライ語が商品語の標準語だということは、ユダヤ民族が古代から商業の民だったということだけではなく、近代においてもユダヤ人が商人や金貸しとして文学などでも描かれることを暗に示唆しているのでしょう（『ヴェネスの商人』に出てくるシャイロックはユダヤ人の金貸しです、等々）。

㊧、ここでは、㊦で指摘していた《より不正確な方言》としてドイツ語の《Wertsein（値する）》が、そして《より正確な方言》として《ロマンス語系の動詞、valere, valer, valoir（イタリア語、スペイン語、フランス語の「値する」）》が紹介されています。その理由は次の分節の例から類推できますので、次の分節の検討に移ります。

㊨、ここでは《“パリはたしかにミサに値する！ Paris vaut bien messe!”という文例が書かれていますが、この文例の説明としては、新日本新書版の訳者注が詳しいので、それをまず紹介しておきましょう。

〈*〔新旧両キリスト教徒の激しい抗争のなかで、1593年に新教支持のアンリ四世が、旧教徒の支配するパリに進撃するにあたり、王位につくための障害である新教を捨て、旧教カトリックのミサに出席しようと考えたときの言葉。大臣シュリが王に改宗をすすめたときの言葉とも言われ、シュリの言では「パリ」の代わりに「王位」。ここでマルクスは、この言葉をvaloirの用例として使っており、フランス語ではvautがパリのすぐ次にくるが、これに比べてドイツ語ではwertが主語と離れて末尾に来ってしまうので不適切だというわけであろう〉（90頁）

さて、この文例にはどんな意義があるのかも、学習会で少し議論になったのですが、J.J. 富村さんが、新書版の訳者解説を参考に、次のように説明してくれました。

簡単な価値形態の等式、《20エルのリンネルは1着の上着に値する》(商品Aは商品Bに値する)と上記の《“パリはたしかにミサに値する！”》のそれぞれの原文を書き並べてみましょう。

20 Ellen Leinwand sind 1 Rock west.(der Ware A sind der Ware B west.)

Paris vaut bien messe!

ここでwestとvautの位置に注目して下さい。ドイツ語の場合は、westはリンネル(商品A) (Leinwand)(der Ware A)と離れているのに対して、vautの場合はParisのすぐ近くに近くなっています。だからマルクスはドイツ語は《商品Bの商品Aとの等置が商品A自身の価値表現であることを言い表すには不適切である》と述べているように思えます。

◎全体の総括・結論

次はいよいよ最後のパラグラフです。

《いしたがって、価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態が商品Aの価値形態となる。0)言いかえれば、商品Bの身体が商品Aの価値鏡となる(18)。1)商品Aが価値体としての、人間労働の物質化としての、商品Bに關係することによって、商品Aは、使用価値Bを、それ自身の価値表現の材料にする。2)商品Aの価値は、このように商品Bの使用価値で表現されて、相対的価値という形態をもつ。》

このパラグラフは、その位置から考えても、これまでの「a 相対的価値形態の内実」全体のまとめであり、総括・結論でしょう。

1)、この《したがって》は、「a 相対的価値形態の内実」全体の考察を踏まえた《したがって》でしょう。そしてここでは《価値関係の媒介によって》と価値関係が重要な位置を占めています。価値関係が問題だったのだ、ということです。だからこの《価値関係》というのは、その前の第10パラグラフを踏まえると、商品自身が商品世界のなかで主体的に取り結ぶ関係として捉えられているということになります。それは何か観察者である第三者のわれわれが二商品の等置関係から同等性を見出し、それが価値の分析を踏まえて、それはだから価値関係であるというのではなく、価値関係というのは、商品自身が主体となって互いに関連し合う商品世界において生じている客観的過程であり、商品自身が取り結んでいる関係なのだ、という意味で《価値関係の媒介》が商品Bの現物形態を商品Aの価値形態にしていると述べているわけです。またここではすでにリンネルや上着など特定の商品ではなく、商品A、Bとして一般化されて論じられています。

2)、これは《言いかえれば》ということですから、1)と同じ内容を商品Bの面から見たものでしょう。とすれば、1)の内容は第4・5・6パラグラフで展開したリンネルの価値が如何にして表現されるかの過程の説明に対応し、そうした過程が他面では上着に新たな形態規定を与える過程でもあるということを示した第7・8パラグラフが、この2)に対応していると考えられることもできます。つまり第7・8パラグラフで述べた上着がリンネルのとの価値関係に置かれることによって受け取る新たな形態規定は、すなわち上着がリンネルの《価値鏡》になるということだということです。あるいは第7・8で述べた上着に付着する新たな形態規定というのは《価値鏡》という属性だということでしょうか。

3)、これがこの全体の結語です。すなわち相対的価値形態の内実が展開されて、相対的価値形態とは何か明らかにされたわけです。ここで《このように》と述べていますが、この《このように》は、直前の1)と2)の内容を指しているように思えます。つまり商品Bの現物形態が商品Aの価値形態になるという第4~6パラグラフの内容と、商品Bが商品Aの価値鏡になるという第7・8パラグラフの内容によって、商品Aの価値は、商品Bの使用価値で表されて、相対的価値という形態を持っているのだと、というわけです。

◎最後の注も検討

最後に注18がついています。これも全文紹介して少し検討しておきましょう（しかし分節ごとの検討は必要ないと考えます）。

（18） このことは、商品と同じようにいくら人間にもあてはまる。人間は、鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、はじめはまず他の人間に自分自身を映してみる。人間ペテロは、彼と等しいものとしての人間パウルとの関係を通じてはじめて人間としての自分自身に関係する。だが、それと共に、ペテロにとってはパウルの全体が、そのパウルの肉体のままで、人間という種類の現象形態として適用するのである。）

これは商品の反省関係を例示するものと考えることが出来ます。人間は他の人間と交わる（交際する）ことによって始めて自分自身が人間であることを自覚するというのです。つまりある個人が自身の人間としての本質を自覚するのは、他の個人との社会的関係を取り結ぶことによって可能であるということです。そしてその場合には人間としての本質は他の人間に直接現われているとも述べています（それが価値鏡というわけです）。ペテロとパウロの間にある本質（人間種族）は両者に内在するものですが、それ自体としてはその一方でなく、他方でもない（直接には現われていない）、抽象的な第三者です。しかしこのような本質は、両者の関連によって顕現し、確認されます。人間は他者と関係することによって自らの本質を他者に写し出し、自分自身と関係し自覚する。自身と他者との区別とともに、両者の同一性を自覚して、始めて、一人の人間として自己内反省し、その自立性を獲得するわけです。

.....

以下は、この「a 相対的価値形態の内実」のなかで検討し残した問題を補足的に論じることになります。

●「事実上の還元」の解釈への補足

われわれが商品語の考察で気付いたのは、マルクスは商品の価値が表現される過程を、商品が主体的に行なっている過程として捉えているということでした。そうした視点から、もう一度、第4パラグラフを読み直すと興味深い点に気付きます。まず第4パラグラフを引用してみましょう。

《われわれが、価値としては諸商品は人間労働の単なる凝固体であると言えば、われわれの分析は諸商品を価値抽象に還元するけれども、商品にその現物形態とは異なる価値形態を与えはしない。一商品の他の商品に対する価値関係の中ではそのではない。ここでは、その商品の価値性格が、その商品の他の商品に対する関係によって、現れるのである。》

ここでは、マルクスは《われわれ》、つまり第三者（観察者）の視点と、商品自身の他の商品との関連とを使い分けていることに気づきます。つまり《価値としては諸商品は人間労働の単なる凝固体である》というのは、われわれが第1節で分析した内容です。しかしここでは価値形態はただ前提されていただけで、商品の価値からそれを説明できたではありません。しかし《一商品の他の商品に対する価値関係の中ではそうではない》、つまりここで問題なのは、マルクスは、商品自身が互いに結び合う関係として、「価値関係」を捉えているということです。そしてそうした視点は、第5パラグラフ以下の考察に一貫していることが分かります。

マルクスがこうした商品相互の関連に視点を移したのは、では第4パラグラフからか、というそうではありません。それはまず第3節の前文の次のような文言のなかに示唆されています。

《商品の価値対象性は、寡婦のクイックリー〔シェイクスピアの『ヘンリー四世』などの中の人物〕と違って、どうつかまえたらいかにだれにもわからない。商品体の感性的にがさがした対象性とは正反対に、諸商品の価値対象性には、一原子の自然素材も入りこまない。だから、一つ一つの商品を好きだけひねくりまわしても、それは、価値物としては、依然としてつかまえないものである。けれども、諸商品が価値対象性をもつのは、ただ、価値対象性が人間労働という同じ社会的単位の表現である限りにはかならないこと、したがって、商品の価値対象性は純粋に社会的なものであること、を思い出せば、それがただ商品と商品との社会的関係においてのみ現れうるといことも、おのずから明らかである。実際、われわれは、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている諸商品の価値の足跡を探りあてた。今や、われわれは、価値のこの現象形態に立ちかえらなければならない。》（全集版64頁）

ここでは商品の価値対象性の捕まえてこのろなさを指摘していますが、これはいうまでもなく、われわれ、つまり第三者としての観察者の立場からの視点です。そうした観察者として第1節における分析を振り返り、《けれども、諸商品が価値対象性をもつのは、ただ、価値対象性が人間労働という同じ社会的単位の表現である限りにはかならないこと、したがって、商品の価値対象性は純粋に社会的なものであること、を思い出せば、それがただ商品と商品との社会的関係においてのみ現れうるといことも、おのずから明らかである》と述べています。ここで《商品と商品との社会的関係においてのみ現れうる》というのは、商品自身が主体となって互いに関連する関係、つまり価値関係において、それは《現われうる》というわけです。

また第3パラグラフの途中からも、視点の転換が見られます。第3パラグラフの最初のあたりを引用してみましょう。

《しかし、質的に等置された二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？ リンネルが、その「等価」としての上着、またはリンネルと「交換せられるもの」としての上着に対して関係させられることによって、である。》

最初の部分は、それまでの考察と同じように、「われわれ」が二商品の等置関係を考察しているのですが、《では、どのようにしてか？》以下は、そうではないことに気づきます。ここでは《リンネルが》とリンネルが主語（主体）になっています。リンネルが上着を「等価」なものとして、あるいは「交換せられるもの」として、自分に関係させるわけです。全集版では、まだ第三者がリンネルを上着とそうした関係に「関連させる」ように読めなくもないですが、しかし新書版の『資本論』では、この部分は次のように訳されています。

《しかし、質的に等置された二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？ リンネルが、その「等価物」としての、またはそれと「交換せられるもの」としての上着にたいしてもつ関連によって、である。》（新日本出版社版85頁）

この新書版の訳だと、リンネルが主体（主語）となって上着を自分に等置する関連において、リンネルが自身の価値存在を現出させるのだということがよく分かります。つまりわれわれ第三者（観察者）の思惟による分析ではなく、商品自身が取り結ぶ関連が問題になっているわけです。だから商品を主体に据えての価値関係の考察は、ここから始まるわけです。

そしてわれわれは、そうした観点から、もう一度、第5パラグラフを見てみると、そこでは、マルクスが第4パラグラフで示唆していた第1節で述べていたのと異なる「還元」について述べていると、以前は指摘しましたが、しかしその際、「実際に還元する」という文言について十分な考察をしていなかったことに気付かされるのです。この場合の「実際に還元する」というのは、まさに商品が主体の世界において商品自身によって「実際に行なわれている還元」だとマルクスが述べているように思えます。第1節では観察者である「われわれ」がその思惟によって対象を分析し、具体的諸労働の有用的属性を捨象して抽象的人間労働に還元したのでした。しかしこの第5パラグラフでは、商品自らがその相互の関連において、その交換において、あるいはその交換の前提となる自身の価値表現において、商品自身が実際に彼らに対象化されている具体的諸労働を抽象的一般的な人間労働に還元しているのだ、という意味なのです。つまりここで「実際に還元する」とマルクスが述べているのは、商品自身がその行為（交換とその前提としての価値を表現する営為）において行なっている「還元」なのだ、という含意があるのだと思います

●「a 相対的価値形態の内実」全体の構成を概観する

われわれは「a 相対的価値形態の内実」を終えるにあたり、これまでの考察を踏まえて、この部分全体の論理的構成と展開を、各パラグラフごとに分けて確認しておきたいと思います。それは次のようなものと考えられます。

(1)～(2)パラグラフー相対的価値形態の分析の前提の確認

(3)パラグラフー相対的価値形態とは何か、リンネルの価値は如何にして表現されているかを見ている。リンネルの上着との直接的反省関係によるリンネル価値の実存形態の現出、上着が価値物として通用する。

(4)～(8)パラグラフー直接的な反省関係から現出した現存在としての価値物を、その根拠に遡って、現象形態（「価値体」）として把握する過程。

まず(4)は(5)(6)の導入部分であり、第三者としての観察者による分析によってではなく、商品を中心とする価値関係においてこそ、リンネルの価値性格（抽象的人間労働とその凝固体という二契機）が現れ出ることが確認されている。

(5)はだから、そのリンネルの価値性格の一つの契機である、価値を形成する労働の独自の性格、すなわち抽象的人間労働が如何にして裁縫労働によって現出しているかが解明されている。

そして(6)はもう一つの価値性格の契機としての抽象的人間労働の対象化された形態が、上着形態として現出していることが確認されている。

(7)(8)は、(5)(6)がリンネルの価値の実体である抽象的人間労働の凝固体が如何にして現出してきたかの解明であったのに対して、その過程の裏面として上着とそれを形成した裁縫労働が、リンネルとの価値関係に置かれることによって新たな形態規定性を受け取ることが説明されている。かくして上着体はリンネルの価値の現象形態として説明され、「価値体」規定が与えられる。

(9)パラグラフー上述の過程（3～8）の中間総括。ここで初めてリンネルの価値が上着の使用価値によって表現されていることが確認されている。上着の使用価値がリンネルの価値の現象形態となっていることの確認である。

(10)パラグラフー上述の過程は、われわれが第1節、第2節で商品の価値を分析して明らかになったことは、実は商品自身が現実の商品の交換において（現実の商品市場において）実際に商品自身によって行なわれていることなのだとことを確認している。第1節や第2節では、われわれが観察者として、その思惟によって、諸商品の価値を分析したが、第3節では商品が主体となり、商品自身の関連が考察の対象なのである。つまり物象こそが主体であり、そうした物象に、むしろ人間は規制され従属するという、転倒した関係がここで示唆されている。

つまりここでマルクスが「商品語」という奇妙なものを持ち出しているのは、上記のわれわれの考察は、確かにわれわれの観察によって初めてなされたことだが、しかしそれは現実の商品交換のなかで商品自身が日々行なっていることなのだ、ということである。これは後に、第4節で商品の物神的性格が考察されるが、その前提として物象化がここ考察されていると言える。

(11)パラグラフー全体の総括であり、結論である。これまでの考察の結果を、より一般化された形で再確認されている。

このようにこの「a 相対的価値形態の内実」は極めて厳密に論理的に展開されていることがわかります。

●「価値物」について再論(補論)

次は最後に残された宿題とも言うべきものです。第16回の報告で「価値物」の議論を紹介したさいに、次のように述べました。

「確かに大谷氏が紹介している『資本論』からのいくつかの引用文では、ピースさんの意見を肯定するような用例が見られるように思えます。しかしよくよく吟味してみると、やはりそうではなく、マルクス自身は「価値物」という言葉で、価値が形ある物として存在すること、つまり目に見える形で顕れているものと捉えていることが分かります。しかしそれを大谷氏が紹介する引用文一つ一つについて、検証すると横道にそれすぎるので、割愛します（またその機会があればやることにしましょう。）

つまりこれは宿題として残されているのです。そこでこの問題を最後に考えてみたいと思います。

大谷氏は、『資本論』からの引用文を紹介する前にまず久留間敏彦氏の『価値形態論と交換過程論』からの一文を長く引用したあと、次のように問題を提起しています（傍点は下線に変換）。

「いまの引用では、等価値形態に置かれる上着は、この形態に置かれたときにはじめて「価値物」になる、「価値物」としての形態規定性を与えられることになっています。ここで「価値物」の意味は、次のところにはっきりと示されています、――「ではどのようにして上衣は――その自然形態そのものが――そのまま価値をあらわすものに、すなわち価値物になるのか……」。また、繰り返して、「抽象的人間の労働の体化物、すなわち価値物」と言われています。「価値物」がこのようなものであるとすると、それはもちろん等価値形態に立つ商品についてのみ言うことで、相対的価値形態にある商品、たとえばリンネルはつねに「価値物」ではないということになります。じっさい先生は、上着のほうについてのみ「価値物」と言っておられます。ところが、マルクスの場合には、「価値物（Wertding）」という言葉が先生が使われているのとは違った意味で使われているように思われてならない。『資本論』の第1章からその用例を示すと、次のようなものがあります。」（『貨幣論』96頁）

そして大谷氏は『資本論』から五つの引用文を紹介しているわけです。しかしそのうちの2～3の引用文は、すでにわれわれがこの「a 相対的価値形態の内実」を詳細に検討するなかで明らかしてきたものです（第3、第5、第10の各パラグラフに出てくる「価値物」が引用されている）。だからわれわれは大谷氏が最初と最後に引用紹介しているものだけをここで検討すれば良いと思います。それらが、大谷氏によると、「価値物」は上着だけでなく、リンネルについても言う用例であり、（「価値物」とは価値対象性をもつもの）という概念を示すものだというわけです。果たしてそうなのか、マルクスはそうした意味で「価値物」という用語を使っているのか、それをこれからその二つの引用文について検討してみようというわけです。それは次のようなものです。

まず大谷氏が最初に引用しているのは、前にも紹介しましたが、次のような第3節の前文に出てくる文章です。

「商品の価値対象性は、寡婦のクイックリー（シェイクスピアの『ヘンリー四世』などの中の人物）と違って、どうつかまえたらいいかだれにもわからない。商品体の感性的にがさがした対象性とは正反対に、諸商品の価値対象性には、一原子の自然素材も入りこまない。だから、一つ一つの商品を好きだけひねくりまわしても、それは、価値物としては、依然としてつかまえないものがある。」（全集版64頁）

ここに出てくる「価値物」が、果たして大谷氏がどのような意味で使われているのかどうか、です。

ここでは商品の価値対象性はとらえどころがないことが言われています。というのは商品の直接的な自然な対象性はその使用価値であり、それはわれわれには感覚的にも捉えることができます。ところが商品の価値対象性は純粋に社会的なものであり、よって自然素材をまったく含まない、使用価値とは正反対のものだからです。つまりこの場合、商品が価値対象性をもつものであることは、前提されているのです。その上で、マルクスはその価値対象性は、しかし直接には、感覚的には、捉えどころのないものだ、と述べていることが分かります。だからもし大谷氏のように「価値物」＝「価値対象性を持つもの」とするならば、この文章はおかしなことになります。なぜなら、そうすると、上記の一文は次のようになるからです。

〈だから、一つ一つの商品を好きだけひねくりまわしても、それは、「価値対象性を持つもの」としては、依然としてつかまえようがないものである。〉

しかし商品が価値対象性を持つものであることが前提されているからこそ、商品の価値対象性は捉えどころがないものだということが論じられ得るのであって、それさえも分からないのなら、そもそもそれが捉えどころがあるのかわからないかも問題にはならないのではないのでしょうか。価値対象性を持つものであるかどうか、依然としてつかまえようがないというのでは論理的に不合理としかいえないのではないでしょうか。

それに対して、われわれが主張する「価値物」とは「価値の存在形態」であり、「価値が目に見えるような形ある物」として現われているものと理解するならば、上記の一文はスッキリと理解できます。

〈だから、一つ一つの商品を好きだけひねくりまわしても、それは、「価値が目に見える形ある物」としては、依然としてつかまえようがないものである〉

またこの場合は、確かに一つの商品だけが問題になっていますが、しかし一つの商品だけを見ているかぎりは依然としてそれを「価値物」としては捉えられないというのですから、それはむしろ「価値物」という規定は、二商品の価値関係においてはじめて与えられる規定、つまり形態規定であることを論証しているとも言えるわけです。だからこの引用文を根拠に「価値物」がリンネルにも妥当するなどという大谷氏の主張は正当化はできないのです。

次に大谷氏が最後に引用しているのは、「第4節 商品の物神的性格とその秘密」のなかにある次の一文です。

《労働生産物は、それらの交換の内部で、はじめてそれらのたがいに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。有用物と価値物とのこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換を求めて生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がりと重要性とを獲得した時である。》（全集版99頁）

この一文は、一見すると、如何にも大谷氏らの「価値物」理解を正当化するように思えます。マルクスは《感性的に異なる使用対象性》と《社会的に同等な、価値対象性》を上げ、それを言い換える形で《有用物と価値物》を挙げているのですから、この場合の《価値物》は《価値対象性を受け取る》こと、つまり「価値対象性を持つもの」という大谷氏の主張を根拠づけているように見えるわけです。

しかしこの文章を良く吟味してみるとそうではありません。例えば、マルクスは《それらの交換の内部で》と書いているように、ここで問題になっているのは諸物なのです。《それらが互いに感性的に異なる使用価値から分離》されて、《社会的に同等な、価値対象性を受け取る》と述べています。ここで《受け取る》のは《それら》の《諸物》であり、《それら》の《諸物》が《それらの互いに感性的に異なる使用価値から分離》されて、つまりそれらの諸使用価値と区別された存在として、《社会的に同等な、価値対象性を受け取る》と述べているのですから、この《社会的に同等な、価値対象性》というのは、ある特定の労働生産物がそうした一般的な等価値物として分離されてくる事態をマルクスは述べていると考えるべきなのです。この文章は、すでに貨幣形態まで説明が終わったあとに展開されている、第4節の文章であることも考える必要があります。

また上記の引用文は、次の文章とまったく同じ内容を述べていると考えることが出来ます。

《交換の不断の反復は、交換の一つの規則的な社会的過程にする。したがって、時の経過と共に、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換を求めて生産されざるをえなくなる。この瞬間から、一面では、直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する。諸物の使用価値は、諸物の交換価値から分離する。》（全集版23a118頁）

これは「第2章 交換過程」の中の一文ですが、ここで注意が必要なのは、《諸物の使用価値》が分離するのは、《諸物の交換価値》からだということ。これは先の第4節の引用文のなかにある《有用物と価値物》に該当すると考えてよいでしょう。つまりこの二つの引用文から類推するに、マルクスが先の第4節の引用文で述べている《価値物》は《交換価値》を意味していると考えられるのです。いうまでもなく、《交換価値》というのは、価値が目に見える形で現象している形態にあるものです。すなわち、上記の引用文が述べているのは、諸物の使用価値が、価値の現象形態としての《交換価値》から分離するということです。だから使用価値が分離するのは、ただ単に「価値対象性を持つもの」というような価値を内在的に持っている物からではなく、価値が現象して目に見える物からなのです。またそれを言い換えて《直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する》とも述べています。《交換のための諸物の有用性》というのは、諸物の使用価値がただ交換のためにだけに使われるということ。つまり等価値に置かれた商品の使用価値が価値を表すためにだけに使われるということなのです。だからこれもやはり価値が目に見える形で現われた物を意味しているのです。

だからもう一度、最初の引用文に戻ると、マルクスが《有用物と価値物との労働生産物のこの分裂》と述べている《価値物》というのは、単に「価値対象性を持つもの」といった意味ではなく、「価値が目に見える物という形で」現われているもの、つまり「一般的な等価値物」、あるいは「貨幣」を意味しているのです。そのように理解すべきものなのです。かくして大谷氏の主張にはまったく根拠がないことがこの引用文でも論証されるのです。

.....

【付属資料】

●第9パラグラフに関連するもの

《補足と改訂》

《それゆえ、価値関係――他の商品との交わり――のなかでリンネルの価値は使用対象性とは異なった表現を獲得する。しかし、どのようにしてか。リンネルが上着に等しいものとして表現されることによってである、それはちょうど、キリスト教徒の羊的性格が神の仔羊との同等性において現れるのと同じである。しかし、上着、上着商品の身体は一つの単なる使用価値である。それゆえ、リンネルリ価値はそれとは反対のもの、他の何らかの種類の使用価値、それが何であれとにかく使用価値で、表現される。..... リンネルの上着にたいする価値関係において上着は普通の商品体であると同時に、幽霊体〈Gespensterleib〉であり、抽象的人間労働の体化である。したがって、この関連の内部では、上着は、そのワールのもつよくよかさも、最新流行のスタイ

ルも通用しないし、聖なる香りを嗅ぐこともないし、その他使用価値としての上着を飾る有用な肉体的精神的特徴も、通用しない。まさしく、上着の位置にリンネルとは違う商品体であればどの商品体であっても、鉄であろうと、小麦であろうと、臭い焼肉〈Assa Foetida〉であろうと、人糞肥料等であろうと、何の問題もなくとって替わることができるのである。それゆえ、自分の価値と等しいものとしての、等価物としての上着との関係を通してリンネルは、自分の自然形態とは切り離された価値形態を獲得する。一方でこの関係は、リンネルの価値を形成している労働の抽象的人間的性格を表現するが、他方、この価値実体が対象の形態をもつ。上着と等しいものとして、リンネル価値は、リンネル体とは感覚的に全く対照的である。》(65頁、67頁)

《フランス語版》

《したがって、上衣をリンネルの等価物とする関係は、上衣形態をリンネルの価値形態に変態するか、あるいは、リンネルの価値を上衣の使用価値のなかで表現する。使用価値としては、リンネルは上衣と感覚的に異なる物体であるが、価値としては、上衣がリンネルと等価物であることから明瞭に証明されるように、上衣に等しい物であり、上衣に見えるのである。キリスト教徒の羊のような性質が、このキリスト教徒が神の仔羊と類似していることの中に現われるように、リンネルの価値属性は、リンネルが上衣と同等であることの中に現われる。》(22頁)

●第10パラグラフに関連するもの

《初版本文》――特定できるものはないが、この価値関係がリンネルの一方的なものであることを論じている部分を引用しておく。

《価値形態の両方の規定、または交換価値としての商品価値の両方の表現様式は、単に相対的であるとはいえず、両方が同じ程度に相対的に見えるのではない。リンネルの相対的価値 20エルのリンネル＝1着の上着 においては、リンネルの交換価値が明白に他の商品にたいするリンネルの関係として示されている。上着のほうは、たしかにただ、リンネルがそれ自身の価値の現象形態としての、したがってまたリンネルと直接に交換されうるものとしての、上着に關係するかぎりにおいてのみ、等価物である。ただこの関係のなかにおいてのみ上着は等価物なのである。しかし、上着は受動的にふるまっている。それはけっしてイニシアチブを取ってはいない。上着が関係のなかにあるのは、それが關係させられるからである。それだから、リンネルとの関係から上着に生ずる性格は、上着のほうからの関係の結果として現われるのではなくて、上着の作為なしに存在するのである。それだけではない。リンネルが上着に關係する特定の仕方、たとえ上着がまったく控え目であって、けっして「うぬぼれて気の狂った仕立屋」の製品ではなくても、まったく、上着を「魅惑する」ように仕立てられている。すなわち、リンネルは、抽象的人間的労働の感覚的に存在する物質化としての、したがってまた現に存在する価値体としての、上着に關係するのである。上着がこういうものであるのは、ただリンネルがこのような特定の仕方の上着に關係するからであり、またそのかぎりにおいてのみのものである。上着の等価物存在は、いわば、ただリンネルの反射規定なのである。ところが、それがまったく逆に見えるのである。一方では、上着は自分自身では、關係する労をとってはいない。他方では、リンネルが上着に關係するのは、上着をなにかあるものにするためではなくて、上着はリンネルがなくてもなにかあるものであるからなのである。それだから、上着にたいするリンネルの関係の完成した所産、上着の等価形態、すなわち直接に交換されうる使用価値としての上着の被規定性は、たとえば保温するという上着の属性などまったく同じように、リンネルにたいする関係の外にあって上着には物的に属しているように見えるのである。相対的な価値の第一の形態または単純な形態 20エルのリンネル＝1着の上着 にあつては、このまちがった外觀はまだ固定されてはいない。なぜならば、この形態は直接に反対のことをも言い表わしているからである。すなわち、上着がリンネルの等価物であるということ、および、これらの商商品のそれぞれがこのような被規定性をもつのは、ただ、他方の商品がその商品を自分の相対的な価値表現とするからであり、また、そうするかぎりにおいてのものである、ということがそれである。》(国民文庫版55-6頁)

《補足と改訂》

《[B]

[7]相対的価値形態

a)相対的価値形態の内実

.....(略)

商品の分析はわれわれに次のような結論をあきらかにした。すなわち、価値としては全ての商品は、その肉体のさまざまな多様性にもかかわらず、同じ単位のたんなる表現であり、すなわち質的に等しい、ということである。しかしながら、商品自身はあいかわらず、その価値性格のほんの少しの徴候をも自分からは示すことなく、生まれたままの自然形態にとどまっている。

[B1]

他方、ある一つの商品、たとえばリンネルが、他の商品、たとえば上着と価値関係に入るや否や。つまり、この関係はそれ自身の他の商品との関係である。くさきに分析がわれわれに語ったことを、いまやリンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを表現する。もちろん、商品語もまたさまざまな方言をもっている。たとえば、ロマンス語の動詞valer, valoirはドイツ語のWerthseinと比べて、商品Aの価値が表現されている異なった種類の商品Bとの価値同源性関係が、商品A自身の関連であることを、より適切に表現している。)使用価値あるいは使用対象としてはリンネルは、そのごまごわした肉体によってすでに感覚的に使用対象・上着とは区別されている。しかし、商品としてはリンネルは単に使用対象、商品体であるだけでなく、同時に何か全く違った物、見えない物、つまり価値である。リンネルは異なった種類の商品・上着と關係することによって、自分と等しい物としての上着と関連することによって、上着がいきなりリンネルと質的に等置される関係のなかで、自らの価値存在を表すのである。リンネルは上着のうちに同族のうろわしい価値魂を見てとったのである。

[B2]

他方、ある一つの商品、たとえばリンネルが、他の商品、たとえば上着と価値関係にはいるや否や。この関係は、その商品自身の他の商品に対する関係である。使用価値としては、リンネルはそのごまごわした肉体によって感覚的に使用価値上着とは区別される。しかし、それは商品である、それゆえ物質的に普通の使用物であるばかりではなく、より高度な、見ることの出来ない

本質――価値、でもあるのである。リンネルはある一つの異なった種類の、したがって明かに自分とは違った商品上着と、自分と等しい物として関係することによって、上着がいきなりリンネルと質的に等置される関係のなかで、リンネルはこの自らの価値存在を表すのである。リンネルはその無愛想な見かけにもかかわらず、上着のうちに同族のうろわしい価値魂を見てとったのである。さきに、リンネル価値の分析がわれわれに語ったことを、リンネル商品が上着との関係を通して、いまや自ら語るるのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ち明ける。もちろん、商品語も、ヘブライ語以外にもさまざまな、あるいはよりの確なあるいはそれほど的確でない方言を持っている。そこで、たとえば、ドイツ語のWerthseinはロマンス語の動詞valere, valer, valoirと比べて、商品Bとの同等性関係を、商品Aの固有の価値関係として表現するには、あまり明示的ではない。〈Pari sa vaut bien une messe. 〉(「補足と改訂」63-65頁)

《第二版》

《要するに、商品価値の分析が以前われわれに語ってくれたいっさいのことを、リンネルが上着という他の商品と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語ってくれる。リンネルは、自分だけが熟知している言葉である商品語で、自分の思想を漏らしているにすぎない。人間労働という抽象的な属性においての労働が、リンネル自身の価値を形成している、と言うために、リンネルはこう言う、--上着がリンネルと同等であり、したがって価値であるかぎり、上着は、リンネルが成り立っているのと同じ労働から成り立っている、と。自分の崇高な価値対象性は自分のごわごわした体躯とはちがっている、と言うために、リンネルはこう言う、--価値が上着のように見え、したがって、自分自身は価値物としては上着とうり二つである、と。ついでに言うておくと、商品語にも、ヘブライ語のほかに、正確な――正確さの点では程度の差があるが――方言がなお数多くある。たとえば、ドイツ語の“Werthsein”〔「値する」〕は、商品Bを商品Aに等置することが商品Aの固有の価値表現になるということ表現する手立てとしては、ロマンス語の動詞であるvalere, Valer, valoir, よりも適切ではない。パリはまさにミサに値する〈“valoir”〉!〔アンリ四世が王位につくため改宗したときに発した言葉。ただし、この言葉は、“valoir”というロマンス語の動詞の用例として引用されたものにすぎない。〕》(第二版邦訳30-1頁)

《フランス語版》

《リンネルが上衣という他の商品と交わりを結ぶやいなや、価値の分析が以前われわれに知らせてくれたいっさいのことを、リンネル自体が語ってくれる、ということがわかる。リンネルはただ、自分が日常親しんでいる言葉、商品の言葉でしか、自分の考えを洩らさない。自分の価値がその抽象的な属性においては人間労働から生じているということ表現するために、リンネルはこう言う。上衣は、私と同じだけの価値をもつかぎり、すなわち、価値であるかぎり、私自身と同じ労働から成っているのだ、と。リンネルのもつ価値としての崇高な実在が、こわばって筋のある自分の体躯とはちがうことを表現するために、リンネルはこう言う。価値は上衣の姿をとり、したがって、卵が一つ一つ互いに類似しているように私自身も価値物としては上衣に類似している、と。ついでに注意しておくと、商品語には、ヘブライ語のほかに、多かれ少なかれ正確な別の方言や訛りが数多くある。商品Bが商品Aと等価であるという確認が、商品Aの固有の価値表現になるのだ、ということ言い表わす点で、たとえば、「値する〈Wertsain〉」というドイツ語は、ロマンス語の動詞Valere, valer, およびフランス語のvaloirほどにはっきりとしていない。パリは確かにミサに値する〔アンリ四世が王位につくため、新教から旧教に改宗したときに発した言葉〕。》(23頁)

●第11パラグラフに関連するもの

《初版本文》――特定しがたいが、注(18a)がつけられている部分を引用しておく。

《20エレのリンネル=1着の上着、または、xEレのリンネルはy着の上着に値する、という相対的な価値表現のなかでは、上着はただ価値または労働凝固体としてのみ認められているのではあるが、しかし、それだからこそ、労働凝固体は上着として認められ、上着はそのなかに人間労働が凝固しているところの形態として認められているのである(18. a) 使用価値上着がリンネル価値の現象形態になるのは、ただ、リンネルが抽象的人間労働の、つまりリンネル自身のうちに、対象化されている労働と同種の労働の、直接的物質化としての上着物質に関係しているからにほかならない。上着という対象性は、リンネルにとっては、同種の人間労働の感覚的につかまえられる対象性として、したがってまた現物形態における価値として、認められているのである。リンネルは価値としては上着と同じ本質のものであるがゆえに、上着という現物形態がこのようにリンネル自身の価値の現象形態になるのである。しかし、使用価値上着に表わされている労働は、単なる人間労働ではないのであって、一定の、有用な労働、裁縫労働である。単なる人間労働、人間労働力の支出は、どのようにでも規定されることはできるが、それ自体としては無規定である。それは、ただ、人間労働力が特定の形態において支出されるときにはじめて、特定の労働として実現され、対象化されることができるのである。なぜならば、ただ特定の労働にたいしてのみ、自然素材は、すなわち労働がそれにおいて対象化される外的な物質は、相対するのだからである。》(国民文庫版48頁)

《補足と改訂》

《したがって、価値関係の媒介によって、商品Bの自然形態が商品Aの価値形態、商品種類Aの価値鏡となる。(注18, 人間について)商品Aが肉体化した価値としての、すなわち人間労働の物質化としての商品Bに関係することによって、商品Aは自分と違う商品の肉体を自分自身の価値表現の材料にする。そのようにして、ある一つの商品の価値がある異なった種類の商品の使用価値において表現され、相対的価値の形態を受け取る。》(67頁)

《フランス語版》

《価値関係によって、商品Bの自然形態が商品Aの価値形態になる、すなわち、Bの体躯がAにとってAの価値の鏡に(17)なる。このように、商品Bの使用価値のうちに表現された商品Aの価値が、相対的形態を獲得するのである。》(23頁)

●注18に関連するもの

《初版本文》

《(18a) 見ようによっては人間も商品と同じことである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのもないから、人間は最初はまず他の人間のなかに自分を映してみるのである。人間ベテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係するきである。しかし、それとともに、またパウロにとっては、パウロの全体が、そのパウロ的な肉体のままで、人間という種族の現象形態として認められるのである。》(国民文庫版49頁)

《フランス語版》

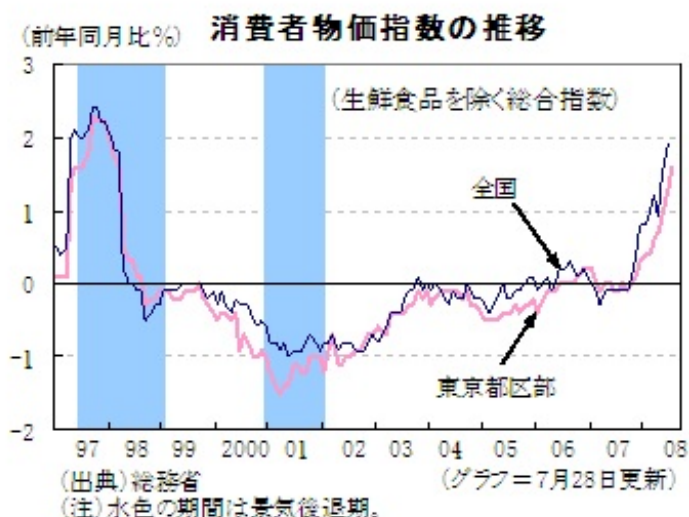
《(17) ある関係のもとでは、人間も商品と同じである。人間はけっして鏡をもって生まれてくるのもないし、フィヒテ―彼の自我は確認されるためになものをも必要としない―流の哲学者として生まれてくるのもないから、人間はまず、自分以外の人間のうちにのみ自分の姿を映して、自分を認めるのである。したがって、彼には、皮膚と毛をもった、自分以外のこの人間が、人間という類の現象形態であるかのように見える。》(23頁)

『資本論』を読んでみませんか

11月20日、菅直人副総理（経済財政担当相）は、11月の月例経済報告で日本経済は「緩やかなデフレ状況にある」と宣言しました。



デフレーション（deflation）の明確な定義は無いようですが、IMF（国際通貨基金）は「少なくとも2年程度下落が続く状態」などと定義しているようです。要するに物価が持続的に下落する状態です。



物価、つまり「商品の価格」は、何によって決まってくるのでしょうか。

『資本論』の第1篇では「商品と貨幣」が論じられています。そこでは商品の「価格」は、商品の「価値」の貨幣表現だと述べています。つまり商品の価格は、貨幣によって商品の価値を相対的に計った（尺度した）ものなのです。そして商品の「価値の大きさ」は、その商品の生産のために社会的に必要な労働時間によって規定される、云々。

こうした『資本論』で論じられている、商品の「価値」と「価格」の理論は今日においても当

然妥当します。しかし今日の物価を規定する要因は、もっと複雑であり、さまざまなものによって媒介されています。少し、物価下落の考えられうる要因を挙げてみましょう。

(1)、まず当然、商品の「価値」の低下があります。これはパソコンやテレビなど電化製品などの価格の下落などはそれらを生産する技術の革新によって、生産力が上がった分だけ、一つの商品に支出される労働量が減少して、価値が低下した結果と考えられます。

(2)、貨幣価値の変動。これは金を生産する生産力の変化によって、金の価値量が増え、よってその金によって相対的に表現された商品の価格が、例えその価値が変わらなくても変化する場合があることです。しかし金の価値そのものは、そんなに急速に変化するようなものではないですから、とりあえずは考えなくてもよいでしょう。

(3)、度量標準の変化。これは現代の通貨（円）が、どれだけの金量を代表しているのかという問題です。私たちが使っている「一万円札」は日銀が発行する銀行券です。それが一般流通に入って通貨（流通手段）として流通しています。その限りでは金を代理して流通する紙幣と同じ流通法則に立脚しているのです。これは兌換銀行券か不換銀行券かの相違とは無関係です。しかし現在の日銀券のように不換券の場合（金との交換が停止されている場合）は、それがどれだけの金量を代表しているのかは、法的、制度的には決まっていません。だからそれは日常的に変化しているわけですが、その変化は、金の市場価格（円価格）に反映しており、それによって現在の一万円札が、だいたいどれだけの金量を代理しているかの見当はつけることができます。ただこれは一般的には、代表する金量は減る傾向にあり、通貨の「価値」は下落傾向にあるので、その限りでは物価を一般的に押し上げるように作用するのです。だからこれはデフレではなくインフレ要因として作用するのです。

(4)、為替相場の変動。これは円がドルやその他の通貨に対して高くなる場合が考えられます。その場合は、輸入商品の価格が下落します。例えばドン・キホーテの690円のジーンズが用意した3万本がたちまち売り切れたなどという例は、そうしたケースに当てはまるでしょう。為替相場は、だいたいにはそれぞれの国の通貨の「価値」（それぞれの通貨が代表する金量）を反映しますが、直接には、その国の国際収支に規定されています。一般に、輸入より輸出が多かったり、外国に投資した資本からの収入が多かった場合に高くなりますが、為替投機によっても急速に変動する場合があります。

(5)、原油の高騰のように、国際的な商品投機による物価変動が国内に波及する場合もあります。つまり今日の物価下落は、一時期の原油の高騰（それはもっぱら投機によるものと考えられています）から較べれば、比較的その価格が落ち着いている状態を反映している側面もありうるわけです。

(6)、最後に、これは今回の物価下落の一番重要な要因と思いますが、マルクスは過剰生産恐慌時には、過剰な商品や資本の「価値の破壊」が強行されると指摘しています。つまり過剰な商品は強制的に投げ売りされるし、過剰な生産整備はスクラップ化されざるをえません。今回の物価下落の原因としては、サブプライム金融恐慌によって暴露された過剰生産が調整されている局面という要素が一番大きいように思います。政府は2001年3月にもデフレ宣言を行ないましたが、あの時も2000年のアメリカのITバブルが崩壊した時期に合致します。むしろ今回の「価値の破壊」がドラスチックに進まないのは、これもさまざまな要因がこれまた絡んでいます（その大きな要因としては政府のエコ補助などさまざまな救済策があるでしょう）、デフレ圧力を通貨価値の下落によるインフレ圧力がある程度相殺しているからだとも考えられます。本来ならもっと激しい物価の下落があってもおかしくはないのです。

このように物価の一般的下落といってもさまざまな要因が絡まっていますが、しかしそれらを解明するためにも、やはり『資本論』の研究はその基礎として必要なのです。貴方も日常的な経済現象をより深く理論的に把握するためにも『資本論』を一緒に読んでみませんか。

第19回「『資本論』を読む会」の報告

◎“師走”

「師走」は『語源由来辞典』によると、当て字で、語源は諸説あるそうで、正確なものは未詳だそうです。しかし主なものとしては、師匠の僧がお経をあげるために、東西を馳せる月という意味があるようです。それ以外には、「年が果てる」意味の「年果つ（としはつ）」が変化したとするものや、「四季の果てる月」を意味する「四極（しはつ）」からとする説、あるいは「一年の最後になし終える」意味の「為果つ（しはつ）」からとする説などがあるということです。

ところで「師走」だからというわけでもないのですが、第19回「『資本論』を読む会」は何とも慌ただしく、あっというまに終わってしまいました。だからあまり報告することもない状態なので、実は、報告者は困っている次第なのです。

今回は「b 相対的価値形態の量的規定性」をすべて終えました。この部分は確かにあまり難しい問題はない所ではあるのですが、しかしそれにしても簡単にやり過ぎたように、報告者には思えました。

だから報告担当の亀仙人は、敢えて難しい問題をぶつけてみました。すなわち、現行版の『資本論』では（初版付録もそうですが）、「相対的価値形態の内実」のあとに、「量的規定性」が考察されているが、初本文では量的規定性が考察されたあとに相対的価値形態が考察されていること、また相対的価値形態の考察もその展開は現行版や初版付録とは一見すると逆の展開になっているように見えるが、これはどうしてなのか、という問題です。これは初本文の論理的展開はどうなっているのか、という問題とも関連して（しかもマルクス自身は、本文の叙述こそ《弁証法が……はるかに鮮明》だと、初版序文で書いているわけです）、大変、興味深いテーマではありますが、しかし、やはりこれはあまりにも問題が横道に逸れ過ぎるので、またその機会があれば、論じることにして、今回は割愛したいと思います（どこの誰かさんが「報告が長すぎる」とブツクサ言っていることでもあります）。

◎各パラグラフごとの検討

とにかくこれまで通り、パラグラフごとに簡単な解説を書いておくことにしましょう。ただ今回は、分節ごとの詳細な解説は不要と考えて、パラグラフごとに全体を解説することにします。これまで通り、最初にパラグラフ全体を紹介し、そのあとに解説をつけるという順序で行なうことにします。また関連資料は最後に回します。

【1パラグラフ】

《その価値が表現されるべき商品は、どれも、与えられた量のある使用対象——15シェffelの小麦、100ポンドのコーヒーなど——である。この与えられた商品量は、一定量の人間労働を含んでいる。したがって、価値形態は、単に価値一般だけではなく、量的に規定された価値、すなわち価値の大きさをも表現しなければならない。したがって、商品Bに対する商品Aの、上着に対するリンネルの、価値関係においては、上着という商品種類は、単に価値体一般として、リンネルに質的に等置されるだけではなく、一定量のリンネル、たとえば20エレのリンネルに対して、一定量の価値体または等価物、たとえば一着の上着が等置されるのである。》

まずこれまで考察してきた商品の価値の表現においては、二つの商品の等置関係の質的な面だけが考察されてきましたが、しかし実際には、その価値が表現される商品は、どれもある与えられた分量の使用対象なわけです。

第1章では、《鉄、紙などいっさいの有用物は、二重の観点から、質および量の観点から、考察されなければならない。このような物はどれも、多くの属性からなる一つの全体であり、したがって、さまざまな面で有用でありえる。これらのさまざまな面と、したがって物のいろいろな使用の仕方とを発見することは、歴史的な行為である。有用物の量をはかる社会的尺度を見つけたこともそうである。諸商品尺度の相違は、一部は、はかられる対象の性質の相違から生じ、一部は、慣習から生じる》とされ、《使用価値の考察に際しては、1ダースの時計、1エレのリンネル〔亜麻布〕、1トンの鉄などのようなその量的規定性がつねに前提されている》と指摘されていました。

ここでは《15シェffelの小麦、100ポンドのコーヒーなど》が例として上げられています。ここで《シェffel》というのは、新日本新書版の解説によれば、「古い穀物単位」であり、その値は地域によって異なるが、1シェffelは23-223リットルと極めて大きな幅があることが紹介されており、プロイセンでは54.96リットルだとの説明があります。

こうした一定量の商品は、だから一定量の人間労働を含んでいるわけです。つまり一定の価値の大きさをもっているわけです。

だからわれわれがこれまで見てきた、価値の相対的表現である、価値形態は、単に価値一般だけでなく、量的に規定された価値、つまり価値の大きさも表現しなければならないというわけです。

したがって、商品Bに対する商品Aの、上着に対するリンネルの、価値関係においては、上着は価値体一般としてリンネルに質的に等置されたのですが、一定量のリンネル、例えば20エレのリンネルに対しては、一定量の価値体または等価物として、例えば一着の上着が等置されるというわけです。

要するに、ここでは、われわれはこれまで相対的価値形態の質的側面を見ることによって、その内実を明らかにすることが出来たのですが、今度は、それらは同時に量的規定性をもったものであることが再確認されていると言えるでしょう。

【2パラグラフ】

《「20エレのリンネル＝1着の上着 または、20エレのリンネルは一着の上着に値する」という等式の前提にあるのは、一着の上着には20エレのリンネルにひそんでいるのとまったく同じ量の価値実体がひそんでいること、すなわち、両方の商品量は等しい量の労働または等しい大きさの労働時間を費やさせることである。ところが、20エレのリンネルまたは一着の上着の生産に必要な労働時間は、織布労働または裁縫労働の生産力が変動するたびに、変動する。そこで、このような変動が価値の大きさの相対的表現に与える影響について立ちいって研究しなければならない。》

「20エレのリンネル＝1着の上着 または、20エレのリンネルは一着の上着に値する」という等式の前提にあるのは、二つの商品にはまったく同じ量の価値の実体、抽象的人間労働の凝固がひそんでいるということです。つまり両方の商品の二つのそれぞれの量の生産のためには、等しい量の人間労働、または等しい大きさの労働時間が必要だということです。

しかし、20エレのリンネルあるいは一着の上着の生産に必要な労働時間は、織布労働または裁縫労働の生産力が変われば、変化します。だから、こうした変化が価値の大きさの相対的表現にどのような影響を与えるのかを立ちいって研究する必要があるということです。

ここでは、「20エレのリンネル＝1着の上着」という等式においては、確かに二つのそれぞれの量の商品の価値が等しいことを示していますが、しかし価値の大きさの表現としては、あくまでも一定量のリンネルの価値の大きさだけが表現されているのであって、一定量の上着の価値の大きさそのものは表現という点では問題にはなっていないこと、にもかかわらず、リンネルの価値の大きさの表現においても、上着の価値の大きさが関連してくるのだ、という指摘がありました。

【3パラグラフ】

《 I リンネルの価値は変動するが(19)、上着価値は不変のままである場合。たとえば、亜麻のとれる耕地〔**Boden**〕がますますやせた結果、リンネルの生産に必要な労働が二倍になるとすれば、リンネルの価値は二倍になる。今や一着の上着は20エレのリンネルの半分の労働時間を含むにすぎないから、20エレのリンネル＝1着の上着 の代わりに、20エレのリンネル＝2着の上着 となるであろう。これに対して、たとえば織機の改良によって、リンネルの生産に必要な労働時間が半分減少すれば、リンネル価値は半分に低下する。それに応じて、今や、20エレのリンネル＝1/2着の上着 となる。したがって、商品Aの相対的価値、すなわち商品Bで表現される商品Aの価値は、商品Bの価値が不変のままでも、商品Aの価値に正比例して、上昇または低下する。》

I リンネルの価値の大きさは変動するが、上着の価値は不変である場合。

それは例えば、亜麻が不作の結果、リンネルの生産に必要な労働時間が二倍になるならば、リンネルの価値も二倍になります。

だから一着の上着は20エレのリンネルの半分の労働時間を含むに過ぎないから、20エレのリンネル＝2着の上着という等式になります。

これに反して、織機の改良によって、リンネルの生産に必要な労働時間が半分になれば、リンネルの価値は半分になり、よって今や、20エレのリンネル＝半分の上着となります。したがって、商品Aの相対的価値、つまり商品Bで表された商品のAの価値は、商品Bの価値が不変でも、商品Aの価値の変動に正比例して、上昇または下落するという結論が得られます。

ここでは「1/2着の上着」という表現ができてきますが、1/2着の上着は使用価値ではないということから、マルクスを批判する論者があることが所沢の「『資本論』を読む会」では問題になったようだという紹介があり、そこでの解説は見事であるという意見がありました。 (<http://shihonron.exblog.jp/9939276/>を参照)

【4パラグラフ】

《 II リンネルの価値は不変のままであるが、上着価値が変動する場合。こうした事情のもとで、たとえば羊毛の刈りとりが思わしくないために、上着の生産に必要な労働時間が二倍になれば、20エレのリンネル＝1着の上着の代わりに、今や、20エレのリンネル＝1/2着の上着 となるであろう。これに反して、上着の価値が半分減少すれば、20エレのリンネル＝2着の上着 となるであろう。だから、商品Aの価値が不変のままでも、商品Aの相対的な、商品Bで表現される価値は、Bの価値変動に逆比例して、低下または上昇する。》

II リンネルの価値が不変で、上着の価値が変動する場合。

羊毛の刈り取りが思わしくないために、上着の生産に必要な労働時間が二倍になると、価値が二倍になり、20エレのリンネル＝1/2の上着 となります。

これに反して、上着の価値が半分に減少すれば、20エレのリンネル＝2着の上着 となります。

だから、商品Aの価値が不変でも、商品Aの相対的な価値が、商品Bで表現される場合、商品Bの価値変動に逆比例して、それは上下するといえます。

【5パラグラフ】

《 I およびIIのもとでのさまざまな場合を比較してみると、相対的価値の大きさの同じ変動が正反対の原因から生じることがわかる。実際、20エレのリンネル＝1着の上着 は、(1)リンネルの価値が二倍になっても、上着の価値が半分に減少しても、20エレのリンネル＝2着の上着 という等式になり、また、(2)リンネルの価値が半分に低下し

ても、上着の価値が二倍に上昇しても、**20**エレのリンネル＝ $1/2$ 着の上着 という等式になるのである。》

IとIIの場合におけるさまざまな場合を比較すると、相対的価値の大きさの同じ変動が正反対の原因から生じることがわかります。例えば「20エレのリンネル＝1着の上着」が「20エレのリンネル＝ $1/2$ 着の上着」に変動した場合、その原因は、一つは上着の価値は変わらないのに、リンネルの価値が半分になったからであり、もう一つはリンネルの価値に変化がないのに、上着の価値が二倍に上がったから、という二つの原因が考えられました。つまり一方は価値が下がったから、他方は価値が上がったから、同じ相対的価値の変動が生じたことになるわけです。

実際、「20エレのリンネル＝1着の上着」という等式は、(1)リンネル価値が二倍になっても、あるいは上着の価値が半分になっても、「20エレのリンネル＝2着の上着」になる。(2)他方、リンネルの価値が半減しても、上着の価値が二倍になっても、「20エレのリンネル＝ $1/2$ 着の上着」という等式になります。

【6パラグラフ】

《 III リンネルおよび上着の生産に必要な労働量が、同時に同じ方向に、同じ比率で変動することもある。この場合には、これらの商品の価値がどんなに変動しようと、あい変わらず、**20**エレのリンネル＝1着の上着 である。これらの商品の価値変動は、これらの商品を、価値が不変のままであった第三の商品と比較すれば、すぐにわかる。すべての商品の価値が、同時に、同じ比率で、上昇または低下すれば、それらの商品の相対的価値は不変のままであろう。これらの商品の現実の価値変動は、同じ労働時間内に、今や一般的に、以前よりも多量かまたは少量の商品量が供給されるということから見てとれるであろう。》

III リンネルと上着の生産に必要な労働量が、同時に同じ方向に、同じ比率で変動する場合。

この場合には、二つの商品の価値がどんなに変動しようと、二つの商品で表される相対的価値の大きさには変動はありません。

これらの価値の変化は、価値が不変な第三の商品と比較することによってわかります。

すべての商品が、同時に、同じ比率で、上昇または低下するならば、それらの商品の相対的価値は不変のままです。

これらの商品の価値の変動は、同じ労働時間内に、以前よりもより多くかより少ない商品量が供給されることから見るができるということです。

【7パラグラフ】

《 IV リンネルおよび上着の生産にそれぞれ必要な労働時間、したがってこれらの商品の価値が、同時に同じ方向に、しかし等しくない程度で変動するか、あるいは反対の方向に変動するなどなどのことがありえる。この種のありとあらゆる組み合わせが一商品の相対的価値に与える影響は、I、II、およびIIIの場合を応用すれば、簡単にわかる。》

IV リンネルおよび上着の生産に必要な労働時間が、よってそれらの価値が、同時に同じ方向に、しかし等しくない程度で変動したり、あるいは反対の方向に変動するなどのことはありえます。

この種のありとあらゆる組み合わせが一つの商品の相対的価値に与える影響は、I、II、IIIのケースを応用すれば、簡単にわかるということです。

【8パラグラフ】

《 こうして、価値の大きさの現実の変動は、価値の大きさの相対的表現または相対的価値の大きさには、明確にもあまところなしにも反映されはしない。一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変のままでも、変動しうる。一商品の相対的価値は、その商品の価値が変動しても、不変のままでありえる。そして、最後に、一商品の価値の大きさとこの価値の大きさの相対的表現とが同時に変動しても、この変動が一致する必要は少しもない**(20)**。》

こうして、実際の価値の変動は、その相対的表現、あるいは相対的価値の大きさには、明確に、忠実に反映されることはありません。

一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変でも変動するし、

一商品の相対的価値は、その商品が変動しても、不変のままでありえます。

だから最後に、一商品の価値の大きさとその相対的表現とが同時に変動しても、その変動が一致する必要はまったくないわけです。

【注20】

《**(20)** 第2版への注。価値の大きさとその相対的表現とのこうした不一致は、俗流経済学によっていつものながらの鋭敏さで利用されてきた。たとえば、次のとおり。「Aと交換されるBが騰貴するために――そのあいだにAに支出される労働は減少していないのに――Aが低落するということをひとたび認めれば、諸君の一般的価値原理は崩壊する。…もしも、Aの価値がBに対して相対的に上昇するので、Bの価値がAに対して相対的に低下するということが承認されるならば、リカードが、一商品の価値はそれに体现された労働の量によってつねに規定されるという、彼の大命題の基礎にすえた根拠が崩れさる。なぜなら、もしもAの費用におけるある変動が、Aと交換されるBとの関係におけるAそれ自身の価値を変化させるだけでなく、Bの生産に必要なとされる労働量には何の変動も生じなかったのにBの価値をもAの価値に対して相対的に変化させるならば、その場合には、一つの物品に支出される労働量がその価値を規制するということを断言する学説が崩壊するだけでなく、一つの物品の生産費がその価値を規制するという学説も崩壊するからである」(J・ブロードハースト『経済学』、ロンドン、一八四二年、一一、一四ページ)。ブロードハースト氏は、

同じように、次のように言うこともできよう。どうか一つ、**10/20**、**10/50**、**10/100**等々という比をよく見たまえ。**10**という数は不変のままなのに、その比率上の大きさ、すなわち、**20**、**50**、**100**という分母に対するその相対的な大きさは、たえず減少している。だから、一つの整数、たとえば、**10**の大きさは、それに含まれる**1**という単位の数によって「規制」されているという大原理は崩壊する、と。》

ここでは、商品の価値の相対的な表現が、その価値の変化を必ずしも忠実に表さないということから、だから商品の価値がそれに体现された労働の量によって規定されるというリカードの価値論の崩壊を主張するブロードバーストの誤りが、分数を例に使って、実に分かりやすく説明されています。

【付属資料】

【表題】

《初版付録》——「d 価値関係のなかに含まれている相対的価値形態の量的な被規定性」

【1】

《初版本文》

《これまでではただ価値の実体と価値の大きさが規定されただけなので、今度は価値の形態の分析のほうに方向転換することにしよう。 まず第一に、ふたたび商品価値の第一の現象形態に立ち帰ってみよう。 二つの量の商品をとってみて、それらはそれらの生産に等しい労働時間がかかる、つまり、それらは等しい大きさの価値である、とすれば、40エレのリンネル＝2着の上着、すなわち、40エレのリンネルは二着の上着に値する、ということになる。われわれが見るのは、リンネルの価値が一定量の上着で表現されている、ということである。ある一つの商品の価値は、このように別の一つの商品の使用価値で表わされている場合には、その商品の相対的な価値と呼ばれる。》

《初版付録》

《とはいえ、20エレのリンネルは、ただ、価値一般、すなわち人間労働の凝固であるだけではなくて、それは特定の大きさの価値である。すなわち、そのなかには一定量の人間労働が対象化されている。それだから、上着にたいするリンネルの価値関係においては、上着という商品種類が、単に、価値体一般として、すなわち人間労働の物体化として、リンネルに質的に等置されるだけではなくて、この価値体の一定量が、1ダース等々ではなく一着の上着が、一着の上着のなかに20エレのリンネルにおけるとちょうど同じだけの価値実体すなわち人間労働が含まれているかぎりにおいて、等置されるのである。》

《補足と改訂》

《[A]

[11] b) 相対的価値形態の量的規定性

その価値が表現されるべき商品は、どれも、与えられた分量の使用対象——何シェッフェルの小麦、何ポンドのコーヒー等々——である。この与えられた商品分量は、一定分量の人間の労働を含んでいる。したがって、価値形態は、単に価値一般だけではなく、量的に規定された価値、すなわち価値の大きさをも表現しなければならない。それゆえ、商品Bにたいする商品Aの価値関係においては、商品種類Bは商品Aに質的に等置されるだけではなく、ある与えられた分量のAにたいしてBが、20エレのリンネルにたいして一定量の等価物が、等置される。

[B]

b) 相対的価値形態の量的規定性

その価値が表現されるべき商品は、何シェッフェルの小麦、何ポンドのコーヒー等々といった与えられた分量である。その商品分量は一定量の人間の労働を含んでいる。それゆえ、商品は価値一般としてだけではなく、量的に規定された価値すなわち価値の大きさとしても表現されなければならない。》

《フランス語版》

《価値が表現されるべきの商品も、ある分量の有用物、たとえば15ブツシエルの小麦、100ポンドのコーヒー等であって、一定の分量の労働を含んでいる。したがって、価値形態は、たんに価値一般ばかりでなく、ある価値量をも表現しなければならない。商品Aの商品Bにたいする価値関係では、商品Bが質の観点でAに等しいと宣言されるだけでなく、さらにBのある分量がAの与えられた分量に等しいのである。》

[2]

《初版本文》

《一商品の相対的な価値は、その商品の価値が不変のままであっても、変動することがありうる。逆に、その商品の相対的な価値は不変のままでありうる。たとえその価値は変動しようとも。すなわち、40エレのリンネル=2着の上着 という等式が前提しているのは、両方の商品に同じ量の労働が費やされている、ということである。しかし、それらの商品を生産する労働の生産力に変動が生ずれば、そのつど、それらの商品の生産に必要な労働時間は変動するのである。そこで、このような変動が相対的な価値に及ぼす影響を考察してみよう。》

《補足と改訂》

《[A]

20エレのリンネル=1着の上着、すなわち、20エレのリンネルは1着の上着に値するという等式的前提にあるのは、1着の上着には20エレのリンネルに潜んでいるのとまったく同じ量の価値実体が潜んでいること、すなわち、両方の商品分量は等しい量の労働または等しい大きさの労働時間を費やさせるということ、である。ところが、20エレのリンネルまたは1着の上着の生産に必要な労働時間は、織布労働または裁縫労働の生産力が変動するたびに、変動する。そこで、このような変動が価値の大きさの相対的表現に与える影響について立ち入って研究しなければならない。

[B]

20エレのリンネル=1着の上着、すなわち20エレのリンネルは1着の上着に値するという等式的前提にあるのは、両方の商品分量は等しい量の労働を費やさせる、または等しい大きさの労働時間で生産されることである。ところが、さまざまな種類の労働の生産力が変動するたびに、そのときどきの商品分量の生産に必要な労働時間が変動する。そこで、われわれはこのような変動が、ある商品、われわれの例ではリンネルの価値の大きさの相対的表現に与える影響について考察してみよう。》

《フランス語版》

《20メートルのリンネル=一着の上衣、あるいは20メートルのリンネルが一着の上衣に値するという等式は、両商品のどちらも同量の労働が費やされているか、あるいは、両商品が同じ時間内に生産される、ということ为前提している。だが、この時間は両商品のどちらにとっても、それを作り出す労働の生産力が変動するたびごとに変動する。さて、この変動が価値量の相対的表現に及ぼす影響を調べてみよう。》

[3]

《初版本文》

《1着の価値が不変のままであるときに、リンネルの価値が変動する、としよう。たとえば亜麻を栽培する土地の豊度の低下の結果として、リンネルの生産のために支出される労働時間が二倍になるとすれば、リンネルの価値は二倍になる。40エレのリンネル=2着の上着 にかわって、40エレのリンネル=4着の上着 となるであろう。なぜならば、2着の上着は今では40エレのリンネルの半分だけの労働時間しか含んでいないからである。これとは反対に、たとえば織機の改良の結果として、リンネルの生産に必要な労働時間が半分だけ減少するとすれば、リンネルの価値は半分だけ低下する。したがって今度は40エレのリンネル=1着の上着 となる。それだから、商品Aの相対的な価値、すなわちその商品の価値が商品Bで表現されたものは、商品Bの価値が不変のままであれば、商品Aの価値に正比例して上がり下がりするのである。》

《フランス語版》——ほぼ同じだが、傍点（下線に変換）が付けられている。

《1上衣の価値が不変のままであるのに、リンネルの価値が変動するばあい。亜麻を供給する土地の収穫高がいちだんと少なくなった結果、リンネルの生産に必要な労働時間が二倍になると仮定すれば、そのばあいリンネルの価値も二倍になる。20メートルのリンネル=1着の上衣 のかわりに、20メートルのリンネル=2着の上衣 になる。というのは、1着の上衣はいまでは半分の労働しか含んでいないからである。これに反して、織機の改良の結果、リンネルの生産に必要な時間が半減すれば、リンネルの価値も同じ比率で減少する。したがって、20メートルのリンネル=1/2の上衣 になる。だから、商品Aの相対的価値、すなわち、商品Bのうちに表現される商品Aの価値は、商品Bの価値が不変のままであっても、商品Aの価値に正比例して上昇するかまたは低下する。》

[4]

《初版本文》

《II 上着の価値が変動するときに、リンネルの価値は不変のままである、としよう。こういう事情のもとで上着の生産に必要な労働時間が、たとえば羊毛刈り取りの不調の結果として、二倍になるならば、40エルのリンネル=2着の上着 にかわって、今度は40エルのリンネル=1着の上着 となる。これに反して、上着の価値が半分だけ減少するならば、40エルのリンネル=4着の上着 となる。それゆえ、商品Aの価値が同じままであるならば、商品Aの相対的な、商品Bで表現される価値は、Bの価値変動に反比例して、低下したり上昇したりするのである。》

《フランス語版》――ほぼ同じだが、傍点（下線に変換）がついている。

《 II 上衣の価値が変動するのに、リンネルの価値が不変のままであるばあい。この事情のもとでは、羊毛の刈取りがあまり順調でなかった結果、上衣の生産に必要な時間が二倍になると仮定すれば、20メートルのリンネル=一着の上衣 のかわりに、いまでは 20メートルのリンネル=1/2着の上衣 になる。これに反して、上衣の価値が半分だけ低下すれば、そのばあい 20メートルのリンネル=2着の上衣 になる。商品Aの価値が不変のままであっても、商品Bのうちに表現される商品Aの相対的価値は、商品Bの価値変動に反比例して上昇するかまたは低下する、ということがわかる。》

[5]

《初版本文》

《IとIIとのいろいろな場合を比較してみると、次のような結果になる。すなわち、相対的な価値の同じ変動がまったく反対の諸原因から生ずることがありうる、ということである。たとえば、40エルのリンネル=2着の上着 が（1）等式 40エルのリンネル=4着の上着 になるのは、リンネルの価値が二倍になるか、または上着の価値が半分だけ低下するからであって、（2）等式 40エルのリンネル=1着の上着 になるのは、リンネルの価値が半分だけ低下するか、または上着の価値が二倍に上昇するからである。》

《フランス語版》――同じだが、傍点（下線に変換）がついている。

《IとIIのなかに含まれている種々のばあいを比較すれば、相対的価値の同じ量的変動が全く相反した原因から生じうるということは、明らかである。したがって、20メートルのリンネル=1着の上衣 という等式が 20メートルのリンネル=2着の上衣 になるのは、リンネルの価値が二倍になるか、または上衣の価値が半減するからである。そしてまた、20メートルのリンネル=1/2着の上衣 になるのは、リンネルの価値が半減するか、または上衣の価値が二倍になるからである。》

[6]

《初版本文》

《III リンネルと上着との生産に必要な諸労働量が、同時に、同じ方向で、同じ割合で、変動する。こういう場合には、たとえリンネルと上着との価値がどのように変えられていようと、相変わらず 40エルのリンネル=1着の上着 である。それらの価値変動は、それらと、その価値が不変のままだった第三の商品と比較してみれば、すぐに発見される。もしすべての商品の価値が同時に同じ割合で上昇または低下するならば、すべての商品の相対的な諸価値は不変のままである。それらの商品の現実の価値変動は、同じ労働時間で今や一般的に以前よりもより大きいかまたはより小さい商品量が供給されるであろう、ということから推知されるであろう。》

《フランス語版》――同じだが、傍点（下線に変換）がある。

《 III リンネルと上衣との生産に必要な労働量が、同時に同じ方向に同じ比率で変動すれば、このばあいには、それらの価値変動がどうあろうと、以前と同じように 20メートルのリンネル=1着の上衣 である。この価値変動は、その価値が同じままである第三の商品と比較することによって、発見される。もしすべての商品の価値が同時に同じ比率で増大または減少すれば、それらの相対的価値は全く変動しない。それらの商品の本当の価値変動は、同じ労働時間内に供給される商品量が、いまでは一般に、以前よりも多くなるか少なくなるかで、わかるはずである。》

[7]

《初版本文》

《Ⅳ リンネルと上着とのそれぞれの生産に必要な労働時間、したがってまたそれらの物の価値は、同時に同じ方向においてはあがるが違った程度において、あるいはまた反対の方向、等々において、変動することがありうるであろう。あらゆる可能なその種の組み合わせが一商品の相対的な価値に及ぼす影響は、ⅠとⅡとⅢとの場合の適用によって簡単に明らかになるのである。》

[8]

《補足と改訂》

《それゆえ、現実の価値の大きさの変動は、その相対的表現すなわち相対的価値の大きさに、曖昧さをのこさずあますところなく反映するというわけではない。ある一つの商品の相対的価値は、その価値が変化しなくても、変動することがある。その相対的価値は、その価値が変動しても変わらないことがある、そして最後に、その価値の大きさとこの価値の大きさの相対的表現における同時的変動はなんら一致する必要はないのである。》

《フランス語版》

《価値量の本当の変動は、価値量の相対的表現のうちにつけて明瞭にも全面的にも反映しない、ということがわかる。一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変のままであっても変動することがあるし、その商品の価値が変動しても不変のままであることもあるし、そして最後に、価値量の変動と価値量の相対的表現の変動とが、正確に照応せずに同時に起こることもある。(19)》

§ 初版付録には、独自に「e 相対的価値形態の全体。」という項目が設けられ、次のように論じられている。

《こうして、相対的な価値表現によって、第一に、商品の価値は、その商品自身の使用価値とは違った形態を得る。この商品の使用形態は、たとえばリンネルである。これに反して、この商品は自分の価値形態を上着にたいする自分の同等性関係において、もっている。この、同等性の関係によって、この商品とは感覚的に違っている別の商品体が、この商品自身の価値存在の鏡となり、この商品自身の価値姿態となる。こうして、この商品は、その現物形態とは相違し無関係で独立な価値形態を得る。しかし、第二に、特定の大きさの価値としては、特定の価値の大きさとしては、この商品は、自分にたいして別の商品体が等置されているところの量的に規定された関係すなわち割合によって、量的に計られているのである。》（国民文庫版136-7頁）

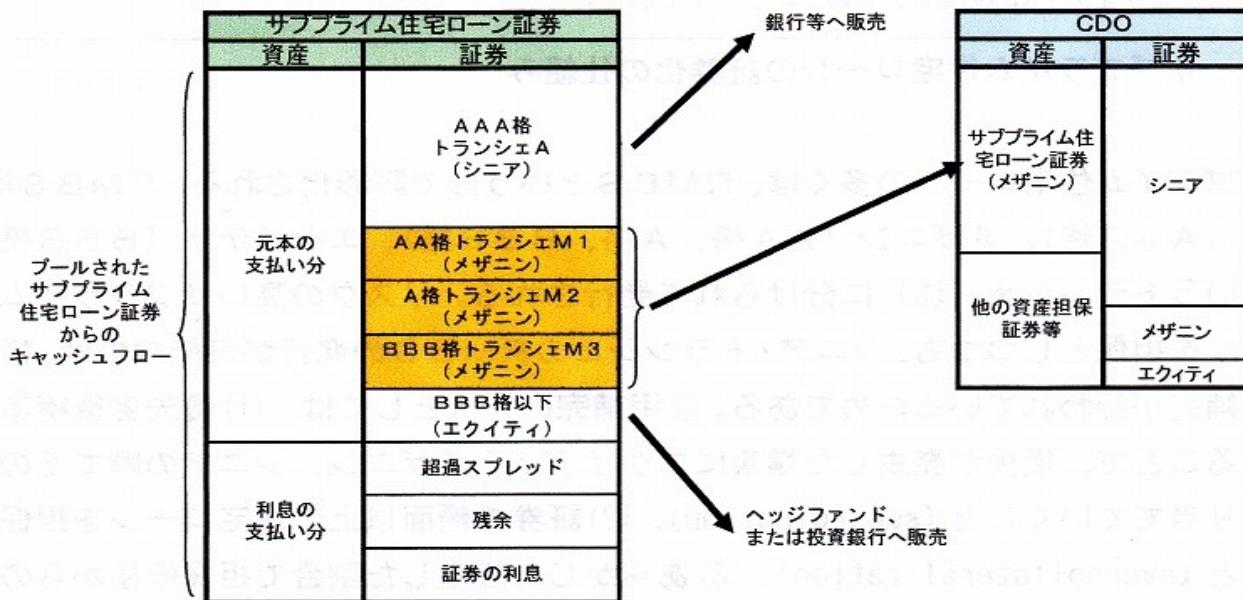
『資本論』を読んでみませんか

2010年という一つの区切りの年が明けました。

昨年は、08年のリーマン・ショックによる金融恐慌に続く経済恐慌の一年でした。クライスラーやGMが倒産し、アメリカを代表する自動車産業が危機に陥り、今年になって、とうとう自動車の売り上げでは中国がアメリカを抜いて世界のトップに躍り出ました。世界経済は大きく塗り替えられようとしています。

2010年には、世界経済は果たして深刻な不況から抜け出ることができるのでしょうか。それともさらなる深いどん底へと引きずり込まれて行くのでしょうか。

サブプライム住宅ローン証券の証券化の仕組み



(備考) 1. IMF (2007b)、IMF (2007c) を基に作成。
2. 複数の民間レポートを参考とした。

それはともかく、“サブプライム金融恐慌”に代表される金融バブルとその破綻について、『資本論』はどのように論じているのでしょうか？

『資本論』第3部第5篇第30～32章「貨幣資本と現実資本Ⅰ～Ⅲ」では、マルクス自身「比類なく困難な問題」として、貨幣資本の蓄積が現実資本の蓄積とどのように関連しているのか、またそれは一国で流通している貨幣の量と如何なる関係にあるのかが理論的に追究されています。そしてそうした考察の理論的前提として第29章「銀行資本の諸成分」では、銀行資本の一部を構成

する「利子生み証券」（債務証券—有価証券—、サブプライム・ローン債権を担保にした資産担保証券などもそれに含まれます）が、「架空な貨幣資本」であることを明らかにしています。マルクスは現実資本の蓄積から相対的に自立してそれらを何倍も上回る規模に膨れ上がって運動する貨幣資本の運動を、「規則的に繰り返される収入」が「資本換算」されて形成される「架空資本」という形態で存在する「利子生み資本」（moneyed Capitalとしての貨幣資本）の運動であることを明らかにし、さらに次のように論じています。

「すべてこれらの証券は、実際には、将来の生産にたいする蓄積された請求権、権利名義のほかにはなにも表していないのであって、この権利名義の貨幣価値または資本価値は、国債の場合のようにまったくどんな資本も表していないか、または、それが表している現実の資本の価値とは無関係に規制されるのである。／すべての資本主義的生産の国には、このような形態で巨大な量のいわゆる利子生み資本または**moneyed capital**が存在している。そして、貨幣資本の蓄積というものの大きな部分は、生産にたすいるこのような請求権の蓄積のほかには、すなわちこのような請求権の市場価値の蓄積、その幻想的な資本価値の蓄積のほかには、なにも意味していないのである。」（全集版600頁）

だからこうした「架空な貨幣資本」の蓄積がどんなに膨大な額に膨れ上がろうが、現実の社会の富から考えるなら、それらは「純粹に幻想的」なものでしかなく、だから「このような名目的な貨幣資本のしゃぼん玉の破裂によっては一文も貧しくはならない」（同）のだと論じています。

サブプライムによる資産担保証券や、デリバティブなどのさまざまな金融派生商品が氾濫し、膨大な過剰な貨幣資本が世界の金融市場を荒し回り世界経済を金融的危機に陥れているような、今日の世界資本主義を理論的に解明していくためにも、やはり『資本論』をしっかりと学ぶことが不可欠なのです。

貴方も、是非、一緒に『資本論』を読んでみませんか？

第20回「『資本論』を読む会」の報告

◎新年を迎えたが

新しい年を迎え、民主党政権になって初めての国会における予算審議が始まったものの、小沢幹事長や鳩山首相の金と政治の疑惑問題ばかりが話題になり、ちっとも自民政権時代と変わっていないんじゃないか、と思わざるを得ません。

そもそも小沢一郎などという人物は、田中角栄や金丸信など自民党の中でももっとも自民党的なゼネコンと結びついた金権政治の伝統を受け継ぐ人であって、こんな人が牛耳る民主党に何かそれまでの自民党と違ったものを期待することが間違いだったのだ、ということがようやく国民の中にも実感して理解されるようになってきたといえるのでしょうか。

鳩山政権の支持率が低下して、すでに不支持と逆転したといえます。民主党にも愛想を尽かした国民は、次に何に期待し、選択するのでしょうか。

代わり映えのしない政治に対して愚痴ばかりが出ますが、わが「『資本論』を読む会」の状況もいま一つ盛り上がりかけ、愚痴の一つもこぼしたくなる状況には変わりはありません。

今回からは、第1章「商品」の第3節「価値形態または交換価値」の「(3) 等価形態」に入りました。議論はいろいろと脱線して、和やかな雰囲気のもとに学習会は進みましたが、そうしたこともあり、結局、進んだのは最初の三つのパラグラフのみでした。さっそくその報告をやることにしましょう。

◎等価形態を質と量の二面から考察

今回、進んだ三つのパラグラフは、等価形態を質の面（第1パラグラフ）と量の面（第2・3パラグラフ）から考察しているところです。それぞれパラグラフごとに検討していくことにします。

【1】《(イ)すでに見たように、一商品A（リンネル）は、その価値を異種の一商品B（上着）の使用価値で表わすことによって、商品Bのものに、一つの独特な価値形態、等価物という価値形態を押しつける。(ロ)リンネル商品はそれ自身の価値存在を顕わにしてくるのであるが、それは、上着がその物体形態とは違った価値形態をとることなしにリンネル商品に等しいとされることによってである。(ハ)だから、リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうるものだけということによって、表現するのである。(ニ)したがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。》

(イ)われわれは、「2 相対的価値形態」において、その「内実」を分析して、リンネルの商品の価値がどのように上着の使用価値によって表現されているかを見てきました。そしてリンネル価値が上着で表現されるということは、上着に独特な形態規定性を与えることによってなされることを見てきたわけです。それが等価物という形態です。等価物も《一つの独特な価値形態》である、とここでは書かれていますが、初版本文には次のような一文があります。

《われわれの分析が明らかにしてきたのは、一商品の相対的な価値表現は二つの違った価値形態を包括している、ということである。リンネルは、その価値と、その特定の価値の大きさを、上着で表わしている。リンネルはその価値を他の一商品にたいする価値関係において、したがって交換価値として、示すのである。他方において、リンネルがその価値をそれにおいて相対的に表現するところの、この別の商品、上着は、まさにそれゆえに、リンネルと直接に交換されうる使用価値という形態を、すなわち等価物という形態を、受け取るのである。両方の形態、一方の商品の相対的価値形態と他方の商品の等価形態とは、交換価値の諸形態なのである。両方が、じつはただ、同じ相対的な価値表現の諸契機であり、相互に制約され合っている諸規定でしかないのであるが、それら二つの等置された商品極の上に対極的に分けられているのである。》（国民文庫版53頁）

ここでは《一商品の相対的な価値表現は二つの違った価値形態を包括している》と述べています。すなわち「相対的価値形態」と「等価形態」です。この《両方の形態、一方の商品の相対的価値形態と他方の商品の等価形態とは、交換価値の諸形態なの》だということです。

(ロ)「相対的価値形態の内実」の第4～6パラグラフでは、リンネルの価値がどのようにして表

現されるのかについて明らかにされてきました。そしてそのことは第7・8パラグラフで明らかにされたように、上着が新たな形態規定性を帯びることによってであること、すなわち上着の自然形態そのものが価値として通用すること、すなわち価値体になることだと説明されました。つまり上着の物体形態そのものが価値の形態になることによって、リンネルと等しいとされたわけです。

(h) そして上着の物体形態そのものが価値の形態になっているのだから、上着はそのまま直接リンネルと交換されうるものなのです。ここで重要なのは「直接に」ということです。すべての商品は価値としては、交換可能なものですが、「直接」にそうしたものであるわけではありません。というのは商品の「直接」的な存在はその使用価値だからです。だから商品は価値として現れるような形態を持たないと交換されえないのです。ところが等価形態にある商品は、それによって価値を表現する商品に対しては、その直接的定在である使用価値そのものが価値の形態になっているわけですから、その商品は「直接に」交換可能となるわけです。価値を表現する一商品は、等価物にある商品をそうした状態に置くことによって、自らの価値を表現しているのです。

(i) だから一商品の等価形態というのは、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態にあるということです。つまり等価形態というのはそれを等価形態におく商品と直接に交換できるという性質を持っているのです。

フランス語版では、この部分が三つのパラグラフに分かれていることが指摘されました。ついでにフランス語版を紹介しておきましょう。

《すでに見たことだが、商品A（リンネル）は、その価値を、異なる商品B（上衣）の使用価値のうちに表現すると同時に、商品Bにたいし、特殊な価値形態である等価形態を押しつける。リンネルはそれ自身の価値性格を次のような関係によって表わす。すなわち、自然形態にあるがままの上衣という別の商品が、リンネルに等しいとされる関係によって。したがって、リンネルは、自分自身があるものに値していることを、上衣という別の商品が直接に自分と交換可能であるという事実によって、表現している。

すべての商品は、価値としては人間労働という同じ単位の同等な表現であり、相互に置き換えることができる。したがって、商品が価値として現われる形態をもつやいなや、この商品は別の商品と交換可能なものになる。

一商品は、それを等価物とする他のすべての商品と、直接に交換可能である。すなわち、価値関係においてこの商品の占める位置が、その自然形態を、他の商品の価値形態にする。この商品は、それが他の商品にたいし価値として現われ、そのようなものとして値うちをもち、したがって、他の商品と交換可能なものになるためには、その自然形態とちがった形態をとるには及ばない。したがって、一商品にとって等価形態とは、その商品が他の商品と直接に交換可能であるところの形態なのである。》(江夏他訳26-7頁)

このフランス語版で特に問題になったのは、第2パラグラフです。ここでは《すべての商品》が問題になっており、だから商品の一般的な交換可能性について論じています。初版付録でも同じような文言が冒頭にきています。

《諸価値としては、すべての商品は、同じ単位の、すなわち人間労働の、同等と認められる、互いに置き替えられる、すなわち交換可能な諸表現である。それゆえ、ある商品が一般に他の商品と交換されうるのは、その商品が価値として現われるような形態をもっているかぎりにおいてのことである》(国民文庫版137頁)

しかし現行版（第二版）では、そうした文言がなくなり、だからフランス語版で再び復活したことになります（しかし位置を変えて）。つまり初版付録やフランス語版では商品の「一般的な」交換可能性と等価形態の「直接的な」交換可能性とが対比される形で論じられているわけです。つまり一般に商品は交換されうるためには、価値として現れることが必要なのですが、等価形態にある商品はその現物形態そのものが価値として認めらるから、だからそれはそれをそうしたものとして認める商品とは「直接的」に交換可能である、というわけです。

また現行版では、上着とリンネルとが例に上げられて、最後まで二商品の価値関係として説明されていますが、フランス語版では最初はリンネルと上着が例に上げられているものの、第3パラグラフでは、等価形態にある商品は、それを等価物にする《他のすべての商品と、直接に交換可能である》と述べられており、やや展開された価値形態に近い表現になっていることも指摘されました。

最後に、ここで言われている「直接的交換可能性」について、どうしてこんなことをいう必要があるのだろうか？ という素朴な疑問が出されました。それに対して、この「直接的交換可能性」というのは、等価形態が貨幣にまで発展すると、「金（カネ）があればなんでも買える」という貨幣の極めて強力な特質として現れてくるものだ、との説明がありました。「金さえあれ

ば何でも欲しい物が手に入る」という金の魔力は、まさに等価形態の直接的交換可能性に基づいているわけです。貨幣になるとそれが貨幣そのものが持っている魔力のように見えますが、実はそうではなく、それは等価形態におかれた商品が、ただ一方的に《押しつけ》られた性質にすぎず、等価形態におかれた上着にとってはまったく与り知らない、ただ受動的に一方的に押しつけられた役割にすぎないわけです。そうした等価形態の「質」の側面が、貨幣にまで発展すると、まるで貨幣そのものが生まれながら持っている一つの魔力のように見えてくるのですから、おかしなものです。

「ということは、貨幣に発展する等価形態の考察こそが、マルクスにとってはメインなのだろうか？」という疑問も出ましたが、しかし等価形態の謎を解明するためには、相対的価値形態の内実が解明される必要があり、むしろ相対的価値形態そのものの解明の困難さが貨幣の謎の解明の困難さでもあったことが指摘されました。

貨幣が主役のように見えている現象の転倒性についても話が及び（なにしろ話はいくらでも脱線したので、現象的には貨幣があつて商品が売買されて流通するように見えるが、本当は商品の流通という現実（あるいは商品の交換によって社会の物質代謝が維持されているという現実）があるからこそ、貨幣の流通もあるのであり、そうした関係がわれわれには転倒して見えているのだということも指摘されました。またそうした転倒した現象に捕らわれた自称マルクス経済学者の典型的な主張の紹介など話は尽きないほどに脱線したのですが、その報告までですと、この報告そのものが脱線しかねないので割愛したいと思います。

◎等価形態の量的側面の考察

次は第2パラグラフです。まず全文紹介します。

【2】《(1)ある一つの商品種類、たとえば上着が、別の商品種類、たとえばリンネルのために、等価物として役立ち、したがってリンネルと直接に交換される形態にあるという独特な属性を受け取るとしても、それによつては、上着とリンネルとが交換される割合はけつして与えられてはいない。(2)この割合は、リンネルの価値量が与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。(3)上着が等価物として表現され、リンネルが相対的価値として表現されていようと、または逆にリンネルが等価物として表現され、上着が相対的価値として表現されていようと、上着の価値量は、相変らず、その生産に必要な労働時間によって、したがって上着の価値形態にはかわりなく、規定されている。(4)しかし、商品種類上着が価値表現において等価物の位置を占めるならば、この商品種類の価値量は価値量としての表現を与えられてはいない。(5)この商品種類は価値等式のなかではむしろただ或る物の一定量として現われるだけである。》

まず注意が必要なのは、「等価形態の量的側面の考察」と言つても、初版本文では《量的な被規定性は一商品等の価値形態のなかには包括されていない》(53頁)と述べられており、初版付録でも表題として《b 量的な被規定性は等価形態には含まれていない》となつています。つまり等価形態には量的被規定性はないということが、この量的側面の考察で論じていることなのです。それを頭に入れて、各文節ごとに詳しく見ていくことにしましょう。

(1)われわれが先に考察した、「相対的価値形態の内実」の冒頭では《ある一つの商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちにとどくように潜んでいるかを見つけたためには、この価値関係を、さしあたりその量的関係からまったく独立に、考察しなければならぬ》と述べられていました。つまりわれわれが考察したリンネルの価値が上着によって表現されることによつて、等価形態におかれた上着が、リンネルと直接に交換される形態にあるという《独特の属性を受け取つて》も、それらはまだ質的な考察にもとづくものであり、そこには量的規定性はなく、だからまたそれらがどういふ割合で交換されるのかということも与えられていないわけです。

(2)その割合は、リンネルの価値量が与えられていれば、上着の価値量によつて決まつてきます。

(3)そしてこの割合は、上着が等価形態になり、リンネルが相対的価値形態になつても、あるいはその逆にリンネルが等価形態になり、上着が相対的価値形態になつても、同じです。つまり、上着の価値量は、それが等価形態にあるか、それとも相対的価値形態にあるかに関わりなく、ただ上着の生産に必要な労働時間によつて決まつており、決して、価値形態によつて決まるわけではありません。

(4)しかし、上着の価値量は価値形態とは関わりがないといつても、その価値量の「表現」は、上着が価値表現のどの位置を占めるかによつて違つてきます。上着が等価物の位置を占めるなら、その価値量は価値量としての表現は与えられていないのです。《上着が価値表現のなかで等価物の位置をしめるや否や、その価値の大きさは、価値の大きさとしての表現をなら演じないで、価値等式においては、むしろただ一定分量の使用価値としての役をつとめるにすぎない》(『補足と改定』70頁)

(5)等価物の商品は、ただ価値を表現する材料として、ある使用価値の一定量として現れるだけです。《ある一つの商品の価値が相対的に表現されるとすれば、その価値の大きさも表現される、なぜならばその商品は――その価値が表現されるべき一定の商品分量として――価値等式に入つていくのだからである。それに対して、等価物として役にたつ商品は、決して価値の大きさとして表現されることはなく、一定分量の使用価値としてのみ役にたつ。たとえば、20エルのリンネルが1あるいは2あるいはx着の上着に値するという表現においては、20エルのリンネルはこれこれの量に値するすなわち量的に規定された価値として表現される。しかし何においてか、1あるいは2あるいはx着の上着において、すなわち、使用対象上着の一定分量においてである。なぜならば、上着はここでは等価物としての役をつとめ、すなわちその使用価値形態が価値体として通用し、この使用価値の一定分量がまた、他の商品のある価値分量を表現するのに充分であるからである。》(『補足と改定』70-71頁)

そもそも等価形態に置かれた商品上着は、もちろん、一定量の価値を持っているからこそ、等価物に置かれたのですが、しかしリンネルの価値表現においては、自身の価値を表すのではなく、ただ相対的価値形態にあるリンネルの価値を表す材料になるだけです。だから等価形態にある上着の価値そのものは、そもそもリンネルとの価値等式においては何も表されていないわけです。だからもともと価値が表されていないのですから、その価値の量も表されていないのは、ある意

味では当然ともいえます。しかしでは上着の価値量はリンネルの価値表現においては何の関係もないかというところではありません。20エレのリンネルの価値量は、上着の使用価値の一定量、たとえば「1着」の上着という形で表されているわけです。ここで「1着」というのは、上着の使用価値の量的表現ですが、それによってリンネルは、自身の価値を量的に表現しているわけです。それは上着の使用価値そのものがリンネルの価値を表しているからです。だから上着の使用価値の量がリンネルの価値の量を表すことになるわけです。しかし上着が「1着」であるか、それとも「2着」であるかは、リンネルの価値が与えられているなら、上着の価値量によって決まってくる。にも関わらず、リンネルの価値量の相対的表現においては、上着はただその使用価値の量的規定性しか持たないのです。つまり等価形態にある上着の価値量は、リンネル価値量の相対的表現においては、規定的に関係しているが、リンネルの価値量の表現そのものには直接には現れてこないわけです。

次は第3パラグラフです。

【3】《(1)たとえば、四〇エレのリンネルは「値する」――なになに？ 二着の上着に。(2)商品種類上着がここでは等価物の役割を演じ、使用価値上着がリンネルにたいして価値体として認められているので、一定量の上着はまた一定の価値量リンネルを表現するに足りるのである。(3)したがって、二着の上着は四〇エレのリンネルの価値量を表現することはできるが、しかしそれはそれ自身の価値量、上着の価値量を表現することは決してできないのである。(4)価値等式における等価物は、つねに、ただ、ある物の、ある使用価値の、単純な量の形態をもっているだけだというこの事実の皮相な理解は、ペーリをもその多くの先行者や後継者をも惑わして、価値表現のうちに単なる量的な関係を見るに至らせたのである。(5)そうではなく、一商品の等価形態は決して量的な価値規定を含んではいないのである。》

(4)(5)例えば40エレのリンネルは二着の上着に値するという場合、上着は等価物の役割を演じており、その使用価値がリンネルに対して価値体として認められています。だから一定量の上着の使用価値量だけで、リンネルの一定の価値量を表現するのに十分なのです。

(5)しかし二着の上着という上着の使用価値量は確かに40エレのリンネルの価値量を表すことはできますが、しかし上着自身の価値量そのものを表現することは決してできません。

(4) 価値等式における等価物は、だから常にある使用価値の一定量という単純な量の形態を持っているだけなのです。しかしこの事実の皮相な理解は、ペーリやその他の多くの先行者や後継者たちを惑わして、価値表現のなかに単なる量的な関係だけを見る誤りに陥らせたのです。

(5)むしろ一商品の等価形態には、何の量的な価値規定も含まれていないのです。

ここではペーリの誤った理解が言われていますが、それはどういうものなのか、またペーリの「先行者」「後継者」とも言われていますが、それはどういう人物たちなのかという質問が出されました。まず後者としては、『補足と改定』のなかで、次のような紹介があることが指摘されました。

《価値形態すなわち価値表現は完全に商品価値の本性とその大きさから発生するのである。そして逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれ自身の表現方法から生ずるのではない。それは、一面では価値一般に関しては重商主義者とその近代的蒸し返し屋であるフーリエ（注：F.L.A.Ferrier（関税副検査官）『商業との関係から見た政府について』パリ1805年）やガニール（注：Ch.Ganilh『経済学の諸体系について』第2版パリ1821年）、マクロード等が妄想していることであり、他方、価値の大きさに関しては近代自由貿易論者であるバステアとその仲間たちが妄想していることである。》（69-70頁）

《（注：価値等式における等価物は、つねに、ただ、一定分量の使用価値の役をつとめるにすぎないというこの事実の全く皮相な理解は、ペイリー（『貨幣とその変遷』ロンドン18371.c.）を迷わせて、価値表現のなかに量的な関係だけを見るにいらせた。）》（71頁）

ではペーリの主張はどのようなものか、ということについては、『剰余価値学説史』の中で紹介されているのではないかと、との指摘がありました。『学説史』そのものは当日持っていなかったため、ここでその典型的な主張を紹介しておきましょう。ペーリはリカードを批判して次のように述べています（全集版第26巻III116-117頁）。

「大部分の諸商品または一商品を除くすべての商品を生産する労働の絶対量が増加しても、この一商品の価値は変わらないと言ふことができるであろうか？【どんな意味でなのか？】というのは、それは、他のすべての商品のより少ない量と交換されるからである。もし実際に、価値の増減ということの意味が、当該商品を生産した労働量の増減のことを主張しているつもりで言われているとすれば、私がいま反対理由にあげた結論は、十分真実でありうるであろう。だが、リカード氏が言っているように、二つの商品を生産する比較的労働量が、これら二つの商品を相互に交換する比率、すなわち各商品の交換価値の原因であると言ふことは――、各商品の交換価値が、他の商品または他の商品の存在とのどんな関係も考慮されずに、その商品を生産した労働量のことを意味すると言ふことは、非常に違っている。」（『考察』、13ページ。）

「リカード氏は、事実われわれに向かってこう言っている、『自分が読者の注意をひきたいと思う研究は、諸商品の相対的価値の変動の効果に関してであって、絶対的価値のそれに関してではない』と。あたかも彼は、そこでは、相対的ではない交換価値のようなある物が存在する、と考えていたかのようである。」（同前、9/10ページ。）「リカード氏が価値という言葉の彼の最初の用法から離れて、それを、相対的なものではなく、なにが絶対的なものにしたということは、『価値と富、両方を区別する特性』と題する彼の一章のなかで、もっと明瞭になっている。そこで論じられている問題は、他の人によっても論じられたものだが、純粋に用語上のもので、役にはたたない。」（同前、15ページ以下。）

このペーリの主張に対するマルクスの批判もついでに紹介しておきます（同上163頁）。

《諸商品が使用価値として相互に交換される量的な関係は、なるほど諸商品の価値の表現であり、諸商品の実現された価値であるが、しかしその量的関係は、それらの商品の価値そのものではない、というのは同じ価値関係が使用価値のまったく違った量で表わされるからである。……諸商品の価値としての定在は、その商品自身の使用価値――その商品の使用価値としての定在――では表現されない。それは、他の使用価値でのその商品の表現のなかに、すなわち、このような他の使用価値がその商品と交換される関係のなかに、現象する。1オンスの金と1トンの鉄とが等しくて、それゆえ金の少量が鉄の多量と交換されるとすれば、そのために、鉄で表現される1オンスの金の価値のほうが金で表現される鉄の価値よりも大きいであろうか？ 諸商品がそれらに含まれている労働に比例して交換されるということは、諸商品が、同

じ労働量を表わすかぎりでは、相等しく、同じものである。……だから同時にそれは、各商品が、対自的に考察されれば、その商品自身の使用価値、すなわちその商品自身の使用価値としての定在とは区別されたものである、ということの意味している。】

【付属資料】

これらのパラグラフに関連すると思われるものを紹介しておきます。

【1】パラグラフ

《初版本文》

《われわれの分析が明らかにしてきたのは、一商品の相対的な価値表現は二つの違った価値形態を包括している、ということである。リンネルは、その価値と、その特定の価値の大きさを、上着で表わしている。リンネルはその価値を他の一商品にたいする価値関係において、したがって交換価値として、示すのである。他方において、リンネルがその価値をそれにおいて相対的に表現するところの、この別の商品、上着は、まさにそれゆえに、リンネルと直接に交換される使用価値という形態を、すなわち等価物という形態を、受け取るのである。両方の形態、一方の商品の相対的価値形態と他方の商品の等価形態とは、交換価値の諸形態なのである。両方が、じつはただ、同じ相対的な価値表現の諸契機であり、相互に制約され合っている諸規定でしかないのであるが、それら二つの等置された商品極の上に対極的に分けられているのである。》（国民文庫版53頁）

《初版付録》

《a 直接的交換可能性の形態。

諸価値としては、すべての商品は、同じ単位の、すなわち人間労働の、同等と認められる、互いに置き替えられる、すなわち交換可能な諸表現である。それゆえ、ある商品が一般に他の商品と交換されるのは、その商品が価値として現われるような形態をもっているかぎりにおいてのことである。ある商品体が他の商品と直接に交換されるのは、その商品体の直接的な形態、すなわちそれ自身の物体形態または現物形態が、他の商品にたいして価値を表わしている、すなわち、価値姿態として認められているかぎりにおいてのことである。このような属性を上着は自分にたいするリンネルの価値関係においてもっている。そうでなければ、リンネルの価値は上着という物では表現されえないであろう。だから、商品が一般に等価形態をもっているということは、ただ、価値表現におけるその商品の位置によって、その商品自身の現物形態が他の商品のための価値形態として認められているということ、すなわち、その商品が他の商品との直接的交換可能性の形態をもっているということの意味しているだけである。だから、その商品は、他の商品にたいして価値として現われ価値として認められて他の商品に価値として働きかけるために、あらかじめ、その商品の直接的な現物形態とは違う形態をとる必要はないのである》（同上137-8頁）

《補足と改訂》

《a）直接的交換可能性の形態》という項目はあるが、それに直接続く内容は初版付録の《b）》の内容である。そして《等価形態の独自性への移行》という項目のあとに続く次のものが、この最初のものに合致している。

《われわれは次のことを見てきた。――商品（リンネル）は、その価値を、種類を異にする一商品Bの使用価値（上着）で表現することによって、商品Bそのものに、一つの独自の価値形態、等価物という価値形態を押しつける。リンネルは、自分自身を上着と等しいものとして表現することによって、その価値存在を表現する。すでに見たように、この表現のなかでは、上着体は、リンネルと等しいものとして通用し、それと置き換えることができ、それと交換可能である価値体として、同じ単位の人間的労働の表現として役にたつ。

結論――したがって、リンネルはその価値存在を、同じに通用するという性質を、つまり交換可能性を、上着が直接それと交換できるということを通して、表現する。それゆえ、一商品の等価形態は、他の商品との直接的交換可能性の形態である、そしてその商品がこの形態を受け取るのは、他の商品の価値がそれで、つまり、他の商品の価値表現におけるその立場を通してのみ、表現されているからにほかならない。

b）すでに見たように、そのことを通して上着体はリンネルに対して価値体となる、すなわち、上着商品の自然形態が価値形態になる。

[B2]

(8)われわれは次のことを見てきた。――商品A（リンネル）は、種類を異にする商品Bの使用価値（上着）でその価値を表現することによって、商品B そのものに、一つの独自の価値形態、等価物という形態を押しつける。リンネルは、ある他の商品、上着がそのままの姿で、その自然形態においてリンネルに等しいものとして通用する関係を通してそれ自身の価値性格を外に現わす。したがって、リンネルは、事実として、他の商品上着が直接リンネルと交換されうるということを通して、自分の価値存在を表現する。したがって、一商品の等価形態は他の商品との直接交換可能性の形態である、そしてある商品がこの形態をうけとるのは、それにおいて他の商品の価値が、つまり、他の商品の価値表現におけるその立場を通してのみ、表現されるときにかざられる。この文章は8)の最後。》（小黒正夫訳72-73頁）

《フランス語版》

《すでに見たことだが、商品A（リンネル）は、その価値を、異なる商品B（上衣）の使用価値のうちに表現すると同時に、商品Bにたいし、特殊な価値形態である等価形態を押しつける。リンネルはそれ自身の価値性格を次のような関係によって表わす。すなわち、自然形態にあるがままの上衣という別の商品が、リンネルに等しいとされる関係によって。したがって、リンネルは、自分自身があるものに値していることを、上衣という別の商品が直接に自分と交換可能であるという事実によって、表現している。

すべての商品は、価値としては人間労働という同じ単位の同等な表現であり、相互に置き換えることができる。したがって、商品が価値として現われる形態をもつやいなや、この商品は別の商品と交換可能なものになる。一商品は、それを等価物とする他のすべての商品と、直接に交換可能である。すなわち、価値関係においてこの商品の占める位置が、その自然形態を、他の商品の価値形態にする。この商品は、それが他の商品にたいし価値として現われ、そのようなものとして値うちをもち、したがって、他の商品と交換可能なものになるためには、その自然形態とちがった形態をとるには及ばない。したがって、一商品にとって等価形態とは、その商品が他の商品と直接に交換可能であるところの形態なのである。》

【2】パラグラフ

《初版本文》

《量的な被規定性は一商品の等価形態のなかには包括されていない。たとえば、上着がリンネルの等価物である、という特定の関係は、上着の等価形態から、すなわちリンネルとの上着の直接的交換可能性の形態から生ずるのではなくて、労働時間による価値の大きさの規定から生ずるのである。リンネルがそれ自身の価値を上着で表わすことができるのは、ただ、リンネルが、結晶した人間労働の所与の量としての一定の上着量に関係するからにほかならない。もし上着の価値が変わるならば、この関係もまた変わるのである。とはいえ、リンネルの相対的な価値が変わるためには、その相対的な価値が存在していなければならないのであり、そしてその相対的な価値は、ただ、上着の価値が与えられている場合にのみ形成されうるのである。いま、リンネルがそれ自身の価値を上着の一着で表わすか、二着で表わすか、それとも×着で表わすか、ということは、この前提のもとでは、まったく、自分の価値が上着形態で表わされるべきリンネルの一エレの価値の大きさとして定まる。一商品の価値の大きさは、ただ他の一商品の使用価値においてのみ、相対的な価値としてのみ、表現されることができるのである。これに反して、直接に交換可能な使用価値の形態すなわち等価物の形態を、一商品は、逆にただ他の一商品の価値がそれにおいて表現されるところの材料としてのみ、受け取るのである。

この区別は、その単純な、または第一の、形態における相対的な価値表現の特性によって、不明瞭にされている。すなわち、等式 $20 \text{ エレのリンネル} = \text{一着の上着}$ または 20 エレのリンネル は、一着の上着に値する は、明らかに、同じ等式 $\text{一着の上着} = 20 \text{ エレのリンネル}$ または 一着の上着 は 20 エレのリンネル に値する を含意している。つまり、リンネルの相対的な価値表現においては上着が等価物としての役割を演じているのであるが、この価値表現は逆関係的に上着の相対的な価値表現を含んでいるのであって、それにおいてはリンネルが等価物としての役割を演じているのである。》(前掲53-4頁)

《初版付録》

《b 量的な被規定性は等価形態には含まれていない。

上着という形態をもっている一つの物がリンネルと直接に交換されうるということ、または、金という形態をもっている一つの物がすべての他の商品と直接に交換されうるということ、一このような、一物の等価形態は、まったくなんらの量的な被規定性をも含んではいない。

第一に、リンネルの価値表現のための材料として役だつ上着という商品は、このような表現においても、一着等々ではなくて一着の上着というように、つねに量的に規定されている。では、なぜであろうか？ そのわけは、二〇エレのリンネルがその相対的な価値表現においてはただ価値一般として表現されているだけではなくて同時に特定の価値量として計られているからである。しかし、一着ではなくて一着の上着が二〇エレのリンネルと同じだけの労働を含んでおり、それだから二〇エレのリンネルに等置されるのだ、ということは、商品種類リンネルと直接に交換されうるという商品種類上着の特徴的な属性とは、まったくなんの関係もないのである。

第二に、もし二〇エレのリンネルが特定の大きさの価値として一着の上着で表現されるならば、逆関係的に一着の上着の価値の大きさもまた二〇エレのリンネルで表現され、したがってやはり量的に計られているのであるが、しかし、ただ間接的に、表現の逆転によってであり、上着が等価物の役割を演ずるかぎりにおいてのことではなくて、むしろ上着自身の価値をリンネルで相対的に表わしているかぎりにおいてのことなのである。

第三に、われわれは、20エレのリンネル＝一着の上着 または、20エレのリンネルは一着の上着に値する、という定式を、二〇エレのリンネルと一着の上着とは等価物である、または、両方とも同じ大きさの価値である、というように表現することもできる。この場合には、われわれは両方の商品のどちらかの価値を他方の商品の使用価値で表現するのではない。したがって、両方の商品のどちらも等価形態に置かれるのではない。ここで等価物が意味しているのは、ただ、両方の物が前もってわれわれの頭のなかで暗黙のうちに価値という抽象物に還元されたのちに、大きさの等しいものである、ということにすぎない。》(同上138-9頁)

《補足と改訂》

《ある一種類の商品、たとえば上着が、別の種類の商品、たとえばリンネルのために等価物として役立ち、それゆえ、上着がリンネルと直接に交換されうる形態にあるという特徴的な属性を受け取るとしても、それによって、上着とリンネルとが交換される比率が与えられるわけではない。

[A 1]

これは、リンネルの価値が与えられた大きさであるばあい、つねに上着の価値の大きさによって決まる。上着が一着等価物として表わされ一着としてリンネルが相対的価値として表わされているか、あるいは上着が相対的価値としてそしてリンネルが等価物として表わされているか。一着それゆえ、そのことはこの価値形態とは無関係な規定である。価値形態すなわち価値表現は完全に商品価値の本性とその大きさから発生するのである。そして逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれ自身の表現方法から生ずるのではない。それは、一面では価値一般に関しては重商主義者とその近代的蒸し返し屋であるフリーエ（注：F.L.A.Ferrier（関税副検査官）『商業との関係から見た政府について』パリ1805年）やガニール（注：Ch.Ganilh『経済学の諸体系について』第2版パリ1821年）、マクロード等が妄想していることであり、他方、価値の大きさに関しては近代自由貿易論者であるバステアとその仲間たちが妄想していることである。

[A 2]

それは、リンネルの価値の大きさが与えられているのだから、上着の価値の大きさによって決まる。上着が一着等価物として表現され、リンネルが相対的価値として表現されていようとも、あるいは逆にリンネルが等価物として表現され上着が相対的価値として表現されていようとも、上着の価値の大きさは、依然として、上着の生産に必要な労働時間によって、したがって上着の価値形態とはかかわりなく、規定されている。しかし、上着が価値表現のなかで等価物の位置をしめるや否や、その価値の大きさは、価値の大きさとしての表現をなんら演じないで、価値等式においては、むしろただ一定分量の使用価値としての役をつとめるにすぎない。

[A 3]

それは、リンネルの価値の大きさが与えられているのだから、上着の価値の大きさによって決まる。上着が一着等価物として表現されリンネルが相対的価値として表現されていようとも、あるいは逆にリンネルが等価物として表現され上着が相対的価値として表現されていようとも、それらが交換される比率は変わらないままであり、それらの生産に必要な労働時間で計られたそれらのそのときどきの価値は、それゆえ、それらの価値形態とは無関係な規定である。その価値が相対的に表現される商品は、つねに価値の大きさとして表現され、一方逆に等価物は決して価値等式において価値の大きさとしての役を演ずることはなく、つねに一定分量の使用価値としての役をつとめるにすぎない。

[A '1]

ある一つの商品の価値が相対的に表現されるとすれば、その価値の大きさも表現される、なぜならばその商品は――その価値が表現されるべき一定の商品分量として――価値等式に入っていくのだからである。それに対して、等価物として役にたつ商品は、決して価値の大きさとして表現されることはなく、一定分量の使用価値としてのみ役にたつ。たとえば、20エレのリンネルが1あるいは2あるいはx着の上着に値するという表現においては、20エレのリンネルはこれこれの量に値するすなわち量的に規定された価値として表現される。しかし何においてか。1あるいは2あるいはx着の上着において、すなわち、使用対象上着の一定分量においてである。なぜならば、上着はここでは等価物としての役をつとめ、すなわちその使用価値形態が価値体として通用し、この使用価値の一定分量がまた、他の商品のある価値分量を表現するのに充分であるからである。（注：価値等式における等価物は、つねに、ただ、一定分量の使用価値の役をつとめるにすぎないというこの事実の全く皮相な理解は、ベイリー（『貨幣とその変遷』ロンドン18371.c.）を迷わせて、価値表現のなかに量的な関係だけを見るにいらせた。）

したがって、ある商品の等価形態にはなんらの量的価値規定をも含まないのである。》（前掲69-71頁）

《フランス語版》

《たとえば、上衣のような商品が、リンネルのような他の商品に等価物として役立ち、したがって、リンネルと直接に交換可能であるという特有の属性を得ても、この交換が行なわれうる比率は、けっして与えられてはいない。リンネルの価値量が与えられているから、この比率は上衣の価値量に依存するであろう。たとえ価値関係において、上衣が等価物として現われリンネルが相対的価値として現われようと、またはこれと逆であろうとも、交換の行なわれる比率は依然同じである。したがって、生産に必要な労働時間の比較によって測られる二商品のそれぞれの価値量は、価値形態とは全く関係のない規定である。》（前掲27頁）

【3】パラグラフ

《補足と改訂》

《[A'2]

たとえば、40エレのリンネルは値する――なにか？ 2着の上着に、である。ここでは、上着という商品種類は等価物の役割を演じており、上着という使用価値は、それゆえ、リンネルに対して価値体として通用しているのであるから、リンネルという一定の価値分量を表現するためには、やはり一定分量の上着があれば十分なのである。したがって、2着の上着は、40エレのリンネルの価値を表現することはできるが、それ自身の価値の大きさを表現することは決してできない。価値等式における等価物は、つねに、ただ、一つの物の単なる分量という形態をとるにすぎないというこの事実の皮相な理解は、ベイリーを――彼の多くの先行者や後続者と同じように――迷わせて、価値表現のうちにただ量的な関係のみを見るにいらせた。

――商品の等価形態には、むしろ、なんの量的な価値規定も含まれてないのである。》（前掲71頁）

《フランス語版》

《価値が相対的形態のもとにあるような商品は、つねに価値量として表現されるが、他方これと反対に、つねに有用物の単なる量として等式のうちに現われる等価物については、そうではない。たとえば40メートルのリンネルはなにに値するか？ 二着の上着に値する。上衣という商品は、ここでは等価物の役割を演じ、こうしてリンネルの価値に体躯を与えるから、ある分量の上着は、リンネルがもつ価値の分量を表現するのに充分である。したがって、二着の上着は、40メートルのリンネルの価値量を表現することができるが、自分自身の価値量を表現することはできない。価値等式では等価物が有用物の単なる分量としてのみ現われるという事実を、皮相に観察したために、S・ペーリや彼以前および以後の多くの経済学者が誤りに陥ったのである。彼らは価値表現のうちに量的関係しか見なかった。ところで、商品は等価形態のもとでは、あるなんらかの物体の単なる量として現われるが、それはまさに、この商品の価値量が表現されないからなのである。》（前掲27頁）

『資本論』を読んでみませんか

「いのちを、守りたい。いのちを守りたいと、願うのです。」

鳩山首相の施政方針演説である。 昨年の所信表明演説も美辞麗句でよそよそしく飾られていたが、今回の施政方針演説もただ観念的で崇高な理念が掲げられているのみである。



「資本主義社会を維持しつつ、行き過ぎた『道徳なき商業』」、「『労働なき富』を、どのように制御していくべきなのか。人間が人間らしく幸福に生きていくために、どのような経済が、政治が、社会が、教育が望ましいのか。今、その理念が、哲学が問われています。」 「人間のための経済、再び」 「経済のしもべとして人間が存在するのではなく、人間の幸福を実現するための経済をつくり上げるのがこの内閣の使命です。」 「『商業の道徳』を育み、『労働をともなう富』を取り戻すための挑戦」等々。

資本主義の現実と本質を知る労働者にとって、これらは何と空疎な文言として響くことか。マルクスは次のように述べている。

《“わが亡き後に洪水は来たれ！ **Après moi le deluge!**”これがすべての資本家およびすべての資本家国民のスローガンである。したがって、資本は、社会によって強制されるのでなければ、労働者の健康と寿命に対し、何らの顧慮も払わない。肉体的、精神的萎縮、早死、過度労働の拷問に関する苦情に答えて資本家は言う――われらが楽しみ（利潤）を増やすがゆえに、それが何でわれらを苦しめるというのか？ と。》（『資本論』第1巻、全集23a 353頁）

これこそが、労働者が日々体験している資本主義の現実ではないだろうか！

一方で「資本主義社会の維持」を掲げながら、他方で、『労働なき富』を批判し（それをいうならまず自分自身を批判せよ！）、「『労働をともなう富』を取り戻す」ことを謳う鳩山首相の理念は、マルクスがブルジョア経済学者を批判して次のように述べたことがもっともよく当てはまる。

《賃労働は自己疎外された労働であって、それにたいしては、それによってつくりだされた富が他人の富として対立し、それ自身の生産力がその生産物の生産力として対立し、その致富が自己貧窮化として対立し、その社会的な力がそれを支配する社会の力として対立するのである。ところが、このような、資本主義的生産において現われるところの、社会的労働の特定の独自の歴史的な形態を、これらの経済学者たち（鳩山首相と読め——引用者）は、一般的な永久的な形態、自然真理として言い表わし、また、このような諸生産関係を、社会的労働の絶対的な（歴史的ではない）必然的な、合自然的で理性的な諸関係として言い表わすのである。資本主義的生産の視野のなかに完全に閉じこめられているために、彼らは（鳩山首相は——同）、社会的労働がここでとるところの対立的な形態を、この対立から解放されたこの形態そのものと同様に必然的なものと断定するのである。こうして彼らは一方では労働を絶対的だとし（というのは、彼らにとっては賃労働は労働と同義なのだからである）、他方では資本を同様に絶対的だとし、労働者の貧窮と非労働者の富（鳩山家の巨万の富はまさにこれだ——同）とを同時に富の唯一の源泉として言い表わすのだから、彼らは絶えず絶対的な諸矛盾のなかで動いていながら、少しもそれを感じてはいないのである（だからノーテンキなことも言っているわけだ——同）。

》（『学説史』26巻III340頁）

ブルジョア社会の現実に対する無知を曝け出し、ノーテンキな理念を掲げることしか知らない鳩山政権を批判するためにも、あなたも、ともに『資本論』を一緒に読んでゆきませんか。

第21回「『資本論』を読む会」の報告

◎春の陽気

大阪は、ここ数日は好天に恵まれ、春のような陽気が続いています。

第21回「『資本論』を読む会」開催当日（2月21日）もよい天気で、私たちが学習会を行った教室は50人ほどが入るほどの大きさなのですが、いつもはその真ん中の一番前の黒板に近い席を占めてこじんまりとやるのですが、今回はよい天気に誘われて窓際の席の各自思い思いの場所に座り、行いました。おかげで学習会の最中に居眠りをしてほとんど聞いていなかったなどと、帰り道で話している人もあったほどでした。

そうした陽気もあってか、等価形態の「第一の特性」をすべて終えました（第4～8パラグラフ）。さっそく、その報告を行きましょう。

◎「等価形態の矛盾」とは？

今回は第4パラグラフからです。例によって全文を紹介し、議論も含めてその文節ごとの解説を紹介してゆきましょう。

[4] パラグラフ

《等価形態の考察にさいして目につく第一の特色は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。》

ここから等価形態の「特色」（初版付録は「特性」、『補足と改定』は「独自性」となっている）の考察が始まっています。それは使用価値がその反対物である価値の現象形態になるということです。ところで、この等価形態の特色の考察の前に、『補足と改定』や『フランス語版』では次のような導入文があることが紹介されました。

《補足と改訂》

《等価形態の独自性への移行 等価形態が内包する矛盾はその独自性をさらに詳細に考察することを必要とする。》（小黒正夫訳72頁）

《フランス語版》

《等価形態が含んでいる矛盾は、いまでは、この形態の特色のいっそう徹底的な考察を要求している。 等価形態の第一の特色。使用価値が、その対立物である価値の表示形態になる。》（江夏美千穂／上杉聡彦訳27頁）

ここで《等価形態が内包する矛盾》（補足と改定）や《等価形態が含んでいる矛盾》（フランス語版）と言われているものは、一体、何を指しているのだろうかということが問題になりました。

ピースさんはローゼンベルグの『資本論注解』を紹介してくれました。確かに『注解』でも〈ついでマルクスは右にあげた諸矛盾の特徴づけにうつる。それは三つある〉と述べて、等価形態の三つの特性を紹介しているのですが、ローゼンベルグの『注解』でも、いま一つ〈右にあげた諸矛盾〉が何を指しているのかよく分からないのです。ただその諸矛盾がより詳細に考察されて、三つの特性（独自性）が与えられていることは分かります。しかし何をもちいて〈諸矛盾〉と述べているのかは、やはりもう一つよく分かりません。

亀仙人は、これらの導入文を見る限り、それまでの等価形態の考察（質的および量的）の結果、《等価形態の内包する矛盾》が明らかになったので、そのことはさらに等価形態の独自性を詳細に考察する必要があると読むことができるように思える。だからその直前で行われている等価形態の量的考察のなかに、その矛盾があるのではないかと指摘して、次のような考えを述べました。

“等価形態の内包する矛盾は、それまでに考察したことを直接受けたものだから、特に、等価形態には量的な被規定性は含まれていないということの意味するのではないかと思う。それがどうして矛盾しているのかというと、リンネルの価値は与えられているので、その量的表現は、上着の価値の量によって決まってくるわけだが、実際のリンネルの価値量の相対的な表現においては、上着の価値の量的規定性そのものは現れて来ないということではないかと思う。等価形態に置かれた上着は、ただ「一着」の上着というように上着の使用価値の一定量として表され、それで十分だから、上着の価値量がどれだけかは、そこではまったく表されていない。だから、リンネルの価値の量的表現は、上着の価値の大きさによって決まるのに、その表現形態においては上着の価値の量的規定性そのものは現れて来ないわけです。これをマルクスは等価形態が含んでいる矛盾と述べているようではないか。”というわけです。

ただその場合でも、何がどのように矛盾しているのか、そもそも矛盾とは何か、ということが問題になりました。この「矛盾」というのはそもそも何か、ということについては、以前、大阪で行った「『資本論』を学ぶ会」のニュースNo.16で鯉坂真他編『ヘーゲル論理学入門』（有斐閣新書）からその内容を一部紹介したことがありますので、それをもう一度紹介しておくことにします。

【同書には本質について次のような説明があります。

〈本質は、より規定的にいえば、事物のうちにあって、その多様な諸形態にうちに自己をうつしだし、それらに媒介

された一定の恒常的なものです。そして、このような本質の、もっとも基本的で抽象的な規定が、同一、区別、根拠という三つのカテゴリーです。〉（同66頁）

ところで今問題になっている「対立」や「矛盾」は、まさにこの本質の「基本的で抽象的な規定」の一つである「区別」のなかにあります。それは次のように説明されています。

〈区別は、より単純な形態からより複雑な形態へと三つにわけられます。それが、差異・対立・矛盾です。〉（同69頁）

〈差異とは、最初の直接的な形態での区別であり、相互に無関係な別々のもののあいだでの区別です。〉しかしこうした〈たんなる差別的区別は、かならずしも事物にとって必要な不可欠な区別ではありません。／たとえば、ひとひとのあいだには、背丈とか体重その他の点で、いろいろな差別的な区別があります。しかしこれらの区別は、人類そのものにとって、本質的な、なくてはならない区別ではありません。人類にとっての本質的な区別は、たとえば、男女や親子の区別であり、この種の本質的な区別は、それがより本質的な区別であればあるほど、当の事物のうちにある、いわゆる両極的な区別となっています。／対立とは、このような、事物のうちにある両極的な区別をいいます。右と左、プラスとマイナス、N極とS極などの区別がそれです。／この対立的な区別には、次の点で差別的な区別と異なっています。／第一に、対立は、右のことからして、事物におけるもっとも本質的で必然的な区別です。そして、対立的な二つのものは、その規定性に関しては相互に排斥しあう関係にあって、たがいに自分は他方のものではないということが、そのまま直接に自分自身の規定と合致するという関係にあります。／第二に、一般にあるもの他者とは、そのものではないもの、そのもの否定です。しかしペンではないものといっても、かならずしも本という特定のものを意味しません。ところが、人間のうちにあって男性でないものといえただちに女性を意味するように、両極的な対立物はたがいに、たんなる他者としてではなくて、それぞれに固有の他者としてあるのです。／第三に、右のことは、かならずしも一方のものが他方の存在そのものを否定する関係にあることを意味しているわけではありません。むしろ両者は、一つのものの不可分の二側面として、たがいに前提しあい依存しあう関係にあります。このように、その規定性にかんしては相互排斥的な両極的な関係にあるものが、その存在にかんしては相互前提的な関係にあること、これが対立です。〉（69～71頁）

〈ところで、事物における本質的であるがたんに対立的でない区別にたいして、二つのものが、その存在そのものに関して、一方では共存の関係にあり、他方では逆に相互排除の関係にあるとき、この二つのものの関係が、矛盾としての対立です。この関係を論理的に表現すると、「AはAであるとともに非Aである」ということになります。〉（71頁）

だから矛盾というのは〈二つのものが、その存在そのものに関して、一方では共存の関係にあり、他方では逆に相互排除の関係にあるとき、この二つのものの関係が、矛盾としての対立〉だということです。上着の価値の大きさは、リンネルの価値の量的表現を規定しているのに、実際の表現形態ではそれは含まれていないということ、これが矛盾ということではないでしょうか。

◎《取り替え〔**Quidproquo**〕》と《現物の皮》

[5] パラグラフ

《(4)商品の現物形態が価値形態になるのである。(H)だが、よく注意せよ。(H)この取り替え〔**Quidproquo**〕が一商品B（上着や小麦や鉄など）にとって起きるのは、ただ任意の他の一商品A（リンネルなど）が商品Bにたいしてとる価値関係のなかだけでのことであり、ただこの関係のなかだけでのことである。(2)どんな商品も、等価物としての自分自身に關係することはできないのであり、したがってまた、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできないのだから、商品は他の商品を等価物としてそれに関係しなければならないのである。(H)すなわち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである。》

4) 《商品の現物形態が価値形態になるのである》とあります。これは先のパラグラフ（[4]）と較べると、《使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になる》を直接言い換えたものです。つまり《商品の現物形態》＝《使用価値》、《価値形態》＝《（使用価値の）反対物の、価値の、現象形態》という関係にあることが分かります。

H) H) だが注意する必要があるのは、《この取り替え〔**Quidproquo**〕》が一商品Bにおいて生じるのは、別の一商品Aが商品Bに対してとる価値関係においてだけだということです。

ここで《取り替え〔**Quidproquo**〕》という言葉が出てきますが、この言葉については、所沢の「『資本論』を読む会」の報告では次のような大谷禎之介氏の説明が紹介されていますので、重引しておきましょう。

〈マルクスが使っているこの《入れ替わり[Quidproquo]》という表現は、あるものとあるものと、入れ替わって現れることであって、それによって人びとが欺かれることになる。たとえばモーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』で、アルマヴィーヴェ伯爵を懲らしめるために伯爵夫人とスザンナが衣装を取り替えて別人になります。そしてこれに伯爵がまんまとひっかかる。これが《入れ替わり》である。〉（大谷禎之介「価値形態」「経済誌林」第61巻第2号191頁）

つまり使用価値が価値の現象形態になります。使用価値というのは、それ自体が直接的なものです。つまり直接目に見える感覚的なものとして存在しています。しかし価値はそうしたものではありません。にも関わらず、その使用価値の直接的な定在が、価値が目に見える形で現れたものとしての意義を持たされるわけです。つまり価値が目に見えるように現れたものとして、その使用価値の直接性があるということです。だから使用価値の直接的な定在がそのまま価値の直接的な定在になっています。しかしあくまでも上着の使用価値がリンネルの価値の直接的な目に見える定在になっているのであって、上着の使用価値が上着の価値の直接的な定在になれるわけではありません。そしてそのためには上着の使用価値が価値の形態になるという入れ替わりがそこには生じなければならないわけです。もちろん、入れ替わりといっても上着の使用価値そのものは何も変わってはいないのです。ただそのままの使用価値にリンネルの価値の現象形態という新たな形態規定性（役割）が付け加えられるだけなのです。しかしその付け加えられた新たな形態規定性においては、上着の使用価値は、ただリンネルの価値の現象形態であるという役割しか持たされず、上着の使用価値自体に存在している他のさまざまな属性――例えば羊毛でできていて着心地がよいといったこと――はそこでは直接には問題になっていません。

しかも重要なことは、上着がこうした役割を担われるのは、リンネルとの価値関係に置かれる限りでのことだということです。

二) というのは、どんな商品も、自分自身を自分自身の等価物にすることはできません。

これは「1 価値形態の両極」のところで、指摘されていた《20 エレのリンネル＝20 エレのリンネル》という等式が価値表現ではなく、むしろ20 エレのリンネルは一定量の使用価値だということを示すだけだと言われていたことと同じです。これでは何も価値は表現されていないのです。つまりどんな商品も自分自身の現物の皮（自分自身の使用価値）を自分自身の価値の表現に利用できないのです。だからどんな商品も自身の価値を表現しようとするなら、他の別の商品を等価物にして、それと関係する必要があるわけです。

ここで使用価値を《現物の皮》と表現していますが、これはどういう意味なんだろうということも問題になりました。これは使用価値は直接的なものであるのに対して、価値は内在的なものであるということをも具体的なイメージで示すものではないかということになりました。つまり使用価値は物の表面に顕れていて直接目に見えるものであるということで、それを動物の表面を覆っている皮に例えているわけです。それに対して価値は内在的なもので、直接には見えず、だから皮に覆われて見えなくされているものというイメージで捉えられているわけです。

ホ) だから、その内在的な価値が直接的な目に見えるものにするためには、自分自身の皮は役に立たないこと、他人の皮の中に自分の内在的価値を映し出すのだということ、つまり他の商品の現物の皮を自分自身の価値の形態にしなければならぬということなのです。

◎棒砂糖の例

[6] パラグラフ

《(イ)このことをわかりやすくするのは、商品体としての商品体に、すなわち使用価値としての商品体にあてがわれる尺度の例であろう。(ロ)棒砂糖は物体だから重さがあり、したがって重量をもっているが、どんな棒砂糖からもその重量を見てとったり感じとったりすることはできない。(ハ)そこで、われわれは、その重量があらかじめ確定されているいろいろな鉄片をとってみる。(ニ)鉄の物体形態は、それ自体として見れば、棒砂糖の物体形態と同様に、重さの現象形態ではない。(ヘ) それにもかかわらず、棒砂糖を重さとして表現するために、われわれはそれを鉄との重量関係におく。(ハ)この関係のなかでは、鉄は、重さ以外のなにものをも表わしていない物体とみなされるのである。(ト)それゆえ、種々の鉄量は、砂糖の重量尺度として役立ち、砂糖体にたいして単なる重さの姿、重さの現象形態を代表するのである。(チ)この役割を鉄が演ずるのは、ただ、砂糖とか、またはその重量が見いだされるべきそのほかの物体が鉄にたいしてとるこの関係のなかだけでのことである。(リ)もしこの両方の物に重さがないならば、それらの物はこのような関係にはいることはできないであろうし、したがって一方のものが他方のものの重さの表現に役立つこともできないであろう。(ス)両方を秤りの皿にのせてみれば、それらが重さとしては同じものであり、したがって一定の割合では同じ重量のものであるということが、実際にわかるのである。(セ)鉄体が重量尺度としては棒砂糖にたいしてただ重さだけを代表しているように、われわれの価値表現では上着体はリンネルにたいしてただ価値だけを代表しているのである。》

イ) この等価形態の第一の特性（使用価値がその反対物である価値の現象形態になる）を分かりやすく説明するために、商品を量り売りするために、商品そのものの量を計る場合を考えてみましょう。例えば商品としての棒砂糖を量り売りするために、使用価値としての棒砂糖そのものの量を計る必要がありますが、それを考えてみるわけです。

ロ) 商品としての棒砂糖もやはり物体だから重さがあります。だからその重さで商品としての棒砂糖の量、つまりその使用価値の量を計ることができるわけです。しかし棒砂糖の重さは棒砂糖だけを見ているだけでは、見たり感じたりすることはできません。だから使用価値としての棒砂糖の量をその重さで計るためには、まずその棒砂糖の重さそのものを目に見えるような形で表し、その上で、買い手が自分自身の目でその量がどれぐらいかを確認できるように、計って見せなければなりません。買い手は自分の目で確認しない限り、これは幾らの棒砂糖だと一方的に言われても信用出来ないわけです。だからどうしても目に見えない棒砂糖の重さを、目に見えるようにして、その上でその量を買い手の目の前で計って見せる必要があるわけです。

ハ) だから売り手は天秤計りを持ち出して、一方の皿に一定量の棒砂糖を乗せ、他方の皿にあらかじめ確定されている分銅を乗せて、その釣り合いを見ながら計るところを見せるわけです。こうして買い手は棒砂糖の重さを、よってその使用価値の量を自分の目で確認して納得して買うことが出来るわけです。

ニ) しかし今、もし分銅が鉄で出来ているとするなら、それもやはり単なる鉄の固まりであり、鉄も物体としては、それだけを見ている、やはり棒砂糖と同じで、その重さを見たり感じたりすることは出来ません。つまり鉄も、やはり重さが目に見えるような形で顕れている物とはいえないのです。

ヘ) それなのに、われわれ（買い手）はその鉄片によって、棒砂糖の重さが目に見えていると感じ、使用価値としての棒砂糖の量がそれによって計ることが出来たと納得するわけです。どうしてそうなっているのか、それが問題です。それは天秤ばかりで一方の棒砂糖と他方の分銅とが釣り合っていることを買い手は確認したからです。この場合、棒砂糖と分銅とは重量として同じである、つまり重量として等置の関係にあることを示しています。天秤ばかりは、この二つの物体が、互いの重さにおいて釣り合っていることを目に見える形で表しているのです。売り手は、天秤ばかりによって二つの物体を重量関係においたのです。

ト) そしてこの重量関係において、鉄片は、重さ以外の何のものをも表さない物体とみなされているのです。

チ) だから、さまざまな量の鉄片は、棒砂糖の重量の尺度として役立つのです。そしてその場合は、鉄片は棒砂糖に対して、ただ単に重さそのものの姿として、重さが目に見える形で顕れたものとして役立っています。つまり重さの現象形態を代表しているのです。

リ) 鉄片が、こうした役割を演じるのは、ただ棒砂糖とか、それ以外のその重量を表そうとするものが、この鉄片に対してとる関係、すなわち重量関係のなかだけのことです。

ス) もちろん、両方に重さがないなら、両方を天秤ばかりに乗せることも出来ないし、だから重量関係に置くことも出来ません。だから一方を他方の重さの表現として役立てることも出来ないわけです。

7) 両方を天秤ばかりの皿に乗せるなら、それらが釣り合い、それらは重さとしては同じであり、したがって一定の割合では同じ重量のものであることが、実際に目に見える形で分かります。この場合、棒砂糖の重さそのものが鉄片の個数として具体的に目に見える形で顕れているのです。

8) 鉄の固まりが重量の尺度としては棒砂糖に対して、ただ重さだけを代表して、それを目に見える形で表しているのに対して、われわれの価値表現においては上着はリンネルに対して、ただ価値だけを代表し、それを目に見える形として表しているのです。

ここでは、ピースさんが準備してくれたレジュメでは、〈天秤に棒砂糖を左側に、鉄を右側において釣り合わせる。この関係において、棒砂糖は右側の鉄を見て私と同じ質量を持っていることを見る〉という説明があったのですが、これに対して、マルクスは「価値」と「価値量」とにアナロジーさせて、「重さ」と「重量」とを区別しながら意識的に使い分けており、「質量」だとそれが分からないのではないかとの指摘がありました。

◎棒砂糖の例の限界――自然的属性と超自然的属性

[7] パラグラフ

《(4)とはいえ、類似はここまでである。(0)鉄は、棒砂糖の重量表現では、両方の物体に共通な自然属性、それらの重さを代表している――、ところが、上着は、リンネルの価値表現では、両方の物の超自然的な属性、すなわちそれらの価値、純粋に社会的な或るものを代表しているのである。》

1), 0) しかし棒砂糖の例にはおのずと限界があります。というのは、鉄は、棒砂糖の重量表現においては、重さという、両方の物体が持っている一つの自然属性を代表しているのに対して、われわれが問題にしているリンネルの価値表現においては、等価形態にある上着は、両方の商品が持つ超自然的な属性、すなわち価値という、純粋に社会的な或るものを代表しているのだからです。

ところで、ここではマルクスは商品の価値を、商品という「物の超自然的属性」と述べています。これを読んで、以前、商品の価値を商品の「属性」と述べたことを批判した人があったことを思い出しました。その人は次のように批判したのでした。

〈(0氏は――引用者) 価値が「実体」であるということから、それは商品の属性――ただし自然的な属性ではなく、社会的な属性であると断るのだが――であると断言してはばからない。いかに「社会的」と言おうが、商品の「属性」、つまり商品そのものに属する性質であると言うかぎり、まさに物神崇拜意識そのものである。〉

しかし価値を〈商品そのものに属する性質であると言う〉意味で、「商品の属性」といえば、物神崇拜意識そのものだという批判は、本当に正しいのでしょうか。例えば、マルクスは『補足と改定』では、次のように書いています。

《しかし、類似はここまでである。重量は鉄と棒砂糖との物質的属性である。それにたいして、リンネルと上着の、要するにすべての商品の価値性格は社会的な刻印であり、そしてそのことによって、価値関係のなかで商品の物的な属性となる。》(前掲73頁)

ここではマルクスは商品の価値性格は《価値関係のなかで商品の物的な属性となる》と述べています。もし商品の価値を商品に刻印される社会的属性だと述べるのが、物神崇拜意識そのものだというなら、マルクスもそうだといわねばならなくなるでしょう。問題はそういうことではなくて、価値関係によって物的な属性として現れてくるものを、価値関係の外でもそういうものとして捉えること、すなわち商品そのものが生まれながらに持つ物的な属性であるかに捉えることが、物神崇拜意識そのものだというのではないのでしょうか。

◎等価形態の謎

[8] パラグラフ

《(4)ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが或る社会的関係を包蔵していることを暗示している。(0)等価形態については逆である。(1)等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生まれながらに価値形態をもっているということ、まさにこのことによって成り立っている。(2)いかに、このことは、ただリンネル商品が等価物としての上着商品に關係している価値関係のなかで認められているだけである(21)。(3)しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。(4)それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである。(5)そのとき、彼はなんとかして金銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀の代わりにもっとまぶしくないいろいろな商品を持ち出し、かつて商品等価物の役割を演じたことのあるいっさいの商品賤民の目録を繰り返しこみあげてくる満足をもって読みあげるのである。(6)彼は、20エレのリンネル＝1着の上着 というような最も単純な価値表現がすでに等価形態の謎を解かせるものだということには、気がつかないのである。》

1), 0) 相対的価値形態も価値が目に見えるように現れるのですが、この場合は、例えばリンネルの価値存在をリンネルの身体やその諸属性とはまったく違った、別の商品の身体やその物的属性によって、例えば上着なら上着の自然属性によって表すのだから、商品と商品との社会的関係において現れてくるのが分かります。だからそれらの価値関係の背後に社会的関係が潜んでいることが暗示されているのです。しかし等価形態についてはそれが逆になっています。

さて、この部分の『補足と改定』を見ると、次のようになっています。

《すべての商品の価値性格は社会的な刻印であり、そしてそのことによって、価値関係のなかで商品の物的な属性と

なる。この入れ替わりは、両方の形態に現われているのであるが、商品の相対的価値形態におけるよりも等価形態においてより決定的に現われる。すなわち、一商品の相対的価値形態は明かに他の商品との関係によって媒介されている。この形態が商品体の価値存在を、その感覚的存在およびその物的属性とはっきりと区別することによって、その形態は同時に、価値関係そのものを背後に潜んでいる社会的関係の単なる現象形態でありうるということを示唆している。等価形態においては逆である。》（前掲同）

このようにマルクスはここでは「入れ替わり」は両方の形態に現れていると述べています。相対的価値形態においても、相対的価値形態にある商品の価値が、その使用価値と区別されて、別の商品の使用価値によって表されるという限りでは、やはり自然形態が価値の形態になるという入れ替わりがあるのですが、しかし、その入れ替わりは、他の商品との関係に媒介されていることもはっきりしており、価値関係が社会的関係の現象形態であることを示唆しているというのです。しかし同じ入れ替わりでも等価形態においては、それが逆であり、価値関係内部でのことであることが見えにくくなっているというのです。

ハ)、ニ)というのは、等価形態の場合、商品体、例えば上着のそのあるがままの姿、その自然形態そのものが価値を表しており、だから上着そのものが、生まれながらに価値の形態を持っているかのように見えるからです。もちろん、等価形態にある上着が直接価値を表すのは、リンネルとの価値関係のなかでのみ認められることであり、上着の表している価値というのは、リンネルの価値であって、上着の価値ではないのですが、自然形態そのものが価値を表しているから、価値が、上着自身の自然属性であるかに見えてしまうというのです。

ホ)というのは、ある物の諸属性というのは、ある物が他の物との関係から生じるのではなくて、ただ他の物との関係のなかで確認されるだけであるから、等価形態にある上着が価値を表すということも、あるいは直接的交換可能性の形態も、同じように上着の自然属性、例えば重さがあるとか、保温に役立つといった属性と同じように、生まれながらに持っているもののように見えてしまうというわけです。

この部分の『補足と改定』の一部は次のようになっています。

《しかし、ある物の一定の肉体的属性は、この属性が効力をもつようになる他の物との関係から生じるのではなく、この関係は、返って、逆に、すでに存在している属性をあらわにするだけであるから、上着は、価値関係とは関係なく、その等価形態を、つまり直接的交換可能性の形態を、重さがあるとか寒さを防ぐとかというその属性と全く同じように、生まれながらにもっているように見える。》（前掲74頁）

つまり等価形態にある商品は、その自然形態そのものが価値の形態として認められ、よってその使用価値のままに、そのままで自らの価値を表す商品とは直接に交換可能なものとして通用するわけだから、そうした諸属性が、本来は相対的価値形態にある商品との価値関係のなかでのみ生ずるものであるのに、あたかも等価形態にある商品が生まれながらに持っている他の自然属性と同じようなものとして見えてしまうということです。というのは物の属性というのは等価形態のように他の物との関係で初めて生じるというような性格のものではないから、等価形態の諸属性も価値関係を離れても、等価形態に置かれた商品自体が自然に持っているもののように見えるのだということです。

ハ) こうして等価形態の謎的性格が感じられます。この謎的性格は、等価形態が完成されて貨幣になって、ブルジョア経済学者の粗雑な目にもようやく驚きを持って迎えられることになります。

ト) 彼は何かとしてその金銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀の代わりにそれ以前に貨幣の役割を担ったさまざまな貨幣商品を持ってきて、それを説明したつもりになるのです。つまりこうしたまぶしくないものでも、そうした役割を果たしたのだから、燦然と輝き、誰もが欲しがらる金銀がそうした役割を持っているのは当然なのだというわけです。

チ) しかし彼は、もっと簡単な価値形態、20エレのリンネル＝1着の上着 の中こそ、こうした等価形態の謎を解く鍵があるということを考えてもみないのです。

ところで所沢の「『資本論』を読む会」の学習会の報告では、「『等価形態の謎』とは、どのような内容なのか」という疑問が出されることが紹介され、大谷禎之介氏の「貨幣形態の謎」と「貨幣の謎」についての言及が紹介されています。この問題については、先にも紹介しました、大阪の「『資本論』を学ぶ会」の「ニュース」No.23でも以前紹介したことがあるので、それをここに再現しておきましょう。

【◎「謎」と「秘密」の区別?】

さて紙数は残りわずかとなりましたので、最後に、問題提起だけをやっておきます。『ニュース』前号（№22）で、第三節のまとめとして久留間鮫造著『価値形態論と交換過程論』の一節を引用しましたが、そこで久留間氏は第三節（価値形態論）の課題を「貨幣形態の謎を、そしてそれと同時にまた貨幣の謎を解くことにある」と述べていました。ここで「貨幣形態の謎」とは、「一般に商品の価値が特殊の使用価値—金—の一定量という形態で表現されることの謎」と説明され、「貨幣の謎」とは「金の使用価値—本来価値の反対物たるもの—がそのまま一般に価値として妥当することの謎」である、と説明されています。そして「貨幣形態および貨幣の謎の核心」は「価値形態そのものの謎」であり、それは「商品の価値はそれに等値される他商品の使用価値で表示されるということ、そしてそのさい、この他商品の使用価値は、それを自らに等値する商品にとって価値の形態になるということこれである」と説明されていました。

また大谷禎之介氏も『価値形態』という論文で次のように述べています。「物である金 (Au)の量が価値の量を表現する、というようなことがいったいどのようにして可能なか。・・・この謎を〈貨幣形態の謎〉と呼ぶ」「物である金、使用価値としての金が、その反対物である価値そのものとして通用することの謎、〈貨幣の謎〉」と。

ところが最近、こうした久留間氏や大谷氏の「謎」の理解に異論が出されていることを知りました。まず武田信照氏は次のように指摘します。「（久留間）氏のいうように、上着という商品体＝使用価値が直接価値形態になることが等価形態の謎なのではない。そうではなくて、リンネルとの価値関係の内部でのみ認められるこのような等価商品の性格が、この価値関係から独立しても認められるようにみえること、つまりその性格が上着という使用価値の生まれながらの自然属性にみえること、これが等価形態の謎なのである。非自然属性が自然属性にみえる等価形態の謎は、最も発展した等価形態である貨幣において完成した姿であられる」（『法経論集』経済・経営篇、53頁）と。

これに対して藤本義昭氏は、この武田氏の指摘は正しいが、しかし武田氏は「上着がいかにして価値物となるかという問題」の理解で間違っていると指摘し、久留間氏にとっては「価値形態の秘密」および「貨幣の秘密」と「等価形態の謎」及び「貨幣の謎」とが「厳密に区別されずに混同されている」と指摘しています（『大阪市大論集』第30号、11頁）。そして次のように説明しています。

〈簡単な価値形態に則して言えば、リンネル価値が上着の使用価値で表現されることによって上着が直接に価値物として意義をもち、リンネルの等価物となることは、この二商品の価値関係のうちひそんでいる「価値形態の秘密」ではあっても、等価形態の謎ではない。この「価値形態の秘密」の発見は、上着が生まれながらにして直接交換可能性という属性をもつようにみえる等価形態の謎を解消させはするが、等価形態という上着に刻印された「一つの新たな形態」を解消させはしないのである。だから『資本論』では、「貨幣形態の生成を論証すること・・・これによって同時に貨幣の謎も消滅する」とされているように、金という特定の商品が生まれながらにして貨幣であるという「虚偽の仮象」をはぎとるために、貨幣形態の生成を論証することが価値形態論の課題として明確に提示されるのである。マルクスはこの課題を「いっさいの価値形態の秘密」の発見とそれを基礎にした価値形態の発展的移行の究明によって果たすのであるが、このうち前者が第三節の「A簡単な、個別的な、また偶然的な価値形態」における主要な課題である〉（同11～2頁）

こうした疑問にどのように答えるのか、一度、皆様も考えてみてください。ここではこうした疑問や批判を検討する余裕はないので問題提起だけしておきます。】

武田氏の指摘はもっともであるような気がします。しかし藤本氏の主張は果たしてどうでしょうか。

◎反省規定という奇妙なもの

最後は、注21です。

《(21)およそこのような反省規定というものは奇妙なものである。たとえば、この人が王であるのは、ただ、他の人々が彼にたいして臣下としてふるまうからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである。》

これと同じ注は初版本にもありますが（付録にはない）、その注が付けられている本文では、次のような一文があります。

《価値形態の両方の規定、または交換価値としての商品価値の両方の表示様式は、単に相対的であるとはいえ、両方が同じ程度に相対的に見えるのではない。リンネルの相対的価値 20エレのリンネル＝一着の上着 においては、リンネルの交換価値が明白に他の一商品にたいするリンネルの関係として示されている。上着のほうは、たしかにただ、リンネルがそれ自身の価値の現象形態としての、したがってまたリンネルと直接に交換されうものとしての、上着に關係するかぎりにおいてのみ、等価物である。ただこの関係のなかにおいてのみ上着は等価物なのである。しかし、上着は受動的にふるまっている。それはけっしてイニシアチブを取ってはいない。上着が関係のなかにあるのは、それが関係させられるからである。それだから、リンネルとの関係から上着に生ずる性格は、上着のほうからの関係の結果として現われるのではなくて、上着の作為なしに存在するのである。それだけではない。リンネルが上着に關係する特定の仕方は、たとえば上着がまったく控え目であって、けっして「うぬぼれて気の狂った仕立屋」の製品ではなくても、まったく、上着を「魅惑する」ように仕立てられている。すなわちリンネルは、抽象的人間労働の感覺的に存在する物質化としての、したがってまた現に存在する価値性としての、上着に關係するのである。上着がこういうものであるのは、ただ、リンネルがこのような特定の仕方で上着に關係するからであり、またそのかぎりにおいてのみのことである。上着の等価物存在は、いわば、ただリンネルの反射規定なのである。ところが、それがまったく逆に見えるのである。一方では、上着は自分自身では、關係する労をとってはいない。他方では、リンネルが上着に關係するのは、上着をなにかあるものにするためではなくて、上着はリンネルがなくてもなにかあるものであるからなのである。それだから、上着にたいするリンネルの關係の完成した所産、上着の等価形態、すなわち直接に交換されうの使用価値としての上着の被規定性は、たとえば保温するという上着の属性などとまったく同じように、リンネルにたいする關係の外にあっても上着には物的に属しているように見えるのである。相対的な価値の第一の形態または単純な形態 20エレのリンネル＝一着の上着 において、このまちがった外観はまだ固定されてはいない。なぜならば、この形態は直接に反対のことをも言い表わしているからである。すなわち、上着がリンネルの等価物であるということ、および、これらの両商品のそれぞれがこのような被規定性をもつのは、ただ、他方の商品がその商品を自分の相対的な価値表現とするからであり、また、そうするかぎりにおいてのことである、ということがそれである。(21)》

また『補足と改定』では、注としてではないのですが、次のような面白い例を使った説明も見ることが出来ます。

《実際、ある商品が等価物の役割を演ずるのは、ある他の商品の価値がそれにおいて表現されているからであり、またその限りでしかない。一商品の等価形態はこの関係から発生し、この関係の内部でのみ存在し、したがって、この関係に媒介されている。同じように、老婆の魔女的性格もまた迷信深い農民と彼女との関係のなかで成り立つのである、しかし、この老婆が農民にとって魔女として通用するのは、彼女が何もしなくても魔女的性格をもっているように見えるからでしかない。同じように、ある商品、たとえば上着が他の商品、たとえばリンネルの等価物であるのは、上着が何もしなくてもこの性格をもっているように見えるからにすぎない。上着は、リンネルが上着を自分自身の価値鏡にするかぎりにおいてのみ、等価物の形態を受け取る。リンネルは、上着がもともと、生まれながら価値鏡であるから、自分の価値を上着に映すように見える。その結果・・・》前掲73頁）

.....

【付属資料】

ここではこれまでと同様に、今回検討した各パラグラフごとに、関連する資料として引用集を紹介しておきます。

【4】パラグラフ

《初版付録》

《c 等価形態の諸特性。

α等価形態の第一の特性。使用価値がその反対物たる価値の現象形態になる。》（国民文庫版139頁）

《補足と改訂》

《等価形態の独自性への移行

等価形態が内包する矛盾はその独自性をさらに詳細に考察することを必要とする》（小黒訳72頁）

《フランス語版》

《等価形態が含んでいる矛盾は、いまでは、この形態の特色のいっそう徹底的な考察を要求している。 価形態の第一の特色。使用価値が、その対立物である価値の表示形態になる。》（江夏他訳27頁）

〔5〕パラグラフ

《初版付録》

《商品の現物形態が価値形態になる。しかし、注意せよ、このような取り違えが一商品B（上着または小麦または鉄、等々）にとって起こるのは、ただ、その商品にたいして任意の他の一商品A（リンネル、等々）がはいるところの価値関係のなかにおいてのみのことであり、ただこの関係のなかにおいてのみのことである。それ自体としては、孤立的に考察すれば、たとえば上着は、リンネルまったく同じように、ただ、有用な物、使用価値であり、したがってまた、その上着形態も、ただ、一定の商品種類の使用価値の形態または現物形態であるにすぎない。しかし、どの商品も等価物としての自分自身に關係することはできないのだし、したがってまた、それ自身の現物外皮をそれ自身の価値の表現とすることもできないのだから、商品は等価物としての他の商品に關係しなければならないのであり、言い換えれば、他の一商品体の現物外皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである。》（前掲139-140頁）

《フランス語版》

《商品の自然形態がその価値形態になる。だが、実際には、この取り替えが商品B（上衣、小麦、鉄等）にとって生ずるのは、ただ、他の商品A（リンネル等）が商品B にたいしてとる価値関係の限界内でのことであり、たんにこの限界内に限られる。たとえば上衣は、これを単独に考察すれば、リンネルと同じく絶対使用価値という有用物でしかなく、その形態は、特殊な種類の商品の自然形態でしかない。だが、どんな商品も等価物として自分自身に關係することはできないし、自分の自然形態を自分自身の価値形態にすることもないから、どんな商品も必ず他の商品を等価物として選ばなければならない、これによって後者の使用価値が前者にとって価値形態の役を果たすのである。》（前掲27-28頁）

〔6〕パラグラフ

《初版付録》

《このことをわれわれに明示するものは、商品体としての、すなわち使用価値としての、商品体にあてがわれる尺度の例であろう。棒砂糖は、物体だから、重さがあり、したがってまた重量をもっているが、どんな棒砂糖からもその重さを見てとったり感じとったりすることはできない。そこで、われわれは、その重量があらかじめ確定されているいろいろな鉄片をとってみよう。鉄の物体形態は、それ自体として見れば、棒砂糖の物体形態と同様に、重さの現象形態ではない。それにもかかわらず、棒砂糖を重さまたは重量として表現するためには、われわれは棒砂糖を鉄との重量関係に置く。この関係のなかでは、鉄は、重さまたは重量以外のなにものをも表わしていない物体として認められている。それだからこそ、いろいろな鉄量は、砂糖の重量尺度として役立ち、砂糖体にたいして単なる重さの姿、重さの現象形態を代表するのである。このような役割を鉄が演ずるのは、ただ、砂糖とか、またはその重量が見いだされるべきなんらかの他の物体が鉄にたいしてとるところの、この関係のなかにおいてのみのことである。もしこの両方の物に重さがなければ、これらの物はこのような関係のなかにはいることはできないであろうし、したがってまた一方のものが他方のものの重さの表現に役だつこともできないであろう。われわれがこの両方の物を秤りの皿に載せてみれば、それらの物が重さとしては同じものであり、したがってまた一定の割合にあれば同じ重量のものである、ということが実際にわかるのである。この場合に鉄体が棒砂糖にたいしてただ重さだけを代表しているように、われわれの価値表現においては上着体はリンネルにたいしてただ価値だけを代表しているのである》（前掲140-

《フランス語版》

《物体としての商品、すなわち使用価値としての商品に適用される尺度が、上述したことを読者の眼に直接明らかにするための事例として役立つ。棒砂糖は物体であるから重い、したがって重量をもっている。だが、この重量をたんに外観上眼で見ることまたは手で触れることもできない。さて、既知の重量をもつまざまな鉄片をとってみよう。鉄の物体形態は、それ自体として考察すれば、棒砂糖の物体形態と同じく重量の表示形態ではない。しかし、棒砂糖が重いことを表現するために、われわれは棒砂糖を鉄との重量関係に置く。鉄はこの関係のなかでは、重量以外になにも表わさない物体と見なされる。したがって、砂糖の重量を測るために用いられる鉄の量は、砂糖という物体にたいして単なる形態、すなわち、重量が表示される形態を表わす。鉄がこの役割を演じることができるのは、砂糖であろうと、重量を必ずもつ他のどんな物体であろうと、それらがこういった観点で鉄と関係させられるかぎりでのことなのだ。もし両物体に重さがなければ、相互間にこの種のどんな関係もありえないであろうし、一方が他方の重量の表現に役立つこともできないであろう。両者を双方とも天秤盤にのせると、両者が重量としては同じ物であり、したがって、両者がある比率のもとで同じ重さでもあることが、実際にわかるのである。鉄体が重量の尺度としては棒砂糖にたいして重量しか代表しないのと同じように、われわれの価値表現でも、上衣体はリンネルにたいして価値しか代表しない。》(前掲28頁)

[7] パラグラフ

《補足と改訂》――次のパラグラフと一緒に掲載

《フランス語版》

《しかし、類似はここで終る。鉄は、棒砂糖の重量表現では、両物体に共通な自然的特性、それらの重量を代表するのにたいし、上衣体は、リンネルの価値表現では、両物体の超自然的特性、それらの価値、純粋に社会的な刻印という性格を代表する。》(前掲28-9頁)

[8] パラグラフ

《補足と改訂》

《[A 1]

しかし、類似はここまでである。重量は鉄と棒砂糖との物質的属性である。それにたいして、リンネルと上着の、要するにすべての商品の価値性格は社会的な刻印であり、そしてそのことによって、価値関係のなかで商品の物的な属性となる。この入れ替わりは、両方の形態に現われているのであるが、商品の相対的価値形態におけるよりも等価形態においてより決定的に現われる。すなわち、一商品の相対的価値形態は明かに他の商品との関係によって媒介されている。この形態が商品体の価値存在を、その感覚的存在およびその物的属性とはっきりと区別することによって、その形態は同時に、価値関係そのものを背後に潜んでいる社会的関係の単なる現象形態でありうるということを示唆している。相対的価値形態(等価形態の間違い?――引用者)においては逆である。

実際、ある商品が等価物の役割を演ずるのは、ある他の商品の価値がそれにおいて表現されているからであり、またその限りでしかない。一商品の等価形態はこの関係から発生し、この関係の内部でのみ存在し、したがって、この関係に媒介されている。同じように、老婆の魔女的性格もまた迷信深い農民と彼女との関係のなかで成り立つのである、しかし、この老婆が農民にとって魔女として通用するのは、彼女が何もしなくても魔女的性格をもっているように見えるからでしかない。同じように、ある商品、たとえば上着が他の商品、たとえばリンネルの等価物であるのは、上着が何もしなくてもこの性格をもっているように見えるからにすぎない。上着は、リンネルが上着を自分自身の価値鏡にするかぎりにおいてのみ、等価物の形態を受け取る。リンネルは、上着がもともと、生まれながら価値鏡であるから、自分の価値を上着に映すように見える。その結果.....

[A 2]

しかし、類似はここまでである。鉄体は、棒砂糖の重量表現においては、両方の物体に共通な自然属性であるそれらの重さを代表するのにたいして――上着体は、リンネルの価値表現においては、両方の物の超自然的属性、それらの価値を、純粋に社会的な刻印という性格を、代表する。リンネルといったような一商品体の相対的価値形態は、その価値存在を、その商品体の感覚的な存在およびその物的属性とは完全に区別されるものとして、たとえば20エレのリンネルと1着の上着との同等性として表現するのであるが、そのことによって、価値関係がその背後に潜

ている社会的関係を現しているということを、この形態は同時に暗示している。等価形態については逆である。等価形態とは、まさに、ある商品の身体が、その物が、あるがままで直接的に価値を表しているということなのである。

[10] 確かに、このことが通用するのは、ある他の商品、たとえばリンネルの上着商品との価値関係の内部でのことにすぎない。(注21, p.23) しかし、ある物の一定の肉体的属性は、この属性が効力をもつようになる他の物との関係から生じるのではなく、この関係は、返って、逆に、すでに存在している属性をあらわにするだけであるから、上着は、価値関係とは関係なく、その等価形態を、つまり直接的交換可能性の形態を、重さがあるとか寒さを防ぐとかというその属性と全く同じように、生まれながらにもっているように見える。そこから、等価形態の謎的性格が生じるのであるが、この謎的性格が経済学者の粗野な実際のな目を見はらせるのは、やっとな、等価形態が完成されて貨幣となって彼の前に立ち現れるときである。20エルのリンネル=1着の上着という最も簡単な価値表現がすでに、等価物の謎的性格をもっているということに、ほんのすこしも気づくことをせずに、かえって彼は、金銀の神秘的性格を説明し去ろうと妄想して、金銀の代わりに目をくらませることのさらに少ないいろいろな商品をこっそりもってきて、かつては商品等価物の役割を演じたことのあるこれらいっさいの商品賤民の目録を棒読みする。

[B]

等価形態 第1の独自性

しかし、類似はここまでである。鉄体は、棒砂糖の重量表現においては、両方の物体に共通な自然属性、――それらの重さ――、を代表するのにたいして、上着体はリンネルの価値表現においては、両方の物の超自然的属性を、それらの価値を、純粋に社会的なものを、代表する。

一商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体およびこの身体の属性と完全に区別されるものとして、たとえば上着にひとしいものとして表現するのであるが、この形態は、この表現が社会的関係を隠していることを暗示している。

等価形態については逆である。等価形態とは、まさに、ある商品体、たとえば上着がこのあるがままの物が、価値を表現し、したがって、生まれながらにして価値形態をもっている、ということなのである。確かに、このことが通用するのは、ただ、他の商品たとえばリンネルが、等価物としての上着に関係させられている価値関係の内部でのことにすぎない。(注21, p.23) しかし、ある物の身体的諸属性は、その物の他の諸物との関係から生じるのではなく、むしろこのような関係のなかで確認されるだけであるから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか寒さを防ぐとかというその属性と同じように、生まれながらにもっているかのように見えるのである。そこから、等価形態の謎的性格が生じるのであるが、この謎的性格が経済学者のブルジョワ的な粗雑な目を見はらせるのは、やっとな、等価形態が完成されて貨幣となって彼の前に立ち現れるときである。そのとき、彼は、金銀の神秘的性格を説明し去ろうとして、金銀の代わりに目をくらませることのさらに少ないいろいろな商品をこっそりもってきて、かつては商品等価物の役割を演じたことのあるこれらいっさいの商品賤民の目録を棒読みしては、そのたびた満足よろこびを新たにす。すでに、20エルのリンネル=1着の上着というようなもっとも簡単な価値表現が等価形態の謎を解く鍵を与えていることなど、彼は気づきもしないのである。》(前掲73-76頁)

《フランス語版》

《相対的形態が、たとえばリンネルという商品の価値を、その体躯そのものおよびその属性とは全く異なるあるものとして、たとえば上衣に類似しているあるものとして表現するとき、この相対的形態は、ある社会的関係がこの表現のもとに隠されていることを示している。

等価形態のばあいは、逆のことが起こる。等価形態はまさに、ある商品体たとえば上衣が、そういうものとしてのこの物が、価値を表現し、したがって、当然に価値形態をもっている、ということから成り立っている。確かに、このことが正しいのは、リンネルのような他の商品が等価物としての上衣に関係するかぎりのことでしかない。(20) だが、ある物の物質的属性は、他の物にたいする外的関係から生ずるのではなく、この関係のなかで確認されるにすぎないのと同様に、上衣もその等価形態を、すなわち、直接に交換可能であるという属性を、重いか熱いかという属性と同じく当然に、自然から引き出しているように見えるのであって、リンネルとの価値関係から引き出しているのではないかのように見える。ここから等価物の謎のような側面が生まれるのであって、この側面は、この形態がすっかり完成して貨幣の姿でブルジョア経済学者に現われるときにはじめて、彼の眼を驚かす。次いで彼は、銀や金のこの神秘的な性格を一掃するために、銀や金をそれほど眩しくない商品にこっそりとりかえようとする。彼は、かつて等価物の役割を演じてきたすべての物品のカタログをなんどもなんども作り変えては、そのたびに喜びを新たにす。20メートルのリンネルが一着の上衣に値するといったような最も単純な価値表

現が、すでに謎を含んでいることも、自分がこの単純な価値形態のもとで謎解きの努力をしなければならぬことも、彼は予感していない。》（前掲29頁）

【注21】

《フランス語版》

《（20）ほかの概念界でも、やはりこのとおりである。たとえば、この人が玉であるのは、他の人々が彼の臣民と見なされ、それに応じて振舞うからでしかない。これらの人々は逆に、彼が王であるから自分たちは臣民であると信じている。》（同前）

『資本論』を読んでみませんか

「トヨタ神話の崩壊」、「史上最悪のリコール」。

トヨタのリコール問題が世界のマスコミを騒がせている。

今回のリコールの対象は大きくわけて三つある。

一つはアメリカにおいて、フロアマットを二重に敷いたことによって暴走して四人が死亡するという事故が発端になったものである。トヨタは当初、自社の責任を否定しながらも、結局、8車種計426万台を対象にしたリコールに追い込まれた。

もう一つはフロアマットとは無関係にアクセルペダルが元に戻りにくい不具合の発生である。これも8車種計230万台のリコールの実施を発表した。

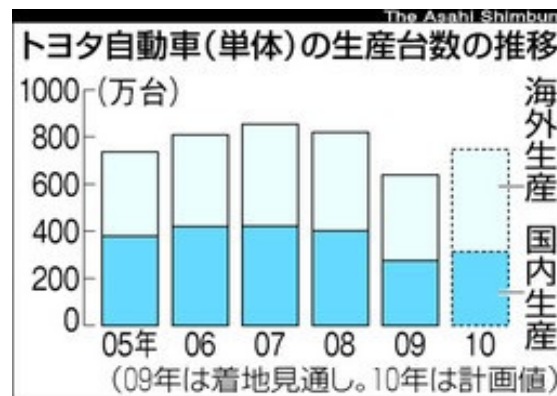
そして最後はトヨタの技術の粋を集めたとされるハイブリッド車プリウスのブレーキ問題である。これは前二者が海外市場に限定されたものであったのに対して、日本市場においても、プリウスとブレーキシステムを共有している5車種計20数万台のリコールを届け出るようになった。

アメリカの公聴会に出席したあと日本のテレビ局に出演した豊田章男社長は「事業の急拡大が人材育成のスピードを上回った」と、今回のリコール問題を引き起こした原因について述べたという。



アメリカの公聴会に出席した豊田社長

確かにトヨタのここ数年の生産拡大には驚異的なものがある。1998年から2007年の十年間で海外に16工場を建設、年平均1.6工場の「怒濤の工場建設ラッシュ」と言われた。生産台数も99年以降ほぼ毎年50万台の生産能力を増強させ、世界生産台数は2001年の513万台に対して07年には853万台に達している。こうしたなかで品質低下への懸念がグループ内でも徐々に増していたと言われている。



今回のトヨタのリコール問題に限っていうなら、こうした問題が直接の原因として考えられる。しかし資本主義的生産においては、すべての技術は「資本の技術」として、すべての生産力は「資本の生産力」としてしか存在しないという現実こそが、根本的な原因なのである。資本主義的生産は直接には使用価値を目的にした生産ではない、ただ価値（剰余価値＝利潤）を目的にした生産なのである。資本にとっては、高度な技術や生産力も、ただ労働を搾取し最大の利潤を獲得するためにのみ存在する。だからその生産は、直接には使用価値、つまりそれを使用する顧客を考えたものとはならず、それらはただ利潤獲得に必要な限りで顧慮されるにすぎないのである。

マルクスは次のように述べている。

《科学や自然力や大量の労働生産物のこのような社会的労働に基づく充用は、すべてそれ自身ただ労働の搾取手段としてのみ、剰余労働を取得する手段としてのみ、それゆえ、労働に対立し資本に所属する諸力としてのみ現われるのである。もちろん、資本は、ただ労働を搾取するため

にのみこれらすべての手段を充用するのであるが、労働を搾取するためには、資本はそれらの手段を生産に充用しなければならない。このようにして労働の社会的生産力の発展もこの発展の諸条件も、資本の行為として現われるのであって、これにたいして個々の労働者は受動的な態度をとるだけでなく、むしろ労働者に対立してこれが進行するのである。》（『剰余価値学説史』26巻1498頁）

資本主義的生産は労働の社会的生産力を高度に発展させ、人類の福祉を豊かにする物質的基礎を形成する。しかしそれはあくまでも一つの間接的な歴史的な結果に過ぎず、それらを直接に目的とした結果ではない。だからそうした物質的生産力の発展は、他方で何万何千万もの犠牲をもたらす戦争や膨大な環境破壊、労働力の飽くなき搾取と浪費等々を通してしか実現できないのである。資本主義的生産様式の克服こそが問題の根本的解決への道である。

その理解のために、あなたも、ともに『資本論』を読んでみませんか？

第22回「『資本論』を読む会」の報告

◎春の嵐と黄砂

第22回「『資本論』を読む会」が開催された3月21日はよい天気でしたが、前日からの突風と黄砂の名残がまだあり、時々なま温かい強風が吹いていました。

私たちが学習会を開催している堺市立南図書館の3階会議室の窓から見える桜の木は、赤い蕾を膨らませていました。この桜もすぐにも開花を迎え、私たちの目を楽しませてくれることでしょう。

花の季節が巡って来たのに、私たちの学習会はなかなか開花しそうになく、相変わらずの集まりでした。といっても学習会の内容そのものは充実したものであったのです。さっそく、その報告に移りましょう。今回は等価形態の第二の特性と第三の特性の途中まで進みました。

◎等価形態の第二の特色

第9パラグラフから始まります。いつもの通り、まずパラグラフの本文を紹介し、文節ごとにf)、g)、h)……の記号を打ち、それぞれの解説を順次行うことにします。

[9]

《f)等価物として役立つ商品の身体は、つねに抽象的人間労働の具体化として認められ、しかもつねに一定の有用な具体的労働の生産物である。g)つまり、この具体的な労働が抽象的人間労働の表現になるのである。h)たとえば上着が抽象的人間労働の単なる実現として認められるならば、実際に上着に実現される裁縫は抽象的人間労働の単なる実現形態として認められるのである。i)リンネルの価値表現では、裁縫の有用性は、それが衣服をつくり、したがって人品をもつくるといふことにあるのではなく、それ自身が価値であると見られるような物体、つまりリンネル価値に対象化されている労働と少しも区別されない労働の凝固であると見られるような物体をつくることにあるのである。j)このような価値鏡をつくるためには、裁縫そのものは、人間労働であるというその抽象的属性のほかにはなにも反映してはならないのである。》

今回から〈等価形態の第二の特色〉の説明です。初版付録や「補足と改定」、あるいはフランス語版では、パラグラフの前に表題として、〈g)等価形態の第二の特性。具体的な労働がその反対物たる抽象的な人間労働になる〉(初版付録)とか、〈価値形態(「等価形態」の誤植?—引用者) 第二の独自性〉(「補足と改定」)、〈等価形態の第二の特色。具体的労働が、その対立物である抽象的人間労働の表示形態になる〉(フランス語版)と書かれていて、これから考察する課題がまず明らかにされていますが、現行版では、[9]パラグラフそのものには何もそれらしいものもなく、その代わりに[11]パラグラフで、それまでの考察の結論として表題と同じ内容が述べられています。とにかく文節ごとに、詳細に検討していくことにしましょう。

f)等価形態として役立つ商品の身体、例えば上着の商品体は、価値体として認められます。すなわちその自然形態が価値の形態、価値が具体的な形をとって目に見える物として現れたものとして認められています。上着の具体的な現物形態が価値の形態として、だから無差別な人間労働が対象化したもの、抽象的人間労働がそこに具体的に凝固しているものとして、認められるのです。しかし他方で、上着という物的姿を形作っているのは、抽象的人間労働ではなくて、一定の有用な具体的な労働—裁縫労働なのです。

g)だからここでは、この具体的な有用労働が、抽象的人間労働が具体的な姿をとって現れているものになっているわけです。すなわちその表現になっているのです。

h)上着形態、上着の物的形態が、抽象的人間労働の単なる実現形態、抽象的人間労働がその物的姿をとって自らを現わし実現したものと認められるなら、実際には上着を形作っている裁縫労働が抽象的人間労働の単なる実現形態として認められるわけです。

学習会では、この〈単なる実現として認められるならば、……単なる実現形態として認められる〉という言い方のなかで〈単なる〉が二回出てくるのですが、どうしてここで〈単なる〉と言われているのか、これは何を意味しているのだろうか、という疑問が出されました。

これは次のようなことではないか、という意見が出ました。上着が価値体として認められるということは、上着の自然形態が価値の形態として認められるということですが、価値というのは抽象的人間労働の凝固であり、無差別な人間労働だけからなっています。しかし上着の自然形態というのは、決して、例えば裁縫労働という具体的な有用労働だけからなっているわけではありません。それは具体的な有用労働と物的素材との結合の産物であり、上着の目に見える物的姿は、それが形作られている物的素材(ウール生地等)と、それに支出された裁縫労働の産物であることが目に見えています(裁縫労働は痕跡として見えているだけです)。しかし上着の自然形態が価値の形態として認められるということは、上着が純粹に無差別な労働だけからなっているとみなされるわけです。その結果、上着の物的姿を形作った裁縫労働だけが抽象的人間労働の表現形態になっているといわれているわけです。だから〈単なる〉というのは、上着が単に労働だけからなっているものと認められるという含意ではないかというわけです。

i)リンネルの価値表現では、上着の使用価値は、ただリンネルの価値を具体的に表すという役割だけが問われているだけで、上着の使用価値本来の有用性は何も問われていません。だから上着の使用価値を形作る裁縫労働の有用性も、上着の使用価値本来の有用性を形作る側面は何も問題にされずに、ただリンネルの価値に対象化されている労働と少しも区別されない労働、つまり抽象的人間労働の凝固であるという物体をつくるという面だけが問われているわけです。

ここで〈裁縫の有用性は、それが衣服をつくり、したがって人品をもつくるということにあるのではなく〉とされていますが、〈人品をもつくる〉というのは、新日本新書版では、〈「馬子にも衣装」を意味するというドイツの諺をもっている〉との説明があります。そして実際、フランス語版では〈リンネルの価値を上衣において表現するばあい、仕立屋の労働の有用性は、この労働が上衣を作る、そしてまた、ドイツの諺によれば人を作る、という点にあるのではなく〉（江夏他訳30頁）となっています。

(♯)「相対的価値形態の内実」の最後の【11】パラグラフでは、それまでの考察の結論として〈価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態が商品Aの価値形態となる。言いかえれば、商品Bの身体が商品Aの価値鏡となる〉とされています。リンネルの価値表現では、上着の身体がリンネルの価値鏡になります。そして価値鏡としての上着の身体を作るためには、裁縫労働そのものは、抽象的人間労働であるという属性以外の何も反映してはならないのだということです。これは裁縫労働に抽象的人間労働がその内的契機として含まれているということではありません。裁縫労働という具体的な労働そのものが抽象的人間労働そのものの反映なのだということなのです。つまり裁縫労働が抽象的人間労働という目に見えない内的なものが外的な物として現れた実現形態としてあるということなのです。

ここで上着の身体がリンネルの〈価値鏡〉になる、とありますが、この鏡は「魔法の鏡」ではないか、という話が出ました。というのは普通の鏡なら、鏡の前に立ったものの外面を映し出すだけです。この価値鏡の場合は、リンネルのゴワゴワした直接的な対象性に隠された内的本質である価値を映し出すからです。「魔法の鏡」の前に立つと、その人の美しい外面に隠された醜い本質が、悪魔の顔として映し出されると同じだということなのですが、果たしてどうでしょうか。

◎等価形態の第二の特色の神秘性（転倒）

【10】

《(I)裁縫の形態でも織布の形態でも、人間の労働力が支出される。(II)(それだから、どちらも人間労働という一般的な属性をもっている)であり、また、それだから、一定の場合には、たとえば価値生産の場合には、どちらもただこの観点のもとでのみ考察されるのである。(III)こういうことは、なにも神秘的なことではない。(IV)ところが、商品の価値表現では、事柄がねじ曲げられてしまうのである。(V)たとえば、織布はその織布としての具体的な形態においてではなく人間労働としての一般的な属性においてリンネル価値を形成するのだということを表示するためには、織布にたいして、裁縫が、すなわちリンネルの等価物を生産する具体的な労働が、抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として対置されるのである。》

〈等価形態の第一の特色〉を論じたところでも、【8】パラグラフで等価形態にある上着が直接的交換可能性という属性を、あたかも重さがあるとか、寒さを防ぐというような上着が持っている自然的な属性と同じように、生まれながらに持っているかのように見えるという〈等価形態の謎【Raetselhafte】〉について論じていましたが、今回のパラグラフは、それ対応させて、同じような等価形態の神秘的性格が第二の特色に関連して論じられているように思えます。

(I)、(II)、(III) われわれは「第2節 商品に表される労働の二重性」の最後のパラグラフで、〈すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する〉とされていたのを知っています。ここで言われていることはこのことです。すなわち、裁縫労働も織布労働も、人間労働力が支出され、だからどちらも人間労働という一般的な属性を持っている。だからある場合には、すなわち価値生産という場合には、労働の一般的な属性において考察され、使用価値生産の場合には、労働の具体的な属性から考察される。こういうことには神秘的なことは何一つないわけです。

(IV)、(V) ところが、商品の価値表現では、事柄がねじ曲げられてしまいます。織布労働がその一般的な属性、すなわち無差別な人間労働一般という属性においてリンネルの価値を形成するということを表示するために、この織布労働に対して、リンネルの等価物である上着を生産する裁縫労働が、その具体的な労働の形態のまま、抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として現れ、対置されなければならないのです。裁縫という具体的な労働が抽象的人間労働が現実目に見えるものとして現れ出たものとみなされるのです。初版付録では次のように書かれています。

〈価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なもの具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なものが抽象的一般的なもの単なる現象形態または特定の実現形態として認められるのである。たとえば等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の実現形態として認められるだけなのである。〉（国民文庫版142-3頁）

これがどれほど奇妙なことであり、また価値表現の理解を困難にするかは、やはり初版付録では次のように説明されています。

〈この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的なもの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なもの具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。それは同時に価値表現の理解を困難にする。もし私が、ローマ法とドイツ法とは両方とも法である、と言うならば、それは自明なことである。これに反して、もし私が、法というこの抽象物がローマ法においてとドイツ法においてと、すなわち、これらの具体的な法において実現される、と言うならば、その関連は不可解になるのである。〉（同上）

【11】

《だから、具体的な労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になるということは、等価形態の第二の特色なのである。》

これは初版付録や「補足と改定」、フランス語版では最初に表題として掲げられているものが、現行版では、最後に結論として述べられているわけです。

◎等価形態の第三の特色

【12】

《(イ)しかし、この具体的労働、裁縫が、無差別な人間労働の単なる表現として認められるということによって、それは、他の労働との、すなわちリンネルに含まれている労働との、同等性の形態をもつのであり、したがってまた、それは、すべての他の商品生産労働と同じに私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態にある労働なのである。(ロ)それだからこそ、この労働は、他の商品と直接に交換されうる生産物となって現われるのである。(ハ)だから、私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になるということは、等価形態の第三の特色である。》

初版付録や「補足と改定」、フランス語版では、やはり最初に表題がついています。すなわち〈γ 等価形態の第三の特性。私的労働がその反対物の形態たる直接的に社会的な形態における労働になる。〉(初版付録)、〈第三の独自性。等〉(「補足と改定」)、〈等価形態の第三の特色。〉(フランス語版)というようにです。

(イ) 上着の現物形態を作る具体的な裁縫労働が、無差別な人間労働、抽象的人間労働の表現として認められることによって、その労働は、他の労働との、つまりリンネルに含まれている労働、リンネルの価値を形成した労働と同等性の形態をもつのです。そしてそのことにみても、裁縫労働は、すべての他の商品を生産する労働と同じように私的労働でありながら、同時に直接に社会的な形態にある労働と認められるわけです。ここで「直接に社会的な形態にある労働」とありますが、「第二節 商品に表される労働の二重性」において、次のような一文がありました。

〈いろいろな違った使用価値または商品体の総体のうちには、同様に多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体——社会的分業が現われている。社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない。……ただ、独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである。〉

また初版付録の〈γ 等価形態の第三の特性〉の冒頭には次のような一文があります。

〈諸労働生産物は、もしそれらが互いに無関係に営まれる独立な諸私的労働の諸生産物でないならば、諸商品にはならないであろう。これらの私的労働の社会的関連が素材的に存在するのは、それらが一つの自然発生的な社会的分業の諸分枝であり、したがってまた、それらの生産物によっていろいろな種類の欲望を充足するかぎりにおいてのことであって、これらの欲望の総体からはやはり社会的な諸欲望の自然発生的な体系が成り立っているのである。しかし、このような、互いに無関係に営まれる諸私的労働の素材的な関連は、ただ、それらの諸生産物の交換によってのみ、媒介され、したがってまた実現されるのである。それゆえ、私的労働の生産物が社会的な形態をもっているのは、ただ、それが価値形態を、したがってまた他の諸労働生産物との交換可能性の形態を、もっているかぎりにおいてのみのものである。それが直接に社会的な形態をもっているのは、それ自身の物体形態または現物形態が同時に他の商品とのその交換可能性の形態であり、言い換えれば、他の商品にたいして価値形態として認められているかぎりにおいてのことである。しかし、われわれがすぐ見たように、こういうことがある労働生産物にとって生ずるのは、ただ、それが、それにたいする他の商品の価値関係によって、等価形態にある場合、すなわち、他の商品にたいして等価物の役割を演ずる場合だけである。〉(前掲144頁)

つまり諸商品を生産する労働は直接には私的労働であり、だからこそそれらは商品として交換されなければならないわけです。しかしそれらが交換されるためには、それらを生産した労働が、社会的な形態を持たねばなりません。そしてそれがすなわち諸商品の価値形態なのです。諸商品は価値形態を持つことによって、他の商品との交換可能性の形態を持つことになるのです。しかしそのためには諸商品は他の商品自身の等価物にし、等価物商品を生産する労働を私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態を持った労働にすることによって、そうした自身の価値形態を持つのだということです。だから等価物を生産する労働は私的労働でありながら、同時に直接に社会的な形態にある労働になっているのです。

しかし、裁縫労働が直接に社会的な形態にある労働になっている、といっても、それはあくまでも上着という商品に対象化された労働についてのみ言うことであって、決して、現実に出された裁縫労働そのものがその流動的な状態において、そうした形態にあるということではありません。言い換えれば、裁縫労働者が直接に社会的な関係のなかであってその労働を行ったのではないということです。裁縫労働者はあくまでも一人として上着を生産し、彼の支出する労働は直接には私的労働なのです。ただその労働が私的に支出されて商品に対象化されたあと、商品同士が互い関係し合う世界＝商品世界において、すなわちその価値関係において、特定の商品上着が等価物という位置に置かれるかぎりにおいて、上着に対象化された労働がそうしたものと見做されるということなのです。だからこの場合、具体的な裁縫労働そのものが、抽象的人間労働の具体化として認められるように、私的労働そのものが、なおかつ直接に社会的な形態にある労働になっているわけです。

(ロ) だからそのように、私的労働でありながら、なおかつ直接的に社会的な形態にある労働である裁縫労働の産物であるからこそ、上着は、等価形態の最初に考察したように、他の商品と直接に交換されうる生産物になっているわけです。

初版付録からもう一つ紹介しておきましょう。

〈裁縫労働というような、一定の、具体的な労働が、たとえばリンネルというような別種の商品に含まれている別種の労働との同等性の形態をもっていることができるのは、ただ、その特定の形態が、別種の諸労働の同等性を、またはそれらの労働における同等なものを、現実形成しているあるものの表現として認められているかぎりにおいてのみのものである。しかし、別種の諸労働が同等であるのは、ただ、それらが人間労働一般、抽象的人間労働、すなわち人間労働力の支出であるかぎりにおいてのみのものである。だから、すでに明らかにしたように、等価物のなかに含まれている特定の具体的な労働は抽象的人間労働の特定の実現形態または現象形態として認められているので、その労働は他の労働との同等性の形態をもっているものであり、したがってまた、すべての他の商品生産労働と同様に私的労働であるのに、しかもなお直接的に社会的な形態にある労働なのである。それだからこそ、その労働は他の商品と直接に交換されうる生産物となって現われるのである。〉(同上)

(ニ) これは第二の特色の場合と一緒に、結論として第三の特色が定式化されているだけです。

.....

【付属資料】

〔9〕パラグラフに関連して

《初版本文》

〈20エレのリンネル＝1着の上着 または xエレの連寝るはy着の上着に値する、という相対的な価値表現のなかでは、上着はただ価値または労働凝固体としてのみ認められているのではあるが、しかし、それだからこそ、労働凝固体は上着として認められ、上着はそのなかに人間労働が凝固しているところの形態として認められるのである。使用価値上着がリンネル価値の現象形態になるのは、ただ、リンネルが抽象的人間労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的物質化としての上着物質に関係しているからにほかならない。上着という対象性は、リンネルにとっては、同種の人間労働の感覚的につかまえられる対象性として、したがってまた現物形態における価値として、認められているのである。リンネルは価値としては上着と同じ本質のものであるがゆえに、上着という現物形態がこのようにリンネル自身の価値の現象形態になるのである。しかし、使用価値上着に表わされている労働は、単なる人間労働ではないのであって、一定の、有用な労働、裁縫労働である。単なる人間労働、人間労働力の支出は、どのようにでも規定されることはできるが、それ自体としては無規定である。それは、ただ、人間労働力が特定の形態において支出されるときにはじめて、特定の労働として実現され、対象化されることができるのである。なぜならば、ただ特定の労働にたいしてのみ、自然素材は、すなわち労働がそれにおいて対象化される外的な物質は、相対するのだからである。ただヘーゲル的な「概念」だけが、外的な素材なしで自己を客観化することを達成するのである。

リンネルは、人間労働の直接的な実現形態としての裁縫労働に関係することになしには、価値または肉体化した人間労働としての上着に関係することはできない。とはいえ、リンネルを使用価値上着に関係させるものは、上着の羊毛的な快適さでもなければ、上着のボタンをかけられた有様でもなく、そのほか上着に使用価値として刻印するなんらかの有用的な質でもない。上着は、リンネルのためには、ただ、リンネルの価値対象性をリンネルのごまごわした使用対象性と区別して表わす、ということに役だっただけである。リンネルは、その価値をアギ〔植物名〕樹脂とか乾燥人糞とか靴墨とかで表現したとしても、同じ目的を達したであろう。それゆえ、同様に、裁縫労働がリンネルにとって有効であるのも、それが合目的的に生産的な活動であり有用労働であるかぎりにおいてのことではなくて、ただ、それが特定の労働として人間労働一般の実現形態であり対象化様式であるかぎりにおいてのみのことである。もしリンネルがその価値を上着においてではなく靴墨において表現したとすれば、リンネルにとってはまたやはり裁縫ではなく靴墨作りが抽象的人間労働の直接的実現形態として認められたであろう。つまり、ある使用価値または商品体が価値の現象形態または等価物となるのは、ただ、別のある商品が、前記の商品体に含まれている具体的な有用労働種類に、抽象的人間労働の直接的実現形態としてのそれに、関係する、ということによってのみである。〉（国民文庫版48-50頁）

《初版付録》

〈β等価形態の第二の特性。具体的な労働がその反対物たる抽象的な人間労働になる。

上着はリンネルの価値表現において価値体として認められており、したがって、上着の物体形態または現物形態は、価値形態として、すなわち、無差別な人間労働の、単なる人間労働の、具体化として、認められている。しかし、それによって上着という有用物がつくられてその特定の形態を得るところの労働は、抽象的人間労働ではなく、単なる人間労働ではなくて、一定の、有用な、具体的な労働種類――裁縫労働である。単純な相対的な価値形態が要求するのは、一商品たとえばリンネルの価値がただ一つの別の商品種類だけで表現されるということである。しかし、この別の商品種類がなんであるか、ということは単純な価値形態にとってはまったくどうでもいいのである。商品種類上着ではなく、リンネルの価値は、商品種類小麦でも、あるいはまた商品種類小麦ではなく商品種類鉄、等々でも、表現されうるであろう。しかし、上着であろうと小麦であろうと鉄であろうと、つねに、リンネルの等価物はリンネルにたいして価値体として、したがってまた、単なる人間労働の具体化として、認められているであろう。そしてまたつねに、等価物の特定の物体形態は、それが上着であろうと小麦であろうと鉄であろうと、抽象的人間労働の具体化ではなくて、裁縫労働なり農民労働なり鉱山労働なりとにかく一定の、具体的な、有用労働種類の具体化であることに変わりはないであろう。だから、等価物の商品体を生産する特定の、具体的な、有用労働は、つねに必然的に、単なる人間労働の、すなわち抽象的人間労働の、特定の表現形態または現象形態として認められなければならないのである。たとえば上着が価値体として、したがって単なる人間労働の具体化として、認められうるのは、ただ、裁縫労働が、それにおいて人間労働力が支出されるところの、すなわち、それにおいて抽象的人

間労働が実現されるところの、特定の形態として認められているかぎりにおいてのみのことである。〉（国民文庫版141-2頁）

《補足と改訂》

〈価値形態（「等価形態」の誤植？—引用者） 第二の独自性

等価物-商品の身体は、価値表現のなかでは、つねに、抽象的人間的労働の体化として通用し、しかも、つねに、一定の有用的具体的労働の生産物である。したがって、この具体的労働が、ここでは、抽象的人間的労働の表現にのみ役立つ。たとえば、上着が抽象的人間的労働の単なる実現形態として通用するとすれば、実際に上着に実現される裁縫労働は抽象的人間的労働の単なる実現形態として通用する。リンネルの価値表現においては、裁縫労働の有用性は、それが衣装をつくり、したがってまた風采をあげるということにあるのではなくて、それが価値であること、したがって、リンネルの価値に対象化された労働とまったく区別されない労働の凝固体であること、が見てとれるような一身体をつくることにある。このような価値鏡をつくるためには、裁縫労働そのものは、人間の労働というその抽象的属性以外のなにもも反映してはならない。〉（小黒正夫訳76頁）

《フランス語版》

〈等価形態の第二の特色。具体的労働が、その対立物である抽象的人間労働の表示形態になる

等価物の体躯は、商品の価値表現では、つねに抽象的人間労働の具現として現われ、しかもつねに、特殊で具体的な有用労働の生産物である。したがって、この具体的労働は、ここでは、抽象的労働を表現することにだけ役立つ。たとえば、一着の上衣が抽象的労働の単なる実現であるならば、上衣のなかに実現されている仕立屋の行為もまた、抽象的労働の単なる実現形態にほかならない。リンネルの価値を上衣において表現するばあい、仕立屋の労働の有用性は、この労働が上衣を作る、そしてまた、ドイツの諺によれば人を作る、という点にあるのではなく、この労働が、価値の透きとおって見える体躯を、すなわち、リンネルの価値のなかに実現されている労働となら区別されることのない労働の見本を、生産する、という点にある。このような価値の鏡になれるためには、仕立屋の労働そのものは、人間労働という属性以外になにもものをも反映してはならないのである。〉（江夏他訳29-30頁）

【10】パラグラフ

《初版本文》

〈われわれは、ここにおいて、価値形態の理解を妨げるあらゆる困難の噴出点に立っているのである。商品の価値を商品の使用価値から区別するという、または、使用価値を形成する労働を、単に人間労働力の支出として商品価値に計算されるかぎりでのその同じ労働から区別するということは、比較的容易である。商品または労働を一方の形態において考察する場合には、他方の形態においては考察しないのであるし、また逆の場合には逆である。これらの抽象的な対立物はおのずから互いに分かれるのであって、したがってまた容易に識別されるものである。商品にたいする商品の関係においてのみ存在する価値形態の場合にはそうではない。使用価値または商品体はここでは一つの新しい役割を演ずるのである。それは商品価値の現象形態に、したがってそれ自身の反対物に、なるのである。それと同様に、使用価値のなかに含まれている具体的な労働が、それ自身の反対物に、抽象的人間労働の単なる実現形態に、なる。ここでは、商品の対立的な諸規定が別々に分かれて現われるのではなくて、互いに相手のなかに反射し合っている。こういうことは、一見したところではあまりにも奇妙であるとはいえ、いっそう綿密に熟慮してみれば、必然的であることが判明する。商品は、もともと、一つの二重物、使用価値にして価値、有用労働の生産物にして抽象的な労働凝固体なのである。それゆえ、自分をそのあるがままのものとして表わすためには、商品はその形態を二重化しなければならないのである。使用価値という形態のほうは、商品は生まれつきそれをもっている。それ滴品の現物形態である。価値形態のほうは、商品は他の諸商品との交際においてはじめてそれを得るのである。ところが、商品の価値形態は、それ自身もまたやはり対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な諸形態は、諸商品の使用形態であり、諸商品の現物形態である。ところで、ある商品の、例えばリンネルの、現物形態は、その商品の価値形態の正反対物であるから、その商品は、ある別の現物形態を、ある別の商品の現物形態を、自分の価値形態にしなければならない。その商品は、自分自身にたいして直接にすぐことかできないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分陣にたいして、することかできるのである。その商品は自分の価値を自分自身の身体において、または自分自身の使用価値において、表現することはできないのであるが、しかし、直接的価値定在としての他の使用価値または商品体に関係することはできるのである。その商品は、それ自身のなかに含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間労働の単なる実現形態として関係することはできないが、しかし、他の商品種類に含まれている具

體的な労働にたいしては、それを抽象的な人間労働の単なる実現形態として関係することのできるのである。そうするためにその商品が必要とするのは、ただ、他の商品を自分に等価物として等置する、ということだけである。一商品の使用価値は、一般にただ、それがこのような仕方では他の一商品の価値の現象形態として役だつかぎりにおいてのみ、この他の商品のために存在するのである。……しかし、両商品の価値関係をその質的な側面から見れば、かの単純な価値表現のなかに価値形態の、したがってまた、簡単に言えば貨幣形態の、秘密を発見するのである。〉（前掲50-52頁）

《初版付録》

〈価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の実現形態として認められるのである。たとえば等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の実現形態として認められるだけなのである。この取り違えは不可避である。というのは、労働生産物で表わされている労働が価値形成的であるのは、ただ、その労働が無差別な人間労働であり、したがって、一生産物の価値に対象化されている労働が別種の一生産物の価値に対象化されている労働とまったく区別されないかぎりにおいてのみのことだからである。

この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的なものの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なものが具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。それは同時に価値表現の理解を困難にする。もし私が、ローマ法とドイツ法とは両方とも法である、と言うならば、それは自明なことである。これに反して、もし私が、法というこの抽象物がローマ法においてとドイツ法においてと、すなわち、これらの具体的な法において実現される、と言うならば、その関連は不可解になるのである。〉（前掲142-3頁）

《補足と改訂》

〈裁縫労働の形態でも織布労働の形態でも、人間的労働力が支出される。それゆえ、どちらも人間的労働という一般的な属性をもっており、またそれゆえ、特定の場合、たとえば価値生産の場合には、どちらもただこの観点のもとでのみ考察されうる。こうしたことはすべて、なにも神秘的なことではない。ところが、商品の価値表現においては、事態がねじ曲げられる。たとえば、織布労働が、織布労働としてのその具体的な形態においてではなく、かえって、人間的労働としてのその一般的な属性においてリンネル価値を形成するということを表現するために、織布労働にたいして裁縫労働が、すなわちリンネルの等価物を生産する具体的な労働が、抽象的人間的労働を実現する表現形態が、対置されるのである。こうして、織布労働それ自身は、その抽象的属性の単なる表現に変化するのである。〉（前掲同）

《フランス語版》

〈機織や衣服の仕立という、生産活動の二つの形態は、人間労働力の支出を必要とする。したがって、双方とも、人間労働であるという共通の属性をもっているものであって、たとえば価値の生産が問題であるような若干のばあいにはこの観点からのみ考察されるべきなのだ。そこには神秘的なものはなにもないが、商品の価値表現ではことがあべこべに理解される。たとえば、機織が、機織としてではなく人間労働一般という特性において、リンネルの価値を形成する、ということ表現するために、機織には別の労働、リンネルの等価物である上衣を生産する労働が、人間労働を表示する明示の形態として対置される。仕立屋の労働はこのようにして、それ自身の抽象的特性の単純な表現に変態するわけである。〉（前掲30頁）

【12】パラグラフ

《初版付録》

〈γ 等価形態の第三の特性。私的労働がその反対物の形態たる直接的に社会的な形態における労働になる。

諸労働生産物は、もしそれらが互いに無関係に営まれる独立な諸私的労働の諸生産物でないならば、諸商品にはならないであろう。これらの私的労働の社会的関連が素材的に存在するのは、それらが一つの自然発生的な社会的分業の諸分枝であり、したがってまた、それらの生産物によっていろいろな種類の欲望を充足するかぎりにおいてのことであって、これらの欲望の総体からはやはり社会的な諸欲望の自然発生的な体系が成り立っているのである。しかし、このような、

互いに無関係に営まれる諸私的労働の素材的な関連は、ただ、それらの諸生産物の交換によってのみ、媒介され、したがってまた実現されるのである。それゆえ、私的労働の生産物が社会的な形態をもっているのは、ただ、それが価値形態を、したがってまた他の諸労働生産物との交換可能性の形態を、もっているかぎりにおいてのみのことである。それが直接に社会的な形態をもっているのは、それ自身の物体形態または現物形態が同時に他の商品とのその交換可能性の形態であり、言い換えれば、他の商品にたいして価値形態として認められているかぎりにおいてのことである。しかし、われわれがすで見たように、こういうことがある労働生産物にとって生ずるのは、ただ、それが、それにたいする他の商品の価値関係によって、等価形態にある場合、すなわち、他の商品にたいして等価物の役割を演ずる場合だけである。

等価物が直接的に社会的な形態をもっているのは、それが他の商品との直接的交換可能性の形態をもっているかぎりにおいてのことであり、そして、それがこの直接的交換可能性の形態をもっているのは、それが他の商品にたいして価値体として、したがってまた同等なものとして、認められているかぎりにおいてのことである。だから、等価物に含まれている特定の有用労働もまた、直接的に社会的な形態にある労働として、すなわち、他の商品に含まれている労働との同等性の形態をもっている労働として、認められているのである。裁縫労働というような、一定の、具体的な労働が、たとえばリンネルというような別種の商品に含まれている別種の労働との同等性の形態をもっていることができるのは、ただ、その特定の形態が、別種の諸労働の同等性を、またはそれらの労働における同等なものを、現実形成しているあるものの表現として認められているかぎりにおいてのみのことである。しかし、別種の諸労働が同等であるのは、ただ、それらが人間労働一般、抽象的人間労働、すなわち人間労働力の支出であるかぎりにおいてのみのことである。だから、すでに明らかにしたように、等価物のなかに含まれている特定の具体的な労働は抽象的人間労働の特定の実現形態または現象形態として認められているので、その労働は他の労働との同等性の形態をもっているものであり、したがってまた、すべての他の商品生産労働と同様に私的労働であるのに、しかもなお直接的に社会的な形態にある労働なのである。それだからこそ、その労働は他の商品と直接に交換されうる生産物となって現われるのである。〉（前掲143-6頁）

《補足と改訂》

〈[A]

第三の独自性。等

したがって、私的労働の生産物は、それが価値形態、すなわち等しい物として通用する形態、つまり他の労働生産物との交換可能性をもつかぎりにおいてのみ社会的形態をもつ。ある労働生産物は、それが他の労働生産物の価値表現のなかで等価物の位置を占めるや否や、したがって、身体形態が同時に価値形態、他の商品との交換可能性の形態、すなわち、等しい物として通用する形態であると同時に、直接的社会的形態をもつのである。

われわれはいままで次のことを見てきた。一等価物に含まれている具体的有用な労働種類は、人間的労働一般の実現形態として通用する。そのことによって、その労働種類は、他の労働との同等性のすなわち等しい物として通用するという形態をもつのであり、したがって、それは、他のすべての商品を生産する労働と同じように私的労働であるにもかかわらず、直接社会的形態にある労働なのである。

[B]

しかし、裁縫労働というこの具体的な労働が、区別のない人間的労働の単なる表現として通用することによって、それは、他の労働、すなわちリンネルに含まれている労働との同等性の形態をとるのであり、したがってまた、それは、商品を生産する他のあらゆる労働と同じく私的労働であるにもかかわらず、しかも直接に社会的な形態にある労働なのである。だからこそ、その労働は、他の商品と直接に交換されうる一生産物で自分自身を表わすのである。そして次に――〉（前掲77頁）

《フランス語版》

〈等価形態の第三の特色。等価物を生産する具体的な労働、われわれの例では仕立屋の具体的な労働は、無差別な人間労働の表現として役立つということによってのみ、他の労働、リンネルが包蔵している労働と同等であるという形態をもち、したがって、他のすべての商品生産労働と同じように、私的労働でありながらも直接に社会的な形態のもとにある労働、になるのである。このために、この労働は、他の商品と直接に交換可能な生産物によって実現されるわけである。〉（前掲30頁）

『資本論』を読んでみませんか

谷垣 「総理、普天間基地の、今、腹案があるとおっしゃった。移設先は沖縄県内ですか。県外ですか。国外ですか。」

鳩山 「いくら谷垣総裁といえども、私にそれが県内であるとか、県外であるといわれても、お答えはできない。」

3月31日に行われた党首討論での一幕である。

普天間基地移設問題が討論の中心であった。

鳩山首相は「腹案」があるというが、新聞報道によると、政府がとりまとめようとしている移設案というのは、「県内での移設作業を2段階に分け、当面は名護市などにある米軍キャンプ・シュワブ陸上部への機能移転を進めつつ、うるま市の米軍ホワイトビーチ沖合を最終的な移設先とする。併せて、県外に基地機能を分散し、負担軽減を図る」というものらしい。



しかしこれでは現行案よりはるかに酷い内容である。「少なくとも県外・国外」との選挙公約を裏切るだけでなく、現行案より大規模な基地をさらに沖縄に二つも作るというのだから、あきれる。

それはそうと、そもそも軍隊や基地、あるいは兵器といったものは、経済学的にはどのように

考えたらよいのであろうか。

こうしたものは極めて政治的な問題であり、経済学の対象ではないというなら、あるいはそうかも知れない。しかし自衛隊では何十万という若者の労働力がまったく不生産的に浪費されており、国家の防衛予算は4.8兆円もあり、一般歳出の1割近い規模に膨れ上がっている。軍隊や軍事活動が不生産的な労働力や労働であることはいうまでもないが、しかし基地を作ったり、戦車やミサイルなど兵器を生産する労働はどうであろうか。それらを生産するのは、一般の土木・建設労働者や産業労働者であり、彼らは他の産業の生産的労働者と何の区別もないように見える。兵器の生産も一見すると物質的な生産活動であり、他の社会的な富を生産する労働と何の区別もないように思えるのである。

しかしこうした労働は本源的には決して生産的なものとは言えないし、また価値を形成する労働とも言えないのである。確かに軍需産業の諸企業は、兵器を生産することによって利潤を上げており、その限りでは、資本家の立場からみれば、生産的ではある。しかし本源的には決してそうではないし、価値を形成しているわけではないのである。

それは諸商品の価値とは何か、というもっとも根本的な問題から考えてみれば、明らかになる。商品の交換価値について、マルクスは、クーゲルマンへの手紙（1868.7.11付け）のなかで、次のように述べている。

《どんな国民でも、1年はおろか、2、3週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。どんな子供でも知っていると言えば、次のことにしてもそうです、すなわち、それぞれの欲望の量に応じる生産物の量には、社会的総労働のそれぞれ一定の量が必要だ、ということです。社会的労働をこのように一定の割合に配分することの必要性は、社会的生産の確定された形態によってなくなるものではなく、ただその現われ方を変えるだけのことというのも、自明のところです。自然の諸法則というのではなくすることができないものです。歴史的にさまざまな状態のなかで変わり得るものは、それらの法則が貫徹されていく形態だけなのです。そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換をその特徴としているような社会状態で、この労働の一定の割合での配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にほかならないのです。》（全集32巻454頁）

つまり諸商品の価値というのは、社会の物質代謝を構成する私的な諸生産を社会的に関連づける法則（＝価値法則）に基づくものなのだ。しかし兵器の生産は、決して社会の物質代謝の構成部分をなすわけではない。それは本源的には社会の浪費であり、寄生的要素なのである。だから兵器の生産が例え直接的には物質的であっても、本源的に不生産的であり、価値を形成するとは言えないのである。

このように、何が本源的に生産的かどうかは、価値法則と不可分に関連しているのである。こうした問題も『資本論』をしっかりと学ぶことから理解できるのである。是非、あなたも、一緒に『資本論』を読んでみませんか。

第23回「『資本論』を読む会」の報告

◎散り際が深くない桜

軍歌の「同期の桜」を持ち出すまでもなく、桜花はその散り際の見事さが、昔からよく言われるのですが、今年の桜はくずくずと何時までたっても木々に残っています。

会場の図書館の三階から見えるソメイヨシノも、すでに4月も半ばを過ぎているというのに、かなりのものが残って咲いていました。その健気な姿も称賛に値しないことはありません。

ところで、私たちの読書会も、そろそろ“散り所”ではないかという噂がちらほら聞こえなくもないのですが、今年の桜と同様、しつこく続けようとしているかを見えます。窓際に見える残り花を横目に、今回は、比較的短時間に等価形態の最後まで終えました。その報告をしつこくしておきましょう。

◎最後に展開された等価形態の二つの特色とは？

今回は、等価形態の第三の特色が終わったあとに続くもので、第13パラグラフから始まりました。いつものように、まずパラグラフ全文を紹介し、文節ごとに内容を確認して行きましょう。

〔13〕

《(4)最後に展開された等価形態の二つの特色は、価値形態を他の多くの思考形態や社会形態や自然形態とともにはじめて分析したあの偉大な探究者にさかのぼって見れば、もっと理解しやすいものになる。(9)その人は、アリストテレスである。》

(4)、(9) ここで(最後に展開された等価形態の二つの特色)とは何かが問題になりました。これはいうまでもなく、等価形態の第二の特色(「具体的労働がその反対物である抽象的労働の現象形態になるということ」)と第三の特色(「私的労働がその反対物の形態すなわち直接的社会的形態にある労働になるということ」)のことを指すのだろう、ということが確認されました。そして、この二つの特色は、等価形態の第一の特色(「使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということ」)と較べてみると、共通しているのは、等価形態の特色が価値の実体である人間労働の次元にまで掘り下げて論じられているということです。だからそうした問題がアリストテレスの価値形態の分析を振り返ってみると「もっと理解しやすいものになる」ということではないかということです。

◎『経済学批判』におけるアリストテレスへの言及

また今回問題になるアリストテレスについては、『経済学批判』でも言及されていることが指摘されました。そして学習会の一連の議論のなかでは、『批判』における一文も併せて検討されましたので、まず、『批判』の文章を紹介しておくことにしましょう。

それは「労働時間が金と商品とのあいだの尺度であり、そして金はすべての商品が金で測られるかざりだけで価値の尺度となるものであるから、あたかも貨幣が諸商品を通約可能なものとするように見えるのは、流通過程のたんなる外見にすぎない[*]。むしろ対象化された労働時間としての諸商品の通約性こそが、金を貨幣とするのである。」という本文の中にある[*]印部分の注としてある、次のような一文です。

《[*]アリストテレスは、たしかに商品の交換価値が商品価格の前提となっていることを見ぬいている。「……貨幣があるまえに交換があったことは、明らかである。なぜならば、五台の寝台が一軒の家と交換されようと、また五台の寝台の値うちにあたる貨幣と交換されようと、すこしも区別はないからだ。」他方、商品は価格においてはじめて互いに交換価値の形態をもつのであるから、彼は、商品は貨幣によって通約可能となると考えた。「すべてのものは価格をもたなければならない。なぜなら、そうしてこそともかくも交換がおこなわれ、したがって社会が存在するであろうからだ。貨幣はものさしと同様に、実際にものを通約可能〔*συμμετρα*〕にし、ついでそれらを互いに等置する。なぜなら、交換なしには社会はありえず、しかし同等性なしには交換はありえず、通約性なしには同等性はありえないからである。」彼は、貨幣で測られるこれらのいろいろなものが、まったく通約できない大きさであることを見おとしはしなかった。彼の求めたものは、交換価値としての諸商品の単一性であるが、古代ギリシア人である彼は、これを見いだすことができなかった。彼は、それ自体で通約できないものを、実践的な要求にとって必要なかざりで貨幣によって通約できるものとすることによって、この困難からまぬがれた。「たしかにこのようにさまざまなものが通約できるということは、ほんとうはありえないことだが、けれども実践上の要求におうじてそれがおこなわれるのである。」(アリストテレス『ニコマコス倫理学』第五巻、第八章、ベッカ編、オックスフォード、一八三七年)《全集13巻50-1頁》

つまり『経済学批判』では、アリストテレスの主張は、貨幣があたかも諸商品を通約可能なものにするかのように見える、流通過程の外見に捕らわれた見解の一つとして紹介されているのです。だからアリストテレスの主張は、通約可能になる背景にある尺度としての労働時間を見ていない例として上げられているわけです。ところが『資本論』では、反対にアリストテレスの見解は、通約可能の中に質的同一性を見ている積極的な例として上げられており、ただその質的同一性が何であるかは歴史的制約のなかでアリストテレスには理解できなかったのだ、ということになっているわけです。

◎アリストテレスは単純な価値形態(交換価値)が貨幣形態(商品価格)の前提であることを見抜いている

〔14〕

《(4)アリストテレスがまず第一に明言しているのは、商品の貨幣形態は、ただ、単純な価値形態のいっそう発展した姿、すなわちある商品の価値を任意の他の一商品で表現したもののいっそう発展した姿でしかないということである。(9)というのは、彼は次のように言っているからである。

(9) 「5台の寝台=1軒の家」

("Κλίναι πεντε αντι οικιας")

ということは、

「5台の寝台=これこれの額の貨幣」

("Κλίναι πεντε αντι...οσου αι πεντε κλίναι")

というのと「違わない」と。》

(4)、(0)、(0) ここでは、アリストテレスの〈言っている〉こととして、二つの等式が紹介されていますが、『経済学批判』では先に見たように、アリストテレス自身の言葉として、「……貨幣があるまゝに交換があったことは、明らかである。なぜならば、五台の寝台が一軒の家と交換されようと、また五台の寝台の値うちにあたる貨幣と交換されようと、すこしも区別はないからだ」という一文が紹介されています。

アリストテレスが「5台の寝台=1軒の家」ということは「5台の寝台=これこれの貨幣」というのと「違わない」と述べているように、彼は商品の貨幣形態は、単純な価値形態のいっそう発展した姿だ、つまりある商品の価値を任意の他の一商品で表現したもののいっそう発展した姿でしかないと明言しているわけです。『経済学批判』でも〈アリストテレスは、たしかに商品の交換価値が商品価格の前提となっていることを見ぬいている〉とも指摘されています。つまり〈商品の交換価値〉、すなわち商品の単純な価値形態は、〈商品価格〉、すなわち商品の貨幣形態の〈前提〉であることを見抜いているというのです。

◎アリストテレスの論理

〔15〕

《(4)彼は、さらに、この価値表現がひそんでいる価値関係はまた、家が寝台に質的に等置されることを条件とするということ、そして、これらの感覚的に違った諸物は、このような本質の同等性なしには、通約可能な量として互いに関係することはできないであろうということを見ぬいている。(0)彼は言う、「交換は同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」("ουτ ισοτης μη ουσης συμμετριάς")と。(0)ところが、ここでにわかには彼は立ちどまって、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまう。(2)「しかしこのように種類の違う諸物が通約可能だということ」すなわち、質的に等しいということは、「ほんとうは不可能なのだ」("τη μεν ουν αληθεια αδυνατον")と。(0)このような等置は、ただ、諸物の真の性質には無縁なものでしかありえない、つまり、ただ「実際上の必要のための応急手段」でしかありえない、というのである〔24〕。》

(4)ここでは、マルクスはアリストテレスは、価値関係のなかに価値表現を見いだしており、そしてそのためには、家=寝台という質的等置を条件としていること、だから家や寝台といった感覚的に異なる諸物は、本質的な同質性を持たない限り、通約可能な量として互いに関係することはできないことを見抜いているのだと指摘されています。

ところが、その実例として(0)で紹介されているアリストテレスの文章は、すでに見た『批判』の次の文章の一部(下線部分)です。

「すべてのものは価格をもたなければならない。なぜなら、そうしてこそともかくも交換がおこなわれ、したがって社会が存在するであろうからだ。貨幣はものさしと同様に、実際にものを通約可能(συμμετρία)にし、ついでそれらを互いに等置する。なぜなら、交換なしには社会はありえず、しかし同等性なしには交換はありえず、通約性なしには同等性はありえないからである。」

この一文に対して、マルクスは『批判』では、〈他方、商品は価格においてはじめて互いに交換価値の形態をもつのであるから、彼は、商品は貨幣によって通約可能となると考えた〉と指摘しており、その実例として紹介されているのです。つまりこれはアリストテレスの分析の不十分さ、間違いを指摘しているのです。そもそもすでに紹介したように、『批判』でのアリストテレスへの言及は、〈労働時間が金と商品とのあいだの尺度であり、そして金はすべての商品が金で測られるかぎりだけで価値の尺度となるものであるから、あたかも貨幣が諸商品を通約可能なものとするように見えるのは、流通過程のたんなる外見にすぎない〔*〕。むしろ対象化された労働時間としての諸商品の通約性こそが、金を貨幣とするのである〉という本文中の〔*〕印部分の注として書かれており、アリストテレスの価値形態の分析は、〈あたかも貨幣が諸商品を通約可能なものとするように見える〉〈流通過程のたんなる外見〉に捕らわれた一例なのです。

ところが『資本論』では、通約可能性のなかに〈本質の同等性〉を見抜いている、積極的な見解として紹介されているわけです。

上記の『批判』で紹介されているアリストテレスの主張の論理を詳細に検討してみると、確かにそれは次のようになっていることが分かります。

まずアリストテレスにとっては、社会の存続が第一の前提としてあり、そのためにはとにもかくにも交換が行われなければならないということがあります。そして交換が行われるためには、すべてのものは価格を持たなければならないというわけです。すべての物が価格をもつということは、貨幣で通約可能にされることであり、通約性なしに、同等性はなく、同等性なしには交換はない、と続いています。つまり交換の前提には貨幣によるすべてのものの通約性があり、通約性によってそれらははじめて同等性を持ち、それによって交換が可能になるのだと考えているわけです。確かにこうしたアリストテレスの論理には転倒があります。なぜなら、これだと諸物は貨幣によって通約可能になり、それによってはじめて同等性を持ち、よって交換可能になるのですが、しかし、実際には、すべてのものが同等性を持っているから、貨幣によって通約可能になるのだからです。

しかし、ではアリストテレスはこうした関係を見抜いていないのかということそうではありません。というのは、よくみると、彼は貨幣を「ものさし」と「同様」だと考えているからです。

さまざまな物を「ものさし」で計って互いに較べることができるのは、さまざまな物に「長さ」という質的な同等性があるからであり、だからこそ「ものさし」はさまざまな物を同じ質である長さという属性だけで、比較可能なものに、つまり通約可能なものにすることができるわけです。さまざまな物は「ものさし」によって初めて「長さ」を持つわけではなく、もともと「長さ」という共通の属性を持っているからこそ、「ものさし」でそれらが量的に比較可能な状態に置かれるわけです。アリストテレスはこうした「ものさし」とさまざまな物の通約可能性との関係を明確に掘んでいます。にも関わらず、アリストテレスが諸商品の交換のなかに転倒した関係しか見なかったのは、彼には貨幣によって通約可能になるすべてのものに共通な「本質の同等性」なるものを見いだすことはできなかったからなのです。だから――

(1) 〈ここでにわかには彼は立ちどまって、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまう〉わけです。

また(-)と(8)で紹介されているアリストテレスの一文も、やはり『批判』では次のように紹介されています。

〈「たしかにこのようにさまざまなものが通約できるということは、ほんとうはありえないことだが、けれども実践上の要求におうじてそれがおこなわれるのである。」〉

つまりアリストテレスには、(4)で指摘されているように、感覚的に異なる諸物が貨幣によって通約可能になるためには、それらに〈本質の同等性〉がなければならないことは、見抜いているのですが、しかし諸商品に内在するそうした同等性を見いだすことができず、だからそれらを通約することも「ほんとうはありえない」のだが、ただ〈実践上の要求におうじてそれがおこなわれる〉だけだと考えたわけです。だから、アリストテレスの上記の文章は、流通過程の外見に捕らわれた主張であるかのような展開になっているわけです。

◎「価値概念」とは？

[16]

《(4)つまり、アリストテレスは、彼のそれからさきの分析がどこで挫折したかを、すなわち、それは価値概念がなかったからということ、自分でわれわれに語っているのである。(1)この同等なもの、すなわち、環台の価値表現のなかで家が環台のために表わしている共通な実体は、なんであるか？ (11)そのようなものは「ほんとうは存在しないのだ」とアリストテレスは言う。(2)なぜか？ (8)家が環台にたいして或る同等なものを表わしているのは、この両方のもの、環台と家とのうちにある現実の同等なものを、家が表わしているかぎりでのことである。(9)そしてこの同等なものは――人間労働なのである。》

(4)アリストテレスには、価値概念が無かったことが、彼が価値形態の分析を先に進めることができなかった理由であることを、われわれに語っているわけです。

ここで価値概念という言葉が出てきますが、これは何かということが議論になりました。これは初版本文にある次の一文が参考になると思います。

《決定的に重要なことは、価値形態と価値実態と価値の大きさとの関係を発見するという、すなわち、観念的に表現すれば、価値形態とは価値概念から発していることを論証することだったのである。》(国民文庫版77頁)

つまり価値概念というのは、諸商品の価値はその商品に対象化され結晶した抽象的人間労働であるということ(価値実態)とその大きさが商品に対象化された社会的に必要な労働時間によって規定される(価値の大きさ)ということです。

(11)、(1) 環台の価値を家によって表現されているなかでの共通の実態は、何か、ということに、アリストテレスはそんなものは本当は存在しないと云います。

(2)、(8)、(9) 家が環台に対して表す同等なもの、両者に共通なものというのは、人間労働だからです。それがアリストテレスには分からなかったわけです。

◎「価値表現の秘密」とは？

[17]

《(4)しかし、商品価値の形態では、すべての労働が同等な人間労働として、したがって同等と認められるものとして表現されているということ、アリストテレスは価値形態そのものから読みとることができなかったのであって、それは、ギリシアの社会が奴隷労働を基礎とし、したがって人間やその労働力の不平等を自然的基礎としていたからである。(1)価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。(11)しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間の相互の関係が支配的社会的関係であるような社会において、はじめて可能なのである。(2)アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちの一つの同等性関係を見ているということのうちに、光り輝いている。(8)ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」なんであるのか、を彼が見つけだすことを妨げているだけである。》

(4)アリストテレスが商品の価値形態のなかに、共通の実態を見いだすことができなかったのは、ギリシアの社会が奴隷労働を基礎としていたからです。つまり人間や労働力の不平等を自然的基礎にしていたからです。

(11)すべての人間が平等であり、同等であるという観念が民衆の先入見として強固になったときに、はじめて人間労働一般やすべての労働の同等性や同等な妥当性という、価値表現の秘密は解きあかれ、その謎が解明され得るのです。

ここで「価値表現の秘密」という言葉が出てきますが、これは何かが問題になりました。そしてそれと関連して、そもそもこの(11)の一文はどのように解釈したらよいか問題になり、いろいろ議論した結果、最終的には、次のように理解すべきだろうということになりました。

まずこの文章は、〈価値表現の秘密〉で一旦区切り、それを〈すなわち〉で受け、〈人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は〉と続いています。だから〈価値表現の秘密〉というのは〈人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性〉ということだろうということになりました。そして、それが主語になって、〈人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである〉と続いていると解釈できるということになりました。

(11)しかしすべての人間が平等であり、同等であるというような観念は、商品形態が労働生産物の一般的な形態になり、すべての人々が商品所有者として互いに人格として認め合う社会、つまり資本主義社会においてこそ、初めて可能なのです。

(c) アリストテレスの天才は、彼が諸商品の価値表現のなかに一つの質的同等性を見いだしているところにあると言えます。

(d) ただ彼が生きた奴隷制社会という歴史的な限界が、彼が諸商品の同等性を見いだすことを不可能にしたのであり、だから彼はそうしたものは「ほんとうは」あり得ないのだが、社会が存続する上での実践上における必要がそれを可能にしているのだと、便宜的に解釈したのです。

さて、このアリストテレスの例は、等価形態の第二と第三の特色を理解しやすくするものと説明されているのですが、もう一つ第二の特色と第三の特色との関連が、よく分かりません。もちろん、人間労働一般としての同等性、同等な妥当性がこれらの特色に関連しているといえ言えますが、しかし第二の特色（〈具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になるということ〉）とや第三の特色（〈私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になるということ〉）のそれぞれの内容が、このアリストテレスの例を見たあと〈もっと理解しやすいものになったかという、なかなかそのようには思えません。しかしそれは私だけかも知れません。

【付属資料】

『経済学批判』からの紹介はすでに行ったので、ここでは省きます。

● [13] パラグラフに関連して

《初版付録》

《ここで最後に述べた等価形態の二つの特性は、われわれがあの偉大な探求者までさかのぼってみるとき、さらにいっそう理解しやすくなる。その人は、価値形態をも、あのように多くの思考形態や社会形態や自然形態と同様に、はじめて分析し、しかもたいていは彼の現代の後継者たち以上にそれに成功しているのである。アリストテレスこそまさにその人なのである。》（国民文庫版146頁）

《フランス語版》

《最後に検討した等価形態の二つの特色は、価値形態や他のあれほど多くの諸形態――思惟形態であろうと社会形態であろうと自然形態であろうと――を最初に分析した偉大な思想家にまでさかのぼってみれば、さらにいっそう把握しやすくなる。その思想家はアリストテレスである。》（江夏他訳31頁）

● [14]

《初版付録》

《アリストテレスがまず第一に明言しているのは、商品の貨幣形態は、ただ、単純な価値形態のいっそう発展した姿、すなわち、ある商品の価値をなんらかの任意の他の一商品で表現したもののいっそう発展した姿でしかないということである。なぜならば、彼は次のように言っているからである。

〈5台の寝台=1軒の家〉
("Κλίβαι πεντε αντι οικιας")

というのは、

〈5台の寝台=これこれの額の貨幣〉
("Κλίβαι πεντε αντι...οσου αι πεντε κλίβαι")

というのと「違わない」と。》（前掲146頁）

《フランス語版》

《アリストテレスはまず、商品の貨幣形態が、単純な価値形態の、すなわち、ある商品の価値をなんらかの他商品において表現したものの発展した姿にほかならない、ということをはっきり表現している。彼はこう言っているからである。

「5台の寝台=1軒の家〈Κλίβαι πεντε αντι οικιας〉」

「5台の寝台=これこれの額の貨幣〈Κλίβαι πεντε αντι...οσου αι πεντε κλίβαι〉」

と「ちがいが無い」、と。》（前掲31頁）

● [15]

《初版付録》

《彼は、さらに、この価値表現がひそんでいる価値関係はまた、家が寝台に質的に等置されることを条件とする、そして、これらの感覚的に違った諸物は、このような本質の同等性なしには、通約可能な大きさとして互いに関係することはできないであろう、ということを見抜いている。彼は言う、「交換は同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」("ουτ ισοτης μη ουσης συμμετρας")と。ところが、ここでにわかには彼は立ちどまって、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまう。「しかし、このように種類の違う諸物が通約可能だということ」、すなわち、質的に同じだということとは、「ほんとうは不可能なのだ」("τη μεν ουν αληθεια αδυνατου")と。このような等置は、ただ、諸物の真の性質には無縁なものでしかありえない、つまり、ただ「実際上の必要のための応急手段」でしかありえない、というのである。》（前掲146-7頁）

《フランス語版》

《彼はさらに次のことを理解している。すなわち、この価値表現を含んでいる価値関係のほうでも、家が質の観点からは寝台に等しいと宣言されていること、また、感覚的に異なったこれらの物体は、このような本質の同等性がなければ通約可能な量として相互に比較できないことを前提しているのである、と。彼は言う。「交換は同等性なしには生じえず、同等性も通約可能性なしには生じえない」(οὐτ ἰσοτιῆς μὴ οὐσιῆς συμμετρίας)》、と。ところが彼はここで価値形態の分析をためらって断念する。彼はつけ加えて言う。「これほどにちがった物が相互に通約可能であること」、すなわち、質的に等しいということは「実際は不可能である(τῆ μὲν οὐ ἰσότητι ἀδύνατον)」。これらの物の同等性を肯定することは、これらの物の本性に反することではかありえない、「人は実際上の必要のためにこの同等性を頼りにしているだけである」、と。》(前掲31頁)

● [16]

《初版付録》

《つまり、アリストテレスは、彼のそれからさきの分析がどこで挫折したかを、すなわち、それは価値概念が欠けていたからだということ、自分でわれわれに語っているのである。この同等なもの、すなわち、寝台の価値表現において家が寝台のために表わしている共通の実体とは、なになのだらうか？ そのようなものは「ほんとうは存在しえないのだ」とアリストテレスは言う。なぜか？ 家が寝台にたいしてある同等なものを表わしているのは、この両方のもの、寝台と家とのうちにある現実に同等なものを、家が表わしているかぎりでのことである。そして、この同等なものは――人間労働なのである。》(前掲147頁)

《フランス語版》

《したがって、アリストテレス自身、自分の分析がどこで座礁したか――価値概念の不十分さで座礁したか――を、われわれに語ってくれている。「なんだかわからない」同等のもの、すなわち、寝台の価値表現のなかで家が寝台にたいして表わしている共通な実体とは、なにか？ 「そんな物は実際にはありえない」、とアリストテレスは言う。どうしてなのだ？ 家が寝台にたいして同等なるものを表わすのは、家が、この双方のなかにある現実に同等のものを表わすかぎりでのことなのだ。この現実に同等のものとは、いったいなにか？ 人間労働である。》(前掲31-32頁)

● [17]

《初版付録》

《しかし、諸商品価値の形態においてはすべての労働が同等な人間労働として、したがって同等と認められるものとして、表現されているということを、アリストテレスは諸商品の価値形態から読み取ることができなかったのであって、それは、ギリシアの社会が奴隷労働にもとづいており、したがって人間および彼らの労働の不平等性を自然的基礎としていたからである。価値表現の秘密、すなわち、人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりにおいての、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときには、はじめてその謎を解かれることができるのである。しかし、そういうことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた諸商品所有者としての人間たち相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会において、はじめて可能なのである。アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちの一つの同等性関係を発見しているということのうちに、光り輝いている。ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」なんであるのか、を彼が見つけたことを妨げているだけである。》(前掲148頁)

《フランス語版》

《アリストテレスは、商品の価値形態のうちに、すべての労働がそこでは無差別な、したがって同等な人間労働として表現されていることを、読みとれなかったが、彼をそうさせたのは、ギリシアの社会が奴隷労働にもとづいており、人間やその労働力の不平等性を自然的基礎にしていたからである。価値表現の秘密、すなわち、すべての労働は、それが人間労働であるがためにまたそうであるかぎり同等であり等価である、ということを読み解くことができるのは、ただ、人間の平等という概念がすでに民衆の先入観念として破りがたく堅固になったときだけである。ところが、このことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態になった社会、したがって、商品生産者や商品交換者としての人間相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会で、はじめて生ずるのである。アリストテレスの天才を示すもの、それは、彼が商品の価値表現のうちに同等性関係を発見したことである。ただ、彼の生活していた社会が特殊な状態であるために、この関係の真の内容がなんであるかを見出すことが妨げられていたのである。》(前掲32頁)

『資本論』を読んでみませんか

アイスランド火山噴火による欧州連合（EU）の航空網の混乱は、なんとか収束に向かいつつあるようだが、改めて今日における航空運輸機関の重要性を私たちに再認識させるものとなった。



EUの執行機関、欧州委員会は、今回の火山灰飛散による航空業界の損失が、欧州全体で総額15億～25億ユーロ（約1900億～3100億円）にのぼると推計、10万便以上が欠航し、1000万人以上の旅行者が滞在先で足止めされたという。



遠くヨーロッパの空の話とはいえ、欧州との空の物流網の停止は、日本の産業界にもさまざまな影響を与えた。

例えば、欧州向けの半導体用感光性樹脂、液晶テレビ用偏光フィルムの出荷停止（住友化学）、福岡、神奈川県2工場の操業を停止（日産自動車）、欧州向けノートパソコンの出荷停止（富士通）、15～19日までに団体ツアー客1914人がキャンセル（JTB）、全70店でノルウェー産サーモンを冷凍物に変更（回転すし「すし銚子丸」）、オランダ産のアマリリスやヒヤシンスの切り花の出荷停止（大田花き）等々という具合である。

ところで航空機や鉄道・バス、船舶など運輸・交通機関は経済学的にはどのように考えたらよいのであろうか。これらは人や物を運送するものの、他の産業部門のように、物質的な生産物を生み出しているとは思えない。それらは果たして物質的な生産部門と考えるべきなのかどうかである。

マルクスは交通・運輸機関を「社会的生産過程の一般的な条件」（『資本論』第1部全集23a501頁）だとする一方、生産された使用価値は、ただその消費によってのみ実現されるが、そのためには消費されるまでの場所変換が必要になる。だからこの場所変換を行う運輸業は「追加的生産過程」（第2部全集版183頁）なのだと規定している。また次のようにも述べている。

〈輸送業が販売するものは、場所の変更そのものである。生み出される有用効果は、輸送過程すなわち輸送業の生産過程と不可分に結び付けられている。人間と商品は輸送手段と一緒に旅をする。そして、輸送手段の旅、輸送手段の場所的運動が、まさに輸送手段の作用によって生じた生産過程である。その有用効果は、生産過程の期間中のみ消費されうる。その有用効果は、この過程とは異なる使用物――すなわち、その生産後にはじめて取り引き物品として機能し、商品として流通する使用物――としては存在しない。しかし、この有用効果の交換価値は、他のどの商品の交換価値とも同じく、その有用効果〔の生産〕に消費された生産諸要素（労働力および生産諸手段）の価値、プラス、輸送業に就業している労働者たちの剰余労働が創造した剰余価値、によって規定されている。この有用効果は、その消費とともに消え失せる。それが生産的に消費されるならば、したがって、それ自身が輸送中の商品の一生産段階であるならば、その価値は、追加価値としてその商品そのものに移転される。〉（『資本論』第2部全集版69頁）

だから運輸業は他の物質的生産部門と同じ部門を構成するのであり、他の生産部門と同様に価値を生産しているのである。

このように『資本論』はその時々にかかるさまざまな問題を理論的・科学的に考える指針を与えてくれる。あなたも、是非、一緒に『資本論』を読んでみませんか。

第24回「『資本論』を読む会」の報告

◎まぶしい新緑

第24回「『資本論』を読む会」が開催された16日は、さわやかな五月晴れに恵まれ、会場の堺市立南図書館の3階の窓から見る新緑は色鮮やかでした。

この図書館は、大阪の南の丘陵に位置する広大な泉北ニュータウンの中心駅ともいべき泉が丘駅のすぐ近くにあり、交通の便のよいところにある図書館ですが、その裏には開発される以前の小高い山が一部そのまま残っており、それが教室の窓から一望できます。一言で新緑と言っても、その色合いは千差万別であり、とても言語に尽くすことはできません。ショッキンググリーンとでも表現するしかないようなものもあれば、茶褐色に近い濃緑色をまるでフリルのようにクリーム色で縁取ったものもあつたりします。いくら眺めても見飽きることはありません。

窓からの風景をながながと書いたのは、ピースさんが少し開始時間に遅れてきたので、その間、窓から外を眺める時間がたっぷりとれたからです。今回から、新しい項目「4 単純な価値形態の全体」に入りましたが、色々と意見が出たためか、進んだのは、なんと、たったの二つのパラグラフだけでした。しかしその議論は充実しており、報告の内容も決して見劣りするものではありません。それでは、さっそく、その報告に移しましょう。

◎「4 単純な価値形態の全体」について

まず、最初に、ピースさんから、今回から始める新しい項目について、簡単にそれまでの等価形態までの展開との関連などが説明され、亀仙人からも一定の補足がありました。この項目の位置づけとして、次のような確認がされたといえます。

まず、この〈単純な価値形態の全体〉というのは、これまで〈A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態〉として、〈x量の商品A=y量の商品B または、x量の商品Aはy量の商品Bに値する。(20エレのリンネル=1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する)〉という等式を例に上げ、まず〈一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態〉で、〈単純な価値形態〉には、相対的価値形態と等価形態が価値表現の両極として含まれていることが確認され、そのあと〈二 相対的価値形態〉と〈三 等価形態〉とにわけて、それぞれを個別に考察してきたわけです。

だから今回の新しい項目である〈単純な価値形態の全体〉というのは、それまで個別に考察してきたそれぞれのもの(相対的価値形態と等価形態)を総合して、全体として考察するということです。だからこの項目は〈A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態〉の最後に位置しているわけです。

だからまた、この「4 単純な価値形態の全体」は、項目「A」で考察された「単純な価値形態」を一つの自立した主体として捉えかえし、その直接的な考察(【1】パラグラフ)、学史的考察(【2】パラグラフ)、総括的な考察(【3】パラグラフ)、歴史的考察(【4】パラグラフ)、そして歴史的考察から不可避に生じる、次の発展(「B 全体的な、または展開された価値形態」)への「移行」(【5】～【7】パラグラフ)が論じられることになるわけです。

こうした確認と見通しのもとに、第1パラグラフから具体的に検討を開始しました。

◎「単純な価値形態の全体」の直接的な考察

今回も、これまでの通り、最初に『資本論』の本文を紹介し、それを文節ごとに検討していくという形で紹介したいと思います。また関連する資料は【付属資料】として、一番最後に別途まとめて紹介することにします。では最初は、第1パラグラフの本文です。

【1】

〈(1)一商品の単純な価値形態は、種類を異にする一商品に対するその商品の価値関係のうちに、あるいはそれとの交換関係のうちに、含まれている。(2)商品Aの価値は、質的には、商品Bの商品Aとの直接的交換可能性によって表現される。(3)それは、量的には、一定量の商品Bの、与えられた量の商品Aとの交換可能性によって表現される。(4)言い換えれば、一商品の価値は、「交換価値」としてのその表示によって、独立に表現されている。(5)この章のはじめでは、普通の流儀にしたがって、商品は使用価値および交換価値であると言ったが、これは、厳密に言えば、誤りであった。(6)商品は、使用価値または使用対象、および「価値」である。(7)商品は、その価値がその現物形態とは異なる一つの独特な現象形態、交換価値という現象形態をとるやいなや、あるがままのこのような二重物として自己を表すが、商品は、孤立的に考察されたのではこの形態を決してとらず、つねにただ、第二の、種類を異にする商品との価値関係または交換関係の中でのみ、この形態をとるのである。(8)もっとも、このことを心得ておきさえすれば、先の言い方も有害ではなく、簡約に役立つ。〉

このパラグラフでは、「単純な価値形態の全体」の直接的な考察が行われます。ここではわれわれは最初の「単純な価値形態」の直接的な表象に戻ります。しかし「A」の最初にわれわれに与えられた直接的な表象は、まだその内的構造はまったくわれわれには分からないものでしたが、今では、われわれはその内的な構造を詳しく分析して辿ってきた結果、それらは論理的に透けて見えています。つまり「単純な価値形態の全体」の論理的な構造が透けて見えているような、「全体」としての最初の直接的な表象にもどっているわけです。だから直接的な考察といっても、その内部構造が何も分からない状態のものとは異なり、それらが透けて見えている状態での考察なのです。だから直接的なものが、その内的なものとのように関連し合い、内的なものごとのようにして自らを発現して直接的なものとして現われているのかというように、直接的なものごとがそのようなものとして発現してきた内的なものとの論理的・必然的な関連において、再び

全体としての直接的なものを説明するというような考察になるわけです。まず、このような観点を踏まえて、このパラグラフを各文節ごとに詳しく検討して行くことにしましょう。

(i) われわれが、これまで考察してきたように、一つの商品の単純な価値形態は、別の種類の商品に対する、その商品の価値関係のうちに、あるいは交換関係のうちに、含まれていました。

さて、ここに「価値関係」と「交換関係」という言葉が出てきます。この二つは同じと考えてよいのか、違うならどのように違うのか、ということが問題になりました。

まず「交換関係」については、第1節の価値の分析の最初のあたりで次のように出てきました。

さらに、二つの商品、たとえば小麦と鉄をとってみよう。それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、与えられた量の小麦がどれだけの量の鉄に等置されるという一つの等式で表わすことができる。たとえば1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄 というように。この等式はなにを意味しているのか？ 同じ大きさの一つの共通物が、二つの違った物のうちに、すなわちクォーターの小麦のなかにも a ツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。〉（下線は引用者）

だから交換関係というのは、価値と使用価値の統一物である商品が互いに交換される関係、あるいは割合を意味します。それらが交換されるということは、二つの商品の、価値が量的に等しいだけでなく、使用価値が異なるからであり（同じであれば交換する意味がありません）、だから交換関係という場合は、商品を価値とともに使用価値において見ていることが分かります。

次に「価値関係」ですが、これは初版付録の相対的価値形態の考察の小項目をみると分かります。

〈(2) 相対的価値形態

a 同源性関係

b 価値関係 〉

先の第1節からの引用文では、二つの商品の交換関係のなかに、同源性の関係を見ていました。つまり引用文の例でいうと、「小麦＝鉄」の関係がそこにあるわけです。この二つの異なる使用価値が同じものであるのは、それらのなかに同じものがあるからです。そしてその同じものというのがすなわち価値なのです。つまり両者は価値であるかぎりにおいて同じなのです。だから小麦が自分と同じものとしての鉄に関係するという、あるいは、鉄が同じ実体を持つものとして小麦に等置されるということは、鉄がこの関係において価値として認められている、ということ表現しているわけです。鉄は小麦に等置されますが、それもやはり小麦が価値であるかぎりにおいてのことです。だから、二商品の同源性関係というのは、「価値関係」なのだ、と初版付録では書いています。

だから「交換関係」というのは、二商品が互いに交換される関係や割合のことですが、二つの使用価値が異なる商品が交換されるということは、それらの異なる商品が互いに等しい関係を持っているということ、「同源性関係」にあるということ。そして二つの商品が同等であるというのは、それらが価値である限りにおいて言えることです。だから二つの商品の「同源性関係」とは「価値関係」なのです。だから「価値関係」というのは、「交換関係」におかれた二つの商品が、価値という一面においては互いに等しいのだと関係しあうものだけということができます。そしてこの「価値関係」のなかに一つの商品の「価値表現」が潜んでいたわけです。ただし、二商品の共通な価値属性が、それらを互いに価値関係のなかに置くのであって、二商品の交換関係、あるいは価値関係が、両者に共通な価値属性を持たせるのではないということが肝心です。

そして少し先走って論じるなら、この社会を労働によって支える生産者たちが彼らの労働によって結びつる社会的関係が、これらの物の、すなわち諸労働生産物の、「価値関係」として現われているということです。だから「価値関係」は、その背後に隠されている一つの社会的な関係の現象形態でしかないということです。

(ii) 次は単純な価値形態の全体を、質的な面と量的な面から考察します。まず質的な面では、商品Aの価値は、商品Bの商品Aとの直接的な交換可能性によって表現されています。つまり価値関係の内実は、商品Aの価値が商品Bに対して、商品Bは自分と直接交換可能だと一方的に宣言し働きかけることによって表されているわけです。

(iii) 次は量的な側面です。商品Aの価値の大きさは、一定量の商品Bが、ある与えられた量の商品Aとの交換可能性によって表現されています。つまり商品Bの一定の使用価値量によって表されています。

ここで量的な考察では質的な場合とは異なり、「交換可能性」が言われるだけで、「直接的交換可能性」とはなっていないのはどうしてなのかという疑問が出されました。それは「直接的」に交換可能かどうかという問題は量の問題ではなく、等価形態の質の問題だからではないか、という意見が出されました。実際、「3 等価形態」の第1パラグラフでは等価形態の質的な考察がなされていましたが、そこではくしたがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である」と言われていたのでした。それに対して、等価形態の量的考察が行われている第2・3パラグラフでは、そうした文言は出てきません。つまり量的には、そうした直接交換可能性という質的なものを前提して論じられているから、ただ「交換可能性」でよいのではないかということです。

もちろん、これはこれでよいのですが、もう少し内容に踏み込んで考えてみましょう。

「直接的交換可能性」の「直接的」とはどういうことを考えてみましょう。これは文字通り「直接」に交換可能ということです。商品はそのままでは決して直接には交換可能ではありません。というのは商品の直接的な存在はその自然形態であり、使用価値だからです。使用価値の場合は、偶然、交換相手がそれを必要としていた場合は交換可能ですが、そうでなければ、使用価値のままでは直接には交換できません。だから商品は交換可能となるためには、一旦、直接に交換可能なもの（貨幣）に転換する必要があるのです。

つまり等価物が直接に交換可能なのは、等価物の使用価値そのもの、その自然形態が価値そのものに、価値が具体的な形態をとって現われたものとして通用しているかにほかなりません。だから等価物の場合は、価値の具体物として認め

られるその使用価値のままで、それこそ「直接」に交換可能なのです。それ自身が価値そのものですから、あらゆる商品の価値に等置されるからです。しかもここで商品Bが商品Aに対して直接的交換可能性を持っているというのは、商品Bの使用価値が商品Aの価値が具体的な形で現われたものだからなのです。つまり商品Bの使用価値によって商品Aの価値が表されているからなのです。だからマルクスはここで〈商品Aの価値は、質的には、商品Bの商品Aとの直接的交換可能性によって表現される〉と述べているのだと思います。ここで〈質的には〉と述べているのは、ここでは商品Aの価値の量ではなく、価値そのものが如何に表現されるかということだけが問題になっているからです。

それに対して、量的には商品Aと商品Bが交換されるということは、商品Aの価値の大きさと商品Bの価値の大きさが同じであるからにはなりません。この両方の価値の大きさというのはいずれも両方の商品に内在的なものであって、だからここでは直接性は何も問題にはならないのです。ただ商品Aの価値の大きさは、それと交換される商品Bの使用価値の量（例えば上着ならその1着、2着というその使用価値量）によって表現されているのです。だから商品Aの価値量は、ある与えられた内在的な量なのですが（だからそれは当然目に見えません）、それはそれと交換可能な商品Bの使用価値量によって目に見える形で表現されているのです。だからマルクスは〈（商品Aの価値は）量的には、一定量の商品Bの、与えられた量の商品Aとの交換可能性によって表現される〉と述べているのだと思います。つまり商品Aの価値は量的には、商品Bの使用価値の一定量との交換されるということによって、その価値量そのものは表現されているので、「直接的」かどうかはここでは問われていないわけです。「直接的」というのはあくまでも交換可能性の「質的」側面ということができます。

(二) 一商品の価値が質的にも量的にも、どのように表現されているかを確認して言えることは、一商品の価値は、「交換価値」として表示されることによって、初めて独立に表現されているのだということです。そもそも私たちは第1節で商品の価値を探るために、次のように考察を開始しました。

〈交換価値は、まず第一に、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。〉

これが交換価値をもっとも直接的に表象として捉えたものでした。さらに私たちの分析は次のように進みました。

〈ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、x量の靴墨とか、y量の絹とか、z量の金とか、要するにいろいろに違った割合の諸商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値をもっているのだから、ただ一つの交換価値をもっているのではない。〉

だからこうしたさまざまな交換価値こそ、1クォーターの小麦の価値を表すものだったのです。だからこの第1節でも、次のような考察がなされていました。

〈およそ交換価値は、ただ、それとは区別されるある内実の表現様式、「現象形態」でしかありえない〉。

そして今では私たちは、こうしたことは、「ある内実」、つまり「価値」の表現様式であり、現象形態であることをすでに知っているわけです。

つまり20エレのリンネルの価値は、それと直接に交換可能である別の商品、上着1着によって表されているわけです。上着1着というのは、20エレのリンネルの「交換価値」なのです。それは20エレのリンネルの価値が、リンネル自身とは区別されて、上着1着として独立して表現されているものなのです。

ここで〈独立に〉というのは、どういうことが問題になりましたが、すでに上記の説明でお分かりだと思います。すなわち一商品の価値は、その商品のなかに使用価値と統一された形で内在的に存在しています。だからその限りでは価値そのものは、独立した定定はないわけです。しかし交換価値はそうした内在的な価値が、その商品の使用価値とは区別された形で、すなわち〈独立に〉、別の異種の商品の姿を借りて存在し、表されていることなのです。

(三) この章のはじめでは、普通の流儀にしたがって、商品は使用価値および交換価値であると言いましたが、これは厳密にいうと間違いでした。

ここで「この章のはじめ」というのは、どこを指しているのか、ということが問題になりました。「この章」というのは、当然「第1章 商品」を指しています。では「商品は使用価値および交換価値である」という文言は、どこで言われたのでしょうか。それは第2節の冒頭の次の一文を指すのではないかと思います。

〈最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値および交換価値として、現われた〉

また『経済学批判』では、「第1章 商品」の冒頭のパラグラフに次のように出てきます。

〈一見したところでは、ブルジョアの富は一つの巨大な商品の集まりとして現われ、一つ一つの商品はその富の基本的定定として現われる。ところがそれぞれの商品は、使用価値と交換価値という二重の観点のもとに自己をあらわしている。〉（国民文庫版23頁）

しかしこうした言い方は厳密にいうと間違いだったということです。

(A) というのは、厳密にいうと、商品は使用価値または使用対象であるとともに「価値」であるというべきだからです。

初版付録の「価値形態」では、冒頭、次のように言われています。

〈商品の分析は、商品は一つの二重物、使用価値にして価値である、ということを示した。〉（国民文庫版128頁）

また『資本論』の第3節の冒頭でも次のように言われていました。

〈それらが商品であるのは、ただ、それらが二重なものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからである。〉

(ト) 商品はそれを孤立的に見ているだけでは、こうした二重物として見えません。というのは商品の直接目に見えるものはその現物形態であり、価値は目に見えないからです。だから商品の価値が、商品自身の現物形態と異なる別の現物形態として現われて、初めて商品は二重物として見えることになります。その商品の価値が目に見える現物形態をとったものが、すなわち「交換価値」なのです。だから商品は、こうした二重物として現われるためには、常に、第二の種類を異にする商品との価値関係または交換関係のなかに置かれる必要があるのです。

第3節の最初でも次のように言われていました。

〈商品は、ただそれが二重形態、すなわち現物形態と価値形態とをもつかぎりでのみ、商品として現われるのであり、言い換えれば商品という形態をもつのである。〉

だからこうした商品の二重形態は、常に別の商品との価値関係または交換関係をとることによって示されるわけです。

(フ) もっとも、こうしたことを心得ておけば、先の言い方、つまり「商品は使用価値および交換価値である」という言い方も、有書ではなく、簡約に役立つでしょう。

先の第2節冒頭の一文や『経済学批判』の冒頭の一文をみると、「われわれにたいして・・・現われた」とか「自己をあらわしている」というようになっていて、厳密には、必ずしも「商品は使用価値および交換価値である」という文言になっているわけではありません。つまりそれだけ慎重に書かれているわけです。しかし例え「現われた」とか「現わしている」といっても、一つの商品を孤立的に見ている限りでは、そうした二重物としては「現われない」わけで、その意味では、二つの言い方もやはり厳密にいうと正しいとはいえません。しかし常に商品が二つの商品の関係のなかで二重物として現われるということが分かっているなら、こうした言い方も意味があるといえるわけです。リンネルの交換価値は、確かにリンネルとは異なる別の商品、上着の現物形態の一定量として表されますが、しかしそれもリンネル自身の価値の形態であることに違いはないのですから、だからこういう意味で、商品は使用価値および交換価値であるといえるわけです。

◎学説史的考察

次は第2パラグラフです。ただし注も一緒に検討します。またこのパラグラフで出てくる幾つかの経済学者やそれに関連する用語については、それぞれ『資本論辞典』などの説明を付属資料として紹介しますので、詳しくはそれらを参照するようにしてください。

[2]

〈(イ)われわれの分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現が商品価値の性質から生じるのであり、逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれらの表現様式から生じるのではない。(II)ところが、この逆の考え方が、重商主義者たち、およびその近代的な蒸しかえし屋であるフェリエ、ガニルなど(22)の妄想であると共に、彼らとは正反対の論者である近代自由貿易外交員、たとえばバステアとその一派の妄想でもある。(I)重商主義者たちは、価値表現の質的な側面に、したがって貨幣をその完成姿態とする等価形態に重きをおき、これに対して、自分の商品をどんな価格でもたたく売らなければならない近代自由貿易商人たちは、相対的価値形態の量的側面に重きをおく。(ニ)その結果、彼らにとっては、商品の価値も価値の大きさも交換関係による表現のうち以外には存在せず、したがって、ただ日々の物価表のうちのみ存在する。(ホ)スコットランド人マクラウドは、ロンバード街〔ロンドンの金融街〕の混乱をさわめた諸表現をできる限り学問的に飾り立てるとして彼の職能において、迷信的な重商主義者たちと啓蒙された自由貿易商人たちとの見事な総合をなしている。

(22) 第2版への注。F・L・A・フェリエ(“関税副検査官 **sous-inspecteur des douanes**”)『商業との関係から見た政府について』、パリ、一八〇五年、および、シャルル・ガニル『経済学の諸体系について』、第二版、パリ、一八二一年。〉

このパラグラフは初版本文や初版付録にはありません。第2版で初めて登場したものです(実際には、第2版の準備のために書かれた『補足と改訂』で初めて出てきます)。第2版で初めて登場する事情を、山内清氏は次のように述べています。

〈初版発行後に、マルクスは、ユーリウス・ファウハーが彼の発行する『国民経済・文化史四季報』第20巻に、匿名者のマルクスをバステア追隨者にみだてた書評をのせているのに出くわした。英国でそれをクーゲルマンから受取ったマルクスは、クーゲルマンに次のような手紙を出している。「ファウハーには同意の手紙をやらさないで下さい。そうでないと、この小僧は自分をあまりにもえらく思っているでしょう。彼が到達したところは、第2版が出るころにでもなければ私が価値の大きさに関する適当な箇所ですべてバステアに二つ三つ痛棒をくわすだろう、ということに尽きています。」(1868.7.11付)。またマルクスは、同日付のエンゲルスあての手紙でもこの点に言及し、バステア流の価値論が全くの俗流的な労働節約説にあることを指摘している。「さらにまたドイツのバステア追隨者たちは知らないことだが――商品の価値を規定する労働は、その商品に費やされる労働ではなくて、その商品が買手のために省いてやる労働だ、というこの惨めな言い方(交換と労働との関連についてとりとめのないことを言う子供くさい文句)は、そのほかの、彼の葡萄酒販売買的な諸範疇のどれか一つと同様に、バステアの発明品ではないのだ。」

さらにマルクスは、1868年の『私のF・バステア剽窃』という論文で逆にバステアの剽窃を暴露し、そしてここで決定的な痛棒を加えたのである。〉(『資本論商品章詳注』87-8頁)。

マルクスが、このパラグラフを加えた背景に、こうした事情があったことはそのとおりかも知れません。しかしこのパラグラフの内容を検討すると、確かにバステアにも言及していますが、しかしそれだけが問題になっているわけではなく、バステアに「痛棒をくわす」ことが中心になっているようにも思われたいです。それよりも私たちはより重要な事実に気づきます。つまりこの「4 単純な価値形態の全体」という項目そのものが、初版本文や同付録にはないものなのです。例えば初版付録では、〈γ 等価形態の第三の特性。私的労働がその反対物たる直接的に社会的な形態における労働になる。〉のあとに続くものは、〈δ 等価形態の第四の特性。商品形態の呪物崇拜は等価形態においては相対的価値形態におけるよりもいっそう顕著である。〉という、第2版では「第4節 商品の物神的性格とその秘密」に移されたと思えるような内容の項目が続き、そのあと第2版の「単純な価値形態の全体」と内容的に一致するものが(四)～(九)の6つの項目にわけて論じられているだけなのです。

つまり単純な価値形態における価値表現の両極である相対的価値形態と等価形態が、それぞれ個別に考察されたあとに、それらが総合されて、再度、「単純な価値形態の全体」が捉え返されるというような構成は、第2版で初めて採用されたものなのです（もちろん、実際には、『補足と改訂』ですでにこの項目は見られます）。だから「単純な価値形態の全体」が自立した主体としてあらためて捉え返される項目が新たに設定されることによって、初めてその学説的な考察も本文のなかに挿入されるようになったと考える方が、このパラグラフが第2版で初めて挿入された理由として、より適切ではないかと思えます。バステアへの「痛棒」はむしろその「ついで」といえるのではないのでしょうか。

とりあえず、そうしたことを確認して、このパラグラフの内容を文節ごとに検討して行きましょう。

(4) 私たちの、これまでの価値形態の分析で明らかになったように、商品の価値形態または価値表現は、商品の価値の本性から生じるのであって、逆に、価値やその大きさが、交換価値としてのそれらの表現様式から生じるものではありません。

以前にも紹介しましたが、マルクスは初版本文のなかで次のように述べています。

〈しかし、決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値の大きさとの関係を発見するということ、すなわち観念的に表現すれば、価値形態は価値概念から発していることを論証するということだったのである〉（国民文庫版77頁）

つまりこれまでの価値形態の分析が明らかにしてきたのは、価値形態は価値概念から発しているということ、価値形態は内在的な価値が現象したものであることを論証してきたわけです。だから当然、価値やその大きさが、現象形態である交換価値から生じるなどという考えは転倒以外の何物でもないのですが、しかしブルジョア経済学者たちはこの現象に固執するわけです。

(4) しかし、こうした現象としての交換価値にしがみつく逆転した考え方が、かつての重商主義者たちや、その近代的な蒸し返し屋であるフェリエ、ガニルなどの妄想であり、さらに彼らの保護貿易主義とは正反対の論者である近代自由貿易外交員、例えばバステアとその一派の妄想でもあるのです。

ここでは「重商主義」という用語が出てきますが、『資本論辞典』は次のように説明しています。

【一般に重商主義とは16～18世紀にわたる資本の〈本源的蓄積〉の時期にあらわれた経済政策および経済理論の総称である。……重商主義政策の基本的主体は絶対主義的形態をもつ国家であり、それは〈商人資本〉の運動に支援されながらいわゆる本源的蓄積のための諸政策を暴力的に遂行する。この時期には、すでに大市場の形成がなされており、〈世界市場〉が発生し、商業資本はみずから生産に関与して小生産者を駆逐するにいたり、一方種々なる形の〈マニュアルファクチャ〉が発生した。国家は、貿易差額を大ならしめ国内の貨幣を増加させるために、輸出産業を奨励・統制し、労働日の延長と労賃の固定化を目的とする労働立法を制定した。……だが重商主義が、商業資本の運動において自立化した流通過程の表面的現象から出発して、それゆえに経済上の仮象のみをとりあげたことは、己の学説の根本的限界をなしている……たとえば、剰余価値を剰余貨幣、つまり貿易差額の過剰分で表示したり、貨幣をそのまま資本だとみたりしたのは、そうした誤りにもとづいている。それゆえに重商主義的学説は、価値のうちにただ社会的形態の実体なき仮象のみをみたり貨幣や資本の形態規定性をそのまま一面的に説明することによって、ブルジョア社会の外面的特徴を端的につかみだすことに成功したとはいえ、そうした現象の背後にひそむ本質的生産諸関係を洞察するまでには至らなかったものであり、そのために〈古典派経済学〉からの批判を受けることになるのである。】（石垣博美(資本論辞典238-9頁)

こうした重商主義者に対して、その〈近代的な蒸し返し屋〉といわれている、フェリエやガニルは、第一次フランス帝政の時代に帝政を擁護し、また帝政の公職について、ボナパルトの貿易禁止制度の賛美者であったと言われていました。古典派経済学は価値形態に注意を払わなかったとマルクスは指摘していますが（後述参照）、彼らは逆に諸商品の価値とその大きさを、交換価値、あるいは価値形態から説明したのです。

これに対して、彼らの保護貿易主義とは正反対の自由貿易主義の立場に立つバステアは〈価値は交換されたサーヴィスの比例である〉とし、商品の価値も価値の大きさも交換関係による表現のうち以外には存在しない立場をとったと言われていました（以上、付属資料参照）

また先に紹介した初版本文の注24でマルクスは次のように書いています。

〈(24) 古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、またいっそう特殊には商品価値の、分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけ出すことに成功しなかった、ということである。A. スミスやリカードのような、まさにその最良の代表者たちにおいてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとして、または商品そのものの性質には外的なものとして、取り扱っているのである。その原因は、ただ、価値の大きさの分析にすっかり注意を奪われてしまったということだけではない。それは、もっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョアの生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態なのであって、このことによってこの生産様式は、社会的な生産様式の一つの特殊な種類として、したがってまた同時に歴史的に、特徴づけられているのである。それゆえ、もしこの生産様式を社会的生産の永久的な自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの、独自性を見そこなうことになるのである。それだから、労働時間による価値の大きさの計測についてはまったく一致している経済学者たちのあいだにも、貨幣、すなわち一般的な等価物の完成した姿については、きわめて雑多できわめて矛盾している諸見解が見られるのである。このことは、たとえば、ありふれた貨幣の定義でもはよまにあわぬ銀行業の取扱いにさいして、明瞭に現われてくる。このことから、反対に、復活した重商主義（ガニルその他）が生じたのであって、これは価値においてただ社会的な形態だけを、またはむしろただ社会的な形態の無実体な外観だけを、見るのである。――ここで一度はつきり言うておくが、私は、W・ペティ以来の、ブルジョア的諸生産関係の内的な関連を探究する経済学のすべてを、俗流経済学と対立させて、古典派経済学と呼ぶのであって、俗流経済学のほうは、ただ外観上の関連のなかを右往左往するだけで、いわば粗雑きまわら現象のもっともらしい平易化と、ブルジョアの自家需要とのために、科学的な経済学によってはとくくに与えられている材料を絶えず繰り返して反芻するのであるが、そのほかには、自分たち自身の最良の世界についてのブルジョアの生産当事者たちのありふれた、ひとりよがりを見解を、体系づけ、麗理屈づけ、永遠の真理として宣言するだけで満足しているのである。〉（国民文庫版77-8頁）

マクラウドについては、もっと時代は後になりますが、これは付属資料を参照して頂くだけにしましょう。

(4) 重商主義者たちは、価値表現の質的な側面に、だから等価形態の完成形態である貨幣に重きを置き、それに対して

、近代的自由貿易商人たちは、とにかく自分の商品をどんな価格でもたたき売る必要から、相対的価値形態の量的側面を重視したのです。

価値表現の質的な側面というのは、第1パラグラフでも述べられていたように、等価形態に置かれる商品が「直接的交換可能性」を持つことによって表現されるということでした。この等価形態の直接的交換可能性が発展し、完成したもののこそ、どんな商品とも直接に交換可能である（何でも買える）貨幣です。重商主義者たちは、貿易差額を拡大して国内の貨幣の増大を追求し、輸出を奨励する一方、輸入を制限する保護貿易政策をとったと言われています。

他方、自由貿易主義者は、市場の拡大を目的とし、そのためには価格の引き下げを必要としたので、商品の価格という量的側面だけに注意を払ったということです。

(c) その結果、両者は、商品の価値も価値の大きさも、商品に内在するものとは見えず、ただ交換関係によるそれらの表現だけに固執し、ただ日々の物価表のうちに存在するものとみなすのです。

(d) マクラウドは、ロンバード街という金融市場の中心において、銀行業者を代表して、これらの論者たちを総合して、混乱した諸表象をできる限り学問的に飾りたてています。

このように第2パラグラフは、「単純な価値形態の全体」としてその直接的な表象として捉えられる交換価値が、歴史的には重商主義者たちによって（また近代にはその蒸し返し屋によって）、その質的側面が重視され、あらゆる商品との直接的交換可能性をもつ貨幣をとりわけ重視する主張として現われたこと、また近代の自由貿易論者も同じように現象としての交換価値だけに捕らわれているが、彼らは量的側面を重視し、市場拡大のために商品をたたき売ろうとしたこと、そしてさらに今日の金融街においても、同じ様な現象に捕らわれた主張がマクラウドに見られるというような展開になっています。つまり「単純な価値形態の全体」が学説史的に考察されていると言ってよいのではないかと思います。

【付属資料】

【1】パラグラフに関連して

《初版付録》

《（四）価値が独立に現われるやいなやそれは交換価値という形態をもつ。価値表現は二つの極を、相対的価値形態と等価形態とを、もっている。まず第一に、等価物として機能する商品について言えば、その商品は他の商品にたいして価値姿態として、直接的に交換可能な形態にある物体——交換価値として、認められている。ところが、その価値が相対的に表現されているところの商品が交換価値の形態をもつのは、(1)その商品の価値存在がその商品と他の一商品体の交換可能性によって明示されるからであり、(2)その商品の価値の大きさがその商品と他の商品とが交換される割合によって表現されるからである。——それだから、一般に、交換価値は商品価値の独立な現象形態なのである。》（国民文庫版152頁）

《補足と改訂》

《ところで、簡単な価値形態を全体として考察するならば、まず第一に、交換価値は質的および量的に規定された商品価値の単なる表現方法、すなわち現象形態である、しかしながら、商品価値それ自身の本性から発した表現方法である、ということが明らかになる。その価値が表現されるべき商品は、自分と等しい物として、他の種類の商品——両方の商品が人間的労働の結晶であるかぎりにおいて——との関係にはいり、そしてそのことによって、その価値を〈表現する〉。》

[B]

[14] 価値形態 etc p.775.776(\$4) 一商品の簡単な価値形態は、種類を異にする一商品にたいするその商品の価値関係のうちに、あるいは後者との交換関係のうちに、含まれている。商品Aの価値は、質的には、商品Bの商品Aとの直接的交換可能性によって表現されうる。それは、質的には、一定分量の商品Bの、与えられた分量の商品Aとの交換可能性によって表現される。言い換えれば、一商品の価値は、交換価値としてのその表示によって、自立的に表現されている。

◇

この章のはじめでは、普通の流儀にしたがって、商品は使用価値および交換価値であると言ったが、これは、厳密に言えば、誤りであった。商品は、使用価値または使用対象、および価値である。商品は、その価値がその自然形態とは異なる一つの独立な現象形態、交換価値という現象形態をとるやいなや、あるがままのこのような二重物として自己を表すが、商品は、孤立的に考察されたのではこの形態を決してとらず、つねにただ、第二の、種類を異にする商品との価値関係または交換関係のなかでのみ、この形態をとるのである、もっとも、このことを心得ておきさえすれば、さきの言い方も有害ではなく、簡約に役立つ。》（77-78頁）

《フランス語版》

《一商品の単純な価値形態は、ただ一つの種類の商品——たとえそれがなんであろうと——にたいするこの商品の価値関係あるいは交換関係のうちに含まれている。商品Aの価値は、質的には、Aと直接に交換可能な商品Bの属性によって表現される。それは、量的には、一定分量のBと任意分量のAとのつねに可能な交換によって表現される。換言すれば、一商品の価値は、その商品が交換価値の座に置かれることによってしか表現されないのだ。われわれが本章の初めで、普通の言いかたにしたがって、商品は使用価値でもあり交換価値でもあると述べたのは、文字どおりにとれば誤りであった。商品は使用価値すなわち有用物でもあり、価値でもある。商品は、その価値が、その自然形態とは区別される固有の現象形態、交換価値という形態をもつやいなや、あるがままの二重の物として現われるが、商品は、単独に考察すれば、こうした形態をけっしてもたない。このことがわかっているかぎり、古い言いかたもはや有害ではなく、簡略にすることに役立つ。》(32-33頁)

【2】パラグラフに関連して

《補足と改訂》

《われわれの分析が証明したように、価値形態または価値表現が商品価値の本性から生じるのであり、逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれらの表現様式から生じるのではない。ところが、この逆の考え方が、重商主義者たち、およびその近代的な蒸し返し屋であるフーリエ(22 第二版への注：F.L.A.フーリエ(関税副検査官)：『商業との関係から見た政府について』, パリ1805), ガニル(注：C h.ガニル：『経済学の諸体系について』, 第2版、パリ, 1821)などの妄想であるとともに、彼らとは正反対の論者である近代自由貿易外交員、たとえばバステアとその一派の妄想でもある。重商主義者たちは、価値表現の質的な側面に、それゆえ貨幣をその完成形態とする等価形態に重きをおき、これにたいして、自分の商品をどんな価格でもたき売らなければならない近代貿易商人たちは、相対的価値形態の量的側面に重きをおく。その結果、彼らにとっては、商品の価値も価値の大きさも交換価値による表現のうち以外には実存せず、したがって、実際には日々の物価表のうちに実存する。スコットランド人マクラウドは、ロンバード街の混乱をきわめた経済的諸表象をできる限り学問的に飾り立てるといふ彼の職能において、迷信的な重商主義者たちと啓蒙された自由貿易商人たちとのみごとな総合をなしている。》(78-79頁)

《フランス語版》

《われわれの分析の結果は、こういうことになる。すなわち、商品の価値形態は、商品価値の本性から生ずるのであって、逆に、価値や価値量が、それらを交換関係によって表現するところの様式から生ずるわけではない、と。しかし、これこそが、重商主義者やその近代的熱狂者であるフェリエやガニル(21)らの誤りでもあり、また、その対立者であるバステアやその一派のような自由貿易の外交員たちの誤りでもある。重商主義者たちは、価値表現の質的な側面に、したがって、貨幣形態のうちに明白に実現される商品の等価形態に、とりわけ立脚している。これと反対に、近代の自由貿易のチャンピオンたちは、自分の商品を是非とも厄介払いしようとして、もっぱら相対的価値形態の量的な側面を強調する。したがって、彼らにとっては、価値も価値量も交換関係によって表現するしかないのであって、このことは実際には、毎日の時価による相場のみが存在しているということの意味している。スコットランド人のマクラウドは、ロンバード街——ロンドンの大銀行家の街——の雑然とした経済的先入観念を、実に盛りだくさんな博識で包んで飾りたててを仕事にしていて、迷信的な重商主義者たちと自由貿易の自由思想家たちとのみごとな総合を、つくりあげている。》(33頁)

【資本論辞典】から

フーリエ(1777~1861)フランスの関税制度検査官・経済学者。主著『商業との関係から見た政府について』(18005)には、スミス理論との折衷の形をとった新加重商主義的主張がみられる。マルクスは彼を‘ボナパルトの貿易禁止制の賛美者’および、彼とガニールとを第一次フランス帝国の‘帝政時代の経済学者’とよんでいる。『資本論』第1巻第1章では、彼をガニールとともに‘重商主義の近代的な蒸しかえし屋’と評価し、彼が諸商品の価値およびその大きさを、逆にそれらの交換価値すなわち価値形態から生ずるとしたものととして批判している(KI-66:青木1・154-155:岩波1-121-122)。なお『剰余価値学説史』第1部第4章では、生産的・不生産的労働について、ガルニエ、ローダデル、ガニール、シュトルヒ、シーニア、ロッシ等と同列に検討され(MWI-193.228.282:青木2-327,379,429)、とくにスミスの生産的労働論および資本蓄積論にたいする彼の論評の保護貿易主義的性格が指摘されている(MWI-214-215:青木2-359~360) (資本論辞典537頁)

ガニール Charles Ganiilh(1758-1836)フランスの経済学者・金融評論家で、新加重商主義者。フランス革命時代およびその後のナポレオン帝政時代に多くの公職につく。当時のフランス金融事情にかん

する歴史的著作がおそらくもっとも重要なものであるが、なおその他の経済学の著書とは別に、《Dictionnaire analytique d'economie politique》(1826)を書いている。これは多はの難点をもち、当時一般の注意を惹いた問題を知りうる程度のものである。マルクスが直接引用している主著は、《Des systèmes d'économie politique, de la valeur comparative de leurs doctrines, et de celle qui paraît la plus favorable aux progrès de la richesse》(led., 1809; 2ed. 1821)の再版本である。新重商主義の主張を内容とし、マルタ旦は'復活した重商主義'とよび、彼を重商主義の'近代的な蒸しつかえし屋'あるいはフェリエとともに'帝政時代の経済学者'と評価した。批判は、まずガニールが、富は交換価値からなり、貨幣—貨幣たるかぎりの商品—だとして、商品の価値を交換の生産物と考えた重商主義の見解に向けられ、それは商品の価値形態から逆に価値が生ずるとする誤れる見方であり、けっきよし価値の実体を見ることなく、価値のうちにただ商品経済の社会的形態のみを、あるいは実体なきその仮象のみを見るものとした (KI-66:87.98;青木1-164~155.155.185.203;岩波1-121~122, 158.181.MWI第4章第8項)。なお富は交換価値からなるという見方に関連して、『剰余価値学説史』では、ガニールが、生底的・不生産的労働の区別をも交換によって判断し、労賃の支払われる労働は、非物質的生産に従事する労働や召使などの労働といえども、すべて生産的労働であるとして、スミスの生産的・不生産的労働の区別を論破しようとしたことを、ガルエル、ローダゲールの説と同様、'まったくくだらない話'であり'大衆文芸的論議' "教養ある饒舌にすぎない"としている(MWI第4章第8項および262:青木2-285~300,428-429)、そしてガニールは、ガルニエが重商主義に逆戻りすると同様、重商主義に逆戻りし、重商主義の'剰余価値'にかんする見解を、はっきりさせたとされる(MWI-168;青木2-287)、さらに、機械採用の自然的必然的作用として、彼が、労働人口は絶対的に減少し、'純生産物で生活する人口数'は増加すると考え、こうした仕方では人類は向上するのだとじて、生産的人口の減少に味方したことを批判している(KI-471:青木3-720~721。岩波3-238~239.MWI第4章第9項)。なお、資料的には、『資本論』第1巻第4章で、労賃の後払いが可能になった瞬間に、商業信用が始まったとする彼の文章を引用している(KI-182:青木2-325;岩波2-70)。また同じく第5章では、農業で労働手段として土地を利用するのに、前提となるべき緒労働過程の大きな系列を彼が適切に数えあげていると指摘している(KI-187:青木2-333;岩波2-70)。この指摘は、さきの彼の主著と異なり、『剰余価値説史』でマルクスが'未見の書'とした彼の《Théorie de l'économie politique, etc.》(1815)によっている。(資本論辞典481頁)

パステリア(1801-1850) フランスの俗流経済学者で自由貿易論者。南フランスの葡萄栽培地方の貿易商の子に生まれ、1840年代のイギリス穀物法闘争に刺戟されて、盛んに自由貿易論を主張《Journal des Economistes》に寄稿したり、ポルドーやバリーに自由通商協会を設立して協会機関誌《La Liberté des Echanges》を創刊、その編集者となる等の活動をした、1848年2月革命以後は社会主義の反対者として、ルイ・ブラン、ブルドン等を批判してパンフレットを書き、憲法制定議会議員、立法議会議員となった。主著《Les harmonies économiques》(1850)を出版後、イタリアに赴きローマで死す。その主著にみられるように、彼はセー以上に徹底した楽観的な経済的調和論者であり、古典派経済学の弁援者であった。マルクスは、セーにはまだ不偏不党の態度から彼自身で経済的諸問題の解決に努力している跡がみられるが、パステリアになると、もともと調和論者であり、剽窃をこととし支配階級にとって不愉快な古典派経済学の側面はきりすて、皮相なやり方でその階級のために情熱的な弁護をやっていると批判した(MWIII-573-574:改造社版全集11-565)。というのは、彼は、ケアリーと同じように、資本主義的生産の現実的諸対立を実はそれがリリカードなどが経済理論の内部でつくり出したものだと考え(MWIII同上箇所。KI-590;青木3-880。岩波3-431)、資本主義的生産諸関係とそれらの敵対作用をみることなく、そのもっとも表面的でもっとも拍象的な状態、つまりそれ自身として考察された単純なる商品流通にみられる'自由と平等と'労働'にもとづく所有の王国'を真理だと考えたからである(Briefe über "Das Kapital" 91:国民上88)。そして彼は、ブルジョア社会は自然的制度であり、それ以前の社会は人為的制度であると考え、たとえば古代のギリシャ人やローマ人は強奪によってのみ生活していたとしている(KI-87;青木1-186;岩波1-159)。パステリアのこの皮相さは、一方では、同様に無批判な経済学者であり保護貿易論者であるケアリーと相通ずるものであり(KI-590-591:青木3-880-881。岩波3-431)、剽窃問題までも、起したのであるが、他方、それは彼の経済理論が'サーヴィス'という範疇を基礎としている点に明瞭にみられる。彼は、人間のすべてのサーヴィスが生産的であるとし、価値は交換されたサーヴィスの比例であるとした。マルクスはその点を批判してつぎのようにいう。だからパステリアにとっては、商品の価値も価値の大きさも交換関係による表現のうち以外には実存しない、したがって日々の価格表の番付けのうちのみ実存することとなる(KI-66;青木1-154;岩波1-122)。ところで、サーヴィス(役立ち)とは、商品のであれ労働のであれ、実はある使用価値の有用的な働き以外のなものでもない。そして交換価値をきめるものは、そのような商品や労働が使用価値として行なうサーヴィスではなく、商品が生産されるさいにその商品自身に向かつてなされるサーヴィス、つまりそれを生産するのに必要な労働なのである。たとえば、ある機械の交換価値は、その機械をもって短縮しうる労働時間の量によってきまるのではなく、その機械あるいはそれと同一種類の機械を生産するのに必要な労働時間の量によってきまるのである。パステリアは、交換価値をその労働時間に還元するのではなく、サーヴィスの交換に解消する、かくして労働生産物が商品として交換される特殊な形態規定性は捨棄されてしまうことになる、と(KI-31:岩波36:国民28-29;選集補3.21:青木41-42)。またパステリアは、利潤・利子も、シーニャ的な資本家の節約によるサーヴィスにたいする報酬として、地代も土地所有者の土地提供のサーヴィスにたいする報酬と考えた。『資本論』および『剰余価値学説史』第3部のブルドンの利子論の箇所では、無償信用をめぐる彼とブルドンとの

利生子資本にかんする論争書《Gratuité du Credit. Discusson entre M. Fr. Bastiat et M. Proudhon》(1850)がとりあげられているが、そこでは一方的にブルドンの批判に力点が置かれている(KIII-378-380;青木10-490-493;岩波10-18~22.MWIII附録第I項)。『剰余価値学説史』第3部のルターの高利子輸の項では、バステアが利子をサーヴィスにたいする報酬として、セーと同様に弁護していること、ここにわれわれはすでに'各人は他の人に役立つ'という理解から競争鋭または調和説を見出すとされている(MWIII-591;改造社版全集11-583)。バステアは、自由競争下では等しいサーヴィスの交換が行なわれ、社会の進歩とともにより少ないサーヴィスをもってより多い富が獲得され、社会は神の摂理によって調和的に発展すると考えていた。(資本論辞典531-2頁)

マクラウドHenry Dunning Macleod(1821-1902) イギリスの経済学者。スコットランドに生まれ、ケンブリッジ大学で法律学を学び、1849年弁護士となる。ついでロイヤル・ブリティッシュ・バンク(The Royal British Bank)の取締役となり、1854年に株式銀行法における銀行の権限にかんする法律問題に関係して、はじめて経済学に関心をもち、歴史的・理論的研究をはじめた。その成果として主著《The Theory and Prartice of Banking》(2vols.1855-56)が生まれたが、この書物はイングランド銀行の政策の歴史的研究に重点があり、ながらこの問題についての典拠として利用されてきた。彼は銀行の信用創造力をきわめて高く評価し、銀行は本質的に〈信用の製造所〉(manufactory of credit)であるとし、信用創造過程をはじめて詳細に追求した。彼は当時の経済学世界の主流から孤立し、大学の教職につくことができず、また1856年に前記の銀行が破産したさい、彼は同僚の取締役とともに、詐欺罪で有罪を宣告され、社会的立場は不利となり、不遇のうちに一生を終った。主著のほか、《The Elements of Political Economy》(1858); 《The Elements of Banking》(1878) 《The Theory of Credit》(2vols.1889-1891)などがあり、彼が一人で書いた《A Dictiomy of Political Economy》(1863)は、第1巻(A~C)しか出版されなかったが、金融史の資料として現在でも十分利用価値がある。『資本論』ではマクラウドの名前は、まず価値形態論で出てくる。そこでは重商主義者は価値表現の質的側面に、商品の等価形態に重点をおくが、自由貿易行商人は相対的価値形態の量的側面に重点をおくとして、'スコットランド人のマクラウドは、ロンドンバード街の縦横に錯雑した諸表象をできるだけ学問風に粉飾するのを彼の任務として、迷信的な重商主義者たちと啓蒙された自由貿易行商人たちとのあいだのすばらしい総合をなしている'(KI-66;青木1-154;岩波1-119) 主述べているが、その典拠は挙げていない。つぎに資本の一般的定式を倫ずるにあたって、G-W-Gの流通形式で増殖する価値がその生涯の循環において交互にとる特殊的现象形態を固定させて、資本は貨幣であると規定する論者の例として、'生産的目的に用いられる通貨は資本である'というマクラウドの一句が挙げられている(KI-161;青木2-294-295;岩波2-22)。最後に固定資本と流動資本との区別を銀行業者的立場からmoney at call とmoney not at callの区別にしてしまう代表者の一人としてマクラウドが挙げられている(KII-224;青木6-293;岩波6-119)。なお『経済学批判』では、マクラウドは貨幣一般をそのもっとも発展した形態である支払手段から発生させている、と指摘されている(Kr153;岩波187-1;国民178;選集補3-165;青木189-190)。(資本論辞典556-7頁)

重商主義 Merkanti system 一般に重商主義とは、16~18世紀にわたる資本の〈本源的蓄積〉の時期にあらわれた経済政策および経済理論書の総称である。だが、マルクスは、この時期を二つの段階に分け、前の段階を重金主義となし、後の段階を'より発展した重商主義'としている(KR-57;青木5-81;岩波5-96)。厳密な意味の重商主義は、この後の段階をなす。重商主義政策の基本的主体は絶対主義の形態をもつ国家であり、それは〈商人資本〉の運動に支援されながらいわゆる本源的蓄積のための諸政策を暴力的に遂行する。この時期には、すでに大市場の形成がなされており、〈世界市場〉が発生し、商業資本はみずから生産に関与して小生産者を駆逐するにいたり、一方種々なる形の〈マニファクチャ〉が発生した。国家は、貿易差額を大ならしめ国内の貨幣を増加させるために、輸出産業を奨励・統制し、労働日の延長と労賃の固定化を目的とする労働立法を制定した(KI第7篇第24章)。マルタスは重商主義の経済学説を'近代的生产様式の最初の理論的とり扱い'であるとみなしている(KIII-369;青木9-478;岩波9-211)。けだし、この学説は、重金主義が富の形態を貨幣のみに帰着せしめて、流通部面という没概念的立場を固持するのにたいして、同じく流通部面に立脚しているにしても、その根柢にはたんなる商品流通にとどまらず、商品生産をも必然的要素として含蓄しているからであり、重金主義の資本観がG-W-Gなる無概念的形態において表現されるとすれば、後者のそれはG-W...P...W'-G'という排他的形態で表現されるものだからである(KII-57;青木5-81;岩波5-96)。このように重商主義は、世界商業に直接つながる国民的労働の特定の部門を、富または貨幣の唯一の源泉だとする観点をもっており、粗野かつ素朴なかたちではあるが、いちおうブルジョア社会の生産の特徴を、つまりそれが交換価値によって支配されているということを認識していたのであって、そのかぎりでは'近代経済の一定の領域のなかでは完全な市民権'をもっているのである(Kr171;岩波209;国民199;選集補3-185;青木211)。だが重商主義が、商業資本の運動において自立化した流通過程の表面的現象から出発して、それゆえに経済上の仮象のみをとりあげたことは、己の学説の根本的限界をなしている。だから'近世的経済についての現実的科學は、理論的考察が流通過程より生産過程に移行したところにはじめて開始される'という立場からみると、これはまだ科学としての経済学的認識とはいえないし、またそれがG...G'の循環形式での一面的資本把慢に固執したかぎりでは、窮極的にはこの貨幣資本の循環形式に固有な欺瞞性や幻想的性格をのがれることはできなかったのである(KII-57;青木5-81;岩波5-95)。たとえば、剰余価値を剰余貨幣、つまり貿易差額の過剰分で表示したり、貨幣をそのまま資本だとみたりしたのは、そうした誤りにもとづいている(KIII-834;青木13-1106;岩波11-289)。それゆえに重商主義的学説は、価値のうちにただ社会的形態の実体なき仮象のみをみたり貨幣や資本の形態規定性をそのまま一

面的に説明することによって、ブルジョア社会の外面的特徴を端的につかみだすことに成坊した
とはいえ、そうした現象の背後にひそむ本質的生産諸関係を洞察するまでには至らなかったの
あり、そのために〈古典派経済学〉からの批判を受けることになるのである(KI-87;青木1-188;岩
波1-162)(石垣博美)(資本論辞典238-9頁)

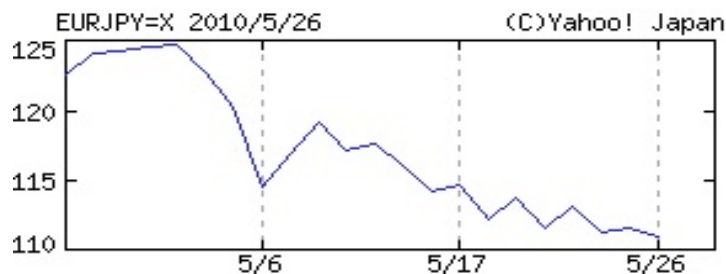
『資本論』を読んでみませんか

ギリシャの財政破綻に端を発する信用不安がスペインやポルトガルなどにも広がり、欧州の共通通貨「ユーロ」安が止まらず、世界的な株安をももたらしている。



政府の緊縮政策に抗議するギリシャの労働者

ギリシャの財政危機に対しては、欧州連合（EU）と国際通貨基金（IMF）が総額1100億ユーロ（約13兆円）の支援策を決め、ユーロ圏緊急首脳会議でも、財政難のユーロ導入国に対する基金の設立や欧州中央銀行（ECB）も含めた、ユーロ圏安定保証のためにあらゆる手段を講じることや、EUの財政規律の強化等を合意したものの、スペインの中央銀行が貯蓄銀行「カハスール」を傘下においたことが伝わると、再び信用不安が広がり、5月26日には、ニューヨーク株式市場のダウ工業株30種平均は3カ月ぶりに1万ドルの大台を割り込み、日本でも日経平均株価は1万円を割ってしまっただ。ユーロ安も止まらず26日現在、1ユーロは110円を割り込んでいるありさまである。



ところでユーロ安とか、円高、ドル安とか色々言われるが、この「為替相場（為替レート）」というのは、そもそも何を表しているのだろうか。一般には「異なる通貨の交換比率のことである」と説明されている。これはブルジョア経済学者だけではなく、マルクス経済学者にもこうした説明で済ませている人が多い。しかし果たしてこうした説明は正しいのだろうか。

『資本論』第3部第5篇第35章は「貴金属と為替相場」である。しかし、さまざまな抜粋部分やエンゲルスが書き加えた部分を除くと、マルクス自身が「為替相場」について書いたものは極めて少ない。本格的にはほとんど論じてないと言ってもよいほどである。では、マルクス自身はそれに関心がなかったかということ、とんでもないのである。「ロンドン・ノート1850-1853年」とMEGA編集者によって名付けられた24冊のノートには膨大な抜粋と考察が残されているのだという。

本来、マルクスの「経済学批判」体系プランでは、為替相場は、後半体系の「4. 国家における総括」と「6. 世界市場と恐慌」との間に位置する「5. 国際的関係（外国貿易）」のなかで主題的に論じるべきものだったのである。だから前半体系の、しかもその一部を占めるに過ぎない『資本論』では、ほとんど言及されなかったのもやむをえない。しかし『資本論』の最初の「貨幣論」と第3部第5篇の「利子生み資本論」を正確に理解すれば、自ずと為替や為替相場についても正しい理解に到達できると確信している。

「為替」というのは、遠隔地間の諸支払を銀行など金融機関を媒介して振り替えることによって、現金を運ばずに決済するための信用用具（有価証券）である。だからそれは決して厳密な意味での「通貨」と同じではないのである。

「通貨」とは貨幣の流通手段と支払手段という二つの機能を併せた、「広い意味での流通手段」のことであり、今日でいうなら、日本国内で流通している円札や硬貨、アメリカ国内で流通しているドル札や硬貨、ユーロ圏内ならユーロ札や硬貨、つまり一般に「現金」と言われているものである。しかし為替市場で売買されているのは、こうしたものではなく、有価証券の一種である「為替」なのである。

前者は、それぞれの国内における一般的な商品市場で流通し、その流通必要量は、その時々それぞれの国内における（だから外国との間ではないことに注意！）商品流通の状態、すなわち流通する諸商品の価格総額、流通速度、信用の状態（相殺される諸支払の度合い）によって規定され、通貨の「価値」（その代表する金量）も同じようにそれぞれの国内の商品流通の現実によって規定されている。

それに対して後者は、有価証券の売買であるから、貨幣市場の問題であり、だから厳密には利子生み資本、あるいはmoneyed Capitalとしての貨幣資本の運動として捉えるべきなのである。だから、為替の市場価格は、東京やニューヨーク、あるいはロンドン等の外為市場における、その時々円建てやドル建て、あるいはユーロ建ての為替の需給如何によって、それぞれの通貨建て為替の他の通貨による購買価格が変動するのである（だから両替のように「通貨」そのものが交換されているわけではないし、ここには現金そのものは一切姿を表さない）。そして為替の需給は、投機的なものを除けば、貿易収支や資本収支、つまりそれぞれの国の国際収支の変化に対応して変動するのである。

このように、両者はまったく異なる流通（商品市場と貨幣市場）に属し、通常は直接的には関連しない（もちろん両者は間接的には関連しているし、それが如何なる関連にあるかを理論的に解明することが重要なのであるが、それを正しく説明しているものはほとんど見かけない）。だから、この両者を区別できずに、混同するならば、マルクスが批判した銀行学派と同じ誤りに陥ることになるであろう。

「為替相場」を「通貨の交換比率」などと説明することは、まさにこうした誤りに陥っていることを示しているのである。そうした誤った主張の中には国際的な商品取引でもドルなどの「通貨」が実際に流通していると考えているとしか思えないような説明をしているケースさえある。残念ながら、ここでは批判を十分理論的に展開する余裕はないが、こうした問題一つとっても、『資本論』をしっかりと研究することの重要性を確認しなければならないのである。

是非、貴方も国際的な金融諸現象を理論的に深く理解するためにも、ともに『資本論』を読んでみませんか。

第25回「『資本論』を読む会」の報告

◎梅雨空

毎日、うっとうしい天気が続きます。

第25回「『資本論』を読む会」が開催された6月20日(日)も、どんよりとした曇り空でしたが、家を出るとすぐバラバラと降ってきました。私たちは傘を持って出かけたのは言うまでもありません。

鳩山に代わる菅政権になっても、民主党政権の本質は何も変わらないような気がします。理念ばかりの"おぼっちゃま"政治から、庶民感覚の"市民派"政治への転換かと期待したのですが、「消費税10%」が飛び出し、「現実主義」の名のもとにより露骨な庶民いじめの政治が横行しそうな気配です。政治の世界も、相変わらず"うっとうしい"状態が続きそうではあります。

さて、「読む会」は前回から入った「4、単純な価値形態の全体」の続きで、第3パラグラフから始まりましたが、今回は、この「4」の最後まで終えました。さっそく、その報告に移しましょう。

◎「単純な価値形態の全体」の総括的な考察

前回の報告で、この「4」全体の構成を次のように紹介しました。

〈この「4 単純な価値形態の全体」は、項目「A」で考察された「単純な価値形態」を一つの自立した主体として捉えかえし、その直接的な考察（[1]パラグラフ）、学説史的考察（[2]パラグラフ）、総括的な考察（[3]パラグラフ）、歴史的な考察（[4]パラグラフ）、そして歴史的考察から不可避に生じる、次の発展段階（「B 全体的な、または展開された価値形態」）への「移行」（[5]～[7]パラグラフ）が論じられることになる〉と。

だから今回、最初の検討対象になった第3パラグラフでは「単純な価値形態の全体」の「総括的な考察」が行われることとなります。これまでと同じように、まずパラグラフ全体の本文を紹介し、それを文節ごとに学習会の報告と併せて詳細に検討していくことにしましょう。また関連する付属資料は最後に別途紹介することにします。まずは第3パラグラフの本文です。

[3]

〈(1)商品Bに対する価値関係に含まれている商品Aの価値表現を立ち上げて考察してみると、この価値表現の内部では、商品Aの現物形態はただ使用価値の姿態としてのみ意義をもち、商品Bの現物形態はただ価値形態または価値姿態としてのみ意義をもつ、ということがわかった。(1)したがって、商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的対立は、一つの外的対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表され、この関係の中では、〈それの〉価値が表現されるべき一方の商品は直接にはただ使用価値としてのみ意義を持っており、これに対して、〈それで〉価値が表現される他方の商品は直接にはただ交換価値としてのみ意義を持つ。(1)したがって、一商品の単純な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態なのである。〉

(1)商品Bに対する商品Aの価値関係のなかに含まれている商品Aの価値表現を立ち上げて考察してみると、この価値表現の内部では、商品Aの現物形態はただ商品Aの使用価値の姿として意義をもち、商品Bの現物形態は、ただ商品Aの価値形態、すなわち商品Aの価値が形ある物として現われているもの、あるいは価値姿態として、すなわち商品Aの価値が具体的な姿をとった物として意義をもつことが分かりました。

(1)だから商品Aのうちに包み込まれている使用価値と価値との内的対立は、一つの外的対立によって、つまり二つの商品の対立的な関係によって表されているわけです。この関係のなかでは、商品A、つまりその価値が表現されるべき一方の商品は、直接には、つまり直接目に見えるものとしては、使用価値としてのみ意義を持っており、これに対して、商品B、つまりそれで価値が表現されるもう一つの商品の場合は、直接には、つまりその目に見えるものとして存在しているものとしては、ただ商品Aの交換価値としてのみ意義をもっていることとなります。

ここで、〈内的対立は、一つの外的対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表され〉るとありますが、そもそも「対立」というのは、どう理解したら良いのか、その「内的」なものが「外的」なものによって表されるとはどういう事が問題になりました。まず「対立」については、以前、大阪市内で行っていた「『資本論』を学ぶ会」で毎回発行された『学ぶ会ニュース』の一文が亀仙人から紹介されました。それをもう一度、紹介しておきましょう。

【◎「使用価値と価値との内的対立」とは？

これは第3パラグラフの議論で出てきた疑問です。直接には第3パラの内容の理解というよりも、「商品のうちに包み込まれている使用価値と価値との内的対立」という表現に関して、使用価値と価値は商品の二つの「属性」とか「契機」とかであって、「対立」しているかどうして言えるのかという疑問でした。そしてそもそも「使用価値と価値の内的対立」とはどうかという事が問題になり、「対立」と「矛盾」とはどう違うのか、といった論理学的な問題にまで発展しました。

まず「使用価値と価値の対立」の理解としては、次のように言えるのではないのでしょうか。商品の使用価値には価値は全く含まれていません。一つの商品をどんなにひねくり回しても、透かして見ても、価値は見えてきません。他方、価値には一原子の自然素材も入り込んでいないということはまた明らかです。このように両者は全く互いに排除しあった関係にあります。また使用価値が大きくなっても、そこに含まれる価値が必ずしも増大するとは限らず、むしろ両者は全く反対の動きさえします。このように量的にも両者は全く独立した動きをするものとしてあります。しかしまた両者は商品の二契機である限り、互いに分かれがたく前提しあっています。価値は使用価値が前提されなければ価値ではありえないし、また使用価値はそれが商品の使用価値であるためには価値の担い手でなければなりません。これが「対立」の内容ではないかと思えます。

次に「対立」や「区別」、「矛盾」といった論理学のカテゴリーの説明については、鏝坂真他編『ヘーゲル論理学入門』（有斐閣新書）から簡単な紹介をするだけにします。

同書には本質について次のような説明があります。

〈本質は、より規定的に言えば、事物のうちにあって、その多様な諸形態のうちに自己をうつしだし、それらに媒介された一定の恒常的なものです。そして、このような本質の、もっとも基本的で抽象的な規定が、同一、区別、根拠という三つのカテゴリーです。〉（同66頁）

ところで今問題になっている「対立」や「矛盾」は、まさにこの本質の「基本的で抽象的な規定」の一つである「区別」のなかにあります。それは次のように説明されています。

〈区別は、より単純な形態からより複雑な形態へと三つにわけられます。それが、差異・対立・矛盾です。〉（同69頁）

〈差異とは、最初の直接的な形態での区別であり、相互に無関係な別々のもののあいだでの区別です。〉しかしこうし

たぐんなる差別的区別は、かならずしも事物にとって必要な不可欠な区別ではありません。／たとえば、ひとびとのあいだには、晋丈とか体重その他の点で、いろいろな差別的な区別があります。しかしこれらの区別は、人類そのものにとって、本質的な、なくてはならない区別ではありません。人類にとっての本質的な区別は、たとえば、男女や親子の区別であり、この種の本質的な区別は、それがより本質的な区別であればあるほど、当の事物のうちにある、いわゆる兩極的な区別となっています。／対立とは、このような、事物のうちにある兩極的な区別をいいます。右と左、プラスとマイナス、N極とS極などの区別がそれです。／この対立的な区別には、次の点で差別的な区別と異なっています。／第一に、対立は、右のことからして、事物におけるもつとも本質的で必然的な区別です。そして、対立的な二つのものは、その規定性に関しては相互に排斥しあう関係にあって、たがいに自分は他方のもではないということが、そのまま直接に自分自身の規定と合致するという関係にあります。／第二に、一般にあるもの他者とは、そのものではないもの、そのものの否定です。しかし本ではないものといっても、かならずしも本という特定のものの意味しません。ところが、人間のうちにあって男性でないものといえはただちに女性を意味するように、兩極的な対立物はたがいに、たんなる他者としてではなくて、それぞれに固有の他者としてあるのです。／第三に、右のことは、かならずしも一方のものが他方の存在そのものを否定する関係にあることを意味しているわけではありません。むしろ兩者は、一つのものの不可分の二側面として、たがいに前提しあい依存しあう関係にあります。このように、その規定性にかんしては相互排斥的な兩極的關係にあるものが、その存在にかんしては相互前提的な關係にあること、これが対立です。〉(69～71頁) 　　ここで、事物における本質的であるたがんに対立的でしかない区別にたいして、二つのものが、その存在そのものに関して、一方では共存の關係にあり、他方では逆に相互排除の關係にあるとき、この二つのものの關係が、矛盾としての対立です。この關係を論理的に表現すると、「AはAであるとともに非Aである」ということとなります。〉(71頁)

区別、対立、矛盾の關係がたいお分かりいただけただけでしょうか？ 詳しくは同書を参考させていただくとしてこれぐらいたいと思います。】(『資本論』を学ぶ会ニュース No.16より)

ここでは「内的対立」の説明はされていますが、「外的対立」については、そもそも價值表現の兩極として相対的價值形態と等價值形態というのは、まさに二つの商品が一つの價值表現の兩極として「対立」關係にあることを示しています。例えば、初版付録の項目を紹介しますと、次のようになっています。

- 〈(一) 價值表現の兩極、相対的價值形態と等價值形態。
a 西形態の不可分性。
b 西形態の対極性。〉(國民文庫版129-130頁)

このように相対的價值形態と等價值形態は、〈その規定性にかんしては相互排斥的な兩極的關係にあるものが、その存在にかんしては相互前提的な關係にあること〉が分かります。つまりこの兩者は二つの商品として外的な「対立」的な關係にあることが分かるのです。

つまり商品Aと商品Bのそれぞれがとる二つの價值の形態、すなわち相対的價值形態と等價值形態は、商品Aに内在する使用價值と價值の内的対立が、二商品の價值の形態として、外的な対立として現われたものであることが分かるのです。

(1) だから、一商品の單純な價值形態は、その商品に含まれている使用價值と價值との対立の單純な現象形態なのです。これが「單純な價值形態の全体」の「總括的な考察」の結論ということが出来ます。

初版付録には、次のような具体的な説明が付いています。

　　<もし私が、商品としてはリンネルは使用價值にして交換價值である、と言うならば、それは私が商品の性質について私が分析によって得た判断である。これに反して、20エレのリンネル=1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、という表現においては、リンネルそのものが、自分が(1)使用價值(リンネル)であり、(2)それとは区別される交換價值(上着と同じもの)であり、(3)これらの二つの別々なものの統一、つまり商品である、ということ語っているのである。〉(同上153頁)

ここでは私たちが「相対的價值形態の内実」に出てくる「商品語」について考察したときに指摘したことが、マルクス自身の言葉として語られています。すなわち、價值關係というのは、商品自身が主体的に關係しあう物象的な商品世界の話であるということです。そこでは商品自身が商品語で他の商品に語りかけているわけです。つまりリンネル自身が上着との價值關係を取り結ぶことによって、自分が商品であることを語るわけですが、そのためには、(1)まずリンネルは自分は使用價值であり、(2)そしてそれとは区別される交換價值(上着と同じもの)である、と語ることによって、(3)自分自身が商品であることを示すのだというわけです。

◎「單純な價值形態の全体」の歴史的な考察

次は第4パラグラフですから「歴史的な考察」です。もちろん、「歴史的な考察」と言っても、それが歴史的に如何に形成されたかを考察するというより、「單純な價值形態」が歴史的な存在であるということ、つまり歴史的なある發展段階の産物であり、歴史的に限界のあるものであることが考察され、指摘されるわけです。

[4]

　　<(1)労働生産物は、どのような社会状態においても使用対象であるが、労働生産物を商品に転化するの、ただ、使用物の生産において支出された労働を、その使用物の「対象的」属性として、すなわちその使用物の價值として表す歴史的に規定された一つの發展の時期だけである。(1)それゆえ、こうなる――商品の單純な價值形態は、同時に労働生産物の單純な商品形態であり、したがってまた、商品形態の發展は價值形態の發展と一致する、と。〉

(1) 労働生産物は、どのような社会状態においても使用対象ですが、労働生産物を商品にするのは、ただある歴史的な發展段階においてに過ぎません。すなわち、その使用物を生産するために支出された労働が、その使用物の「対象的」属性として、すなわちその使用物の價值として表される歴史的な一時期なのです。

　　だから労働生産物が商品形態をもつためには、すなわち、それが使用價值と交換價值という対立物の統一体として現われるためには、その使用物に支出された労働が、使用物の價值の形態として現われる歴史的條件と一致することが分かります。

(1) だから、商品の單純な價值形態は、單純な商品形態であり、商品形態の發展は價值形態の發展と一致するのです。

　　ここで「対象的」が鍵括弧に入っているのはどうしてか、という疑問が出されました。それは商品の價值というのは、商品という客観的な対象物に備った一つの社会的属性ではあるが、しかし商品の使用價值の諸属性のように商品自身の自然的属性とは区別された、われわれには直接には目に見えない、その意味では「幻想的な」、社会的属性であり、そこには自然物は一分子も含まれていません。しかし商品という対象物に備った属性という意味では確かにそれもその限りでは対象的存在であるために、他の自然属性と区別する意味を込めて鍵括弧に括っているのではないか、という意見が出されました。しかし、完全な了解をえられたわけではありません。

また「商品形態の発展」という文言が出てきますが、そもそも「商品形態」が発展するというのはどう考えたらいのか、という疑問が出されましたが、これについてはピースさんが、これは商品として生産される生産物がますます増大し拡大するという意味ではないかと指摘し、ほぼそういう理解で一致しました。

ただ一つ付け加えますと、すぐに後にも紹介しますが、初版付録には〈貨幣形態はただ**発展した商品形態**でしかないのだから、ただ、**単純な商品形態**から源を発しているのである〉という文言があります。つまりここでは「発展した商品形態」というのは、貨幣形態を意味しているわけです。つまり「商品形態の発展」というのは、商品形態が貨幣形態にまで発展するという含意なのかも知れない、ということです。

◎「B 全体的な、または展開された価値形態」への「移行」

初版付録には次のような項目があります。

〈(七) 商品形態と貨幣形態との関係。〉

20エレのリンネル＝1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、というかわりに、20エレのリンネル＝2ポンド・スターリング または、20エレのリンネルは2ポンド・スターリングに値する、という形態を置いてみるならば、貨幣形態は商品の**単純な価値形態**の**いっそう発展した姿**、したがって**労働生産物の単純な商品形態のいっそう発展した姿**にまったくほかならない、ということは一見して明らかである。貨幣形態はただ**発展した商品形態**でしかないのだから、ただ、**単純な商品形態**から源を発しているのである。それだから、単純な商品形態が理解されていさえすれば、残るのは、ただ、単純な商品形態 20エレのリンネル＝1着の上着 が 20エレのリンネル＝2ポンド・スターリング という姿をとるために通過しなければならない**諸変態の列**を考察することだけである〉(国民文庫版154頁)

つまり、単純な価値形態の全体を考察したわれわれは、ここから単純な価値形態から貨幣形態にまで発展する諸系列を考察するわけですが、そのためには、単純な価値形態から次の発展段階である、「B 全体的な、または展開された価値形態」への「移行」が問題にされなければならないわけです。

ただこの「移行」部分は大きくは二つに分かれます。一つは「単純な価値形態」が最も発展した貨幣形態(=価格形態)から見て不十分なものであることが考察されている部分〔〔5〕〔6〕〕と、そして文字通りの次の発展段階への「移行」が論じられている部分〔〔7〕〕にです。

〔5〕

〈(f) 単純な価値形態、すなわち、一連の変態をへてはじめて価格形態に成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである。〉

(f) このパラグラフでは、単純な価値形態が一連の変態をとげてはじめて価格形態に成熟するための萌芽形態であり、そしてその限りで不十分さを持っていることが指摘されているだけです。それに対して、次の〔6〕パラグラフでは、その不十分さの具体的な考察が行われます。

〔6〕

〈(f)ある一つの商品Bでの表現は、商品Aの価値をただ商品A自身の使用価値から区別するだけであり、したがってまた、商品Aを、それ自身とは異なる何らかの個々の商品種類に対する交換関係におくだけであり、商品Aの他のすべての商品との質的同等性および量的比例関係を表すものではない、(f)一商品の単純な相対的価値形態には、他の一商品の個々の等価形態が対応する。(f)こうして、上着は、リンネルの相対的価値表現の中では、リンネルというこの個々の商品種類との関係で等価形態または直接的交換可能性の形態をとるにすぎない。〉

(f) 単純な価値形態では、商品A、例えばリンネルの価値は、商品B(上着)によって表現され、商品A(リンネル)は価値形態を持ちます。しかし商品A(リンネル)は、自身の使用価値と区別された価値形態(交換価値)をもつだけです。しかも、商品A(リンネル)は、ただ商品B(上着)という単一のリンネル自身とは異なる商品種類に対する関係をもつだけです。しかし価値としては、商品A(リンネル)は、すべての他の商品と同じなのです。だから商品A(リンネル)の価値形態は、商品A(リンネル)を、すべての他の商品に対する質的な同等性や量的な比例関係に置く形態でも無ければならないはずなのです。

(f) ところが単純な価値形態では、商品の単純な相対的価値形態には他の一商品の単一な(個別的な)等価形態が対応するだけです。つまりこの場合は商品B(上着)は、ただ単一の等価物として機能するだけなのです。

(f) こうして、上着は、リンネルとの相対的な価値表現においては、ただ単一の商品種類リンネルに対してだけ等価形態または直接的交換可能性の形態をもっているのみなのです。

〔7〕

〈(f)けれども、個別的な価値形態は、おのずから、それよりも完全な一形態に移行する。(f)たしかに、個別的な価値形態の媒介によって、一商品Aの価値は別の種類のただ一つの商品によって表現されるだけである。(f)しかし、この第二の商品がどのような種類のものであるか、上着か、鉄か、小麦などかどうかということは、まったくどうでもよいことである。(f)したがって、商品Aが他のあれこれの商品種類に対して価値関係に入るのに従って、同一の商品のさまざまな単純な価値表現が生じる(22a)。(f)商品Aの可能な価値表現の数は、商品Aと異なる商品種類の数によって制限されているだけである。(f)だから、商品Aの個別的価値表現は、商品Aのさまざまな単純な価値表現のたえず延長可能な列に転化する。〉

(f) しかし、個別的な価値形態は、おのずから、より完全な一形態へと移行します。

ここではこれまでの「単純な価値形態」ではなく「個別的な価値形態」という文言が使われています。もともと「単純な価値形態」とわれわれが言ってきたものは、表題としては「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」でした(この表題そのものはエンゲルス版に固有であって、マルクスが直接携わった版にはこうした表題そのものはありません―詳しくは第14回の報告〔その1〕を参照)。ここで「簡単な価値形態」というのは、ほぼ「単純な価値形態」と同義でしょう。「個別的」と「偶然的」というのは、等価形態について言われているように思えます(上記報告参照)。つまり単純な価値形態においては、等価形態にある商品は、個別の一商品だけであり、ある一商品が等価物として置かれるのは偶然的であるという含意と考えられるのです。だからここで「個別的な価値形態」という文言が出てくるのは、等価形態に着目して、それが個別の一商品に限定されているという意味を込めて使われていると考えるべきではないかと思えます。つまり個別の一商品によって表された価値形態という意味で、「個別的な価値形態」ということです。

(f) 確かに、個別的な価値形態では、一商品Aの価値は別の種類のただ一つの商品によって表現されているだけです。

(f) しかし第二の商品がどのような種類のものであるか、上着か、鉄か、小麦かどうかということは、まったくどうでもよいことです。

(f) だから商品A(リンネル)が、あれこれの他の商品種類に対して価値関係に入るのに従って、同一の商品、すなわち商品A(リンネル)のさまざまな単純な価値形態が生じることになります。

(f) 商品A(リンネル)の可能な価値表現の数は、商品A(リンネル)と異なる商品種類の数によって制限されている

だけです。

(ハ) だから、商品Aの個別的な価値表現は、商品Aのさまざまな単純な価値表現のたえず延長可能な列に転化することになります。すなわち「全体的な、または展開された価値形態」に移行することになるのです。

【注】

《(22a) 第2版への注。たとえば、ホメロスにあっては、一つの物の価値が一連のさまざまな物で表現される〔ホメロス『イリアス』、第七書、第四七二―四七五行。呉茂一訳、岩波文庫、中、三九ページ〕。》

これは〈商品Aが他のあれこれの商品種類に対して価値関係に入るのに従って、同一の商品のさまざまな単純な価値表現が生じる〉という一文に付けられた注ですが、要するに、ホメロスの場合は、一つの物（葡萄酒）が、さまざまな物と交換されることが言及されているということのようです。『イリアス』から当該部分を紹介しておきましょう。

〈折ふしレームノス島から、葡萄酒を運んで来た船が、浜にかかった、……その船々から、頭髮を長く垂らしたアカイア人らは、酒をとって来た、ある者どもは青銅に換え、あるいは輝く鉄（くろがね）に換え、あるいはまた牛の皮に、あるいは生身の牛そのものに、他の者どもは奴婢（やっこ）に換えて、賑わしい宴をもうけ、……〉（岩波文庫、中、38-9頁）

.....

【付属資料】

● **[3] パラグラフに関連して**

《初版付録》

〈(五) 商品の単純な価値形態は、その商品のなかに含まれている使用価値と交換価値との対立の単純な現象形態である。

上着にたいするリンネルの価値関係においては、リンネルの現物形態はただ使用価値の姿としてのみ認められており、上着の現物形態はただ価値形態または交換価値の姿としてのみ認められている。したがって、商品のなかに含まれている使用価値と価値との内的な対立は、一つの外的な対立すなわち二つの商品の関係によって表わされているのであって、これらの商品の一方は直接にはただ使用価値としてのみ認められ、他方は直接にはただ交換価値としてのみ認められているのであり、言い換えれば、この関係のなかでは使用価値と交換価値という両方の対立的な規定が二つの商品のあいだで対極的に分けられているのである。――もし私が、商品としてはリンネルは使用価値にして交換価値である、と言うならば、それは私が商品の性質について私が分析によって得た判断である。これに反して、20エルのリンネル＝1着の上着 または、20エルのリンネルは1着の上着に値する、という表現においては、リンネルそのものが、自分が(1)使用価値（リンネル）であり、(2)それとは区別される交換価値（上着と同じもの）であり、(3)これらの二つの別々なものの統一、つまり商品である、ということを語っているのである。〉（同上152-3頁）

《補足と改訂》

〈商品Bにたいする価値関係に含まれている商品Aの価値表現を立ち入って考察してみると、この価値表現の内部では、商品Aの自然形態はただ使用価値の姿態としてのみ意義をもち、商品Bの自然形態はただ価値形態または価値の姿態としてのみ意義をもつ、ということがわかった。したがって、商品のうちに包み込まれている使用価値と価値との内的対立は一つの外的対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表わされ、この関係のなかでは、その価値が表現されるべき商品Aは、直接にはただ使用価値としてのみ意義をもち、これにたいして、それで価値が表現される商品Bは直接にはただ交換価値としてのみ意義をもつ。したがって、一商品の簡単な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の簡単な現象形態なのである。〉（79頁）

《フランス語版》

〈BによつてのAの価値表現を注意深く考察すれば、次のことが示された。すなわち、この関係では、商品Aの自然形態が使用価値形態としてのみ現われ、商品Bの自然形態が価値形態としてのみ現われる、と。このように、一商品の使用価値と価値との内的対立は、二つの商品の関係によって現われるが、この関係では、価値が表現されるべきAは、使用価値としての地位のみを直接に得るが、これに反し、価値を表現するBは、交換価値としての地位のみを直接に得るのである。したがって、一商品の単純な価値形態は、この商品が包蔵している対立の、すなわち、使用価値と価値との対立の、単純な現象形態である。〉（33-34頁）

● **[4] パラグラフに関連して**

《初版付録》

〈(六) 商品の単純な価値形態は労働生産物の単純な商品形態である。使用価値の形態は、その現物形態における労働生産物を世のなかに出す。だから、労働生産物は、それが商品形態をもつためには、すなわち、それが使用価値と交換価値という対立物の統一体として現われるためには、ただ価値形態を必要とするだけである。それだから、価値形態の発展は商品形態の発展と同じなのである。〉（同上153頁）

《補足と改訂》

〈労働生産物は、どのような社会状態においても使用価値すなわち使用対象であるが、労働生産物を商品に転化するの、ただ、使用物の生産において支出された労働を、対象的属性として、すなわちその使用物の価値として表す歴史的に規定された社会の一つの発展の時期だけである。労働生産物は、その価値が交換価値の形態、すなわち、その使用価値の自然形態とは対象的な形態をもち、したがって、それと同時に労働生産物がこの対立の統一として表わされるや否や、商品形態を受け取るのである。それゆえ、こうなる一商品の簡単な価値形態は、同時に労働生産

物の簡単な商品形態であり、したがってまた、商品形態の発展は価値形態の発展と一致する、と。〉(79頁)

《フランス語版》

〈労働生産物は、どんな社会状態においても使用価値、すなわち有用物である。だが、労働生産物が一般的に商品に転化するの、社会の歴史的発展上の一定の時代にかざられるのであって、その時代は、有用物の生産に支出された労働が、この物に固有な特性、すなわちこの物の価値、という性格を帯びるような時代である。〉(34頁)

● [5] パラグラフに関連して

《初版付録》

〈(七) 商品形態と貨幣形態との関係。
20エレのリンネル=1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、というかわりに、20エレのリンネル=2ポンド・スターリング または、20エレのリンネルは2ポンド・スターリングに値する、という形態を置いてみるならば、貨幣形態は商品の単純な価値形態のいっそう発展した姿、したがって労働生産物の単純な商品形態のいっそう発展した姿にまったくほかならない、ということは一見して明らかである。貨幣形態はただ発展した商品形態ではないのだから、ただ、単純な商品形態から源を発しているのである。それだから、単純な商品形態が理解されていさえすれば、残るのは、ただ、単純な商品形態 20エレのリンネル=1着の上着 が 20エレのリンネル=2ポンド・スターリング という姿をとるために通過しなければならぬ諸変態の列を考察することだけである〉(同上154頁)

《補足と改訂》

〈簡単な価値形態、すなわち、一連の変態を経てはじめて価格形態に成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである。〉(79頁)

《フランス語版》

〈一見すれば、単純な価値形態の不十分さが認められるが、この形態は、価格形態に到達する以前に一連の変態を経なければならぬ胚種なのである。〉(34頁)

● [6] パラグラフに関連して

《初版本文》

〈相対的な価値の単純な形態においては、すなわち二つの商品の等価性の表現においては、価値の形態発展は両方の商品にとって、たとえそのつど反対の方向においてであっても、一律である。相対的な価値表現は、さらに、両方の商品のそれぞれに関して統一的である。というのは、リンネルはその価値を、ただ、一つの商品、上着においてのみ表わしており、また逆の場合は逆であるからである。しかし、両方の商品にとってはこの価値表現は二重であり、それらのおののつとて違っている。最後に、両方の商品のおのおのは、ただ他方の個別的商品種類にとって等価物であるだけであり、したがってただ個別的な等価物であるだけである。〉(国民文庫版57頁)

《初版付録》

〈(八) 単純な相対的価値形態と単一な等価形態。
上着での価値表現はリンネルに価値形態を与えはするが、この価値形態によってはリンネルは、ただ、価値として、使用価値としての自分自身から区別されるだけである。この形態はまたリンネルを、ただ、上着にたいする、すなおならんらかの単一な、リンネル自身とは違う商品種類にたいする、関係に置くだけである。しかし、価値としてはリンネルはすべての他の商品と同じなのである。それゆえ、リンネルの価値形態はまた、リンネルを、すべての他の商品にたいする質的な同等性および量的な釣り合いの関係に置く形態でもなければならない。――商品の単純な相対的価値形態には他の一商品の単一な等価形態が対応する。すなわち、それにおいて価値が表現されるところの商品は、この場合にはただ単一な等価物として機能するだけである。こうして、上着は、リンネルの相対的な価値表現においては、ただこの単一な商品種類リンネルにたいして等価形態または直接的交換可能性の形態をもっているだけである。〉(同上154-5頁)

《補足と改訂》

〈なにかある自分とは違った種類の商品Bでの価値表現は、商品Aの価値をただ商品Aの使用価値から区別するだけであり、それゆえまた、商品Aを、それ自身とは異なるなんらかの個々の商品種類にたいする交換関係におくだけであり、商品Aの他のすべての商品との質的同等性および量的比例関係を表わすものではない。一商品の簡単な相対的価値表現には、他の一商品の個々の等価形態が対応する。こうして、上着は、リンネルの相対的価値表現のなかでは、リンネルというこの個々の商品種類との関連で等価形態または直接的交換可能性の形態をとるにすぎない。〉(79-80頁)

《フランス語版》

〈実際のところ、単純な形態は、一商品の価値と使用価値とを区別して、この商品を、なんらかの他の一つの商品種類との交換関係に置くにすぎず、すべての商品にたいするこの商品の質的同等性と量的比率とを表わすものではない。一商品の価値がこの単純な形態において表現されるやいなや、他の一商品のほうも単純な等価形態を帯びる。こうして、たとえば上衣は、リゾネルの相対的な価値表現では、リンネルというただ一つの商品にたいする関係によってのみ、等価形態、すなわち自分が直接に交換可能なものであることを示す形態、をもっているにすぎない。〉(34頁)

● [7] パラグラフに関連して

《初版本文》

〈このような等式、すなわち、20エルのリンネル＝1着の上着 または 20エルのリンネルは1着の上着に値する、というような等式は、明らかに、商品の価値をただまったく局限的に一面的に表現しているだけである。もし私がたとえばリンネルを、上着とではなく、他の諸商品と比較するならば、私はまた別の相対的な諸価値表現、すなわち、20エルのリンネル＝u量のコーヒー 20エルのリンネル＝v量の茶 などというような別の諸等式を得ることになる。リンネルは、それとは別な諸商品があるのとちょうど同じ数の違った相対的な価値表現をもつのであって、リンネルの相対的な価値表現の数は、新たに現われてくる諸商品種類の数とともに絶えず増加するのである (22)。

(22) 「各商品の価値は、交換にさいしてのその商品の割合を表わすのだから、われわれは、各商品の価値を、その商品が比較される商品がなんであるかにしたがって……穀物価値とか布価値とか呼ぶことのできるであろう。したがってまた、無数の違った種類の価値があるのであり、そこにある諸商品と同じ数の価値の種類があるのであって、それらはみな等しく真実でもあり、また等しく名目的でもある。」(『価値の性質、尺度および諸原因に関する批判的論究。主としてリカード氏とその追隨者たちとの諸著作に関連して。意見の形成と公表とに関する試論の著者の著』、ロンドン、1825年、39ページ。〔日本評論社『世界古典文庫』版、鈴木訳『リカード価値論の批判』、54ページ。]) 当時イギリスで大いに騒がれたこの匿名の書の著者S・ペーリは、このように同じ商品価値の種々雑多な相対的な表現を指摘することによって、価値の概念規定をすべて否定し去ったと妄信している。それにしても、彼自身の偏狭さにもかかわらず、彼がリカード学説の急所に触れたということは、たとえば『ウェストミンスター・レビュー』のなかで彼を攻撃したリカード学派の立腹がすでに証明したところである。(同上57-8頁)

《初版付録》

〈(九) 単純な価値形態から展開された価値形態への移行。
単純な価値形態は、一商品の価値がただ一つの——といってもそれがなんであってもかまわないのだが——他の種類の商品で表現される、ということを条件とする。だから、リンネルの価値が鉄や麦やその他で表現されても、それは、その価値が商品種類上着で表現される場合とまったく同じに、リンネルの単純な相対的な価値表現なのである。したがって、リンネルが価値関係にはいる相手の商品種類がこれであるか、あれであるか、にしたがって、そのつどリンネルの違った単純な相対的な価値表現が成立するのである。可能性から言えば、リンネルは、それとは別種な諸商品が存在するのとちょうど同じだけのいろいろな価値表現をもっているわけである。つまり、事実上リンネルの完全な相対的な価値表現は、一つの個別的な単純な相対的な価値表現ではなくて、リンネルの単純な相対的な諸価値表現の総和なのである。こうして、われわれは次のような形態を得ることになる。〉(同上155-6頁)

《補足と改訂》

〈とはいえ、簡単な価値形態は、おのずから、それよりも完全な一形態に移行する。確かに、簡単な価値形態の媒介によって、一商品の価値は別の種類のただ一つの商品によって表現されるだけである。しかし、この第二の商品がどのような種類のものであるか、上着か、鉄か、小麦等かということは、まったくどうでもよいことである。(p.777,4) それゆえ、商品Aが他のあれこれの商品種類にたいして価値関係にはいるのに従って、同一の商品のさまざまな簡単な価値表現が生じる。商品Aの可能な価値表現の数は、商品Aと異なる商品種類の数によって制限されているだけである。だから、商品Aの個別的価値表現は、商品のさまざまな簡単な価値表現の絶えず延長可能な列に転化する。〉(80頁)

《フランス語版》

〈それにもかかわらず、単純な価値形態はおのずから、もっと完全な形態に移行する。単純な価値形態は確かに、商品Aの価値をただ一つ他種類の商品においてしか表現しない。だが、この第二の種類の商品は全く、上衣、鉄、小麦等々、全くお望みどおりでかまわない。したがって、一商品の価値表現は、他の諸商品にたいするこの商品の価値関係と同じくらい多様になる。したがって、この商品の単独な価値表現は、随意に延長できる一連の単純な表現に変態されるのである。〉(34-35頁)

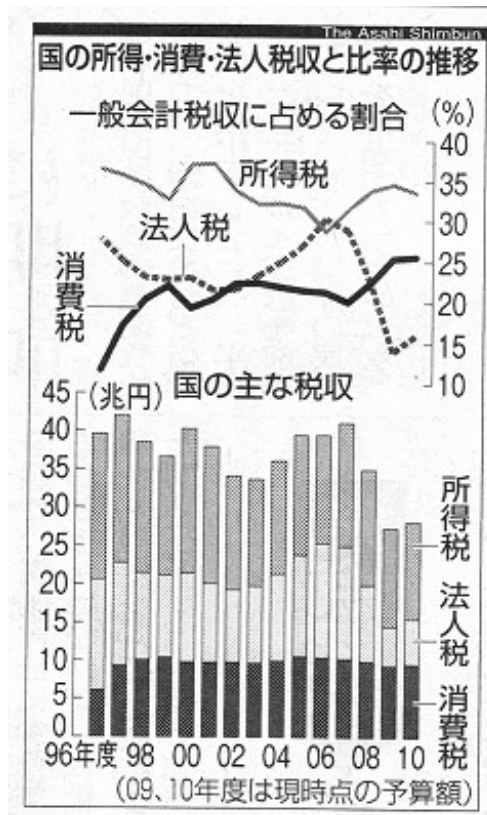
『資本論』を読んでみませんか

参院選が公示されました。

菅直人首相は、所信表明演説や記者会見のなかで、「『強い経済』`『強い財政』`『強い社会保障』の一体的実現を、政治の強いリーダーシップで実現していく」と訴え、「経済成長を大きな軸に置き、2011年度予算編成に当たりたい。成長を支えるには強い財政が必要だ。日本の債務残高は国内総生産（GDP）比180%を超えている。ギリシャの例を引くまでもなく、財政が破綻すれば人々の生活、社会保障が破綻する」と消費税率引き上げの必要性を強調。「早期に超党派で議論を始め、自民党が提案した税率10%を一つの参考にしたい」と具体的な数値にまで言及したために、俄かに消費税の引き上げが、参院選の大きな争点として浮上してきました。



2010年度の国債発行は、総額162兆4139億円を計画。09年度当初より30兆1285億円増。10年度末の国債発行残高（財投債除く）は637兆円の見込みで、国民1人あたり499万円の借金になる計算です。国家財政が早くからすでに破綻していることは明らかです。そしてそのツケがやがては国民に押しつけられるだろうということも容易に予測できました。しかしそれがよりにもよって民主党政権によって実行されようとしているのです。



理念先行の美辞麗句だけの鳩山内閣に代わって、庶民派宰相・菅内閣の誕生で少しはましな政治になるのかと期待しましたが、とんでもありません。菅政権は、“現実主義”の名のもとに、財政破綻のツケを庶民に押しつける増税に先鞭をつける歴史的役割を果たそうとしているのです。まったく酷い内閣が誕生したものです。

現在の財政破綻に国民が何か責任があるのでしょうか。決して否です。歴代の自民党政府が膨大な赤字国債を毎年毎年発行してきたのは、資本の危機を救済するためです。特に90年代のバブル崩壊後の深刻な不況では、銀行などバブル時に“濡れ手に粟”のぼろ儲けをした資本家たちを救済するために膨大な資金を提供してきました。何度も景気浮揚策と称して無駄な公共事業にカネをつぎ込むために赤字国債を垂れ流してきたのです。現在の財政破綻に責任を負わなければならないのは独占資本なのです。ところが現在の独占資本は税金をほとんど払っていません。税収に占める法人税の割合は極めて少なくなっています（図表参照）。

にも関わらず、菅政権は、そうした独占資本には法人税の減税を約束する一方で、財政破綻のツケをすべて国民を押しつけようというのです。消費税は、所得税のように国民が直接その痛みを感じることなく収奪できる、政府にとって都合のよい税制です。だからこれに一度手をつけると止めども無く、それに頼る財政が累進的に進むのです。

マルクスは国債と税制は不可分の関係にあり、生活手段に課税する消費税を軸とする財政は、それ自体に自動累進の萌芽を含んでいると次のように指摘しています。

《国債は国庫収入を後ろだてとするものであって、この国庫収入によって年々の利子などの支払がまかなわれなければならないのだから、近代的租税制度は国債制度の必然的な補足物になったのである。国債によって、政府は直接に納税者にそれを感じさせることなしに臨時費を支出することができるのであるが、しかしその結果はやはり増税が必要になる。他方、次々に契約される負債の累積によってひき起こされる増税は、政府が新たな臨時支出をするときにはいつでも新たな借入れをなさざるをえないようにする。それゆえ、最も必要な生活手段にたいする課税（したがってその騰貴）を回転軸とする近代的財政は、それ自体のうちに自動的累進の萌芽をはらんでいるのである。過重課税は偶発事件ではなく、むしろ原則なのである。それだから、この制度を最初に採用したオランダでは、偉大な愛国者デ・ウィットが彼の箴言（しんげん）のなかでこの制度を称賛して、賃金労働者を従順、儉約、勤勉にし……これに労働の重荷を背負わせるた

めの最良の制度だとしたのである。》（『資本論』第1部全集23巻 b 986-7頁）

増税押しつけの菅民主党政権には、この参院選挙でキッパリとノーを突きつけなければなりません。貴方も国債と税制のからくりを見抜くためにも、ともに『資本論』を読んでみませんか。

第26回「『資本論』を読む会」の報告

◎さーア、暑い夏がきた

うっとうしく長く続いた梅雨が、激しい雷雨によって開け、一転、暑い夏がやってきました。

大雨をもたらした激しい雷雨は各地に大きな被害をもたらしましたが、私ごとながら、我が家でも、落雷が近くに落ちたためか、パソコンのモニターがフラッシュ状態になり、間欠的にしか画面が見えなくなる被害を被りました。結局、諦めて新しいモニターを購入する羽目に。

しかし土曜日から一転して夏日になり、第26回「『資本論』を読む会」も、真夏に相応しい強い日差しの中での開催となりました。子供たちにはうれしい夏休みにも突入。連日、猛暑日が続いています。おかげで全く集中力が働かず、この報告もアップが遅れました（これは言い訳）。

今回からは〈B 全体的な、または展開された価値形態〉という新しい項目に入りました。とにかく、その報告を行うことにしましょう。

◎「全体的な、または展開された」とは？

J 富村さんが、突端から、〈「全体的な、または展開された」というのは、等価値形態について言っているのだからか？〉という質問を発したものですから、まずは、この新しい項目そのものの解釈が問題になり、おかげで、この項目の位置づけや全体の構成、見通しが話し合われました。まず、そこから確認しておくことにしましょう。

今回から学習する新しい項目Bは、いうまでもなく、〈A 単純な、個別的な、偶然的な価値形態〉のより発展したものです。そしてAと同じように、Bも、価値形態の両極である、相対的価値形態と等価値形態がそれぞれに分析され、その上で、それらが総合されて、この新しい発展した価値形態であるBの欠陥が指摘され、次の発展段階への移行が考察される、という展開になっています。

ただ相対的価値形態にしても、等価値形態にしても、あくまでも「全体的な、展開された価値形態」としてのそれであり、これまでの単純な価値形態の考察を前提に、展開された価値形態に固有の問題を、それぞれについて明らかにしているわけです。まず相対的価値形態については、最初はその質的な考察を行い、次いでその量的考察が行われています。等価値形態については、Bに固有の特徴として、その特殊な性格が明らかにされています。

そして次の価値形態（C 一般的価値形態）への移行として、展開された価値形態が全体として考察され、その欠陥がかなりの分量で考察されています。

この展開された価値形態から、次のステップである一般的価値形態への移行については、多くの論争がありますが、J 富村さんも、その問題に関連する質問を発して、かなりの拘りを示したのですが、しかし、この問題は今回はやらずに、次回に回すことにしました。

とにかく、〈B 全体的な、または展開された価値形態〉とはどういうものか、その具体例を示しておきましょう。

[2]

〈（20エレのリンネル＝1着の上着 または＝10ポンドの茶 または＝40ポンドのコーヒー または＝1クオーターの小麦 または＝2オンスの金 または＝1/2トンの鉄 または＝等々）〉

これが〈全体的な、または展開された価値形態〉です。

ここでピースさんのレジュメでは、「A商品＝B商品の関係にあつては、個別的に等しいとされていた関係が、他の全ての商品と等しいという関係を形成することによって、等しい内容が一般的な現象として表されることになる」とあったので、「一般的な現象」という言い方はどんなものだろうか、という疑問が出され、この価値形態の性格が問題になりました。亀仙人は、この形態の特徴は〈20エレのリンネル＝1着の上着〉という単純な形態だけでなく、〈20エレのリンネル＝10ポンドの茶〉、〈20エレのリンネル＝40ポンドのコーヒー〉、〈20エレのリンネル＝1クオーターの小麦〉等々という単純な価値形態の無限の列が並ぶということにあるのではないかと、つまり一つの商品の単純な価値形態が並列することで、そうした無限の列そのものによって、今度は一つの商品の価値が表現されているところに特徴があるのではないかと、いわばリンネル以外の他の多くの商品が「共同的」に一つの商品であるリンネルの価値を表現しているのではないかと、指摘しました。

また同時に、初版付録では、この後に、現行版やフランス語版にもない、次のような項目とパラグラフが入っていることも指摘されました。

〈（一）列の無限性〉

〈このような、単純な相対的な諸価値表現の列は、その性質上、いくらでも延長されることができ、言い換えれば、決して終結することがない。なぜならば、絶えず新たな商品種類が出現して、どの新たな商品種類も新たな価値表現の材料となるからである。〉（国民文庫156頁）

とにかく、具体的なマルクスの説明を検討して行くことにしましょう。今回もまず本文を紹介し、その各文節ごとに(1)、(2)、……と記号を打ち、文節ごとに詳しく見ていくことにします。

◎相対的価値形態の質的考察

まず最初は、〈全体的な、または展開された価値形態〉の相対的価値形態の質的考察が行われます。

[1]

〈(1)ある一つの商品、たとえばリンネルの価値は、いまでは商品世界の無数の他の要素で表現される。(2)他の商品体はどれもリンネル価値の鏡になる(23)。(3)こうして、この価値そのものが、はじめてほんとうに、無差別な人間労働の凝固として現われる。(4)なぜならば、このリンネル価値を形成する労働は、いまや明瞭に、他のどの人間労働でもそれに等しいとされる労働として表わされているからである。(5)すなわち、他のどの人間労働も、それがどんな現物形態をもってしようと、したがってそれが上着や小麦や鉄や金などのどれに対象化されていようと、すべてこの労働に等しいとされているからである。(6)それゆえ、いまではリンネルはその価値形態によって、ただ一つの他の商品種類にたいしてだけでなく、商品世界にたいして社会的な関係に立つのである。(7)商品として、リンネルはこの世界の市民である。(8)同時に商品価値の諸表現の無限の列のうちに、商品価値はそれが現われる使用価値の特殊な形態には無関係だということが示されているのである。〉

(1) リンネルの価値は、いまでは商品世界の無数の他の商品によって表されています。

ここで「商品世界」という言葉が出てきますが、以前にもこの言葉については説明したことがあったと思います。これは商品自身が主体となって互いに関係し合う世界のごとくした(第18回報告を参照)。リンネル自身が、商品世界にある、他のあらゆる商品に関係して、自身の価値を表現している形態(価値形態)と考えることができます。

(0)そしてこの関係においては、「他の商品体」、つまり他のすべての商品の諸使用価値、その自然諸姿態は、どれもリンネルの価値を写し出す鏡になるわけです。

(A)こうして初めて、本当に、実際的にも、リンネルの価値は無差別な人間労働の凝固として現われています。

(一)、(二)なぜなら、リンネルの価値を形成する労働は、いまでは明瞭に、他のすべての商品に支出されている労働に等しいとされているからです。リンネルの価値を形成する労働は、ある場合には裁縫労働の姿をとり、ある場合には茶を生産する労働の姿をとり、ある場合にはコーヒー生産労働と同じであり、小麦生産労働と同じ等々だからです。つまりリンネルの価値を形成する労働は、他のすべての具体的な労働と同じなのですが、だからこそそれはその無限の同等性によって、それ自身が無差別な人間労働そのものの凝固であることを、実際的にも明らかにしているのだといえるからです。

(A)だから、いまではリンネルはその展開された価値形態によって、単純な価値形態の場合のように、ただ一つの種類の商品に対してだけでなく、商品世界のすべての商品種類に関係し、自身の価値を表すのですから、商品世界と社会的な関係に立っていることとなります。

(B)リンネルは、商品として、この世界の市民なのです。つまり商品として認められ、この同じ商品社会の一員であることが示されているわけです。

(F)同時に商品価値の諸表現の無限の列のうちに、商品の価値はそれが現われる使用価値の特殊な諸形態には無関係だということを示されていることでもあるのです。

ここでリンネルを商品世界の「市民」としているのは、示唆的です。商品世界というのは商品自身が主体として互いに関係し合う世界であること、商品が互いに関係して一つの世界を形作っている(しかもそれは人間の意識から自立して、反対に人間をそれに従属させるような物象的な世界として立ち現れている)ことを考えれば、こうしたアナロジーは理解できます。近代的な市民社会も個々の人間が個々バラバラな市民としてその構成員になって形成する社会ですが、市民社会そのものを個々の市民がコントロールしているのではなく、むしろ彼ら自身の関係である市民社会は彼ら自身からは自立して、反対に彼らをしぼり統制する社会として立ち現れています。商品世界もまったく同じだといえるからです。

次は(0)の文節につけられた〈注23〉についてですが、これも一応検討しましたので、紹介しておきます。しかし今回は文節ごとの考察は省略します。

【注23】

〈(23)それゆえ、リンネルの価値を上着で表す場合にはリンネルの上着価値と言い、穀物で表す場合にはリンネルの穀物価値と言ったりするのである。このような表現は、どれもみな、上着や穀物などという使用価値に現われるものはリンネルの価値だということの意味している。「各商品の価値は、交換にさいしてのその商品の割合を表わすのだから、われわれは、各商品の価値を、その商品が比較される商品がなんであるかにしたがって……穀物価値とか布価値とか呼ぶことができるであろう。したがってまた、そこにある商品と同じ数の違った価値の種類があつて、それらはみな等しく真実であり、また等しく名目でもある。」(『価値の性質、尺度および諸原因に関する批判的論議。主としてリカードとその追隨者たちの諸著作に関連して。意見の形成と公表に関する試論の著者の著』、ロンドン、一八二五年、三九ページ。〔日本評論社「世界古典文庫」版、鈴木訳『リカード価値論の批判』、五四ページ。])当時イギリスで大いに騒がれたこの匿名の書の著者S・ペーリは、このように同じ商品価値の種々雑多な相対的表現を指摘することによって、価値の概念規定をすべて否定し去つたと妄信している。それにしては、彼自身の偏狭さにもかかわらず、彼がリカード学説の急所に触れたことは、たとえば「ウェストミンスター・レビュー」のなかで彼を攻撃したりカード学派の立腹がすでに証明したところである。〉

だからリンネルの価値を上着で表す場合は、リンネルの上着価値といい、穀物で表す場合にはリンネルの穀物価値と言ったりするので。そしてこのような表現は、上着や穀物などという使用価値に現われるものはリンネルの価値だということの意味しています。こうしたことから、リカードを批判するペーリは商品の内在的な価値を否定し、商品の価値は、その時々の商品が交換される割合を表すだけだから、だからわれわれはその商品が比較される他の商品の種類によって穀物価値とか布価値というのだ、それらはすべて異なる種類の商品の数だけのその商品の価値の種類があることを示しており、よってそれはすべて等しく真実であり、名目でもある、という主張をしたのです。このようにペーリは種々雑多な商品の価値表現を羅列することによって、価値の概念規定をすべて否定したと妄信したのです。それは確かに彼の偏狭さを示すものですが、しかし彼が、労働時間による価値規定を主張しながら、価値の形態には何ら注意を与えなかったりカード学説の急所に触れたことは確かであり、それはリカード学派が彼を激しく攻撃したことによっても証明されています。

ここで「リカード学説の急所」というのは何かが問題になりました。これはリカードが価値の大きさをそれに対象化されている労働時間に還元したが、その形態には注意を払わなかったことではないか、との説明がありました。もう少し『剰余価値学説史』から関連すると思われる部分を紹介しておきましょう。

「リカードは、商品の相対的価値(または交換価値)は「労働の量」によって規定されるということから出発する。(われわれは、リカードが使っている価値という言葉のいろいろな意味を、結びのところで検討することができる。ペーリの批判、同時にリカードの欠陥は、これに基づいている。)この「労働」の性格は、これ以上には研究されていない。もし二つの商品が等価である――または一定の比率で等価である。または、同じことであるが、それらが含んでいる「労働」量に応じて大きさが違ふ――とすれば、その場合には、それらの商品は、それらが交換価値であるかぎりでは、実体の点では、相等しいということも明かである。それらの商品の実体は労働である。だからこそ、それらの商品は「価値」なのである。その大きさは、それらの商品がこの実体をより多く含むか、または、より少ししか含まないかに応じて違っている。ところで、リカードは、この労働の姿態――交換価値をつくりだすものとしての、または交換価値で表わされるものとしての、労働の特殊な規定――を、この労働の性格を研究していない。したがって彼は、この労働と貨幣との関連を、すなわちこの労働が貨幣として表わされなければならないことを、理解していない。したがって彼は、商品の交換価値の労働時間による規定と、諸商品が貨幣形成にまで進む必然性とあいだの関連を、まったくつかんでいない。ここから彼のまちがった貨幣理論が出てくる。彼の場合には、はじめからただ価値の大きさだけが問題なのである。すなわち、商品の価値の大きさはその生産に必要な労働量に比例するということがただ問題なのである。ここからリカードは出発する。彼は、A・スミスを自分の出発点として、はっきり指摘している(「リカード『経済学および課税の原理』第一章第一節)。

ところで、リカードの方法は、次のようなものである。すなわち、彼は、商品の価値の大きさは労働時間によって規定されるということから出発し、次いで、その他の経済的な諸関係や諸範囲がこの価値の規定に矛盾するかどうか、または、それらがこの価値の規定をどの程度修正するか、を研究する。経済学の歴史におけるこのようなやり方の歴史的な正当性とその科学的な必然性とは一見しただけで明らかであるとはいえず、同時にまた、その科学的な不十分性も一見しただけで明らかである。この不十分性は、単に叙述の仕方の中に(形式的に)現われるだけでなく、まちがった結論に導くものである。というのは、それは必要な諸中間項を飛び越えて直接的な仕方では経済学的諸範囲の相互の整合を証明しようとするのだからである。〉(26巻1209-210頁)

「ペーリは、はじめのほうにあげた著書のなかで次のように言う。「彼ら」(リカードとその追隨者たち)「は、価値を二つの物のあいだの関係とはみなさないで、それがある一定の労働量によって生産された積極的な所産とみなしている。」(「ペーリ『価値の性質、尺度、諸原因に関する批判的論議、……』)三〇ページ。〔世界古典文庫版、鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』、日本評論社、四七ページ。]) 彼らは「価値をなにか内在的かつ絶対的なものと」(同前、八ページ〔鈴木訳、三二ページ〕)みなしている。

あとのほうの非難がでてくるのは、リカードの欠陥の多い叙述のためである。というのは、彼は、価値をその形態――実体の実体としての労働が取るところの特定の形態――に関して研究することをまったくやらないで、ただ価値の大きさを、諸商品の価値の大きさの相違をひき起こすところの、この抽象的――一般的、そしてこの形態においては社会的な労働の量を研究しているだけだからである。もしそうでなかったなら、ペーリは次のことがわかったであろう。す

なわち、すべての商品が交換価値であるかぎり、それらの商品はただ社会的労働時間の相対的な表現にすぎないということによって、価値概念の相対性はけっして廃棄されないということ、また、すべての商品の相対性は、けっしてただこれらの商品の相互に交換される関係だけから成っているのではなく、これらのすべての商品が、それらの実体であるこの社会的労働にたいしてもつ関係からも成っているのだということ、である。〉（26巻11220頁）

◎相対的価値形態の量的考察

次は、〈全体的な、または展開された価値形態〉の相対的価値形態の量的考察です。

[2]

〈(1)第一の形態、20エルのリンネル＝1着の上着 では、これらの二つの商品が一定の量的割合で交換されるということは、偶然的事実でありうる。(2)これに反して、第二の形態では、偶然的現象とは本質的に違っていてそれを規定している背景が、すぐに現われてくる。(3)リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄など無数の違った所持者のものである無数の違った商品のどれで表わされようと、つねに同じ大きさのものである。(4)二人の個人的商品所持者の偶然的な関係はなくなる。(5)交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換割合を規制するのだ、ということが明らかになる。〉

(1) 第一の形態、つまり〈A 単純な、個別的な、偶然的な価値形態〉である、20エルのリンネル＝1着の上着では、これらの二つの商品が一定の量的割合で交換されるということは、偶然的事実であり得ます。

(2) これに対して、第二の形態、つまり〈B 全体的な、または展開された価値形態〉では、偶然的現象とは本質的に違っていることを示唆しています。つまりそれを規制している背景が、すぐに現われてくるのです。ここで〈それを規制している背景〉というのは何を指しているのが問題になりましたが、これはその後説明されていることであるが、二つの商品が交換される割合を規制するのは、二つの商品の価値量だということであろう、ということになりました。

(3) リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄などの無数の違った商品所持者のものである無数の異なる商品のどれで表されようと、常に同じ大きさかであることが分かってきます。

(4)、(5) だから二人の個人的な商品所持者の偶然的な関係はなくなり、交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換割合を規定するということが明らかになっています。

「単純な価値形態の全体」のところで、〈商品の単純な価値形態は、同時に労働生産物の単純な商品形態であり、したがってまた、商品形態の発展は価値形態の発展と一致する〉と指摘されていたことが、ここでは具体的に論じられているように思えます。つまり、明らかにマルクスは単純な価値形態（第一形態）から展開された価値形態（第二形態）への発展を、歴史的な商品形態の発展との関連のなかで考察し、論じているように思えるのです。

ところが、久留間敏造著『貨幣論』では「簡単な価値形態はどういう意味で『偶然的』であるのか」という項目のなかで、「安易に歴史的發展と結びつけてはならない」とサブタイトルで書かれていることが紹介され、この点、どのように考えたらよいか、少し議論になりました。『貨幣論』から少し紹介してみましよう。

まず大谷氏が〈またこの『偶然的な』というのは、価値形態の歴史的發展の過程と関連づけて理解することができるのでしょうか。そのような見解もあるように思いますが〉（同書89頁）と問題を提起したのに対して、久留間氏は、『資本論』の冒頭のパラグラフを紹介して、〈これによっても、ここでの分析の対象とされている商品は「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富」の「基本形態として現われる」商品であって、商品生産がまだ一般化していないで生産物が偶然的に商品になるような場合の商品でないことは明らかだと思います〉（同）と応えています。そして単純な価値形態を「偶然的」とするのは〈これはとりもなおさず、展開した価値形態の場合に等価値形態を構成していた無数の商品種類のうちから、たまたま上着を取り出してきたにすぎません。……そういう意味で、マルクスは、簡単な価値形態を「偶然的な価値形態」とまっているのでしょうか〉（同90頁）と応えています。そして〈このいわゆる偶然的な価値形態は歴史的發展の過程と関係づけることができるものなのかどうか、とう質問ですが、こうしたことが問題になるのは、恐らく、同じ『資本論』のなかに次のような記事が見いだされるからだと思います〉（同91頁）と述べて、次の一文が紹介されています。

〈第一の形態は、1着の上着＝20エルのリンネル、10ポンドの茶＝1/2トンの鉄 などという価値等式を与えた。上着価値はリンネルに等しいもの、茶価値は鉄に等しいものというように表現されるのであるが、しかし、リンネルに等しいものと鉄に等しいものとは、すなわち上着や茶のこれらの価値表現は、リンネルと鉄とが違っているように違っている。この形態が実際にはっきりと現われるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである。〉（全集版89頁）

そして次のように述べています。

〈なるほどここには、「この形態」は「労働生産物が偶然的な……交換によって商品に転化される最初の時期」に「実際に現われる」と書かれています。ここで「この形態」と言っているのは、左右両辺のどちらもただ一つの種類の商品がおかれている、等式としての形態であって、これを、商品の価値表現の基本的な形態としての簡単な価値形態と同じだと読んだら、とんでもない間違いになるでしょう。〉（同92頁）

しかしこのような久留間氏の説明は納得が行きません。久留間氏が紹介している引用文は、価値形態の次の発展段階である〈C 一般的価値形態〉に出てくる一文なので、当然、私たちも、そこで問題にするとは思いますが、少し今の段階で触れておかなければ、マルクスがここで「この形態」と述べているのは、明らかに「第一の形態」のことであり、そしてマルクスが「第一の形態」と述べているのは、われわれが今問題にしているパラグラフを見ても、それは「単純な価値形態」を指していることは疑うことのできないことだからです。

だからマルクスは明らかに単純な価値形態から展開された価値形態、さらに一般的価値形態への発展を商品形態の歴史的な発展と関連させて論じていることは明らかなのです。では、どうしてマルクスは資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富の基本形態としての商品の分析を行っているのに、それを歴史的な商品形態の発展と関連させて考察しているのでしょうか。それはマルクスの「経済学の方法」と密接に関連しています。マルクスは『経済学批判要綱』のなかで、それに関連して次のように述べています。

〈他方――これはわれわれにとってはるかに重要なことであるが――、われわれの方法は、歴史的考察が入って来なければならない諸地点を、言い換えれば、生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないブルジョア経済が自己を超えてそれ以前の歴史的な生産諸様式を指し示すにいたる諸地点を、示している。だから、ブルジョア経済の諸法則を展開するためには、生産諸関係の現実の歴史を記述する必要はない。とはいえ、この生産諸関係を、それ自体歴史的に生成した諸関係として正しく観察し演繹するならば、それはつねに、この体制の背後にある過去を指し示すような、最初の諸方程式――例えてみれば自然科学における経験的諸数値のようなもの――に到達するのである。とすれば、これらの示唆は、現在あるものを正しく把握することあいまって、過去の理解――これは一つの独立した仕事であって、これにもいずれば取り組みたいのだが――への鍵をも提供してくれる。同様にしてこの正しい考察は、他方で、生産諸関係の現在の姿態の立場――それゆえ未来の予示、生成していく運動――が示唆されるにいたる諸地点に到達する。一方では前ブルジョア的諸段階が、たんに歴史的な、すなわちすでに止揚された諸前提として現われ、他方では今日の生産諸条件が、自己自身を止揚する諸条件として、それゆえまた、新たな社会状態のための歴史的な諸前提を指定する諸条件として現われるのである。〉（『経済学批判要綱』華稿集②100-1頁、強調＝下線はマルクス）

つまりそれ自体が歴史的存在である近代ブルジョア社会の正しい認識は、不可避に一方では対象の歴史的に遡った過去の諸関係へと私たちを導くのであり、他方ではその未来の諸関係へも、すなわちそれ自身の中に自己を止揚する諸条件が生まれつつあることを私たちに示すのです。だから、私たちの認識は対象の歴史性にまで至ってこそ本当に正しいものになりうるということができるとは、だから冒頭の商品の分析で対象にしているのは、確かに資本主義的生産様式が支

配的に行われている社会における商品なのですが、しかし資本主義的生産様式そのものも長い過去を持つ存在であり、歴史的に生成し、発展し、そして消滅していく限界あるものです。だからその正しい観察と分析は不可避に、それぞれの諸範疇自身（それらもまたそれぞれに固有の歴史を持っている）の過去へと私たちを誘導するのです。こういっわけ、マルクスは価値形態の発展は商品形態の発展と一致すると指摘し、両者を関連づけて論じているのだと思います。

◎特殊の等価形態

これまで、展開された価値形態の「相対的価値形態」の考察でしたが、今度は、「等価形態」の考察です。「展開された価値形態」の等価形態の特徴は、その「特殊」なところにあります。よって、次の小見出しは「二 特殊の等価形態」となっています。まずそのパラグラフの紹介をしましょう。

[1]

〈(I)上着や茶や小麦や鉄などの商品はどれもリンネルの価値表現では等価物として、したがってまた価値体として、認められている。(II)これらの商品のそれぞれの特定の現物形態は、いまでは他の多くのものと並んで一つの特殊の等価形態である。(III)同様に、いろいろな商品体に含まれているさまざまな特定の具体的な有用な労働種類も、いまでは、ちょうどその数だけの、人間労働そのものの特殊な実現形態または現象形態として認められているのである。〉

(I) 展開された価値形態においては、等価形態に置かれる諸商品、上着や茶や小麦や鉄などは、いずれもリンネルの価値の等価物として、したがって価値体として、つまりその使用価値、自然姿態が価値を表すものとして、認められています。

(II) これらの諸商品のそれぞれの特定の現物形態は、いまでは他の多くの現物形態と並べられることによって、一つの特殊な等価形態となっています。

(III) そしてそのことは、同様に、それぞれの商品体（諸使用価値）に含まれているさまざまな特定の具体的な有用労働種類も、やはりいまでは、つまり他のさまざまな有用労働と並ぶことによって、ちょうどその数だけの、人間労働そのもの（人間労働一般）の特殊な実現形態または現象形態として認められているのです。

ここで「展開された価値形態」の等価形態が、特殊の等価形態であることの意味について少し議論になりました。ヘーゲルの論理学ではその概念論の最初の概念そのものの三つのモメントとして、普遍、特殊、個別が検討されていますが、これとどのような関係にあるのか、ということも話題になりました。

「展開された価値形態」の等価形態が「特殊」であるのは、さまざまな無限の等価物が並列された中での「特定のもの」という意味だと思います。それに対して、単純な価値形態の等価形態が「個別」であるのは、この場合も確かに特定の商品が等価物に置かれるという点では同じですが、しかし、この場合はたまたまその商品が等価形態に置かれたにすぎず、別の他の多くの商品が同時に等価物に置かれていることを前提していません。ところが「展開された価値形態」の等価形態は、そうした無限の諸商品による等価形態を前提した上での、特定の等価形態だという意味で「特殊の等価形態」なのです。

ヘーゲル概念論の普遍、特殊、個別と無理やり関連づける必要性もないのですが、マルクス自身は単純な価値形態の全体を〈一連の変遷を経てはじめて価格形態に成熟するこの萌芽形態〉と述べており、それが発展して貨幣形態になるとの考えがあることは明らかだと思います。ヘーゲルの「個別」は自己発展する主体としての事物の意味がありますが、その限りでは個別的な等価形態が発展し、特殊の形態から一般的形態へと発展して、貨幣形態へと移行するという考えがマルクスにもあったことは確かではないか、という意見が出されました。

【付属資料】

ここでは関連すると思われるものを各文献から紹介しておきます。

●表題

《初版本文》

〈II 相対的な価値の第二の、または展開された形態。〉

《初版付録》

〈II 全体的な、または展開された価値形態〉

《第二版》

〈B 総和のあるいは発展した価値形態〉

《フランス語版》

〈B 総和の、あるいは発展した価値形態〉

●展開された価値形態の例示に関連して

《初版本文》

〈20 エレのリンネル = 1 着の上着 または = u 量のコーヒー または = v 量の茶 または = x 量の鉄 または = y 量の小麦 または = z 量の商品 A = u 量の商品 B または = v 量の商品 C または = w 量の商品 D または = x 量の商品 E または = y 量の商品 F または = 等々)。〉

《初版付録》

〈20 エレのリンネル = 1 着の上着 または = 10 ポンドの茶 または = 40 ポンドのコーヒー または = 1 クォーターの小麦 または = 2 オンスの金 または = 1/2 トンの鉄 または = 等々。〉

《第二版》

〈z量の商品A=u量の商品B または=v量の商品C または=w量の商品D または=x量の商品E または=等々(20エルのリンネル=1着の上着 または=10ポンドの茶 または=40ポンドのコーヒー または=1クォーターの小麦 または=2オンスの金 または=1/2トンの鉄 または=等々)〉

《フランス語版》

〈z量の商品A=u量の商品B、または=v量の商品C、または=x量の商品E、または=その他(20メートルのリンネル=1着の上衣、または=10ポンドの茶、または=40ポンドのコーヒー、または=2オンスの金、または=1/2トンの鉄、または=その他)〉

●初版本文と同付録にのみある小見出しとパラグラフ

《初版本文》

〈さしあたりまず明らかに第一の形態は第二の形態の基礎的要素をなしている。なぜならば、後者は20エルのリンネル=1着の上着、20エルのリンネル=u量のコーヒー 等々ま というような多数の簡単な相対的な価値表現から成り立っているからである。〉(60頁)

《初版付録》

〈(一) 列の無限性〉

〈このような、単純な相対的な諸価値表現の列は、その性質上、いくらかでも延長されることができ、言い換えれば、けっして終結することがない。なぜならば、絶えず新たな商品種類が出現して、どの新たな商品種類も新たな価値表現の材料となるからである。〉(156頁)

●第1節小見出し

《初版付録》

〈(二) 展開された相対的価値形態〉

《第二版》

〈(1) 発展した相対的価値形態〉

《フランス語版》

〈(a) 発展した相対的価値形態〉

●第1節の【1】パラグラフに関連して

《初版本文》

〈20エルのリンネル=1着の上着 という表現では、上着はリンネルにおいて対象化されている労働の現象形態として認められていた。こうして、リンネルのなかに含まれている労働は、上着のなかに含まれている労働に等置され、したがってまた同種の人間労働として規定されたのである。とはいえ、この規定は明示的には現われていなかった。第一の形態はリンネルのなかに含まれている労働をただ裁縫労働にたいしてのみ直接に等置している。第二の形態はこれとは違っている。リンネルは、その相対的な諸価値表現の無限な、いくらかでも延長される列において、リンネル自身のなかに含まれている労働の単なる諸現象形態としてのありとあらゆる商品体に関係している。それだから、ここではリンネルの価値がはじめて真に価値として、すなわち人間労働一般の結晶として、示されているのである。〉(60-1頁)

《初版付録》

〈一商品の、たとえばリンネルの、価値はいまや商品世界のすべての他の要素で表わされている。どの他の商品体でもリンネル価値の鏡となる。こうして、この価値そのものがはじめて真に無差別な人間労働の凝固として現われる。なぜならば、リンネル価値を形成する労働は、それとはどの他の人間労働でも、たとえその労働がどんな現物形態をもっていようと、したがってまた上着、小麦、鉄、金、等々のどれに対象化されようと、同等と認められるところの労働としていまや明言的に示されているからである。それだから、リンネルは、その価値形態によって、いまではまた、もはやただ単一な他の商品種類にたいしてのみではなく、商品世界にたいして社会的な関係のなかに立っもいるのである。商品としてリンネルはこの世界の市民である。同時に、その諸表現の無限の列のなかには、商品価値はそれが現われるところの使用価値のどんな特殊な形態にたいしても無関係である、ということが示されているのである。〉(156-7頁)

《フランス語版》

〈一商品、たとえばリンネルの価値は、いまでは、他の無数の要素のうちに表現される。その価値は、まるで鏡に映されるかのように他のすべての商品体のうちに反映される(22)。〉(35頁) 〈他の労働はどれも、それが裁断、種まき、鉄または金の採掘などな自然形態であろうとも、いまでは、リンネルの価値のうちに凝固された労働、したがって、人間労働という性格を示す労働、に等しいと断言される。総和の相対的価値形態は、一商品をすべての商品との社会的関係のもとに置く。同時に、相対的価値表現の際限ないこの系列は、商品の価値が使用価値のどんな特殊な形態をも無差別に帯びる、ということを証明する。〉(36頁)

●「注23」に関連して

《フランス語版》

〈2〉それゆえ、人は、リンネルの価値を上衣で表現するばあいにはリンネルの上衣価値と
言い、小麦で表現するばあいにはリンネルの小麦価値、等々と言う。このような表現はどれも、
これらさまざまな使用価値のうちに現われるものはリンネル自身の価値である、ということ意味している。

「一商品の価値は、その交換関係を表示している。したがって、われわれは、この商品が比較される商品に応じて、その小麦価値とか上衣価値とか言うことができるのである。そしてそのばあいには、無数の価値の種類、すなわち、現に存在している商品の種類と同数の価値の種類があり、それらはすべてひとしく実在的でもあり、ひとしく名目的でもある」（『価値の性質、尺度、および原因にかんする批判的論文。主としてリカード氏やその追随者たちの著作に関連して。諸見解の形成、……にかんする試論の著者の著』、ロンドン、一八二五年、三九ページ）。S・ペーリは、当時イギリスで大騒ぎをおこしたこの匿名の著作の著者であるが、彼は、同じ商品の価値についてさまざまな相対的表現をこのように列挙することによって、価値概念の肯定をどれも壊滅させたと思ひこんでいる。彼の精神がどんなに狭量であろうとも、やはり彼の精神は、往々リカード理論の欠陥をあばいた。このことを証明するものは、リカード学派がたとえ『ウェストミンスター・レビュー』のなかで、彼を憎々しげに攻撃したことである。〉（35-6頁）

●第1節の【2】パラグラフに関連して

《初版本文》

〈第一の形態 20エルのリンネル=1着の上着 においては、これらの二つの商品がこのような特定の量的な割合で交換されうるということは、偶然的な事実に見えることがありうる。これに反して、第二の形態においては、この偶然的な現象とは本質的に区別されていてこの現象を規定している背景がすぐさま明らかに見えてくる。リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄などで示されていても、つまりまったく違った所有者たちの手にある無数に違った商品で示されていても、つねに同じ大きさのままである。二人の個別的な商品所有の偶然的な関係はなくなってしまふ。交換が商品の価値の大きさを規定するのではなくて、逆に商品の価値の大きさが商品の価値のいろいろな交換の割合を規定するのだ、ということが明白になるのである。〉（60頁）

《フランス語版》

〈20メートルのリンネル=1着の上衣 という第一形態では、これらの二商品がこの一定の比率で交換可能であるのは、偶然であるように見えるかもしれない。これに反して、第二形態では、この外観を包み隠しているものが、すぐにわかる。リンネルの価値は、衣服やコーヒーや鉄で、すなわち、この上なく多様な交換者に属している無数の商品によって表現されても、つねに同じである。交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換関係を規制する、ということが自明になる。〉36頁）

●第2節の小見出し

《初版付録》

〈(三) 特殊な等価形態。〉

《フランス語版》

〈(b) 特殊な等価形態〉

●第2節本文に関連して

《初版付録》

〈上着や茶や小麦などの商品は、いずれもリンネルの価値表現においては等価物として、したがってまだ価値体として、認められている。これらの商品のそれぞれの特定の現物形態は、いまでは他の多くのものと並んで一つの特殊な等価形態である。同様に、いろいろな商品体に含まれているさまざまな特定の、具体的な、有用な労働種類も、ちょうど同数の、単なる人間労働の特殊な実現形態または現象形態として認められているのである。〉（157頁）

《フランス語版》

〈上衣、小麦、茶、鉄等、一つ一つの商品が、リンネルの価値表現では等価物として役立つ。これら商品のそれぞれの自然形態がいまでは、他の数多くの商品とならんで、一つの特殊な等価形態になる。これと同じように、さまざまな商品体のなかに含まれているさまざまな有用労働種類も、それと同数の、純粹で単純な人間労働の特殊な実現形態あるいは表示形態を、表わしている。〉（36頁）

第27回「『資本論』を読む会」の案内

毎日、うだるような暑さが続きますが、暦の上では、もう「立秋」だそうです。そういえば、熱帯夜も朝方は心なしか過ごしやすくなったような気がする、今日この頃ではあります。

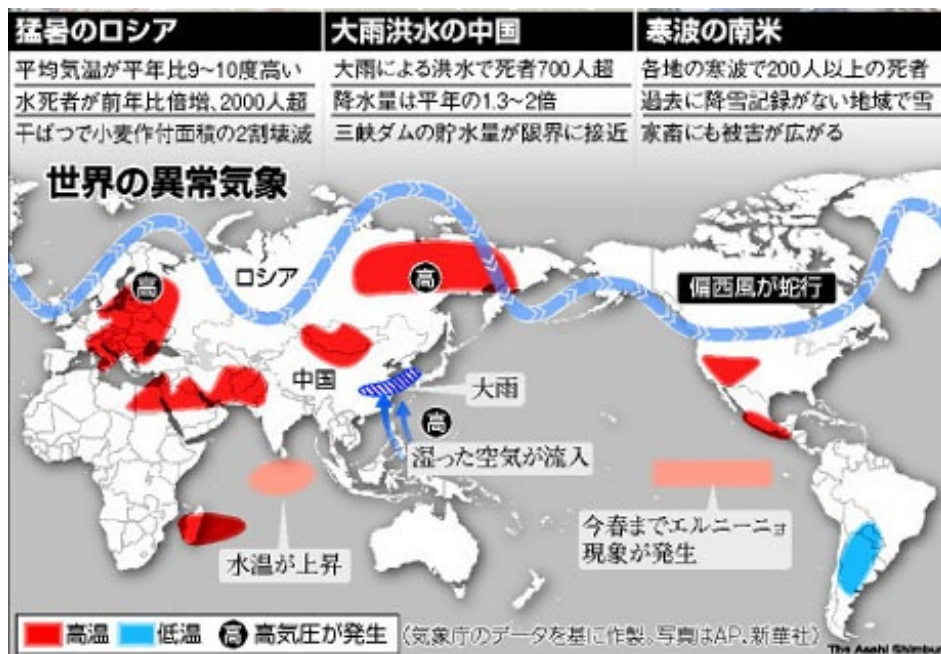
とにかく記録的な猛暑日が日本列島を覆っています。しかし異常な気象状況は、世界を見渡すと日本の比ではないような気がします。

ロシアでは先月末、首都モスクワの気温が130年ぶりに37.4度を記録し、暑さによって7月31日には369カ所で山火事が発生、8月1日には774カ所に拡大したと言います（火災による死者は34人に）。森林や泥炭火災によるスモッグが都市部を覆っているとか。

またパキスタン北西部では、記録的な豪雨が発生。洪水による死者が1100人を超え、孤立状態になっている被災者が数万人に上るといわれています。

洪水はお隣の中国でも。7月初旬から続く豪雨によって全国的な被害が発生。当局は、「27の省・自治区・直轄市で1億1300万人が被災し、701人が死亡、347人が行方不明。倒壊家屋は64万5500棟に達し、経済損失は1422億元（1元＝13円）、805万人を緊急避難させている」と発表。洪水被害救済対策に人民解放軍や武装警察、民兵ら200万人を動員して現地に対応に当たらせていると報じられています。

このような世界的な異常気象——集中豪雨、竜巻、熱波、寒波等々——は地球温暖化の進行とともに増加してきたのはいうまでもありません。しかし今年の異常気象の直接の原因としては、偏西風の蛇行が固定化していることが指摘されています。地球温暖化は赤道付近と極地方との気温差を小さくし、地球上の大気の流れに変化を起こしているのです。熱波や寒波、長雨という異常気象には、対流圏上空のジェット気流の蛇行が固定化するブロッキング現象が関わっているそうです。地球温暖化の進行は、地球の中緯度地帯（日本もこの中に位置します）で、このブロッキングの発生を増加させ、さまざまな異常な気象を生み出しているというのです。



『毎日新聞』から

それにしても、世界中の異常な気象の諸現象やその被害状況があつという間に世界中を駆けめぐり、詳細なデータがインターネットから入手できます。またそれを引き起こす地球規模の大気運動メカニズムも今では科学的に解明されて、しかもその時々刻々のデータもインターネットで公開されています。

確かに地球温暖化などの異常な気候変動は、地球規模に拡大された資本主義の無政府的な生産によるといえますが、そのことは同時に、資本主義的生産様式の発達、その解決の諸条件も生み出しつつあるともいえるわけです。人類はその社会的な物質代謝活動で地球規模の自然条件を左右するまでになってしまったのですが、しかしそれは同時にわれわれが地球規模で自然と人間活動との間の物質代謝を意識的に統制し、コントロールしなければならないこと、またそれができるだけの科学的・技術的諸条件も、高度に発達した生産力によって作り出してきたことをも示しているわけです。

マルクスは『経済学批判』の「序言」で次のように述べています。

〈一つの社会構成は、それが十分包容しうる生産諸力がすべて発展しきるまでは、決して没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されおわるまでは、決して古いものにとって代わることはない。それだから、人間はつねに、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば、詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが、つねに見られるであろうからだ。〉 (全集13巻7頁)

地球規模の異常気象を引き起こしている人類は、同時にそれを解決する物質的諸条件もすでに生み出しているともいえるでしょう。問題はその主体的な条件である世界の労働者階級の闘いが発展していくことです。その条件の形成のためにも、ともに『資本論』を読んでみませんか。

第27回「『資本論』を読む会」の報告

◎残暑、厳しいおり

今年の暑さは記録的でした。大阪では9月になっても、まだ猛暑日が続いています。8月29日の第27回「『資本論』を読む会」の開催日も厳しい残暑のなかで行われました。

“猛暑特需”というものがあるらしく、連日の猛暑様々でアイス製造業など一部の業界は潤っているのだそうです。しかし“猛暑特需”があるなら、“猛暑枯れ”もあるのではないのでしょうか。植木の話ではありません。こんな猛暑日の昼日中にこのことと炎暑のなかを出かけようなど誰も思わないだろうということです。そのためともいえませんが、おかげで第27回「『資本論』を読む会」は、常連の参加者さえ姿を見せず、いつものことながら寂しい開催になりました。

しかしまあ、愚痴を言っても始まりません。今回は〈B 全体的な、または展開された価値形態〉の〈三 全体的な、または展開された価値形態の欠陥〉からやりましたが、Bの最後まで終えることができました。さっそく、その報告に移りましょう。

◎どうして「欠陥」なのか？

まず、今回の表題〈三 全体的な、または展開された価値形態の欠陥〉が問題になりました。つまりどうして「欠陥」なのか？ というのです。

前回までは〈B 全体的な、または展開された価値形態〉の相対的価値形態と等価形態について、それぞれ考察が行われましたが、今回は、それらの考察を踏まえて、それらを統一した上で、〈全体的な、または展開された価値形態の欠陥〉が考察の対象になっています。しかしBの全体としての考察が、どうしてその「欠陥」の考察になるのでしょうか。また「欠陥」というのは、何から較べての「欠陥」なのでしょう？

それは私たちが先に見た、Bの相対的価値形態（その質的および量的考察）と等価形態のそれぞれの考察は、A（単純な価値形態）の考察を踏まえたB（展開された価値形態）に固有の課題を明らかにするものであると指摘しましたが、それは同時にAの不十分な点が如何にしてBにおいて克服されているのかの考察でもあったのです。Aの最後に次のように言われていました。

〈単純な価値形態、すなわち一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである〉（全集版83頁）

つまり単純な価値形態の「不十分さ」というのは、〈一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態としての不十分さ〉なのです。つまり価値形態が価格形態（＝貨幣形態）にまで発展することによって、価値はその概念にもっとも相応しい形態を獲得し、自立した姿態を得るとともに、諸商品を質的に同じく量的に比較可能なものとして表すことができるようになるのですが、価値形態の各発展段階は、だからそうしたもとも発展した貨幣形態からみた場合に、いまだその「不十分さ」や「欠陥」があると言うことなのです。だから単純な価値形態の最後にその「不十分さ」が指摘されたように、展開された価値形態の場合も、その最後に、その欠陥が指摘され、次の発展段階への移行の必然性が明らかにされるという展開になっているわけです。

とにかく、具体的に、以下、文節ごとに詳しく見て行くことにしましょう。

〈(1)第一に、商品の相対的価値表現は未完成である。というのは、その表示の列は完結することがないからである。(1)一つの価値等式が他の等式につながってつくる連鎖は、新たな価値表現の材料を与える新たな商品種類が現われるごとに、相変わらずいらいでも引き伸ばされるものである。(1)第二に、この連鎖はばらばらな雑多な価値表現の多彩な奇木細工をなしている。(2)最後に、それぞれの商品の相対的価値が、当然そうならざるをえないこととして、この展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限の価値表現列である。(3)――展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態に反映する。(4)ここでは各個の商品種類の現物形態が、無数の他の特殊的等価形態と並んで一つの特殊的等価形態なのだから、およそただそれぞれが互いに排除しあう制限された等価形態があるだけである。(5)同様に、それぞれの特殊の商品等価物に含まれている特定の具体的な有用な労働種類も、ただ、人間労働の特殊的な、したがって尽きるところのない現象形態でしかない。(6)人間労働は、その完全な、または全体的な現象形態を、たしかにあの特殊の諸現象形態の総範囲のうちにもっている。(7)しかし、ここでは人間労働は統一的な現象形態をもってはいないのである。〉

〈全体的な、または展開された価値形態の欠陥〉も、やはり相対的価値形態と等価形態にわけてそれぞれが考察されています。まず相対的価値形態の欠陥です。

(1)、(1)第一に、商品の相対的価値表現は、未完成です。というのは、その表現の列は完結することがないからです。というのは、新たな商品種類が現われるごとに、価値等式の列は、相変わらずいらいで引き伸ばされて、限りがないからです。

(1) 第二に、この価値表現の繋がりは、さまざまな表現の寄せ集めのままです。

〈この第二形態は同じ商品の価値のために相対的な諸表現の雑多さわかる奇木細工を与える〉（初版本文、国民文庫版58頁）

(2) 最後に、それぞれの商品の相対的価値は、この展開された形態で表現されるならば、当然のことながら、どの商品の（展開された）相対的価値形態も、他のどの商品の（展開された）相対的価値形態とも違った無限の価値表現の列になります。つまり諸商品それぞれが違った展開された価値形態で自らの価値を表現するわけですが、それらがすべて違っているわけです。

次は等価形態の欠陥です。

(3) 展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態の欠陥として反映します。

(4) ここでは各個の商品の現物形態が、無数の他の特殊的等価形態と並んで、一つの特殊的等価形態ですから、それらは互いに排除しあう限られた等価形態があるだけです。

(5) 同じように、それぞれの特殊な等価物に含まれている特定の具体的な有用労働種類も、ただ人間労働の特殊的な、したがって尽きることのない現象形態でしかありません。

(6)、(7) 人間労働は、その完全な、または全体的な現象形態を、特殊の諸現象形態の総範囲のうちにもっていますが、しかし、人間労働は統一的な現象形態をまだ持っていないのです。

この部分はフランス語版では次のようになっています。

〈人間労働は確かに、その完全なあるいは総和の表示形態を、その特殊な形態の総体のうちにもっている。だが、形態と表現との統一が欠けている。〉（36-7頁）

そして山内清氏はこの部分をフランス語版と関連させて次のように説明しています。理解をより深めるために、紹介しておきましょう。

〈仏語版がいうように、第二形態は、その形態的内実と形態的形式とが不一致である。第二形態は、その形態にある限りすべての商品の質的同等性を表現するが、そういう形態的内実を、全体性、総範囲性という形態的形式で示しているにすぎず、本来そうあるべき、単純性、統一性、共同性の形式をもっていないのである。〉（山内清著『資本論商品章詳注』97頁）

◎全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行

次のパラグラフの間に初版付録には〈(五) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行〉という表題があることが指摘されました（国民文庫版158頁）。つまりここからは、価値形態の次の発展段階への移行が問題になるわけです。

〈(4)とはいえ、展開された相対的価値形態は、単純な相対的価値表現すなわち第一の形態の諸等式の総計から成っているにすぎない。

(4)たとえば、
20エレのリンネル＝1着の上着
20エレのリンネル＝10ポンドの茶
などの総計からである。〉

(4)、(4)しかし、展開された相対的価値形態は、単純な相対的価値形態、すなわち第一形態の諸等式の総計から成っているにすぎません。すなわち、

20エレのリンネル＝1着の上着
20エレのリンネル＝10ポンドの茶
などの総計からです。

〈(4)しかし、これらの等式は、それぞれ、逆にすればまた次のような同じ意味の等式をも含んでいる。

(4)すなわち
1着の上着＝20エレのリンネル
10ポンドの茶＝20エレのリンネル
などを含んでいる。〉

(4)、(4)そして、これらの等式は、それぞれを逆にすれば、次のような同じ意味の等式を含んでいます。すなわち、

1着の上着＝20エレのリンネル
10ポンドの茶＝20エレのリンネル
という等式をです。

〈(4)じっさい、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。――(4)そこで、20エレのリンネル＝1着の上着 または＝10ポンドの茶 または＝etc. という列を逆にすれば、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆関係を言い表わしてみれば、次のような形態が与えられる。〉

(4)そして、実際の交換関係を考えてみますと、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換して、自分の価値を一連の他の商品で表現するとしますと、それは必然的に他の多くの商品の所持者も彼らの商品を同じ第三の商品であるリンネルと交換しなければなりませんし、だから彼らはいろいろな商品の価値をリンネルで表現しなければならないことになります。

ところでここでマルクスがリンネルを〈同じ第三の商品〉と述べていることに異論を唱えている人がいます（山内清前掲書）。つまり〈リンネルは、第二形態では当事者の一方であるから、「第三の」は疑問〉（前掲99頁）だということです。しかし上記の一文をよく読むと、マルクスは〈彼らのいろいろな商品の価値を〉と述べています。つまりリンネルと交換して自分たちの商品の価値を表現する〈他の多くの商品所持者〉にとっては、彼らの商品相互の関係から見ると、リンネルは〈同じ（あるいは共通の）第三の商品〉になると述べているのです。ここでは、すでに表式が逆転して、リンネルがすでに一般的等価値形態になっているのですから、こうした表現はそれを示唆しているものと考えられ、何ら問題はないと思います。

(4)だから、20エレのリンネル＝1着の上着 または＝10ポンドの茶 または＝etc. という列を逆にすれば、すなわち実際上は、これらの列に含まれている逆関係を表わしてみますと、次のような形態が与えられるわけです。

そしてその与えられる新しい価値形態こそ、一般的価値形態であり、次の項目では、以下のような等式が示されています。

〈 C 一般的価値形態
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
40ポンドのコーヒー =
1クォーターの小麦 = 20エレのリンネル
2オンスの金 =
1/2トンの鉄 =
x量の商品A =
等々の商品 = 〉

◎第二形態から第三形態への移行をめぐる論争

このマルクスの第二形態（全体的な、または展開された価値形態）から第三形態（一般的価値形態）への移行については、賛否両論があり、従来から論争が繰り返されてきました。それらは大きくは、マルクスが「逆関係」を使って説明しているのを否定する主張と、それを肯定する主張とに分けることができます。今、その代表的なものを知るために、白須五男氏がまとめたものを紹介してみます。

〈【逆連関否定の移行論】

I

(1) 価値形態の中に交換過程の論理を導入し、商品所有者の相互的な欲望表現を価値表現と同一視し、その表現の不一致から発生する交換の困難を解決するものとして第三形態を措定しようとする説――宇野弘蔵氏および宇野学流の多くの論者の見解。

(2) マルクスの価値表現を相互的価値表現であると批判し、価値実体も商品所有者の欲望もともに前提せず、交換過程の論理を排除した「純化された価値形態の論理」それ自体の内で、価値と使用価値の二要因の矛盾が展開されることを避けて第三形態を導出しようとする説――中野正氏、鈴木鴻一郎氏（および玉野井芳郎氏）の見解。

II

(3) 価値形態論の内部では第二形態から第三形態への移行を理論的に説くことには本質的困難が伴い、その発展過程に交換過程の全面的外化の矛盾を対応させることによって第三形態の成立が可能になるとする説――富塚良三氏の見解。

III

(4) 逆連関を前提せずに、価値概念とその定在様式（価値形態）との矛盾の展開だけから第三形態の成立を措定しようとする説――武田信昭氏の見解。

IV

(5) 価値形態論を価値表現の「類型論」として位置付け、第二形態から第三形態への移行は本来交換過程論の課題であって、価値形態論の内部ではその移行の論理は始めから説きえないとする説――大島雄一氏の見解。

【逆遡関肯定の移行論】

(6) 価値概念と価値の定在様式との不一致(矛盾)を形態移行の動力として価値概念に照応する第三形態を導出し、貨幣の現実的必然性が問題となる交換過程はその第二形態から第三形態への移行を媒介するものと捉える説――見田石介氏、尼寺義弘氏の見解。

(7) 価値表現の両極性と両項の互換性についての「独自な」解釈に基づいて、第二形態およびその逆遡関としての第三形態が同一時点では必ずただ一つだけ成立可能と捉える説――頭川博氏の見解。)(『マルクス価値論の地平と原理』158-9頁)

なかなか、これだけでは、それぞれの主張を理解することはできませんが、さまざまな主張が入り乱れて論争が行われていることは了解頂けたのではないのでしょうか。そのすべてについて具体的に検討することは、ほとんど不可能であるし、またその必要性もないと思いますので、ここでは、逆遡関を否定する代表的な主張として、富塚氏の主張を批判的に検討してみることにしましょう。富塚氏の主張は次の一文に典型的に現われています。

〈元来、20ヤールの亜麻布=1着の上衣 という等式関係は、亜麻布商品の所有者が「上衣一着とならば亜麻布20ヤールを交換してもよい」といっていることを表現しているにすぎないのであって、それは全く亜麻布所有者にとっての私事にすぎず、亜麻布所有者がそうしているからといって、上衣の所有者がそれに応じなければならないという理由は全くない。上衣の所有者はその商品を亜麻布と交換することを望まないかもしれず、仮りに亜麻布と交換しようとする場合にも、20ヤールでは不足だとするかもしれない。要するに、20ヤールの亜麻布=1着の上衣 という亜麻布にとっての価値表現の関係は、20ヤールの亜麻布が必ず一着の上衣と交換されるということ表現してはならず、1着の上衣=20ヤールの亜麻布 という逆の価値表現の関係を当初から予定してはいないのである。〉(『恐慌論研究』244頁)

こうした富塚氏の主張は、明らかに価値形態を見誤っているか言いようがありません。富塚氏は、マルクスが商品の価値を分析するのに、商品の交換関係から考察を開始したことを忘れてます。マルクスは第1章で次のように書いています。

〈交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。〉(下線は引用者、全集版49頁)

〈さらに、二つの商品、たとえば小麦と鉄とをとりまよう。それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置されるという一つの等式で表わすことができる。たとえば1クォーターの小麦=aツェントナーの鉄 というように。この等式はなにを意味しているのか?〉云々(下線は引用者、同50頁)

こうした考察から出発して、私たちは商品の価値をつかみだし、その実体を考察したのです。マルクスは、価値の実体を考察したあと、その量的考察に移る前に次のように述べていました。

〈だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである。研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう。しかし、この価値は、さしあたりまずこの形態にはかわりなしに考察されなければならない。〉(同52頁)

だから第三節から始まった価値形態の分析は、マルクスがここでいう〈価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値〉の分析に他ならないのです。だから価値形態の分析においては、常にその背景として交換関係が前提されているということが留意されなければならないのです。そして二商品の交換関係を前提すれば、リンネルと上着との交換は、当然、上着とリンネルとの交換が含まれており、リンネルの価値を上着で表すということと同時に、上着の価値をリンネルで表すという逆の関係が常に含まれていることはあまりにも当然のことではないでしょうか。価値形態の考察においては、二商品のこうした交換関係から商品所有者やその欲望を捨象して、二商品の交換という事実だけを取り出して、観察し、分析しているわけです。

こうした第二形態から第三形態への発展を、マルクスはモスト著『資本論入門』のなかでは歴史的に次のように描いています。

〈交換のその次に高い段階(第二形態――引用者)を、われわれはこんにちでもまだ、たとえばシベリアの狩猟種族のところで見だす。彼らが提供するものは、交換向けのほとんどただ一つの財貨、つまり毛皮である。ナイフ、武器、火酒(かしゆ)、塩等々といった彼らに供給される他人のすべての商品が、彼らにとってはそっくりそのまま、彼ら自身の財貨のさまざまな等価物として役立つ。毛皮の価値がこうして受け取る表現が多様であることは、この価値を生産物の使用価値から分離して表象することを習慣にするが、他方では、同一の価値をたえず増大する数のさまざまな等価物で計量することが必要となる結果、この価値の大きさの規定が固定するようになる。つまり、ここでは毛皮の交換価値はすでに、以前ばらばらに行なわれていただけの生産物交換の場合(第一形態――引用者)に比べて、はるかにはっきりした姿をもっているものであり、したがってまた、いまではこれらの物そのものもすでに、はるかに高い程度で商品という性格をもっているのである。

こんどはこの取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみよう彼らのおのおのはシベリアの狩人たちにたいして、自分の財貨の価値を毛皮で表現しなければならない。こうして毛皮は、一般的等価物になる。一般的等価物は、他人のすべての商品と直接に交換可能であるばかりでなく、また他人のすべての商品にとって、共通の価値表現のために、したがってまた価値を計るものおよび価値を比較するものとしても役立つ。言い換えれば、毛皮は生産物交換のこの範囲のなかでは、貨幣となるのである。〉(大谷禎之介訳10-11頁)

◎第二形態から第三形態への発展には、どのような商品形態の発展が対応しているのか?

第二形態から第三形態への移行を逆の関係から説明するマルクスのやり方を肯定するにしても、では、第二形態から第三形態への移行においては、ただ観察の視点を転換だけが問題なのでしょう。〈全体的な、または展開された価値形態〉を、それまでリンネルの側から見ていたのを、ひっくり返して、それまで等価形態に置かれていた諸商品の側から見て、それらの相対的な価値の表現として見ただけなのでしょう。そうではなく、やはり第二形態から第三形態への移行にも、商品形態の発展が対応しているのでしょうか、それが問題です。大谷氏はこの点で、先のマルクスの『入門』の説明は、〈やや舌足らずで、誤解を招く可能性がある〉と指摘しています。確かにそういう面がないとはいえませんが、しかし『入門』の説明でも、商品形態の発展を物語っているようにも思えます(それは後に紹介します)。しかし、とりあえず、この点では大谷氏の説明が参考になるので、紹介しておくことにしましょう。

大谷氏は『価値形態』(『経済志林』61巻2号)で次のように述べています。

〈じっさい、ある人が自分のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値をこれらの商品で表現するならば、必然的に、他の多くの商品所持者もそれぞれ自分の商品をリンネルと交換しなければならないはず、したがってまたそれぞれ自分の商品の価値を、みな同じ商品、リンネルで表現しなければならないわけである。

すでに述べたように、これらの他商品が相互にまったく無関係に存在して、相互にまったく無関係にリンネルと交換するのであれば、それらの商品がもつ価値形態は単純な価値形態でしかない。けれども、ここで生じる**交換関係の発展の方向**は、リンネルばかりでなく、これら他商品のほうでも他の多くの諸商品と交換関係を結び、したがってこれらの諸商品がみな同一の場で交換されるようになっていく、というものであるほかはない。その**行き着くところ**は、リンネルの展開された価値形態を潜めている交換関係のなかで、リンネルにたいする多くの他商品の側でも、互いに商品として関わりをもち、同じ商品世界を形成しているということ、どの他商品もリンネルと交換しようとしているということである。そして、一方の側に展開された価値形態を含む交換関係は、他方の側にそのような多くの商品が立つことを排除するものではないのである。〉(212頁)

つまりこういうことです。モストの『入門』の例を参考に考えてみましょう。シベリアの狩猟種族が彼らの獲物である毛皮を、狩りの旅の途中で出会うさまざまな種族と、それらの種族の生産した武器や火酒、塩等々と交換していく場合、毛皮は展開された価値形態を獲得します。しかし、毛皮と交換される武器や火酒、塩等々の側から見ると、それらの交換は**いまだ**それらの生産者にとっては偶然的なものにすぎません。だからそれらの商品から見た場合は、それらはいまだ

単純な価値形態に過ぎないわけです。

しかしそうした交換がさらに発展して行くと、武器や火酒や塩等々を生産する種族たちにとっても、商品の交換はますます偶然的なものではなくなり、彼らの間でも互いに商品を交換し合う関係が発展してくるわけです。そうした場合に、彼らは互いの商品交換において、それぞれの価値をまずは毛皮で表現して、彼らの商品の価値を比較しようようになります。その上で、彼らは互いの商品を交換し合うわけです。そして、これがすなわち一般的な価値形態なのです。だから第二形態から第三形態への発展にも、商品交換の、よってまた商品形態の発展が対応していると考えられるわけです。先の『入門』を丁寧に読めば、マルクスは、こうした商品交換の歴史的な発展を描いていることが読み取ることができると思います。

.....

【付属資料】

● **[1]** パラグラフに関連して

《初版本文》

〈第一の形態 20エレのリンネル＝1着の上着 は二つの商品の価値のために二つの相対的な表現を与えた。この第二の形態は同じ商品の価値のために相対的な諸表現の雑多きまわる寄木細工を与える。価値の大きさの表現のためにもなんらかのものが得られたようには見えない。なぜならば、20エレのリンネル＝1着の上着 においては、じっさいどの表現においても同じままであるリンネルの価値の大きさが、ちょうど 20エレのリンネル＝u量の茶 等々におけるのと同じに、あますところなく示されているからである。また、等価物の形態規定のためにもなんらかのものが得られたようには見えない。なぜならば、20エレのリンネル＝u量のコーヒー 等々においては、コーヒー等々は、上着がそうだったのとまったく同じように、ただ個別的な等価物であるにすぎないからである。〉（国民文庫版58-9頁）

《初版付録》

〈第一に、リンネルの相対的な価値表現は未完成である。というのは、その表示の動は完結することがないからである。第二に、それはばらばらな雑多な価値表現の多彩な寄木細工をなしている。最後に、これはそうならざるをえないことであるが、それぞれの商品の相対的な価値がこの展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限な価値表現列である。――展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態に反映する。各個の商品種類の現物形態がここでは無数の他の特殊的な等価形態と並んで一つの特殊的な等価形態であるのだから、およそ、ただ、それぞれが互いに排除し合う制限された等価形態があるだけである。同様に、それぞれの特殊な商品等価物に含まれている特定の、具体的な、有用な労働種類も、ただ、人間労働の特殊的な、したがって尽きることのない現象形態でしかない。人間労働は、その完全な、または全体的な現象形態を、たしかにある特殊的な諸現象形態の総範囲のうちにもってはいる。しかし、こうして人間労働は統一的な現象形態をもっていないのである。〉（同158頁）

《フランス語版》

〈まず、相対的な価値表現は、その表現系列がけって終結されないために、未完成である。それぞれの価値比較を環とする鎖は、ある新たな商品種類が新たな表現の材料を提供するにつれて、随意に伸ばすことができる。もしさらに、そうならざるをえないとおり、この形態が、すべての商品種類に適用されることによつて一般化されるならば、結局は、諸商品の価値表現と同数の、さまざまな際限のない諸系列が、得られるであろう。発展した相対的価値形態の不備は、この形態に対応する等価形態に反映する。それぞれの商品種類の自然形態がここでは、他の無数の特殊な等価形態とならんで、一つの特殊な等価形態を提供するから、一般的に言って、それぞれが他を排除するような断片的な等価形態のみが存在する。これと同じように、それぞれの等価物のうちに含まれている具体的な有用労働種類も、そこでは、人間労働の特殊な形態、すなわち、人間労働の不完全な表示のみを表わす。人間労働は確かに、その完全なあるいは総和の表示形態を、その特殊な形態の総体のうちにもっている。だが、形態と表現との統一が欠けている。〉（江夏訳36-7頁）

● **[初版付録にのみある表題]**

〈(五) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行〉（前掲158頁）

● **[2]** パラグラフに関連して

《初版付録》

〈とはいえ、全体的な、または展開された相対的価値形態は、ただ、単純な相対的な価値表現すなわち第一の形態の諸等式の総計から成っているにすぎない。たとえば、
20エレのリンネル＝1着の上着
20エレのリンネル＝10ポンドの茶、等々の総計からである〉（同159頁）

《フランス語版》――次のパラグラフとくっついている

● **[3]** パラグラフに関連して

《初版付録》

〈しかし、これらの等式は、それぞれ、逆関係的には次のような同じ意味の諸等式をも含んでいる。すなわち、
1着の上着＝20エレのリンネル
10ポンドの茶＝20エレのリンネル、等々を含んでいる。〉（同159頁）

《フランス語版》

〈しかし、総和のあるいは発展した相対的価値形態は、単純な相対的表現の総計、すなわち、次のような第一形態の等式、

$$20 \text{メートルのリンネル} = 1 \text{着の上衣}$$

$$20 \text{メートルのリンネル} = 10 \text{ポンドの茶、等、}$$

の総計からのみ成り立っているが、この等式の一つ一つが、次のような同一の等式を逆に含んでいるのである。

$$1 \text{着の上衣} = 20 \text{メートルのリンネル}$$

$$10 \text{ポンドの茶} = 20 \text{メートルのリンネル、等} \quad (\text{前掲37頁})$$

● [4] パラグラフに関連して

《初版本文》

〈第二の形態は、第一の形態の諸等式だけの合計から成り立っている。しかし、これらの等式のそれぞれ、たとえば $20 \text{ エレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$ は、その逆の関係 $1 \text{ 着の上着} = 20 \text{ エレのリンネル}$ をも包括しているのであって、ここでは上着が自分の価値をリンネルで示しており、まさにそれゆえにリンネルを等価物として示しているのである。ところで、こういうことはリンネルの無数の相対的な価値表現のどれにもあてはまるのだから、そこでわれわれは次のような形態を得るのである。〉 前掲(61頁)

《初版付録》

〈じっさい、リンネルの所持者が彼の商品を多くの他の商品と交換し、したがってまた彼の商品の価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に多くの他の商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換するにちががなく、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現するにちがいない。――そこで、 $20 \text{ エレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$ または $= 10 \text{ ポンドの茶}$ または $= \text{等々}$ 、という列を逆にすれば、すなわち、それ自体としてすでにこの列のなかに含まれている逆関係を言い表わしてみれば、われわれは次のような形態を得る。〉 (同159-160頁)

《フランス語版》

〈実際のところ、リンネルの所有者がリンネルを他の多数の商品と交換し、したがって、その価値を一連の同じ数だけの項のうちに表現するならば、他の商品の所有者たちは、自分たちの商品をリンネルと交換して、自分たちのさまざまな商品の価値を、リンネルという同一の項のうちに表現せざるをえない。 $20 \text{ メートルのリンネル} = 1 \text{ 着の上衣}$ 、または $= 10 \text{ ポンドの茶}$ または $= \text{その他}$ という系列を転倒するならば、すなわち、この系列のうちにすでに暗々裡に含まれている相反等式を表現するならば、次の形態が得られる。〉 (前掲37-8頁)

『資本論』を読んでみませんか

民主党の代表選挙が、菅直人首相と小沢一郎元幹事長との一騎討ちとなり、党を二分する激しい選挙戦が闘われています。

停滞する日本経済を如何に建て直すか、折りからの急速な円高にどう対応するか等々も一つの争点です。日本記者クラブで行われた公開討論会でも対応が問われましたが、なかなか両候補とも有効な手段が打ち出せないというのが本当のところではないでしょうか。



以前にも指摘しましたが（第25回案内参照）、「為替」というのは、遠隔地間の諸支払を銀行など金融機関を媒介して振り替えることによって、現金を運ばずに決済するための信用用具（有価証券）であり、だから決して厳密な意味での「通貨」と同じではないし、為替相場は通貨の交換レートとは概念的には異なるものなのです。

通貨と為替とはまったく異なる流通（一方は商品市場、他方は貨幣市場）に属し、通常は直接的には関連しないが、しかし間接的には関連しているし、その関連を理論的に解明することが重要であるが、それを正しく説明しているものはほとんど見かけないとも指摘しました。だから今回は、この点を少し説明したいと思います。

菅首相は、先の討論会で、記者の質問に答えて、「今回の急激な円高の背景には、アメリカ経済が期待されたほどの回復にいたっていないという、（米連邦準備制度理事会議長の）バーナンキさんなんかの自らの発言もあって、ある意味ドル安という形で円高になってきている」と答えていました。

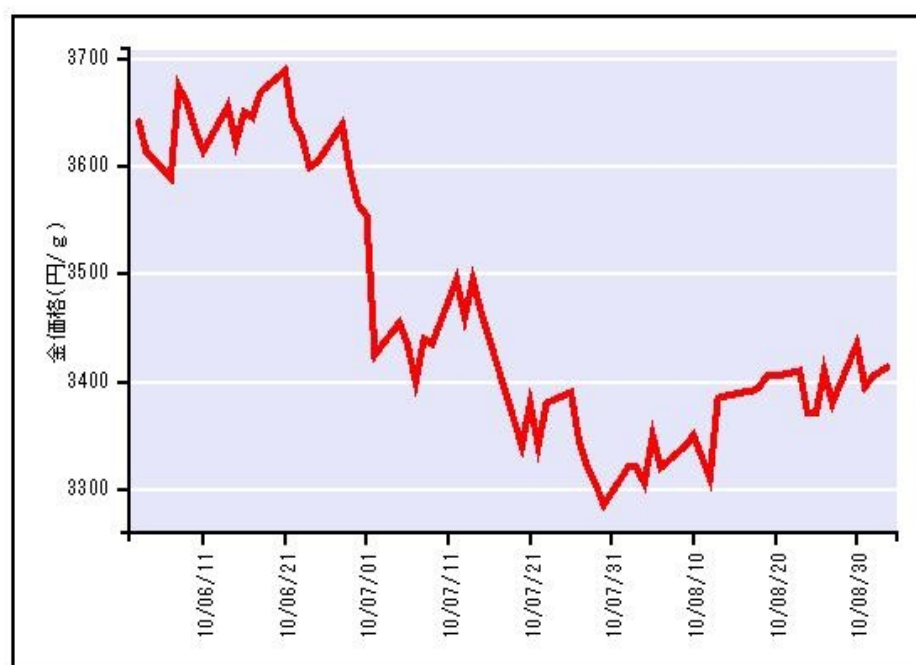
ここで「ドル安という形で円高になってきている」という意味は、ドルの“減価”が背景にあると言いたいのだと思います。もちろん、菅首相が通貨と為替との区別ができているとは思えませんが、こうした指摘には一定の客観的な根拠がないとはいえません。

ニューヨーク金市場における金価格のここ2カ月間の推移をみますと、図にあるように、7月始

めから9月始めにかけて、金価格は1オンス1200ドルから1250ドルへと高値に推移しています（つまりそれだけドルの代表する金量は減り、ドルは“減価”しています）。



これに対して、東京金市場では、同じ期間、1グラムの金の価格は3400円前後を上下しているだけで、一方的な上昇傾向を示しているわけではありません。



1グラム=0.03215トロイオンスで換算した場合、1ドル札と1万円札はそれぞれどれだけの金量を代表し、それがどのように推移したのかを見てみますと、7月初めごろの円とドルの通貨の実際のレートは1円=89.4ドルであるのに対して、9月初めにはそれが1円=84.6ドルになっています。

これは通常言われている「為替レート」とは異なり、実際のアメリカ国内で流通しているドル札の代表する金量と日本国内で流通する円札の代表する金量との比較から計算した、その意味ではその概念にかなった「通貨レート」なのです。

為替相場における、ドル建て、円建てのそれぞれの為替の価格も、当然、こうした各国の通貨の“価値”（代表する金量）をもとにしていることはいうまでもありません。金が諸商品の価値を尺度する唯一の貨幣商品であることは今日でも変わっていないのです。人によっては、金はすでに貨幣ではなく、「潜在的な貨幣としてあるだけだ」（状況の変化によっては貨幣になりうる可能性はあるが、現実には貨幣ではない）と言います。しかしそれは間違っています。金が「潜在的に貨幣」であるというるのは、金が鉱山から採掘されて、まだ金採掘業者がそれを他の諸商品との交換に出す前の段階にある金に言うことであって、例えば金が世界のさまざまな金融機関、特に中央銀行やあるいは諸個人によって貯蔵されている場合については言い得ません。それらは本源的な蓄蔵貨幣として存在する金であり、だからそれらは“正真正銘”の貨幣そのもの（「本来的な貨幣」、あるいはマルクスがいうところの「第三の規定による貨幣」）なのです。こうした誤った主張が出てくるのは、貨幣についての正しい概念が欠落しているからだだと思います。実際に流通していなければ貨幣とはいえないというのは、古典派経済学的な間違った貨幣論に戻ることにほかなりません。

そもそも諸商品の価値とは、与えられた生産諸力のもとで諸商品の使用価値が表している社会的分業にもとづいて、それらの使用価値を生産するために、社会の総労働を如何に配分されるべきかを示す指標なのです。それによって基本的な社会の物質代謝は維持されているのです。そしてその価値を目に見えるように表現し尺度するのが貨幣なのです。というのは、この社会ではそうした総労働の配分は意識的に行われるのではなく、ただ諸商品の交換の結果として客観的に貫かれるものとして存在するからです。だから諸商品の価値はただ別の共通な一商品によって相対的にしか表現できないし、尺度出来ないのです。そして商品世界から排除されて、そうした諸商品の価値を表現し尺度するものこそ貨幣なのです。

だから今日の社会で諸商品が生産され、それがさまざまな形で売買されて、それを必要とするところに配分され、生産的にかあるいは個人的に消費されて、社会の物質代謝が維持されていることは誰もが認めることです。ということはこの社会に厳然として価値法則が貫いていること、諸商品を流通させるに必要な貨幣量が、それぞれの国ごとに客観的な法則として厳然として存在していることを、それらは示しているのです。

実際にアメリカ国内で流通しているドル札であるとか、日本国内で流通している円札などは、そうした客観的に決まってくる流通必要貨幣量（流通必要金量）をただ代理しているだけなのです。

それらがどれだけの金量を代理しているかは、不換制の今日では法的・制度的には決まっています。しかし法的・制度的に決まっていないからといって、それらが一定の金量を代理している現実そのものが無くなるわけではありません。実際に流通しているドル札や円札がどれだけの

金量を代理しているかは、現実の経済過程（実際の商品流通の現実）によって決まってくるのです。

そもそも流通代理物がどれだけの金量を代理しているかは、何か法的・制度的に決められるものではなくて、あくまでも現実の経済過程そのものが決めるのです。兌換制は、実際の経済過程で決まってくる金量を（だからそれは常に変動するわけですが）、常に一定の量に戻す力が働くように制度的に保障しているだけなのです。

歴史的には、金鑄貨が流通しているときでさえ、それらの鑄貨は現実の流通過程では象徴と化するために、実際の金の市場価格とのずれが生じてくるのであって、そうした結果、時の権力者（国王など）は金貨の度量標準の変更を余儀なくされたりしたのです。

では、実際に流通しているドル札や円札がどれだけの金量を代理しているのかを知るのはどうすれば出来るのでしょうか。

それをわれわれが知りうるは、それぞれの国における金の市場価格以外にはありません。

金の市場価格は、さまざまな要因によって決まり、変動します。一つは金の価値そのものの変化によって、あるいは現実の流通必要金量の変化によって、流通代理物の量が流通の外部から強制的な注入によって変化することによって、さらには直接的な金の需給によってです。だから時々刻々変化する実際の金の市場価格そのものは、直接にそれぞれの通貨がどれだけの金量を代理しているのかを必ずしも正確に表しているとはいえませんが、しかし直接的な需給の変動を均せば、やはりそれは流通代理物がどれだけの金量を代理しているのかをわれわれに教えているのです。

しかし実際には、金は他の商品と同じように売買されており、単なる一つの商品にすぎないように見えます。しかしこれは単なる外観であって、決して金の売買と他の商品の売買とは同じではありません。もちろん、金も例えば工業用の材料として売買されるなら、それは他の商品と同じです。しかし金取り引きの多くはそうした金の使用価値を実現する（金を何らかの生産に使う）ためのものではありません。多くの人（あるいは法人・機関）は金を購入したからといって、金を消費するわけでは無いのです。だから金商品の購入というのは一つの外観であって、実際にはそれは流通貨幣を蓄蔵貨幣に転換しているのです。むしろこうした金の売買の現実こそが、金が依然として貨幣であることを物語っているのです。

金を蓄蔵しているのは、石油やレアアースを備蓄しているのはわけがちがうのです。後者はやがてはそれを使用する（消費する）ために備蓄しているのですが（だから物質代謝の一過程ですが）、金の備蓄（蓄蔵）はただ価値の絶対的な形態を手に行っているだけで、必要とあればいつ

でも通貨（流通貨幣）に転換して、諸商品の購入に充てることを考えて蓄蔵されているのです（だからそれは物質代謝を媒介するだけで、物質代謝の一過程ではない）。

さて問題は、為替です。各国の通貨（ドル札や円札）そのものは、すでに何度も述べたように、決して為替とは直接には関係せず、その“価値”（代表する金量）はそれぞれの国内の商品市場の現実（流通する商品の価格総額、流通速度、諸支払の相殺度合い）に規定されているのであり、その限りでは独立変数なのです。

実際の為替の相場そのものは直接には為替の需給に左右されますが、しかしそうした為替の売買には、国際的な諸商品の売買が反映しており（もちろん、為替は国際的な価値の移転だけのためにも売買されますが）、そして諸商品が売買される価格は、それぞれの国の通貨の“価値”によって規定されていることはいうまでもありません。だから為替の売買も、そのベースにはそれぞれの通貨の“価値”の比率が存在するといえるわけです。

だから菅首相の肩をもつわけではありませんが、今回の円高には両国の通貨“価値”の比率の変化がある程度反映しているといえるかも知れません。

為替と通貨との区別と関連はなかなか難しいものですが、そうした問題も『資本論』を研究するなかで、理論的に解明していくことが可能です。貴方も是非、共に『資本論』を読んでみませんか。

第28回「『資本論』を読む会」の報告

◎ようやく訪れた秋

少し前まで厳しい残暑に悪態をついていたかと思ったら、急遽な秋の深まりです。

今回報告する第28回「『資本論』を読む会」が開催された9月19日は、まだまだ厳しい残暑があり、報告者は泉が丘駅で配布していたチラシ（ハンバーグの安売りの宣伝）を、捨てる場所もないまま持って図書館に急いだのですが、真夏を思わせる日差しに、そのチラシを頭の上にかざして、日傘の代わりとして利用して、これはなかなかグッドアイデアだと思ったほどなのですが、今日この頃のこの寒さはどうでしょうか。季節の変わり目における体調の維持と管理には、お互い気をつけなければなりません。おかげでこの報告もずいぶん遅くなってしまいました。しかし今回から入った〈C 一般的価値形態〉は、なかなか重要な部分でもあり、進んだのはわずかに5つのパラグラフだけでしたが、議論は充実したものとなりました。さっそく、その報告を行うことにしましょう。

◎何度も書き換えられた「一般的価値形態」

「一般的価値形態」のところは、「単純な価値形態」のと同じように、マルクスによって何度も推考され書き換えられたところです。初版本文と付録との間ではその構成に大きな変化が見られ、「補足と改訂」でもさらなる考察が加えられ、現行版とほぼ同じ第二版へと繋がっています。少しその変化の目立った特徴を紹介しておきましょう。

《初版本文と初版付録との相違》

初版本文と初版付録との構成上の大きな違いは、初版本文の「第1章 商品と貨幣」の価値形態論と思われる部分には、「貨幣形態」が出て来ないことです。初版本文では「貨幣形態」の代わりに、「形態Ⅳ」が位置づけられています。この「形態Ⅳ」の理解もなかなか難しく、さまざまな議論もありますが、ここではその詳細には触れないでおきます（また論じる機会があるかもしれません）。その「形態Ⅳ」とは、次のようなものです。

く だから、われわれは最後に次の形態を得ることになる。

形態Ⅳ

20エレのリンネル＝1着の上着、または＝u量のコーヒー、または＝v量の茶、または＝x量の鉄、または＝y量の小麦、または＝等々

1着の上着＝20エレのリンネル、または＝u量のコーヒー、または＝v量の茶、または＝x量の鉄、または＝y量の小麦、または＝等々

u量のコーヒー＝20エレのリンネル、または＝1着の上着、または＝v量の茶、または＝x量の鉄、または＝y量の小麦、または＝等々 （江夏訳66-7頁）

つまり「形態Ⅳ」というのは、「形態Ⅱ」をさまざまな商品ごとに並列させたものなのです。なぜこうしたものになるのかここでは詳述できませんが、これを見ても、現行版とは大きく異なる展開になっていることが分かります。

初版付録にはすでに現行版と同じように「Ⅲ 一般的な価値形態」のあとに「Ⅳ 貨幣形態」があります。また初版付録では初版本文とは異なり、全体が小さな項目で分けられて、その展開が一目で分かるようになっているのは、他の部分とも同じですが、これは今回の部分においても、現行版の構成を考える上でも参考になるので、項目だけを紹介しておきましょう。最初に現行版の項目を紹介し、それが初版付録ではどうなっているのかを較べてみましょう。

現行版の項目

く C 一般的価値形態

1 価値形態の変化した性格

2 相対的価値形態と等価形態との発展関係

3 一般的価値形態から貨幣形態への移行（）

初版付録の項目

く Ⅲ 一般的な価値形態

（1）相対的価値形態の変化した姿

（2）等価形態の変化した姿

（3）相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係

（4）相対的価値形態と等価形態との対極性の発展

（5）一般的価値形態から、貨幣形態への移行（）（夏目訳）

この初版付録の項目を見ると、現行版の展開がどのようになっているのかが一目瞭然となります。つまり現行版の〈1 価値形態の変化した性格〉は、〈相対的価値形態の変化した姿〉と〈等価形態の変化した姿〉という順序で考察されていることが分かります。実際には、〈相対的価値形態の変化した姿〉も、その質的な考察（【1】～【6】パラグラフ）と（この質的な考察における初版付録と現行版との一つの大きな相違は、『補足と改訂』のところで紹介しますが、後者には前者にはない歴史的な考察が加わっていることです）量的な考察（【7】パラグラフ）とに分けられて、そのあと〈等価形態の変化した姿〉（【8】パラグラフ）が考察され、さらに〈価値形態の変化全体のため〉（【9】パラグラフ）が加わっています。

また現行版の〈2 相対的価値形態と等価形態との発展関係〉は、〈相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係〉（【1】【2】）と〈相対的価値形態と等価形態との対極性の発展〉（【3】～【6】）とが、この順序で考察されていることも分かります。

〈一般的価値形態から貨幣形態への移行〉は現行版がより簡潔になっているとはいえ初版付録には目立った相違はありません（初版付録にはここに若干の歴史的考察が加えられているが、現行版ではそれが無くなっている）。

《『補足と改訂』における変化》

マルクスは第二版の準備のために初版に手を入れた『補足と改訂』を書きましたが、そこには「一般的価値形態」の冒頭部分の同じところ（【§1. 相対的価値形態の変化した姿】）を、主要なものとしては、【A】、【B】、【C】の三つの書き直した原稿（しかしそれぞれ長さは違います）が残されています（【付属資料】参照。但し今回は【B】をす

べて収録すると余りにも資料が大きくなってしまいますので、今回の問題に直接には関連しない部分は割愛しています)。一般的価値形態の最初のあたりでは、[A]はそれほど長いものではなく、書き出しなどは初版とそれほどの違いはありません。[B]は、初版本文や同付録、そして現行版にもない詳細な展開を見ることが出来ます。その中には現行版の「第4節 商品の物神的性格とその秘密」に該当するような考察もみられ、そこには〈これは全部、商品にかんする最後の章(「章の最後」の誤訳?—引用者)に置かれるべきである〉というコメントがあったりします。一般的な相対的価値形態の質的考察における歴史的な考察の挿入は、[B]から行われたことが分かりますが、それがどのような位置づけのもとに挿入されるようになったのかは、[A]との比較検討で類推することが出来ます。それは[A]で〈その一般的性格によってはじめて価値形態は価値概念に対応する〉云々というパラグラフがあるのですが、その部分を全体として詳述し膨らませたものが、[B]で出てくる歴史的な考察や内容的には第4節につながるような考察が行われている部分であることが分かります。つまり一般的価値形態においてはじめて価値形態は価値概念に対応したものになるのだということ価値形態の論理的・歴史的な発展をあとづけて説明しようとしたところがそうした詳細な考察に繋がって行ったことがよく分かります。そしてそうした考察を踏まえて書かれた[C]は、第二版(現行版)とほぼ同じものになっています。このように「補足と改訂」は、推考を重ねるなかでマルクスの問題意識がどのように変化して第二版として結実して行ったかをわれわれに教えてくれています。この「補足と改訂」はそれ自体として詳細な研究の対象になるべき文献だとつくづく今回、思いました。

前書きはこれぐらいにして、本文の解説に移ることにしましょう。今回も各パラグラフをまず紹介し、それを文節ごとに解説していくようにします。

◎「一般的価値形態」の具体的な例示

まず、次のような図示から始まっています。

| | | | |
|---|------------|---------|-----------|
| く | C | 一般的価値形態 | |
| | 1着の上着 | = | |
| | 10ポンドの茶 | = | |
| | 40ポンドのコーヒー | = | |
| | 1クォーターの小麦 | = | 20エレのリンネル |
| | 2オンスの金 | = | |
| | 1/2トンの鉄 | = | |
| | x量の商品A | = | |
| | 等々の商品 | = |) |

これだけを紹介しても、それまでの展開との関連がなかなかわかりづらいと思いますので、その一つ前の「B 全体的な、または展開された価値形態」の最後のパラグラフを振り返っておきましょう。それは次のようなものでした。

〈くじさい、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所有者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。—そこで、20エレのリンネル=1着の上着 または=10ポンドの茶 または=**etc.** という列を逆にすれば、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆関係を言い表わしてみれば、次のような形態が与えられる。〉

つまり「B」の冒頭で、最初に提示された「全体的な、または展開された価値形態」の具体例というのは次のようなものでした。

く(20エレのリンネル=1着の上着 または=10ポンドの茶 または=40ポンドのコーヒー または=1クォーターの小麦 または=2オンスの金 または=1/2トンの鉄 または=等々)

これを図示しますと、次のようになります。

| | | |
|-----------|---|------------|
| | = | 1着の上着 |
| | = | 10ポンドの茶 |
| | = | 40ポンドのコーヒー |
| 20エレのリンネル | = | 1クォーターの小麦 |
| | = | 2オンスの金 |
| | = | 1/2トンの鉄 |
| | = | 等々 |

そしてこれを左右ひっくり返したものが、今回、新たに得られた「一般的価値形態」になるというわけです。どうしてこうしたことが言えるのかということは、すでに前回の報告のなかで紹介したと思います(第27回報告を参照)。

◎「一般的価値形態」の「相対的価値形態の変化した姿」の質的分析

これは、すでに述べたように、【1】~【6】パラグラフで展開されています。だから今回私たちは【5】パラグラフまで終わったのですが、その意味では、やや中途半端な終わり方であったと言えます。各パラグラフごとに見て行きましょう。

【1】〈(4)いろいろな商品はそれぞれの価値をここでは(1)単純に表わしている、というのは、ただ一つの商品で表わしているからであり、そして(2)統一的に表わしている、というのは、同じ商品で表わしているからである。(4)諸商品の価値形態は単純で共通であり、したがって一般的である。〉

(4)まずこれは一般的価値形態の直接的な考察です。一般的価値形態の図示された具体例をみて、直接得られる表象からの特徴を並べているわけです。まず気づくのは、すべての商品が自らの価値を一つの商品、リンネルで表していることです。マルクスはそれを〈単純に表している〉としています。そして〈統一的に表している〉とも述べています。というのは同じ商品ですべての商品の価値を表しているからです。つまり同じ商品ですべての商品の価値が統一的に表現されているというわけです。

(4)そして最後に、こうした特徴から、諸商品の価値形態は〈単純で〉〈共通で〉、したがって〈一般的〉だということです。

学習会では、どうして〈単純で共通〉なら、〈一般的〉と言えるのかという疑問が出されました。そこでこのパラグラフをよく見ると、最初は〈単純〉であることと〈統一的〉であることが指摘されながら、最後の文節では〈単純〉と〈共通〉が指摘され、だから〈一般的〉だとされています。そして(2)の記述を見ると、〈統一的〉である理由として、〈同じ商品で表しているから〉だと述べています。つまり〈共通〉だからだというわけです。しかしこのパラグラフの文章を詳細に分析しても、なかなか、何故、〈単純〉で〈統一的〉で、〈共通〉であれば、〈一般的〉と言えるのかという納得のゆく理解が出てきません。実はこれはある意味では当然なのです。というのは【2】パラグラフ以降は、まさにその理由を説明しているともいえるのだからです。そこでこうした疑問を持ったまま、次のパラグラフに進むことにしましょう。

【2】〈形態IとIIはどちらも、ただ、一商品の価値をその商品自身の使用価値またはその商品体とは違ったものとして表現することしかできなかった。〉

マルクスはまず〈形態I〉(単純な価値形態)と〈形態II〉(全体的な、または展開された価値形態)の欠陥というか、不十分性を指摘しています。〈一商品の価値をその商品自身の使用価値またはその商品体とは違ったものとして表現することしかできなかった〉、というのですが、どうしてこうした欠陥が指摘される必要があるのでしょうか。

私たちは第1章の商品の価値の分析で、諸商品は価値としてはすべて質的に同等で量的に異なるに過ぎないことを理解しました。しかしこれまで私たちが見てきた商品の価値形態を振り返ると、単純な価値形態（形態Ⅰ）では確かにリンネルの価値は上着に等しいものとして表されましたが、しかしそれ以外の商品との質的な同一性そのものは、この形態では表現されていません。また展開された価値形態（形態Ⅱ）の場合はどうかというと、リンネルの価値はさまざまな商品の使用価値で表現されることによって、その価値の他の諸商品との同一性が表現されているように見えます。しかしリンネルの価値の表現は、他方でそれ以外の商品の価値の表現を排除してしまっていることに気づきます。つまりリンネルの価値は、表現された価値としては他の商品の価値の表現と同じものとはいえないのです。というのはリンネルの展開された価値形態は、リンネルを除く他のすべての商品で表現されるように、例えば上着の展開された価値形態も、上着を除く他のすべての商品で表現されるわけですから、この二つの表現形態は同じとはいえません。つまり展開された価値形態もリンネルの価値と上着の価値の質的同一性を表現しているとはいえないわけです。だからこれらは、やはり価値の概念からみれば、その表現形態としては不完全な、欠陥を持ったものと言わざるを得ないのです。以下のパラグラフはこうした問題を論じて行くわけです。

【3】〈(ⅰ)第一の形態は、1着の上着＝20エレのリンネル、10ポンドの茶＝1/2トンの鉄 などという価値等式を与えた。(ⅱ)上着価値はリンネルに等しいもの、茶価値は鉄に等しいものというように表現されるのであるが、しかし、リンネルに等しいものと鉄に等しいものとは、すなわち上着や茶のこれらの価値表現は、リンネルと鉄とが違っているように違っている。(ⅲ)この形態が実際にはっきりと現われるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである。〉

(ⅴ)、(ⅵ)単純な価値形態（形態Ⅰ、第一の形態）は、〈1着の上着＝20エレのリンネル、10ポンドの茶＝1/2トンの鉄〉などという、それぞれ異なる二つの商品の価値等式によって表されました。しかし上着の価値と茶の価値は、リンネルと鉄が異なるように違ったものとして表現されており、両者が価値として同じものとして表現されているとはとてもいえません。

(ⅶ)これは当然であって、こうした形態が実際に現われてくるのは、ただ労働生産物が時折り偶然に交換されるような原始時代のものだからです。だから上着がリンネルと交換され、上着の価値がリンネルで表現されたとしても、それが茶の価値と比較しなければならない必要性もまたないわけです。茶が鉄と交換されるのは、上着がリンネルと交換されるのと同じように、まったく偶然の時折の出来事に過ぎず、それらの交換が互いに関連し合うこともまたないからです。

【4】〈(ⅰ)第二の形態は第一の形態よりももっと完全に一商品の価値をその商品自身の使用価値から区別している。(ⅱ)なぜならば、たとえば上着の価値は、いまではあらゆる可能な形態で、すなわちリンネルに等しいもの、鉄に等しいもの、茶に等しいもの、等々として、つまりただ上着に等しいものだけを除いて他のあらゆるものに等しいものとして、上着の現物形態に相対しているからである。(ⅲ)他方、ここでは諸商品の共通な価値表現はすべて直接に排除されている。なぜならば、ここではそれぞれの商品の価値表現のなかでは他のすべての商品はただ等価物の形態で現われるだけだからである。(ⅴ)展開された価値形態がはじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にはなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのことである。〉

(ⅵ)、(ⅶ)単純な価値形態（第一の形態）に較べると展開された価値形態（第二の形態）は商品の価値をより普遍的に表現しているように思えます。というのは、例えば上着の価値は、いまでは上着を除くすべての商品によって表現されているからです。

(ⅷ)しかし、やはりこの場合も諸商品の共通な価値表現というものはすべて直接に排除されています。というのは、上着の価値は上着を除く他のすべての商品で表されるのと同じように、茶の価値も茶を除く他のすべての商品で表されるので、この両者の価値表現は同じものとはいえないからです。だから上着と茶は共通の価値表現を持っているとはいえませんし、それはすべての商品の価値の表現についても言いうることなのです。

(ⅸ)こうした展開された価値形態がはじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、例えば家畜がほぼ慣習的に他のさまざまな商品と交換されるようになったときですが、しかしそれは家畜と交換される他のさまざまな商品が、いまだ必ずしも相互に商品として対峙し合うとは限らない状態のもので、だから上着の展開された価値形態が、それ以外の価値形態を排除しても大きな困難が生じなかったともいえます。

しかし商品交換の発展は、やがては家畜と交換される諸商品相互の間においても、それらを互いに商品として対峙させるようになることは明らかです。そうすると、それらの商品は互いの価値を共通な等価物である家畜で表現しあうことによって、互いの価値を比較し合うことになりませんが、それがすなわち一般的な価値形態なわけです。

【5】〈(ⅰ)新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表わす。リンネルと等しいものとして、どの商品の価値も、いまではその商品自身の使用価値から区別されるだけでなく、いっさいの使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されるのである。(ⅱ)それだからこそ、この形態がはじめて現実的に諸商品を互いに価値として関係させるのであり、言い換えれば諸商品を互いに交換価値として現われさせるのである。〉

(ⅲ)一般的価値形態は、すべての商品が、その価値をただ一つの共通の商品リンネルで表現しています。リンネルだけが商品世界から分離されて、そうした価値表現の材料として役立っているわけです。リンネルは、それ以外のすべての商品の、よって商品世界の価値を表しているといえます。こうしてどの商品も自分の価値を自分自身の使用価値から区別して表現するだけでなく、一切の使用価値からも区別されています。例えば上着の価値はリンネルとして表現されていますが、同じように茶の価値もやはりリンネルとして表現されており、あるいは鉄の価値も、金の価値も、やはり同じリンネルとして表現されているわけですから、それらの価値はすべて同じであることが、この価値形態によって初めて表現されているわけです。つまり上着の価値は、単に上着の使用価値から区別されるだけでなく、他のすべての使用価値からも区別されているからこそ、その価値は、他の諸商品の価値と同じものとして、共通なものとして表現されているといえるわけです。

(ⅴ)こうして、この形態がはじめて現実の諸商品を互いに価値として関係させるのであり、質的に同一で量的に比較可能な形態に置くのです。言い換えれば、諸商品を互いに交換価値として、すなわち価値の現象形態として、価値が目に見える形で現われているものとして関係させるのです。

ところで【1】パラグラフで提起された疑問は解決したでしょうか。実は最初にも述べたように、「相対的価値形態の変化した姿」の質的分析は【6】パラグラフまで続くので、本来なら、【6】パラグラフが終わって問題の解決を論じるべきなのですが、しかしそれでは次回まで待たねばなりません。だからここでとりあえず一つの結論のようなものを述べておきましょう。

すでに述べたように、「単純な価値形態」や「展開された価値形態」では、「諸商品は価値としては質的に同じで量的に比較可能なもの」という「価値の概念」にあった表現形態になっていないことが分かりました。そして翻って一般的価値形態を見ると、上着の価値はリンネルで表現されているだけではなく、茶やコーヒーや鉄、等々の諸商品もリンネルで表現されています。だから上着の価値と茶やコーヒーや鉄等々の諸商品の価値の表現は、まさに質的に同じで量的に比較可能なものとして表現されていることが分かるのです。このように一般的価値形態によって、商品の価値はその概念に相応しい表現形態を得たといえるわけです。今では上着の価値はリンネルとして表されることによって、茶やコーヒーや鉄に対しては交換価値として現われており、よって「一般的に」表されているわけです。〈価値形態は、諸商品が、無差別で同質な人間労働の単なる臚状物として、すなわち、同じ労働客体の物的な表現として、相互に現われている。……なぜならば、諸商品のどれもが、同じ労働の具象物として、すなわち、リンネルに含まれている労働の具象物として、または、労働の同じ具象物として、すなわちリンネルとして、表現されているからである。こうして、諸商品は質的に等置されているわけである〉（初版付録、江夏訳901頁）。価値形態が「一般的」であるというのは、こうした意味だと思います。

.....

【付属資料】

●【表題と式】

《初版本文》

Ⅲ 相対的価値の、第三形態・あるいは第二形態を倒置しあるいは逆の関係に置いた形態
1着の上着 = 20エレのリンネル
u量のコーヒー = 20エレのリンネル
v量の茶 = 20エレのリンネル
x量の鉄 = 20エレのリンネル
y量の小麦 = 20エレのリンネル
その他 = 20エレのリンネル (46-7頁)

《初版付録》

Ⅲ 一般的な価値形態
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
40ポンドのコーヒー =
1クォーターの小麦 =
2オンスの金 = 20エレのリンネル
1/2トンの鉄 =
x量の商品A =
等々の商品 =)

《補足と改訂》

〈一般的な価値形態〉の表題だけで、等式はない。

《フランス語版》

C 一般的な価値形態
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
40ポンドのコーヒー =
2オンスの金 = 20メートルのリンネル
1/2トンの鉄 =
x量の商品A =
その他 =) (江夏他訳36頁)

●【1の表題】

《初版本文》 ---なし

《初版付録》

〈(一) 相対的価値形態の変化した姿〉

《補足と改訂》

〈§1. 相対的価値形態の変化した姿〉

《フランス語版》

〈(A) 価値形態の性格の変化〉 (36頁)

●【1】パラグラフ

《初版本文》

〈商品の相対的価値表現は、ここでは、その最初の形態である 1着の上着 = 20エレのリンネル に戻っている。とはいえ、この単純な等式はいまではさらに発展している。この等式はもとも次のことだけを含意している。すなわち、上着価値が、別の商品で表現されることによって、上着という使用価値あるいは上着体そのものからは区別され独立している形態を得ている、ということ。いまではこの同じ形態は、上着を、すべての他商品にたいしても価値として表わしており、したがって、上着の普遍妥当な価値形態なのである。上着だけではなく、コーヒーや鉄や小麦、要するにすべての他商品が、いまでは自分たちの価値を、リンネルという素材で表現している。このように、すべての商品が、人間労働の同じ具象物として、相互に自己を表示している。すべての商品は量的に差異があるにすぎ、したがって、1着の上着、u量のコーヒー、x量の鉄等々、すなわちこれらのさまざまな物のさまざまな量は、20エレのリンネルにイコールであり、対象化された人間労働の同じ量に等しい。こうして、すべての商品は、リンネルという素材での自分たちの共同の価値表現に依拠して、交換価値として自分たち自身の使用価値から区別され、そして同時に価値量として互いに関係しあい、質的に等置されて量的に比較される。この統一的な相対的価値表現において初めて、これらの商品のすべてが互いに価値として現われ、したがって、これらの商品の価値は初めて、それにふさわしい、交換価値としての現象形態を、得ることになる。一商品の価値をすべての他商品の広がりの中で表わすところの、相対的価値の発展した形態(形態II)と区別して、われわれは、この統一的な価値表現を、一般的な相対的価値形態と呼ぼう。〉 (47-8頁)

《初版付録》

〈相対的価値形態は、いまでは、全く変化した姿をもっている。すべての商品は、自分たちの

価値を、(1)単純に、すなわち唯一の他の商品体で、(2)統一的に、すなわち同じ他の商品体で、表現している。それらの商品の価値形態は、単純であり、また、共通すなわち一般的である。すべての雑多な商品体にたいして、いまではリンネルが、それらの商品体の共通で一般的な価値形態として認められている。一商品の価値形態、すなわち、リンネルにおいてのその商品の価値の表現は、いまでは、その商品を、価値として、使用対象としてのその商品自身の存在から、すなわち、その商品自身の現物形態から、区別するばかりでなく、同時に、その商品を、価値として、他のすべての商品に、その商品と同じものであるすべての商品に、関係させている。だから、その商品は、こういった価値形態において、一般的・社会的形態をもっている。価値形態は、この形態の一般的性格によって、初めて、価値概念にかなったものになる。価値形態は、諸商品が、無差別で同質な人間労働の単なる膠状物として、すなわち、同じ労働実体の物的な表現として、相互に現われあっている、というような形態でなければならなかった。このことがいまでは達成されている。なぜならば、諸商品のどれもが、同じ労働の具象物として、すなわち、リンネルに含まれている労働の具象物として、または、労働の同じ具象物として、すなわちリンネルとして、表現されているからである。こうして、諸商品は質的に等置されているわけである。〉（初版付録、江夏訳900-901頁）

《補足と改訂》

〈 [A]
一般的価値形態の一要素をなしている1着の上着＝20エレのリンネル、1クオーターの小麦＝20エレのリンネル等といった、個々のすべての価値等式を考察すれば、相対的価値表現の最初の姿、すなわち、簡単な相対的価値形態を見いだす。たとえば、上着の価値は、ただ上着とは異なった種類の商品の使用価値において、すなわち、リンネルにおいてのみ表現される。しかし、コーヒー、茶、小麦、金、鉄、ようするに他のすべての商品種類の価値は、いまや同じようにリンネルで表現されている。簡単な相対的価値形態は、すべての商品の価値等式の関連を通して新しい性格を獲得する。価値表現という行為はいまや、個々の商品の私的な行ないではなくなる。いまや、価値表現は商品世界の共同の、社会的行為の結果として生ずる。

最初の価値形態では、一商品Aに価値表現の材料を提供する商品Bは、何であつてもよいがとにかくなんらかの、商品Aとは異なる商品種類である。それとは逆に、新たに見いだされた価値形態は、一定の商品種類、たとえばリンネルだけが、すべての他の商品にとって価値表現のために役立つ、ということから生ずる。同じ等価物におけるこの表現を通して、さまざまに異なった商品の価値は、簡単であり、しかも共同的であり、統一的な形態――一般的相対的形態をうけとる。〉（小黒正夫訳下11頁）

〈 [B]
一般的価値形態の要素をなしている1着の上着＝20エレのリンネル、1クオーターの小麦＝20エレのリンネル等といった個々の価値等式を考察すれば、相対的価値表現の最初の姿、すなわち、簡単な価値形態を見いだす。たとえば、上着の価値は、ただ上着とは異なった種類の商品の使用価値において、すなわち、リンネルにおいてのみ表現される。しかし、コーヒー、茶、小麦、鉄、ようするに他のすべての商品種類の価値は、いまや同じようにリンネルで表現されている。価値等式のこの関連は価値形態に一つの全く新しい性格を刻印する。

最初の価値形態では、商品Aがそれで価値を表現する商品Bは、何であつてもよいが、なんらかの、Aとは異なった商品種類である。それとは逆に、新たに見いだされた価値形態は、唯一の商品種類、たとえばリンネルだけが価値表現の材料に役立つということから生ずる。同じ等価物において表現されるということによって、さまざまに異なった商品の価値が一つの共通の形態を、簡単でしかも統一的な、したがって一般的な形態を受け取る。〉（同12頁）

〈 [C]
a)商品はそれぞれの価値を、いまや1)簡単に表わしている、なぜなら、ただ一つの商品種類で表わしているからであり、かつ2)統一的に表わしている、なぜなら、同じ商品種類で表わしているからである。諸商品の価値形態は、簡単かつ共同的であり、それゆえ一般的である。〉（同21頁）

《フランス語版》

〈諸商品はいまではその価値を、(1)ただ一つの商品種類のうちに表現しているから、単純なやり方で表現しているし、(2)同じ商品種類のうちに表現しているから、統一的に表現しているのである。それら商品の価値形態は単純で共通であり、したがって、一般的である。〉（36頁）

●【2】パラグラフ

《補足と改訂》

〈 [A]
その一般的性格によってはじめて価値形態は価値概念に対応する。最初の簡単な価値形態は、ただ、一商品の価値をそれ自身の身体、すなわち、それ自身の使用対象性と異なるものにおいてのみ表現したが、一般的相対的価値形態は、すべての他の商品の使用価値とは異なるものにおいて、唯一の例外である等価物商品で、価値を表現する。いまや、たとえば上着は、リンネルと等しい物として、自分自身の上着体とは異なっており、同じように、鉄、金、小麦等とも異なっている。すべての他の商品がその価値を、いまや同じように、リンネルという制服で見せていることによって、上着は価値として現われると同時に、他のすべての商品にたいして交換価値という形態をもつのである。第二の、または展開された価値形態において得ようと努力したが得られなかったもの、すなわち、相対的価値形態の一般的社会的性格が、達成された。〉

〈 [C]
b)形態IおよびIIIは、どちらも、一商品の価値を、その商品自身の使用価値または身体とは区別されたものとして表現したにすぎなかった。〉（前掲21頁）

《フランス語版》（第2パラグラフと第3パラグラフとは改行がなく、一つのパラグラフになっている）

〈形態Iと形態IIIは、一商品の価値をうまく表現しているといっても、それ自身の使用価値すな

わちそれ自身の物体から区別されたあるものとしてのことでしかない。第一形態は、 1 着の上衣＝20メートルのリンネル、 10ポンドの茶＝1/2トンの鉄 等というような等式を提供する。上衣の価値はリンネルに等しいあるもの、茶の価値は鉄に等しいあるもの、等々として表現されているが、上衣や茶のこうした価値表現は、リンネルと鉄がちがうのと同じく、互いにかがっている。この形態は、実地の上では、労働生産物が偶然な孤立的交換によってのみ商品に転化された原始時代にしか、明瞭に現われてこない。〉（38-9頁）

●【3】パラグラフ

《補足と改訂》

〈 [A]
その一般的な性格によってはじめて価値形態は価値概念に対応する。最初の簡単な価値形態は、ただ、一商品の価値をそれ自身の身体、すなわち、それ自身の使用対象性と異なるものにおいてのみ表現したが、一般的相対的価値形態は、すべての他の商品の使用価値とは異なるものにおいて、唯一の例外である等価物商品で、価値を表現する。いまや、たとえば上着は、リンネルと等しい物として、自分自身の上着体とは異なっており、同じように、鉄、金、小麦等とも異なっている。すべての他の商品がその価値を、いまや同じように、リンネルという制服で見せていることによって、上着は価値として現われると同時に、他のすべての商品にたいして交換価値という形態をもつのである。第二の、または展開された価値形態において得ようと努力したが得られなかったもの、すなわち、相対的価値形態の一般的社会的性格が、達成された。〉（同11-12頁）

〈 [B]
最初の価値形態では、商品Aがそれで価値を表現する商品Bは、何でもよいが、なんらかの、Aとは異なった商品種類である。それとは逆に、新たに見いだされた価値形態は、唯一の商品種類、たとえばリンネルだけが価値表現の材料に役立つということから生ずる。同じ等価物において表現されるということによって、さまざまに異なった商品の価値が一つの共通の形態を、簡単でしかも統一的な、したがって一般的な形態を受け取る。

最初の形態は、1着の上着＝20エレのリンネル、10ポンドの茶＝1/2トンの鉄、などのような価値等式を示した。上着商品の価値はリンネルに等しいものとして、ただ、それ自身の使用価値、すなわち上着体から区別されるだけであり、おなじように、茶商品価値は鉄と等しいものとしてそれ自身の使用価値、すなわち茶から区別されるだけである、等。しかし、上着価値と茶価値、すなわち、リンネルに等しいものと鉄に等しいものとは、使用価値リンネルと鉄とが異なっているように、異なっている。したがって、このような個々の価値表現は上着商品と茶商品を、一般的にさまざまな商品を、互いに価値として、すなわち同じ単位の表現として関係させはしない。この形態が実際に現われるのは、明かに、ただ、労働生産物が偶然的なときおき行われる交換によって商品に転化されるそもその始まりにおいてだけである。〉（同12-13頁）

〈 [C]
第一の形態は、1着の上着＝20エレのリンネル、10ポンドの茶＝1/2トンの鉄などのような価値等式を示した。上着価値はリンネルに等しいものとして、茶価値は鉄に等しいものとして、というように表現されるが、リンネルに等しいもの、および鉄に等しいものという上着および茶のこの価値表現は、リンネルと鉄が異なっているように、互いに異なっている。この形態が実際に現われるのは、明らかに、ただ、労働生産物が偶然的な散発的に行われる交換によって商品に転化されるそもその始まりにおいてだけである。〉（同21頁）

《フランス語版》（第2パラグラフと一緒に表示）

●【4】パラグラフ

《初版本文》

〈形態IIIにおいて、すなわち20エレのリンネル＝1着の上着、または＝u量のコーヒー、または＝v量の茶、または＝x量の鉄、等々 において、リンネルは自分の相対的価値表現を發展させているのであるが、この形態IIでは、リンネルは、一つの特殊的な等価物としての個々の商品である上着やコーヒー等々に関係し、そしてまた、自分の特殊的なもろもろの等価形態の広がりとしての全商品をひくくめたものに関係している。リンネルにたいしては、どの個々の商品種類もまだ、単一の等価物においてと同じに、等価物そのものとしては認められていないのであって、特殊的な等価物として認められているにすぎず、ここでは一方の特殊的な等価物が他方のそれを排除している。これに反して、逆の関係に置かれた第二形態であり、したがって第二形態のうちに含まれているところの形態IIIにあっては、リンネルは、すべての他商品にとっての等価物という種属形態として現われている。このことはあたかも、分類されて動物界のさまざまな類や種や亜種や科等々を形成しているライオンや虎や兎やその他のすべての実在する動物と並んで、またそれらのほかに、なおも動物というものが、すなわち動物界全体の個体的な化身が、存在しているかのようなものである。自分自身のうちに同じ物の現存種をことごとく包括しているところの、このような単一なるものは、動物や種等々のように、ある普遍的なものである。だから、リンネルが、別の商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係したことによって、単一の等価物になったのと同様に、リンネルは、すべての商品に共通な、価値の現象形態として、一般的な等価物、一般的な価値体、抽象的な、人間的な、労働の一般的な具象物に、なるわけである。だから、リンネルのうちに具象化された特殊な労働が、いまでは、人間労働の一般的な実現形態として、一般的な労働として、認められているわけである。〉（48-9頁）

《補足と改訂》

〈 [B]
1着の上着＝20エレのリンネルまたは＝10ポンドの茶または＝1/2トンの鉄または＝1クオーターの小麦等といった展開された価値形態は、上着商品の価値を上着体に対してリンネルと等しいものとして対置するばかりではなく、交互に、茶と等しいもの、鉄と等しいもの、小麦と等しいもの等としても対置する。依然として、上着商品の価値は、最初の価値形態よりはより完全にはあるにせよ、ただ、それ自身の使用価値と対立したものであるのみ表現されているだけである。他面、いまや、上着商品の価値それ自身がさまざまに異なった形態で表現されているだけではない。その表現は他のすべての商品をそれ自身の価値の表現から、したがってまた、それらと上着商品との共同の価値表現からも、明確に排除する。茶の価値は茶と等しいものとして、鉄

の価値は鉄と等しいものとしては表現されることはできない、等。この展開された価値形態が、はじめて実際に現れるのは、ある労働生産物、たとえば家畜等が、もはや例外的や偶然であったりせず慣習的に、他のさまざまな商品と交換されるときであり、したがって、その価値性格がすでに大いに固定しているときである。

簡単な価値形態も展開された価値形態も、ただ、現実の価値形態の準備的發展段階でしかない。一商品の価値を表現するという第一歩は、必然的に価値を、それ自身の使用価値、すなわち、それ自身の商品体とは異なった物として表現せざるをえなかった。しかしながら、それはやはり最初の一步でしかなかった。一商品の価値がはじめて現実的に表現されるのは、価値がそれ自身の使用価値とは異なった物として表現されるだけでなく、すべての他の商品との共通性としても表現されるときである。したがって、共同の価値形態においてのみ、諸商品は互いに価値として現象することができ、すなわち、お互いのために交換価値として自分を見せあうことができる。商品世界は、すべての商品がその価値を一つのそして同じ、唯一の商品種類で表現することによって、統一的な一般的相対的価値形態を護得する。そのことによって、すべての商品は排除された商品を自分たちの共通の等価物商品、すなわち、一般的等価物にする。

1着の上着＝20エレのリンネル、10ポンドの茶＝1/2トンの鉄等といった価値表現においては、価値形態の生産<Production>は、いわば、個々の商品の、すなわち、その価値をリンネルと等しいものとしてみずからの上着体から区別する上着商品の、またその価値を鉄と等しいものとしてみずからの茶体から区別する茶商品の、私事として現象する。1着の上着＝20エレのリンネルまたは＝10ポンドの茶または＝1/2トンの鉄または＝1クオーターの小麦または＝等、あるいは、1クオーターの小麦＝1着の上着または＝20エレのリンネルまたは＝等、といった全体的価値形態においても、上着や小麦、ようするに一連のそれぞれの商品は、ここでは返って見知らぬ価値表現のために単なる受動的な材料を提供しているにすぎない他の商品の関与なしに、自分の価値表現を得る。それに対して、一商品の一般的相対的価値形態は商品世界の共同事業としてのみ成立し、そして、元々から社会的刻印をもっている。諸商品はその価値性格においては互いに異なった自然、物ではなくて、同じ社会的物であるということは、すでに、一般的価値形態の形成のなかで表現されている。> (同13-14頁)

< [C]

b)第二の形態は、第一の形態よりも完全に、一商品、たとえば上着の価値の上着自身の使用価値との区別を、表現している。というのは、上着の価値は、いまや、リンネルに等しいもの、鉄に等しいもの、茶に等しいもの、等々として、つまり、上着に等しいものでないだけで他のあらゆるものに等しいものとして、あらゆる可能な姿において、上着自身の自然形態に相対するからである。他面、この形態は諸商品の共通な価値表現を、すべて、まったく不可能にする。というのは、それぞれの商品の価値表現において、他のあらゆる商品は、その等価物であり、したがって、自分自身の価値表現から排除されているからである。この展開された価値形態が、はじめて実際に現れるのは、ある労働生産物、たとえば家畜が、もはや例外的ではなくすでに慣習的に、他のさまざまな商品と交換されるときである。 それにたいして、一般的相対的価値表現においては、上着、コーヒー、鉄といったそれぞれすべての商品が、一つの同じ自分の自然形態とは異なった価値形態を、たとえばリンネルという形態をもつ。> (同21-22頁)

《フランス語版》

<第二形態は、たとえば上衣という一商品の価値と、それ自身の使用価値とのあいだにある差異を、第一形態よりも完全に表現している。実際のところ、上衣の価値はここでは、その自然形態に对立してあらゆる可能な姿をとる。すなわち、それは上衣を除いてリンネルや茶や鉄やすべてのものに類似している。他方、この形態は、諸商品に共通などんな価値表現をも不可能にする。というのは、なんらかの一商品の価値表現にあつては、他のすべての商品は、この商品の等価物として現われ、したがって、自分たち自身の価値を表現する能力がないからである。ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にではなく、すでに慣習的に、他の種々の商品と交換されるようになるやいなや、この発展した価値形態が現実に出現するのである。> (39頁)

●【5】パラグラフ

《補足と改訂》

< [B]

ところで、より立ち入って見てみると、いまや、上着、鉄、金、ようするにリンネル自身を例外としてすべての商品の価値は、一つの同じ形態、すなわち、リンネルと等しいものとして、表現される。

この制服はすべての商品の価値を、他のすべての使用価値の自然形態から区別するのと同じように、それら自身の使用価値から区別し、それゆえ、それとすべての商品に共通なもの、すなわち価値存在の現象形態である。このことは商品世界においては普通のことである、それゆえ、しかし、一般的に通用する価値表現は、すべての商品種類がその価値をリンネルで表現する、すなわち、自らを等価物としてのリンネルに関連させる簡単な価値等式の列からのみ発生する。それゆえ、すべての商品は、リンネルを直接自分たちと交換可能なものとして現わすことによりのみ、その価値を交換価値として表現する。そのようにして、リンネルすなわち等価物の自然形態が商品世界の一般的価値姿態に、社会的な価値の化身になる。(以下、関連する展開がながながと続くが、長すぎたので割愛します)> (前掲14-15頁)

< [C]

b)新しく得られた形態は、商品世界の諸価値を、商品世界から排除された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして、すべての商品価値を、それらのリンネルとの同等性によって表わす。リンネルに等しいものとして、どの商品の価値も、いまや、その商品自身の使用価値から区別されているだけでなく、それ以外のあらゆる使用価値から区別されており、まさに同時にその商品とすべての商品とに共通なものとして、表現されている。だから、この形態がはじめて現実諸商品に互いに価値として関連させ、言い換えれば、諸商品を互いに交換価値として現象させるのである。> (同22頁)

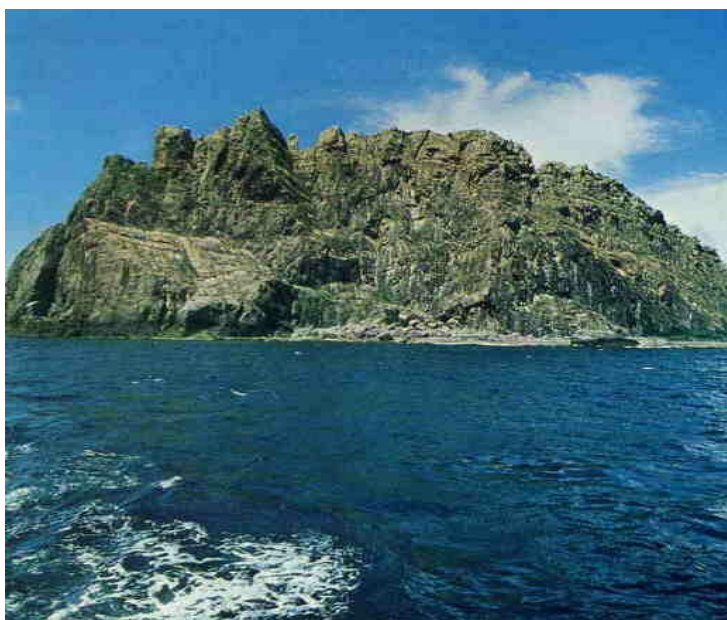
《フランス語版》

<これと反対に、相対的価値の一般的表現にあつては、上衣、コーヒー、鉄等のようなそれぞれの商品が、たとえばその自然形態とは異なるリンネル形態という、同一の価値形態をもっている。リンネルとのこの類似によって、各商品の価値はいまや、たんにそれ自身の使用価値から

区別されるだけでなく、さらになお、他のすべての使用価値からも区別されるのであって、それがために、すべての商品の共通で無差別な性格として表わされる。この形態は、諸商品を交換価値として相互に向かいあって出現させることによって、これらの諸商品を価値として相互に関連させあう、最初のものなのだ。〉 (39頁)

『資本論』を読んでみませんか

尖閣諸島海域での中国漁船と海上保安庁の巡視船との衝突をめぐり、中国船長の逮捕と釈放という菅政権の稚拙な外交政策とも相まって、この領域の領有権を巡る争いが、深刻化しています。



菅首相は1日の所信表明演説でも、「尖閣諸島は歴史的にも国際法的にも我が国固有の領土」だと主張。与野党を問わず、共産党も含めてこうした政府の立場に賛同しています。マスコミも菅政権の「弱腰外交」などと無責任な非難を強め、中国への敵愾心や民族主義や排外主義を煽っています。



この問題に労働者はどのような姿勢で接近し、対応すべきでしょうか。

それは「労働者階級には領土問題などは存在しない」という原則です。

そもそも地球上の土地や海洋が、歴史的に、さまざまな国家に分割・領有されてきたのは、これまでの社会が私的所有を基礎にした社会だからなのです。今日のそれぞれの国の中でも、土地は多くの個人や法人、あるいは国家によって分割・所有され、「それはAの所有する土地だ」、「いやそうではないBの所有地だ」等々と争われています。土地の私的所有とその領有を巡る争いは、まさに古代から今日までそれぞれの歴史的な条件のなかに存在し、今日では帝国主義的な覇権のもとに資源の争奪をめぐる国家間の争いとしても現われているのです。

私的所有が歴史的に発生し発展してきたのは、社会を構成する個々人が自分たちの社会的な物質代謝を、生産力の発展の過程で、その発展が不十分であるが故に、自覚的に直接コントロールすることができなくなった一結果です。だから本来は自分たち自身の関係である社会的な関係が、彼らから疎外された経済的な生産諸関係とか政治的・法的諸関係として立ち現れ、それらが特定の個人や集団によって壟断されることによって、個々人は私的な存在に貶められ、自分たち自身の関係そのものによって反対に支配・統制されるという転倒した現象が生じているのです。つまり生産力の発展がまだまだ不十分なために、歴史的に制約された発展段階にあったがためなのです。そして現代の資本主義的生産様式は、高度な生産諸力を飛躍的に発展させて、こうした歴史的な階級社会の最後の発展段階でもあるのです。

だから資本主義的生産様式は、すでにそれ自体のなかに将来の社会の芽を生み出してもいます。労働者階級は、資本主義的外皮を打ち破り、こうしたすでに潜在的に存在する将来の社会的生産様式を資本主義の胎内から解放して、それを築き発展させてゆくべき歴史的使命を担っています。私的所有にもとづく最後の生産様式を、私的所有のない新しい生産様式へと飛躍させなければならないのです。

それは労働の真の意味での解放でもあります。資本主義的生産様式のもとで高度に発展した社会的生産の物質的・技術的土台の上に直接に労働する諸個人が互いの関係を自覚的に取り結び、彼らの社会的な関係を彼ら自身のものとして取り戻すのです。それは同時に社会的な物質代謝を彼ら自身が意識的に統制し、自然と人間との関係を合理的にコントロールするということでもあります。だからそれはもはや人間の社会が、その疎外形態に過ぎない生産諸関係（経済的諸関係）としても政治的諸関係としても現われなくなるということでもあります。

マルクスは将来の社会から見た今日の土地の私有について、次のように述べています。

「より高度な経済的社会構成体（将来の共産主義社会——引用者）の立場から見れば、地球にたいする個々人の私有は、ちょうど一人の人間のもう一人の人間にたいする私有のように（奴隷制のこと——引用者）、ばかげたものとして現われるであろう。一つの社会全体でさえも、一つの国でさえも、じつにすべての同時代の社会をいっしょにしたものでさえも、土地の所有者ではないのである（これは地球上のすべての海洋についても然りです——引用者）。それらはただ土地の占有者であり土地の用益者であるだけであって、それらは、よき家父〔**boni patres familias**〕として、土地を改良して次の世代に伝えなければならないのである。」（『資本論』第3部、全集25巻b995頁）

だから地球上のすべての土地や海洋やその資源は、人類の共有の財産であって、人類はそこから、自身の社会的な物質代謝を意識的且つ合理的に統制して、有用なものを取り出し、彼らの生活を、よってまた彼らの社会を維持し発展させて行かなければなりません。そしてそれを何世代にもわたって後世に伝えて行かなければならないのです。だから将来の新しい社会の形成をめざす労働者階級には、そもそも地球上の一部を切り取り私有するような領土問題など存在しないのです。

共産党のように民主党や自民党などと一緒に尖閣諸島の「日本の領有権は、歴史的にも国際的にも明確な根拠がある」（笠井議員）等々と叫ぶことは、この党がすでに共産主義の立場や労働者階級の立場を裏切っていることを暴露してい

るのです。

『資本論』は、このように領有権問題における労働者階級の原則的な立場についても、明確にその理論的裏付けを与えています。是非、貴方も一緒に『資本論』を読んでみませんか。

第29回「『資本論』を読む会」の報告

◎堺まつり

第29回「『資本論』を読む会」を開催した10月17日(日)は、あいにく「堺まつり」と重なってしまい、ピースさんはどうしてもパレードの参加団体の顧問として「まつり」に参加する必要があり、「読む会」を欠席しました。

だから「読む会」はいつもにも増して寂しい開催となりました。しかもいつもレジュメとレポートを担当してくれるピースさんがいないので、大変困ったのですが、何とか「一般的価値形態」の「1 価値形態の変化した性格」の第6パラグラフから始めて、「1」の最後(9パラグラフ)まで終えることができました。さっそくその報告を紹介しましょう。

◎一般的相対的価値形態の変化した姿の質的考察の「まとめ」

今回は6パラグラフから始めたのですが、それまでとの繋がりが見えるように、前回(第28回)の報告で紹介した全体の構成を少し手を入れて採録しておきましょう。それは次のようなものでした。

〈1 価値形態の変化した性格〉は、〈相対的価値形態の変化した姿〉と〈等価形態の変化した姿〉という順序で考察されています。〈相対的価値形態の変化した姿〉は、その質的考察(【1】～【6】パラグラフ)と量的な考察(【7】パラグラフ)とに分けられて、そのあと〈等価形態の変化した姿〉(【8】パラグラフ)が考察され、さらに〈価値形態の変化全体のまとめ〉(【9】パラグラフ)が加わっています。〉

つまり6パラグラフは〈相対的価値形態の変化した姿〉の〈質的考察〉の最後のパラグラフであり、いわばその「まとめ」ともいべき位置にあることが分かります。

それではさっそく本文を詳細に検討して行くことにしましょう。これまでと同じように、まず本文を紹介し、各文節ごとに(イ)、(ロ)、(ハ)・・・と符号を打って、解説していくことにします。

【6】パラグラフ

〈(イ)前のほうの二つの形態は、商品の価値を、ただ一つの異種の商品によってであれ、その商品とは別の一連の多数の商品によってであれ、一商品ごとに表現する。(ロ)どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしにこれをなしとげるのである。(ハ)他の諸商品は、その商品にたいして、等価物という単に受動的な役割を演ずる。(ニ)これに反して、一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。(ホ)一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に他のすべての商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現するからにはかならない。(ヘ)そして、新たに現われるどの商品種類もこれにならなければならない。(ト)こうして、諸商品の価値対象性は、それがこれらの物の純粋に「社会的な定在」であるからこそ、ただ諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されるのであり、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならないということが、明瞭に現われてくるのである。〉

(イ)前の二つの形態(単純な価値形態と展開された価値形態)の場合、ある商品の価値を、ただ一つの異種の商品によってであれ(単純な価値形態の場合)、その商品とは別の一連の多くの商品によってであれ(展開された価値形態の場合)、あくまでも、例えばリンネルならリンネルの価値という一つの商品ごとに表現するものです。

(ロ)だから、どちらの場合にも、リンネルが自分に一つの価値形態を与えることは、リンネルの私事であって、リンネルは他の商品の助力なしにこれをやることとなります。

(ハ)といっても勿論、他の商品からはその等価物としての助力は得なければならないわけですが、しかしこれらの価値形態で能動的なのはリンネルだけであり、しかもそれはあくまでもリンネルの私事としての能動性であり、単純な価値形態であれ、展開された価値形態であれ、等価物として助力させられる商品はただ受動的にそれに協力するだけです。

(ニ)、(ホ)、(ヘ) これに反して、一般的価値形態では、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立します。つまり能動的なのは上着だけではなくて、リンネルで価値を表現するすべての商品、茶やコーヒーや鉄等々も上着と同じように能動的に、しかも共同して彼らの価値をリンネルで表現しているのであり、だからこの価値形態は商品世界の共同の仕事なのです。こうして初めてある一つの商品、例えば上着は一般的価値形態を得るのです。つまりこの形態で上着の価値は茶とも、コーヒーとも、鉄等々とも同じものとして、つまり「一般的なもの」という形態を得ているわけです。だからこの形態では 1着の上着＝20エレのリンネル と一見すると最初の単純な価値形態にもどるように見えますが、しかしそこには他のすべての商品世界全体がリンネルによって価値を表現していることが前提されているのです。だからまた新たに商品世界に入って来る商品もこれにならなければならないことになるのです。というのは、新たな商品が例え自らの価値をリンネルとは別の商品で表そうとしても、もはや等価物になる商品はないからです。新たな商品がもし例えリンネルとは別の商品で自らの価値を表す場合があっても、それは単に最初の偶然的な価値形態に逆戻りすることによってではないでしょう。

(ト)こうして、諸商品の価値対象性は、これらの商品の純粋に「社会的な定在」であり、だからそれら諸商品の全面的な社会的関係によってのみ表現されるということ、よって諸商品の価値形態はただ社会的に認められた形態でなければならないということが、この一般的相対的価値形態においては明瞭に現われているのです。

ここで学習会では「社会的な定在」というのがわざわざ鍵括弧に入っているが、そもそも「社会的な定在」というのは、どういうものなのか問題になりました。価値形態の最初のところでも(第三節の前文)、〈商品の価値対象性は純粋に社会的なものである〉との記述が見られましたが、そもそも「社会的なものである」というのはどういうことでしょうか。

マルクスは『補足と改訂』の[B]原稿のなかで次のように述べています。

〈価値としての労働体の生産は、労働体と同じ単位の、〈それらに共通なものの、それらのなかにある等しいものの〉表現に還元する。このことは、同じ単位の表現として、単位としての人間の労働にたいする関係、商品相互の関係、を含む。あるいは、この同じ単位の表現としての労働生産物相互の関係はそれらの価値存在である。そして、この関係を通してのみ、単なる労働生産物から、有用な使用対象が—商品になる。それゆえ、ある労働生産物が、それだけを切り放して考察した場合価値ではないのと同じように、それは商品ではないのである。それは、他の労働生産物と一緒にあって、すなわちさまざまな労働生産物が同じ単位の、人間の労働の結晶としてお互いに等置される関係においてのみ、価値になるのである。

したがって、つぎのように言うことができよう：諸商品の価値はそれらに共通な実体としての労働にたいする関係以外のなものでもないのであるから、ある一つの商品のこの価値はまた、その商品が価値としての他の商品とむすぶ関係のなかでのみ、したがって、さまざまな商品の価値関係においてのみ、現われることができるのである。このことから、さまざまな商品の関係においてのみ、価値表現は見いだされうるし、すなわち、商品は価値形態をもちうるのである。このことは、価値形態がどのように価値の本性それ自身から発しているかを、われわれに示している。〉（小黒訳19-20頁）

このようにマルクスは商品というのは、そもそも労働生産物の相互の社会的な関係こそがそれらを商品にし、また価値存在にするのだということを強調しています。私たちは商品の価値は商品に備わった自然属性ではなくて、超自然的属性であり、社会的な属性であること、すなわち「社会的な実体」であるということを知っています。ここで社会的実体であるというのはそもそもどういうことでしょうか。それはようするに社会的な関係のなかで存在するようなものだという事です。それは個々の商品とは別個に存在するわけではありませんが、しかし個々の商品だけを孤立させてしまうなら、すでにそこには存在せず、よってそれは商品ですらないというようなものなのです。だから個々の商品のなかにもありながら、しかし個々の商品だけにあるわけではないようなものなのです。つまりそれは諸商品の関係のなかにも存在するものなのです。だからそれはまた、諸商品の関係のなかでのみその存在を現わすものでもあるわけです。だから当然、商品の価値は他の諸商品との関係のなかでのみ現われ得るし、表現され得たわけです。商品の価値というのは、社会的な物質代謝が維持されるために、社会の総労働が与えられた生産力の下に必要な諸分野に適当に配分されるべきものとして客観的に法則的に貫いているような性格のものなのです。だからそれは単に一つの商品の他の一つの商品との関係だけではなくて、すべての商品の社会的関係にもとづいて初めて自己を十全に現わすものでもあるわけです。その意味では、一般的相対的価値形態はこうした価値の社会的性格をもっとも明瞭に現わしているものだと言えると思います。

◎〈相対的価値形態の変化した姿〉の「量的考察」

次の7パラグラフは、これまでの〈相対的価値形態の変化した姿〉の「質的考察」に対応した「量的考察」に該当します。

【7】パラグラフ

〈(i)リンネルに等しいものという形態ではいますべての商品が質的に同等なもの、すなわち価値一般として現われるだけではなく、同時に、量的に比較されうる価値量として現われる。(ii)すべての商品がそれぞれの価値量を同じ一つの材料、リンネルに映すので、これらの価値量は互いに反映しあう。(iii)たとえば、10ポンドの茶=20エレのリンネル、そして、40ポンドのコーヒー=20エレのリンネル。(iv)したがって10ポンドの茶=40ポンドのコーヒーというように。(v)または1ポンドのコーヒーに含まれている価値実体、労働は、1ポンドの茶に含まれているその4分の1でしかない、というように。〉

(i)リンネルに等しいものという形ですべての商品の価値は質的に同等なものとして現われているだけではなく、同時に、量的に比較可能なものとして、すなわち価値量としても現われています。

(ii)というのは、すべての商品がそれぞれの価値量を同じ一つの材料、リンネルに映し出すのですから、それらは同じ価値の大きさとして比較可能なものとなるわけです。つまりリンネルはすべての商品の価値の鏡（公式の鏡）になり、すべての商品は同じ鏡でそれぞれの価値とその大きさを映し出すので、同時にそれらの商品は価値量としても互いに反映し合うことになるのです。

(iii)、(iv)、(v)例えば、10ポンドの茶の価値が20エレのリンネルとして映し出され、同時に40ポンドのコーヒーの価値も20エレのリンネルとして映し出されるなら、10ポンドの茶の価値は、40ポンドのコーヒーと同じというように。あるいはまた1ポンドのコーヒーの価値の大きさは、1/4ポンドの茶の価値と同じ大きさであるということ、あるいは1ポンドのコーヒーに含まれている価値実体、労働は、1ポンドの茶に含まれているその4分の1でしかない、というように。

◎等価形態の変化した姿

初版付録では、ここに〈二 等価形態の変化した姿〉という項目が入ります。だからこのパラグラフでは一般的価値形態では等価形態はどのように変化しているかが考察されています。

【8】パラグラフ

〈(i)商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から除外された等価物商品、リンネルに、一般的等価物という性格を押しつける。(ii)リンネル自身の現物形態がこの世界の共通な価値姿態なのであり、それだから、リンネルは他のすべての商品と直接に交換されるのである。(iii)リンネルの物体形態は、いっさいの人間労働の目に見える化身、その一般的な社会的な縮小として認められる。(iv)織布、すなわちリンネルを生産する私的労働が、同時に、一般的な社会的形態に、すなわち他のすべての労働との同等性の形態に、あるのである。(v)一般的価値形態をなしている無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、他の商品に含まれているそれぞれの労働に順々に等置し、こうすることによって織布を人間労働一般の一般的な現象形態にする。(vi)このようにして、商品価値に対象化されている労働は、現実の労働のすべての具体的形態と有目的属性とが捨象されている労働として、消極的に表わされているだけではない。(vii)この労働自身の積極的な性質がはっきりと現われてくる。(viii)この労働は、いっさいの現実の労働がそれらに共通な人間労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものである。〉

(f) 商品世界を構成するすべての商品は、一般的な相対的価値形態において、商品世界から除外されたリンネルによって自らの価値を表すことによって、リンネルに一般的な等価物という性格を押しつけます。

ここでマルクスは〈一般的等価物としての性格を押しつける〉と〈押しつける〉という表現を使っていますが、リンネルの一般的等価物としての性格はあくまでもリンネルが受動的に商品世界から押しつけられたものだとの理解が重要だということが指摘されました。というのはこの一般的等価形態が貨幣形態にまでなるとその性格があたかも貨幣が生まれながらに持っているかの外観が生じ、だから諸商品の交換関係から、貨幣が生まれるという関係が逆転して、貨幣があるから商品がある、すなわち貨幣によって諸商品が流通させられるのだという観念が生じてくるからだということです。

(g) 単純な価値形態においても明らかになったように、リンネル自身の現物形態が、価値の形態になるのですが、ここではさらにそれは商品世界に共通の価値形態になるのです。だからまたリンネルはその現物形態のままでも他のすべての商品と直接に交換可能なものになります。

(h) いまではリンネルの物体形態は、いっさいの人間労働の目に見える化身、その一般的な社会的な蛹化として認められます。初版本文には次のような説明があります。

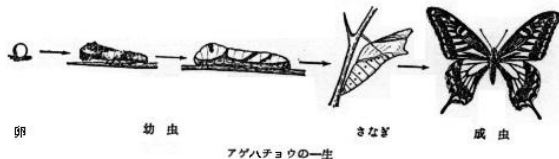
〈形態IIIにあつては、リンネルは、すべての他商品にとつての等価物という種属形態として現われている。このことはあたかも、分類されて動物界のさまざまな類や種や亜種や科等々を形成しているライオンや虎や兎やその他のすべての実在する動物と並んで、またそれらのほかに、なおも動物というものが、すなわち動物界全体の個体的な化身が、存在しているかのようなものである。自分自身のうちに同じ物の現存種をことごとく包括しているところの、このような単なるものは、動物や種等々のように、ある普遍的なものである。だから、リンネルが、別の商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係したことによって、単一の等価物になったのと同様に、リンネルは、すべての商品に共通な、価値の現象形態として、一般的な等価物、一般的な価値体、抽象的な、人間的な、労働の、一般的な具象物に、なるわけである。だから、リンネルのうちに具象化された特殊な労働が、いまでは、人間労働の一般的な実現形態として、一般的な労働として、認められているわけである。〉（江夏訳48頁）

ところで、学習会ではここにある〈蛹化〉という言葉が問題になりました。「蛹」というのは昆虫の「さなぎ」のことです。なぜ、こうした表現が使われているのか、ということです。

この問題については、以前、大阪で「『資本論』を学ぶ会」を開催していたときにも問題になり、「学ぶ会ニュース」No. 20で論じたことがあります。だからそこの説明を参考のために紹介しておきましょう。またそこで紹介されていたアゲハチョウの一生を図示したのも紹介しておきます。

【ここで〈一般的社会的蛹化〉とは、何を意味するのか、ということが問題になりました。報告者は〈中身は一般的社会的労働である。それが化けて蛹（サナギ）になったということ？〉と報告しましたが、今一つ自信がないようでした。

確かにリンネルの身体が、〈いっさいの人間の労働の目に見える化身〉として通用するということ、〈一般的社会的蛹化〉とは、同じ内容を述べたものであることは、前後の文脈から理解できます。つまり〈いっさいの人間の労働〉とは、リンネルでその価値を表す、商品世界のリンネル以外のすべての商品に対象化された〈いっさいの人間の労働〉です。〈人間の労働〉といった一般的なものは、確かに商品に対象化された具体的労働の抽象的属性であり、その限りでは商品に対象化され、商品に実在するものですが、商品を見てもそれ自体としては目に見えるものではありません。ところがリンネルの身体が、そうした一般物の目に見える形に化けたものとして通用するわけです。それが〈一般的社会的蛹化〉とも表現されています。



蛹化（ヨウカ）とは、〈昆虫の幼虫が、蛹に変態すること〉と『広辞苑』にあります。蛹はさらに変態して蝶になるわけですが、蛹は成虫の蝶や蜻蛉（トンボ）などに比べて、まだ地味な姿態をしています。しかしそれは艶（アデ）やかな蝶に変身する一歩手前まで来ているわけです。同じように一般的な等価物も、例えばリンネルの場合、それは単なる一つの商品でしかなく、他の商品とそれほど変わらない特別な存在ではありません。しかしそれは貨幣（金）になる一歩手前です。単純な価値形態から展開された価値形態と変態を繰り返して、ようやく価値形態は貨幣形態の一歩手前まで来たわけです。つまり一般的等価物はひかり輝くまばゆい貨幣に羽化する一歩手前の蛹のようなものであるとマルクスは述べているのではないのでしょうか？参加者の一人からは、これはマルクス特有の“文学的表現”ではないか、との意見もありました。また先に紹介した河上肇も次のように述べています。

〈拡大された価値形態から一般的価値形態への変態もまた、量から質への転化の一例である。前者の形態における一商品（例えばリンネル）の相対的価値の表現の系列が、その商品と交換されるために登場する他の諸商品の数を増すにつれて次第に延長されてある限度に達するときには、方程式は自然に転倒されて、一般的価値形態を表示するものに変態するのである。かくて幼虫の蛹への変態が実現される。〉（同上286頁）

(-)、(g) 私たちが単純な価値形態の等価形態で考察したように、ここではリンネルを生産する織布労働が、つまり私的労働が、同時に、そのまま一般的な社会的形態になります。しかも一般的等価形態においては、織布労働が、すべての労働と同等であることがこの形態そのものによって表されているわけです。というのは、一般的価値形態をなしている無数の等式は、リンネルという使用価値に実現されている具体的な労働である織布労働が、すべての他の商品に含まれているそれぞれの具体的な労働、例えば上着を生産する裁断労働やコーヒー栽培労働、鉱山労働など他のすべての労働種類によって等置され、こうすることによって織布労働という具体的な労働そのものを、裁断労働やコーヒー栽培労働や鉱山労働など他のすべての労働種類に共通である人間労働一般の一般的な現象形態にするわけです。

(v)、(b)、(f) こうして諸商品の価値に対象化されている労働は、いまでは、それらの現実の労働の具体的な形態と有用的属性とが捨象された労働として、すなわち抽象的一般の人間労働として消極的に表されているだけではありません。こ

の労働自身の積極的な本性がはっきりと現われてきます。この労働は、すべての現実の労働が人間的労働というそれらに共通な性格に、人間的労働の支出に、還元されたものなのです。

ここで学習会では、〈消極的〉と〈積極的〉ということでは何を言いたいのかが問題になりました。

労働生産物が商品になり価値を持つのは、それらが互いの交換において社会的な関係を取り結ぶことによってです。しかし労働生産物がこうした関係に置かれるのは、それらに同等なものがあるからにはかなりません。異なる使用価値をもつ労働生産物を同等なものにするためには、それらの使用価値を生産するために支出された労働の具体的で有用な属性を捨象して、抽象的な人間労働一般に還元しなければなりません。それらの生産のために支出された労働は、具体的属性を捨象された抽象的な属性によって始めて同等性を獲得し、交換関係という社会的な関係を取り結ぶことができたのです。

しかし一般的な等価形態においては、価値を形成する労働のこうした抽象的・一般的な性格は、単に具体的属性を捨象された抽象的なものとしてだけではなく、それらがリンネルを生産する織布労働という具体的形態において現象することによって、それ自身が形のあるものとして積極的に現われているというわけです。それはあたかも〈ライオンや虎や兎やその他のすべての実在する動物と並んで、またそれらのほかに、なおも動物というもの〉、すなわち動物界全体の個体的な化身が、存在しているかのようなもの（前掲初版本）なのです。ライオンや虎や兎の同等性は、それらをどのようにに分類する諸特徴を捨象して、それらを動物そのものに還元することによって可能ですが、いまでは、単にそうした具体的属性を捨象された消極的な抽象的なものとしての動物そのものだけではなく、それらの実在する諸動物とならんで動物そのものという一般物、動物界全体の個体的化身が現実存在しているのだというわけです。〈リンネルは、すべての商品に共通な、価値の現象形態として、一般的な等価物、一般的な価値体、抽象的な、人間的な、労働の・一般的な具象物に、なるわけで〉す。〈だから、リンネルのうちに具象化された特殊な労働が、いまでは、人間労働の一般的な表現形態として、一般的な労働として、認められているわけで〉す（同）。これが〈積極的な性質がはっきりと現われてくる〉ということの内容ではないかと思えます。『補足と改訂』にも次のような説明があります。

〈個々の等式はいまや、リンネルが鉄価値、コヒー価値、金価値等、一言で言えば商品世界の価値を形成している労働の明確な物質化であると声をそろえていっている他の無数の等式によって補足されている。それゆえ、リンネルは価値物質化――等価物商品の肉體――としてすべての他の商品体に含まれている労働の、したがって、無区別人間的労働の物質化であり、そして、リンネルと等しいものとしてすべての商品は、いまや一般に、以前の価値形態が限定付きでしか表現できなかったもの、すなわち商品価値にして労働の一般的人間的すなわち抽象的人間的性格を表現しているのである。リンネル体を形成する一定の具体的労働――リンネル紡織――は、他のすべての商品の価値を形成する労働と同じ種類の労働であるから、リンネル紡織は人間の労働それ自体の一般的現象形態である。それゆえ、リンネル紡織は、それが私的労働であったとしても、やはり、その自然形態においてその他のすべての労働との同等性の形態をもった、すなわち、直接的に一般的社会的形態にある。〉（小黒訳下14-15頁）

◎一般的な相対的価値形態の変化した性格の「まとめ」

次は、〈1 価値形態の変化した性格〉の最後のパラグラフであり、その「まとめ」です。

【9】パラグラフ

〈(4)諸労働生産物を無差別な人間労働の単なる凝固として表わす一般価値形態は、それ自身の構造によって、それが商品世界の社会的表現であることを示している。(4)こうして、一般価値形態は、この世界のなかでは労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっているということを明らかに示しているのである。〉

(4) 一般価値形態は、諸労働生産物を無差別な人間労働の単なる凝固として表します。それだけではなく、それ自身の構造によって、それは諸労働生産物を商品にする社会的な関係そのものの表現であるもことを示しています。

(4) こうして、一般価値形態は、この世界（ブルジョア社会）のなかでは労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっているということを明らかに示しているのです。

マルクスは『補足と改訂』のなかで、〈労働の一般的なすなわち抽象的な性格は商品生産においては、その社会的性格である、……社会的労働のこの規定された形態は、商品生産をその他の生産様式から区別する〉（小黒訳16頁）と指摘して、次のようにさらに例を上げて説明しています。

〈たとえば、家長制の家族、古代アジアの共同体等において、家族構成員や共同体構成員のさまざまな労働は、もともとから、一定の社会的性格をもっている。それらの労働は特殊な家族機能ないしは、共同体機能である。（「もしある農民家族がそれ自身の消費のために上着とリンネルと小麦を生産するとすれば、これらの物はその家族にはその家族労働のいるに違つた生産物として相対してはいるが、しかしそれら自身が互いに諸商品として相対してはいない。」）(P. 32) (「もし労働が〔古代アジア的共同体の労働のように〕直接的に社会的な、すなわち共同の、労働であるとすれば、諸生産物は、その生産者たちのための共同生産物であるという直接的社会的性格を受け取るであろうが、生産者どうしにとって商品という性格は受け取らないであろう。……諸私的労働の社会的な形態とは、同じ労働としてのそれらの相互の関係である。つまり、千差万別のいろいろな労働の同等性はただそれらの不平等の捨象においてのみ存在しうるのだから、それらの社会的な形態は、人間の労働一般としての、人間労働力の支出としての、それらの相互の関係であって、このような人間の労働の支出は、すべての人間の労働が、その内容やその作業様式がどうであろうとも、実際にそういうものなのである。どの社会的な労働形態においてもさまざまな諸個人の労働はやはり人間労働として互いに関係させられているのであるが、ここではこの関係そのものが諸労働の独自に社会的な形態として認められるのである。ところが、これらの私的労働のどれもがその現物形態においては抽象的な人間労働のこの独自性に社会的な形態をもってはいないのであって、それは、ちょうど、商品がその現物形態においては単なる労働凝固体という、すなわち価値という、社会的な形態をもってはいないのでと同じことである。……『社会的であること』の標準は、それぞれの生産様式に特有な諸関係の性質から借りられるべきであって、それに無縁な諸観念から借りられるべきではないのである。」）(p. 32 本文) 〉（同前16-17頁）

このような商品を生産する労働の独自の社会的性格については、〈第4節 商品の物神的性格とその秘密〉のなかで展開されるものです。ここでの記述は、それに繋がるものと言えるでしょう。

【付属資料】

●【6】パラグラフ

《初版付録》

〈価値形態は、この形態の一般的な性格によって、初めて、価値概念にかなったものになる。価値形態は、諸商品が、無差別で同質な人間労働の単なる膠状物として、すなわち、同じ労働実体の物的な表現として、相互に現われあっている、というような形態でなければならなかった。このことがいまでは達成されている。なぜならば、諸商品のどれもが、同じ労働の具象物として、すなわち、リンネルに含まれている労働の具象物として、または、労働の同じ具象物として、すなわちリンネルとして、表現されているからである。こうして、諸商品は質的に等置されているわけである。〉（江夏訳901頁）

《補足と改訂》

〈 [C]

c) まえの二つの形態は、商品の価値を、種類を異にするただ一つの商品によってであれ、その高品とは異なる一連の多数の商品によってであれ、一商品ごとに表現する。どちらの場合にも、自分自身に一つの価値形態を与えることは、いわば個々の商品の私事であり、個々の商品は他の諸商品の関与なしにそれをなしとげる。他の諸商品は、その商品にたいして、等価物という単に受動的な役割を演じる。これにたいして、一般的相対的価値形態は高品世界の共同事業としてのみ成立する。一商品が一般的価値表現を獲得するのは、同時に他のすべての商品がそれらの価値を等価物で表現するからにほかならず、そして、新しく登場するどの商品種類もこれにならなければならないのである。これによって、諸商品の価値対象性は――その存在が単に社会的な物として表現されるがゆえに――諸商品の全面的な社会的関連によってのみそれにふさわしく表現されうること、それゆえ、諸商品の価値形態は社会的に通用する形態でなければならないこと、が現われてくる。〉（小黒訳下22頁）

《フランス語版》

〈最初の二つの形態は、なんらかの一商品の価値を、これとは別の一商品かまたは一連の多くの他商品のうちに表現している。どちらの場合も、みずから価値形態になるのは個々の各商品のいわば私事であって、各商品は他の商品から手だしを受けることなく価値形態に到達する。他の商品はこの各商品にたいして、等価物という純粋に受動的な役割を演じる。これに反して、一般的な相対的価値形態は、総体としての諸商品の共通の作業としてのみ産み出される。一商品が一般的な価値表現を獲得するのは、ただ、他のすべての商品が同時にそれらの価値を同じ等価物のうちに表現するからであって、新たに現われる商品種類はどれもこれと同じことをしなければならぬ。さらに、次のことが自明になる。すなわち、価値の観点からすれば純粋に社会的な物である諸商品もまた、それらの相互関係をすべて包括する系列によってしか、この社会的な存在を表現することができず、したがって、それらの価値形態は社会的に有効な形態であるにちがいない、ということ。〉（39-40頁）

●【7】パラグラフ

《初版付録》

〈同時に、諸商品が、量的に比較されている。すなわち、一定の価値の大きさとして相互に表示されあっている。たとえば、10ポンドの茶=20エレのリンネル であるし、40ポンドのコーヒー=20エレのリンネル である。したがって、10ポンドの茶=40ポンドのコーヒー である。すなわち、1ポンドのコーヒーのなかには、1ポンドの茶に比べて、1/4の価値実体すなわち労働しか含まていない。〉（江夏訳901頁）

《補足と改訂》

〈 [C]

d) 共同の等価物商品の自然形態であるリンネルは、いまや、公式の価値制服である。リンネルにおいて、諸商品は互いに、価値としてのその質的同等性を示すだけではなく、同時に、価値の大きさとしての量的差異も示す。[22] 諸商品はその価値の大きさを一つの同じ材料リンネルに映し出すのであるから、この価値の大きさは相互に反映しあう。〉（小黒訳下22頁）

《フランス語版》

〈共通の等価物になる商品すなわちリンネルの自然形態は、いまでは公式な価値形態である。したがって、諸商品は相互に質的な同等性として現われるばかりでなく、さらになお価値の量的差異としても現われる。リンネルという同じ鏡の上に投影された価値量が、相互に反映しあう。

一例。10ポンドの茶=20メートルのリンネル、そして、40ポンドのコーヒー=20メートルのリンネル、したがって、10ポンドの茶=40ポンドのコーヒーであり、あるいは、一ポンドのコーヒーのなかには、一ポンドの茶に含まれている労働の四分の一の労働しかない〉(40頁)

●【8】パラグラフ

《初版本文》

〈形態IIIにおいて、すなわち、20エレのリンネル=1着の上衣、または=u量のコーヒー、または=v量の茶、または=x量の鉄、等々 において、リンネルは自分の相対的価値表現を發展させているのであるが、この形態IIでは、リンネルは、一つの特殊な等価物としての個々の商品である上着やコーヒー等々に関係し、そしてまた、自分の特殊なもろもろの等価形態の広がりとしての全商品をひっくるめたものに関係している。リンネルにたいしては、どの個々の商品種類もまだ、単一の等価物においてと同じに、等価物そのものとしては認められていないのであって、特殊な等価物として認められているにすぎず、ここでは一方の特殊な等価物が他方のそれを排除している。これに反して、逆の関係に置かれた第二形態であり、したがって第二形態のうちに含まれているところの形態IIIにあつては、リンネルは、すべての他商品にとつての等価物という種属形態として現われている。このことはあたかも、分類されて動物界のさまざまな類や種や亜種や科等々を形成しているライオンや虎や兎やその他のすべての実在する動物と並んで、またそれらのほかに、なおも動物というものが、すなわち動物界全体の個体的な化身が、存在しているかのようなものである。自分自身のうちに同じ物の現存種をことごとく包括しているところの、このような単一なるものは、動物や虫等々のように、ある普遍的なものである。だから、リンネルが、別の商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係したことによって、単一の等価物になったのと同様に、リンネルは、すべての商品に共通な、価値の現象形態として、一般的な等価物、一般的な価値体、抽象的な、人間的な、労働の一般的な具象物に、なるわけである。だから、リンネルのうちに具象化された特殊な労働が、いまでは、人間労働の一般的な表現形態として、一般的な労働として、認められているわけである。

商品Aの価値が商品Bで表されることによって、商品Bは単一の等価物になるのであるが、この表示のさいには、商品Bがどんな特殊な種類のものであるかはどうでも良いことであつた。商品Bの体躯性が商品Aのそれとは別の種類でなければならないし、したがつてまた、別の有用な労働の生産物でなければならなかつた、というだけのことである。上着は、自分の価値をリンネルで表すことによって、実現された人間労働としてのリンネルに関係したし、まさにそれゆゑに、人間労働の実現形態としてのリンネル織りに関係したのであるが、リンネル織りが別のもろもろの労働種類から区別されて特殊に規定されているということは、全くどうでもよいことであつた。それは、ただ、裁断労働とは別の種類のものでなければならなかつたし、とにかくある特定の労働種類でなければならなかつたのである。リンネルが一般的な等価物になると、そうではなくなる。この使用価値が、いまでは、この使用価値の特殊な規定——この規定に依拠して、この使用価値は、コーヒーや鉄等々という他のすべての商品種類とは区別されたリンネルになる——をもつたままで、すべての他商品の一般的な価値形態になり、したがつて一般的な等価物になっているのである。だから、この使用価値のうちに表されている、特殊な、有用な、労働種類が、いまでは、人間労働の一般的な表現形態として、一般的な労働として、認められているが、そのように認められているのは、まさに、この労働種類が、たんに裁断労働からばかりではなくコーヒー栽培や鉱山労働や他のすべての労働種類からも区別されているところの、リンネル織りという特殊に規定されている労働である、というかぎりにおいてのことなのである。逆に、他のすべての労働種類は、リンネルの、すなわち一般的な等価物の、相対的価値表現(形態II)にあつては、人間労働の特殊な表現形態としてしか認められていない。〉(江夏訳48-49頁)

《初版付録》

〈(二) 等価形態の変化した姿

特殊な等価形態が、いまでは、一般的な等価形態にまで發展している。すなわち、等価形態にある商品が、いまでは——一般的な等価物になっている。——商品体リンネルの現物形態が、他のすべての商品の価値姿態として認められているのであるから、この現物形態は、商品世界のすべての要素とのリンネルの無差別性あるいは直接的な交換可能性という形態なのである。だから、リンネルの現物形態は、同時に、リンネルの一般的な・社会的形態でもある。

リンネルは、他のすべての商品にとつては、たといこれらの商品がどれほど種類を異にする労働の生産物であろうとも、これらの生産物そのものなかに含まれている労働の現象形態として、したがつて、同質で無差別な人間労働の具体化として、認められている。だから、機織りと

いうこの特殊な、具体的な、労働種類が、いまでは、リンネルにたいする商品世界の価値関係を通じて、抽象的な、人間的な、労働の・すなわち、人間労働力一般の支出の・一般的でしかも直接的に十全な実現形態として、認められている。

まさにそうであるからこそ、リンネルのなかに含まれている私的労働は、直接に、一般的社会的の形態に、あるいは他のすべての労働と同等であるという形態に、あるところの労働としても、認められているのである。

だから、ある商品が一般的な等価形態をもっているばあいには、すなわち、一般的な等価物として機能しているばあいには、この商品の現物形態あるいは物体形態は、すべての人間労働の、目に見える化身すなわち一般的・社会的の化身として、認められているのである。〉（江夏訳901-2頁）

《補足と改訂》

〈 [B]

ところで、より立ち入って見てみると、いまや、上着、鉄、金、ようするにリンネル自身を例外としてすべての商品の価値は、一つの同じ形態、すなわち、リンネルと等しいものとして、表現される。

この制服はすべての商品の価値を、他のすべての使用価値の自然形態から区別するのと同じように、それら自身の使用価値から区別し、それゆえ、それとすべての商品に共通なもの、すなわち価値存在の現象形態である。このことは商品世界においては普通のことである、それゆえ、しかし、一般的に通用する価値表現は、すべての商品種類がその価値をリンネルで表現する、すなわち、自らを等価物としてのリンネルに関連させる簡単な価値等式の列からのみ発生する。それゆえ、すべての商品は、リンネルを直接自分たちと交換可能なものとして現わすことによるのみ、その価値を交換価値として表現する。そのようにして、リンネルすなわち等価物の自然形態が商品世界の一般的な価値形態に、社会的な価値の化身になる。

さまざまに異なった商品世界の肉体のなかに潜んでいる共通物、その価値実体である労働は、リンネルと等しいものとして、初めて同じ社会的装いをうけとり、それゆえまた、価値を形成する労働の特別な性格が初めてそれに照応した表現をうけとる。

その関連が一般的な価値形態を形成しているそれぞれの価値表現は、単なる簡単な相対的な価値表現でしかない。簡単な価値形態の分析が示したことは、1着の上着=20エレのリンネルという等式は、上着価値を形成する労働の感性的な表現、つまり物質化に転化する、ということである。しかし、個々の等式はいまや、リンネルが鉄価値、コヒー価値、金価値等、一言で言えば商品世界の価値を形成している労働の明確な物質化であると声をそろえていっている他の無数の等式によって補足されている。それゆえ、リンネルは価値物質化—等価物商品の肉体—としてすべての他の商品体に含まれている労働の、したがって、無区別な人間的労働の物質化であり、そして、リンネルと等しいものとしてすべての商品は、いまや一般に、以前の価値形態が限定付きでしか表現できなかったもの、すなわち商品を価値にしている労働の一般的人間的すなわち抽象的人間的な性格を表現しているのである。リンネル体を形成する一定の具体的労働—リンネル紡織—は、他のすべての商品の価値を形成する労働と同じ種類の労働であるから、リンネル紡織は人間的労働それ自体の一般的現象形態である。それゆえ、リンネル紡織は、それが私的労働であったとしても、やはり、その自然形態においてその他のすべての労働との同等性の形態をもった、すなわち、直接的に一般的社会的形態にある。〉（小黒訳下14-15頁）

〈 [C]

e)商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から排除された等価物商品であるリンネルに、一般的等価物という性格を押しつける。リンネル自身の自然形態がこの世界の共通な価値形態であり、したがって、リンネルは、他のすべての商品と直接に交換されうるものである。

f)リンネルを生産する織布労働という私的労働が、同時に、一般的な社会的形態にある労働として、他のすべての労働と同等性の形態の労働として適用する。一般的な価値形態を構成する無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、他の商品に含まれている労働に、順々に等置し、そうすることによって、織布労働を人間的労働一般の一般的現象形態にする。

g) こうして、商品価値に対象化されている労働は、現実的労働のすべての具体的形態と有目的属性が捨象される労働として消極的に表わされているだけではよい。この労働自身の積極的な本性がはっきりと現われてくる。この労働は、いっさいの現実的労働が人間的労働というそれらに共通な性格に、人間的労働の支出に、還元されたものである。〉（小黒訳下22-3頁）

《フランス語版》

〈商品世界を包括する一般的な相対的価値形態は、この世界から排除された等価物商品に、一般的等価物という性格を押しつける。リンネルはいまや他のすべての商品と直接に交換可能である。したがって、リンネルの自然形態は同時にその社会的形態でもある。リンネルを生産する私的労働である機織は、これがために、社会的労働という性格、他のすべての労働と同等である形態を獲得する。一般的価値形態を構成する無数の等式は、リンネルのなかに実現されている労働を、このリンネルとかわるがわる比較される各商品のなかに含まれている労働と同一視して、機織を、人間労働がそのなかに現われるところの一般的な形態にする。このようにして、商品の価値のなかに実現されている労働は、たんに消極的に、すなわち、実在の労働の具体的な形態と有用な属性とがそこで消滅するところの抽象として、表わされるだけではない。その積極的な性質がはっきりと確認される。この労働は、すべての実在の労働を、人間労働すなわち同じ人間労働力の支出というそれらの共通な性格に、還元したものである。〉 (40-41頁)

●【9】パラグラフ

《初版本文》

〈価値としては、諸商品は、同じ単位の表現、抽象的な、人間的な、労働の・表現である。交換価値という形態にあつては、諸商品は互いに価値として現われており、互いに価値として関係しあっている。諸商品は、このことによって、同時に、自分たちの共通な社会的実体としての・抽象的な、人間的な、労働に、関係している。これらの商品の社会的な関係は、もつぱら、それらが相互に、それらのこういった社会的実体の表現――量的にしかちがわず質的には同じであり、したがって互いに置き換えが可能であるし互いに交換が可能である、というような表現――として認められているという点において、成り立っている。有用物として一商品が社会的な規定を受け取っているのは、その商品がその所持者以外の人々にとって使用価値であり、したがって社会的な必要をみたく、というかぎりにおいてのことである。ところが、この商品の有用な属性がこの商品を誰の必要に関係させているかということにはかかわりなく、このような属性によって、この商品はつねに、人間の必要に関する対象になるだけであつて、別の諸商品にたいしての商品にはならない。単なる諸使用対象を商品に転化させるものだけが、それらの使用対象を、商品として互いに関係させることができ、したがって、社会的な関係のなかに置くことができるのである。ところが、これこそが諸使用対象の価値なのである。だから、諸使用対象が価値として、人間の労働膠着物として、認められているところの形態が、これらの使用対象の社会的な形態である。つまり、商品の社会的な形態と、価値形態あるいは交換可能性の形態とは、同一のものである。ある商品の現物形態が同時に価値形態であるならば、この商品は、他の諸商品との直接的交換可能性という形態を、したがって直接的に社会的な形態を、もっていることになる。〉 (江夏訳49-50頁)、

《補足と改訂》

〈 [C]

労働生産物を、同じ区別のない人間的労働の同じ種類の凝固として表わす一般的価値形態は、それ自身の構造によって、それが商品世界の社会的表現であることを示している。こうして、一般的価値形態は、商品世界の内部では労働の一般的人間的性格が労働の独自の社会的性格をなしているということを明らかにしている。〉 (小黒訳23頁)

《フランス語版》

〈一般的価値形態は、その購成自体によって、この形態が商品世界の社会的表現であることを示している。したがって、この形態は、この世界では労働の人間のあるいは一般的性格が、労働の独自の社会的性格を形成しているということを、明らかにしている。〉 (41頁)

『資本論』を読んでみませんか

11月2日に開票された、アメリカの中間選挙は、オバマ民主党の大敗に終わった。民主党は下院で過半数を割り込み、上院では辛うじて過半数は維持したものの大幅な後退を余儀なくされた。



米中間選挙で敗北したオバマ大統領

オバマ大統領は、敗因について「米国民にとって最大の懸念は、経済であることには疑いの余地がない。必要な前進ができていないという事実、私に直接の責任がある」と経済問題への対応の不十分さにあることを認めた。

実際、米CNNの出口調査でも投票にあたって重視した政策では「経済」を挙げた人が62%に登ったという。今年9月の全米の失業者数は1477万人に登り、失業率も9.7%となっている。さらに仕事を失うだけでなく、資産の差し押さえなどで住む場所さえ失う人が増大しているのだという。

しかし下院で過半数を割ったオバマ政権は、景気対策の主導権を失ったも同然とも言われている。オバマ政権は、この間、景気刺激策として史上最大となる7800億ドル（約64兆円）もの財政出動を行ってきた。しかし下院で過半数を握った共和党は、それらの政策を「大きな政府」政策として批判しており、今後は財政出動が困難になると予測されているからである。

こうしたなかで11月3日、米連邦準備制度理事会（FRB）は、来年6月までに6000億ドル（約49兆円）の長期国債（米債）を金融機関から買い入れるなどの追加の金融緩和策を決めた。FRBは2008年のリーマン・ショックによる金融恐慌に対応するために、同12月にいわゆる「ゼロ金利政策」を導入、昨年3月には長期国債3000億ドルの購入や住宅ローン担保証券や政府機関債の購入など、矢継ぎ早に信用を膨張させる政策を打ち出してきた。今回の国債の購入額はそれらを大幅に上回る規模である。

これを受けて、日本銀行は、すでに35兆円の基金をもとに、5兆円規模の長期国債の市中銀行からの購入や、株価指数連動型上場投資信託（ETF）や不動産投資信託（J-REIT）の市場購入などに踏み切ることを打ち出していたが、それを始めるために、5日、政策決定会合を前倒しして、週明けから開始することを決めたのだという。

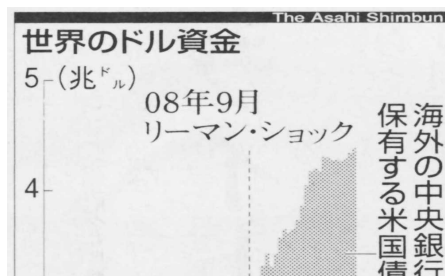
こうした日米の膨大ないわゆる「金融緩和策」というものの実体は一体何なのであろうか。すなわち経済学的にはそれらはどのように説明されるべきであろうか。またそれは今後の世界経済にどのような影響を及ぼすのであろうか。

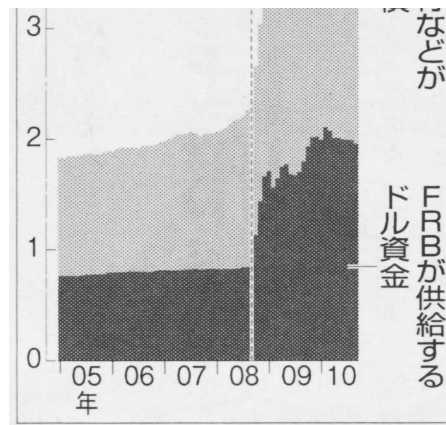
人によっては、こうした政府の政策を、「通貨の垂れ流し」とか「ヘリコプターで通貨をばらまく」とか、あるいは「輪転機をフル回転してドルをばらまく」などと説明する。しかしこれらは厳密な意味での「通貨」とは直接には何の関係もない。それらはマルクスが「帳簿信用」と述べている操作にもとづいている。つまり預金の帳簿記録をただ書き換えているだけに過ぎないのである。それを政府の信用（公信用）だけにもとづいて行っているわけだ。だからこうした膨大な貨幣の貸し借りが可能なのである（国債等の債権購入の実際の内容は利子生み資本に固有の運動である「貸借」である）。マルクスは「通貨」と「貨幣資本（moneyed Capital）」とは、恐慌時のような支払手段としての現金への需要が強烈に生じる一時期を除けば、直接には関連しないと次のようにのべている（ただし、こうした現金需要そのものも、信用制度が高度に発達している現在では、例え恐慌時でもほとんどなくなっている）。

〈このような場合（恐慌時——引用者）のほかは、通貨の絶対量は利子率（つまり貸し付け可能な貨幣資本の増減——同）には影響しない。なぜならば、この絶対量は——通貨の節約や速度を不変と前提すれば——第一には、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されており（といってもたいていの場合一方の契機は他方の契機的作用を麻痺させるのであるが）、また最後に信用の状態（諸支払の相殺度合い——同）によって規定されているが、逆にそれが信用の状態を規定するのではけっしてないからである。また、第二には、商品価格と利子とのあいだにはなにも必然的な関連はないからである。〉（『資本論』第3部第33章全集25 b 680頁）

以前に指摘した、「通貨」と「為替」との区別と同様に、またその区別を理解するためにも、「通貨」と「貨幣資本（利子生み資本）」との区別を理解することは、今日の複雑な金融諸政策の実際の内容を読み解くには極めて重要なのである。

さて、こうした政府の政策は、当然、市中銀行の貸し付け可能な貨幣資本を増大させる。だから金利は実質上ゼロに張りつく。しかしそれらが生産的な投資、すなわち蓄積に向かうことはほとんどできない。なぜなら、日米の産業資本はリーマン・ショック以後露呈した過剰生産に直面しており、何一つそれらが解消されていないからである。いくら市中銀行に実質ゼロ金利で入手した貸し付け資本が潤沢にあっても、彼らは将来焦げつきが予想され損失が確実な中小企業などに貸し付けるわけがないし、また大企業の側も低落した利潤率のもとで新規投資をする余地をほとんどなくしているからである。だからそれらのほとんどは銀行準備の一形態である様々な「金融商品」の購入に充てられざるを得ない。特に日米の金融機関に溢れる膨大な貨幣資本（moneyed Capital）は新興諸国の債権や土地等への投機資金として流出しており、それらの国々でバブルを引き起こす可能性が指摘されている。





そしてこうした貨幣資本の流出は、同時に、日米の為替相場（ドルや円）を押し下げる効果をもち、他方、それが流入する新興諸国（例えば中国やインド、ブラジル等）の為替相場を押し上げて、それらの国々の輸出を困難にさせている。だからオバマや菅は、それをドル高や円高に対抗する有効な為替政策の一つともしているわけである。

8日の人民日報は、米追加緩和策は間接的な為替操作だとする論説を掲載し、F R Bの行動は「世界の通貨切り下げ競争を誘発、『通貨戦争』や貿易保護主義につながり、世界経済の脅威になる」と指摘した。しかしそういう中国政府自身も、米国などの強い抗議にも関わらず、為替相場に直接介入する姿勢を変えず、膨大な外貨準備を積み上げるばかりなのである。

かくして、世界の大国は今や国内経済の行き詰まりのなかでますます余裕を失い、互いの損失を相手に押しつけ合う競争へと駆り立てられ、経済的・政治的な軋轢と対立・抗争の時代へと突入しつつあるかである。

こうした世界情勢や各国政府の経済政策の実際の内容を解明していくためにも、やはり『資本論』をしっかりと研究することがますます必要となりつつある。是非、貴方も『資本論』を共に読んでみませんか。

第30回「『資本論』を読む会」の報告

◎紅葉

どこに行っても紅葉がまばゆいばかりです。

しかしその華やかさの陰で、はらはらと舞落ちる病葉は何故か儂い気持ちにわれわれを誘うものです。

枯れ葉の行く末に何らかの暗示を受けながら、しかし私たちの「『資本論』を読む会」は依然として続けていくようではあります。はらはらと事毎に参加者が減りながらも、しぶとく続けていく意義が何処にあるのか、誰も分かりません。

残念ながら、今回も寂しい開催になりました。途中、何人かが会場を覗きに來られましたが、いずれもどうやら目指す会場を間違って訪れたようで、謝って去りました。

というわけで、今回は〈C 一般的価値形態〉の〈二 相対的価値形態と等価形態の発展関係〉をやったのですが、淡々と進み〈二〉の最後まで終えることができました。その報告を行うことにしましょう。

◎〈二〉全体の構成

いつものように、今回学習する〈二〉の課題とその構成について、まず見て行くことにしましょう。

〈一 価値形態の変化した性格〉では、獲得された一般的価値形態では、相対的価値形態と等価形態がどのように変化しているかが、それぞれ個別に考察されました。相対的価値形態と等価形態のそれぞれが形態Ⅰ（単純な価値形態）、形態Ⅱ（展開された価値形態）、形態Ⅲ（一般的価値形態）という価値形態の発展のなかで如何に変化したかが論理的にも歴史的にも通って考察されていました。

そうした考察を踏まえて、この〈二〉では、相対的価値形態と等価形態という二つの価値形態が、今度は統一されて、両者の関係の発展が考察されていると言えます。

初版付録では、すでに紹介しましたように（第28回報告参照）、この部分は〈3 相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係〉と〈4 相対的価値形態と等価形態との対極性の発展〉という二つの項目に分けられていました。だからここでは〈相対的価値形態と等価形態との発展関係〉が、〈相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係〉（[1]・[2]）と〈相対的価値形態と等価形態との対極性の発展〉（[3]～[7]）とに分けて考察されているわけです。

そしてまたその考察は〈一〉の場合と同じように、形態Ⅰ、形態Ⅱ、形態Ⅲの順にその発展関係が考察されています。

それでは前置きはこれぐらいにして、具体的にパラグラフをみて行くことにしましょう。今回もこれまでと同じように、まず本文を提示し、その文節ごとに(1)、(2)、(3)……記号を付して、それぞれを平易に書き下す形で進めることにします。

◎相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係

まず第1パラグラフです。

【1】〈(1)相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応する。(2)しかし、これは注意を要することであるが、等価形態の発展はただ相対的価値形態の発展の表現と結果とではないのである。〉

(1)相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応しています。

(2)しかしこのことは十分注意すべきことですが、等価形態の発展は、相対的価値形態の発展の表現であり、その結果に過ぎません。イニシアチブは、あくまでも相対的価値形態にあり、等価形態はただ受動的にそれを受け取るに過ぎません。

ここで特に(2)で述べられていることは重要であることが指摘されました。J J 富村さんは、ここで書かれていることそのものは、そんなに難しいことではなく、これまでの展開を踏まえれば、何となく分かるような気がする、と述べました。しかし、それに対して、事はそれほど簡単ではないのだとの指摘がありました。というのは前回（第29回）の報告でも、〈一〉の【8】パラグラフの解説のなかで、一般的な相対的価値形態がリンネルに一般的等価物という性格を「押しつける」という表現に関連して、次のように説明しました。

「ここでマルクスは〈一般的等価物としての性格を押しつける〉と〈押しつける〉という表現をとっていますが、リンネルの一般的等価物としての性格はあくまでもリンネルが受動的に商品世界から押しつけられたものだと理解が重要だということが指摘されました。というのはこの一般的等価形態が貨幣になるとその性格があたかも貨幣が生まれながら持っているかの外観が生じ、だから諸商品の交換関係から、貨幣が生まれるという関係が逆転して、貨幣によって諸商品が流通させられるという観念が生じてくるからだということです。」

今回は、この転倒した観念に、現実には、どれほど多くの人たちが惑わされているかということが話題になり、次のような例が紹介されました。

例えば戦後の世界資本主義は「管理通貨体制」と言われています。あるいは「管理通貨制度の下にある」とも。つまり「通貨」が国家によって「管理」されていると捉えられているのです。もちろん、ここには「通貨」概念の混乱が背景にあります。「通貨」というのは厳密には貨幣の流通手段と支払手段との機能を合わせたものを意味します。そしてこうした意味での「通貨」を「管理」できるなど考えるのは、貨幣についてのまさに転倒した観念の産物なのです。ところが、ブルジョア経済学者だけではなく、ほとんどのマルクス経済学者も、今日のいわゆる「不換制」の下では、「通貨」は国家によって「管理」されているのだという認識を持っています。しかし、「通貨」を概念的に捉えれば、それを「管理」するなどいうことができないことは明らかなのです。なぜなら、このパラグラフでマルクスが強調しているように、諸商品の交換という現実があって（そしてそのために諸商品がその価値を相対的な価値形態として表すという現実があって）、貨幣形態（一般的等価形態）があるのだからです。イニシアチブをとっているのは商品交換という現実です。だからもし「通貨」を「管理」しようと思うなら、商品の交換そのものを「管理」しなければならないことになるのです。そしてそれは実質上、われわれの社会的な物質代謝を「管理」するということに他なりません。しかしこんなことは現代の資本主義社会をひっくり返さない限り不可能でしょう。ところがマルクス経済学者を自認する人たちまで、資本主義を前提したままで、「通貨」の「管理」は可能だと考え、現代の資本主義はそうした体制なのだと説明して、何の疑いも持たず、いわばそれが常識と化しているありさまなのです。

こうした現代資本主義においては「通貨」は「管理」されていると捉えている人たちの誤りには二つの理由が考えられます。一つは先に指摘した「通貨」概念の混乱にもとづくものです。つまり「通貨」と「利子生み資本」という意味での貨幣資本（moneyed Capital）」との区別が分からずにごちゃに論じていることから来るものです（これについては第30回の「案内」でも少し述べました）。本当は「利子生み資本」としての貨幣資本（moneyed Capital）」の運動なのに、それを「通貨」の運動と捉えてしまっているのです。しかし「通貨」は社会的な物質代謝に直接関連します（媒介します）が、「貨幣資本（moneyed Capital）」は社会的な再生産の外部にある信用制度の下で運動する貨幣なのです。だから

こうした人為的な制度のもとでは、それは信用(特に公信用)を背景にいくらかでも膨張したり縮小したり、ある程度までは恣意的に左右できるわけです。だからそれを「通貨」と捉えたと、「通貨」は国家によって恣意的に「管理」されていると捉えることになってしまうわけです。

もう一つは貨幣名を変更することを持って、「通貨」を「管理」していると錯覚していることです。これについて詳しく説明すると、あとで学習する予定の〈第3章 貨幣または商品流通〉の内容にあまりにも踏み込みすぎますので、それは割愛しますが、いずれにせよ、貨幣名は確かに時の権力者によって恣意的に決めることが可能です。しかし、それは商品の価値量を表現する等価物の使用価値量が、例えば上着を「1着」「2着」と数えたり、ラクガを「1頭」「2頭」と数えるのも、ただ社会的な慣習にもとづいているように、一般に社会的な慣習によるものだからであり、だからまた貨幣としての金の量をどのように数えるのかも(それが貨幣名を決めるということです)、その限りでは恣意的に決めることが可能だというにすぎないのです。だからこれも決して「通貨」を「管理」しているわけではないのです。現代の不換制の下においても基本的にはこの延長上にあると考えるべきなのです。

このように『資本論』を読んでいる限りでは分かったつもりになっていても、いざ、現実の過程を説明しようとなると、結局は『資本論』が何度も強調し注意している間違った転倒した観念にとらわれている例が多いのだという説明でした。

次は第2パラグラフです。

【2】〈(1)一商品の単純な、または個別的な相対的価値形態は、他の一商品を個別的等価物にする。(2)相対的価値の展開された形態、すなわちすべての他の商品での一商品の価値の表現は、これらの商品にいろいろに違った種類の特殊の等価物という形態を刻印する。(3)最後に、ある特別な商品種類が一般の等価形態を与えられるのであるが、それは、すべての他の商品がこの商品種類を自分たちの統一的一般的な価値形態の材料にするからである。〉

(1)一商品の単純な、個別的な相対的価値形態は、他の一商品を個別的等価物にします。

(2)一商品の全体的な相対的価値形態は、一商品の価値を表す他のすべての商品に、それぞれ種類の違った特殊な等価物という形態を与えます。

(3)そして最後のすべての商品が共同でその価値を表す一般的な相対的価値形態は、その価値を表す材料となる商品世界から排除されたある特別な商品に一般の等価形態を与えます。

この部分は初版付録では、次のようにより詳しい展開になっています。

〈単純な相対的価値形態は、一商品の価値を、唯一の他の商品種類でのみ表現するのであって、この商品種類がなんであってともかまわない。だから、この商品は、それ自身の使用価値形態あるいは現物形態とは異なる価値形態しか受け取れない。この商品の等価物も、単一の等価形態しか受け取れない。発展した相対的価値形態は、一商品の価値を、他のすべての商品で表現する。だから、他のすべての商品は、多くの特殊な等価物という形態すなわち特殊な等価形態を、受け取るわけである。最後に、商品世界は、自分に、統一的な、一般的な、相対的価値形態を与えるが、そうするのは、商品世界が唯一の商品種類をのけものにし、この唯一の商品種類のうちに、他のすべての商品が自分たちの価値を共同で表現するからである。こうすることによって、こののけものにされた商品が一般的な等価物になる。すなわち、この等価形態が一般的な等価形態になるわけである。〉(江夏訳902頁)

より詳しい説明にはなっていますが、基本的に言われていることは同じことです。ここでは単純な相対的価値形態→「個別的」な等価形態、展開された相対的価値形態→「特殊」な等価形態、一般的な相対的価値形態→「一般」な等価形態、という相互の発展関係が対比された形で示されています。ここで等価形態が「個別」、「特殊」、「一般」という形で発展して、商品の価値の概念にもっと相応しい形態を獲得する過程が示されているといえるでしょう。

◎ 相対的価値形態と等価形態との対極性の発展

次の第3パラグラフからは、相対的価値形態と等価形態との対極性の発展です。

【3】〈(1)しかし、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、その二つの極の対立、相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。〉

(1)相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係とともに、それは同時に両形態の対極性、対立の発展でもあるのです。

このパラグラフも初版付録では詳しく展開されていますので、まずそれを紹介しておきましょう。

〈相対的価値形態と等価形態との対極的な対立、あるいは、不可分な一対であるとともに同じく絶えず排除しあっているということ、したがって、(1)一商品は、他の商品が反対の形態になれば、一方の形態にあることができないということ、そしてまた、(2)一商品が一方の形態にあると、その商品は、この価値表現では、同時に他方の形態にもあることができるということ―価値表現の両契機のこういった対極的な対立は、価値形態一般が発展または完成するのと同じ度合いで、発展し硬化する。〉(江夏訳902頁)

ここでは〈対極的な対立〉を説明して、〈不可分な一対であるとともに同じく絶えず排除しあっているということ〉という説明が加えられ、さらにそれぞれについて(1)(2)と説明されています。すなわち〈不可分の一対である〉ということとは、〈一商品は、他の商品が反対の形態になれば、一方の形態にあることができないということ〉と説明され、〈絶えず排除しあっているということ〉については、〈一商品が一方の形態にあると、その商品は、この価値表現では、同時に他方の形態にもあることができないということ〉という説明が加えられています。そしてさらに、こうした〈対極的な対立〉の発展が、〈価値形態一般が発展または完成するのと同じ度合いで、発展し硬化する〉と説明されています。つまり対立が発展するということは、その対立が硬化する度合いが発展するということだということです。つまりそれぞれ対立した極に由来する商品が特定のものに固定されることが、すなわちその対極性の発展の内容であることが示唆されています。

ヘーゲルは「対立」について次のように説明しています。

〈本質の区別は対立であり、区別されたものは自己にたいして他者一般ではなく、自己に固有の他者を持っている。言い換えれば、一方は他方との関係のうちのみ自己の規定を持ち、他方へ反省しているかぎりにおいてのみ自己へ反省しているのであって、他方もまたそうである。つまり、各々は他者に固有の他者である〉(『小論理学』岩波文庫、下28頁)

また以前にも紹介したことがある『ヘーゲル論理学入門』(有斐閣新書)は、さらに分かりやすく次のように解説しています。

〈第一に、・・・対立的な二つのものは、その規定性に関しては相互に排斥しあう関係にあって、たがいに自分とは他方のものではないということが、そのまま直接に自分自身の規定と合致するという関係にあります。第二に、・・・人間のうちあって男性でないものといえばだちに女性を意味するように、兩極的な対立物は、たがいに、たんなる他者としてではなくて、それぞれに固有の他者としてあるのです。第三に、・・・両者は、一つのものの不可分の二側面として互いに前提しあい依存しあう関係にあります。このように、その規定性にかんしては相互排斥的な兩極的關係にあるものが、その存在にかんしては相互前提的な関係にあること、これが対立です。〉(70-1頁)

つまり相対的価値形態と等価形態とは、互いに前提しあいながら、同時に相互に排斥しあっているような関係にあるということです。こうした対立的な関係が、それぞれの価値形態の発展によって、対立のものも発展し、硬化するというわけです。そうした対極性の発展関係が、単純な価値形態(【4】)から展開した価値形態(【5】)、そして一般的価値

値形態（〔6〕・〔7〕）へと価値形態が発展する度合いに応じて、どのように発展しているかを考察しようというわけ
です。

だから第4パラグラフは単純な価値形態ではそれがどうなっているかの考察です。

〔4〕 〈(f)すでに第一の形態——20エレのリンネル＝1着の上着——もこの対立を含んではいるが、それを固定させ
てはいない。(g)同じ等式が前のほらから読まれるかあとのほうから読まれるかにしたがって、リンネルと上着というよ
うな二つの商品種のそれぞれが、同じように、あるときは相対的価値形態にあり、あるときは等価値形態にある。(h)両極
の対立をしっかりとつかんでおくには、ここではまだ骨が折れるのである。〉

(f)すでに第一の形態（単純な価値形態）にも対立が含まれていることは〈A 単純な、個別的な、または偶然的な価値
形態〉の〈一 価値表現の両極 相対的価値形態と等価値形態〉のなかでみてきました。例えば次のように説明されていま
した。

〈相対的価値形態と等価値形態とは、互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な契機であるが、同時にまた、同じ
価値表現の、互いに排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。この両極は、つねに、価値表現によって互
いに関係させられる別々の商品のうえに分かれている。〉

だから相対的価値形態にリンネルがあるということは、リンネルは同時に等価値形態にあることはできず、必ず他の別
のある商品、例えば上着でなければならなかったのです。

しかし単純な価値形態では、まだそれは固定させてはいませんでした。

(g)例えば20エレのリンネル＝1着の上着という等式がなりたつということは、同時に1着の上着＝20エレのリン
ネルという等式も成り立ちました。つまりどちらの商品もあるときは相対的価値形態にあり、また別のあるときには等価
形態にもあることができたのです。

(h)だからこの場合、二つの形態が互いに排斥し合う関係にあるということをつかむためには、いささが骨が折れたの
でした。だから次のような考察がなされたのです。

〈たとえば、リンネルの価値をリンネルで表現することはできない。20エレのリンネル＝20エレのリンネル はけ
って価値表現ではない。この等式が意味しているのは、むしろ逆のことである。すなわち、20エレのリンネルは20
エレのリンネルに、すなわち一定量の使用対象リンネルに、ほかならないということである。つまり、リンネルの価値は
、ただ相対的にしか、すなわち別の商品でしか表現されえないのである。それゆえ、リンネルの相対的価値形態は、なに
か別の商品がリンネルにたいして等価値形態にあるということを前提しているのである。他方、等価値物の役を演ずるこの
別の商品は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それは自分の価値を表わしているのではない。それは、ただ
別の商品の価値表現に材料を提供しているだけである。〉

もちろん、20エレのリンネル＝1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値するという表現は、1
着の上着＝20エレのリンネル または1着の上着は20エレのリンネルに値するという逆関係を含んでいる。しかし、
そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そして、そうするや
いなや、上着に代わってリンネルが等価値になる。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われるこ
とはできないのである。この両形態はむしろ対極的に排除しあうのである。〉

次の第5パラグラフは展開された価値形態の場合です。

〔5〕 〈(f)形態Ⅱでも、やはりただ一つ一つの商品種類がそれぞれの相対的価値を総体的に展開しうただけである。(g
)言いかえれば、すべての他の商品がその商品種類にたいして等価値形態にあるからこそ、またそのかざりでのみ、その商
品種類自身が、展開された相対的価値形態をもつのである。(h)ここではもはや価値等式——たとえば 20エレのリン
ネル＝1着の上着 または＝10ポンドの茶 または＝1クォーターの小麦、等々——の二つの辺をおきかえることは、
この等式の全性格を変えてこれを全体的価値形態から一般的価値形態に転化させることなしには、不可能である。〉

(f)形態Ⅲ（展開された価値形態）でも、やはり両形態の対極的な対立は含まれています。すなわち、一つ一つの商品種
類がそれぞれの相対的価値をそれ以外のすべての商品によって展開して表現しうただけです。ある一つの商品種類が展
開された相対的価値形態にあるなら、それはそれを表現する材料である他の多くの特殊な等価値形態の一つになることは
できません。

(g)言いかえれば、すべての他の商品が、その一つの商品種類に対して特殊な等価値形態にあるからこそ、またその限り
においてのみ、その一つの商品種類は展開された相対的価値形態を持つのです。確かにここでは、その一つの商品種類は
、ある特定の商品に固定されてはいません。

(h)しかし、ここでは単純な価値形態のように、この価値等式そのもの、例えば 20エレのリンネル＝1着の上着
または＝10ポンドの茶 または＝1クォーターの小麦、等々の二つの辺をひっくり返すことは、もはやできません。そ
れをやるこの等式そのものを全性格を変えてしまい、全体的な価値形態から一般的価値形態に転化させることになっ
てしまうからです。つまりここでは対極的な対立の「硬化」はその限りでは一段と進んでいることが分かります。

次は一般的価値形態の場合についてですが、これは一般的な相対的価値形態（〔6〕）と一般的な等価値形態（〔7〕）
とに分けて考察されています（その間に注24が入ります）。

〔6〕 〈(f)このあとのほうの形態、すなわち形態Ⅲが最後に商品世界に一般的な社会的な相対的価値形態を与えるので
あるが、それは、ただ一つの場合を除いて、商品世界に属する全商品が一般的等価値形態から排除されているからで
あり、またそのかざりでのことである。(g)したがって、一商品、リンネルが他のすべての商品との直接的交換可能性
の形態または直接的に社会的な形態にあるのは、他のすべての商品がこの形態をとっていないからであり、またそのかざり
でのことなのである(24)。〉

(f)形態Ⅲ（一般的価値形態）は、商品世界に一般的な社会的な相対的価値形態を与えますが、それはただ一つの場合
を除いて、商品世界のすべての商品が一般的等価値形態から排除されているからであり、またその限りにおいてのみです。
これは相対的価値形態と等価値形態の対極的な対立が、商品世界のすべての商品と、その商品世界から排除されたある例
外的な商品種類という形で現われていることを意味します。ここでは一般的等価値形態にある商品は、商品世界から排除さ
れた例外的存在としてあります。つまりその限りでは「硬化」は一段と進んでいるともいえます。

(g)だから、この例外的な一商品、例えばリンネルが他のすべての商品との直接的な交換可能性の形態にある、あるいは
直接的に社会的な形態にあるということは、他のすべての商品がこうした形態から排除されているからであり、またその
の限りにおいてのことなのです。

初版本文では次のように説明しています。

〈諸商品の一般的な相対的価値表現にあつては、上着やコーヒーや茶等々の各商品とも、自分の現物形態とはちがっ
た価値形態、すなわちリンネルという形態をもっている。そして、まさにこういった形態において、諸商品は、交換可能
なものとして、しかも量的に規定された割合で交換可能なものとして、互いに関係しあっている。なぜならば、1着の
上着＝20エレのリンネル、u量のコーヒー＝20エレのリンネル、等々 であれば、1着の上着＝u量のコーヒーでも
あるからだ。すべての商品が同一商品のうちに自分たちを価値量として映し出すことによって、これらの商品は互いに価
値量として映りあっているのである。ところが、これらの商品が使用対象としてもっている諸現物形態は、これらの商品
同士にとっては、こういった回り道を経てのみ、したがって直接にはではなく、価値の現象形態として認められているの
である。だから、これらの商品は、自分たちの姿のままであれば、直接的に交換可能なものではなくなる。つまり、それ
らは、相互間での直接的交換可能性という形態をもっていない、すなわち、それらの社会的に妥当な形態は、媒介され
た形態なのである。逆に言えば、価値の現象形態としてのリンネルに、すべての他商品が関係することによって、リンネ

ルの現物形態が、すべての商品とのリンネルの直接的交換可能性という形態になり、したがって、直接的にリンネルの二般的・社会的形態になるわけである。）（江夏訳52頁）

商品の直接的な存在は、その使用価値です。私たちは商品を見て感覚的に捉えるのは、その物的存在でしかありません。だから一般に商品はその使用価値のままでは直接には交換できないのです。だから、それができるようになるためには、それが他の商品と同じものであることを示す必要があります。それがすなわちその商品の価値なわけです。商品は自らの価値を目に見える形で表現して、その現物形態が価値そのものであるものに転換してこそ、他の諸商品と直接に交換可能なもの、直接に社会的に妥当な形態を獲得することができます。そしてそうした現物形態が価値そのものを表すものこそ、すなわち等価形態であり、そうした商品世界から排除された唯一の例外的存在が、すなわち一般的等価形態だということです。

この第6パラグラフについて注24も紹介して解説しておきましょう。しかし、各文節ごとの詳しい解説は省略します。

【注24】〈24〉じっさい、一般の直接的交換可能性の形態を見ても、それが一つの対立的な商品形態であって、ちょうど一磁極の陰性が他の磁極の陰性と不可分であるように非直接的交換可能性の形態と不可分であるということは、決してわからないのである。それだからこそ、すべての商品に同時に直接的交換可能性の権印を押すことができるかのように妄想することでもできるのであって、それは、ちょうど、すべてのカトリック教徒を教皇にすることができると妄想することもできるようなものである。商品生産に人間の自由と個人の独立との頂点を見る小市民にとっては、この形態につきものいろいろの不都合、ことにまた諸商品の非直接的交換可能性から免れるということは、もちろんまったく望ましいことであろう。この俗物的ユートピアを描きあげたものがブルドンの社会主義なのであるが、それは、私がほかのところでも示したように〔26〕、決して独創という功績などのあるものではなく、むしろ彼よりもずっと前にグレーやプレーや他の人々によってもっとずっとよく展開されたのである。こういうことは、このような知恵が今日でもある種の仲間のあいだでは「科学」という名のもとに流行しているということを妨げないのである。ブルドンの学派ほど「科学」という言葉を乱用した学派はかつてなかった。じっさい、「まさに概念の欠けているところに、言葉がうまくまにあうようにやってくるものなんだ〔27〕。」

一般的等価形態の直接的な交換可能性というのは、それが一つの対立的な商品形態であるからこそなのである。つまりそれは他のすべての商品が非直接的な交換可能性にあるからこそなのである。それはちょうど一つの磁極の陰性が他の磁極の陰性と不可分であるように不可分なのである。しがしこうしたことは小ブルジョア的な観念には理解されない。だから彼らはすべての商品に同時に直接的交換可能性の権印を押すことができるかに妄想することができるのです。それは丁度、すべてのカトリック教徒を教皇にできると妄想するのと同じです。商品生産に人間の自由と個人の独立の頂点を見る小市民にとっては、この形態につきものいろいろの不都合から免れようとする、つまり諸商品の非直接的交換可能性から免れるということはまことに望ましいことです。こうした俗物的なユートピアを描きあげたものがブルドンの社会主義なのである。それは私が『哲学の貧困』のなかで明らかにしたように、決して独創的なものではなく、彼よりもずっと前にグレーやプレーや他の人々とによってもっとずっとよく展開されたものなのです。しかしこういうことは、このような知恵が「科学」という名のもとに流行することを妨げないのです。ブルドンの学派ほど「科学」という言葉を乱用した学派かてりませんでした。というのも「まさに概念の欠けているところに、言葉がうまくまにあうようにやってくるもの」だからです。

これに関連しては、エンゲルスが『哲学の貧困』の序文で述べている一文を紹介しておきましょう。またここでマルクスが言及しているグレーやプレーについては詳しくは【付属資料】を参照してください。

〈労働が商品価値の尺度であることが認識されるやいなや、律気なブルジョアの善良な感情も、この正義の原則を名目上は認めはするが、実際にはたえず平然とそれを無視しているようにみえる世間の意地悪さによって、ふかく傷つけられるのを感ぜないわけにはいかない。とりわけ小ブルジョア、すなわち彼のまじめな労働一たえそれが彼の職人と徒弟の労働にほかならないにしてもーが六生産と機械との競争によって日一日とますますその価値を失いつつある小ブルジョアは、とりわけ小生産者は、労働価値に従う生産物の交換が最終的に完全に例外なく実現しているような社会を、熱望しないわけにはゆかない。いいかえれば、商品生産の一つの法則はもっぱら完全に妥当するが、そのもとのみ法則が一般に妥当しうるどころの諸条件、すなわち商品生産の、さらに資本制生産の、他の諸法則が廃棄されるような社会を、熱望しないわけにはゆかない。

このユートピアが、近代のー現実にあるいは観念上のー小ブルジョアの思考様式のなかにきわめて深く根をおろしていることの証拠は、次の事実である。このユートピアは、1831年にすでにジョソ・グレイによって体系的に展開され、30年代にイギリスにおいて実地に試みられかつ理論的にひろめられ、ドイツではロートベルトウスによって1842年に、フランスではブルドンによって1846年に最新の真理と宣言され、さらに1871年にはロートベルトウスによって、ふたたび社会問題の解決として、いわば彼の社会的遺言書として公表され、そして1884年にまたもや、それは、ロートベルトウスの名のもとにプロイセンの国家社会主義をくいものしようとする熱意になっている出世主義者一味を信奉者にかちえている）（全集第4巻879頁）

次の第7パラグラフでは一般的な等価形態における対極的な対立がどうなっているかが考察されています。

【7】〈(4)反対に、一般的等価物の役を演ずる商品は、商品世界の統一的な、したがってまた一般的な相対的価値形態からは排除されている。(0)もしもリンネルが、すなわち一般的等価形態にあるなら商品の、同時に一般相対的価値形態にも参加するとすれば、その商品は自分自身のために等価物として役立たなければならないであろう。(A)その場合には、20エレのリンネル＝20エレのリンネル となり、それは価値も価値量も表わしていない同義反復になるであろう。(C)一般的等価物の相対的価値を表現するためには、むしろ形態IIIを逆にしなければならないのである。(B)一般的等価物は、他の諸商品と共通な相対的価値形態をもたないのであって、その価値は、他のすべての商品体の無限の列で相対的に表現されるのである。(A)こうして、いまでは、展開された相対的価値形態すなわち形態IIが、等価物商品の独自の相対的価値形態として現われるのである。〉

(4)一般的な相対的価値形態について上記のようにいえるということは、反対に、一般的等価物の役割を演ずる商品については、この商品が、商品世界の統一的な、したがって一般的な相対的価値形態からは排除されているということがいえるわけです。

(0)もしもリンネルが、つまり一般的等価形態にある何らかの商品が、同時に一般相対的価値形態にも参加するとすると、その商品は自分自身のために等価物として役立たなければならないでしょう。

(A)しかしその場合には、20エレのリンネル＝20エレのリンネル となり、私たちが価値表現の両極を考察したときに確認したように、これは価値も価値量も表さない同義反復でしかなく、ただ〈20エレのリンネルは20エレのリンネルに、すなわち一定量の使用対象リンネルに、ほかならないということ〉を示すだけに過ぎません。

(C)一般的等価物の相対的価値を表現するためには、むしろ形態IIIを逆にしなければならないのです。

(B)一般的等価物は、他のすべての商品の身体で、その無限の列で、自身の価値を相対的に表現するしかないので。

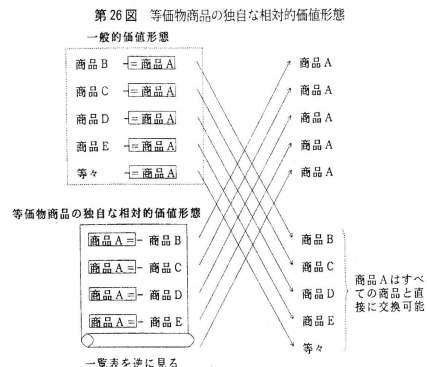
(A)こうして、いまでは、展開された相対的価値形態、すなわち形態IIが、等価物商品の独自の相対的価値形態として現われているのです。

ここで「等価物商品の独自の相対的価値形態」という用語が出てきますが、これについて大谷禎之氏は『価値形態』という論文で次のように述べています。

〈だから、一般的等価物となっている商品の価値を相対的に表現するためには、形態C（形態IIIー引用者）を逆にしなければならない。そうすれば、その価値は、他のすべての商品体の無限の列で相対的に表現されることになる。形態Cを逆をすれば、ふたたび形態B（形態IIー引用者）が現われるのだから、いまや、展開された価値形態すなわち形態Bが、等価物商品の独自の相対的価値形態として現われているのである。ただし、等価物商品の価値を表現する商品体の列は、等価物である商品が直接に交換しうる他の諸商品のそれぞれの量を示す等式の列であって、形態から見れば展開された相対的価値形態と同じものであるが、それは事実上、商品世界に属するすべての商品の一般的価値表現の無限の

列を、あるいはその一覧表を逆に読んだものにほかならない。だからそれは、等価物商品の独自の相対的価値形態と言われるのである。(第26図)(下線は大谷氏、『経済志林』第61巻220-1頁)

ついでに大谷氏が図示している「第26図」も紹介しておきます。ただこれはあくまでも一つの参考して紹介するのであって、その是非は各自判断して下さい。



【付属資料】

●〈二〉の表題について

《初版付録》――二つの項目に分けられている。

〈(3) 相対的価値形態と等価形態との均斉のとれた発展関係〉

〈(4) 相対的価値形態と等価形態との対極性の発展〉

《補足と改訂》

〈2)相対的価値形態と等価形態との発展関係〉(小黒訳下23頁)

《フランス語版》

〈(b) 相対的価値形態と等価形態との発展関係〉

●【1】パラグラフに関するもの

《初版付録》

〈相対的価値形態の発展度には、等価形態の発展度が対応している。ところが、このことは十分に注意すべきことだが、等価形態の発展は、相対的価値形態の発展の表現でありかつまた結果であるにすぎない。イニシアチブは、後者のほうから発動する。〉(江夏訳902頁)

《フランス語版》

〈等価形態は相対的形態とともに、同時に、段階的に発展する。しかし、このばあいよく注意すべきことだが、前者の発展はたんに後者の発展の結果であり表現でしかない。発端が始まるのは後者からである。〉(江夏他訳41頁)

●【2】パラグラフに関するもの

《初版付録》

〈単純な相対的価値形態は、一商品の価値を、唯一の他の商品種類でのみ表現するのであって、この商品種類がなんであってかまわない。だから、この商品は、それ自身の使用価値形態あるいは現物形態とは異なる価値形態しか受け取らない。この商品の等価物も、単一の等価形態しか受け取らない。発展した相対的価値形態は、一商品の価値を、他のすべての商品で表現する。だから、他のすべての商品は、多くの特殊的な等価物という形態すなわち特殊的な等価形態を受け取るわけである。最後に、商品世界は、自分に、統一的な、一般的な、相対的価値形態を与えるが、そうするのは、商品世界が唯一の商品種類をのけものにし、この唯一の商品種類のうちに、他のすべての商品が自分たちの価値を共同で表現するからである。こうすることによって、こののけものにされた商品が一般的な等価物になる。すなわち、この等価形態が一般的な等価形態になるわけである。〉(江夏訳902頁)

《補足と改訂》

〈最初の文章 +

一商品の簡単な、または個別的な価値形態は、他の一商品を個々の等価物にする。相対的価値の展開された形態、すなわち他のすべての商品による一商品の価値の表現は、それらの商品にさまざまな種類の特殊的等価物という形態を刻印する。最後に、ある一つの特殊的な商品種類が一般的な等価形態を受け取るが、それは、他のすべての商品が、その商品種類を、それらの商品の一般相対的価値形態の材料にするからである。〉(小黒訳下23頁)

《フランス語版》

〈一商品の単純あるいは単独な相対的価値形態は、なんらかの他の一商品を偶然的な等価物

として前提している。発展した相対的価値形態、他のすべての商品においての一商品のこうした価値表現は、他のすべての商品全部にいろいろな種類の特種な等価形態を押しつける。最後に、独自の商品が一般的等価形態を獲得するが、それというのも、他のすべての商品がこの商品をも、自分たちの一般的な相対的価値形態の材料にするからである。〉（江夏他訳41頁）

●【3】パラグラフに関するもの

《初版付録》

〈相対的価値形態と等価形態との**対極的な対立**、あるいは、不可分な一対であるとともに同じく絶えず排除しあっているという、したがって、(1)一商品は、他の商品が反対の形態になければ、一方の形態にあることができないということ、そしてまた、(2)一商品が一方の形態にあると、その商品は、この価値表現では、同時に他方の形態にもあることができないということー一価値表現の両契機のこういった**対極的な対立**は、価値形態一般が発展または完成するのと同じ**度合いで、発展し硬化する**。〉（江夏訳902頁）

《補足と改訂》

〈しかし、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、その両極である相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。〉（小黒訳下23頁）

《フランス語版》ー独自のパラグラフとしてはない、次のパラグラフと一緒にパラグラフになっている。

●【4】パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈**単純な相対的価値形態(形態1)**である 1着の上着＝20エレのリンネルが、**一般的な相対的価値形態**である 1着の上着＝20エレのリンネルから区別されるのは、この等式が今は次の系列の一環を形成しているからにほかならない。

1着の上着＝20エレのリンネル
u量のコーヒー＝20エレのリンネル
v量の茶＝20エレのリンネル
等々

つまり、形態1は、じっさいには、リンネルが一つの単一の等価物から**一般的な等価物**に発展しているということによってのみ、区別されている。したがって、**単純な相対的価値表現**にあっては、自分の**価値量**を表現する商品ではなく、**価値量がそれにおいて表現される**ところの商品が、**直接的交換可能性の形態**、等価形態、したがって**直接的に社会的な形態**を得ているとすれば、同じことは、一般的な相対的価値表現についてもあてはまる。だが、単純な相対的価値形態にあっては、この区別はまだ形式的であってぼやけている。1着の上着＝20エレのリンネル では、上着が自分の価値を相対的に、すなわちリンネルで、表現しており、そうすることによって、リンネルが等価形態を得ているとしても、この等式は、20エレのリンネル＝1着の上着 という逆の関係を直接に含んでいるのであって、この関係では、上着が等価形態を得ており、リンネルの価値が相対的に表現されているのである。相対的価値としての・および等価物としての・両商品の価値形態もところの、このように対称的であり相互的である表示は、もう生じていない。1着の上着＝20エレのリンネル **一般的な相対的価値形態**ーこの形態ではリンネルが**一般的な等価物**であるーが、20エレのリンネル＝1着の上着 に転倒されても、そのことによって、上着は、すべての他商品にとっては**一般的等価物**になるのではなくて、リンネルの特種な等価物になるにすぎない。〉（江夏訳50-1頁）

《初版付録》

〈**形態1**においては、この両形態はすでに互いに排除しあっているが、このことは**形式的であるにすぎない**。同じ等式を前方から読むか後方から読むかに応じて、リンネルと上着という両商品種のそれぞれが、一様に、あるときは相対的価値形態にあり、あるときは等価形態にある。対極的な対立をしっかりとらえておくには、このばあいまだ骨が折れる。〉（江夏訳902-3頁）

《補足と改訂》

〈第一の形態、20エレのリンネル＝1着の上着ーは、すでにこの対立を含んでいるが、それを固定化させてはいない。例えば20エレの[リンネル]=1着の上着という価値等式において、一方の極の上着が相対的価値形態にあり、反対の極のリンネルが等価形態にある。いま、この同じ等式を逆から読めば、上着とリンネルは単純に役割を交換するが、等式の形は不変である。それゆえ、ここでは、対立を固持するのはまだ骨がおれる〉（小黒訳下24頁）

《フランス語版》

〈しかし、価値形態一般が発展するのに応じて、その二つの極である相対的価値と等価物との対立もまた発展する。20メートルのリンネル＝1着の上衣 という第一の価値形態自体が、すでにこの対立を含んでいるが、この対立を固定してはいない。この等式では、一方の項であるリンネルが相対的価値形態のもとにあり、これと反対の項である上衣が等価形態のもとにある。いまこの等式をあべこべに読むならば、リンネルと上衣とはただたんにその役割を変えるだけだが、等式の形態は同じままである。したがって、このばあい両項間の対立を固定することは困難である。〉（江夏他訳41頁）

●【5】パラグラフに関するもの

《初版付録》

〈形態IIIにおいては、いつでも一つ一つの商品種類がその相対的価値を総和として発展させることができるのは、すなわち、この商品種類自身が発展した相対的価値形態をもっているのは、他のすべての商品がこの商品種類にたいして等価形態にあるからこそであり、また、そのかぎりにおいてのことではない。〉（江夏訳903頁）

《補足と改訂》

〈 [C]
したがって、ここではもはや、20エレのリンネル＝1着の上着または＝10ポンドの茶または1クォーターの小麦または等といった価値等式の両辺を置き換えることは、等式の全性格を変えることなしに、そして、等式を全体的な価値形態から一般の価値形態へ転換することなしには不可能である。〉

[D]
したがって、ここではもはや、等式の両辺を置き換えることは、この等式の全性格を変えてそれを全体的価値形態から一般の価値形態に転化させることなしには、不可能である。〉（小黒訳下24頁）

《フランス語版》

〈形態IIでは、一種類の商品がその相対的価値を完全に発展させることができる、すなわち、総和の相対的価値形態を帯びている。というのは、他のすべての商品がこの商品にたいして等価形態のもとにあるからであり、またそのかぎりのことである。この形態では、この等式の性格を完全に变えて、これを総和の価値形態から一般の価値形態に移行させることなしには、この等式の両項を置き換えることがもはやできなくなっている。〉（江夏他訳41-2頁）

● [6] パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈諸商品の一般的な相対的価値表現にあつては、上着やコーヒーや茶等々の各商品とも、自分の現物形態とはちがった価値形態、すなわちリンネルという形態をもっている。そして、まさにこういった形態において、諸商品は、交換可能なものとして、しかも量的に規定された割合で交換可能なものとして、互いに関係しあっている。なぜならば、1着の上着＝20エレのリンネル、u量のコーヒー＝20エレのリンネル、等々であれば、1着の上着＝u量のコーヒーでもあるからだ。すべての商品が同一商品のうちに自分たちを価値量として映し出すことによって、これらの商品は互いに価値量として映りあっているのである。ところが、これらの商品が使用対象として持っている諸現物形態は、これらの商品同士にとっては、こういった回り道を経てのみ、したがって直接にはなく、価値の現象形態として認められているのである。だから、これらの商品は、自分たちの姿のままであれば、直接的に交換可能なものではなくなる。つまり、それらは、相互間での直接的交換可能性という形態をもっていない、すなわち、それらの社会的に妥当な形態は、媒介された形態なのである。逆に言えば、価値の現象形態としてのリンネルに、すべての他商品が関係することによって、リンネルの現物形態が、すべての商品とのリンネルの直接的交換可能性という形態になり、したがって、直接的にリンネルの一般的・社会的形態になるわけである。〉（江夏訳52頁）

〈だから、二商品が、すべての他商品との直接的交換可能性という形態で、したがって直接的に社会的な形態で、存在しているのは、すべての他商品がこの形態で存在していないからでなく、またそのかぎりにおいてのことではない。すなわち、商品は総じて、その直接的な形態がその使用価値という形態であつてその価値という形態ではないために、直接的に交換可能な形態あるいは社会的な形態では、もともと存在していないからなのである。〉

一般的な直接的交換可能性という形態を見ても、この形態が対立的な商品形態であり、非直接的交換可能性という形態と不可分であるのは、あたかも磁極の一方の陽性が他方の陰性と不可分であるようなものだ、といったことは、じっさいにはけつしてわからない。だから、すべての商品に直接的交換可能性の極印を同時に押すことができると想像しうるのであつて、このことは、すべての労働者を資本家にするかのように想像しうると、同じである。ところが、じっさいには、一般的な相対的価値形態と一般的な等価形態とは、諸商品の同じ社会的形態の、対立的な、相互に前提しあい、相互に斥撥しあう両極なのである。(23)（同上53頁）

《初版付録》

〈最後に、形態IIIにおいては、商品世界は一般的な社会的な相対的価値形態をもっているが、このことは、商品世界に属するすべての商品が、等価形態あるいは直接的な交換可能性という形態から排除されているからこそであり、また、そのかぎりにおいてのことではない。〉（江夏訳903頁）

《補足と改訂》

〈 [A]
さいごに、形態III、
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
1クォーターの小麦 = 20エレのリンネル
×商品のA =
その他の商品 =

において、商品世界が一般的な社会的な相対的価値形態をもつのは、全ての商品が、ただ一つの商品を除いて、等価形態から排除されているからであり、またそのかぎりにおいてのことすぎない。リンネルという一つの商品が、ここで、他の全ての商品との直接的交換可能性の形態または直接的社会的形態にあるのは、他のすべての商品がこの形態にないからであり、またその限りでのことである。(これに対する注、本文p.31と注23)

それゆえここでは、相対的価値形態自身が諸商品を等価形態から排除している。一般的等価物として機能し、それゆえ、商品の一般的な相対的価値形態から排除されている商品については逆で

ある。

一般的等価物として機能する商品の相対的価値は、そのように等式を逆転することによって表現され、それゆえ・・・に解消する。

[B]

最後の形態、形態Eが、最終的に商品世界に一般的相対的価値形態をあたえる。

[B2]

・・・、ただ一つの例外をのぞいて、すべての商品が等価形態から排除されているからであり、またその限りにおいてである。だから、リンネルという一つの商品が他のすべての商品との直接的交換可能性の形態または直接的社会的形態にあるのは、他のすべての商品がそこにないからでありまたその限りでのことである。(これに対する注、本文p.31と注23)

一般的等価物として機能し、商品の統一的な、したがって一般的な相対的価値形態から排除されている商品については逆である。(小黒訳下24-5頁)

《フランス語版》

〈終りに、最後の形態である形態IIIは、諸商品全体に一般的で画一的な相対的価値表現を与えるが、それは、この形態がただ一つの商品を例外として、他のすべての商品を等価形態から排除するからであり、またそのかぎりでのことである。したがって、リンネルという一商品は、他のすべての商品との直接的交換可能性という形態のもとにあるが、それは、他のすべての商品がこの形態のもとにないからであり、またそのかぎりでのことである。(23)〉

●【注24】に関するもの

《初版本文》

〈(23)商品生産という形態のなかに人間の自由と個人の独立との頂点を見る小市民にとっては、この形態につきものの不都合から、ことにまた諸商品の非直接的交換可能性から免れるということは、もちろん、大いに望ましいことであろう。この俗物的なユートピアを描きあげたものが、ブルードンの社会主義であって、この社会主義は、私が他の箇所ですべて示しているように、けっして独創性という功績をもっているわけではなく、むしろ、彼よりもはるか以前に、プレーやグレイやその他の人々の手で、はるかにもっとうまく叙述されていた。このことは、このような知恵が今日フランスでは「科学」という名のもとではびこっているのを、妨げてはいない。ブルードン学派ほど、「科学」という言葉を乱用した学派はなかった。なぜならば、「まさに概念の欠けているところに、言葉がうまく間にあうようにやってくるものなんだ。」ゲーテ『ファウスト』岩波文庫版、相良守峯訳、第1部、133頁、より引用)〉

《フランス語版》

〈(23) 直接的、普遍的な交換可能性という形態は、一見したところでは、次のことをすこしも示していない。すなわち、この形態は、自己のうちに対立を含んでいる分極形態であって、磁石の一方の極の陽極としての役割が、他方の極の陰極としての役割から分離できないのと全く同じように、この形態は、直接的な交換が不可能であるような反対の形態から分離できない、ということ。したがって、人は、すべての商品を直接的に交換可能なものにする能力が自分にある、と想像することができる。ちょうど、すべてのカトリック教徒を同時に教皇にすることができる、と想像することもできるように。だが、実際には、一般的な相対的価値形態と一般的な等価形態とは、諸商品の同じ社会的関係の、相互に想定しあい相互に排除しあう二つの対極なのである。

諸商品間の直接的交換がこのように不可能であることは、現在の生産形態—ブルジョア経済学者はこの生産形態のうちに人間の自由と個人の独立との絶頂を見ている—に結びついている主要な不都合の一つであるが、この障害を克服するために、多くの無駄で空想的な努力が試みられてきた。私が別の場所ですべて示したように、この試みではブルードンは、プレーやグレイやその他の人々に先を越されていたのである。〉(江夏他訳42頁)

・ブレイ、ジョン・フランシス(1809-1895) アメリカ生まれのイギリスのユートピア社会主義者、経済学者としてはオーエンの信奉者、職業は植字工、1837年創立のリーズ労働者協会の会計係、1842年にアメリカに帰る。ブレイの著書は『労働者の不当な処遇と労働者の救済策』(1839年)があるが、『哲学の貧困』ではそこからかなり長い引用がなされている(全集第4巻97-106頁参照)。そのなかでマルクスが結論的に述べている部分を紹介しておこう。

〈はじめにあったのは、生産物の交換ではなくて、生産に協力する労働の交換である。生産物の交換様式は、生産諸力の交換様式に依存するのである。一般に、生産物の交換の形態は、生産の形態(生産様式—ドイツ語版)に照応する。後者を変えれば、それに応じて前者も変化するようになるであろう。それゆえにわれわれは社会の歴史のなかに、生産物を交換する様式がこれらの生産物を生産する様式にもとついて規定されるのを見るのである。私的交換もまた一定の生産様式に照応している。そして、この生産様式そのものがまた、諸階級の敵対関係に照応しているのである。だから、階級対立がなければ私的交換はありえない。しかし、実直な〔ブルジョア的〕良心はこの明白な事実を拒否する。ブルジョアであるかぎり、人はこの敵対関係をば、他人の犠牲において自分だけ儲けることをだれにも許さない調和と永遠の正義の関係(状態—ドイツ語版)とみなすほかには、どうしようもないのである。ブルジョアにとっては、私的交換は諸階級の敵対関係がなくとも存続しうるのである。彼にとっては、私的交換と階級対立とは、まったく関係のない事だからである。ブルジョアが心のなかで考えているような私的交換は、実際におこなわれている私的交換とは似てもつかぬものなのである。ブレイ氏は、実直なブルジョアの幻想をば、彼が実現したいと念願している理想に祭りあげる。私的交換を浄化することによって、私的交換のなかに彼の見いだすいっさいの敵対関係を除去することによって、彼が社会のなかに忍びこませようと念願している「平等主義的」諸関係を見いだすことができる、と彼は信じこんでいるのである。ブレイ氏がこの世の中に適用しようと念願しているこの平等主義的關係なるものは、この、現実を是正する理想なるものは、それ自体が現在の社会の反映にすぎないのであり、したがってまた、現在の社会の美化された影にほかならぬものを基礎として社会を再建することはまったく不可能なことを、氏は理解しないのである。この影がふたたびはつきりとした姿となるにつれて、人々は、この姿が社会の夢想された理想像であるどころか、社会の実際の姿であることに、気づいていくのである。〉(全集第4巻105-6頁)

・グレイ、ジョン(1798-1850)、イギリスのユートピア社会主義者、ロバート・オーエンの門弟。グレイの著書は『社会制度論、交換原理についての一論』(1831年)、『貨幣の性質および用

途にかんする講義』（1848年）等がある。マルクスは、『経済学批判』でグレーの学説について詳しく言及している（全集第13巻66-69頁参照）。今その最初の部分を紹介しておこう。

〈労働時間を貨幣の直接の度量単位とする学説は、ジョン・グレーによつてはじめて体系的に展開された。彼は、国民のための一つの中央銀行に、その支店をつうじて種々の商品の生産についやされる労働時間を確かめさせようとする。生産者は、商品と引き換えに公式の価値証明書、すなわち彼の商品がふくんでいるだけの労働時間にたいする受領証を受け取る。そして一労働週、一労働日、一労働時間等々のこれらの銀行券は、同時に、銀行の倉庫に収納されている他のすべての商品のかたちでの等価物にたいする指図証券として役立つ。これがその根本原則であつて、それは細目にわたつて、またすべて現存のイギリスの諸制度にもとづいて、注意ぶかく考へぬかれている。（以下略）〉（66頁）

●【7】パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈上着の相対的価値形態が一般的であるのは、上着のそれが同時に、すべての他商品の相対的価値形態であるからにはかならない。上着にあてはまることは、コーヒー等々にもあてはまる。だから、諸商品の一般的な相対的価値形態はこれらの商品そのものが一般的な等価形態から排除する、という結果になる。逆に、リンネルのような商品は、それが一般的な等価形態をもつやいなや、一般的な相対的価値形態から排除される。リンネルの一般的な、他の諸商品と統一的な、相対的価値形態は、20エルのリンネル=20エルのリンネル であろう。だが、これは同義反覆であつて、この同義反、一般的な等価形態にありしたがつて絶えず交換可能な形態にあるこゝうといった商品の価値量を、表現するものではない。むしろ、20エルのリンネル=1着の上着、または=α量のコーヒー、または=ν量の茶、または=等々という発展した相対的価値形態が、いまでは、一般的な等価物の独自の相対的価値表現になるのである。〉（江夏訳51-2頁）

《初版付録》

〈逆に、一般的な等価形態にある商品、すなわち、一般的な等価物の役を演ずる商品は、商品世界の統一的な、したがつて一般的な相対的価値形態からは、排除されている。もしリンネルが、すなわち一般的な等価形態にあるなんらかの商品が、同時に、一般的な相対的価値形態にも参加するとすれば、その商品は、等価物としての自分自身に關係させられなければならないであろう。そうなると、われわれの手にはいつてくるものは、20エルのリンネル=20エルのリンネル という、価値も価値の大きさも表現されることのない同義反覆である、ということになる。一般的な等価物の相対的価値を表現するためには、形態IIIを逆にしなければならない。一般的な等価物は、他の諸商品と共通な相対的価値形態をなんらもっていないのであつて、その価値は、他のすべての商品体の無限の系列のうちに、相対的に表現されている。こうして、いまでは、発展した相対的価値形態、すなち形態IIが、一般的な等価物の役割を演ずる商品の独自の相対的価値形態として、現われているわけである。〉（江夏訳903頁）

《フランス語版》

〈この形態IIIのもとでは、商品世界が社会的、一般的な相対的価値形態をもっているのは、その世界を構成するすべての商品が、等価形態から、すなわち、それらの商品が直接的に交換可能であるところの形態から、排除されているからにはかならない。これと反対に、一般的な等価物として機能する商品、たとえばリンネルは、一般的な相対的価値形態に参加することができないであろう。参加するためには、リンネルは自分自身のために等価物として役立つことができなければならないであろう。そのばあい、20メートルのリンネル=20メートルのリンネル という、価値も価値量も表現しない同義反覆が得られる。一般的な等価物の相対的価値を表現するためには、形態IIIをあべこべに読まなければならない。一般的な等価物は、他の商品と共通な相対的形態をすこしももたないのであつて、その価値は、他のすべての商品の果てしない系列のうちに相対的に表現される。このようにして、発展した相対的価値形態、すなわち形態IIIはいまや、一般的な等価物が自分自身の価値をそのうちに表現するところの独自の形態として現われる。〉（江夏42-3頁）

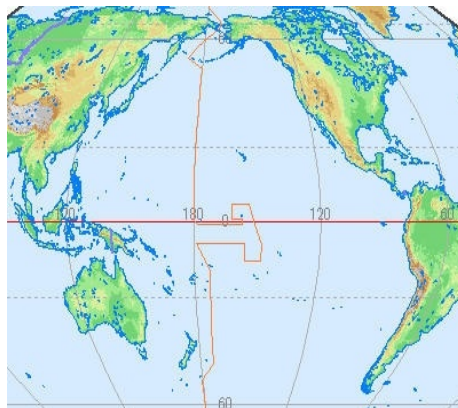
『資本論』を読んでみませんか

新年、明けまして、おめでとうございます。

菅首相は、年頭記者会見で「三つの理念」を掲げ、その最初に「平成23年を平成の開国元年としたい」と述べました。「平成23年を、そうしたヒト・モノ・カネばかりではなくて、明治維新や戦後に続く、日本人全体が世界に向かってはばたいていくという、そうした開国を進めていく元年としたい」と。記者の1人は環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）の問題は「平成の開国に対する本気度をはかる試金石」だと述べ、その交渉の是非をいつごろまでに判断するのかと質問。首相は、「6月頃というのが一つの目処だ」と答えていました。



貿易の自由化を明治維新に例えるのは、大げさではありますが、それだけこのTPPには根強い反対勢力があるからでしょう。TPPは、アジア太平洋経済協力会議（APEC）21カ国・地域のうち、米国やオーストラリアなど9カ国で交渉が進む経済の枠組みのことですが、コメなど農産物を含む原則すべての関税の撤廃や、投資や貿易の円滑化、サービス、金融など幅広い分野で「障壁」の除去を取り決めようとするものです。



日本の農業は、コメの関税が政府の公式試算で490%（世界貿易機関の新ルールだと700%を超

える)であることに象徴されるように、手厚い保護政策と高い関税障壁によって守られてきました。だからそれを撤廃すると日本の農業は壊滅的な打撃を受けるといわれています。

しかし打撃を受けるのは、安い外国産に太刀打ちできない生産性の低い日本の農業であって、生産力を高めれば、日本の農業も十分外国産に対抗できると主張する農業従事者もいます。だから日本の農業そのものが壊滅するかにいうのも大げさであって、反対に、生産性の低い農業が淘汰され、日本の農業生産も、生産性の高い工業の技術力と結合させて、生産力を飛躍的に高める出発点にならないとも限らないのです。

菅首相がTPPの推進を叫ぶのは、FTA(自由貿易協定)の推進など、先行する韓国などに決定的に立ち遅れ、焦燥感を募らせている日本の大資本の意向を受けてのことだと思いますが、他方で、それに反対する政党(民主党の一部も含まれます)もただ小農業者の票を失いたくないがためのものにすぎません。

労働者は原則的には貿易の自由化には賛成です。それは自由化によって労働者の境遇や生活の改善がなされるという目先の利益からではなく(自由化そのものは、労働者が搾取されている現実には何の変化ももたらさないでしょう)、自由貿易は小農を淘汰し、農業でも生産の変革を迫ること一つをとっても、社会変革を押し進めるからであり、そうした革命的意義を認めるからにほかなりません。

マルクスは「世界貿易と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開く」(『資本論』第1巻、全集23a191頁)と述べています。そして世界市場こそは一般に資本主義的生産様式の基礎をなしその生活環境をなしているのだと指摘しています。そして次のようにその意義について明らかにしています。

「歴史のブルジョア時代は、新世界の物質的基礎をつくりださなければならない。――一方では、人類の相互依存にもとづく世界的交通とこの交通の手段、他方では、人間の生産力の発展と、物質的生産を自然力の科学的支配に転化すること、これがその基礎である。このような新世界の物質的諸条件を、ブルジョア商工業は、地質上の革命が地表をつくりだしたのと同じように、つくりだしているのである。将来、偉大な社会革命が、このブルジョア時代の成果である世界市場と近代的生产力とをわがものとし、これらをもっとも先進的な諸国人民の共同管理のもとにおいたとき、そのときはじめて人類の進歩は、うま酒(ネクタル)を死人の頭蓋骨からだけ飲もうとする、あのいとうべき異教の偶豫に似ることを、やめるであろう。」(「イギリスのインド支配の将来の結果」全集9巻217-8頁)

まさにこうした意味で、労働者は貿易の自由化に原則的に賛成するのです。

新しい年も、『資本論』をさらに深く理解して、あらゆる問題について、労働者の原則的立場を堅持する年にしたいと思います。是非、『資本論』を一緒に読みませんか。

第31回「『資本論』を読む会」の報告

◎今年こそ

本来なら、今年最初の『資本論』を読む会であり、その報告なので、「明けましておめでとう」ぐらいから始めるべきですが、すでに2月です。だから、まあ、今年の決意から始めましょう。

今年こそ、わが「『資本論』を読む会」も多くの参加者に恵まれ、充実した学習を重ねて、一層の進展をはかりたいと思います。是非、多くの皆様のご参加をお待ちしています。そのような期待と決意を込めて、報告を行います。

ただ今回は都合により、開始時間が遅れたこともあり、進んだのは第3節の「C 一般的価値形態」の「3 一般的価値形態から貨幣形態への移行」だけでした。分量としてはわずか2つのパラグラフに過ぎません。しかし、ここには初版本文との展開相違などの問題もあり、議論は多義にわたりました。

◎一般的価値形態から貨幣形態への移行について

今回、学習したところは、いわゆる「移行」が問題になっています。これまででも価値形態が発展する度に、それぞれ「移行」が問題になりました。初版付録の項目を見ると、それがハッキリします。例えば、次のようなものです。

- 〈(9)単純な価値形態から、発展した価値形態への移行〉（江夏沢897頁）
- 〈(5)総和の価値形態から、一般的な価値形態への移行〉（同899頁）

そして今回の「移行」、すなわち〈一般的価値形態から貨幣形態への移行〉は、価値形態の発展としては最後の「移行」なわけです。これまでも、こうした価値形態の発展と移行には、商品の交換関係そのものの発展、あるいは商品形態の発展が背景にあり、それを前提してマルクスは考えていると指摘してきました。今回もその意味では同じなのですが、これまでの価値形態そのものの本質的な変化があったのに、今回はそうではないともマルクスは述べています（こうした事情は次の「D 貨幣形態」で考察されます）。こうした価値形態の発展とその移行は、すべて形態のものに内在する矛盾や欠陥を指摘することから説明されてきました。その意味では、抽象的な考察だったのですが、そうした過程が実際の歴史的な発展としてはどうだったのか、という具体的なイメージを持つために、今回は、その問題から入りたいと思います。

そのために、まずマルクス自身が徹底的に手を入れたといわれている、モスト著『資本論入門』（大谷禎之介訳、岩波書店）から関連する部分を紹介しておきましょう。

〈さてここで交換価値に、つまり諸商品の価値が表現されるさいの形態に、立ち戻ろう。この価値形態は生産物交換から、また生産物交換とともに、しだいに発展してくる。

生産がもつばら自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど余剰分をもっているようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。たとえば毛皮が塩と、しかもまず最初はまったく偶然的なもろもろの比率で交換される。この取引がたびたび繰り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かに決められるようになり、一枚の毛皮は、ある一定量の塩とだけ交換されるようになる。生産物交換のこの最も未発展の段階では、交換者のそれぞれにとって、他の交換者の財貨が等価物として役立つ。すなわち、それ自体として彼の生産した財貨と交換可能であるばかりではなく、彼自身の財貨の価値を見えるようにする鏡でもあるような、等価物として役立つのである。

交換のその次に高い段階を、われわれはこんにちでもまだ、たとえばシベリアの狩猟種族のところで見いだす。彼らが提供するの、交換向けのほとんどたゞ一つの財貨、つまり毛皮である。ナイフ、武器、火酒(かしゅ)、塩等々といった彼らに供給される他人のすべての商品が、彼らにとってはそっくりそのまま、彼ら自身の財貨のさまざまな等価物として役立つ。毛皮の価値がこうして受け取る表現が多様であることは、この価値を生産物の使用価値から分離して表象することを習慣にするが、他方では、同一の価値をたえず増大する数のさまざまな等価物で計量することが必要となる結果、この価値の大きさの規定が固定するようになる。つまり、ここでは毛皮の交換価値はすでに、以前ばらばらに行なわれていただけの生産物交換の場合に比べて、はるかにはっきりした姿をもっているのであり、したがってまた、いまではこれらの物そのものもすでに、はるかに高い程度で商品という性格をもっているのである。

こんどはこの取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみよう。彼らのおのおのはシベリアの狩人たちにたいして、自分の財貨の価値を毛皮で表現しなければならない。こうして毛皮は、一般的等価物になる。一般的等価物は、他人のすべての商品と直接に交換可能であるばかりでなく、また他人のすべての商品にとって、共通の価値表現のために、したがってまた価値を計るものおよび価値を比較するものとしても役立つ。言い換えれば、毛皮は生産物交換のこの範囲のなかでは、貨幣となるのである。総じて同じようにして、あるときはこの商品が、あるときはあの商品が、広狭(こうきょう)さまざまな範囲で、貨幣の役割を演じた。商品交換の一般化につれて、この役割は金銀に、すなわち生まれながらにこの役割に最も適している商品種類に移って行く。金銀は一般的等価物となるのであって、これは他のすべての商品と直接に交換可能であり、また、他のすべての商品がいっしょに、これで自分たちの価値を表現し、計り、比較しあうのである。貨幣で表現された商品の価値は、商品の価格と呼ばれる。たとえば、20エルのリンネル＝2分の1オンスの金であり、かつ10ターレルが二分の一オンスの金の貨幣名であるときには、20エルのリンネル価値の大きさは、10ターレルという価格で表現される。〉（10-12頁）

次も少し先走りになりますが、今回の移行と関連するものとして、「第2章 交換過程」からも、紹介しておきます。

〈直接的な生産物交換においては、どの商品もその所有者にとっては直接的に交換手段であり、その非所有者にとっては等価物である――もっとも、その商品がその非所有者にとって使用価値である限りでのことであるが。したがって、交換品は、それ自身の使用価値や交換者の個人的欲求から独立した価値形態をまだ受け取ってはいない。この形態の必然性は、交換過程に入りこむ商品の数と多様性と増大と共に発展する。課題はその解決の手段と同時に生じる。商品所有者が彼ら自身の物品を他のさまざまな物品と交換したり比較したりする交易は、さまざまな商品所有者のさまざまな商品がその交易の内部で同一の第三の種類の商品と交換され、価値として比較されることなしには、決して生じない。このような第三の商品は、他のさまざまな商品にとっての等価となることによって、直接的に――たとえ狭い限界内においてにせよ――一般的または社会的な等価形態を受け取る。この一般的商品形態は、それを生み出す一時的な社会的接触と共に発生し、それと共に消滅する。この形態は、あれこれの商品に、かわるがわる、かつ一時的に帰属する。しかし、それは、商品交換の発展につれて、排他的に特殊な種類の商品に固着する。すなわち、貨幣形態に結晶する。それがどのような種類の商品に固着するかは、さしあたり偶然的である。しかし、一般的には、二つの事情が決定的である。貨幣形態が固着するのは、外部から入ってくる最も重要な交易品――これは、事実上、内部の諸生産物がもつ交換価値の自然発生的な現象形態である――か、さもなければ、内部の譲渡される所有物の主要要素をなす使用対象、たとえば家畜のようなものである。遊牧諸民族が最初に貨幣形態を発展させるのであるが、それは、彼らの全財産が動かしうる、したがって直接的に譲渡される形態にあるからであり、また彼らの生活様式が彼らをたえず他の諸共同体と接触させ、したがって、生産物交換へと誘いこむからである。〉（全集版118-9頁）

ここで、一般的等価形態である〈第三の商品は、他のさまざまな商品にとっての等価となることによって、直接的に――たとえ狭い限界内においてにせよ――一般的または社会的な等価形態を受け取る。この一般的商品形態は、それを生み出す一時的な社会的接触と共に発生し、それと共に消滅する。この形態は、あれこれの商品に、かわるがわる、かつ一時的に帰属する。しかし、それは、商品交換の発展につれて、排他的に特殊な種類の商品に固着する。すなわち、貨幣形態に結晶する〉という部分に注目して下さい。これが今回の「移行」に関連する部分なのです。

もちろん、われわれが今考察している価値形態においては、第2章の交換過程では登場する商品所有者そのものは捨象されており、考察の対象はあくまでも商品世界そのもの、よって諸商品自身が互いに主体的に関わり合う世界を対象にしていることに注意する必要があります。以上は、あくまでも具体的なイメージで問題を考えるための参考として紹介したのです。

それでは前置きが長くなりましたが、実際に、今回、学習した部分の解説と報告に移りましょう。

◎第1パラグラフ

最初のパラグラフの解説です。これまでと同様、まず最初に本文を紹介し、文節ごとに検討して行きましょう。

【1】〈(f)一般的等価値形態は価値一般の一つの形態である。(h)だから、それはどの商品にでも附着することができる。(h)他方、ある商品が一般的等価値形態(形態III)にあるのは、ただ、それが他のすべての商品によって等価値として排除されるからであり、また排除されるかぎりでのことである。(c)そして、この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをかけたのである。〉

その前の小項目〈2 相対的価値形態と等価値形態との発展関係〉では、価値形態の発展によって、その両極の対立も発展し、一般的等価値になる商品は、商品世界から排除された、特別で、例外的なものになることが確認されました。そうした一般的等価値形態が、今度は、貨幣に移行するわけです。その移行がここでは問題になっています。

(f)、(h) 一般的等価値形態は価値一般の一つの形態です。だから、それはどの商品にでも附着することができるのです。

ここで〈一般的等価値形態は価値一般の一つの形態である〉というように、〈価値一般〉という言葉が出てきますが、これをどう理解したらよいか、という疑問が出されました。これは一般的等価値形態というのは〈抽象的な人間労働の一般的な物質化〉とか〈一般的な労働として、認められている〉(初版本文庫版64頁)等とされていたように、そうした意味で「価値一般」と言われているのだろうか、という話になり、どうもそうではないのではないかと、ということになりました。というのは、ここでは〈価値一般の一つの形態である〉というように〈一つの形態〉と言われているように、一般的等価値形態も価値の形態の一つだというような意味で言われているように思えること、そして〈だから〉次の文節である〈それはどの商品にでも附着することができる〉と繋がっているように思えるからです。だからここで〈価値一般〉は文字通りに取るべきであり、「すべての商品に一般的に内在する価値」というような意味ではないか、だからすべての商品が価値を持つ限り、一般的価値形態はどの商品にも附着することが出来るということに繋がっているのではないかと、ということになりました。初版本文の最後のあたりで、マルクスは次のように書いています。

〈ところが、商品の分析が明らかにしたものは、商品形態一般としてのこれらの諸形態であり、したがって、これらの諸形態は、もし商品Aが一方の形態規定にあれば商品B、C等々は商品Aに対立して他方の形態規定をとるというように、ただ対立的にのみ、どの商品にも属している〉(江夏訳58頁)

つまり「価値一般」の「一般」は、ここでマルクスが「商品形態一般」と述べている「一般」と、ほぼ対比できるのではないかと考えます。

そして次に、では、どうしてマルクスは、こうした書き方から始めているのか、ということが問題になり、それは初版本文の展開と関連しているという指摘がありました。つまりこの最初の二つの文節は、一般的等価値形態がまだ最初の段階では、色々な商品に附着することができる。あるいは歴史的に考えてもそれはさまざまな商品に附着してきたことを前提して述べているのですが、しかしマルクス自身は、そうした歴史的な形でそれを説明するのではなく(マルクスはすでに紹介したように、「第2章 交換過程」では歴史的に論じています)、いわば論理的な形で、すなわち「価値一般の形態の一つ」なのだから、それはどんな商品にも附着できるのだという形で説明し、しかし、では、それはどんな商品に最終的には附着し、固定するのということそのものは、論理的には、出て来ない、それは歴史的に、社会的な実践によって決まってくるのだという形で、それ以降の文節と対比する意味も込めて、最初はこうした抽象的な、その意味では論理的・形式的な考察から始めているのではないかと、という説明がありました。

そしてそれでは、それは初版本文の展開とどのように関連しているのか、初版本文ではそもそもどのように展開されているのかということが問題になりました。初版本文では、形態IIIの次に来る形態IVは貨幣形態でなく、形態II(展開された価値形態)をさまざまな商品におけるものを並列した形で図示されているという説明がありました。しかし、では、その初版本文の形態IVは、どのような意味があるのか、という問題も議論になりましたが、それを詳しく語りだすと、大きく枠をはみ出してしまいますので、今回は、それは割愛したいと思います。

(h)しかし、ある商品が一般的等価値形態にあるのは、他のすべての商品によって等価値として排除されるからであり、またその限りで、それは一般的等価値にあるのです。だからその商品は、これまで確認してきたように、商品世界から排除された、特別な商品であり、例外的な商品でした。

(c)だから、この排除が最初は、ときとところによっては、色々な商品に附着したのですが、しかし最終的に一つの商品の種類に限定されると、その瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は、客観的に一つの固定性と一般的な社会的妥当性をかけたことになるわけです。

この部分は初版付録ではより詳しく、より具体的に、次のようになっています。

〈一般的な等価値形態は、価値一般の形態である。だから、それはどの商品にもそなわりうるものだが、そうなるのは、それが、どんなばあいでも、他のすべての商品から排除されているばかりに過ぎない。それにもかかわらず、形態IIと形態IIIとのあいだの単なる形態上の差異は、すでに、形態IとIIとの区別にはないある特徴的なものを、示している。すなわち、発展した価値形態(形態II)においては、一つの商品が、他のすべての商品を排除して、これらの商品のうちに自分の価値を表現している。この排除は純粋に主観的な過程でありるのであって、たとえば、自分自身の商品の価値を多数の他の商品で評価するリネル所持者の過程が、それなのである。これに反して、一商品が一般的な等価値形態(形態III)にあるのは、その商品自身が他のすべての商品によって等価値として排除されているからこそであり、また、そのかぎりにおいてのことではない。排除は、このばあいには、排除される商品からは独立した客観的な過程である。だから、商品形態の歴史的な発展においては、一般的な等価値形態は、あるときにはこの商品に、あるときにはあの商品に、かわるがわるそなわっていることがありうる。ところが、一商品は、この商品の排除が、したがってこの商品の等価値形態が、客観的・社会的過程の結果であるかぎりでのほかは、決して現実一般的な等価値として機能することがない。一般的な価値形態は、発展した価値形態であり、したがって、発展した商品形態でもある。素材的に全く欠かっている諸労働生産物は、同一の、同等な、人間労働の・物的な諸表現として表示されていなければ、完成した商品形態をもつことができず、したがって、交換過程において商品として機能することもできない。すなわち、完成した商品形態を獲得するためには、諸労働生産物は、統一的な、一般的な相対的価値形態を獲得しなければならない。ところが、諸労働生産物がこの統一的な相対的価値形態を獲得しうるためには、これらの労働生産物がある特定の商品種類を一般的な等価値として自分たち自身の系列から排除する、ということ以外には、手段がない。そして、この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、初めて、統一的な相対的価値形態が客観的な固定性と一般的な・社会的妥当性として獲得したことになる。〉(江夏訳903-4頁)

このように初版付録では、〈商品形態の歴史的な発展〉や〈交換過程〉への言及も見られます。こうした背景が前提となって先の考察があるわけです。

◎第2パラグラフ

それでは次に第2パラグラフの検討に移りましょう。

【2】 〈(f)そこで、その現物形態に等価形態が社会的に合生する特殊な商品種類は、貨幣商品になる。(f)言いかえれば、貨幣として機能する。(f)商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずることが、その商品の独自の社会的機能となり、したがってまたその商品の社会的独占となる。(f)このような特権的な地位を、形態IIではリンネルの特殊な等価物の役を演じ形態IIIでは自分たちの相対的価値を共通にリンネルで表現しているいろいろな商品のなかで、ある一定の商品が歴史にかちとった。(g)すなわち、金である。(g)そこで、形態IIIのなかで商品リンネルを商品金に取り替えれば、次のような形態が得られる。〉

(f)、(f) そのような過程で、その現物形態に等価形態が最終的に癒着する特殊な商品種類は、貨幣商品になるわけです。言いかえると、貨幣として機能します。

ここで全集版は「合生する」というあまり見慣れない言葉が使われていることが問題になりました。これは辞書引いても出て来ないところを見ると造語のように思われます。新日本新書版は「癒着する」となっています（青木版も同じ）。この「癒着」は第1パラグラフで「付着」と表現されていたとは少し違うような感じがします（因みに新日本新書版の第1パラグラフはくしたがって、どの商品もこの形態をとることかできる）となっています。「付着」の場合、表面にくっついているというイメージであり、だからさまざまな商品に付着するという形で使われていることが分かります。それに対して「癒着」の場合は、固くくっついてしまっているというイメージです。しかし「合生」の場合は、「合成」に近く、単にくっつくというより内部で化学反応が生じて別の何物かになってしまっているイメージの方が強いという印象が語られました。まあ結論的には、この場合は「癒着」が相応しいのではないか、ということですが、先の引用・紹介した「交換過程」のところ使われていた「固着」という表現でも良いのではないか、という意見もありました。また初版付録では〈この商品種類の現物形態と等価形態とは社会的に癒着している〉と〈現物形態〉の〈形態〉と〈等価形態とは社会的に癒着している〉が強調されています。つまり商品の現物の手で握める形そのものが、一般的等価形態と癒着しているということが強調されているわけです。つまり金という物的な形態、つまりその金じかの光り輝く形象そのものが、一般的等価物としての社会的機能と癒着してくっついて現われてくることが強調されていることに注意が必要でしょう。

そして「貨幣商品になる」という言葉が、「貨幣として機能する」と言いかえられており、だから「貨幣商品」というのは「貨幣として機能する商品」というぐらいの意味だろうということになりました。

(f) 商品世界のなかで一般的等価物の役割を演ずることが、その商品の独自の社会的な機能となり、だからその商品だけがそれを果たすことになり、社会的独占となります。

ここで一般的等価形態は、以前（小項目1の第8パラグラフ）では、〈商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から除外された等価物商品、リンネルに、一般的等価物という性格を押しつける〉と書かれていたように、一般的等価物になる商品は、商品世界から「除外される」とか「排除される」（新日本新書版）と書かれていましたが、今回は、この一般的な等価物の商品は商品世界の「なかで」、一般的等価物の役割を演ずると書かれています。商品世界から「除外」されたり「排除」されたものが、その中で役割を演ずるというのやや分かりにくいような感じがします。恐らく最初の「除外」や「排除」は相対的価値形態の列を形成する商品世界から「除外」されたり「排除」されるものと理解すべきなのかも知れません。

(f)、(g) これは一つの特権的な地位を獲得することですが、こうした特権を、形態IIでは、リンネルの特殊な等価物の役割を演じ、形態IIIでは、自分たちの相対的価値形態を、他の商品と一緒にリンネルで表現していた、ある商品が歴史的に勝ち取ったのです。それがすなわちなのです。

確かに形態IIや形態IIIをふり返ると、金は前者では「または＝2オンスの金」という形で、特殊な等価物の一つとして出てきました。また形態IIIでは、リンネルで自分たちの価値を表現する多くの商品と並んで「2オンスの金」として出てきていました。ということは歴史的には金も一つの商品として他の諸商品と交換されていた普通の商品だったということでしょう。

(f) そこで、形態IIIの一般的等価形態にあるリンネルの代わりに商品金を入れると、次のような形態が得られます。

そして「D 貨幣形態」が次に提示されているのですが、それは次回にやることになります。

【付属資料】

●【3の表題】

《初版付録》

〈(五) 一般的な価値形態から、貨幣形態への移行〉（江夏訳903頁）

《フランス語版》

〈(c) 一般的価値形態から貨幣形態への移行〉（江夏他訳43頁）

●第1パラグラフに関して

《初版本文》

〈とはいえ、われわれの現在の立場では、一般的な等価物はまだけっして骨化されていない。どのようにしてリンネルがじっさいに、一般的な等価物に転化されたのであろうか？ リンネルが自分の価値を、まず一つの単一の商品で相対的に表し（形態I）、次には、すべての他商品で順ぐりに相対的に表わし(形態II)、こうして反射的に、すべての商品が自分たちの価値をリンネルで相対的に表わす(形態III)、ということによって。単純な相対的価値表現は、リンネルという一般的な等価形態がそこから発展してきた胚珠であった。この発展のなかで、リンネルは役割を変える。リンネルは、自分の価値量を他の一商品で表わすことで始まり、すべての他商品の価値表現のための素材として役立つことで終わる。リンネルにあてはまることは、どの商品にもあてはまる。リンネルの発展した相対的価値表現(形態II)は、リンネルの単純な価値表現の多数のあつまりからのみ成り立っているのであって、この形態IIでは、リンネルはまだ一般的な等価物として現われていない。むしろ、ここでは、他の商品体はどれも、リンネルの等価物になっており、したがってリンネルと直接的に交換可能であり、それゆえにリンネルと位置を取り替えることができる。だから、われわれは最後に次の形態を得ることになる。〉（江夏訳56頁）

《初版付録》

〈一般的な等価形態は、価値一般の形態である。だから、それはどの商品にもそなわりうるものだが、そうなるのは、それが、どんなばあいでも、他のすべての商品から排除されているばあ

いにかざられている。 それにもかかわらず、形態IIと形態IIIとのあいだの単なる形態上の差異は、すでに、形態IとIIとの区別にはないある特徴的なものを、示している。すなわち、発展した価値形態（形態II）においては、二つの商品が、他のすべての商品を排除して、これらの商品のうちに自分の価値を表現している。この排除は純粋に主観的な過程でありうるのであって、たとえば、自分自身の商品の価値を多数の他の商品で評価するリンネル所持者の過程が、それなのである。これに反して、一商品が一般的な等価形態（形態III）にあるのは、その商品自身が他のすべての商品によって等価物として排除されているからこそであり、また、そのかぎりにおいてのことではない。排除は、このばあいには、排除される商品からは独立した客観的な過程である。だから、商品形態の歴史的な発展においては、一般的な等価形態は、あるときにはこの商品に、あるときにはあの商品に、かわるがわるそなわっていることがありうる。ところが、一商品は、この商品の排除が、したがってこの商品の等価形態が、客観的・社会的過程の結果であるかぎりでのほかは、決して現実に一般的な等価物として機能することがない。一般的な価値形態は、発展した価値形態であり、したがって、発展した商品形態でもある。素材的に全くちがっている諸労働生産物は、同一の、同等な、人間労働の・物的な諸表現として表示されていなければ、完成した商品形態をもつことができず、したがって、交換過程において商品として機能することもできない。すなわち、完成した商品形態を獲得するためには、諸労働生産物は、統一的な、一般的な相対的価値形態を獲得しなければならない。ところが、諸労働生産物がこの統一的な相対的価値形態を獲得しうるためには、これらの労働生産物がある特定の商品種類を一般的な等価物として自分たち自身の系列から排除する、ということ以外には、手段がない。そして、この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、初めて、統一的な相対的価値形態が客観的な固定性と一般的な・社会的妥当性とを獲得したことになる。（江夏訳903-4頁）

《フランス語版》

〈一般的な等価形態は、価値一般の形態である。したがって、それはどんな商品にも所属することができる。他方、ある商品がこの形態（形態III）のもとにありうるのは、それ自身が他のすべての商品によって等価物として排除されているからにほかならない。この排他的な性格が、ある特殊な商品種類に結びつくようになったときにはじめて、相対的価値形態は、唯一無二の物体のなかに凝結し固定し、社会的に真正であることを獲得するのである。〉（同前43頁）

●第2パラグラフに関して

《初版付録》

〈ここで、独自の商品種類—この商品種類の現物形態と等価形態とは社会的に癒着している—が、貨幣商品になる。すなわち、貨幣として機能するのである。商品世界の内部で一般的な等価物の役割を演ずることが、この商品種類の独自の社会的機能になり、したがって、この商品種類の社会的な独占になる。形態IIではリンネルの特殊な等価物の役割を演じ、形態IIIでは自分たちの相対的価値をリンネルで共通に表現している諸商品のなかで、この特権的な地位を歴史上かちとったものが、ある特定の商品、すなわち金である。だから、形態IIIにおいて商品リンネルの代わりに商品金を置くくと、次のような形態が得られる。〉（同前904頁）

《フランス語版》

〈この特殊な商品は、その自然形態が社会のなかでだんだん等価形態と同一視されるにつれて、貨幣商品になる、すなわち、貨幣として機能する。その独自の社会的機能、したがってその社会的独占権は、商品世界において普遍的な等価物の役割を演じることである。形態IIIにおいてはリンネルの特殊な等価物として現われ、形態IIIのもとでは自分たちの相対的価値を共にリンネルのうちに表現する諸商品のうち、歴史上この特権を勝ちとったのは、金である。そこで、形態IIIにおいてリンネル商品のかわりに金商品を置けば、次の形態が得られる。〉（同前43頁）

『資本論』を読んでみませんか

チュニジアにおけるベンアリ独裁政権を打ち倒したジャスミン革命（チュニジアの国花の名にちなんでこう呼ばれている）は、多くの人たちにとっては、“寝耳に水”の驚きであった。

1987年以降20数年にわたって独裁権力を欲しいままにしてきたベンアリ政権はそれほど安定したものに思われてきたのである。

しかしそれが歴史的必然であったことは、この革命がたちまち中東・北アフリカ諸国に波及して、中東最大国であるエジプトでも、革命が起こり、30年の長期にわたるムバラク独裁政権をも打ち倒したことを見ても明らかである。



タハリール広場に集まり革命の成功を祝う群衆

革命の波は、ヨルダンやイエメン、アルジェリア等にも及び、中東諸国にいまだに居すわっている王国や首長国にも大きな脅威として迫りつつある。そればかりか長期の共産党一党独裁が続く隣の中国でも、為政者はその波及をくい止めようと必死だといわれている。

今回の革命の特徴は、インターネット等を利用したものであることが取り沙汰されている。しかし、われわれが注目するのは、イスラムという宗教色の薄いものだという点である。チュニジアでもエジプトでもデモの中心にいるのは宗教者ではない。独裁政権の圧政に苦しみ、貧富の格差に憤り、失業と貧困、食料品の高騰による生活苦に対して民衆は立ち上がったのである。

これまでの中東諸国における様々な革命や政変の多くは、宗教的色彩を帯びて、イスラム教の原理に帰れという呼びかけと共に行われ、イスラム原理主義組織がその中心にあった。しかし今回のエジプトの革命運動の中心を担ったともいわれる「4月6日運動」とは、2008年に始まった、緩やかな無党派反政府ネットワークだという。彼らは昨年为人民議会選挙でも既存野党からの共闘の呼びかけを拒否し、選挙にも参加しなかったという。反ムバラクだけでなく、既存の政党への不信を表明しているところに特徴があるのだという。

中東・北アフリカ諸国においては、チュジニアやエジプトだけではなく、リビアやイエメンなど長期にわたる独裁政権が続く国家が多い。またサウジアラビアやバーレーンなどの湾岸諸国においては、いまだに国王が国政の実権を握り、首長が国を治めている。それに反対するさまざまな政治運動も、イランのイスラム革命に象徴されるように、イスラムの宗教色が強いのが一般的であった。

こうしたこれらの地域の特徴は、ひとえにこれらの諸国が、資本主義的発展がまだまだ十分ではなく、労働者の階級としての未発達と未成熟に起因するといえる。

マルクスは『資本論』第1版序文で、自分がこの著作で研究するのは、資本主義的生産様式と、それに照応する生産諸関係および交易諸関係であるが、その典型をなしているのは、イギリスだと述べ、同時に、当時のイギリスに較べて、資本主義的発展が遅れていた大陸諸国について、次のように述べている。

〈資本主義的生産の発展ばかりでなく、その発展の欠如もまた、われわれを苦しめている。近代的な窮境とならんで、一連の伝来的な窮境がわれわれを締めつけているが、これらの窮境は、古風で時代遅れの生産諸様式が、時勢に合わない社会的政治的諸関係という付随物をともなって、存続していることから生じている。われわれは、生きているものに悩まされているだけでなく、死んだ者にも悩まされている。“死者が生者をとらえる！ **Le mort saisit le vif!**”〉（全集23a9頁）

しかし今回のチュジニアやエジプトの革命は、こうした諸国においても近代的な資本主義的生産の発展と労働者階級の発達、不可避にそれに相応した政治体制を要求しつつあることを教えている。これらの諸国においても、〈こんにちの支配階級は、より高尚な動機は別として、まさに彼ら自身の利害関係によって、労働者階級の発達をさまたげている、法律により処理可能ないっさいの諸障害を取りのぞくことを命じられている〉（『資本論』同10頁）といえるであろう。

「革命」という、既に歴史の倉庫の中でホコリを被っていたと思われていた“幽霊”が再び甦りつつある。貴方も『資本論』を読んで、共に来るべき「革命」に備えませんか。

第32回「『資本論』を読む会」の報告

◎ジャスミン革命

「ジャスミン」というのは香料の名前として知っていましたが、その花については、恥ずかしながら、知りませんでした。チュゼニアの国花だそうで、だからチュゼニアで起こった革命を「ジャスミン革命」というのだそうです。その革命の波は、エジプトにも及び、いまはリビアをも巻き込んでいます。お隣の中国でも「中国ジャスミン革命」が呼びかけられているのだとか。



ハコロモジャスミン

花の名前を冠した革命というのも、いい感じですが、厳しい冬の季節を克服して、暖かい春の到来をいち早く告げる梅の花も、あるいは革命の名に相応しいのかも知れません。

第31回「『資本論』を読む会」もようやく寒さが緩んで、春を感じさせるなかで開催されました。もちろん、参加者の状況は、相変わらずのお寒い限りではありましたが・・・。

今回は〈D 貨幣形態〉をやりました。これは分量も大したことはないので、一回で終わりました。これで〈第3節 価値形態または交換価値〉が終わったことになります。だから学習会の議論の最後には、この第3節全体の位置づけについても話題になりました。さっそく、その報告に移ることにしましょう。

◎一般的な価値形態から貨幣形態への移行と、それ以前の発展移行との差異

まず現行版には〈D 貨幣形態〉として次のような図示があります。

〈20エルのリンネル =
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
40ポンドのコーヒー = 2オンスの金
1クォーターの小麦 =
1/2トンの鉄 =
x量の商品A = 〉

そして、初版付録の「IV 貨幣形態」には三つの小項目がついています。まずそれを紹介しておきましょう。

〈(1) 一般的な価値形態から貨幣形態への移行と、それ以前の発展移行との差異。〉 -- (【1】【2】)

〈(2) 一般的な相対的価値形態の価格形態への転化。〉 -- (【3】)

〈(3) 単純な商品形態は、貨幣形態の秘密である。〉 -- (【4】)

それぞれの項目のあとに()に入れて書いたものは、それぞれの項目に該当すると考えられる、現行版の paragraph の番号です。この報告も、この初版付録の項目にもとづいて、各 paragraph を三つの項目に分けて、行うことにします。まず最初は第1 paragraph です。

【1】 〈(1) 形態Iから形態IIへの、形態IIから形態IIIへの移行に際しては、もろもろの本質的な変化が起きる。(B)これに対して、形態IVは、今やリンネルの代わりに金が一般的等価形態をとることのほかには、形態IIIと区別されるところがない。(A) 形態IVにおける金は、あい変わらず、形態IIIにおいてリンネルがそうであったもの -- 一般的等価である。(C) 進歩は、ただ、直接的な交換可能性の形態または一般的等価形態が、今や社会的慣習によって、商品金の特有な現物形態に最終的に憑着しているということだけである。〉

(1) 形態I (単純な価値形態) から形態II (展開された価値形態) への移行、あるいは形態IIから形態III (一般的な価値形態) への移行に際しては、もろもろの本質的な変化が起きました。それを私たちは、〈C 一般的価値形態〉の〈2 相対的価値形態と等価形態との発展関係〉のなかで詳しく見てきました。例えば等価形態は、単純な価値形態→個別的等価形態、展開された価値形態→特殊的等価形態、一般的価値形態→一般的等価形態と発展し、また相対的価値形態と等価形態の対立も、価値形態が発展または完成するのと同じ度合いで、発展して硬化することが指摘されたのでした。

(B)、(A) これに対して、形態IV (貨幣形態) では、形態IIIで一般的等価形態にあったリンネルの代わりに、金が来るだけで、それ以外では形態IIIと区別されるところがありません。形態IVにおける金は、形態IIIにおいてリンネルがそうであったのと同じように、一般的等価形態にあるという点では変わらないのです。

(C) ただ違うところ、進歩は、一般的等価形態が持っている直接的な一般的な交換可能性の形態が、今では社会的慣習によって、商品金の特有な現物形態 (そのキラキラまばゆく光る形態) に最終的に憑着 (全集版では「合生」) しているということだけです。

学習会ではこの最後の全集版で「合生」と訳されている部分について、J・J 富村さんから、この原語の *verwachsen* の訳語の中には「合生」というのがあったことが紹介されました。木村・相良 独和辞典(新訂版) 博友社 昭和45年1月15日 第9刷によると、次のような項目があったということです。

〈見出し語 *verwachsen*

(I) t. ①

② 成長して失う。

(II) i. ① 成長してきえる、ふさがる、憑着する。

② mit et. -, 或物(生えるもの)におおわれる。

③ 合生する。もつれ合う、からみあう。

④ 成長して不具になる。ぶかっこうになる。せむしになる。

(III) refl. sich ~

① 成長しすぎる。

② 成長して或物になる、に憑着する。

③ ふさがる、憑着する。〉

次は第二パラグラフです。

【2】〈(イ)金が他の諸商品に貨幣として相対するのは、金が他の諸商品にすでに以前から商品として相対していたからにはかならない。(ロ)他のすべての商品と等しく、金もまた、個別的な交換行為における個々の等価としてであれ、他の商品等価物とならぶ特別な等価としてであれ、等価として機能した。(ハ)しだいに、金は、広い範囲が狭い範囲かの違いはあっても、一般的等価として機能するようになった。(ニ)金が商品世界の価値表現におけるこの地位の独占を勝ちとるやいなや、それは貨幣商品となり、そして、それがすでに貨幣商品となったその瞬間から、はじめて形態Ⅳは形態Ⅲから区別される。(ヒ)言いかえれば、一般的価値形態が貨幣形態に転化するのである。〉

このパラグラフは先のパラグラフで〈一般的等価形態が、今や社会的慣習によって、商品金の特有な現物形態に最終的に癒着している〉とされていたことに対応し、それを説明しているように思えます。

(イ) 金が形態Ⅳで、他の諸商品に対して貨幣として相対するようになるのは、金がすでに以前から他の商品と同じように一つの商品として、他の諸商品に相対していたからにはなりません。

(ロ) つまり、他のすべての商品と同じように、金もまた、個別的な交換行為において(つまり単純な価値形態において)、個々の等価物としてあらわれたし、また展開された価値形態では、他の商品と並んで一つの特異な等価物としてあらわれ、それぞれ等価として機能していたのです。

(ハ) そして、金は、しだいに広い範囲や狭い範囲の違いはあったとしても、徐々に一般的等価として機能するようになったのです。

(ニ)、(ヒ) そして金が商品世界の価値を表現する、こうした地位、つまり一般的等価物としての地位、を他の諸商品を押しのけて独占するようになると(本当は他の諸商品の一般的な相対的な価値表現の別から金は例外的なものとして排除されて、変動的にそうした地位につかされるわけですが)、それは貨幣商品になり、そして金がそうした地位についた瞬間から、はじめて形態Ⅳ(つまり貨幣形態)は、形態Ⅲ(一般的価値形態)から区別されるのです。言いかえると、一般的価値形態が貨幣形態に転化するのです。

学習会では、ここでは金が一般的等価物の地位を独占することを、一般的価値形態と貨幣形態とを区別するメルクマールとしているのですが、果たして歴史もそういうことがいえるのだろうか、ということが疑問として出されました。というのは古代ローマでは、金ではなく、銅が貨幣(銅貨)であったとマルクス自身も語っていますし、マルクスが生きていた時代においても、大陸諸国では、例えば一大商業都市であったアムステルダムなどは銀が貨幣だったからです。また日本の江戸時代では、大阪では銀が、江戸では金がそれぞれ貨幣として流通していたとも言われています。つまり歴史的には貨幣は銅や銀、そして金へと貴金属のなかでも変遷して来たといえるのではないだろうかというわけです。だから、もしそういうことなら、このパラグラフのように、金が一般的等価物の地位を独占して、初めてそれは貨幣形態と言いうるのだというようにいうと、まだ銅や銀が一般的等価物であった時代や地域では、そうしたものは、いまだ貨幣形態とはいえないものだったのかという疑問が生じてくる、というわけです。そして「第2章 交換過程」では、次のようにも述べられている、との指摘もありました。

〈商品交換がそのもっぱら局地的な束縛を打破し、したがって商品価値が人間労働一般の物質化にまで拡大していくのと同じ割合で、貨幣形態は、一般的等価という社会的機能に生まれながらにして適している商品に、すなわち貴金属に、移っていく。〉(全集版119頁)

つまりここでは、貨幣形態そのものが、貴金属に移っていくと述べられており、ということは貴金属以前のものも貨幣形態であったかに述べられているわけです。また「金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である」と『経済学批判』の一文が紹介されているように、ここでは貨幣形態として「金銀」という形で金と銀が一纏に語られているとの指摘もありました。しかし、この問題は疑問として出されただけで、それ以上の議論にはならず終わりました。

◎一般的な相対的価値形態の価格形態への転化

次は第3パラグラフです。

【3】〈(イ)すでに貨幣商品として機能している商品たとえば金による、一商品たとえばリンネルの単純な相対的価値表現は、価格形態である。(ロ)だから、リンネルの「価格形態」は、 $20\text{ エレのリンネル} = 2\text{ オンスの金}$ であり、あるいは、 $2\text{ ポンド・スターリングがニオンスの金の銅貨名であれば、}$ $20\text{ エレのリンネル} = 2\text{ ポンド・スターリング}$ である。〉

(イ)、(ロ)すでに貨幣商品として機能している商品、例えば金による、一商品、例えばリンネルの単純な相対的価値表現は、価格形態です。だからそれは次のように表されます。

$20\text{ エレのリンネル} = 2\text{ オンスの金}$

あるいは、 $2\text{ ポンド・スターリングが}2\text{ オンスの金の銅貨名であれば、}$

$20\text{ エレのリンネル} = 2\text{ ポンド・スターリング}$

がリンネルの価格形態となるわけです。

ここでは、そもそも価格形態と貨幣形態とは何が違うのか、両者はどのように区別されるのか、が問題になりました。ピースさんは、次のように説明してくれました。

〈一般的価値形態の貨幣形態への転化〉と言われるように(第2パラグラフ)、貨幣形態は一般的価値形態に対応している。

それに対して〈一般的な相対的価値形態の価格形態への転化〉と言われるように、価格形態は一般的相対的価値形態に対応しているのではないかと、というわけです。

だから価格形態は一般的な相対的価値形態にある商品、例えばリンネルに対して言われているのに対して、貨幣形態の場合は、相対的価値形態と等価形態との全体を含めた価値形態の一つとして、単純な価値形態(形態Ⅰ)、展開された価値形態(形態Ⅱ)、さらには一般的価値形態(形態Ⅲ)に対応するもの(形態Ⅳ)として言われているというわけです。

同じように、一般的等価形態(あるいは一般的等価物)は、貨幣(貨幣商品)になるということができるとも知れません。

◎単純な商品形態は、貨幣形態の秘密である

最後の第4パラグラフです。

【4】〈(イ)貨幣形態の概念把握における困難は、一般的等価形態、したがって一般的価値形態一般、形態Ⅲに限定される。(ロ)形態Ⅲは、もとにさかのぼれば形態Ⅱ、すなわち展開された価値形態に帰着し、そして、この形態Ⅱの構成要素は形態Ⅰ、すなわち、 $20\text{ エレのリンネル} = 1\text{ 着の上着}$ または $x\text{ 量の商品A} = y\text{ 量の商品B}$ である。(ハ)だから、単純な商品形態は貨幣形態の萌芽である。〉

(4) 貨幣形態を概念的に把握する困難は、一般的等価形態、だから一般的価値形態そのものの理解に限られています。

(0) しかし一般的価値形態の理解は、そもそももとに遡れば、形態II（展開された価値形態）の理解に帰着し、そしてその理解はさらにはその構成要素でもある形態I（単純な価値形態）の理解に帰着するのです。つまり 20エルのリンネル=1着の上着 または x量の商品A=y量の商品B という単純な価値形態の理解こそが、すべての出発点であり、その概念的な理解こそが重要であるということです。

(1) だから、単純な商品形態は貨幣形態の萌芽だといえるわけです。

まずここでは最初に単純な価値形態ではなく、〈単純な商品形態〉と言われているが、これはどうしてなんだろうか、ということが疑問として出されました。これに対しては、〈4 簡単な価値形態の全体〉において、次のような指摘があったことが紹介されました。

〈労働生産物は、どのような社会状態においても使用対象であるが、労働生産物を商品に転化するのとは、ただ、使用物の生産において支出された労働を、その使用物の「対象的」属性として、すなわちその使用物の価値として、表す歴史的に規定された一つの発展の時期だけである。それゆえ、こうなる――商品の単純な価値形態は、同時に労働生産物の単純な商品形態であり、したがってまた、商品形態の発展は価値形態の発展と一致する、と。〉（全集版83頁）

だからここで〈単純な商品形態〉と言われているのは、商品形態の未発達の状態を意味しているのではないかと、そしてそれは単純な価値形態でもあったということではないかと、ということになりました。

次に問題になったのは、最初に出てくる〈貨幣形態の概念把握における困難〉というように、どうして〈概念的把握における困難〉が問題にされているのか、ということでした。というのは、初版付録では、この部分は次のようになっているからです。

〈3〉単純な商品形態は、貨幣形態の秘密である。

要するに、本来の貨幣形態は、それ自体としては、全くなんらの困難をも呈していない。一般的な等価形態がひとたび看破されてしまうと、この等価形態が金という独自の商品種類に固着するということを理解するには、いさかも苦慮する必要がないのであって、このことは、一般的な等価形態は、本来、ある特定の商品種類が他のすべての商品によって社会的に排除されることを条件としている、ということを理解するのに苦慮する必要がない、のと同じである。問題になるのは、こういった排除が、客観的・社会的な一貫性と一般の妥当性を獲得し、したがって、いろいろな商品にかかわるがわる付着するのでもないし、商品世界のたんに特殊な範囲内でたんに局地的な射程をもっているだけでもない、ということだけである。貨幣形態の概念上の困難は、一般的な等価形態の理解に、したがって、形態IIIという一般的な価値形態一般の理解に、かざられている。ところが、形態IIIは、反射的に形態IIに解消し、そして、形態IIの構成要素は、形態I、すなわち 20エルのリンネル=1着の上着 または、x量の商品A=y量の商品B なのである。そこで、使用価値と交換価値がなんであるかを知れば、この形態Iは、たとえばリンネルのような任意の労働生産物を、商品として、すなわち、使用価値と交換価値という対立物の統一として、表示するところの、最も単純で最も未発達な仕方である、ということがわかる。そうすると、同時に、単純な商品形態である 20エルのリンネル=1着の上着 が、この形態の完成した姿態である 20エルのリンネル=2ポンド・スターリング すなわち貨幣形態を獲得するために通過しなければならぬところの、諸姿態の系列も、容易に見いだされることになる。〉（906-7頁）

つまりこの初版付録と較べてみると、現行版は初版付録についていた前半部分がカットされているように思えます。しかし初版付録の展開をみると、途中から言われている〈貨幣形態の概念上の困難は〉云々という言は、明らかに、最初の〈要するに、本来の貨幣形態は、それ自体としては、全くなんらの困難をも呈していない〉に対比した形で言われているように読めます。初版本文の最初で言われていることは、要するに、一般的価値形態から貨幣形態への移行というのは何の困難もなく理解できるということのようです。ただ問題になるのは、それが客観的・社会的な一貫性と一般の妥当性を獲得し、もはやアテコチに付着することもなく、局地的なものではなくなるということだということのようです。そして、それに対して〈貨幣形態の概念上の困難〉が対比されているように思えます。

この問題については、ピースさんから、それに関連するのではないかと、久留間敏造氏が問題にした〈第2章 交換過程〉の最後の方にある次の一文が指摘されました。

〈すでに一七世紀の最後の数十年間には、貨幣分析のずっと踏み越えた端緒がなされていて、貨幣が商品であるということが知られていたけれども、それはやはり端緒にすぎなかった。困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある。〉（全集版123頁）

つまり貨幣形態を概念的に捉えるというのは、ここでマルクスが言っている〈どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する〉ということではないかと、いうわけです。〈商品が貨幣である〉というのをどのように理解するのかなか難しいのですが、どうして商品には価格形態がついているのか、つまりどうして商品には値札がついているのかを商品の価値の概念から出発して、展開して説明することは困難なのだと言っているのではないのでしょうか。マルクスは第3節の前文のところでも、次のように述べていました。

〈だけれども、ほかのことは何も知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な現物形態とはきわめて著しい対照をなす共通の価値形態をもっているということは知っている。すなわち、貨幣形態である。しかし、今ここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、すなわち、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純なもっとも目立たない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えうせる。〉（全集版65頁）

まさに〈貨幣形態の概念把握における困難〉というのは、これまでの展開でマルクスが試みた〈ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること〉の困難だといえると思います。

なおこれは学習会では指摘されなかったのですが、フランス語版のこのパラグラフは極めて簡略化されており、その代わりにそれに付けられた注25ではかなり詳しい説明がなされています。ここでは〈古典派経済学はいまだかつて、商品、特に商品の価値の分析から、商品が交換価値になる形態を演繹することに成功したためしがなく、これがこの経済学の主要な欠陥の一つである〉云々とあります。しかし詳しくは付属資料を参照してください。

◎「第3節 価値形態または交換価値」の位置

さて、今回で〈第3節 価値形態または交換価値〉が終わったのですが、そもそもこの第3節は第1章のなかでどういう位置と役割を持っているのかも最後に問題になりました。そしてこうした第1章の各節や第2章、第3章のそれぞれの役割や意義について、最初に問題にして、自身の理解を明らかにし、その後、その見解が多くの人たちに受け入れられ、また最近になって批判されているという点で大きな影響を与えたものとして、久留間敏造『価値形態論と交換過程論』が話題になりました。そこで、ここでは、この久留間氏の著書を取り上げるなかでこの問題を考えてみた

いと思います。

久留間氏は次のように自身の問題意識を紹介することから始めています。

〈「資本論」の最初の部分の構成を見てみると、第一章が「商品」で、これが四つの節に分れている。第一節が「商品の二つの要素、使用価値および価値」、第二節が「商品で表示される労働の二重性格」、第三節が「価値形態または交換価値」、第四節が「商品の物神的性格とその秘密」。それから章がかわって、第二章が「交換過程」、その次の第三章が「貨幣または商品流通」となっている。この構成を見てみるといろいろな疑問が起きてくる。貨幣という言葉は、表題では、第三章の「貨幣または商品流通」のときにはじめてあらわれてくる、これがいわゆる貨幣論にあたるものと考えられる。しかし内容を見ると、その前にすでに貨幣に関するさまざまな議論が展開されている。第一は価値形態論、第二は物神性論、第三は交換過程論で、すべて貨幣が出てくる。いったいこれらは、第三章の貨幣論に対してどういう関係に立つのか。こういう疑問が当然おきてくる。第三章の貨幣論は本格的な貨幣論で、それ以前のものは序論的なものだと考えるのが当然のように思われるが、それではいったい、序論といい本論といい、その間にどういう本質的な区別があるのか、これがはっきりしないと具合がわるい。それから第二には、この第三章以前の貨幣に関する議論は序論的なものだと、この今あげた三つのもの、すなわち価値形態論と物神性論と交換過程論、これらは序論としてそれぞれどういう特殊な意味をもっているのか。これがまた疑問のたねになる。そしてこれがわからぬとやはり具合がわるい。それから第三には、序論にあたると思われる以上の三論のうちで、価値形態論と物神性論とは、「資本論」の現行版でいうと、第一章「商品」のうちのそれぞれ一つの節をなしているのに対して、交換過程論は、この商品論の全体とならぶ位置を与えられて、第二章になっている。しかも、頁数を見てみると、いまあげた第一章のどの一節よりもはるかに少ないのである。にもかかわらず、それらの全部をふくむ第一章と対等な位置を与えられている。これはいったいどういうわけなのか。これがまた疑問のたねになる。こういういろいろな疑問が、「資本論」の最初の部分の構成を徹底的に理解しようとするならば、きつとおきてくるにちがいない。少くともわたくしのばあいにはそうであった。〉（12頁）

この久留間氏の問題意識をみて最初に気付くのは、氏が問題にしているのは、第1篇の内容であるのに、そもそも第1篇の「商品と貨幣」という表題には注意が及んでいないことです。だから氏の問題意識は、第3章の「いわゆる貨幣論」から始まっており、この貨幣論の本論ともいべき第3章と、その前で貨幣について論じている序論ともいべき部分（第1章第3節、同第4節、第2章）との関係はどうか、それは貨幣論の本論に対してどんな意義があるのかという問題意識しかないということです。

しかし第1篇の表題が「商品と貨幣」であることを考えるなら、マルクス自身は、この第1篇では、まず「商品」を考察し、その上で「貨幣」を考察していると思えなければなりません。貨幣が中心にあるわけではないのです。もちろん、貨幣とは何かを明らかにするためには、まず商品が明らかにされなければならないわけですが、しかし貨幣を明らかにするのは、資本を明らかにするためでもあり、決して、貨幣が事の中心にあるわけではないのです。まず商品とは何かが解明されて、初めて貨幣とは何かも明らかになり、貨幣の諸機能と諸法則が解明されるわけです。そして第2篇の「貨幣の資本への転化」へと繋がっていると捉える必要があるわけです。

だからそもそも久留間氏の問題意識そのものに問題があると言わなければならないのです。最初からこうしたやや偏った問題意識から出発しているが故に、その解決も必ずしも正しいものにならなかった、とわれわれは結論せざるをえません。

氏は上記の引用では、三つの問題を提起していますが、それらはすべて、この氏の最初の間違った問題意識と関連しており、そうした間違った意識そのものによって生じてきている問題でもあるということです。それぞれについて少し検討してみましょう。

まず久留間氏の最初の問題意識は、「価値形態論」（第1章第3節）と「物神性論」（同第4節）と「交換過程論」（第2章）では、すべて貨幣が出てくるが、これらは第3章の貨幣論に対してどういう関係に立つのか、〈第三章の貨幣論は本格的な貨幣論で、それ以前のものは序論的なものだと考えるのが当然のように思われるが、それではいったい、序論といい本論といい、その間にどういう本質的な区別があるのか、これがはっきりしないと具合がわるい〉というものです。すでに述べたように、第1章第3節や同第4節、第2章は、決して第3章の「序論」といった性格のものではありません。われわれは、『資本論』の展開に則して、素直にみて行くべきです。すなわち、それは次のようになっています。

まず「第1篇 商品と貨幣」は「第1章 商品」と「第2章 交換過程」、「第3章 貨幣または商品流通」からなっています。この構成をみれば、第1章では商品とは何か解明され、第3章では貨幣の諸機能と商品流通における諸法則が解明されることが明らかになり、第2章は、第1章と第3章を媒介する章であることが分かります。これが問題の正しい捉え方なのです。

だから次の久留間氏の第二の問題意識も同じことが言えます。つまりそれは久留間氏が貨幣論の序論として位置づけた〈すなわち価値形態論と物神性論と交換過程論、これらは序論としてそれぞれどういう特殊な意味をもっているのか。これがまた疑問のたねになる。そしてこれがわからぬとやはり具合がわるい〉というものです。しかしこれらは第1章第3節、同第4節、第2章なのです。だからこの三つを、ただ貨幣が出てくるといっただけで貨幣論の序論として位置づけることそのものがおかしいわけです。少なくとも「価値形態論」と「物神性論」は「第1章 商品」のそれぞれ第3節と第4節をなしており、だからそれらは「商品とは何か」を解明している第1章の、いわば「商品論」の一部である、という認識が必要です。それが十分意識されていないことが久留間氏の問題意識の決定的な誤りと考えられます。今述べたことは、だから久留間氏の第三の問題意識にも直接関連しています。だから第三の問題意識もついでにみておくことにします。それは次のようなものです。

第三の問題意識は、〈序論にあたると思われる以上の三論のうちで、価値形態論と物神性論とは、「資本論」の現行版でいうと、第一章「商品」のうちのそれぞれ一つの節をなしているのに対して、交換過程論は、この商品論の全体とならぶ位置を与えられて、第二章になっている。しかも、頁数を見てみると、いまあげた第一章のどの一節よりもはるかに少ないのである。にもかかわらず、それらの全部をふくむ第一章と対等な位置を与えられている。これはいったいどういうわけなのか。これがまた疑問のたねになる〉というものです。

しかし第2章が第1章と第3章を媒介する章であるとの位置づけが分かれば、それが短いのに一つの章として第1章と第3章と対等の位置に置かれているという理由も分かります。それは例えば第2篇には、一つの章しかなく、しかも分量としては短いものであるのに、第1篇や第3篇と対等の位置にどうして位置づけられているのかという理由と同じ理由なのです。第2篇の表題は「貨幣の資本への転化」ですが、これはまさに第1篇と第3篇を媒介する篇であることをその表題そのものが示しているといえるでしょう。だから同じような位置づけで考えるなら、「第2章 交換過程」は、内容からいえば、いわば「商品の貨幣への転化」とも言えるような位置にあると考えられるわけです。

そこで今問題になっている。第3節の第1章全体における位置とその役割はどういうものと考えべきか、についてですが、まず久留間氏の問題意識が、その点でもやはりおかしい点を指摘しておかなければなりません。氏は次のように述べています。

〈特に価値形態論と交換過程論との関係、これが、三十四五年前に「資本論」を読みはじめてから間もない頃から、ずいぶん長いあいだわたくしを苦しめた。どちらを読んでみても、貨幣がどのようにしてできるかについて論じているように思われる。ところがその論じかたを見ると、全くちがっている。そのちがいは、本質的にはどういふ点にあるのか。これがなかなかわからない。そしてそれに関連して、前にも述べたように、価値形態論の方は第一章の商品論のうちの第三節になっているが、交換過程論の方は独立した第二章になっている。これもいったいどういうわけなのかということ、こままた長いあいだ疑問のたねであった。〉（2頁）

やはり久留間氏の問題意識そのものが間違っているのです。と言うのは、氏は第3節と第2章との関係を直接問うているのですが（そしてこの問いは、この著書の表題『価値形態論と交換過程論』そのものになっていることをみても久留間氏にとっては重要な問題意識だったこと分かります）、しかし、関係を問題にするのなら、いきなり第1章第3節と第2章とではなく、まず第3節の第1章のなかでの位置を明確にした上で、次に第1章と第2章との関係を問うべきではないでしょうか。そうすれば必ずから、第1章第3節と第2章との関係も明らかになるはずなのです。

では第3節は第1章でどういう位置と役割を持っているのでしょうか。

第1章の表題は「商品」です。つまり商品とは何かを明らかにすることが課題になっています。しかし第1章の冒頭パラグラフでは、マルクスは「第1部 資本の生産過程」が「第1篇 商品と貨幣」の考察から始まり、さらにそれは「第1章 商品」の考察から始めなければならない理由を述べています。

そして商品をそのありのままの姿で観察して、それがまず使用価値として存在すること、しかしそれが商品である限りは、同時に交換価値でもあることを指摘して、交換価値の考察に移り、交換価値をさしあたりは一つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係としてとらえます。つまり諸商品の交換関係という現象から考察を始めています。そしてマルクスはそこからその交換関係に内在する商品の価値を抽出し、価値の概念を与え、さらに使用価値と価値という二重物である商品に表される労働の二重性の考察まで深めたあと（第2節）、もう一度、商品の交換価値という現象形態に帰ってくるのです。それがすなわち第3節でした。第1節で価値の概念を明らかにしたところでも、次のように述べていました。

〈研究の進行は、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値にわれわれをつれ戻すであろうが、やはり、価値は、さしあたり、この形態から独立に考察されなければならない。〉（全集版53頁）

だから第3節はわれわれが第1章の冒頭で商品をそのまま観察した現象の背後にある本質的なもの（価値）を取り出して考察したあとで、その現象形態（交換価値）に再び帰ったものなのです。つまり現象の背後にある本質的な関係を考察したあと、再びその本質から最初の現象形態を展開して説明するのが第3節の課題であると言えるでしょう。つまり価値の概念からその現象形態（価値形態）を展開して説明することです。

第3節の課題については、その冒頭の前文ともいうべきところで、次のように述べています。

〈商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である。けれども、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにはかならない。だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである。〉（全集版64頁）

このようにマルクスはまず〈商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である〉と商品のもっとも最初の現象に戻っています。つまり商品がわれわれの目に写るありふれた姿をそれ自体としてとらえているわけです。これは第1節の冒頭で商品をまず使用価値としてとらえていたのと同じです。そして同時に〈商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにはかならない〉と指摘するのです。〈だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである〉というのが大変重要なのです。つまりわれわれが商品を見て、これは商品だと分かるのは、商品が現物形態（これは鉄、リンネル、小麦という物的姿そのものです）と同時に価値形態という二重形態を持たねばならないと述べています。「価値形態」というのは、価値が形あるものとして目に見えるものとして現われているということです。だから商品が商品という形態、つまりその姿そのもので商品であることが分かるようなものになるためには、その物的形態だけではなく、商品に内在する価値も、何らかの形あるものとして直接的なものとして現われていなければならないのだ、とマルクスは述べているわけです。ではその価値形態というのはどういふものなのか、それが問題です。それについては、マルクスは次のように述べています。

〈だれでも、ほかのことは何も知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な現物形態とはきわめて著しい対照をなす共通の価値形態をもっているということは知っている。すなわち、貨幣形態である。〉（65頁）

つまりわれわれが商品の価値形態として、そのありふれた姿として見えているのは、貨幣形態だとマルクスは述べています。そしてすでに貨幣形態まで学んだわれわれは、マルクスがここで述べている「貨幣形態」というのは「価格形態」であることを知っています。つまり商品はその物的形態と同時に価格形態、すなわち「値札」をつけているというのが、われわれが商品を店頭でみるもっともありふれた姿なのです。だから例え商品であっても、それにもし値札が付いていないとそれが商品であるのか、すなわち売り物であるのか、それともその商店が自分で使っているものなのかは分かりません。値札が付いて、「ああ、これは商品だな」と分かるわけです。だから値札こそ、商品の価値形態であり、その発展したもの、すなわち貨幣形態なのです。だから第3節の課題は、商品とは何かを解明するために、商品にはどうして値札が付いているのかを説明することなのです。そしてそのためには貨幣形態を説明しなければならず、どうして商品は貨幣形態を持つのかを説明しなければならなかったわけです。だからマルクスは次のように述べているのです。

〈しかし、今ここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、すなわち、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純なもっとも目立たない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えさせる。〉（65頁）

だからこの第3節は確かに貨幣に言及し、貨幣形態の発生を立証しているわけですが、しかし、それはあくまでも商品とは何か（それが第1章の課題です）を明らかにする一環としてそうしているのだということ、商品とは何かを明らかにするために、商品にはどうして値札が付いているのかを説明するためのものだという理解が重要なのです。同じように貨幣の発生を説明しているように見える第2章が、第1章の商品論を前提にして、商品がその現実の交換過程において、如何にして貨幣へと転化するのかを解明するものであり、それによって第1章と第3章とを媒介するものであるという、その役割や位置づけにおける相違も分かってくるのです。

だから第3節を最後まで考察し終えたわれわれは、すでに商品とは何かがそれによって掴むことができたことになりました。しかし、それでは第4節はどういう意義を持っているのでしょうか。これは次回以降の学習の対象であり、次回以降の課題になりますが、久留間氏の諸説を検討したついでに、少し先回りして簡単に論じておきましょう。

確かに第3節までで商品とは何かは明らかになったのですが、しかしそれだけでは商品の何たるかが十全に解明されたとは言えないのです。というのは商品というのは、歴史的にはどういう性格のものなのかはまだとらえられていないからです。資本主義的生产様式は歴史的な一つの生産様式です。だから資本主義的生产様式とそれに照応する生産諸関係や交易諸関係というものも、やはり歴史的な存在であるわけです。だから資本主義的生产様式を構成するさまざまな諸契機もやはりそれぞれが、やはり歴史的な存在なのです。つまりそれらも歴史的に形成されてきたものであり、それぞれがそれぞれの歴史を持っており、それぞれがそれぞれの生成や発展、消滅の過程を辿っているものなのです。だから商品の何たるかを十全に把握するためには、それを歴史的なものとしてとらえる必要があるわけです。そしてその課題を解決しているのが、すなわち第4節なのです。

そして第1章として「商品」が解明されたあと、諸商品の実際の交換過程のなから、如何にして貨幣が生まれてくるのかを説明するのが、第2章の課題であり、それを踏まえて貨幣の諸機能や商品流通における諸法則を解明するのが、第3章の課題である、ということが出来るのです。極めて簡略ですが、久留間氏の問題意識に答えるものとして、このように説明しておきましょう（久留間氏の著書を批判的に検討するのは、それはそれで別の課題であり、ここでこの課題はありません）。

.....

【付属資料】

●【Dの表題】

《初版付録》

《フランス語版》

〈(貨幣形態《Forme monnaie ou argent(24)》)

(24) "Geld,Geldform"というドイツ語の正確な翻訳は困難である。"forme argent"という表現は、貴金属を除いてすべての商品に無差別に適用できる。人はたとえば、読者の頭を混乱させずに、"forme argent de l'argent"とか"l'or devient argent"などとは言えないであろう〔フランス語の"は、「貨幣」という意味と「銀」という意味をもっているから〕。さて、"forme monnaie"という表現は、"monnaie"という語がフランス語では鑄造された貨幣片の意味でしばしば用いられることから生じるところの、別の不都合を示している。われわれは状況に応じて、といっても、いつも同じ意味で、"forme monnaie"と"forme argent"との両語を交互に使用することにする〔両語とも本書では「貨幣形態」と訳すことにする〕。〉(43-4頁)

●【貨幣形態の図示】

《初版付録》

〈20エレのリンネル =
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
40ポンドのコーヒー = 2オンスの金
1クォーターの小麦 =
1/2トンの鉄 =
x量の商品A =
その他の商品 = 〉

《フランス語版》

〈20メートルリンネル =
1着の上着 =
10ポンドの茶 =
40ポンドのコーヒー = 2オンスの金
1/2トンの鉄 =
x量の商品A =
その他 = 〉(44頁)

●【1】パラグラフ

《初版付録》

初版付録には、「IV 貨幣形態」には三つの小項目がある。すなわち

- 〈(1) 一般的な価値形態から貨幣形態への移行と、それ以前の発展移行との差異。〉
- 〈(2) 一般的な相対的価値形態の価格形態への転化。〉
- 〈(3) 単純な商品形態は、貨幣形態の秘密である。〉

ここでは、まず項目(1)の内容を紹介する。

〈(1) 一般的な価値形態から貨幣形態への移行と、それ以前の発展移行との差異。

本質的な変化は、形態Iから形態IIへの移行、形態IIから形態IIIへの移行にさいして、生じている。これに反して、形態IVは形態IIIとは、いまではリンネルに代わって金が一般的な等価形態をもっているということを除くと、なんらの差異もない。金は、形態IVでは、リンネルが形態IIIでそうであったもの――一般的な等価物である。進歩があるのは、直接的な一般交換可能性という形態あるいは一般的な等価形態が、いまでは、社会的な慣習にのって、商品体金の独自の現物形態と最終的に癒着している、という点だけである。〉(905頁)

《フランス語版》

〈本質的な変化は、形態Iから形態IIへの移行、形態IIから形態IIIへの移行において生ずる。これに反して、形態IVは、いまでは金がリンネルにかわって一般的な等価形態をもつようになったことを除けば、形態IIIと全然ちがわない。進歩はただちに、直接的、普遍的な交換可能性の形態、すなわち一般的な等価形態が、金という独自の自然形態のうちに終局的に体现された、ということにある。〉(44頁)

●【2】パラグラフ

《初版付録》

以下も項目(1)である。

〈金が他の諸商品に貨幣として相対しているのは、金がこれらの商品にたいしてすでにあらかじめ商品として相対していたからにほかならない。金もまた、他のすべての商品と同じに、個々別々の交換行為における単一の等価物としてであろうと、他の商品等価物と並んで特殊な等価物としてであろうと、等価物として機能していたのである。だんだんに、金は、もっと狭いかもっと広い範囲のなかで、一般的な等価物として機能するようになった。金が商品世界の価値表現においてこの地位の独占をかちとってしまうと、金が貨幣商品になる。そして、金がすでに貨幣商品になってしまった瞬間から、初めて、形態IVが形態IIIと区別されることになる。すなわち、一般的な価値形態が貨幣形態に転化する。〉(905-6頁)

《フランス語版》

〈金が他の商品にたいして貨幣の役割を演じるのは、金がすでに以前から他の商品にたいして商品の役割を演じていたからにはほかならない。他のすべての商品と同じように金もまた、孤立した交換において偶然的にであろうと、他の等価物とならんで特殊な等価物としてであろうと、等価物として機能してきた。金は広狭さまざまな限度内で、しだいに一般的等価物として機能したのだ。金は、商品世界の価値表現においてこういった地位の独占を勝ちとるやいなや、貨幣商品になったのであり、金がもはや貨幣商品になったその時にはじめて、形態Ⅳが形態Ⅲから区別される、すなわち、一般的価値形態が貨幣形態に変態する。〉(44-5頁)

●【3】パラグラフ

《初版付録》

次から小項目の(2)である。

〈(2) 一般的な相対的価値形態の価格形態への転化。

すでに貨幣商品として機能している商品での、たとえば金での、一商品たとえばリンネルの単純な相対的価値表現が、価格形態なのである。だから、リンネルの価格形態は

20エルのリンネル=2オンスの金

であり、または、ニポンド・スターリングが2オンスの金の購買名であれば、

20エルのリンネル=2ポンド・スターリング

である。〉(906頁)

《フランス語版》

〈たとえばリンネルという商品の、すでに貨幣として機能している商品たとえば金においての、単純な相対的価値表現が、価格形態になる。したがって、リンネルの価格形態は、20メートルのリンネル=2オンスの金あるいは、2ポンド・スターリングが2オンスの金の購買名であれば、20メートルのリンネル=2ポンド・スターリングになる。〉(45頁)

●【4】パラグラフ

《初版付録》

次は小項目(3)である。

〈(3) 単純な商品形態は、貨幣形態の秘密である。

要するに、本来の貨幣形態は、それ自体としては、全くなんらの困難をも呈していない、一般的な等価形態がひとたび看破されてしまうと、この等価形態が金という独自の商品種類に固着するということを理解するには、いさかも苦慮する必要がないのであって、このことは、一般的な等価形態は、本来、ある特定の商品種類が他のすべての商品によって社会的に排除されることを条件としている、ということを理解するのに苦慮する必要がない、のと同じである。問題になるのは、こういった排除が、客観的・社会的一貫性と一般的妥当性とを獲得し、したがって、いろいろな商品にかかわるがわる付着するのでもないし、商品世界のたんに特殊な範囲内でたんに局地的な射程をもっているだけでもない、ということだけである。貨幣形態の概念上の困難は、一般的な等価形態の理解に、したがって、形態Ⅲという一般的な価値形態一般の理解に、かざられている。ところが、形態Ⅲは、反射的に形態Ⅱに解消し、そして、形態Ⅱの構成要素は、形態Ⅰ、すなわち 20エルのリンネル=1着の上着 または、x量の商品A=y量の商品B なのである。そこで、使用価値と交換価値がなんであるかを知れば、この形態Ⅰは、たとえばリンネルのような任意の労働生産物を、商品として、すなわち、使用価値と交換価値という対立物の統一として、表示するところの、最も単純で最も未発展な仕方である、ということがわかる。そうすると、同時に、単純な商品形態である 20エルのリンネル=1着の上着 が、この形態の完成した姿態である 20エルのリンネル=2ポンド・スターリング すなわち貨幣形態を獲得するために通過しなければならぬところの、諸変態の系列も、容易に見いだされることになる。〉(906-7頁)

《フランス語版》

〈したがって、単純な商品形態は貨幣形態の胚種である(25)。

(25) 古典派経済学はいまだかつて、商品、特に商品の価値の分析から、商品が交換価値になる形態を演繹することに成功したためしがなく、これがこの経済学の主要な欠陥の一つである。まさにアダム・スミスやリカードのような古典派経済学の最良の代表者は、価値形態を、商品そのものの本性には無関心なあるもの、すなわち、この本性とはどんな内的関係もないもの、として論じている。それは、量としての価値が彼らの注意をひいたためばかりではない。その理田はもっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、現在の生産様式の最も抽象的な、最も一般的な形態であって、それゆえに歴史的な性格を、特殊な社会的生産様式という性格を獲得しているのである。これを、あらゆる社会におけるあらゆる生産の自然約な永遠の形態と取りちがえる、という誤りをおかすならば、価値形態、次いで商品形態、また、さらに発達した段階では貨幣形態、資本形態等の独自の側面を、必ず見失ってしまう。労働時間による価値量の測定については完全に意見がお互いに一致している経済学者たちのあいだで、貨幣、すなわち、一般的な等価物の固定した形態については、この上もなく多種多様でこの上もなく矛盾した考えが見出されるのも、このためである。たとえば銀行問題のような問題が姐上にのぼるやいなや、われわれはこのことに特に気がつくものだ。そのばあいになると、貨幣の定義やこの定義について絶えず言いつらされてきた常套句とは、もはや縁が切れなくなる。私はきっぱりと指摘するが、私が古典派経済学と言うのは、俗流経済学とは反対に、ウィリアム・ベティ以降、ブルジョア社会における生産関係の現実的で内的な総体を洞察しようと努める、すべての経済学のことである。俗流経済学は、外観に満足し、自分自身の必要のために、また、この上なく大ざっぱな現象の俗流化のために、先行者たちによってすでに丹念に作りあげられた諸材料を絶えず反芻し、ブルジョアが自分に属する世界すなわち可能なかぎりすばらしい世界に好んで繁殖させる幻想を、衛学的

『資本論』を読んでみませんか

第33回「『資本論』を読む会」の案内文を出そうと思いながら、ぐずぐずしていたら、東北の三陸沖でM8.8という（後にM9.0に修正）巨大な地震が起こり、東北地方や関東地方を含めて、甚大な被害に見舞われる災害が発生した。



3月12日『朝

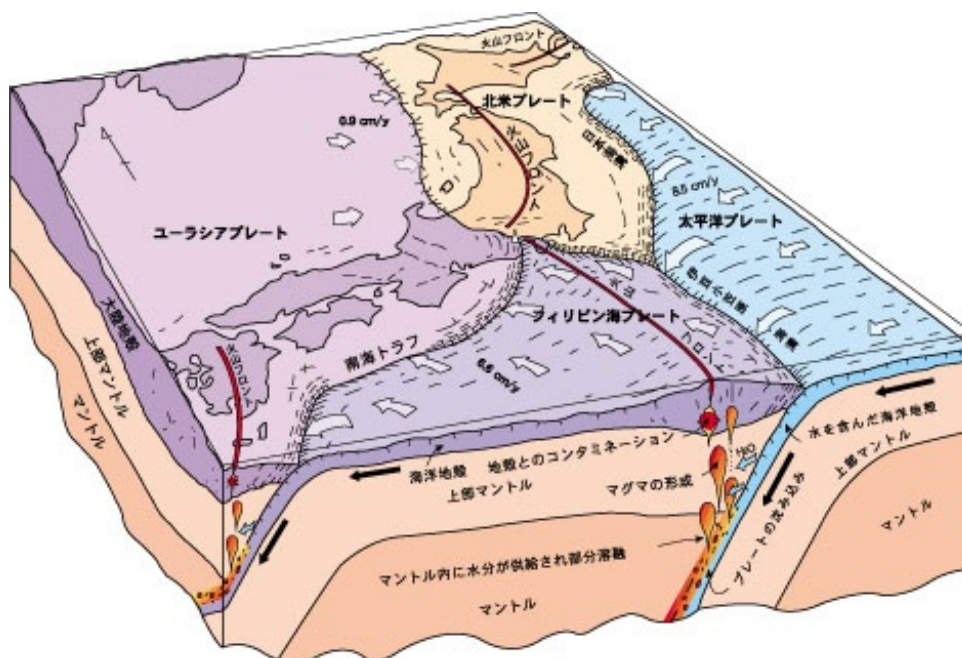
日新聞』夕刊より

とくに大津波の猛威は想像をはるかに越えるものであり、大きな船もろともに家屋までもを巻き込んで、一切合切を撫で斬りに流し去ってしまっている。家も何も跡形もなく、残ったのはただ瓦礫の山だけになっている。そこで生活していた人たちはどうなってしまったのか、その安否を思うにつけ、心痛の限りであるが、ただテレビの画面に釘付けになり、見入ることしかできない自分に歯がゆさを感じざるを得ない。

おまけに福島原子力発電所では、地震によって緊急停止装置が働き停止したのはよいものの、緊急炉心冷却システム（ECCS）が作動せず、第一原発の建屋が骨組みを残して吹っ飛んだとニュースでは報じている。これはチェルノブイリ原発事故に相当する災害をもたらしかねない事態が生じていることを物語っている。放射能による二次災害はさらに広い範囲に長期間に渡る被害をもたらすことが予想される。まさに大変な事態である。

考えてみれば、われわれ人類が築いてきた産業や毎日の生活の営みは、ただ地球のマントルの上ベリにできた瘡蓋（かぶた=地殻）の上にあるわけである。その瘡蓋は地球自体の長い歴史のなかで、火の玉の状態から徐々に冷却してくる過程で生じたものであるが、当然のことながら、今もって、その冷却は進んでおり、その冷却を媒介しているものがマントルの対流なのである。それによって地球はその内部の熱を宇宙に放出して徐々に冷えているわけだ。

そしてそのマントルの対流に応じて、その瘡蓋は地球の表面を長い時間をかけて（われわれ人類の歴史から見れば長いだけであるが）移動しており、日本列島は、そうした瘡蓋（プレート）の幾つかが地球内部のマントルにもぐり込んでいる場所にできた島である。



プレートテクトニクスから見た日本列島

だから今回のような地震は当然予想されてきた。東海地震や東南海地震、あるいは南海地震というのがそれであるが、まさか三陸沖にそれが生じるとはあまり予想されて来なかったのではないだろうか。しかしそうであるなら、やがては来るだろうといわれているわれわれの身近で起こる南海地震も、同じような甚大な被害を関西地方にもたらすだろうことは容易に想像できる。だから、これはまったく人ごとではないわけである。

マルクスは社会の歴史を地球の歴史になぞらえて「社会構成体(Gesellschaftsformation)」という概念を提起している。マルクスはこれを地質学の用語からとってきたとされている。

〈社会史の諸時代は抽象的な厳密な境界線によっては区分されないということは、地球史の諸時代の場合と同じことだからである。〉（全集23a486頁）

〈さまざまな地質の累層の順次的継起について、ひとは、明確に分離された諸時代が突如として現われるなどと考えるはならないが、さまざまな社会構成体の形成についても同様である。〉（『1861-1863年草稿集』9巻129頁）

地球の歴史は人類の歴史からすれば、気の遠くなるほど長いスタンスで変化しているものであるが、同じように人類の歴史も決して不変ではなく、現在の資本主義的生産様式も、やがては新しい社会構成体へと移行する一時代が来るものと思われる。それは今回の自然災害をもたらすようなものではないが、やはり世界全体を巻き込んだ一つの生みの苦しみともいうべき陣痛を伴うものなのかも知れない。

そうしたことを今回の地震で考えさせられた。

『資本論』など読んでいる場合ではない、と言われそうだが、一応、会場の予約もあり、第33回「『資本論』を読む会」は予定どおり開催します。

第33回「『資本論』を読む会」の報告

◎大地震と原発事故

東北・関東地方が大地震と大津波によって壊滅的な被害を受けました。何万もの人命が失われ、何十万もの人々が住む家を失いました。引き続き福島原発の事故による放射能の恐怖は首都圏をも巻き込みつつあります。全国や世界からも多くの支援の手がさしのべられ、官民上げて原発の暴走をくい止めようと必死の対策がとられています。それらが奏効し、災害からの復興と事故拡大が未然に防止されることを願うばかりです。

第33回「『資本論』を読む会」はこうした大変なときに開催されました。今回から第1章の第4節「商品の物神的性格とその秘密」に入りました。今回はいつも報告を担当して頂いているピースさんがお休みなので、J J 富村さんがピンチヒッターで報告を担当してくれました。ピースさんもいつもレジュメを準備してくれていますが、J J 富村さんも大変丁寧なレジュメを準備してくれました。今回は三つのパラグラフを進んだだけでしたが、その内容を報告しましょう。

◎商品の神秘的性格はその使用価値から来るものではない

今回も、まず最初にパラグラフ全文を紹介し、文節ごとに(イ)、(ロ)、・・・と記号をうち、それぞれについて平易に解説することになります。まず最初は第1パラグラフです。

【1】〈(イ)商品は、一見、自明な、平凡な物らしく見える。(ロ)商品の分析は、商品が形而上学的な小理屈と神学的な小言に満ちた非常にやっかいなしろ物であるということを示す。(ハ)商品が使用価値である限り、その諸属性によって人間の諸欲求を満たすという観点から見ても、あるいは、人間労働の生産物としてはじめてこれらの諸属性を受け取るという観点から見ても、商品には神秘的なものは何もない。(ニ)人間がその活動によって自然素材の諸形態を人間にとって有用な仕方に変えるということは、感性的に明らかである。(ホ)たとえば、木材でテーブルがつくられれば、木材の形態は変えられる。(ヘ)にもかかわらず、テーブルはあい変わらず木材であり、ありふれた感性的なものである。(ト)ところが、テーブルが商品として登場するやいなや、それは感性的でありながら超感性的なものに転化する。(チ)それは、その脚で床に立つだけでなく、他のすべての商品に対しては頭で立ち、そしてその木の頭から、テーブルがひとりてに踊り出す場合よりはるかに奇妙な妄想を展開する(25)。〉

(イ) 商品は、一見すると、自明で、平凡なもののように見えます。

(ロ) ところが、「商品とは何か」と商品の分析を開始すると、それは非常にやっかいなものであるということが明らかになります。それは形而上学的な理屈や神学的な小言に満ちたものであるかにさえ見えるのです。

この二つの文節は、いわばこの第4節全体の導入部分のように思えます。つまりこれまでの第1章の商品の分析（第1節～第3節）を振り返って、この節（第4節）での課題を明らかにしているものと思えます。少し、その意味を込めて、書き直すと次のようになるかと思えます。

〈商品というのは、われわれが日常目に見ているものであり、それ自体は、ありふれたものです。しかしこれまでわれわれは商品を分析し、「商品とは何か」を考察してきたのですが、その過程で明らかになったように、「商品とは何か」を明らかにしようとすると、恐ろしくやっかいな代物であることが分かりました。そのためには、ややこしい形而上学的ともいえる理屈をこねなければならず、わけのわからない神学的な小言と同じようなことを論じなければならなかったわけです。どうして商品とは、こんなわけのわからないものなのでしょう。これが分かると、「商品とは何か」ということを十分に説明したとは言えないのではないのでしょうか。つまりこれまで、われわれは商品にはどうして値札がついているのかを、貨幣の発生を辿ることによって明らかにして、われわれが日常見ている商品のありのままの姿がどうしてそうなっているのかを説明したのです。しかしその説明が、どうしてあのように難しい説明にならざるを得ないのか、どうして商品というのは、そうしたわけのわからない、やっかいな説明を必要とするものなのかが、実はまだ十分説明されているとはいえないわけです。だからそれが説明されて、初めて、われわれは「商品とは何か」について十全に理解したといえるでしょう。それをこれから説明することになります。〉

まあ、だいたい、こういう内容をここで言いたいわけです。そしてこれがこの第4節の課題を説明することでもあるわけです。

(ハ) 商品はその使用価値の属性で見ると、それは人間の諸欲求を満たすということや、あるいは、それが人間労働の生産物であり、そうした生産によってそうした欲求を満たす属性を受け取ったのだということなどについては、まったく神秘的なものは何もないわけです。

ここからは、まず商品の一つの属性である使用価値そのものには、何の神秘的なものはないということから、商品の神秘的性格はどこから来るのかを説明するための前提として、商品の何については神秘的ではないのかをまず見極めることから始めているといえます。そしてその上で、では、商品の神秘的性格はどこから来るのかを説明しようとしているわけです。だから最初の二つのパラグラフそのものは、この節の本論の前提ともいうべきものなのかも知れません。

(ニ) 人間がその活動によって自然素材をさまざまにその形態を変えて、人間にとって有用なものに作り替えるということは、まったく感性的にも理解できることであり、明らかです。

(ホ)、(ヘ) 例え、木材でテーブルを作るならば、木材の形態は変えられますが、しかし、依然としてテーブルは木材であり、ありふれた感性的に捉えられるものであり続けます。

ここまでは、とにかく商品の使用価値やそれをつくる労働についても、何も神秘的なものはないことが指摘されています。

(ト)、(チ) ところが、テーブルがひとり商品として登場するやいなや、それは感性的存在でありながら、それ以上のもの、超感性的なものに転化するのです。テーブルはその脚で床に立っているだけではなくて、他の商品に対しては頭で立ち、そしてその木の頭から、テーブルがひとりてに踊り出す場合よりはるかに奇妙な妄想を展開するようになるのです

これまでの考察のように商品の使用価値を問題にしている限りでは、それらはすべて感性的に、つまりわれわれの五感で捉えられるものであり、だからわれわれにとっては神秘的なものは何もないのですが、しかし、商品の神秘性は商品が他の商品との関係のなかで捉えられるとなると、その神秘的な性格が現われてくるのだということが、ここでまず指摘されています。それをやや文学的な表現でなされているといえるでしょう。

学習会では、まず「それは、その脚で床に立つだけでなく、他のすべての商品に対しては頭で立ち」の部分について、報告者のレジュメでは「他のすべての商品に対して価値関係を取り結ぶ。脚で立つ机、即ち、使用価値としてではなく、価値、交換価値として振る舞う」との説明がありました。これはその通りなのですが、なぜ「頭で立ち」と説明されているのが今一つよく分かりません。価値関係を取り結ぶということは、他の商品との違いを示している商品の使用価値を生み出した有用な労働の諸属性を捨象して、他の商品との共通なもの、抽象的な人間労働が対象化したものに還元する必要があります。そうすると、それは抽象の産物となり、そういう意味で頭の産物だから、このように述べているのではないか、という説明がありました。初版本文には次のような説明もあります。

〈リンネルを人間労働の単なる物的な表現として把握するためには、リンネルを現実にも物にしているところのいっさいのものを、なによりもまず捨象しなければならない。それ自身抽象的であってその他には質も内容ももたない人間労働の対象性は、必然的に、抽象的な対象性、すなわち思考産物である。こうして亜麻織物は幻想になる。〉（江夏訳36頁）

またレジュメでは、「そしてその木の頭から、テーブルがひとりでに踊り出す場合よりもはるかに奇妙な妄想を展開する」の部分がよく分からないと「？」マークがついていましたが、これはこれまでの展開を振り返って論じているのではないか、つまり価値形態の発展を論じた部分の難しい展開を〈奇妙な妄想の展開〉ともっているのではないか、との意見がありました。

さらに、第4節の表題は「商品の物神的性格とその秘密」ですが、そもそも〈物神的性格〉とは何だろうということになりました。レジュメでは平凡社の百科事典の「フェティシズム」の項からの引用が紹介されていましたが、「物神」というのは、物を神のように崇めるということ。例えば奇岩・奇石などを神が宿るものとして崇めたり、巨大な古木をご神木として崇めるというような例が紹介されました。しかし単に物を神として崇めるというだけでは、「物神的性格」の理解としては不十分ではないか、との指摘もあり、有井行夫著『マルクスはいかに考えたか』の内容の紹介など色々と議論がありました。その内容をすべて紹介してしまうと、この節の内容を先取りしてしまいかねず、よって今回は割愛したいと思います。それについてはまた論じる機会があるかと思えます。

この第1パラグラフについて注25についても簡単に議論しましたので、それも紹介しておきましょう。

【注25】〈(25) 世界の残りの部分がすべて静止しているように見えた時に、中国〔China、「陶器」と同文字〕とテーブルが踊り出した――“ほかのものを励ますために **pour encourager les autres** ”――ということが思い出される。〉

これに関しては、レジュメでは全集版の注解28で次のような説明があると紹介されていました。

〈全集版の注解(28) ほかのものを励ますために(pour encourager les autres)

1848-49年の革命の敗北後、ヨーロッパでは暗い政治的反動期が始まった。そのころヨーロッパ貴族仲間、またブルジョア仲間も靈交術や特に卓蹄術に熱中していたが、他方、シナでは特に農民のあいだに強力な反封建的解放運動が広がっており、それは太平天国の乱として歴史に残っている。〉

また新日本新書版では次のような説明があることも紹介されました。

〈〔テーブルや陶器が踊るというのは心靈術の一種で、1848年の革命の敗北後ヨーロッパで大流行したが、マルクスはここで、1850年から起こった太平天国運動とそれをかけている。「中国問題」、邦訳『全集』、第15巻、490頁参照。なお、「ほかのものを励ますために」は、ヴォルテール『カンディード』、第23章からとられている。吉村正一郎訳、岩波文庫、129頁〕

全集版の「中国問題」の当該箇所については、埼玉・所沢の「『資本論』を読む会」のサイトでは次のように紹介されていました。

《この中国革命で独特なのは、実際はただその担当者だけである。彼らは、王朝の交替ということを除いては、どのようなスローガンももっていない。彼らは旧統治者によるよりも人民大衆によってよけいに恐れられている。彼らの使命は、保守的的老衰に対立して、怪奇な、いとわしい形態における破壊、なんらの新しい建設の萌芽ももたない破壊を代表する以外にはなにもないかのように思われる。》（全集第15巻490頁）

とりあえず、この注25については、こうした資料だけを紹介しておきます。

◎商品の神秘的性格は価値規定の内容からも生じるのではない

次は第2パラグラフです。

【2】〈(1)したがって、商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じるのではない。(1)それはまた、価値規定の内容から生じるのでもない。(1)と言うのは、第一に、有用労働または生産的活動がたがいにどんなに異なっているか、それらが人間の有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容やその形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髓、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、一つの生理学的真理だからである。(2)第二に、価値の大きさの規定の基礎にあるもの、すなわち、右のような支出の継続時間または労働の量について言えば、この量は労働の質から感覚的にも区別されるものである。(3)どんな状態のもとでも、人間は――発展段階の相違によって――様ではないが――生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった(26)。(4)最後に、人間が何らかの様式でたがいのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的形態を受け取る。〉

(1) だから商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じるものではありません。

(D)では、それは商品の価値から生じているのでしょうか。しかしまた、商品の価値規定の内容を見る限りでは、そこから生じているともいえないのです。

(H)というのは、商品の価値規定の内容というのは、第一に、有用労働が、あるいは生産的な活動がそれがどんなに互いに違っていたとしても、それらが人間有機体の諸機能だという点ではどんな違いもありませんし、またそれがどういような具体的な形態でなされるかに違いはあったとしても、それらはどれも本質的には人間の脳髓、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるという点では同じであることは、生理学的真理であって、これ自体には何の神秘的な性格もないわけです。

ここで注意が必要なのは、マルクスが「価値規定の内容」として語っているものには、「価値の実体」と言われる「抽象的人間労働の凝固」という言葉がないことです。だから「価値規定の内容」というのは「価値の実体」とはまた違って、その基礎にあるものだとということです。

(-)、(A)次に価値規定の内容として問題になるのは、価値の大きさの基礎にあるもの、すなわち先の生理学的な労働力の支出の継続時間、またはその労働の量については、労働の質とは感覚的に区別されるものです。

ここでも注意深く吟味してみる必要があるのは、マルクスは「価値の大きさ」そのものを問題にしているのではなく、「価値の大きさの基礎にあるもの」を問題にしているということです。価値の大きさは商品の生産に社会的に必要な労働時間ですが、そうしたものを直接問題にしているのではなく、その「基礎にあるもの」なのです。それはマルクスが「価値規定の内容」として抽象的人間労働を問題とせず、さまざまな具体的な形態が規定された人間労働力の支出というものが、その具体的な形態が如何なるものであると、人間有機体の諸機能であり、本質的には人間の脳髓、神経、筋肉、感覚器官などの支出なのだと捉えていることに対応しています。

以前、第2節の最後のパラグラフを分析したときに、このパラグラフがシンメトリーの構成になっていることと、三層の構造を持っていることを指摘しました。それをもう一度思い出してみましょう。まず、第2節の最後のパラグラフを紹介します。

《すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性において、それは商品価値を形成する。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。》(全集版63頁)

このパラグラフの構成を図示したのも紹介しておきます。

| | | |
|---------------------|------------------|---|
| すべての労働は | | これは資本主義社会における「すべての労働」であろう。マルクスは初版やフランス語版では商品の中にある「労働」を見ているからである。 |
| 一面では | 他面では | だから労働が「二重性」として捉えられるのは、商品の使用価値と価値という二つの対立的契機と関連させて見るからである。 |
| 生理学的意味での | 特殊な、目的を規定された形態での | 「人間労働力の支出」というレベルでみた二つの労働の契機。 |
| 人間労働力の支出であり | | |
| この同等な人間労働または抽象的人間労働 | この具体的有用労働 | 労働の「属性」としてみた、二つの契機。 |
| という属性において | | |
| それは商品価値を形成する。 | それは使用価値を生産する。 | 労働の二つの「属性」が、商品の二つの契機に結果するものとしてみている(ここでは「表れる」のではなく、「形成する」であり、他方は「生産する」であることに注意)。 |

つまりマルクスは「商品価値を形成する」労働を分析して、「生理学的意味での人間労働力の支出」というものと「同等な人間労働または抽象的人間労働」という属性とを区別しているということです。同じように「使用価値を生産する」労働についても、「特殊な、目的を規定された形態での人間労働力の支出」ということと、「具体的有用労働」という属性とが区別されています。

だから今ここで、マルクスが「価値規定の内容」として述べているものでいえるのは、「価値を形成する」労働のうち、まさに最初の層、つまり「生理学的意味での人間労働力の支出」とその継続時間なのだということです。第二層、つまり価値の実体である「同等な人間労働または抽象的人間労働」の凝固と社会的に必要な人間労働の継続時間ではないということに注意が必要なのです。多くのマルクス経済学者は「抽象的人間労働」と「生理学的な意味での人間労働力の支出」を同じものとして扱っていますが、マルクス自身はこれらを明確に区別していることに注意が必要なのです。

(A)そして最後に、人間が何らかの様式で互いのために労働するようになるやいなや、彼らの労働も社会的な形態を受け取るということはあたりまえのことであり、彼の労働が社会的な形態を持っているということ自体には何の神秘的なものもないのです。

ここでは〈価値規定の内容〉という言葉が出てきます。マルクスはこの内容を三つの部分からなると考えているようです。では、それは第1節のどのような内容に照応しているのでしょうか。

(1)まず価値規定、つまり価値の規定というのは、次のような第一節の一文を指すのではないのでしょうか。

〈ここで、これらの労働生産物に残っているものを考察しよう。それらに残っているものは、幻のような同一の対象性

以外の何物でもなく、区別のない人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、単なる凝固体以外の何物でもない。これらの物が表しているのは、もはやただ、それらの生産に人間労働力が支出されており、人間労働が堆積されているということだけである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値――商品価値である。

諸商品の交換関係そのものにおいては、それらの物の交換価値は、それらの物の諸使用価値とはまったくかわりのないものとして、われわれの前に現れた。そこで今、実際に労働諸生産物の使用価値を捨象すれば、今まさに規定された通りのそれらの価値が得られる。したがって、商品の交換関係または交換価値のうちのみずからを表している共通物とは、商品の価値である。

したがって、ある使用価値または財が価値をもつのは、そのうちに抽象的労働が対象化または物質化されているからにほかならない。)

これが「価値規定」です。しかし、ここでマルクスが問題にしているのは、こうした「価値規定」そのものではなく、その基礎にあるものとだということです。それが「価値規定の内容」なのです。

(2) 次は量的価値規定について、

くでは、どのようにしてその価値の大きさははかれるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」、すなわち労働の、量によってである。労働の量そのものは、その継続時間によってははかれ、労働時間はまた、時間、日などのような一定の時間部分を度量基準として持っている。……

したがって、ある使用価値の価値の大きさを規定するのは、社会的に必要な労働の量、または、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間にほかならない。)

この場合も、しかしマルクスがここで問題にしているのは価値の量的規定そのものではなく、「その基礎にあるもの」なのだということが重要です。

(3)次は、価値を形成する労働の社会的性格についてです。

〈商品を生産するためには、彼は、使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値を、社会的使用価値を、生産しなければならない。〉

くしたがって、われわれは次のことを見てきた――どの商品の使用価値にも一定の目的的生産的活動または有用労働が含まれている。諸使用価値は、質的に異なる有用労働がそれらに含まれていなければ、商品として相対することはできない。その生産物が一般的に商品という形態をとっている社会においては、すなわち商品生産者たちの社会においては、独立生産者たちの私事としてたがいに従属せずに営まれる有用労働のこうした質的相違が、一つの多岐的な体制に、すなわち社会的分業に、発展する。)

しかしこうした労働の社会的形態は、商品を生産するという様式において取り結ぶ社会的形態であるということが理解されなければなりません。価値規定の内容としてマルクスが述べているのは、そうしたもののさらに一般化されたものだとということです。

報告者のレジュメでは、以前、大阪でやっていた「『資本論』を学ぶ会」のニュースNo.23(1998/11/5)からの紹介がありました。だからそれも少し紹介しておきましょう。

【ここではマルクスは「価値規定の内容」とは、労働を基礎とする人間のどんな社会にも妥当するような、もっとも基本的なものだと述べているように思えます。だからそれは資本主義以前の社会はもちろん、将来の社会、つまり社会主義、共産主義の社会においても存在するものだとということでもあります。だからこうしたものには何の神秘的なものもないのだということだと思えます。このようなマルクスの考えは、それ以外の文献でも色々述べられています。今、その主なものを紹介しておきましょう。

例えばマルクスは1868年7月11日付けの「クーゲルマンへの手紙」で次のように書いています。

〈価値概念を証明する必要があるなどというおしゃべりは、当面の問題についての、さらにまた、この科学の方法についての完全な無知にもとづくものにほかならない。いかなる国民でも、一年間はるか二、三週間でも労働を停止しようものなら、たちまちまいってしまうということは、どんな子どもでも知っている。また、種々の欲望の量に応じる諸生産物の量は、社会的総労働の種々のそして特定の分量を必要とするということもどんな子どもでも知っていることである。このように社会的労働を一定の割合で配分する必要は、社会的生産の一定の形態によってなくされるものではなくて、ただそのあらわれかたが変わるにすぎないことは自明である。自然法則をなくすことは決してできないことである。いろいろの歴史的状态につれて変化しうるのは、それらの法則が貫徹される形態だけである。そして、社会的労働の連関が個人的労働生産物の私的交換としてあらわれる社会状態においてこの労働の比例的配分が貫徹される形態がまさしくこれらの生産物の交換価値なのである。〉(国民文庫版87～9頁)

(中略)つまりマルクスが「価値規定の内容」として述べていることは、いわばこの手紙でマルクスが「自然法則」として述べていることと同義であって、だから商品生産社会において「それらの法則が貫徹される形態」こそが、まさに「生産物の交換価値」であり、それが「労働生産物の認知的性格」をもたらすのだ、ということではないでしょうか。

もう一つ紹介しましょう。「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」では次のような一文が見られます。

くさて、ロートベルトゥスが――私はあとでなぜ彼にこれがわからなかったのか、その理由を言おう――すんで商品の交換価値を分析したとすれば、――交換価値は商品が複数で見いだされ、さまざまな商品種類が見いだされるところにだけ存在するのだから――彼はこの現象形態の背後に「価値」を発見したはずである。彼がさらにすんで価値を調べたとすれば、彼はさらに、価値においては物、「使用価値」は人間労働のたんなる対象化、等一な人間労働力の支出と見なされ、したがってこの内容が物の対象的性格として、商品自身に物的にそなわった〔性格〕として表示されていること、もっともこの対象性は商品の現物形態には現れないということ〔そして、このことが特別な価値形態を必要にするのである〕、こういうことを発見したことであろう。つまり、商品の「価値」は、他のすべての歴史的社会形態にも別の形態ではあるが、同様に存在するもの、すなわち労働の社会的性格――労働が「社会的」労働力の支出として存在する限りでの――を、ただ歴史的に発展した一形態で表現するだけだということを発見したことであろう。このように商品の「価値」があらゆる社会形態に存在するもの特定の歴史的状态にすぎぬとすれば、商品の「使用価値」を特徴づける「社会的使用価値」もやはりそうである。〉(全集・376～7頁)

こうしたマルクスの論述は、それ以外の諸文献でも見ることができます。ここで重要なのは、マルクスはこうした「価値規定の内容」は、確かにあらゆる社会に存在するものではあるが、しかしそれは「価値」がそうであるとは言っていないということです。むしろ「価値」はその「特定の歴史的形態にすぎない」と述べています。（以下略）

ところで、初版本文では、このパラグラフに続いて、現行版では12パラグラフに来るロビンソンの例と15パラグラフに来る共同社会の例の二つのパラグラフが続いています。つまりこの価値規定の内容には何の神秘的な性格はないということの説明する例として、ロビンソンの孤島での生活や将来の共同社会の例が展開されているのです。この現行版の二つのパラグラフは、当然、後に問題になるわけですが、初本文の展開の意義を確認するために、若干先取りして、その内容を少しだけ検討しておきましょう。

まずロビンソンの島の生活においては、〈ロビンソンと彼の自家製の富を形成している物とのあいだのいっさいの関係は、ここではきわめて簡単明快〉だと指摘しながら、〈それにもかかわらず、これらの関係のうちには、価値のすべての本質的な規定が含まれている〉とも述べられています。つまりそれらが価値規定の内容を意味することが示唆されているのです。

また〈共同の生産手段を用いて労働し、自分たちのたくさんの個人的な労働力を意識的にさて、一つの社会的な労働力として支出するところの、自由な人々の団体〉については、〈ロビンソンの労働のあらゆる規定が繰り返されるが、このことは、個人的にはなく社会的にというにすぎない〉と指摘され、やはり〈人々が彼らの労働や彼らの労働生産物にたいしてもっている社会的な諸関係は、ここでは依然として、生産においても分配においても、透明で簡単である〉と述べられています。つまり先に「クーゲルマンへの手紙」や「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」でも指摘されていましたが、それらはあらゆる社会に共通な内容をもったものであり、こうした関係には何の神秘的な性格もないと言うわけです。

そして初本文では、こうした二つのパラグラフによる価値規定の内容の具体的な例の検討を行ったあと、それを受けて、次のパラグラフで〈それでは、労働生産物が商品という形態をとるやいなや、労働生産物の謎めいた性格はどこから生ずるのか?〉と続いているのです（しかしその後の展開は現行版とは若干異なります。その検討は次回以降にしたいと思います）。

次の注26については、ほとんど議論にはなりませんでしたが、まずその本文を紹介しておきましょう。

【注26】〈(26) 第2版への注。古代のゲルマン人のあいだでは、一モルゲンの土地〔Land〕の大きさは一日の労働によつてはかられ、そこから、一モルゲンは、Tagwerk（あるいは Tagwanne）〔一日の仕事〕（jurnale または jurnalis, terra jurnalis, jornalis または diurnalis）、Mannwerk〔男一人の仕事〕、Mannskraft〔男一人の力〕、Mannsmaad〔男一人の草刈り〕、Mannshaut〔男一人の刈り取り〕などと呼ばれた。ゲオルク・ルートヴィヒ・フォン・マウラー『歴史への序論、マルク・農地等々・・・の制度について』、ミュンヘン、一八五四年、一二九ページ以下を見よ。〉

これは〈どんな状態のもとでも、人間は一一発展段階の相違によって一様ではないが一一生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった〉ということの一つの例証として、古代ゲルマンでも、一人の男の労働時間によって彼の土地の大きさが決められたことを紹介しているだけですから、あまり拘る必要もないでしょう。

◎労働生産物の謎的性格は、商品形態そのものから来る

次は第3パラグラフです。

【3】〈(1)では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎のような性格は、どこから来るのか? (1)明らかに、この形態そのものからである。(1)人間労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の測定は、労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的諸規定がその中で発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。〉

(1)では、労働生産物が商品の形態をとるやいなや生じる、その謎のような性格は、どこから来るのでしょうか?

(1)それは、明らかに、この形態そのもの、つまり商品形態から来るのです。

ここで〈形態そのもの〉とありますが、学習会では、第3節の最初の前文ともいうべき部分にある次の一文に注目すべきことが指摘されました。

〈商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である。けれども、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにほかならない。だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである。〉

だからここで〈形態そのもの〉と言われているのは、商品形態の二重の形態のうちの、価値形態を指すことは明らかでしょう。「価値形態そのもの」から労働生産物の謎的性格が来ていることとなります。

(1) 価値規定の内容のそれぞれの契機は、商品形態において、次のような形態を受け取ることによって謎的性格を帯びます。まず人間労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、次にその継続時間による人間労働力の支出の測定は、労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的諸規定がそのなかで発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのです。

この最後の部分の文章に注意が必要だということが指摘されました。まず〈生産者たちの労働のあの社会的諸規定がその中で発現する彼らの諸関係〉という部分の〈あの社会的諸規定〉の〈あの〉というのは、一つ前のパラグラフにある〈人間が何らかの様式でたがいのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的形態を受け取る〉を受けていると思えます。つまり先のパラグラフで指摘された社会的形態を受け取った労働の〈あの社会的諸規定〉ということなのです。

労働そのものは、その具体的な属性によって社会的な関係を体現しています。マルクスは使用価値について次のように述べていました。

〈さまざまな種類の使用価値または商品体の総体のうちには、同じように多様な、属、種、科、亜種、変種を異にする有用労働の総体――社会的分業――が現れている。〉

つまり有用労働はその有用な属性によって社会的分業の総体を表しているわけです。

その労働の〈社会的諸規定〉が〈その中で発現する〉〈その中〉というのは〈生産者たち〉の〈諸関係〉ということです。つまり労働それ自体がもっている社会的諸規定というのは、社会の物質代謝を維持するために必要不可欠な物質的な条件なのです。それが生産者が取り結ぶ社会的諸関係のなかで発現する（実現される、あるいは具体化される）と述べているわけです。しかしこの生産者の社会的諸関係は、しかし、〈労働生産物の社会的関係という形態を受け取る〉ことによってその謎的性格が生まれるのだというわけです。つまり生産者の社会的諸関係が物の社会的関係という形態を受け取っているということですが、この最後の部分は少し難しいのですが、もっと後で詳しく論じられると思いますので、ここでは、これぐらいにしておきましょう。

【付属資料】

●第4節の表題

《初版付録》

〈 δ 等価形態の第四の特性。商品形態の物神崇拜は、等価形態では、相対的価値形態よりも顕著である。〉（893頁）

《補足と改訂》

〈4〉商品の物神的性格とその秘密〉（小黒正夫訳下26頁）

《フランス語版》

〈第四節 商品の物神性とその秘密〉（江夏他訳46頁）

●第1パラグラフ

《初版本文》

〈商品は、一見したところでは、自明の、ありきたりの物に見える。商品の分析が示すところでは、商品は非常に奇妙な物であり、形而上学的な屁理屈や神学的ななしかめつらでいっぱいになっている。単なる使用価値としては、商品はある感覚的な物であって、私がいま、それを、その諸属性が人間の必要をみたすという観点から観察しても、または、それが人間労働の生産物として初めてこれらの属性を得るという観点から観察しても、それにはなんら神秘的なものはない。人間が自分の行為によって自然素材の諸形態を自分にとって有用な仕方に変えるということには、謎めいたものは絶対になにもない。たとえば、材木から机を作れば材木の形は変えられる。にもかかわらず、机は依然として、材木というありふれた感覚的な物である。ところが、机が商品として現われるやいなや、机は、感覚的でありながら超感覚的な物に変わる。机は、その脚で地上に立っているだけでなく、すべての他商品に向かって逆立ちし、その木の頭から、机が自ら進んで踊り出すときよりもはるかに奇怪な妄想を、繰り広げるのである(25)。〉（江夏訳59頁）

《フランス語版》

〈商品は一見したところでは、ありふれた自明なあるもの、のように見える。これとは反対に、われわれの分析の示すところでは、商品は、形而上学的な精密さと神学的なうわべの飾りにみちたきわめて複雑な物である。商品には、それがその属性によって人間の必要をみたそうと、その属性が人間労働によって産み出されようと、使用価値としてはなんら神秘的なものはない。人間の活動が自然の提供する素材を加工して、これを有用なものにするということは、自明のことである。たとえば、机を木材で作るならば、木材の形態が変化したのである。それにもかかわらず、机は依然として木材、すなわち、ありきたりで火を見るより明らかな物である。だが、机が商品として現われるやいなや、事態は全くちがってくる。机は、手でつかみうると同時に手でつかみえないものであるから、その足を地上に立てるだけでは充分でない。机は、いわば他の商品にむかって木の頭〔鈍い頭という意味も兼ねている〕で逆立ちし、踊りだすよりもいっそう奇妙な幻想に耽るのである。〉（46頁）

●注25

《初版本文》

〈(25)ほかの世界がすべて静止しているように見えたとき、シナと机が踊り出したーほかのものを励ますためにー、ということが思い起こされる。〉 (59頁)

●第2パラグラフ

《初版本文》

〈だから、商品の神秘的な性格は、商品の使用価値からは生まれてこない。それは同様に、それ自体として観察された価値規定からも生まれてこない。というのは、第一に、もろもろの、有用な労働あるいは生産活動は、どんなにそれぞれに相異なったものであっても、ほかの有機体とはちがうところの独自に人間的な有機体の諸機能であるということは、そしてまた、このような諸機能はどれも、その内容やその形態がどうあろうとも、本質的には、人間の頭脳や神経や筋肉や感覚器官等々の支出であるということは、生理学上の真理だからである。第二に、価値量の規定の基礎になっているもの、上記の支出の継続時間または労働の量について言えば、この量は、感覚的にさえ、労働の質と区別できる。生活手段の生産に費やされる労働時間は、たとい発展段階がちがえば様ではないにしても、どんな状態のもとでも、人間の関心事でなければならなかった。最後に、人間がなんらかの仕方でも相互のために労働するように怒ると、彼らの労働も、ある社会的な形態をとることになる。〉 (59-60頁)

《フランス語版》

〈したがって、商品の神秘的な性格はその使用価値から生ずるものではない。この性格はなおさら、価値を規定する性格からも生じない。第一に、実際のところ、有用労働すなわち生産活動がどんなに種々さまざまなのでありえようとも、それらはなによりもまず人間有機体の機能であること、このような機能はどれも、その内容や形式がどうあろうとも、本質的には人間の脳髓、神経、筋肉、器官、感覚等の支出であることは、生理学的真理である。第二に、価値量を規定するのに役立つもの、すなわち、こういった支出の継続時間あるいは労働の量については、この労働の量が労働の質から明らかに区別されることは、否定できないであろう。どんな社会状態でも、消費手段を生産するために必要な時間は、文明の段階の相違に応じて不均等であっても、人間の関心事でなければならなかった。(26)最後に、人間がなんらかのやり方で相互のために労働するやいなや、彼らの労働も社会的な形態を獲得するのである。〉 (47頁)

●注26

《フランス語版》

〈(26) 古代ゲルマン人のあいだでは、1 アルバンの土地の大きさは、1日の労働にしたがって計算され、そのため1日の仕事〈Tagewerk〉、男1人の仕事〈Mannewerk〉等 (jumale または jumalis, terra jumalis または diunalis) という大きさの名称が生じた。さらに、「一人が一日に耕せる〈journal〉」土地の面積という表現は、フランスの若干の地方ではいまなお存続している。〉 (47頁)

●第3パラグラフ

《フランス語版》ーパラグラフの構成がやや違っている

〈労働生産物が商品形態を帯びるやいなや、労働生産物の謎めいた性格はいったいどこから生ずるか？明らかにこの形態そのものからである。人間労働の同等性という性格は、労働生産物の価値という形態を獲得する。継続時間による個別的労働の測定は、労働生産物の価値量という形態を獲得する。最後に、生産者たちの労働の社会的性格がそのなかで確認されるところの彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を獲得する。〉 (47頁)

『資本論』を読んでみませんか

東日本大震災から一カ月が経過したが、福島第一原子力発電所の事故は、深刻の度を加えこそすれ、いまだに核の暴走を完全に防ぐ見通しさえ立てる事が出来ないでいる。放射性物質はすでに地球全体に振りまかれてしまい、原発周辺の土地や海洋の放射能汚染の被害は甚大であるが、さらに深刻な事態を迎えないとは誰も断言できないありさまである。



無残にも崩壊した福島第一原発

今回の原発事故は、直接には大地震と大津波という自然の猛威によるものであるが、しかしそれだけを理由にすることは出来ない。なぜなら、同じ第一原発でも5・6号機は同じように外部電源がすべて途絶えながらも、何とか非常用ディーゼル発電機が作動し原子炉を冷却する水の循環を回復することが出来たからである。また同じような地震と津波に晒された福島第二原発や東北電力の女川原発では何とか重大事故に至らずに済ますことが出来ているからである。

福島第一原発は60～70年代にかけて建設され、国内ではもっとも古い部類に入るのだという。だから安全設計もずさんであったというわけである。しかしそんなことが果たして理由になるだろうか。その後に建設された原発がより安全な設計指針にも基づいたものなら、そうした新しい安全指針によって、古いものを見直すのが当然ではないのか。しかし東京電力はそれを怠ってきたのである。

06年に新たに改訂された原発の耐震指針では津波対策も明記され、福島第一の中間報告を審査した09年の専門家会合では、今回のような大津波「貞観（ジョウガン）津波」（869年）を考慮するよう指摘されたが、結局、東電は「学術的な見解がまとまっていない」などと屁理屈を

述べ、最後まで最終報告を出さなかったと指摘されている（3月31日『朝日』）。結局、東電は「安全とコストを天秤にかけた」のである（4月9日『サンケイ』）。要するに儲けのために、コストのかかる安全対策を怠ってきたわけである。これが今回の深刻な事態を招いた最大の理由であろう。

人類がこれまで使いこなしてきた化石燃料に代わって、原子エネルギーによって高度な生産が必要とする膨大なエネルギー需要に応じることを可能にしたのは、資本主義的生産の偉大な成果の一つである。しかし原子力の技術自体は、まだまだ未成熟なものであり、膨大な放射性廃棄物を生み出す等の問題も抱えている。しかも今回の原発事故が示したように、危険極まりないこうした技術が、ただ利潤（儲け）だけを唯一の目的とも推進動機ともする資本主義的生産によって担われていることには、深刻な矛盾があるのである。

新しい技術は、新しい社会によるあたしい人たちによってこそ、十分に管理し、運営することが出来るとマルクスは次のように述べている。

〈われわれのあらゆる発明や進歩は、物質的な力に知的な生命をあたえる一方、人間の生命を愚鈍化して物質的な力に変える結果となるようにみえる。一方における現代の工業と科学、他方における現代の貧困と衰退のこの対立、現代の生産力と社会関係のこの対立は、明白な、圧倒的な、争う余地のない事実である。ある党派はこのことを嘆き悲しむかもしれない。また別の党派は、現代の衝突をとりのぞくために現代の技術をとりのぞきたいと望むかもしれない。あるいはまた、こうも顕著な工業の進歩を、それに劣らず顕著な政治の退歩で補う必要があると考える者もあるかもしれない。われわれとしては、これらすべての矛盾にたえず印を残しているすばしい妖精の姿を見ちがえることはない。社会の新しい力をうまくはたらかせるには、新しい人間がこの力を支配しさえすればよいことを、われわれは知っている。――そして、そういう新しい人間とは労働者である。〉（全集12巻4頁）

今回の事故は「人災」であると同時に、資本主義という生産のシステムそのものにも起因するものである。そうした問題を理解するためにも『資本論』の研究が是非とも必要である。貴方も、一緒に『資本論』を読んでみませんか。

第34回「『資本論』を読む会」の報告

◎桜も終わり

東日本大震災で被災された方々のことを思うと、花見どころではないだろう、と言われそうですが、しかし、花の下でのどんちゃん騒ぎならともかく、静かに花をめでることにまで目くじらを立てることもないかと思えます。

かくいう私も4月の第二日曜日に、コンビニで買った弁当を下げて、近くの公園まで花見に行ってきました。大勢の花見客は避けて、静かなところで弁当を広げましたが、桜の花には、ヒヨドリやメジロ、シジュウカラが花の蜜を吸いに集まり、コゲラが幹についた虫が何かをついばんでいました。また無数の蜜蜂が群がり、その羽音がフーンと響いていました。静かですが、それなりにぎやかな花見です。

第34回「『資本論』を読む会」が開催された堺市立南図書館の三階から見える桜はすでに半ば散って、部分的に葉桜になっていました。もう桜も終りです。窓から見える金剛山などの山並みは春陽に霞んでいました。

今回はピースさんも参加されたのですが、前回ピンチヒッターを引き受けて頂いた、JJ富村さんが引き続きレポートを担当して下さいました。しかし、今回は、たった一つ、第4パラグラフを進んだだけに終わりました。さっそくその報告を行います。

◎第3パラグラフへの補足

前回(第33回)は、第1～3パラグラフまで進みましたが、第3パラグラフの解説では準備不足から十分解説できずに終わっている部分がありましたので、それを補足的に紹介しておくことにします。まず第3パラグラフをもう一度、全文紹介しておきます。

[3] <(1)では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎のような性格は、どこから来るのか？(1)明らかに、この形態そのものからである。(1)人間労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の測定は、労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的諸規定がその中で発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。>

文節ごとの平易な解説はすでに前回の報告で済ませました。今回は、この第3パラグラフに対応する初本文を紹介したいと思います。というのは、その文章が次のように、大変長ものになっているからです。

<それでは、労働生産物が商品という形態をとるやいなや、労働生産物の謎めいた性格はどこから生ずるのか？(a)【人々が彼らの諸生産物を、これらの諸物が同種の人間労働の単なる物的外皮として認められているかぎりにおいて、価値として互いに関係させるならば、このことのうちには、同時にこのこととは逆に、彼らのいろいろな労働が、物的外皮のなかでは、同種の人間労働としてのみ認められる、ということが含まれている。彼らは、自分たちの諸生産物を価値として互いに関係させることによって、自分たちのいろいろな労働を人間労働として互いに関係させているのである。人的な関係が物的な形態で蔽い隠されている。したがって、価値の額には、価値がなんであるかは書かれていない。人々は、自分たちの諸生産物を商品として互いに関係させるためには、自分たちのいろいろな労働を、抽象的な、人間的な、労働に、等置することを強制されている。彼らはこのことを知っていないが、彼らは、物質的な物を抽象物である価値に還元することによって、このことを行なうのである。これこそが、彼らの頭脳の自然発生的な、したがって無意識的で本能的な作用であって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産によって彼らが置かれているところの諸関係とから、必然的には出てくるものである。第一に、彼らの関係は実践的に存在している。だがしかし、第二に、彼らは人間であるがゆえに、彼らの関係は、彼らにとっての関係として存在している。それが彼らにとって存在している仕方、あるいは、それが彼らの頭脳のなかに反射している仕方は、この関係の性質そのものから生まれてくる。のちになって彼らは、科学に頼って、彼ら自身の社会的生産物の秘密を見抜こうとする。なぜならば、物の価値としての規定は、言語と同じに、彼らの産物だからである。】(b)【ところで、さらに、価値量にかんして言えば、互いに独立して営まれていても、自然発生的な分業の諸肢体であるがゆえに全面的に互いに依存しあっているところの、私的諸労働は、次のことによって、それらの社会的に釣り合いのとれた大きさに、絶えず還元されている。すなわち、これらの労働の生産物の偶然的な、そして絶えず変動する交換割合のうちで、それらの生産物の生産のために社会的に必要な労働時間が、たとえばある人の頭上に家が崩れ落ちるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として暴力的に自己を貫徹する、ということによって(26)。だから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の目に見える諸運動の背後に隠されている秘密なのである。】生産者たち自身の社会的な運動が、彼らにとっては、諸物の運動という形態をとっているのであって、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御されているのである。(c)【ところで、最後に価値形態について言えば、この形態こそはまさに、私的労働者たちの社会的な諸関係を、したがって私的諸労働が社会的に規定されていることを、あらわにするのではなく、物的に蔽い隠している。私が、上着や長靴等々は、抽象的な、人間的な、労働の一般的な具象物としてのリンネルに、関係していると言えば、この表現の奇矯なことは明白である。ところが、上着や長靴等々の生産者たちが、これらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに関係させると、彼らにとっては、自分たちの私的諸労働の社会的な関係が、まさにこのような奇矯な形態で現われるのである。】(b)【(26)「周期的な革命によってのみ自己を貫徹しうる法則を、われわれはどう考えるべきか？それはまさに、関与者たちの無意識にもとづいている自然法則である。」(フリードリヒ・エンゲルス『国民経済学批判大綱』、103ページ。所収、『独仏年誌、アルノルト・ルーゲおよびカール・マルクス編、パリ、一八四九年』。)】>(江夏訳61-3頁、但し、【】やその前に記した(a)(b)(c)は引用者が付けた。)

つまりこの長い一文が第二版では上記のように極めて簡潔にまとめられていると考えられるのです。他方、マルクスは

この初本文の一部（上記の引用文中【】で囲い、(a)(b)(c)の記号を付した部分）を第2版のなかでは、少し文章を書き換えて、(a)の部分は第8パラグラフに、(b)の部分は第9パラグラフに、(c)の部分は第10パラグラフに、それぞれを、各パラグラフの文章の一部として取り入れています。それらがどのように書き換えられて、それぞれのパラグラフの文章として生かされているのか、ということについては、それぞれのパラグラフを考察するときにも必要な限りで問題にしたいと思います。

ここでは、この初本文について若干の検討を加えたいと思います。

現行版の第3パラグラフでは、第2パラグラフにおいて価値規定の内容として述べられた、(1)価値の実体としての抽象的人間労働の基礎にある、人間有機体の諸機能としての本質的に人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出、(2)価値の大きさとしての社会的に必要な人間労働の基礎にある生理学的な意味での人間労働力の支出の継続時間、(3)労働の社会的形態のそれぞれが、商品形態においては、どのような物的、対象的形態を受け取るかが説明されていました。すなわち(1)は労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を、(2)は労働生産物の価値の大きさという形態を、(3)は労働生産物の社会的関係という形態を、です。上記の初本文の(a)(b)(c)の各部分も、概ねこれら(1)(2)(3)に対応していると考えられます。つまり初本文の(a)(b)(c)は、現行版の第3パラグラフの(1)の内容をそれぞれに解説するものと考えられるわけです。

あるいはまた、この(a)(b)(c)の各部分が第二版の第8～10パラグラフに、若干文章を変えてではあるが、その一部として利用されているということは、この第二版の第8～10パラグラフは、第3パラグラフで価値規定の内容である三つの契機がそれぞれ商品形態において、どのような物的形態を受け取るかを簡潔に説明したものを、さらに展開して明らかにしているところでもある、という位置づけも分かってくることになります。そうした現行版の各パラグラフ間の関係を知る上で、この初本文は重要ではないかと思ったわけです（なお、この初本文の内容の解説については、それらが利用されている現行版の当該パラグラフの解説のなかで行う予定ですので、今回は、やらないでおきます）。

◎第4パラグラフについて

それでは、第34回「『資本論』を読む会」で学習した第4パラグラフの議論の紹介をしましょう。まず例によってパラグラフ全文を紹介し、各文節に(イ)、(ロ)、(ハ)・・・の記号を付して、それぞれを平易に解説していくことにします。

【4】(イ)したがって、商品形態の神秘性は、単に次のことにある。(ロ)すなわち、商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、したがってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。(ハ)この“入れ替わり”によって、労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物に、なる。(ニ)たとえば、物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的刺激としては現れないで、目の外部にある物の対象的形態として現れる。(ホ)しかし、視覚の場合には、外的対象である一つの物から、目というもう一つの物に、現実が光が投げられる。(ヘ)それは、物理的な物と物とのあいだの一つの物理的な関係である。(ト)これに対して、労働生産物の物理的性質およびそれから生じる物的諸関係とは絶対に何のかかわりもない。(チ)ここで人間にとって物と物との関係という幻影的形態をとるのは、人間そのものの一定の社会的関係にほかならない。(リ)だから、類例を見いだすためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げこまなければならない。(ス)ここでは、人間の頭脳の産物が、それ自身の生命を与えられて、相互のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ自立した姿態のように見える。(セ)商品世界では人間の手の生産物がそう見える。(ゼ)これを、私は物神崇拜と名づけるが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に附着し、したがって、商品生産と不可分なものである。)

(イ)、(ロ)したがって、商品形態の神秘性は、商品という形態が、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を彼らの労働生産物そのものの対象的性格として、すなわち物の社会的自然属性として反映させ、だからまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼ら自身の関係としてはではなく、彼らの外部に存在している諸対象物相互の社会的関係として反映させるということにあるのです。

このパラグラフの冒頭の「したがって」は、当然、その前のパラグラフ（第3パラグラフ）を受けたものであることは明らかです。つまり第2パラグラフで、商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じるのでも、価値規定の内容から生じるのでもなく、労働生産物が商品形態をとる場合の、この形態そのものから生じるものであること、すなわち価値規定の内容として述べられた三つの契機（①人間有機体の諸機能としての生理学的な意味での人間労働力の支出ということや、②その継続時間として労働の量、③あるいはその労働が互いに社会的な関係を持つということ）が、それぞれ①労働生産物の同等な価値対象性という形態、②労働生産物の価値の大きさという形態、③労働の社会的な関係が発現する生産者の関係が、労働生産物の社会的関係という形態を受け取るということから生じるのだと説明されたわけです。

そしてそうした説明を受けて、このパラグラフでは「したがって」とそれを受けているわけです。しかし一見すると、ここで述べられているのは、二つのことだけであるように思えます。つまり一つは商品という形態が、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を彼らの労働生産物の対象的性格として、物の社会的自然属性として反映させるということ、もう一つは、「したがってまた」総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということの二つです。

第2パラグラフや第3パラグラフでは、価値規定の内容として三つの契機が指摘され、それらが商品形態ではそれぞれどのような物的、対象的形態を受け取るかが指摘され、そこから商品形態の神秘的性格が出てくると言われていたのですが、ここでは二つのことしか言われていないように思えます。これはどうしてなのか、という疑問が、まず出されました。

これについては、色々議論されましたが、結論としては、このパラグラフの最初で言われていることは、第2、第3の各パラグラフで言及されていた三つの契機のどれかに対応するというより、それら三つのもの全体を前提して述べているものであろうということです。

だから最初に述べていること（商品形態の神秘性は、商品という形態が、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を彼らの労働生産物そのものの対象的性格として、すなわち物の社会的自然属性として反映させること）も、その次に述べていること（総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在している諸対象の社会的関係として反映

させるということ)も、両方とも先のパラグラフ(第3パラグラフ)全体を受けているのではないか、ということになりました。

では、この二つのことは同じことを述べているのでしょうか。それとも違ったことを述べているのでしょうか。

最初に述べていることは次のようなことではないでしょうか。

人間が互いのために労働するようになるや、彼らの労働は一つの社会的形態を受け取ります(これは第2パラグラフで指摘されました)。そして商品生産の社会も、その意味では、人間が互いのために労働しあう社会なのですが、しかし、労働生産物が商品形態をとる社会では、人間の労働の社会的性格は、人間自身の直接の社会的関係としては現われていません(人間自身が直接に社会的関係を結べないからこそ、その労働生産物は商品という形態をとるわけです)。人間は彼らの労働を自身の社会的関係を意識して支出するわけではないのです。だから、彼らの労働の社会的性格は、労働生産物そのものの対象的性格として、つまり労働生産物の価値性格として現われ、そうした価値対象性が、あたかも労働生産物が自然に持っている属性と同じようなものとして、人間には見えるような形で現われてくるということです。つまり労働生産物という物の属性のように見えているもの―「社会的自然属性」―は、実は人間の労働の社会的な性格が物の属性のように現われているものであり、人間自身が直接的にはないが、本質的には持っている、つまり社会の物質代謝を維持するために客観的必然性として貫くようなものとして持っている、社会的な関係そのものなのだとということです。

では次はどういうことでしょうか。

総労働というのは、個々別々の労働の総和として社会的には存在しています。それに対する生産者たちの社会的関係というのは、個々の生産者の労働が総労働のなかでどういう位置を占めるべきか、また社会の物質代謝を維持する上で、与えられた生産力のもとで、どれだけ支出されるべきかということではないでしょうか。そうしたことは、商品生産社会では、個々の商品の生産者には分かりません。彼らは彼らの生産した生産物を商品として交換に出して、初めてそこに支出した労働が社会的に適切なものであるかどうかを知るのです。だから彼らの総労働に対する社会的関係は、彼らの生産した生産物、つまり彼らの外部に存在する諸対象が商品として交換されて、社会的関係を取り結んだ結果として、事後的に分かるに過ぎないのです。つまり彼らは彼ら自身の総労働に対する社会的関係を彼らの外に存在している諸対象の関係からしか知ることができないのです。その結果、そうした物的諸対象の関係が、彼らを規制し、彼らがそれらに従属するような関係として、立ち現れてくるということではないでしょうか。

だから最初の部分は、労働生産物が商品形態をとることによって、労働の社会的性格が、労働生産物の価値性格として現われてくるのが中心に述べられ、その次の部分では、総労働に対する社会的関係は、労働生産物の価値の大きさとして、それらの交換関係のなかに貫くものとして、彼らを規制することが述べられているように思えます。

(A) この“入れ替わり”によって、つまり人間の社会的関係が、物の社会的自然属性や社会的関係として立ち現れてくるという“入れ替わり”によって、労働生産物は商品になるのです。すなわちその使用価値においては、感覚的に捉えられるような、感性的なものでありながら、しかし同時に、価値としては、確かにそれも商品そのものに存在しているように見えながら、しかし直接には目にも見えず、捉えどころのない、超感性的なものという両性を備えたものになるのです。

(B) 例えば、物が視神経に与える光の印象は、私たちに、視神経への主観的な刺激とは意識されず、目の外部にある物として現われるのと同じようなものです。

この例えは、明らかにその前で述べている、“入れ替わり”によって起こる現象を説明しているものですが、何がどのようになっっているのか今一つよく分かりません。

まず目の場合の“入れ替わり”というのは、視神経への刺激が、目の外にある物の像として現われるという“入れ替わり”のように思えます。つまりわれわれは、外にある物として意識しているが、しかし、実際にはそれはただわれわれの目が刺激されているだけだということでしょうか。これは3Dの映画を見たときに、あたかも目の前に存在しているように見えるものが、しかし手を伸ばしても、つかむことはできず、それはただ単に目と与える刺激が、そうしたものとしてわれわれに意識させているだけだということが分かる例を考えると、よく分かるのではないのでしょうか。しかしわれわれはそうしたものとしては意識せずに、あたかもわれわれの外に物があると意識するわけです。

商品形態の神秘性の場合、人間の社会的な関係が、物の社会的自然属性や関係として現われるということです。だから両者の対応関係を考えて、視神経への刺激が、すなわち人間の社会的関係に対応し、目の外にある物として意識させることが、物の社会的自然属性や関係として現われるということに対応しているように思えます。つまり物の社会的自然属性や関係として見えているもの、あるいはわれわれがそのように意識しているものは、実は、われわれ自身の社会的関係の反映したものだということです。しかしわれわれは、それらをわれわれ自身の社会的関係としては意識せずに、あたかもわれわれの外にある物のそのものに備わった自然属性であるかに、あるいは物そのものの社会的関係であるかに意識しているというわけです。

(C) (A) (B) しかし、視覚の場合には、外的対象である一つの物から、目というもう一つ物に、現実には光が投げかけられます。それは物理的な物と物とのあいだの一つの物理的な関係です。つまりわれわれは、外にある物として意識するのですが、そうした物が確かに外にはあり、そこから発した光が、われわれの目に投じるといった物理的な関係がそこにはあるわけです。

(D) これに対して、労働生産物の社会的自然属性やそれらの社会的関係として見えているものは、何かそうしたものとしての実体が労働生産物にあるかというところではないのです。それらは労働生産物の物理的な性質やそこから生じる物的な関係とは何の関わりもないのです。

(E) ここで人間に物の属性や物と物との関係として見えているものは、人間そのものの一定の社会的関係に他ならないのです。それは人間が直接互いに意識して取り結んでいる関係としては存在していませんが、しかし人間が彼らの社会の物質代謝を維持するためには必要な彼ら自身の社会的関係として、人間の社会の中に本質的なものとして存在しているのです。それが物と物との関係として現われ、その物と物との関係に規制される形で、結果として、人間の社会的関係が

現実化するような性格のものなのです。

(リ) だから、類例を見いだそうとすると、宗教世界の夢幻境に逃げ込まなければなりません。

(ク) 宗教世界では、人間の頭脳の産物が、神として、それ自身が生命を与えられた自立的存在であるかのように現われ、神々の関係や世界を作り上げ、またさまざまな戒律によって人間を規制するものとして現われてきます。

(ク) 商品世界では、人間の手の生産物がそのように見えるのです。つまり労働生産物の関係が、人間自身の行動や関係を規制するものとして立ち現れてくるわけです。

(ケ) これを、私は物神崇拜と名付けますが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に附着してきます。だからそれは商品生産と不可分なものなのです。

ところで、学習会では、第4パラグラフの後半部分(ニ)～(七)は、初版付録から採られていることが指摘されました。この初版付録の一文も、現行版のこれまでの展開を理解するうえで役立つと思いますので、紹介しておきましょう。それは〈等価形態の諸特性〉として、現行版では第一の特性から第三の特性まで説明されていますが、初版付録では、これにさらに〈(ハ)等価形態の第四の特性。商品形態の物神崇拜は、等価形態では、相対的価値形態においてよりも顕著である〉が加わっているのです。その前半部分からです。

〈諸労働生産物が、すなわち、上着やリンネルや小麦や鉄等々のような諸有用物が、価値であり一定の価値量であり一般的に商品であるということは、われわれの交易においてのみこれらの労働生産物に当然そなわっている属性であって、たとえば、重さがあるとか保温するとか栄養になるとかいう属性のように、天然にそなわっているものではない。ところが、われわれの交易の内部では、これらの物は商品として相互に関係しあっている。それらは価値であり、それらは価値の大きさとして計量可能であり、それらの共通な価値属性は、それらを互いに価値関係のなかに置いている。ところで、たとえば 20エレのリンネル＝1着の上着、あるいは、20エレのリンネルは1着の上着に値する、が表現しているのは、(1)これらの物の生産のために必要ならいろいろな種類の労働が、人間労働として同等であると認められているということ、(2)これらの物の生産に支出された労働量が、特定の社会的な法則にのっとって測られているということ、(3)裁断師と織り職とが、ある特定の社会的な生産関係のなかにはいっているということ、でしかない。この関係は、生産者たちのある特定の社会的な関係であって、この社会的な関係のなかで、彼らは、自分たちのいろいろな有用な労働種類を人間労働として等置しているのである。この関係は、同様に、そのなかで生産者たちが自分たちの労働の大きさを人間労働力の支出の持続時間によって測っているところの、生産者たちの特定の社会的関係でもある。ところが、われわれの交易の内部では、生産者たちにとっては、自分たち自身の労働のこれらの社会的な性格は、労働生産物そのものの、社会的な自然属性すなわち対象的な規定として、現われているし、人間労働の同等性は、労働生産物の価値属性として、現われているし、社会的に必要な労働時間による労働の尺度は、労働生産物の価値の大きさとして、現われているし、最後に、生産者たちの労働によって結ばれている彼らの社会的な関係は、これらの物の、すなわち労働生産物の、価値関係あるいは社会的な関係として、現われている。だからこそ、彼らは、労働生産物が、商品として、感覚的で超感覚的な、すなわち社会的な物として、現われているのである。【たとえば、ある物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主体的な刺激として表われるのではなく、目の外にある物の対象的な形態として現われるようなものである。ところが、物を視るときには、外的な対象という一方の物から、目という他方の物に、光が現実投げられている。それは、物理的な物同士のあいだの物理的な関係である。これに反して、労働生産物の商品形態および価値関係は、労働生産物の物理的な性質およびこの性質から生ずる物的な関係とは絶対に無関係である。それは、人間たち自身の特定な社会的関係でしかなく、この関係はこのばあい、彼らにとっては、諸物の関係という幻影的な形態を帯びている。だから、類似のものを見いだすためには、宗教的世界という霧のかかった領域のなかに逃げ場を求めざるをえない。ここでは、人間の頭の諸生産物が、それら自身の生命を授けられてそれら自身のあいだでも人間たちとのあいだでも関係を結ぶ独立の姿態として、現われている。商品世界では、人間の手の生産物がそうなのである。これを私は物神崇拜と呼ぶが、この物神崇拜は、労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に附着するし、したがって、商品生産とは不可分なのである。】(江夏訳893-4頁、ただし【】は引用者が付けた。)

ごらんの通り、初版付録の上記の引用文のうち【】で括った部分が、現行版に生かされているわけです。しかも、この初版付録の内容を検討してみると、〈20エレのリンネルは1着の上着に値する、が表現しているのは〉として、〈(1)……、(2)……、(3)……〉と述べていることは、表現は若干異なるものの、丁度、現行版の第二パラグラフで述べている価値規定の内容や、それが物的形態をとることによって神秘的性格を帯びると述べている第三パラグラフで述べている内容に合致しています。だから、その次に書かれている内容、すなわち〈この関係は、生産者たちのある特定の社会的な関係であって、この社会的な関係のなかで、彼らは、自分たちのいろいろな有用な労働種類を人間労働として等置している〉のである。この関係は、同様に、そのなかで生産者たちが自分たちの労働の大きさを人間労働力の支出の持続時間によって測っているところの、生産者たちの特定の社会的関係でもある〉と述べている内容は、丁度、第四パラグラフで〈商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、したがってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある〉に対応していることが分かるのです。

.....

【付属資料】

(ここでは本文で紹介したものは省きます)。

●第4パラグラフに関連したのも

《初版本文》

〈つまり、商品の神秘性は次のことから生じている。すなわち、私的生産者たちにとっては、

自分たちの私的労働の社会的な諸規定が、労働生産物の社会的な自然規定性として現われているということ、人々の社会的な生産諸関係が、諸物の対相互的および对人的な社会的諸関係として現われているということ。社会的総労働にたいする私的労働者たちの諸関係は、彼らに対立して対象化され、したがって、彼らにとっては、諸対象という形態で存在している。〉（江夏訳63-4頁）

《補足と改訂》

〈したがって、商品形態の神秘性は、単に次のことにある。すなわち、商品形態は、人間にたいして、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの社会的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、それゆえまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に実存する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。この入れ替わりによって、労働生産物は商品に、すなわち感性的に超感性的な物、または社会的な物に、なる。〉（小黑訳28-9頁）

《フランス語版》

〈このことが、これらの生産物がなぜ商品に、すなわち、火を見るより明らかでしかもそうではない物、あるいは社会的な物に変換するか、の理由なのである。かくして、視神経にたいするある物体からの光の印象は、この神経そのものの主体的な刺激としてではなく、眼の外部に存在するあるものの感知しうる形態として現われる。付言しなければならないが、視るという行為にあっては、外界のある物体から眼という他の物体にたいして光が実際に投影される。それは、物理的な諸物間の物理的な関係である。だが、労働生産物の価値形態や価値関係は、その物理的性質とは全くなんの関係もない。このぼあい人間にとって諸物相互の関係という幻想的な形態をとるものは、たんに、人間相互間の特定の社会的関係であるにすぎない。この現象に類似したものを見出すためには、それを宗教世界という曇った領域のうちにもとめざるをえない。そこでは人間の頭脳の産物が、それぞれ特殊な体躯を賦与されて人間との交渉やこれら産物相互間の交渉を、行なうところの独立的な存在、という外観を呈する。商品世界における人間の手の生産物についても、同じである。これが、労働生産物が商品として現われるやいなや労働生産物に付着する物神崇拜、すなわち、この生産様式に不可分の物神崇拜、と名づけることのできるものなのだ。〉（江夏他訳47-8頁）

『資本論』を読んでみませんか

オバマ米大統領は、5月始め、9・11、ニューヨーク・ツインビル爆破など同時多発テロを首謀し、国際テロ組織・アルカイダのリーダーであるウサマ・ビンラディンを殺害したと発表した

。



ウサマ・ビンラーディン

9・11以降、アメリカは対テロ戦争を標榜して、“大儀なき闘い”と酷評されたイラク戦争に突入し、アフガン侵略戦争を引き起し、ビンラディンを匿うタリバン政権を打倒した。そしてこの10年間追いつけた最大の標的であり、「対テロ戦争」の「最優先事項」である、ビンラディンの殺害という課題をなし遂げたのだ、とオバマは誇った。「正義はなされた」と。

しかしウサマ・ビンラディンは、帝国主義の超大国であるアメリカの、色々な意味での“産物”以外の何物でもなかった。

タリバンの指導者オマルが、旧ソ連のアフガン侵攻に抵抗するムジャヒディンの一員として育ち、そのムジャヒディンを資金的にも軍事的にも支えたのがパキスタンやサウジアラビアの諜報機関であり、その背後にあったのはアメリカであったことは周知のことである。

そしてアフガンで闘うムジャヒディンに、国際的に義勇兵を募り、訓練を施して送り出し、そ

れを支えたのがビンラディンであり、その国際的なネットワークが、後にアルカイダになったのである。

つまりこれらのほとんどはアメリカ自身の対旧ソ連への帝国主義的な争いと策謀のなかで培われてきたものなのである。

そしてイスラム原理主義に凝り固まったこうした戦闘組織は、その後、それぞれの出身地に帰ると、アフガンで培った戦争技術を、今度は、アメリカの中東支配をはじめとする帝国主義的な世界支配に対抗する闘いへと生かし始め、それが98年のタンザニア・ケニア米大使館同時爆破事件など一連のテロ事件を引き起し、そして9・11へと繋がっていったのである。

そして今やアメリカは、世界に張り巡らした自国の権益——経済的・金融的世界支配という超大国としての帝国主義的利害——を守るために、軍事的な支配の網の目を国際的に張りめぐらせる理由として、「対テロ戦争」を一つの口実として利用しているというわけである。

今回のビンラディンの殺害は、イスラム急進派によるアメリカ帝国主義に対するテロリズムによる“闘い”の一つの挫折であり、その限界を暴露するものであろう。

なぜなら、アメリカ帝国主義との闘いは、少数の陰謀組織が行うテロによってではなく、アメリカのそして世界の労働者階級によってこそなされなければならないし、なされるだろうからである。

労働者階級はテロ戦術といった絶望的な闘いではなく、資本に対する階級闘争をこそ発展させるのであり、そうした闘いによって国際的に結び合い、世界中から帝国主義の支配を一掃するまで闘い抜くのである。

マルクスは「革命的テロリズム」そのものは否定しなかったが、しかし、それは労働者の階級闘争の一環としてであり、労働者階級の革命政権が、反革命を打ち破るべき「剣」として認めたに過ぎない。次のように指摘している。

「コミュニンの組織がいったん全国的な規模で確立されたとき、おそらくその前途になお待っている災厄は、奴隷所者の散発的な反乱であろう。それらの反乱は、平和な進歩の仕事をしばらく中断させはするが、社会革命の手に剣を握らせることによって、かえって運動を促進するだけであろう。」（『フランスにおける内乱』第一草稿、全集17巻517頁）

また次のようにも述べている。

「反革命派の残忍さなどをみれば、諸国民は次のことを確信するようになるだろう。それは、古い社会の血なまぐさい死の苦しみと新しい社会の血にまみれた産みの苦しみを短くし、単純化し、一つにまとめる手段はたった一つしかないということ、そのたった一つの手段とは革命的テロリズムだということである。」（「ヴィーンにおける反革命の勝利」全集第5巻457-8頁）

だから、必要なのは資本の支配と闘う労働者の階級闘争を発展させることである。そしてそうした各国の労働者階級の闘いが国際的に結合することであろう。

そしてそのためにも、労働者階級自身が、現代の資本主義社会の仕組みを科学的に解明し、理解することを不可欠にしている。

是非、貴方も共に『資本論』を読んでみませんか？

第35回「『資本論』を読む会」の報告

◎改むるに憚ること勿れ

菅首相は、先の会見で浜岡原発全面停止要請を行い、中部電力はその要請を受け入れ、浜岡原発は停止しました。

この首相の要請について、米倉経団連会長は「唐突感否めない」と不満を述べ、各マスコミも一斉に「唐突だ」との批判の声を上げました。

しかし福島原発事故の経験が踏まえれば、首相の判断は当然ではないでしょうか。浜岡原発は予想される東海地震の震源域のど真ん中に位置し、日本の大動脈である東海道線や首都東京にも近く、それが福島原発と同じ事態に陥れば、その影響は測り知れないことは容易に想像できます。地震調査研究推進本部の評価によると、30年以内にマグニチュード8程度の地震が発生する可能性は87%と極めて高く、今日、明日にも大地震と大津波が生じても、決しておかしくはない状況だというわけですから。

「過ちでは改むるに憚ること勿れ」と言います。そもそもこんなところに原発を作ってしまったことが問題なのですが（電力資本と癒着して原子力政策を推し進めてきた歴代の自民党の責任です）、それを直ちに止める判断そのものは是だと思います。事故が起きてしまってからでは、取り返しがつかないのですから。もちろん、止めるだけでなく、廃炉にすべきでしょう。

福島の状況は一進一退を繰り返して、気にはなるところですが、私たちの「『資本論』を読む会」も、相変わらず細々とやっております。第35回は、再びピースさんが参加できないということで、JJ富村さんが、やはりピンチヒッターでレポートを担当してくれました。今回も、進んだのは第5・6の二つのパラグラフだけでした。その報告を行います。

◎商品の生産する労働の固有の社会的性格

最初は第5パラグラフです。いつものように、最初にパラグラフ全文を紹介し、文節ごとに記号を打ち、平易に書きおろす形で解説して行きます。

[5] <(1)このような、商品世界の呪物的性格は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである。>

(1) こうした商品世界の物神的な性格は、これまでの分析で明らかになったように、商品を生産する労働の特有の社会的性格から生じます。

ここで、〈このような、商品世界の物神的な性格は〉の〈このような〉というのは、その直前の第4パラグラフで〈これを私は呪物崇拜と呼ぶ〉と書かれていたのを受けていることは明らかです。それではその次の、〈前の分析がすでに示したように〉の〈前の分析〉とは、どの部分を指すのでしょうか。

これはやはり、〈前の分析〉、つまり商品の物神的性格はどこから来るのかを追求し、探り出してきた、第4節の第1パラグラフ以降の分析ということではないかということになりました。

では〈前の分析で〉〈商品を生産する労働に特有な社会的性格〉がどのように明らかにされ、そこから〈商品世界の・・・物神的性格〉がどのように〈生じ〉ることが明らかにされたのでしょうか。それをもう一度念のために確認するために振り返ってみることにしましょう。

もちろん、ここで言われている〈商品を生産する労働に特有な社会的性格〉については、続くパラグラフ以降でより詳しく説明されるのだろうという予測は立つのですが、少なくとも〈前の分析がすでに〉それをどのように〈示した〉のかを確認しておこうというわけです。

マルクスは、商品の物神的性格を、直接的には、まずはそれが感覚的でありながら、同時に超感覚的なものであるということにみているように思えます。そして感覚的に捉えられるものとしては、まず使用価値やそれを生産する労働の具体的性格等々については、何の神秘的なものはないこと、では商品の価値からその神秘的性格は来るのかと問うて、確かにそうなのですが、しかし価値と言っても価値規定の内容そのものには、やはり何の神秘性もないのだと指摘しています。そしてその結果、だから商品の神秘性は商品の形態そのものから来るのだと突き止めているわけです。

そして商品の形態においては、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのもの対象的性格として、それらの物があたかも自然に備わっている属性と同じようなものであるかに反映させ、総労働に対する生産者たちの社会的な関係を、そうした諸対象の社会的関係として反映させるということ、こうした「入れ替わり」が生じていることを明らかにし、それこそが商品が感覚的でありながら、同時に超感覚的なものとして、われわれにとって現われてくる原因なのだと言っていきます。つまり商品を生産する労働の社会的性格が、生産者自身の直接的な社会的関係としては現われず、労働生産物の社会的自然属性や社会的諸関係として現われるという、商品を生産する労働の特有な社会的性格から来ているのだ、ということだったように思えます。

◎翻訳が問題に

次は第6パラグラフです。

[6] <(1)およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。(ii)これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。(iii)生産者たちは自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。(iv)言い換えれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるのである。(v)それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現われるのである。(vi)すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接的な社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として、現われるのである。>

(1) そもそも使用対象が商品になるのは、それらの使用対象が互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかなりません。

これについては、第2節で次のように書かれていました。

いろいろな違った使用価値または商品体の総体のうちには、同様に多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体——社会的分業が現われている。社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない。古代インドの共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物が商品になるということはない。あるいはまた、もっと手近な例をとってみれば、どの工場でも労働は体系的に分割されてい

るが、この分割は、労働者たちが彼らの個別的生産物を交換することによって媒介されてはいない。ただ、独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである。）（全集版57頁、下線は引用者）

また「補足と改訂」では、もう少し詳しく、次のように書かれています。

〈そもそも使用対象が商品になるのは、使用対象が互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはかならず、それゆえ、それらのなかに表れている労働が互いに独立した私的労働によるものであるからにはかならない。〉（小黒訳下29頁）

(0) これらの私的諸労働の総体は社会的総労働なしています。

この部分も「補足と改訂」ではより詳しく次のように説明されています。

〈さまざまな私的労働は物質的には互いに独立しており、また物質的に互いに補いあっている。それは、一方がこの社会的欲望を充足し、他方があの社会的欲望を充足して、それゆえ、すべてが一緒になって社会的欲望の全体を充足する、という限りでにはかならず、言い替えれば、どの私的労働もその特殊な有用な性格によって、社会の総労働の一部分を遂行し、自然発生的社会的体制の、分業体制の一分肢をなすからにはかならない。まさに、部分労働者が特別な個々の社会的欲望だけを充足するがゆえに、私的労働者の労働はその私的労働者自身の多様な社会的欲望を充足しはしない。〉（同上）

また初版本本文は、次のような一文もあります。少し長いですが、参考のために紹介しておきましょう。

〈すべての使用価値がじっさいに商品であるのは、それらの使用価値が、互いに独立した私的諸労働の生産物であるからにはかならない。これらの私的労働は、私的労働とはいいながら、分業という自然発生的な体制の・独立しているとはいえ特殊な肢体として、素材的に互いに依存しあっている、というような私的労働なのだ。これらの私的労働がこのように社会的に関係しあっているのは、まさに、それらの差異に、それらの特殊な有用性に、依拠しているからである。だからこそ、これらは、質的に相異なる諸使用価値を生産している。そうでなければ、これらの使用価値は相互同士での商品にはならないであろう。他方、有用な品質がこのようにちがうだけでは、生産物はまだ商品にはならない。ある農民家族が自分自身の消費用上に着りリンネルや小麦を生産すれば、これらの物は、その家族には、その家族労働のそれぞれにちがった生産物として相対しているが、これらの物自身が相互に商品として相対しているわけではない。労働が直接的に社会的な労働、すなわち共同の労働であれば、諸生産物は、それらの生産者たちにとっては、共同生産物という直接的に社会的な性格を得るであろうが、相互同士での商品という性格を得ることはないであろう。とはいえ、われわれは、ここでは、諸商品のなかに含まれていて互いに独立している私的諸労働の社会的な形態が、なんであるかを、さらに立ち入って探究するには及ばない。この形態はすでに、商品の分析から明らかになっている。これらの私的労働の社会的な形態は、同等な労働としてのそれらの相互関係なのである。つまり、千差万別のいろいろな労働の同等性は、それらの不等性の描象においてのみ存在しうるのであるから、それらの社会的な形態は、人間労働一般としての、人間労働力の支出としての、たといすべての人間労働がそれらの内容や作業様式がどうであろうとじっさいにそうであるところのものとしての、それらの相互関係なのである。どんな社会的な労働形態にあっても、別々な個々人の労働はやはり、人間労働として互いに関係しあうが、ここでは、この関係そのものが、諸労働の独自に社会的な形態として認められている。だが、これらの私的労働はどれも、その自然形態では、抽象的な、人間的な、労働という、独自に社会的な形態をもたないが、このことはちょうど、商品がその現物形態では、単なる労働膠着物すなわち価値という社会的形態をもたない、のと同じである。〉（江夏訳54-5頁）

(0)、(1) 生産者たちは、自分たちの労働生産物を互いに交換することによって、はじめて社会的に接触するようになるのですから、彼らの私的諸労働の独自な社会的な性格も、この交換によってはじめて現われるのです。言いかえすと、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれるところの、あるいは労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの、諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として、すなわち社会的分業の一分肢であることが実証されるのです。

(8)、(9) そういうことから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的な結びつきは、その現実にあるがままに現われます。すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて直接結び合うような社会的な関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係として、あるいは諸物の社会的な諸関係として、現われるのです。

学習会ではこのパラグラフの最後の部分〔(8)、(9)〕の翻訳が問題になりました。というのは、J J 富村さんは岩波文庫版を亀仙人は新日本新書版をそれぞれ読んでいたのですが、その翻訳が少し違っており、微妙に意味も違っており、解釈できるように思えたからです。

まず岩波文庫版のこの部分の翻訳を紹介してみましょう。

〈したがって、生産者たちにとっては、彼らの私的労働の社会的連結は、あるがままのものとして現われる。すなわち、彼らの労働自身における人々の直接に社会的な諸関係としてでなく、むしろ人々の物的な諸関係として、また物の社会的な関係として現われるのである。〉(133頁)

この翻訳は全集版とほぼ同じです。ついでに全集版も紹介しておきましょう。

〈それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現われるのである。すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として、現われるのである。〉(99頁)

岩波版も全集版も、この部分は二つの文節に分けられています。ところが新日本新書版は、この部分は次のようになっているのです。

〈だから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的諸関係は、そのあるがままのものとして、すなわち、人と人とが彼らの労働そのものにおいて結ぶ直接的に社会的な諸関係としてではなく、むしろ、人と人との物的諸関係および物と物との社会的諸関係として現れるのである。〉(125頁)

つまり新日本新書版では一続きの文になっているのです。そして亀仙人はこの新書版にもとづいて、〈そのあるがままのものとして、すなわち、人と人とが彼らの労働そのものにおいて結ぶ直接的に社会的な諸関係としてではなく〉を一つの文として理解して、〈そのあるがままのもの〉というのを〈私的諸労働の社会的関係〉の「本来的なもの」というような意味として理解して、〈人と人とが彼らの労働そのものにおいて結ぶ直接的に社会的な諸関係〉のことを指しているとして理解したのでした。しかし、J J 富村さんは、そうではなく、〈そのあるがままのもの〉というのは、私的諸労働の社会的諸関係が、実際に現われるままのものとして、すなわち〈人々の物的な諸関係として、また物の社会的な関係として現われる〉ことを指しているのだと理解したというわけです。

さて、そこで、果たしてどちらの翻訳が原文を正しく訳しているのが問題になりました。あいにく、学習会当日は原文を持っていなかったため、直接、確認することができませんでした。原文は、次のようになっていました。

〈Den letzteren erscheinen daher die gesellschaftlichen Beziehungen ihrer Privatarbeiten als das, was sie sind, d.h. nicht als unmittelbar gesellschaftliche Verhältnisse der Personen in ihren Arbeiten selbst, sondern vielmehr als sachliche Verhältnisse der Personen und gesellschaftliche Verhältnisse der Sachen.〉(S.87)

ドイツ語原文をみる限りでは、これらは一続きの文になっており、その限りでは新日本新書版の訳の方が、より原文に忠実であるかに思えます。しかし、果たして亀仙人のような読み方は正しいのかどうかです。残念ながら、学習会の参加

者の中にはドイツ語に堪能な人はいないので、ドイツ語により詳しい友人に問い合わせたところ、亀仙人のような読み方は、ドイツ語としては読めないのではないかという返事でした。というわけで、岩波版や全集版の方が、訳としてはより正確であり、新日本新書版の場合は、亀仙人のような読み方の余地を残しているという点では、やや問題があるという結論に、どうやらなりそうようです。どなたかドイツ語に堪能な方のご意見をお伺いしたいと思います。

【付属資料】

●第5パラグラフ

《補足と改訂》

〔A〕

そこで、商品のこの物神的性格はどこから来るのか、とさらに問うとするならば、この秘密はすでにこれまでの分析で解決されている。商品の物神的性格は、商品を生産する労働の特殊な社会的性格から、また、それに照応した商品生産者の特有な社会的関係から発する。〉(29頁)

〔B〕

商品世界のこの物神的性格は、これまでの分析がすでに示したように、商品を生産する労働の独特な社会的性格から発する。〉(29頁)

●第6パラグラフ

《初版本文》

〈私的生産者たちは、自分たちの私的生産物である諸物に媒介されて、初めて社会的な接触にはいる。だから、彼らの労働の社会的な諸関係は、彼らの労働における人々の直接的に社会的な諸関係として、存在し現われているのではなくて、人々の物的な諸関係または諸物の社会的な諸関係として、存在し現われている。ところで、物を、社会的な物として、最初にかつ最も一般的に表わすことは、労働生産物が商品に転化することなのである。〉(63頁)

《補足と改訂》

〈そもそも使用対象が商品になるのは、使用対象が互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならず、それゆえ、それらのなかに表れている労働が互いに独立した私的労働によるものであるからにほかならない。さまざまな私的労働は物質的には互いに独立しており、また物質的に互いに補いあっている。それは、一方がこの社会的欲望を充足し、他方があの社会的欲望を充足して、それゆえ、すべてが一緒になって社会的欲望の全体を充足する、という限りではにほかならず、言い替えば、どの私的労働もその特殊な有用な性格によって、社会の総労働の一部分を遂行し、自然発生的社会的体制の、分業体制の一分肢をなすからにほかならない。まさに、部分労働者が特別な個々の社会的欲望だけを充足するがゆえに、私的労働者の労働はその私的労働者自身の多様な社会的欲望を充足しはしない。〉

〈〔B1〕

そもそも使用対象が商品になるのは、使用対象が互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体が社会的総労働をなす。私的諸労働は物質的に互いに独立しておりそして互いに補いあっている。それは、その私的諸労働が、あるものはこの、そして他のものはあの特殊な社会的欲望を充足する特殊な産業部門に属しているかざりにおいてであり、言い替えば、すべての私的労働がその特殊な有用な性格によって社会的総労働の一部分を遂行し、それゆえ、検査的分業という自然発生的体制の分肢をなすかざりにおいてである。まさに、私的生産者が社会的総労働の特別な一部分しか遂行しないがゆえに、そしてそれゆえ、その生産的行為が一定の社会的欲望しか充足しないがゆえに、私的労働者の労働は彼自身の多様な欲望を充足しはしない。

〔B2〕

そもそも使用対象が商品になるのは、使用対象が互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体が社会的総労働をなす。第三者たちは彼らの労働生産物の交換を通してはじめて社会的接触にはいるから、彼らの私的諸労働の独特な社会的性格もまたこの交換の内部ではじめて現われる。あるいは、私的諸労働は、交換によって労働生産物が、そしてまた労働生産物を媒介として生産者たちが、結ばれる諸関連を通して、事実上はじめて、社会的総労働の諸分肢として自己を発現する。だから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的諸関連は、そのあるがままのものとして、すなわち、人と人との彼らの労働のものにおいて結ぶ直接的に社会的な諸関係としてではなく、むしろ、人と人との物的諸関係および物と物との社会的諸関係として現れるのである。〉(小黒訳下29-30頁)

《フランス語版》

〈一般的に言うと、有用物が商品になるのは、それらの有用物が、相互に独立して営まれる私的労働の生産物であるからにほかならない。これら私的労働の総体が、社会的労働を形成する。生産者たちは、彼らの生産物の交換によってはじめて社会的に接触するのであるから、彼らの私的労働の社会的性格が最初に確認されるのも、この交換の限界内に限られる。あるいは、私的労働は実際には、次の関係によってはじめて社会的分業として現われる。すなわち、交換が労働生産物のあいだに、そして間接には生産者たちのあいだにうちたてられるという関係によって、この結果、生産者たちには、自分たちの私的労働の関係が、あるがままのものとして、すなわち、

自分たちの労働そのものにおける人と人の直接的な社会的関係としてではなくむしろ物と物との社会的関係として、現われることになる。〉（江夏他訳48頁）

『資本論』を読んでみませんか

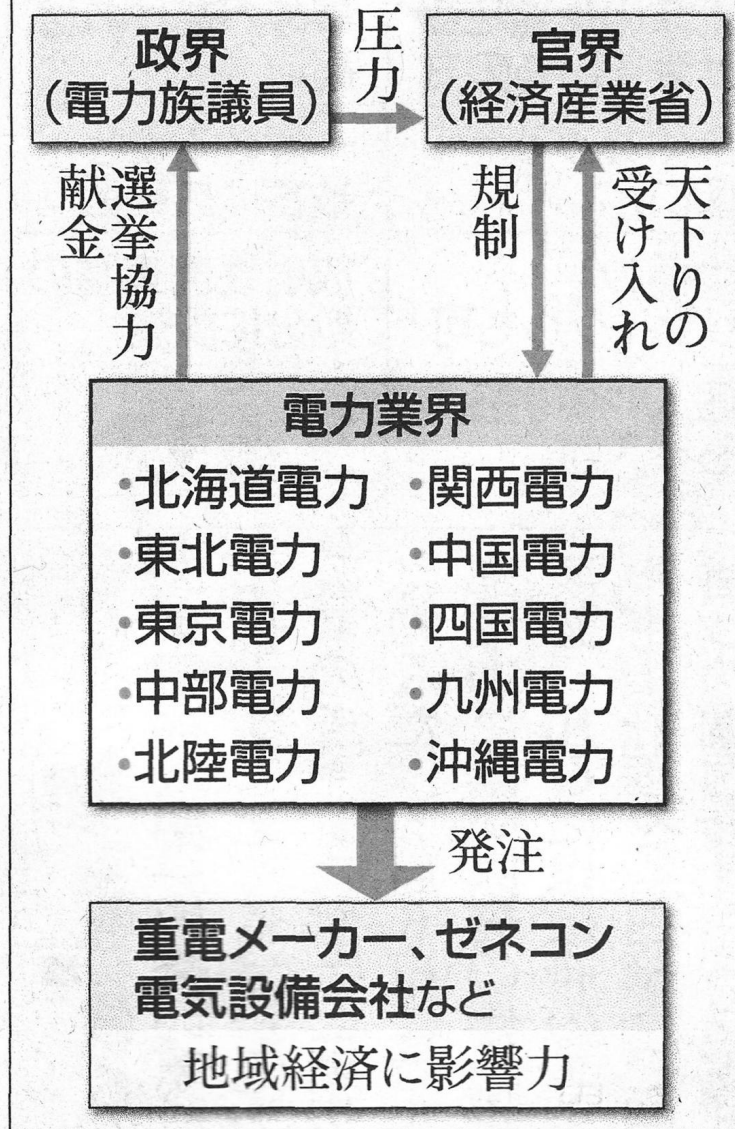
「菅降ろし」の声がかまびすしい。

「菅は無能だ」、「とにかく菅さえ辞めさせれば、うまく行く」等々。

今では野党の自民・公明だけではなく、政権与党の民主党の中枢や閣僚の中からも「菅退陣」が叫ばれる有り様である。

しかし6月27日の『朝日新聞』は、こうした策動の震源が「電力権益」の温存を謀る勢力にあることを暴露した。彼らは福島事故にも何の反省もなく、ただ自らの権益維持のために、何があっても原発推進と現体制の維持に固執するのである。だから菅首相が浜岡を止め、原発増設を前提にしたエネルギー政策のゼロベースの見直しを掲げ、発・送電分離に言及したとたんに、「菅降ろし」の激しさが増したのだという。そして電力資本に取り込まれているのは、野党だけではなく、与党の中にも多数いるというわけである。

電力業界を取り巻く構図



菅首相は、6月28日の民主党両院議員総会で、再生エネルギー法案、第2次補正予算案、特例公債法案の成立が退陣の条件と改めて表明した。そのうえで「エネルギー政策をどのような方向に持って行くかは次期国政選挙でも最大の争点になる」と、「脱原発」を掲げた解散・総選挙をチラつかせて、これらの勢力を牽制し、何とか政権の延命をと策謀を逞しくしているようにも思える。

そして今や菅首相は、「脱原発」派のシンボルとさえなったかである。「鼻をつまみ、断固として菅首相を支持する」（矢作俊彦）と言い出すものさえ出てきた。

イタリアの国民投票では原発反対票が94.53%となり、ベルルスコーニ首相も、「原発にさよならと言わねばならない」と敗北を認めた。ドイツ連邦議会（下院）も、6月30日、「脱原発」法案を圧倒的多数で可決した、等々。今や原発を忌避する声は、日本のみか世界中に溢れているように思える。

しかし肝心なことが忘れられている。

原子力発電も、人類がその社会的物質代謝を豊かにするために、膨大な自然力を生産に貢献させ、生産過程を科学の技術学的応用に転化させてきた一結果であり、その点では、他のどんな技術とも何の違いもないということである。

あるいは、問題は、資本主義的生産は、そうした過程を歴史的に驚異的な形で促進させるが、しかし、それはあくまでも一つの転倒した形態においてでしかないということである。

資本主義的生産においては、すべての生産力は「資本の生産力」として現れる。すなわち利潤という抽象的富の獲得のために絶対的に奉仕させられる。

資本主義的生産というのは、そもそも人間の社会的物質代謝を直接目的にした生産ではないのである。それが維持されているのは、あるいは維持されてきたのは、たださまざまな攪乱と偶然の一結果でしかないのだ。今回の原発事故も、その意味では、そうした攪乱の一つともいえるのである。

マルクスは、資本主義的生産は、生命の自然法則によって命ぜられた社会的物質代謝の関連のうちに回復できない裂け目を生じさせ、すべての富の源泉である自然と労働者を同時に破壊するが、しかしそのことによってのみ資本主義的生産は社会的生産過程の技術やその統合を発展させ、将来の社会の物質的基礎を形成しうると指摘している。

だから問われているのは、資本主義的生産様式そのものを克服して、将来の社会の形成のために闘うことなのである。それを誰も問おうとはしない。

しかし、それを実現してこそ、人類はその社会的物質代謝を合理的に統制し、その一契機として、原子力エネルギーの合理的な統御と管理をも可能にするようになるのである。問われているのは、ある特定の技術そのものの是非ではなく、この限界のある特定の歴史的社会的形態そのものなのである。

「社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。」（『資本論』第3巻、全集25巻b 1051頁）

貴方もぜひ、『資本論』と一緒に読んでみませんか？

第36回「『資本論』を読む会」の報告

◎新参加者！

7月17日に開催された第36回「『資本論』を読む会」に新しい人が参加されました。

2008年にこの読書会を始めてすでに3年の歳月を数えますが、これまでは、参加者が櫛の歯が抜けるように減ることはあっても、増えたことは無かったです。それがとうとう新参加者が現れたのです。

新参加者は私たちと同年代の方ですが、20代の若いころに『資本論』を読んだことがあるようでした。彼は友人からこの読書会のことを聞き、堺市立南図書館に電話して、連絡先を聞いて、連絡してきてくれたのです。

彼は3年もやっているから、もう第2巻に入っていると思っていた、と言っていました、それがまだ第1章も終わっていないと聞いて、少し呆れたようです。それほど私たちの「『資本論』を読む会」は、とにかく『資本論』を、ワンパラグラフずつ、徹底的に読み込み、議論を深めながら進み、時には一つのパラグラフの議論だけで終わるという場合も少なくありませんでした。マルクスがそこで何を論じているのかをあらゆる方面から深く考え抜き、解明していくことに重点をおいてきた学習会なのです。

果たして新参加者は、こうした私たちの学習会のあり方に理解を示され、引き続き参加されるでしょうか。それはわかりませんが、期待したいと思います。

新参加者を迎えたものの、学習会そのものはいつものように行われ、結局、今回も進んだのは第7と第8の二つのパラグラフのみでした。さっそく、その報告を行いましょ。

◎第7パラグラフ全体の構成が問題に

今回、学習した第7パラグラフの、まず本文を紹介し、それを文節ごとに記号を付して、平易に解読したあと、議論を紹介したいと思います。

【7】〈(1)労働生産物は、それらの交換の内部で、はじめてそれらのたがいに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。(0)有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換を求めて生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がりと重要性とを獲得した時である。(0)この瞬間から、生産者たちの私的諸労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取る。(1)私的諸労働は、一面では、一定の有用労働として一定の社会的欲求を満たさなければならない。そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の諸分枝として実証されなければならない。(2)私的諸労働は、他面では、特殊な有用私的労働のどれもが、別の種類の有用私的労働のどれとも交換され得るものであり、したがって、これらと等しいものとして通用する限りでのみ、それら自身の生産者たちの多様な欲求を満たす。(3)たがいに“まったく”異なる諸労働の同等性は、ただ、現実の不等性の捨象、諸労働が人間労働力の支出として、抽象的人間労働として、もっている共通な性格への還元においてしか、成り立たない。(4)私的生産者たちの頭脳は、彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格を、実際の交易、生産物交換において現れる諸形態でのみ反映する。――(5)すなわち、彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格を、労働生産物が有用でなければならないという、しかも他人にとって有用でなければならないという形態で反映し、種類を異にする労働の同等性という社会的性格を、労働生産物というこれらの物質的に異なる諸物の共通な価値性格という形態で反映するのである。〉

(1)労働生産物は、互いに交換されるようになると、その交換の内部で、はじめてそれぞれが互いに異なる使用価値というそれらの具体的な対象性とは分離された形で、社会的に同等な、価値という対象性を受け取ります。

(0)有用物と価値物という、この二つの対象性に労働生産物が分裂する事態が始めて生じてくるのは、有用物が交換を求めて生産されるまでに、だからさまざまなものが生産される場合に、それらの価値性格がすでに考慮されるまでに、労働生産物の交換が十分な広がり、重要性とを獲得した時です。

(0)この瞬間から、生産者たちの私的諸労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取ります。

(1)私的諸労働は、一面では、一定の有用労働として一定の社会的欲望、つまり他人の欲望を満たさなければならない。そしてそうすることによって、その労働が社会の総労働の自然発生的分業の体制の諸分枝であることが実証されなければならないのです。

このことはすでに第1節の最後でも次のように述べられていました。

〈ある物は、商品ではなくても、有用であり人間労働の生産物であることがありうる。自分の生産物によって自分自身の欲望を満足させる人は、使用価値をつくるが、商品をつくらぬ。商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけではなく、他人のための使用価値、社会的使用価値を生産しなければならない。〔しかも、ただ単に他人のためというだけではない。中世の農民は領主のために年貢の穀物を生産し、坊主のために十分の一税の穀物を生産した。しかし、年貢の穀物も十分の一税の穀物も、他人のために生産されたということによっては、商品にはならなかった。商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役だつ他人の手に交換によって移されなければならない(11a)。〕最後に、どんな物も、使用対象であることなしには、価値ではありえない。物が無用であれば、それに含まれている労働も無用であり、労働のなかにはいらず、したがって価値をも形成しないのである。(11a) 第四版への注。――括弧内の文句を私が書き入れたのは、この文句がないために、マルクスにあっては生産者以外の人によって消費される生産物はなんでも商品とみなされるかのような誤解が非常にしばしば生まれたからである。――F・エンゲルス〕(全集版55-6頁)

(g) 他面では、私的諸労働は、それらの特殊な有用私的労働のどれもが、別の種類の有用私的労働のどれとも交換され得るものであり、したがって、それらが等しいものとして通用する限りでのみ、交換され、よってまた生産者たちの多様な欲求を満たすことができます。

(h) 互いにまったく違った諸労働が同等のものとして通用するということは、それらの違いが捨象されること、すなわち諸労働が、人間労働力の支出として、抽象的人間労働として、それらがもっている共通な性格に還元されることなくしてはあり得ません。

(i) 私的生産者たちの頭脳には、彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格は、実際の交易、生産物交換において現れる諸形態でのみ反映します。

(f) すなわち、一面では、彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格は、彼らの労働生産物が有用でなければならないという、しかも他人にとって有用でなければならないという形態で反映し、他面では、種類を異にする労働の同等性という社会的性格は、労働生産物というこれらの物質的に異なる諸物の共通な価値性格という形態で反映するのです。

さて最初の議論は、この第7パラグラフ全体の構成を如何に理解するかということでした。というのは、J J 富村さんが準備してくれたレジュメでは、全体を (1)~ (4)の番号を付して分けられていたからです。しかし、これでは全体の構成がよく分からないのではないか、という意見が出されました。そして最終的には、このパラグラフ全体は大きくは三つに分けられ、主に三つのことが言われている、ということになりました。すなわち次のように分けることが妥当だろうということでした。

(1) まず、最初の部分は、文節の記号では、(f)、(g)にあたり、ここでは労働生産物が、価値対象性を受け取るのは、交換の内部であり、しかも、その交換のどのような発展段階においてであるかが述べられている、ということでした。

(2) 次は、文節記号では(h)、(i)、(j)、(k)の部分で、ここではそうした発展段階に照応して、私的諸労働が二重の社会的性格を実際に受け取ることが指摘されています。

だからこの部分は、そうした二重の社会的性格に対応して、「一面では」、「他面では」という形で説明されていることも確認されました。

またレジュメでは、(j)の最後にある「それら自身の生産者たちの多様な欲求を満たす」というのが、二重の社会的性格を得ることの両方にかかっているかに説明されていましたが、これもそうではなく、社会的性格の「他面」との関連で述べられているということになりました。

また(h)の文節が別の一つの項目として (3)の番号が付されていましたが、しかし(h)は社会的性格の「他面」の説明から言いいうることとして述べられていることも確認されました。

(3) そして最後の部分は、文節記号では(i)、(j)の部分ですが、ここではそうした私的諸労働の社会的性格が、私的生産者たちの頭脳にはどのように反映するかについて述べられているということになりました。

そして (1)では労働生産物の交換のどのような発展段階で、労働生産物は有用物と価値物とに分裂するかが指摘され、(2)ではそうした現実を私的諸労働の二重の社会的性格にまで分析を深めて根拠付け、(3)では、それらが生産者の頭脳にどのように反映するかを明らかにして、(1)でわれわれが労働生産物において確認したことが、実際には、私的諸労働の二重の社会的性格が、生産者の頭脳に反映したものであることが確認されるような構造になっていることも指摘されました。

◎第7パラグラフの冒頭の「価値物」を如何に理解すべきか？

次に問題になったのは、(i)の文節に出てくる「価値物」の理解についてでした。レポーターは、恐らく以前の議論を踏まえて、ここに出てくる「価値物」は、「貨幣」ではないし、そう理解すべきではない、と報告のなかで述べたのでした。レポーターのそうした主張に対しては、大きな異論は出されなかったのですが、マルクスは、ここでは〈それらのたがいに感性的に異なる使用対象性から分離された〉とか、〈有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂〉と述べているように、物的対象が二つの属性に「分離」するとか、「分裂」すると述べており、この場合は文字通りそのように理解すべきで、それまでの具体的な使用対象性としての有用物とは物的に異なる、交換手段という新たな対象性を受け取った物的存在について述べているのではないかと（それが「価値物」ではないか）、という意見が出されました。ただこの問題については、それ以上の議論にはなりません。というのは、一つは、以前の議論というものについて、その場では、ハッキリとは確認できず、それを踏まえた厳密な議論ができなかったからですが、他方では、「貨幣ではないし、そうしたものとして理解すべきではない」というレポーターの主張に対して、確かにここではまだ「貨幣」が直接には問題になっていないことは明らかのように思えたからでした。しかし、以前の解釈に一定の疑義が提起されたわけですから、やはりそれは厳密に検証されなければならないのではないかと考えます。だからここでは、以前の議論にも遡って、マルクスがこのパラグラフで「価値物」と述べているものを如何に理解すべきかについて、少し詳しく検討してみたいと思います。まず、以前の議論とはどういうものだったのかを振り返ることから始めたいと思います。

「価値物」については、第3節「価値形態または交換価値」のさまざまなところで問題にし、議論を紹介してきました（詳しくは第15回報告 [その2]、第16回報告 [その1]、第17回報告 [その3]、第18回報告 [その3] 等を参照）。その主な論点は、大谷氏が「価値物」を「価値対象性が与えられているもの」、あるいは「価値対象性を持ったもの」と説明しているのに対して、それではマルクスが上着がリンネルの等価物として「価値物」として通用することによって、リンネルの価値が上着で表現されると述べていることの説明が出来ない。大谷氏の「価値物」の説明では、リンネルの価値が上着によって目に見えるように顕れているものとして捉えたことにはならない、だからそれではリンネルの価値の表現を説明できないと批判をし、「価値物」というのは、「価値の目に見える存在形態」と捉えるべきだと主張してきたのでした。例えば第16回報告（その1）では、第3節の「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」の「2 相対的価値形態」の「a 相対的価値形態の内実」の第3パラグラフに出てくる「価値物」についての議論が次のように紹介されています。

【しかし、実は、大谷氏の説明ではリンネルの価値の表現がなされていないのです。例えば、前回紹介した大谷氏の

主張をもう一度紹介してみましょう。

〈労働生産物が商品になると、それは価値対象性を与えられているもの、すなわち価値物となる。しかし、ある商品が価値物であること、それが価値対象性をもったものであることは、その商品体そのものからはつかむことができない。商品は他商品を価値物として自分に等置する。この関係のなかではその他商品は価値物として意義をもつ、通用する。またそれによって、この他商品を価値物として自己に等置した商品そのものも価値物であることが表現されることになる。〉（『貨幣論』98頁）このように大谷氏は価値表現を説明していますが、これでは価値は何一つ表現されたことにはなりません。「表現される」ということは、それが目に見えるようになるということです。そしてそのためには、価値が何らかの形ある物として現われる必要があるのです。しかし大谷氏の説明はそうしたものとはなっていません。というのは、大谷氏は「価値物」＝「価値対象性を持ったもの」と説明するからです。例えば、この言葉を大谷氏の説明文に出してくる「価値物」の代わりに挿入すれば、それが分かります。

〈商品は他商品を〔価値対象性を持ったもの〕として自分に等置する。この関係のなかではその他商品は〔価値対象性を持ったもの〕として意義をもつ、通用する。またそれによって、この他商品を〔価値対象性を持ったもの〕として自己に等置した商品そのものも〔価値対象性を持ったもの〕であることが表現されることになる。〉

このように書き換えてみると、何一つ価値が表現されていないことが分かります。というのは〔価値対象性を持ったもの〕として意義をもつ、通用する〉と言っても、それだけでは、価値が目に見えるものとして、すなわち形ある物として現われていることにはならないからです。形あるものと顕れていないなら、それは表現されたとは言えません。マルクスは《上着は、価値の存在形態として、価値物として、通用する》と述べています。《価値の存在形態》というのは、本来は「まぼろし」のような対象性しかもたない価値が、形ある物として存在するということなのです。それが《価値物》の意味です。だからそうした「価値物」の理解に立たない大谷説では、価値は表現されているとは言えないのです。】

ただ大谷氏が『貨幣論』（久留間敏造著、大月書店、1979.12.24）で自説を補強するために、『資本論』から5つの引用文を紹介しているのですが（同著96頁）、その最後に紹介している引用文が、今回、まさに問題になっている第7パラグラフの冒頭の部分なのです。そしてこの引用文について、果たしてそれが大谷説を補強するようなものなのかについて、批判的検討を加えたのが、第18回の報告（その3）でした。その内容も少し紹介しておきましょう。

【大谷氏は、『資本論』からの引用文を紹介する前にまず久留間敏造氏の『価値形態論と交換過程論』からの一文を長く引用したあと、次のように問題を提起しています（傍点は下線に変換）。

〈いまの引用では、等価形態に置かれる上着は、この形態に置かれたときにはじめて「価値物」になる、「価値物」としての形態規定性を与えられることになっています。ここでの「価値物」の意味は、次のところにはっきりと示されています、――「ではどのようにして上衣は――その自然形態そのものが――そのまま価値をあらわすものに、すなわち価値物になるのか……」。また、繰り返して、「抽象的人間的労働の体化物、すなわち価値物」と言われています。「価値物」がこのようなものであるとすると、それはもちろん等価形態に立つ商品についてのみ言いうことで、相対的価値形態にある商品、たとえばリンネルはつねに「価値物」ではないということになります。じっさい先生は、上着のほうについてのみ「価値物」と言っておられます。ところが、マルクスの場合には、「価値物（Wertding）」という言葉が先生が使われているのとは違った意味で使われているように思われてならない。『資本論』の第1章からその用例を示すと、次のようなものがあります。〉（『貨幣論』96頁）

そして大谷氏は『資本論』から5つの引用文を紹介しているわけです。しかしそのうちの2～4の引用文は、すでになれわれがこの「a 相対的価値形態の内実」を詳細に検討するなかで明らかにしてきたものです（第3、第5、第10の各パラグラフに出てくる「価値物」が引用されている）。だからわれわれは大谷氏が最初と最後に引用紹介しているものだけをここでは検討すれば良いと思います。それらが、大谷氏によると、「価値物」は上着だけでなく、リンネルについても言いうる用例であり、〈「価値物」とは価値対象性をもつもの〉という概念を示すものだというわけです。果たしてそうなのか、マルクスはそうした意味で「価値物」という用語を使っているのか、それをこれからその二つの引用文について検討してみようというわけです。それは次のようなものです。

まず大谷氏が最初に引用しているのは、前にも紹介しましたが、次のような第3節の前文に出てくる文章です。

【中略……この最初の引用文の検討については省略しますが、もし興味のある方は第18回報告を参照してください】

次に大谷氏が最後に引用しているのは、「第4節 商品の物神的性格とその秘密」のなかにある次の一文です。〔つまり、今回、われわれが学習した第7パラグラフの冒頭部分です〕。

《労働生産物は、それらの交換の内部で、はじめてそれらのたがいに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換を目あてに生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がりと重要性とを獲得した時である。》（全集版99頁）

この一文は、一見すると、如何にも大谷氏らの「価値物」理解を正当化するように思えます。マルクスは《感性的に異なる使用対象性》と《社会的に同等な、価値対象性》を上げ、それを言い換える形で《有用物と価値物》を挙げているのですから、この場合の《価値物》は《価値対象性を受け取る》こと、つまり「価値対象性を持つもの」という大谷氏の主張を根拠づけているように見えるわけです。

しかしこの文章を良く吟味してみるとそうではありません。例えば、マルクスは《それらの交換の内部で》と書いているように、ここで問題になっているのは諸物なのです。《それらが互いに感性的に異なる使用価値から分離》されて、《社会的に同等な、価値対象性を受け取る》と述べています。ここで《受け取る》のは《それら》の《諸物》であり、《それら》の《諸物》が《それらの互いに感性的に異なる使用価値から分離》されて、つまりそれらの諸使用価値と区別された存在として、《社会的に同等な、価値対象性を受け取る》と述べているのですから、この《社会的に同等な、価値対象性》というのは、ある特定の労働生産物がそうした一般的な等価物として分離されてくる事態をマルクスは述べていると考えるべきなのです。この文章は、すでに貨幣形態まで説明が終わったあとに展開されている、第4節の文章であることも考える必要があります。

また上記の引用文は、次の文章とまったく同じ内容を述べていると考えることが出来ます。

《交換の不断の反復は、交換一つの規則的な社会的過程にする。したがって、時の経過と共に、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換めあてに生産されざるをえなくなる。この瞬間から、一面では、直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する。諸物の使用価値は、諸物の交換価値から分離する。》（全集版23a118頁）

これは「第2章 交換過程」の中の一文ですが、ここで注意が必要なのは、《諸物の使用価値》が分離するのは、《諸物の交換価値》からだということです。これは先の第4節の引用文のなかにある《有用物と価値物》に該当すると考えてよいでしょう。つまりこの二つの引用文から類推するに、マルクスが先の第4節の引用文で述べている《価値物》は《交換価値》を意味していると考えられるのです。いうまでもなく、《交換価値》というのは、価値が目に見える形で現象している形態にあるものです。すなわち、上記の引用文が述べているのは、諸物の使用価値が、価値の現象形態としての《交換価値》から分離するということです。だから使用価値が分離するのは、ただ単に「価値対象性を持つもの」というような価値を内在的に持っている物からではなく、価値が現象して目に見えている物からなのです。またそれを言い換えて《直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する》とも述べています。《交換のための諸物の有用性》というのは、諸物の使用価値がただ交換のためにだけに使われるということです。つまり等価物に置かれた商品の使用価値が価値を表すためにだけに使われるということなのです。だからこれもやはり価値が目に見える形で現われた物を意味しているのです。

だからもう一度、最初の引用文に戻ると、マルクスが《有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂》と述べている《価値物》というのは、単に「価値対象性を持つもの」といった意味ではなく、「価値が目に見える物という形で」現われているもの、つまり「一般的な等価物」、あるいは「貨幣」を意味しているのです。そのように理解すべきものなのです。かくして大谷氏の主張にはまったく根拠がないことがこの引用文でも論証されるのです。】

このようにここでは結論的に【マルクスが《有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂》と述べている《価値物》というのは、単に「価値対象性を持つもの」といった意味ではなく、「価値が目に見える物という形で」現われているもの、つまり「一般的な等価物」、あるいは「貨幣」を意味しているのです】と述べています。レポーターは、恐らくこの以前の解釈を意識して、この第7パラグラフの冒頭でマルクスが述べている「価値物」は「貨幣ではないし、そうしたものとして理解すべきではない」と述べたのだと思います。そしてレポーターが指摘したように、この以前の考察には、一定の行き過ぎと限界があったように思えます。

まず第7パラグラフの冒頭部分では、まだ貨幣が直接問題になっているわけではないのですから、「価値物」をく「貨幣」を意味している）などというのは明らかに行き過ぎなのです。また以前の考察は、第3節の価値形態の分析の中の考察なので、やむを得ない面もありますが、しかし今回の第7パラグラフは第4節の物象論の中の一文であるということが十分意識されていない嫌いがあります。この第7パラグラフでは、マルクスは一貫して「労働生産物」の交換について述べていますが、決して「商品」の交換について述べているわけではありません。第3節では「商品」はいわば考察の前提でした。諸商品の交換関係を前提した上で、そこに潜む商品の価値の表現形態を分析し明らかにすることが課題だったのです。しかし第4節ではそうではないのです。以前、第4節の課題について次のように指摘したことがあります。

【しかし、それでは第4節はどのような意義を持っているのでしょうか。これは次回以降の学習の対象であり、次回以降の課題になりますが、久留間氏の諸説を検討したついでに、少し先回りして簡単に論じておきましょう。

確かに第3節までで商品とは何かは明らかになったのですが、しかしそれだけでは商品の何たるかが十全に解明されたとは言えないのです。というのは商品というのは、歴史的にはどういう性格のものなのかはまだとらえられていないからです。資本主義的生産様式は歴史的な一つを生産様式です。だから資本主義的生産様式とそれに照応する生産諸関係や交易諸関係というものも、やはり歴史的な存在であるわけです。だから資本主義的生産様式を構成するさまざまな諸契機もやはりそれぞれが、やはり歴史的な存在なのです。つまりそれらも歴史的に形成されてきたものであり、それぞれがそれぞれの歴史を持っており、それぞれがそれぞれの生成や発展、消滅の過程を辿っているものなのです。だから商品の何たるかを十全に把握するためには、それを歴史的なものとしてとらえる必要があるわけです。そしてその課題を解決しているのが、すなわち第4節なのです。】（第32回報告「その2」から）

つまり第1節～第3節は資本主義的生産様式が支配している社会の富の要素形態である「商品」を、そのまま前提して、それを観察・分析・考察することから「商品とは何か」が解明されたのでした。しかし、第4節では、商品そのものが歴史的にどのように生まれてきたのか、あるいはそもそも労働生産物が商品になるのは如何なる理由によるのかを解明することが課題なのです。

もちろん、諸商品を前提して、それを分析していく中でも、その歴史性は明らかにされうるし、されてきたのですが(価値形態の考察では、常に問題は歴史的にも取り扱われています)、しかし商品が商品でないものから(労働生産物から)、商品に如何にして何ゆえになるのかということは、商品を前提した分析では明らかにならないのです。商品を見ている限りは、それ以前のものは歴史の背後に隠されており、決してわれわれは見ることができないからです。だからマルクスはそうした問題は自ずと別の課題になるのだと述べています。そしてその課題を果たすのが、すなわち第4節なのです。

その意味では先の考察（第18回報告、その3）は、そうした第4節の課題を十分踏まえたものにはなっていない面があったと言えます。大谷氏が紹介している5つの引用文のうち前の4つは、すべて第3節の価値形態からのものであり、価値の表現形態が問題になっている部分から引用されたものです。だからそこで問題になっているのは「諸商品」であり、交換され、等置されるのは「商品」なのです。ところが5つ目の引用文だけは、第4節からのものなのです。だからこの引用文の場合は、価値形態や価値表現のそれまでの考察の延長上で考えることは必ずしも正しくは無かったと言えるでしょう。

それでは第4節の位置を意識して、第7パラグラフの冒頭に出てくる「価値物」は如何に理解すべきでしょうか。それについて、一定の見解を明らかにしたいと思います。ただし、このことは学習会で述べたことではないので、次の学習会では批判的に検討される必要があるでしょう。

まず注意しなければならないのは、すでに指摘したように、ここでは商品の価値の表現や形態が問題になっているのではないということです。第3節では商品の価値形態が問題でした。それは商品の交換関係を前提しながら、その交換関係に潜む商品の価値の表現形態を明らかにするものだったのです。しかし、今、問題になっているのは、そうした問題ではありません。ここでは交換されるのは「労働生産物」です。そして交換関係に潜む価値の表現形態ではなく、実際の交換そのもの（その歴史的な発展段階）が問題になっています。労働生産物の価値性格がハッキリ現れてくるのは

、労働生産物の交換の一定の発展段階においてだということが指摘されているのです。その意味では、労働生産物の価値性格が明確に現れてきて、初めて労働生産物は「商品」になるとも言えるわけです。そうした問題を論じるなかで、「価値物」というタームが出てくるということがまず確認されなければなりません

そしてパラグラフの本文にそって問題を考えてみますと、ここでは労働生産物が価値を持つのは、労働生産物の交換の内部においてであること、しかも、その労働生産物の交換がある程度発展して初めて、そうした労働生産物の価値性格がハッキリ現れてくるのだと述べているわけです。

われわれが商品の価値の形態を問題にした時には、交換されるのは商品であることは当然のことながら前提されていました。しかし、このパラグラフでは、労働生産物が交換され、その交換される労働生産物が価値を持つようになるのは、どういう交換の発展段階かが問題になっているのです。労働生産物の一つの有用物です。つまりそれは本来は、直接に生産者の欲望を満たすためのものです。生産者は自らの欲望を満たすために、物を作るわけです。しかし、それが価値という性格を持つのは、もはやそれが彼の、つまりその労働生産物を生産した者の欲望を満たすものとしてではないのです。それは生産者にとっては、それ以前に持っていた有用物としての性格とは違ったものとして、すでに彼には現れているのだ、というわけです。だからマルクスはそうした性格は、有用物とは（分裂して）現れてくると述べているのだと思います。つまり労働生産物の交換が発展して、生産者がその生産物の価値性格を意識するような段階、つまり交換を目的に生産を行うような段階、そのような段階においては、労働生産物もはや生産者の欲望を満たす有用物ではなく、ただ彼のさまざまな欲望を満たすために必要なさまざまな他の労働生産物を彼が入手するための「手段」でしかなくなるわけです。だからここには、それが本来は持っていた有用物という属性とは分裂した、ある一つの属性が労働生産物に付け加わっているとマルクスは指摘しているわけです。それはすなわち他の労働生産物との「交換のための手段」という属性です。そしてその限りではそれは他の労働生産物と社会的に同等な性格を持ったものとして存在している、それをマルクスは「価値物」と述べているのだと思います。だから価値形態に出てくる「価値物」は、相対的価値形態にある商品の価値が一つの他の等価形態にある商品の物的姿をとって現れてきた物でしたが、このパラグラフにおける「価値物」とは、そうしたのではなく、労働生産物そのものが「価値物」として現てくるということと述べているのだと思います。

これは分かりやすいと、次のような事態を述べているのだと思います。労働生産物の交換がある程度発展し、生産者が交換を目的に生産するようになると、生産者はそれまでの自家消費分（有用物）とは別に、交換用の労働生産物を、それとして区別して、物的にも区別し分けようになります。これが有用物と価値物とへの労働生産物の「分裂」、あるいは「分離」ということの実際の内容なのです。このように考えてみれば、それほど難しいことを言っているわけではないことが分かります。

マルクスは、有用物と価値物とに労働生産物が分裂する段階を、労働生産物が、すでに交換を目的に生産される段階、だから生産においてすでにその価値性格を意識する段階と述べています。これは価値形態の発展段階としては、どの段階を意味するでしょうか。それは労働生産物のうちの主に剰余物だけが、たまたま偶然に、個別に、交換されるような段階ではないことは明らかです。だから価値形態の発展段階としては、形態Ⅰ（「簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」）の段階ではなく、形態Ⅱ（全体的な、または展開された価値形態）か、あるいは形態Ⅲ（一般的価値形態）の段階だと考えられます。

形態Ⅱというのは、ある特定の労働生産物が次々と他のさまざまな労働生産物と交換されていく段階です。これは具体例を上げて説明しますと、遊牧民族がその遊牧の過程で、接触したさまざまな定着農耕民族と自分たちの生産物である羊を小麦やジャガイモなどと交換してゆくような段階と考えることができるでしょう。羊はさまざまな労働生産物を自らの価値の表現形態にしますが、しかし羊と交換される小麦やジャガイモなどは、それらを生産する定着農耕民族にとっては依然として剰余生産物であり、彼らから見れば、この交換は依然として個別的・偶然的なものにすぎないわけです。つまり彼らから見れば、価値形態としては形態Ⅰの段階です。しかし交換がさらに発展し、商品交換がそうした定着農耕民族までもを捉えるようになると、彼らも交換を目的に生産するようになり、互いの労働生産物をも交換し始めるようになります。そうした段階では、彼らは自分たちの労働生産物の価値性格を、それまでの彼らにとっての共通の物産であった羊で秤量し、そして互いの労働生産物を交換するようになります。そのような発展段階が、すなわち形態Ⅲだったわけです。

だからマルクスがここで、労働生産物が有用物と価値物とに分裂する段階というのは、価値形態の発展段階としては、果たしてどういう発展段階を指していると考えられることができるでしょうか。私は形態Ⅱにおける、次々と自らの価値を表現して展開する労働生産物のみが、そうした発展段階に該当すると考えることができると思います。つまり自らの価値を展開して表現する商品のみが、最初から交換を目的に生産され、よってその価値性格を意識して生産されるような段階に達していると考えられるわけです。先の第18回報告の考察のなかで紹介していた第2章の一文でもマルクスは次のように述べていました。

《交換の不断の反復は、交換を一つの規則的な社会的過程にする。したがって、時の経過と共に、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換めあてに生産されざるをえなくなる。この瞬間から、一面では、直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する。諸物の使用価値は、諸物の交換価値から分離する。》（全集版23a118頁）

つまり《労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換めあてに生産されざるをえなくなる》段階こそ、こうした段階ではないでしょうか。

もちろん、形態Ⅲの場合も、それ以外の多くの労働生産物も、価値性格を意識して生産するようになる段階なので、そうしたものに該当するのはいうまでもありません。しかしマルクスが「この瞬間から」と述べているように、そうした最初の商品が歴史的に登場するのは、どういう段階かと考えるなら、形態Ⅱがそれに相応しいと言えるでしょう。

いずれにせよ、労働生産物が「価値物」という属性を獲得するのは、決して、形態Ⅰのような段階ではないということ、すでに貨幣の萌芽として、労働生産物が本来持っている有用物という性格から分離した形で、ただ交換だけを目的に生産されるようになり、あらゆる他の労働生産物と交換するための手段という、新たな属性を獲得した物という意味が、すなわちマルクスがここで述べている「価値物」だと思うわけです。

これは余談ですが、たまたまNHKのBSプレミアムの番組を観ていると、北欧ノルウェーのバイキングについて、彼らがどうしてあのような極寒の不毛の地で、一大勢力を築き、さまざまなところに出かけて行くようになったのか、について解説していました。それは「干し鱈（タラ）」の製法を彼らが発明したことによるのだということです。「干し鱈」そ

のものは、ある時期に大量に取れる鱈を、不漁の時の食料として利用するために保存することが目的だったと思います。つまり「干し鱈」は、当初はその限りでは一つの「有用物」に過ぎなかったのです。しかし「干し鱈」は長期の保存が可能であり、しかもそれを他の多くの隣接民族が欲しがり、彼らを持っているものと交換できるということをバイキングは知るようになるわけです。かくしてバイキングは大量の「干し鱈」を交換を目的に生産するようになり、それを持って大航海をし、それを色々な地域で、小麦や絹など彼らが必要とするさまざまなものと交換するようになっていったのです。それが彼らが航海に乗り出した動機であり、原動力だったというわけです。それを解説者は、「干し鱈は貨幣になった」と述べています。つまり「干し鱈」は単なる保存食としての「有用物」から、「交換手段」という新たな対象性を獲得したのです。「干し鱈」は単なる「有用物」という対象性から、それとは区別された、その対象性から分離した「交換手段」という新たな対象性を獲得したのです。これがすなわち、ここでマルクスが述べている「価値物」ではないだろうかと思ったのです。

◎第8パラグラフについて

第8パラグラフについても、同じようにまず本文を紹介し、文節ごとの解説をやり、その中で議論の紹介も行っていくことにします。

【8】 〈(i)したがって、人間が彼らの労働生産物を価値としてたがいに関係させるのは、これらの物が彼らにとって一様な人間労働の単なる物的外皮として通用するからではない。(ii)逆である。(iii)彼らは、彼らの種類を異にする生産物を交換において価値としてたがいに等置しあうことによって、彼らのさまざまに異なる労働を人間労働としてたがいに等置するのである。(iv)彼はそれを知ってはいないけれども、それを行う(27)。(v)だから、価値の額(βγδ)にそれが何であるかが書かれているわけではない。(vi)むしろ、価値が、どの労働生産物をも一種の社会的象形文字に転化するのである。(vii)後になって、人間は、この象形文字の意味を解読して彼ら自身の社会的産物——というのは、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的産物だからである——の秘密の真相を知ろうとする。(viii)労働生産物は、それが価値である限りでは、その生産に支出された人間労働の単なる物的表現にすぎないという後代の科学的発見は、人類の発達史において一時代を画するものではあるが、労働の社会的性格の対外的外観を決して払いのけはしない。(ix)商品生産というこの特殊な生産形態だけに当てはまること、すなわち、たがいに独立した私的諸労働に特有な社会的性格は、それらの労働の人間労働としての同等性にあり、かつ、この社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるのだということが、商品生産の諸関係にとらわれている人々にとっては、あの発見の前にも後にも、究極的なものとして現れるのであり、ちょうど、空気がその諸元素に科学的に分解されても、空気形態は一つの物理的物体形態として存続するのと同じである。〉

(i)、(ii)、(iii)、(iv) したがって、人間が彼らの労働生産物を価値として互いに関係させるのは、それらの物が彼らにとって、一様な人間労働の単なる物的外皮として通用しているからではありません。つまり彼らは、自分たちの異なる労働が人間労働として同等であることを知っているから、だからそれらの生産物を互いに交換し、関係づけているのではないのです。事態はむしろ逆なのです。彼らは、彼らの種類の異なる生産物を交換において価値として互いに等置しあうことによって、彼らのさまざまに異なる労働を人間労働として互いに等置しあっているのです。だから彼らは、彼らの労働生産物を交換することによって、自分たちの労働を関係させているのですが、彼らはそのことを知りません。知らないままに、実際には、それを行っているのです。

この最初の〈したがって〉は、その前のパラグラフ(第7)の最後の部分を直接受けたものだと思います。フランス語版では、パラグラフをまたいで次のようになっています。

〈私的労働の二重の社会的性格は、実際の交易つまり生産物の交換が生産者たちに押しつけられる形態のみ、彼らの頭脳に反映される。生産者たちは彼らの労働生産物を価値として対峙させて関連させるが、それは、彼らがその労働生産物のうちに、同一の人間労働を隠している単なる外被を、看取るからではない。全く逆である。彼らは、自分たちの相異なる生産物を交換において同等と見なすことによって、自分たちの相異なる労働が同等であることを実証する。彼らはそうとは知らずにそうする。(27)〉(江夏他訳49頁)

また初版本文では、一見すると、逆のような表現になっています。

〈人々が彼らの諸生産物を、これらの諸物が同種の人間労働の単なる物的外皮として認められているかぎりにおいて、価値として互いに関係させるならば、このことのうちには、同時にこのことは逆に、彼らのいろいろな労働が、物的外皮のなかでは、同種の人間労働としてのみ認められる、ということが含まれている。彼らは、自分たちの諸生産物を価値として互いに関係させることによって、自分たちのいろいろな労働を人間労働として互いに関係させているのである。人間的な関係が物的な形態で蔽い隠されている。〉(江夏訳61頁)

つまり第二版では、〈一様な人間労働の単なる物的外皮として通用するからではない〉となっているのに、初版本文では〈これらの諸物が同種の人間労働の単なる物的外皮として認められているかぎりにおいて、価値として互いに関係させる〉となっているからです。

しかしよく読んでみると、両者は同じことを述べていることが分かります。初版本文の述べていることは、人々が彼らの諸生産物を価値として互いに関係させるのは、それらの諸物が同種の人間労働の単なる物的外皮として認められる限りにおいてであるが、このことは、彼らのさまざまな異なった労働が、物的外皮のなかで、同種の人間労働として認められるということが含まれているのだ、ということです。つまり諸物を価値として関係させるということは、実際には、彼らの異なった諸労働を同種の人間労働として関係させ、認め合っていることになるのだ、ということなわけです。つまり彼らは諸生産物を交換して価値として互いに関係させていると考えているが、しかしそのことは彼ら自身の労働を人間労働として互いに関係させているのだ、しかし、人間のそうした互いの関係が、物的な関係を媒介して行われており、物的な関係によって蔽い隠されてしまっているのだということです。交換当事者には、ただ諸物の交換(諸物を価値として関係させる)という現実しか目に入っていないませんが、しかし彼らは、自分では意識せずに、彼ら自身の労働を互いに人間労働として関係させているのだ、本当は、彼らは、そうした物の関係に媒介されて、互いに社会的に人間同士の関係を取り結んでいるのだ、しかしそのことは覆い隠されていし、彼らの知らないことなのだ、ということでしょう。

(v)、(vi)、(vii) 彼らはそうした事実を知らないのですが、しかしそれを行っているのです。だから、生産物が価値を持っているということは意識されませんが、それが何であるかということは一つも分らないのです。むしろ生産物が価値を持っているということが、労働生産物をわけの分らないものに、つまり一種の社会的象形文字にしてしまうのです。それが何であるかは、もっとあとになって、その象形文字を解読して、その秘密を知るのです。使用価値の価値としての

規定は、言語と同じように、人間の社会的産物なのです。

この部分もフランス版では次のようになっています。

〈だから、価値の額（レタイ）の上には、それがなんであるかは書かれていない。価値はむしろ、それぞれの労働生産物を象形文字にする。時が経ってやっと、人間はこの象形文字の意味を解読し、自分が関与して作ったこの社会的生産物の秘密を洞察しようと試みるのであって、有用物の価値への転化は、言語と全く同じに社会の産物なのだ。〉（49頁）

(f) 労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単なる物的表現に過ぎないという後代の科学的発見は、人類の発達史において一時代を画する偉大な発見ですが、しかし、それが発見されたからといって、労働の社会的性格が、物の関係として現れている現実そのものを決して無くさないのです。

ここで〈後代の科学的発見〉について、マルクスのことを述べているのかという質問がありました。そうではなく古典派経済学のことでないかという指摘がありました。なおこの点に関連して、『経済学批判』の次の一文を紹介しておきましょう。

〈商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的な生産的活動に交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ベティに、フランスではボアギュベールに始まり、イギリスではリカードに、フランスではシモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である。（中略）

ベティは、労働の創造力が自然によって制約されているということについて思いがいをすることなしに、使用価値を労働に分解している。彼は現実的労働をただちにその社会的総姿態において、分業としてとらえた。素材的富の源泉についてのこの見解は、たとえば彼の同時代人ホップズの場合のように、多かれ少なかれ実を結ばずに終わることなく、彼をみちびいて、経済学が独立の科学として分離した最初の形態である政治算術に到達させた。けれども彼は、交換価値をそれが諸商品の交換過程で現象するままに、貨幣と解し、しかも貨幣そのものを実在する商品、つまり金銀と解した。彼は重金主義の表象にとらわれて、金銀を獲得する特殊な種類の現実的労働を、交換価値を生み出す労働だと説明した。實際上、彼はブルジョア的な労働が生産しなければならないのは、直接的な使用価値ではなく、商品であり、交換過程におけるその外化によって金銀として、すなわち貨幣として、すなわち交換価値として、すなわち対象化された一般的労働として自分をあらわすことのできる使用価値である、と考えた。それはとにかく、彼の例は、労働を素材的富の源泉と認識しても、それは決して労働が交換価値の源泉となっている一定の社会的形態についての誤解をとりぞくものではない、ということを適切に示している。〉（全集13巻36-7頁）

(f) 互いに独立した私的諸労働の独特な社会的性格が、それらの労働の人間労働としての同等性にあり、またこの社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるということは、商品生産というこの特殊な生産形態だけに当てはまることです。だから、商品生産の社会に身を置き、それを当然の前提として受け入れている人々、つまり物象的な関係にとらわれている人たちにとっては、価値が、その生産に支出された人間労働の物的表現に過ぎないということが分かったとしても、しかしそれによって商品生産の社会こそが究極の絶対的なものとして現れるということは何一つ変わらないのです。それは空気がその諸元素に科学的に分解されたとしても、そのことによって空気形態が依然として、一つの物理的形態として存在しているのと同じなのです。

この部分も参考のためにフランス語版を紹介しておきましょう。

〈この特殊な生産形態、つまり商品生産にとってのみ真実であるもの—すなわち、この上なく多様な諸労働のもつ社会的性格が、人間労働としてのそれらの同等性のうちに成り立っていること、そしてまた、この独自の社会的性格が労働生産物の価値形態という客体的形態をとっていること—、この事実、商品生産の機構と関係のなかにとらわれている人間にとっては、価値の性質の発見の前後を問わず不変であり、自然界の事実であるかのように見えるのであって、このことは、空気の化学元素の発見の前後を問わず不変変わらず同じである空気という気体形態のばあいと、全く変わりが無い。〉（同上50頁）

なお注27については、ほとんど議論にもならなかったので解読も省略します。

.....

【付属資料】

●第7パラグラフに関連したもの

《補足と改訂》

〈◇

労働生産物は、それらの交換の内部ではじめて、互いに感性的に異なる使用対象から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換をめあてに生産されるまでに、したがって、諸使用価値の価値性格がすでにそれらの生産そのものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がり重要性とを獲得したときである。この瞬間から、生産者たちの私的労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取る。私的労働は、一面では、一定の有用的労働として一定の社会的欲求を満たさなければならず、そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の、諸分枝として実証されなければならない。私的諸労働は、他面では、特殊な有用的な種類の私的労働のどれもが、別の種類の有用的私的労働のどれとも交換されうるものであり、したがって、これらと等しいものとして適用する限りでのみ、それら自身の生産者たちの多様な欲求それ自体を

満たす。しかし、互いにまったく異なる諸労働の同等性は、ただ、現実の不等性の捨象、諸労働が人間的労働力の支出として、抽象的人間的労働として、もっている共通な性格への還元においてしか、成り立ちえない。[33] 異なった具体的私的労働の、同じ人間的労働という抽象物への還元は、事実上、異なった労働の生産物が、互いに等置される交換を通してのみ行なわれる。[31]5 それゆえ、商品生産者たちの頭脳は、彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格を、実際の交易、生産物交換で受け取る諸形態でのみ反映する。つまり、商品生産者たちの頭脳は、彼らの私的労働の社会的有用的性格を、労働生産物が有用物である、いわば他人にとって有用でなければならない、という形態において反映し、異なった種類の労働の同等性という社会的性格を、これら物質的に異なった物の、労働生産物の、共通の価値性格として反映するのである。〉 (30-1頁)

《フランス語版》

〈労働生産物はその交換のなかではじめて、有用物としての多様な物的存在とは区別されるところの、同等で一様な社会的存在を、価値として獲得する。有用物と価値物への労働生産物のこのような分裂が実際にひろがるのは、有用物が交換を目あてに生産されるほどに、交換が充分広範囲かつ大量に行なわれるようになった直後のことであって、このために、これらの有用物の価値性格は、生産そのもののなかですでに考慮されるようになるのである。生産者たちの私的労働は、この瞬間から、事実上二重の社会的性格を獲得する。これらの私的労働は一方では、有用労働でなければならない、社会的な必要をみたさなければならない、このようにして総労働の、すなわち自然発生的に形成される社会的分業体制の、構成部分として確認されなければならない。他方、これらの私的労働は、それぞれの有用な私的労働種類が他のすべての有用な私的労働種類と交換可能なものであり、すなわち、これらと同等であると見なされるがゆえにはじめて、生産者自身のさまざまな必要をみたすのである。相互に全くちがっている労働の同等性は、それらの労働の現実の非同等性を無視するばあい、すなわち、それらを人間労働力の支出としての、人間労働一般としての共通な性格に還元するばあいに、はじめて成立しうるのであって、ただ交換だけが、この上なく多様な労働生産物を同等の立場で相互に対面させることによって、こうした還元を行なうのである。〉 (48-9頁)

●第8パラグラフに関連したもの

《初版本文》

〈人々が彼らの諸生産物を、これらの諸物が同種の人間労働の単なる物的外皮として認められているかぎりにおいて、価値として互いに関係させるならば、このことのうちには、同時にこのことは逆に、彼らのいろいろな労働が、物的外皮のなかでは、同種の人間労働としてのみ認められる、ということが含まれている。彼らは、自分たちの諸生産物を価値として互いに関係させることによって、自分たちのいろいろな労働を人間労働として互いに関係させているのである。人的な関係が物的な形態で蔽い隠されている。したがって、価値の額には、価値がなんであるかは書かれていない。人々は、自分たちの諸生産物を商品として互いに関係させるためには、自分たちのいろいろな労働を、抽象的な、人間的な、労働に、等置することを強制されている。彼らはこのことを知っていないが、彼らは、物質的な物を抽象物である価値に還元することによって、このことを行なうのである。これこそが、彼らの頭脳の自然発生的な、したがって無意識的で本能的な作用であって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産によって彼らが置かれているところの諸関係とから、必然的にはえ出てくるものである。第一に、彼らの関係は実践的に存在している。だがしかし、第二に、彼らは人間であるがゆえに、彼らの関係は、彼らにとっての関係として存在している。それが彼らにとって存在している仕方、あるいは、それが彼らの頭脳のなかに反射している仕方は、この関係の性質そのものから生まれてくる。のちになって彼らは、科学に頼って、彼ら自身の社会的生産物の秘密を見抜こうとする。なぜならば、物の価値としての規定は、言語と同じに、彼らの産物だからである。〉 (江夏訳61-2頁)

《補足と改訂》

〈したがって、人間が彼らの労働生産物を価値として互いに関連させるのは、これらの物が彼らにとって一様な人間的労働の単なる物的外皮のために通用するからではない。逆である。彼らは、彼らの種類を異にする生産物を交換において価値として互いに等置し合うことによって、彼らのさまざまに異なる労働を人間的労働として互いに等置するのである。彼らはそれを知っていないけれども、それを行なう。〔注27。だから、ガリアーニが、価値は二人のあいだの関係である、と言うとき、(ガリアーニ『貨幣について』クストーディ編『イタリア古典経済学者』叢書、近代編、第3巻、ミラノ、1803年、221ページ) 彼は、物的外皮のもとにおい隠された関係、とつけ加えるべきであったろう。〕だから、価値の額にそれがなんであるかが書かれているわけではない。むしろ、価値が、どの労働生産物をも一種の社会的象形文字に転化するのである。あとになって、人間は、この象形文字の意味を解読して彼ら自身の社会的産物——というのは、労働生産物の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的産物だからである——の秘密を知ろうとする。労働生産物は、それが価値である限り、その生産に支出された人間的労働の単なる物的表現にすぎないという後代の科学的発見は、人間の発達史において一時代を画

するものではあるが、労働の社会的性格の対象的外観を決して払いのけはしない。商品生産というこの特殊な生産形態だけにあてはまること、すなわち、私的労働の独特な社会的性格は、人間労働一般としてのそれらの同等性にあり、かつ、この独特な社会的性格が対象の形態、労働生産物の価値性格という形態をとらねばならないということが、[32]商品生産の諸関係にとらわれている人々にとっては、あの発見のまえにもあとにも、自然なものとして現われるのであり、ちょうど、空気がその諸元素に分解されでも、そのまえにもあとにも、空気形態は物体の自然な形態として存続するのと同じである。〉（31-2頁）

《フランス語版》

〈私的労働の二重の社会的性格は、実際の交易つまり生産物の交換が生産者たちに押しつけられる形態でのみ、彼らの頭脳に反映される。生産者たちは彼らの労働生産物を価値として対峙させて関連させるが、それは、彼らがその労働生産物のうちに、同一の人間労働を隠している単なる外被を、看取するからではない。全く逆である。彼らは、自分たちの相異なる生産物を交換において同等と見なすことによって、自分たちの相異なる労働が同等であることを実証する。彼らはそうとは知らずにそうする。(27) だから、価値の額 (ヒイ) の上には、それがなんであるかは書かれていない。価値はむしろ、それぞれの労働生産物を象形文字にする。時が経ってやっと、人間はこの象形文字の意味を解読し、自分が関与して作ったこの社会的生産物の秘密を洞察しようと試みるのであって、有用物の価値への転化は、言語と全く同じに社会の産物なのだ。〉（49頁）〈労働生産物は価値としてはその生産に支出された人間労働の純粋にして単純な表現である、という後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時期を画すものであるが、労働の社会的性格を物の性格、生産物自体の性格として出現させる幻影を、少しも一掃するものではない。この特殊な生産形態、つまり商品生産にとってのみ真実であるもの—すなわち、この上なく多様な諸労働のもつ社会的性格が、人間労働としてのそれらの同等性のうちに成り立っていること—、そしてまた、この独自の社会的性格が労働生産物の価値形態という客体的形態をとっていること—、この事実は、商品生産の機構と関係のなかにとらわれている人間にとっては、価値の性質の発見の前後を問わず不変であり、自然界の事実であるかのように見えるのであって、このことは、空気の化学元素の発見の前後を問わず相変わらず同じである空気という気体形態のばあいと、全く変わりが無い。〉（49-50頁）

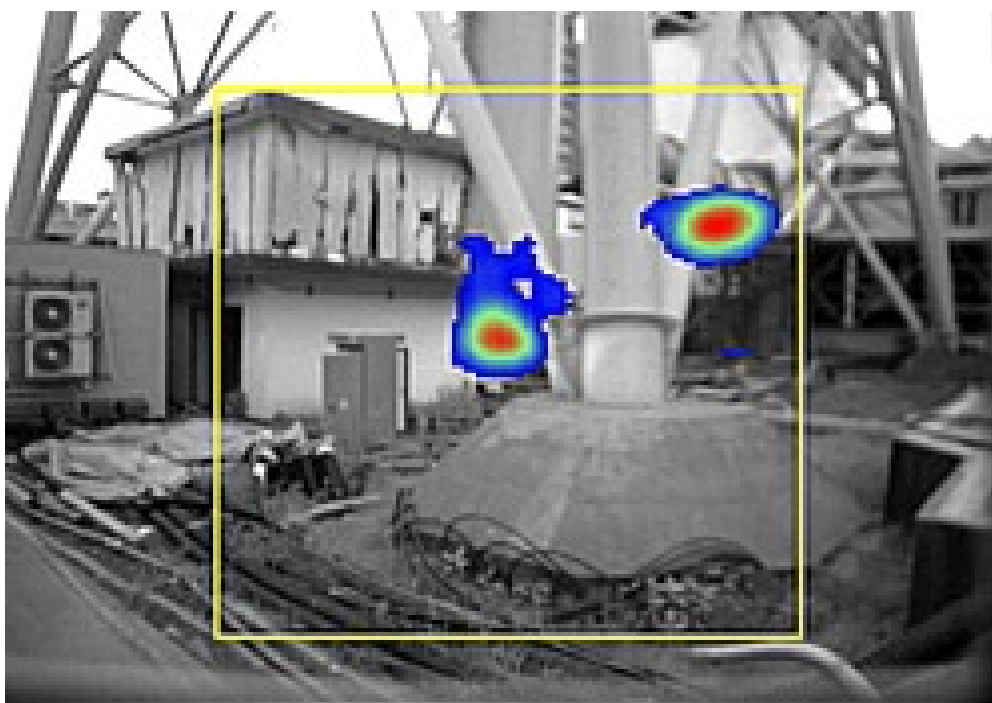
『資本論』を読んでみませんか

福島原発事故による放射能汚染の深刻な実態が明らかになりました。

放射性セシウムが稲藁を汚染し、その汚染された稲藁を食べた汚染牛が、全国に出荷され、すでに一部は消費者の胃袋に入ってしまったのです。稲藁の放射性セシウムの最高値は、1キロ・グラムあたり17万7000ベクレルに上り、これは水分を含んだ状態に換算すると牧草の政府の規制値（300ベクレル）の約130倍に相当します。

今年収穫される新米の汚染も懸念され、昨年の古米が早々と買い占められているといいます。「実りの秋」は一転して「不安の秋」になりそうな気配です。

福島第一発電所では、1、2号機の原子炉建屋の西側にある排気塔下部の配管付近で事故後最高値の毎時10シーベルト（1万ミリシーベルト）以上の高い放射線量が計測されました。毎時10シーベルトというのは1度の被爆で必ず死に至るという恐るべき値です。原発事故の恐ろしさが改めて思い知らされます。



福島原発1、2号機原子炉建屋西側の排気塔下部で高い放射線量を計測したガンマカメラの画像=東京電力提供

こうしたなかで、「反原発」の声がますます高まっています。

私たちの仲間の間でも論争が生じ、ある人は、放射線被曝は特別な問題であり、原子力発電はそもそも人類と共存できないのだ、と主張します。かと思うと、他の人は、そうした主張は原発問題を“善悪”で裁断する形而上学であり、観念論だと批判します。一体どちらが正しいのか、原発問題を如何に考えたらよいのでしょうか。

実は、私たちが「『資本論』を読む会」で現在学習している、第1章第4節「商品の物神的性格とその秘密」は、この問題を考えるための理論的基礎を与えてくれているのです。

私たちが生活している資本主義社会では、生活に必要なほとんどの物が商品として生産されています。人類はその生活に必要なものをすべて自然に働きかけて、自然から得てきました。その原理は今日でも変わりませんが、しかし、関係は単純ではありません。私たちが自然に働きかけるのは、直接にはではなく、労働者として資本に雇われなければならない、そこで得た賃金で必要なものを商品として購入しなければなりません。このような社会では、私たちの生活を維持する社会的な物質代謝は、商品や資本という物象的な関係を通じて、維持されるようになっており、その結果、人々は物によって支配されるという転倒した社会になってしまっているのだ、とマルクスは説明しています。そしてそのために、すべての生産力や科学や技術も資本の諸力として現れるのだ、と次のように述べています。

「このような過程では労働者の労働の社会的性格がいわば資本化されて労働者たちに相対するのであるが――たとえば機械の場合に、目に見える労働諸生産物が労働の支配者として現われるように――、こうした過程において、自然力や、その抽象的精髓において一般的な社会的発展の産物である科学についても、同じことが生ずるのは当然である、――それらは資本の諸力として労働者に相対する。それらは事実上個々の労働者の技能や知識からは分離し――そしてその根源を考えて見ればやはり労働の生産物であるにもかかわらず――、それらが労働過程にはいりこむところでは、どこでも、資本に合体されたものとして現われる。資本家は、ある機械を充用しても、その機械を利用しても、その機械を理解する必要はない。（ユーアを見よ。）だが機械においては、実現された科学が労働者にたいして資本として現われるのである。そして実際にも、科学や自然力や大量の労働生産物のこのような社会的労働に基づく充用は、すべてそれ自身ただ労働の搾取手段としてのみ、剰余労働を取得する手段としてのみ、それゆえ、労働に対立し資本に所属する諸力としてのみ現われるのである。もちろん、資本は、ただ労働を搾取するためにのみこれらすべての手段を充用するのであるが、労働を搾取するためには、資本はそれらの手段を生産に充用しなければならない。このようにして労働の社会的生産力の発展もこの発展の諸条件も、資本の行為として現われるのであって、これにたいして個々の労働者は受動的な態度をとるだけでなく、むしろ労働者に対立してこれが進行するのである。」（『剰余価値学説史』26巻 | 498頁）

そして原子力発電も、この限りではまったく同じなのです。それは電力資本として労働者に敵対し、ただ労働者を搾取して、利潤を得るために存在しているのです。だからこそ、それはどんなに危険なものであっても、資本は儲けを優先して、その「安全」措置を怠るのです。そしてその結果、今回のような事故を引き起こしてしまうのです。

だから根本問題は、こうしたすべての生産力が資本の諸力として現れる社会にこそあるのです。それこそが変革されないと、いつまでも労働者は資本に従属し、支配され続けなければならない、恐ろしい原発事故の克服や一掃も不可能なのです。

だから原発問題を考えるためにも、やはり『資本論』をしっかりと勉強する必要があります。是非、貴方も一緒に『資本論』を読んでみませんか。

第37回「『資本論』を読む会」の報告

◎今回の報告は若干形式を変えて行います

第37回は亀仙人は都合により欠席したために、報告はJ J 富村さんにお願しました。メールで送られてきたものをそのまま、以下、紹介することにします。だから、今回は、いささか報告の形式は異なりますが、ご了承ください。

◎第9パラグラフを議論

今回は参加者が少なく、それでトントンと進むと思いきや、あーでもない、こーでもないと考え込むことが多く、一段落しか終えることができませんでした。見解の分かれたままのところもありますが、一応の理解には達したと思っています。

<段落 9> 本文 (岩波文庫 p135、向坂訳)

〈(イ)生産物交換者がまず初めに実際上関心をよせるもの、自分の生産物にたいしてどれだけ他人の生産物を得るか、したがって、生産物はいかなる割合で交換されるかという問題である。(ロ)このような割合は、ある程度慣習的な固定性をもつまでに成熟すると同時に、労働生産物の性質から生ずるかのように見える。(ハ)したがって、例えば1トンの鉄と2オンスの金とは、1ポンドの金と1ポンドの鉄が、その物理的・化学的屬性を異にするにもかかわらず同じ重さであるように、同じ価値であることになる。(ニ)事実、労働生産物の価値性格は、価値の大いさとしてのその働きによってはじめて固定する。(ホ)この価値の大いさは、つねに交換者の意志、予見、行為から独立して変化する。(ヘ)彼ら自身の社会的運動は、彼らにとっては、物の運動の形態をとり、交換者はこの運動を規制するのではなくして、その運動に規制される。(ト)相互に独立に営まれるが、社会的分業の自然発生的な構成分子として、あらゆる面において相互に依存している私的諸労働が、継続的にその社会的に一定の割合をなしている量に整約されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的で、つねに動揺せる交換諸関係において、その生産に社会的に必要な労働時間が、規則的な自然法則として強力的に貫かれること、あたかも家が人の頭上に倒れかかるばあいにおける重力の法則のようなものであるからである(注28)が、このことを、経験そのものの中から科学的洞察が成長してきて看破するに至るには、その前に完全に発達した商品生産が必要とされるのである。(チ)労働時間によって価値の大いさが規定されるということは、したがって、相対的商品価値の現象的運動の下にかくされた秘密なのである。(リ)その発見は、労働生産物の価値の大いさが、単なる偶然的な規定という外観をのぞくが、しかし、少しもその事物的な形態をなくするものではない。

(ヲ)注28 「周期的な革命によってのみ貫徹される法則をなんと考えるべきであろうか？ それはまさしく一つの自然法則であって、関与者たちの無意識にもつづいているものなのである。」(フリードリヒ・エンゲルス『国民経済学批判大綱』、『独仏年話』アーノルト・ルーゲおよびカール・マルクス編、パリ、1844年、所載〔ドイツ版『全集』第1巻、515ページ。新潮社版『選集』第1巻、161ページ〕)。

文節番号(イ)～(リ)は引用者

(イ) 報告者のレジメでは、「生産物交換者が・・・関心をよせる」交換比率とは、交換価値と価値のいずれか、としていましたが、これは交換価値であるということになりました。「如何なる割合で交換されるか」とは交換比率であり、生産物が価値として現れるのはもう少し後だからです。

(ロ) 「このような割合」つまり交換価値は「ある程度慣習的な固定性を持つまでに成熟」というのは、交換が量的にも空間的にも広がると交換比率が一定化するということであり、それは当然でしょう。ところで「慣習的な固定性を持つ」のは何かということで、これは交換比率即ち交換価値のことです。だから、交換価値が「慣習的な固定性を持つ」ということになります。

次に「労働生産物の性質から生ずるかのように見える」の主語は何か。これはまたこの文の先頭にある「このような割合」、即ち、交換価値であり、だから交換価値は「労働生産物の性質から生ずるかのように見える」となります。そこでこの「労働生産物の性質」とは何なのか、が問題になりましたが、なかなか分かりにくい議論になりました。しかし、次の文(ロ)を手がかりに、これは価値ではないかということに。価値については第1節でその実体は抽象的人間労働であると論じられています。しかし、抽象的人間労働が必ず労働生産物をして価値ならしめるかというところではないだろう。この節の少し後のほうでロビンソンクルーソーの話が出てきますが、そこで論じられています。労働生産物の交換価値が一定の比率に固定化する、すなわち1つの商品に交換価値があるのは、その労働生産物それ自体に価値があるからだというわけです。

(ハ) この文は直前の文(ロ)の説明です。労働生産物それ自体の属性として価値ということが現れるということです。

(ニ) ここでは、「労働生産物の価値性格」と「価値の大いさとしてのその働き」の意味が議論になりました。「労働生産物の価値性格」は労働生産物が価値という属性を持つことであろう。価値をもったものとして現れるということでしょう。

次に、「価値の大いさとしてのその働き」とは、どの働きか。それは、次の(ホ)、(ヘ)だろうと思われれます。そして価値の性格が全面的に現れる。

(ホ)、(ヘ) 価値の大きさは、交換者の意志、予見、行為から独立して変化する。つまり客観的なものであること。分業や大量生産によって価値が下がること、などの意味でしょうか。

報告者は「交換者の社会的運動」とは、生産や分配のこととしたのですが、生産活動のように思えます。生産の計画を立て、材料や労働力を準備し、その生産物を他の生産の材料として供給する、あるいは消費財として供給することだと思われれます。そしてそれは生産者どうして直接的に行なわれるのではなく、物の運動すなわち商品の運動の形態をとるといふ訳です。そのため商品の運動が交換者を規制する。貨幣形態にある資本を生産資本に転化できないとか、生産物を貨幣に転化できないとか、そういうことだろう。

さて、後半に入ります。

(ト) 一つの文節としては非常に長く読みづらい文です。「相互に独立に・・・からである(注28)が」は、その後ででてくる「科学的洞察が成長してきて看破する」内容です。この科学的認識に到達するには、十分に発展した商品生産が必要と云うのです。さて、その科学的認識の内容で問題になったのは、「・・・私的諸労働が・・・一定の・・・量に整約される」の意味です。その後に「社会的に必要な労働時間」とあるので、必要労働時間、したがって生産物の価値が決まってくることを意味するのかどうか、ということです。報告者は最初この点曖昧でした。しかし、そのすぐ後に「規則的な自然法則として強力的に貫かれる」と言っていることから、生産への制約・恐怖、すなわち価値法則が貫かれることを言っているのではないかと意見がでました。J J 富村さんは、注28は恐怖のことを言っているのだから、この科学的認識とは価値法則のことではないかと主張しました。

(チ) 「相対的商品価値の現象的運動」の意味がつかみにくい。「相対的商品価値」とは商品の相対的価値形態のことだろうか。「現象的運動」とは何なのか。と議論になりました。しかし、要するに商品の運動ということだろうと云うことです。

(リ) 「価値量の偶然的な規定」というのは、内在的規定性がない、多数の売買の中で決まってくるものということでしょう。価値の実体が抽象的人間労働であるということがわかって、その事物的な形態」、すなわち商品は商品である、と理解しました。

(電子書籍化するにあたり、ブログに公開した上記の報告とは別に亀仙人が事前に第37回「『資本論』を読む会」のために用意した解説も、以下、付け加えておきます)

【9】 く (i)生産物の交換者たちがさしあたり実際に関心をもつのは、自分の生産物と引き換えにどれだけの他人の生産物が手に入るか、すなわち、どのような割合で生産物が交換されるかという問題である。 (ii)この割合が一定の慣習的な固定性にまで成熟すると、この割合はあたかも労働生産物の性質から生じるかのように見える。 (iii)たとえば、一トンの鉄と二オンスの金とが等しい価値のものであるのは、ちょうど、一ポンドの金と一ポンドの鉄とが、それらの物理的・化学的諸属性の相違にもかかわらず、等しい重さのものであるのと同じように見えるのである。 (iv)労働生産物の価値性格は、事実上、価値の大きさとしての諸生産物の発現によってはじめて固まる。 (v)価値の大きさは、交換者たちの意志、予見、および行為にはかかわりなく、たえず変動する。 (vi)交換者たち自身の社会的運動が、彼らにとっては、諸物の運動という形態をとり、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御される。 (vii)たがいに独立 (unabhaengig) に営まれながら、しかも社会的分業の自然発生的な諸分枝としてたがいに全面的に依存している (abhaengig) 私的諸労働が社会的に均齊のとれた基準にたえず還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的でつねに動揺している交換比率を通して、それらの生産のために社会的に必要な労働時間が一たたとえば、だれかの頭の上に家が崩れおちる時の重力の法則のように一規則的な自然法則として暴力的に自己を貫徹するからである(28)、という科学的洞察が経験そのものから生じるためには、その前に、完全に発展した商品生産が必要である。 (viii)だから、労働時間による価値の大きさの規定は、相対的な諸商品価値の現象的運動のもとに隠されている秘密である。 (ix)この秘密の発見は、労働生産物の価値の大きさが単に偶然的に規定されるだけであるという外観を取りのぞくが、この規定の物的形態を取りのぞきはしない。>

(i) 生産物を交換する人が、最初に関心を持つのは、自分の生産物と引き換えにどれだけ他人の生産物が手に入るか、つまり、どんな割合で生産物が交換されるかという問題です。

このパラグラフは、明らかにその前のパラグラフ (第8パラグラフ) が、労働生産物の価値性格が、生産者の意識に対して直接にはどういう関係にあるのかを、いわば質的に考察したのに対して、同じ問題をいわば量的に考察しているものと思われまます。また前のパラグラフの後半部分で、商品生産の諸関係にとらわれている人々にとっては、〈たがいに独立した私的諸労働に特有な社会的性格は、それらの労働の人間労働としての同等性にあり、かつ、この社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるのだということが〉〈究極的なものとして現れる〉という指摘を受けて、〈商品生産というこの特殊な生産形態だけに当てはまること〉を物理的物体形態と同じように、当たり前の現実として受け入れ、それを当然のものとしている人たちが、交換者として直接にはどのような問題意識を持つか、彼らは量的な問題意識から、商品の価値性格の理解に到達することが論じられているように思います。

(ii) (iii) 生産物の交換割合が慣習によって一定の固定性をもつようになると、この割合はあたかも労働生産物の性質から生じるかのように見えます。例えば一トンの鉄と二オンスの金とが等しい価値をもつものであるのが、丁度、一ポンドの金と一ポンドの鉄とが、同じ重さを持つと同じように、見えるのです。

これもやはり商品生産とそこから生じる現象をそのまま受け入れている意識には、直接見えてくるものをそのまま述べているように思えます。

(iii) たとえば、一トンの鉄と二オンスの金とが等しい価値のものであるのは、ちょうど、一ポンドの金と一ポンドの鉄とが、それらの物理的・化学的諸属性の相違にもかかわらず、等しい重さのものであるのと同じように見えるのです。

この部分はフランス語版では、違った説明になっています。

〈この比率がある慣習的な固定性を獲得するやいなや、それが交換者にとっては労働生産物の性質自体から生じるかのように見える。化学物質が固定的な比率で化合しているのと同じように、これら諸物のうちには、一定の比率で交換されるという属性が宿っているかのように見える。〉 (50-51頁)

またこの部分は、モストの『資本論入門』の次の一文も参考になります。

〈生産がもたらば自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど剰余分をもってようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。例えば毛皮が塩と、しかもまず最初はまったく偶然的なもろもろの比率で交換される。この取引がたびたび繰り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かく決められるようになり、一枚の毛皮はある一定量の塩とだけ交換されるようになる。〉 (大谷訳10頁)

つまり生産物の交換割合がまず交換者に意識される現実が指摘されています。交換割合というのは、生産者が交換手段として持ち出す生産物の使用価値量と、それと交換される他の労働生産物の使用価値量との割合のことです。つまり交換者がまず持つ直接的な問題意識は、こうした量的意識であることをマルクスは指摘しているわけです。そしてそうした量的割合が、最初は交換者のそのときのさまざまな欲望などの偶然的な条件によって大きく変化しますが、しかし交換が繰り返されるとその偶然性が徐々になくなり、交換割合も細かく決められるようになり、やがてある使用価値の一定量とは、他の使用価値の一定量とが交換されべきだという形で交換比率に固定性が生じてくるわけです。そうすると、その割合はあたかもその労働生産物そのものに属する性質であるかに見えてくるのだというわけです。毛皮一枚はかならず塩1キログラムと交換できる。それは毛皮そのものがもつ性質である、というわけです。それが価値性格が交換者の意識に直接現象する最初のものだと言えます。

(iv) 労働生産物の価値性格は、事実上、価値の大きさとしての諸生産物の発現によってはじめて固まります。

この文章は言い回しとしてはやや分かりづらいのですが、それまで述べてきたことの結論をまとめていると考えられます。フランス語版は次のようになっています。

〈労働生産物の価値性格が実際に目立つのは、労働生産物が価値量として規定されるばあいにかざられる。〉

(g) 価値の大きさは、交換者たちの意志や予見、あるいは彼らの行為に関わりなく、絶えず変動します。

この (g)以下は、(-)の命題をさらに説明しているように思えます。フランス語版では、(-)から段落が変わり、それ以下の一連の文章は、この段落の最初の命題 [(-)] をさらに説明したものであることもよく分かるような展開になっています。

(h) この結果、交換者たち自身の社会的運動は、彼らにとっては諸物の運動という形態をとり、彼らは、この運動を制御するのではなく、この諸物の運動によって制御されることになります。

直接的に見ても、諸物が一定の割合で交換されるのは、それぞれの交換者が互いに彼らの意志にもとづいて交換し合うからにはかなりません。彼らの行為がなければ、そもそも諸物の交換もないわけです。しかも彼らの交換行為がますます頻繁になるからこそ、諸物の交換割合に一定の固定性が生まれるのです。しかしある使用価値の一定量は、他の使用価値の一定量と必ず交換されるという交換比率の固定性は、彼らの意志によるものではありません。毛皮の持ち主が、毛皮1枚と塩2キロとを交換したいという意志があっても、しかし、客観的な交換の過程では、結局は、塩1キロとしか交換できないという現実が生じてくるのです。彼にはそれはどうしてかは分かりません。それは彼らの交換行為から生じてくるものなのに、その一定の固定性を持った交換割合そのものは、彼らの意志から独立したもののなのです。だからそれはあたかも毛皮や塩そのものに備った属性であるかに彼らには思えるのです。結局、毛皮の持ち主は、それと塩1キロとの交換という現実を受け入れざるを得ません。そして彼は、その後は、毛皮の生産を、塩1キロとの交換という現実を前提にして行うことになります。つまり彼は毛皮と塩との交換、という諸物の運動に規制されて、毛皮の生産行為を行わなければならないわけですから、つまり彼らの社会的運動は、諸物の運動という形態をとる結果、彼らはこの運動を制御するのではなく、この諸物の運動によって制御されることになるわけです。それはどうしてなのかはもちろん交換者当事者には分かりません。しかし彼らは諸物の交換を規制するある客観的な何がそこにはあることに気づくようになります。すなわち価値性格を意識するようになるわけです。

(i) 互いに独立して営まれながら、社会的分業の自然発生的な諸分枝として互いに全面的に依存し合っている私的諸労働が、社会的に均斉のとれた基準に絶えず引き戻され、その均衡が維持されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的な、絶えず動揺している交換比率を通じて、それらが社会的に必要な労働時間が、例えば、誰かの頭の上に家が崩れ落ちる時の重力の法則のように、規制的な自然法則として暴力的に自己を貫徹するからだ、という科学的洞察が経験そのものから生じるためには、完全に発展した商品生産が必要ですよ。

ここで述べている「科学的洞察」というのは、マルクスによってなされた考察を意味しているのかという疑問が生じますが、必ずしもそうではなく、古典派経済学においてもそうした一定の理解に到達していたらうといえます。例えばスミスの「神の見えざる手」というのは、まさにそうした理解に彼らが経験的に到達していたことを意味するわけです。商人相互の自由な競争にゆだねておけば、「神の見えざる手」が働いて、自ずから社会的な生産はもっとも合理的なところにおいて均衡するという理解は古典派経済学のものでもあったと言えるでしょう。ただ古典派経済学が、そうした理解の実際の内容を理解していたかは疑問です。だからここで書かれていることは、古典派経済学の到達した理解そのものというより、彼らが「神の見えざる手」という言葉で語った、実際の内容を、マルクス自身が述べていると理解すべきではないでしょうか。

(j) だから、労働時間による価値の大きさの規定は、相対的な諸商品価値の現象的な運動の背後に隠された秘密です。

だから古典派経済学はこうした秘密を暴露したという点で、彼らは科学的な洞察に貢献できた歴史的な名譽を得ることができたということができるといえるでしょう。

(k) この秘密の発見は、労働生産物の価値の大きさが単に偶然に規定されるだけであるという外観を取り除きますが、しかし、この規定が物的に表現されなければならない現実を何一つ取り除くことはできません。

ここで「この規定の物的形態」というのが何を指すのかはやや分かりにくいように思えます。「この規定」というのは、「価値の大きさの規定」ということでしょうか。とするとある商品の「価値の大きさの規定の物的形態」というのは、結局、それは他の商品の使用価値量によって表現されるわけです。そしてそれが発展すれば、すなわち貨幣によって秤量されることになります。つまり諸商品の価値の大きさは、その商品の生産に必要な社会的な労働によって規定されるという科学的認識に例え達したとしても、商品の価値の大きさが貨幣の一定量によって尺度されなければならないという、商品生産社会の現実そのものは、何一つ変わらないし、取り除くことはできないのだ、ということです。つまり科学的認識は、対象を変革する条件にはなるが、対象の変革するには十分な条件ではない、ということです。そのためには対象を変革する実践が要求されるということかも知れません。

なおこのパラグラフの理解については、次の初版本が参考なると思えます。このパラグラフそのものは、この初版本を書き換えたものと言えます。

〈ところで、さらに、価値量にかんして言えば、互いに独立して営まれていても、自然発生的な分業の諸肢体であるがゆえに全面的に互いに依存しあっているところの、私的諸労働は、次のことによって、それらの社会的に約り合いのとれた大きさに、絶えず還元されている。すなわち、これらの労働の生産物の偶然的な、そして絶えず変動する交換割合のうちで、それらの生産物の生産のために社会的に必要な労働時間が、たとえばある人の頭上に家が崩れ落ちるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として暴力的に自己を貫徹する、ということによって。だから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の目に見える諸運動の背後に隠されて

いる秘密なのである。生産者たち自身の社会的な運動が、彼らにとっては、諸物の運動という形態をとっているのであって、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御されているのである。〉（江夏訳61-3頁）

【付属資料】

《初版本文》

〈ところで、さらに、**価値量**にかんして言えば、互いに独立して営まれていても、**自然発生的な分業**の諸肢体であるがゆえに全面的に互いに依存しあっているところの、私的諸労働は、次のことによって、それらの社会的に釣り合いのとれた大きさに、**絶えず還元**されている。すなわち、**これらの労働の生産物の偶然的な、そして絶えず変動する交換割合**のうちで、それらの生産物の生産のために社会的に必要な**労働時間**が、たとえばある人の頭上に家が崩れ落ちるときの重力の法則のように、**規制的な自然法則**として暴力的に自己を貫徹する、ということによって。だから、労働時間による**価値量の規定**は、**相対的な商品価値**の目に見える諸運動の背後に隠されている秘密なのである。生産者たち自身の社会的な運動が、彼らにとっては、**諸物の運動**という形態をとっているのであって、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御されているのである。ところで、最後に**価値形態**について言えば、この形態こそはまさに、私的労働者たちの社会的な諸関係を、したがって私的諸労働が社会的に規定されていることを、あらわにするのではなくて、**物的に蔽い隠している**。私が、上着や長靴等々は、抽象的な、人間的な、労働の一般的な具象物としてのリンネルに、関係していると言え、この表現の奇矯なことは明白である。ところが、上着や長靴等々の生産者たちが、これらの商品を**一般的な等価物**としてのリンネルに関係させると、彼らにとっては、自分たちの私的諸労働の社会的な関係が、まさにこのような奇矯な形態で現われるのである。〉（江夏訳61-3頁）

《補足と改訂》

〈生産物の交換者たちがさしあたり実際に関心をもつのは、自分の生産物と引き換えにどれだけの他人の生産物が手にはいるか、すなわち、生産物が交換される割合である。この割合が一定の慣習的な固定性まで成熟すると、この割合はあたかも労働生産物の本性から生じるかのように見える。p.4(草稿)を見よ。[32a]労働生産物の価値性格は、事実上、価値の大きさとしての諸生産物の発現によってはじめて展開する。価値の大きさは、生産者たちの意志と予見にはかわりなく絶えず変動する。生産者たちにとっては、彼ら自身の社会的運動が、したがって、諸物の運動という形態をとり、彼らはこの運動を制御するのではなく、制御されるのである。．．． [32]等[5, p.38]という科学的洞察が経験そのものから生じるためには、完全に発達した商品生産が必要なのである。5(p.39)、その最終的な解決は、価値の大きさの単なる偶然的な規定を廃棄するが、しかし、その物的形態を決して廃棄することはない。〉（32頁）

《フランス語版》

〈交換者が最初に実際上関心をもつことは、自分の生産物と引き換えにどれだけのものを手に入れるか、すなわち、生産物が互いに交換される比率を、知ることである。この比率がある慣習的な固定性を獲得するやいなや、それが交換者にとっては労働生産物の性質自体から生ずるかのように見える。化学物質が固定的な比率で化合しているのと同じように、これら諸物のうちには、一定の比率で交換されるという属性が宿っているかのように見える。労働生産物の価値性格が実際に自立するのは、労働生産物が価値量として規定されるばあいにかざられる。価値量は、生産者たちの意志や予測にかかわらずに不斷に変化し、したがって、彼ら自身の社会的運動が彼らの眼には物の運動という形をとる。彼らはこの運動を導きうどころではなく、運動が彼らをひきずるのである。次のような科学的真理が経験そのものから引き出されるまでには、商品生産が完全に発達していることが必要である。この科学的真理は、相互に独立して営まれる私的労働が、社会的、自然発生的な分業体制の分枝として絡み合っているとはいえず、その社会的な比率尺度に絶えず還元される、ということである。それでは、なぜか？私的労働の生産物の偶然的な、いつも可変的な交換比率においては、その生産に必要な社会的労働時間が規制的な自然法則として力づくで勝利を占めるからであり、このことは、象が頭上に崩れ落ちてくれれば誰にでも重力の法則が感じられるのと同じである。(28)したがって、労働時間によって価値量がきまるということは、商品の価値の表面的な運動の背後に隠された秘密である。とはいえ、この秘密の解決は、価値量が外観のように偶然的にきめられるものでないということを示すものの、それによって、価値量が諸物のあいだの、労働生産物自体のあいだの量的関係として表わされるところの形態を、消滅させることはない。〉（50-51頁）

【注28】 〈(28) 「周期的な革命によってのみ自己を貫徹しうる法則を、われわれは何と考えるべきであろうか？ それこそ、まさに、関与者たちの無意識にもとづいている自然法則なのである」(フリードリヒ・エンゲルス『国民経済学批判大綱』、所収、アーノルド・ルーゲおよびカール・マルクス編『独仏年誌』、パリ、一八四四年〔『全集』、第1巻、559ページ)〕。〉

《フランス語版》

〈(82) 「周期的な革命によってしか貫徹されえない法則については、どう考えるべきであろうか？ それはただに、この法則に従う人々の無意識にもとづく自然法則なのである」(フリードリヒ・エンゲルス『国民経済学批判大綱』、一〇三ページ。アルノルト・ル1ゲおよびカール・マルクス編『独仏年誌』、パリ、一八四四年、に所載)。〉（51頁）

『資本論』を読んでみませんか

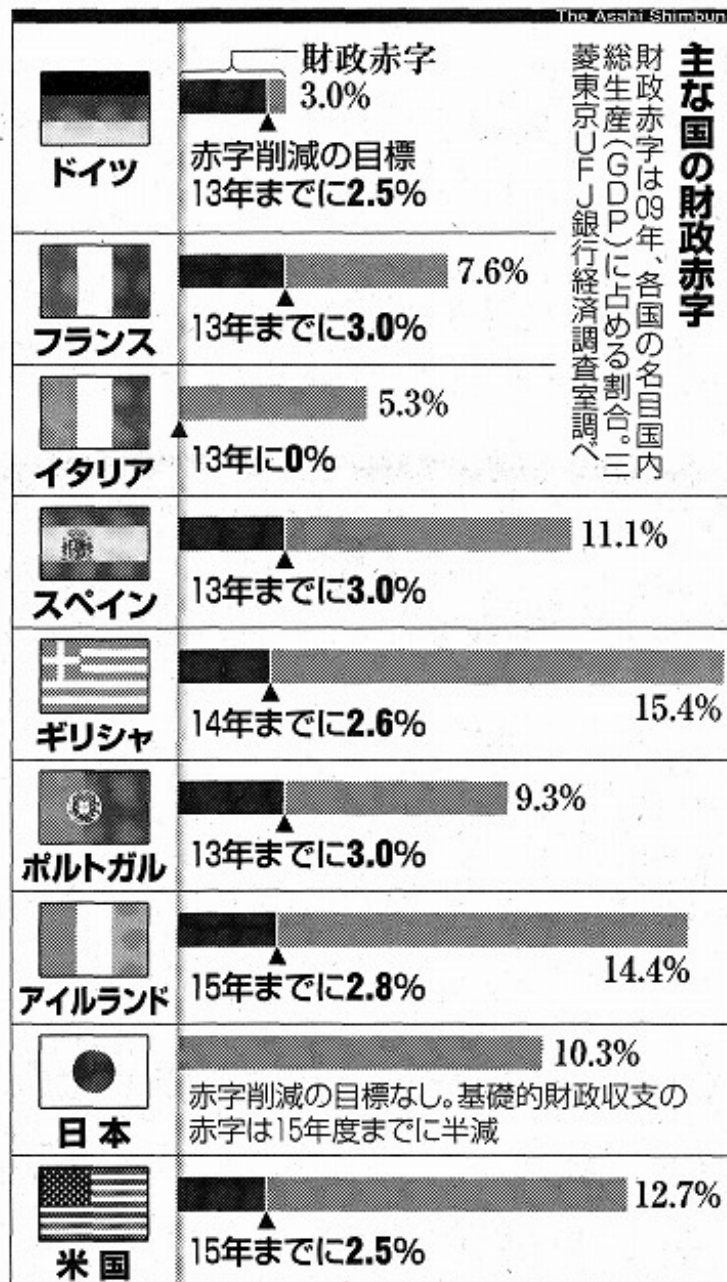
野田新内閣が誕生しました。自らを「ドジョウ」に例え、泥臭さを売りにしています。しかしウナギと同様ドジョウも、ヌルヌルして掴み所がないように、野田新政権も何をやろうとしているのか今のところ掴み所がありません。



しかしどうやら野田政権を全面的に支えているのは、増税実現に執念を燃やす財務省だと言われています（9月3日朝日）。野田首相も2日の就任会見で、「財政再建は待ったなしだ」と強調しました。経済財政相に財務省OBの古川元久を起用し、自民党時代の経済財政諮問会議を復活させて、司令塔に据えようとしているとも言われています。

まずは東日本大震災の復興のための復興増税、そして「税と社会保障の一体改革」なるものの消費税増税、等々。野田新政権は、どうやら増税一直線内閣になりそうな気配です。

おりから9月9日に主要7国（G7）財務省・中央銀行総裁会議が開かれました。今回のG7の主要議題は世界的な金融危機を招きかねない欧米の政府債務問題です。ソブリンデフォルト（国家債務不履行）のリスクが世界経済を揺さぶっているのです。



08年のリーマンショックから3年、未曾有の危機を脱するために各国は景気刺激策、金融緩和策として、政府債務を積み増してきました。そのツケがギリシャの債務危機やスペインやイタリアの信用不安として吹き出し、ユーロ圏全体を揺さぶっているのです。アメリカ国債の格付け会社(S&P)による格下げも同じような危機を暗示しています。そして日本の債務残高はもはや天文学的な数値になりつつあることは言うまでもありません。08年に次ぐ、世界的な経済恐慌の「二番底」が恐れられているのです。

マルクスは、資本主義的生産においては「信用主義(Creditsystem)から重金主義(Monetarsystem)への転回」は不可避だと指摘しています。マルクスの時代とは異なり、現代では世界的な信用システムが発展しています。だから現代の世界経済では、むき出しの金(キン)が出てくることはよほどのことがない限りはありません。しかし、マルクスが当時の国家的な危機の兆候である地金流出について述べていることは、高度に発展した現代の資本主義においても、依然として正しいのです。

「地金流出の諸結果のうちには、生産が現実には社会的生産として社会的統制を受けていないという事情が、富の社会的形態が富の外にある物として存在するという形で、はっきりと現われてくるのである。これは、じっさい、資本主義体制にもそれ以前の諸生産体制にも、これらの体制が商品取引と私的交換とにもとづいているかぎりでは、共通なことである。しかし、それは資本主義体制のなかではじめて最も明確に、そしてばかげた矛盾と背理との最もグロテスクな形で、現われるのである。なぜならば、（１）資本主義体制では、直接的使用価値のための、生産者たちの自家使用のための生産は最も完全に止揚されており、したがって、富は、ただ、生産と流通との錯綜として現われる社会的過程として存在するだけだからである。（２）信用制度の発展につれて、資本主義的生産は、このような、富とその運動との金属による制限を、物的であると同時に幻想的でもある制限を、絶えず廃棄しようとする努力ながら、また絶えず繰り返しこの制限に頭をぶつけるからである。」（全集25 b 740頁）

現代の世界経済の危機を読み解くためにも、貴方も『資本論』と一緒に読んでみませんか。

第38回「『資本論』を読む会」の報告

◎「自然の猛威」

3・11の東日本大震災では、地震と津波の恐ろしい破壊力に人力の限界を知らされました。最近では台風の猛威が紀伊半島を中心に大きな被害をもたらしました。「自然の猛威」はやはり圧倒的ではありません。

ただ同時に、私たちはこうした地震や津波、台風等に対して、現代の科学技術を総動員して対処している多くの人たちの努力もニュース等で知ることが出来ます。「自然の猛威」は確かにいまだ圧倒的ですが、しかし、それに対処する人間のカも確実に前進していることが確かめられるのではないのでしょうか。

幸い、私たちが生活する泉州地方は、台風の被害は今のところはほとんどありません。第38回「『資本論』を読む会」が開催された日は、まるで真夏のような日差しがありました。新しく参加された方は前回欠席されたために、参加が危ぶまれたのですが、今回は参加されました。徐々にでも参加者が増えていくことを期待したいものです。

◎第10パラグラフ

前回は第9パラグラフの一つのパラグラフだけでしたが、今回も、第10・第11の二つのパラグラフだけで終わりました。早速その報告を行います。前回の報告は亀仙人が欠席したために、若干形式を変えて「J」富村さんから送られてきた報告をそのまま紹介しましたが、今回はこれまでと同じように、まず本文を紹介し、文節ごとに記号〔(1)、(2)、・・・〕を付し、それぞれについて平易な解説を行い、その中で議論も紹介していくという形で行いたいと思います。

【10】〈(1)人間の生活の諸形態についての省察、したがってまたそれらの科学的分析は、一般に、現実の発展とは反対の道をたどる。(2)この分析は“後から”始まり、したがって発展過程の完成した諸結果から始まる。(3)労働生産物に商品の刻印を押す、したがって商品流通に前提されている、諸形態は、人々が、これらの形態の歴史的性格についてではなく――これらの形態は人々にはむしろすでに不変のものと考えられている――これらの形態の内実について解明しようとする以前に、すでに社会的生活の自然諸形態の固定性を帯びている。(4)こうして、価値の大きさの規定に導いたのは商品価格の分析にほかならなかったし、諸商品の価値性格の確定に導いたのは諸商品の共通な貨幣表現にほかならなかった。(5)ところが、商品世界のまさにこの完成形態――貨幣形態――こそは、私的諸労働の社会的性格、したがってまた私的労働者たちの社会的諸関係を、あらわに示さず、かえって、物的におおい隠すのである。(6)もし私が、上着、長靴などが抽象的労働の一般的化身としてのリンネルに関係すると言えば、この表現がばかげていることはすぐに目につく。(7)ところが、上着、長靴などの生産者たちが、これらの商品を、一般的等価としてのリンネルに――または金銀に、としても事態に変わりはない――関係させるならば、社会的総労働に対する彼らの私的諸労働の関係は彼らにとつてまさにこのばかげた形態で現れるのである。〉

(1)、(2) 人間の生活の諸形態についての省察、よってまたそれらの科学的分析は、一般には、現実の発展とは反対の道を辿ります。この分析は“後から”始まり、したがって発展過程の完成した諸結果から始まるのです。

これは「ミネルバの泉は夕暮れとともに飛び立つ」という有名なヘーゲルの言葉が示すものと同じ真実を語っているとの指摘がありました。つまり物事の概念的な考察は、対象が十分発達してから始まるということです。

またマルクスが『経済学批判要綱』の「序説」のなかで、「経済学の方法」という小項目を立てて、その中で、次のように述べているとの指摘もありました。

〈ブルジョア社会は、最も発展した最も多様な歴史的な生産組織である。それゆえ、ブルジョア社会の諸関係を表現する諸範疇は、またブルジョア社会の編制の理解は、同時に、すべての滅亡した社会形態の編制と生産関係との認識を可能にするのである。ブルジョア社会はこれらの社会形態の破片や要素でぎざぎざであったのであり、これらの要素のうちのみ一部克服されていない遺物がブルジョア社会のなかでまだ余命を保っていたり、たんに暗示されていただけのものが完成された意義をもつまでに発展していったりするのである。人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵である。ところが、下等な動物種類に見られる高等なものへの暗示は、この高等なもの自身がすでに知られている場合にだけ理解される。こうして、ブルジョア経済は古代その他の経済への鍵を提供するのである。〉（全集13巻632頁）

このマルクスの〈人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵である〉という言葉と関連させて、それは自然の認識についても言えるのかというピースさんの問題提起に触発される形で、個体発生と系統発生との関係や、論理と歴史との関係、物質の究極の構成要素であるクォークと宇宙のビッグバンに始まる進化の過程にまで話が及びました。それらはそれなりに興味深く、面白かったのですが、当面の課題から逸れますので、紹介は割愛したいと思います。

(3) 労働生産物に商品の極印を押す諸形態、だから商品流通に前提されている諸形態は、人々が、これらの形態の歴史的性格についてではないのですが――むしろこれらの形態は人々にとってはすでに不変のものと考えられています――これらの形態の内実について解明しようとする以前に、すでに社会的生活の自然諸形態の固定性を帯びています。

この部分では、まず「商品流通」という言葉が初めて出てくる箇所であり、第1章ではここだけで、第2章にも出てこず、第3章以降にしか出てこないことが指摘されました。そして第3章には、次のような説明があるとの指摘もありました。

〈ある一つの商品の循環をなしている二つの変態は、同時に他の二つの商品の逆の部分変態をなしている。同じ商品（リンネル）が、それ自身の変態の列を開始するとともに、他の一商品（小麦）の総変態を閉じる。その第一の変態、売りでは、その商品はこの二つの役を一身で演ずる。これに反して、生きとし生けるものの道をたどってこの商品そのものが化してゆく金儲（さなぎ）としては、それは同時に第三の一商品の第一の変態を終わらせる。こうして、各商品の変態列が描く循環は、他の諸商品の循環と解きがたくからみ合っている。この総過程は商品流通として現われる。〉（全

次に、〈これらの形態の歴史的 성격についてではなく――これらの形態は人々にはむしろすでに不変のものと考えられている――これらの形態の内実について解明しようとする以前に〉という部分で、どうして〈これらの形態の歴史的 성격についてではなく〉と書かれているのか、という疑問が出されました。これについては、この部分では総じて古典派経済学による物象的な過程の認識について論じていると思うが、古典派経済学者たちは商品流通に前提されている諸形態の内実については、ある程度までは認識することは出来たが、彼らはそれらの歴史的 성격についてはまったく認識できず、資本主義的生産様式を不変のものと考えていたことをここで指摘しているのではないだろうか、という意見が出されました。

そしてそうした古典派経済学者たちの認識が開始される段階では、すでに商品流通に前提されている諸形態（諸商品の価格、貨幣等々）は社会生活のありふれた現実として存在しており、だから古典派経済学者たちはそうした現象からその内実を把握する分析を開始する必要があったのだということではないかと思えます。

(c) だから価値の大きさの理解に導いたのは諸商品の価格の分析にほかなりませんでしたし、諸商品の価値性格を確定するようになったのは、諸商品の共通な貨幣表現から出発することによって可能だったのです。

この部分についても、古典派経済学者たちが、さまざまに変動する価格のなかに、その変動の中心となる「自然価格」の存在に気づき、価値の大きさの規定に至ったこと、また諸商品の共通な貨幣表現から、諸商品に共通な価値の存在に気づくようになったことが指摘されているのではないかとこの意見が出されました。

(d) ところが、商品世界の完成形態と言ってもよい、この貨幣形態こそ、私的諸労働の社会的性格、したがって私的労働者たちの社会的諸関係を、あらわに示さず、かえって、それを物的におおい隠すのです。

ここで貨幣形態のことを〈商品世界のまさにこの完成形態〉と述べているのは、貨幣形態が価値形態の発展の最後の形態であり、価値形態の発展が、商品形態の発展に照応しているというマルクスの指摘を思い出せば、よく理解できます。

マルクスは一般的価値形態について、〈労働生産物を区別のない人間労働の単なる凝固体として表す一般的価値形態は、それ自身の構造によって、それが商品世界の社会的表現であることを示している〉と述べ、〈こうして、一般的価値形態は、商品世界の内部では労働の一般的人間の性格が労働の特有な社会的性格をなしているということを明らかにしている〉述べていました。ところが一般的価値形態のさらに発展した貨幣形態では、20エルのリンネル＝2オンスの金 というように、その構造は単純な相対的価値形態に戻っています。貨幣形態では、商品世界の社会的表現は貨幣という物的属性と分かちがたく結びついてしまっているわけです。だから貨幣形態は私的労働の社会的性格や私的労働者たちの社会的諸関係を、かえって物的に覆い隠すといえるのだと思えます。

誰も自分の生産した生産物を販売して貨幣に変えることが、自分の私的労働の社会的性格を実証し、自分自身と他の多くの生産者たちの社会的関係を作り上げているのだ、などとは思わないわけです。

(A)、(B) もし私が、上着、長靴などを一般的等価物であるリンネルと交換することによって、抽象的人間労働の一般的化身であるリンネルに関係するといえれば、この表現がばかげていることはすぐに目につきます。ところが上着や長靴の生産者たちが、これらの商品を、一般的等価物としてのリンネルに――あるいは金銀に、としても同じですが――関係させるなら、社会的総労働に対する彼らの私的諸労働の関係は、彼らにとってまさにこの馬鹿げた形態で現れるわけです。

つまり上着や長靴の生産者たちは、こうしたことをまったく意識せずにやっているということでしょう。彼らは彼らの生産物を一般的等価物としてのリンネルと交換するということが、彼らの支出した私的諸労働が社会的な総労働のなかでその自然発生的な分業の一分肢であることを確認することになるわけですが、そうしたことも彼らは意識せずにやっています。ましてや彼らの交換行為は、抽象的人間労働の一般的化身であるリンネルに関係していることなのだ、といえれば、彼らはその馬鹿らしさに呆れるでしょうが、しかし、彼らが実際にやっていることは、実はそうしたことなのだ、ということではないでしょうか。

◎第8～第10パラグラフの位置づけ

以前、[第34回の「報告（その1）」](#)で、「第3パラグラフへの補足」を書きました。そこでは、現行版の第3パラグラフに該当する初版本の長い引用文を紹介し、それが第2版では現行のように簡潔にまとめられていること、同時に初版本に引用者が付けた(a)(b)(c)の各部分は第2版（現行版）の第8～第10パラグラフに部分的に使われていることも指摘しました。

まず現行版と初版本との関連については、次のように指摘しています。

「現行版の第3パラグラフでは、第2パラグラフにおいて価値規定の内容として述べられた、(1)価値の実体としての抽象的人間労働の基礎にある、人間有機体の諸機能としての本質的に人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出、(2)価値の大きさとしての社会的に必要な人間労働の基礎にある生理学的な意味での人間労働力の支出の継続時間、(3)労働の社会的形態のそれぞれが、商品形態においては、どのような物的、対象的形態を受け取るのかが説明されていました。すなわち(1)は労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を、(2)は労働生産物の価値の大きさという形態を、(3)は労働生産物の社会的関係という形態を、です。上記の初版本の(a)(b)(c)の各部分も、概ねこれら(1)(2)(3)に対応していると考えることができます。つまり初版本の(a)(b)(c)は、現行版の第3パラグラフの(n)の内容をそれぞれに解説するものと考えられるわけです。」

注：(文節(n)とは、次のようなものです。〈(n)人間労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の測定は、労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的諸規定がその中で発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。〉)

さらに第二版の第8～10パラグラフとの関連についても、次のように述べています。

「あるいはまた、この(a)(b)(c)の各部分が第二版の第8～10パラグラフに、若干文章を変えてではあるが、その一部として利用されているということは、この第二版の第8～10パラグラフは、第3パラグラフで価値規定の内容である三つの契機がそれぞれ商品形態において、どのような物的形態を受け取るかを簡潔に説明したものを、さらに展開して明らかに

しているところでもある、という位置づけも分かってくることになります。そうした現行版の各パラグラフ間の関係をみる上で、この初版本文は重要ではないかと思ったわけです」

それでは第8～第10パラグラフのどの部分が初版本文から転用したのでしょうか。それぞれについて現行版と初版本文を並べて紹介してみましょう。

●第8パラグラフではその前半部分がほぼ初版本文からの転用になっています。

・現行版 〈したがって、人間が彼らの労働生産物を価値としてたがいに関係させるのは、これらの物が彼らにとって一律な人間労働の単なる物的外皮として通用するからではない。逆である。彼らは、彼らの種類を異にする生産物を交換において価値としてたがいに等置しあうことによって、彼らのさまざまな異なる労働を人間労働としてたがいに等置するのである。彼はそれを知ってはいないけれども、それを行う(27)。だから、価値の額（*ヒイ*）にそれが何であるかが書かれているわけではない。むしろ、価値が、どの労働生産物をも一種の社会的象形文字に転化するのである。後になって、人間は、この象形文字の意味を解読して彼ら自身の社会的産物——というのは、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的産物だからである——の秘密の真相を知ろうとする。〉

・初版本文 〈人々が彼らの諸生産物を、これらの諸物が同種の人間労働の単なる物的外皮として認められているかぎりにおいて、価値として互いに関係させるならば、このことのうちには、同時にこのこととは逆に、彼らのいろいろな労働が、物的外皮のなかでは、同種の人間労働としてのみ認められる、ということが含まれている。彼らは、自分たちの諸生産物を価値として互いに関係させることによって、自分たちのいろいろな労働を人間労働として互いに関係させているのである。人的な関係が物的な形態で蔽い隠されている。したがって、価値の額には、価値がなんであるかは書かれていない。人々は、自分たちの諸生産物を商品として互いに関係させるためには、自分たちのいろいろな労働を、抽象的な、人間的な、労働に、等置することを強制されている。彼らはこのことを知っていないが、彼らは、物質的な物を抽象物である価値に還元することによって、このことを行なうのである。これこそが、彼らの頭脳の自然発生的な、したがって無意識的で本能的な作用であって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産によって彼らが置かれているところの諸関係とから、必然的にはえ出てくるものである。第一に、彼らの関係は実践的に存在している。だがしかし、第二に、彼らは人間であるがゆえに、彼らの関係は、彼らにとっての関係として存在している。それが彼らにとって存在している仕方、あるいは、それが彼らの頭脳のなかに反射している仕方は、この関係の性質そのものから生まれてくる。のちになって彼らは、科学に頼って、彼ら自身の社会的生産物の秘密を見抜こうとする。なぜならば、物の価値としての規定は、言語と同じに、彼らの産物だからである。〉

●第9パラグラフは、後半部分です。

・現行版 〈価値の大きさは、交換者たちの意志、予見、および行為にはかわりなく、たえず変動する。交換者たち自身の社会的運動が、彼らにとっては、諸物の運動という形態をとり、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御される。たがいに独立〔unabhaengig〕に営まれながら、しかも社会的分業の自然発生的な諸分枝としてたがいに全面的に依存している〔abhaengig〕私的諸労働が社会的に均斉のとれた基準にたえず還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的でつねに動揺している交換比率を通して、それらの生産のために社会的に必要な労働時間が——たとえば、だれかの頭の上に家が崩れおちる時の重力の法則のように——規制的な自然法則として暴力的に自己を貫徹するからである(28)、という科学的洞察が経験そのものから生じるためには、その前に、完全に発展した商品生産が必要である。〉

・初版本文 〈ところで、さらに、価値量にかんして言えば、互いに独立して営まれていても、自然発生的な分業の諸肢体であるがゆえに全面的に互いに依存しあっているところの、私的諸労働は、次のことによって、それらの社会的に釣り合いのとれた大きさに、絶えず還元されている。すなわち、これらの労働の生産物の偶然的な、そして絶えず変動する交換割合のうちで、それらの生産物の生産のために社会的に必要な労働時間が、たとえばある人の頭上に家が崩れ落ちるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として暴力的に自己を貫徹する、ということによって(26)。だから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の目に見える諸運動の背後に隠されている秘密なのである。生産者たち自身の社会的な運動が、彼らにとっては、諸物の運動という形態をとっているのであって、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御されているのである。〉

●第10パラグラフは、最後の部分が初版本文からの転用になっています。

・現行版 〈ところが、商品世界のまさにこの完成形態——貨幣形態——こそは、私的諸労働の社会的性格、したがってまた私的労働者たちの社会的諸関係を、あらわに示さず、かえって、物的におおひ隠すのである。もし私が、上着、長靴などが抽象的人間労働の一般的化身としてのリンネルに関係すると言えば、この表現がばかげていることはすぐに目につく。ところが、上着、長靴などの生産者たちが、これらの商品を、一般的等価としてのリンネルに——または金銀に、としても事態に変わりはない——関係させるならば、社会的総労働に対する彼らの私的諸労働の関係は彼らにとってまさにこのばかげた形態で現れるのである。〉

・初版本文 〈ところで、最後に価値形態について言えば、この形態こそはまさに、私的労働者たちの社会的な諸関係を、したがって私的諸労働が社会的に規定されていることを、あらわにするのではなく、物的に蔽い隠している。私が、上着や長靴等々は、抽象的な、人間的な、労働の一般的な具象物としてのリンネルに、関係していると言えば、この表現の奇矯なことは明白である。ところが、上着や長靴等々の生産者たちが、これらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに関係させると、彼らにとっては、自分たちの私的諸労働の社会的な関係が、まさにこのような奇矯な形態で現れるのである。〉

このように現行版と初版本文とを比べると、微妙に文章に手を入れて、マルクスは第2版に転用していることが分かります。もう一度、初版本文の展開から類推できる第8～第10パラグラフの位置づけについて確認しておきましょう。

マルクスは、第2パラグラフで商品の神秘的性格は価値規定の内容から生じるものではないことを指摘し、価値規定の内容として三つの契機のそれぞれについてそれらには神秘性がないことを確認しています。そして第3パラグラフの冒頭、〈では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎のような性格は、どこから来るのか?〉と問い、それは〈この形態そのものから〉だとして、価値規定の内容の三つの契機が、それらが商品形態において、それぞれどのような神秘性を帯びるのかを明らかにします。

初版本文では、そうした現行版の簡潔な説明の代わりに、そうした価値規定の内容である三つの契機が、商品形態でどのような神秘的性格を受け取るのかを、それぞれについて詳しく展開しているのが、現行版の第8～第10パラグラフに転用されたものなのです。

だから現行版の第8～第10パラグラフについて、おおよそいえることは、価値規定の内容の三つの契機が、商品形態で受け取るそれぞれの神秘的性格について、さらに展開したものと言うことができるでしょう。ただマルクスはそれらを現行版では、商品生産者たちの意識には、どのような形で捉えられるかという観点を加えて論じているように思えます（なお初版本が現行版では、その展開がどのように変えられたのか、そしてそれはどんな意味があるのか、ということについては、もっとあとで――この節の終わりぐらいで――考えてみることにしましょう）。

◎第11パラグラフについて

【11】〈(f)この種の諸形態こそが、まさにブルジョア経済学の諸カテゴリーをなしている。(g)それらは、商品生産というこの歴史的に規定された社会的生産様式の生産諸関係についての、社会的に認められた、つまり客観的な思考諸形態なのである。(h)したがって、商品生産の基礎の上で労働生産物を霧に包む商品世界のいっさいの神秘化、いっさいの魔法妖術は、われわれが別の生産諸形態のところに逃げこむやいなやただちに消えうせる。〉

(f) この種の諸形態こそが、ブルジョア経済学の諸カテゴリーをなしているのです。

ここで〈この種の諸形態〉というのは、何を指しているのが問題になりました。これは一見すると、その直前の前パラグラフの最後で述べている〈このばかげた形態〉を受けているように思えるのですが、そうではなく、前のパラグラフで〈労働生産物に商品の刻印を押す、したがって商品流通に前提されている、諸形態〉のことではないかということになりました。それらは〈人々が、……これらの形態の内実について解明しようとする以前に、すでに社会的生活の自然諸形態の固定性をおびている〉ようなものです。ブルジョア経済学はそうした固定性をおびた現象諸形態から出発して、その内実である価値の大きさや価値性格を確定したわけですから、それがブルジョア経済学の諸カテゴリーをなしていると述べていると思えます。

(g) その意味では、それらは、商品生産というこの歴史的に規定された社会的生産様式の生産諸関係についての、社会的に認められた、つまり客観的な思考諸形態なのです。

ブルジョア経済学の諸カテゴリーとはいえ、それは社会生活の自然諸形態の固定性をおびた現象から、その内実のある程度まで捉えたものであり、その限りでは、商品生産という歴史的に規定された生産様式の生産諸関係を、客観的に理解しようとするものであるということでしょう。

(h) だから、商品生産の基礎の上で労働生産物を霧の中に包む商品世界のいっさいの神秘化、一切の魔法妖術は、私たちが別の生産諸形態に逃避するや、直ちに消え失せるのです。

商品の物神的性格というのは、商品生産という歴史的に規定された社会的生産に固有のものでありますから、商品生産とは違った別の社会的な生産では、そうした神秘的なものはなくなるということですから、それを次のパラグラフからみて行くことになります。

.....

【付属資料】

●第10パラグラフに関連するもの

《初版本文》

〈私が、上着や長靴等々は、抽象的な、人間的な、労働の・一般的な具象物としてのリンネルに、関係していると言えば、この表現の奇矯なことは明白である。ところが、上着や長靴等々の生産者たちが、これらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに関係させると、彼らにとっては、自分たちの私的諸労働の社会的な関係が、まさにこのような奇矯な形態で現われるのである。〉（63頁）

《補足と改訂》

〈社会的生活の諸形態についての考察は、したがってそれらの科学的分析もまた、本来つねに、現実の発展とは反対の道をたどる。この分析はあとからくpost fest日間>発展過程の完成した諸結果から始まる。労働生産物に商品の刻印を押す、それゆえ商品流通に(43)前提されている諸形態は、人々が、これらの形態の歴史的な性格についてではなく――これらの形態は人々にはむしろすでに不変のものと考えられている――これらの形態の内実について解明しようとする以前に、すでに社会的生活の自然諸形態の固定性を帯びている。こうして、価値の大きさの規定に導いたのは商品価格の分析にほかならなかったし、諸商品の価値性格の確定に導いたのは、諸商品の共通な貨幣表現にほかならなかった。ところが、商品世界のまさにこの完成形態――そしてそれは貨幣形態においてのみ存在するのだが――こそは、私的諸労働の社会的性格を、それゆえ私的労働者の社会的関係を、あらわにしめさず、かえって、物的におおい隠すのである。〉（32-3頁）

《フランス語版》

〈社会生活の諸形態にかんする反省、したがって、それらの科学的分析は、現実の運動とは完全に反対の道に沿って行く。それは後から、すでにすっかり確立された与件とともに、発展の結果とともに始まる。労働生産物に商品の刻印を押し、したがって、商品流通をすでに支配している諸形態が、すでに社会生活の自然形態として固定されるにいたってはじめて、人間は、自分たちにはむしろ不変なものに見えるこれらの形態について、その歴史的な性格ではなくその内的意義を理解しようとする。こうして、商品価格の分析からのみ、商品価値の量的規定が導かれたのであり、商品の共通な貨幣表現からのみ、商品の価値性格の固定が導かれたのであった。ところで、商品世界のこうした固定した既定の形態、商品の貨幣形態は、私的労働の社会的性格と生産者たちの社会的関係をあぼくのではなしに、これを蔽い隠すだけである。小麦や上衣や長靴は、抽象的な人間労働の一般的な化身としてのリンネルに関連する、と私が言うならば、この表現の虚偽と異常さはたちどころに一目瞭然である。ところが、これらの商品の生産者たちが、これらの商品をリソネルあるいは金か銀に、同じことになるが、一般的等価値に関連させるばあい、彼らの私的労働と社会の総労働とのあいだの関係は、彼らにはまさにこういう奇妙な形態のもとで現われるのだ。〉 (51頁)

●第11パラグラフに関連するもの

《初版本文》

〈この種の諸形態は、まさに、ブルジョア経済学の諸範疇を形成している。これらの諸形態は、この歴史的に規定されている社会的な生産様式の生産諸関係にとっての、社会的に妥当な・つまり客観的な・思考形態である。〉

《補足と改訂》

〈(P.39)それゆえ、商品生産の基礎上で労働生産物を霧に包む商品世界のいっさいの神秘化、いっさいの魔法妖術は、われわれが別の生産諸形態のところに逃げ込むやいなや、ただちに消えうせる。〉 (33頁)

《フランス語版》

〈ブルジョア経済学の諸範疇は、それらが現実の社会的諸関係を反映するがぎり、客観的な真理をもつ悟性形態であるが、これらの諸関係は、商品生産が社会的な生産様式であるような特定の歴史時代にしか属していない。われわれが別の生産形態を考察すれば、現代において労働生産物を蔽い隠しているこの神秘性はまるごと、たちどころに消え失せるであろう。〉 (51-2頁)

『資本論』を読んでみませんか

EUの信用不安が止まらない。

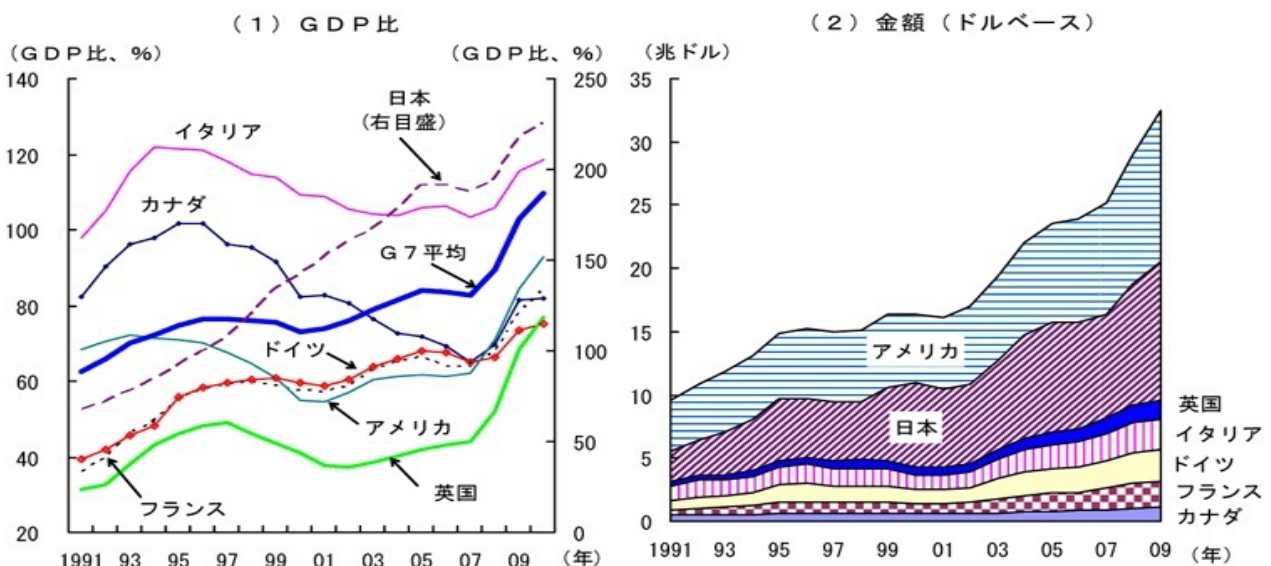
EUの政府債務問題への対応が、なかなか具体化しないからである。

まず当面の課題としてギリシャのデフォルト（債務不履行）回避に必要とされる計80億ユーロ（約8千億円）の融資さえ、3日の財務相会合では決定を先送りしてしまった。ギリシャが来年までの財政赤字削減目標の達成が困難と表明したこともあり、ギリシャの財政状況を検証する専門家チームの結論待ちの様相である。

さらにEU全体に広まる信用不安に対応する欧州金融安定化基金（EFSF）の拡充にしても、具体的には進みそうもないのである。

こうした政府債務危機がEUにおいて表面化したのは、EUでは通貨は統一しているものの、財政や国債の発行は各国バラバラであり、08年のリーマン・ショックによる資本の危機を救済するために、各国がそれぞれに野放図に政府債務を拡大したからである。そのツケが、ギリシャなど経済的に弱い部分からソブリン・リスク（国家危機）として生じ、それがEU全体の信用不安へと拡大する恐れが出てきているわけである。

世界の先進各国が国債発行等によって国家財政の赤字を拡大して資本救済に走り始めたのは、70年代の石油ショック以降であるが、特に08年の世界的な金融恐慌以降は、ほとんどの国で財政赤字が拡大している。だからEUの危機は“対岸の火事”ではなく、世界的な信用不安へと再び突入する恐れが出てきているのである。



(備考) 1. IMF “World Economic Outlook Database October 2010” より作成。
2. G7平均は、GDP（購買力平価ベース）の加重平均。

主要先進国の一般政府債務残高（グロスベース）

ソブリンデフォルト（国家債務不履行）のリスクは、資本主義の矛盾の総合的な爆発である世界市場恐慌の現代的な

現れとすることができる。現代資本主義においては、国家の経済過程への介入が重要な特徴の一つになっており、それに伴って、恐慌の現れ方も変化してきたからである。

マルクスは、国家の経済過程への介入について、資本主義が黎明期（本源的蓄積期）にあったとき、植民制度や国債制度、近代的租税制度、保護貿易制度によって、資本の強蓄積を温室的に促進したと指摘している。その後、資本主義は自由競争の時代に入り、国家の干渉を極力排除する“自由放任”が主張された。しかし、19世紀の後半になると、資本主義は独占資本主義の時代へと突入し、再び国家の経済過程への介入は顕著になってきたのである。

もっとも同じ国家の経済過程への介入といっても、国家の果たす歴史的役割は異なっている。一方は資本主義の黎明期に、資本主義の本源的蓄積を助け保護したのに対して、他方は資本主義の黄昏期に、資本主義的生産の崩壊を国家的信用によってくい止め、その延命を図ろうとするものである。

マルクス自身は、こうした現代資本主義の新しい傾向を知るよしもなかったが、しかしそれでも、現代資本主義では普遍的なものとなった株式会社の発展について、〈それはある種の諸部面では独占を成立させ、したがってまた国家の干渉を誘い出す〉（全集25a559頁）と、将来の資本主義においては、国家の干渉が重要な特徴になることを示唆している。

このように、現代資本主義を深く理解するためには、やはり『資本論』の研究は必要である。ぜひ、貴方もいっしょに『資本論』を読んでみませんか。

第39回「『資本論』を読む会」の報告

◎99パーセントの怒り

「ウォール街を占拠せよ」のスローガンをかけニューヨークから始まった民衆の抗議行動は、たちまち全米に広がり、さらに全世界へと広がりをみせつつあるかです。それは自然発生的で雑多な要求を掲げたものですが、資本主義への怒りの告発であることは確かなようです。“政府は国民の99パーセントの犠牲のもとに、国民の1パーセントの富裕層を救済し優遇している”というのが、彼らの主要な批判なのだそうです。この告発はもっともといえます。

以前、08年のリーマン・ショックのあと、保険大手のAIG（アメリカン・インターナショナル・グループ）の巨額報酬が問題になりました。その時も書きましたが、彼らはバブルを煽った張本人でありながら、1700億ドル（約17兆円）もの公的資金による救済をよいくことに、それを山分けして、金融商品部門の幹部が総額160億円（一人当たりの最高額は約6億2700万円）ものボーナスを受け取っていたのです。また証券大手のメリルリンチも、総額450億ドル（約4兆5000億円）の公的資金の注入を受けながら、そのトップ10の社員へのボーナスの支払い総額は約209億円（平均約20億円！）という凄まじい額の大金を食っていたのです。アメリカの99パーセントの国民の怒りは、当然といえば、あまりにも当然ではないでしょうか。

しかし資本主義の告発と抗議の大衆行動が、資本主義的生産様式そのもの変革へと発展するためには、ただ自然発生的なものに留まっていたのでは不可能です。それが意識的で組織的なものへと発展しなければ、本当に変革する力にはならないでしょう。そしてそのためにはやはり資本主義的生産様式そのものに対する科学的な認識が不可欠ではないでしょうか。『資本論』の学習は地道ではありますが、やはり重要なのです。

“我田引水”よろしく「『資本論』を読む会」の宣伝を思わずしてしまいました。しかし、現実には厳しいもので、第39回の学習会も、相変わらず寂しいものでした。さっそくその報告を行いたいと思います。

◎第12パラグラフ

今回は第12・13の二つのパラグラフを進みました。今回のパラグラフからは「ロビンソン物語」が出てきますが、これらは如何なる意味があるのか、それが分かるその前の第11パラグラフの最後の一文を紹介しておきましょう。

〈したがって、商品生産の基礎の上で労働生産物を露に包む商品世界のいっさいの神秘化、いっさいの魔法妖術は、われわれが別の生産諸形態のところに逃げこむやいなやただちに消えうせる。〉

だから今回の第12パラグラフから第15パラグラフまでは、マルクスが〈別の生産諸形態のところに逃げこむ〉と述べている、その〈別の生産諸形態〉が具体的に検討されることになります。では、それを具体的に見て行くことにしましょう。今回もこれまでと同様に、まずパラグラフ本文を紹介し、それを文節ごとに記号を打って、それぞれを平易に書き下すなかで、議論の紹介もして行くことにします。まずは本文の紹介です。

【12】 〈(1)経済学はロビンソン物語を好むから(29)、まず孤島のロビンソンに登場願おう。(3)生まれつきつましい彼ではあるが、それでもさまざまな欲求を満たさなければならず、したがってまた、道具をつくり、家具をこしらえ、ラマ〔南アメリカ産のラクダ科の役畜〕を馴らし、魚をとり、狩りをするといったさまざまな種類の有用労働を行わなければならない。(4)祈祷やこれに類することは、ここでは問題にしない。(5)なぜなら、わがロビンソンは、それに喜びを見だし、この種の活動をくつろぎと見なしているからである。(6)彼の生産的機能はさまざまに異なってはいるけれども、彼は、それらの機能が同じロビンソンのあい異なる活動形態にほかならず、したがって、人間労働のあい異なる様式にほかならないことを知っている。(7)彼は、必要そのものにせまられて、彼の時間を彼のさまざまな機能のあいだに正確に配分しなければならない。(8)彼の全活動の中でどの機能がより大きい範囲を占め、どの機能がより小さい範囲を占めるかは、所期の有用効果の達成のために克服されなければならない困難の大小によって決まる。(9)経験がそれを彼に教える。(10)そして、わがロビンソンは、時計と帳簿とインクとペンとを難破船から救いだしているので、立派なイギリス人らしく、やがて自分自身のことを帳簿につけ始める。(11)彼の財産目録には、彼が所有する諸使用対象と、それらの生産に必要とされるさまざまな作業と、最後に、これらのさまざまな生産物の一定量のために彼が平均的に費やす労働時間との一覧表が含まれている。(12)ロビンソンと彼の手製の富である諸物とのあいだのすべての関係は、ここではきわめて簡単明瞭であって、M・ヴィルト氏でさえ、とりたてて頭を痛めることなくしに理解できたほどである。(13)にもかかわらず、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれているのである。〉

(1) 経済学はロビンソン物語を好みますから、まず孤島のロビンソンに登場してもらいましょう。

ここで学習会では次のような疑問が出されました。先に見たように、マルクスはその前の第11パラグラフで商品生産とは異なる〈別の生産諸形態〉に〈逃げこむ〉と書いています。しかし果たしてロビンソンの孤島の生活はそうした〈別の生産形態〉というようなものかと言いうるのだろうか、という疑問です。ロビンソン物語そのものは一つの空想物語ですから、第13～15パラグラフのようなものと同じ〈別の生産諸形態〉の一つといえるようなものだろうか、という疑問です。この疑問は、このマルクスのロビンソン物語の考察は、そもそもどういう意義があるのか、という問題と関連しているように思えます。ただ、この問題は、少し詳しく論じようと思いますので、項を改めてその議論も含めて紹介したいと思います。

(12) ロビンソンは、生まれつきつましい生活をしているのですが、それでもやはりさまざまな欲求を満たさねばならず、だからそれに必要な、道具や家具をこしらえ、ラマを馴らし、魚をとり、狩りをするというようにさまざまな種類の有用労働を行わなければならない。

ロビンソンは彼のつましい生活を維持するためだけでも、さまざまな欲求を満たさなければならず、そのために彼をとりまく自然に働きかけて、そこから彼の欲求を満たす有用物を得なければなりません。ここで問題になるのは、有用労働だということです。そして有用労働というものには、何らの神秘性もないことはあきらかです。

(11)、(12) しかし、われわれは彼がやるであろう、祈祷やそれに類することは、ここでは問題にしない。というのは、それらは彼にとっては喜びであって、一つのくつろぎだろうからです。

ここでは、労働を犠牲と考えたアダム・スミスを批判して、マルクスは労働は賃労働という歴史的形態を脱ぎ捨てれば、個人の自己実現となり、魅力的なものになりうると主張していること、しかしそのことは、フーリエが考えるような、労働を単なる慰みや、娯楽になるというようなことでは決していないのだとも述べていることが紹介されました。だからここで祈祷やそれに類するものを問題にしない理由として、マルクスが〈なぜなら、わがロビンソンは、それに喜びを見だし、この種の活動をくつろぎと見なしているから〉と述べているのは、そうしたマルクスの労働に対する認識が背景にあるのではないかとということです。

(8) ロビンソンの生産的な機能はさまざまに異なっていますが、しかし、彼は、それらの機能が同じ自分自身の異なった活動形態であり、だから、それらは人間労働の違った様式であることを知っています。

この部分は、マルクスが第2パラグラフで、商品の神秘的性格が価値規定の内容から生じるものではない理由として、第一に上げていた次の一文に対応しているように思えます。

くと言うのは、第一に、有用労働または生産的活動がたがいどんなに異なっても、それらが人間の有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容やその形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、一つの生理学的真理だからである。)

つまりこうしたこともロビンソンがハッキリ自覚していることであり、そこには何の神秘的なものはないということでしょう。

(A) ロビンソンは、その彼のさまざまな機能を必要にせまられて、彼の時間をさまざまな機能のあいだに正確に配分しなければなりません。

この部分も第2パラグラフの価値規定の内容については神秘的なものはない第二の理由として述べていた次のような一文に対応していると考えられます。

〈第二に、価値の大きさの規定の基礎にあるもの、すなわち、右のような支出の継続時間または労働の量について言えば、この量は労働の質から感覚的にも区別されるものである。どんな状態のもとも、人間は――発展段階の相違によって様ではないが――生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった。)

(h)、(f) 彼の全活動のなかで、どの機能がより大きな範囲を占めるか、あるいはどの機能がより小さい範囲を占めるかは、必要な有用な効果を達成するためにやらなければならないことの困難さの大小によって決まってくるでしょう。経験がそれを彼に教えます。

この部分もロビンソンのさまざまな諸機能が対象である自然に働きかけて、彼が目的にしたものを獲得するために、相互に有機的に関連しあった形で支出される必要があることが指摘されているわけですが、これも先の価値規定の内容の第三のものに対応していると考えることが出来るでしょう。

〈最後に、人間が何らかの様式でたがいのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的形態を受け取る。)

つまり社会的にはさまざまな人間によって担われる、彼らの社会的形態を受けた労働、すなわち社会的に結びあっている労働が、ロビンソンの場合は、彼自身のさまざまな機能として一人の人間の諸機能として関連し合って支出されるということです。

このようにこれらのロビンソンの労働の分析は、第2パラグラフの価値規定の内容には何の神秘的な性格はないと述べていた内容に対応しています。これはある意味では当然なのです。というのは、初版本文では、この第12パラグラフのロビンソンの生活の考察と、第15パラグラフの将来の自由な人々の連合体の社会の考察は、第2パラグラフの直後に、その第2パラグラフで述べている価値規定の内容には神秘的なものは何もない具体的な例証として論じられていたものなのです(だから初版では第3、第4パラグラフにありました)。それをマルクスは第2版ではやや位置づけを変えて、今の位置に持ってきているのです。こうした初版と第2版との違いは、どういう意味があるのかも、一つの問題といえませんが、それはまた別に機会があれば論じたいと思います。

(l) そしてロビンソンは、それぞれの物を生産するに必要な時間がどれだけかを帳簿につけ始めます。

(j) 彼の財産目録には、彼が所有する諸使用対象がどれとどれかが記されるとともに、それらの生産に必要なさまざまな作業や、そして一つの生産物の一定量を生産するために、彼が必要とした平均的な労働時間の一覧表が含まれていることでしょう。

こうしてロビンソンは、彼の生活を維持し、再生産するためには、自分の時間のうち、どの作業にどれだけ費やせばよいかを知っているので、彼は彼自身の労働を意識的に合理的な計画のもとに支出して、彼の生活を、つまり自然と物質代謝を維持することが出来るようになるわけです。

(k) ロビンソンと彼の手製の富である諸物とのあいだのすべての関係は、ここではきわめて簡単明瞭であって、俗物経済学者のM・ヴィルト氏でさえ、とりたてて頭を痛めることもなしに理解できたことでしょう。

(g) にもかかわらず、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれているのです。

つまり価値規定の内容というのは、こうした人間と自然と物質代謝を規制するもとも原理的な、自然法則ともいふべきものなのだという事ではないでしょうか。

関連して少し思い出したことがあります。私たちの仲間なかで以前「有用労働による価値移転」問題が論争になりました。一部の人は「有用労働が『価値』の概念の根底に入り込むのはおかしい」と疑問を出し、マルクスの理論を事実上否定しました。しかし、このロビンソンの労働の分析を考えてみると、問題は分かりやすいように思えます。例えばロビンソンは家具を作るために、彼の時間のうち木を伐採するのに3時間、その木から材木を作るのに10時間、そして材木から家具を作るのに20時間を要したとします。これらの〈彼の全活動の中でどの機能がより大きい範囲を占め、どの機能がより小さい範囲を占めるかは、所期の有用効果の達成のために克服されなければならない困難の大小によって決まる〉わけです。つまりロビンソンがどの労働にどれだけを支出しなければならないかは、彼の具体的な有用労働の内容によって決まってくるわけです。だからロビンソンのノートには彼の財産である家具とそれに必要な作業(伐採、製材、木工)とそれらに費やされた時間が記録されています。そして家具の生産には全体としてかかった時間として、それらをトータルして33時間と書かれているはずですが、有用労働による価値移転というのは、こうしたかかった労働時間が最終の生産物の生産に必要な労働時間としてトータルされるというまったく自明な自然の原理を、ただそれぞれの労働がロビンソンの労働や自由な人々の連合体のように直接には社会的に結びついていないがために、それぞれの労働の社会的性格が、それぞれの労働の生産物の価値性格として表されるをえない社会に固有の問題であることが分かるわけです。つまりそれらの諸労働が諸商品の交換を通じて一定量の価値として、その社会的な関連が実証されるからこそ、その関連が、最終生産物に価値が移転するという形態で現れてくるということが分かるのです。それらの諸労働の社会的関連というのは、それぞれの労働の具体的な有用な側面が表しています。木を切る伐採労働と、その木から材木を作る製材労働、材木から家具を作る木工労働は、一つの社会的な分業を形成しています。しかし、商品生産社会では、これらの諸労働の社会的結びつきは直接的ではなく、ただそれらの労働の生産物が商品として交換されるなかで実証されるしかありません。だからこそ、それらは価値の移転という形で関連し合い、最終の労働生産物の価値として堆積されることになるわけです。そしてそれぞれの労働生産物を加工して新たな生産物を作るのはそれぞれの具体的な有用労働ですから、だから、マルクスは有用労働によって価値は移転されるのだとしたのだと思います。

◎「マルクスのロビンソン物語」?

さて、このパラグラフの性格について改めて考えてみましょう。

マルクスは冒頭「経済学はロビンソン物語を好む」と述べていますが、久留間敏造編『マルクス経済学レキシコン』第5巻「唯物史観」の一つの項目に「4、台頭しつつある18世紀のブルジョアジーの一種のイデオロギーとしてのロビンソン物語」というのがあります。つまりロビンソン物語というのは、18世紀のブルジョアジーの一つのイデオロギーであったということです。ただ久留間氏は、この小項目を設けた理由を、レキシコンの「葉No.5」のなかで次のように述べています。

〈久留間 これ(ロビンソン物語――引用者)はブルジョアのイデオロギーにはちがいないが、マルクスも言っている

ように、本来は18世紀の革命的ブルジョアのイデオロギーで、社会契約論に代表される、もともと人間は個々独立のものであったという幻想です。それがスミスによって経済学にもちこまれ、リカードにうけつがれた、孤立した猟師や漁夫の想定です。こうした学説をマルクスはロビンソン物語と名づけて批判しているのです。だからこの批判の対象とされているのは、現在はずでにすたれている過去のイデオロギーであって、その批判は革命期のブルジョアジーのイデオロギーの考察にとつては大きな意義があるが、直接現実の問題に関係があるわけではない。だから、この批判を一つの独立項目として集録することについてはちおう躊躇したのですが、結局そうすることにしたのは、「マルクスのいわゆるロビンソン物語」についてとんでもない誤解があることを考慮したからです。マルクスは『資本論』の「商品の物性的性格」のところで、「経済学はロビンソン物語を愛好するから」といって、孤島に漂着したロビンソン・クルーソーがどのようなやり方で彼の労働力を彼の生活の必要をみたすためにいろいろの仕事に割り当てるかを述べていますが、これがいわゆるマルクスのロビンソン物語なのだということです。そういうことをだれかが書いたので、この誤解がかなりの範囲に普及しているらしい。これはぜひ訂正する必要がある。そういうことも考えて、結局この項目を設けることにしたわけです。)

どうやら、久留間氏によると、古典派経済学にロビンソン物語があるように、マルクスにもロビンソン物語があり、それがこの「商品の物性的性格」を論じた部分だという見解があるのだそうです。そしてどうやら、久留間氏はそれは間違いだと考えているようです。だからそれを論証するために、この小項目を設けたようなのです。確かにこの小項目では、「経済学批判要綱」からマルクスが古典派経済学のロビンソン物語を批判している部分が二カ所にわたって長く抜粋されて、紹介されています。ところが、奇妙なことに、『資本論』からは、第1章第4節「商品の物性的性格とその秘密」の第12パラグラフ全体ではなく、わずかその冒頭部分だけ、すなわち「経済学はロビンソン物語を好むから(29)、まず孤島のロビンソンに登場願おう」という部分だけと、その注29全文が紹介されているのみなのです。

なるほど、久留間氏によれば、この第12パラグラフの冒頭に続く部分は、「マルクスにもロビンソン物語がある」という誤解を与えかねないものだと判断なのかも知れません。しかし、こうした抜粋の仕方、レキシコンの他の抜粋のやり方から考えても、かなり恣意的な印象を持たざるを得ません。

確かに『要綱』からの引用文のなかでは、マルクスは次のように古典派経済学のロビンソン物語を批判しています。

　　(a)ここで対象はまず第一に物質的生産である。　　社会のなかで生産をおこなう諸個人――したがって諸個人の社会的に規定された生産、いうまでもなくこれが出発点である。個々の孤立した猟師や漁夫、スミスやリカードはここから出発するのであるが、これらのものは、一八世紀のロビンソン物語の幻想のない想像物に属するのであって、この想像物は、けっして、文化史家たちの想像するようにたんに過度の洗練にたいする反動や誤解された自然生活への復帰だけを表現するものではない。それは、本来は独立している諸主体を契約によって関係させ結合するルソーの社会契約 (contant social) と同様、そのような自然主義にもとづくものではない。このような自然主義は、大小のロビンソン物語の外観であり、しかもただ美的な外観でしかない。それは、むしろ、一六世紀以来準備されて一八世紀に成熟への巨歩を進めた「ブルジョア社会」を見越したものである。この自由競争社会では、個人は、それ以前の歴史上の時代には彼を一定の局限された人間集団の付属物にしていた自然的細帯などから解放されて現われる。スミスやリカードがまだまったくその肩のうえに立っている一八世紀の予言者たちの目には、このような一八世紀の個人――一面では封建的社会形態の産物の産物、他面では一六世紀以来新しく発展した生産諸力の産物――が、すでに過去の存在になっている理想として、浮かんでいるのである。一つの歴史的な結果としてではなく、歴史の出発点として、なぜならば、それは彼らの目には、人間性についての彼らの観念に合致した自然に適合した個人として現われ、歴史的に生成する個人としてではなく、自然によって与えられた個人として現われるからである。このような錯覚は、これまでどの新しい時代にもつきものだった。多くの点で一八世紀に対立し、また貴族としてより多く歴史的な地盤のうえに立っているステュアートは、すでにこのような素朴さからまぬかれている。

　　われわれが歴史を遠くさかのぼればさかのぼるほど、ますます個人は、したがってまた生産をおこなう個人も、独立していないものとして、あるより大きな全体に属するものとして、現われる。すなわち、最初はまだまったく自然的な仕方家族のなかに、また種族にまで拡大された家族のなかに現われ、のちには、諸種族の対立や融合から生ずる種々の形態の共同体のなかに現われる。一八世紀に「ブルジョア社会」ではじめて、社会的関連の種々の形態が、個人にたいして、その個人的な目的のためのたんなる手段として、外的な必然性として、相対するようになる。しかし、このような立場、すなわちばらばら個人の立場を生みだす時代こそは、まさに、これまでのうちで最も発展した社会的な(この立場から見れば一般的な)諸関係の時代なのである。人間は最も文字どおりの意味でゾーン・ポリティコン [共同体的動物、社会的動物] (アリストテレス『政治学』第1巻第2章、919)である。たんに社交的な動物であるだけではなく、ただ社会のなかだけで個別化されることのできる動物である。社会の外でのばらばら個人の生産――すでにいろいろな社会力を動的に身につけている文明人がたまたま無人島に吹き飛ばされてもすれば起こるかもしれないこと――は、いっしょに生活いっしょに語りあう諸個人なしでの言語の発達と同じようにありえないことである。それは、これ以上かかろうとおぼないことである。もしも、一八世紀の人々にとっては意味もあつたこのたわいもないことがバステイアやケアリやブルードンなどによってまたしても大まじめに最新の経済学のまんなかにもちこまれえしなかったら、この点に触れる必要はまったくなかったであろう。ことにブルードンにとっては、自分がその歴史的な発生を知りもしない経済的関係の起原を、神話化することによって、歴史哲学的に説明することは、もちろん愉快なのである。たとえバステイアやケアリやブルードンとかの頭にちゃんとできあがつた観念が浮かんで、それからそれが採用されるようになった、などという神話によってである。こういう空想的なきまり文句 (locus communis) ほどたいくつでおもしろくないものはない。)(「経済学批判への」序説) から、全集13巻611-2頁)

　　こうしたマルクスの古典派経済学に対する批判はまったく正当です。しかし問題は、ではそうであるならば、どうしてマルクス自身も『資本論』第1章第4節第12パラグラフで、敢えてロビンソン物語を取り上げているのか、それは古典派経済学がロビンソン物語を取り上げているのどういう点で異なるのか、そのマルクスの叙述をわれわれが「マルクスのロビンソン物語だ」と言ってしまうのはどうしておかしいのか、ということではないかと思ひます。

　　古典派経済学の取り上げるロビンソン物語とマルクスの論じているロビンソン物語とは、歴然たる相違があります。古典派経済学の場合は、歴史の出発点として孤立した個人の狩猟や漁労を取り上げながら、その中に直接、交換価値や資本、利潤等を持ち込んで論じています。マルクスがリカードのロビンソン物語について、〈そのさい彼は、原始的な漁師と猟師とが、彼らの労働用具の計算のために、一八一七年にロンドン取引所で用いられている年賦償還表を参照するという時代錯誤におちいつている〉と批判しているようにです。しかし、マルクスの場合、すでに見たように、ロビンソンの孤島での生活をあらゆる社会的な関係とは無縁の一つの抽象物として論じています。ロビンソンは孤島でひとりぼっちなので、ここでは彼と自然との関係のみがあるだけです。これはマルクスが「第5章 労働過程と価値増殖過程」の「第1節 労働過程」において、労働過程をとりあえずはあらゆる社会形態から独立してそのものとして考察したのと同じような関係が、ここにはそのまま、つまり何の抽象も必要なく、具体的なものとして存在しているわけです。

　　マルクスは労働過程がそうした抽象的なものとして論じる理由を次のように述べています。

　　〈使用価値または財貨の生産は、資本家のために資本家のための管理のもとで行なわれることによって、その一般的な性質を変えはしない。したがって、労働過程は、さしあたり、どのような特定の社会的形態からも独立に考察されなければならない。〉(全集版233頁)

　　そしてそうした考察の最後に、その意義を次のように述べています。

　　〈われわれがその単純で抽象的な諸要素において叙述してきたような労働過程は、諸使用価値を生産するための合目的的活動であり、人間の欲求を満たす自然的なもの取得であり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であり、したがってこの生活のどんな形態からも独立しており、むしろ人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものである。それゆえ、われわれは、労働者を他の労働者たちとの関係において叙述する必要がなかった。一方の側に人間とその労働、他方の側に自然とその素材があれば、それで十分であった。小麦を味わってみてもそれがそれを栽培したのかわからないと同様、この過程を見ても、どのような条件のもとでそれが行なわれるのか、奴隷監督の残忍なムチのもとでか、資本家の心配げなまなざしのもとでなのか、それともキンキナトウスが数ユグルム [1ユグルム=約25アール]の耕作において行なうのか、石で野藪を倒す未開人が行なうのか、はわからない。〉(241-2頁)

ここでマルクスが述べているように、マルクスのロビンソンの孤島での生活の考察は、それが〈人間の欲求を満たす自然的なもの取得であり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であり、・・・人間生活のすべての社会形態に等しく共通なもの〉としてではないかと思ひます。それがロビンソンの孤島での生活では、一つの空想的な物語とはいへ、具体的に何の抽象も必要のない形で存在しており、その具体性において、一般的条件が考察できるからではないかと思うわけです。

だからこうしたマルクスのロビンソン物語の特徴を理解し、古典派経済学のそれとの相違を踏まえた上でなら、「マルクスにもロビンソン物語がある」と言っても決して間違いではないのではないかと思うわけですが、どうでしょうか。

◎注29について

注29についても、一応、学習会では問題にしたので、その紹介をしておきましょう（但し、ここでは関連資料を紹介するのみで、文節ごとの解説はやりません）。

【注29】〈29〉第2版への注。リカードにも彼のロビンソン物語がないわけではない。「彼は、原始的な漁師と猟師にも、ただちに商品所有者として、魚と獣とを、それらの交換価値に対象化された労働時間に比例して交換をとり行わせている。そのさい彼は、原始的な漁師と猟師とが、彼らの労働用具の計算のために、一八一七年にロンドン取引所で用いられている年賦償還表を参照するという時代錯誤におちいつている。『オーエン氏の平行四辺形』が、ブルジョア社会形態以外に彼が知っていた唯一の社会形態だったようである」（カール・マルクス『経済学批判』、38、39ページ〔『全集』、第13巻、45ページ〕。）」

レポーターのJ J富村さんから提出されたレジュメには、次のような全集版の注解からの紹介がありました。

〈オーウェンの平行四辺形〉（全集版、注解）（29）オーエン氏の平行四辺形について、リカードは、その著『農業保護について』、第四版、ロンドン、1822年、21頁〔岩波文庫版、大川訳『農業保護政策論』、66頁〕のなかで触れている。オーエンは、そのユートピア的な社会改造計画のなかで、集落が平行四辺形または正方形の形態で設けられれば、経済性の立場からも、居住性の立場からも最も合理的であるということを証明しようとした。〔河出書房版『世界大思想全集』、社会・宗教・科学篇、第一〇巻、永井・鈴木訳『ラナーク州への報告』、87頁以下。〕

さらに『剰余価値学説史』のなかでは、マルクスはリカードの『農業保護について』から一文を引用して、次のように批判しています。

〈もしわれわれがオーエン氏の平行四辺形（14）の一つに住み、われわれの全生産物を共同に享受するとすれば、その場合には、豊富であることの結果として苦しむものはだれもないであろう。しかし、社会が現在のように構成されているかぎり、豊富であることがしばしば生産者にとっては有害であり、稀少であることが彼らにとっては有利であろう。〕（『農業保護について』、第四版、ロンドン、1822年、21ページ。〔岩波文庫版、大川一司訳『農業保護政策批判』、66ページ。〕）リカードは、ブルジョア的生産を、もっと明確に言えば資本主義的生産を、生産の絶対的な形態として把握している。したがって、その生産関係の一定の形態が、生産そのものの目的――豊富――と矛盾したり、それを拘束したりすることは決してありえない。ここで言っている豊富とは、使用価値の量とその多様性とをともに含んでいるものであって、この使用価値はこれまた、生産者としての人間の豊かな発展、彼の生産能力の多方面にわたる発展を条件とするものである。そしてリカードは、ここで、こっけいな矛盾に陥っている。われわれが価値と富について語るのであれば、ただ全体としての社会だけを念頭におかなければならない。といっても、資本と労働について語るとすれば、「総収入」はまだ「純収入」を生み出すためにのみ存在する、ということとは自明なことである。彼がブルジョア的生産について驚嘆しているのは、実際には、その一定の形態が一先行する諸生産形態に比較すれば――生産諸力の無拘束な発展を許容する、ということである。それがそうしたことを遂行しなくなったり、そうしたことを遂行している内部に矛盾が現われたりする場合には、彼は矛盾を否定する。というよりはむしろ、生産者を顧慮することなく、富そのもの――使用価値の量――をそれ自体究極の目標だとすることによって、矛盾そのものを他の形態で言い表わすのである。〕（『学説史』全集第26巻III62-3頁）

（注解14――オーエンは彼のユートピア的な社会改革案のなかで、住居は平行四辺形または正方形かに設計されるのが経済性の立場からも家庭生活の立場からも最も合理的だ、ということも証明しようとした。）

◎第13パラグラフ

次は第13パラグラフです。

【13】〈(1)そこで次に、ロビンソンの明るい島から暗いヨーロッパの中世に目を移そう。(0)ここでは、独立した男の代わりに、だれもが依存しあっているのがみられる――農奴と領主と、臣下と君主と、俗人と聖職者とが。(0)人格的依存が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけている。(1)しかし、まさに人格的依存関係が与えられた社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物も、それらの現実性とは異なる幻想的姿態をとる必要はない。(0)それらは、夫役や貢納として社会的機構の中に入っていく。(0)労働の現物形態が、商品生産の基礎上でのように労働の一般性ではなく労働の特殊性が、ここでは、労働の直接的に社会的な形態である。(1)夫役労働も、商品を生産する労働と同じように、時間によってははかれるが、どの農奴も、彼が領主のために支出するのは彼の個人的労働力の一定量であるということを知っている。坊主どもに納めるべき十分の一税は、坊主の祝福よりもはっきりしている。(1)だから、ここで人々が相対しているさいに身につけている仮面がどのように判断されようとも、彼らの労働における人格と人格との社会的諸関係は、いつでも彼ら自身の人格的諸関係として現れ、物と物との、労働生産物と労働生産物との、社会的諸関係に変装されてはいない。〉

(1) それでは次に、ロビンソンの明るい島から、暗いヨーロッパの中世に目を移しましょう。

ここではロビンソンの島の明るさと、暗い中世ヨーロッパが対比されていますが、当時の歴史学や経済学では「暗い中世」像が支配的だったのだそうです。

(0) 中世では、孤島の独立した男の代わりに、誰もか依存しあっています。例えば農奴と領主、臣下と君主、俗人と聖職者というように。

商品生産の社会では、労働の社会的関係は物的に覆い隠され、物の社会的関係として現れ、神秘的な形態をとります。だからマルクスは商品生産とは異なる別の生産諸形態に逃げ込めば、こうした一切の神秘化、いっさいの魔法妖術は、消え失せるとして、最初にはロビンソンの孤島の生活を考察しました。孤島ではロビンソンがただ一人いるだけですから、そもそも人間の社会的関係そのものが問題ではありませんでした。しかしロビンソン個人のささやかな生活を支えるためにも、彼は彼の諸機能を、さまざまな作業として支出しなければならず、それらが互いに関連し合っていなければならないという形で、労働の結びつきが、やはりそれでも問題であることが示されました。しかしそれらはロビンソン個人の諸機能ですから、そこには何の神秘性もないことが確認されたのでした。

そこでマルクスは、今度は、孤立した一人の人間ではなく、人間相互の関係が、最初から直接に関連し合っていて、物の関係として現れていない社会として、中世の社会を取り上げているわけです。つまり中世では人々は最初から互いに依存し合っている社会なのです（支配・被支配の服従関係ですが）。このロビンソンから中世へ、そして家長制の家族共同体へ（第14パラグラフ）、そして最後は自由な人々の連合体へ（第15パラグラフ）、という考察の順序には、どういう意味があるのかも一つの問題なのですが、それはまたおいおい考えて行きたいと思ひます。とりあえず、ロビンソン物語から中世への移行にはそうしたマルクスの意図が感じられると、今の時点では指摘しておきたいと思ひます。

(n) 中世では、人格的な依存関係が、物質的生産の社会的関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけています。

学習会では、ここで述べられていることは、人間の物質的諸関係がすべての関係の基盤だという、いわゆる「唯物史観」の定式化と言われるものと同じといえるのか、印象としては若干の齟齬が感じられるように思うが、どう考えたらよいのか、という疑問が提出され、少し議論になりました。しかし、この問題は、別の項目を立てて検討・紹介したいと思います。

(一)、(特) しかし、まさに人格的な依存関係が社会の基礎をなしているからこそ、ここでは労働は夫役として、またその生産物も貢納という形で、その社会的な機構のなかにあり、それらの現実性とは違った幻想的な姿をとる必要はないわけですね。

マルクスは『資本論』第1部第3編「第8章 労働日」第2節「剰余労働への渴望 工場主とボヤール」(ボヤールというのはロシアやルーマニアの領主のこと)において、領主と農奴との関係について論じています。そこでは農奴の剰余労働は〈夫役において一つの独立な感覚的に知覚することのできる形態をもっている〉(307頁)〈彼は一方(必要労働―引用者)を彼自身の耕地で行い、他方(剰余労働―引用者)を領主の農場で行う。それだから、労働時間の二つの部分は独立に並んで存在する。夫役形態では、剰余労働は明確に必要労働から区別されている〉(307-8頁)と。つまり農奴は自分のために彼自身の耕地で働く労働と領主のために農場で働く労働とは、時間的にも空間的にも、だから感覚的にもハッキリ区別されていて、そこにはそれ以外の何らかの幻想的なものが入る余地はまったくなかったということだと思います。

ついでに、ドナウ諸侯国やルーマニア諸州では夫役から農奴制が発生した事情について、次のように述べていることも紹介しておきましょう。

〈夫役はドナウ諸侯国では現物地代その他の農奴制付属物と結びつけられていたが、しかし支配階級への決定的な貢租となっていた。このような所では、夫役が農奴制から発生したことはまれで、むしろたいへん反対に農奴制が夫役から発生した。ルーマニア諸州でもそうだった。これら諸州の元来の生産様式は共同所有を基礎としていたが、それはスラヴ的形態の共同所有ではなく、インド的形態のそれではなおさらなかった。土地の一部分は自由な私的所有として共同体の諸成員によって独立に管理され、他の部分―ager publicus〔公共地〕―は彼らによって共同に耕作された。この共同労働の生産物は、一部は凶作その他の災害のための予備財源として役立ち、一部は戦費や宗教費やその他の共同体支出をまかなうための国庫として役立った。時がたつにつれて、軍事関係や教会関係の高識者たちは共有財産といっしょに共有財産のための仕事を横領した。自分たちの公共地での自由な農民の労働は、公共地盗人たちのための夫役に変わった。それと同時に農奴制諸関係が発展した。〉(308頁)

つまり夫役はもともとは農村共同体の共有する公共地での自由な農民たちの共同体のための労働だったが、その公共地を軍事関係者や教会関係者が横領して支配者に成り上がり、共同体の構成員を支配するようになったために、公共地での自由な農民の労働は夫役になってしまい、そこから農奴制諸関係が生まれたのだということのようです。

(a) 労働の現物形態が、つまりその特殊な形態が、ここでは、労働の直接に社会的な形態ですから、商品生産の基礎として、労働生産物に対象化された労働が抽象的・一般的な性格に還元されて、初めて社会性を獲得するというような、難しいわけの分からないものは何もありません。

(b) 夫役労働も、確かに商品を生産する労働と同じように時間によってははかれますが、どの農奴も、彼が領主の農場で支出するのは、彼の個人的労働力の一定量であるということは知っています。また教会に納める十分の一税も、坊主の与える祝福よりハッキリしています。

(f) だから、ここで人々が相対しているさいに身につけている仮面(農奴、領主、臣下、君主、俗人、聖職者等々)がどのように判断されることも、彼らの労働における人格と人格との社会的諸関係(農奴と領主、俗人と聖職者との関係)は、いつでも彼ら自身の人格的諸関係として現れ、物と物との、あるいは労働生産物と労働生産物との、社会的関係というような変装された形では現れないのです。

◎中世では、人格的な依存関係が、物質的生産の社会的関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づける、という定式は、果たして唯物史観の定式化とどのように関係するのか？

それでは、文節〈(n)人格的依存が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけている〉に関連して提起した問題を改めて考えてみましょう。つまりここで述べていることは、唯物史観の定式化と言われているものと同じと考えてよいのか、それともそれとは違ったものなのか、という問題です。

この問題を考えるために、マルクスが『経済学批判』の「序言」で〈私にとって明らかとなった、そしてひとたび自分のものになってからは私の研究にとって導きの糸として役だった一般の結論は、簡単にいえば次のように定式化することができる〉として述べている一文を紹介しておきましょう。

〈人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在の土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造が立ち、そしてこの土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。〉(全集13巻6頁)

このようにマルクスはここでは〈物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する〉と述べています。これにもとづけば、物質的生活の生産様式が、人間の社会的な関係をも制約すると理解できそうに思えますが、しかし、マルクスは中世においては、人格的な依存関係が、物質的生産の社会的関係をも・・・性格づけていると述べています。果たしていわゆる唯物史観の定式化は、ブルジョア社会だけに適応できるものであって、中世の世界では適応不可とマルクスは考えていたのでしょうか。

しかしそうでないことは、先の定式化の最後のあたりで、マルクスは〈大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的生産様式を経済的社会構成のあいつく諸時期としてあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である〉と述べているのを見ても明らかです。それは封建的生産様式にも妥当すると考えているのです。しかし、では先の文節の一文はどのように考えたらよいのでしょうか。

唯物史観の定式化をよく見ますと、マルクスが〈物質的生活の生産様式〉と述べているものは、その前で述べている〈実在の土台〉と同義と考えられます。そして〈実在の土台〉というのは、〈社会の経済的構造〉であり、それはすなわち〈生産諸関係の総体〉を意味しています。そして〈生産諸関係〉というのは、〈物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する〉ものであるということが述べられているわけです。つまり物質的生産諸力の発展段階に対応して、社会的な生産諸関係が形成されるのであり、その総体が土台になっていると述べているわけです。そしてそれがまた〈物質的生活の生産様式〉でもあるということではないかと思えます。

そして先の文節では、マルクスは〈人格的依存が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけている〉と述べています。つまりここでは人格的依存関係が、直接、物質的生産の社会的諸関係、すなわち生産諸関係をなしているとマルクスは述べているわけです。だからそれが物質的生産諸力の一定の発展段階に対応していることはいうまでもありません。つまり物質的生産諸力の一定の発展段階に対応して、人格的依存関係が直接社会的な生産諸関係を形成しているわけです。そしてそれがこの場合は社会の経済構造を形成し、実在の土台をなしているといえるわけです。このように考えれば、この文節で述べていることが、マルクスのいわゆる唯物史観の定式化と決して矛盾するものではないかと思えます。

ないことが分かるでしょう。

また学習会では、マルクスは『経済学批判要綱』では、社会諸形態の歴史的な発展段階を、三つの継起する段階として特徴づけて論じているという紹介がされました。それも、ここで紹介しておきましょう。

〈交換価値においては、人格と人格との社会的関連は物象と物象との一つの社会的関係行為に転化しており、人格的な能力は物象的な能力に転化している。社会的な力を交換手段がもつことが少なれば少ないほど、つまり交換手段がいまだに直接的な労働生産物の性質や交換者の直接的諸必要とかわりあいがあればあるほど、諸個人を結びつける共同団体—一家父長的関係、古代の共同団体、封建制度、ギルド制度—の力は、まだそれだけ大きいにちがいない。……各個人は社会的な力を一つの物象の形態でもっている。この社会的な力を物象から奪いとってみよ。そうすると諸君は、それを諸人格のうに立つ諸人格にあたえざるをえない。人格的な依存諸関係(最初はまったく自然生的)は最初の社会諸形態であり、この諸形態においては人間的生産性は狭小な範囲においてしか、また孤立した地点においてしか展開されないのである。物象的依存性のうにきずかれた人格的独立性は第二の大きな形態であり、この形態において初めて、一般的社会的物質代謝、普遍的諸関連、全面的諸欲求、普遍的諸力能といったものの一つの体系が形成されるのである。個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的力能として服属させることのうにきずかれた自由な個性性は、第三の段階である。第二段階は第三段階の諸条件をつくりだす。〉(『要綱』草稿集第1巻137-138頁、但し、挿入されている原文はドイツ語がうまく表記できないためにカットしました。)

また関連すると思われる、『資本論』第3巻第48章の最後の一文も紹介しておきましょう。

〈以前のいろいろな社会形態では、この経済的神秘化(生産関係の物化や生産当事者に対する生産関係の独立化と、それが生産者に対して、圧倒的に彼らを支配する自然法則として現れ、彼らに対立して盲目的な必然性として力を振るうこと—引用者)は、ただ、おもに貨幣と利子生み資本とに関連してはいつてくるだけである。それは次のような場合には当然排除されている。第一には、使用価値のための、直接的自己需要のための、生産が優勢な場合である。第二には、古代や中世のように奴隷制や農奴制が社会的生産の広い基礎をなしている場合である。この場合には生産者にたいする生産条件の支配は、支配・隷属関係によって隠されていて、この支配・隷属関係が生産過程の直接的発案として現われており、目に見えている。自然発生的な共産主義が行なわれている原始的共同体のなかでは、また古代の都市共同体のなかでさえも、その諸条件を含めてこの共同体そのものが生産の基礎として現われ、また共同体の再生産が生産の最終目的として現われる。中世の同業組合制度にあつてさえも、資本も労働も無拘束なものとしては現われなくて、それらの相互の関係は、組合制度やそれと関連する諸関係やまたこの諸関係に対応する職業上の義務や親方資格などの諸観念によって規定されたものとして現われる。〉(全集25b1064-5頁)

.....

【付属資料】

●第12パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈島の上でのロビンソンを例にとってみよう。彼は、生来つましやかであるが、それでもいろいろな種類の必要をみたさなければならず、したがって、道具を作り、家具をこしらえ、ラマを馴らし、漁労をし、狩猟をする等々、いろいろな種類の有用な労働を行なわなければならない。祈祷とかこれに類することは、ここでは触れない。というのは、わがロビンソンは、こういったことに喜びを見いだし、この種の行動を気晴らしだと思っているからである。彼の生産機能が種々雑多であるにもかかわらず、彼は、これらの機能が、ほかならぬロビンソンのいろいろな活動形態でしかなく、したがって、人間労働のいろいろなやり方でしかない、ということをしきまえている。必要そのものが、彼を強制して、彼の時間を彼のいろいろな機能のあいだに正確に配分させている。彼の全活動のなかでどれがより大きなスペースを占めどれがより小さなスペースを占めるかは、目ざす有用効果を達成するために克服しなければならない困難の大小いかんで、きまることである。経験がこのことを彼に教える。そして、わがロビンソンは、時計や帳簿やインクやペンを難破船から救出していたので、立派なイギリス人として、直ちに、自分自身のことを帳簿につけ始める。彼の財産目録には、彼がもっている諸使用対象の、それらの生産に必要ないろいろな仕事の、そして最後に、これらのいろいろな生産物の一定量が彼に平均的に費やさせる労働時間の、明細書が、記入されている。ロビンソンと彼の自家製の富を形成している物とのあいだのいっさいの関係は、ここではきわめて簡単明快であるから、M・ヴィルト氏がさき、特に精神を緊張させなくてもこれらの関係を理解できたであろう。それにもかかわらず、これらの関係のうちには、価値のすべての本質的な規定が含まれている。〉(江夏訳60頁)

《補足と改訂》

〈経済学はロビンソン物語を好むから(注)、まず孤島のロビンソンに登場ねがおう。(P.36、37、1)ここでの注。リカードにも彼のロビンソン物語がないわけではない。「彼は、原始的な漁師と猟師にも、ただちに商品所有者として、魚、と獣とを、それらの交換価値に対象化された労働時間に比例して交換をとり行なわせている。そのさい彼は、原始的な漁師と猟師とが、彼らの労働用具の計算のために、1817年にロンドン取引所でもちいられている年賦償還表を参照するという時代錯誤におちいつている。『オーエン氏の平行四辺形』が、ブルジョア的的社会形態以外に彼が知っていた唯一の社会形態だったようであるJ(『批判』、p.38、39)〉(33頁)

《フランス語版》

〈経済学はロビンソン物語を好むので、まずロビンソンを彼の島に訪れよう。ロビンソンは、生来そうであるように慣ましやかであるが、それでもさまざまな必要をみたさなければならない。たとえば家具を作り、道具をこしらえ、動物を馴らし、漁労をし、狩猟をするなど、各種の有用労働を行なわなければならない。彼の祈禱その他これに類するつまらぬことについては、なんら語る必要もない。というのは、わがロビンソンは、そういうことに喜びを見出して、この種の活動は元気をますための気晴しであると見なしているからである。彼の生産機能が多様であるにもかかわらず、それらの機能はほかならぬロビンソンの生活設計のためのさまざまな形態でしかない、すなわち、ただたんに人間労働のさまざまな様式でしかない、ということを知っている。必要そのものにせまられて、彼は自分の時間を種々の仕事に配分しなければならない。彼の総労働のなかで、ある仕事より大きな範囲を占め、別の仕事より小さな範囲を占めるが、このことは、彼が目ざす有用な効果を得るために克服しなければならない困難の大小に依存し

ている。経験が彼にこのことを教えたのであって、時計や台帳やペンやイソキを難破船から救い出したわがロビンソンは、立派なイギリス人として、まもなく日々の行為をくまなく記帳する。彼の財産目録には、彼が所有する有用物についての、それらの生産に必要な種々の労働様式についての、そして最後に、これらさまざまな生産物の一定量が平均して必要とする労働時間についての、明細が記されている。ロビンソンと彼の自製の富である諸物とのあいだの関係はことごとくきわめて簡単明瞭であって、ボードリヤール氏〔ブルジョア経済学者〕もとりわけ心を緊張させずにこのことを理解できるほどである。それでも、価値のあらゆる本質的な規定がこのうちに含まれている。〕（52頁）

●注29に関するもの

《フランス語版》

く（29）リカードにさえ、ロビンソン物語がある。リカードにとっては、原始的な狩猟者と漁夫とは、魚と獣とをそれらの価値のうちに実現された労働時間に比例して交換する商人である。このばあいリカードは、狩猟者と漁夫とが彼らの労働用具の計算のために、ロンドン取引所で一八一七年に使われていた年賦償却表を参照するという、かの特異な時代錯誤を犯している。「オーウェン氏の平行四辺形〔集落が平行四辺形であれば最も合理的である、というオーウェンのユートピア的な社会改造計画〕」は、リカードがブルジョア社会以外に知っている唯一の社会形態であるようだ。〕（52頁）

●第13パラグラフに関するもの

《補足と改訂》

くここで次に、ロビンソンの明るい島から暗いヨーロッパの中世に目を移そう。ここでは、独立した男の代わりに、だれもが依存し合っているのが見られる――農奴と領主と、臣下と君主と、俗人と聖職者とが。人格的依存が、まさしく、物質的生産の社会的関係をも、その上に立つ他のすべての生活領域をも性格づけている。しかし、まさに人格的依存関係が与えられた社会的基盤をなしているからこそ、したがって、労働も生産物も、それらの現実性とは異なる幻想的姿態をとる必要はない。それらは、夫役や貢納として社会的機構のなかにはいって行く。ここでは労働の自然形態が、商品生産の基礎上でのように労働の一般性ではなく労働の特殊性が、労働の直接的に社会的な形態である。夫役労働も、商品を生産する労働と同じように、時間によってはかれるが、どの農奴も、彼が領主のために支出するのは彼の個人的労働力の一定分量であるということを知っている。坊主どもに納めるべき十分の一税は、坊主の祝福よりもはっきりしている。だから、ここで人々が相対しているさいに身につけている社会的扮装がどのように判断されようとも、彼らの労働における人格と人格との社会的諸関係は、いつでも彼ら自身の人格的諸関係として現われ、物と物との、労働生産物と労働生産物との、社会的諸関係に変装されてはいない。〕（33-4頁）

《フランス語版》

くさて、ロビンソンの光り輝く島から暗いヨーロッパの中世に移ろう。われわれはここでは、独立した人間のかわりに、奴隷と領主、家臣と宗主、俗人と聖職者という、依存しあっている万人を見出す。この人的依存が、物質的生産の社会的関係をも、この物質的生産が土台として役立っているところの他のすべての生活領域をも、特徴づけているのである。そして、この社会が人的依存を基礎としているからこそまさに、すべての社会的関係が人間のあいだの関係として現われる。したがって、さまざまな労働とその生産物とは、実在とちがった幻想的な姿をとるには及ばない。それらは、夫役や現物給与や現物給付として現われる。労働の自然形態、労働の特殊性―商品生産におけるように労働の一般性、鋤労働の抽象的性格ではない―が、労働の社会的形態でもある。夫役労働も、商品を生産する労働と全く同じように、時間で測られる。だが、個々の農奴は、アダム・ス、ミスのような人に頼るまでもなく、自分の主人のために支出するものが自分自身の労働力のなかの一定量であることを、非常によく承知している。司教に納めるべき十分の一税は、司教の祝福よりもはっきりしている。だから、人間がこの社会でかぶっている仮面をどのように判断するにしても、諸個人各自の労働における彼らの社会的関係は、彼ら自身の人的関係としてはっきりと確認されるのであって、物の社会的関係、労働生産物の社会的関係に変装してはいない。〕（53頁）

『資本論』を読んでみませんか

欧州の国家債務危機と信用不安は、ギリシャからイタリアへと飛び火し、ますますその深刻の度を加えています。

ギリシャでは、EU首脳会議が決めた支援策の受け入れで、国民投票をするかどうかですったもんだした挙句、それを言い出したパパンドレウ首相が辞任、パパデモス前欧州中央銀行(ECB)副総裁が後任につき、来年2月実施予定の総選挙までの暫定政権が発足しました。

しかしギリシャの財政危機は依然として増大しており、国債償還が集中する12月中旬には、国際通貨基金(IMF)や欧州金融安定基金(EFSF)などから80億ユーロ(約8500億円)のつなぎ融資を受けられなければ、国家破綻する事態を迎えています。

一方、イタリアの国債価格が急落し、10年物国債の利回りが自力返済不能のボーダーライン(危険水域)とされる7%を超え、一気に、財政・金融不安が広まりました。イタリアの政府債務は約1兆9000億ユーロ(約200兆円)、国内総生産(GDP)比120%に達しています。

もしイタリアが国家危機に陥るなら、その影響はギリシャの比ではありません。イタリアの経済規模はユーロ圏全体の約17%を占め、ドイツ・フランスに次ぐ「大国」なのです。

先の主要20カ国・地域(G20)首脳会議では、IMFによるイタリアの財政改革の実行状況の監視を決めました。もし国債の利回りがこのまま上昇し続ければ、IMFからの支援なしでは、資金調達が困難になり、国債償還時に資金繰りに行き詰まり突然の債務不履行(デフォルト)に陥る可能性があるからです。結局、ベルルスコーニ首相は自ら退陣を表明、2013年までに対GDP比4.6%の財政赤字を解消させる財政安定法の成立を国際公約させられました。

こうしたなかで、財政危機のしわ寄せを一方向的に押しつけられようとしている、ギリシャやイタリアの労働者は、敢然と闘いに立ち上がっています。ギリシャでは10月19~20日に、数百万人規模の官民48時間ゼネストと数十万人の集会や、国会包囲デモが行われ、イタリアでも600万人の労働者を組織しているイタリア最大の労組CGIL(イタリア労働総同盟)の呼びかけで、ベルルスコーニ政権の緊縮財政攻撃に反対する8時間ゼネストに決起しました。労働者への犠牲の押しつけで国家的危機を乗り切ろうとする資本に対して、その反撃は当然といえます。



今回のEU発の世界的な信用不安は、08年のリーマンショックの延長であり、世界市場恐慌の一層の深化を示しています。そして恐慌の時こそ、労働者階級が、新しい社会の建設に向けて闘いに立ち上がる時でもあるのです。マルクスは、恐慌と革命の関係について、次のように述べています。

〈本当の革命は……この二要因、つまり近代的な生産諸力とブルジョア的生産諸形態とが、たがいに矛盾に陥る時期にだけ、可能である。……新しい革命は新しい恐慌につづいてのみ起こりうる。しかし革命はまた、恐慌が確実にあるように確実にある。〉（下線はマルクスによる。全集7巻450頁）

世界市場恐慌のより一層の深まりは、やがては世界の労働者階級を闘いに駆り立てずにはおかないでしょう。ギリシャやイタリアの労働者の闘いは、その先駆けといえます。来るべき革命の一時代に備えるためにも、貴方も、共に『資本論』を学びませんか。

第40回「『資本論』を読む会」の報告

◎大阪ダブル選挙

大阪府知事選と大阪市長選のダブル選挙は「維新の会」の圧勝に終わりました。橋下前府知事が「大阪都」構想を掲げ、「大阪維新の会」を基盤に大阪市長選に鞍替えして立候補したために、実現した選挙でしたが、橋下前知事の狙いが着々と具体化しつつあることに、危機感を持たざるを得ません。

橋下氏は、「独裁者」よろしく、乱暴な攻撃的な言いで、さまざまな作られた「敵」を相手に、派手な立ち回り演じることによって、人気を集めています。

しかし、北海道大学准教授の中島岳志氏が「橋下徹の言論テクニックを解剖する」(<http://www.magazine9.jp/hacham/111109/>)で暴露していますが、橋下氏は自らが著した『図説・心理戦で絶対に対敵に交渉術』（日本文芸社）で、自分の言論のテクニックを披露し、手の内を明かしているのだそうです。

それによれば、この間の橋下氏のマスコミを上手に使い、耳目を引き付ける奇抜な言動のすべてが、大衆を欺き、錯覚を引き起こして、操作するための、計算されたものであることが分かります。

このようなファシストまがいの大衆操作のテクニックを操る危険な人物を私たちは決して、認めるわけには行きません。

「維新の会」進出に警鐘を乱打しながら、とにかく、第40回の学習会の報告を行います。

◎第14パラグラフ

今回も第14パラグラフと第15パラグラフの二つのパラグラフをやりました。まず最初にそれぞれのパラグラフの本文を紹介し、文節ごとに記号を打って、平易に解説しながら、議論の紹介もして行くことにします。まずは第14パラグラフ本文です。

【14】 〈(1)共同的な、すなわち直接的に社会化された労働を考察するためには、われわれは、すべての文化民族の歴史の入口で出会う労働の自然発生の形態にまでさかのぼる必要はない(30)。(0)自家用のために、殺物、家畜、糸、リンネル、衣類などを生産する農民家族の素朴な家父長的な勤労が、もっと手近な一例をなす。(0)これらのさまざまな物は、家族に対して、その家族労働のさまざまな生産物として相対するが、それら自身がたがい商品として相対することはない。(1)これらの生産物を生み出すさまざまな労働、農耕労働、牧畜労働、紡績労働、織布労働、裁縫労働などは、その現物形態のまま、社会的機能をなしている。(8)なぜなら、それらは、商品生産と同じように、それ自身の自然発生的分業をもつ、家族の諸機能だからである。(9)男女の別、年齢の相違、および季節の推移につれて変わる労働の自然的諸条件が、家族のあいだでの労働の配分と個々の家族成員の労働時間とを規制する。(1)しかし、ここでは、継続時間によってははかれる個人的労働力の支出が、はじめから、労働そのものの社会的規定として現れる。(f)なぜなら、個人の労働力は、はじめから、家族の共同的労働力の諸器官としてのみ作用するからである。〉

(1) 共同的な、つまり直接的に社会化された労働を考察するためには、私たちは、すべての文化民族の歴史の入口で出会う労働の自然発生の形態にまでさかのぼる必要はありません。

さて、ここでは〈共同的な、つまり直接的に社会化された労働〉が問題になっています。その前の第13パラグラフのところで紹介したように、マルクスは人間の社会諸形態を三つの大きな段階として位置づけていました。すなわち（1）〈人格的な依存諸関係(最初にまったく自然生的は最初の社会諸形態)、（2）〈物象的依存性のうえにきずかれた人格的独立性は第二の大きな形態)、（3）〈個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的力能として服属させることのうえにきずかれた自由な個性性は、第三の段階〉と。

この最初の〈人格的な依存諸関係〉について、マルクスは〈社会的な力【Kraft】を交換手段がもつことが少なれば少ないほど、つまり交換手段がいまだに直接的な労働生産物の性質や交換者の直接的諸必要とかかわりあいがあればあるほど、諸個人を結びつける共同団体――家父長的関係、古代の共同団体、封建制度、ギルド制度――の力は、まだそれだけ大きになちがいない〉とも説明していました。つまり人格的依存関係というのは、何らかの共同体的な関係が労働における人間の社会的関係（生産関係）になっているものです。だからそれは封建制度だけではなく、家父長的関係や古代の共同団体やギルド制度などにも共通して言えるものであるとの認識に立っているわけです。その意味では第13パラグラフの封建的な生産も、〈共同的な、つまり直接的に社会化された労働〉にもとづくものだったといえるでしょう。

だからこのパラグラフでは、同じ〈共同的な、つまり直接的に社会化された労働〉の別の社会的諸形態を論じようとしているわけです。さらにマルクスは〈われわれは、すべての文化民族の歴史の入口で出会う労働の自然発生の形態にまでさかのぼる必要はない〉と述べていることにも注意が必要です。つまりマルクスには時代を遡って商品生産とは異なる別の生産諸形態に逃げ込もうという意図があるということです。マルクスが『資本論』で対象にしているのは、いうまでもなく資本主義的生産様式です。そこから時代を遡って最初に問題になるのは、封建的生産様式であることは明らかでしょう。だからこそ、マルクスはロビンソンの孤島での生活というあらゆる社会形態に共通な一般的条件をまず考察したあと、最初に取り上げたのは、中世の生産諸形態であったといえるでしょう。そして中世の生産諸形態では、人格的な依存関係が直接的に労働における人間の社会的関係（生産諸関係）をなしていることが指摘されたのでした。つまり労働は最初から人格的な依存関係によって社会的関連の枠のなかにあったのです。そして同じ労働が直接に社会的に結びついている社会、つまり直接的に社会化された労働を問題にするためには、原始的な共同体社会まで時代を遡る必要はない、として次は、つまりこのパラグラフでは、自家需要のために生産する家父長制的家族共同体の生産形態を問題にしているといえます。

(0) その直接的に社会化された労働としては、自家用のために、殺物や家畜、糸、リンネル、衣類などを生産する農民の家族の素朴な家父長的な勤労が、もっとも手近な一例をなしています。

(0) これらのさまざまな物は、家族に対して、その家族労働のさまざまな生産物として相対しますが、それら自身がたがい商品として相対することはありません。

(1) これらの生産物を生み出すさまざまな労働、例えば農耕労働（殺物）や牧畜労働（家畜）、紡績労働（糸）、織布労働（リンネル）、裁縫労働（衣類）などは、その現物形態のまま、社会的機能をなしています。

(8) というのは、それらの労働は、商品生産と同じように、それ自身の自然発生的分業をもつ、家族の諸機能だからです。

(9) 男女の別や年齢の相違、季節の移り変わりによって変化する労働の自然条件などが、家族の間での労働の配分と個々の家族構成員の労働時間を規制します。

(f) (f) しかし、ここでは継続時間によってははかれる個人的労働力の支出は、はじめから、労働そのものの社会的規定として現れます。というのは、個人の労働力は、はじめから、家族の共同的労働力の諸器官としてのみ作用するからです。

この家父長制的労働について、学習会では、家父長制的労働は果たして自然発生的な分業と言えるのだろうか、という

疑問が出されました。というのは、文節〔C〕では家父長制のもとにおける家族労働は、その現物形態のまま社会的機能を持っているとしています。ということは、それらは直接に社会的に結びつけられた労働ということでしょう。ということはそれらの諸労働の分業もその限りで意識的・計画的なものと言えるのではないかと言うわけです。工場内の分業が意識的・計画的なものであり、だから工場内の労働はその現物形態のまま工場の枠内においては社会的ものとしてあるのと同じように、家父長制の家族労働もやはり意識的・計画的に諸労働が分割されて、家族のさまざまな構成員に配分されるのではないだろうか、というわけです。

この点について、マルクスは、資本主義以前の社会諸形態における分業について、次のように述べています。

〈それ以前の諸社会形態では諸産業の分化がまず自然発生的に発展し、次いで結晶し、最後に法的に固定された。〉（全集23 a 468頁）

そしてその具体的な例としてインドの太古の小共同体の場合を紹介し、次のように述べています（全体を引用すると長すぎるので一部省略しました。興味のある方は『資本論』に直接当たって参照してください）。

〈たとえば、部分的には今日なお存続しているインドの太古的な小共同体は、土地の共有と、農業と手工業との直接的結合と、固定した分業とを基礎としており、この分業は、新たな共同体の建設にさいしては与えられた計画および設計図として役だっている。……生産物の大部分は共同体の直接的自己需要のために生産され、商品として生産されるのではなく、したがって、生産そのものは、商品交換によって媒介されるインド社会の全体としての分業からは独立している。……この共同体機構は計画的な分業を示しているが、しかしマニファクチュアの分業は不可能である。……共同体労働の分割を規制する法則は、ここでは自然法則の不可侵の権威をもって作用するのであるが、他方、鍛冶師などのようなそれぞれの特殊な手工業者は、伝統的な仕方に従って、しかし独立的に、自分の作業場ではどんな権威も認めることなく、自分の専門に属するあらゆる作業を行なうのである。〉（全集23 a 646-9頁）

このように、マルクスはインドの太古の小共同体では、さまざまな労働が分割されているが、それらは商品として生産されるのではなく、その〈共同体機構は計画的な分業を示して〉いると述べています。ただそれらの労働の分化そのものは自然発生的に発展したものであり、次いでそれが結晶し、法的に固定したものだとして述べています。

だから家父長制の家族労働も、それらが家族の構成員にそれぞれ振り分けられるやり方は、男女の別や年齢の相違、あるいは季節によって移り変わる自然条件の変化によって、自然発生的に行われてきたものであるが、しかしそれらはやがては固定されて、最初から家族の各構成員のそれぞれの義務として、家族の中の一つの決まりとなったものであり、その限りでは最初から計画的なものとしてあるということではないでしょうか。

◎注30について

注30についても議論しましたので、紹介しておきましょう（ただし文節ごとの解説は省略します）。

【注30】（30）第2版への注。「自然発生的な共有の形態は、特にスラヴ的な、しかもつばらロシア的な形態であると言うのは、近ごろ広まっている笑うべき偏見である。それは、われわれがローマン、ゲルマン人、ケルト人のあいだで指摘できる原初形態であるが、これについては、さまざまな見本をそなえた立派な見本台帳が、今なお、一部は遺制としてであるけれども、インド人のあいだに見いだされる。アジア的な、ことにインド的な共有諸形態のいっそう厳密な研究は、自然発生的な共有のさまざまな形態からどのようにしてその崩壊のさまざまな形態が出てくるかを示すであろう。こうして、たとえば、ローマのおよびゲルマンの私有のさまざまな原型が、インドの共有のさまざまな形態から導出されるのである」（カール・マルクス『経済学批判』、10ページ〔『全集』、第13巻、19ページ〕）。

この注30については、そもそもこの注30は『経済学批判』からの引用になっていますが、『経済学批判』でも、やはり注としてあることが紹介されました。そしてその本文は次のようなものだという紹介もされました。

〈これに反して、紡ぎ手も織り手も同じ屋根の下に住んでいて、いわば自家需要のために、家族のうちの女たちは紡ぎ、男たちは織っていた家父長制的農村工業においては、家族の限界内で糸とリンネルとは社会的生産物であり、紡績労働と織布労働とは社会的労働であった。けれどもそれらの社会的性格は、一般的等価物としての糸が一般的等価物としてのリンネルと交換されること、つまり両者が同じ一般的労働時間のどちらでもよい、同じ意味の表現として互いに交換されることにあつたのではない。むしろ原生的な分業をもつ家族関連が、労働の生産物にその固有な社会的極印をおいたのである。あるいはまた、中世の賦役と現物給付をとってみよう。ここでは現物形態にある個々の一定の労働が、労働の一般性ではなくて特殊性が、社会的紐帯をなしている。あるいはまた最後に、すべての文化民族の歴史の入口で見られるような、原生的形態にある共同労働をとってみよう〔*〕。ここでは労働の社会的性格は、明らかに個々の労働が一般性という抽象的形態をとることによって、つまり彼の生産物が一つの一般的等価物の形態をとることによって媒介されているのではない。個々の労働が私的労働となることを避け、彼の生産物が私的労働となることを避け、むしろ個々の労働を直接に社会有機体の一肢体の機能として現われさせるものは、生産の前提とされている共同体である。交換価値であらわされる労働は、個別化された個々の労働として前提されている。それが社会的となるのは、それがその正反対の形態、抽象的一般性の形態をとることによってである。〉（全集13巻18-19頁）

この本文中にある〔*〕につけられた注として、上記の一文が存在しているのです。

この本文を読んでも、家父長制の家族労働そのものが、それらの家族の諸労働の社会的関連そのものになっており、だからそれらの諸労働は最初から社会的労働であったという指摘がなされています。労働が家族のさまざまな構成員に配分されるのは、家族の生理的理由や自然条件によって、自然発生的に決まってきたのですが、しかしそれらが家族のさまざまな諸機能として直接に結びつけられており、その限りでは計画的な分業をなしていたということが出来るでしょう。

◎第15パラグラフ

次は第15パラグラフです。

【15】〈(1)最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体を考えてみよう。(2)ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されるが、ただし、個人的にはなく社会的に、である。(3)ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼自身の生産物であり、したがってまた、直接的に彼にとっての使用対象であった。(4)この連合体の総生産物は一つの社会的生産物である。(5)この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。(6)この部分は依然として社会的なものである。(7)しかし、もう一つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費される。(8)この部分は、だから、彼らのあいだで分配されなければならない。(9)この分配の仕方は、社会的生産組織体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的發展程度に応じて、変化するのである。(10)もっぱら商品生産と対比するだけのために、各生産者の生活手段の分け前は、彼の労働時間によって規定されるものと前提しよう。(11)そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるだろう。(12)労働時間の社会的計画的配分は、さまざまな欲求に対するさまざまな労働機能の正しい割合を規制する。(13)他面では、労働時間は、同時に、共同労働に対する生産者たちの個人的関与の尺度として役立つ。(14)したがってまた、共同生産物のうち個人的に消費される部分に対する生産者たちの個人的分け前の尺度として役立つ。(15)人々が彼らの労働および労働生産物に対してもつ社会的諸関係は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭である。〉

(1)最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働して、自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体を考えてみましょう。

(2)ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されますが、ただ、個人的なものとしてではなく、社会的なものとしてです。

(3)ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼自身の生産物であり、したがってまた、直接に彼にとって使用対象でした。

(c) この連合体の場合は、その総生産物は一つの社会的生産物です。

(g)、(h) この生産物の一部分は、再び生産手段として役立ちます。だからこの部分は依然として社会的なものです。

(t)、(f) しかし、もう一つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費されます。だからこの部分は、彼らの間で分配されなければなりません。

(l) この分配の仕方は、社会的な生産組織そのものの特殊な種類と、これに照応する生産者たちの歴史的發展程度に応じて、変化するでしょう。

(k) もっとばら商品生産と対比するだけのために、各生産者の生活手段の分け前は、彼の労働時間によって規定されるものと前提しましょう。

(j) そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるでしょう。

(i) 労働時間の社会的計画的配分は、さまざまな欲求に対するさまざまな労働機能の正しい割合を規制します。

これに関連すると思われる文言は、『資本論』の他の部分にもみられます。例えば.....

〈ただ生産が社会の現実の予定統制のもとにある場合にだけ、社会は、一定の物品の生産に振り向けられる社会的労働時間の範囲とこの物品によってみだされるべき社会的欲望の範囲とのあいだの関連をつくりだすのである。〉全集25 a 236頁)

〈第二に、資本主義的生産様式が解消した後も、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味では、やはり有力に作用するのである。〉(全集25 b 1090頁)

(7) 他方、労働時間は、同時に、共同労働に対する生産者たちの個人的な関与の尺度として役立ち、したがってまた、共同生産物のうち個人的に消費されるべき部分に対する生産者たちの個人的分け前の尺度としても役立ちます。

労働時間が、共同生産物のうち個人的消費される分け前を規制するというのは、『ゴータ綱領批判』のなかでより詳しく展開されています。

〈個々の生産者は、彼が社会にあたえたと正確に同じだけのものを一一控除をしたうえで一一返してもらおう。個々の生産者が社会にあたえたものは、彼の個人的労働量である。たとえば、社会的労働日は個人的労働時間の総和からなり、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の給付部分、すなわち社会的労働日のうちの彼の持分である。個々の生産者はこれこれの労働(共同の元本のための彼の労働分を控除したうえで)を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段を引きだす。個々の生産者は自分が一つのかたちで社会にあたえたと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである。〉(全集19巻20頁)

(8) 人々が彼らの労働や労働生産物に対して持つ社会的な諸関係は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭であり、何の神秘的な性格を帯びることもないでしょう。

学習会では、労働時間は二重の役割を果たすとありますが、「三重」ではないのか、という意見が出されました。第一に社会的欲望に対応したさまざまな労働機能の正しい割合に応じて労働時間を社会的計画的に配分する役割、第二にそうした労働の計画的な配分に応じて、個々人の労働を社会的に直接割り振る役割、第三に、個々人が社会に与えた労働に応じて、各人が共同生産物から個人的消費分の分け前を受け取る役割、ということです。第二と第三は同じ労働時間ですが、しかしその果たしている役割はやはり別のものであるべきではないかという意見です。しかしこの問題は、「二重」か「三重」かということ以上ではなく、大した問題ではないので、それ以上には問題になりませんでした。

.....

【付属資料】

●第14パラグラフに関連して

《補足と改訂》

〈共同的な、すなわち直接的に社会化された労働を考察するためには、われわれは、すべての文化民族の歴史の入口で出会う労働の自然発生の形態にまでさかのぼる必要はない。注「それは云々J(W批判-p.10、注1)。自家用のために、穀物、家畜、糸、リンネル、衣類などを生産する農民家族の素朴な家父長的な勤労が、もっと手近にある一例を提供する。これらのさまざまな物は、家族にたいして、その家族労働のさまざまな生産物として相対するが、それら自身が互いに商品として相対することはない。これらの生産物を生み出すさまざまな労働、農耕労働、牧畜労働、織布労働、裁縫労働などは、その自然的形態のまま、社会的機能をなしている。なぜなら、それらは、商品生産と同じように、それ独自の自然発生的分業をもつ、家族の諸機能だからである。一面では男女の別、年齢の相違、および他面では季節の推移につれて変わる労働の自然的諸条件が、家族の間での労働の配分と個々の家族構成員の労働時間とを規制する。しかし、ここでは、労働の継続時間によってはかられる個人的労働力の支出が、はじめから、労働そのものの社会的規定として現れる。なぜなら、個人的労働力は、はじめから、家族の共同的労働力の器官としてのみ作用するからである。〉(34頁)

《フランス語版》

〈共同の労働、すなわち直接的な協力に出会うためには、すべての文明国民の歴史の入口で見られるような、この労働の原始的な自然形態にまで、さかのぼる必要はない(30)。自分たち自身の必要のために家畜、小麦、リンネル、亜麻糸、衣服等を生産している農民家族の田園的、家父長的事業のなかに、この労働の全く身近な一例がある。これらさまざまな物品は、その家族にとっては、家族労働のさまざまな生産物として現れるが、相互に交換される商品としては現れない。これらの生産物の源であるさまざま労働、農耕や牧畜や機織や衣服の仕立等は、当初から社会的機能の形態をとっている。というのは、それらは、商品生産と全く同じように、分業が行なわれている家族の機能であるから。季節の変化につれて変わる自然条件も、年齢や性のちがいが、家族内では、各人にたいする労働の配分と労働時間とを規制する。労働時間による個々人の労働力の支出の測定が、ここでは直接に、労働そのものの社会的性格として現れる。というのは、個々人の労働力は、家族の共同労働力の諸器官としてのみ機能するからである。〉(53-54頁)

●注30に関連して

《経済学批判》

〈[*] 原生的な共有の形態は、とくにスラヴ的な、しかももっぱらロシア的な形態だというのは、近ごろひろまっているばかりの偏見である。それは、われわれがローマ人、ゲルマン人、ケルト人のあいだで指摘することのできる原初形態であるが、これについては、さまざまな見本をそなえたりばな見本帳が、いまでもなお、一部分は遺制としてであるとはいえ、インド人のあいだに見いだされる。アジア的な、ことにインド的な諸共有形態のいっそう詳しい研究は、原生的共有の種々の形態からどのようにしてその崩壊の種々の形態が出てくるかを示すであろう。こうして、たとえばローマのおよびゲルマンの私有の種々の原型が、インド的共有の種々の形態からみちびきだされるのである。〉（全集13巻19頁）

《フランス語版》

〈(30) 共有の原始的形態が特にスラヴ的な、あるいはもっぱらロシア的な形態であるというのは、最近流布されている笑うべき偏見である。それは、ローマ人やゲルマン人やケルト人のもとでも出会う形態であって、この形態については現在でもなお、たとえ断片や破片としてであろうと、さまざまな標本をそなえたその見本台帳を、インド人のもとで見出すことができる。アジア、とりわけインドにおいての分割されていない所有形態の徹底的な研究は、そのさまざまな解体形態がどのようにして出てきたかを、示すであろう。こうして、たとえばローマでの、そしてまたゲルマン人のもとでの私有の種々の原型が、インド的共有のさまざまな形態から発生することができるのである。〉(54頁)

●第15パラグラフに関連して

《初版本文》

〈さて、ロビンソンに代わって、共同の生産手段を用いて労働し、自分たちのたくさんの個人的な労働力を意識的に一つの社会的な労働力として支出するところの、自由な人々の団体を、想定することにしよう。ロビンソンの労働のあらゆる規定が繰り返されるが、このことは、個人的にではなく社会的にというにすぎない。とはいっても、一つの本質的な区別が生ずる。ロビンソンのすべての生産物は、彼ひとりの個人的生産物であったし、したがって、彼にとっては、直接的な使用対象であった。団体の総生産物は社会的な生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。ところが、ほかの一部分は生活手段として団体の構成員たちの手で消費される。したがって、それは、彼らのあいだに分配されなければならない。この分配の様式は、社会的生産有機体そのものの特殊な様式に応じて、また、この様式に対応する生産者たちの歴史的な発展の高さに応じて、変化するのである。ただ商品生産と対比してみるために、生活手段についての各生産者の分けまえが各生産者の労働時間によって規定されている、と前提しよう。そうすると、労働時間は二重の役割を演ずることになる。労働時間の社会的に計画された配分が、いろいろな必要にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を、規制する。他方、労働時間は同時に、共同労働についての生産者の個人的な分担の尺度として役立つ。したがってまた、共同生産物中の個人的に消費可能である部分についての生産者の個人的な分けまえの尺度としても役立つ。人々が彼らの労働や彼らの労働生産物にたいしてもっている社会的な諸関係は、ここでは依然として、生産においても分配においても、透明で簡単である。〉（江夏訳61頁）

《フランス語版》

〈最後に、共同の生産手段を用いて労働し、協議した計画にしたがって多くの個別的労働力を同一の社会的労働力として支出するような、自由な人々の集まりを描くことにしよう。ロビンソンの労働についてすでに述べたことはどれも、ここでも再現されているが、それは社会的にであって、個別的にはない。ロビンソンの生産物はすべて、彼の個人的で専有的な生産物であり、したがって、彼のために直接的な有用性をもつ物品であった。結合した労働者の全生産物の一つの社会的生産物である。この生産物の一部は再び生産手段として役立つ。相変わらず社会的であるが、他の部分は消費され、したがって、全員のあいだで分配されなければならない。この分配様式は、社会の生産有機体と労働者の歴史的な発展段階とに応じて変化するのである。この事態を商品生産と比較対照するために、個々の労働者に与えられる分け前が彼の労働時間に比例するものと前提しよう。そうすると、労働時間は二重の役割を演じるであろう。一方では、社会内での労働時間の配分が、さまざまな必要にたいするさまざまな機能の正確な比率を規制する。他方では、労働時間が、共同労働内での個々の生産者の個別的な分担を測定し、同時に、消費に充てられる共同生産物部分のうち個々の生産者に帰属する分け前を測定する。労働においての人々の社会的関係も、労働から生ずる有用物にたいする人々の社会的関係も、ここでは相変わらず、生産でも分配でも簡単明瞭である。〉（54-5頁）

『資本論』を読んでみませんか

大阪ダブル選挙では、橋下徹前府知事率いる「大阪維新の会」が圧勝しました。

「維新の会」圧勝の原因として上げられているのが、既成政党への不信です。大阪市長選では、民自公共が現市長平松氏支持でタッグを組んだのに負けました。橋下氏からは「理念なき野合」と批判されるありさまでした。もう一つの理由として上げられているのが、蔓延する「閉塞感」です。「市を解体するという前代未聞の訴えが、『大阪を変えてほしい』という市民、府民の切実な思いをとらえた」（東京新聞）というのです。

「維新の会」は、その政策で「大阪の危機」の深刻さを訴え、さらには「国家自体の未曾有の危機」も次のように訴えています。

「国家自体も未曾有の危機に瀕している。2010年の国・地方を合わせた財政収支赤字はGDP比で10%程度にまで拡大し、公的債務残高はGDP比で200%にも達すると予測されている(OECD推計)。政府は全国一律のバラマキ(再分配政策)を始め、財政赤字をさらに拡大させようとしている。日本経済はまさに破綻への道を転がり落ちている。しかし、中央の政府も政党も危機の深刻さを理解しようとせず、どのように窮状から抜け出すのか短期的なビジョンも示せずにいる。」(同会HPから)

では「維新の会」はそうした危機を打開する方途を示しているのか、というと、まったくそうではありません。ただ「大阪都構想」なるものを提示して、都市の構成を再編すると主張しているに過ぎません。こんなもので現在の危機を乗り越える展望など何一つないのに、しかし「何かやってくれるかも」という漠然とした期待が、有権者を選挙に向かわせ、「維新の会」を押し上げたというわけです。

ただ、大阪のみならず、日本全体が深刻な危機と閉塞感にあることは事実です。あるいは日本ばかりか、欧米の先進各国も同じような状況にあるとも言えるでしょう。これはどうしてなのでしょう。

マルクスは『資本論』で「一般的利潤率の傾向的低下の法則」を明らかにしました。資本は最大の利潤を得ようと互いに競争して生産力を高めます。大規模な機械や設備をどんどん導入します。生産過程で労働者を機械に置き換えます。しかし資本が求める利潤(剰余価値)の源泉は、労働者の剰余労働なのです。つまり資本は利潤を求めて生産力を高めるために機械化や省力化

に取り組めば取り組むほど、自分が求める利潤の源泉を生産過程から追い出すという矛盾したことをやらざるを得ないのです。そのために生産手段の価値は、そこで使う労働力の価値に比べてますます大きくなり、その結果、一般的に利潤率は低下する傾向にあるというのです。これがマルクスが明らかにした資本主義的生産に固有の根本的な矛盾を暴露する法則なのです。しかもこの法則は、低下する利潤率を補うために資本をさらなる生産拡大に追いやります。低落する利潤率に追われるように諸資本は生産の拡大・蓄積に狂奔するわけです。その行き着く先がすなわちバブルです。そしてその結果が、08年のリーマン・ショックで私たちが経験した過剰生産恐慌なのです。

マルクスの時代の恐慌は、ほぼ十年周期の産業循環の最後の局面において、こうした資本主義的生産に固有の矛盾の爆発であるとともに、同時にその矛盾を暴力的に調整し、解決する手段でもありました。資本は恐慌という大変な経済的な混乱の煉獄を経て、再び産業循環を最初から開始することができたのです。

「世界市場恐慌は、ブルジョア的経済のあらゆる矛盾の現実的総括および強力的調整として理解しなければならない。」（『剰余価値学説史』全集26II-689頁）

しかしマルクスの時代とは異なり、国家が経済過程に深く関与する現代の資本主義においては、恐慌はもはやこうした産業循環をリセットする機能を十分に果たせなくなっています。恐慌時に特有の価値の暴力的な破壊が徹底して行われる前に、経済的混乱や体制的な危機を恐れる資本の政府がさまざまな救済策を講じてしまうからです。資本主義的生産の矛盾は、十分清算されず温存され、そのために資本は低落したままの利潤率の下で生産への意欲を失い(これが「失われた20年」と言われているものの背景にあるものです)、そればかりか本来破壊されるべき膨大な資本価値(その中には「架空」なものも少なからずあります)を諸資本に代わって背負い込んだ政府は、そのために膨大な債務を抱え込むことになったのです。つまり資本主義的生産の矛盾が、政府の債務危機という形をとって現れることになったのです。それが今日の先進各国を襲っているソブリン危機（国家債務危機）の本当の原因なのです。

だから先進各国を捉えている深刻な停滞と閉塞感、あるいはそれに規定された政治的な混迷は、こうした資本主義的生産そのものの行き詰まりに起因しています。だからこそ、大阪という一都市の構造を変えようが、問題が解決するようなものではないのです。しかしこうした資本主義のどうしようもない行き詰まりは、資本主義的生産様式そのものを根本的に克服する道が示されなければ、やがては混迷を突き抜けようと、戦争への道を掃き清めるファシズム的な“解決”を求める悪しき道へと迷い込むことを歴史は教えています。「維新の会」は、そうした危険な芽を持った存在とも言えるでしょう。

こうした意味でも、現代の資本主義社会を新しい社会へと展望する労働者階級の闘いこそが、

ますます必要となっているのです。そしてそのためにも意識ある労働者の『資本論』の学習は欠かせません。是非、貴方も共に『資本論』を読んでみませんか。

第41回「『資本論』を読む会」の報告

◎収束宣言？！

野田首相は、16日、東電福島第一原発事故の収束宣言を行いました。「発電所の事故そのものは収束に至ったと判断される」と。しかし、メルトダウンし、さらに压力容器をメルトスルーし、あるいは格納容器さえも突き抜けたくない抜け落ちた核燃料が今どうなっているかは、誰も直接には知ることができていないのではないのでしょうか。

そればかりか、すでに広範囲に拡散され、今も垂れ流され続けている深刻な放射能汚染は、福島県を中心にした東北地方のみならず、首都東京や西日本も含めたまさに日本列島全体を、その海域も含め、これから放射能の恐怖に晒そうとしているのです。

いったい、どの面を「事故は収束した」などと言えるのでしょうか。住み慣れた美しい故郷を汚され、安住の地を失い、剥ぎ取られ、追い払われた何万人もの人たちの心を踏みにじるものではないのでしょうか。

腹立たい気持ちちは容易に納まりませんが、しかし、とにかく第41回「『資本論』を読む会」の報告をやりたいと思います。

◎第12パラグラフの「ロビンソン物語」に関連する二つの疑問

今回は、すでに第39回で学習した第12パラグラフのロビンソン物語に関連して、二つの疑問が出され、まず、その議論から始まりました。というのは、以前紹介した新参加者の方（今、仮に「Nさん」としておきます）が、そのときには都合で参加されなかったために、今回、その疑問を改めて提出されたからです。だから、まずその疑問と関連する議論の紹介から始めることします。

★第一問、どうして「ヤギ」ではなく、「ラマ」なのか？

最初の疑問は、次の部分に対するものです。

〈経済学はロビンソン物語を好むから(29)、まず孤島のロビンソンに登場願おう。生まれつきつましい彼ではあるが、それでもさまざまな欲求を満たさなければならず、したがってまた、道具をつくり、家具をこしらえ、ラマ〔南アメリカ産のラクダ科の役畜〕を馴らし、魚をとり、狩りをするといったさまざまな種類の有用労働を行わなければならない。〉

ここでマルクスはロビンソンが「ラマ〔南アメリカ産のラクダ科の役畜〕を馴らし」と書いていますが、Nさんによれば、デフォーの書いた「ロビンソン・クルーソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険」によれば、ロビンソンが飼っていたのは「ヤギ」になっているのだそうです。ロビンソン・クルーソー物語そのものは空想物語ですが、そのヒントになったと言われている、スコットランド人航海長アレキサンダー・セルカークの実話（その体験談が1713年に出版されている）によれば、そのヤギというのはセルカーク自身が島（マス・ア・ティエラ島、後にロビンソン・クルーソー島と改名）に持ち込んだものなのだそうです。

だからどうしてマルクスは物語とは違った「ラマ」にしているのか、というのがNさんの疑問なのです。あるいはマルクスはロビンソン物語の実話の島がチリの沖合に浮かぶファン・フェルナンデス諸島（その主島がロビンソン・クルーソー島）であることを知り、南米ならばヤギではなくラマだろうと考えたのかも知れないが、しかしラマというのは南米のアンデス山脈の高地で古くから役畜として飼育されてきたようですが、果たしてチリ沿岸とはいえ、島にも生息していたといえるのだろうか、というのもNさんの疑問でもあるのです。果たしてどうでしょうか。困ってしまいました。

マルクスが「ヤギ」ではなく、どうして「ラマ」にしたのか、というのは、よく分かりませんが、そもそもマルクスが「ロビンソン物語」という場合、それはある程度、象徴的な意味をもたせているのではないだろうか、という意見がだされました。というのは注29で「リカードにも彼のロビンソン物語がないわけではない」と述べて、〈彼は、原始的な漁師と猟師にも、ただちに商品所有者として、魚と獣とを、それらの交換価値に対象化された労働時間に比例して交換をとり行わせている〉という『経済学批判』の一文を紹介していますが、しかし、実際にリカードの著書を見ても、ロビンソン物語そのものが直接論じられているのではなく、〈アダム・スミスが説ける、彼の初期の状態〉の話として、〈海狸〉（ビーバーの別名）と〈鹿〉の猟師に必要な労働の違いによって、〈一頭海狸は当然二頭の鹿よりも多くの価値を有する〉などと論じているだけです（『経済学及び課税の原理』第1章第3節）。だから現在の経済諸関係や諸法則を、人間社会の原初的な関係にまで遡って説明しようとする試みを、象徴的に「ロビンソン物語」としているところがあるのではないだろうかというのです。その意味では、実際のロビンソン物語に忠実ではないということそのものは、それほど重要な問題ではないだろうというわけです。

またこれに関連して、以前にも問題になりましたが、第12パラグラフで論じているロビンソン物語の考察は、そもそもどういう意義があるのか、またそれに続いて第13パラグラフで取り上げられているのが、どうして中世社会なのか、という疑問も出されました。つまりこの一連のマルクスの考察の順序にはどんな意味があるのか、という問題です。

この問題については、すでに第39回の報告のなかでも触れましたので、その部分を少し紹介することをお許ください。そこでは次のように論じています。

〈マルクスの場合、すでに見たように、ロビンソンの孤島での生活をあらゆる社会的な関係とは無縁の一つの抽象物として論じています。ロビンソンは孤島でひとりぼっちなので、ここでは彼と自然との関係のみがあるだけです。これはマルクスが「第5章 労働過程と価値増殖過程」の「第1節 労働過程」において、労働過程をとりあえずはあらゆる社会形態から独立してそのものとして考察したのと同じような関係が、ここにはそのまま、つまり何の抽象も必要なく、具体的なものとして存在しているわけです。……（中略）……ここでマルクスが述べているように、マルクスのロビンソンの孤島での生活の考察は、それが〈人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であり、……人間生活のすべての社会形態に等しく共通なもの〉としてではないかと思えます。それがロビンソンの孤島での生活では、一つの空想的な物語とはいえ、具体的に何の抽象も必要のない形で存在しており、その具体性において、一般的条件が考察できるからではないかと思うわけです。〉

議論のなかでは、ロビンソンは漂流して、孤島に流れ着くことによって、ロビンソンが生活していたその時代の社会的な生産諸関係から切り離されてしまったために、彼の孤島での生活は、〈人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件〉という、どんな社会形態からも独立した関係になってしまったのではないかと。つまり漂流は彼の生活にある特定の生産諸関係から抽象する役割を果たしたと言えるのではないかと、との指摘もありました。そしてそれがマルクスが最初にロビンソン物語を考察している理由ではないかということです。

では、それ（第12パラグラフの考察）に続いて、マルクスが中世社会の労働（第13パラグラフ）や家父長制の下での労働（第14パラグラフ）、将来の連合体社会の労働（第15パラグラフ）という順序で考察していますが、この順序には何か意味があるのか、という問題についてはどうでしょうか。

これについては、一つは、マルクスは第11パラグラフまで、商品世界の物神的性格について、それを生み出す原因を明らかにし、労働生産物の物象的諸関係が、ブルジョア経済学の諸カテゴリーをなしていること、だからそれらは歴史的に規定された商品生産を基礎とする社会（資本主義社会）に固有のものであることを明らかにしたのです。そしてマルクスは、だから商品生産を基礎とする社会とは違った別の生産諸形態の場合には、そうした労働生産物に纏い付く神秘的なものは直ちに消え失せるのだ、と述べて、第12～15パラグラフにおいて、そうした資本主義的生産様式とは異なる別の生産諸形態の考察を行っているわけです。

それをマルクスは、まず最初に、人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものであり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件を示す具体例として、空想物語であるロビンソンの孤島での生活を例に考察を行い、そのあと資本主義的生産様式から歴史的に遡って、最初の前資本主義的生産様式である中世社会の考察に移っていると考えられます。そこでは人格的な依存関係が、労働の社会的な関係に、すなわち生産諸関係になっている社会でした。そこで次に、マルクスは〈共同的な、すなわち直接的に社会化された労働を考察するためには、われわれは、すべての文化民族の歴史の入口で出会う労働の自然発生的形態にまでさかのぼる必要はない〉として、中世の封建社会へと発展する以前の社会形態である、家父長制の家族労働の分析を行ったのです。そして最後に、マルクスは今度は、一転して、将来の自由な個人の自覚的な連合体の社会を想定して、そこでも諸関係は極めて透明であり、労働生産物が神秘的な霧に覆われる必要はないことを明らかにしたのです。もしこの考察の順序に意味があるとすれば、その程度のものではないでしょうか。

あるいは、こうした考察の順序自体には、それほど重要な意味がないのかも知れない、という意見も出されました。というのは、第40回の報告でも注30と関連して、紹介したことのある『経済学批判』では次のようにマルクスは論じているからです（すでに一度紹介しましたが、もう一度紹介しておきます）。

〈これに反して、紡ぎ手も織り手も同じ屋根の下に住んでいて、いわば自家需要のために、家族のうちの女たちは紡ぎ、男たちは織っていた家父長制的農村工業においては、家族の限界内で糸とリンネルとは社会的生産物であり、紡績労働と織布労働とは社会的労働であった。けれどもそれらの社会的性格は、一般的等価物としての糸が一般的等価物としてのリンネルと交換されること、つまり両者が同じ一般的労働時間のどちらでもよい、同じ意味の表現として互いに交換されることにあったのではない。むしろ原生的な分業をもつ家族関連が、労働の生産物にその固有な社会的極印をおしたのである。あるいはまた、中世の賦役と現物給付をとってみよう。ここでは現物形態にある個々人の一定の労働が、労働の一般性ではなくて特殊性が、社会的紐帯をなしている。あるいはまた最後に、すべての文化民族の歴史の入口で見られるような、原生的形態にある共同労働をとってみよう〔*〕。ここでは労働の社会的性格は、明らかに個々人の労働が一般性という抽象的形態をとることによって、つまり彼の生産物が一つの一般的等価物の形態をとることによって媒介されているのではない。個々人の労働が私的労働となることを妨げ、彼の生産物が私的生産物となることを妨げ、むしろ個々の労働を直接に社会有機体の一体体の機能として現われさせるものは、生産の前提とされている共同体である。交換価値であらわされる労働は、個別化された個々人の労働として前提されている。それが社会的となるのは、それがその正反対の形態、抽象的一般性の形態をとることによってである。〉（全集13巻18-19頁）

この本文中にある〔*〕につけられた注として、現行版の注30とほぼ同じ内容のものが付けられているのです。ところで、ここでマルクスが考察している順序は、(1)家父長制の家族労働、(2)中世の賦役と現物給付、(3)原生的形態にある共同労働、というものです。だからこの考察の順序自体に、何か意味があるようにはどうしても思えません。こうした例を考えてみると、『資本論』の場合も、あまりその考察の順序自体に何か深い意味があるかに考えるのは、やはり考えすぎではないかと思うわけです。

★第二問、〈価値のすべての本質的規定〉の三つ目はどこに〈含まれている〉のか？

これは次の部分に対する疑問です。

〈ロビンソンと彼の手製の富である諸物とのあいだのすべての関係は、ここではきわめて簡単明瞭であって、M・ヴィルト氏でさえ、とりたてて頭を痛めることなしに理解できたほどである。にもかかわらず、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれているのである。〉

このように、マルクスはロビンソンと彼の作った諸物とのあいだの関係は、簡単明瞭であって、簡単に理解できるものであるにもかかわらず、そこには、価値のすべての本質的規定が含まれていると述べています。マルクスがわざわざ〈すべての〉と述べているのは、いうまでもなく、マルクスが第2パラグラフで次のように述べていたことに対応しています。

〈したがって、商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じるのではない。それはまた、価値規定の内容から生じるのではない。と言うのは、第一に、有用労働または生産的活動がたがいになんかに異なっても、それらが人間の有機体の諸機能であること、そして、そのような機能は、その内容やその形態がどうであろうと、どれも、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは、一つの生理学的真理だからである。第二に、価値の大きさの規定の基礎にあるもの、すなわち、右のような支出の継続時間または労働の量について言えば、この量は労働の質から感覚的にも区別されるものである。どんな状態のもとでも、人間は――発展段階の相違によって一様ではないが――生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった(26)。最後に、人間が何らかの様式でたがいのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的形態を受け取る。〉

このようにマルクスはここでは「価値規定の内容」として三つの契機について論じています。(1)価値の実体である抽象的人間労働の基礎にあるものは、その内容や形態がどうであろうと、人間有機体の諸機能として、本質的には人間の脳髄、神経、筋肉、感覚器官などの支出であるということは生理学的真理であり、そこには何の神秘性もない。(2)また価値の大きさの規定の基礎にある、そうした労働の支出の継続時間、あるいは労働の量についても、やはり労働の質から感覚的にも区別されるものであり、やはり何の神秘性もない。(3)労働の社会的形態についても、やはり人間が何らかの様式で互いのために労働するようになるやいなや、必ずそうした形態を受け取るものである、と。

Nさんの疑問は、このマルクスが〈最後に〉と述べているものは、ロビンソンと彼の諸物とのあいだの如何なる関係に

〈含まれている〉のか、というものです。

この問題については、第39回の学習会でも問題になりました。そして議論の結果、それは〈彼の全活動の中でどの機能がより大きい範囲を占め、どの機能がより小さい範囲を占めるかは、所期の有用効果の達成のために克服されなければならない困難の大小によって決まる。経験がそれを彼に教える〉という部分に合致しているのではないかと、ということになったのでした。だから報告では次のように書いています。

〔(f)、(f) 彼の全活動のなかで、どの機能がより大きな範囲を占めるか、あるいはどの機能がより小さい範囲を占めるかは、必要な有用な効果を達成するためにやらなければならないことの困難の大小によって決まってくるでしょう。経験がそれを彼に教えます。〕

この部分もロビンソンのさまざまな諸機能が対象である自然に働きかけて、彼が目的にしたものを獲得するために、相互に有機的に関連しあつた形で支出される必要があることが指摘されているわけですが、これも先の価値規定の内容の第三のものに対応していると考えることが出来るでしょう。

〈最後に、人間が何らかの様式でたがいのために労働するようになるやいなや、彼らの労働もまた一つの社会的形態を受け取る。〉

つまり社会的にはさまざまな人間によって担われる、彼らの社会的形態を受けた労働、すなわち社会的に結びあつていよう労働が、ロビンソンの場合は、彼自身のさまざまな機能として一人の人間の諸機能として関連し合つて支出されるということなのです。

このようにこれらのロビンソンの労働の分析は、第2パラグラフの価値規定の内容には何の神秘的な性格もないと述べていた内容に対応しています。これはある意味では当然なのです。というのは、初版本文では、この第12パラグラフのロビンソンの生活の考察と、第15パラグラフの将来の自由な人々の連合体の社会的考察は、第2パラグラフの直後に、その第2パラグラフで述べている価値規定の内容には神秘的なものは何もない具体的な例証として論じられていたものなのです（だから初版では第3、第4パラグラフにありました）。それをマルクスは第2版ではやや位置づけを変えて、今の位置に持ってきているのです。こうした初版と第2版との違いは、どういう意味があるのかも、一つの問題といえませんが、それはまた別に機会があれば論じたいと思います。〕

しかし、今回、議論のなかで、この〈最後に〉とマルクスが述べている価値規定の内容の三つ目の内容は、人間労働が社会的形態をとることについて述べているのに、今、ロビンソンのところで引用している部分は、労働の社会的形態というより、ロビンソンの時間がさまざまな労働に配分されることについて述べているという指摘がありました。だからロビンソンの諸労働が互いに結び合つて一つの分業の体系をなしているということを言っているのは、その部分ではなく、むしろ最初に言われている次の部分の方が適切ではないか、ということになりました。すなわち次の部分です。

〈生まれつきつましい彼ではあるが、それでもさまざまな欲求を満たさなければならず、したがってまた、道具をつくり、家具をこしらえ、ラム〔南アメリカ産のラクダ科の役畜〕を馴らし、魚をとり、狩りをするといったさまざまな種類の有用労働を行わなければならない。〉

つまりこうしたロビンソンのさまざまな労働は、彼の諸欲求を満たすために、全体として有機的に関連して支出されなければならないという意味で、一定の社会的形態を持たねばならないと言えるのではないかと、というわけです。

なおこれに関連して、Nさんは、さまざまな解説書がその部分をどのように説明しているかも紹介してくれましたが、それはここでは割愛させていただきます。ただNさんが河上肇の『資本論入門』も例に上げてくれましたが、河上肇の場合は、ロビンソンと彼の諸物との関係に含まれる価値規定の内容として上げているのは、最初の二つだけで、マルクスが〈最後に〉と述べている部分は取り上げていません。つまりNさんが問題にしている部分については何ら論じていないように思えます。もちろん、これではマルクスが〈価値のすべての本質的規定〉(下線は引用者)と述べていることに必ずしも忠実ではないこととなります。

◎第16パラグラフ

さて、今回はそういうこともあって、実際に進んだのは、第16パラグラフ一つだけでした。その報告を次に行います。これまでと同じように、まず本文を紹介し、それを文節ごとに記号を付して、それぞれについて平易に解説しながら、議論の内容も紹介していくことにします。

【16】 〈(i)商品生産者たちの一般的社会的生産関係は、彼らの生産物を商品として、したがってまた価値として取りあつかい、この物的形態において彼らの私的諸労働を同等な人間労働としてたがいに関係させることにあるが、このような商品生産者たちの社会にとっては、抽象的人間を礼拝するキリスト教、ことにそのブルジョアの発展であるプロテスタント、理論などとしてのキリスト教が最もふさわしい宗教形態である。(ii)古アジア的、古代的等々の生産様式においては、生産物の商品への転化、したがってまた商品生産者としての人間の現存は、一つの副次的な役割を――といっても、共同体が崩壊の段階にはいっていけばいくほど、ますます重要な役割を――演じている。(iii)本来の商業民族は、エピクロスの言う神々のように、あるいはポーランド社会の気孔の中のユダヤ人のように、古代世界の空所にのみ存在する。(iv)あの古い社会的生産有機体は、ブルジョア的生産有機体よりもはるかに簡単明瞭ではあるが、それらは、他の個人々との自然的な種族関係へのそのおからまだ切り離されていない個人々の未成熟にもとづいているか、さもなければ、直接的な支配隷属関係にもとづいている。(v)それらの生産有機体は、労働の生産諸力の発展段階の低さによって、またそれに照応して局限された、物質的生活生産過程の内部における人間の諸関係、したがって人間相互の諸関係と人間と自然との諸関係によって、制約されている。(vi)この現実の被局限性が古代の自然宗教や民族宗教に観念的に反映している。(vii)現実世界の宗教的な反射は、一般に、実際の日常生活の諸関係が、人間に対して、人間相互の、また人間と自然との、すいて見えるほど合理的な諸関係を日常的に表すようになる時、はじめて消えうせる。(viii)社会的生産過程の、すなわち物質的生産過程の姿態は、それが、自由に社会化された人間の産物として彼らの意識的計画的な管理のもとにおかれる時、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎすてる。(ix)けれども、そのためには、社会の物質的基礎が、あるいは、それ自身がまた長い苦難に満ちた発展史の自然発生的産物である一連の物質的存在諸条件が、必要とされる。〉

(i) 生産物をもっぱら商品として生産する生産者の社会的な関係（つまり資本主義的な生産関係）は、生産物を商品として、したがってまた価値として取り扱い、その商品の価値という物的形態において、生産者の私的な諸労働を同等な人間労働として互いに関係させることにあります。こうした商品生産者たちの社会においては、抽象的人間を礼拝するキリスト教、ことにそのブルジョアの発展であるプロテスタントや理論などとしてのキリスト教が最も相応しい宗教形態です。

このパラグラフから問題が一転しています。第12～15パラグラフは、第11パラグラフで〈したがって、商品生産の基礎の上で労働生産物を霧に包む商品世界のいっさいの神秘化、いっさいの魔法妖術は、われわれが別の生産諸形態のところに逃げこむやいなやただちに消えうせる〉と述べたのを受けて、その〈別の生産諸形態〉が考察されたのでした。だ

からその考察が第15パラグラフで終わった今、第16パラグラフからは、再び、〈商品生産の基礎の上で労働生産物を霧に包む商品世界のいっさいの神秘化、いっさいの魔法妖術〉の問題に戻り、それが宗教の諸形態として反映することが、今度は問題になっているように思えます。初版本文ではこのパラグラフの冒頭は、次のように始まっています。

〈つまり、商品の神秘性は次のことから生じている。すなわち、私的生産者たちにとっては、自分たちの私的労働の社会的な諸規定が、労働生産物の社会的な自然規定性として現われているということ、人々の社会的な生産諸関係が、諸物の対相互的および対人的な社会的諸関係として現われているということ。社会的総労働にたいする私的労働者たちの諸関係は、彼らに対立して対象化され、したがって、彼らにとっては、諸対象という形態で存在している。〔∕〕商品生産者たちの一般的な社会的生産関係は、自分たちの生産物を商品として、したがって価値として取り扱い、この物的な形態において、自分たちの私的労働を同等な人間労働として互いに関係させる、という点にあるのであるが、このような商品生産者たちの社会にとっては、抽象的な人間にたいする礼拝を伴うキリスト教が、ここにそのブルジョア的な発展であるプロテスタントや理神論等々におけるキリスト教が、最もふさわしい宗教形態である。……〉(但し〔∕〕は引用者が付けた)

つまり初版本文では、こうした一連の文章であったのです。〔∕〕より前の一文は、現行版の第4パラグラフ、くしたがって、商品形態の神秘性は、単に次のことにある。すなわち、商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、したがってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある〉とは同じ内容になっています。つまり〈商品の物的性格とその秘密〉(第4節の表題)が結論的に説明されています。そしてそのあとそれらは宗教としても反映されていることに問題が移っているわけです。フランス語版では、このパラグラフの最初に〈宗教界は現実世界の反映にほかならない〉という一文が来たあとほぼ同じ内容の(やや文章が違います)展開があります。だからこのパラグラフからは、明らかに商品の物的性格の宗教的反映が問題になっているといえるでしょう。

ここでは、キリスト教が商品生産者たちの社会にとってもっとも相応しい宗教形態であることが指摘されています。そしてその理由として、商品生産者たちの社会では、生産者たちの社会的関係を生産物を商品として、あるいは価値として取り扱うことによって、物の関係によって、彼らの私的諸労働を同等性な人間労働として関係させる社会だからというものです。それが抽象的人間を礼拝するキリスト教、特にプロテスタントや理神論として反映しているのだとしています。

学習会ではキリスト教が抽象的人間を礼拝する宗教だというのがよく分からないという意見が出ました。これについては、埼玉の所沢で行われている「『資本論』を読む会」のブログで紹介されている浜林正夫氏の著書からの引用が紹介されました。それをそのサイトから重引して紹介しておきましょう。

〈キリスト教には、カトリックとプロテスタントがあります。カトリックのほうは飾りたてた物を拜むという傾向があります。カトリックの教会には十字架やキリスト像など飾り物がいっぱいあります。それにたいしてプロテスタントの教会には飾り物はありません。そこで、人びとは十字架を拜むのではなく、自分の心の中に神を思いうかべて拜むという内面的、抽象的な形をとります。理神論というのは、さらにそれが徹底され、特定の神を思いうかべない。つまり、具体的にキリストやエホバなどの特定の神ではなく、心の中に思いうかべる神といった抽象性をもつようになります。そういうかたちが、ブルジョア社会、商品生産の社会にいちばんふさわしいのはなぜか。そこでは、身分の違いをこえて人間がすべて平等に考えられているようなそういう社会だということです。〉(『資本論』を読む(上) 137-138頁)

またこれに関連して、宗教というのは、そもそもどういふものか、それは将来の社会では無くなるというのは本当か、という議論にもなりました。そこで、少しこの問題について、エンゲルスの見解を紹介しておきましょう。エンゲルスは『フイエールバハ論』のなかで次のように述べています。

〈宗教は、非常に原始的な時代に、人間が自分自身の本性と自分をとりまく外的自然についていだいていた誤った非常に原始的な諸観念から発生したものである。ところが、どのイデオロギーもひとたび存在するようになると、与えられた観念材料と結びついて、この観念材料をいっそう発展させるものである。そうでないなら、それはイデオロギーではないであろう。つまり、独立に発展し、ただ自分自身の法則だけにしがう自立的な存在としての思想との取り組みではないであろう。こうした思想過程がその頭のなかで生じている人間には、自分の物質的生活の諸条件がけっきよはこの過程の経過を規定するのだということとは、必然的に意識されないうまでである。というのは、もし意識されるなら、おおよそイデオロギー全体がおしまいになってしまうであろうから。そういうわけで、たいいてい近縁のどの民族群にも共通であるこの根源的な宗教的諸観念は、民族群が分離したのちには、各民族において、その民族に与えられた生活条件にしたがって、独特の発展をとげる。そして、この発展の過程は、一連の民族群、とくにアーリア民族群(いわゆるインド・ヨーロッパ民族群)にかんしては、比較神話学のおかげでくわしく示されている。各民族においてこのようにつくりあげられた神々が民族神であって、その領域は、この神々の手で守護されるはずになっている民族の領土を越えることはなく、その境界のかなたでは、別の神々が文句も言われずに大きなことを言っていたのである。この神々は、ただその民族が存続しているあいだだけ、その観念のなかに生きながらえることができた。その民族の没落ととも神々は亡びた。〉(全集第21巻308-9頁)

またキリスト教については、次のように述べています。

〈中世においてはキリスト教は、封建制が発達するのとちょうど同じ歩調で封建制に照応した宗教となり、この制度に照応した封建的位階制度をもっていた。そしてブルジョアジーが台頭してきたとき、封建的なカトリック教に対抗してプロテスタント的異端が発展してきた。それはまず、南フランスの諸都市が最も繁栄していた時代に、そこのアルビ派のあいだで発展した。中世は、神学以外のイデオロギーのすべての形態――哲学、政治学、法学――を神学に併合して、これを神学の部門としていた。そのために、中世では、どの社会的運動も政治的運動も神学的形態をとるほかなかった。大衆の気持はもっぱら宗教でやなわれていたから、大きなあらしをまきおこすためには、大衆自身の利益も宗教的に扮装してもちださなければならなかったのである。そしてブルジョアジーが最初からその付属物として、公認された身分に属していない無産の都市平民、日雇人、あらゆる種類の召使いなど、のちのプロレタリアートの先駆をなす人々を生みだしていたように、プロテスタント的異端もまた、すではやくから、ブルジョア的に穏健なもの、ブルジョアの異端者たちからもきられていた平民的に革命的なものに分かれていた。

プロテスタント的異端が根絶できないのは、台頭するブルジョアジーを打ちまかすことができないのに照応していた。このブルジョアジーが十分に強くなったとき、これまでは主として地方的なものであった封建貴族との闘争は、全国的な規模をとりはじめた。その最初の大打撃はドイツで起こった。いわゆる宗教改革がそれである。……(中略)……キリスト教は、以後どれにせよ進歩的な階級のためにその要求のイデオロギーの扮装として役だつということができなくなった。それは、まずまず支配階級の独占物となり、支配階級はそれを下層階級を制御するただの統治手段としてもちいている。この場合さまざまな階級のうちのどれも、自分自身に照応した宗教を利用している。すなわち、地主貴族はカトリックのイエズイット派やプロテスタントの正統派を、自由主義的および急進的ブルジョアは理性宗教を、利用している。〉(同309-310頁)

(H) 古代アジア的、古代的などの生産様式においては、生産物の商品への転化、したがって商品生産者としての人間の存在は、一つの副次的役割を演じています。といっても、共同体が崩壊段階にはいっていけばいくほど、そうした関係は重要な役割を果たすようになるのですが。

ここでは、商品生産を基礎とする社会、すなわち資本主義以前の生産様式が問題になり、やはりそこでの社会的関係の宗教的な反映はどうか論じられています。そしてそのために、まずここではそれらの生産様式では、商品生産の諸関係がまだ副次的な役割しか果たしていないことが指摘されています。

またここでは〈古アジア的、古代的等々の生産様式〉という文言が出てきます。これはマルクスが『経済学批判』序言で次のように述べていたことに対応していると思います。

〈大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョア的の生産様式を経済的社会構成のあいつく諸時期としてあげることができる。ブルジョア的の生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。〉（全集13巻7頁）

この〈アジア的〉あるいは〈古アジア的〉というのは、「アジアの生産様式」を指すことが指摘されましたが、しかしアジアの生産様式をどうい社会構成体として捉えるかについては、さまざまな論争があり、学習会の議論もその点ではあまり深まりませんでした。かつてはアジアの生産様式を原始共同体と同じものとして捉える主張が優勢でしたが、最近では、原始共同体が崩壊する過程で最初に見られる生産様式であり、マルクスが『資本主義的生産に先行する諸形態』で指摘している「総体的奴隷制」と同じ、最初の階級社会であるとする主張が一般的になっているようです（といっても、それは「奴隷制」とは違った概念であることに注意が必要です）。

また〈古代的〉というのは、同じく『先行する諸形態』で、マルクスが「ギリシャ・ローマ的」と述べているものと同じであり、奴隷制的な生産様式を指しているという意見が出されました。

こうした社会では、商品生産は未発達で、従属的な役割しか果たしていないということです。マルクスは『経済学批判要綱』の序説では、次のように述べています。

〈貨幣や貨幣の生まれるための条件である交換は、個々の共同体の内部ではまったく現われないが、またはわずかしが現われないで、むしろ共同体の境界で他の共同体との交渉で現われる。じっさい、交換を共同体そのもののなかに本源的な構成要素としてもちこむことは、およそまちがいのなのである。むしろ、交換は、当初は、一つの同じ共同体のなかの諸成員のあいだでよりも別々の共同体の相互関係のなかでのほうがより早く現われるのである。さらに、貨幣は、非常に早くから全面的に一つの役割を演じてはいるが、しかし古代に支配的要素としてそれが現われているのは、ただ、一面的に規定された諸国民、すなわち商業国民の場合だけである。そして、最高度に完成された古代にあってさえも、すなわちギリシア人やローマ人のものでさえも、近代ブルジョア社会で前提されているような貨幣の十分な発展は、ただその崩壊の時代に現われるだけである。つまり、このようなまったく簡単な範疇でも、それが歴史的にその内包性をもって現われることは、社会の最も発展した状態のものでよりほかにはないのである。それは、けっしてすべての経済関係にゆきわたっていたのではない。たとえばローマ帝国では、その最高の発展期にも、相変わらず現物租税や現物給付が基礎になっていた。ローマ帝国で貨幣制度が完全に発展していたのは、もともとただ軍隊だけのことだった。それが労働の全体に及んだことも、けっしてなかったのである。〉（全集13巻630頁）

(H) 本来の商業民族は、エビクロスのいう神々のように、あるいはポーランド社会の気風の中のユダヤ人のように、古代世界の空所にもみ存在していました。

ここでは古代ギリシャの哲学者であるエビクロスが出てきます。J J 富村さんは昔読んだことがあるということで、その主張は、原子論を唱え、ほとんど無神論に近い主張なので、神を空所に追いやったのではないが、との説明でした。マルクスは「ライプティヒ宗教会議、III 聖マックス」という論文で、エビクロスについて次のように述べています。

〈エビクロスは古代のほんとうのラディカルな啓蒙家であった。彼は古代の宗教を大づばりに攻撃したのであって、ローマ人にみられる無神論も――これがローマ人のもとに存在したかぎりには、――彼に由来したのである。ルクレティウスが彼を、まっさきに神々を倒し宗教を踏んづけた英雄としてたたえたのもこのゆえであり、エビクロスがブルタルコスからルターまでのすべての教父たちから、本格的な洗神哲学者、豚野郎の異名をとったのもこのためであり、アレクサンドレイアのクレメソスが、哲学を目の仇にするパウロの意図にはただエビクロス哲学があるばかりなのだと言うのもそのためである(『雑纂』第1巻(第11章) 295頁、ケルン版(1688年)。これによってみれば、世間の宗教を歯に衣きせず攻撃したこのむき出しの無神論者が世の中にたいしてどんなに「狡くて、インチキで」そして「賢い」態度をとったかということ、これにたいしてストア派のほうは古い宗教をわが身に合わせて思弁的にうまくアレンジし、懐疑派のほうは彼らの「そう見える」を口実にして自分たちの判断にいつでも心の中の留保をともなわせようようにしたことがわかる。〉（全集第3巻127頁）

またマルクスは先に紹介した『要綱』序説では、古代の商業民族について、次のように述べています。

〈古代世界で商業民族――フェニキア人やカルタゴ人――が示した純粋性(抽象的規定性)は、まさに、農業民族が優勢だったということ自体によるものである。商業資本または貨幣資本としての資本は、資本がまだ社会の支配的要素になっていないところでこそこのような抽象性で現われるのである。ロンバルド人やユダヤ人も、農業を営む中世の社会にたいして、これと同じ地位を占めている。〉（同635頁）

(c) こうした古い社会的生産有機体は、ブルジョア的の生産有機体よりもはるかに簡単明瞭ですが、それらは、他の個々人との自然的な種族関係のへその緒からまだ切り離されていない個々人の未成熟にもとづいているか（アジア的の生産様式の場合）、そうでなければ、直接的な支配隷属関係にもとづいているのです（古代的の生産様式の場合）。

(g) それらの生産有機体は、労働の生産力の発展の低さによって、またそれに照応して極めて限られた、物質的な生活過程の内部における人間の諸関係、だからまた人間相互の諸関係と人間と自然との諸関係によって、制約されています。

(h) この現実の生活の局限された状態が、古代の自然宗教や民族宗教に観念的に反映しています。

ここでは〈古代の自然宗教や民族宗教〉という言葉が出てきますが、その内容については、すでに紹介したエンゲルスの『フォイエルバッハ論』からの最初の引用文や、すぐ後で紹介する『反デューリング論』の中にその説明があると見えます。

(t)、(f) 現実世界の宗教的な反射は、一般に、実際の日常生活の諸関係が、人間に対して、あるいは人間相互の、また人間と自然との、透明な関係として、よって合理的な諸関係を日常的に表すようになると、初めて消え失せるようになります。社会的な生活過程の、すなわち物質的な生活過程の姿は、それが、自由に社会化された人間の産物として彼らの意識的で計画的な管理のもとにおかれたとき、はじめてその神秘的ヴェールを脱ぎ捨てるのです。

宗教の消滅については、まずエンゲルスの『反デューリング論』から紹介しておきましょう。

（ところで、いっさいの宗教は、人間の日常生活を支配する外的な諸力が、人間の頭のなかに空想的に反映されたものにほかならないのであって、この反映のなかでは、地上の諸力が天上の諸力の形態をとるのである。歴史の初期には、まず最初に自然の諸力がこういう反映の対象となるのであって、それらは、その後の発展につれて、さまざまな民族のあいだでさまざまに多様な、きわめて雑多な人格化をこうむる。……（中略）……さらにすすんだ発展段階では、多くの神々のもっていた自然のおよび社会的な属性が、ことごとく全能の唯一神に移されるが、この唯一神そのものはこれまで抽象的人間の反射にすぎない。このようにして一神信仰が成立したが、これは、歴史的にはギリシア後期の俗流哲学の最終の産物であって、ユダヤ人の排他的な民族神やハウェ〔エホヴァ〕に、既成のものとして自分の化身を見いだした。こういう便利で手ごろな、なんにでも適応できる姿では、宗教は、人間を支配する外的な自然のおよび社会的な諸力にたいする人間のふるまいの直接的な、すなわち情緒的な形態として、人間がこのような諸力の支配のもとにあるかぎり、つづることができるのである。だが、すでに幾度も見たように、今日のブルジョア社会では、人間は、あたかも外的な力によるかのように、彼ら自身がつくりだした経済的諸関係によって、彼ら自身が生産した生産手段によって、支配されている。だから、宗教的反射作用の現実の基礎はいまなお存続しているのであって、それとともに、宗教的反射そのものも存続している。そして、たとえブルジョア経済学がこのような外的な力の支配の因果関係をいくぶん洞察する道をひらいたにしても、実質上はなにも変わらない。ブルジョア経済学は、恐慌を全般的に阻止することもできなければ、個々の資本家を損失や貸しだおれや破産から守ることも、個々の労働者を失業や貧困から守ることもできない。いまでもやはり、事を計画するのは人間、事の成否を決するのは神（つまり、資本主義的生産様式の外的な力の支配）という状態になっている。たんなる認識だけでは、たとえそれがブルジョア経済学の認識よりもいっそうすすんだ、いっそう深いものであっても、社会的な諸力を社会の支配に服させるには足りない。そのためには、なによりもまず一つの社会的行為が必要である。そして、この行為がなしとげられたとき、すなわち、社会がいっさいの生産手段を掌握しそれを計画的に運用することによって、社会自身とその全成員とを、現在彼らがこの生産手段――彼ら自身で生産したものでありながら、優越する外的な力として彼らに対立しているところの――のためにおとし入れられている隷属状態から解放するとき、したがって、人間がもはや事を計画するだけでなく事の成否をも決するようになるとき、そのときにはじめて、いまなお宗教に反映されている最後の外的な力が消滅し、それとともに宗教的反映そのものも消滅する。それは、そのときにはもう反映すべきものがないという、簡単な理由によるのである。）（全集第22巻325-6頁）

またマルクスも『剰余価値学説史』の中で次のように述べています。

（人間が自分自身の自然や外部の自然や他の人間にたいする自分の関係を宗教的な形態で独立化して、そのためにこれらの観念によって支配されるようになれば、人間は聖職者たちと彼らの労働とを必要とする。しかし、意識の宗教的形態や意識の諸関係の消滅とともに、聖職者のこの労働も社会的生産過程にはいることはなくなる。聖職者とともに聖職者の労働もなくなり、同様に、資本家とともに、彼が資本家として行なうかまたは他の者に行なわせる労働もなくなる。）（全集第26巻III639-40頁）

(9) けれども、そのためには、社会の物質的基礎が、あるいは、それ自身がまた長い苦難に満ちた発展史の自然発生的な産物である一連の物質的存在条件が、必要とされるのです。

.....

【付属資料】

●第16パラグラフに関連するもの

《初版本文》

（つまり、商品の神秘性は次のことから生じている。すなわち、私的生産者たちにとっては、自分たちの私的労働の社会的な諸規定が、労働生産物の社会的な自然規定性として現われているということ、人々の社会的な生産諸関係が、諸物の対相互的および对人的な社会的諸関係として現われているということ。社会的総労働にたいする私的労働者たちの諸関係は、彼らに対立して対象化され、したがって、彼らにとっては、諸対象という形態で存在している。商品生産者たちの一般的な社会的生産関係は、自分たちの生産物を商品として、したがって価値として取り扱い、この物的な形態において、自分たちの私的労働を同等な人間労働として互いに関係させる、という点にあるのであるが、このような商品生産者たちの社会にとっては、抽象的な人間にたいする礼拝を伴うキリスト教が、ことにそのブルジョア的な発展であるプロテスタントや理神論等々におけるキリスト教が、最もふさわしい宗教形態である。古代アジア的、古代的等々の諸生産様式にあっては、生産物の商品への転化、したがって、商品生産者としての人間の存在は、従属的な役割を演じている。といっても、この役割は、共同体が没落の段階にはいるにつれて、ますます重要になってくる。本来の商業民族は、エピクロス〔ギリシアの哲学者〕の神々のように、または、ポーランド社会の気孔のなかのユダヤ人のように、古代世界の透き間にしか生存していない。上記の古い社会的な諸生産有機体は、ブルジョア的な生産有機体よりも異常なほどにずっと単純で透明であるが、それらは、他の人間との自然的な種属関係の臍の緒からまだたぢきられていない個々人の未熟にもとづいているか、または、直接的な支配および隷属関係にもとづいている。それらは、労働の生産力の低い発展段階によって制約されており、また、この発展段階に対応して偏狭であるところの、人間たちの物質的な生活創造過程内部における彼らの諸関係――したがって、彼ら同士の諸関係と彼らの自然にたいする諸関係――によって、制約されている。このように現実偏狭であることは、観念的には、古代の自然宗教や民族宗教のなかに反映している。現実の世界の宗教的な反映は、実践的な日常生活の諸関係が、人間にたいして、人間の相互間および対自然の・日常的に透明であり合理的である諸関係を、表わすやいなや、初めて消滅しうるのである。こういった諸関係は、それのあるがままのものとしてのみ、現われることができる。社会的な生活過程の姿、すなわち物質的な生産過程の姿は、それが、自由に社会化された人間の産物として、人間の意識的に計画された制御のもとにおかれるやいなや、初めてその神秘的霧のヴェールを脱ぎ捨てる。しかし、そのためには、社会の物質的な基礎または一連の物質的な存在条件が必要なのであって、これらの条件そのものもまた、長くて苦悩にみちた発展の歴史の、自然発生的な産物なのである。）（江夏訳63-5頁）

〈宗教界は現実世界の反映にほかならない。労働生産物が一般に商品形態をとる社会、したがって、生産者たちのあいだの最も一般的な関係が彼らの生産物価値を比較することから成り立ち、また、この関係が諸物のこういった外被のもとで彼らの私的労働を同等な人間労働として相互に比較することから成り立っている社会、このような社会は、抽象的な人間を礼拝するキリスト教、とりわけプロテスタントや理神論等というキリスト教のブルジョア的な典型のうちに、最もふさわしい宗教的補足物を見出している。古代アジアの生産様式、一般には古代の生産様式では、生産物の商品への転化は副次的な役割しか演じない。とはいえ、共同体がその解体に近づくとつれ、この役割はいつそう重要なものになるのであるが。厳密な意味での商業国民は、エピクロスの神々流に、あるいはポーランド社会の隙間に生きるユダヤ人のように、古代世界の幕間にしか生存していない。これらの古い社会的有機体は、生産関係についてはブルジョア社会よりもはるかに簡単明瞭だが、個々人の未成熟――彼を原始部族の自然共同体に結びつけているいわばその緒を、歴史はまだ断ち切らないでいる――か、または専制主義と奴隷制の諸条件を土台とするものである。これらの有機体の特徴づけ、したがって物質生活の全域に浸透しているところの労働生産力の低い発展度、人間相互の関係または人間と自然との関係の狭さは、古い民族宗教のなかに観念的に反映している。一般的に言って、現実世界の宗教的反映は、労働と実際生活との諸条件が人間にたいして、対同類および対自然の透明で合理的な関係を、目に見えるようにするときにはじめて、消滅しうるのであろう。物質的生産とそれに含まれている諸関係ともとづく社会生活は、自由に協力し意識的に行動し自分自身の社会的運動の主人公となった人間の仕事、そこに現われる日にはじめて、その姿を蔽い隠す神秘的な雲から解放されるであろう。だが、このためには、社会内に一そろいの物質的存在条件が必要であるが、この存在条件自体が、長くて苦悩にみちた発展の産物でしかありえないのである。〉（江夏他訳55頁）

『資本論』を読んでみませんか

あけまして、おめでとうございます。

早いもので、「『資本論』を読む会」を初めてから、今年で5年目に入ります。ところが、まだ第1章が終わっていないありさまです。何ともゆっくりしたペースですが、これが私たちのやり方なのです。

これからでも、一度、『資本論』を読んでみようか、などと考えておられる方も、だから、十分間に合いますので、是非、ご参加頂きますようお願いいたします。

さて、野田首相は、年頭所感で「社会保障と税の一体改革」は「待ったなし」だと、消費税導入を示唆しました。そして昨年末には民主党は2015年10月までに段階的に10%まで引き上げることを確認したのです。

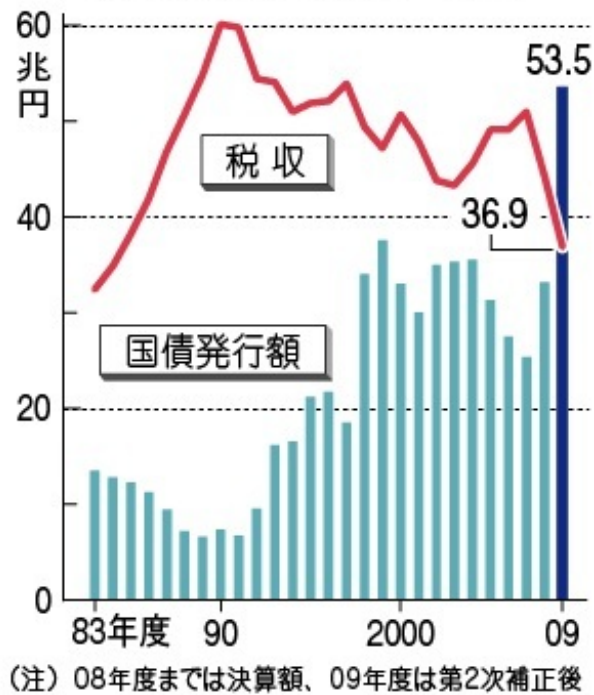
野田・民主党は、マニフェストで掲げた公約をことごとく御破算にしながら、公約にもない消費税の引き上げを「不退転の決意」でやるというのですから、これは有権者を裏切り、愚弄するものと言わなければなりません。

確かに国の借金は886兆円、地方も併せると1000兆円とも言われ、GDPの倍近い額になっています。これは事実上の国家破綻といっても過言ではない状況です。しかし、こうした現実には誰が責任を負うべきでしょうか。消費税でまかなうということは、一般国民、特に収入が少なく、そのほとんどを生活費に支出しなければならない低所得者に重い負担を強いるということです。

国家の負債増大の本当の責任は大資本にあるのです。

日本の国債発行が目立って増えだしたのは、90年のバブル崩壊以後です。92年8月の宮沢内閣から始まって、先の菅内閣まで、経済対策（景気刺激策）は合計17回に及び、その総額は約300兆円にもなっています。これは金融機関を直接救済した費用を除いたもので、不況にあえぐ資本を救済するために、公共事業等に費やしたものです。それらのほとんどが国債によってまかなわれてきたのです。

国債発行額と税収の推移



「社会保障と税の一体改革」というのは、あたかも国家負債の原因が社会保障の増大にあるかに思わせ、その本当の原因を隠す意図があると言わねばなりません。

社会保障費も確かに2010年末で約100兆円と、その増加も急激ですが、年金や医療の増加は、資本の都合で定年制の名のもとで、高齢者の首を切り、ただ年金に依存するしかない状態に追いやる今の制度にこそ問題があり、医療費の増加も医療が金儲けの手段になっている現実に問題があるので。医者などの高額診療報酬というまでもなく、製薬会社や医療器具会社の儲けの手段に現代の医療はなっています。

ところが、こうした負担を消費税によってまかなおうというのが野田首相の狙いです。資本救済費用やその儲けのための負担を、労働者・国民に背負わせる政策には断固反対して行かねばなりません。

マルクスは「個々の問題についての暫定中央評議会代議員への指示」のなかで、「直接税と間接税」の特徴を述べ、税制を変えても資本と賃労働との関係には何の変化もないが、あえてどちらを選ぶかを問題にするなら、直接税だとその理由を次のように述べています。

〈間接税では、個人が国家に支払う額がどれだけかということは、その個人に隠されているのに、直接税はあからさまで、ごまかしがなく、どんな頭のわるい人間にも誤解のおこりようがないこと。だから、直接税は各人を刺激して、統治者を監督しようという気持ちにさせるが、間接税は自治への志向をいっさいおしつぶす。〉 (全集16巻197頁)

野田民主党政権の国民への裏切りを告発し、消費税導入に断固反対して行きましょう。貴方も『資本論』を学び、共に、資本主義の仕組みを科学的に考えてみませんか。

第42回「『資本論』を読む会」の報告

◎これはもうベテニ師である

野田首相は23日の通常国会の冒頭、施政方針を明らかにする演説を行いました。何がなんでも消費増税をやりたいというわけです。しかしその演説は、首相が、まだ一代議士として街頭で演説していたも
<http://www.youtube.com/watch?v=y-oG4PEPeGo>とは真逆になっています。その後の国会審議のなかでも取り上げられていたが、これは国民の多くが知っておくべきことだと思います。

首相は、街頭で演説しています。「書いてあることを命懸けで実行する。書いていないことはやらない。これがルールなのです。」「消費税5%分の皆さんの税金に、天下り法人がぶらさがっている。シロアリがたかっているのです。」「それなのに、シロアリの退治しないで、今度は消費税を引き上げるんですか。」「シロアリの退治して、天下り法人をなくして、天下りをなくす、そこから始めなければ、消費税を引き上げる話はおかしいんです。徹底して無駄遣いをなくしていく、それが民主党の考え方です。」

一体、誰が「ルール」を踏みに行っているのでしょうか。「どじょう」の舌は二枚舌なのでしょうか。これはもうただ政治不信を振りまいているだけとしか言いようがありません。「命懸けで実行する」と約束したのですから、実行できなかった責任をとって一刻も早く政治の舞台から身を引くべきです。何とも情けない政治の昨今ではありません。

◎第17パラグラフについて

今回は第17パラグラフを一つだけやりました。しかしこのパラグラフには本文の何倍もある三つの長い注があり、それらについても詳しく検討を行いました。さっそく、その報告を行いましょ。いつものように、まず本文を紹介し、各文節ごとに記号を付して、平易い書き下すなかで、議論についても紹介していくことにします。まず本文の紹介です。

【17】〈(1)ところで、たしかに経済学は、不完全にはあるけれども(31)、価値と価値の大きさを分析して、この形態のうちに隠されている内容を発見した。(1)しかし、経済学は、では、なぜこの内容がああ形態をとるのか、したがって、なぜ労働が価値に、またその継続時間による労働の測定が労働生産物の価値の大きさに表されるのか?という問題を提起したことさえもなかった(32)。(1)諸定式――すなわち生産過程が人間を支配して、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものであるということが、その額(ヒタイ)に書かれている諸定式は、経済学のブルジョアの意識にとっては、生産的労働そのものがそうであるのと同じくらいに自明な自然的必然性であると見なされるのである。(2)それだから、経済学が社会的生産有機体の前ブルジョアの形態を取りあつかうやり方は、教父たちが前キリスト教的諸宗教を取りあつかうやり方と同じなのである(33)。〉

(1) たしかに、これまでの経済学は、不完全ではありますが、価値と価値の大きさを分析して、これらの形態のうちに隠されている内容を発見しました。

さて、このパラグラフからは物神性をまとった経済的諸カテゴリーを自然なものとして扱った古典派経済学の批判に充てられています。

学習会では、〈この形態のうちに隠されている内容〉というのは何か、という疑問が出されました。しかしそれについては、すぐにその後説明されているとの指摘がありました。すなわち労働やその継続時間、つまり労働時間のことではないか、ということです。

(1) しかし、経済学は、では、なぜ、この内容(労働や労働時間)が、そうした形態をとるのか、どうして労働が価値として表されるのか、あるいは、その継続時間による労働の量の測定が、労働生産物の価値の大きさとして表されるのか、という問題については、そもそもそうした問題を提起したことも無かったのです。

これは第3パラグラフの次の一文を思い出させます。

〈では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎のような性格は、どこから来るのか? 明らかに、この形態そのものからである。人間労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の測定は、労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的諸規定がその中で発現する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。〉

つまりこのようにマルクスが問題を提起して解明していることについて、これまでの古典派経済学は問題にもしたことがなかったということです。

(1) 価値や価値の大きさという諸定式――これらは生産過程が人間を支配して、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属しているということを示すものでもありますが――は、経済学のブルジョアの意識にとっては、生産的労働がそうであるのと同じくらいに自明な自然的必要性であると見なされているのです。

ここでは〈生産過程が人間を支配して、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものである〉ということが、その額(ヒタイ)に書かれている諸定式という一文が出てきます。まずこの〈諸定式〉というのは何を意味するのですが、JJ 富村さんが準備してくれたレジュメには「資本主義的生産様式の法則・定式」と書かれていました。亀仙人は「価値や価格、貨幣等のブルジョア経済学の諸カテゴリー」ではないか、と言いました。ただフランス語版では、この部分は次のようになっています。

〈生産諸形態が次のような時代、すなわち、生産と生産関係が人間によって支配されずに人間を支配する社会的な時代、に属していることが一見して明らかならば、これらの生産諸形態は、人間のブルジョアの意識にとっては、生産労働

そのものと全く同じくらいに、自然的必然性であるように見える。〉（55-56頁）

これから考えると〈これらの生産諸形態〉ということになります。ただ注33でも紹介されている『哲学の貧困』には、次のような一節があります。

〈経済学者たちは、ブルジョア的生産の諸関係、分業、信用、貨幣等々を、固定した、不変の、永久的なカテゴリーとして表現する。……経済学者たちは、どのようにしてこれらの与えられた諸関係のなかで生産がおこなわれるか、ということについては、われわれに説明してくれる。しかし彼らは、どのようにしてこれらの諸関係のものが生産されたかということ、つまり、これらの諸関係を生誕させた歴史的運動については、われわれに説明してくれない。〉（全集第4巻129頁）

だからこの〈諸定式〉というのは、ブルジョア的な生産諸形態、生産諸関係、あるいは分業や信用、貨幣、価値、価格等々の諸カテゴリーと考えてよいのではないのでしょうか。

ところで〈諸定式〉をそうしたものとして捉えると、ここで述べられていることは、一見すると、第8パラグラフで次のように指摘されていたことと矛盾するように思えるが、どう考えたらよいのだろう、という問題も提起されました。第8パラグラフでは次のように書かれています。

〈だから、価値の額（*betrag*）にそれが何であるかが書かれているわけではない。〉

つまり、ここではこうしたブルジョアの諸カテゴリーには、その〈額（*betrag*）にそれが何であるかが書かれているわけではない〉と言われているのに、今回の場合は、〈生産過程が人間を支配していて、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものであるということが、その額（*betrag*）に書かれている〉と言われているからです。

これは次のように考えられるのではないのでしょうか。ここでマルクスが述べている〈生産過程が人間を支配していて、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものであるということ〉というのは、マルクスがこうした諸カテゴリーの根拠を、すなわち、その物象的な諸関係の秘密を解きあかした結果、言えることだと思います。だからここでマルクスが〈その額（*betrag*）に書かれている諸定式〉というのは、そうした商品の物神的性格とその秘密が解きあかされたが故に、今は言えることだと理解すべきではないでしょうか。それに対して、第8パラグラフでは、ブルジョア的な目には、そうした諸関係はまったく見えないということで、〈だから、価値の額（*betrag*）にそれが何であるかが書かれているわけではない〉と述べていると理解すべきだと思います。

ところで、〈生産過程が人間を支配していて、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属するものであるということ〉というのは、第9パラグラフの次の一文に対応しています。

〈交換者たち自身の社会的運動が、彼らにとっては、諸物の運動という形態をとり、彼らは、この運動を制御するのではなく、この運動によって制御される。たがいに独立〔**unabhaengig**〕に営まれながら、しかも社会的分業の自然発生的な諸分枝としてたがいに全面的に依存している〔**abhaengig**〕私的諸労働が社会的に均斉のとれた基準にたえず還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的でつねに動揺している交換比率を通して、それらの生産のために社会的に必要な労働時間が――たとえば、だれかの頭の上に家が崩れおちる時の重力の法則のように――規制的な自然法則として暴力的に自己を貫徹するからである。〉

だから〈生産過程が人間を支配して〉ということとは、それらが生産者たちを一つの自然法則として統制し支配することによって。そして、ここで言われている〈社会構成体〉とは、資本主義的生産様式のことだと思います。

またここで〈経済学のブルジョアの意識にとっては、生産的労働そのものがそうであると同じくらいに自明な自然的必然性であると見なされる〉という部分は、第8パラグラフで〈商品生産というこの特殊な生産形態だけに当てはまること、すなわち、たがいに独立した私的諸労働に特有な社会的性格は、それらの労働の人間労働としての同等性にあり、かつ、この社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるのだということが、商品生産の諸関係にとらわれている人々にとっては、あの発見の前にも後にも、究極的なものとして現れるのであり、ちょうど、空気がその諸元素に科学的に分解されても、空気形態は一つの物理的物体形態として存続するのと同じである〉と述べていたことを思い出すとよく分かります。

またここでは〈生産的労働〉という言葉が出てきますが、これは第1節に〈それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物でもない〉として出てきます。つまり具体的有用労働と同義と考えてよいでしょう。

(-) だから、経済学が社会的生産有機体の前ブルジョアの形態、例えば封建的生産様式や古代的生産様式等を取り扱うやり方は、教父たちが前キリスト教的諸宗教を取り扱うのとまったく同じやり方なのです。

この文節は、この一文につけられた注33を見れば、よく分かりますので、そこで考えることにしましょう。

◎三つの長い注

すでに述べたように、この第17パラグラフは、本文は短いのに、それにつけられた三つの注はいずれも長いものです。しかも内容も重要であり、決しておろそかにできません。学習会でも、それぞれについて詳しく検討しました。次に、その報告をやりましょう（但し、注については、文節ごとの平易な書き下しは不要と考えます）。

【注31】〈リカードの価値の大きさの分析――しかもこれは最良の分析である――の不十分さは、本書の第3部および第4部からわかるだろう。しかし、価値一般について言えば、古典派経済学は、価値に表される労働と、生産物の使用価値に表される限りの労働とを、どこにおいても、明文によっては、また明瞭な意識をもっては、区別していない。もちろん、実際には区別を行っている。なぜなら、古典派経済学は、労働を、ある時は量的に、ある時は質的に、考察しているからである。しかし、古典派経済学は、諸労働の単なる量的区別がそれらの質的統一性または同等性を、したがってまたそれらの抽象的人間労働への還元を前提するということに思いつかなかったのである。たとえば、リカードは、デスチュート・ド・トラジが次のように言う時、これに賛意を表明している。「われわれの肉体的および精神的諸能力だけが

われわれの本源の富であることはたしかであるから、それらの能力の使用、すなわち、何らかの種類の労働は、われわれの本源の財宝である。われわれが富と呼ぶいさいの物をつくり出すのは、つねにこの能力の使用である……。さらにまた、それらの物はすべてそれらをつくり出した労働だけを表していること、そして、もしそれらの物が一つの価値をもつとすれば、あるいはむしろ二つの区別される価値すらもつとしても、それらの物はそのような価値を、ただ、それらを生み出す労働のそれ（価値）「から引き出すことができるだけである、ということもたしかである」（デスチュート・ド・トラン『イデオロギー要論』、第四および第五部、パリ、一八二六年、三五、三六ページ）リカード『経済学原理』、第三版、ロンドン、一八二一年、三三四ページ〔堀経夫訳、『リカード全集』I、雄松堂書店、三二八ページ〕。われわれは、リカードが彼自身のより深い意味をデスチュートに押しつけているということだけを示唆するにとどめる。実際、デスチュートは、たしかに一面では、富を形成するすべての物は「それをつくり出した労働を代表している」と言っている。しかし、他面では、これらの物はそれらの「二つのあい異なる価値」（使用価値と交換価値）を「労働の価値」から得ると言っているのである。こうして彼は、一商品（ここでは労働）の価値をまず前提し、それによってあとから他の諸商品の価値を規定するという俗流経済学の浅薄さにおちいっている。リカードは、使用価値にも交換価値にも労働が（労働の価値が、ではなく）表示されているというふうにはデスチュートを読んでいない。ところが、リカード自身は、二重に表示される労働の二面的性格をほとんど区別していないから、「価値と富、両者を区別する諸属性」という章〔第二〇章〕の全体で、J・B・セーごときの愚論との格闘に苦勞しなければならぬのである。それゆえまた、とどのつまりリカードは、デスチュートが価値源泉としての労働については彼自身と一致しているのに、他面、価値概念についてはセーと一致しているということに、すっかりあきれ果てているのである。〉

まず最初にマルクスはリカードの価値の大きさの分析――しかもこれは最良の分析である――の不十分さは、本書の第3部および第4部からわかるだろうと書いていますが、ここに出てくる〈本書の第3部および第4部〉というのは、第1版序文の次の一文にもとづいているとの指摘がありました。

〈本書の第二巻は資本の流通過程（第二部）と総過程の諸形態（第三部）とを、最後の第三巻（第四部）は理論の歴史を取り扱うことになるであろう。〉（全集23a11頁）

次に、ここでマルクスはリカードが〈価値に表される労働と、生産物の使用価値に表される限りでの労働とを、どこにおいても、明文によっては、また明瞭な意識をもっては、区別していない〉一つの例として、リカードがデスチュート・ド・トランの一文に賛意を表していることを上げています。ただそれが、どうしてリカードが労働の二重性を意識的に区別できていない例と言えるのかが、いま一つよく分かりませんでした。デスチュート・ド・トランの一文を見ると、それが〈二つの区別される価値〉、つまり使用価値と交換価値とを無区別に、同じ労働から引き出されるものとして説明していて、両者の区別をしていないのに、リカードはその誤りを見抜くことが出来ずに、むしろそれに賛意を表明しているから、だと言えるのではないかと、ということになりました。

そしてマルクスは、さらにリカードは自分自身のより深い理解をデスチュート・ド・トランに押しつけているとも述べていますが、これはデスチュート・ド・トランは生産物の価値を労働の価値から説明するという、つまり価値を価値から説明するという俗流的な誤りに陥っているのに、リカードはそれを理解できず、むしろ自身の見解に引き付けて、生産物の価値をそれに支出された労働で説明しているものと理解しているということではないかということになりました。

最後に〈とどのつまりリカードは、デスチュートが価値源泉としての労働については彼自身と一致しているのに、他面、価値概念についてはセーと一致しているということに、すっかりあきれ果てているのである〉という部分については、リカードがデスチュート・ド・トランの著書について、注のなかで論じている次の一文を指しているのではないかと、との指摘もありました。

〈『観念学概論』第4巻、99頁――本書のなかに、ド・トラン氏は経済学の一般原理に関する有益で優れた論説を発表した。だが、氏が氏の権威を持って、『価値』、『富（リッハ）』、『効用』という用語にセー氏が与えている定義を支持していることを付言しなければならないのは、残念である。〉（『経済学および課税の原理』岩波下巻102頁）

なおJ・富村さんのレジュメには、「セーの価値概念」と題して、『資本論辞典』の一部が引用されていましたので、それも紹介しておきましょう。

〈物の価値(富の唯一の属性)は物の効用、すなわち人間の欲望を満足させる物の性能にもとづくとする見地から富を自然的富、社会的富の二種類にわけ、前者は空気や水等のごとく自然から無償で与えられる物の効用、後者は自然力・資本・労働の三要素の共同作用から生ずる物の効用で、その評価によって交換されると考える。つまりスミスの使用価値と交換価値の概念を効用説にすりかえたものであることがわかる。〉（510頁）

【注32】(32) 古典派経済学の根本的欠陥の一つは、それが、商品の分析、ことに商品価値の分析から、価値をまさに交換価値にする価値の形態を見つけたことに成功しなかったことである。A・スミスやリカードのようなその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとして、あるいは商品そのものの性質にとつて外的なものとして、取りあつかっている。その原因は、価値の大きさの分析にすっかり注意を奪われていたというだけではない。それはもっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態であり、ブルジョア的生産様式はこの形態によって一つの特別な種類の社会的生産として、したがってまた同時に歴史的なものとして、性格づけられている。だから、人がこの生産様式を社会的生産の永遠の自然的形態と見誤るならば、人は必然的に、価値形態の特殊性を、したがって商品形態の、すすんでは貨幣形態、資本形態等々の特殊性を見落とすことになるのである。だから、労働時間による価値の大きさの測定についてはまったく一致している経済学者たちのあいだに、貨幣、すなわち一般的等価の完成した姿態、については、きわめて種々雑多なまったく矛盾した諸見解が見られるのである。このことは、たとえば、ありふれた貨幣の定義ではもはや間に合わない銀行業の取りあつかいに際してははっきりと現れてくる。それゆえ、反対に、価値のうちに社会的な形態だけを見る、あるいはむしろ実体のない社会的形態の外観だけを見る復活した重商主義（ガニルなど）が生じた。・・・ここできっぱりと断わっておくが、私が古典派経済学と言うのは、ブルジョアの生産諸関係の内的関係を探求するW・ペティ以来のすべての経済学をさし、これに対して俗流経済学と言うのは、外見上の関係の中だけをうろつきまわり、いわばもっとも粗雑な現象のもっともらしい解説とブルジョアの自家需要のために、科学的経済学によってとうの昔に与えられた材料をたえずあらためて反芻（ハヅル）し、それ以外には、自分たち自身の最善の世界についてのブルジョアの生産当事者たちの平凡でひとりよがりの諸観念を体系づけ、学問めかし、永遠の真理だと宣言するだけにとどまる経済学をさしている。〉

古典派経済学は「交換価値」を「真の価値」に、つまり「価値」に還元し、さらにその「価値」を「労働」に還元しましたが、なぜ「価値」が「交換価値」として現れるのかを、つまり「価値の形態」については何の関心も払わなかったとマルクスは指摘しています。その理由は、彼らが価値の大きさの分析にすっかり注意を奪われていただけではなく、勞

働生産物の価値形態は、このブルジョア的生産様式を、一つの特殊な種類の社会的生産として、歴史的に性格づけるものだから、このブルジョア的生産を永遠の自然的なものとして見るなら、価値形態の特殊性を、さらにまた商品形態や貨幣形態、あるいは資本形態等々の歴史的な特殊な性格を見落とすことになるからだ、というわけです。

ここで、どうして「価値」ではなく「価値形態」が資本主義的生産を歴史的に特徴づけるものなのか、という疑問が出されました。しかし、これについてはすでに第2パラグラフで商品の神秘的性格は、商品の使用価値からも、価値規定の内容からも生じるのではないと明らかにされています。つまり価値規定の内容というのは、あらゆる社会形態に共通する一般的な条件だからです。だからこそ第12パラグラフで検討されたように、孤島に流されて、その意味ではあらゆる社会形態からも独立した、人間と自然という、もっとも抽象的な関係に還元されたロビンソンの島の生活のなかにも〈価値のすべての本質的規定が含まれている〉ことが確認されたのでした。

ところで話は変わりますが、「社会主義の概念」を「価値の規定」から説明すべきだ、という主張があります。あるいは「価値の規定」によってこそ、「社会主義の概念の根底」が明らかになるというのです。しかし、こうした主張は、「価値規定の内容」が、あらゆる社会に共通な一般的な条件であるということを考えてと、やや首を傾げざるを得ません。確かに「価値の規定」があらゆる社会に共通な一般的な条件であるなら、当然、将来の社会主義においても、それは買っていることは言うまでもありません。しかしそうであるなら、将来の社会主義の概念がそうした一般的な条件にただ還元されるだけでは、何一つ社会主義に固有の内容は明らかにならないのではないかと考えるからです。やはり社会主義の概念を語ろうとするなら、あらゆる社会に共通な一般的な条件に還元するだけではなく、むしろそうした一般的な条件が社会主義に固有のあり方によって現れている、その固有の内容こそが明らかにされるべきではないかと考えるわけですから。

では、そうした社会主義に固有の内容というのは、どういうものでしょうか。実は、それもすでに第15パラグラフでマルクスによって明らかにされています。それをもう一度、紹介してみましょう。

〈最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されるが、ただし、個人的ではなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼自身の生産物であり、したがってまた、直接的に彼にとっての使用対象であった。この連合体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。この部分は依然として社会的なものである。しかし、もう一つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費される。この部分は、だから、彼らのあいだで分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産組織体そのものの特殊な種類と、これに照応する生産者たちの歴史的発展程度とに応じて、変化するであろう。もっぱら商品生産と対比するだけのために、各生産者の生活手段の分け前は、彼の労働時間によって規定されるものと前提しよう。そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるだろう。労働時間の社会的計画的配分は、さまざまな欲求に対するさまざまな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働に対する生産者たちの個人的関与の尺度として役立つ、したがってまた、共同生産物のうち個人的に消費される部分に対する生産者たちの個人的分け前の尺度として役立つ。人々が彼らの労働および労働生産物に対してもつ社会的諸関係は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭である。〉

これこそが、もし「社会主義の概念」を語ろうとするなら、語られなければならない内容なのではないでしょうか。

やや脱線しましたが、脱線についてもう少し脱線することをお許しください。

あらゆる社会に共通な「価値規定の内容」ではなく、「価値形態」こそが、資本主義的生産の特殊歴史的な性格を特徴づけるものであるということですが、ここで「価値形態」や「商品形態」あるいは「貨幣形態」、「資本形態」等々の「形態」という言葉に注意してみましょう。マルクスは『経済学批判』のなかでは「形態規定性」とか「経済的形態規定」という用語を多用していますが、『資本論』ではそうした用語は出来るだけ避けています。しかし『資本論』で「形態」や「諸形態」という場合、その多くは『経済学批判』でマルクスが多用している「形態規定性」や「経済的形態規定」とほぼ同義と考えてよいと思います。つまりそれは社会的な生産における生産者の社会的関係が直接的なものではないために、それらが物の社会的属性や物の社会的関係として現れてきて、本来は目に見えない生産者の社会的な関係が、物の属性や物の関係という対象的な形態をとって目に見えるものとして現れ、しかもそうした物の属性や関係に逆に人間が支配され引き回されるという転倒した関係が生じてくる、そうした物の属性や関係が、すなわち「形態規定性」や「経済的形態規定」といわれるものなのです。

マルクスは『資本論』第2部（巻）の最初の草稿において、「資本の流通」や「資本の回転」を取り扱う第1章（現行版では「第1編」）や第2章（同「第2編」）では、〈資本が流通過程の内部でとる新たな形態規定性を研究しなければならない〉（『資本の流通過程』大月版9頁）としています。それに対して、〈流通過程を現実の再生産過程および蓄積過程として考察する〉第3章（同じく「第3編」）では、〈たんに形態を考察するだけではなく、次のような実体的な諸契機がつけ加わる〉と述べ、三つの契機を列挙していますが、その最初のものが次のようなものです。

〈（1）実体的な再生産・・・に必要な諸使用価値が再生産され、且つ相互に条件づけあう、そのしかた。〉（同9-10頁）

社会の総再生産過程を考察する第3章（編）では、どうして単に形態だけでなく、実体的な諸契機が問題にされなければならないのかは、この（1）項目で明らかにされています。つまり社会の総再生産が行われているということは、社会の総生産物が、その使用価値にもとづいて互いに関連しあい、条件づけあって存在しているということです。つまり生産物の使用価値は、その物的属性性によって、それが生産的に消費されるものか、それとも個人的に消費されるべきものかを明らかにしています。そればかりか生産物の物的属性は、それがどういう生産手段から生産されたものかも示しており、その限りではそれが生産されるまでの他の生産諸部門との関連や、あるいはその生産物そのものが、さらにどういう生産部門で生産的に消費されるものかも示しています。だから、すべての生産物の諸使用価値は、それによってそれらが社会な分業の一つの体系の網の目を表しているものなのです。つまり社会の総再生産が一定の均衡をもって維持されているということは、それが如何なる社会的諸形態でなされようと、だから資本主義的生産様式のものであろうが、封建的生産様式のものであろうが、それらの物質的諸条件として、社会的分業の網の目が形成され、互いに関連しあい、質的にも量的にも、条件づけあって存在していなければならないということなのです。だからこうした物的属性にもとづく実体的諸条件というものは、あらゆる社会に共通な内容なのです。

マルクスは社会の総再生産過程を、「再生産の表式」という、極めて簡単・簡潔な表式によって図示して考察しています。この「再生産の表式」こそ、社会の総再生産が行われるための物質的條件として、社会の生産諸部門とその諸生産

物がどのように社会的に条件づけられているか、その社会的な再生産の実体的構造を明らかにするものでもあるのです。だからこそ、「再生産の表式」は、資本の流通過程に固有の諸形態を捨象して、その実体的諸関連として考察するなら、あらゆる社会に共通の内容を持っており、よって将来の社会においても、計画的な再生産を考える上で、有効な内容を持っていると言えるのです。

やや脱線が過ぎましたが、本題に戻しましょう。

ここでくだから、労働時間による価値の大きさの測定についてはまったく一致している経済学者たちのあいだに、貨幣、すなわち一般的等価の完成した姿態、については、きわめて種々雑多なまったく矛盾した諸見解が見られるのである。このことは、たとえば、ありふれた貨幣の定義ではもはや間に合わない銀行業の取りあつかいに際してははっきりと現れてくる」という部分については、次の『経済学批判』の一文が参考になります。

〈イングランド銀行が兌換を停止していた時期には、戦況報告よりも多数の貨幣理論が生まれたほどだった。銀行券の減価と金の市場価格のその製造価格以上への騰貴とは、二、三の〔イングランド〕銀行擁護論者の側に、またまた観念的貨幣尺度説をよびおこした。……なおついでながら、観念的貨幣尺度説が、銀行券の兌換性または不換性にかんする論争問題で新たな重要性を得たことを注意しておこう。もしも紙券がその名称を金や銀から受け取るとすれば、銀行券の兌換性、すなわちそれが金や銀と交換されうるということは、法律上の規定がどう言っていようが、依然として経済法則である。だからプロイセンの紙幣ターレルは、法律上は不換紙幣であるとしても、日常の取引で銀ターレル以下にしか通用しなくなり、したがって実際に兌換不能になれば、ただちに減価するであろう。だから、イギリスの不換紙幣の徹底的な主張者たちは、観念的貨幣尺度へ逃げこんだのであった。もしも貨幣の計算名であるポンド、シリング等々が、一商品が他の諸商品との交換で、あるときは多くあるときは少なく吸収したり吐きだしたりする一定量の価値原子にたいする名称であるというのであれば、たとえばイギリスの五ポンド券は、鉄や綿花となんの関係もないのと同じように、金ともなんの関係もない。五ポンド券という称号は、この券を金またはなんらかの他の商品の一定量と理論上等置することをやめてしまっているのだから、その兌換性の要求、すなわちそれをある特定の物の一定量と実際上等置しようとする要求は、その概念そのものによって排除されることになろう。〉(全集第13巻64-66頁)

次にくそれゆえ、反対に、価値のうちに社会的な形態だけを見る、あるいはむしろ実体のない社会的形態の外観だけを見る復活した重商主義（ガニルなど）が生じた」という部分については、次の一文が参考になります。

〈われわれの分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現が商品価値の性質から生じるのであり、逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれらの表現様式から生じるのではない。ところが、この逆の考え方が、重商主義者たち、およびその近代的な蒸し加えし屋であるフェリエ、ガニルなど(22)の妄想であると共に、彼らとは正反対の論者である近代自由貿易外交員、たとえばバスティアとその一派の妄想でもある。重商主義者たちは、価値表現の質的な側面に、したがって貨幣をその完成姿態とする等価形態に重きをおき、これに対して、自分の商品をどんな価格でもたき売らなければならない近代自由貿易行商人たちは、相対的価値形態の量的側面に重きをおく。その結果、彼らにとっては、商品の価値も価値の大きさも交換関係による表現のうち以外には存在せず、したがって、ただ日々の物価表のうちのみに存在する。〉（「4 単純な価値形態の全体」から、23a82頁）

なお復活した重商主義やガニル等については【付属資料】を参照してください。

【注33】(33) 「経済学者たちは奇妙なやり方をする。彼らにとってはただ二種類の制度があるだけだ。人為的制度と自然的制度と。封建制の制度は人為的制度であり、ブルジョアジーの制度は自然的制度である。彼らはこの点では、同じく二つの種類の宗教を区別する神学者たちに似ている。彼らのものでないどの宗教も人間のつくりものであるが、彼ら自身の宗教は神の啓示なのである。・・・そういうわけで、かつてはとにかく歴史があったが、もうそれは存在しないのだ」（カール・マルクス『哲学の貧困』ブルードン氏の「貧困の哲学」に対する返答）一八四七年、113ページ〔『全集』第4巻、143～144ページ〕。ここで実にこっけいなのはバスティア氏で、彼は、古代のギリシア人やローマ人はただ略奪だけで生活していたと思いこんでいる。しかし、何世紀にもわたって略奪で生活していくからには、そこには略奪されるべきものがたえず存在しなければならぬ。言いかえれば、略奪の対象が引き続き再生産されていなければならない。とすれば、ギリシア人やローマ人も一つの生産過程を、したがって一つの経済をもっていて、それが彼らの世界の物質的基礎をなしていたことは、ブルジョア経済がこんにちの世界の物質的基礎をなしていることとまったく同じであるように思われるのである。それともバスティアは、奴隷労働にもとづく生産様式は略奪体制の上に立っているとも考えているのだろうか？ そうだとすると、彼はあぶない地盤の上にいることになる。アリストテレスのような大思想家でさえ奴隷労働の評価で誤ったのに、バスティアのようなちっぽけな経済学者がどうして賃労働の評価をまともによれるはずがあるのか？ ・・・この機会に、私の著書『経済学批判』（一八五九年）が出た時に、アメリカのあるドイツ語新聞から私に加えられた異論を簡単にしりぞけておこう。この新聞によれば、私の見解、すなわち、一定の生産様式といつてもこれに照応している生産諸関係、要するに、「社会の経済的構造は、法的かつ政治的上部構造がその上に立ち、一定の社会的意識形態がそれに照応するところの実在の土台である」ということ、「物質的生活の生産様式が、社会的、政治的、および精神的な生活過程一般を制約する」という私の見解——およびそうした見解は、物質的利害が支配的であるこんにちの世界についてはたしかに正しいが、カトリックが支配的であった中世についてや、政治が支配的であったアテネおよびローマについては、正しくない、と。まず第一に奇妙なのは、中世と古典古代世界についてのこの世間周知の決まり文句をまだ知らない人があるものと前提して、喜んで人がいるということである。中世がカトリックによって、古典古代世界が政治によって、生活していくことができなかったことだけは、はっきりしている。それどころか、その暮しを立てた仕方・様式こそ、なぜ、古典古代では政治が、中世ではカトリックが主役を演じたかを説明するのである。さらには、たとえばローマ共和政の歴史をほとんど知らなくても、土地所有〔Grundeigentum〕の歴史がその裏面史をなしていることくらいはわかる。他面では、すでにドン・キホーテは、遍歴騎士道がどのような経済的形態とも同じように調和すると妄想した誤りのために、ひどい目にあっているのである。〉

まずここで『哲学の貧困』からの引用がありますが、その全文を紹介しておきましょう。

〈経済学者たちは奇妙なやりかたをする。彼らにとっては、二種類の制度、すなわち人為的制度と自然的制度とが存在するにすぎない。封建制の諸制度は人為的制度であり、ブルジョアジーの諸制度は自然的制度である。この点では、彼らは、神学者たちに似ている。神学者たちもまた、二種類の宗教があるときめているからである。彼ら〔神学者たち〕の宗教でない宗教はいずれもみな人間が発明したものであるが、彼ら自身の宗教は神から発したものである。現在の諸関係——ブルジョアの生産諸関係——は自然的なものである、とかたることによって、経済学者たちは、それらの関係こそ自然の諸法則にしたがって富が創造され、生産力が発展する関係である、ということをはのめかす。ゆえに、これらの関係は、それ自身が時代の影響と無関係な自然法則である。つねに社会を規制すべき永久的な諸法則である。かくて、かつては若干の歴史が存在した。しかしもはや歴史は存在しない。かつては若干の歴史が存在した。というのは、封建制の諸制度がかつて存在したからであり、また、これらの封建制の諸制度のなかには、経済学者たちがそれを自然的な

もの、したがって永久的なものと思いきませよとするところの、ブルジョア社会の生産諸関係とはまったく異なる生産諸関係が見いだされるからである。〉（全集4巻143-4頁、しかし本文は国民文庫版から）

次に『経済学批判』の「序言」の一文も紹介しておきます。

〈私にとって明らかとなった、そしてひとたび自分のものになってからは私の研究にとって導きの糸として役だった一般の結論は、簡単にいえば次のように定式化することができる。人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産語力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造が立ち、そしてこの土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。〉（全集第4巻6頁）

ここでマルクスは〈アリストテレスのような大思想家でさえ奴隷労働の評価で誤った〉と述べていることについて、若干議論になりました。

亀仙人は「等価形態」の次の一文がそれを示しているのではないかと指摘しました。

〈しかし、商品価値の形態では、すべての労働が同等な人間労働として、したがって同等と認められるものとして表現されているということを、アリストテレスは価値形態そのものから読みとることができなかったのであって、それは、ギリシアの社会が奴隷労働を基礎とし、したがって人間やその労働力の不平等性を自然的基礎としていたからである。価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間の相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会において、はじめて可能なのである。アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちの一つの同等性関係を発見しているということのうちに、光り輝いている。ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」なんであるのか、を彼が見つげだすことを妨げているだけである。〉（23a81頁）

しかし他の人たちは、やや疑問を持っていたようです。

また〈その暮らしを立てた仕方・様式こそ、なぜ、古典古代では政治が、中世ではカトリックが主役を演じたかを説明する〉という部分について、まず〈古代世界では政治が・・・主役を演じたか〉については、次の一文が参考になります。

〈アリストテレス。

（なぜならば、主人—資本家—が主人としての実を示すのは、奴隷の獲得—労働を買う力を与える資本所有—においてではなく、奴隷の利用—生産過程での労働者の、今日では賃金労働者の、使用—においてだからである。）（だが、この知識は重大なものでも高尚なものでもない。）（すなわち、奴隷が仕方を心得ていなければならないこと、それを主人は命令することを心得ているべきである。）（主人が自分で骨を折る必要がない場合には監督者がこの名誉ある仕事を引き受けるのであって、主人自身は国務に従事したり哲学したりするのである。）（アリストテレス『政治学』、ベッカー編、第一巻、第七章。） 支配は、政治の領域と同じように、経済の領域でも権力者たちに支配することの諸機能を課するということ、したがって経済の領域では彼らは労働力を消費することを心得ていなければならないということ、—こういうことをアリストテレスは率直な言葉で述べてから、さらにつけ加えて、この監督労働はあまりたいしたことでもないで、主人は、十分な資力ができさえすれば、このような骨折りをする「名誉」を監督者に任せてしまう、と言っているのである。〉（『資本論』第3部25a482-3頁）

このように奴隷制社会では、奴隷を支配し、監督する機能が、つまり政治的諸機能が重要になるということではないかと思えます。

次に〈なぜ、・・・中世ではカトリックが主役を演じたか〉については、13パラグラフの次の一文が参考になるでしょう。

〈暗いヨーロッパの中世に目を移そう。ここでは、独立した男の代わりに、だれもが依存しあっているのがみられる—農奴と領主と、臣下と君主と、俗人と聖職者とが。人格的依存が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけている。しかし、まさに人格的依存関係が与えられた社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物も、それらの現実性とは異なる幻想的姿態をとる必要はない。それらは、夫役や貢納として社会的機構の中に入って行く。労働の現物形態が、商品生産の基礎上でのように労働の一般性ではなく労働の特殊性が、ここでは、労働の直接的に社会的な形態である。夫役労働も、商品を生産する労働と同じように、時間によってはかられるが、どの農奴も、彼が領主のために支出するのは彼の個人的労働力の一定量であるということを知っている。坊主どもに納めるべき十分の一税は、坊主の祝福よりもはっきりしている。〉

また以前に紹介したエンゲルスの『フォイエールバッハ論』の次の一文も参考になると思えます。

〈中世においてはキリスト教は、封建制が発達するのとちょうど同じ歩調で封建制に照応した宗教となり、この制度に照応した封建的位階制度をもっていた。そしてブルジョアジーが台頭してきたとき、封建的なカトリック教に対抗してプロテスタントの異端が発展してきた。それはまず、南フランスの諸都市が最も繁栄していた時代に、そのアルビ派のあいだで発展した。中世は、神学以外のイデオロギーのすべての形態—哲学、政治学、法学—を神学に併合して、これを神学の部門としていた。そのために、中世では、どの社会的運動も政治的運動も神学的形態をとるほかはなかった。大衆の気持はもっぱら宗教でやしなわれていたから、大きなあらしをまきおこすためには、大衆自身の利益も宗教的に扮装してもちださなければならなかったのである。〉（全集21巻同309頁）

〈ローマ共和政の歴史をほとんど知らなくても、土地所有〔**Grundeigentum**〕の歴史がその裏面史をなしていることくらいはわかる〉という部分については、次の『資本論』の一文が参考になると思えます。

〈古代ローマのことが思い出されるであろう。「富者たちは不分割地の最大部分をわがものとしていた。彼らは、当時

の事情から、それらの土地が再び彼らから取り上げられるおそれはないだろうと信じていたので、付近にある貧民の地片をあるいは合意によって買い取り、あるいは暴力によって奪い取り、こうして彼らはその後は個々の耕地ではなくただずっと広大な領地だけを耕作するようになった。そのさい、彼らは農耕や牧畜に奴隷を使用した。なぜならば、自由民は、彼らの手から取り上げられて労働から兵役に移されるおそれがあったからである。奴隷は兵役を免れていたので不安なく繁殖することができてたくさんの子供をつくったというかぎりでも、奴隷を所有することは彼らに大きな利益をもたらした。こうして、強者たちはありとあらゆる富を自分に引き寄せ、全土に奴隷が充満した。これに反して、イタリア人は貧困や貢租や兵役にすり減らされて、ますます少なくなった。そして、平和の時代になっても、彼らは完全な無為に運命づけられていた。というのは、富者が土地を握っていて、自由民のかわりに奴隷を農業に使用したからである。」(アビアン『ローマの内乱』、第一部、第七章。)この箇所はリキニウス法〔167〕以前の時代に関するものである。ローマの平民の没落をこんなにも速めた兵役は、カール大帝がドイツの自由農民の隷農化や農奴化を温室的に促進するために用いた一つの主要手段でもあったのである。(23b950頁)

.....

【付属資料】

(但し、ブログでは付けられていた「資本論辞典」からの関連項目の抜粋は、1ページ3万文字の字数制限をオーバーするために電子書籍化するにあたって削除せざるをえませんでした。よって必要な方は直接ブログを見ていただくようにお願いします。)

●第17パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈ところで、経済学は、たとい不完全であっても(27)、なるほど価値と価値量とを分析してきた。経済学は、なぜ労働が価値のなかに表わされ、労働の継続時間による労働の計量が価値量のなかに表わされるか、という問題さえ、いまだかつて提起したことがなかった。生産過程が人間を支配して人間がまだ生産過程を支配していないところの社会組織に自分たちが所属していることを、自分たちの額(ヒタイ)に書き記している諸形態は、経済学のブルジョア的な意識にとっては、生産労働そのものと全く同じように自明的な自然必然性として、認められている。だから、社会的な生産有機体の前ブルジョア的な諸形態が経済学の手で取り扱われているのは、たとえばキリスト教以前の諸宗教が教父たちの手で取り扱われているのと、同じことである(28)〉(江夏訳65頁)

《フランス語版》

〈きわめて不完全なやり方ではあるが、経済学は確かに、価値と価値量とを分析した(31)。だが、なぜ労働が価値のうちに現われ、労働時間による労働の測定が生産物価値の量のうちに現われるかは、経済学が一度も問題にしたことがない。生産諸形態が次のような時代、すなわち、生産と生産関係が人間によって支配されずに人間を支配する社会的な時代、に属していることが一見して明らかなばあい、これらの生産諸形態は、人間のブルジョアの意識にとっては、生産労働そのものと全く同じくらしいに、自然的必然性であるように見える。教父がキリスト教に先行した諸宗教を扱ったのと同じように、経済学がブルジョア的生産に先行した社会的生産諸形態を扱っていることは、別に驚くにはあたらない。(32)〉(55-56頁)

●注31に関するもの

《初版本文》

〈(27)リカードが行なう価値量分析の不充分さーといっても、最良の分析であるがーは、本書の第三部および第四部から判断されるであろう。だが、価値一般にかんして言えば、古典派経済学は、価値のなかに現われている労働を、この労働の生産物の使用価値のなかに現われているかぎりでの同じ労働から、どこでも、はっきりと、明瞭に意識して、区別していない。古典派経済学はもちろん、労働をあるときには量的に別のときには質的に観察しているのであるから、じっさいにはこの区別を行なっている。しかし、古典派経済学は次のようなことには考えついでない。すなわち、諸労働のたんに量的なちがいは、それらの質的な一元性あるいは同等性を、したがって抽象的な、人間の、労働への・それらの選元を、前提にしているということ。たとえばリカードは、デステュット・ド・トラジが次のように言うとき、彼に同意していると表明している。「われわれの肉体的および精神的な諸能力だけがわれわれの根源的な富であるということは確かであるから、これらの能力の使用であるなんらかの種類の労働は、われわれの根源的な財宝である。そして、われわれが富と呼ぶいっさいの物は、いつでも、これを使用することによって作り出されている。.....これらの物はすべて、これらの物を作り出した労働を表わしているにすぎない、ということもまた確かである。そして、これらの物が一つの価値をもっていれば、または二つのちがった価値をさえもっていても、これらの物は、こういった価値を、これらの物の根源である労働のそれ(価値)から導き出すことができるだけのことなのだ。」(リカード『経済学原理。第三版。ロンドン、一八一二年』、三三四ページ。)われわれが示唆するのは、リカードが

彼自身のいっそう奥深い意味をデステュットに押しかぶせている、ということではない。デステュットは、実のところ、確かに、一方では、富を形成しているすべての物は「それらの物を作り出した労働を表わしている」と言いながら、他方では、それらの物はそれらの「二つのちがった価値」(使用価値と交換価値)を「労働の価値」から得ていると言う。こうして、ある商品（ここでは労働）の価値を前提しておいて、このことによってあとから別の諸商品の価値を規定する、という俗流経済学の浅薄さに陥っている。リカードは、使用価値のなかにも交換価値のなかにも労働(労働の価値ではない)が表わされているというように、デステュットを読んでいる。ところが、リカード自身は、二重に表わされている労働の二面的な性格をほとんど区別していないために、「価値と富、両者を区別する諸属性」という章全体にわたって、J・B・セーのような男の浅薄さと争うのに苦勞せざるをえないことになる。したがってまた、最後に彼は、デステュットが、価値源泉としての労働については確かに自分自身と一致しているのに、価値概念についてはセーと一致していることに、すっかり驚いている。(江夏訳64-5頁)

《フランス語版》

〈31〉ウィリアム・ベティ以後に価値をその真実の内容に還元した最初の経済学者の一入である、かの著名なフランクリンは、ブルジョア経済学が行なう分析のやり方の一例を、われわれに提供していると言ってもよい。彼は言う。「交易一般とは労働と労働との交換にほかならないから、すべての物の価値は労働によって最も正確に評価される」(スパークス編『ベンジャミン・フランクリン等の著作』、ボストン、一八三六年、第二巻、二六七ページ)。フランクリンは、物が価値をもつのは、物体が重量をもつのと全く同じように自然である、と思っている。彼の観点からすれば、この価値がどのようにして最大限正確に評価されるかを見出すことだけが、問題なのである。彼は、「どんな物の価値も労働によって最も正確に評価される」と述べながら、交換される労働の差異を捨象して同等な人間労働に還元していることに気づいてさえいない。彼はこれとはちがってこう言うべきであったろう。長靴または短靴と机との交換は、靴製造と指物細工との交換にほかならないから、長靴の価値が最も正確に評価されるのは指物師の労働によってである！。彼は労働一般という言葉を用いることによって、さまざまな労働の有用な性格と具体的な形態を捨象している。リカードが価値量について与えた分析——これは最良のものである——の欠陥は、この著作の第三部と第四部で証明するであろう。価値一般にかんして、古典派経済学は、価値のうちに表わされている労働を、生産物の使用価値のうちに表わされているかぎりでの同じ労働から、けっしてははっきりと区別していない。古典派経済学は、労働を、あるばあいには質の観点で、あるばあいには量の観点で考察しているから、もちろん實際上この区別を行なっている。だが、諸労働のたんに量的でしかない相違は、それらの質的な一元性または同等性を、すなわち、諸労働の抽象的人間労働への還元を前提しているのだということは、この経済学の頭には浮ばない。リカードは、たとえばデステュット・ド・トラシが次のように言うとき、デステュットと同意見であると述べている。「われわれの肉体的、精神的力能は、われわれがもつ唯一の本源的な富であるということ、これらの力能の行使、すなわちなんらかの労働は、われわれの唯一の本源的な財宝であるということ、われわれが財産と呼ぶすべての物は、つねにこの行使から生まれるものであるということ……は確かであるから、これらすべての財産は、それらを産んだ労働を表わすだけであるということも、それらが一つの価値をもつならば、または二つの別々の価値をもつとしても、それらは、自分たちが生まれ出てきた労働の価値からのみこれらの価値を引き出しうるということも、同様に確かである」(デステュット・ド・トラシ『イデオロギー要論』、第四部および第五部、パリ、一八二六年、三五、三六ページ)。リカードがデステュットの言葉に余りにも深すぎる意味をもたせていることだけを、つけ加えておく。デステュットは一方では、富を形成する諸物がそれらの物を創造した労働を表わすと言いながら、他方では、それらの物がそれらの二つのちがった価値(使用価値と交換価値)を労働の価値から引き出すと主張する。こうして彼は、一商品の(たとえば労働の)価値をあらかじめ承認しておいて別の商品の価値を規定するという俗流経済学の浅薄さに陥っている。リカードは、あたかもデステュットが、労働(その価値ではない)は使用価値のなかにも交換価値のなかにも同じように表わされている、と述べたかのように、デステュットを理解している。だが、リカード自身は、労働の二面性をほとんど識別していないので、「価値と富」という章全体にわたって、J・B・セーなる男の陳腐さとならぶに論争せざるをえなくなった。したがって、結局のところ、リカードは、価値源泉としての労働についてはデステュットと同意見であるが、そのデステュットが他方で価値についてはセーと同じ概念を抱いていることに、すっかり驚いている。(56-57頁)

●注32に関するもの

《初版本文》

〈24〉古典派経済学の根本欠陥の一つは、この経済学が、商品の分析から、いっそう特殊には商品価値の分析から、商品価値をまさに交換価値にするところの価値の形態を見つけ出す、ということに成功しなかったことである。A・スミスやリカードのような古典派経済学の最良の代表者たちにおいてさえ、古典派経済学は、価値形態を、全くどうでもよいものとして、あるいは、商品そのものの性質には外的なものとして、取り扱っている。その理由は、価値量の分析が古

典派経済学の注意をすっかり奪ってしまった、ということにあるだけではない。その理由もつと奥深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式の最も抽象的だが最も一般的な形態であって、このことによって、この生産様式は、社会的な生産様式の一つの特殊な様式として、したがって、また同時に歴史的に、特徴づけられている。だから、この生産様式を社会的な生産の永久的な自然形態と見誤るならば、必然的に、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては、貨幣形態や資本形態等々の、独自性をも、見落とすことになる。だから、労働時間による価値量の計量については全く同意見である経済学者たちのあいだには、貨幣すなわち一般的な等価物の完成した姿について、きわめて雑多できわめて矛盾している考えが、見いだされる。このことは、たとえば、貨幣のありふれた定義ではもはや間にあわない銀行制度の取り扱いにさいして、的確に現われてくる。このことから、復した重商主義(ガニル等々)が生じたのであって、この重商主義は、価値のうちに、社会的な形態だけを、またはむしろ、この形態の・実体を欠いた仮象だけを、見ているのである。――きっぱりと注意しておくが、俗流経済学に対立して私が古典派経済学であると理解しているものは、ブルジョア的な生産諸関係の内的な関連を研究する、W・ベティ以後のすべての経済学のことであり、俗流経済学のほうは、外観上の関連のなかだけをうろついていて、いわばこの上なく大ざっぱな現象のもっともらしい説明とブルジョアの自家用とのために、科学的な経済学がはるかに以前に提供した素材を絶えずあらためて反芻しているのだから、それはともかく、ブルジョア的生産当事者たち自身の最良の世界について彼らが抱えている陳腐でひとりよがりの考えを、体系づけ、学者ぶってひけらかし、永遠の真理として宣言する、ということだけにとどまっているのである。〉(江夏訳58-9頁)

★また『学説史』261にはシャルル・ガニルについて、「交換および交換価値に関する重商主義の見解」と題して、取り扱われている(261232-240) ところが、ガニルは、重商主義者とともに、価値の大きさそのものが交換の産物だと思い込んでいる。けれども、生産物が交換を通して受け取るのは、価値の形態または商品の形態にすぎないのである。〉(同235頁)

●注33に関するもの

《初版本文》

〈(28)「経済学者たちは奇妙なやり方をするものだ。彼らにとっては、人為的な制度と自然的な制度という二種類の制度しかない。封建制の制度は人為的な制度であり、ブルジョアジーの制度は自然的な制度である。彼らは、この点では、同じく二種類の宗教をうちたてる神学者たちに似ている。神学者たちの宗教でない宗教はどれも、人間の発明品であるが、彼ら自身の宗教は神の啓示である。――それゆえに、かつては歴史があったがもはや歴史はない。」(カール・マルクス『哲学の貧困。プルードン氏の貧困の哲学に答えて。一八四七年』、――三ページ。)古代のギリシア人やローマ人が略奪だけで生きていたと思っているバステリア氏は、ほんとうにおかしな男だ。人間が幾世紀も略奪によって生きていたとすれば、やっぱり、いつでもそこには略奪されるものがあらねばならないか、それとも、略奪の対象が絶えず再生産されていなければならない。だから、ギリシア人やローマ人も、ある生産過程を、したがってある経済をもっており、その経済は、ブルジョア経済が今日の世界の物質的な基礎を成しているのと全く同じように、彼らの世界の物質的な基礎を成していた、と思われるのである。さもなければ、バステリアは、もしや、奴隷労働にもとづく生産様式が略奪体制を土台にしているとでも思っているのだろうか？

そうなると、彼は危険な地盤の上に身を置いていることになる。アリストテレスのような思想の巨人が奴隷労働の評価では遂を誤ったのに、どうして、バステリアのような小人の経済学者が賃労働の評価で正しい道を行けるはずがあるのか？――私はこの機会をとらえて、私の著作『経済学批判。一八五九年』の発刊のさいにアメリカのあるドイツ語新聞が私に向かって唱えた異議を、すげなくはなつけておこう。同紙は次のように述べた。私の見解、すなわち、特定の生産様式とそのつどこれに対応している生産諸関係、簡単に言えば「社会の経済構造は、法律的政治的な上部構造がその上にそびえ立ち、特定の社会的意識形態がそれに対応しているところの、現実の基礎である」ということ、「物質的生活の生産様式が、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約している」ということ、――これらすべてのことは、物質的な利害関係が支配している今日の世界にとっては、確かに正しいが、カトリック教が支配していた中世にとっても、政治が支配していたアテネやローマにとっても、正しくはない、と。第一に奇怪なのは、中世や古代世界についてのこの天下周知のきまり文句が誰かある人には知られていないと前提して喜んでいる者がいる、ということだ。中世はカトリック教によって生きてゆくことができなかつたし、古代世界は政治によって生きてゆくことができなかつた、ということだけは明らかである。これとは逆に、中世や古代世界がその生活を獲得したやり方は、なぜ、前者では政治が、後者ではカトリック教が、主役を演じたか、を明らかにしている。さらに、たとえば、ローマ共和国の歴史をほんのわずかでも知っていれば、土地所有の歴史がこの国の秘史を成していることがわかる。他方、遍歴騎士道が社会のどんな経済形態とも一様に両立すると妄想した誤りにたいしては、ドン・キホーテがすでに罰を受けてしまっている。〉(江夏訳65-6頁)

《フランス語版》

く(32)「経済学者たちは奇妙なやり方をする。彼らにとっては、人為的制度と自然的制度という二種類の制度しかない。封建制の制度は人為的制度であり、ブルジョアジーの制度は自然的制度である。彼らはこの点では神学者たちに似ているのであって、神学者たちも二種類の宗教をうちたてている。彼らの宗教でない宗教はどれも人間の発明であるが、彼ら自身の宗教は神の啓示である。それゆえに、かつては歴史があったが、もはや歴史はない」(カール・マルクス『哲学の貧困。ブルードン氏の貧困の哲学に答えて』、一八四七年、一一三ページ)。バスティアはこの上なく滑稽であって、ギリシア人とローマ人は掠奪だけで生活していたと想像している。だが、人が数世紀ものあいだ掠奪で生活するばあいには、それでもなお、取りあげるべきあるものがつねに存在していなければならないか、あるいは、絶えることのない掠奪の対象が不断に更新されなければならない。だから、ギリシア人もローマ人も、自分たちに属する自分たちの生産方式、したがって一つの経済をもっていた、と思わなければならないが、この経済は、ブルジョア経済が今日の社会の物質的基礎を成しているのと全く同じように、彼らの社会の物質的基礎を成していたのである。それともまたバスティアは、奴隷労働にもとづく生産様式が掠奪体制であると考えているのだろうか？ そうなると、彼は危険な地盤の上に立っていることになる。アリストテレスのような大思想家が、奴隷労働の評価では思いちがいがありえたのに、どうしてバスティアのような小人が、賃労働の評価で誤りを犯さないであろうか？ 私はこの機会をとらえ、一八五九年に刊行された私の著作『経済学批判』にかんしアメリカのあるドイツ語新聞が私に加えた反論について、若干言及しておく。この新聞によると、私の見解、すなわち、一定の生産様式とこれから生ずる社会的関係、一言にしていえば社会の経済構造は、法制的および政治的な機構があとでその上にうちたてられるところの現実的な土台であるから、物質的生活の生産様式が一般に社会的、政治的、知的生活の発展を支配するという私の見解は、物質的利害が支配している現代の世界にとっては正しいが、カトリック教が支配していた中世にとっても、政治が支配していたアテネやローマにとっても正しくない、というのである。まず奇妙なのは、中世と古代にかんするこの使い古された陳腐な語法を誰かが知らないと前提して喜ぶ男がいる、ということだ。中世がカトリック教によって、古代が政治によって生活できなかったことは、明白である。当時の経済条件は逆に、なぜ中世ではカトリック教が、古代では政治が主役を演じたか、を説明している。たとえば、ローマ共和国の歴史をほんのわずか知っても、この歴史の秘密が土地所有の歴史であることがわかる。他方、誰でも知っているように、ドン・キホーテはとっくの昔に、遍歴の騎士道が社会のすべての経済形態と両立すると信じたことを後悔せざるをえなかったのだ。

〉(57-58頁)

『資本論』を読んでみませんか

先月末、「大阪維新の会」が、教育委員会の異論を押し切って、大阪府教育基本条例案を大筋で決定しました。そして23日にはじまる府議会では「維新の会」が過半数を握っており、ほぼ原案どおり可決される見通しとも言われています。

同条例案は前文で「教育行政からあまりに政治が遠ざけられ、教育に民意が十分に反映されてこなかった結果生じた不均衡な役割分担を改善し、政治が適切に教育行政における役割を果たし、民の力が確実に教育行政に及ばなければならない」などと述べ、政治家である知事が「教育の目標」を決め（6条2項）、それに従わない教育委員は知事によって罷免する（12条2項）などとしています。つまり教育内容や教育制度に、直接、政治家が介入しようというのです。

橋下同会代表は、「教育に民意が十分に反映されてこなかった」から、だから選挙で選ばれた知事が「教育の目標」を決めれば、民意が反映されると言います。しかしそういう橋下代表は、他方で「すべてをマニフェストに掲げて有権者に提起するのは無理です。・・・選挙では国民に大きな方向性を示して訴える。ある種の白紙委任なんですよ」（12日朝日）などとも述べています。つまり選挙に勝てば、白紙委任されたも同然であり、だから知事のやりたいようにやるのだ、というわけです。だから「民意を反映する」などというのはまやかしであり、ただ知事の反動的な意向をストレートに教育にも徹底させようとするものにほかなりません。

しかし教育に時の権力が直接介入することを許せば、どういう結果になるかは、戦前の軍国主義教育が国民を戦争に総動員する上で、大きな役割を果たしたことを考えれば、あまりにも明らかです。だからこそ、その反省の上に立って、戦後の教育基本法の第16条は、「教育は不当な支配に服することなく行われるべき」と定め、教育への政治の不当な介入を否定してきたのです。

橋下代表の狙いは、こうした戦後の教育の大原則とでもいうべきものを覆し、知事が教育内容にも介入して、ファッション的な統制と管理を教育の中にも持ち込もうというものです。





もちろん、私たちは一部の自由主義者のように、教育は「中立であるべき」などという理念を振りかざす気はありません。なぜなら、ある時代の支配的な思想は、常に支配階級の思想にほかならないように、ブルジョア社会のもとでは、教育もまたブルジョア教育にしかなりえないからです。しかし、そのことは教育が支配階級の支配の道具に墮すことを容認しなければならないことを意味しません。資本・賃労働の関係の下では、労働者の賃金は、労働力の価値以上にはなりえません。しかしだからといって、労働者が賃上げを求めて闘う必要がなくなるわけではないように、教育に対する権力の不当な支配とも労働者は闘って行く必要があるのです。「教育の中立」といったありえない理念のためにではなく、資本の支配との闘いの一環として闘うのです。

マルクスも『ゴータ綱領批判』のなかで、綱領が「国家による普通・平等の国民教育」を掲げていることを批判して、教育への国家の影響を排除すべきことを次のように主張しています。

〈「国家による国民教育」はまったく不適當だ。一般的な法律によって国民学校の財源、教員の資格や授業科目などを規定すること、またアメリカ合衆国でおこなわれているように、国家の視学官がこれらの法規の実行を監督することと、国家を国民教育者に任命することとは、まったく別のことである！ 逆に、政府と教会のどちらも、学校にたいしていかなる影響をも及ぼしえないようにしなければならない。〉（全集19巻31頁）

橋下・維新の会代表のファッション的な企みを断固粉碎しましょう。労働者の闘いをさらに発展させるために、『資本論』を共に学びましょう。

第43回「『資本論』を読む会」の報告

◎関電、全原発停止

関西電力は21日未明、福井県にある高浜原子力発電所3号機（出力87万キロワット）の原子炉を停止しました。これで関電の11基あるすべての原発が停止したことになります。当面の電力需給は安定していますが、関電は夏の需要ピーク時には大変なことになると「危機的状況」を強調し、「電力の需給安定には、原子力の再稼働が不可欠」（八木社長）などと述べています。

ところがおかしなことに、関電は、大阪府や大阪市の電力需給の詳細データの公開要請にはガンとして答えようとしていません。節電への協力を呼びかけながら、それが必要である裏付けとなるデータの公開を拒み続けているのです。これは一体、どうしたことでしょうか。

それは恐らくデータを公開すれば、これまで原発に反対する人たちが主張してきた、原発がなくても日本には電力需要を十分にまかなうだけ発電設備はある、という主張を裏付けてしまうからではないかと思われま

す。というのも、私の知人は関電で長く働き、今はすでに定年退職していますが、彼のいうには、これまでは、原発の稼働率を上げるために、関電管内の火力発電所の多くは停止してきたというのです。だから停止した火力発電所を再稼働すれば、十分電力の需要に応じることが出来るだけの余力を今の関電は持っていると言います。例えば多奈川第二火力発電所は定格出力は120万キロワットです。これがすべて停止したままなのです。あるいは海南火力発電所（同210万キロワット）もその一部は停止したままです。

もちろん、停止している火力発電所を再稼働すれば、それだけ燃料代がかかるかも知れません。しかし、老朽化して危険極まりない原発を再稼働して、放射能の恐怖にさらされるより、よっぽとましというものではないでしょうか。

関電にとっては、原発は“ドル箱”であり、稼ぎ頭なので、何としても原発を動かしたいとの思いがあるのは分かるのですが……。

◎ロビンソンの問題を再び議論

さて、今回の学習会はやや違った趣のもとに始まりました。というのはNさんが、彼は第41回の報告で紹介しましたように、第12パラグラフに関連して、ロビンソンが飼っていたのはヤギなのに、どうしてマルクスはラマにしたのか、と問題提起をされた方ですが、今度は、同じ第12パラグラフに関連する資料として、大塚久雄著『社会科学における人間』（岩波新書）からロビンソンに言及しているところ（96-110頁）をコピーして資料として持ってきてくれたからです。だから学習会は、まずこの資料に一通り目を通すことから始めました。そしてその中身について、若干の議論を行ったわけですが、その詳しい内容を紹介することは、やはりこの報告のなかでは主題を外してしまうので、出来ませんが、大塚氏のこの著書は、コピーされた部分を読むだけでも、細かく見て行くと色々問題が多いものでした。だからここでは、主要な点に限って、その問題点を指摘しておきたいと思

います。

さて、この大塚氏の著書は、1976年のNHK人間大学における講義を新書に再編したもののようですが、同氏は、マルクスがロビンソン物語で問題にしているのは次のようなことだと述べています。

〈このマルクスの指摘する基本的な諸事実は、実は、われわれが現在使い慣れている語で言いかえますと、物的ならびに人的資源の配分、簡単に資源配分とよばれているものですね。〉〈経済の本質が資源配分である〉〈およそ経済現象なるものはつねに「資源配分」の問題だ〉云々。

確かにマルクスがロビンソン物語を取り上げているのは、これまでの報告でも指摘してきたように、あらゆる社会的生産諸形態に共通する物質的な生産を人間と自然というもっとも抽象的な契機に還元して考察するためでした。しかしそれを〈物的ならびに人的資源の配分、簡単に資源配分とよばれているもの〉だと捉えるのは、決して正しくありません。そもそもマルクスは商品の物神的性格の秘密を暴露しているのです。その内容を紹介するに際して、物神崇拜に取り込まれたカテゴリーである〈物的ならびに人的資源の配分〉などという用語を使うこと自体、おかしなことです。ましてや、それがマルクスの主張していることだ、などと説明することは途方もないことではないでしょうか。おまけに大塚氏は〈「資源配分論」はいわゆる近代経済学の方のレポートのなかに含まれている〉なども述べており、そのことを先刻承知の上で使っているのですから、何をか況んやです。

〈人的資源〉という用語を調べてみますと、次のような説明があります。

〈資源ということばは・・・主として人間の利用できる天然資源 natural resources を指すようである。しかし、一方〈人的資源〉なることばも使われ、この場合は人間がみずから客観的に見て、なんらかの目的の達成には人間も必要な資源と考えているのである。〉〈資本とは投資によってその価値を増大させることのできる財貨であるが、この考え方を投資対象としての人間に適用したものが〈人的資本〉の概念である。すなわち、人間の経済的価値を投資によって高めることができるという考え方である。〉（平凡社世界大百科事典）

しかしマルクスはこうした考え方こそ〈資本主義的な考え方の狂気の沙汰〉だと、次のように述べているのです。

〈国債という資本ではマイナスが資本として現われる――ちょうど利子生み資本一般がすべての狂った形態の母であったとえば債務が銀行業者の観念では商品として現われることができるように――のであるが、このような資本に対比

して次には労働力を見てみよう。労賃はここでは利子だと考えられ、したがって、労働力は、この利子を生む資本だと考えられる。たとえば一年間の労賃が五〇ポンドで利子率が五％だとすれば、一年間の労働力は一〇〇ポンドという資本に等しいとみなされる。資本家的な考え方の狂気の沙汰はここでその頂点に達する。〉（全集25 b 596頁）

マルクスはあらゆる社会的生産諸形態に共通して存在している〈本来の物質的生産の領域〉（『資本論』第3部・全集25巻 b 1051頁）について、次のように述べています。

〈未開人は、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないが、同じように文明人もそうしなければならないのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもとでも、そうしなければならないのである。彼の発達につれて、この自然必然性の国は拡大される。というのは、欲望が拡大されるからである。しかしまた同時に、この欲望を充たす生産力も拡大される。自由はこの領域のなかではただ次のことにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。〉（同1051頁）

このように、ここでもマルクスはロビンソン物語と同じように、社会を一人の人間に置き換えて、未開人や文明人という形で、それを直接自然に対峙させて、「彼の発達」を問題にしています。大塚氏が指摘していることは、その限りでは、こうしたあらゆる社会形態からも独立した物質的生産の領域そのものなのですが、しかし、大塚氏は、それを、マルクスが「商品の物神的性格とその秘密」を暴露しているパラグラフの説明として、敢えてわざわざブルジョア経済学の「資源配分」という用語に置き換えて論じているのです。これはまさに氏のブルジョア的本性を暴露するだけではなく、悪しき意図をも示すものではないでしょうか。

●「人間類型」から社会を説明する観念的な俗説をマルクスに被せる

また大塚氏はマックス・ウェーバーの「人間類型論」に引き付けて、マルクスを読んでいます。ロビンソンクルーソーを「第一の人間類型」とし、「中産的生産層の典型」として捉えているわけです。そしてマルクスにも同じようなとらえ方があるのではないか、というのが、どうやら大塚氏の問題意識のようです。次のように述べています。

〈少なくとも、経済学の範囲内で論じている限り、マルクスもまた「ロビンソンの人間類型」を認識のモデルとして前提していた、と。あるいは、マルクスは、「ロビンソンの人間類型」がおよそ経済学における理論形成の前提となっている、と考えていた、と。私はそう言ってさしつかえないのではない、と思います。〉

しかし、これはとんでもない話ではないでしょうか。『資本論』のどこを読めばそうした理解が可能なのか、さっぱり分かりませんが、こんな観念的な歴史観をマルクスになすりつけることは許されるものではありません。大塚氏は最後には〈厳密な意味では、マルクスの学問には、人間論は立派にあっても、人間類型論はなかった、ということになるかと思います〉などと述べていますが、とうていマルクスの理論を語る資格などないといわざるを得ないと思います。

また大塚氏は、『資本論』の前に書かれた遺稿として『資本制的生産に先行する諸形態』も紹介して、それについて次のようにも述べています。

〈ここでは、・・・『資本論』の段階では慣用することになるような、そしてわれわれにはなじみの、生産諸力が発達すれば生産関係としての共同体は解体する、というような言い方はしていません。〉

しかし、これも真っ赤なウソであることは明らかです。次の一文を見てください。

〈労働する諸主体相互間の、また彼らの自然にたいする、一定の諸関係は、彼らの生産諸力の一定の発展段階に対応するのであって、彼らの共同体組織もこれにもとづく所有も、結局のところ、この発展段階に帰着するのである。ある点までは再生産〔が行われる〕。それから解体に転変する。〉（『資本論草稿集』2、149頁）

そもそも『先行する諸形態』というのは、一般に『経済学批判要綱』と言われている1857-58年の草稿の一部なのです。マルクスはこの『要綱』での研究とそこで明確になった経済学批判のプランにもとづいて、その第一分冊として『経済学批判』を1859年に刊行し、その「序言」で、〈私の研究にとって導きの糸として役だった一般的結論〉として定式化したものが、あの有名な「唯物史観の定式」と言われるものなのです。つまりマルクス自身が、『批判』のもとになった『要綱』における研究を、「序言」で定式化したような観点を導きとして行ったのだと、自ら述べていることになるのです。だからその一部である『先行する諸形態』にそうした観点が貫かれていることは当然といえばあまりにも当然なのです。

大塚氏が『先行する諸形態』が書かれた、こうした経緯を知った上であのようなことを述べているのであれば、でたらめな人間であるといわざるを得ないし、知らずに書いているなら、学者として「失格」と言わなければなりません。

いずれにせよ、大塚氏のこの著書は、残念ながら、われわれの『資本論』の理解を助けて、深めるものというより、間違った理解へと、われわれを導き迷わす類のものといわざるを得ないでしょう。

◎第18パラグラフ

さて、そういうわけで、最初に頂いた資料を読む時間をとり、若干のそれについての議論を行ったあと、テキストにもどり、第18パラグラフから学習を開始しました。その報告を行います。いつものように、まず最初にテキスト本文を紹介し、それに文節ごとに記号を付して、それぞれを平易に書き下しながら、議論も紹介していくことにしましょう。

【18】 〈(i)商品世界にまつわりついている物神崇拜に、あるいは社会的労働諸規定の対象的外観に、一部の経済学者がどんなにはなはだしくあざむかれているかということ、とりわけ、交換価値の形成における自然の役割についての退屈でばかばかしい論争が示している。(ii)交換価値は、ある物に支出された労働を表現する一定の社会的様式であるから、たとえば為替相場と同じように、それが自然素材を含むことはありえないのである。〉

(4) 商品世界にまわりついている物神崇拜、あるいは社会的な労働諸規定の対象的外観に、一部の経済学者がどんなにはなはだしくあざむかれているかということは、とくに交換価値の形成における自然の役割についての退屈でばかばかしい論争が示しています。

ここで〈商品世界にまわりついている物神崇拜〉を言い換えて、〈社会的労働諸規定の対象的外観〉とも述べているように思えます。学習会では、この二つは同じものと考えてよいのか、また「物神崇拜」を「物象化」と区別して、後者は労働の社会的性格が物の社会的自然属性や物の社会的関係として現れる客観的な現象をいうが、前者はそれが意識に反映したものだとする理解があるが、こうした理解は正しいのか、あるいは次のパラグラフには「物神的性格」という言葉も出てきますが（これは第4節の表題「商品の物神的性格とその秘密」にもなっています）、これらはどのように区別されるのか、また、第3章「貨幣または商品流通」の第2節「流通手段」の「a 商品の変態」の最後の方に出てくる「物の人格化と人格の物化との対立」の理解との関連などが話題になりました。これらは、しかし、話題になったというだけで、議論のなかで問題がハッキリ解決したわけではなく、ある意味では、今後の課題として問題提起されたものと受け止めています。よって、今後、こうした問題も考えていくための一つの参考文献として『資本論体系 2 商品・貨幣』所収の西野勉「物神性論に関する諸学説」から少し紹介しておきましょう。西野氏は平子友長氏の主張に依拠して、この問題を次のように説明しています。

〈広義の「物象化」とは、「物神崇拜」という転倒した意識を生ずる客観的現象のなりたち、すなわち、人間の社会的関係がどういって関係を通じて「物象化」(広義の)し、さらにそれがどういって関係を通じて物の自然的関係・属性として現象する＝「物化」することになるのか、という客観的現象のなりたちをとらえた概念であるのたいして、「物神性」とは、その広義の「物象化」の結果、「物象」の社会的関係が、物の自然的属性や質料の関係性として現象しているその結果としての転倒現象のみを批判的にとらえた概念だというべきであろう。その転倒現象をあるがままに受け入れるところの日常意識が「物神崇拜」というべきであろう。〉(393頁、傍点で強調されている部分を下線にした)

このように西野氏や平子氏は、「物神崇拜」を「意識の問題」と捉えているようです。しかし、果たしてそうした理解は正しいのでしょうか。学習会では、単に意識の問題として捉えるのはおかしいのではないかと、という疑問が出されました。いずれにせよ、もう一度、この問題を考えるために参考になるので、以前学習した第4パラグラフを見てみることにしましょう。

〈したがって、商品形態の神秘性は、単に次のことにある。すなわち、商品形態は、人間に対して、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、したがってまた、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。この“入れ替わり”によって、労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物に、なる。たとえば、物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的刺激としては現れないで、目の外部にある物の対象的形態として現れる。しかし、視覚の場合には、外的対象である一つの物から、目というもう一つの物に、現実光が投げられる。それは、物理的な物と物とのあいだの一つの物理的な関係である。これに対して、労働生産物の商品形態およびこの形態が自己を表すところの労働生産物の価値関係は、労働生産物の物質的性質およびそれから生じる物的諸関係とは絶対的に何のかわりもない。ここで人間にとって物と物との関係という幻影的形態をとるのは、人間そのものの一定の社会的関係にほかならない。だから、類例を見いだすためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げこまなければならない。ここでは、人間の頭脳の産物が、それ自身の生命を与えられて、相互のあいだでも人間とのあいだでも関係を結び自立した姿態のように見える。商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを、私は物神崇拜と名づけるが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなや労働生産物に付着し、したがって、商品生産と不可分なものである。〉

ここではマルクス自身が、〈これを、私は物神崇拜と名づける〉と述べており、だから「物神崇拜」とは何かを理解するカギは、このパラグラフにあると考えることが出来ます。そしてこのパラグラフを読む限り、「物神崇拜」というのは、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、つまりこれらの物の社会的自然属性として反映したものであり、総労働に対する生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させることから生じるものだと説明されています。労働生産物の商品形態は、決して単なる意識の問題ではないことは明らかです。だからこのマルクスの説明を見る限り、「物神崇拜」を単なる意識の問題と理解することにはやはり疑問を持たざるを得ません。

またいわゆる「物象化」と言われているものは、こうした人間自身の労働の社会的性格や、総労働に対する生産者たちの社会的関係が、物の社会的自然属性や物の社会的関係として反映され、しかもそれらによって人間自身が支配され、引き回される転倒した関係を意味します。だから「物象化」というのは、「物神崇拜」とその限りでは同じものです。ただ「物神崇拜」は、「物象化」という同じ事態を、すなわち人間が自分自身の労働の社会的属性や総労働に対する関係を反映させたものに支配される事態を、人間が自分たちの社会的な意識の産物にすぎない神によって支配される関係にアナロジーさせて、物を神として崇拜し、それに跳く現実を指して「物神崇拜」と述べているものではないでしょうか。だから「物象化」は「物神崇拜」とは何か別物ではなく、また前者は現実の関係であるが、後者はその現実を反映した、あるいはそれに捕らわれた意識の問題だというのではなく、基本的には同じ内容を述べたものだと考えられるのではないのでしょうか。

「カネさえあればなんでもかかろう」というのは、単に意識の問題ではなく、ブルジョア社会の現実であり、だからこそ、カネをありがたがり、札束の前に卑屈になって跳くのではないのでしょうか。それは決して単なる意識の問題ではないのです。

また〈交換価値の形成における自然の役割についての退屈でばかばかしい論争〉というのは、『剰余価値学説史』の〈(b) 労働概念の自然過程への拡張によるそれへの歪曲。交換価値と使用価値との同一視〉(全集26巻III・231頁)という項目を見ると、こうした見解は、価値の生産価格への転化という現象をリカードの理論では説明不可能なところから生まれたようです。一般的利潤率の生成を知らず、よって価値の生産価格への転化を知らなかったリカードはそれを「例外」としたのですが、リカード学派を解体させた経済学者たちは、さらに突き進んで、だから価値は労働によって規定されないのだと結論し、次のような例を挙げたということです。

〈その事例は次のようなものであった。すなわち、ある種の諸商品は、それに労働が費やされることなしに、生産過程のなかに留まるのであって(たとえば酒倉のなかのぶどう酒)、その期間のあいだ、それらの商⑩品はある種の自然過程の作用にさらされる、ということである。(たとえばミルによっては指摘されていないが、いくつかの新たな化学的能因が充用される前の、農耕や皮なめしにおける労働の長い中断が、そうである。)それにもかかわらず、この期間は利潤を生みだしているものとして計算される。商品に労働が加えられない期間が労働期間として計算されるのである。(一般に、より長い流通期間が見込まれる場合も同じである。)、ミルは、この難局を、いわば「うそを言って切り抜けた」ので

ある。というのは彼は次のように言っているからである。すなわち、人は、たとえばぶどう酒が酒倉のなかにある期間を、たとえ前提からすれば実際にはそうでないにしても、労働を吸収している期間とみなすことができるであろう、と。そうでなければ、人は「時間」が利潤をつくりだし、時間そのものが「音や煙」である、と言わなければならないであろう、と。ミルのこのような駄弁をマカロックは話の糸口にし、というよりはむしろ彼のいつもの気どった割符のやり方で、その駄弁を一般的な形態で再生産しているのであって、そのなかでは、隠されていたばかげた考えが解放され、リカードの体系の、また一般にすべての経済学的思考の、最後の残存物までが都合よく除去されているのである。〉（全集26巻III・232-3頁）

またこの引用の最後で言われているマカロックの主張については、次のように説明されています。

〈不都合が取り除かれているのは、諸商品の使用価値が一 交換価値と呼ばれ、また、諸商品が使用価値として通過する作業や、諸商品が使用価値として生産過程のなかで果たす役だちが一労働と呼ばれる、ということによってなのである。このようにして、実際、日常生活のなかでは、労働する役畜や労働する機械が云々され、また、詩的に、鉄は炎熱のもとで労働しているとか、ハンマーの重庄のもとでうめくとき労働している、とも言われたりするのである。それどころか、鉄が歩いたりもするのである。そして、労働は一つの作業なのだから、どんな「作業」でも労働である、ということよりも容易に証明できることはない。まったく同様に証明されうことは、感賞のあるものはすべて肉体的なものだから、すべての肉体的なものが感賞をもっているということであろう。

「労働は、正確には、それが人間や下等な動物や機械や自然力のどれによって行なわれようと、ある望ましい所産をもたらす傾向のあるなんらかの種類的作用または作業である、と定義しうるのである。」（マカロック『経済学原理』七五ページ。）

そして、このことは、けっして【ただ】労働用具に【だけ】かわりがあることではない。それは、事実上、原料についてもまったく同様にあてはまる。羊毛は、それが染料を吸収する場合には、ある物理的な作用または作業を受ける。一般に、「ある望ましい所産をもたらすために」ある物に、物理的、機械的、化学的などの作用を及ぼすならば、必ずその物自体は反作用をする。だから、それ自身が労働することなしに、それが加工されるということはいえぬ。こうして、生産過程にはいるすべての商品は価値が増加するのであるが、それは、それ身の価値が保存されるからだけではなく、それらの商品が、単に対象化された労働ではなく「労働する」ということによって、新しい価値をつくりだすからである。これによって当然すべての困難は除去される。実際には、これは、単に、セーの「資本の生産的役だち」や「土地の生産的役だち」などの遠回しな表現にすぎず、それを改名したものにすぎない。〉（同325-6頁）

以下、マルクスの叙述は続きますが、これぐらいで十分でしょう。

(H) 交換価値は、ある物に支出された労働を表現する一定の社会的な様式なのでから、例えば、為替相場と同じように、それに自然素材が含まれるということはいえぬのです。

ここでは〈交換価値は、ある物に支出された労働を表現する一定の社会的様式である〉という説明があります。実際、生産物が商品という形態をとらない社会では、ある物に支出された労働は直接労働時間で計られていました。例えば、農民は田植えをしなければならぬ時期から逆算して、田を耕したり、水を入れて均すなどさまざまな田植えの準備をやりますが、それぞれの作業にどれだけの労働日が必要かを常に意識して自分の労働を配分します。同じように、大工は棟上げの日を決めて、そこから逆算して、上棟に必要な一切のものを材木を加工して準備しますが、その場合にどの作業にどれだけの日数が必要かを常に考えて作業をしています。これらはすべて一つの生産過程のなかで話ですが、本来は、社会的な生産においても同じことが必要なのです。しかし労働が直接社会的に結びつけられていない社会では、その労働の社会的な結びつきや、ある物にどれだけの労働が支出されるべきかは、結局、それらの労働生産物が商品として交換されるなかで事後的に決まってくるわけです。だから価値というのは、そうした物に支出された労働を表現する一つの社会的やり方であって、だから価値にはそもそも自然素材などはまったく含まれていないのだというわけです。それは為替相場に自然素材が含まれていないのと同じだとも。しかし為替相場に自然素材が含まれていないことは認めるブルジョア経済学者も、しかし物神崇拜に取り込まれているがために、商品の価値には、自然の産み出す「価値」も含まれるのだと考えているわけです。それは次のパラグラフを見れば分かります。

◎第19パラグラフ

【19】〈(I)商品形態は、ブルジョアの生産の最も一般的な最も未発展な形態であるから一だからこそ、商品形態は、こんにちほど支配的な、したがって特徴的な様式ではないにしても、早くから登場するのだが一その物神的性格はまだ比較的たやすく見ぬけるように見える。(H)もっと具体的な形態の場合には、簡単であるという外観さえ消えうせる。(H) 重金主義の幻想はどこから来るのか？ (C)重金主義は、金銀を見ても、貨幣としての金銀は一つの社会的生産関係を、しかも奇妙な社会的属性をおびた自然物という形態で、表示するのだということを見てとることができなかった。(A)また、お高くともって重金主義を冷笑している近代の経済学は、それが資本を取りあつかうやいなや、その物神崇拜は手に取るように明らかになるではないか？ (H)地代は大地【Erde】から生じるのであって、社会から生じるのではないという重農主義の幻想が消えてから、どれだけたったであろうか？〉

(I)、(H) 商品形態は、ブルジョアの生産の最も一般的な最も未発展な形態ですから、そしてだからこそ、商品形態は、ブルジョア的な生産ではそうであるように、支配的で特徴的な様式にまでなっていないとしても、早くから歴史的には登場します。しがし、そうした未発展な商品形態では、まだその物神的性格は比較的容易に見抜くことが可能なように見えます。しかし、もっと具体的な形態、例えば貨幣形態であるとか、資本形態などの場合は、簡単であるという外観さえ消え失せます。

ここでは商品形態では、その物神的性格はまだ比較的たやすく見抜けると言われていますが、これはどういうことかが問題になりました。

商品形態は、その発展したものである貨幣形態や資本形態と比較してこのように言われているのですが、商品形態では物神的性格が比較的容易に見抜けるというのは、商品の価値は、生産物の「社会的自然属性」だと言われますが、しかしそれが生産物の実際の自然の属性とは異なるものであることが比較的容易に理解されるということではないかと思えます。

初版付録の等価形態の第四の特性の表題は、〈商品形態の物神崇拜は、等価形態では、相対的価値形態においてよりも顕著である〉となっています。つまりここで相対的価値形態にあるのは、単なる一つの商品ですが、等価形態にある商品は、さらに貨幣へと発展するものなのです。つまり相対的価値形態にある商品リンネルの価値は、ここでは上着という別の商品の使用価値によって表現されています。だからリンネルの価値は、リンネルの使用価値とは異なるものであり、

何らかの商品の関係から生じるものであるということは、ここでは容易に理解できるわけです。それに対して、上着は、リンネルとの価値関係（表現）の中では、その使用価値そのものが価値になっています。つまりその自然属性そのものが価値という社会的属性と密接不可分に癒着しているのです。しかし、まだ等価形態の未発達な段階では、上着は別のある商品と入れ代わることが可能ですから、別に上着の使用価値そのものにそうした属性がくっついているわけではないことはまだ分かります。しかし、貨幣形態では、金という商品にそれが最終的に固着し、それ以外のすべての商品は等価形態から排除されています。つまりここでは金という自然属性そのものが、そうした社会的属性を独占的にまとっており、だからこゝ今度は、自然属性そのものが社会的属性と密接不可分になっています。だから貨幣形態では、金という物的姿そのものが価値そのものに、価値の絶対的化身として現れて、その物神的性格を見抜くことは、単なる商品形態に比べてより困難になっているとマルクスは述べているのだと思います。

そしてさらに発展した資本形態では、ブルジョア経済学者は資本を物として、すなわち財貨として見るのは彼らにとってより強い常識として一般化しているのだというわけです。

(H)、(C) 重金主義の幻想はどこから来るのでしょうか？ 重金主義は、金銀を見ても、貨幣としての金銀は一つの社会的な生産関係を、金銀という自然物の社会的な自然属性として、表しているのだということが分かりませんでした。

ここで〈重金主義の幻想〉というのは、金銀こそが唯一の富だと考えたことではないかと思えます。つまり商品形態のより発展した貨幣形態では物神崇拜を見抜くことはより困難であり、よって重金主義者は、金銀を見ても、それが社会的な生産関係を表すものであり、金銀が持つ社会的な力は、彼ら自身の社会的な関係から生じているということを理解できなかったわけです。重金主義については付属資料を参照してください。

(A) また、その重金主義を批判し、冷笑している近代の経済学は、しかし自分たちも資本を取り扱うとなると、資本は工場や機械などの財物だという強固な理解から抜けきれず、その物神崇拜は手にとるように明らかではないでしょうか。

ここで〈近代の経済学〉とあるのは古典派経済学、特にスミスやリカード以降の経済学を指すのだと思えます。スミスは『諸国民の富』第4篇で「重商主義体系の原理」を取り上げ、金銀を唯一の富とする重商主義者は、羊や牛を唯一の富としたタター人と同じであり、むしろタター人の方が「真理にもっとも近かった」などと述べ、重商主義者たちの主張を、ことごとく批判しています。

また『経済学批判』では、マルクスは次のようにも述べています。

〈最後に、交換価値を生み出す労働を特徴づけるものは、人と人との社会的関係が、いわば逆さまに、つまり物と物との社会的関係としてあらわされることである。一つの使用価値が交換価値として他の使用価値に関係するかぎりだけで、いろいろな人間の労働は同等な一般的な労働として互いに関係させられる。したがって交換価値とは人と人とのあいだの関係である、というのが正しいとしても、物の外被の下に隠された関係ということをつげくわえなければならない。一ポンドの鉄と一ポンドの金とが、その物理的、化学的属性が違っているにもかかわらず、同一の量の重さをあらわしているように、同一の労働時間をふくんでいる二つの商品の使用価値は、同一の交換価値をあらわしている。こうして交換価値は、使用価値の社会的な自然規定性として、物としての使用価値に属する一つの規定性として現われる。そしてその結果として、諸使用価値は、交換過程において一定の量的割合で互いに置き換えられ、等価物を形成するが、それはちょうど、単純な化学元素が一定の量的割合で化合して、化学当量を形成するのと同じことである。社会的生産関係が対象の形態をとり、そのために労働における人と人との関係がむしろ物相互の関係および物の人にたいする関係としてあらわされること、このことをあたりまえのこと、自明のことのように思わせるのは、ただ日常生活の習慣にほかならない。商品では、この神秘化はまだきわめて単純である。交換価値としての諸商品の関係は、むしろ人々の彼らの相互の生産的活動にたいする関係であるという考えが、多かれ少なかれ、すべての人の頭にある。もっと高度の生産諸関係では、単純性というこの外観は消えうせてしまう。重金主義のすべての錯覚は、貨幣が一つの社会的生産関係を、しかも一定の属性をもつ自然物という形態であらわすということを貨幣から察知しなかった点に由来する。重金主義の錯覚を見くだして嘲り笑う現代の経済学者たちにあっても、彼らをもっと高度の経済学的諸範疇、たとえば資本を取り扱うことになると、たちまち同じ錯覚が暴露される。彼らが不器用に物としてやっつけかまえたと思っただけなのに、たちまち社会関係として現われ、そして彼らかようやく社会関係として固定してしまったものが、こんどは物として彼らを愚弄する場合に、彼らの素朴な驚嘆の告白のうちに、この錯覚が突然現われるのである。〉（全集13巻19-20頁）

また〈近代の経済学は、それが資本を取りあつかうやいなや、その物神崇拜は手に取るように明らかになるではないか？〉という部分については、『資本論』第2部の固定資本と流動資本との区別を論じた部分から一部紹介しておきましょう。

〈根本的な誤り——固定資本と流動資本という範疇と不変資本と可変資本という範疇との混同——は別としても、経済学者たちのあいだに見られる従来の概念規定の混乱は、何よりもまず次の諸点に基づくものである。人々は、労働手段が素材として持っている特定の諸属性、たとえば家屋などの物理的な不動性のようなものを、固定資本の直接的属性だとする。このような場合にいつでもたやすく指摘できるのは、労働手段としてやはり固定資本である他の労働手段が反対の属性をもっているということであり、たとえば船などの物理的な可動性である。あるいはまた、価値の流通から生ずる経済上の形態規定を物的な属性と混同する。あたかも、それ自身では決して資本ではなくてただ特定の社会的諸関係のもとでのみ資本になる物が、それ自体としてすでに生まれ長柄に固定資本とか流動資本とかいう一定の形態の資本でありうるかのよう。〉（第2部、全集24巻197頁）

(A) あるいは地代は土地から生じるのであって、社会から生じるのではないという重農主義的な幻想が消えてから、どれだけだったでしょうか。

学習会では、ここでマルクスは何を言いたいのかが問題になりました。重金主義、重商主義、重農主義、そしてそれらを克服した近代の経済学との関係を、マルクスは、『経済学批判への序説』において、労働一般の観念の成立と関連させて、次のように述べています。

〈労働はまったく簡単な範疇のように見える。このような一般性においての——労働一般としての——労働の観念も非常に古いものである。それにもかかわらず、経済学的にこの単純性において把握されたものとしては、「労働」は、この簡単な抽象を生み出す諸関係と同様に近代的な範疇である。たとえば重金主義は、富を、まだまったく客体的に、自分の外に貨幣の姿をとっている物として、定立している。マニファクチュア主義または重商主義が、対象から主体的活動に——商業労働とマニファクチュア労働に——富の源泉を移しているのは、重金主義にたいして大きな進歩だった。といっても、まだこの活動そのものを金儲けという局限された意味でしか把握していないのであるが。この主義にたい

して、重農主義は、労働の一定の形態――農業――を、富を創造する労働として定立し、また対象そのものを、もはや貨幣という仮装のなかでではなく、生産物一般として、労働の一般的結果として、定立するのである。しかしまだこの生産物を、活動の局限性に対応して、やはりまだ自然的に規定された生産物――農業生産物、とくに〔par excellence〕土地生産物――として考えているのである。 富を生み出す活動のあらゆる限定を放棄したのは、アダム・スミスの大きな進歩だった。――マニュファクチュア労働でもなく、商業労働でもなく、農業労働でもないが、しかもそのどれでもあつたんなる労働。富を創造する活動の抽象的一般性ととも、いまやまた、富として規定される対象の一般性、生産物一般、あるいはさらにまた労働一般、といっても過去の対象化された労働としてのそれ。この移行がどんなに困難で大きかったかは、アダム・スミス自身もまだときどきふたたび重農主義に逆もどりしているということからも明らかである。〉（全集13巻630-1頁）

重金主義は16-17世紀の重商主義の前期の経済政策あるいは経済思想ですが、重農主義は主に18世紀にフランスで学派を形成した経済学者の一派です。その中心に位置するケネーは1694-1774年です。それに対して、スミスは1723-1790年、リカードは1772-1823年です。だからマルクスが「重農主義的幻想が消えてから、どれだけたつたであろうか？」というのは、「近代の経済学」が、そうした重農主義的幻想を克服してから、すでに一世紀ほど経っているのに、いまだに彼らは資本を取り扱うや、物神崇拜の幻想に惑わされているのではないか、という意味で、述べているのではないか、ということになりました。

【付属資料】

●第18パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈商品世界に付着している物神崇拜、あるいは、社会的な労働規定の对象的な外観を見て、一部の経済学者がどんなに欺かれているかは、なかならず、交換価値の形成における自然の役割にかんしての退屈でくだらない論争が、明らかにしている。交換価値は、ある物に費やされた労働を表現する特定の社会的なやり方であるから、たとえば為替相場と同じに、もはや自然素材を含んでいるはずがない。〉（江夏訳67頁）

《フランス語版》

〈商品世界に内在的な物神崇拜によって、あるいは労働の社会的属性の物的な外観によって、大半の経済学者のもとに産み出された幻想を、とりわけ証明するものは、交換価値の創造における自然の役割についての、長々しい、無味乾燥な彼らの論争である。交換価値は、ある物体の生産に使用された労働を計算するための、特殊な、社会的なやり方にほかならないから、たとえば為替相場と同じように、物的な要素を含むはずがない。〉（江夏他訳58頁）

●第19パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈商品形態は、ブルジョア的な生産の最も一般的で最も未発展な形態として、すなわち、それゆえに、すでに以前の生産時代においても、今日と同じように支配的なやり方、したがって特徴的なやり方ではないにせよ、現われているところの形態として、まだ比較的容易に見抜かれるものであった。ところが、たとえば資本のような、いっそう具体的な諸形態は、どうか？ 古典派経済学の物神崇拜が、ここでは手にとるように明らかになる。〉（江夏訳68頁）

《補足と改訂》

〈商品形態は、ブルジョワの生産のもっとも一般的なそしてもっとも未発達な形態であるから――だからこそ、商品形態は、今日ほど支配的な、それゆえ特徴的な様式ではないにしても、すでに早くから登場するのだが――その物神的性格はまだ比較的にたやすく見抜けるように見える。もっと具体的な社会的諸形態にあつては、簡単であるという外見え消えうせる。重金主義的幻想はどこから来るのか？ 金銀を見ても、貨幣としての金銀は一つの社会的生産関係を、しかも自然物の形態において、表示するのだということを見てとることができなかった。

[A]

また、お高くとまって重金主義を冷笑している近代の経済学は、それが資本を取り扱うやいなや、その物神崇拜は手に取るように明らかだということではなくなるのではないか？ 近代の経済学がまぬけにも、物だとして理解しようとした資本は、彼らにとって社会的関係として相対するとき、そして彼らがすぐにまた物だとかからかい、そのあとで彼らは資本を社会的関係としてはおよそ規定しないのを見るとき、同じ幻想があらわになっている。地代は土地から生じるのであって、社会から生じるのではないという重農主義的幻想が消えてから、どれだけたつたであろうか？

[B]

また、お高くとまって重金主義を冷笑している近代の経済学は、それが資本を取り扱うやいなや、その物神崇拜、は手に取るように明らかだということではなくなるのではないか？ 地代は土地から生じるのであって、社会から生じるのではないという重農主義的幻想が消えてから、

どれだけだったであろうか？ 〉（小黒訳26-7頁）

《フランス語版》

〈今日の社会では、労働生産物に結びつく最も一般的で最も単純な経済形態、すなわち商品形態は、誰もがそれに悪意を認めないほど、万人に身近なものである。もっと複雑な別の経済形態を考察しよう。たとえば、重商主義の幻想はどどこから生ずるか？ それは明らかに、貨幣形態が貴金属に極端に押す物神崇拜的な性格からである。それでは、自由思想家をよそおって、重商主義者の物神崇拜にたいして色褪せた冷やかしを倦むことなくむしかえす近代の経済学は、この外観にだまされることがいっそう少ないか？ 諸物、たとえば労働手段が本性上資本であること、労働手段からこの純粋に社会的な性格を奪い取ろうとして人は反自然の罪を犯すこと、これが近代の経済学の基礎的学説ではないのか？ 最後に、重農主義者は、多くの点で優れているにしても、地代が人間から奪われた貢物ではなく、自然そのものが土地所有者に与える贈り物である、と考えなかったか？（フランス語版では、ここで改行せずに、現行版の次のパラグラフの最初の文節がこのパラグラフの最後に来たあと改行している。――引用者）〉（江夏他訳58頁）

●『資本論辞典』から

重金主義Monetarsystem 重金主義とは、資本主義の初期にあたる16-17世紀にかけて西ヨーロッパ、とくにイギリスを中心として支配的におこなわれた経済政策ならびに経済思想の総称である広義の〈重商主義〉の前期をいう。この経済思想の基調は、貨幣が本性上金銀であるところから、金銀を富の唯一の形態だとみて、一国の富の大きさは金銀の保有量によって測られるとする点に求められる。したがって貨幣としての金銀を極度に重要視し、それを保蔵ないし蓄積することを強調したのであって、その限りでは素朴で一面的な主張というほかはない。だが反面においてこの思想のなかには、近代資本主義社会にたいする鋭い認識がひそんでいる。すなわち近代世界の最初の通弁である重金主義――重商主義はただその一変種にすぎない――の創始者たちは、金および銀つまり貨幣を唯一の富だと宣言し、正当にもブルジョア社会の使命をば貨幣をもうけること……だ、と明言したのである'(Kr 170;岩波208;国民197;選集補3-184;青木209)・初期資本主義の時代には、まだ国民的生産の大部分が封建的緒形態によって営まれており、生産物の商品への転形、貨幣を媒介とする商品流通は、まだきわめて限られた部面であらわれたにすぎなかった。それゆえに生産物の大部分は、総じて全社会的な素材変換の過程のなかに入らないから。むしろ一般的抽象的労働の対象化としてはあらわれず、事実上ブルジョアの富を形成するものではなかった。そこでせいぜいその当時の真にブルジョア的な経済の領域は、商品流通の領域であった。'この商品流通という原初的な領域に立脚してブルジョア的生産の全過程を判断して、そこにこの社会的生産形態に固有の秘密を、すなわちそれが交換価値によって支配されているということを洞見しえた点は、重商主義者の卓見である。のみならず、彼らの提唱した具体的諸政策の背後には、世界商業や外国貿易を尊重する思想の裏づけとして、こうした内外商業に直接につながる国民的労働の特定の諸部門を、富または貨幣の唯一の真の源泉だとみる見地があった(Kr170-172 ;岩波208-210;国民197-199;選集補3-184-185;青木209-211)・すなわち貨幣としての金銀は富の基盤をなすものであるが、しかし外国貿易に登場する生産物の生産やまたその生産物の商品への転形も、それらがけつきよくは貨幣に転形されて自国に金銀をもたらすならば、やはり富を実現するための条件であるといわなければならない。それゆえ重金主義は世界市場のための生産、生産物の商品への転形をも、正当に資本主義的生産の前提および条件として布告したのである(KIII-834-835 ;青木13・1106;岩波11-289)・しかしこの学説は、金銀をみても、それが貨幣としての社会的生産関係をば社会的属性を具えた自然物の形態で表示することを感知しなかったし(Kr20;岩波32;国民25;補3-18;青木38) , また貨幣の運動をとらえても、それをG-W-G'という無概念的形態において固定化し。この循環形式の背後にひそむ生産関係にまでたちいって洞察する観点をもちえないで、もっぱらそこに貨幣形態での金銀量の増加を考えるだけにとどまり、貨幣をそのまま資本と混同したのである（KII-57;青木5-81;岩波5-95)。これは、この経済思想がその根本的性格において粗雑な〈実利主義〉にもとづく本来的な俗流経済学であることを示すものである（KIII-834青木13-1106;岩波11-289) . [原典] KIII・834-835;青木13-1105-1106;岩波11・289-290. Kr第1編第2章C→重商主義(石垣博美)

フィジokrat Physiokrat | 名称 フィジokratとは、18世紀の後半フランスで学派を形成した経済学者の一群。すなわちフランソワ・ケネー(Francois Quesnay, 1694-1774)を中心とするミラボー侯(Victor Riquetti, Marquis de Mirabeau, 1715-1789), デュボン・ド・ヌムール(Pierre Samuel Dupont de Nemours, 1739-1817), メルシエ・ド・ラ・リグイエール(Paul Pierre Le Mercier de Riviere de Saint Medard, 1720-1793). ボードー師(L'abbé Nicolas Baudeau, 1730-1792). ル・トロヌ(Guiltaume Francois Le Trosne, 1728-1780)などのひとびとを指すのである。彼らはケネーを学祖として学派を形づくったが、テュルゴ(Anne Robert Jacques Turgot, 1727-1781)はこの学派の正系と見られていず、またみずからもこの学派に属することを否定した。それにもかかわらず彼がケネーの経済学説の骨子を継承し、それを発展させた重要な思想家であることはよく知られている。だからマルクスも彼をこうした意味でフィジokratの一人に数えているのである。ちなみに彼らはその在世当時からみずからをエコノミスト(economistes)と称し、また19世紀の前半までは他からもその名をもって呼ばれた。多分に思想の神秘的特徴を匂わ

せるフィジオクラートという名称が起ったのは、デュボンがケネーの論稿を集めて公刊した害物の名《フィジオクラシー (Physiocratie. 1767)からであり、さらにこの名が一般化したのはおそらく、19世紀の中葉、デーラ(EugeneDaire)がデュボンの編著にのっとり、学派の主要著作を編纂して《フィジオクラト》(Physiocrates, 1846)と題する二巻本を刊行してから後のことと考えられる。マルクスが学派の著作に接したのは、主としてこの二巻本を通じてである。II 業綴と性格

フィジオクラシー (重農主義)とは自然の統治というほどの意味をもつ。この学派は社会という体を支配する自然的秩序を開明し、とくに経済生活の自然的組織を貫く物理的法則をあきらかにしようとしたが、このような意図は現状の批判、なかんずくフランス重商主義(Colbertismus)批判の動機と深く結びついている。批判の対象となった社会はいうまでもなく、アンシャン・レジム(ancienregime)下の経済的に荒廃し、財政的にも破綻に瀕した農業国フランスであり、解決の狙いは農業経営の資本主義化である。ここに彼らの政策の基本的項目としての大農論が、(農産物)取引の自由化政策ならびに課税対象をもつばら農業生産の剰余価値たる〈純生産物〉(produit net).すなわち地代にのみに限るべしという単一税(impdtunique)政策とともに前景に出てくる。しかしフィジオクラシーはたんなる政策論ではなかった。それは政治算術的な方法にもとづいて国民の経済生活に実証的な分析を加え、そこから一つの物理的法則すなわち資本の再生産の秩序をさぐり出そうとしたのである。この秩序はまず社会の構成を機能的に地主階級と生産階級たる(借地)農業者の階級と不生産階級たる商工業者の階級に三分し、農業のみが生産的であること、したがって農業生産においてのみ剰余価値たる純生産物が創出されること、この創出された純生産物が年々地代として地主階級に支払われ、その収入を形成することを前提とし、さらに取引における自由と経営資本の所有権の完全な保証とが存するばあい、商業国間に適用する恒常的な平均価格(prix commun)の存立を基礎として、農業者の経営資本がいかに流過程における転形(W'-G'-W...P...W)を経つ純生産物を産出し、年々同じ規模の単純再生産を繰り返すかの構想となって実を結ぶ。この構想の図式化が《経済表》(Tableau Oeconomique. 1758;〔岩波文庫〕増井幸雄=戸田正雄訳:坂田太郎訳)であることはいうまでもない。かような分析こそまさしく彼らを近代経済学の父たらしめるものといわれるが、この分析の基本方向は、剰余価値を流過程における富の譲渡またはその振動にもとづく利潤'(MWI-32:青木1-82)と見る〈重商主義〉とはまさに対蹠的に、剰余価値創出の場を流過程から直接的生産過程に移したところにある(MW I-II:青木1-51)・しかしながらわれわれはその反面に、彼らが当時の素朴な重農論者のように、いたずらに貨幣を賤視し、富の財物観にとらわれ、したがって重商主義以前に逆行したりすることなく、再生産過程を流過程との相即においてとらえた識見の高さを十分評価しなくてはならない。マルクスがフィジオクラートの理論的立場を〈商品資本循環の方式〉として特徴づけた意味を、よく汲みとる必要があると考えるのである(KII第1篇第3章、とくにKII-95:青木5・131:岩波5-155)・ところで彼らが剰余価値創出の場を流過程から直接的生産過程に移し、資本主義的生産の分析に鋸を入れるに当たって、当然労働力の価値とその労働力がつくりだす価値との差異を把握してかからなくてはならなかった。資本主義的生産が発展するための基礎は、まず商品としての労働力が資本ないしは土地所有としての労働諸条件に対立することにあるが、労働力の価値とそれが創出する価値との差異を見極めるためには、さしあたって前者がある一定の大いさとしてとらえられる必要がある。フィジオクラートはこれを必要生活手段の価格としての労賃最低限としてつかんだ。もともと彼らはいまだ価値そのものの本性を認識することがなく、価値一般の分析に入りこみえなかったため、この差異はひきょう労働者が年々消費する使用価値の総額を超えて生産する使用価値の超過分としてとらえられざるをえず、したがってすべての生産部門のうち、そのいささが判然とあらわれる農業のみが生産的と考えられたわけである(MWI-11-12:青木1-50-53)・そのばあい彼らにとっては、剰余価値を生む農業労働の生産性が自然の生産力、自然のたまものとしてあらわれるが、農業労働から分離してそれに対立する労働諸条件としての土地所有が、おのずから自然のたまものとしての剰余価値を地代として取得する権能を認められる。フィジオクラートにあっては、封建制――土地所有の支配――がブルジョアの生産の見地のもとで再生産され、封建制がブルジョア化されることによってブルジョア社会が封建的仮象をうけるといわれるのは、こうした構想の性格によるのである(MWI-16:青木1-57-58)・たしかにフィジオクラートの体系は、資本主義的生産の最初の体系的把握である。産業資本の代表者たる借地農業者の階級が全経済運動を指導する。農耕は資本主義的に経営される(KII-36I;青木7-468;岩波7-21)・しかしながらこのばあいの資本主義的生産は、正しくは封建制からの脱出期におけるブルジョア社会に照応するものであることに注意しなくてはならない。したがってこの点にフィジオクラートの思想の性格の複雑さ、あいまいさがあらわれるのは当然といえる。しかし彼らの一人一人の思想のニュアンスは、けっして一様でない。たとえば封建的仮象はミラボーにおいてももっとも著しいが、テュルゴにおいてはこうした仮象がほとんど消滅し、思想の明瞭な近代化を認めることができる(MWI-16:青木1-58)・ところで、かような性格の複雑さは、一方において土地所有者が外見上は賛美されるが、そのことが反面においてその経済的否認に、そして資本主義的生産の確認につながる点に端的にあらわれる。すなわち単一税政策の主張は、すべての租税が唯一の剰余価値たる地代に転嫁さるべしというのであり、したがって土地所有を部分的に没収しようとするのであるが、これこそはフランス革命立法が遂行しようとした当の政策である。かようにして借地農業者をはじめ商工業者は、租税の負担から解放されることになるが、そればかりでなく彼らはいっさいの国家的干渉や特権の付与からも自由にされなくてはならない。この自由放任政策は、その動機において良価(bon prix)すなわち十分に生産費を償う価格の確立を目指すものである点に注意を要するが、いずれにしる単一税政策も自由放任政策も、そのことごとくが表向きは土地所有の利益のために行なわれるといういさつに、思想の過渡的性絡をはっきりと読みとることができるのである(MWI-18-19;青木1-61-62)。(原典)KII第1篇第3章;第

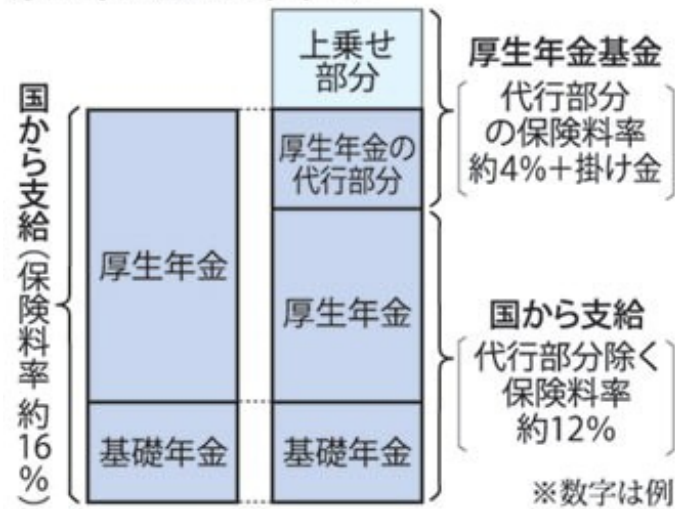
『資本論』を読んでみませんか

2000億円もの企業年金の資金が煙のように消滅してしまった！

A I J投資顧問会社が、建設業や電気工事業など中小企業の厚生年金基金から預かった資金の運用に失敗して、ほぼ3年の間にそのほとんどを失ってしまったというのである。しかもA I Jは、そうした実態を隠し、高利回りの運用実績を上げているかに偽って、顧客を拡大して、その新たに獲得した資金を、それまでの顧客に利回りとして配分するという、自転車操業を繰り返して、損失をますます拡大していった実態が明らかになっている。

それにしても、2000億円というのは、途方もない金額である。この消失した企業年金というのは、三階建てといわれる日本の年金制度のうち三階部分の企業が独自に上乘せする部分で、労働者や企業の資金を元手に、機関投資家に運用を委託しているものである。従来は信託銀行や生命保険に運用は限定されていたが、金融自由化のなかで97年に規制緩和された結果、有象無象の投資顧問会社が参入し、企業年金の残高約73兆円（11年3月末）のうち約3割がこうした投資顧問会社に運用を委託しているのだという。しかもこうした投資顧問会社への政府の規制や監査はほとんどなされず、野放しの状態だったというから、今回のA I Jの問題は、あるいは“氷山の一角”かも知れないのである。

厚生年金基金の仕組み



企業年金加入者数の推移



A I Jは旧社会保険庁（現日本年金機構）OBらと結託して、3種類の投資信託を年金資産の運用者（ここにも旧社保庁OBが天下りしている）らに販売していたらしいが、そのすべては、金融派生商品や米国やドイツの国債や未公開株などさまざまなものを組み合わせたものらしく、すべて投機的な資産運用を行うものである。これらは儲けが大きい代わりに、損失額も桁違いに大きいものである。にも関わらず、A I Jはリーマンショック以後も7.45%の高利回りを謳い、おまけに浅川社長ら幹部は、「偽の運用成績」に基づいて、20%もの成功報酬を受け取っていたというのである（浅川社長だけで毎年8億円近く報酬！）。これはもう金融詐欺以外の何ものでもないであろう。

この消失した2000億円はもはや取り返しは不可能である。詐欺師たちを罰することはできても、彼らにそんな莫大な損失を返済する能力があるはずもない。では誰がそのツケを払うのか、結局は弱いものが犠牲を強いられるのが目に見えている。

いわゆるマネーゲームといわれる、金融の世界は、いわば架空の資本価値を取り引きする世界であり、だからこそ、それらは信用によって一気に膨れ上がるかと思えば、一遍にしぼんでしまう世界でもあるのである。

マルクスは、「利子生み資本一般がすべての狂った形態の母」だと述べ、株式や債権などが、

「ただの詐欺を表しているということも、けっして排除されているわけではない」とも指摘している。今回のA I Jの販売した投資信託はまさにそうしたものだということわけである。

マルクスが解明している「架空資本」の理論は決して易しいものではないが、要するに定期的な貨幣利得が得られるなら、それをもたらす理由如何に関わらず、その貨幣利得をもたらす「利子生み資本」が存在するものと計算され、幻想的な資本価値が形成されるというものである。しかもそれらは、そうした資本価値として売買されて、運動するのである。だからその定期的な利子支払いが滞れば、たちまちその資本価値は蜃気楼のように消失するような性格のものである。だからこそそれらは「架空」な資本価値なのである。リーマンショックをもたらした、サブプライムローンをもとに証券化され、売買されたさまざまな金融派生商品も同様のものである。現代の金融の世界は不可解至極であるが、しかしこうした現象も科学的に解明していくことは可能である。

貴方もぜひ『資本論』を共に学習して、現代資本主義の不可解な謎の解明に挑戦してみませんか。

第44回「『資本論』を読む会」の報告

◎教育労働者への不当な思想弾圧を許すな！

大阪府教育委員会は、9日、卒業式での君が代斉唱時に起立しなかったのは、職務命令違反であるとして、17名の教師に対して戒告処分を言い渡したということです。特に一人の教師は勤務日には無かったのに、当日、校門前で保護者と生徒に日の丸・君が代の強制に反対するピラを配布し、そのあと式場に参列して、斉唱時に起立しなかったとして処分されたと新聞は報じています。

教育労働者は、どうして卒業式や入学式において、日の丸・君が代の強制に反対しているのでしょうか。

その理由は、その配布されたピラの内容をみれば分かります。そのピラには、まず「卒業おめでとう」と生徒や保護者に呼びかけながら、次のようにその理由について書かれています。

「私たちがこうした強制や命令に反対する理由は、第二次世界大戦前の学校教育の中で日の丸や君が代が果たしていた役割を思い出すからです。戦前は『お国のために』『天皇陛下のために』といった愛国主義教育が行われ、多くの若者を戦場へ送り出したのです。そして、戦後、こうした経験を反省し、『二度と子供たちを戦場に送らない』『二度と戦争を起こさない』ことを私たちは教職員は誓ったのです」

そして次のようにも述べています。

「民主主義のもとになっている憲法の第12条には『この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない』とあります。つまり憲法で保障されている『表現の自由』や『思想・信条の自由』も、私たちが自分たちの努力で、その権利を主張し、守っていかねばならないのです。だから私たちは、納得できないことに黙っているのは良くないと考えます。」

そして最後に、『戦死せる教え子よ』と題する竹本源元の詩が掲載されています。

逝（い）いて還（かえ）らぬ教え児（こ）よ
わたしの手は血まみれだ一
君をくびったその綱の端（はし）を私も持っていた
しかも人の子の師の名において 嗚呼（ああ）一
「お互いにだまされていた」の言い訳が何でできよう
慚愧（ざんき） 悔恨（かいこん） 懺悔（ざんげ）を重ねても
それがなんの償いにならう
逝（い）った君はもう還（かえ）らない
今ぞわたしは汚濁の手をすすぎ
涙をはらって君の墓標に誓う
「繰り返さぬ絶対に！」

こうした教育労働者は、いわば日本の労働者階級の“良心”ともいうべき存在ではないでしょうか。時の権力が反動化して行くときに、真っ先に攻撃の対象になるのが、教育です。というのは将来の世代を担う子供たちを、まず思想的に改造することが、国民全体を反動的な思想に染め上げていくための端緒になるからです。だからこそ、戦前と同じような反動的な思想統制が、まず教育の場で行われているのです。もしこうした事態を、ただ教育の職場や一部の教師だけの問題だとして放置すれば、やがてはそれは国民全体に広まり、私たちがその危険性に気づいたときは、もはや手遅れということにもなりかねません。

だからこうした教育労働者を孤立させてはなりません。彼らは、全国の労働者全体の“良心”を代表して、声を上げ、起ち上がっているのです。自分の良心を大切に思うなら、労働者はこうした労働者を包み込み、支援し、その闘いを労働全体の闘いにしてゆく必要があるのではないのでしょうか。

◎第20パラグラフ

さて、教育労働者は厳しい闘いを強いられているのですが、だからこそ私たちが彼らの闘いを見守り、支援できるところは支援しながら、一層身を入れて『資本論』の学習をやらなければと考えています。

第44回「『資本論』を読む会」は、第1章第4節の第20～22パラグラフの学習を行い、これでようやく、「第1章 商品」を最後まで終えたこととなります。2008年4月13日に第1回を開催して、実に4年間、44回の学習会を重ねて、ようやく乗り越えることが出来たわけです。あまりにも長い時間をかけすぎではないか、と思われる方もあるかも知れませんが、しかし、この第1章は、マルクス自身がその理解が難しいと認めている部分なのです。しかもこの部分の理解が、『資本論』全3巻の理解にとって決定的に重要でもあるのです。だからそれを十分に理解するためには、決して長くはない時間ではなかったかと考えています。

そういうことで、第20パラグラフから、学習会の報告を行いたいと思います。まず最初は本文を紹介し、各文節ごとに記号を付して、それぞれを平易に書き下しながら、議論の内容を紹介し、吟味して行くことにしましょう。

【20】〈(イ)しかし、先まわりしないために、ここでは商品形態そのものについてのもう一つの例で満足することしよう。(ロ)諸商品がものを言えんとすれば、こう言うであろう。(ハ)われわれの使用価値は人間の関心を引くかもしれない。(ニ)それは物としてのわれわれには属さない。(ホ)そうではなくて、われわれに物的に属しているものは、われわれの価値である。(ヘ)商品物としてのわれわれ自身の付きあいがあることを証明している。(ト)われわれは、ただ交換価値としてのみ自分たちをたがいに関係させあうのだ、と。(フ)では、経済学者が、この商品の心をどのように伝えるかを聞いてみよう。〉

(4)、(5)しかし、先回りを止めて、ここでは商品形態そのものについてのもう一つの例を挙げることにしましょう。諸商品がものを言えるとすれば、こういうでしょう。

この部分は、初版本文では、次のようにもう少し長い説明が付いています。

〈しかし、先走りをしたくないためには、ここでは、商品形態そのものについてのもう一つの例をあげれば充分である。すでに見たように、商品にたいする商品の関係、たとえば脱靴器にたいする長靴の関係にあつては、脱靴器の使用価値、したがって脱靴器の現実の物的な諸属性の有用性は、長靴にとっては全くどうでもよい。長靴商品は、それ自身の価値の現象形態としてのみ、脱靴器に関心をもっている。したがって、諸商品がものを言うことができれば、こう言うであろう。〉（江夏訳68頁）

マルクスはここで長靴と脱靴器という使用価値としては密接に関連しているものを例に挙げて、しかしそれらが商品としてある限り、あるいは商品として関係する限りは、それらの使用価値は問題にはならないのだ、と述べています。つまり長靴にとって、脱靴器の有用性そのものはまったくどうでもよいのだということです。もちろん、長靴を脱ごうする人にとって、脱靴器の有用性はどうでもよいどころか極めて関心のあるものです。上手く長靴が脱げるかどうか、脱靴器の善し悪しを決めるでしょうから。しかし、ここで、マルクスが問題にしているのは、そういうことではなくて、商品としての長靴と商品としての脱靴器との間の関係が問題なのだ、ということです。商品自身が互いに商品として交わる関係、商品が主体となって関係し合う、そういう関係から見ると、商品は自分の関係する他の商品の有用性には何の関心もないのだ、ただ長靴という商品にとっては、自分の価値を表現するものとしての脱靴器に関心を持っているだけで、脱靴器自身もつ有用性そのものには何の関心も持っていない、脱靴器の使用価値は、ただ長靴の価値の表現する材料、すなわち価値の現象形態としてのみ意義があるだけなのだ、ということです。だから、諸商品がものを言うことができるすれば、次のように言うだろう、という形で、マルクスは商品自身に語らせているわけです。商品自身が語るわけですから、これは以前出てきた、「商品語」ということでもあります（「商品語」については、別途検討します）。

(A)、(2)、(8)、(9)、(10) われわれの使用価値は人間の関心を引くかも知れません。しかし、それは物としてのわれわれには属さないのです。そうではなくて、われわれに物的に属しているものは、われわれの価値なのです。商品物としてのわれわれ自身の付き合い（あなたが「交換」と言っているものですが）が、そのことを証明しています。われわれは、ただ交換価値としてのみ自分たちを互いに関係させあうのです、と。

これは商品自身が語っている内容です。使用価値は人間の関心を引くかもしれないが、物としての商品に属しているのは使用価値ではなくて、価値だと述べています。しかしそれにしても、使用価値は〈物としてのわれわれには属さない〉、〈われわれに物的に属しているものは、われわれの価値である〉というのは、一体、どういうことでしょうか。商品は直接には使用価値であると共に価値です。しかし使用価値は労働生産物が商品にならなくても、備わっている属性です。だから労働生産物が商品であるということは、そこに価値があるからだということになります。つまり物としての商品にだけ属しているのは、使用価値ではなくて、価値なのだということです。そしてそれは物が互いに商品として関係し合うその仕方（すなわち人間が「交換」といっている関係）を見れば、それを証明しているとも述べています。というのは、物が互いに商品として関係し合うのは、それらが交換価値として関係し合う限りにおいてのみだからだ、というわけです。

つまり商品という物象的な関係をおよび物は、客観的に互いにこうした関係を取り結んでいるとマルクスは述べているのです。なぜ、マルクスは、こうした商品自身が主体的に互いの関係を取り結ぶというようなものとして問題を論じているのでしょうか。商品はそれらが交換価値として関係するのは、当然、人間がそれらを交換するから、そうした関係を結ぶことは明らかなのに、あたかも商品自身が自分で互いの関係を取り結び、そうしたなかで商品自身が自分たちのそうした関係を語るというような説明をしているわけです。どうしてマルクスは、こうした説明をしているのでしょうか。

それは商品の交換関係が、一つの客観的な法則として人間を外的に拘束するものとして現れているからです。商品生産者は、自分が売ろうとする商品の市況に一喜一憂して、何時、自分の商品売るべきかタイミングを考えています。つまり商品同士の交換関係は、あたかも人間自身の意識や行動とは独立した過程、客観的な物象的な関係として存在し、それによって、人間は拘束され、それに引き回されるような転倒した関係が生じているのです。

だからこそ、マルクスはあたかも商品自身が主体的に自分たちで互いの関係を取り結ぶような自立したものであり、またそうした自分たちの関係を自分自身の言葉で語るようなものとして説明しているのです。こうした物象的な関係というのは、それ自身、人間の労働の社会的な関係を反映したものであるにも関わらず、それが人間の意識や意志からは直接には独立したものであるとして立ち現れてきて、人間を支配し、拘束し、引き回すような転倒した関係にあることを、マルクスはこうした商品自身の主体的な行動や関係、言葉や話として説明しているのだと思います。

(f) では、経済学者たちが、この商品の心をどのように伝えているのかを聞いてみることにしましょう。

●商品語について

ここでは〈諸商品がものを言えるとすれば、こう言うであろう〉という形で商品の語りを取り上げられています。私たちは「第3節 価値形態または交換価値」、「A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」、「2 相対的価値形態」、「a 相対的価値形態の内実」の第10パラグラフで、〈上述のように、商品価値の分析がさきにわれわれに語りたいこと、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ちあける〉というように書かれていたことを思い出します。ここで出てくる「商品語」というのは、何なのか、ということについては、第18回の報告のなかで、次のように説明しました。

【それはある商品と別のある商品が互いに関連し合うときに、特定の商品の立場から両商品の反省関係を一方の商品自身の〈語り〉として述べているものと考えられるように思えます。つまりこの場合、リンネルは上着を自身に対する等置関係に置き、自分から二商品の反省関係を展開しているわけです。それが〈商品語〉です。上着が自分と等しいものと置かれ、通用する限りは、二つは同質であり、だから上着は価値でなければならない、そうであるなら、上着という姿そのものは、リンネルと同じ労働から成り立っている。つまり人間労働一般から成り立っている。これがリンネルが上着に対して一方的に述べていることだ、とマルクスはいうわけです。このような反省関係というのは、例えば初版本文の次のような一文を読めばよく分かります。

〈リンネルは、他の商品を自分に価値として等置することによって、自分を価値としての自分自身に関係させる。リン

ネルは、自分を価値としての自分自身に関係させることによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から区別する。〉（国民文庫版45頁、訳文を若干変えています）。

マルクスのいう〈商品語〉は、こうした商品自身が交わす反省関係を、一商品の〈語り〉として述べているものと考えることができます。】

またこうした〈商品語〉という形での説明の意義について、次のように解説しています。

【われわれが第1節で諸商品の交換関係から商品の価値を分析し抽象したのは、われわれの思惟による理論的営為であり、われわれの意志的な行為でした。そしてその分析の結果は、われわれの分析そのものからわれわれに語られた（明らかになった）のでした。しかしそうしたいっさいのことは、実際には、われわれが意識的に分析して認識する以前に、商品自身が他の商品との交わりのなかで客観的に商品自身が語っている内容なのだ、というのがマルクスが言いたいことなのです。つまりそうした反省規定は、何かわれわれが外的に商品の交換関係を分析して、われわれの頭脳を使ってやっていることだけではなくて、商品自身が他の商品との関係のなかで社会的に行なっている客観的な過程なのだということです。だからそれらは商品という物象と物象との社会的関係そのものにある客観的な過程なのであり、それはわれわれの認識から独立した過程であって、むしろわれわれの意識や行為はそうした物象的關係に規制され拘束されるという転倒した関係こそがそこにはあるのだ、というのがマルクスがこの〈商品語〉として語っている内容ではないだろうかと思えます。つまりこのパラグラフの内容は、第4節で問題になる物象化の内容を先取りしてその示唆を、あるいはその基礎を与えたものと言えるでしょう。】

こうした物象的な関係を取り上げているのは、だからこの第4節「商品の物神的性格とその秘密」なので、ここでも商品自身の語りが出てきたのは、その意味では当然だと言えるかもしれません。

◎第21パラグラフ

【21】〈(f)「価値」（交換価値）「は物の属性であり、富」（使用価値）「は人間の属性である。(g)価値は、この意味では、必然的に交換を含んでいるが、富はそうではない(34)。(h)「富」（使用価値）「は人間の属性であり、価値は商品の属性である。(i)人間や社会は富んでいる。(j)真珠やダイヤモンドには価値がある。…(k)真珠やダイヤモンドは、真珠やダイヤモンドとして価値をもつ(35)」。〉

このパラグラフは引用だけです、平易な書き下しは不要と考えます。よって若干の解説を試みることにしましょう。

(f)、(g) これは匿名の論争書、『経済学におけるある種の用語論争の考察。とくに価値および需要供給に関して』からの引用です。マルクスは『剰余価値学説史』では、この著書を重視し、かなりのスペースを割いて、何度か取り上げています。「種々の論争書」と題された部分のリードは次のようなものです。

〈1820年から1830年までの時期は、イギリスの国民経済学の歴史において形而上学的に最も重要な時期である。リカードの理論にたいする賛否の理論上の試合が行なわれ、一連の匿名の論争書が出版された。ここで言及するのは、そのうちの最も重要なもので、特にただ、われわれの論題に属する点に触れているものだけである。だが同時に、これらの論争書の特徴づけているのは、それらのすべてが実際には単に価値概念の規定とそれの資本との関係を中心問題にしているだけだ、ということである。〉（全集26巻III・138頁）

そして〈この著書には、いくらか鋭さが無いこともない。『用語論争』という表題は特徴的である〉と述べています。

さて、この引用文は、要するに当時の経済学者は先のパラグラフで見たような、商品のいうがままに、そのまま問題を取り扱っているということでしょう。『学説史』では、まったく同じ部分を引用して、かなり長い批判を試みていますので、それを紹介しておきましょう。

〈例のりこうぶっている男が（『用語論争』の著者のこと一引用者）どんなに深い呪物崇拝にはまりこんでいるか、また、彼がどのようにして相対的なものある積極的なものに転化させているか、ということは、次のような文章が最も明瞭にそれを示している。

「価値は物の属性であり、富は人間の属性である。価値は、この意味では、必然的に交換を含んでいるが、富はそうではない。」（同前、一六ページ。）

ここでは富とは使用価値のことである。使用価値は、もちろん、人間に関して富なのであるが、しかし、それ自身の属性、それ自身の特性によってこそ、物は、使用価値なのであり、したがってまた人間にとつての富の一要素なのである。仮りにぶどうから、それをぶどうにさせている属性を取り去れば、それが人間にとってぶどうとして持っている使用価値はなくなり、また、それはぶどうとして富の一要素であることもなくなる。使用価値と同じものとしての富は物の属性であり、この属性は人間によって利用され、また人間の欲望との関係を表わすものである。ところが「価値」は「物の属性」だと言っているのである！

価値としては諸商品は社会的な大きさであり、したがって、「物」としてのその「属性」とは絶対に区別されたものである。諸商品は、価値としては、ただ人間の生産的活動における彼らの関係だけを表わす。価値は事実上「交換」を含んでいるが、しかし交換とは、人々のあいだでの物の交換であり、物それ自体には絶対になんの関係もない交換である。物は、Aの手にあるとBの手にあると、同じ「属性」を保持する。「価値」の概念は事実上生産物の「交換」を想定している。労働が共同である場合には、人間の社会的生産における彼らの関係は「物」の「価値」としては表わされない。諸商品としての諸生産物の交換は、労働を交換し、各人の労働が他人の労働によって定まる一定の方法、社会的な労働または社会的な生産の一定の様式である。

私は、私の著書の第一冊で、私的交換にもとづく労働を特徴づけているのは、労働の社会的な性格が物の「属性」として一転倒して一「表わされ」、また、社会的な関係が物(生産物、使用価値、商品)のあいだの関係として現象することだ、ということを書いておいた。例の呪物崇拝の使徒は、この外観を、ある現実的なものと解し、そして実際に次のように信じている、すなわち、物の交換価値は、物としてのその属性によって規定され、一般にその物の自然的属性である、と。これまでに自然科学者で、嗅ぎたばこ絵画とがどんな自然的属性によって一定の割合で相互に「等価物」であるのか、を発見した者はいない。こうして彼は、この知ったかぶりをする男は、価値を、ある絶対的なものに、「物の属性」に、転化させているのであって、彼は価値のなかにただ相対的なものだけを、すなわち、社会的労働つまり私的交換にもとづく社会的労働にたいする物の関係だけを、見ているわけではない。このような社会的労働においては、物は独立したものとしてではなく、社会的生産の単なる表現として規定されているのである。

だが、「価値」が、絶対的なものではなく、一つの実在物としては把握されないということは、諸商品が、自分たちの

交換価値に、一つの独立な、自分たちの使用価値または現実の生産物としての自分たちの定在とは違った、それとはか
かりなく存在する一つの独立な表現を与えなければならないということ、言い換えれば、商品流通が貨幣形成にまで
進行しなければならないということ、とはまったく別なことである。諸商品は、自分たちの交換価値に、このような貨
幣での、まず第一に価格での、表現を与えるのであって、この価格では諸商品はすべて同じ労働の物質化として表わされ
、同じ実体のただ量的にだけ違った表現として表わされる。商品の交換価値の貨幣での独立化は、それ自身、交換過
程の、商品に含まれている使用価値と交換価値との矛盾の発展の、また、それに劣らずその商品に含まれている次のよ
うな矛盾の発展の、所産である。その矛盾とは、私的個人の一定の特殊な労働が、その反対物、すなわち同等な、必要な、
一般的な、そしてこの形態では社会的な労働として表わされなければならない、というのがそれである。商品の貨幣と
しての表示のなかには、ただ、諸商品の価値量の相違が、排他的な一商品の使用価値での自分たちの価値の表示によっ
て計られる、ということが含まれているだけではない。同時に、次のことが含まれている、すなわち、諸商品はすべて一
つの形態で表わされ、この形態では諸商品は社会的な労働の具体化として存在し、したがってまた他のどの商品とも交換可
能であり、任意にどの任意な使用価値にも置き換えることが可能である、ということがそれである。それだから、諸商品
の貨幣としての一価格での一表示が最初にただ観念的にだけ現われるのであり、この表示は、諸商品の現実の販売
によってはじめて実現するのである。リカードの場合の欠点は、彼がただ価値の大きさだけに注意を奪われているとい
うことである。だから彼の注意が向けられているのは、ただ、相対的な労働量だけであり、これは、いろいろな商品が表わ
すもので、価値として具体化されてそれ自身のうちに含まれているものである。だが、諸商品に含まれている労働は、社
会的な労働として、譲渡される個人的労働として、表わされなければならない。価格では、この表示は観念的である。販
売によってはじめてその表示は実現される。諸商品に含まれている私的な諸個人の労働の、同等な社会的労働への、し
たがって、すべての使用価値での表示可能な、すべての使用価値と交換可能な、労働としてのそれへの、このような転化
、すなわち、交換価値の貨幣としての表示のなかに含まれている事柄のこのような質的な側面は、リカードでは説明され
ていない。このような事情を一諸商品に含まれている労働を同等な社会的労働として、すなわち貨幣として、表わす必
然性を一リカードは見落としているのである。〉（同166-8頁）

(A)、(C)、(E)、(F) これはベリーの著書からの引用です。マルクスはベリーは先の匿名の論争書『考察』から剽窃し
ていると批判しています。『学史』には同じ部分を引用したものがああります。それも紹介しておきましょう。

〈それはまったく『用語論争の考察』から盗用されたものであって、事実上このばかげたこと全体の秘密は、次のよ
うな文句のなかで徐々に漏れており、その文句は、また、ベリーが自分では注意深く隠している『用語論争の考察』を剽
窃者として利用したことをも、私に確信させるものである。〉

「富は人間の属性であり、価値は商品の属性である。人間または社会は富んでいるのであって、真珠またはダイヤモンド
は価値があるのである。」(同前、一六五ページ。〔鈴木訳、一五一ページ。〕)

真珠またはダイヤモンドが貴重であるのは、真珠またはダイヤモンドとしてであり、すなわち、それらの性質によっ
てであり、人間にとっての使用価値として、すなわち一富としてである。だが、真珠またはダイヤモンドのなかには、
それらのあいだの交換関係が与えられるようなものはなにも存在しない。〉（同211頁）

◎注34と注35

第21パラグラフには注34と注35が付いていますが、ただ本文で引用した部分の英文がそのまま紹介されているだけで
すので、ここでも、ただそれを紹介するだけにとどめます。

【注34】〈(34) "Value is a property of things, riches of man. Value, in this sense, necessarily implies
exchanges, riches do not." (『経済学におけるある種の用語論争の考察。とくに価値および需要供給に関して』、ロ
ンドン、一八二一年、一六ページ。)〉

【注35】〈(35) "Riches are the attribute of man, value is the attribute of commodities. A man or a community
is rich, a pearl or a diamond is valuable ... A pearl or a diamond is valuable as a pearl or diamond." (S・ベ
リー『価値の性質、尺度、および諸原因に関する批判的論究』、一六五ページ以下〔鈴木訳『リカード価値論の批判』
、日本評論社、一五一ページ〕)〉

◎第22パラグラフ

【22】〈(4) これまでまだどの化学者も、真珠やダイヤモンドの中に交換価値を発見してはいない。(A)ところが、批判
の鋭さを特に自負するこの化学的実体の経済学的発見者たちは、物の使用価値はそれらの物的属性にはかかわりが
ないが、これに対して、それらの価値は物としてのそれらに属するというを見いだすのである。(A)ここで彼らの見解を確
証するのは、物の使用価値は人間にとって交換なしに、したがって物と人間との直接的関係において実現されるが、反対
に物の価値はただ交換においてのみ、すなわち一つの社会的過程においてのみ、実現されるという奇妙な事情である。
(C)ここで、あの善良なドッグベリーを思いださない人があろうか。彼は夜番のシーコウルに教えて語る。(E)「男ぶりの
いいのは運の賜物だが、読み書きは自然に備わるものだ」(36)。〉

(4) これまでどの化学者も、真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見していません。これは当然です。交換価値は
、労働の社会的な性格が反映したものであって、それは自然素材とはまったく異なるものだからです。価値の対象的性格
には一物もの自然素材は含まれていません。

(A)ところが、批判の鋭さを自負しリカードを批判するこれらの経済学者たちは、交換価値という化学的実体を発見し
たかのように、物の使用価値はそれらの物的属性にはかかわりがなく、それらの価値は物としてのそれらに属するとい
うを見いだしているのです。つまり彼らはまったく物神崇拜に取り込まれているわけです。

(A) こうした彼らの見解を確認するのは、物の使用価値は人間にとっては、交換なしに、したがって物と人間との直接
的な関係において実現するという事実です。使用価値は人間との関係のなかでのみ使用価値なのだから、だから使用価値
は物的属性には関わりがないのです。それに反して、物の価値は、ただそれらの交換においてのみ、つまり物の関
係においてのみ、すなわち人間とは関係のない物自身の一つの社会的な過程として実現されている事実です。だからそれ
らは物自身の属性によるものだというわけです。だから彼らは使用価値は人間に関係するもので、物の物的属性には関係
はないが、価値としてはそれらは物そのものの関係によるものであり、よってそれは物そのものの属性なのだ、と考える
わけです。

(C)、(E) しかしこれは、あのシェークスピアの『から騒ぎ』に登場する善良な警察官、ドッグベリーが夜番のシーコー
ルに教えるセリフを思い出させます。すなわち「おとこぶりのいいのは運の賜物だが、読み書きは自然に備わるものだ」

。このように彼は終始、言葉を誤用するのですが、物神崇拜にとりつかれた経済学者たちもまるで同じように語っているわけです。

◎注36

この第22パラグラフには注36も付いています。この注は少し重要ですので、少し解説を加えておきます。

【注36】(36) 『考察』の著者やS・ペイリーは、リカードが交換価値を単に相対的なものから絶対的なものに転化させたと言って、リカードを責めている。逆である。彼は、これらの物、たとえばダイヤモンドや真珠が交換価値としてもっている外観的相対性を、その外観の背後に隠されている真の関係に、人間労働の単なる表現としてのそれらの相対性に、還元したのである。リカード学派のペイリーに対する反論が粗雑であり、適切でなかったとすれば、そのわけは、彼らがリカード自身のうちに、価値と価値形態または交換価値との内的関係について何の解明も見いださなかったからにほかならない。)

この注も文節ごとの平易な書き下しは略しますが、マルクスは『剰余価値学説史』のなかで、同じ問題を論じていますので、それを少し長くなりますが紹介しておくことにしましょう。

〈第二の異論は、リカードが、相対的なものである価値を、絶対的なものに転化させているということであるが、これは、のちに現われた別の論争書(ペーリーのそれ)で、リカードの体系全体にたいする攻撃の要点にされた。〉(26111
・140頁)

〈『考察』の筆者がリカードを非難しているのは、リカードが、価値を、諸商品の相互関係におけるその相対的な属性から絶対的なものに転化させている、ということである。

リカードがこの点で非難されるべきことは、ただ、彼が価値概念の説明にさいしているいろいろな契機を厳密に区別していないということだけである。すなわち、諸商品の交換過程のなかで表わされ現われる商品の交換価値が、物や生産物や使用価値としての商品の定在とは違う価値としての商品の定在から区別されていない、ということである。

『考察』のなかでは次のように言われている。

「大部分の諸商品または一商品を除くすべての商品を生産する労働の絶対量が増加しても、この一商品の価値は変わらないと言うことができるであろうか? [どんな意味でなのか?] というのは、それは、他のすべての商品のより少ない量と交換されるだろうからである。もし実際に、価値の増減ということの意味が、当該商品を生産した労働量の増減のことを主張しているつもりで言われているとすれば、私がいま反対理由にあげた結論は、十分真実でありうるであろう。だが、リカード氏が言っているように、二つの商品を生産する比較的労働量が、これら二つの商品を相互に交換する比率、すなわち各商品の交換価値の原因であると言うことは一一、各商品の交換価値が、他の商品また他の商品の存在とのどんな関係も考慮されずに、その商品を生産した労働量のことを意味すると言うことは、非常に違っている。」(『考察』、一三ページ。)

「リカード氏は、妻われわれに向かってこう言っている、『自分が読者の注意をひきたいと思う研究は、諸商品の相対的価値の変動の効果に関してであって、絶対的価値のそれに関してではない』と。あたかも彼は、そこでは、相対的ではない交換価値のようなある物が存在する、と考えていたかのようである。」(同前、九ノ一〇ページ。)

「リカード氏が価値という言葉の最初の用法から離れて、それを、相対的なものではなく、なにか絶対的なものにしたということは、『価値と富、両方を区別する特性』と題する彼の一章のなかで、もっと明瞭になっている。そこで論じられている問題は、他の人によっても論じられたものだが、純粋に用語上のもので、役にたつたない。」(同前、一五ページ以下。)

われわれはこの男に立ち入る前に、なおリカードのこの点に触れておこう。彼が「価値と富」に関するその章のなかで論じていることは、社会の富は生産された商品の価値によっては定まらない、とはいえ、あとのほうの点はすべての個々の生産者にとって決定的なものである、ということである。そうだとすれば、いっそう彼は、単に剰余価値を目的としている生産形態、すなわち生産者大衆の相対的な貧困を基礎にしている生産形態が、彼の絶えず叙述しているような絶対的な富の生産形態ではありえないことを理解しなければならなかつたはずである。

では、「用語について」りこうぶっている男の『考察』に移ろう。

一商品を除くすべての商品が、以前より多くの労働時間を要するために、その価値が増大するならば、その労働時間に変動を生じなかつた一商品は、他のすべての商品のより少ない量と交換されることになるであろう。この商品の交換価値は、それが他の諸商品に表現されるかぎりでは、減つたのである。すなわち、その交換価値は、他のすべての商品の使用価値で表わせば、減つたのである。「それにもかかわらず、その交換価値は変化していないと言うべきであろうか?」これは、ただ、問題を問題として提起しただけで、肯定的な解答にも否定的な解答にも賛成はしていない。同じ結果は、一商品の生産に必要な労働時間が減って他のすべての商品のそれが変わらない場合にも、生ずるであろう。この一商品の一定量は、他のすべての商品のより少ない量と交換されるであろう。この両方の場合は同じ現象である。とはいへ、直接相対立する原因から生じたのであるが、仮りに反対に、一商品Aの生産に必要な労働時間は変わらないのに、他のすべての商品のそれが減つたとすれば、この商品Aは他のすべての商品のより多くと交換されるであろう。同じことは、Aの生産に必要な労働時間がふえて他のすべての商品のそれが変わらないという反対の原因からも、生ずるであろう。こうして商品Aは、一度は、すべての商品のより少ない量と交換され、しかも、それは二とおりの対立する原因によってである。もう一度は、他のすべての商品のより多くの量と交換され、この場合にも、二とおりの対立する原因によってである。だが、注意すべきことは、商品Aは、どの場合にも、前提によれば、その価値どおりに、したがって等価物と交換される、ということである。それは、どの場合にも、それと交換される他の使用価値の量で自分の価値を実現するのであって、たとえこの使用価値の量がどんなに変動してもそのようなのである。

このことから明らかに次のような結論が出てくる。すなわち、諸商品が使用価値として相互に交換される量的な関係は、なるほど諸商品の価値の表現であり、諸商品の表現された価値であるが、しかしその量的関係は、それらの商品の価値そのものではない、というのは同じ価値関係が使用価値のまったく違った量で表わされるからである、ということがそれである。諸商品の価値としての定在は、その商品自身の使用価値――その商品の使用価値としての定在――では表現されない。それは、他の使用価値でのその商品の表現のなかに、すなわち、このような他の使用価値がその商品と交換される関係のなかに、現象する。1オンスの金と1トンの鉄とが等しくて、それゆえ金の少量が鉄の多量と交換されるとすれば、そのために、鉄で表現される1オンスの金の価値のほうが金で表現される鉄の価値よりも大きいであろうか? 諸商品がそれらに含まれている労働に比例して交換されるということは、諸商品が、同じ労働量を表わすかぎりでは、相等しく、同じものである、ということなのである。だから同時にそれは、各商品が、対自的に考察されれば、その商品自身の使用価値、すなわちその商品自身の使用価値としての定在とは区別されたものである、ということの意味している。

同じ商品の価値は、それ自身は変わることもなく、私とその価値をあれやこれやの商品の使用価値で表わすのに応じて、使用価値の無限に違った量で表わされる。このことは、その価値の表示を変えるものではあつても、価値を変えるわけではない。同様に、商品Aの価値がそれで表わされるところの、種々な使用価値の種々な量は、すべて等価物であり、相互に価値としてだけではなく、相等しい大きさの価値として関係し合うのである。だから、これらの非常に違

った量の使用価値が取り替えられる場合でも、価値は変わらないのであって、それは、ちょうど、その価値がまったく違った使用価値での表示を受け取らなかったであろう場合と同じなのである。

諸商品が交換されるのは、それらが等量の労働時間を表わす関係においてだとすれば、対象化された労働時間としての諸商品の定在、つまり具体化された労働時間としての諸商品の定在は、諸商品の単一性、諸商品の同一要素のことである。このようなものとして諸商品は質的に同じであり、ただ、それらが表わす同一物すなわち労働時間の大小に応じて、量的にだけ区別される。諸商品は、この同一なものとしての表示としては価値であり、等量の労働時間を表わすかぎり、等しい大きさの価値、等価値である。諸商品を大きさとして比較するためには、前もって諸商品が、同名の大きさ、質的に同一なものでなければならぬ。

このような単位の表示としてこそ、これらのいろいろな物は価値なのであり、また価値として相互に関係し合うのであって、それによって、それらの価値の大きさの相違、それらの内在的な価値尺度も与えられるのである。また、それだからこそ、一商品の価値は、その価値の等価値としての他の商品の使用価値で表わされ表現されるのである。したがって、個々の商品そのものも、価値としては、このような単位の定在としては、使用価値すなわち物としてのそれ自身とは違っている――他の諸商品での価値の表現をまったく別にすれば、商品は、労働時間の定在としては価値一般であり、量的に規定された労働時間の定在としては、一定の価値の大きさである。

だから、例のりこうぶっている男にとって特徴的なのは、彼が次のように言う場合である。もしわれわれがそのことを考えているつもりであっても、われわれはそのことを考えているわけではない、逆の場合も同じである、と。われわれの「意図」は、われわれが考察している事柄の本質的な性格とはまったくなんの関係もない。われわれがある物の交換価値について語るとすれば、まず第一に考えることは、もちろん、最初の商品と交換される他のそれぞれの商品の相対的な量である。だが、さらに進んで考察すれば、次のことがわかるであろう。すなわち、ある物が、それとまったくなんの共通点も持っていない――たとえそれらの物のあいだに自然的な、またはその他の類似点があるとしても、それは交換にあたっては考慮されない――無限量の他の物と交換される割合にとって、それが固定した割合であるためには、それらのすべて異質で多様な物が、同じ共通な単位、それらの物の自然的な存在や現象とはまったく違った一要素の、比例配分的表現と考えられなければならない、ということである。そうだとすれば、さらに進んで次のことがわかるであろう。すなわち、もしわれわれの意図がなにか意味をもつとすれば、一商品の価値とは、その商品がそれによって他の商品と区別され、それと関係させられるなにかあるものであるというだけでなく、その商品を一物つまり使用価値としてのそれ自身の存在から区別する一つの性質でもある、ということである。〉（同161-165頁）

〔だが〕次のように言うのはまったくまちがいである、すなわち、それによって商品の価値は相対的なものか絶対的なものに転化される、と。逆である。使用価値としては商品はある独立なものとして現われる。これに反して、価値としては、単に定立されたものとして、つまり単に、社会的に必要で、同等な、単純な労働時間にたいするその商品の割合によって規定されているものとして、現われるだけである。このようにまったく相対的なものであるから、再生産に必要な労働時間が変わるならば、たとえその商品に現実に含まれている労働時間は変わらないとしても、その商品の価値は変化するのである。〉（同165-6頁）

◎初版本文のいわゆる「移行規定」

学習会では第1章の最後に、初版本文では、いわゆる「移行規定」があることが紹介されました。その内容は、第1章と次の第2章との関連を知る上で役立つと思いますので、ここに紹介しておきましょう。

【初版にある移行規定】

〈商品は、使用価値と交換価値との、したがって二つの対立物の、直接的な統一である。だから、商品は直接的な矛盾である。この矛盾は、商品が、これまでのように、分析的に、あるときは使用価値の観点のもとで、あるときは交換価値の観点のもとで、観察されるのではなくて、一つの全体として、現実には、他の諸商品に関係させられるやいなや、発展せざるをえなくなる。諸商品の相互の現実の関係は、諸商品の交換過程なのである。〉（江夏訳69頁）

学者のなかには、このいわゆる「移行規定」が第二版では消えているのはどうしてか、などと色々論じている人もいますが、しかし、われわれにとっては要らざる詮索と思いますので、ここでは立ち入らないことにします。

最後に、以前、第32回の報告で紹介した第1章と第2章(さらに第3章)との関連について論じたものをもう一度、紹介して(但し不要な部分は省略して)、第1章の締めくくりとします。

【「第1篇 商品と貨幣」は「第1章 商品」と「第2章 交換過程」、「第3章 貨幣または商品流通」からなっています。この構成をみれば、第1章では商品とは何かが解明され、第3章では貨幣の諸機能と商品流通における諸法則が解明されることが明らかになり、第2章は、第1章と第3章を媒介する章であることが分かります。・・・

そして第2章が第1章と第3章を媒介する章であるとの位置づけが分かれば、それが短いのに一つの章として第1章と第3章と対等の位置に置かれているという理由も分かります。それは例えば第2篇には、一つの章しかなく、しかも分量としては短いものであるのに、第1篇や第3篇と対等の位置にどうして位置づけられているのかという理由と同じ理由なのです。第2篇の表題は「貨幣の資本への転化」ですが、これはまさに第1篇と第3篇を媒介する篇であることをその表題そのものが示しているといえるでしょう。だから同じような位置づけで考えるなら、「第2章 交換過程」は、内容からいえば、いわば「商品の貨幣への転化」とでも言えるような位置にあると考えられるわけです。・・・

では第3節 「価値形態または交換価値」は第1章でどういう位置と役割を持っているのでしょうか。

第1章の表題は「商品」です。つまり商品とは何かを明らかにすることが課題になっています。しかし第1章の冒頭パラグラフでは、マルクスは「第1部 資本の生産過程」が「第1篇 商品と貨幣」の考察から始まり、さらにそれは「第1章 商品」の考察から始めなければならない理由を述べています。

そして第1節「商品の二つの要因――使用価値と価値(価値の実体、価値の大きさ)」において、商品をそのありのままの姿で観察して、それがまず使用価値として存在すること、しかしそれが商品である限りは、同時に交換価値でもあることを指摘して、交換価値の考察に移り、交換価値をさしあたりは一つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係としてとらえます。つまり諸商品の交換関係という現象から考察を始めているのです。そしてマルクスはそこからその交換関係に内在する商品の価値を抽出し、価値の概念を与え、さらに使用価値と価値という二重物である商品に表される労働の二重性の考察まで深めたあと(第2節「商品に表される労働の二重性」)、もう一度、商品の交換価値という現象形態に戻ってくるのです。それがすなわち第3節「価値形態または交換価値」でした。第1節で価値の概念を明らかにしたところでも、次のように述べていました。

〈研究の進行は、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値にわれわれをつれ戻すであろうが、やはり、価値は、さしあたり、この形態から独立に考察されなければならない。〉（全集版53頁）

だから第3節はわれわれが第1章の冒頭で商品をそのまま観察した現象の背後にある本質的なもの（価値）を取り出して考察したあとで、その現象形態（交換価値）に再び帰ったものなのです。つまり現象の背後にある本質的な関係を考察したあと、再びその本質から最初の現象形態を展開して説明するのが第3節の課題であると言えるでしょう。つまり価値の概念からその現象形態（価値形態）を展開して説明することです。

第3節の課題については、その冒頭の前文ともいうべきところで、次のように述べています。

〈商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である。けれども、商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにはかならない。だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである。〉（全集版64頁）

このようにマルクスはまず〈商品は、使用価値または商品体の形態で、鉄、リンネル、小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありふれた現物形態である〉と商品のもっとも最初の現象に帰っています。つまり商品がわれわれの目に写るありふれた姿をそれ自体としてとらえているわけです。これは第1節の冒頭で商品をまず使用価値としてとらえていたのと同じです。そして同時に〈商品が商品であるのは、それが二重のものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからにはかならない〉と指摘するのです。〈だから、商品は、現物形態と価値形態という二重形態をもつ限りでのみ、商品として現れ、言いかえれば、商品という形態をとるのである〉というのが大変重要なのです。つまりわれわれが商品を見て、これは商品だと分かるのは、商品が現物形態（これは鉄、リンネル、小麦という物的姿そのものです）と同時に価値形態という二重形態を持たねばならないと述べています。「価値形態」というのは、価値が形あるものとして目に見えるものとして現われているということです。だから商品が商品という形態、つまりその姿そのもので商品であることが分かるようなものになるためには、その物的形態だけではなく、商品に内在する価値も、何らかの形あるものとして直接的なものとして現われていなければならないのだ、とマルクスは述べているわけです。ではその価値形態というのはどういうものなのか、それが問題です。それについては、マルクスは次のように述べています。

〈だけれども、ほかのことは何も知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な現物形態とはきわめて著しい対照をなす共通の価値形態をもっているということは知っている。すなわち、貨幣形態である。〉（65頁）

つまりわれわれが商品の価値形態として、そのありふれた姿として見えているのは、貨幣形態だとマルクスは述べています。そしてすでに貨幣形態まで学んだわれわれは、マルクスがここで述べている「貨幣形態」というのは「価格形態」であることを知っています。つまり商品はその物的形態と同時に価格形態、すなわち「値札」をつけているというのが、われわれが商品を店頭でみるもっともありふれた姿なのです。だから例えば商品であっても、それにもし値札が付いていないとそれが商品であるのか、すなわち売り物であるのか、それともその商店が自分で使っているものなのかは分かりません。値札がついていて、「ああ、これは商品だな」と分かるわけです。だから値札こそ、商品の価値形態であり、その発展したもの、すなわち貨幣形態なのです。だから第3節の課題は、商品とは何かを解明するために、商品にはどうして値札が付いているのかを説明することなのです。そしてそのためには貨幣形態を説明しなければならず、どうして商品は貨幣形態を持つのかを説明しなければならなかったわけです。だからマルクスは次のように述べているのです。

〈しかし、今ここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、すなわち、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純なもっとも目立たない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えうせる。〉（65頁）

だからこの第3節は確かに貨幣に言及し、貨幣形態の発生を立証しているわけですが、しかし、それはあくまでも商品とは何か（それが第1章の課題です）を明らかにする一環としてそうしているのだということ、商品とは何かを明らかにするために、商品にはどうして値札が付いているのかを説明するためのものだという理解が重要なのです。同じように貨幣の発生を説明しているように見える「第2章 交換過程」が、第1章の商品論を前提にして、商品がその現実の交換過程において、如何にして貨幣へと転化するのかを解明するものであり、それによって第1章と第3章とを媒介するものであるという、その役割や位置づけにおける相違も分かってくるのです。

だから第3節を最後まで考察し終えたわれわれは、すでに商品とは何かによって掴むことができたことになりそうです。しかし、それでは第4節はどういう意義を持っているのでしょうか。

確かに第3節までで商品とは何かは明らかになったのですが、しかしそれだけでは商品の何たるかが十全に解明されたとは言えないのです。というのは商品というのは、歴史的にはどういう性格のものなのかはまだとらえられていないからです。資本主義的生産様式は歴史的な一つの生産様式です。だから資本主義的生産様式とそれに照応する生産諸関係や交易諸関係というものも、やはり歴史的な存在であるわけです。だから資本主義的生産様式を構成するさまざまな諸契機もやはりそれぞれが、やはり歴史的な存在なのです。つまりそれらも歴史的に形成されてきたものであり、それぞれがそれぞれの歴史を持っており、それぞれがそれぞれの生成や発展、消滅の過程を辿っているものなのです。だから商品の何たるかを十全に把握するためには、それを歴史的なものとしてとらえる必要があるわけです。そしてその課題を解決しているのが、すなわち第4節なのです。

そして第1章として「商品」が解明されたあと、諸商品の実際の交換過程のなかから、如何にして貨幣が生まれてくるのかを説明するのが、第2章の課題であり、それを踏まえて貨幣の諸機能や商品流通における諸法則を解明するのが、第3章の課題である、ということができるとは、・・・】

また第33回報告では、第4節の最初のパラグラフの説明として、この部分はこの第4節全体の序論のような役割を果たしているとして、第4節全体の課題を次のように説明しました。それもこの第4節の位置づけを知る上で、参考になると思います。

【商品というのは、われわれが日常目にしており、それ自体は、ありふれたものです。しかしこれまでわれわれは商品を分析し、「商品とは何か」を考察してきたのですが、その過程で明らかになったように、「商品とは何か」を明らかにしようとすると、恐ろしくやっかいな代物であることが分かりました。そのためには、ややこしい形而上学的ともいえる理屈をこねなければならない、わけのわからない神学的な小言と同じようなことを論じなければならなかったわけです。どうして商品とは、こんなわけの分からないものなのでしょうか。これが分からないと、「商品とは何か」と

いうことを十分に解明したとは言えないのではないのでしょうか。

つまりこれまで、われわれは商品にはどうして値札がついているのかを、貨幣の発生を辿ることによって明らかにして、われわれが日常見ている商品のありのままの姿がどうしてそうなっているのかを解明したのです。しかしその解明が、どうしてあのように難しい説明にならざるを得ないのか、どうして商品というのは、そうしたわけの分からない、やっかいな説明を必要とするものなのかが、実はまだ十分解明されているとはいえないわけです。だからそれが説明されて、初めて、われわれは「商品とは何か」について十全に理解したといえるでしょう。それをこれから説明することにしましょう。】

そしてそれもいまや説明されました。それではこれで「第1章 商品」を終えることにしましょう。

.....

【付属資料】

●第20パラグラフに関するもの

《初版本文》

〈しかし、先走りをしてしないためには、ここでは、商品形態そのものについてのもう一つの例をあげれば充分である。すでに見たように、商品にたいする商品の関係、たとえば脱靴器にたいする長靴の関係にあつては、脱靴器の使用価値、したがって脱靴器の現実の物的な諸属性の有用性は、長靴にとっては全くどうでもよい。長靴商品は、それ自身の価値の現象形態としてのみ、脱靴器に関心をもっている。したがって、諸商品がものを言うことができれば、こう言うであろう。――われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。この使用価値は、物としてのわれわれに属しているわけではない。物としてのわれわれに属しているものは、われわれの価値である。商品物としてのわれわれ自身の交わりが、このことを証明している。われわれは交換価値としてのみ互いに関係があつている――と。ところで、経済学者がこの商品の心をどのように伝えているか、聞いてみることにしよう。(初版本文は、ここに改行はなく、次の現行版の最後のパラグラフまで一つのパラグラフとして続いている――引用者)〉(江夏訳68頁)

《フランス語版》

〈.....だが、先走りせずに、商品形態そのものについてもう一つの例で満足することにしよう。もし商品が語ることができたらこう言うだろう。すなわち、われわれの使用価値は確かに人間の関心をひくかもしれないが、物体としてのわれわれにしてみれば、そんなものは全く相手にもしない。われわれに関係があるのは、われわれの価値である。売買という、物としてのわれわれ同士の関係が、このことを証明している。われわれは交換価値としてのみ、お互いに注目しあっているのだ。経済学者が次のように述べるばあい、彼が自分の言葉を商品の魂のものから借りてきたとは、誰も思わないであろう。(フランス語版は、現行版の次のパラグラフから最後までの一文がこのあと一つのパラグラフとして続いている。――引用者)〉(59頁)

●第21パラグラフに関するもの

《初版本文》――(初版では、このパラグラフは前のパラグラフとさらに次の22パラグラフとも、改行なしに、一続きになっているが、ここでは分割して抜粋しておく。)

〈「価値(交換価値)は物の属性であり、富(使用価値)は人間の属性である。価値はこの意味では必然的に交換を含んでいるが、富はそうではない(29)。「富(使用価値)は人間の属性であり、価値は商品の属性である。人間または共同体は富んでいる。真珠またはダイヤモンドは大いに価値がある。.....真珠またはダイヤモンドは、真珠またはダイヤモンドとして価値をもっている(30)。」(江夏訳68頁)

《フランス語版》――(フランス語版では、現行版のこのパラグラフは、前のパラグラフと同じ最後までの一続きのパラグラフになっている。――引用者)

〈.....「価値(交換価値)は物の属性であり、富(使用価値)は人間の属性である。価値はこの意味では必然的に交換を前提とするが、富はそうではない(33)。「富(使用価値)は人間の属性であり、価値は商品の属性である。人間または共同体は富んでおり、真珠またはダイヤモンドは、価値をもち、それぞれそのものとして価値をもっている(34)」。

●注34と注35に関するもの

《初版本文》

〈(29) "Value is a property of things, riches of man. Value, in this sense, necessarily implies exchanges, riches do not." (『経済学におけるある種の用語論争にかんする考察。特に価値および需要供給にかんして。ロンドン、一八二一年』、一六ページ。)) (同69頁)

《フランス語版》

〈(33) "Value is a property of things, riches of man. Value, in this sense, necessarily implies exchanges, riches do not." (『経済学におけるある種の用語論争にかんする考察。特に価値および需要供給に関連して』、ロンドン、一八二一年、一六ページ。)) (59頁)

《初版本文》

〈(30) "Riches are the attribute of man, value is the attribute of commodities. A man or a community is rich, a pearl or a diamond is valuable ... A pearl or a diamond is valuable as a pearl or diamond." (S・ベイリー、前掲書、一六五ペ

ージ。)〉 (同69頁)

《フランス語版》

〈34) "Riches are the attribute of men, value is the attribute of commodities. A man or a community is rich, a pearl or a diamond is valuable ... A pearl or a diamond is valuable as a pearl or diamond." (S・ペイリー『価値の性質、尺度、および原因に関する批判的論文』、一六五ページ)。〉 (59-60頁)

●第22パラグラフに関するもの

《初版本文》―― (同前)

〈真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見した化学者は、これまでにまだ一人もいない。ところが、批判の深刻さをことさら自負するわれわれの著作家たちは、諸物の使用価値はそれらの物的な諸属性にはかわりがないのに、それらの交換価値は物としてのそれらにそなわっている、ということを見だしている。ここで彼らの見解を裏づけているものは、諸物の使用価値は、人間たちにとって、交換ぬきで、つまり物と人間との直接的な関係のなかで、実現されるが、諸物の価値は、逆に、交換のなかでのみ、すなわちある社会的な過程のなかでのみ実現される、という奇妙な事情である。ここでは、あのお人好しのドッグベリが思い出されないだろうか。彼は夜番のシーコールにこう教えている。「男ぶりがよいのは境遇の賜物だが、読み書きできるのは生まれつきだ (31)」と。〉 (江夏訳68-9頁)

《フランス語版》―― (このパラグラフも先に紹介したように、一続きのパラグラフになっている。――引用者)

〈いままでにどんな化学者も、真珠またはダイヤモンドのなかに交換価値を発見しなかった。こういうたぐいの化学的物質を発見または発明して、深遠であることを若干自慢する経済学者は、物の使用価値は、その物の物質的属性にかわりなくその物に属するのに対して、物の価値は物としてその物に属している、ということを見出すのである。経済学者のこうした意見の正しさを確認するものは、物の使用価値は人間にとっては交換なしに、すなわち、物と人間とのあいだの直接的関係のなかで実現されるが、これに反して、物の価値は逆に、交換すなわち社会的関係のなかでのみ実現される、という奇妙な事情である。ここで、お人好しのドッグベリと、ドッグベリが夜番のシーコールに与える次の教訓とを、思い起こさない者があろうか。「男ぶりがよいのは境遇の賜物だが、読み書きができるのは生まれつきだ (35)」〈"To be a well favoured man is the gift of fortune; but to write and read comes by nature."〉 (シェイクスピア)。〉 (江夏他訳59頁)

《初版本文》

〈31)『考察』の著者やS・ペーリは、リカードに、交換価値をたんに相対的なものからなにか絶対的なものに転化したという罪を負わせている。しかし逆である。リカードは、これらの物たとえばダイヤモンドや真珠が交換価値としてもっている外観上の相対性を、外観の背後に隠されている真の関係に、人間労働の単なる表現としてのこれらの物の相対性に、還元したのである。リカード学派の人たちがペーリーにたいして大ざっぱに答えて、的確に答えなかったとすれば、それは、彼らがリカード自身のうちに、価値と交換価値との内的な関連にかんしてなんの解明をも見いださなかったからにほかならない。〉 (同69頁)

《フランス語版》

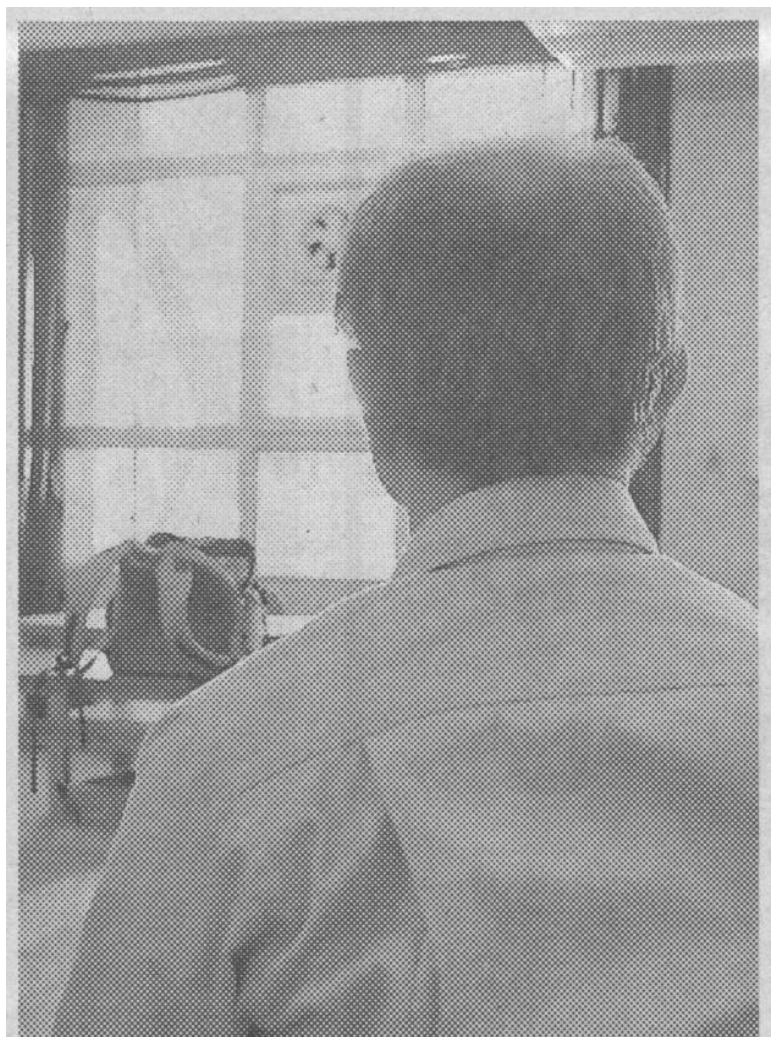
〈35)『考察』の著者やS・ペーリは、リカードが純粋に相対的な物である交換価値を絶対的なあるものにした、と言って彼を非難している。リカードはこれとは全く逆に、たとえば真珠やダイヤモンドのようなこれらの物体が交換価値としてもっている外観的な相対性を、この外観の背後に隠されている真の関係に、すなわち、人間労働の単なる表現としてのこれら物体の相対性に、還元したのである。リカードの信奉者たちはペーリーにたいして、粗雑で少しも説得的でないやり方でしか答えることができなかったが、それは、ただたんに、彼らがリカード自身のうちに、価値と価値形態あるいは交換価値とのあいだに存在する内的関係についてなにか一つ解明してくれるものを、発見しなかったからにすぎない。〉 (60頁)

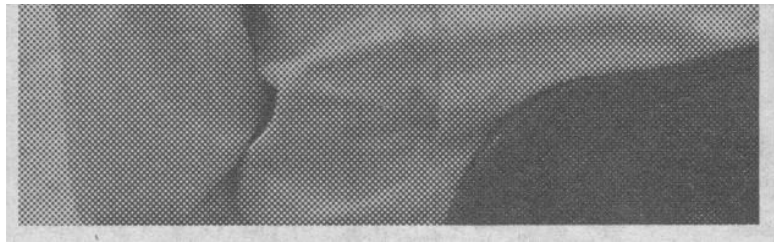
『資本論』を読んでみませんか

前回（第44回）の報告の最初にも紹介した、大阪府教育委員会による、教育労働者への不当な思想弾圧は、とうとう、教育労働者の解雇にまで発展しました。

前回は紹介したのですが、勤務日ではなかったが、卒業式当日、校門前で生徒と保護者に日の丸・君が代の強制に反対するビラを配布し、そのあと式場にも参列して、斉唱時に起立しなかったという教師がその対象者です。今回の不起立者17名全員が訓戒処分を受け、うち8名が再任用の内示が保留されたままであったのが、彼だけがその内示を取り消されたというのです。

この不当な処分を受けた教育労働者について、『朝日新聞』（3月30日）は、かなり詳しい紹介記事を掲載しています。





今回、処分を受けた教諭(3月30日「朝日」から)

まず「不起立は人から職を奪うほどの大きな罪だろうか」と疑問を呈しています。まったく同感です。

府教委は今回の処分の理由として「勤務実績が良好でない」としています。しかし、この新聞記事によれば、この教諭の同僚は、昨春、定年を迎えたこの教諭を生徒たちが胴上げしたのを見たと書いています。そして「あんなに慕われる先生はいない。生徒を尊重し、決して馬鹿にしないから、どんなワルも心を開く」とその同僚の言葉を紹介しています。また職場では処分取り消しと再雇用を求める署名が同僚の間で行われ、8割を超える署名が集まったのだといいます。そればかりかこの教諭は、堺市の伝統産業であるタタラ製鉄を教育実習に取り上げ、その教育実践によって、昨年3月、当の教育委員会から表彰までされているというのです。何が「勤務実績が良好ではない」でしょうか。

この教諭の「勤務実績」のどこをみても、再任用の内示を取り消さなければならない理由はないのです。おまけにこの教諭は卒業式当日は、勤務日ではなく、校長も「休みの人間に職務命令は出せない」と述べているのに、府教委は、「事前の校長からの指示を口頭での職務命令とみなした」と強引に解釈して、職務命令違反として訓戒処分に行っているのです。

しかし府教委が処分の根拠とした地方公務員法第32条は「職員は、その職務を遂行するに当たって」と断っており、だから勤務日ではないものが「職務を遂行する」立場にもないことは当然であり、よって当の教諭に、この法律を適用することそのものがそもそも出来ない話なのです。

こうしたことを考えると、今回の処分は、府教委が、この教諭が校門前で配布したビラの内容まで処分の理由の一つにしていることをみても、明らかに思想的な弾圧であり、統制であると言わざるを得ません。これは、教育労働者全体への思想統制を強めるために、一つの見せしめとして、今回の処分が行われたことを物語っています。

私たちは、こうした教育労働者への攻撃を断じて許すことは出来ません。それはやがては、国民全体に対する思想統制と弾圧が開始される兆しを意味するからです。

マルクスは『共産党宣言』において、「教育を支配階級の影響からひきはなす」べきことを次

のように述べています。

〈社会が教育にはたらきかけるのは、なにも共産主義者が発明したことではない。共産主義者は、ただこのはたらきかけの性格を変えるだけである。ただ教育を支配階級の影響からひきはなすだけである。〉（全集4巻492頁）

教育への不当な思想統制を断じて許さない闘いを！

厳しい闘いを強いられている教育労働者へ支援の手を！

『資本論』を学び、闘いの武器として鍛え上げよう！

第45回「『資本論』を読む会」の報告

◎桜も終わり・・・

あつというまに桜は終わり、今はツツジが満開です。

第45回「『資本論』を読む会」が開催された4月15日には、会場の堺市立南図書館の3階の窓からは、散り急ぐ桜がまだ僅かに残っていました。

しかし5月のゴールデンウィークも終わりました。つまり報告はずいぶんと遅れてしまったわけです。せっかくの連休はどうしたのか？ 言い訳はしません。遊ぶのに忙しく、また雑用もあって、無駄に過ごしてしまった次第です。面目無い。

というわけで、とにかく遅ればせながら、第45回の報告を行わなければなりません。今回から、ようやく第2章に入りました。今回は三つのパラグラフを進んだだけでしたが、この章もなかなか難しく、それも報告が遅れた一因ともいえます。しかし、とにかく、テキストを徹底的に読み込んで、その解説を試みることにしましょう。

◎第1章と較べた第2章の課題

まず第2章にとりかかるにあたって、やはり第2章の課題について、論じる必要があります。つまり第2章では、何が問題になるのか、また何が新しく考察の対象にならなければならないのか、ということです。以前にも一度紹介したことがあります。もう一度、第2章の課題を確認するために、初版のいわゆる「移行規定」と『経済学批判』の「交換過程」の分析が始まる冒頭部分とを、紹介しておきましょう。

〈商品は、使用価値と交換価値との、したがって二つの対立物の、直接的な統一である。だから、商品は直接的な矛盾である。この矛盾は、商品が、これまでのように、分析的に、あるときは使用価値の観点のもとで、あるときは交換価値の観点のもとで、観察されるのではなくて、一つの全体として、現実には、他の諸商品に関係させられるやいなや、発展せざるをえなくなる。諸商品の相互の現実の関係は、諸商品の交換過程なのである。〉（初版、江夏訳69頁）

〈いままで商品は、二重の観点で、使用価値として、また交換価値として、いつでも一面的に考察された。けれども商品は、商品としては直接に使用価値と交換価値との統一である。同時にそれは、他の諸商品にたいする関係でだけ商品である。諸商品相互の現実の関係は、それらの交換過程である。それは互いに独立した個人がはいりこむ社会的過程であるが、しかし彼らは、商品所有者としてだけこれにははいりこむ。彼らのお互いどうしのための相互的定在は、彼らの諸商品の定在であり、こうして彼らは、実際上は交換過程の意識的な担い手としてだけ現われるのである。〉（『批判』全集13巻、26頁）

これらの文章を検討すると、第1章に対する第2章の特徴、あるいはそこでの課題、つまり、そこでは何が解明されなければならないかが明らかになります。

(1) まず第1章では商品は、二重の観点で観察され、ある時は使用価値の観点のもとに、他の時は、交換価値の観点のもとに、分析されたのですが、しかし第2章では、商品は一つの全体として、すなわち使用価値と交換価値との直接的な統一物として考察されるということです。つまり第1章では、その限りでは商品は抽象的に取り上げられたのですが、第2章では、商品はより具体的なものとして取り上げられることが分かります。だから諸商品の相互の現実の関係、つまり諸商品の交換過程が考察の対象になるというわけです。

(2) そしてそうすると、商品はそうした使用価値と交換価値との直接的な統一物としては、直接的な矛盾だとも指摘されています。第1章では商品の二要因である使用価値と交換価値（価値）とは、互いに対立するものとして考察されました。これに対して、第2章では、そうした対立物の直接的な統一として商品は考察されるために、諸商品は直接的な矛盾だということです。矛盾ということは、諸商品が、使用価値として存在する場合、あるいは交換価値として存在する場合、それらは互いに前提し合いながらも、同時に排斥し合う関係にもあるということです。第2章では、現実の諸商品の相互の関係が、こうした直接的な矛盾として分析されることが指摘されています。そしてその矛盾が現実で解決されていく過程こそが、すなわち貨幣の発生過程でもあるというわけです。だから第2章は現実の諸商品の交換過程において、如何にして商品は貨幣へと転化するのかを解明するものでもあるといえるでしょう。

(3) そしてまた商品の現実の関係である交換過程においては、互いに独立した諸個人、すなわち商品所有者が入り込む社会的過程でもと指摘されています。つまり商品は第1章に比べてより具体的に考察されるわけですが、それは使用価値と交換価値との直接的な統一物として考察されるだけでなく、第1章では捨棄されていた、それらの諸商品の所有者が新たに考察の対象に入ってくるということです。

とりあえず、こうしたことを確認して、テキストの解説に取りかかることにします。いつものように、テキストの各文節ごとに(イ)、(ロ)、(ハ)、・・・の記号を打ち、それぞれについて解説していくことにします。

◎第1パラグラフ

【1】 〈(イ)諸商品は、自分で市場におもむくこともできず、自分で自分たちを交換することもできない。(ロ)したがってわれわれは、商品の保護者、すなわち商品所有者たちを探さなければならない。(ハ)商品は物であり、したがって人間に対して無抵抗である。(ニ)もしも商品が言うことを聞かなければ、人間は暴力を用いることができる。(ホ)言いさえれば

、商品を持っていくことができる(37)。(h)これらの物を商品としてたがいに関係させるためには、商品の保護者たちは、自分たちの意志をこれらの物に宿す諸人格としてたがいに関係しあわなければならない。(h)それゆえ、一方は他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらも両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を譲渡することによって他人の商品を自分のものにする。(f)だから、彼らはたがいに相手を私的所有者として認めあわなければならない。(j)契約をその形式とするこの法的関係は、法的に発展していてもなくても経済的關係がそこに反映する意志関係である。(k)この法的関係または意志関係の内容は、経済的關係そのものによって与えられている(38)。(l)諸人格は、ここではただ、たがいに商品の代表者としてのみ、したがってまた商品所有者としてのみ、存在する。(7)われわれは、展開が進むにつれて、諸人格の経済的扮装はただ経済的諸関係の人格化にほかならず、諸人格はこの経済的諸関係の担い手としてたがいに相対するということを、総じて見いだすであろう。)

(i)、(m) 諸商品は、物であり、自分で市場に行くわけでもなく、自分で自分たちを交換することも出来るわけではありません。だからわれわれは、商品を市場に持って行く人、つまり商品の所有者を問題にする必要があるわけです。

第1章では諸商品の交換は前提されていました。つまり現実に交換されている諸商品の、商品そのものに注目し、それらの交換関係だけを純粹に取り出し、分析したのです。だから第1章では、あたかも諸商品は主体的に互いに関係合うものとして取り扱われ、だから商品所有者は捨象されて登場しませんでした。しかし第2章からは、第1章では捨象されていた、商品の所有者が登場します。第2章では、使用価値と交換価値の統一物としての商品が主体となります。そうしたものとして、他の諸商品との現実の関係、すなわち交換過程が問題になるわけです。そして現実の交換過程では、現実の商品の運動が問題になるわけですが、その運動を商品の意を体して担うのが、商品の保護者である商品所有者というわけです。つまり商品を市場に持って行き、その交換を行う商品の保護者であり監督者である、商品所有者が登場しなければならないというわけです。

(n)、(o)、(p) 商品は単なる物ですから、人間に対して無抵抗です。もちろん、商品が言うことを聞かないとなれば、人間は暴力を用いてでも、それを市場に持っていくことが出来るわけです。

ここにはくもしも商品が言うことを聞かなければ、人間は暴力を用いることができる」という一文があります。学習会では、ここでマルクスは何を言いたいのか、ということが問題になりました。これは、注37で〈当時のフランスの一詩人は、ランディ〔パリ近郊の町〕の市場に見られた商品のうちに、服地、靴、なめし革、農具、皮革類などと共に、「みだらな遊び女 *femmes folles de leur corps*」をあげている〉と指摘されているように、マルクスは、商品の一つとして娼婦を想定して、このように述べているのではないかということになりました。つまり例え商品に意志があつて、市場に出て行くことを拒んでも、しかし商品としては例え娼婦や奴隷のように意志を持った人間であっても、彼ら(彼女ら)は単なる「物」として扱われ、無理やり暴力を持ってでも、市場に引っ張りだされて売りに出されるというわけです。

(q) これらの物を商品としてたがいに関係させるためには、商品の保護者たちは、自分の意志をこれらの商品に宿す諸人格として互いに関係し合わなければなりません。

ここで学習会では、「諸人格 (Person)」という用語が出てきますが(全集版では単に「人」と訳されています)、これは(n)や(o)に出てくる「人間 (Mensch)」とどのように区別されるのか、ということが問題になりました。第1版序文には、次のような一文があります。

〈起こるかもしれない誤解を避けるために一言しておこう。私は決して、資本家や土地所有者の姿態をバラ色には描いていない。そしてここで諸人格 (Person)が問題になるのは、ただ彼らが経済的諸カテゴリーの人格化(Personifikation)であり、特定の階級諸関係や階級利害の担い手である限りにおいてである。経済的社会構成体の発展を一つの自然史的過程ととらえる私の立場は、他のどの立場にもまして、個人に社会的諸関係の責任を負わせることはできない。個人は主観的には諸関係をどんなに超越しようとも、社会的には依然として諸関係の被造物なのである。〉(10-11頁。頁数は全集版ですが、訳文は新書判から。全集版では「諸人格」ではなく、単なる「人」と訳されています。)

つまり「人格」というのは、経済的な関係を反映し、それを代表している人間のことを意味しているのたいてして、「人間」というのは、この場合は「物」に対峙するものとして述べられていることが分かります。

(h) それゆえに、一方は他方の同意のもとにのみ、つまり両者に共通な一つの意志行為にもとづいて、彼らは自分の商品を譲渡する代わりに、他人の商品を自分のものにします。

(f) だから、彼らは互いに相手を私的所有者として認め合わなければなりません。

ここにはく私的所有者」という言葉が出てきます。「私的所有」とはそもそもどのように理解したら良いのでしょうか。マルクスは『剰余価値学説史』においてく「社会」そのものが—人間は「社会」のなかで生活するのであって、独立独歩の個人として生活するのではないということが—所有の根源なのであり、この所有に立脚する法律と不可避的な奴隷制度との根源なのである〉(26巻1431頁)と述べています。そして『資本論』第1部「第24章 いわゆる本源的蓄積」「第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向」の最初のところで、次のように述べています。

〈社会的・集团的所有の対立物としての私的所有は、労働手段と労働の外的諸条件とが私人に属する場合にのみ存立する。しかし、この私人が労働者であるか非労働者であるかに応じて、私的所有もまた異なる性格をもつ。一見したところ私的所有が示している無限にさまざまな色あいは、ただこの両極端のあいだにあるいろいろな中間状態を反映しているにすぎない。〉(『資本論』23巻b-993頁)

つまり私的所有とは「私人」の所有ということ。人間の「社会」が人間自身の関係として、すなわち彼らの相互の意識的で自覚的な関係として存在するのではなく、彼らから疎外されたものとして、第三者(個人あるいは共同体組織や諸物象)によって代表され、支配されるものとして存在するようになることによって、人間が「公人」と「私人」とに分裂する結果、私的所有は社会的・集团的所有の対立物として生まれてくるということです。だから私的所有は社会が諸階級に分裂し、対立する、階級社会の発生と同時に生まれるものでもあるわけです。

(j) 契約をその形式とするこの法的関係は、法的に発展していても、いなくても経済的關係がそこに反映している意志関係です。

ここで〈契約をその形式とするこの法的関係〉とありますが、〈この〉というのはその前に述べていること、すなわち

〈これらの物を商品としてたがいに関係させるためには、商品の保護者たちは、自分たちの意志をこれらの物に宿す諸人格としてたがいに関係しあわなければならない。それゆえ、一方は他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらも両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を譲渡することによって他人の商品を自分のものにする。だから、彼らはたがいに相手を私的所有者として認めあわなければならない〉という全体を指していると思います。つまり〈一方は他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらも両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を譲渡することによって他人の商品を自分のものにする〉ということの商品所有者は互いに「契約」という形式で法的関係として結び合うということです。これは民法のような法律として明文化されていようが、いまいが、商品所有者の間では、互いに結び合わなければならない関係だということです。あるいはそれが契約書という文書になっていようが、口頭によるものであっても、やはり「契約」なわけです。

因みに民法第555条は「売買」について、〈売買は、当事者の一方がある財産権を相手方に移転することを約し、相手方がこれに対してその代金を支払うことを約することによって、その効力を生ずる〉とし、売買契約が成立する要件としては次のように定めているのだそうです。

〈契約は法律行為であるから、総則の意思表示の規定が適用される。すなわち、効果が発生するには以下の要件を満たす必要がある。

1.成立要件

- 1.申込みと承諾（521条～528条）
- 2.売買契約は諾成契約であるので、意思表示の合致のみで成立する。
- 3.売買契約は不要式契約であるので、書面の作成は必須でない。口頭の合意でも成立する。〉（以上、ウィキペディアから）

(3) この法的関係、あるいは意志関係の内容は、経済的関係そのものによって与えられています。

(4) 諸人格は、ここでは、ただ互いに商品の代表者としてのみ、だから商品所有者としてのみ存在しています。

(7) われわれは、展開が進むにしたがって、諸人格の経済的扮装はただ経済的諸関係の人格化にほかならず、諸人格はこの経済的関係の担い手として互いに相対することを、総じて見いだすでしょう。

つまり「資本家」＝「資本の人格化」というのは、こうしたことを意味しています。例えば次のように説明されています。

〈単純な商品流通――購買のための販売――は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、欲求の充足、のための手段として役立つ。これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、このたえず更新される運動の内部にのみ存在するからである。したがって、資本の運動には際限がない。……この運動の意識的な担い手として、貨幣所有者は資本家になる。彼の人格、またはむしろ彼のポケットは、貨幣の出発点であり帰着点である。あの流通〔G－W－G〕の客観的内容――価値の増殖――は彼の主観的目的である。そして、ただ抽象的富をますます多く取得することが彼の操作の唯一の推進的動機である限り、彼は資本家として、または人格化された――意志と意識とを与えられた――資本として、機能するのである。〉（『資本論』23a198-200頁）

〈資本家としては彼はただ人格化された資本でしかない。彼の魂は資本の魂である。〉（同23a302頁）

◎注37と注38

なおこのパラグラフには注37と注38が付いています。それらも紹介して起きましょう。

【注37】〈(37) その敬けんさで聞こえた一二世紀にも、これらの商品のうちに、しばしば、はなはだか弱いものが見現する。たとえば、当時のフランスの一詩人は、ランディ〔パリ近郊の町〕の市場に見られた商品のうちに、服地、靴、なめし革、農具、皮革類などと共に、「みだらな遊び女 *femmes folles de leur corps*」をあげている。〉

これは特に説明は不要でしょう。ここで〈当時のフランスの一詩人〉というのは、ギヨーの風刺詩『ランディ物語』を指しているのだそうです。

【注38】〈(38) ブルードンは、まず正義、“永遠の正義 *justice eternelle*”という彼の理想を商品生産に照応する法的諸関係からみ取る。ついでに言うておけば、このことによって、商品生産の形態は正義と同じように永遠であるというすべての素町人にとってははなはだ好ましい証明が与えられるというわけである。彼は、今度は反対に、現実の商品生産とこれに照応する現実の法をこの理想に従って改造しようとする。もしも物質代謝の現実的諸法則を研究してこれらの法則に基づいて一定の課題を解決するのではなく、「自然状態 *naturalite*」や「親和力 *affinite*」という「永遠の理念」によって物質代謝を改造しようとする化学者がいたとしたら、この化学者を何と考えたらよいであろうか？ 「高利」は「永遠の正義」や「永遠の公正 *equite eternelle*」や「永遠の相互扶助 *mutualite eternelle*」やその他の「永遠の真理 *verites eternelles*」と矛盾すると言う時、人が「高利」なるものについて知るところは、教父たちが高利は「永遠の恩寵 *grace eternelle*」、「永遠の信仰 *foi eternelle*」、「神の永遠の意志 *volonte eternelle de dieu*」と矛盾すると言う時に彼らが高利について知っていたものよりも、はたしてより多いであろうか？

この注は〈この法的関係または意志関係の内容は、経済的関係そのものによって与えられている(38)。〉という一文に付けられています。つまり法的関係や意志関係の内容というのは、経済的諸関係を反映したものに過ぎないということを理解しない一例としてブルードンの主張が紹介されているわけです。こうしたブルードンの観念的な主張の特徴をより分かりやすく説明したものとして、マルクスのアンネコフへの手紙（1846年12月28日ブリュッセル）があります。そこから少し紹介しておきましょう。

〈歴史の現実の運動を追跡することができないう、ブルードン氏は幻覚をつくりだしている。それは弁証法的幻覚である、と言いはっている。彼は17、18、19世紀のことを述べる必要を感じていない。というのは、彼の歴史は霧ふかい想像の国でおこっており、時間と場所をはるかに超越しているからである。一言でいえば、それはヘーゲルふうの古いがらくたであり歴史ではない。それは一世俗的な歴史――人間の歴史――ではなく、聖なる歴史、すなわち観念の歴史で

ある。彼の見方によると、人間というものは、観念または永遠の理性がそれを利用して展開するための道具であるにすぎない。ブルードン氏のいう進化は、絶対的観念の神秘的な胎内でおこなわれるような進化だと考えられている。この神秘的な言語からヴェールをはぐとしたら、それはブルードン氏が彼の頭のなかで経済的範疇がならんでいる順序をわれわれにしめしているということである。〉（全集第4巻564-5頁、但し訳文は文庫本から、以下同じ）

〈このようにブルードン氏は、主として歴史の知識が欠けているために、人間がその生産諸力を発展させるとともに、つまり生活するとともに、相互のあいだの一定の関係を発展させること、この関係の仕方がこれら生産諸力の変化と増大につれて変化するところを、見なかった。彼は、経済的範疇がこれらの現実の抽象にすぎないこと、これらの関係が存するかぎりではこれらの範疇が真理であるにすぎないことを、見なかった。こうして、彼は、これらの経済的範疇を永遠の法則とみとめ、生産諸力のある一定の発展にだけあてはまる法則である歴史的な法則とみとめないブルジョア経済学者の誤謬におちいった。そこで、政治的＝経済的範疇を、現実の、暫時的な、歴史的な、社会関係から抽象されたものとして観察するかわりに、ブルードン氏は、神秘的に転倒したために、現実の諸関係をこれらの抽象の具象化だとみとめている。これらの抽象そのものは、天地開闢以来、神のふところまでまどろんでいた公式なのである。〉（同上567-8頁）

〈ブルードン氏は、その物質的生産様式に応じて社会関係をつくりあげる人間が、観念や範疇をも、すなわちこれらの社会関係の観念的・抽象的表現をも、つくりだすということは、なおさら理解しなかった。したがって、範疇は、自分が表現する関係とまさに同じように、永遠のものではない。範疇は歴史的・暫時的な産物である。ブルードン氏にとっては、これとは正反対に、抽象、範疇が第一原理である。彼の意見にしたがうと、歴史をつくるのはそれであって、人間ではない。抽象、範疇それ自体、つまり人間およびその物質的行動と切りはなしてとりあげられた範疇は、もちろん不死、不変、不動である。それは、純粋理性の一つの有である。それは、抽象それ自体は抽象的である、というだけのことである。すばらしい同語反復！

このように範疇の形でみられた経済関係は、ブルードン氏にとっては、起源も進歩もない永遠の公式である。

別の言いかたを試みよう。ブルードン氏は、ブルジョアの生活が彼にとって永遠の真理であると直接に主張しているわけではない。彼は、ブルジョアの関係の思想の形で表現する範疇を神化することによって、間接にそう言っている。〉（同上570頁）

◎第2パラグラフ

【2】 〈(1)商品所有者を特に商品から区別するものは、商品にとっては他のどの商品体もただ自分の価値の現象形態としての意味しかもたないという事情である。(1)だから、生まれながらの水平派であり犬儒学派である商品は、他のどの商品とも、たとえそれがマリトルネスよりまづい容姿をしていても、魂だけでなく体までも取り替えようとたえず待ちかまえている。(1)商品所有者は、こうした、商品には欠けている、商品体の具体性に対する感覚を、彼自身の五感およびそれ以上の感覚でもって補う。(2)彼の商品は彼にとっては何らの直接的な使用価値をも持たない。(3)さもなければ、彼はそれを市場に持っていきはしなかっただろう。(4)それがもっているのは他人にとっての使用価値である。(5)彼にとってそれは、直接的には、ただ交換価値の担い手であり、したがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである(39)。(6)だからこそ、この商品は彼は自分を満足させる使用価値をもつ商品と引きかえに譲渡しようとするのである。(7)すべての商品は、その所有者にとっては非使用価値であり、その非所有者にとっては使用価値である。(8)したがって、これらの商品は、全面的に持ち手を交換しなければならない。(9)そして、この持ち手の交換が諸商品の交換なのであって、またそれらの交換が諸商品を価値としてたがいに関係させ、諸商品を価値として実現する。(7)したがって、諸商品は、みづから使用価値として実現しうるまえに、価値として実現しなければならない。〉

(1) 商品の所有者を商品そのものと区別するものは、商品にとっては他のどの商品体（使用価値）もただ自分の価値の現象形態としての意味しかもたないということである。

第1パラグラフで、第1章では商品そのものが分析の対象であったのに対して、第2章では、さらに商品の所有者が分析の対象として加わることが指摘されましたが、では、商品そのものを分析の対象にするのと、より具体的に商品所有者をも分析の対象として加えることで何が問題になるのかが次に問われているわけです。そして、まず、第1章の場合は、商品にとって、他の商品の使用価値は、ただ自分の価値の現象形態、つまり自分の価値を相対的に表す材料という意味しか持たなかったと指摘されています。

(1) だから、生まれながらの水平派であり犬儒学派である商品は、他のどの商品とも、例えそれがマリトルネスよりまづい容姿をしていても、魂だけでなく体までも取り替えようとたえず待ち構えています。

水平派というのは、新日本出版の新書版の注によれば、〈17世紀イギリスのピューリタン革命期にリルバーンたちに指導されて活躍した左翼民主主義的平等主義者たち〉のことであり、犬儒学派というのは〈ディオゲネスたち古代ギリシアの一派で、禁欲的自然主義者。礼儀、慣習を無視した〉との説明があります。またマリトルネスというのは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』に出てくる醜い女中のことだそうです。つまりどちらも相手の風采は気にせずに、誰彼とも無く相手にするということでしょうか。つまり第1章では商品リンネルは商品上着と交換すると前提されていましたが、もちろん、リンネルと交換されるのは、上着に限らず、コーヒーでも鉄でも金でも何でも良かったわけです。とにかく商品であれば任意のものを想定して、われわれは考察することが出来たのです。

(1) 商品所有者は、こうした商品には欠けている、商品の使用価値に対する具体的な感覚を、彼の五感、あるいはそれ以上の感覚で補うことになります。

ところが、商品所有者が分析の対象に加わってくる第2章では、商品所有者の欲望が問題になります。つまり交換の対象になる商品の使用価値は、何でもよいというわけでは無くなるわけです。そうしたことが第2章では、新たに問題になってくることが分かるわけです。

ここで〈彼自身の五感およびそれ以上の感覚〉とありますが、〈五感〉は、視覚・嗅覚・味覚・聴覚・触覚ですが、〈それ以上の感覚〉というのは、内面的な欲望にもとづく感覚ということでしょうか。

(2)、(3)、(4) 彼にとって自分の商品は直接的な使用価値ではありません。つまりそれは彼の欲望の対象ではないのです。なぜなら、もしそれが彼の欲望の対象であれば、彼はそれを市場に持って行く代わりに、自分の欲望を満たすために消費してしまうでしょう。だから、それは商品にはなりません。だからそれが彼の商品であるということは、それは

彼にとっては直接的な使用価値ではないということです。彼の欲望の対象は、彼が交換しようとする他人の持っている商品であり、だから彼の商品の使用価値も、それが商品である限りは、他人にとっての使用価値でなければならないわけです。

すでに第1章「商品」の第1節「商品の二つの要因—使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」において、次のように説明されていました。

〈自分の生産物によって自分自身の欲望を満たす人は、たしかに使用価値を作りだすが、商品を作りだしはしない。商品を生産するためには、彼は、使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値を、社会的な使用価値を、生産しなければならない。〔しかも、ただ単に他人のためというだけではない。中世の農民は、封建領主のために年貢の穀物を生産し、僧侶のために十分の一税の穀物を生産した。しかし、年貢穀物も十分の一税穀物も、それらが他人のために生産されたということによっては、商品にはならなかった。商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他人の手に、交換を通して移譲されなければならない(エンゲルスの追加)。〕〉 (全集版55-6頁)

ただ、ここでは商品所有者の欲望と商品の使用価値との関係が問題になっています。商品所有者にとって彼の商品は何らの直接的な使用価値を持ちません。それは彼の生産物のうち、彼の欲望を満たしたあとに残った余剰物のようのものでなければならないわけです。だからそれは他人にとっての使用価値、つまり社会的な使用価値を持たねばならないのです。社会的な使用価値を持つということは、その商品に支出された労働が、社会的な分業の環をなしているということです。

(f)、(g) 彼にとって、それは直接的には、ただ交換価値の担い手であり、したがって交換手段であるという使用価値を持っているだけです。だからこそ、この商品を自分の欲望を満足させる使用価値をもつ商品と引き換えに譲渡しようとするわけです。

(h)、(i)、(j) すべての商品は、その所有者にとっては非使用価値であり、その非所有者にとって使用価値です。だからこそ、これらの商品は、その持ち手を全面的に交換しなければならないのです。そしてこの持ち手の交換が、すなわち諸商品の交換なのであって、またこれらの交換が諸商品を価値として互いに関係させ、諸商品を価値として実現するのです。

(k) したがって、諸商品は、みずから使用価値として実現しうる前に、価値として実現しなければなりません。

ここでは〈価値として実現する〉、〈使用価値として実現〉という用語が出てきます。ここで〈価値として実現する〉とは、「価値の実現」とは同じではありません。商品の価値の実現とは、貨幣の存在を前提した上で、商品を貨幣に転換すること、つまり商品の販売のことです。だから商品を〈価値として実現する〉とは、商品が他の諸商品と質的に同じものとして関係するということです。つまりそれが抽象的人間労働の対象化されたものとして妥当するということではないかと思えます。また〈使用価値として実現する〉とは、「使用価値の実現」とは違います。「使用価値の実現」とは商品が交換過程から出て、消費過程に入り、その使用価値が消費されることです。しかし〈使用価値として実現する〉というのは、交換過程内の問題であり、だから商品に支出された具体的な有用労働が、社会的な分業の環をなしていることが示されることにほかなりません。つまりそれが社会的な使用価値であることが実証されることです。

さて全体としてのこのパラグラフを理解するのに役立つと思える『経済学批判』の一文を紹介しておきましょう。

〈商品は、使用価値、小麦、リンネル、ダイヤモンド、機械等々であるが、しかし商品としては、同時にまた使用価値でない。もしそれがその所有者にとって使用価値であるならば、すなわち直接に彼自身の欲望を満足させるための手段であるならば、それは商品ではないであろう。彼にとっては、それはむしろ非使用価値であり、すなわち、交換価値のたんなる素材的な担い手、またはたんなる交換手段である。交換価値の能動的な担い手として、使用価値は交換手段となる。その所有者にとっては、商品は交換価値としてだけ使用価値なのである〔*〕。だから、使用価値としては、それはこれから生成しなければならないのである。しかもまずもって他の人々にとっての使用価値としてである。商品はそれ自身の所有者にとっての使用価値ではないのであるから、他の商品の所有者にとっての使用価値である。そうでないとなれば、彼の労働は無用の労働であったし、したがってその成果は商品ではなかったわけである。他方では、商品は所有者自身にとっての使用価値にならなければならない。なぜならば、彼の生活手段は、この商品以外に、他人の諸商品の使用価値として存在しているからである。使用価値として生成するためには、商品は自分が充足の対象であるような特殊の欲望に出会わなければならない。だから諸商品の使用価値は、商品が全面的に位置を転換し、それが交換手段である人の手から、それを使用対象とする人の手に移ることによって、使用価値として生成するのである。諸商品のこのような全面的な外化〔*〕によってはじめて、それにふくまれている労働は有用労働になる。使用価値としての諸商品相互のこのような過程的關係においては、諸商品はなんら新しい経済的形態規定性をうけない。それどころか、商品を商品として特徴づけた形態規定性が消え去る。たとえばパンは、パン屋の手から消費者の手に移っても、パンとしてのその定在を変えない。反対に、それがパン屋の手の中では一つの経済的関係の担い手であり、一つの感覚的でしかも超感覚的なものであったのに、消費者がはじめて、使用価値としての、こうした一定の食料品としてのパンに関係するのである。だから、諸商品が使用価値としてのその生成中にはいりこむ唯一の形態転換は、それがその所有者にとって非使用価値、その非所有者にとって使用価値であった、その形態的定在の揚棄である。諸商品の使用価値としての生成は、その全面的な外化、それが交換過程へはいることを予想しているが、しかし交換のための商品の定在は、交換価値としてのその定在である。したがって、使用価値として自己を実現するには、商品は交換価値として自己を実現しなければならない。

〔*〕 アリストテレス（本章の冒頭に引用した箇所を参照）が交換価値を把握したのは、この規定性においてである。

〔*〕 「外化」の原語はEntäußerung。あるものが自分自身をある状態から自分にとって外的な状態に移すことであり、またあるものを自分の手から外部の者の手へ移すといった意味である。前者の意味では、Entfremdung「疎外」ということばと同義と解してよく、同じ現象を「外化」は過程として把握し、「疎外」は結果の側からみたものといえよう。ここでは諸商品が全面的な位置転換によってそれぞれそれを使用対象とする人の手に移ることをさしている。日常用語では「譲渡」、「移譲」の意味に用いられる。本書で「外化」とある場合も、以上の意味がふくまれている。〉 (全集13巻27-8頁)

◎注39

第2パラグラフには、注がついています。それも一応紹介しておきましょう。

【注39】〈(39) 「なぜなら、どの物の用途も二通りあるからである。――一方は物としての物に固有であり、他方はそうではない。たとえば、靴には、靴としてはくという用途と交換されうという用途とがある。両方とも靴の使用価値である。なぜなら、靴を、自分にないもの、たとえば食物と交換する人でも、やはり靴を靴として用いているからである。もっとも、これは靴の本来の用法ではない。なぜなら、靴は交換のために存在しているのではないからである」(アリストテレス『政治学』、第一巻、第九章〔山本光雄訳、『アリストテレス全集』15、岩波書店、二三ページ。同訳、岩波文庫、五一～五二ページ)〕。〉

この注は特に解読の必要はないと思いますが、ほぼ同じような注は『経済学批判』では冒頭の〈一見したところでは、ブルジョア的富は一つの巨大な商品の集まりとして現われ、一つ一つの商品はその富の基本的定在として現われる。ところがそれぞれの商品は、使用価値と交換価値という二重の観点のもとに自己をあらわしている[*]〉(同前13頁)に付けられています(引用文の最後に〈他の物についても同じことが言える。〉という一文が付け加わっている)。そして先に紹介した一文―〈商品は、使用価値、小麦、リンネル、ダイヤモンド、機械等々であるが、しかし商品としては、同時にまた使用価値でない。もしそれがその所有者にとって使用価値であるならば、すなわち直接に彼自身の欲望を満足させるための手段であるならば、それは商品ではないであろう。彼にとっては、それはむしろ非使用価値であり、すなわち、交換価値のたんなる素材的な担い手、またはたんなる交換手段である。交換価値の能動的な担い手として、使用価値は交換手段となる。その所有者にとっては、商品は交換価値としてだけ使用価値なのである[*]〉に付けられている注では、この冒頭の注を参照するように指示して、〈アリストテレス……が交換価値を把握したのは、この規定性においてである〉と指摘しています。

◎第3パラグラフ

【3】〈(イ)他面では、諸商品は、自分を価値として実現しうる前に、自分が使用価値であることを実証しなければならない。(ロ)というのは、諸商品に支出された人間労働が、それとして認められるのは、この労働が他人にとって有用な形態で支出された場合に限られるからである。(ハ)ところが、その労働が他人にとって有用であるかどうか、したがってその生産物が他人の欲求を満足させるかどうかは、ただ諸商品の交換だけが証明できることである。〉

(イ)、(ロ) 他方では、諸商品は、自分たちを価値として実現しうる前に、自分たちが使用価値であることを実証しなければなりません。というのは、諸商品に支出された人間労働が、そういうものとして認められるのは、それらの労働が他人にとって有用な形態で支出された場合に限られるからです。

ここで〈それとして認められる〉というところは、初版では〈数のなかにはいる〉となっています。またフランス語版では〈それが他人に有用な形態のもとで支出されるかざりでしか、計算に入らないからである〉となっています。だから商品に支出された人間労働が、社会の総労働量の一部分として、社会的・平均的に必要な量だけ支出される限りで、それが価値として認められるのであり、それは価値として他の諸商品と関係することが出来るのだということではないかと思えます。

またここで〈使用価値であることを実証しなければならない〉というのは、先に出てきた〈使用価値として実現〉するということと、同じだと思います。というのは、〈使用価値であることを実証〉するとは、〈この労働が他人にとって有用な形態で支出された場合に限られる〉とも述べているように、社会的使用価値であることを実証するということと同義だからです。つまり社会的な分業の総体の一分肢であることを示すことだと思います。

(ハ)ところが、この労働が他人にとって有用であるか、だからその生産物が他人の欲求を満足させるかどうかは、ただ諸商品の交換だけが証明できることなのです。

このパラグラフの場合も、その理解に役立つと思える『経済学批判』の一文を紹介しておきましょう。

〈個々の商品は、使用価値の観点のもとでは、本来独立した物として現われたが、これに反して交換価値としては、はじめから他のすべての商品との関係で考察された。けれどもこの関係は、ただ理論的な、思想上の一関係にすぎなかった。この関係が実際に証明されるのは、ただ交換過程においてだけである。他方では、たしかに商品は、一定量の労働時間がそれについてやされており、したがってそれが対象化された労働時間であるかざり、交換価値である。しかしそれは、直接そのままでは、特殊な内容の対象化された個人的労働時間であるにすぎず、一般的労働時間ではない。だからそれは、直接そのままでは交換価値ではなく、これからそれにならなければならない。まず商品は、一定の有用なしかたで用いられた、したがってある使用価値にふくまれた労働時間をあらわすかざりでだけ、一般的労働時間の対象化でありうる。商品にふくまれた労働時間が、一般的社会的労働時間として前提されたのは、こういう素材的条件のもとだけであった。だから商品は、交換価値として実現されることによってはじめて使用価値として生成しうるのだが、他方ではその外化において使用価値としての実を示すことによってはじめて交換価値として実現されるのである。〉(前掲28頁)

さて、この第2、第3パラグラフで分析されている交換過程の矛盾をどのように理解したらよいのでしょうか。ここでは、以前、大阪で行っていた「『資本論』を学ぶ会」のニュースから、それについて論じた部分を紹介しておくことにします。

【マルクスが最初に問題にしている矛盾とは、「諸商品は、みずから使用価値として実現しうるまえに、価値として実現しなければならない」ということと「価値として実現しうるまえに、みずから使用価値であることを実証しなければならない」ということです。つまり使用価値も交換価値もその実現のためには相手の実現を前提し合う関係にあるということなのです。ということは現実には商品交換は不可能だということになります。『経済学批判』ではマルクスはこれを「悪循環」とも述べています。

問題はこれはいったいどういう現実を言っているのだろうか、ということですが。しかしこれはそれほど難しいことではなくて、現実の生産物の物々交換(つまり貨幣がまだ現われていない交換)を想定してみれば分かります。私が魚をとって市場で野菜と交換したいと考えても、たまたま野菜を市場に持って来ている人が、魚をほしがっているならば交換可能ですが、そうでなければ交換できません。両者の欲求が一致するのはまったく偶然であって、実際にはなかなか一致せず、だから交換も出来ないのです。マルクスが明らかにしている矛盾はまさにこうした現実を示しているのではないのでしょうか。

交換過程を問題にするときには、商品は使用価値と価値の統一物であり、商品所有者の欲求が分析の対象にならなければなりません。だからまたこうした矛盾が生じるのです。第一章では20エシのリンネルは上着一着と交換されましたが、しかし等価形態に上着が来るか、鉄がくるかコーヒーが来るかは問題ではありませんでした。それは何でも良かったのです。というのは第一章では商品が交換されている現実を前提にしてそれを直接分析の対象にしていたからであって、そこでは商品所有者も彼の欲望も捨象されて問題にはされなかったからです。しかし第二章では商品交換はより具体的に分析され、商品は現実の商品としていわば運動するものとしてとらえられているともいえます。】（「学ぶ会ニュース」No.27）

【付属資料】

●表題

《初版本文》

〈「諸商品の交換過程」〉

《フランス語版》

〈「諸交換について」〉

●第1パラグラフ

《初版本文》

〈諸商品は、自分たち自身で市場に行くことができないし、自分たち自身を交換しあうこともできない。だから、われわれは、それらの番人である商品所持者たちを探し出さなければならない。諸商品は、物であり、したがって人間にたいしては無抵抗である。それらが従順でなければ、人間は暴力を用いることができる。言い換えれば、それらをつかまえることができる（32）。これらの物を商品として互いに関係させるためには、商品の番人たちは、自分たちの意志がこれらの物においてある存在をもつところの諸個人として、互いに関係しあわなければならない。したがって、各人は、自分の意志と他人の意志とをもってのみ、つまり、双方が共通の意志をもってのみ、自分たちの商品を譲渡することによって他人の商品を取得しなければならない。そしてまた、他人の商品を取得するためには自分の商品を譲渡しなければならない。だから、彼らは互いに、私的所有者として認めあわなければならない。法的に表示されていようとまいと契約という形式をとる、この法的関係は、経済的關係がそのなかに反映しているところの意志関係にほかならない。この法的関係または意志関係の内容は、経済的關係そのものによって与えられている（38）。諸個人は、ここでは、自分たちがなんらかの諸物を商品として互いに関係させることによって、互いに関係しあっているにすぎない。だから、この関係のあらゆる規定は、商品としての物の規定のなかに含まれている。ここでは、一方の人は、他方の人にたいし、商品の代表者として、したがって商品所持者として、存在しているにすぎない。叙述が進むにつれて、諸個人の経済的な諸扮装は経済的な諸関係の擬人化にすぎず、彼らはこれらの関係の担い手として互いに相対しているということを、われわれは一般的に見いだすであろう。〉（江夏他訳70頁）

《フランス語版》

〈諸商品はけっして自分たち自身で市場に行くこともできないし、自分たち自身を互いに交換しあうこともできない。したがって、われわれは商品の保管者や監督者、すなわち商品の所有者のほうに眼を向けなければならない。商品は物であり、したがって、人間に少しも抵抗できない。もし商品に善意がなければ、人間は暴力を用いることができる、換言すれば、商品をとらえることができる（1）。これらの物を商品として互いに関係させるためには、その保管者たち自身が、これらの物自体のうちに意志を宿す人として、互いに関係しあわなければならない。したがって、一方の意志は他方の意志でもあり、個々の保管者は共通の意志行為によって、自分の商品を手ばなして他人の商品をわがものにするようになる。だから、彼らは互いに私有者として認めあわなければならない。合法的に結ばれようとそうでなかつと、契約という形式をとるこの法的関係は、経済的關係を反映する意志関係にほかならない。その内容は、経済的關係そのものによって与えられている（2）。人々はここでは、数々の物を商品として互いに関係させるかぎりでのみ、互いに関わりあっているのである。人々が互いに相手として存在するのは、彼らが所有する商品の代表者としてのことでしかない。われわれはさらに、よりいっそう詳述を進めてゆく過程のなかで、人々が状況に応じてかぶるさまざまな仮面が、彼らが互いに相手にたいして維持する経済的關係の擬人化にほかならない、ということを知るであろう。〉（江夏他訳61頁）

●注37と注38

《初版本文》

〈(32)敬虔で聞こえた12世紀には、これらの商品のなかには、しばしば、非常にやんわりした物が見いだされる。それだから、当時のフランスのある詩人は、ランディの市場内に現われた諸商品のなかに、服地や靴や革や農器具や毛皮等々のほかに「浮気な女」をも数えあげている。〉（同71頁）

〈(33)ブルードンは、まず、正義すなわち永遠の正義という彼の理想を、商品生産に対応する法的諸関係から汲み取っているが、ついでに言っておくと、このことによって、商品生産という形態も正義と同様に永遠であるというすべての俗物にとって大いに慰めになる証明も、提供されているのである。次いで、彼は、逆に、現実の商品生産とこれに対応する現実の法律とを、二の理想ののっつて改造しようとする。物質代謝の現実の諸法則を研究しこれらを基礎として特定の諸課題を解決せず、「自然的性状」や「親和力」という「永遠の理念」ののっつて物質代謝を改造しようとするような化学者がいれば、人はこの化学者をどう思うだろうか？ 人が、高利は「永遠の正義」や「永遠の公正」や「永遠の相互扶助」やその他の「永遠の真理」と矛盾している言うとき、その人が「高利」について知っていることは、教父たちが高利は「永遠の恩寵」や「永遠の信仰」や「神の永遠の意志」と矛盾していると言ったとき、彼らが高利について知っていたことよりも、いくらかは長じていることになるのだろうか？ 〉（同71頁）

《フランス語版》

〈(1) 敬虔なことであれほど評判の高い12世紀には、往々にして商品のなかにきわめてなよやかな物が見出される。たとえば、当時のフランスの一詩人は、ランディの市場で見た商品のなかに、布地や靴や皮や農具のほかに「浮気な女」をあげている。〉（61頁）

〈(2) 多くの人々は彼らの正義理想を、商品生産に基礎を置く社会から生まれた法的関係から汲みとっている。ついでに言っておくが、このことは、この種の生産が正義そのものと同じくらい長持ちするであろうという証拠を、彼らに快く提供しているのである。次いで彼らは、現在の社会から引き出されるこの理想のなかに、この社会とその法とを改良するための支点を置く。物質化合の法則を研究もせず、この基礎の上で一定の課題を解決もせず、「親和力や自然的性情という永久的理念」にしたがってかこの化合を変えようとする化学者がいたら、人はこの化学者をどう考えるであろうか？ 例えば、人が「高利」は「永遠の正義」や「永遠の公正」と矛盾すると言うとき、この人が高利について知っていることは、教父が、高利と「永遠の恩寵や永遠の信仰や神の永遠の意志」との矛盾を宣言して同じことを行ったとき、この教父が高利について知っていたことよりも、どこか長じているところがあるだろうか？ 〉（61-2頁）

●第2パラグラフ

《初版本文》

〈商品所有者を特に商品から区別するものは、商品にとってはどの他商品の使用価値も自分自身の価値の現象形態としてしか認められない、という事情である。だから、生まれながらの平等派であり犬儒学派である商品は、絶えず、どの他商品とでも、たといそれがマリトルネス〔セルパンテスの『ドン・キホーテ』に出てくる醜い女中〕よりも体裁が悪かろうと、魂だけでなく体までもとり交わそうとしている。商品には欠けている、商品体という具体物にたいするこうした感覚を、商品所有者は、自分自身の五感およびそれ以上の感覚で補うのである。彼の商品は、彼にとっては直接的な使用価値をなんらもっていない。もっていれば、彼はその商品を市場にもってゆきはしない。彼の商品は、他人にとって価値をもっている。彼にとって、それは直接的に、交換価値の担い手でありしたがって交換手段であるという使用価値のみを、もっている（34）。それだから、彼は、自分を満足させる使用価値をもつ商品と引き換えに、この商品を譲渡しようとする。すべての商品は、その所有者にとっては非使用価値であり、その非所有者にとっては使用価値である。だから、これらの商品は全面的に持ち手を変更しなければならない。ところが、この持ち手の変更が、これらの商品の交換を形成しており、これらの商品の交換が、これらの商品を価値として互いに関係させ、これらの商品を価値として実現するのである。だから、諸商品は、それらが使用価値として実現される以前に、価値として実現されていなければならない。〉（71-2頁）

《フランス語版》

〈交換者を彼の商品から特に区別するものは、この商品にとっては他のどの商品自体の価値の

現象形態にほかならない、ということなのだ。この商品は、生まれながらにして放蕩で厚かましいから、他のどんな商品とでも一対一とえそれがマリトルネス〔セルヴァンテスの『ドン・キホーテ』に出てくる醜い女中〕と同じくらい魅力に乏しかろうとも一対一、自分の魂やさらに肉体までも交換しようと、いつも身構えている。この商品は自分の姉妹の具体的な側面を評価する感覚を欠いているが、この欠落を、交換者は五つ以上もある自分自身の感覚で補い、発達させるのである。彼にとっては、この商品はどんな直接の使用価値ももっていない。そうでなければ、彼はこれを市場にもってゆかない。彼がこの商品に見出す唯一の使用価値は、この商品が他人にとって有用な価値の担い手であり、したがって交換手段である、ということである(3)。だから、彼は、自分を満足させることのできる使用価値をもつ別の商品と引き換えに、この商品を譲渡しようとする。すべての商品は、それを所有する人々にとっては非使用価値であり、それを所有しない人々にとっては使用価値である。したがって、すべての商品は一方の持ち手から他方の持ち手へと全面的に移行しなければならない。ところが、この持ち手変更が商品交換をなすのであって、この商品交換が商品を価値として互いに関係させ、商品を価値として実現する。したがって、商品は使用価値として実現されうる以前に価値として現われていなければならない。〉(62頁)

●注39

《初版本文》

〈(34)「なぜならば、どの財貨の用途も二重であるからである。一方の用途は物としての物に固有であり、他方の用途はそうではない。たとえば、サンダルは、はき物として役立つし、また交換可能でもあるというように。両方の用途ともサンダルの使用価値である。というのは、サンダルを自分がもっていない物、たとえば食物と交換する人でも、やはり、サンダルをサンダルとして利用するからである。といっても、サンダルの本来の用い方ではないが。なぜならば、サンダルは交換のために存在するものではないからである。」(アリストテレス『国家論』、第一巻、第九章。)) (72頁)

《フランス語版》

〈(3)「なぜかという、どの物にも二種の用途があるからである。その一方は、物としての物に固有であり、他方はそうでない。たとえばサンダルは、履物としても交換手段としても役立つ。この二つの観点のもとで、サンダルは使用価値なのである。自分に欠けているもの、たとえば食糧と引き換えに、サンダルを交換する人も、サンダルをサンダルとして用いるからである。だが、このことはサンダルの生来の用い方ではない。サンダルはまさに、交換のためにそこにあるわけではないからである」(アリストテレス『政治学』、第1巻、第9章。)> (62-3頁)

●第3パラグラフ

《初版本文》

〈他方では、諸商品は、それらが価値として実現されうる以前に、使用価値として実証されていなければならない。というのは、諸商品に支出された人間労働は、それが有用な形態で支出されたかぎりでのみ、しかも他人にとって有用な労働であるかぎりでのみ、数のなかにはいるからである。ところが、その労働が他人にとって有用であるかどうか、したがってその労働の生産物が他人の必要をみたすかどうかは、諸商品の交換だけが証明しうるところである。〉(72頁)

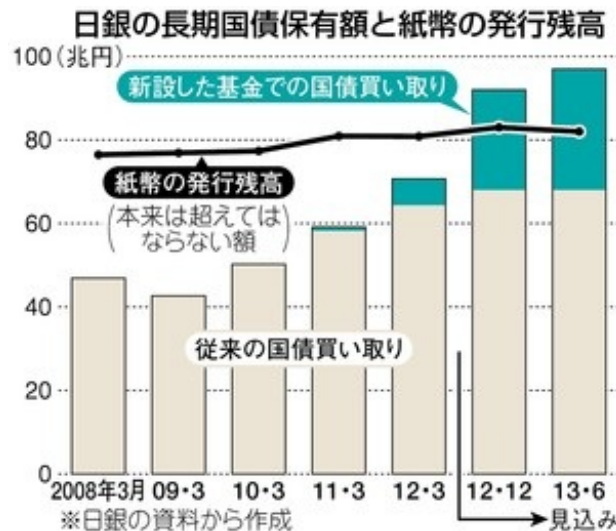
《フランス語版》

〈他方では、商品が価値として実現されうる以前に、その使用価値が確認されていなければならない。商品の生産に支出された人間労働は、それが他人に有用な形態のもとで支出されるかぎりでは、計算に入らないからである。ところで、この労働が他人に有用であるかどうか、すなわち、その生産物が他人の必要をみたすことができるかどうかは、商品の交換だけが証明しうることなのだ。〉(63頁)

『資本論』を読んでみませんか

日本銀行は2月、4月と立て続けに追加金融緩和措置を講じてきたが、5月8日に公表した資料によれば、同行が保有する長期国債の額が、今年度末には同行が内規として定める上限額を突破する見通しだという。その内規というのは「国債保有は世の中に出回るお札（銀行券）の量まで」というものらしい。

今年3月末の時点で、銀行券発行残高80.8兆円に対し、長期国債（発行時の満期が2年以上）の保有残高は70.7兆円と下回っていたが、年末には長期国債が92兆円にふくらみ、銀行券残高の83兆円を超えるのである。



この「銀行券ルール」と称する内規については、日銀サイトの2001年の「新しい金融調節方式Q&A」を見ると、「日本銀行はこれまで、長期国債買い切りオペの増額に反対してきたのではないですか」という質問に、「今後も、国債価格の買い支えや財政ファイナンスを目的として長期国債買い切りオペを増やすということは考えていません。このような趣旨を明らかにするため、今回、これまでの『長期国債買い切りオペは銀行券に対応させる』という考え方を守り、銀行券発行残高を長期国債保有残高の上限とする明確な歯止めも用意しました」と答えている。

しかし、この「歯止め」なるものも今ではほぼ有名無実化しつつあるというわけである。白川総裁は、日銀の国債買い入れは「金融政策の目的遂行のために行っている」「財政ファイナンスを行わないという、私どもの言葉を信用してほしい」と述べているが、しかし、市中銀行からの国債の大量購入は、事実上の日銀の国債引き受けと同じであることは明らかである。

ところで日銀がルールとして定めている銀行券の発行残高と国債保有高にはどういう関連があるのであろうか。

この両者を関連づけているということは、日銀には両者に何らかの関連があると考えているからであろう。実は、それは日銀券が銀行券という性格から来ている。銀行券はもともとは銀行が自らの信用にもとづいて発行する手形であり、その限りでは発券銀行にとっては債務なのである。だからかつては銀行券の発行のためには、発券銀行は、同行が保

有する何らかの債権や金などを担保として、その発行の保証としなければならなかったのである。だから保有国債を日銀券の発行高と関連づけることで歯止めをしようとする日銀は考えたのであろう。

しかし、今日の日銀券はこうしたかつてのような手形流通に立脚して流通するようなものとはすでに異なっている。日銀券は手形流通に立脚する商業流通においてはまったくと言ってよいほど流通はしておらず、もっぱら一般流通のなかで通貨として流通しているからである。そして通貨としては貨幣流通に立脚し、貨幣の流通法則に規制されるのである。

だから今日では、日銀券と日銀の有する国債などの債権との間には、理論的には直接的な関連はないのである。日銀が市中銀行から国債を購入するということは、利子生み資本（貨幣資本 moneyed Capital）を貸し出すことである。つまり日銀の信用を拡大して、潤沢な貨幣資本を市中銀行に供給するわけである。しかしこの貨幣資本は、当面は、市中銀行の中央銀行にある当座預金の積み増しとして現れ、それが直ちに市中銀行の産業資本や商業資本への貸し出し増加に繋がるとは限らない。むしろ現実には、市中銀行は、その増加した預金を使って、新たな国債購入に充てているというのが現実である。だからいくら金融緩和をしても一向に景気が上向かないのはそのためでもある。

他方、銀行券の発行残高というのは、一般の商品市場における通貨の必要量によって規定されており、日本銀行によってその増減を左右できるようなものではないのである。実際、日銀券の発行残高は、この間、日銀が買いオペによって国債や社債、株式まで購入しているのに、ほぼ80兆円前後を推移している。

日銀は「デフレ脱却」を掲げ、「物価上昇率1%」を目標に金融緩和策を行っていると言っているが、こうした主張は通貨と貨幣資本（moneyed Capital）との区別を混同した間違っただ理論に立脚しているわけである。マルクスはこの両者について、次のように述べている。

〈このような場合（恐慌時——引用者）のほかは、通貨の絶対量は利子率（つまり貸し付け可能な貨幣資本の増減——同）には影響しない。なぜならば、この絶対量は——通貨の節約や速度を不変と前提すれば——第一には、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されており……、また最後に信用の状態（諸支払の相殺度合い——同）によって規定されているが、逆にそれが信用の状態を規定するのではけっしてないからである。また、第二には、商品価格と利子とのあいだにはなにも必然的な関連はないからである。〉（『資本論』第3部第33章全集25b 680頁）

貴方も、現在の政府や日銀の財政・金融政策を科学的に分析するためにも、『資本論』を読んでみませんか。

第46回「『資本論』を読む会」の報告

◎大飯原発再稼働

野田首相は、何がなんでも大飯原発の再稼働を考えているようです。

しかし、福島原発事故の原因ははまだ究明されたとはいえません。国会の事故調査委員会の最終報告も出ていません。原子力規制庁の発足もまだなのです。大飯の安全が確認できたと言いますが、しかし政府の安全基準なるものは、いまだ暫定的なものでしかなく、事故が起きた場合の拠点となる免震棟もありません。放射能の拡散を防ぐフィルター付きのベントもない有り様なのです。にも関わらず、野田首相は、この夏の電力事情が関電管内では逼迫しているとの理由で、「私の責任で最終判断したい」というのです。

しかし、「私の責任」と言いますが、一体、事故が起こった場合に、どういう「責任」とをとるのでしょうか。福島原発事故で、誰かがその責任をとったということは聞いたことがありません（むしろ事故のために故郷を追われた福島の人々こそがその責任を押しつけられ、尻拭いを強いられているのではないのでしょうか）。原発事故の「責任」を云々しても始まらないのです。起こってしまえば、取り返しがつかないのが原発事故です。

それをただ目の前の電力需給の逼迫を理由に、なし崩し的に再稼働に向けて突っ走るなどということは許されるものではありません。そもそも関電が夏の電力需要に対応するために、原発以外の手段を動員する十分な対策をとったといえるでしょうか。原発を動かしたいがために、休眠中の火力発電所を動かそうともせず、それに必要な設備投資を怠ってきたのではないのでしょうか。原発事故が起こった時点で、今日の事態は十分予測できたことであり、そのための対策をとる期間も無かったとはいえません。実際、東電は短期間に火力発電所を再稼働させ電力需要に応じています。やる気さえあればできるのです。

関電の狙いは、停電を脅しに強引に再稼働に持ち込もうということではないのでしょうか。そして野田政権は、その電力資本の言いなりなのです。

結局、野田民主党政権は消費税増税にしても、原発推進にしても、これまでの自民党と何一つ変わることなく、資本のいいなりの政権でしかないことがハッキリしたわけです。

とにかく腹の立つことばかりですが、しかし、まあ、本来の学習会の報告に移りましょう。今回は、第2章「交換過程」に入って二回目です。第4～6パラグラフをやりました。さっそく、その報告を行います。

◎第4パラグラフ

報告はこれまでのように、まずパラグラフ本文を紹介し、文節ごとに記号を付して、それぞれの解説を行い、そのなかで学習会での議論も紹介していくことにします。

【4】〈(1)どの商品所有者も、自分の欲求を満たす使用価値をもつ別の商品と引きかえにでなければ自分の商品を譲渡しようとはしない。(2)その限りでは、交換は彼にとって個人的な過程でしかない。(3)他方では、彼は自分の商品を価値として実現しようとする。(4)すなわち、彼自身の商品が他の商品の所有者にとって使用価値を持つか持たないかにはかわりなく、自分の気に入った、同じ価値をもつ他のどの商品でも価値として実現しようとする。(5)その限りでは、交換は彼にとって一般的社会的過程である。(6)だが、同じ過程が、すべての商品所有者にとって同時にもつばら個人的であると共にもつばら一般的社会的であるということはあるまい。〉

(1)、(2) どの商品所有者も、自分の欲しい商品とでなければ、交換しようとしません。その限りでは、交換は、彼にとっては個人的な過程でしかないでしょう。

この場合も、商品所有者の立場から、交換過程を考察しています。これまでのパラグラフでは、商品所有者と商品そのものとの相違ということで、第2章の第1章との相違を見ていたのですが、ここでは問題をもう少し具体的に交換過程そのものを対象にして、商品所有者が商品を交換するというのは、どういう問題意識と観点からか、という形で問題を見ていることが分かります。そしてその場合の交換過程の矛盾を見ているわけです。

これまで商品所有者と商品との関係が考察の対象でしたが、ここでは商品所有者同士の関係が問題になっています。そしてその上で、商品所有者にとって、交換は、まずは個人的な過程であることが指摘されているのです。交換が、商品所有者にとって、「個人的な過程」であるというのは、それは商品所有者の個人的な欲望と密接不可分だからです。直接的な生産物の交換の場合、交換者は自分の欲しいと物とだけ、交換しようとし、だから相手も自分の持っているものが欲しい場合にだけ、偶然にそれは交換されるわけです。それはまったく偶然で個人的な過程なのです。

(3)、(4)、(5) 他方で、彼は自分の商品の価値を実現しようとし、つまり、彼は自分の商品が他の商品所有者にとって使用価値を持つかどうかに関わりなく、自分の気に入った同じ価値を持つ商品とであればどれとでも交換しようと思おうわけです。だからこの限りでは、交換は彼にとっては、一般的社会的過程であるわけです。

ここでは先の場合とは違って、〈彼は自分の商品を価値として実現しようとする〉とあります。つまりこの場合の交換は、決して偶然的なものではなく、個人的な欲望には関わりなく、交換を行うということです。だからすでに交換されるものは、それ自身の使用価値や個人的欲望とはかわりない価値として、つまり自身に対象化されている労働の一般的社会的な妥当性を示そうとしているわけです。つまりこの場合、この商品の所有者は、次々に他の諸商品と交換することを望んでいるわけです。だからこの場合は、交換は、彼にとっては社会的な過程なのです。〈交換の不断の繰り返しが、交換の一つの規則的な社会的過程にする〉(117頁)と後にマルクスは述べていますが、自身の商品を次々に別

の諸商品と交換しようとするということは、それ自体、交換の一定の社会的な発展を想定しています。マルクスは「展開された価値形態」（第二の形態）について、次のように述べています。

〈第一の形態、20エレのリンネル＝1着の上着 では、これらの二つの商品が一定の量的な割合で交換されうるということは、偶然的事実でありうる。これに反して、第二の形態では、偶然的現象とは本質的に違っていてそれを規定している背景が、すぐに現われてくる。リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄など無数の違った所持者のものである無数の違った商品のどれで表わされようと、つねに同じ大きさのものである。二人の個人的商品所持者の偶然的な関係はなくなる。交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換割合を規制するのだ、ということが明らかになる。〉（全集23a86頁）

つまり次々と諸商品と交換しようとする場合、すでにその商品所有者にとっては、交換は一般的社会的な過程なのです。

(A) しかし、同じことはすべての商品所有者にとって言えることです。だから同じ過程が、すべての商品所有者にとって同時にもつばら個人的であると共にもつばら一般的社会的であるということはありません。

つまり、次のようなことではないでしょうか。ある部族の一人の有能な猟師が毛皮を求めて狩猟をしながら森を移動したとします。そしてその行き先で彼はたまたま接触した幾つかの部族と彼の獲物の毛皮を、それぞれの部族の産物と交換したとします。この場合、その一つ一つの交換は偶然的なもので、互いに欲望が互いの物を欲する限りで行われるに過ぎません。その限りでは交換は個人的な過程なのです。

しかしその有能な猟師は、それまで一定の定着農耕の農閑期に限っていた狩猟を、生活の中心に置くようになります。つまり彼は獲物を求めて、一年を通し、この季節にはこの森に、この季節にはこの谷に、どういふ動物がいるのかを知るようになり、季節によって、年々、同じルートを巡回して、狩を行ひ、毛皮を生産しつつ、それをそのルートで接するある程度決まった部族と交換するようになります。つまり猟師にとって、獲物の毛皮を交換して歩くことが彼自身の生活になってきます。だから彼の毛皮は最初から交換を目的に生産されることになるわけです。そうすると、猟師が遭遇する部族との交換は、ある獣の毛皮一枚はジャガイモ二袋としか交換しないというように、その交換は一定の規則性を帯びてきます。つまり猟師は、彼の毛皮を価値として交換しようとするようになります。

しかしやがて猟師だけではなく、猟師がそれまで接触してきた部族のなかにも、交換が発展してきます。しかしすべての部族の生産物が同じように彼らの生産物を価値として実現しようとしても決してできないのです。こうした交換の発展が、それらに内包する矛盾を発展させる過程が、ここでは分析されているのではないのでしょうか。

◎第5パラグラフ

[5] 〈(1)立ちいってしてみると、どの商品所有者にとっても、他人の商品はどれも自分の商品の特別な等価として意義をもち、したがって、自分の商品は他のすべての商品の一般的等価として意義をもつ。(2)しかし、すべての商品所有者が同じことを行うのだから、どの商品も一般的等価ではなく、したがってまた、諸商品は、それらが自己を価値として等置し、価値の大きさとして比較しあうための一般的相対的価値形態をもっていない。(3)だから、諸商品はおよそ商品として相対しているのではなく、ただ生産物または使用価値として相対しているにすぎないのである。〉

(1) 少し詳しく考えてみると、どの商品所有者にとっても、他の人の商品はどれも自分の商品の特別な等価として意義を持ちます。だから自分の商品は他のすべての商品に対しては一般的等価として意義を持つわけです。

先の過程をより立ち入って考えてみましょう。〈どの商品所有者も、自分の欲求を満たす使用価値をもつ別の商品と引きかえにでなければ自分の商品を譲渡しようとはしない。・・・他方では、彼は・・・彼自身の商品が他の商品の所有者にとって使用価値を持つか持たないかにはかかわりなく、自分の気に入った、同じ価値をもつ他のどの商品でも価値として実現しようとする〉ということは、どの商品所有者にとっても、他人の商品はどれも自分の商品に対する特殊な等価物として意義を持つということであり（展開された価値形態）、だから他方では、自分の商品は他のすべての商品に対して一般的等価物として意義をもつという関係にあるわけです（一般的等価形態）。

つまりここでは先の「展開された価値形態」に対応する交換過程が、それ自身が内包している逆の関係、つまり「一般的価値形態」に対応する交換過程へと発展することが論じられているように思えます。

(2) しかし、すべての商品所有者が同じことを行うわけですから、どの商品も一般的等価ではなく、したがってまた、諸商品は、それらが自分が価値として等置し、価値の大きさとして比較しあうための一般的相対的価値形態をもっていないこととなります。

しかし、すべての商品所有者が同じことを行い、自分の商品を一般的等価物にしようとしても、それは不可能なことです。なぜなら、ある商品の所有者が、自分の欲する諸商品と次々と交換し、だから他の諸商品を自分の商品の特殊な等価物にし、それによって自分の商品を他のすべての商品に対する一般的等価物の地位に置くということは、自分以外のすべての商品を一般的等価物から排除するということでもあるからです。しかし、すべての商品所有者が同じことをしようとするなら、すべての商品が一般的等価とはならず、だから諸商品は、互いに自分たちを価値として等置し、価値の大きさとして比較しあうための一般的相対的価値形態をもっていないこととなります。

(3) だから、諸商品はおよそ商品として相対しているとは言えず、ただ生産物あるいは単なる使用価値として相対しているに過ぎなくなります。つまり交換は不可能になるわけです。

ということは、商品は価値形態を持たないことになり、価値形態を持たないということは、それらは商品形態を持たないということ、すなわち単なる現物形態を持っているだけになり、そうした形で相対しているだけになるわけです。つまり交換は不可能になります。

この三つ目の矛盾は、初版本文に出てくる「価値形態IV」の場合と類似しているように思えます。初版からその部分を紹介しておきましょう。

〈とはいえ、われわれの現在の立場では、一般的な等価物はまだけって骨化されていない。どのようにしてリンネルがじっさいに、一般的な等価物に転化されたのであろうか？ リンネルが自分の価値を、まず一つの単一の商品で**相対的に**表し（形態Ⅰ）、次には、すべての他商品で順ぐりに**相対的に**表わし（形態Ⅱ）、こうして**反射的に**、すべての商品が自分たちの価値をリンネルで相対的に表わす（形態Ⅲ）、ということによって。単純な相対的価値表現は、リンネルという一般的な等価形態がそこから発展してきた胚種であった。この発展のなかで、リンネルは役割を変える。リンネルは、自分の価値量を他の一商品で表わすことで始まり、**すべての他商品の価値表現のための素材**として役立つことで終わる。リンネルにあてはまることは、どの商品にもあてはまる。リンネルの発展した相対的価値表現（形態Ⅱ）は、リンネルの**単純な価値表現の多数の**あつまりからのみ成り立っているのであって、この形態Ⅱでは、リンネルはまだ一般的な等価物として現われていない。むしろ、ここでは、他の商品体はどれも、リンネルの等価物になっており、したがってリンネルと直接的に交換可能であり、それゆえにリンネルと位置を取り替えることができる。

だから、われわれは最後に次の形態を得ることになる。

形態Ⅳ

20エルのリンネル=1着の上着、または=u量のコーヒー、または=v量の茶、または=x量の鉄、または=y量の小麦、または=等々

1着の上着=20エルのリンネル、または=u量のコーヒー、または=v量の茶、または=x量の鉄、または=y量の小麦、または=等々

u量のコーヒー=20エルのリンネル、または=1着の上着、または=v量の茶、または=x量の鉄、または=y量の小麦、または=等々

v量の茶=等々

ところが、これらの等式のどれも、**逆の関係に**されると、一般的な等価物としての上着やコーヒーや茶等々が生じ、したがって、すべての他商品の一般的な相対的価値形態としての上着やコーヒーや茶等々での価値表現が生ずる。一般的な等価形態は、つねに、すべての他商品に**対立して**、一商品にのみ属している。だが、それは、すべての他商品に**対立して**、どの商品にも属している。ところが、どの商品もが、自分自身の現物形態を一般的な等価形態として、すべての他商品に**対立させる**ならば、すべての商品が、自分たちをことごとく一般的な等価形態から排除し、したがって、自分たち自身を、自分たちの価値量の社会的に認められている表示から、排除することになる。〉（江夏訳56-58頁）

◎交換過程の三つの矛盾

これまで検討してきた交換過程の三つの矛盾について、それらの相互関係を如何に理解するかが、さまざまに議論されてきました。それについて、少し考えてみることにしましょう。まず三つの困難としてマルクスが述べているものについて、簡単に復習してみます。

1) 〈諸商品は、みずからを使用価値として実現しうるまに、価値として実現しなければならない（価値として実現しうるまに、みずからが使用価値であることを実証しなければならない）〉【第2・3パラグラフ】。

2) 〈同じ過程が、すべての商品所有者にとって同時にもっぱら個人的であるとともにもっぱら一般的社会的であるということはありません〉【第4パラグラフ】。

3) 〈どの商品も一般的な等価物ではなく、それゆえまた、諸商品は、それらが自己を価値として等置し、価値の大きさとして比較しあうための一般的な相対的価値形態をもってはいない〉【第5パラグラフ】。

この三つの事態について、これらを相対的に独立した「三つの矛盾」と見るか、それとも「一つの矛盾」を三つの側面から考察したものを見るべきか、ということが論じられて来たのだそうです。

しかし、これらの三つの矛盾の相互の関係を論じるまに、そもそもどうして交換過程では、こうした矛盾が論じられているのでしょうか。まずそれから考えましょう。

それを考えるためには、もう一度、第1章「商品」との関連で、第2章「交換過程」の課題を明確に掴む必要があります。

これについては、一度詳しく論じたことがあります（第44回報告）。ここでは次のように説明しました。

第1章「商品」は、商品とは何かを明らかにすることでした。確かに第1章ではリンネルや上着やコーヒーや鉄や金など、さまざまな商品が登場してそれらの関係が考察されたのですが、しかしこれらはあくまでも商品とは何かを明らかにすることが目的なのです。もちろん、商品とは何かを明らかにすることは、その商品がリンネルであろうが、上着であろうが何でも良かったのですが、しかし問題は、あくまでも商品とはそもそも何かを明らかにすることでした。そしてその商品の何たるかを解明するためには、商品は自らの価値を具体的に表す存在でなければならないこと、それを商品は貨幣形態、つまり価格という形で表していることをマルクスは明らかにしたのです。だからリンネルと上着との価値関係やリンネルと他の諸商品との展開された価値形態など、さまざまな諸商品との関係が考察されたのも、そもそも商品にはどうして価格が、すなわち値札が付けられているのか、そうしたことを明らかにするために商品の価値の表現形態としての貨幣の発生を論証したのでした。

しかし重要なことは、そうした一連の諸商品の価値関係や価値形態の考察も、あくまでも、そもそも商品とは何かを解明するためであったということです。だから第1章では、商品はそれ自体として存在するもの、つまりその姿においてだれもが商品として分かる物的存在として、すなわち一つの現存在として把握されたのでした。あとはこの商品が一つの自立的存在として、今度はそれ自身の運動する過程をわれわれは分析するのですが、しかし、マルクスはその前に、商品そのものの歴史性を暴露する節を設けていました。それがすなわち第4節です。

つまり第4節の商品の物神性というのは、商品そのものの歴史性を暴露し、商品の発生、発展、及び消滅の必然性を明らかにするのが、この節の課題でした。

だから第2章は、第1章で明らかにされた商品をもとに、今度は自立した商品の運動が、すなわちその交換の過程が分析の対象になるのです。そして商品の運動とは、すなわち他の諸商品との交換過程そのものです。そして運動を分析することは、その運動として現れている矛盾を解明すること、つまり交換過程に潜む矛盾を解明することでもあるの

です。

これは例えば、ある物質が運動している場合、その運動する物質を規定しようとする場合、論理的には、ここに「ある」と同時に「ない」としか説明できません。しかしある物が「ある」と同時に「ない」というのは矛盾そのものです。しかし運動しているものは、すべてこうした矛盾した規定的存在なのです。もう一つの例を上げると、古代ギリシアの哲学者ゼノンの有名なアキレスと亀の話があります。アキレスが亀に追いついたと思ったら、亀はその分だけ前に進んでおり、さらにその分の距離を追いついたと思ったら、やはり亀は、その時間だけ前に進んでいて、いつまで経ってもアキレスは亀に追いつけないという話です。これも実際にはアキレスは亀をあっというまに追い抜くという運動をしているのですが、しかしその運動を分析し規定しようすると、こうした「悪無限」という論理的には矛盾した状態が明らかになるのです。

交換過程は、現実の商品の交換が行われる過程であり、諸商品は実際に交換されているものとして運動しているのですが、こうした運動を分析するということは、その運動を運動たらしめている矛盾を明らかにすることになるのです。これが交換過程では矛盾が最初に問題にされている理由なのです。

最初の矛盾（商品は使用価値として実現する前に、価値として実現していなければならない、価値として実現するためには、使用価値として実証していなければならない）は、価値形態では最初の「単純な価値形態」に対応するものですが、そのことは同時に、商品の交換のものに内在する矛盾を明らかにしたのものであるのです。その限りではその矛盾は、抽象的な形で交換を捉えたものであり、交換一般に潜む矛盾を明らかにしたのもといえるでしょう。

それに対して、第二の矛盾（商品の交換は個人的過程であると同時に一般的過程であるということできない）は、価値形態の「第二の形態」に対応していますが、今度は、交換一般ではなく、商品がより多くの諸商品との交換過程に入るなかでの矛盾です。一つの商品が、それ以外の他の多くの諸商品と交換過程に入るなかで生じる矛盾なのです。

それに対して、第三の矛盾は、諸商品が相互に交換し合う社会的な関係を想定しています。それは一つの商品が、それ以外の他の多くの商品と交換するだけでなく、すべての商品が自分以外の多くの諸商品と交換し合う過程を想定して、その矛盾を見ているわけです。

交換過程は現実の商品が実際に交換されている過程の分析ですが、しかし諸商品が交換されるということ进行分析すると、だからこうした矛盾が見いだされ、現実の商品の交換の発展は、こうした矛盾を解決する過程として捉えられることになるわけです。

私たちは第1章第3節では、諸商品の交換関係の中に潜む価値の表現形態の発展を跡づけました。そこでは価値形態の発展は、商品形態の発展であり、商品の交換関係そのものの発展でもあるとの指摘がありました。次のように指摘されていました。

〈労働生産物は、どんな社会状態のなかでも使用対象であるが、しかし労働生産物を商品にするのは、ただ、一つの歴史的に規定された発展段階、すなわち使用物の生産に支出された労働をその物の「対象的」な属性として、すなわちその物の価値として表わすような発展段階だけである。それゆえ、商品の単純な価値形態は同時に労働生産物の単純な商品形態だということになり、したがってまた商品形態の発展は価値形態の発展に一致するということになるのである。〉（全集23a83頁、下線は引用者）

またマルクスは価値形態のそれぞれがどのような交換過程を前提しているかについても、次のように述べていました。

〈第一の形態――この形態が実際にはっきりと現われるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである。〉（同前89頁）

〈第二の形態――展開された価値形態がはじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にはなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのことである。〉（同）

〈第三の形態――新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表わす。リンネルと等しいものとして、どの商品の価値も、いまではその商品自身の使用価値から区別されるだけでなく、いっさいの使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されるのである。それだからこそ、この形態がはじめて現実諸商品を互いに価値として関係させるのであり、言いかえれば諸商品を互いに交換価値として現われさせるのである。〉（同）

つまり私たちが第1章で跡づけた価値形態の発展（単純な価値形態→展開された価値形態→一般的価値形態）は、いわば現実の商品交換の発展を前提して、そのうえで、そのそれぞれの発展段階の交換過程から、諸商品の交換を前提した上で、交換される諸商品そのものに注目して、それ以外の現実の商品交換に付随する商品所有者やその欲望等を捨象して、純粋に諸商品の交換関係だけを取り出し、商品の価値関係そのものに潜む、価値の表現形態の発展段階を分析してきたといえるのです。だからこそ、そうした商品の価値形態の発展の前提としてあった交換過程そのものが、今度は、第2章の分析の対象なのですから、諸商品の交換過程の発展が、こうした交換過程の三つの矛盾に対応していると言いうるのではないかと考えられるわけです（だからまた、当然、交換過程の三つの矛盾は、価値形態の三つの発展段階にも対応しているとも言えます）。

◎第6パラグラフ

[6] 〈(イ)わが商品所有者たちは、当惑してファウストのように考えこむ。(II)はじめて行動ありき。(H)したがって、彼らは考える前にすでに行動していたのである。(C)商品の性質の諸法則は、商品所有者の自然本能において確認されたのである。(H)彼らは、彼らの商品を一般的等価としての他の何らかの商品に対立的に関係させることによってしか、彼らの商品を価値として、商品として、たがいに関係させることができない。(A)このことは、商品の分析が明らかにした。(I)だが、もっぱら社会的行為だけが、ある特定の商品を一般的等価にすることができる。(F)だから、他のすべての商品の社会的行動がある特定の商品を排除し、この排除された商品によって他のすべての商品はそれらの価値を全面的に表示

するのである。(l)これによって、この排除された商品の現物形態が社会的に通用する等価形態となる。(x)一般的等価であるということは、社会的過程によって、この排除された商品の特有な社会的機能となる。(ll)こうして、この商品は一貨幣となる。

(7)「この子どもは、心一つにしており、自分たちの力と権威を獣(けつ)にゆだねる。(7)この刻印のあるものでなければ、だれも物を買うことも売ることもできないようになった。(h)この刻印とはあの獣の名、あるいはその名を表す数字である **Illi unum consilium habent et virtutem et potestatem suam bestiae tradunt. Et ne quis possit emere aut vendere, nisi qui habet characterem aut nomen bestiae, aut numerum nominis ejus.**」(ヨハネ黙示録。)

(i)、(ii)、(iii) 商品所有者は、困り果ててファウストのように考え込みます。はじめに行動ありき。つまり彼らは、考え込む以前に行動していたのです。

〈はじめに行動ありき〉というのは、ゲーテ『ファウスト』第1部「書齋」でのファウストの言葉ですが、この部分については、所沢の「『資本論』を読む会」の資料を紹介させていただきます。それは次のようなものです。

【●《太初(はじめ)に業(わざ)ありき》について、NHKドイツ語講座のテキストで以下のように述べられていることが紹介されました。

聖書(ヨハネによる福音書1章1節)の「Im Anfang war das Wort はじめに ことばがあった」について《ここで言われているdas Wort「ことば」は、おしゃべりの言語や話し言葉といういみではなく、ギリシャ語の言語ではLogos ロゴス、つまり神の意志、理念、力、神の行動とそのことば、イエス・キリスト、といった複雑な意味を込めた語です。》《ウルフィアがロゴスをそのままの音で使わず、「ことば」と訳したのが、現代までの聖書訳の原型になっています。》《ゲーテは、ルネサンス的行動の巨人ファウスト博士に、このロゴスをこう訳させています。「誠実な心で 神聖な原文を わが愛するドイツ語に訳そう。 こう書いてある、「太初(はじめ)にことばがあった」。 ここで俺はもうつまずく、よい知恵はないものか。 ことばというものを、そう高くは尊重できぬ。・・・霊の力だ！ 俺にはよい知恵がありありと見える。 そして安んじて記す、はじめに行動があった、と。 [注]Tat : 行為、行動。ここでは人間の行動、そして神の行為という意味も込められています。》】

(ii) つまり商品の性質の諸法則は、商品所有者の自然のおもむくままにその行動によって確認されたのです。

(h) 彼らは、彼らの商品を価値として、互いに関係させようとするなら、他の何らかの商品に対して、共同して、それを一般的等価として対立的に関係させることしかないのである。

(h)、(t) こうしたことは第1章における商品の分析がきらかにしたことです。しがしどの商品が一般的等価物になるかということは、ただ社会的行為だけが決めることです。理論的考察によって決まることではないのです。

諸商品の交換関係が、価値形態としては一般的価値形態にまで発展せざるを得ないことは、第1章「商品」の第3節「価値形態または交換価値」のなかで明らかにされました。しかし、現実の商品の交換過程のなかで、如何なる商品が商品世界からはじき出されて、一般的等価物として登場するかは理論的に明らかになるものではないのです。それは実際の歴史的・社会的過程によって、すなわち諸商品の社会的行為だけが決めるものなのです。

(f)、(l) だから、他のすべての商品の社会的行動が、ある特定の商品を除き、この排除された商品によって、他のすべての商品が、自分たちの価値を表現することになります。こうして、この排除された商品の現物形態が社会的に通用する等価形態になるわけです。

(x)、(ll) 一般的等価であるということは、社会的過程によって、この排除された商品の特有な社会的機能となり、こうしてこの商品は貨幣になるわけです。

(7)、(7)、(h) (「ヨハネ黙示録」からの引用)

これは書き下し文は不要と考えます。この「ヨハネの黙示録」からの引用は、このパラグラフの最初のファウストの言葉に対応させていると考えられます。

ところでこのパラグラフの最初に出てくる〈はじめに行動ありき〉については、以前、大阪で開催していた「『資本論』を学ぶ会」のニュースで次のように論じたことがあります。参考のために紹介しておきましょう。

【<◎「はじめに行為ありき」とは理論的破産？>

さて、マルクスは先に紹介したように、交換過程に潜む三つの矛盾を明らかにした後に、突然、第六パラグラフで〈わが商品所有者たちは、当惑してファウストのように考え込む。はじめに行為ありき。彼らは考えるまえにすでに行動していたのである。・・・もっぱら社会的行為だけが、ある特定の商品を一貨幣にすることができる〉と述べています。この部分は久留間敏造氏によれば、〈マルクスはここで、理論的に解決不可能な問題を商品所有者の行為が解決するものとして説明しているのだ〉と主張し、〈そういう「説明」は説明ではなく、理論的破産を意味するものでなければならぬとして、ここにマルクス批判の一つの根拠を見いだそうとする試みがあらわれ〉(『価値形態論と交換過程論』24頁)たのだと述べています。もちろん、久留間氏はこうした批判が根拠のないものであることを論証しているのですが、それによれば、〈貨幣は――商品生産のすべてのその他の関係と同様に――自然発生的なものであって反省の産物ではないということ、ブルジョア経済学者がしばしばいっているように「発明」されたものではないということ、いささかしゃれたいい方だといっているものにすぎない〉と説明しています。

これはこの限りでは、正しく異論はないのですが、ただマルクスがこの第六パラグラフと、さらにこれまでの分析の結論部分と考えられる第七パラグラフに続いて、第八パラグラフから貨幣発生論の歴史的考察に移っていることを考えると、こうした説明だけで果たして十分なのだろうかと考えます。

ここではマルクスは、久留間氏がいうように貨幣は「発明」品ではなく、自然発生的な産物だというだけでなく、〈だが、もっぱら社会的行為だけが、ある特定の商品を一貨幣にすることができる〉とも述べています。つまりどの商品が貨幣になるかは、理論の問題ではなく、現実の社会的過程によって決まるのだ、ともいっているように思えるのです。だからマルクスは第八パラグラフから商品交換の歴史的な発展を分析的にあとづけて、まず最初の一般的等価形態は、それを生み出す一時的な社会的接触とともに発生し、それとともに消滅すること、しかしそれはすぐに商品交換の発展につれて、特殊な種類の商品に固着し、貨幣形態に結晶すること、しかしさしあたりそれが何に固着するかは偶然であるが、しかしますます商品交換が発展していくにつれて、最終的には貴金属に移っていくことが明らかにされて

います。つまり貨幣形態が最終的に貴金属に固着するには理由はありますが、しかしそれがそうなるのは社会的行為によってなるのだとしているのです。

このようなマルクスの歴史的考察の挿入は、『資本論』では他にも多く見られます。例えば、絶対的剰余価値の生産から相対的剰余価値の生産に移る間に、労働日をめぐる階級闘争の長い歴史的考察が見られます。マルクスは「第八章 労働日」の第一節の最後で次のように述べています。

かくして、資本制の生産の歴史においては、労働日の標準化は、労働日の諸限度をめぐる闘争――総資本家すなわち資本家階級と総労働者すなわち労働者階級との間の一つの闘争――として現われる。

そして第二節から、長い歴史的考察を始めているのです。つまり絶対的剰余価値の生産を限界づける労働日の標準化そのものは、一つの社会的行為、すなわち現実の階級闘争そのものが決めるのです。そしてそうした歴史的な闘いによって制限された労働日を前提にして、資本は今度は生産様式の変革による相対的剰余価値の生産に移行すると展開していくのです。

マルクスは『経済学批判要綱』では、〈われわれの方法が、どのような点で歴史的考察がはじまらなければならないかを、……指し示している〉（高木訳Ⅲ396頁）とか〈叙述の弁証法的な形態は、自己の限界を設けているばあいにはのみに正しい〉（同Ⅴ1069頁）と述べています。交換過程のこの部分についても、マルクスはそうした歴史的考察を指し示すものとして、「ファウストの当惑」を挿入しているのだと思うのですが、どうでしょうか？（同ニュースNo.28）

.....

【付属資料】

●第4パラグラフ

《初版本文》

〈どの商品所有者も、自分の商品を、自分の必要をみたく使用価値をもっている他の商品と引き換えにのみ、譲渡しようと思う。そのかぎりでは、交換は、彼にとっては個人的な過程でしかない。他方、彼は、自分の商品を、価値として実現しようと思う、つまり、自分自身の商品が他の商品の所有者にとって使用価値をもつていようといまいと、それを、他の気に入った同じ価値の商品でありさえすればどの商品においても、実現しようと思う。そのかぎりでは、交換は、彼にとっては一般的・社会的過程である。といっても、同じ過程が、どの商品所有者にとっても同時に、たんに個人的であるとともにたんに一般的・社会的である、ということはない。〉（72-3頁）

《フランス語版》

〈各々の商品所有者は、自分の必要をみたく使用価値をもつ他の商品と引き換えにしか、自分の商品を譲渡しようとはしない。この意味では、交換は彼にとって個別的な仕事でしかない。おまけに、彼は自分の商品を、価値として、自分の気にいる同価値のどんな商品のうちにでも実現しようとする。このばあい、自分自身の商品が他の商品所有者にとって使用価値をもっているかどうかは、問わない。この意味では、交換は彼にとって一般的な社会的行為である。だが、この同じ行為がすべての商品交換者にとって同時に、たんに個別的であるとともにたんに社会的、一般的でもあるということはない。〉（63頁）

●第5パラグラフ

《初版本文》

〈もっと詳しく見ると、どの商品所有者にとっても、他人の商品はどれち自分の商品の特殊な等価物と見なされ、したがって、自分の商品はすべての他商品の一般的な等価物と見なされる。ところが、すべての商品所有者が同じことを行なうから、どの商品も一般的な等価物ではなく、したがってまた諸商品は、それらが価値として等置され価値量として比較されあうところの、一般的な相対的価値形態を、もっていない。だから、諸商品は、一般的には、商品として相対するのではなく、生産物または使用価値としてのみ相対することになる。〉（73頁）

《フランス語版》

〈もっと細かく事態を考察してみよう。各々の商品所有者にとって、他人の商品はどれも自分の商品の特殊な等価物であり、したがって、自分の商品は他のすべての商品の一般的等価物である。ところが、すべての交換者が同じ状態にあるから、どの商品も一般的な等価物ではなく、諸商品の相対的価値は、これらの諸商品が価値量として比較されることのできる一般的な形態を、なんらもたない。要するに、諸商品は互いに相手にたいして商品の役割を演じるのではなく、単なる生産物、あるいは使用価値の役割を演じるわけである。〉（63頁）

●第6パラグラフ

《初版本文》

〈わが商品所有者たちは当惑のあまりファウストのように考え込む。初めに行為ありき、と。だから、彼らは、考えるよりも以前にすでに行っていたのだ。商品の本性の諸法則は、商品所有者たちの自然本能において実証されている。彼らが、自分たちの商品を、価値として、それゆえに商品として、互いに関係させることができるためには、彼らが、自分たちの商品を、一般的な等価物としてのなんらかの別の商品に対立的に関係させる、という手段にたよるほかない。このことは、商品の分析が明らかにしたところである。ところが、社会的な行為だけが、ある特定の商品を一般的な等価物にすることができる。だから、すべての他商品の社会的な行為が特定の商品を除く、この商品のうちに、すべての他商品が自分たちの価値を全面的に表わすことになる。このことによって、この商品の現物形態が、社会的に認められる等価形態になる。一般的な等価物であるということが、社会的過程によって、この排除された商品の独自の社会的機能になる。こうして、この商品は――貨幣になるのである。「彼らは心をついておのこうして、がちからと權威とをけものにあたう。このしるしをもたぬすべての者に売り買いすることを得ざらしめたり。そのしるしはけもの名、もしくはその名の数字なり。」（ヨハネ黙示録。）〉（73頁）

〈われわれの交換者たちは困り果てて、ファウストのように考える。初めに行為ありき、と。したがって、彼らは考えるよりも前にすでに行動していたのであって、彼らの自然本能は、商品の性質から生ずる法則を確認するにすぎない。彼らが自分たちの物品を価値として、したがって商品として比較できるのは、もっぱら、彼らが自分たちの物品を、これにたいして一般的等価物として置かれる他のなんらかの商品と比較することによってのことである。このことは、上述の分析がすでに証明したところである。だが、この一般的等価物は、社会的行為の結果でしかありえない。だから、特殊な一商品が、他の諸商品の共同行為によって除外されて、他の諸商品の相関的価値を表示するのに役立つわけである。このようにして、この商品の自然形態が、社会的に有効な等価形態になる。それ以後は、一般的等価物の役割がこの除外された商品の独自の社会的機能になり、この商品が貨幣になる。「彼らは心を一つにしておのがちからと權威とをけものにあたう。このしるしをもたぬすべての者に売り買いすることを得ざらしめたり。そのしるしはけもの名、もしくはその名の数字なり」(ヨハネ黙示録)。〉

『資本論』を読んでみませんか

野田政権は消費税増税のためには、社会保障改革で同党が公約したものをことごとく捨て、自民・公明案を丸飲することも辞さない構えのようである。

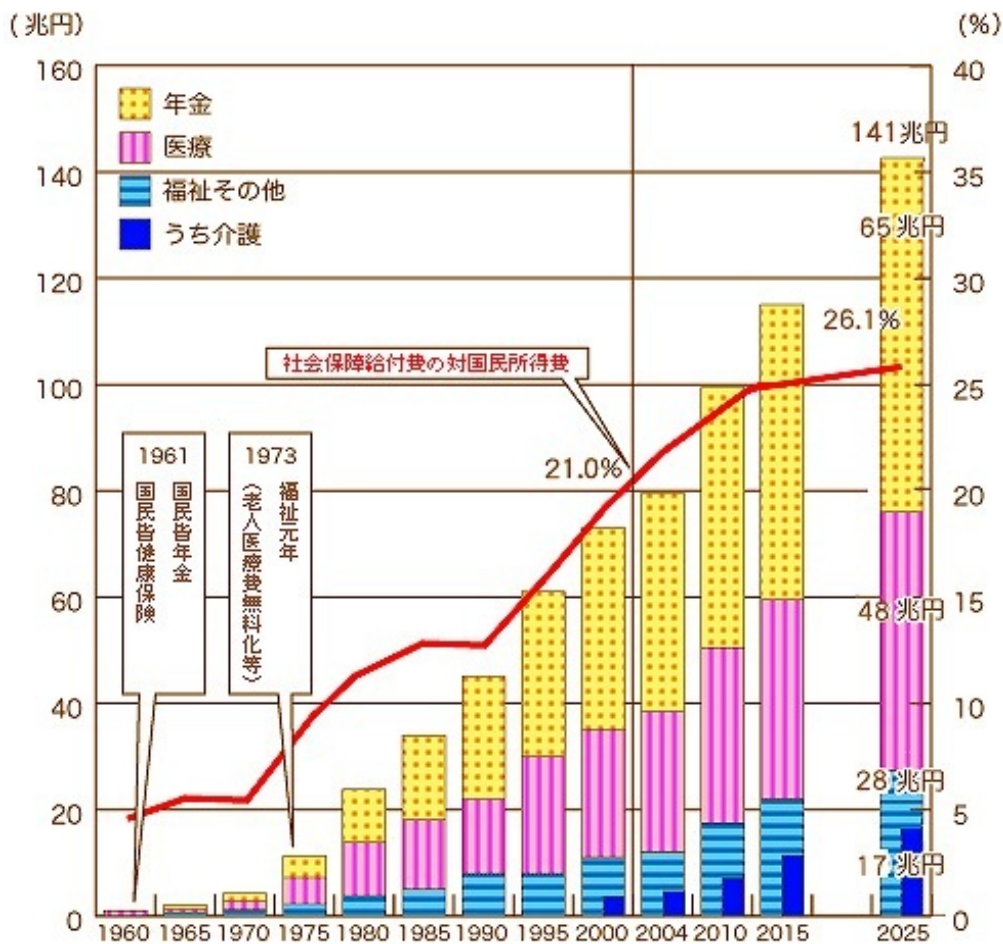
与野党の協議では、すでに消費税を14年に8%、15年に10%と二段階で引き上げるとした民主党案を自民・公明が受け入れ、基本合意に達したとされている。

あとは社会保障改革であるが、自民・公明は民主党が掲げる最低保障年金制度や後期高齢者医療制度廃止の撤回を求め、自民党の社会保障基本法案の丸飲みを要求しているという。そして野田首相は、13日、自民党案へ歩み寄る姿勢を示した。

もはや「税と社会保障の一体改革」は有名無実化し、民主党が選挙で掲げた社会保障改革は置いてきぼりをくらい、ただ消費税増税論議だけが突っ走っていると言ってよい。しかし、これでは本末転倒も甚だしい。そもそも消費増税が必要なのは、少子高齢化社会の到来によって、現行の年金制度等がこのままでは立ち行かなくなる、だから社会保障制度全体を見直し、改革する必要がある。しかし、そのための財源が必要、だから消費増税だ、というのが同党の説明ではなかったのか。もっとも、同党の選挙向けのマニフェストでは、当面は消費増税は不要で、行政の無駄を徹底的に省けば、改革に必要な財源などはいとも簡単にひねり出せるなどとも主張してきたのではあったが。

しかし、いまでは、その肝心要の社会保障制度の抜本的な見直しが棚上げされ、ただ消費増税だけが先走りしている。これでは国民に対する二重三重の裏切りではないか。そもそも消費増税は当面はやらないというのが民主党の約束だった筈である。にも関わらず、それを持ち出してきたことがまず一つの裏切りであり、その増税の根拠としてきた社会保障制度の改革さえ棚上げするとなれば、さらなる裏切りだからである。

少子高齢化社会の到来とともに、社会保障費が増大していることは一つの事実である。しかし、それらはすでに何度も述べてきたように、現在の社会が資本主義の社会であるが故である。例えば年金にしても、資本が一定の年齢に達した労働者を機械的に退職に追いやる制度から不可避に必要となっているものである。高齢者の大半は、それぞれの年齢に応じた仕事を与えられるなら、幾らでも働く能力も意志も持っている。本当に社会から保障されなければならないほどの高齢に達しているような人は、決して多くはないのである。



マルクスは一定の年齢以上のすべての子供たちや高齢者にも、それぞれの年齢に相応しい適切な労働が必要であること、例えば子供たちの場合は、教室に缶詰になって一方的に知育を押しつけられるより、教育と生産的労働とを結合した方が、教育への子供たちの意欲を引き出し、全面的に発達した個性を作り出すことができることや、さまざまな年齢層の男女の労働者が職場で共同して働く方が、生産力を高めうるだけでなく、人間的発達の源泉になりうることを次のように指摘している。

〈ロバート・オーエンをくわしく研究すればわかるように、工場制度から未来の教育の萌芽が芽ばえたのであり、この未来の教育は、社会的生産を増大させるための一方法としてだけでなく、全面的に発達した人間をつくるための唯一の方法として、一定の年齢以上のすべての児童に対して、生産的労働を知育および体育と結びつけるであろう。〉（『資本論』第1巻、全集23a629-30頁）

〈結合労働人員の構成が、両性のきわめてさまざまな年齢層の諸個人からなっていることは、労働者が生産過程のために存在し生産過程が労働者のために存在するのではないという自然成長的で野蛮な資本主義的形態においては、退廃と奴隷状態との害毒の源泉であるけれども、適当な諸関係のもとでは、逆に人間的発達の源泉に急変するに違いない。〉（同上、全集23a637-638頁）

いずれにせよ、社会保障の抜本的改革は民主党の公約である。消費増税なしでそれが可能としたのが同党の約束であったが、いまではそれは公然と反故にされ、そればかりか社会保障制度の改革まで棚上げされて、消費増税一本槍では、国民は納得できない。民主党は国民との約束を守れないなら、さっさと政権から身を引くべきではないか。

「税と社会保障の一体改革」の欺瞞を暴くためにも、貴方も共に『資本論』を読んでみませんか。

第47回「『資本論』を読む会」の報告

◎原発再稼働反対デモに20万人！

毎週金曜日に首相官邸前で行われてきた原発の再稼働に反対する集会は、6月22日は主催者発表で4万5千人とされていましたが、7月1日の大飯再稼働を前にして、29日には、爆発的と言ってもよいほど増えて、同20万人という規模に膨れ上がりました。

これは政党や労働組合等による組織的な動員などはまったくなく、ごく普通の市民が、ツイッターなどインターネットで得た情報をもとに集まったものだと思います。だから動員規模が大きくても、統制がとれず、ただ集まり、思い思いに抗議の意志を示したというものに過ぎないのかも知れません。しかし、これがさらに膨れ上がって、「アラブの春」のように何百万人もの規模になれば、そして自然発生的にせよ、何らかの組織的な統制がとれてくれば、時の政権といえども無視することは出来なくなるでしょう。

その意味では、インターネットという新しい情報機器とネットワークの形成は、政治的闘いの形態そのものを変化させ、旧態然たる古い組織にしがみついているような運動体はもはや現実の運動から見放され、新しい階級闘争の形態から弾き飛ばされてしまうのかも知れません。

しかし現実の運動形態がどのように変わろうとも、その運動がめざす将来の社会が、自覚した個人によって自主的に営まれるものであるならば、それは彼らが、彼らをとりにくく客観的な歴史的・社会的な現実を科学的に認識して、彼ら自身の社会的物質代謝を意識的に統制することにかかっています。だから、現実を科学的に認識することは不可欠の契機なのです。現実の資本主義的生産様式とそれが不可避に向かうであろう未来の新しい生産様式の萌芽を理論的に解明している『資本論』から真剣に学ぶことは、また不可欠のことだろうと思っています。

というわけで、“我田引水”の誹りを受けそうですが、私たちの「『資本論』を読む会」は、一見迂遠のようであるが、その意義は大きいものと確信します。

まあ、その意義を確認したところで、前回の報告を行うことにします。前回は第7と第8の二つのパラグラフを進みました。これまでと同じように、まず本文を紹介し、各文節ごとに記号を付して、それぞれについて平易な解説を行いながら、そのなかで議論の紹介も行っていくことにします。

◎第7パラグラフ

【7】 〈(i)貨幣結晶は、種類を異にする労働生産物が実際にたがいに等置され、したがって実際に商品に転化される交換過程の必然的産物である。(ii)交換の歴史的な拡大と深化は、商品の性質のうちに眠っている使用価値と価値との対立を発展させる。(iii)交易のためにこの対立を外的に表示しようとする欲求は、商品価値の自立した形態へと向かわせ、商品と貨幣との商品の二重化によってこの自立した形態が最終的に達成されるまでとどまることを知らない。(iv)したがって、労働生産物の商品への転化が生じるのと同じ度合で、商品の貨幣への転化が生じるのである(40)。〉

(i) 貨幣というのは、種類の違う労働生産物が実際にたがいに等置されて、商品に転化される交換過程の必然的な産物なのです。

先のパラグラフでは、それまで分析されてきた交換過程の矛盾が、結局は、現実の交換過程における当事者である商品所持者たちの社会的行為によって、そうした矛盾は解決されること、だから諸商品のなかでどの商品が貨幣になるかは歴史的・社会的に決まってくるのが指摘されたのでした。

だからこのパラグラフでは、そうした指摘を受けて、だから貨幣結晶というのは、交換過程の必然的産物であり、それは商品に内在する対立が、交換の歴史的発展のなかで、外的な対立として表示されたものだという指摘がされています。

同じような説明は、『経済学批判』でも次のようになされています。

〈それ（貨幣——引用者）は、諸商品が交換過程そのものにおいて形成する、諸商品の交換価値の結晶である。〉（全集13巻33頁）〈貨幣は反省や申合せの産物ではなく、交換過程のなかで本能的に形成されるのであるから、きわめて多様な、多かれ少なかれ不適当な諸商品が、かわるがわる貨幣の機能を果たしてきた。交換過程の発展のある段階で、交換価値と使用価値との規定が諸商品のあいだに両極的に配分され、たとえば一つの商品は交換手段として機能するのに、他の商品は使用価値として譲渡されるようになる必然性にもなって、いたるところで最も一般的な使用価値をもっている一つまたはいくつかの商品が、さしあたり偶然に貨幣の役割を演じるようになる。これらの商品が当面の欲望の対象ではないにしても、素材の点で富の最も重要な構成成分であるというその定在が、それらに他の使用価値よりもいっそう一般的な性格を保証する。〉（同34頁）

(H)、(A) 交換の歴史的な広がりや深まりは、商品のなかに眠っている使用価値と価値との対立を進展させます。そして交易の必要のために、この対立を外的に表示しようとする欲求は、商品価値の自立した形態へと向かわせ、商品と貨幣への商品の二重化によって、この自立した形態が最終的に達成されるまでとどまることを知らないのです。

(c) だから、労働生産物の商品への転化が行われるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化も生じてくるのです。

さて、学習会では、このパラグラフの位置づけについて若干の議論になりました。報告者の J J 富村さんは、このパラグラフは、次のパラグラフへの橋渡しの位置にあるのではないかとの意見でしたが、亀仙人は、そうした位置づけもあるが、むしろそれまでの交換過程の矛盾の分析を踏まえて中間的に総括する位置づけもあるのではないかと主張しました。つまり第 6 パラグラフで、交換過程の矛盾は、結局は、社会的行為によって解決されること、それは理論の問題ではなくて、現実の交換過程の歴史的・社会的行為そのものが解決する問題だという指摘を受けて、貨幣は交換過程の必然的結晶であることが指摘され、交換過程の歴史的発展こそが貨幣を産み出したということがこのパラグラフでは指摘されていると思います。そして次のパラグラフから、実際の諸商品の交換の歴史的考察が始まると考えられるわけです。

ところで、このパラグラフは、他のパラグラフに較べて、初版本文が比較的大きく書き換えられたところでもあります。初版本文では次のようになっていました。

〈貨幣結晶は、諸商品の交換過程の必然的な産物である。使用価値と交換価値との直接的な統一としての商品の、有用な諸労働の一つの自然発生的な総体系すなわち分業の個々別々にされた一肢体であるにすぎない有用な私的労働の生産物としての商品の、そしてまた、抽象的な、人間的な、労働の・直接的に社会的な具象物としての商品の、内在的な矛盾――この矛盾は、それが商品と貨幣とへの商品の二重化の形をとるまでは、とまりもしなければ休みもしない。だから、労働生産物の商品への転化が行なわれるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化が行なわれるのである (35)。〉 (73-4頁)

この初版本文と較べると第二版では歴史的な考察が前面に出ているような気がします。マルクスは、実際、次のパラグラフから交換の歴史を辿り、そこから如何にして貴金属が貨幣として商品世界から排除されていくかを明らかにするのですが、このパラグラフは、そのための導入であるとともに、それまでの交換過程の分析を締めくくるものでもあると言えるのではないのでしょうか。

◎注40

【注40】 〈(40) これによって、小ブルジョア社会主義の小ささを判断されたい。それは、商品生産を永遠化し、しかも同時に「貨幣と商品との対立」を、したがって、貨幣そのものを――というのは、貨幣はこの対立においてのみ存在するのだから――廃止しようとするのである。それができるなら、教皇を廃止して、しかもなおカトリック教会を存続させることもできるであろう。これについての詳細は、私の著作『経済学批判』の 61 ページ以下〔『全集』、第 13 巻、66 ページ以下〕。〉

この注は貨幣は商品交換の歴史的発展の必然的産物であり、だから商品生産を認めながら、貨幣を無くそうという小ブルジョア社会主義者たちの主張の無意味さを指摘していると思いますが、ここに出てくる〈小ブルジョア社会主義〉については、すでにこれまで出てきた原注 24 と 38 でも次のように紹介されていました。

〈(24) じっさい、一般的直接的交換可能性の形態を見ても、それが一つの対立的な商品形態であって、ちょうど一磁極の陽性が他の磁極の陰性と不可分であるように非直接的交換可能性の形態と不可分であるということは、けっしてわからないのである。それだからこそ、すべての商品に同時に直接的交換可能性の極印を押すことができるかのように妄想することもできるのである。それは、ちょうど、すべてのカトリック教徒を教皇にすることができるかと妄想することもできるようなものである。商品生産に人間の自由と個人の独立との頂点を見る小市民にとっては、この形態につきもののいろいろな不都合、ことにまた諸商品の非直接的交換可能性から免れるということは、もちろんまったく望ましいことであろう。この俗物的ユートピアを描きあげたものがブルドンの社会主義なのであるが、それは、私がほかのところで示したように、けっして独創という功績などのあるものではなく、むしろ彼よりもずっと前にグレーやプレーやその他の人々によってもっとずっとよく展開されたのである。こういうことは、このような知恵が今日でもある種の中間のあいだで「科学」という名のもとに流行しているということを妨げないのである。ブルドンの学派ほど「科学」という言葉を乱用した学派はかつてなかった。じっさい、

「まさに概念の欠けているところに、言葉がうまくまにあうようにやってくるものなんだ。」〉

〈(38) ブルドンは、まず第一に、正義、永遠の正義という彼の理想を、商品生産に対応する法的関係から汲み取る。ついでに言えば、これによって、商品生産という形態も正義と同様に永遠だというすべての俗物にとって大いに慰めになる証明も与えられるのである。次に彼は、逆に、現実の商品生産やそれに対応する現実の法をこの理想に従って改造しようとする。もしも、物質代謝の現実の諸法則を研究して、これを基礎として、一定の課題を解決しようとはしないで、そのかわりに「自然状態」や「親和性」という「永遠の理念」によって物質代謝を改造しようとする化学者があるとしたら、ひとはこんな化学者をどう思うだろうか？ ひとが、高利は「永遠の正義」や「永遠の公正」や「永遠の相互扶助」やその他の「永遠の真理」と矛盾すると言うとき、ひとが「高利」について知るところは、教父たちが、高利は「永遠の恩寵」や「永遠の信仰」や「神の永遠の意志」と矛盾すると言ったとき、彼らが高利について知っていたところよりも、はたしてより多いであろうか？〉

またこの注では、『経済学批判』が参考文献に上げられていますが、『批判』の当該部分ではジョン・グレーの〈労働時間を貨幣の直接の度量単位だとする学説〉が批判されています。グレーは商品に含まれている労働を直接尺度にして銀行を介して、社会的に生産物の交換が可能としたのですが、それに対して、マルクスは次のように批判しています。

〈労働時間が価値の内在的尺度であるのに、なぜそれとならんでもうひとつの外在的尺度があるのか？ なぜ交換価値は価格に発展するのか？ なぜすべての商品は排他的な一商品でその価値を評価し、こうしてこの商品が交換価値の十全な定在に、貨幣に転化されるのか？ これこそグレーの解決しなければならなかった問題であった。これを解決するかわりに、彼は商品は社会的労働の生産物として直接互いに関係しあうことができる、と想像する。だが諸商品は、ただそれらがあるがままのものとして互いに関係しあえるにすぎない。諸商品は、直接には個別化された独立の私的労働の生産物であって、これらの私的労働は、私的交換の過程でその外化によって、一般的社会的労働であるという実を示さなければならない。すなわち、商品生産を基礎とする労働は、個人的労働の全面的な外化によってはじめて社会的労働となるのである。ところがグレーは、商品にふくまれている労働時間を直接に社会的なものと想定するのだから、彼はそれを共同体的な労働時間、つまり直接に結合された諸個人の労働時間だと想定することになる。そうだとすると、實際上、金や銀のような独特な一商品が、一般的労働の化身として他の諸商品に対立することはできないし、交換価値は価格とはならないであろう。それで使用価値も交換価値にならず、生産物は商品とならず、こうしてブルジョアの生産の基礎が揚棄されてしまうであろう。しかし、グレーの意見は、けっしてこうではない。生産物は商品として生産されなければならないが、商品として交換されてはならない、というのである。グレーは、この敬虔な願望の達成を国民銀行にまかせる。社会は一方では、銀行のかたちで個人を私的交換の諸条件から独立させ、他方では、同じ個人に私的交換の基礎のうえで生産をつづけさせる。しかしグレーは、ただ商品交換から発生する貨幣を「改良」しようとしただけなのに、内面的に首尾一貫させようとして、彼はブルジョアの生産諸条件をつぎからつぎへと否定することになった。こうして彼は、資本を国民資本に、土地所有を国民的所有に転化させる。そして彼の銀行をこまかく観察すると、それは一方の手で商品を受け取り、他方の手で提供された労働にたいする証明書を発行するだけでなく、生産そのものをも統制していることがわかる。グレーはその最後の著作『貨幣に关する講義』で、小心翼翼として、彼の労働貨幣が純粹にブルジョア的な改良だ、と述べようとしているが、もっとひどい矛盾におちいつている。〉（全集13巻67-68頁）

◎第8パラグラフ

【8】 〈(i)直接的な生産物交換は、一面では単純な価値表現の形態をもっているが、他面ではまだそれをもっていない。(ii)あの形態は、x量の商品A=y量の商品Bであった。(iii)直接的な生産物交換の形態は、x量の使用対象A=y量の使用対象Bである(41)。(iv)AとBという物は、ここでは、交換の前には商品ではなく、交換を通してはじめて商品となる。(v)ある使用対象が可能性からみて交換価値である最初の様式は、非使用価値としての、その所有者の直接的欲求を超える量の使用価値としての、その定在である。(vi)諸物はそれ自体としては人間にとって外的なものであり、したがって譲渡されるものである。(vii)この譲渡が相互的であるためには、人々は、ただ、黙って、その譲渡される諸物の私的所有者として、またまさにそうすることによって相互に独立の人格として、相対しさえすればよい。(viii)しかし、このようにたがいに他人である関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては――その共同体が、家父長制的家族の形態をとってしようと、古インド的共同体の形態をとってしようと、インカ国家などの形態をとってしようと――存在しない。(ix)商品交換は、共同体の終わるところで、諸共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の諸成員と接触する点で、始まる。(x)しかし、諸物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それらのものは反作用的に、内部的共同生活においても商品になる。(xi)諸物の量的交換比率は、さし当りはまったく偶然である。(xii)それらの物が交換されるものであるのは、それらをたがいに譲渡し合おうとする所有者たちの意志行為によってである。(xiii)しかし、そのうちに、他人の使用対象に対する欲求がしだいに固まってくる。(xiv)交換の不断の反復は、交換の一つの規則的な社会的過程にする。(xv)したがって、時の経過と共に、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換めあてに生産されざるをえなくなる。(xvi)この瞬間から、一面では、直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する。(xvii)諸物の使用価値は、諸物の交換価値から分離する。(xviii)他面では、それらの物が交換されあう量的比率は、それらの物の生産のものに依存するようになる。(xix)慣習はそれらの物を価値の大きさとして固定させる。〉

(i) 直接的な生産物の交換、つまり物々交換では、一面では単純な価値表現の形態を持っていますが、他面ではまだそれを持っていません。

ここから商品の交換過程の歴史的な発展の考察が始まるのですが、マルクスは、商品の交換の原生的形態として、労働生産物（使用価値）が商品になる条件の考察から始めています。『経済学批判』では、次のように述べています。

〈交換過程の原生的形態である直接的交換取引〔物々交換〕は、商品の貨幣への転化の開始というよりも、むしろ使用価値の商品への転化の開始をあらわしている。〉（全集13巻34頁）

つまり、まず労働生産物が商品になるのは歴史的にはどういう場合かという形で問題を始めているのです。労働生産物が商品になるのは、労働生産物の交換が一定の広がりや深さを獲得してからであることは、すでに第1章第4節のなかで、次のように述べていました。

〈労働生産物は、それらの交換の内部で、はじめてそれらのたがいに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換を目あてに生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がすでにそれらの生産のものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がりや重要性とを獲得した時である。〉（99頁）

第36回の報告では、この部分を、ここに出てくる「価値物」の理解と関連させて、次のように解説しました。

【ここでは交換されるのは「労働生産物」です。そして交換関係に潜む価値の表現形態ではなく、実際の交換そのもの（その歴史的な発展段階）が問題になっています。労働生産物の価値性格がハッキリ現れてくるのは、労働生産物の交換の一定の発展段階においてだということが指摘されているのです。その意味では、労働生産物の価値性格が明確に現れてきて、初めて労働生産物は「商品」になるとも言えるわけです。そうした問題を論じるなかで、「価値物」というタームが出てくるということがまず確認されなければなりません。

そしてパラグラフの本文にそって問題を考えてみますと、そこでは労働生産物が価値を持つのは、労働生産物の交換の内部においてであること、しかも、その労働生産物の交換がある程度発展して初めて、そうした労働生産物の価値性格がハッキリ現れてくるのだと述べているわけです。

われわれが商品の価値の形態を問題にした時には、交換されるのは商品であることは当然のことながら、前提されてきました。しかし、このパラグラフでは、労働生産物が交換され、その交換される労働生産物が価値を持つようになるのは、どういう交換の発展段階かが問題になっているのです。労働生産物一つの有用物です。つまりそれは本来は、直接に生産者の欲望を満たすものなのです。生産者は自らの欲望を満たすために、物を作るわけです。しかし、それが価値という性格を持つのは、もはやそれが彼の、つまりその労働生産物を生産した者の欲望を直接満たすものとしてではないのです。それは生産者にとっては、それ以前に持っていた有用物としての性格とは違ったものとして、すでに彼には現れているのだ、というわけです。だからマルクスはそうした性格は、有用物とは〈分裂して〉現れてくると述べているのだと思います。つまり労働生産物の交換が発展して、生産者がその生産物の価値性格を意識するような段階、つまり交換を目的に生産を行うような段階、そのような段階においては、労働生産物もはや生産者の欲望を直接満たす有用物ではなく、ただ彼のさまざまな欲望を満たすために必要なさまざまな他の労働生産物を彼が入手するための「手段」でしかなくなるわけです。だからここには、それが本来は持っていた有用物という属性とは分裂した、ある一つの属性が労働生産物に付け加わっているとマルクスは指摘しているわけです。それはすなわち他の労働生産物との「交換のための手段」という属性です。そしてその限りではそれは他の労働生産物と社会的に同等な性格を持ったものとして存在している、それをマルクスは「価値物」と述べているのだと思います。だから価値形態に出てくる「価値物」は、相対的価値形態にある商品の価値が一つの他の等価形態にある商品の物的姿をとって現れてきた物でしたが、このパラグラフにおける「価値物」とは、そうしたのではなく、労働生産物そのものが「価値物」として現てくるということ述べているのだと思います。

マルクスは、有用物と価値物とに労働生産物が分裂する段階を、労働生産物が、すでに交換を目的に生産される段階、だから生産においてすでにその価値性格を意識する段階と述べています。これは価値形態の発展段階としては、どの段階を意味するのでしょうか。それは労働生産物のうちの主に剰余物だけが、たまたま偶然に、個別的に、交換されるような段階ではないことは明らかです。だから価値形態の発展段階としては、形態Ⅰ（「簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」）の段階ではなく、形態Ⅱ（全体的な、または展開された価値形態）か、あるいは形態Ⅲ（一般的価値形態）の段階だと考えられます。形態Ⅱというのは、ある特定の労働生産物が次々と他のさまざまな労働生産物と交換されていく段階です。これは具体例を上げて説明しますと、遊牧民族がその遊牧の過程で、接触したさまざまな定着農耕民族と自分たちの生産物である羊を小麦やジャガイモなどと交換してゆくような段階と考えることができるでしょう。羊はすでにさまざまな労働生産物を自らの価値の表現形態にしますが、しかし羊と交換される小麦やジャガイモなどは、それらを生産する定着農耕民族にとっては剰余生産物であり、彼らからみれば、この交換は依然として個別的・偶然的なものにすぎないわけです。つまり彼らから見れば、価値形態としては形態Ⅰの段階です。しかし交換がさらに発展し、商品交換がそうした定着農耕民族までをも捉えるようになると、彼らも交換を目的に生産するようになり、互いの労働生産物をも交換し始めるようになりますが、そうした段階では彼らが自分たちの労働生産物の価値性格を羊という彼らにとって共通の物差しで秤量し、そうして互いの労働生産物を交換するようになった発展段階が、すなわち形態Ⅲだったわけです。】

だから直接的な生産物の交換の段階では、まだ労働生産物の価値性格は、ハッキリとは出てこない段階です。だからこそ、マルクスは〈直接的な生産物交換は、一面では単純な価値表現の形態をもっているが、他面ではまだそれをもっていない〉と述べているのだと思います。〈一面では単純な価値表現の形態をもっている〉というのは、単純な価値形態というのは、すでに労働生産物が商品になり、互いに交換されている現実を前提して、それらの交換関係を純粋に考察したものです。その限りでは、それは抽象的な思考の産物なのですが、しかし、そうした抽象性においては、それらは同時に、歴史的にはもっとも最初に現れるものにも妥当すると言えるからです。しかし〈他面ではまだそれをもっていない〉というのは、実際に歴史の最初に現れるものは、いまだ交換されるものは商品とは言えないからです。それらは労働生産物（使用価値）の交換とは言えても、商品の交換ではないからです。マルクスは、それを次に具体的に価値形態の等式を使って説明します。

(a)、(b)、(c) この形態は x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B というものでした。しかし直接的な生産物の交換の形態は、 x 量の使用対象 $A = y$ 量の使用対象 B なのです。つまり交換される生産物は、必ずしも商品になっているとはいえない場合もあるということです。 A と B という生産物は、ここでは、交換の前には商品ではなく、交換を通してはじめて商品になります。

最初の単純な価値形態（形態Ⅰ）は、 x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B でしたが、実際の直接的な生産物の交換は、いまだ商品の交換とはいえず、 x 量の使用対象 $A = y$ 量の使用対象 B 、つまり労働生産物（使用対象物）の交換に過ぎないのです。だからこそ、それらはいまだ単純な価値表現の形態をまだ持っていないのです。マルクスは〈 A と B という物は、ここでは、交換の前には商品ではなく、交換を通してはじめて商品となる〉と言っていますが、もちろん、〈交換を通して〉ということ、交換されれば、すぐに商品になるというふうに理解してはいけません。というのは、すでに説明したように、交換の一定の広がりや深まりを待って、初めてそれらは商品になると言えるのだからです。

(a) ある使用対象が可能性からみて交換価値である最初の様式は、非使用価値としての、その所有者の直接的欲求を超える量の使用価値としての、その定在です。

単なる生産物が交換の対象になり、よって商品になりうるのは、それが生産者自身の欲求を満たす以上に生産された剰余物としてあるということです。しかしここでも注意しなければならないのは、マルクスは〈可能性からみて交換価値である最初の様式〉と厳密に述べていることです。というのは剰余物であるということだけでは、まだそれらは商品になるとは言えないからです。個別の剰余物が、一時的・偶然的に交換される段階では、いまだ労働生産物は価値対象性を獲得したとはいえず、よっていまだ商品とは言えないからです。それらは〈可能性からみて交換価値である〉に過ぎないのです。

(a)、(b) 諸物はそれ自体としては人間にとっては外的なものですから、だから譲渡されうるものです。だからこの譲

渡が相互的であるためには、人々は、ただ、諸物の私的所有者として、そしてそうしたものとして互いに独立した人格として、相対すればよいわけです。

この文節は商品交換が前提する商品所有者相互の関係をもう一度、根底から問うものになっています。つまり「第2章 交換過程」の冒頭のパラグラフを彷彿とさせる内容になっているわけです。もう一度、その部分を紹介しておきましょう。

〈商品は物であり、したがって人間に対して無抵抗である。……これらの物を商品としてたがいに関係させるためには、商品の保護者たちは、自分たちの意志をこれらの物に宿す諸人格としてたがいに関係しあわなければならない。それゆえ、一方は他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらも両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を譲渡することによって他人の商品を自分のものにする。だから、彼らはたがいに相手を私的所有者として認めあわなければならない。……諸人格は、ここではただ、たがいに商品の代表者としてのみ、したがってまた商品所有者としてのみ、存在する。〉

(f) しかし、このような互いに他人である関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては、存在しません。その共同体が家父長制的な家族の形態をとつていようと、あるいは古代インディの共同体の形態をとつていようと、インカ国家などの形態をとつていようと、私的な個人はいまだ存在していないからです。

こうした商品交換が前提する人間相互の関係そのものが、ここでは問題になっています。つまりそうした人間相互の関係（互いに私的所有者として認め合い相対する関係）というのは、決して歴史の端緒に存在するものではなく、一定の歴史的な発展段階において初めて生まれてくるものだとマルクスは言いたいわけです。原始共同体の社会では、個人は共同体に埋没していると、マルクスは次のように述べています。

〈人類の文化の発端で、狩猟民族のあいだで、またおそらくインドの共同体の農業で、支配的に行なわれているのが見られるような、労働過程での協業は、一面では生産条件の共有にもとついており、他面では個々の蜜蜂が巣から離れていないように個々の個人が種族や共同体の臍帯（シタイ）からまだ離れていないことにもとついていっている。〉（23a438頁）

またここに出てくる家父長制的な家族や古代インドの共同体、インカ国家等については、マルクスが第1章第4節で〈共同的な、すなわち直接的に社会化された労働を考察するためには、われわれは、すべての文化民族の歴史の入口で出会う労働の自然発生的形態にまでさかのぼる必要はない〉と述べていたものに該当するように思います。その時は、〈自家用のために、穀物、家畜、糸、リンネル、衣類などを生産する農民家族の素朴な家父長的な勤労が、もっと手近な一例をなす〉とここに出てくる〈家父長制的な家族の形態〉が例として上げられ、具体的に論じられていました。

それ以外の〈古インドの共同体の形態〉や〈インカ国家などの形態〉についても、マルクスはさまざまところで言及しています。今、その主なものを紹介しておきましょう。

〈古インドの共同体の形態〉について

〈たとえば、部分的には今日なお存続しているインドの太古的な小共同体は、土地の共有と、農業と手工業との直接的結合と、固定した分業とを基礎としており、この分業は、新たな共同体の建設にさいしては与えられた計画および設計図として役だっている。このような共同体は自給自足的な生産的全体をなして、その生産領域は百エーカーから数千エーカーに至るまでさまざまである。生産物の大部分は共同体の直接的自己需要のために生産され、商品として生産されるのではなく、したがって、生産そのものは、商品交換によって媒介されるインド社会の全体としての分業からは独立している。ただ生産物の余剰だけが商品に転化するのであり、しかも一部分は、いつともない昔から一定量の生産物が現物地代として流入してくる国家の手のなかではじめて商品に転化するのである。インドでも地方によって共同体の形態は違っている。最も簡単な形態では、共同体は土地を共同で耕作して土地の生産物を成員のあいだに分配し、他方、各家族は、紡いだり織ったりすることを家庭的副業として営んでいる。これらの一様な仕事をしている民衆のほかに、次のようなものが見いだされる。裁判官と警察官と徴税官とを一身に兼ねている「人民の長」。農耕について計算し、それに関係のあるいっさいのことを記録する記帳人。犯罪者を追及し、外來の旅行者を保護して一村から他村に案内する第三の役人。近隣の共同体の境界を見張る境界管理人。農耕のために共同貯水池から水を分配する水の監視人。宗教的行事の諸機能を行なうバラモン〔婆羅門〕。共同体の子供に砂で読み書きを教える教師。占星者として播種収穫の時期や、すべての特別な農耕作業の時期の適否を告げる暦術バラモン。あらゆる農具を製造し修理する鍛冶師と工匠。村に必要なすべての容器をつくる陶器師。理髪師。衣類を清潔にするための洗濯人。銀細工師。ところによっては詩人。これはある共同体では銀細工師の代わりをし、また他の共同体では教師の代わりをする。この一ダースほどの人々は共同体全体の費用で養われる。人口が増加すれば、新しい共同体が元のを模範として未耕地に設けられる。この共同体機構は計画的な分業を示してはいるが、しかしマニファクチャの分業は不可能である。というのは、鍛冶師や工匠などにとっての市場は変わることがなく、せいぜい、村の大きさの違いにしたがって一人の鍛冶師や陶器師が二人か三人になるくらいなものだからである(60)。共同体労働の分割を規制する法則は、ここでは自然法則の不可侵の權威をもって作用するのであるが、他方、鍛冶師などのようなそれぞれの特殊な手工業者は、伝統的な仕方に従って、しかし独立的に、自分の作業場ではどんな權威も認めることなく、自分の専門に属するあらゆる作業を行なうのである。このような、絶えず同じ形態で再生産され、たまたま破壊されてもまた同じ場所に同じ名称で再建される自給自足的な共同体の簡単な生産体制(61)は、アジア諸国家の不断の興亡や王朝の無休の交替とは著しい対照をなしているアジアの諸社会の不変性の秘密を解く鍵を与えるものである。社会の経済的基本要素の構造が、政治的雲上界の嵐に揺るがされることなく保たれているのである。

(60) 陸軍中佐マーク・ウィルクス『インド南部の歴史の概観』、ロンドン、一八一〇—一八一七年、第一巻、一一八一—二〇ページ。インド共同体のいろいろな形態の適切な比較対照は、ジョージ・キャンブル『現代インド』、ロンドン、一八五二年、のなかに見いだされる。

(61) 「この簡単な形態のもとで……この国の住民たちはいつともない大昔から暮らしてきた。村々の境界は、まれにしか変えられなかった。そして、村そのものはときには戦争や飢饉や疫病に見舞われ、また荒らされさへもしたが、同じ

名称、同じ境界、同じ利害関係、そして同じ家族さえもが久しく続いてきた。住民は王国の滅亡や分割には少しも心を煩わされない。村が完全に残っているかぎり、それがどんな権力に引き渡されようと、どんな君主にゆだねられようと、彼らは少しも気にかけない。村の内部の経済は相変わらず元のままである。」（元ジャワ副総督トマス・スタンフォード・ラフルズ『ジャワ史』、ロンドン、一八一七年、第一巻、二八五ページ。）（23a468-470頁）

〈インカ国家などの形態〉について

〈また他面では次のように言うことができる。非常に発展してはいても歴史的には比較的未熟な社会形態があって、そこにはどんな貨幣も存在しないのに、経済の最高の諸形態、たとえば協業や発展した分業などが見られるものがある、と。たとえばペルーがそれである。スラヴ人の共同体にあっても、貨幣や貨幣の生まれるための条件である交換は、個々の共同体の内部ではまったく現われないか、またはわずかしか現われないで、むしろ共同体の境界で他の共同体との交渉で現われる。じっさい、交換を共同体そのもののなかに本源的な構成要素としてもちこむことは、およそまちがいのなのである。むしろ、交換は、当初は、一つの同じ共同体のなかの諸成員のあいだでよりも別々の共同体の相互関係のなかでのほうがより早く現われるのである。〉（経済学批判への序説「経済学の方法」、全集13巻929-30頁）

〈もう一つの場合としては、統一体が労働そのものにおける共同性にまで拡大されることがありうるのであって、この共同性は、メキシコ、とくにペルーにおけるように、また古代ケルト人、インド人のいくつかの部族の場合のように、正式の一制度（システム）となっていることもある〉（草稿集②121頁）

〈たとえばペルーに見られるような共同の生産および共同所有は、明らかに、二次的な形態であって、征服諸部族によって導入され、移植されたものである。これらの征服諸部族は自分自身のところで、インドで、またスラヴ人のあいだで見られるような、古い、もっと単純な形態における共同所有および共同の生産を知っていたのである。〉（草稿集②142頁）

〈さらに明らかなことは、交換者たちが交換価値を生産するという前提が、単に分業一般を前提しているばかりでなく、分業の特殊な発展形態をも前提している、ということである。たとえばペルーでもやはり分業は行なわれていた。自給自足を行なっていたインドの小さい共同体においても同様である。しかしこの分業が前提しているものは、交換価値に基礎を置く生産ではないどころか、逆に多かれ少なかれ直接に共同態的な生産なのである。流通の諸主体が交換価値を、つまり直接に交換価値という社会的規定性のもとに置かれている生産物をすでに生産しており、したがってまた特定の歴史的姿態をまとったひとつの分業のもとに包摂されて生産を行なっている、という根本前提は、一連の諸前提を含んでいるが、これらは個人の意志から生じるものでもなければ個人に直接に具わっている自然的性質から生じるものでもなく、歴史的な諸条件と歴史的な諸関係から生じるものである。こうした歴史的諸条件および諸関係によって、個人はすでに社会的に、つまり社会によって規定されたものとして、存在している。上記の〔根本〕前提はまた、諸個人が流通のなかで対応しあう単純な生産諸関連とは別の、諸個人の生産諸関連のなかで現われる諸関係をも含んでいる。交換者が生産したものは商品であり、しかも商品を生産する者たちのために生産された商品である。このことは二つのことを含んでいる。一面では、交換者は、独立した私的個人として、自発的に、ただ自分自身の欲求と自分自身の諸能力によってのみ規定されて、自分自身からまた自分自身のために、生産を行なったのであって、ひとつの自然生長的な共同体の成員として行なったのもなければ、直接に社会的な個人として生産に参加し、したがってまた自分の生産物に対しても直接の生活源泉に対するようなふるまい方をしない個人として行なったわけでもない。しかし他面では、この私的個人が生産するものは交換価値である、つまり、ある特定の社会的過程、すなわちある特定の変態を通じてはじめて彼自身にとっての生産物になるような生産物である。だから私的個人はすでにひとつの連関のなかで、つまりある生産諸条件および交易諸関係のもとで、生産を行なっていたのである。この生産諸条件および交易諸関係は、ひとつの歴史的過程を通じてはじめて生成したものであるのに、彼自身の目には自然必然性として現われるのである。こうした意味で、個別的生産の独立性は、分業に適切な表現を見いだす社会的な依存性によって補完されている。

交換価値を生産する個人が行なう生産の私的な性格は、それ自身歴史的産物として現われる、――つまり、生産の内部での彼の孤立、点的な自立性は、ひとつの分業を条件としており、この分業はさらにまた、個人を他の個人との連関においても彼自身の存在様式においても、あらゆる側面から条件づけているような一連の経済的諸条件全体の上に成り立っている。〉（『批判』原初稿、草稿集③115-116頁）

〈ところで、私的交換が分業を前提とするというのは正しいが、分業が私的交換を前提とするというのは誤りである。たとえばペルー人のあいだでは、私的交換、商品としての生産物の交換はおこなわれなかったが、分業は極度におこなわれていたのである。〉（『批判』全集13巻44頁）

(1) だから商品交換は、共同体の終わるところで、諸共同体が他の共同体または他の諸共同体の成員と接触するところで、始まるのです。

(2) しかし、諸物がひとつたず対外的共同生活で商品になれば、それらのものは反作用的に、内部的共同生活においても商品になります。

『批判』では、〈ここで交換取引が始まり、そして、そこから共同体の内部にはねかえり、これに解体的な作用を及ぼす〉（13巻34頁）と指摘されています。

(4)、(7) しかし、諸物の量的交換比率は、さしあたりはまだ偶然的です。またそれらの物が交換されうるのは、それらを互いに譲渡し合おうとする所有者たちの意志行為によって決まってくるものです。その意味では、交換はまだ個人的な過程なのです。

これはまだ価値形態では形態1の段階（単純な、個別的な、偶然的な段階）と言えます。交換されるのは商品といえず、単なる使用対象（労働生産物）です。

(7)、(カ)、(3) しかし、そのうちに、他人の使用対象に対する欲求がしだいに固まってきます。交換の不断の反復は、交換を一つの規則的な社会的な過程にします。そして時の経過と共に、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換目当てに生産されるようになるのです。

これは価値形態では形態IIの段階（全体的なまたは展開された段階）といえます。ある特定の生産物（例えば猟師の毛皮や遊牧民の羊など）が、季節によって移動する遊牧民や狩猟民族がその行き先々で接するさまざまな定着農耕民と習慣的に交換を行っていくようになる段階です。交換は一つの規則的な社会的な過程になり、狩猟民や遊牧民自身の生活をささえる重要な柱になってきます。だから彼らは毛皮や羊を交換を目的に生産するようになるわけです。

(8)、(リ) この瞬間から、一面では、直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性との間の分離が確定します。諸物の使用価値は、諸物の交換価値から分離します。

この段階から、次々と他の生産物と交換を行う労働生産物は、それを行う者にとって、一つは自分たちの欲求を満たす生産物であると同時に、他面では、交換手段という新たな属性を獲得し、また彼らは彼らの生産物のうち自家需要のためのものと、交換のためのものというように物的にも区別し、分離するようになります。交換手段としてはそれは他の諸物との同等なものとして、価値対象性を持ったものとして存在することになります。

(9)、(7) 他面では、それらの物が交換されあう量的比率は、それらの物の生産そのものに依存するようになります。つまり習慣はそれらの物を価値の大きさとして固定するのです。

そしてそうなると、それらが交換される割合も、その偶然性は徐々になくなり、徐々にそれらの生産そのものに依存するようになり、やがては習慣はそれらを価値の大きさとして固定するようになるわけです。

さて、このパラグラフから、商品交換の歴史的發展を跡づけて、如何にしてそれが貨幣を産み出すかを論じていますが、しかし、このパラグラフでは、その最初のものとして、そもそも労働生産物が商品になるのは如何にしてか、ということから、マルクスは考察を開始しています。だから交換されるのは、いまだ商品ではなく、単なる使用対象（労働生産物）であり、その直接的な交換の形態（物々交換）というわけです。労働生産物が商品になるのは、こうした物々交換が一定の發展をとげ、一部の労働生産物が、少なくとも交換を目当てに生産されるようになってからだ、というわけです。

◎注41

【注41】 〈41〉 二つの異なった使用対象がまだ交換されず、未開人のあいだにしばしば見られるように、混沌とした諸物のひとかたまりがある第三の物の等価として提供される限りでは、直接的な生産物交換そのものはやっとその入口に立っただけである。〉

この注は〈直接的な生産物交換の形態〉そのものにも發展段階があることを示しています。つまり最初の〈直接的な生産物交換〉は、最初はひとかたまりの物が、他の物の等価として交換されるというようなものであり、いまだ個別の生産物同士が交換されるというものではなかったと指摘されています。学習会では、そもそも共同体のなかでは生産物は共同生産の結果であり個別の成員のものではなかった、だから共同体の首長が共同体を代表して、他の共同体やあるいはその成員と交換することになるが、もっとも最初の場合は、共同体を訪れた外部の者が、自分が属する共同体を代表して、自分の共同体からの贈り物としてひとかたまりの物を差し出し、それに対して、その送られた共同体の首長も、自分たち共同体の総意としてその共同体のあれこれの産物のひとかたまりを、返礼として差し出すというような形で始まったのではないかと、こうした段階では、最初は当事者には贈与とその返礼という認識がなく、「交換」するという意識がないのだから、いまだ〈直接的な生産物の交換の形態〉とさえ言えないような段階ではなかったかという意見も出ました。他方、マルクスは、〈直接的な生産物交換〉（すなわち物々交換）の一つの例として、『経済学批判』のなかで、貨幣の価値尺度の機能の観念的性格を説明して、実際上の取り引きは物々交換でありながら、しかし交換当事者たちは観念的な貨幣によって彼らの物の価値を尺度しながら、互いに交換し合う例を紹介しており（「またシベリアと中国とのあいだの商品交換では、実際上取引はたんなる交換取引〔物々交換〕にすぎないのに、銀が価格の尺度として役だっている。」全集13巻57頁）、こうした場合の物々交換は、その意味では、同じ〈直接的な生産物交換〉といえども、貨幣を前提したものであり、その限りでは発達した一連の社会的関係を前提したものでらうという意見も出されました。

【付属資料】

●第7パラグラフに関連するもの

《初版本文》

〈貨幣結晶は、諸商品の交換過程の必然的な産物である。使用価値と交換価値との直接的な統一としての商品の、有用な諸労働の一つの自然発生的な総体系すなわち分業の個々別々にされた一肢体であるにすぎない有用な私的労働の生産物としての商品の、そしてまた、抽象的な、人間的な、労働の・直接的に社会的な具象物としての商品の、内在的な矛盾――この矛盾は、それが商品と貨幣とへの商品の二重化の形をとるまでは、とまりもしなければ休みもしない。だから、労働生産物の商品への転化が行なわれるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化が行なわれるのである（35）。〉（73-

《フランス語版》

〈貨幣は、交換—この交換によって、さまざまな労働生産物が実際に互いに同等とされ、まさにそのために、商品に転化されるのである—のなかで自然発生的に形成される結晶である。交換の歴史的な発展は、ますます労働生産物に商品の性格を押しつけ、同時に、商品の性質が包蔵している対立、使用価値と価値との対立を発展させる。商業の必要性そのものは、この反立（アンチテーゼ）に体を与えることを強制し、手で触れることができる価値形態を産むことを目ざし、商品を商品と貨幣とに二重化することによってついにこの形態に達するまでは、もはや休止も中断も許さない。したがって、労働生産物の商品への一般的な転化が完成するのにつれて、商品の貨幣への転化もまた完成する（4）。〉（64頁）

●注40に関連するもの

《初版本文》

〈(35)この点から推して、小ブルジョア的な社会主義の狡猾さを判断せよ。この社会主義は、商品生産を永遠化しようとし、このことと同時に、「貨幣と商品との対立」を、したがって貨幣そのもの—なぜならば、貨幣はこの対立においてのみ存在しているのだから—を、廃止しようとする。もしそんなことができるなら、教皇を廃止してカトリック教を存続させることもできるであろう。これについてさらに詳しい事情は、私の著書『経済学批判』、61頁以下、を見よ。〉（74頁）

《フランス語版》

〈(4) 商品生産を永遠化し、同時に「商品と貨幣との対立」すなわち貨幣そのもの—貨幣はこの対立においてのみ存在するのであるから—を廃止しようとするブルジョア社会主義は、このことによって評価することができる。この問題については、私の『経済学批判』、61ページ以下を見よ。〉（64頁）

●第8パラグラフに関連するもの

《経済学批判》

〈交換過程の原生的形態である直接的交換取引〔物々交換〕は、商品の貨幣への転化の開始というよりも、むしろ使用価値の商品への転化の開始をあらわしている。交換価値は自由な姿を得ておらず、まだ直接に使用価値に結びつけられている。このことは二重に示される。生産そのものは、その全構造において使用価値を目的とし、交換価値を目的としていない。だから使用価値がここで使用価値であることをやめて、交換の手段、商品になるのは、ただ生産が消費のために必要とされる限度を越えることによってだけである。他方では、諸使用価値は、たとえ両極に配分されているとしても、直接的な使用価値の限界内でだけそれ自体商品となるのであって、したがって商品所有者たちによって交換される諸商品は、双方にとって使用価値でなければならないが、ただし各商品は、その非所有者にとっての使用価値でなければならない。実際には、諸商品の交換過程は、もともと原生的な共同体の胎内に現われるものではなく〔*〕、こういう共同体の尽きるところで、その境界で、それが他の共同体と接触する数少ない地点で現われる。ここで交換取引が始まり、そして、そこから共同体の内部にはねかえり、これに解体的な作用を及ぼす。だから、異なった共同体のあいだの交換取引で商品となる特殊な使用価値、たとえば奴隷、家畜、金属が、多くの場合、共同体そのものの内部での最初の貨幣を形成する。すでに見たように、一商品の交換価値は、その等価物の系列が長ければ長いほど、つまりその商品にとって交換の範囲が大きければ大きいほど、それだけますます高度に交換価値としてあらわされる。だから交換取引の漸次的拡大、交換の増大、交換取引にはいつくる商品の多様化は、商品を交換価値として発展させ、貨幣形成にまでおしすすめ、こうして、直接的交換取引に分解的な作用を及ぼす。経済学者たちは、拡大された交換取引がつきあたる外部的な諸困難から貨幣をみちびきだすのが例となっているが、そのさい彼らは、これらの困難は交換価値の発展、したがって一般的な労働としての社会的労働の発展から生じるものだということを忘れている。たとえば、こうである、商品は使用価値としては任意に分割可能ではないが、交換価値としては任意に分割可能でなければならない、と。あるいは、Aの商品はBにとって使用価値でありうるが、Bの商品はAにとって使用価値でない、と。あるいは、商品所有者たちが互いに交換しようとする分割できない商品を等しくない価値比率で需要することがありうる、と。言いかえれば、経済学者たちは単純な交換取引を考察するという口実のもとに、じつは使用価値と交換価値との直接的統一としての商品の定在が包み隠している矛盾のいくつかの側面をみずからに具体的に示しているのである。ところが、他方、彼らは一貫して交換取引を商品の交換過程の十全な形態として固執し、それにはただいくつかの技術的不便が結びついているだけであり、この不便にたいしてたくみに考案された方便が貨幣である、というのである。このまったく浅薄な立場からすれば、イギリスの才知にあふれた一経済学者が、貨幣は船や蒸気機関のように一つのたんなる物質的な用具であって、社会的生産関係の表示ではなく、したがってまたなんらの経済学的範疇ではない、と主張したのもっともだったのである。だから実際に技術学となんの共通するものももたない経済学で貨幣が振り扱われているのは、まったくまちがいだというのだ〔**〕。

〔*〕 アリストテレスは、最初の共同体としての私的家族について同じことを述べている。しかし家族の最初の形態はそれ自体種族的家族であって、その歴史的分解からはじめて私的家族が発展するのである。「なぜならば、最初の共同体社会（これが家族であるが）では、明らかにこれ（つまり交換）にたいする必要はすこしもなかった。」（前掲書）

〔**〕 「貨幣は実際には、売買をおこなうための用具にすぎないのであって、」（だが売買とはなんのことか？）「そして貨幣の考察が経済学の一部をなさないのは、船や蒸気機関、あるいはまた富の生産と分配を容易にするために用いられるその他のなんらかの用具の考察が、経済学の一部をなさないのと同じことである。」（トマス・ホジスキンの『通俗経済学等々』、ロンドン、一八二七年、一七八、一七九ページ）

商品世界では、発展した分業が前提されている、あるいは発展した分業が、特殊な諸商品として対立しあっている諸使用価値の多様性、同様に多様な労働様式がふくまれている諸使用価値の多様性のうちに直接にあらわされている。すべて

の特殊な生産的作業様式の総体としての分業は、その素材的側面から、使用価値を生産する労働としてみた社会的労働の総形態である。しかしそのようなものとして分業は、商品の立場からすれば、また交換過程の内部では、ただその結果のなかにだけ、諸商品そのものの分化のなかにだけ実在している。

諸商品の交換は、社会的物質代謝、すなわち私的な諸個人の特殊な生産物の交換が、同時に諸個人がこの物質代謝のなかで結ぶ一定の社会的生産諸関係の創出でもある過程である。諸商品相互の過程的諸関係は、一般的等価物の種々の規定として結晶し、こうして交換過程は同時に貨幣の形成過程でもある。さまざまな過程の一つの経過としてあらわされるこの過程の全体が流通である。〉（全集13巻34-36）

《初版本文》

〈直接的な生産物交換は、一面では単純な相対的価値表現の形態をとっているが、他面ではまだこの形態をとっていない。この形態は x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B であった。直接的な生産物交換の形態は x 量の使用価値 $A = y$ 量の使用価値 B である。AおよびBなる物は、ここでは、交換以前には商品ではなくて、交換によって初めて商品になる。ある使用対象がその可能性から見て交換価値であるという最初の様式は、非使用価値としての、この使用対象の所持者の直接的な必要を越える量の使用価値としての、この使用対象の存在である。諸物は、それ自体としては人間にとって外的なものであり、したがって譲渡可能なものである。この譲渡が相互的であるためには、人間たちは、暗黙のうちに、この譲渡可能な諸物の私的所有者として相対しているだけでよいのであって、まさにそうすることによって、互いに独立な人として相対しているだけでよいわけだ。とはいえ、このように互いに他者であるという関係は、共同体が、家父長制的家族、古代インド共同体、インカ国等々の形態をとるにしても、この自然発生的な共同体の構成員にとっては、まだ存在しない。商品交換は、共同体が果てるところにおいて、この共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の諸構成員と接触する地点において、始まるのである。ところが、諸物がひとたび対外的な共同生活において商品になると、それらは、反作用的に、内部的な共同生活においても商品になる。諸物の量的な交換割合は、最初は全く偶然である。それらが交換可能であるのは、それらを相互に譲渡しあうそれらの所持者たちの意志行為に依拠している。だから、それらは、価値として表示される以前に、交換可能なものという形態を得ているのである。そうこうするうちに、他人の使用対象にたいする必要が、しだいに固定してくる。交換の不断の反覆が、交換を規則正しい社会的過程にする。だから、時がたつにつれて、労働生産物の少なくとも一部が、交換の目的のためにわざわざ生産されなければならない。この瞬間から、一方では、直接的な必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性との分離が、確立される。諸物の使用価値が、諸物の交換価値から分離する。他方では、諸物が交換しあう量的な割合が、諸物の生産そのものによってきめられる。慣習が諸物を価値量として固定させる。〉（74-5頁）

《フランス語版》

〈直接的な生産物交換では、価値表現は一方では単純な相対的形態を帯び、他方ではまだこの形態を帯びていない。この形態は、 x 量の使用価値 $A = y$ 量の使用価値 B であった。直接的な交換の形態は、 x 量の使用価値 $A = y$ 量の使用価値 B である（5）。ここでは、物体Aと物体Bとは、交換以前にはけっして商品でなく、交換そのものによってはじめて商品になる。ある有用物は、豊富であるために、その生産者の必要を越える瞬間から彼にたいし使用価値ではなくるのであって、状況が与えられれば交換価値として使用されるであろう。物は、それ自体としては人間にとって外的であり、したがって譲渡可能なものである。この譲渡が相互的であるためには、ただたんに、人間がこの譲渡可能な物の私有者として、まさにそのために独立の人として、暗黙の承認によって互いに関係しあうだけでよい。しかしながら、このような相互的な独立という関係は、原始共同体の構成員にとってはまだ存在しない。たとえこの共同体の形態が家父長家族、インドの共同体、ペルーのようなインカ帝国等であろうとも、そうなのだ。商品交換は共同体の終わるところで、共同体が外部の共同体または外部の共同体の構成員と接触する地点で、始まる。物がひとたび外部との共同生活のなかで商品になるやいなや、物は反作用的に、内部の共同生活でも同じように商品になる。それらの物が交換される比率は、最初はもっぱら偶然である。それらの物は、互いに譲渡することを決心した所有者の意志行為によって、交換可能になる。外部から生ずるところの有用物にたいしての必要が、しだいによりいっそう感じられるようになり、強固になる。交換の不断の反覆が交換の一つの規則正しい社会的事業とし、時の経過につれ、有用物の少なくとも一部が交換を求めて意図的に生産される。この瞬間から、直接的必要のための物の有用性と、互いに行なわれるべき交換のための物の有用性が、すなわち、物の使用価値とその交換価値とが、明瞭に分離される。他方では、それらの物の交換される比率が、それらの物の生産そのものによって規制されはじめる。慣習はそれらの物を価値量として固定する。〉（64-5頁）

《資本論》

〈社会のなかでの分業と、それに対応して諸個人が特殊な職業面に局限されることは、マニファクチュアのなかでの分業と同じように、相反する諸出发点から発展する。一つの家族のなかで(50a)、さらに発展しては一つの種族のなかで、性の区別や年齢の相違から、つまり純粋に生理的な基礎の上で、自然発生的な分業が発生し、それは、共同体の拡大や人口の増加につれて、またことに異種族間の紛争や一種族による他種族の征服につれて、その材料を拡大する。他方、前にも述べたように[*]、生産物交換は、いろいろな家族や種族や共同体が接触する地点で発生する。なぜならば、文化の初期には独立者として相対するのは個人ではなくて家族や種族などだからである。共同体が違えば、それらが自然環境のなかに見いだす生産手段や生活手段も違っている。したがって、それらの共同体の生産様式や生活様式や生産物も違っている。この自然発生的な相違こそは、いろいろな共同体が接触するときに相互の生産物の交換を呼び起こし、したがって、このような生産物がたんだん商品に転化することを呼び起こすのである。交換は、生産部面の相違をつくりだすのではなく、違った諸生産部面を関連させて、それらを一つの社会的総生産の多かれ少なかれ互いに依存し合う諸部門にするのである。この場合に社会的分業が発生するりは、もとから違っているが互いに依存し合っていない諸生産部面のあいだの交換によってである。前のほうの場合、つまり生理的分業が出发点となる場合には、一つの直接に結成されている全体の特殊な諸器官が、他の共同体との商品交換から主要な衝撃を受ける分解過程によって互いに分離し、分解し、独立して、ついに、いろいろな労働の関連が商品としての生産物の交換によって介される点に達するのである。一方の場合には以前は独立していたものの非独立化が行なわれるのであり、他方の場合には以前は独立していなかったものの独立化が行なわれるのである。

[*] 全集、第二三巻、一〇二（原）ページを見よ。

(50a) {第三版への注。――その後の非常に根本的な人類の原始状態の研究は、著者を次のような結論に到達させた。すなわち、元来は家族が発達して種族になったのではなく、反対に、種族こそが、血縁関係にもとづく人類社会形成の本源的な自然発生的な形態だったのであり、したがって種族団体の解体が始まってからはじめているに違った家族形態が発展するようになったのだということである。――F・エンゲルス} > (23a461-2頁)

●注41に関連するもの

《初版本文》

<(36) まだ二つの相異なる使用対象が交換されるのではなく、未開人のあいだでしばしば見いだされるように、諸物の無秩序なひとかたまりが、ある第三の物にたいし等価物として提供されているあいだは、直接的な生産物交換そのものは、やっとその玄関口に立ったばかりである。> (75頁)

《フランス語版》

<(5) まだ二つのちがった有用物が交換されず、未開人のあいだで見受けるように、諸物の混沌としたかたまりが第三の有用物にたいし等価物として提供されているかぎり、直接的な生産物交換自体はやっと生まれたばかりである。> (65頁)

『資本論』を読んでみませんか

福島第一原発の国会事故調査委員会の最終報告書が出された。



今回の報告書は、「この事故が『人災』であることは明らかで、歴代及び当時の政府、規制当局、そして事業者である東京電力による、人々の命と社会を守るという責任感の欠如があった」とするなど、これまで出された政府や民間等の幾つかの調査報告書より、より踏み込んだ内容になっている。

例えば「事故の根源的な原因」は、3.11以前にあるとし、福島第一原発はそもそも地震にも津波にも耐えうる保証の無い脆弱な状態であったこと、にも関わらず、事業者である東電や規制当局である原子力安全委や安全・保安委、経産省が馴れ合って、「それまでに当然備えておくべきこと、実施すべきことをしていなかった」からだとしている。

具体的には、2006年、耐震基準が改訂され、保安院が、耐震安全評価の実施を求めたが、東電は、報告を先送りし、耐震補強工事の必要を認識しながら、まったく実施していなかった。保安院もそれを黙認していた。また同年には、原発の敷地を超える津波が来た場合に全電源喪失に至ることは、保安院と東電の間で認識は共有されていたにも関わらず、東電は対応を先延ばしし、保安院も明確な指示を怠った、等々と指摘し、「このように、今回の事故は、これまで何回も対策を打つ機会があったにもかかわらず、歴代の規制当局及び東電経営陣が、それぞれ意図的な先送り、不作為、あるいは自己の組織に都合の良い判断を行うことによって、安全対策が取られないまま3.11を迎えたことで発生したものであった」としている。

「東電は、新たな知見に基づく規制が導入されると、既設炉の稼働率に深刻な影響が生ずるほか、安全性に関する過去の主張を維持できず、訴訟などで不利になるといった恐れを抱いており、それを回避したいという動機から、安全対策の規制化に強く反対し、電気事業連合会（以下「電事連」という）を介して規制当局に働きかけていた。

このような事業者側の姿勢に対し、本来国民の安全を守る立場から毅然とした対応をすべき規制当局も、専門性において事業者に劣後していたこと、過去に自ら安全と認めた原子力発電所に対する訴訟リスクを回避することを重視した

こと、また、保安院が原子力推進官庁である経産省の組織の一部であったこと等から、安全について積極的に制度化していくことに否定的であった。

事業者が、規制当局を骨抜きにすることに成功する中で、「原発はもともと安全が確保されている」という大前提が共有され、既設炉の安全性、過去の規制の正当性を否定するような意見や知見、それを反映した規制、指針の施行が回避、緩和、先送りされるように落としどころを探り合っていた」等々。

このように今回の報告書では、これまで指摘されてこなかった新しい知見もあるが、なぜ、東電や規制当局は、こうした「人々の命と社会を守るという責任感」を「欠如」させたのか、という点については、当然のことながら、何も明らかにすることは出来ていない。

日本が高度成長で有頂天になり、「自信」が次第に「おごり」変わったからとか、国民の命を守るより、「組織の利益を守る」ことが優先されたからだとか、色々と現象的なことが書きつらねられているだけである。

しかし、根源的にはすでに何度も指摘してきたが、原子力発電が「資本の生産力」として存在し、国家が「資本の国家」であるからである。

〈科学や自然力や大量の労働生産物のこのような社会的労働に基づく充用は、すべてそれ自身ただ労働の搾取手段としてのみ、剰余労働を取得する手段としてのみ、それゆえ、労働に対立し資本に所属する諸力としてのみ現われる……このようにして労働の社会的生産力の発展もこの発展の諸条件も、資本の行為として現われるのであって、これにたいして個々の労働者は受動的な態度をとるだけでなく、むしろ労働者に対立してこれが進行する。〉（『学説史』26巻1498頁）

そして〈われ亡きあとに洪水は来れ！これが資本家、すべての資本家国家の標語なのである。〉（『資本論』23a353頁）。

原子力発電など膨大な自然力をコントロールし、それだけに一層危険と隣り合わせの巨大な技術は、歴史的には、もはや資本主義的生産様式のなかでは制御不能なものとして存在しているということを我々は知らなければならない。

そのために貴方も、共に『資本論』を読んでみませんか！

第48回「『資本論』を読む会」の報告

◎政府事故調の最終報告

23日、福島第一原発の政府の事故調査・検証委員会の最終報告が発表されました。

これでこの種の事故調査報告は出揃ったことになるそうです。今回の報告書では、福島第一原発における東電の対処は第二原発におけるそれと較べても、「適切さが欠けていた」と指摘、先に出された国会事故調査委員会の報告と較べると、事故の背景にまで切り込むというより、ただ淡々と事実を述べたというような印象が強いように思えます。

ところで、こうした一連の事故調査報告書に先駆けて、昨年10月、いち早く「福島第一原子力発電所事故から何を学ぶか」という報告書を発表した大前研一氏は、先に発表された国会事故調査委員会の最終報告を、クソミソに批判しています（日経B Pnet）。国会事故調の報告書は「しよせんは風聞を集めた三面記事のようなレベル」のものでしかなく、「幼稚な報告書を公表することで世界に対して恥をさらした」云々。

すでに述べたように、国会事故調の報告書は、今回の事故を「人災」と断定し、根本的な原因は東電と規制官庁とが馴れ合っただけで必要な対策を怠ってきたからだとしています。大前氏はそれに対して、「究極の事故原因は外部電源がすべて崩壊したことだ」と自己の主張を対置しています。しかしその大前氏も、ではどうして外部電源がすべて崩壊したのかというと、それは「原子力安全委員会の『外部電源の長期喪失は考えなくてもいい』という指針があったから」だともいいます。つまり「規制当局と東電の関係が『逆転関係』になり、原子力安全の監視・監督機能の崩壊が起きていた」という国会事故調の指摘に行き着くわけです。結局、大前氏の批判は言葉は辛辣ですが、その内容は“目くそ鼻くそ”の類に過ぎません。

いずれにしても、すべての報告書が見ることができない本質的な原因は、原子力にしても、すべての科学や技術が資本主義的生産においては資本の生産力として存在しているという事実です。だからこそそれらは人間に対して疎遠で、それほどばかりか人間に敵対的な形でしか存在し得ないのです。

一見すると、工場では労働者は直接機械に向き合い、それを操作し生産物を作っているかに見えます。しかし、労働者が機械などの生産諸力と結合して生産活動ができるのは、彼らが「賃労働」という社会的衣装をまとい、資本としての機械に対峙するからなのです。つまり労働者は決して直接機械に向き合いそれを操作しているのではなく、一定の社会的な関係、すなわち資本-賃労働という生産関係のもとでしかそれが出来ないのです。そしてそれは科学や技術においても同じことが言えるのです。

科学者や研究者は、純粋に真理を追究し、技術を発達させようとしているかに自分では思っているかも知れません。しかし彼らが科学を研究し、技術の発展を追求できるのも、一定の社会的関係においてに過ぎないのです。つまり何らかの企業の研究機関に雇用されるか、ブルジョア大学に所属して初めて研究が出来るのです。そしてこれらの諸機関もやはりこのブルジョア社会のもっとも基本的な関係であり、すべての社会的なものをそれによって染め上げている資本制的な生産関係によって規制され従属させられています。

だから現在の社会的物質的な生産諸力は直接労働者を豊かにするものとして存在しているのではなく、直接には資本が剰余労働を搾取し、利潤を上げるために存在しているのです。科学や技術も同じように資本の生産力として、その自己増殖欲に奉仕させられ、それに有効な限りで評価されるのです。

原子力発電のような膨大な自然力をコントロールしなければならない巨大な技術は、それだけに資本主義的生産様式の下では危険といわなければなりません。原発事故のもっとも本質的な原因はここに起因しているのです。やや前置きが長くなりましたが、本題の学習会の報告に移りましょう。前回（第48回）は第2章の第9～11パラグラフを学習しました。さっそくその報告を行いましょ。

◎第9パラグラフ

報告は、これまでと同じように、まず本文を紹介し、文節ごとに記号を打ち、それぞれについて平易に解説しながら、そのなかで学習会での議論も紹介していくことにします。なお、今回から見やすいように、本文は青字（太字）、平易な書き下しは太字（黒）とします。

【9】 <(i)直接的な生産物交換においては、どの商品もその所有者にとっては直接的に交換手段であり、その非所有者にとっては等価物である—もっとも、その商品がその非所有者にとって使用価値である限りでのことであるが。(ii)したがって、交換品は、それ自身の使用価値や交換者の個人的欲求から独立した価値形態をまだ受け取ってはいない。(iii)この形態の必然性は、交換過程に入りこむ商品の数と多様性と増大と共に発展する。(iv)課題はその解決の手段と同時に生じる。(v)商品所有者が彼ら自身の物品を他のさまざまな物品と交換したり比較したりする交易は、さまざまな商品所有者のさまざまな商品がその交易の内部で同一の第三の種類の商品と交換され、価値として比較されることなしには、決して生じない。(vi)このような第三の商品は、他のさまざまな商品にとっての等価となることによって、直接的に—たとえ狭い限界内においてにせよ—一般的または社会的な等価形態を受け取る。(vii)この一般的等価形態は、それを生み出す一時的な社会的接触と共に発生し、それと共に消滅する。(viii)この形態は、あれこれの商品に、かわるがわる、かつ一時的に帰属する。(ix)しかし、それは、商品交換の発展につれて、排他的に特殊な種類の商品に固着する。(x)すなわち、貨幣形態に結晶する。(xi)それがどのような種類の商品に固着するかは、さしあたり偶然的である。(xii)し

かし、一般的には、二つの事情が決定的である。(7)貨幣形態が固着するのは、外部から入ってくる最も重要な交易品――これは、事実上、内部の諸生産物をもつ交換価値の自然発生的な現象形態である――か、さもなければ、内部の譲渡されうる所有物の主要要素をなす使用対象、たとえば家畜のようなものである。(8)遊牧諸民族が最初に貨幣形態を發展させるのであるが、それは、彼らの全財産が動かさる、したがって直接的に譲渡されうる形態にあるからであり、また彼らの生活様式が彼らをたえず他の諸共同体と接触させ、したがって、生産物交換へと誘いこむからである。(9)人間はしばしば人間そのものを奴隷の姿態で原初的な貨幣材料としてきたが、土地【Grund und Boden】をそうしたことはかつてなかった。(10)このような観念は、すでに發展をとげたブルジョア社会においてのみ出現した。(11)その始まりは一七世紀の最後の三分の一の期のごとであり、その実施が国民的規模でこころみられるのは、それからやっと一世紀後、フランスのブルジョア革命の中においてであった。)

(1) 直接的な生産物の交換においては、どの商品の所有者にとっても、自分の商品は自分にとって必要な生産物を入力するための交換手段です。そして自分の持っていない（つまり相手が持っている）商品は、それが彼にとって自分の欲望を満たすもの（彼にとって使用価値であるもの）であるならば、自分の商品の等価物となります。

ここでもやはり「**直接的な生産物交換**」が問題になっています。これは当然です。というのは我々はこれから商品交換の歴史的發展を辿って如何にしてそれが貨幣を生み出すに至るかを見ていくわけですから、まだ貨幣は登場していないからです。しかし注意が必要なのは、先のパラグラフでは、交換されるのは、いまだ商品ではなく、単なる使用対象（労働生産物）でしかなかったのですが、ここではすでに交換されるものは「商品」であることが前提されています。つまり交換されるものが商品であることが前提されながら、尚且つ、その交換が直接的な生産物交換であるような發展段階が問題になっていることが分かります。そしてこれは先のパラグラフから考えるなら、労働生産物の交換がある一定の広がりや深まりを獲得して、交換当事者が交換を目的に、労働生産物を生産し始める段階だということが分かります。価値形態では形態II（全面的な展開された価値形態）の段階です。この段階では自身の価値をさまざまな商品で次々と表す商品は、すでに最初から交換を目的に生産され、よってその価値性格が徐々に現れてくるものと言えるわけです。しかし、その商品と交換されるさまざまな物は、いまだ個別的・偶然的である可能性もあり、いまだ価値形態としては形態Iの段階を抜けていないかも知れないのです。

(2) だから交換される物は、いまだそれ自身の使用価値や交換する当事者の個人的欲望から独立した価値形態をまだ受け取っていません。

自身の価値を次々とさまざまな商品で表現する形態IIの段階でも、それが想定する交換の歴史的な發展段階としては、当事者は、例えば遊牧民のように季節によって移動して、その移動の過程で接触するさまざまな定着農耕民と交換していく様な段階であり、こうした段階では、いまだ交換当事者自身の必要に応じて、それらは交換されると言えるでしょう。しかし、これがどんどん發展してゆけば、やがては遊牧民は、次の共同体との交易のことを考えて、その前に接触した共同体との交換では、特に自分には必要のない物品でも、次に接触する定着農耕民が欲するものであれば、そこでの交換を目的に、交換するようになってくるようになります。彼はそれをただ交換を目的に交換するわけです。これはすでに商業民族としての登場ですが、こうした段階は早期に訪れたと考えられます。

アフガニスタンとパキスタンに跨って広く生活していたバシュトゥーン族は、冬季はパキスタン西部の低地にあり、春から夏にかけて、アフガンの高原まで羊を遊牧しながら、移動して生活していたのですが、彼らはその過程でアフガンの定着農耕民と農産物と羊を交換しながら遊牧していました。しかし、やがて彼らはアフガンの定着農耕民が必要とするさまざまな物品をパキスタンで仕入れて、それを行き先々の農耕民と交易しながら、遊牧するようになったと昔読んだ本にはありました。カルタゴやフェニキアなど古代の商業民族も、最初は海洋民族として、さまざまな海に出かけてゆくなかで、その行く先々で海産物を交換するだけでなく、やがては、さまざまな物品を仕入れて、交換をするようになればなり、やがては商業民族として歴史の早くから登場したのではないのでしょうか。

またここでは「**それ自身の使用価値や交換者の個人的欲求から独立した価値形態**」という言葉が出てきますが、これは後にも出てきます「**一般的等価形態**」を指しているのだと思います。

(3) この形態（＝「**それ自身の使用価値や交換者の個人的欲求から独立した価値形態**」＝「**一般的等価形態**」）の必然性は、交換過程に入り込む商品の数と種類の増大とともに發展します。

(4) 一般に課題はその解決の手段と同時に生まれます。

この「**課題はその解決の手段と同時に生じる**」という言葉は、『経済学批判』序言にも、次のような形で出てきます。

「一つの社会構成は、それが十分包容しうる生産諸力がすべて發展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されおわるまでは、けっして古いものにとって代わることはない。それだから、人間はつねに、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば、詳しく考察してみると、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが、つねに見られるであろうからだ。」（全集13巻7頁、下線は引用者）

(5) 商品所有者が彼らの物品を他のさまざまな物品と交換したり比較したりする交易は、さまざまな商品所有者のさまざまな商品がその交易の内部で、同じ第三の種類の商品と交換され、それによって価値として比較されることなしには、決して生じないのです。

これはすでにある特定の商品が次々とさまざまな商品によって自らの価値を表すような展開された段階（形態II）とは異なります。この段階では、次々と自らの価値を表す商品は、その価値性格を表してきますが、しかしその商品と交換されるさまざまな商品は、いまだまだ単純な段階、偶然的・一時的段階（形態I）と考えられるからです。

しかし、ここで想定している交換過程の發展段階は、こうしたものではなく、ある特定の商品が次々とさまざまな商品と交換され、その価値を表すだけではなく、その交換されるさまざまな商品そのものが互いに交換し合うような交換

過程の発展段階を想定しているわけです。こうしたさまざまな商品の交換が行われるためには、しかし、第三の商品、例えば、展開された段階で次々にさまざまな商品と交換して、自分の価値を表した商品を尺度にして、そうした全面的に交換し合おうとする諸商品が、互いに価値を比較し合わないとそうした全面的な商品交換は不可能なのです。だからこれはすでに価値形態では形態IIが逆転された段階（形態III）、すなわち一般的価値形態の段階にあるものです。

(A) このような、その交易において、さまざまな商品がその価値を比較し合うための基準になるような商品は、他のさまざまな商品にとっての共通の等価物になることによって、最初はまだその交易の狭い範囲や限界のなかにおいてに過ぎませんが、一般的または社会的な等価形態を受け取ることとなります。

だからこうした第三の商品は一般的価値形態における一般的等価物になるのですが、しかし、マルクスは、こうした一般的等価形態そのものは、最初は、まだある交易の狭い範囲内の、限定された、限界のあるものに過ぎないことも指摘しています。

(B)、(F) この一般的等価形態になる商品は、最初はそれを生み出す交易と同様に、一時的または社会的な接触と共に発生し、それと共に消滅します。だからこの形態は、最初は、あれこれの商品に、かわるがわる、且つ一時的に帰属することになります。

さまざまな商品が交換し合うような交易は、最初から恒常的であったわけではなく、それ自体が一時的であったと考えられます。例えばある祭祀が行われる時期だけに開かれる市であるとか、ある時期に限って開かれる市というようにです。だから最初の一般的等価形態も、そうした交易が行われる時にだけ、その時点、時点である特定の商品に帰属し、別のある交易では、また別の商品がそうした形態を受け取るというようなものだったと考えられるわけです。

(D)、(E) しかし商品交換がさらに発展すると、徐々に、ある特殊な商品が恒常的にそうした役割を担うようになります。そしてそうなってくると、もはや他の商品がそうした役割を担うことが出来なくなるのです。そうなると、その交易は貨幣形態を獲得したことになるでしょう。

商品交換の発展は、さまざまな商品が互いに交換される交易そのものが、一時的ではなくなり、恒常的になるとともに、交換されあう商品そのものもその数も増え、種類も多様になってきます。そうするとそれらの価値を互いに比較し合う商品がその度に異なるのでは都合が悪くなってきます。だからますますある特定の商品が排他的にそうした役割を担うようになるわけです。つまり貨幣形態に結晶するわけです。そして一度、ある商品がそうした形態を受け取ると、他の商品はもはやそうした形態を受け取ることは出来なくなるわけです。

(H)、(I)、(J) 貨幣形態を受け取るのがどういう種類の商品であるのかは、さしあたりはまだ偶然が作用します。しかし、一般的には次の二つの事情がそれを決めます。一つは外部から入ってくる最も重要な交易品です。これは事実上、内部の諸生産物がその価値を表す自然なものだったと考えられます。もう一つの事情は、内部で譲渡されうる所有物のなかでもっとも主要な要素をなすよう使用対象です。例えば家畜のようなものです。

貨幣形態そのものも、最初から、貴金属に結晶するとは限らないこと、最初はまだどの商品が貨幣になるかは、偶然のどとマルクスは指摘しています。しかし、二つの事情が決定的だと。

一つは、外部からもたらされる物品のうち重要なものです。これはある意味では自然です。というのは、すでに指摘されてきたように、商品交換が発生するのは、共同体の内部からではなく、共同体が他の共同体と、あるいは他の共同体の成員と接触するところから生まれるからです。共同体の外部からその共同体にはない物品が交換によってもたらされるわけです。そして始まった交換は、やがては共同体の内部に反射して、共同体の内部でも交換が盛んになり、共同体の成員同士でも互いに交換し合うことが想定されているわけです（しかしそのためにはすでに共同体の内部に私的所有が生まれ、共同体そのものが半崩壊しつつあることも前提されています）。だからこの場合、彼らにとって共通な尺度は、共同体の外部からもたらされた商品、そのうちの誰もが必要とする重要な商品になるのは自然の成り行きなのです。

共同体の内部でも商品交換が頻繁になると、やがて貨幣形態は、彼らにとって主要な使用対象をなすような商品に移っていきます。例えば、家畜のようなものです。私的所有の発生は、最初は、共同体において共有されているような土地などではなく、それぞれの家族や個人が占有している動産から生まれるとマルクスは指摘しています（そして家屋やその回りの菜園などから土地の私有も発生する）。しかし動産と言っても道具のようなものは、一般的ではないために、家畜などがそうした役割を担うことになったと考えられわけです。

(K) 遊牧民族が最初に貨幣形態を発展させるのですが、それは彼らの全財産が動かさうから、よって直接に譲渡可能なものからなっているからです。また彼らの生活様式が、つまり放牧によって一定の地域を移動する生活が、絶えず別の共同体と接触させ、だからそれぞれの接触する共同体と生産物の交換を促すことになるからです。

イスラム教はムハンマド（マホメット）によって興されたとされていますが、ムハンマドが属したクライシュ族も、もとをたせばラクダを放牧して生活していた砂漠の民、ベドウィンの一部族でした。ところが、7世紀にビザンチン帝国とササン朝ペルシャの争いによって、ヨーロッパとアジアの通商路（いわゆる「絹の道」）が開ざされたために、それに代わるものとして、紅海やアラビア半島の西南端を経由する通商路が開発され、その中継貿易を独占して栄えたのが、クライシュ族であり、イスラム教が興った歴史的背景でもあったと言われています。遊牧民族が商業民族へと発展するなかで、イスラム教も興ったわけです。いわゆる古典の民といわれるユダヤ教やキリスト教、イスラム教も、すべて神との契約をその教義としているように、商業民族から興ってきたと考えられています。

(L)、(M)、(N) 人間はしばしば人間自身を奴隷として原初的な貨幣材料としてきましたが、不動産である土地をそうしたものにしたことはかつてありませんでした。土地を貨幣材料にするような観念が生まれるためには、土地を売買が発展するブルジョア社会においてのみ出現し得たからです。その始まりは17世紀の最後の3分の1期のことで、それが国家的規模で最初に実施されたのは、それからやっと一世紀後のフランスのブルジョア革命の時でした。

ここでは奴隷が貨幣材料になったという指摘がありますが、『経済学批判』でも次のような指摘があります。

〈交換過程の原生的形態である直接的交換取引〔物々交換〕は、商品の貨幣への転化の開始というよりも、むしろ使用価値の商品への転化の開始をあらわしている。交換価値は自由な姿を得ておらず、まだ直接使用価値に結びつけられている。このことは二重に示される。生産そのものは、その全構造において使用価値を目的とし、交換価値を目的としていない。だから使用価値がここで使用価値であることをやめて、交換の手段、商品になるのは、ただ生産が消費のために必要とされる限度を越えることによってだけである。他方では、諸使用価値は、たとえ両極に配分されているとしても、直接的な使用価値の限界内でだけそれ自体商品となるのであって、したがって商品所有者たちによって交換される諸商品は、双方にとって使用価値でなければならないが、ただし各商品は、その非所有者にとっての使用価値でなければならない。実際には、諸商品の交換過程は、もともと原生的な共同体の胎内に現われるものではなく、こういう共同体の尽きるところで、その境界で、それが他の共同体と接触する数少ない地点で現われる。ここで交換取引が始まり、そして、そこから共同体の内部にはねかえり、これに解体的な作用を及ぼす。だから、異なった共同体のあいだの交換取引で商品となる特殊な使用価値、たとえば奴隷、家畜、金属が、多くの場合、共同体そのものの内部での最初の貨幣を形成する。〉（全集13巻34頁、下線は引用者）

また『経済学批判要綱』には、次のような叙述があります。

〈本源的に、貨幣として役立つであろう商品は、すなわち、欲求と消費の対象としてではなく、ふたたびそれを他の諸商品と交換で引きわたすために、交換で受けとられるであろう商品は――もっとも多く欲求の対象として交換され、通用し、したがってふたたび他の特殊な諸商品と交換されることがもっとも確実であり、したがってあたえられた社会的組織においてなにより第一に富を代表し、もっとも一般的な需要と供給との対象であり、特殊な使用価値をもっている、そういった商品である。塩、毛皮、家畜、奴隷がそれであった。そのような商品は、実際上、商品としてのその特殊な姿態において、他の諸商品よりもより多く交換価値としての自分自身に(残念だが、ドイツ語では、消費物と商いの区別をうまく翻訳できない)照応している。商品の特殊な効用――特殊な消費対象(毛皮)としてであれ、直接的な生産用具(奴隷)としてであれ――が、このばあいにはその商品に貨幣の烙印をおしている。ところが発展が進むにしたがって、ちょうどこの反対のことが起こってくるであろう。すなわち消費の直接的対象とか、または生産の用具とかであることのもっとも少ない商品が、まさしく、交換そのものの必要に役立つという側面をもっともよく代表するようになるであろう。第一のばあいには、商品はその特殊な使用価値のゆえに貨幣になる。第二のばあいには、商品は、それが貨幣として役立つということから、その特殊な使用価値を受けとる。永続性、不変性、分割可能性、再合成の可能性、大きな交換価値を小さな容積のなかに含んでいるので相対的に容易な運搬可能性、これらすべてのことがあるために、後の方の段階においては貴金属が特別に貨幣に適したものとされるのである。それと同時に、貴金属は、貨幣の最初の形態からの自然的移行をなしてもいる。生産と交換とがある程度高度になっている段階では、生産用具は諸生産物よりも優位を占める。しかも金属(最初は石)は最初の、しかも不可欠の生産道具である。古代人の貨幣においてとくに大きな役割を演ずる銅のばあいには、生産用具としての特殊な使用価値と、商品の使用価値から生じたのでなくて、交換価値としての商品の規定に照応するその他の諸性質(交換手段〔としての規定〕もそのなかに含まれている)との両方が、まだいっしょになっている。さらにつづいて、貴金属は、酸化しないことなどや、その均質性などによって、他の金属から区別され、そしてその次には、消費や生産のためのその直接的な効用はおとるが、その稀少性のゆえからすでに純粋に交換にもつく価値を他の金属よりも多く表示していることによって、より高度な段階にいっそうよく適合している。貴金属は初めから剰余を、つまり富が最初に現象するところの形態を表わしている。金属でさえ、他の諸商品よりは好んで金属と交換される〉(草稿集①150-1頁、下線はマルクスによる強調、太字は引用者)

またマルクスの抜粋ノートには、『ドイツ人の歴史』からの次のような引用があるのだそうです。

〈「ホメロスやヘシオドスにあっては、金と銀ではなくて、羊と牡牛とが、価値尺度として、貨幣であった。トロイアの戦場では物物交換が行なわれた。」(ジェイコブ。)(同様に中世では奴隷がそうであった。同上。)> (同上197頁)

また学習会では、土地を貨幣材料とする観念が、〈17世紀の最後の三分の一期〉に出現したとありますが、それは具体的にはどのようなものかという質問がありましたが、調べてみましたが、ハッキリしたことは分かりませんでした。ただ〈その実施が国民的規模でこころみられ〉たとする「アシニャ紙幣」については、マルクスは色々なところで言及しています。それを紹介しておきましょう。

〈ステュアートの意味での観念的貨幣に近いものとしては、フランスのアシニャ紙幣、すなわち「国民財産、100フランのアシニャ」をあげることができよう。たしかにこの場合、アシニャがあらわすはずの使用価値、すなわち没収された土地は明示されていたが、度量単位の量的規定は忘れられていて、したがって「フラン」は無意味なことばであった。すなわち、1アシニャ・フランがどれだけの土地をあらわすかは、公けの競売の結果いかにかかっていた。とはいえず、実際には、アシニャ・フランは、銀貨幣にたいする価値章標として流通し、したがってその減価は、この銀の度量標準で測られたのである。〉(『経済学批判』全集13巻64頁)

〈一九世紀にはって貨幣制度についての研究に直接の刺激をあたえたものは、金属流通の諸現象ではなくて、むしろ銀行券流通の諸現象であった。前者は、後者の諸法則を発見するために、さかのぼって研究されたにすぎない。一七九七年以来のイングランド銀行の兌換停止、それにつづいて起こった多数の商品の価格騰貴、金の鑄造価格のその市場価格以下への下落、とくに一八〇九年以来の銀行券の減価、これらは、議会内での党派闘争と議会外での理論上の試合とに直接の実際的な動機をあたえたのであって、いずれも等しく熱情的にたたかわれた。討論の歴史的背景となったものは、一八世紀の紙幣の歴史であった。すなわち、ローの銀行の破綻〔33〕、一八世紀のはじめからなかごろにかけて北アメリカのイギリス諸植民地で価値章標の量の増加ともなつてすすんだ地方銀行券の減価、ついで、独立戦争中にアメリカ中央政府によって法律で強制された紙幣(大陸紙幣〔Continental bills〕)、最後に、なおいっそう大規模におこなわれたフランスのアシニャ紙幣の実験がこれである。当時のイギリスのたいていの著述家は、まったく別の法則によって規定される銀行券の流通を、価値章標または強制通用力をもつ国家紙幣の流通と混同しており、そして、この強制流通の諸現象を金属流通の法則で説明すると称しながら、じつは逆に、後者の法則を前者の諸現象から引き出している。われわれは、一八〇〇年から一八〇九年までの時期の多数の著述家たちをすべてとびこして、ただちにリカードに向かうことにする。それは、リカードが彼の先行者たちの説を総括しており、彼らの見解をいっそうすどく定式化しているからでもあり、また彼が貨幣理論にあたえた形態が現在までイギリスの銀行立法を支配しているからでもある。リカードは、彼の先行者たちと同様に、銀行券または信用貨幣の流通をただの価値章標の流通と混同している。彼の頭を支配していた事

実は、紙幣の減価と、それと時を同じくする諸商品価格の騰貴とである。ヒュームの場合のアメリカの諸鉱山にあたるものは、リカードの場合にはスレッドニードル街〔34〕の紙幣印刷機であって、リカード自身もある個所で、この二つの要因をはっきりと同一視している。彼の初期の著作はもっぱら貨幣問題だけを扱ったものであるが、それらは、閣僚と主戦党とを味方としたイングランド銀行と、議会の反対党であるウィッグ党および平和党を周囲に結集したその反対者とのあいだで、きわめて激烈な論争がおこなわれていた時代に書かれた。これらの著作は、一八一〇年の地金委員会の有名な報告書の直接の先駆となったのであって、この報告書にはリカードの意見が採用されている〔*〕。貨幣をただの価値指標だと説明するリカードとその追随者たちが**Bullionists**（地金主義者）とよばれているのは奇妙なことであるが、これはたんにこの委員会の名称に由来するばかりでなく、彼の学説の内容自体にも由来している。リカードは、波の経済学にかんする著書で同じ見解をくりかえし述べ、さらに発展させているが、しかし彼が交換価値、利潤、地代等々についておこなったような研究は、貨幣制度そのものについては、どこでもおこなっていないのである。〉（同全集13巻145頁）

なお草稿集③では同じ『批判』本文に対する注解として次のような説明があります。

〔3〕〔注解〕 「アシニヤ紙幣」――1790年4月1日、国民議会によって国債償還のために布告されたフランスの紙幣。はじめそれは没収された教会祿の価値の指図証であったが、のちには王室財産および亡命者の財産の指図証ともなった。その後アシニヤ紙幣の発行が実際の流通必要量をはるかに凌駕するようになるにしがって、経済ははなはだしい混乱に陥った。アシニヤ紙幣のフランス語の銘文は、「国〔有財産。何々リーヴル割当てと書かれている。〕」（403頁）

またマルクスはシーニアの著書からアッシニア紙幣に関連する部分を抜き書きしています。

〔アッシニア紙幣。「国民財産。100フランのアッシニア紙幣。」法貨。それは、なにか特定のものを代表すると表明することさえしていない点で、他のすべての紙幣とは区別された。「国民財産」という言葉が意味していたのは、この紙幣をもって、〔革命のさいに〕没収された地所を、その常設的競売の場で買うことによって、この紙幣の価値が維持される、ということであった。しかし、なぜこの価値が100フランと名づけられるのか、ということには根拠がなかった。この価値は、そのようにして購買できる土地の相対的な量とアッシニア紙幣の発行数にかかっていた。（ナソー・W・シーニア『貨幣調達費……に関する三つの講演』、ロンドン、1830年、78、79〔ページ〕。〕（草稿集②665頁）

◎第10パラグラフ

〔10〕〈(1)商品交換がそのもっぱら局地的な束縛を打破し、したがって商品価値が人間労働一般の物質化にまで拡大していくのと同じ割合で、貨幣形態は、一般的等価という社会的機能に生まれながらにして適している商品に、すなわち貴金属に、移っていく。〉

(1) 商品交換がますます盛んになり、局地的な束縛を打ち破って拡大していくにつれて、商品の価値はますます人間労働一般が物質化したものとしての性格を強めていきます。そしてそれと同じ割合で、貨幣形態も、ますます一般的等価という社会的機能に適した商品に、すなわち貴金属に移っていきます。

『経済学批判』には、〈一商品の交換価値は、その等価物の系列が長ければ長いほど、つまりその商品にとって交換の範囲が大きければ大きいほど、それだけますます高度に交換価値としてあらわされる。だから交換取引の漸次的拡大、交換の増大、交換取引にはいつてくる商品の多様化は、商品を交換価値として発展させ）（全集13巻34頁）と指摘されています。そして商品の価値がますます人間労働一般の物質化にまで拡大すると同時に、貨幣もまた貴金属に移っていくと指摘されています。貴金属が一般的等価という社会的機能に〈生まれながらにして適している〉という事情は、次のパラグラフで説明されています。

◎第11パラグラフ

〔11〕〈(1)ところで、「金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である(42)」ということは、金銀の自然諸属性が貨幣の諸機能に適していることを示している(43)。(1)しかし、われわれは、これまでのところでは、貨幣の一つの機能しか知らない。(1)すなわち、商品価値の現象形態として、または商品の価値の大きさが社会的に表現される材料として、役立つという機能だけである。(2)価値の適切な現象形態、または抽象的な、したがって同等な、人間労働の物質化となりうるのは、どの一片をとってみてもみな同じ均質な質をもっている物質だけである。(1)他面、価値の大きさの区別は純粋に量的なものであるから、貨幣商品は純粋に量的な区別ができるもの、したがって任意に分割ができてその諸部分がふたたび合成できるものでなければならない。(1)ところが、金銀は生まれながらにしてこの属性をそなえている。〉

(1) ところで、「金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である」ということは、金銀の自然諸属性が貨幣の諸機能に適していることを示しています。

ここで学習会では、〈「金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である(42)」〉ということが〈金銀の自然諸属性が貨幣の諸機能に適していることを示している〉と言われているのですが、いま一つよく分からないという意見が出されました。どうして最初の文言が後の理由になるのかがいま一つ納得が行かないのです。そこでこの一文が出てくる『経済学批判』をみってみることにしましょう。マルクスは、「4 貴金属」において、〈なぜほかの諸商品ではなく金銀が貨幣の材料として役だつたかという問題〉（全集13巻130頁）について論じています。その内容を箇条書き的に紹介してみましょう。

①まず〈一般的労働時間そのものはただ量的な区別を許すだけであるから、その独特な化身として通用すべき対象物は、純粋に量的な区別をあらわすことができるものでなければならない、したがって質の同一性、一様性が前提とされる〉が〈金銀は、単一体としていつでもそれ自体同等であり、したがってそれらの等しい量は等しい大きさの価値をあらわす〉。(同)

②〈一般的な等価物として役だつべき商品にとつての、純粋に量的な区別をあらわすという機能から直接に生じるいまひとつの条件は、それが任意の諸部分に細分することができ、また諸部分をふたたび合成することができるということであり、したがって計算貨幣が感覚のうえでもあらわされるということである。金銀はこれらの属性を非常によくそなえている。〉(同上131頁)

③〈流通手段としては、金銀は他の諸商品にくらべて次のような長所をもっている。すなわち、その比重が大きく、相対的に大きな重量を小さな容積であらわすことができるし、それにおうじてその経済的比重も大きく、相対的に大きな労働時間、すなわち大きな交換価値を小さな容量のうちにふくむことができる、ということである。これによって、運搬の容易さ、一人の手から他の人の手への、一国から他国への移転の容易さ、急速に出没する能力――要するに、流通過程の永久機関〔perpetuum mobile〕として役だつべき商品の必須条件〔sine qua non〕である物質的可動性が保証されている。〉(同)

④〈貴金属の高い価値比重、耐久性、相対的に破壊しにくいこと、空気に触れて酸化しないこと、金の場合にはとくに王水以外の酸に溶解しない性質、これらすべての自然的属性が貴金属を貨幣蓄蔵の自然的材料にする。〉(同)

⑤〈金属一般が直接的生産過程の内部でもつ大きな意義は、生産用具としての金属の機能と関連している。ところが金銀は、それらが稀少であることを度外視しても、鉄はもちろんのこと、銅(古代人の用いた合金状態の)とくらべてさえきわめて軟らかいので、生産用具として利用することができず、したがって金属一般の使用価値の基礎をなす諸属性を大幅に奪われている。金銀は直接的生産過程の内部ではこのように役に立たないのであるが、これと同様に、生活手段として、消費の対象として現われる場合にも、なければなくてもすむものである。だから金銀は、直接的な生産と消費との過程をそこなわずに、どんなに任意の量でも社会的流通過程にはいることができるのである。〉(同上131-2頁)

⑥〈他方で金銀は、消極的な意味で余分な、すなわちなくてもすむ対象物であるばかりでなく、金銀の美的な諸属性は、それを華美、着飾り、盛装、日曜日にふさわしい諸欲望の天然の材料に、つまり贅沢と富の積極的形態にするのである。それらは、いわば地下界から掘り出されたまじり気のない光として現われる。というのは、銀はすべての光線をそれらの光線の本来の配合のままに反射し、金は最も強い色彩である赤だけを反射するからである。だが色彩感覚は美的感覚一般のうちで最もとつきやすい形態である。〉(同上132頁)

⑦〈最後に、金銀が鑄貨の形態から地金形態へ、地金形態から奢侈品の形態へ、そしてまた逆の方向へ転化されるということ、いちどあたえられた一定の使用形態に縛られないという他の諸商品にまさった長所、これらが金銀を、たえず一つの形態規定性から他の形態規定性に転化しなければならない貨幣の自然的材料にするのである。〉(同)

このようにマルクスは金銀が貨幣としての社会的機能を果たす上で、優れている属性を上げたあと、次のように述べています。

〈自然は銀行家や為替相場を生みださないのと同じように、貨幣を生みださない。しかしブルジョアの生産は、富を一個の物の形態をとった物神として結晶させざるをえないから、金銀は富のそれ相応な化身である。金銀は生まれながらに貨幣ではないが、貨幣は生まれながらに金銀である。一方では、銀または金の貨幣結晶は流通過程の産物であるばかりではなく、實際上その唯一の停留する産物である。他方では、金銀はできあがった自然生産物であって、それらは第二のものであるとともに、そのまま第一のものであり、なんらの形態的相違によっても区別されない。社会的過程の一般的生产物、または生産物としての社会的過程そのものが、一つの特異な自然生産物であり、大地の奥ふかいところに隠れていて、そこから掘り出すことのできる金属なのである。〉(全集13巻132頁、下線は引用者)

このマルクスの説明を見ると、〈金銀は生まれながらに貨幣ではない〉というのは、〈自然は銀行家や為替相場を生みださないのと同じように、貨幣を生みださない〉という意味だと分かります。そして同じように〈貨幣は生まれながらに金銀である〉というのは、貨幣というのは、人間の社会的関係が物の形態をとったものであり、ブルジョアの生産では、こうした物象的關係は不可避に生まれれること、だから物象的關係である貨幣は、生まれながらにして金銀という物的なものに癒着して登場するのだというわけです。そして金銀が貨幣という社会的機能を果たす上で物的に優れていることは、すでに縷々述べてきたということだと思います。

(M)、(N) しかし私たちは、これまでのところでは、貨幣の一つの機能しか知りません。つまり、商品の価値の現象形態として、あるいは商品の価値の大きさを社会的に表す材料として、役立つという機能だけです。

〈金銀の自然諸属性が貨幣の諸機能に適している〉と言っても、私たちがまだ貨幣の機能として知っているのは、価値の現象形態であり、価値の大きさをその物的素材によって表すという機能だけだとマルクスは指摘しています。これは後に第3章「貨幣または商品流通」に出てくる説明にもとづけば、「価値尺度の機能」と言えます。その意味では、(I)の解説のなかで紹介した『経済学批判』の一連の説明は貨幣のそれ以外の諸機能(流通手段としての機能等)も含んだものだったと言えます。

(-) 価値の適切な現象形態、すなわち抽象的な、したがって同等な、人間労働の物質化となりうるためには、どの一片をとってみてもみな同じ均等な質をもっている物質でなければなりません。

この属性は、先に紹介した『批判』で指摘されていたものとしては、①に該当しますが、『批判』では、必ずしも質と量が明確に区別されて論じられていないことが分かります。

(*) また価値の大ききの区別は純粋に量的なものでしかありませんから、貨幣商品は、純粋に量的に区別ができるもの、だから任意に分割できて、その分割された諸部分から再び合成できるものでなければなりません。

これは『批判』の説明では①と②に該当します。

(^) ところが、金銀は生まれながらにして、こうした諸属性をそなえています。

全集版や新日本新書版では〈この属性をそなえている〉となっていますが、これでは〈この属性〉が指しているのは、直前の〈任意に分割ができてその諸部分がふたたび合成できる〉というものだけと誤解されかねません。やはりここは (二)と (ホ)で述べられている二つの属性を指しているわけですから、やはり「こうした諸属性」と訳すべきでしょう。因みに長谷部訳では「こうした諸属性」となっています。

◎注42と43

第11パラグラフには二つの注がついていますが、それらも本文を紹介し、簡単な解説を加えておきます。

【注42】 〈42) カール・マルクス『経済学批判』、135ページ〔『全集』、第13巻、132ページ〕。「これらの金属は…生まれながらにして、貨幣である」（ガリアーニ『貨幣について』、所収、クストーディ編、前出叢書、近代篇、第三巻、一三七ページ）。〉

この注によれば、先に見た『経済学批判』に出てくる〈金銀は生まれながらに貨幣ではないが、貨幣は生まれながらに金銀である〉という一文は、ガリアーニの『貨幣について』の中の主張に對置されたものだということが分かります。ただ『批判』では、ガリアーニの『貨幣について』からの引用は幾つかありますが、上記の一文の引用はありませんでした。マルクスはガリアーニについて、〈多かれ少なかれ適切な着想で商品の正しい分析にふれている一連のイタリアの経済学者たち〉（全集13巻42頁）の一人とみていたようです。

【注43】 〈43) これについての詳細は、前出の私の著作中の「貴金属」の節を見よ。〉

この注で触れている〈「貴金属」の節〉の内容については、すでに本文の(イ)の解説のなかで詳しく紹介した通りです。

【付属資料】

●第9パラグラフ

《初版本文》

〈直接的な生産物交換にあっては、どの商品も、その所持者にとっては直接的な交換手段であり、その非所持者にとっては等価物である。といっても、それが非所持者にとって使用価値であるというかぎりにおいてのことではないが。だから、この交換品は、それ自身の使用価値または交換者の個人的必要から独立した価値形態を、まだなら獲得していない。こういった形態の必然性は、交換過程にはいって行く諸商品が数を増し多様になるにつれて、発展する。課題は、その解決手段と同時に生まれる。商品所持者たちに彼ら自身の物品を他のいろいろの物品と交換させ、したがって比較させる交易は、いろいろの商品所持者たちのいろいろの商品が、これらの商品の交易の内部で、一つの同じ第三の商品種類と交換されたり価値として比較されたりしなければ、行って行なわれない。このような第三の商品は、それがいろいろな他商品にたいする等価物になることによって、たとえ狭い限界内であろうとも、一般的あるいは社会的な等価形態を直接に獲得する。この一般的な等価形態は、それを産み出した一時的な社会的接触とともに、生成し消滅する。かわるがわるしかも一時的に、それはあれこれの商品に帰属する。ところが、商品交換の発展につれて、それは排他的に、特殊な商品種類に固着する、すなわち、貨幣形態に結晶する。それがどんな商品種類に付着したままになるかは、最初は偶然的である。とはいえ、一般には二つの事情がことを決定する。貨幣形態は、事実上域内諸生産物の交換価値の自然発生的な現象形態である最も重要な外来の交換品に、付着するか、または、域内の譲渡可能な財産の主要な要素を成している使用対象に、たとえば家畜のようなものに、付着する。遊牧民が最初に貨幣形態を表示するが、そうなるのは、彼らの全財産が可動的な形態、したがって直接的に譲渡可能な形態にあるからであり、また、彼らの生活様式が、彼らを絶えず他の共同体と接触させ、したがって、彼らに生産物交換を促すからなのである。人間はしばしば、人間そのものを奴隷の形で原始的な貨幣素材にしたがって、土地については、そうしたことは決してなかった。土地を貨幣素材にするような考えは、すでにできあがった市民社会においてのみ生ずることができた。このような考えは一七世紀の最後の三分の一期に始まり、このような考えの一国的な規模での実施は、一世紀後に、フランス人たちのブルジョア革命において、初めて試みられたのである。〉（75-6頁）

《フランス語版》

〈直接的な生産物交換では、各々の商品は、それを所有する人にとっては直接的な交換手段であるが、それを所有しない人にとっては、それが彼にとって使用価値であるばかりにかぎって等価物になる。したがって、交換物品はまだ、それ自身の使用価値あるいは交換者たちの個別的必要から独立した価値形態を、全然獲得していない。この形態の必然性は、しだいに交換のうちに入りこむ商品の数と多様性とが増すにつれて発展するのであって、課題はその解決手段と同時に生まれる。さまざまな商品が価値として、そのさまざまな持ち主によって同一の第三の商品種類と交換され、比較されなければ、これら商品の所有者たちは決して自分の物品を他のさまざまな物品と交換し、比較することがない。このような第三の商品は、他のさまざまな商品にたいして等価物になることによって、狭い限界内ではあるが、一般的あるいは社会的な等価形態を直接に獲得する。この一般的等価形態は、これを産んだ一時的な社会的接触とともに発生し消滅するのであって、迅速にしかかわるがわる、あるときはある商品に、あるときは別の商品に付着する。交換がある程度の発達に到達してしまうやいなや、この一般的等価形態はもっぱら特殊な商品種類に付着する、すなわち、貨幣形態に結晶する。それがどんな商品種類に固定されたままになるかは、最初は偶然によってきまる。しかし、一般には二つの決定的な事情による、と言ってよい。貨幣形態は、域内生産物の交換価値を実際最初に示すような最も重要な輸入物品に付着するか、あるいは、たとえば家畜のごとき、その域内の譲渡可能な富の主要な要素をなすような物体あるいはむしろ有用物に、付着する。遊牧民が最初に貨幣形態を発展させる。というのは、彼らの財貨と財産のどれもが、動産形態、したがって、直接に譲渡可能な形態にあるからである。さらに、彼らの生活様式は、彼らを外部の社会と絶えず接触させ、まさにそのために、彼らを生産物交換に駆り立てる。人間はしばしば、人間自身を奴隷の形で自分の原

始的な貨幣材料にした。土地については、こうしたことは一度もなかった。そのような思いつきは、すでに発達したブルジョア社会ではじめて生まれることができた。そのような思いつきは一七世紀の最後の三分の一に始まっており、その実現はそれからやっと一世紀後、フランスの一七八九年革命において、全国的に大規模に試みられたのである。

〉 (65-6頁)

●第10パラグラフ

《初版本文》

〈商品交換がその単なる地方的な枠を突破し、したがって、商品価値が人間労働一般の具象物にまで広がってゆくのと同じ割合で、貨幣形態が、一般的な等価物という社会的機能に生来適している諸商品の上に、貴金属の上に、移ってゆくのである。〉 (76頁)

《フランス語版》

〈交換が純粋に地方的な枠を断ち、その結果、商品の価値がますます人間労働一般を代表するようになるにつれて、貨幣形態は、一般的な等価物の社会的機能を果たすに適した性質をもつ商品、すなわち貴金属に、移行する。〉 (66頁)

●第11パラグラフ

《初版本文》

〈ところで、「金銀は生来貨幣でなくとも、貨幣は生来金銀である(37)」ということは、金銀の自然的な諸属性が貨幣の諸機能に適合していることを、示している(38)。ところが、われわれはこれまで、貨幣の二つの機能しか知らない。その機能は、商品価値の現象形態として、あるいは、諸商品の価値量がそのなかで社会的に表現されるところの素材として、役立っているという機能である。価値の適当な現象形態、あるいは、抽象的でありしたがって同等である人間労働の具象物は、ある物質—この物質のすべての見本が同じ様な質をもっている—でしかありえない。他方、価値量の差異は、純粋に量的であって、凝固した労働時間のいろいろな量を表現しているから、貨幣商品は、純粋に量的な区別が可能なもの、つまり、随意に分割可能でありまたその諸部分から再び合成可能なもの、でなければならない。ところが、金銀は生来これらの属性をもっている。〉 (76-7頁)

《フランス語版》

〈さて、「銀と金は生来貨幣ではないが、そういっても貨幣は生来銀と金である」ということは、これら金属の自然属性と貨幣の機能とのあいだに存在する一致と類似とを、示している(7)。だが、われわれがこれまでに知っている貨幣の機能は、一つの機能—商品価値の表示形態として役立つ、すなわち、商品の価値量を社会的に表現するための材料として役立つ、という一つの機能—だけである。ところで、価値を表示するのに適切な形態でありうる、すなわち、抽象的な、したがってまた同等な人間労働の具体的な形象として役立つ材料は、たった一つしかない。それは、どの一片も同じ画一的な質を有する材料である。他方、価値は量だけが異なるのであるから、貨幣商品は、純粋に量的な差を示しうるものでなければならない。貨幣商品は、任意に分割可能なものであり、その諸部分の総和で再構成されうるものでなければならない。金と銀が生来これらの属性のすべてをもっていることは、誰でも知っている。〉 (66-7頁)

●注42と43

《初版本文》

〈(37)カール・マルクス、前掲書〔『経済学批判』〕、135ページ。「貴金属は……生来貨幣である。(ガリアーニ『貨幣について』、所収、クストディの叢書、近世篇、第三巻、72ページ。)> (77頁)

〈(38) これについてさらに詳しいことは、私の前記著書の「貴金属」という節を参照せよ。〉 (77頁)

《フランス語版》

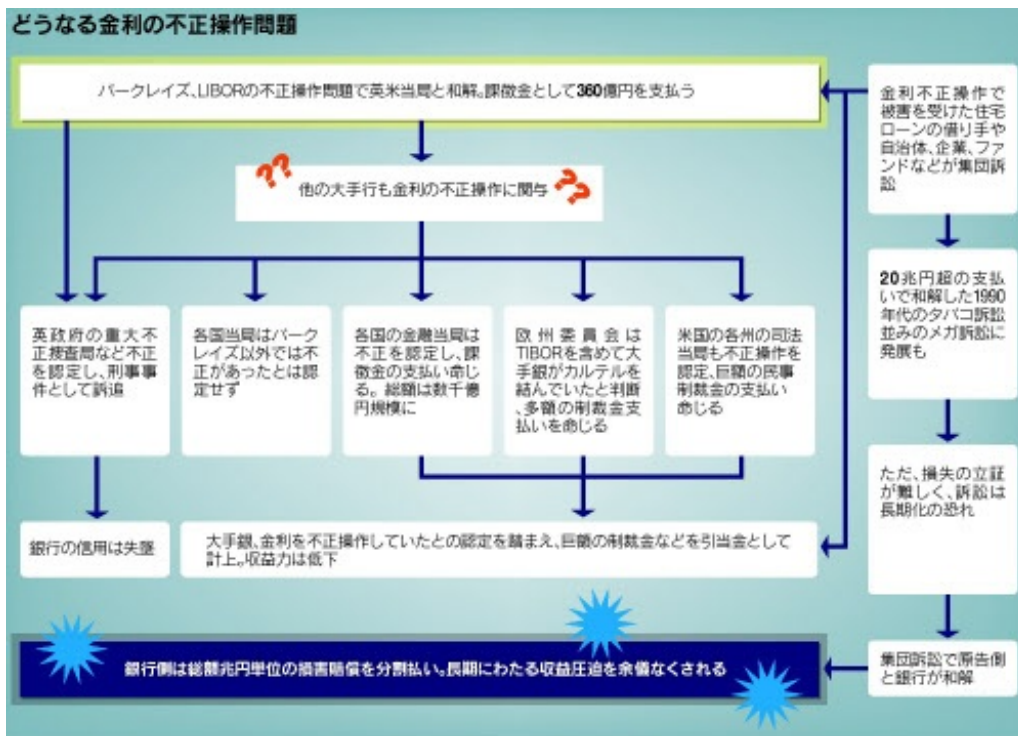
〈(6) カール・マルクス『経済学批判』、135ページ。「貴金属は生来貨幣である」(ガリアーニ『貨幣について』、クストディの叢書に所収、近世の部、第三巻、137ページ。)> (67頁)

〈(7) この問題についてさらに詳細なことは、すでに引用した私の著書の「貴金属」の章を見よ。〉 (67頁)

『資本論』を読んでみませんか

EUの信用不安は一向に収まる気配はないが、ここにきて新たな問題が出てきた。LIBOR（ライボーと読むらしい）の不正疑惑である。LIBORというのは「ロンドン銀行間取引金利のこと」で「指定された複数の有力銀行から報告された11:00時点のレートを英国銀行協会（BBA）が集計し毎営業日発表している」ものらしい。まあ銀行が営業や互いの貸し借りで貸し出す場合の予定金利を毎日BBAに報告して、それにもとづいて一定の手続きの上で、その時点での平均金利として発表されているもので、さまざまな金融取引における利率の目安になっているようなものらしい。

その「有力銀行」の一つ英大手銀行バークレイズが2005～09年にたびたび不正操作していたことが発覚したという。しかも不正操作をしていたのはバークレイズに限らずHSBC（世界最大級の金融グループ）や仏ソシエテ・ジェネラル、クレディ・アグリコルがバークレイズと共謀していたともいう。EUの金融機関全体が（各国の中央銀行も含めて）不信の目で見られるような状態なのである。



しかし銀行が貸し出す金利の「不正操作」と言っても、金利そのものに何か絶対的な基準というものがあるわけではない。今回のBBAへの報告の対象になっているものも、ただ銀行がこれだけの金利なら貸し出してもよいという程度のものでしかなく、実際に貸し出した実勢の金利ではない。つまり金利には常に一定の恣意性と人為性がつきまとうものである。だからそこには常に「不正操作」が、つまり詐欺や瞞着が付きまとうのであり、むしろそれが金融の世界の常態と言ってよいほどのものでさえある。

利子率というのは、銀行が貨幣商品売り出す（貨幣を貸し出す）ときの「価格」であるが、一般の商品の価格とは大きく異なる。一般の商品の価格やそれを最終的に規定する価値というものは、社会の物質代謝を維持するために必要な諸商品の生産に、その時の生産力において、どの分野にどれだけの労働力を配分すべきかを示す指標であり、この社会を物的に維持するために、さまざまな偶然や攪乱を通して貫いている客観的な法則である。それに対して、利子率というのは、

一方に貸付可能な貨幣資本があり、他方にそれを借り出す需要があったときに、その供給と需要によって決まってくるものでしかなく、客観的な基準というものは何もないのである（もちろん、利子も資本が労働者から搾取した剰余価値〔利潤〕から分割したものだから、社会全体の剰余価値〔利潤〕以上にはなりようはないという限度はあるのだが）。

マルクスは信用には二つのものが概念的に区別されるべきと指摘している。一つは一般の商品が流通する過程で生まれる信用（商業信用）であり、もう一つは銀行などが貨幣を貸し出す場合の信用（貨幣信用、通常は「銀行信用」とも言われている）である。前者は再生産過程の内部の信用であり、後者は再生産過程の外部の信用である。もちろんこの二つの信用は現実には複雑に絡まり合っ現れてくるのであるが、再生産過程の内部の信用には、物質的な再生産を構成するという客観的な基準はあるが、外部の信用である貨幣信用には、だからそうした客観的な基準というものはなく、よってこの場合の信用には、常に恣意性と人為性が付きまとうというのである。ただこの世界で問題になるのは、労働者から搾り取った剰余価値の分け前を巡る資本家同士の醜い争いであり、労働者には直接には無関係の、おどろおどろしい世界の話でしかないのだ。

マルクスは次のように述べている。

〈信用は、個々の資本家に、または資本家とみなされる人々に、他人の資本や他人の所有にたいする、したがってまた他人の労働にたいする、ある範囲内では絶対的な支配力を与える。・・・成功も失敗も、ここではその結果は同時に諸資本の集中になり、したがってまた最大の規模での収奪になる。収奪はここでは直接生産者から小中の資本家そのものにまで及ぶ。・・・そして、信用はこれらの少数者にますます純粋な山師の性格を与える。所有はここでは株式の形で存在するのだから、その運動や移転はまったくただ取引所投機の結果になるのであって、そこでは小魚は鮫（さめ）に呑みこまれ、羊は取引所狼に呑みこまれてしまうのである。〉（全集25巻a559-560頁）

金融諸現象はなかなか理解しづらい分野の一つであるが、しかし、『資本論』はそうした複雑な諸現象を基礎的な視点から解明する指針を与えてくれる。貴方も共に『資本論』を読んでみませんか？

第49回「『資本論』を読む会」の報告

◎領土問題の背景

竹島や尖閣諸島の領有をめぐる争いは、俄かに波立ってきましたが、ジャーナリストの山田厚史氏（元朝日新聞編集委員）は、〈反日に走らす「韓流経済」の深き“影”〉と題して、興味深い問題を指摘しています（8.30ダイヤモンド・オンライン）。

今回、李明博（イ・ミョンバク）韓国大統領が竹島（韓国名・独島〔ドクト〕）を訪問したり、天皇に謝罪を求めたりしたのは、大統領選挙を控え、身内にまつわる汚職・腐敗に対する批判を逸らし、「外に敵を作って」求心力を高めようという安易な手法に走ったためだと指摘されていますが、それだけではなく、韓国で燃え上がる愛国主義の背後には「躍進する経済等の光に潜む深き“影”がある」というのです。

それによるとソウル聯合ニュースが4月23日、「所得格差拡大でポピュリズム台頭の恐れ」という記事を掲載したのだそうです。〈国策シンクタンク・韓国開発研究所（KDI）の分析を紹介し、「1990年代前半まで改善に向かっていった所得格差がアジア通貨危機の前後から再び悪化している」「一握りの人々だけが豊かな暮らしをしているという考えが広がり、ポピュリズムや保護貿易論が台頭する可能性がある」と警告した〉と。

所得格差が拡大しているのは、何も韓国だけの話ではないでしょう。経済的躍進を遂げた中国においては「赤い貴族」など遥かに極端な格差が指摘されていますし、長く経済的停滞の中にある日本も例外ではありません。

日本では、「ハシズム」と揶揄される橋下徹大阪市長率いる「大阪維新の会」の躍進に見られるように、「ポピュリズム台頭の恐れ」は、すでに現実の問題ですが、現在の激しくなるばかりの排外主義や愛国主義の背景には、こうした資本主義的生産の矛盾の深まりと、その結果としての深刻な格差の拡大が背景にあるのかも知れません。

さて、残暑厳しいなかで開かれた第49回「『資本論』を読む会」でしたが、相変わらず参加者は“お寒いかざり”でした。「読む会」が行われた南図書館の3階も閑散としており、われわれが使っている1号室以外は誰も使っていない有り様でした。この暑い中、わざわざ出かけるのは余程のヒマ人が物好きなのかも知れません。しかし、まあ、愚痴を言っても始まりません。報告に移りましょう。

◎第12パラグラフ

今回は第12～14パラグラフを進みました。それぞれについて、まず本文を紹介し（青字）、そして各文節ごとに記号を打って、平易な読みくだしを行い（太字）、そしてその解説のなかで議論の紹介もして行くことにします。まず本文です。

【12】 〈(イ)貨幣商品の使用価値は二重化する。(ロ)貨幣商品は、たとえば金が虫歯の充填（ジュウテツ）、奢侈品（シヤビシ）の原材料などに役立つというような、商品としてのその特殊な使用価値のほかに、その独特な社会的機能から生じる一つの形式的な使用価値を受け取る。〉

(イ)、(ロ) こうして貨幣になる商品である貴金属の使用価値は二重化します。というのは、貴金属は、例えば金が虫歯の充填に役立ったり、奢侈品の原材料に役立つというような、商品としてのその本来の特殊な使用価値の他に、貨幣としての独特な社会的機能からくる一つの形態的な使用価値を受け取るからです。

学習会では、J J 富村さんがレポートを担当し、簡単なレジュメを用意してくれました。そのレジュメではこの12パラグラフは、次の13パラグラフと一緒に一まとめに報告するという形になっていました。それに対して亀仙人は疑問を呈し、そもそもこの第12パラグラフはどのような位置に（あるいは課題が）あるのが問題になりました。というのは、この12パラはその前の11パラを直接受けたものように思えるからです。

先の第10パラグラフまでで、商品の交換過程の発展を跡づけて、それが貨幣を生み出すことが論証されました。そして最終的に貨幣が貴金属に固着するわけですが、どうして貨幣が貴金属に最終的に固着するのかについては、貴金属の自然属性が貨幣としての社会的機能を果たす上でもっとも適しているからだ、ということも第11パラで指摘されたのでした。

今回のパラグラフ（第12）は、そうした貴金属が貨幣の社会的機能を果たす上でもっとも適した材質を持っているという先のパラグラフの指摘を受けて、だから貨幣になる商品の使用価値は二重化すると受けているわけです。マルクスは使用価値について、次のように述べていました。

〈鉄、紙などいっさいの有用物は、・・・どれも、多くの属性からなる一つの全体であり、したがって、さまざまな面で有用でありえる。・・・ある物の有用性は、そのものを使用価値にする。〉（全集23a48頁）

諸物のさまざまな諸属性が人間にとって有用である場合、その諸物は使用価値なわけです。貴金属は、古代から装飾に使われてきましたが、必ずしも生産手段としての役立ちはありませんでした。せいぜいその耐久性を利用して虫歯の充填に利用されたり、食器類に使われたに過ぎません。しかし、貴金属は同時にその諸属性が貨幣としての社会的機能を果たす上で、最も適したものでもあったわけです。

前回紹介した『経済学批判』では、その属性は次のようなものでした。①質的に均一で純粋に量的区別を表す。②任意の諸部分に細分でき、また合成できる。③比重が大きく、小さな容量のうちに大きな価値をもち、運搬・移転が容易である。④耐久性があり、容易に酸等に溶解しない。⑤希少であり、生産用具としての役立ちが少ない。⑥装飾的な美

しさがある、等々。

こうした諸属性が社会的機能を果たすのに適し、貨幣としての社会的に必要な有用な効果をもたらすわけですから、これも貴金属の別の意味での使用価値であると言えます。マルクスはこうしたものを、社会的機能から生じる使用価値であるということから、これを形態的使用価値と規定しているわけです。こうした意味で貨幣商品（貴金属）の使用価値は通常の貴金属の属性が有用効果をもたらす使用価値（虫歯の充填等）とその属性が社会的機能（貨幣としての機能）を果たす上でもっとも適切であるという使用価値に、二重化するというわけです。

◎第13パラグラフ

次は第13パラグラフです。

【13】 〈(イ)他のすべての商品は貨幣の特別な等価にほかならず、貨幣はこれらの商品の一般的等価であるから、これらの商品は、一般的商品としての貨幣(44)に対して特別な商品としてふるまう。〉

(イ) 貨幣は他の諸商品の価値を表す一般的等価物です。それに対して、貨幣自身の価値は、それによって表される諸商品の別によって表されます。そしてこれらの諸商品は、だから貨幣に対して特殊な等価物となるわけです。こうしたことから、一般的商品である貨幣に対して、他の諸商品は特殊な商品として位置づけられることになります。

貨幣が〈一般的商品〉であるということはどういうことでしょうか。商品が商品であるということは、それが価値を持つということですが、だから一般的商品とは、価値の絶対的な存在だということですが。

第3章では〈支払手段は流通にはいつてくるが、しかし、それは商品がすでに流通から出て行ってからのことである。貨幣はもはや過程を媒介しない。貨幣は、交換価値の絶対的定在または一般的商品として、過程を独立に閉じる〉(23a178頁)という一文が出てきますが、〈交換価値の絶対的定在〉を言いかえて〈一般的商品〉という言葉が使われています。

それに対して、それ以外の諸商品は特殊な商品として振る舞うわけです。それらは直接にはそれぞれの使用価値（特殊な使用価値）として存在しており、そのままでは〈交換価値の絶対的定在〉たりえません。だからそうなるためには、まずは交換によって貨幣にならなければならない存在なわけです。だから貨幣が一般的商品になることによって、他の諸商品は特殊な諸商品として位置づけられるというわけです。

ところで、このパラグラフは貨幣＝一般的商品、それ以外の諸商品＝特殊な商品という関係を論じたものですが、果たして、これが如何なる意味があるのか、それまでの展開とどのように関連しているのかが一つよく分かりません。学習会でもそれが問題になりましたが、結局、ハッキリした結論は出ず、宿題になりました。

しかし、よく考えてみると、このパラグラフも先のパラグラフを直接受けたものと考えることが出来るように思えます（その意味では、JJ 富村さんのレジュメがこの二つのパラグラフを一まとめに論じていたことそのものが問題であったとは言えないかも知れません）。というのは、貨幣が一般的商品であるというのは、貨幣の形態的使用価値から直接出てくるものだからです。他の諸商品が特殊な商品というのは、他の諸商品の直接的定在は、それらの特殊な使用価値であり、それぞれの物的定在だからです。貨幣商品も、もちろんその直接的定在は一つの特殊な使用価値ですが、しかし貨幣商品の使用価値は二重化し、他の諸商品と同じように特殊な物的定在でありながら、同時にその形態的使用価値によって、その直接的定在そのものが価値の絶対的定在でもあるという社会的機能を果たす存在でもあるわけです。だから貨幣商品の使用価値はまさに価値そのものを表す存在として一般的商品たりうるわけです。だからこのパラグラフはやはりその前のパラグラフを直接受けたものとして捉えるべきでしょう。

因みに、〈一般的商品〉という用語がどのように使われているのか、少し他の文献から紹介しておきましょう（下線はマルクスによる強調、赤字は引用者）。

〈貨幣の諸性質、（1）商品交換の尺度としての、（2）交換手段としての、（3）諸商品の代表物としての（したがって契約の対象としての）、（4）特殊な諸商品とならば**一般的商品**としての。――これらはすべて、諸商品それ自身から切りはなされた、対象化された交換価値という貨幣の規定から単純に出てくる。（すべての他の商品にたいする**一般的商品**としての貨幣の性質、商品の交換価値の化身としての貨幣の性質は、同時に、貨幣を資本の実現された形態であるとともに、いつでも実現できる形態にする。つまり、いつでも通用する資本の現象形態にする。〉（『経済学批判要綱』草稿集①120頁）

〈第四。すなわち、交換価値は、すべての特殊な商品とならんで、**一般的商品**として貨幣のかたちで現われるが、それと同様に、そのことによって同時に交換価値は、すべての他の商品とならんで**特殊な商品**として貨幣のかたちで（というのは、貨幣は一つの特殊な存在をもつから）現われる。〉（同126頁）

〈交換過程では、すべての商品は、商品一般としての、商品そのものとしての、特殊な一使用価値における一般的労働時間の定在としての排他的商品に関係する。だから諸商品は、特殊な諸商品として、**一般的商品**としての特殊な一商品に対立して関係する。〉（『経済学批判』全集13巻33頁）

〈ただここで注意しておきたいのは、W—G—Wでは両極のWは、Gにたいして同一の形態関係に立っていない、ということである。第一のWは、特殊な商品として**一般的商品**としての貨幣に関係するのにも、**一般的商品**としての貨幣は、個別の商品としての第二のWに関係する。〉（同76頁）

〈鑄貨のたえまない流通の条件は、鑄貨の大なり小なりの部分がたえず停滞して、鑄貨準備金――流通内部でいたるところに発生するとともに、この流通を制約するところの――となることであって、この準備金の形成、配分、解消、再形成はつねに交替し、その定在はたえず消滅し、その消滅はたえず定在する。アダム・スミスは、鑄貨の貨幣への、貨幣の鑄貨へのこの間断ない転化を次のように表現している。すなわち、どの商品所有者も、彼の売る特殊な商品とならんで、彼が買うための手段である一定額の**一般的商品**をつねに貯えておかなければならない、と。〉（同105頁）

〈一般的な支払手段としては、貨幣は契約の**一般的商品**となる。〉（同122頁）

〈*）**ペーリ**、前掲書、三ページ。「貨幣は契約の**一般的商品**である。すなわち、将来履行されるべき大多数の財産契約を結ぶのに用いられるものである。」〉（同）

〈金と銀は貨幣としては、その概念上**一般的商品**であるが、それらは世界貨幣で普遍的商品というそれに適応した存在形態を得る。〉（同129頁）

〈流通の目的としての貨幣は、生産を規定する目的および推進する動機としての交換価値または抽象的富であって、富のなんらかの素材的要素ではない。ブルジョアの生産の前段階にふさわしく、あの真価を認められない予言者たちは、交換価値の純粋な、手でつかむことのできる、光り輝く形態を、すべての特殊な商品に対立する**一般的商品**としての交換価値の形態を、しっかりとらえたのである。〉（同135頁）

◎注44

第13パラグラフには注がついていますが、一応、それも紹介だけしておきます。

【注】(44) 「貨幣は一般的商品である」（ヴェリ『経済学に関する諸考察』、〔前出叢書〕一六ページ）。〉

マルクスはこのヴェリ著『経済学に関する諸考察』から『資本論』の幾つかの注で引用していますが、全集版の人名索引にはヴェリについて次のような説明があります。

〈ヴェリ,ピエトロ Verri,Pietro(1728-1797)イタリアの経済学者,重農学派の学説を批判した最初のひとり。
57,58,104,147,349〉

◎第14パラグラフ

【14】 〈(イ)すでに見たように、貨幣形態は、他のあらゆる商品の諸関係の反射が、一つの商品に固着したものにほかならない。(II)したがって、貨幣は商品である(45)ということは、貨幣の完成した姿から出発して後から分析する者にとっての一つの発見であるにすぎない。(A)交換過程は、それが貨幣に転化させる商品に、その価値を与えるのではなく、その独特な価値形態を与えるのである。(二)この二つの規定の混同は、金銀の価値を想像的なものとみなす誤った考えを生み出した(46)。(B)貨幣が、一定の諸機能において、それ自身の単なる章標によって置きかえられるところから、貨幣は単なる章標であるというもう一つの誤りが生じた。(A)他面、この誤りのうちには、物の貨幣形態はその物自身にとって外的なものであり、その背後に隠されている人間の諸関係の単なる現象形態にすぎないという予感があったのである。(ト)この意味では、どの商品も一つの章標であろう。(フ)なぜなら、どの商品も、価値としては、それに支出された人間労働の物的外皮にすぎないからである(47)。(リ)しかし、一定の生産様式の基礎上で、諸物が受け取る社会的諸性格、あるいは労働の社会的諸規定が受け取る物的諸性格を、単なる章標として説明するならば、そのことによって同時に、それらの性格を人間の恣意的な反省の産物として説明することになる。(Z)これこそは、その成立過程がまだ解明されえなかった人間的諸関係の謎のような姿態から少なくともさしあたり奇異の外観をはぎ取ろうとして、一八世紀に好んで用いられた啓蒙主義の手法であった。〉

(イ) すでに見ましたように、貨幣形態は、他のあらゆる商品の諸関係が反射して、一つの商品に固着したものにほかなりません。

〈すでに見たように〉とありますが、第7パラグラフには、次のようにありました。

〈貨幣結晶は、種類の違う労働生産物が実際に互いに等置され、したがって実際に商品に転化される交換過程の、必然的な産物である。交換の歴史的な広がりや深まりとは、商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を展開する。この対立を交易のために外的に表わそうという欲求は、商品価値の独立形態に向かって進み、商品と貨幣との商品の二重化によって最終的にこの形態に到達するまでは、少しも休もうとしない。それゆえ、労働生産物の商品への転化が実現されると同じ程度で、商品の貨幣への転化が実現されるのである。〉

しかし〈すでに見たように〉というのは、〈これまで展開されてきたように〉という含意であり、この第7パラグラフだけを指すのではないかも知れません。

(II) だから、貨幣が商品であるということは、貨幣の完成した姿から出発して後から分析する者にとっては、一つの発見ですが、しかしそれだけに過ぎません。

ここでは〈一つの発見であるにすぎない〉とありますが、〈すぎない〉というのは、貨幣が商品であることを発見しても、貨幣の何たるかを解明するには決定的に不十分であり、貨幣が商品であることを発見した古典派経済学も、しかし、依然として貨幣の物神崇拜に囚われていたのだという含みがあると思います。そしてそれがそれ以下の文節に繋がっているわけです。

(A) 交換過程は、貨幣に転化させた商品に、その価値を与えるのではなく、その独特な価値形態を与えるのです。

現象に囚われている経済学者は、貨幣の価値は流通から与えられると考えるわけです。これは別に古典派経済学者たちだけではなく、現在の経済学者のなかにもこうした考えがどんなに多いことでしょうか。古典派経済学は価値形態の重要性を見なかったのですが、それには深いわけがあるのだと、マルクスは第1章の原注32で次のように述べていました。

〈古典派経済学の根本的欠陥の一つは、それが、商品の分析、ことに商品価値の分析から、価値をまさに交換価値にする価値の形態を見つけたことに成功しなかったことである。A・スミスやリカードのようなその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとして、あるいは商品そのものの性質にとって外的なものとして、取りあつかっている。その原因は、価値の大きさの分析にすっかり注意を奪われていたというだけではない

。それはもっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョアの生産様式の最も抽象的な、しかし最も一般的な形態であり、ブルジョア生産様式はこの形態によって一つの特別な種類の社会的生産として、したがってまた同時に歴史的なものとして、性格づけられている。だから、人がこの生産様式を社会的生産の永遠の自然的形態と見誤るならば、人は必然的に、価値形態の特殊性を、したがって商品形態の、すすんでは貨幣形態、資本形態等々の特殊性を見落とすことになるのである。だから、労働時間による価値の大きさの測定についてはまったく一致している経済学者たちのあいだに、貨幣、すなわち一般的等価の完成した姿態、については、きわめて種々雑多なまったく矛盾した諸見解が見られるのである。〉(全集23a108頁)

(二) この二つの規定の混同は、金銀の価値を想像的なものとみなす誤った考え方を生み出しました。

〈この二つの規定〉というのは、いうまでもなく〈価値〉と〈価値形態〉ということでしょう。『経済学批判』では、次のように書かれています。

〈金銀がそれ自身の価値をもつとすれば、流通の他のすべての法則を度外視しても、ただ一定量の金銀だけが諸商品のあたえられた価値総額にたいする等価物として流通できるということは、明らかである。だからどれだけであろうと、たまたま一国内に存在する金銀の量が、商品価値の総額にかかわらず、流通手段として商品交換にはいりこまなければならないとすれば、金銀はなんら内在的価値をもたず、したがって実際には現実的な商品ではない。これがヒュームの第三の「必然的帰結」である。彼は、価格をもたない商品と価値をもたない金銀とを流通過程にはいりこませる。だから彼はまた、商品の価値と金の価値とについては全然論じないで、ただそれらの相関的な量についてだけ論じているのである。すでにロックが、金銀はただ想像上のまたは慣習上の価値をもつにすぎないと言ったが、これは、金銀だけが真の価値をもつという重金主義の主張にたいする反対論の最初の粗野な形態である。金銀の貨幣定在は、ただ社会的交換過程におけるそれらの機能からだけ発生するということが、金銀はそれ自身の価値、したがってそれらの価値の大きさを社会的な機能のおかげでもっている、というように解釈されるのである。だから金銀は価値のないものであるが、しかし流通過程の内部では諸商品の代理者として一つの擬制的な価値の大きさを得る。金銀は、この過程によって貨幣に転化されるのではなくて、価値に転化される。金銀のこの価値は、それ自身の量と商品量とのあいだの比率によって規定される。なぜならば、両者の量は互いに一致しなければならないからである。だからヒュームは、金銀を非商品として商品の世界にはいりこませおきながら、それらが鑄貨という形態規定性で現れると、逆にそれらを単純な交換取引〔物々交換〕によって他の商品と交換されるただの商品に転化させてしまうのである。〉(全集13巻139-140頁)

ここで〈金銀の貨幣定在は、ただ社会的交換過程におけるそれらの機能からだけ発生するということが、金銀はそれ自身の価値、したがってそれらの価値の大きさを社会的な機能のおかげでもっている、というように解釈される〉というのが、その前の文節(n)で述べていることと同じだと思います。だから〈交換過程は、それが貨幣に転化させる商品に、……その独特な価値形態を与える〉という場合の〈その独特な価値形態〉とは、〈金銀の貨幣定在〉のことです。金銀が貨幣になるのは、社会的な交換過程においてそうした機能を果たすことから生じるのに、それが金銀自身の価値を、そうした社会的な機能のおかげで持っているのだというように解釈されるわけです。金銀の価値というのは、金銀が貨幣だから、貨幣としての機能を果たすことから生まれている、貨幣としての機能によって与えられている、と理解することでしょうか。

そしてそこから〈金銀は価値のないものであるが、しかし流通過程の内部では諸商品の代理者として一つの擬制的な価値の大きさを得る〉という解釈が生まれ、金銀の価値というのは想像的なものだと思ふ考え方が出てきたというわけです。それは上記の『批判』によれば、ロックやヒュームによって主張されたと指摘されています。

(#) 貨幣が、一定の諸機能において、それ自身の単なる章標に置き換えられるところから、貨幣は単なる章標であるというもう一つの誤りが生まれました。

ここに出てくる貨幣の〈一定の諸機能〉というのは、いうまでもなく第3章に出てくる、「流通手段としての機能」あるいは「鑄貨としての機能」だと思います。少し先回りしますが、どうして流通手段としての貨幣の機能が章標への置き換えを可能にするのかを論じている部分を紹介しておきましょう。

〈最後に問題になるのは、なぜ金はそれ自身の単なる無価値な章標によって代理されることができるのか？ ということである。しかし、すでに見たように、金がそのように代理されることができるのは、それがただ鑄貨または流通手段としてのみ機能するものとして孤立化または独立化されるかぎりでのことである。ところで、この機能の独立化は、摩滅した金貨がひきつづき流通するということのうちに現われるとはいえず、たしかにそれは一つ一つの金貨について行なわれるのではない。金貨が単なる鑄貨または流通手段であるのは、ただ、それが現実流通しているあいだだけのことである。しかし、一つ一つの金貨にはあてはまらないことが、紙幣によって代理されることができる最小量の金にはあてはまるのである。この最小量の金は、つねに流通部面に住んでいて、ひきつづき流通手段として機能し、したがってただこの機能の担い手としてのみ存在する。だから、その運動は、ただ商品変態W—G—Wの相対する諸過程の継続的な相互変換を表わしているだけであり、これらの過程では商品にたいしてその価値姿態が相対したかと思えばそれはまたすぐに消えてしまうのである。商品の交換価値の独立的表示は、ここではただ瞬間的な契機でしかない。それは、またすぐに他の商品にとって代わられる。それだから、貨幣を絶えず一つの手から別の手に遠ざけて行く過程では、貨幣の単に象徴的な存在でも十分なのである。いわば、貨幣の機能的定在が貨幣の物質的定在を吸収するのである。商品価格の瞬間的に客体化された反射としては、貨幣はただそれ自身の章標として機能するだけであり、したがってまた章標によって代理されることができるのである。〉(全集23a168頁)

ところで、ここでは(nと#では)マルクスは貨幣の価値を想像的なものと考え誤りと、貨幣を単なる章標であるとする誤りを区別して、それらが貨幣の違った社会的機能から生じてくることを論じています。最初の誤りは交換過程が金銀の価値ではなく、価値形態(=貨幣形態)を与えるのだということを理解せず、貨幣の価値は流通そのものから生じる想像的なものとする誤りであり、もう一つの誤りは貨幣の一つの機能である流通手段としての機能から生じるもので、貨幣は単なる章標だという理解です。

この貨幣についての二つの間違った理解は、しかし決して過去の古い考えというようなものではなく、今日においても、まさに一般的に生じていることなのです。

いわゆる「金貨論」というのがありますが、金はすでに貨幣ではない、という主張です。ということは、現在、貨幣、あるいは通貨として通用しているものは、単に流通から与えられた機能を果たしているだけのものだ、ということになるわけです。例えば次のように言われています。

〈今では貨幣は、ただ「通貨」として、流通過程における機能的な存在としてのみ現れる。〉)『変容し解体する資本主義』12頁)

つまり現在の通貨は、〈価値のないものであるが、しかし流通過程の内部では諸商品の代理者として一つの擬制的な価値の大きさを得る〉(前掲『批判』)ので、そのことによって貨幣としての機能を果たしているだけなのだ、という理解です。

金はすでに貨幣ではない。金との繋がりは何もない円やドル、ユーロ等の銀行券は、〈それ自体としては内在的な価値を持たず、単なる紙つべらである〉(同前)。ただ流通からその貨幣としての機能を与えられて、通貨として通用しているだけなのだということです。最近もある新聞で、〈現代資本主義は「通貨」も……確かな根拠を持たず——というのは、貨幣は内在価値を有せず、近似紙幣に墮し、いくらでも減価する〉云々という一文を読みました(『海つばめ』1178号)。これはつまりマルクスが指摘している二番目の誤った理解に立っているわけです。すなわち〈貨幣が、一定の諸機能において、それ自身の単なる章標によって置きかえられうるところから、貨幣は単なる章標であるという……誤り〉です。現在の通貨は金との関連がないので、もはや金(貨幣)を代理しているとはいえない、だから現在においては、貨幣そのものが単なる章標になってしまったのだ、という考えが、こうした理解の根底にあるように思えます。

確かに現代の「通貨」、すなわち「日本銀行券」は金との繋がりがまったくないように見えます。しかしそれは本当でしょうか。確かに現在の日銀券は不換券です。それを日本銀行に持って行っても金と交換してくれるわけではありません。だから1万円札がどれだけの金を代理しているのか分からないというかも知れません。しかし、もし現在の1万円札がどれだけの金を代理しているのかを知りたいなら、その1万円札で金を購入すればたちどころに分かります。金何グラム買えるかが分かれば、それが1万円札が代理している金の大きさであり、その目に見える形で表された価値とその大きさそのもののなのです。

金の購入は、一見すると他の商品の購入と何一つ変わらないように見えます。しかし、そうではないのです。貴方がリンゴを買う場合、それはリンゴを食うためです。つまり消費するためです。しかし金を買っても、金を消費するわけではなく、せいぜい、眺めて一人ぼくそ笑むか、金庫に保管しておくだけでしょ。つまり貴方が金を購入するのは、決して、リンゴを買うのと同じではないのです(後者は社会的な物質代謝の一環ですが、前者はそうではない)。金を購入するということは、流通貨幣を蓄蔵貨幣に転換しているのです。代理物をその代理している当のものに戻しているのです。つまり価値の絶対的定在である金に置き換えているのです。

世界中の国々はその中央銀行の金庫に金塊を保管しています。何のためにでしょうか。世界の先進国が石油やレアメタルを備蓄しているように、金も同じように備蓄しているだけなのでしょう。決してそうではありません。石油やレアメタルは将来の消費に備えて、在庫として備蓄しているのです。しかし金は決してそうした意味での将来の消費が目的ではありません。それは価値の絶対的定在として、国家の信用の最後の軸点として保管されているのです。だから金が貨幣でないとか「廃貨」されたなどというのは、まったく現実を見誤った主張に過ぎません。

現在の通貨が直接には、あるいは制度的に、金との繋がりが無いということは現在の通貨が金を代理していない、あるいは代理することをやめたことにはならないし、そもそも金を代理せずして、貨幣として、あるいは通貨として通用するということなどは決してないのです。これは貨幣のなんたるかを知れば、明らかなことです。にも拘らず『資本論』を専門的に研究している学者のなかにも、多くの金廃貨論者が存在している現実、一体どうしたことでしょうか。如何に彼らが『資本論』をただ表面的にしか理解しておらず、金が現実には貨幣として流通していないという、目の前の現象に囚われてしまっているかが分かります。しかし流通していないから貨幣ではない、などという理解は、同じような現象に囚われて蓄蔵貨幣を理解できなかった古典派経済学のレベルに戻りすることです。実際には、多くの金が蓄蔵貨幣としてさまざまところで保管されているのです。こうした現実を彼らは見るることができないのです。

(八) 他方、この誤りのうちには、物の貨幣形態は、その物自身にとって外的なものであり、その背後に隠されている人間の諸関係の単なる現象形態に過ぎないという予感があつたのです。

ここでは〈この誤りのうちには〉となっており、その直前の貨幣は単なる章標だとする誤りだけを指すように捉えられます。しかし文脈からするなら、やはりマルクスが指摘している二つの誤りを指すと考えるべきではないでしょうか。

金銀の光り輝く物的姿が価値のものとして、大きな社会的な力を持つのは、人間の社会的な諸関係が金銀の物的姿をとって現れているからにはかなりません。だからこうした誤った貨幣論にもそうした予感があつたのだとマルクスは指摘しているわけです。しかし、マルクスの『資本論』によって、貨幣の謎も解明されたのに、尚且つ、そうした誤った貨幣論に立っている人々に対しては、こうした指摘は当てはまらないのではないのでしょうか。

(ト)、(フ) この意味では、どの商品も一つの章標でしょう。というのは、どの商品も、価値としては、それに支出された人間労働の物的外皮に過ぎないからです。

貨幣形態がその背後に隠されている人間諸関係の現象形態に過ぎないとするなら、当然、どの商品も価値としては、同じことがいえるわけです。

(リ) しかし、一定の生産様式の基礎の上で、諸物が受け取る社会的諸性格、あるいは労働の社会的諸規定が受け取る物的諸性格を、単なる章標として説明するのでしたら、それは結局、それらの性格を人間の恣意的な反省の産物として説明するのと同じです。

ここで〈一定の生産様式の基礎上で〉とあるのは、当然、資本主義的生産様式の基礎上でという意味だろうと思いますが、学習会ではどうして、ここでは〈一定の生産様式〉というように一般的な形で述べているのだろうか、という疑問が出されました。しかし、必ずしも十分な説明もなく、また質問者もあまり拘らなかったので、それ以上、議論は発展しませんでした。

ここでは物象的な属性は、確かに労働の社会的諸性格が物の社会的属性として現れているものですが、しかし、それを単なる章標(シンボル)として説明するとするなら、結局は、そうした物の属性をただ人間が恣意的に造り上げたもの

と説明することを通じてしまうということだと思います。

フランス語版では、このパラグラフそのものは二つに分けられて、だから〈(A)他面、この誤りのうちには〉以下の部分は別のパラグラフになっています。そしてその間に（すなわち、その前のパラグラフの後に）、注(1)（注45と同じ）が挿入されています。今問題になっている(B)に該当する部分は次のようになっています。

〈ところが、特殊な生産様式の基礎の上で物が帯びる社会的性格、あるいは労働の社会的規定が帯びる物的性格のうち、単なる表章しか見なくなるやいなや、この性格は、いわゆる人間の普遍的な合意によって承認された慣習的な擬制という意味を与えられる。〉（江夏他訳68頁）

(X) そしてこれこそは、その成立過程がまだ解明されえなかった人間的諸関係の謎のような姿から、少なくともさしあたりのその奇異な外観を取り除こうとして、18世紀に好んで用いられた啓蒙主義の手法であったわけです。

しかし物象的關係を、ただ人間の作爲的な産物であるかに説明して事足り、とする手法は、18世紀に好んで用いられた啓蒙主義者のやり方だというわけです。

この部分もフランス語版を紹介しておきましょう。

〈これこそが一八世紀に流行した説明のやり方であった。人は、社会的關係で装われた謎めいた形態の起源も発展もまだ解読できないので、この謎めいた形態は人間の考え出したものであり、天から降ったものではない、と宣言することによって、この謎めいた形態を厄介払いしたわけである。〉（同上）

さて、このパラグラフからは貨幣物神に囚われた経済学者たちの主張が批判的に取り上げられており、それまでの展開とは明らかに対象が違っています。そしてこのパラグラフは〈すでに見たように〉という一文から始まっていますが、次の第15パラグラフも〈先に指摘したように〉という一文から始まっており、最後の第16パラグラフも〈われわれが見たように〉という文から始まっています。つまりこれらの三つのパラグラフは、共通して、これまで述べてきたことを踏まえた展開になっているわけです。こうしたことから、恐らく、このパラグラフから以下最後までは、この第2章そのものを締めくくる位置にあるのではないかと考えられます。

◎三つの注

この第14パラグラフには、三つの比較的長い注がついています。それぞれについても、本文を紹介して、簡単に検討しておきましょう。

【注45】〈(45) 「われわれが貴金属という一般の名称で呼ぶことのできる銀や金そのものは……価値が……上がったりが下がりたりする……商品である。……そこで、そのより小さい重量でもってその国の生産物または製造品のより大きい量が買われるのならば、貴金属の価値は高くなったものとみなされる」（〔S・クレマント〕『相互関係にある貨幣、商業、および為替の一般的観念に関する一考察。一商人著』、ロンドン、一六九五年、七ページ）。「銀や金は、鑄造されていてもいなくても、他のすべての物の尺度として用いられるけれども、ワイン、油、タバコ、布や織物と同じく一つの商品である」（〔J・チャイルド〕『商業、ことに東インド貿易に関する考察』、ロンドン、一六八九年、二ページ）。「厳密に言えば、王国の資産と富を貨幣に限定するのは適切でないし、金や銀を商品ではないとすべきではない」（〔Th・パピロン〕『東インド貿易は最も有利な貿易である』、ロンドン、一六七七年、四ページ）〉。

この注は〈貨幣は商品である(45)〉ことを発見した幾つかの主張を紹介したのですが、最初の〈S・クレマント〉からの引用だと貨幣商品の価値やその大きさは、他の諸商品によって表されることもすでに指摘されていたことが分かります。

【注46】〈(46) 「金銀は、それが貨幣である前に、金属として価値をもっている」（ガリアーニ、前出〔七二ページ〕）。ロックは言う。「人々の一般の合意は、銀を貨幣として適切にさせたその性質のゆえに、銀に想像的な価値を与えた」（ジョン・ロック『利子引き下げおよび……その結果の若干の考察』、一六九一年、所収、『著作集』、一七七七年版、第二巻、一五ページ。田中・竹本訳『利子・貨幣論』、東京大学出版会、三ページ）。これに対してローは言う。「どのようにしてさまざまな国民は何らかの物に想像的な価値を与えることができようか？……あるいは、どのようにしてこの想像的な価値は維持されるだろうか？」と。もっとも、彼自身いかにわずかしか問題を理解していなかったかは、次の通りである。「銀は、それがもっていた使用価値に従って、それゆえその現実的価値に従って交換された。銀は、貨幣としてのその規定を通して追加価値（une valeur additionnelle）を受け取った」（ジョン・ロー『貨幣と交易に関する考察』〔エディンバラ、一七〇五年〕、所収、E・デール編『一八世紀の財政経済学者たち』〔パリ、一八四三年〕、四六九、四七〇ページ〔吉田啓一訳『貨幣と商業』、所収『ジョン・ローの研究』、泉文堂、二〇九、二一〇ページ〕）〉。

この注は〈この二つの規定の混同は、金銀の価値を想像的なものとみなす誤った考えを生み出した(46)〉に付けられたものであり、当然、〈二つの規定（価値と価値形態――引用者）の混同〉によって〈金銀の価値を想像的なものとみなす誤った考え〉に陥っている一例が紹介されているものと考えられます。しかし、この注そのものは、それほど単純なものではないように思えます。

まず最初の〈ガリアーニ〉からの引用文を見ると、〈「金銀は、それが貨幣である前に、金属として価値をもっている」〉となっており、むしろ反対に金銀の価値を想像的なものと見なすような主張とは正反対のもののように思えます。これはどうしたことでしょうか、学習会では、そもそもこのガリアーニの引用文は、何のためになされているのが問題になりました。

そのあとのロックの主張は、明らかに金銀の価値を想像的なものと見なす主張として紹介されていることは明らかでしょう。

ではそのあとに紹介されているローの主張はどうでしょうか。ローの主張は、ロックの主張を批判しているものの、ローも、しかし如何にわずかしか問題を理解していなかったかということの一例として紹介されているように思えます。とすると、最初のガリアーニの主張は、むしろ問題を正確に理解している一例として紹介していると考えた方がよい

ように思えます。

そこでこの三人を全集版の人名索引で調べてみると、次のようになっています。

〈ガリアーニ、フェルディナンド Galiani,Ferdinando(1728-1787)イタリアの経済学者、重農学派の敵、商品の価値は商品の効用によって規定されるという見解を主張したが、同時に商品や貨幣の本質について二、三の適切な推測を述べた。〉

〈ロック、ジョン Locke,John(1632-1704)イギリスの哲学者、感覚論者、経済学者。「彼は、あらゆる形態の新興ブルジョアを代表していた。労働者階級と貧民とにたいしては産業家を、時代おくれの高利貸にたいしては商業家を、国家の債務者にたいしては金融貴族を、そして独自の一著においてはブルジョアの悟性が人間の正常的な悟性であることさえ証明した」(マルクス)。〉

〈ロー、ジョン・オヴ・ローリントン Law,John of Lauriston(1671-1729)イギリスの経済学者、財政家、フランスの財務総監(1719-1720年)彼が有名なのは、紙幣発行による投機が、1720年に破綻をきたし、フランスの経済全体が被害をうけたことによってであった。〉

これを見ると、年代的にはガリアーニがもっとも後世の人であり、ロックがもっとも最初の古い学者であり、その次がローという順序になっています。だから金銀の価値を想像的なものと見なしたのはロックであるが、しかし、それを批判したローも、問題をほとんど理解していなかったこと、しかし、その後のガリアーニになって、ようやく問題が正確に捉えられたというような形になったというのでしょうか。果たして、そうしたことを説明する意図がこの注にはあるのかどうか、ハッキリしたことは分かりません。

【注47】〈(47) 「貨幣は、それらの」(諸商品の)「章標である」(V・ド・フォルボネ『商業に関する基本原理』、新版、ライデン、一七六六年、第二巻、一四三ページ)。「章標としてそれは諸商品に引きつけられる」(同前、一五五ページ)。「貨幣は物の章標であり、それを代表する」(モンテスキュー『法の本質』、著作集、第二巻、ロンドン、一七六七年、三ページ〔根岸国孝訳、『世界の大思想』16、河出書房新社、三二〇ページ)。「貨幣は単なる章標ではない。なぜなら、それ自身が富だからである。それは価値を代理するのではない。それは価値の等価物なのである」(ル・トロウ『社会的利益について』、九一〇ページ)。「価値の概念が考察される時には、物そのものは章標としてのみ見られ、それ自身としてではなく、それが値するところのものとして通用する」(ヘーゲル『法の哲学』、一〇〇ページ〔藤野・赤沢訳『世界の名著』35、中央公論社、二六二ページ)。「経済学者たちよりずっとまえに、法学者たちは、王様に媚びへつらって、貨幣は単なる章標であり、貴金属の価値はひとえに想像的なものだという考え方を振りかざし、王の鑄貨変造権を、中世全体を通して、ローマ帝国の伝統とパンデクテン〔ローマ法典〕の貨幣概念に基づいて支持した。彼らののみ込みのよい弟子であるヴァロワのフィリップ〔ヴァロワ朝を創設したフランスのフィリップ六世〕は、一三四六年の勅令の中で次のように言っている。「貨幣鑄造の業務、すなわち製造、形状、発行高、および鑄貨をわが意のままに、意のままの価格で流通させるための鑄貨にかかわるすべての法令が……ひとりわれおよびわが王位のみに属するということは、だれも疑いえず、また疑うべからざることである」。皇帝が貨幣価値を法令で定めるということは、ローマの法的教義であった。貨幣を商品として取りあつかうことは明文で禁止されていた。「しかし、貨幣を買うことは、だれにも許されるべきことではない。なぜなら、貨幣は、一般的使用のためにつくられたのであって、商品であってはならないからである」。この点についてよく説明しているのは、G・F・パンニーニ『諸物の公正な価格に関する試論』、一七五一年、所収、クストーディ編、近代篇、第二巻である。ことに、この著述の第二篇において、パンニーニは法学者諸君に論争をしかけている。〉

この注は〈なぜなら、どの商品も、価値としては、それに支出された人間労働の物的外皮にすぎないからである(47)〉という文節に付けられたものですが、しかし注の内容を見ると、(47)から(47)までの四つの文節全体に付けられた注であるように思えます。しかし、その内容を考える前に、まずここで紹介されている人物を人名索引で調べてみることにしましょう。

〈フォルボネ、フランソワ・ヴェロン・デュヴェルジェ・ド Forbonnais,Francois・Veron・Duverger de(1722-1800)フランスの経済学者、貨幣数量説の支持者。〉

〈モンテスキュー、シャルル・ド・スコングダ、バロン・ド・ラ・ブレド・エ・ド Montesquieu,Charles de Secondat,baron de La Bredeetde(1689-1755)フランスの社会学者、経済学者、著作家、18世紀のブルジョアの啓蒙主義の代表者。立憲君主制および三権分立の理論家。貨幣数量説を主張。〉

〈ル・トロウ、ギヨーム・フラソソア Le Trosne,Guillaume・Francois(1728-1780)フランスの経済学者、重農主義者。〉

〈ヘーゲル、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ Hege1,Georg Wilhelm Friedrich(1770-1831)ドイツ古典哲学(客観的観念論)の最も著名な代表者。ドイツ古典哲学は、ヘーゲル体系において頂点に達し、「この体系においてはじめてーそしてこれがその偉大な功績なのだー全自然的、歴史のおよび精神的世界が一つの過程として、すなわち絶えざる運動、変化、変革および発展として把握されて叙述され、そしてこの運動と肇展とにおける内的関連を明らかにしようという試みがなされたのである」(エンゲルス)。〉

〈フィリップ6世、ヴァロア家の Philippe VI,de Valois(1293-1350)フランス国王(在位1328-1350年)。〉

〈パンニーニ、ジョヴァンニ・フランチェスコ Pagnini,Giovanni Francesco(1715-1789)イタリアの経済学者、貨幣に関する著作の筆者。〉

まず気づくのは、フォルボネとモンテスキューの主張は、明らかに〈貨幣が、一定の諸機能において、それ自身の単なる章標によって置きかえられるところから、貨幣は単なる章標であるというもう一つの誤り〉に該当します。しかしル・トロウの主張していることは、必ずしも同じではありません。そればかりか彼は〈貨幣は単なる章標ではない〉とさえ述べているわけですから。〈それ自身が富だ〉という主張や〈それは価値の等価物〉(初版やフランス語版では〈それは価値と等価である〉)となっています)といった主張を見ると、むしろ貨幣について正しい主張のように思えます。それに対して、ヘーゲルの主張は〈他面、この誤りのうちには、物の貨幣形態はその物自身にとって外的なものであり、その背後に隠されている人間の諸関係の単なる現象形態にすぎないという予感があったのである。この意味では、どの商品も一つの章標であろう。なぜなら、どの商品も、価値としては、それに支出された人間労働の物的外皮にすぎないからである(47)。〉という一文を正確に言い当てているように思えます。ところが不思議なことに、フランス語版では、このヘーゲルの『法哲学』からの引用文は削除されているのです。この意図もいま一つ不明です。

そしてその後続く一文は、中世ではローマ帝国の伝統にもとづいて、貨幣が単なる標章であり、貨幣の価値を決めるのは王の特権の一つであるかに主張されてきたことが紹介されています。しかし、この中世やローマ法の教義の説明部分は、果たして本文のどの部分に対する注と考えられるのかがいま一つよく分かりません。

この部分はその前に紹介した経済学者たちの「貨幣は表章だ」という主張は、実はもっと古くから国王に媚びへつらう中世の法学者たちによって唱えられてきたものの蒸し返しに過ぎないのだと言いたいのかも知れません。

最後のパニーニについては、その著書からの引用がないので分かりませんが(ただし、その前にある「しかし、貨幣を買うことは、だれにも許されるべきことではない。なぜなら、貨幣は、一般的使用のためにつくられたのであって、商品であってはならないからである」という引用文は、どこから引用されたものかはハッキリしません。〈ローマの教義〉の一文の紹介のようにも思えますが、あるいはパニーニの著書からの引用なのかも知れません)、こうした中世の法学者の主張を批判したもののようです。マルクスが、〈よく説明している〉とか〈名論〉(初版)、〈すぐれた注釈〉(フランス語版)などと紹介しているところを見ると、パニーニの主張はその限りでは正しいものだったのかも知れません。

【付属資料】

●第12パラグラフ

《初版本文》

〈貨幣商品の使用価値は二重になる。貨幣商品は、商品としてのその特殊な使用価値——たとえば金が虫歯の充填やぜいたく品の原料等々に役立つということ——のほか、その独自の社会的諸機能から生ずる形式的な使用価値を得ているのである。〉(77頁)

《フランス語版》

〈貨幣商品の使用価値は二重になる。貨幣商品は、商品としての特殊な使用価値——たとえば、金は奢侈品や入れ歯等のための原料として役立つ——のほか、その独自の社会的機能から生ずる一つの形態的な使用価値を獲得する。〉(67頁)

●第13パラグラフ

《初版本文》

〈すべての他商品は貨幣の特殊な等価物でしかないし、貨幣はそれらの一般的な等価物であるから、それらは、一般的な商品としての貨幣(38)には、特殊な諸商品として関係している。〉(77頁)

《フランス語版》

〈すべての商品は貨幣の特殊な等価物にほかならず、後者は前者の一般的な等価物であるから、貨幣はすべての商品にたいし一般的な商品(8)としての役割を演じるのであり、すべての商品は貨幣にたいし特殊の商品しか代表しない。〉(67頁)

●注44

《初版本文》

〈(39)「貨幣は一般的な商品である。」〈ヴェリ、前掲書、16ページ。〉〉(77頁)

《フランス語版》

〈(8)「貨幣は一般的な商品である」(ヴェリ、前掲書、16ページ)。〉(67頁)

●第14パラグラフ

《初版本文》

〈すでに見たように、貨幣形態は、すべての他の諸商品の諸関係の反射が一商品に固着したものでしかない。したがって、貨幣が商品であるということ(40)は、貨幣の完成した姿態から出発してあとからこれを分析する者にとってのみ、一つの発見なのである。交換過程は、それが貨幣に転化させる商品にたいして、この商品の価値を与えるわけではなくて、この商品の独自の価値形態を与える。この二つの規定を混同することは、金銀の価値を想像的なものとする誤りに導いた(41)。貨幣は、特定の諸機能においては、それ自身の単なる象徴(シボール)によって代理されうるから、貨幣は単なる象徴であるというもう一つの誤りが生じた。他方、この誤りのうちには、物の貨幣形態は、その物自身にとっては外的なものであって、その物の背後に隠されている人間関係の単なる現象形態である、という予感があった。この意味では、どの商品も一つの象徴であろう。というのは、それは、価値としては、それに支出された人間労働の物的な外皮でしかないからである(43)。しかしながら、ある特定の生産様式の基礎の上で諸物が受け取る社会的な諸性格を、または、この基礎の上で労働の社会的な諸規定が受け取る物的な諸性格を、単なる象徴であると公言すれば、そのことは、同時に、これらの性格を人間の気ままな反省の産物であると公言することになる。これこそは、一八世紀において、人間関係の謎めいた姿態——この姿態の生成過程は当時まだ解明することができなかった——から、さしあたって少なくと

も奇異の外観をはぎ取るために、好んで用いられた説明方法であった。) (77-8頁)

《フランス語版》——フランス語版では、このパラグラフは二つのパラグラフに分かれており、その間に注が二つ入っているが、ここでは続けて紹介しておく。

〈貨幣形態は、あらゆる種類の商品が唯一の商品種類においてもつとところの価値関係の反映にほかならない、ということがわかった。したがって、貨幣のすっかり完成した形態から出発してあとから貨幣の分析に到達する人にとってだけ、貨幣そのものが商品であるということが、一つの発見になりうるのである(9)。交換運動は、この運動によって貨幣に転化される商品に、その価値を与えるのではなく、その独自の価値形態を与えるものである。人は、このようにちぐはぐな二つの事柄を混同して、銀と金を純粋に想像的な価値と見なすようになった(10)。貨幣がその数々の機能ではそれ自身の単なる表章によって代替されるという事実は、貨幣が単なる表章にほかならないというもう一つの誤謬を産んだ。〉 (67-8頁)

〈他方、この誤謬は確かに、貨幣が外的な物体という外観のもとで社会的関係を実際には隠している、ということを示唆させた。この意味ではどの商品も表章であろう。というのは、どの商品も、その生産に支出された人間労働の物的外被としてのみ、価値であるからである(11)。ところが、特殊な生産様式の基礎の上で物が帯びる社会的性格、あるいは労働の社会的規定が帯びる物的性格のうちに、単なる表章しか見なくなるやいなや、この性格は、いわゆる人間の普遍的な合意によって承認された慣習的な規制という意味を与えられる。これこそが一八世紀に流行した説明のやり方であった。人は、社会的関係で装われた謎めいた形態の起源も発展もまだ解読できないので、この謎めいた形態は人間の考え出したものであり、天から降ったものではない、と宣言することによって、この謎めいた形態を厄介払いしたわけである。〉 (68頁)

●注45

《初版本文》

〈(40)「われわれが地金という一般的な名称で呼ぶことのできる銀と金そのものは……商品であり……その価値は……上がったり下がったりする。……そうであれば、地金は、より小さな重量でその国のより多量の産物または製造品が買えるようなところでは、より高い価値をもっと見なされてもかまわない、云々。」(『相互関係にある貨幣、商業、および為替の一般的観念にかんする一論、一商人著、ロンドン、1695年』、7ページ)「銀と金は、鑄造されていようといまいと、他のすべての物の尺度として用いられているとはいえ、葡萄酒、油、煙草、ラシヤ、または布地と同じように、一つの商品である。」(『商業、特に東インドの商業にかんする一論、ロンドン、1689年』、2ページ。)[「王国の貯えや富を貨幣に限定することは適切でありえないし、また、金銀は商品から除外されるべきではない。】(『東インド貿易は最も有利な貿易。ロンドン、1677年』、4ページ。)> (78頁)

《フランス語版》

〈(9)「われわれが地金という一般的な名称を与えることのできる銀と金そのものも、価値の騰落する商品である。より小さい重量でその国のより大量の商品が買われるところでは、地金はより大きな価値をもっている」(『相互関係にある貨幣、商業および為替の一般的観念にかんする一論、一商人著、ロンドン、1695年、7ページ)。「銀と金は、鑄造されていようといまいと、すべての物にたいし尺度として役立つが、葡萄酒、油、煙草、ラシヤ、布地と全く同じように、商品である」(『商業、特に東インドの商業にかんする一論、ロンドン、1689年、2ページ)。「金銀は、数多くの商品から除外されるべきではない」(『東インド貿易は最も有利な貿易』、ロンドン、1677年、4ページ。)> (68頁)

●注46

《初版本文》

〈(四一)「金銀は、貨幣であるより以前に、金属として価値をもっている。」(ガリアーニ、前掲書)。ロックはこう言う。「人々の一般的な合意は、銀が貨幣に適した諸性質をもっているがゆえに、銀に想像的な価値を与えた。」これに反対してロ一はこう言う。「どうして、いろいろな国民は、なにかあるものに、想像的な価値を与えることができようか?.....あるいは、どうして、この想像的な価値は、維持することができようか?」と。だが、彼自身、事柄をどんなにちよっぴりしか理解していなかったかは、次のとおりである。——「銀は、それがもっていた使用価値に応じて、つまり、そのほんとうの価値に応じて、交換された。貨幣であると規定されることによって、それは一つの追加的な価値(une valeur additionnelle)を受け取った。」(ジョン・ロー『通貨および商業にかんする考察』、所収、E・デル編『一八世紀の財政学者』、470ページ。)> (78-9頁)

《フランス語版》

〈(10)「金銀は、それが貨幣になる以前に、金属として価値をもっている」(ガリアーニ、前掲書)。ロックは言う。「銀は、その性質が貨幣の役割を果たすのに適切なものであるために、人々の普遍的な合意により想像的な価値を受け取った」。これに反して、ロ一は言う。「どうしてさまざまな国民が、なんらかある物に想像的な価値を与えることができたのであろうか?あるいは、どうしてこの想像的な価値を保持することができたのであろうか?」だが、彼自身この問題についてなんら心得がなかった。彼はほかの場所で次のように自分の考えを述べているからである。「銀は、それがもっていた使用価値にしたがって、すなわち、その真実の価値にしたがって、交換された。銀は、貨幣として採用されることによって、一つの追加価値を与えられた」(ジョン・ロー『通貨および商業にかんする考察』、デル編『一八世紀の財政学者』、469-470ページ。)> (68頁)

●注47

《初版本文》

〈(42)「貨幣はそれら(諸商品)の象徴である。」(V・ド・フォルボネ『商業原理。新版、ライデン、1766年』、第二巻、143ページ。)[「象徴として、貨幣は諸商品によって引きつけられる。」(同上、155ページ。)]「貨幣は物の象徴であって物を代表している。」(モンテスキュー『法の精神』。著作集、ロンドン、1767年、第二巻、2ページ)。「貨幣

は単なる象徴ではない。というのは、それ自身が富であるから。それは価値を代表していない。それは価値と等価である。」(ル・トロース、前掲書、910ページ。)「価値の概念を観察するならば、物そのものは象徴としか見なされないのであって、その物は、そのもの自身として認められているのではなく、その物が値するところのものとして認められている。」(ヘーゲル、前掲書〔『法哲学』〕、100ページ。)経済学者たちよりもはるか以前に、法学者たちは、貨幣は単なる象徴であり、貴金属の価値はたんに想像的なものである、という観念を大いに流行させたが、それは王権にへつらつてのことであって、この王権の鑄貨製造機を、彼らは全中世を通じ、ローマ帝国の伝統とパンデクテン〔東ローマ皇帝エスティニアヌス一世の命で編集されたロー民法〕の貨幣概念にもとづいて、支持したのであった。彼らの呑み込みのはい弟子であるフィリップ・ド・ヴァロアは、1346年の勅命のなかで、こう言っている。「鑄造業務、すなわち製造、品位、貯蔵が、および、鑄貨をわれわれの意のままの価格でわれわれの意のままに流通させるための鑄貨にかんするいっさいの命令が、……われわれとわれわれの陛下に専属していることは、なんびとも疑うことができず、また疑つてもならない。」皇帝が貨幣価値を布告することは、ローマ法の教義であった。貨幣を商品として扱うことは、明文をもって禁止されていた。「とはいえ、貨幣を買うことは、なんびとも許されてはならない。というのは、貨幣は、一般的な使用のために作られたものであって、商品であってはならないからである。」この点にかんする名論としては、G・F・パニーニ『諸物の正当な価値にかんする研究。1751年』、クストディ編、近世稿、第二巻、がある。特にこの著作の第二巻では、パニーニは法学者諸氏に反論している。〉(79頁)

《フランス語版》

〈(1) 「貨幣はその(商品の)表章である」(V・ド・フォルボネ『商業原理』、新版、ライデン、1766年、第2巻、143ページ)。「表章として、貨幣は商品によって引きつけられる」(同上、155ページ)。「貨幣は物の表章であって、物を代表する」(モンテスキュー『法の精神』)。「貨幣は単なる表章ではない。それ自身が富であるからである。それは価値を代表しない。それは価値と等価である」(ル・トロース、前掲書、910ページ)。経済学者よりずっと以前に、法学者は、貨幣が単なる表章でしかなく貴金属が想像的な価値しかもたない、という考え方を流行させた。王権の下僕であり追従者であった彼らは、中世全般にわたり、ローマ帝国の伝統にもとづき、また、パンデクテン〔ロー民法の主要部分〕のうちに見出されるような貨幣の役割の概念にもとづいて、王の鑄貨製造権を支持した。彼らの有能な弟子フィリップ・ド・ヴァロアは、1346年の勅令のなかでこう言っている。「鑄造業務、すなわち製造、品位、貯蔵、および、鑄貨をわれわれの意のままの価格でわれわれの意のままに流通させるための鑄貨にかんするいっさいの命令が、……われわれとわれらの陛下に専属していることは、なんびとも疑うことができず、疑つてもならない」。皇帝が貨幣価値を制定することは、ローマ法の教義であった。貨幣を商品として扱うことは、明文で禁止されていた。「とはいえ、貨幣を買うことは、なんびとも許されるべきでない。なぜならば、それは、一般的な使用のために作られたものであって、商品であってはならないからである。」この点については、すぐれた註釈がG・F・パニーニ『物の正当価格にかんする研究』、1751年、クストディ編、近世の部、第二巻、のなかに掲載されている。とりわけ彼の著作の第二部で、パニーニは法学者たちに反論している。〉(68-9頁)

第50回「『資本論』を読む会」の報告

◎第50回で閉会します

残念ながら、「『資本論』を読む会」は第50回をもって終えることにしました。

2008年2月から開始してほぼ4年半、ようやく第2章を終えるところまでこぎ着けました。しかし、この間、新しい参加者は僅か1人、しかもその人も体調のこともあって足が遠ざかり、最初の参加メンバーからも脱落者があつたりして、最近では寂しい状態が続いていました。

そして何よりも、この学習会を立ち上げた中心メンバーであるピースさんが自らに降りかかった解雇攻撃との闘いに忙殺されるという状態になり、学習会を維持していくことが困難になってしまったのです。何を隠そう、第45回案内で紹介した、不当な思想弾圧を受けた教育労働者こそピースさんその人なのです。

そこで第2章を終えたこともあり、50回という一つの区切りのよい機会でもあるので、これをもって学習会を閉じることに決定した次第です。

まことに勝手ではありますが、この学習会に参加はされなくても、ブログ等を通じてご注目頂いてきた皆様には、ご勘弁頂くようお願い申し上げます。

第50回の案内が出ないことを訝しく思われた方もあったかと思いますが、そういうこともあって、すでに閉鎖を決めたものに、「『資本論』を読んでみませんか」と参加を呼びかけるのも憚れたので、案内は作成せず、最後の学習会は9月30日、出発メンバーの一部だけで開催することにした次第です。しかし、間の悪いことに、当日は17号の台風の接近で大阪府に暴風警報が発令され、図書館が休館になってしまい、やむなく中止しました。よって第50回は日程を変更して、10月2日、案内も出さない学習会であるという事情を考えて、改めて会館を借りずに、メンバーの個人宅で行いました。

そういうわけで、とにかく第2章の締めくくりの第50回の「『資本論』を読む会」は変則的ながら、開催しましたので、その最後の報告を行いたいと思います。

◎第15パラグラフ

今回は第2章の最後に残された第15・16の二つのパラグラフを学習しました。報告はこれまでと同じように、まず本文を掲げ（青太字）、文節ごとに記号を付けて、それぞれの平易な書き下し文を記し（太字）、それに関連した解説を加え、その中で議論の内容も紹介するという手順で行います。まず本文です。

【15】 <(i)先に指摘したように、一商品の等価形態はその商品の価値の大きさの量的規定を含んではない。(ii)金が貨幣であり、したがって他のすべての商品と直接的に交換されうるものであることを知っても、それだからといって、たとえば一〇ポンドの金の価値がどれだけであるかはわからない。(iii)どの商品もそうであるように、貨幣[*]はそれ自身の価値の大きさを、ただ相対的に、他の諸商品によってのみ、表現することができる。(iv)貨幣[*]自身の価値は、その生産のために必要とされる労働時間によって規定され、等量の労働時間が凝固した、他の各商品の量で表現される(48)。(v)貨幣[*]の相対的価値の大きさのこうした確定はその産源地での直接的交換取引の中で行われる。(vi)それが貨幣として流通に入る時には、その価値はすでに与えられている。(vii)すでに一七世紀の最後の数十年間には、貨幣分析のずっと踏み越えた端緒がなされていて、貨幣が商品であるということが知られていたけれども、それはやはり端緒にすぎなかった。(viii)困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある(49)。>

[* カウツキー版、ロシア語版では「金」となっている]

(i) 先に指摘しましたように、一商品の等価形態は、その商品の価値の大きさの量的規定を含んでいません。

ここで <先に指摘したように> とあるのは、第1章第3節Aの「三 等価形態」の次の一文を指すと考えられます。

<ある一つの商品種類、たとえば上着が、別の商品種類、たとえばリンネルのために、等価物として役立ち、したがってリンネルと直接に交換されうる形態にあるという独特な属性を受け取るとしても、それによっては、上着とリンネルとが交換されうる割合はけっして与えられてはいない。この割合は、リンネルの価値量が与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。上着が等価物として表現され、リンネルが相対的価値として表現されようとして、または逆にリンネルが等価物として表現され、上着が相対的価値として表現されようとして、上着の価値量は、相変わらず、その生産に必要な労働時間によって、したがって上着の価値形態にはかわりなく、規定されている。しかし、商品種類上着が価値表現において等価物の位置を占めるならば、この商品種類の価値量は価値量としての表現を与えられてはいない。この商品種類は価値等式のなかではむしろただ或る物の一定量として現われるだけである。>（全集23a75-6頁）

(ii) 金が貨幣であり、よって他のすべての商品と直接に交換されうるものであることを知っても、それだからとい

って、例えば10ポンドの金の価値がどれだけかは分かりません。

10ポンドという金の物的量は、金でその価値を表す（だから価格として表示される）商品、例えばリンネルの価値の大きさを10ポンドという金の重量で表しているわけです。だからそれは金そのものの価値の量的表現ではないわけです。

(H) どの商品もそうですが、貨幣（金）はそれ自身の価値の大きさを、ただ相対的に、よって他の諸商品の助けを借りて、表現しうるのみです。

第1章第3節Cの「2 相対的価値形態と等価形態との発展関係」には次のようにあります。

〈反対に、一般的等価物の役を演ずる商品は、商品世界の統一的な、したがってまた一般的な相対的価値形態からは排除されている。もしもリンネルが、すなわち一般的等価形態にあるなんらかの商品が、同時に一般的相対的価値形態にも参加するとすれば、その商品は自分自身のために等価物として役だたなければならないであろう。その場合には、**20** エレのリンネル=**20**エレのリンネル となり、それは価値も価値量も表わしていない同義反復になるであろう。一般的等価物の相対的価値を表現するためには、むしろ形態IIIを逆にしなければならないのである。一般的等価物は、他の諸商品と共通な相対的価値形態をもたないのであって、その価値は、他のすべての商品体の無限の列で相対的に表現されるのである。こうして、いまでは、展開された相対的価値形態すなわち形態IIが、等価物商品の独自の相対的価値形態として現われるのである。〉（同前93頁）

すべての商品の価値は、商品に内在的なものですから、直接には目には見えません。商品の直接的な定在はその使用価値だからです。だからすべての商品は、その内在的な価値を目に見えるように表すためには、他の諸商品の直接的な定在であるそれらの使用価値を使って（助けを借りて）表す以外にありません。つまり「相対的に」表すしかないのです。目に見えるということは、直接的なものになるということです。「価値形態」というのは、本来内在的なものである「価値」を「形態」あるものに、つまり「形ある状態」にする、あるいはなつたものということです。商品の価値は、それ自体としてはまったく姿形も分からない抽象的で本質的なものです。だからそれが具体的な姿をとって現象するようになったのが、価値形態、すなわち価値の現象形態（交換価値）なのです。

(C) 貨幣（金）自身の価値は、他の諸商品と同じように、その生産のために必要とされる社会的に必要な労働時間によって規定されます。だからそれと同じ大きさの労働時間が凝固した、他の諸商品の使用価値の量によって、金の価値も量的には表されなければならないのです。

(D)、(A) 貨幣（金）の相対的価値の大きさがこのような形で確定されるのは、金が生産される場所における直接的な交換取引（物々交換）の中です。そしてそれが貨幣として流通に入る時には、すでにその価値は与えられたものとして存在しているのです。だから、それは決して流通のなかで与えられるものではありません。

この点について、『経済学批判』には、次のようにあります。

〈金は、他のすべての商品と同様に、その原産地では商品である。金の相対的価値と鉄やその他すべての商品の相対的価値とは、そこでは、それらが互いに交換される量であらわされる。しかし流通過程では、この操作は前提されており、商品価格のうちに金自身の価値はすでにあたえられている。だから、流通過程の内部で金と商品とは直接的交換取引の関係にはいり、したがってそれらの相対的価値は、単純な商品としてのそれらの交換によって確かめられる、という考えほどまちがったものはない。流通過程で金がたんなる商品として諸商品と交換されるように見えるとしても、この外観はたんに、価格で一定量の商品がすでに一定量の金と等置されているということ、すなわち一定量の商品がすでに貨幣としての、一般的等価物としての金に関係しており、それだからこそ直接に金と交換できるということから生じるのである。一商品の価格が金で実現されるかぎりでは、その商品は、商品としての金、労働時間の特殊な物質化したものとしての金と交換される。だが、金で、金で実現される商品の価格であるかぎりでは、その商品は、商品としての金ではなく、貨幣としての金、すなわち労働時間の一般的な物質化したものとしての金と交換される。しかし、二つの関係のどちらでも、流通過程の内部で商品と交換される金の量が交換によって規定されるのではなく、交換が商品の価格、すなわち金で評価されたその交換価値によって規定されるのである。〉（全集13巻73頁、下線はマルクスによる強調）

また少し先走りますが、『資本論』からも紹介しておきましょう。

〈金銀の流れの運動は二重のものである。一方では、金銀の流れはその源から世界市場の全面に行き渡り、そこでこの流れはそれぞれの国の流通部面によっていろいろな大きさととらえられて、その国内流通水路にはいつて行ったり、摩滅した金銀鑄貨を補填したり、奢侈品の材料を供給したり、蓄蔵貨幣に凝固したりする。この第一の運動は、諸商品に実現されている各国の労働と金銀生産国の貴金属に実現されている労働との直接的交換によって媒介されている。他方では、金銀は各国の流通部面のあいだを絶えず行ったり来たりしている。それは、為替相場の絶え間ない振動に伴う運動である。〉（前掲189頁、下線は引用者）

(F)、(G) すでに17世紀の最後の数十年間には、貨幣分析のずっと踏み込んだ端緒がなされていて、貨幣が商品であることは知られていました。しかし、それはやはり端緒に過ぎなかったのです。困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にあるのです。

貨幣が商品であるという理解に達していた諸説の例は、第14パラグラフにつけられた原注45で紹介されていました。それらの引用文とその著者のそれぞれの人名索引の解説をつけて、もう一度、書き出して見ましょう。

・ 〈「われわれが貴金属という一般的名称で呼ぶことのできる銀や金そのものは……価値が……上がったり下がったり

する……商品である。……そこで、そのより小さい重量でもってその国の生産物または製造品のより大きい量が買われるのならば、貴金属の価値は高くなったものとみなされる」〔S・クレメント〕『相互関係にある貨幣、商業、および為替の一般的観念に関する一考察。一商人著』、ロンドン、一六九五年……

(クレメント,サイモンClement,Simonイギリスの商人。)

・「銀や金は、鑄造されていなくても、他のすべての物の尺度として用いられるけれども、ワイン、油、タバコ、布や織物と同じく一つの商品である」〔J・チャイルド〕『商業、ことに東インド貿易に関する考察』、ロンドン、一六八九年……

(チャイルド,サー・ジョサイアChild,SirJosiah(1630-1699)イギリスの商人,経済学者,重商主義者.高利貸資本に反対する「商業および産業資本の先駆者」,「近代銀行業者の父」(マルクス)。)

・「厳密に言えば、王国の資産と富を貨幣に限定するのは適切でないし、金や銀を商品ではないとすべきではない」〔Th・パピロン〕『東インド貿易は最も有利な貿易である』、ロンドン、一六七七年……

(パピロン,トマスPapillon,Thomas(1623-1702)イギリスの商人,政治家,国会議員,東インド会社の支配人のひとり。)

原注では、この順序に引用文が紹介されていましたが、これを見ると、マルクスは17世紀の最後の数十年間のなかでも、もっとも最近のものから歴史を遡って紹介していたことが分かります。これらが貨幣分析の端緒だったというわけです。

そしてその次に書かれている一文(困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある)が久留間敏造氏によって、『資本論』の第1章第3節(どのようにして)、第4節(なぜ)、第2章(何によって)のあいだの関連を説明するものとして、問題提起されたことによって、極めて有名になったものです(『価値形態論と交換過程論』)。果たして久留間氏のようにこの一文に着目して、こうした『資本論』の一連の展開を説明することが、あるいはそれで説明可能だとすることが、妥当なのでしょうか。この問題については、すでに何度も論じてきたので(例えば第1回、第32回、第36回等々を参照)、ここで改めて取り上げる必要はないかも知れませんが、やはりこの問題は、これまで多くの人たちによって取り上げられ、論争にもなってきた問題なので、もう一度、論じておきましょう。

ただ、私たちは、その久留間説を評価するためにも、そもそもこの第15パラグラフでは、全体としてマルクスは何を論じているのか、このパラグラフの本来の課題は何か、という問題から考えてみることにしましょう。というのは、久留間氏の問題提起が、あまりにも強い影響力があるために、あたかもこのパラグラフの課題は最後の文節で言われていることにあるかに思い込んでいる人がいないとも限らないからです。

しかし果たしてマルクスがこのパラグラフで言いたかったことは、〈困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある〉ということなのでしょうか。私にはどうしてもそのように思えないのです。というのは、もし、そうしたことがこのパラグラフでマルクスが言いたいことなら、どうしてマルクスは、等価形態にある商品の価値の大きさの量的規定という問題から話を始めているのでしょうか。その説明がなかなかつかないのです。

そうではなく、マルクスがこのパラグラフで中心に述べていることは、文節記号でいうと(Ⓕ)で述べていることではないかと考えます。つまり貨幣としての金の価値の大きさは、産源地での他の諸商品との直接的な交換取引の中で確定されるのだということです。だから貨幣として、現実に流通にある金の価値は、すでに与えられたものとして前提されているのであって、流通過程の内部でも金と商品とが直接的な交換取引の関係に入って、それによってそれらの相対的価値がそれらの相互の交換によって確かめられるなどと考えるのは間違いなのだ、ということです。これは先に紹介した『経済学批判』の一文を良く吟味すれば分かります。

だから17世紀の最後の数十年間における貨幣分析のなかで、当時の商人や経済学者たちが貨幣が商品であるとの理解に達していたとしても、彼らがそうした正しい認識に達していたというのではないのだということです。マルクスが〈それはやはり端緒にすぎなかった〉と述べているのはそういう意味ではないかと思えます。つまり彼らはすでに金が貨幣として流通している現実を前提したうえで、そこで貨幣としての金と他の諸商品とが交換される現実を見て、それをあたかも直接的な交換取引と見立ててそうした主張をしているに過ぎないのですが、しかし、そうした理解そのものは決して正しいものではないのだ、というのがマルクスが言わんとすることではないでしょうか。

つまり貨幣としての金が、他の諸商品と同じ一つの商品として登場するのは、あくまでも金の産源地においてのみであるということです。そうしたことを理解した上で、17世紀の最後の数十年間の商人や経済学者たちが貨幣は商品であると理解していたわけでは無かったということです。そうしたことを理解するためには、〈どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのか(商品が貨幣になるのか)〉、つまり「商品の貨幣への転化」を論じたこの第2章でマルクスが展開してきたように論証する必要があるのだ、ということではないかと思えます。

だから、久留間氏が注目した最後の二つの文節(ⒻⒼ)で述べていることは、このパラグラフ全体でマルクスが中心に言いたいことから見れば、ある意味では、副次的な、あるいはそれを補強するようなものでしかないといえるのではないのでしょうか。

なぜ、マルクスがこうした貨幣としての金の価値の量的確定という問題を、ここで論じているのでしょうか。それは貨幣としての金が、他のすべての商品と同じように、一つの商品として現れ、他の諸商品と互いに交換される量によって

、その価値の量的規定が確定されるのは産源地という特殊な交換過程の問題だからです。こうした産源地における金の他の諸商品との直接的交換取引というものは、全体の商品交換の過程からみれば、極めて特殊なもので、しかし、それもやはり交換過程の問題であることは確かでしょう。だからこそマルクスは、交換過程の最後あたりで(この第2章を締めくくる最後のパラグラフの直前のパラグラフで)、その特殊な交換過程の果たす役割として貨幣としての金の価値量の確定という問題を取り上げているのではないのでしょうか。

さて、その上で、それでは久留間氏の問題提起に戻りましょう。これまでの考察を前提して、最後の文節(7)の内容をもう一度吟味してみましょう。まず「貨幣が商品であることを理解する」というのは、厳密に言えば正しいとはいえず、比較的容易なことであって、「すでに一七世紀の最後の数十年間」に「貨幣分析」の「端緒がなされ」るなかでも指摘されてきたことです。しかし本当に困難なのは、そうしたことなく、「どのようにして、なぜ、何によって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある」とマルクスは言います。まずここで、「商品が貨幣である」とは、一体、どういうことなのでしょう。

フランス語版では、この部分は「困難は、貨幣が商品であることを理解することにあるのではなく、どのようにして、なぜ、商品が貨幣になるか、を知ることであり、商品が貨幣になる」と書かれています。また「どのようにして、なぜ」としか問われていません。フランス語版の場合は、ドイツ語版の初版や第二版に較べて、平易化する配慮がなされていることを考慮したとしても、ここでマルクスが述べていることは、貨幣が商品あるということより、商品が貨幣になるのはどうしてかを理解するの方が困難であり、またそれこそが貨幣の何であるかを知ることになるのだ、ということではないのでしょうか。

だから「商品が貨幣である」というのは、フランス語版のように、文字通り商品がどのようにして貨幣になるのかを知るのだということのように思えます。以前、第2章の位置づけや課題について、次のように論じたことがありました。

【「第1篇 商品と貨幣」は「第1章 商品」と「第2章 交換過程」、「第3章 貨幣または商品流通」からなっています。この構成をみれば、第1章では商品とは何かを説明され、第3章では貨幣の諸機能と商品流通における諸法則が説明されることが明らかになり、第2章は、第1章と第3章を媒介する章であることが分かります。……

そして第2章が第1章と第3章を媒介する章であるとの位置づけが分かれば、それが短いのに一つの章として第1章と第3章と対等の位置に置かれているという理由も分かります。それは例えば第2篇には、一つの章しかなく、しかも分量としては短いものであるのに、第1篇や第3篇と対等の位置にどうして位置づけられているのかという理由と同じ理由なのです。第2篇の表題は「貨幣の資本への転化」ですが、これはまさに第1篇と第3篇を媒介する篇であることをその表題そのものが示しているといえるでしょう。だから同じような位置づけで考えるなら、「第2章 交換過程」は、内容から言えば、いわば「商品の貨幣への転化」とでも言えるような位置にあると考えられるわけです。……) (第33回報告)

〈だからこの第3節は確かに貨幣に言及し、貨幣形態の発生を立証しているわけですが、しかし、それはあくまでも商品とは何か(それが第1章の課題です)を明らかにする一環としてそうしているのだということ、商品とは何かを明らかにするために、商品にはどうして値札が付いているのかを説明するためのものだという理解が重要なのです。同じように貨幣の発生を説明しているように見える「第2章 交換過程」が、第1章の商品論を前提にして、商品がその現実の交換過程において、如何にして貨幣へと転化するのかを説明するものであり、それによって第1章と第3章とを媒介するものであるという、その役割や位置づけにおける相違も分かってくるのです。〉(第44回報告)

〈(1) まず第1章では商品は、二重の観点で観察され、ある時は使用価値の観点のもとに、他の時は、交換価値の観点のもとに、分析されたのですが、しかし第2章では、商品はひとつの全体として、すなわち使用価値と交換価値との直接的な統一物として考察されるということです。つまり第1章では、その限りでは商品は抽象的に取り上げられたのですが、第2章では、商品はより具体的なものとして取り上げられることが分かります。だから諸商品の相互の現実の関係、つまり諸商品の交換過程が考察の対象になるというわけです。

(2) そしてそうすると、商品はそうした使用価値と交換価値との直接的な統一物としては、直接的な矛盾だとも指摘されています。第1章では商品の二要因である使用価値と交換価値(価値)とは、互いに対立するものとして考察されました。これに対して、第2章では、そうした対立物の直接的な統一として商品は考察されるために、諸商品は直接的な矛盾だということです。矛盾ということは、諸商品が、使用価値として存在する場合、あるいは交換価値として存在する場合、それらは互いに前提し合いながらも、同時に排斥し合う関係にもあるということです。第2章では、現実の諸商品の相互の関係が、こうした直接的な矛盾として分析されることが指摘されています。そしてその矛盾が現実解決されていく過程こそが、すなわち貨幣の発生過程でもあるというわけです。だから第2章は現実の諸商品の交換過程において、如何にして商品は貨幣へと転化するのかを説明するものでもあるといえるでしょう。

(3) そしてまた商品の現実の関係である交換過程においては、互いに独立した諸個人、すなわち商品所有者が入り込む社会的過程でもあると指摘されています。つまり商品は第1章に比べてより具体的に考察されるわけですが、それは使用価値と交換価値との直接的な統一物として考察されるだけでなく、第1章では捨象されていた、それらの諸商品の所有者が新たに考察の対象に入ってくるということです。〉(第45回報告)

〈しかし、これらの三つの矛盾の相互の関係を論じるまえに、そもそもどうして交換過程では、こうした矛盾が論じられているのでしょうか。まずそれから考えましょう。

それを考えるためには、もう一度、第1章「商品」との関連で、第2章「交換過程」の課題を明確に掴む必要があります。

これについては、一度詳しく論じたことがあります（第44回報告）。そこでは次のように説明しました。第1章「商品」は、商品とは何かを明らかにすることでした。確かに第1章ではリンネルや上着やコーヒーや鉄や金など、さまざまな商品が登場してそれらの関係が考察されたのですが、しかしこれらはあくまでも商品とは何かを明らかにすることが目的なのです。もちろん、商品とは何かを明らかにすることは、その商品がリンネルであろうが、上着であろうが何でも良かったのですが、しかし問題は、あくまでも商品とはそもそも何かを明らかにすることでした。そしてその商品の何たるかを解明するためには、商品は自らの価値を具体的に表す存在でなければならないこと、それを商品は貨幣形態、つまり価格という形で表していることをマルクスは明らかにしたのです。だからリンネルと上着との価値関係やリンネルと他の諸商品との展開された価値形態など、さまざまな諸商品との関係が考察されたのも、そもそも商品にはどうして価格が、すなわち値札が付けられているのか、そうしたことを明らかにするために商品の価値の表現形態としての貨幣の発生を論証したのです。

しかし重要なことは、そうした一連の諸商品の価値関係や価値形態の考察も、あくまでも、そもそも商品とは何かを解明するためであったということです。だから第1章では、商品はそれ自体として存在するもの、つまりその姿においてだれもが商品として分かる物的存在として、すなわち一つの現存在として把握されたのです。あとはこの商品が一つの自立的存在として、今度はそれ自身の運動をわれわれは分析するのです……

だから第2章は、第1章で明らかにされた商品をもとに、今度は自立した商品の運動が、すなわちその交換の過程が分析の対象になるのです。……

つまり私たちが第1章で踏づけた価値形態の発展（単純な価値形態→展開された価値形態→一般的価値形態）は、いわば現実の商品交換の発展を前提して、そのうえで、そのそれぞれの発展段階の交換過程から、諸商品の交換を前提した上で、交換される諸商品そのものに注目して、それ以外の現実の商品交換に付随する商品所有者やその欲望等を捨象して、純粋に諸商品の交換関係だけを取り出し、商品の価値関係そのものに潜む、価値の表現形態の発展段階を分析してきたといえるのです。だからこそ、そうした商品の価値形態の発展の前提としてあった交換過程そのものが、今度は、第2章の分析の対象なのですから、諸商品の交換過程の発展が、こうした交換過程の三つの矛盾に対応していると言っているのではないかと考えられるわけです（だからまた、当然、交換過程の三つの矛盾は、価値形態の三つの発展段階にも対応しているとも言えます）。）（第46回報告）

だから〈どのようにして、なぜ、商品が貨幣になるか〉（フランス語版）というマルクスの問いは、自立した現存在として捉え返された諸商品の運動、すなわちそれらの交換過程のなかで、あるいはその歴史的な発展の過程において、〈どのようにして、なぜ、商品が貨幣になるか〉ということであって、それは決して久留間氏が考えたような、第1章の課題ではないのです。

第1章第3節が貨幣の発生を論証しているのは、あくまでも商品形態——つまりその目に見える姿や形だけで、直接、われわれが商品であると認識できるような状態——を説明するために、その貨幣形態（価格形態、すなわち値札、われわれは値札が付いていて、初めてそれが商品であることを知り得るのです）を説明するがためなのです。それは自立した諸商品の運動が、すなわちそれらの交換過程のなかで、如何にして貨幣になるのか、つまり貨幣を生み出すのか、要するに「商品の貨幣への転化」を直接説明するものではありません。それはあくまでも商品の価値の表現形態の発展過程を踏づけることが課題であり、その最終的な完成形態としての貨幣形態を——商品にはどうして値札がついているのかを——説明し論証するがためのものなのです。

第1章第3節は、第2章の交換過程が、その歴史的な発展において、どのように貨幣を生み出していくのかというその道程を、ただ諸商品の価値の表現形態という一面だけから、いわばその一面だけを切り取って、抽象的に見ることで、その発展を踏づけたものだといえるものなのです。

だから久留間氏のように、〈どのようにして〉が何処で論じられ、〈なぜ〉は何処で、〈何によって〉は何処だというような詮索の是非はともかく（そんな詮索そのものは本当は何も説明したことにはなっていないと思うのですが）、われわれは、これまでの第2章の展開のなかでそれらは追求され、明らかにされてきたのだと理解されるべきではないかと思えます。

いずれにせよ、以前にも指摘したように、この問題での久留間氏の問題意識そのものが最初から正しいものでは無かったといわざるを得ません。むしろ久留間氏の問題提起は、その影響力が極めて大きかったこともあり、マルクスが本来このパラグラフで言いたかったことを正しく理解することを反対に妨げてきたといえるのではないかとさえ私には思われます。

◎二つの原注

この第15パラグラフには、マルクスによって二つの注が付けられています。それらも本文を紹介して、簡単な考察を加えておきましょう。

【注48】〈(48) 「もしある人がブッシュェルの穀物の生産に要するのと同じ時間で、一オンスの銀をペルーの地中からロンドンまで持ってくることができるのなら、一方は他方の自然価格である。今、もし彼が、新しい、より豊かな鉱山のおかげで、かつて一オンスを獲得したのと同じ容易さで二オンスの銀を獲得することができるのなら、穀物は、ブッシュェルあたり一〇シリングの価格であっても——“他の事情が同じであれば”——以前に五シリングの価格であった場合と同じ安さであろう」（ウィリアム・ペティ『租税貢納論』、ロンドン、一六六七年、三ページ〔大内・松川訳、岩波文庫、八九～九〇ページ〕）。〉

ペティは、この文節（(48)）でマルクスが述べていることをほぼそのまま論じているように思えます。つまりそれだけ

後の学者である注49のロツシャーに較べても、問題を正しく理解していたといえそうです。

学習会では、まず「自然価格」という言葉が使われているが、これはどのように理解したらよいのか、という質問が出され、これは実際の穀物価格は需給によって変動するが、そうした上下に変動する価格を平均したものととして、あるいは、そうした上下に変動する価格を規定するものという意味で「自然価格」と言われているのではないかとの説明があり、一応、了解されました。

またこのベティが最後の部分で述べていることの解釈についても、少し議論になりました。すなわち「今、もし彼が、新しい、より豊かな鉱山のおかげで、かつてオンスを獲得したのと同じ容易さで二オンスの銀を獲得することができるのなら、穀物は、一ブッシェルあたり一〇シリングの価格であっても一〇“他の事情が同じであれば”一〇以前に五シリングの価格であった場合と同じ安さであろう」とありますが、「穀物は、一ブッシェルあたり一〇シリングの価格であっても一〇“他の事情が同じであれば”一〇以前に五シリングの価格であった場合と同じ安さであろう」というのがいま一つよく分からないと疑問が出されたのです。それに対しては、報告者であるJ J 富村さんから、適切な解説が加えられました。

すなわち一ブッシェルあたりの穀物が、以前は五シリングだったが、それが金の価値の低下によって十シリングになったとしても、しかし、価値としては五シリングだった時と同じだと主張しているのではないか、というのです。これで見込みの疑問も氷解しました。

【注49】〈49〉教授ロツシャー氏は、われわれに教えて、「貨幣の誤った定義は二つの群に大別できる。すなわち、貨幣を商品以上のものとみなす定義と、商品以下のものとみなす定義とである」と言い、ついで貨幣なるものに関する著作の種々雑多な目録をあげるが、そこには貨幣理論の現実の歴史についての洞察の片鱗さえも見られない。ついで次の教訓だ。「大部分の近ごろの国民経済学者が、貨幣を他の商品から区別する特異性」（では、商品以上なのか、以下なのか？）「を十分に眼中においていないということは、とにかく否定できない。一その限りでは、ガニルなどのなかば重商主義的な反動もまったく無根拠ではない」（ヴィルヘルム・ロツシャー『国民経済学原理』、第三版、一八五八年、二〇七～二一〇ページ）。以上一以下一十分に……いない一その限りでは一まったく……ではない！ 何という概念規定だ！ そして、このような折衷的な大学教授のむだ話を、ロツシャー氏は、控え目に、経済学の「解剖学的生理学的方法」〔同前、四二ページ〕と命名するのだ！ もっとも、一つの発見は彼に負うところである。すなわち、貨幣は「人を引きつける商品」〔同前、二〇六ページ〕である、と。〉

このロツシャーというのは、すでに19世紀の半ばの学者です。つまり17世紀の最後の数十年間で、経済学者は貨幣は商品であることは理解していたのですが、そして先に見たように問題を的確に理解していたベティはその最初の頃の人なのですが、しかし、19世紀の半ばになっても、相変わらず貨幣についての正しい理解にほど遠かったということです。それだけ貨幣のなんたるかを理解することは困難なことだったということでしょうか。それはマルクスによって初めて解明されたといえるでしょう。

◎第16パラグラフ

【16】〈(i)われわれが見たように、すでに最も単純な価値表現、 x 量の商品A = y 量の商品B においても、他の一つの物の価値の大きさがそれによって表される物は、その等価形態を、この関係から独立に社会的な自然属性として持っているかのようにみえる。(ii)われわれはこの虚偽の外観の確立を追求した。(iii)一般的等価形態が、ある特殊な種類の商品の現物形態に癒着した時、あるいは貨幣形態に結晶した時、この外観は完成する。(iv)一商品は、他の諸商品がその価値をこの一商品によって全面的に表示するので、はじめて貨幣になるのだ、とは見えないで、むしろ逆に、この一商品が貨幣であるからこそ、他の諸商品はこの一商品で一般的にそれらの価値を表示するかのように見える。(v)媒介する運動は、運動それ自身の結果では消失して、何の痕跡も残してはいない。(vi)諸商品は、みずから関与することなく、自分たち自身の価値形態が、自分たちの外に自分たちとならんで存在する一商品体として完成されているのを見いだす。(vii)金や銀というこれらの物は、地中から出てきたままで、同時に、いっさいの人間労働の直接的化身なのである。(viii)ここから、貨幣の魔術が生じる。(ix)人間の社会的生産過程における人間の単なる原子的なふるまいは、したがってまた人間の管理や人間の意識的な個人的行為から独立した彼ら自身の生産諸関係の物的形態は、さしあたり、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるという点に現れる。(x)だから、貨幣物神の謎は、目に見えるようになった、人目をくらますようになった商品物神の謎にほかならない。〉

(i) 私たちがすでに見たように、最も単純な価値表現、 x 量の商品A = y 量の商品B においても、他の商品の価値の大きさがそれによって表される商品の使用価値は、その等価形態を、この関係から独立に社会的な自然属性として持っているかのようにみえます。

〈われわれが見たように〉とあるのは、第1章第3節Aの「3 等価形態」で次のように述べていたことを指しているのだと思われまます。

〈ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが或る社会的関係を包蔵していることを暗示している。等価形態については逆である。等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生まれながらに価値形態をもっているということ、まさにこのことになって成り立っている。いかにも、このことは、ただリンネル商品が等価物としての上着商品に関係している価値関係のなかで認められているだけである。しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨

幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に複雑な目を驚かせるのである。そのとき、彼はなんとかして金銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀の代わりにもっとまぶしくないいろいろな商品を持ち出し、かつて商品等価物の役割を演じたことのあるいっさいの商品賤民の目録を繰り返してこみあげてくる満足をもって読みあげるのである。彼は、**20**エレのリンネル=1着の上着 というような最も単純な価値表現がすでに等価形態の謎を解かせるものだということには、気がつかないのである。〉（全集23a77-8頁）

またこの文節には〈**社会的な自然属性**〉という言葉が出てきますが、これも次のように説明されていました。

〈それでは、労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？明らかにこの形態そのものからである。いろいろな人間労働の同等性はいろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がそのなかで実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。

だから、商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の**社会的な自然属性**として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き替えによって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。同様に、物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的な刺激としてではなく、目の外にある物の対象的な形態として現われる。しかし、視覚の場合には、現実光が一つの物から、すなわち外的な対象から、別の一つの物に、すなわち目に、投せられるのである。それは、物理的な物と物とのあいだの一つの物理的な関係である。これに反して、商品形態やこの形態が現われるところの諸労働生産物の価値関係は、労働生産物の物理的な性質やそこから生ずる物的な関係とは絶対になんの関係もないのである。ここで人間にとって諸物の関係という幻影的な形態をとるものは、ただ人間自身の特定の社会的関係でしかないのである。それゆえ、その類例を見いだすためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げこまなければならない。ここでは、人間の頭の産物が、それ自身の生命を与えられてそれら自身のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ独立した姿に見える。同様に、商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを私は呪物崇拜と呼ぶのであるが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなやこれに付着するものであり、したがって商品生産と不可分なものである。〉（前掲97-8頁、下線は引用者）

(四)、(八) 私たちはこの虚偽の外観の確定を追求しました。一般的等価形態が、ある特殊な種類の商品の現物形態に癒着した時、あるいは貨幣形態に結晶した時、この外観は完成しました。

ここでは〈**われわれはこの虚偽の外観の確立を追求した**〉とありますが、これは第1章第4節の次の部分を指していると考えられます。

〈人間生活の諸形態の考察、したがってまたその科学的分析は、一般に、現実の発展とは反対の道をたどるものである。それは、あとから始まるのであり、したがって発展過程の既成の諸結果から始まるのである。労働生産物に商品という極印を押す、したがって商品流通に前提されている諸形態は、人間たちが、自分たちにはむしろすでに不変なものと考えられるこの諸形態の歴史的な性格に於いてではなくこの諸形態の内実について解明を与えようとする前に、すでに社会的生活の自然形態の固定性をもっているのである。このようにして、価値量の規定に導いたものは商品価格の分析にほかならなかったものであり、商品の価値性格の確定に導いたもの諸商品の共通な貨幣表現にほかならなかったのである。ところが、まさに商品世界のこの完成形態――貨幣形態――こそは、私的諸労働の社会的性格、したがってまた私的諸労働者の社会的関係をあらわに示さないで、かえってそれを物的におおい隠すのである。もし私が、上着や長靴などが抽象的人間労働の一般的な具体化としてのリンネルに関係するのだ、と言うならば、この表現の奇異なことはすぐに感ぜられる。ところが、上着や長靴などの生産者たちがこれらの商品を一般的等価物としてのリンネルに――または金銀に、としても事柄に変わりはない――関係させるならば、彼らにとっては自分たちの私的労働の社会的総労働にたいする関係がまさにこの奇異な形態で現われるのである。

このような諸形態こそはまさにブルジョア経済学の諸範疇をなしているのである。それらの形態こそは、この歴史的に規定された社会的生産様式の、商品生産の、生産関係についての社会的に認められた、つまり客観的な思想形態なのである。〉（前掲101-2頁）

(二) 一商品は、他の諸商品がその価値をこの一商品によって全面的に表示するから、初めて貨幣になるのだ、というようには見えないで、むしろ逆に、この一商品が貨幣であるからこそ、他の諸商品はこの一商品によって一般的にそれらの価値を表示できるかのように見えるのです。

こうした逆転して見える理由については、直前に紹介した第4節の一文が良く説明してくれていると思います。

学習会では、こうした逆転して見える現象に囚われているのは、何も昔の人の話ではなく、今日においても同じだということになりました。というのは、今日でも、例えば日銀の追加金融緩和策を称して、「カネの垂れ流し」をしていると批判している人もありますが、そもそも「カネを垂れ流せ」ば、景気が良くなるというのは、まさにマルクスがここで述べている逆転現象に囚われた間違った理解なのです。だからまた、それを「カネの垂れ流し」だと批判している人も、実は同じような現象に囚われている点では、同じだ、ということでもあるのです。

これは第3章の一文ですが、同じような逆転現象について、マルクスが論じている部分を紹介しておきましょう（また『経済学批判』にも同様の指摘があります。全集13巻81-2頁参照）。

〈貨幣の流通は、同じ過程の不断の単調な繰り返しを示している。商品はいつでも売り手の側に立ち、貨幣はいつでも購買手段として買い手の側に立っている。貨幣は商品の価格を実現することによって、購買手段として機能する。貨幣は、商品の価格を実現しながら、商品を手から買い手に移し、同時に自分は買い手から売り手へと遠ざかって、また別の商品と同じ過程を繰り返す。このような貨幣運動の片面的な形態が商品の二面的な形態運動から生ずるとい

とは、おい隠されている。商品流通そのものの性質が反対の外観を生み出すのである。商品の第一の変態は、ただ貨幣の運動としてだけでなく、商品自身の運動としても目に見えるが、その第二の変態はただ貨幣の運動としてしか見えないのである。商品はその流通の前半で貨幣と場所を取り替える。それと同時に、商品の使用姿態は流通から脱落して消費にはいる。その場所を商品の価値姿態または貨幣仮面が占める。流通の後半を、商品はもはやそれ自身の自然の皮をつけてではなく金の皮をつけて通り抜ける。それとともに、運動の連続性はまったく貨幣の側にかかってくる。そして、商品にとっては二つの反対の過程を含む同じ運動が、貨幣の固有の運動としては、つねに同じ過程を、貨幣とそのつど別な商品との場所交換を、含んでいるのである。それゆえ、商品流通の結果、すなわち別の商品による商品の取り替えは、商品自身の形態変換によってではなく、流通手段としての貨幣の機能によって媒介されるように見え、この貨幣が、それ自体としては運動しない商品を流通させ、商品を、それが非使用価値であるところの手から、それが使用価値であるところの手へと、つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に移して行くというように見えるのである。貨幣は、絶えず商品に代わって流通場所を占め、それにつれて自分自身の出発点から遠ざかって行きながら、商品を絶えず流通部面から遠ざけて行く。それゆえ、貨幣運動はただ商品流通の表現でしかないのに、逆に商品流通がただ貨幣運動の結果としてのみ現われるのである。〉（全集23a151-2頁）

ここでマルクスが述べているように、貨幣の運動が商品の流通を引き起こしているように見えるから、だから貨幣をどんどん流通に投げ込めば（彼らはそれが可能だと考えている！）、商品がもっと流通して、すなわち商品がどんどん売れて、景気もよくなるように見えるわけです。貨幣が不足しているから、「流動性」が不足しているから、商品が売れず、景気が悪いのだと彼らには見えるわけです。

他方、「日銀は通貨の番人たれ」と、「カネを垂れ流す」日銀に対して説教を垂れて、日銀はその本来の任務を自覚すべきだなどと論じている人もありますが、こうした主張もまったく逆転現象に囚われたまま、日銀を批判している（批判したつもりになっている）に過ぎないのです。なぜなら、日銀が実際に、通貨を管理している（出来ている）などと考えること自体が、何も理解していないことを意味するのであって、貨幣の流通は、商品の流通の結果であって、その逆ではないという本質的な関係が何も分かっていないことを物語っているからです。

これと類似した問題は、第1章第3節の一般的価値形態のところでも論じましたので、ついでにそれも紹介しておきましょう。まず本文は次のようなものでした。

〈相対的価値形態の発展の程度には等価形態の発展の程度が対応する。しかし、これは注意を要することであるが、等価形態の発展はただ相対的価値形態の発展の表現と結果でしかないのである。〉（91頁）

そしてこの部分の解説のなかで、次のように書いたのです（今回、紹介するにあたり一部補足しました）。

【今回は、この転倒した観念に、現実には、どれほど多くの人たちが惑わされているかということが話題になり、次のような例が紹介されました。

例えば戦後の世界資本主義は「管理通貨体制」と言われています。あるいは「管理通貨制度の下にある」とも。つまり「通貨」が国家によって「管理」されていると捉えられているのです。もちろん、ここには「通貨」概念の混乱が背景にあります。

「通貨」というのは厳密には貨幣の流通手段と支払手段との機能を合わせたものを意味します。そしてこうした意味での「通貨」を「管理」できるなどと考えるのは、貨幣についてのまさに転倒した観念の産物なのです。ところが、ブルジョア経済学者だけではなく、ほとんどのマルクス経済学者も、今日のいわゆる「不換制」の下では、「通貨」は国家によって「管理」されているのだという認識を持っています。しかし、「通貨」を概念的に捉えれば、それを「管理」するなどということができないことは明らかなのです。なぜなら、このパラグラフでマルクスが強調しているように、諸商品の交換という現実があって（そしてそのために諸商品がその価値を相対的な価値形態として表すという現実があって）、貨幣形態（一般的等価形態）があるからです。イニシアチブをとっているのは商品交換という現実です。だからもし「通貨」を「管理」しようと思うなら、商品の交換そのものを「管理」しなければならないことになるのです。そしてそれは実質上、われわれの社会的な物質代謝を「管理」することに他なりません。しかしこんなことは現代の資本主義社会をひっくり返さない限り不可能事でしょう。ところがマルクス経済学者を自認する人たちまで、資本主義を前提したままで、「通貨」の「管理」は可能だと考え、現代の資本主義はそうした体制なのだと説明して、何の疑いも持たず、いわばそれが常識と化しているありさまなのです。

こうした現代資本主義においては「通貨」は「管理」されていると捉えている人たちの誤りには二つの理由が考えられます。一つは先に指摘した「通貨」概念の混乱にもとづくものです。つまり「通貨」と「利子生み資本」という意味での貨幣資本（moneyed Capital）」との区別が分からずにごっちゃに論じていることから来るものです（これについては第30回の「案内」でも少し述べました）。本当は「利子生み資本としての貨幣資本（moneyed Capital）」の運動なのに、それを「通貨」の運動と捉えてしまっているのです。（補足：いわゆる「預金通貨」という概念は一般的に認められています。これは何もブルジョア経済学者だけではなく、多くのマルクス経済学者にも肯定的に取り扱われています。なかには預金通貨こそ本来の信用貨幣なのだ主張する人さえいます【例えば山本孝則氏】。この学習会でもしばしば取り上げてきた日本のマルクス経済学の権威と目されている大谷禎之氏もその一人なのです。しかし、「預金」を「通貨」と捉えるというのは、まさに「通貨」概念の混乱の最たるものなのです。というのは、預金が諸支払に利用されるということは、通貨の節約になりこそすれ、それ自体が通貨であるなどということは決して無いからです。そもそも預金は貨幣信用の範疇なのです。）

しかし「通貨」は社会的な物質代謝に直接関連します（媒介します）が、「貨幣資本（moneyed Capital）」は社会的な再生産の外部にある信用（貨幣信用）の下で運動する貨幣なのです。だからこうした人為的な制度のもとでは、それは信用(特に公信用)を背景にいくらか膨張したり縮小したり、ある程度までは恣意的に左右できるわけです。だからそれを「通貨」と捉えると、「通貨」は国家によって恣意的に「管理」されていると捉えることになってしまうわけです。

(追加：現在の日銀の追加金融緩和策は、日銀が市中銀行の持っている国債などを買い取り〔買いオペ〕、日銀における市中銀行の当座預金を積み増す操作のことですが、このこと自体は、ただ市中銀行の準備金の形態を変換しているだけに過ぎないのに、こうした「預金」を「通貨」と捉えるからこそ、そうした日銀の操作を「通貨の供給」と捉えたり――日銀自身もそう考えているのですが――、それを批判する側も、「通貨の垂れ流し」だ、などと批判することに〔批判したつもり〕になってしまうわけです。)

もう一つは貨幣名を変更することを持って、「通貨」を「管理」していると錯覚していることです。これについて詳しく説明すると、あとで学習する予定の〈第3章 貨幣または商品流通〉の内容にあまりにも踏み込みすぎますので、それは割愛しますが、いずれにせよ、貨幣名は確かに時の権力者によって恣意的に決めることが可能です。しかし、それは商品の価値量を表現する等価物の使用価値量が、例えば上着を「1着」「2着」と数えたり、ラクダを「1頭」「2頭」と数えるのも、ただ社会的な慣習にもとづいているように、一般に社会的な慣習によるものだからであり、だからまた貨幣としての金の量をどのように数えるのかも（それが貨幣名を決めるということですが）、その限りでは恣意的に決めることが可能だということにすぎないのです。だからこれも決して「通貨」を「管理」しているわけではないのです。現代の不換制の下においても基本的にはこの延長上にあると考えるべきなのです。

このように『資本論』を読んでいる限りでは分かったつもりになっていても、いざ、現実の過程を説明しようとなると、結局は『資本論』が何度も強調し注意している間違った転倒した観念にとらわれている例が実に多いのだという説明でした。】(第30回報告)

自分では『資本論』の重要なところは理解したつもりになっている人が、実は何も理解していないということが明らかになるわけです。日頃の研鑽を怠っては、理論的迷妄に迷い込むというよい例ではないでしょうか。

(e) 媒介する運動は、その運動によってもたらされた結果においては消失して、何の痕跡も残していません。

これはある意味では、すべての現象に言いうることです。例えば、地球が火の玉から徐々に冷却して今日の姿になったということは、今日の地球を見ている限りでは分かりません。というのは、そうした歴史的な媒介された運動は、その結果である今日の地球では、すでに過去のものとして、見る事が出来ないからです。

「第5章 労働過程と価値増殖過程」には、次の一文があります。

〈要するに、労働過程では人間の活動が労働手段を使って一つの前もって企図された労働対象の変化をひき起こすのである。この過程は生産物では消えている。〉(前掲237頁)

また『経済学批判要綱』には、次のような一文もあります。

〈資本の生成、成立の諸条件および諸前提が想定するのは、まさに、資本がまだ存在せず、ようやく生成しつつある、ということである。だからそれら諸条件・諸前提は、現実的資本の出現とともに、すなわち自己の現実性から出発して、自己の実現の諸条件を自ら措定する資本の出現とともに消失するのである。……それゆえ、剰余資本Iの創造に先行した諸条件、言い換えれば資本の生成を表現する諸条件は、資本が前提となっている生産様式の圏域に属するのではなくて、資本生成の歴史的先行段階として資本の背後にある。それはちょう、地球が、どろどろの火と蒸気の世界からその今日の形態へと移行してきたときに通過した諸過程が、完成した地球としての地球の生活の彼方にある、ということと同然である。〉(草稿集②99-100頁)

(f) 諸商品は、自らは関与せずに、自分たちの自身の価値の姿が、自分たちの外に自分たちとならんで存在する一商品体(金銀)として完成されているのを見いだすだけです。

本来は諸商品が自ら関与して、自分たちがそれによって価値を表そうとするから、金銀は、その物的姿そのものにおいて諸商品の価値を表すものとして存在しているのに、そうした媒介過程は消え失せているために、あたかも金銀はそれ自体として、諸商品とならんで価値そのものとして存在しているかに見えるのであり、諸商品はそうした完成された貨幣としての金銀をただ眼前に見いだすだけに過ぎないわけです。

(g) 金や銀というこれらの物は、地中から出てきたままで、同時に、いっさいの人間労働の直接的化身なのです。

だから金銀は、地中から出てきたままで、すでに一切の人間労働の直接的化身として、あらゆるものと直接的な交換可能性を持っており、一つの社会的な力を持ったものとして登場するわけです。

(h) ここから貨幣の魔術が生まれます。

貨幣の魔術については、第3章でも色々出てきます。その一つを紹介しておきましょう。

〈「金はすばらしいものだ！ それをもっている人は、自分が望むすべてのものの主人である。そのうえ、金によって魂を天国に行かせることさえできる。」(コロンブス『ジャマイカからの手紙』、一五〇三年。)

貨幣を見てもなすがそれに転化したのかはわからないのだから、あらゆるものが、商品であろうとなかろうと、貨幣に転化する。すべてのものが売れるものとなり、買えるものとなる。流通は、大きな社会的な坩堝(るつぼ)となり、いっさいのものがそこに投げ込まれてはまた貨幣結晶となって出てくる。この錬金術には聖骨でさえ抵抗できないのだから、もっとこわれやすい、人々の取引外にある聖物にいたっては、なおさらである。貨幣では商品のいっさいの質的相違が消え去っているように、貨幣そのものもまた徹底的な平等派としていっさいの相違を消し去るのである(91)。しかし、貨幣はそれ自身商品であり、だれの私有物にでもなれる外的な物である。こうして、社会的な力が個人の個人的な力になる

のである。それだからこそ、古代社会は貨幣をその経済のおよび道徳的秩序の破壊者として非難するのである。すでにその幼年期にブルトンの髪をつかんで地中から引きずりだした近代社会は、黄金の聖杯をその固有の生活原理の光り輝く化身としてたたえるのである。〉（全集23a1726頁）

またこの引用文のなかに付けられた原注91では、次のようなシェークスピアの一節が紹介されています。

く(91)「黄金？黄色い、ギラギラする、貴重な黄金じゃないか？こいつがこれくらいありゃ、黒も白に、醜も美に、邪も正に、賤も貴に、老も若に、怯も勇に変えることができる。……神たち！なんとどうです？これがこれくらいありゃ、神官どもだろろうが、おそば仕えの御家来だろろうが、みんなよそへ引っぱってゆかれてしまいますぞ。まだ大丈夫という病人の頭の下から枕をひっこぬいてゆきませぬ。この黄色い奴めは、信仰を編みあげもすりゃ、ひきちぎりもする。いまわしい奴をありがたい男にもする。白癩病みをも痒ませる。盗賊にも地位や爵や膝や名誉を元老なみに与える。古後家を再縁させるのもこいつだ。……やい、うぬ、罰あたりの土くれめ、……淫売め。」(シェークスピア『アゼンスのタイモン』。〔中央公論社、坪内訳、130-132頁。〕) (前掲173頁)

確かに、ただの土くれと同じ一つの鉱物でしかないのに、それに多くの人たちが、引き回され、跪き、身も心も引き裂かれ、それを得るために、何と多くの労苦を強いられていることでしょうか。本当に忌々しい土くれです。こんな単なる物質に、われわれは支配され、従属させられているわけで、原始の人たちが、自然を恐れ、自然の圧倒的な力に神を見出して、敬っているのを、決して笑うことはできないのです。最近も、最先端の高度の医療技術を研究し、それでノーベル賞までもらった学者が、さらに研究を続けるためと称して、金の必要を訴えてマラソンまでやっている現実があるではないですか。金、金、金、何をやるにも、まずこの「先立つもの」が必要だ、この現実、何も変わっていないのです。

(9) 人間の社会的生産過程における人間の単なる原子的なふるまいは、だからまた人間自身の管理や彼らの意識的な個人的行為からは独立した彼ら自身の生産諸関係の物的態度は、さしあたり、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるという点に現れます。

第1章第4節には、次のような一文がありました。

くだから、商品形態の秘密はただ単に次のこのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き替えによって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。〉（全集23a97-8頁）

く交換者たち自身の社会的運動が彼らにとっては諸物の運動の形態をもつのであって、彼らはこの運動を制御するのではなく、これによって制御されるのである。互いに独立に営まれながらも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が、絶えずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的な絶えず変動する交換割合をつうじて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、たとえばだれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貴かれるからである。〉（同101頁）

(8) だから、貨幣物神の謎は、目に見えるようになった、人目をくらすようになった、商品物神の謎、その発展したものに他ならないのです。

さて、この最後の第16パラグラフは、「商品の貨幣への転化」を論じた第2章の締めくくりとして、商品の貨幣への転化とともに、商品の物神性は、貨幣の物神性へと発展したのだと論じたものになっています。これは、「商品とは何か」を論じた第1章の締めくくりとして第4節で「商品の物神的性格とその秘密」を論じたのに対応しているともいえるでしょう。

◎最後に――『『資本論』学習資料室』として

以上で、残念ながら、「『資本論』を読む会」の最後の報告を終わります。実際の学習会への参加者数は低調のままに終わったのですが、このブログへのアクセス数は比較的多く、この4年半ほどの間に、訪問者数は45226人、閲覧数は88516を数えました（2012年10月11日現在）。その意味では、この学習会もまんざら無駄ではなかったと自身を慰めている次第です。

アクセス数の多さを考えた場合、学習会の閉鎖と同時にブログもすぐに閉鎖するのではなく、『資本論』の最も難解といわれる冒頭の部分を、一人でも多くの働く人たちが学び理解するために、何らかの参考になるかも知れないと考えて、当面は、ブログの名称を『『資本論』学習資料室』として、これまでの学習の成果をそのまま残しておくことにしたいと思います。今後とも、大いに利用して頂くようお願いします。

.....

(なお【付属資料】は電子書籍化の1頁当たりの字数制限のために、別頁として紹介します。)

第50回「『資本論』を読む会」の報告(補足)

第50回の報告に本来は付属していた資料を別頁として以下、掲載します。

【付属資料】

●第15パラグラフ

《初版本文》

〈前に指摘しておいたように、一商品の等価形態は、その商品の価値量の量的な規定を含んでいない。金が貨幣であり、したがって、それがすべての他商品と直接的に交換可能である、ということは知っていても、だからといって、たとえば10ポンドの金がどれほどに値するかは、知られていない。どの商品でもそうであるように、貨幣は、自分自身の価値量、他の諸商品で相対的にのみ表現することができる。貨幣自身の価値は、貨幣自身の生産に必要とされる労働時間によって規定されており、この労働時間と同じだけの労働時間が凝固されているところの、他のそれぞれの商品の量のうちに、表現されている(43)。貨幣の相対的価値量のこういった確定は、貨幣の原産地において、直接の物々交換のなかで生ずる。貨幣が貨幣として交換過程にはいり込んでいるとき、この貨幣の価値はすでに与えられている。すでに17世紀の最後の数十年間には、貨幣分析の端緒がかなり進んでいるために、貨幣が商品であるということは知られていたにしても、ほんの端緒でしかなかった。困難は、貨幣が商品であることを理解することではなく、いかにして、なぜ、なにによって、商品が貨幣であるか、ということを理解することである(44)。〉(80頁)

《フランス語版》

〈すでに述べたように、商品の等価形態は、この商品の価値量についてなにも明らかにしていない。金が貨幣であること、すなわち、金がすべての商品と交換可能であることを知っても、そのためにたとえば10ポンドの金がどれだけに値するかは、全然わからない。貨幣もあらゆる商品と同様に、それ自身の価値量を他の商品のうちに相対的にしか表現することができない。貨幣の固有の価値は、その生産に必要な労働時間によってきめられ、同時間の労働を必要とした他のすべての商品の分量のうちに表現される(12)。貨幣の相対的価値量をこのようにきめることは、その生産源自体で、その最初の交換において行なわれる。それが貨幣として流通に入りこむやいなや、その価値は与えられるのである。すでに17世紀の最後の数年には、貨幣が商品であることは十分に認められていたが、これについての分析はまだやっと緒についたばかりであった。困難は、貨幣が商品であることを理解することにあるのではなく、どのようにして、なぜ、商品が貨幣になるか、を知ることである(13)。〉(69頁)

●注48

《初版本文》

〈(43) 「もしある人が、1ブッシェルの穀物を生産することができるのと同じ時間で、1オンスの銀をペルーの地中からロンドンに運んでくることができるならば、後者は前者の自然価格である。さて、もしある人が、もっと採掘のたやすい新鉱山のおかげで、以前1オンスの銀を手に入れたのと同じやすさで2オンスの銀を手に入れることができれば、穀物は、その他の事情が等しければ、1ブッシェル当たり10シリングであっても、以前に5シリングであったのと同じ安さであろう。」(ウィリアム・ベティ『租税貢納論。ロンドン、1667年』、31ページ。)>(80頁)

《フランス語版》

〈(12) 「もしある人が、1ブッシェルの穀物を生産するために要したのと同じ時間で、ペルーの鉱山で採掘された1オンスの銀をロンドンまで届けることができれば、そのばあい、一方は他方の自然価格である。さて、もしある人が、いっそう新しくいっそう富んだ鉱山の採掘によって、以前に1オンスの銀を獲得したのと同じ容易さで、2オンスの銀を獲得できるならば、他の事情が等しいかぎり、穀物は1ブッシェルあたり10シリングでも、以前に5シリングであったのと同じ安さであろう。」(ウィリアム・ベティ『租税貢納論』、ロンドン、1667年、31ページ。)>(69-70頁)

●注49

《初版本文》

〈(44) ロッシェア教授はわれわれにこう教えている。「貨幣の誤った定義は、二つの主要なグループに分けることができる。それは、貨幣を商品以上と考えるものと、これ以下と考えるものとである。」こう述べたあとで、彼は、貨幣制度にかんする諸著作の雑然とした目録を示しているが、それを見ても、貨幣理論についての現実の歴史のどんな微光さえも見いだされない。そのあとで、次の教訓が登場してくる。「なお、たいいての最近の経済学者たちが、貨幣を他の諸商品から区別する諸特性(それでは、貨幣は商品以上のものかまたは以下のもの、ということになりはしないか?)を充分には限中に置いていなかったことは、否定すべくもない。.....そのかぎりでは、ガニル等々の半ば重商主義的な反動は、全く無根拠なものではない。」(ヴィルヘルム・ロッシェア『国民経済学原理、第三版、1858年』、207-210ページ。)以上――以下――充分ではない――そのかぎりでは――全く、ではない! なんという概念規定だ! しかも、このような折衷的な大学教授風のたわごとを、ロッシェア氏は控え目に、「経済学の解剖学的・生理学的方法」と命名

している！ といっても、貨幣は「好ましい商品」であるという一つの発見は、彼のおかげなのである。〉（80-1頁）

《フランス語版》

〈(13) 教授ロツシャー氏は、まずわれわれにこう教える。「貨幣の誤った定義は、二つの主要群に区分することができる。すなわち、貨幣が商品以上であるとする定義と、商品以下であるとする定義とがある、次いで、彼はわれわれに、貨幣の性質にかんするきわめて雑然とした著書目録を提供するが、そういうことは、貨幣理論の真の歴史についてどんな光もあてるものではない。最後に、お説教がやってくる。彼はこう言う。「大多数の最近の経済学者が、貨幣を他の商品から区別する特殊性(いったいそれは、商品以上のものか以下のものか?)にはほとんど注意しなかったことは、否定すべくもない。……この意味では、ガニルの半重商主義的反動は、……全く無根拠なものではない」(ヴィルヘルム・ロツシャー『国民経済学の基礎』、第三版、1858年、207ページ以下)。以上――以下――余りにわずか――この意味では――全くそうでない――、言葉の概念上、なんと明晰でなんと正確なことよ！ そして、ロツシャー氏が控え目に「経済学の解剖学的・生理学的方法」と命名するものは、このような雑駁な大学教授的折衷主義なのだ！ それにもかかわらず、一つの発見、すなわち、貨幣が「快適な商品」であるということは、彼のおかげによるものである〉（70頁）

●第16パラグラフ

《初版本文》

〈われわれが見たように、すでに x 量の商品 A = y 量の商品 B という交換価値の最も単純な表現にあっても、他方の物の価値量がそのうちに表わされているところの物は、自分の等価形態を、この関係にかかわりなく、社会的な自然属性として、もっているかのように見える。われわれは、この虚偽の仮象の固定化を追跡した。この虚偽の仮象は、一般的な等価形態が、ある特殊な商品種類の現物形態に癒着するやいなや、すなわち、貨幣形態に結晶するやいなや、完成されることになる。ある商品は、他の諸商品が自分たちの価値を全面的にこのある商品で表わすがゆえに初めて貨幣になる、とは見えないのであって、逆に、このある商品が貨幣であるがゆえに他の諸商品が自分たちの価値を一般的にこのある商品で表わしている、というように見える。媒介する運動は、運動自身の結果のなかに消滅して、なんの痕跡も残さない。諸商品は、なにもすることなしに、自分たち自身の価値姿態が、自分たちのそとに自分たちと並んで存在している一商品体として、完成されているのを、見いだすのである。これらの物すなわち金銀は、地の底から出てきたままで、同時に、いっさいの人間労働の直接的な化身になる。ここから貨幣の魔術が生ずる。社会的な生産過程における人々のたんに原子論的なふるまいは、したがって、彼らの制御や彼らの意識的な個人的行為にはかかわりのない、彼ら自身の生産諸関係の物的な姿は、彼らの労働諸生産物が一般的に商品形態をとるということのうちに、まず現われている。だから、貨幣物神の謎は、商品物神の謎そのものが目に見えるようになり、人目を眩惑させるにいったもの、にほかならない。〉（81頁）

《フランス語版》

〈すでに見たように、最も単純な価値表現である x 量の商品 A = y 量の商品 B においては、ほかの物体の価値量を表わす物体は、自己の等価形態を、この関係とはかかわりなく、自己が自然から引き出すところの社会的属性としてもっているかのように見える。われわれはこの虚偽の外観を、それが固定される瞬間まで追究した。この固定化は、一般的な等価形態がもつばら特殊な一商品に付着する、すなわち貨幣形態に結晶するやいなや、完了した。一商品は、他の諸商品が自分たちの価値をこの一商品のうちに相関的に表現するがゆえに、貨幣になるとは見えない。全く逆に、一商品が貨幣であるがゆえに、他の諸商品は自分たちの価値をこの一商品のうちに表現するように見えるのである。媒介の役を果たした運動は、それ自身が産んだ結果のうちに消え失せて、なんの痕跡も残さない。諸商品は、なんらこの運動に関与したようには現われずに、自分たち自身の価値が、自分たちとならんで自分たちの外にある一商品体のうちに表わされ、固定されているのを、見出すわけである。これらの単純な物、すなわち、地球の胎内から出てきたままの銀と金は、ただちに、すべての人間労働の直接的な化身として姿を現わす。ここから貨幣の魔術が生まれる。〉（70頁）